奥出雲

[3]

（第 201 ～ 305 号）

（1992 年 1 月～ 2003 年 8 月）

横田史談会

高橋一郎 編著

奥出雲201～250号 内容項目別一覧表（数字は号数）

中　世　編

① 横田庄と日野家（233, 234, 235, 236）
② 征夷大将軍（234, 235, 236, 237）

近　世　編

③ 近世の三大飢饉（226, 227, 228）
④ 松江藩家老村松将監と平賀縫殿（205, 206）
⑤ 宝暦天明期と田沼時代（225）

時代・地域と奥出雲

⑥ 太平記の時代の奥出雲（201, 202）
⑦ 信長の時代と奥出雲
（202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 210, 212）
⑧ 奥出雲の中世近世を育てた武士たち
（246, 247, 249）

たたら製鉄

⑨ 明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜
（213（ヒュゲーニン）,214.5, 217, 218, 220, 221
222（松江藩と蘭学）223, 224, 230, 248, 250
未完
⑩ 奥出雲の近世企業たたら製鉄史
（239㉓, 240㉔, 244㉕）　未完
⑪ 出雲国鉄師と伯耆国鉄山師近藤家（242）
⑫ 鉄の来た道（シルクロード・窪田蔵郎述）
（245, 246, 247, 248, 249, 250）

神社・寺院

⑬ 横田札所めぐり
（203, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 216,
222, 225, 227, 230, 243, 244）未完
⑭ 仏像からのぞいた仏教（208）
⑮ 千利休の秘伝を伝える『山上宗二記』と岩屋寺
（219）
⑯ 天平の僧行基（231, 232）

歴史と風土

⑰ 出雲大川流域物語（214・5 ④, 222 ⑤）未完

小字の歴史

⑱ 小字めぐり　六日市（209）　大市（223）未完

人　　物

⑲ 島根県議会史にみる奥出雲の人々
（213, 216, 217, 218）未完
⑳ 村上朝吉と高橋常作（221, 226, 227）
㉑ 明見禅師　（228, 229）
㉒ 祭文と祭文語　（238）

諸　　史

㉔ 横田西城間の乗合自動車（204）
㉕ 中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる
神有月など　（209）
古代朝鮮と日本仏教
（210②, 211, 212, 216）未完
㉖ 資料断片　（234, 235）

民　　俗

㉗ 古い記録を綴りあわせて　（221）
㉘ 島根の名建築　（231, 232）
㉙ 年貢のおさめどき　（245）

随　　想

㉚ さる（猿），猿人，サル（申）　（201）
㉛ 松島やあ、松島や松島 ⑤　（203）
㉜ おくの細道 ⑥　（243）　未完
㉝ 古市のキリスト教　（220）
㉞ 衣がえの六月　（230）
㉟ 猪突猛進を排す　（237）
㊱ 懐古と感謝　（237）
㊲ 戦後50年の歴史 ①
—横田町青年団の歩み（239㊤, 241㊥）未完
㊳ 宮沢賢治生誕百年　（249, 250）未完

提　　言

奥出雲地域の歴史民俗の博物館（214・5）
21世紀は18世紀末の安藤昌益の蘇えりで（217）
古文書集蔵庫の完備を（221）

◎ **俳句・短歌・川柳（地元作者）**　毎号
（御協力に感謝します）

会員頒布一部二〇〇円／六九・一八（電話・電送兼用）島根県仁多郡横田町一、〇三二ノ三　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座松江〇一四一〇—九—一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所　〇八五四—五二—〇一九一

奥出雲251～300号 内容項目別一覧表（数字は号数）

古代編

① 出雲讃歌（286）

② 1枚の木簡の発見から（294, 295, 296, 297, 298）完

中世編

③ この頃（秀吉）の奥出雲（255）

近世編

④ 年表を読もう（洋学の輸入と外国人の来航）（284）

時代・地域と奥出雲

⑤ 秀吉の時代の奥出雲
（252, 253, 255, 257, 258, 259, 260, 261）完

⑥ 奥出雲と毛利氏
（262, 263～4, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 274～5）完

⑦ 徳川慶喜とこの地方（278～9, 285）

⑧ 元禄時代の奥出雲（288, 293, 294）

たたら製鉄

⑨ 明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜⑬続（251, 253, 256, 265, 266）未完

⑩ 奥出雲のたたら製鉄史㉖続（267, 268, 269, 270）未完

⑪ 奥出雲の近世企業たたらの発達過程
（271, 272, 273, 274～5,, 296～7）未完

⑫ 金属の歴史国際会議報告（280）

⑬ 明治初期に於ける仁多郡の経済事情
上・中・下（282, 283, 287）

⑭ 新編奥出雲の砂鉄小史（289～90）

神社と寺院

⑮ 横田札所めぐり⑭
（255, 256, 257, 280, 283, 285, 289～90）未完

⑯ 出雲国内の朝鮮関係神社
（265）

歴史と風土

⑰ しん仁多郡風土記①　（270）未完

小字の歴史

⑱ 村と町の変遷①（287）未完

人物

⑲ 米原清男（亀嵩）の足跡（278～9）

諸史

⑳ 鉄の来た道－トルコから日本への奇跡
（増 254）

㉑ 史蹟めぐり－備中成羽町と横田
上・中・下（256, 257, 262）

㉒ 中国・朝鮮・南方から出雲（日本）を考えてみる
⑦ 平安遷都のはじめ（289）未完

㉓ メソポタミアの鉄文化（291～2, 293）

㉔ シルクロード余話（297, 299）未完

民俗

㉕ ハッケヨイ、ノコッタ（284）

随想

㉖ 宮沢賢治生誕百年④
（252, 253, 255, 256, 257, 258, 259, 261）完

㉗ 墨跡展にみる時代（281）

㉘ 日本にとっての中国儒学瞥見（281）

㉙ 辰のとし　（296）

提言

㉚ 田和山に浮ぶ出雲びとの古代

◎ 俳句・短歌・川柳（地元作者）　毎号
（御協力に感謝します）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 201 号
（1 月 号）
1992. 1. 18
（M 124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

さる（猿）・猿人・サル（申）
ことしは壬申（みずのえさる）のとし

猿廻しときどき横田へやって来る

民族文化映像研究所の姫田所長の三度目の来訪があったのは1978（昭和53）年であった。この時山口県光市高州の「周防さるまわしの会」のことを聞いた。古い伝統ある猿まわしが断絶したのを、'70年に『日本の放浪芸』の取材に全国を歩いていた、俳優の小沢昭一が、高州を訪れて示唆したことに端を発し、生存していたかつての調教師の未亡人からの話の聞きとりにはじまり、'77（昭52）年、民俗学者で日本常民文化研究所長であり、日本観光文化研究所長も兼ねていた、宮本常一の指導と、姫田の助言でその年の暮に結成されたのが、この会であった。

さるまわしの会の会長は、祖父がまた妻の祖父もさるまわしの親方であったという、水道工事事業家で光市市議の村崎義正で、一時は本職を休止してとり組んだ。'78年は姫田の指導で、この訓練が映画化されているさなかであったので、姫田の口調は極めて熱を帯びていたことを憶えている。

毎年2～3回は県外に出かけることがあり、山口県を数度訪ねながら、直接見る機会はなかったが、調教日誌を手に入れて読み、技が生まれるまでの訓練は極めて興味があり、いろいろ教えるということを考えさせられていた。

横田ショッピングセンターで、お客様サービスに何か珍らしいものはと、尋ねられた時、この話をしすゝめた。'82（昭57）年の7月4日、三輪三吉調教師が招待され猿をつれてやって来て好評だった。その後何回か招かれて来ているが、昨秋は旅行とかち合って見ることができなかったが、「反省」の動作は面白かったという。

10年も前の三輪君の話の中で次のようなことを憶えている。ひじょうに人間に近い動物であるが、逆にひじょうに人間とは遠いところで自我を確立していて、人間には追従しない。さるはペットにはならないという。ペット的にあつかうことは、さるを冒瀆することだという。またさる（オスざるのみ）の社会の秩序原理を律している、順位性を無視しては駄目だという。これらのことが重要であって、信頼のもとに潜在能力を引き出すのが根本であるという。

「サルを仕込む時には、サルになれ」「ボスザルになれ」であるともいう。この仕込む側と仕込まれる側の力関係があいまいであると、信頼関係があっても、全くからまわりになるという。さるは不信感をつのらせ、一方で信頼されることをいゝことにして、楽なほうへ楽なほうへと身をかわすという。賢い動物ということである。仕込む側が強い力とイニシアチブ（主導権）を握ることで、順位をはっきりさせることだという。そうすると人間とさるの間が緊張関係で結ばれる。これがないと仕事は全く無秩序になるという。

京都大学霊長類研究所の創始者の今西錦司博士の研究も、これを裏付けている。

昨年の秋、周防さるまわしの会が芸術祭賞を受けると、さる年も近くなり急に「反省ざる」がマスコミ（新聞・映像など）に浮上してきた。

また、日光猿軍団が登場し、「さる学校」「さる演劇」をもって（間中敏雄主宰）テレビをにぎわしている。

反省の猿が育てたサル学者

『田中角栄の研究』『日本共産党の研究』とそれぞれに深く切りこんで批判し、特に前著は政局転換の原動力となった著者の立花隆は、その後『宇宙からの帰還』という宇宙飛行士を一人一人訪ねての、始めての突込んだ体験談集を出した。その中で科学的真理と宗教的真理の一体、人間と神の一体ということを、そしてあらゆる宗教の神は本質的に同じいということが引き出せたとのべ、人間存在に対する貴重な体験をしるしている。その後「脳死」の問題に精力的にとりくみ、世界各地の臨死体験者の探訪をし、死とは何かに迫っている。また現在はコンピュータの世界に於ける脳の問題を某科学誌に連載している。

また昨秋は『サル学の現在』を著わしている。今西博士をはじめサル学者数人を訪問し、考えた記録である。大変な大冊でまだ序文と書評を読んだだけであるが、次のようなことを述べている。

順位性となわばりによって秩序づけられた社会構造から、サルの間にも社会的コミュニケーション（意思や情報の伝達）が成立していて、サルにも文化があり、文化は社会的に伝承されているとサル学世界をノートしている。

個体識別と餌づけという独得な方法による、サルのサル性を知らぬと、ヒトの真の人間性もわからない。サルを知らずして

さる（猿）・猿人・サル（甲）……・太平記の時代と奥出雲⑧・俳句・川柳・短歌

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

太平記の時代と奥出雲⑧

太平記の時代　第Ⅲ期後半

—三つ巴の勢力で動揺する足利幕府（下）—

おことわり

当初は当地方にくわしくない方のため、当地方に関係のある地名・寺社名・人名などは、太い活字を用いていたが、途中からうっかりしていたので、あらためて該当のものをあげ、説明も加えておく。

奥出雲に関係のもの——横田庄・三処郷・三沢郷・阿井郷・横田庄内の岩屋寺・横田八幡宮・安部氏、三沢郷内三沢氏、三処郷内の高田寺、大領権現・三処氏、馬木郷と馬来氏、杠氏、大原郡三刀屋郷の諏訪部（三刀屋）氏。

出雲では——宍道町、鰐淵寺、杵築大社・塩冶高貞。

なお前号8頁の2段28行の「大社」とは、杵築大社（現出雲大社）のことである。当時出雲地方の社寺中勢力では最上位にあった杵築大社で儀式の主座を占めていた岩屋寺は、出雲国内でも寺院では上位にあった。このことは200年後にも続いていて、当時の院主快円の「快円日記」

そのほかにも明らかである。

戦国時代の武家と神社・寺院

これまで述べてきた、天皇や武家の神社・仏閣に対する祈願・寄進は、今日史料として残されているもののみを（若干奥出雲以外のものでも省略した）もとにしたのであるが、それらは当時出雲国内の著名な神社・寺院そして荘園の神社、寺院、有力国人衆の領内の寺社で、信仰上からそれらに祈願するとともに、時には寄進して祈願者の願いを達したいとしたものである。またそれらの寺社の立つ基盤（庄園或は国人衆）の衆徒や、その地域の住民を引き寄せて、人的にも物的にも協力を得ようとする配慮もあっている。また寺社側は武家からの祈願や寄進を得ることによって、地位を誇示し、財政基盤を固めようとする願いも持っていたのである。

中央の武家や領主側でも、長年にわたって、在地の信仰や崇敬を集めてきた神社、寺院を保←

人間論をしているものや人間性を主張するものは、実はサルから受けついだサル性の延長ということになるかも知れないなどと述べてあって手厳しい。詳細は未見であるが、周防のさるまわしの訓練記録や感想からすると、立花の記述も相像できる。

人間は猿と分れてまたサルに

これによって外敵から身を守り、肉を焼き暖をとる（火をおこせるのはずっと後世）。そして旧人に進化し、われわれの直接の祖先である新人（ホモ・サピエンス・サピエンス）はアフリカといわれる。発見された化石からも、1987年アメリカのベッカ・キャン博士らの説による、ミトコンドリアDNA（デオキシリボ核酸）による研究からも同じであるという。それらは約20万年前から10万年前の間に生まれ、世界各地へ広がり、古いタイプの人類と置きかわったという。これが中東へ10万年前ごろ移り、そしてヒマラヤ山脈の南部へ進んだもの（インド人の祖先）と、北部へ進んで寒冷な気候に適したもの（モンゴロイド）に分れた。それは6～5万年前のことであって、大陸続きの日本へ移ったのは3万年前であるという。のち海面の上昇で大陸から離れたのちも、舟を用いて新たな人々が移住した。その過程で自然環境に適応して、さまざまな人種が形成された。

猿・さる

中国では猿の種類が多いのに熟語や故事はあまりないという。欧米には野生の猿が住まないので民話などには登場しないという。イソップ物語でもグリーム童話でも読んだことがない。日本では猿に因んだことわざだけでも、80にも達するという。古来から親しかったのであろう。今日では人里に出かける猿の被害ばかりが伝えられるが、大昔は共存ができていたのであろうか。猿に関することわざで、ふだんよく耳にするのは、「猿の人真似」「猿も木から落ちる」などがあって、あまりよいイメージ（心象）ではない。「猿知恵」というと、知恵があるがずるい者ということに用いられる。こゝで猿のために弁護しておくと、人間に似た形態がわざわいしたもの、いわゆる近親憎悪かもしれない。立花隆流に言うと人間の〝みにくさ〟を一身に背

一月句会抄

茶柱を信じて出勤霜の道　浅野としお
豪快に嚔のこして座を起てり　岡田踟花
私語の止み念仏お堂に冬法座　小川月舟
二ひら三ひら落葉かぶりし石の貌　恩田和美
ふと見れば紅をこぼして藪柑子　門脇花子
何なくも一日の幸や根深汁　加納信子
戦争日々語りてつきぬ年忘れ　楠房子
茶の花芯通い育ちしこの小径　高木白虹
受話器とり柚子煮えたとお茶誘う　中沢美紀子
病む友を訪えば佗しき年の暮　新出谷一華
年の暮今日も素通り郵便夫　錦織富江
北吹いて薬のにがき身にしみる　峯石美代子
大落暉冬の万象染めにけり　渡部夕峰

護することは、領域支配にとって効果的であるので、積極的に接近した。保証や安堵をし、祭祀の維持を計るのみでなく、社殿の修理・運営にも自らの名によって行うようになった。そして一種の被官化状態になるものもあって、神社・寺院の独立性が失われるようにもなった。

それらを具体的に示す文書は当地に極めて乏しいが、他地方の研究によってそれを推定することができる。

国人層の動向

観応の擾乱は、天下三分の状況を生み出しつゝ、その影響を全国に拡大していった。内乱は在地の基底部（承久の乱後補任された地頭層が国人領主として蟠踞していたもの）までも巻き込んで激しく展開した。

観応の擾乱の折、若狭国の守護山名時氏は、直義とともに京都をのがれ、反尊氏派としての行動を明らかにしたので、守護職を改易されたが、そのあとは国人層によって次第に占められていった。

また後年の明徳の乱（次号で記述）に敗れた山名一門の山名満幸（出雲守護職であった）が山陰へ逃れた際に、味方と信じていた国人層に裏切られたことがある。南北内乱期において、国人領主の動向が、守護の領国支配を左右するようになっていったのである。その例はあげないが各地で起っていた。

そして国人領主も、地名を苗字とするような在地から成長してきた土豪層（飯島→三沢氏、諏訪部→三刀屋氏、神中沢→牛尾氏など）も、その勢力を保持するため、これまでのような分割相続方式をやめて、惣領権強化の方向をはっきりと打出し、譲状によってすべてを惣領にゆずり、兄弟違乱をしてはならないと単独相続へと変化させ、内乱を乗り切ることを考えた。

当奥出雲仁多郡西部の新補地頭で国人三沢氏は、その一系図によると、南北朝対立のころまですでに惣領の単独相続を確立して、力を貯えていた（拙稿の『山陰史論』中の論文参照）。そのためには支配下の田地の状況、農民の存在状態を調査し、しっかりと掌握していて、守護京極氏の代官尼子氏の前に立ちはだかる実力を推持していた。

負わされているのが、猿だということになりそうだ。反省。

申（サル）

十二支の第9番目で「しん」ともいゝ十二支獣としてサルがあてられる。サルの異称でもあり、時刻としては今日の午後4時（しん）（みずのえ・さる）である。

ことしのこの組みあわせは壬申

この年にあたるのでよく知られるのは、壬申の乱（672）・壬申戸籍（1872）である。672年大海人皇子（のちの天武天皇）が天智天皇の子である大友皇子（弘文天皇）の近江朝廷に対して起こした反乱をいゝ、これにかわって強力な中央集権国家が形づくられるもととなった古代最大の内乱をいう。（本誌にも既述）

後者は明治5年わが国最初の全国的戸籍が作られた年である。明治新民法の「家」制度の基盤となったものである。今は閲覧が禁止されている。

ほかに壬申とつくものに壬甲条約がある。1512（永正9）年日本と朝鮮との間に成立した通交関係の条約である。このとしは足利11代将軍義澄で、横田庄の藤ケ瀬城に三沢氏が、地頭請横田庄代官として移城してから3年目である。壬申の年でも、1032年には富士山の大噴火があり、1092年には諸国が大風洪水にあい、1272年には北条時輔が殺され、1332年には天皇後醍醐の隠岐遠流があり、1392年は足利・山名両氏の間の対立から、当横田庄の問題に端を発して激突した明徳の乱が終った翌年であって、南北朝合一の年である。

昭和7年1932は、五・一五事件や第一次上海事変のほか満州国建国があり、ラジオ聴取契約100万突破を祝っている。また東京市が近郊5郡82町村を合併して都となり、世界第2の都市になっている。

ソ連崩壊、ヨーロピアン・コミュニティー（EC、ヨーロッパ共同体）による新らしい欧州の出発、南北朝鮮の歩み寄りなどを経て、20世紀最後の壬申の年の今年は、どのように展開するであろうか。早く去ることを望む年でないように。

時を中心とした前後2時間を「申の刻」「申の時」といった。日没に近いので物事の盛りを過ぎたことのたとえに用いられた。方角としては西から南へ30度寄って西南西にあたる。

十干十二支を干支（かんし）と書き、「エト」とも読むが理由ははっきりしない。

斐の上川柳一月号

目は見えず耳はふさいで親泣かせ　田中有樹絵
目をつむりゃ地球の裏まで見えてくる　横山まこと
その仕草父を偲ばす癖が出る　松浦久寿子
乗り降りは抱いて抱かれて車椅子　渡部ミツコ
気配りに振り回されて師走なり　真綿よし子
あの人の温みしばらく手に残り　児玉哲呂
おっぱいを運んで孫に会う果報　藤原のぼる
さよならとそれから涙の堰が切れ　若槻白馬
さてさてと云っても炬燵離さない　高木白虹
やがて散る木の葉別れに紅をつけ　松田牛歩
婦人会特異の芸で仲間入り　中林もりえ
休日の寝坊に人がやって来る　藤原千代子
野良仕事半人役でもいいとする　安部春恵
絵のような花を夢見ていも植える　安部正子
飽食と言えどやっぱりコシヒカリ　松浦亜以
頂点に立って孤独の風が吹く　森山悠子

前号訂正　1頁1段7行移り、2段8行成良は、31行底して、詩一編7行厭かぬ、6頁右側11行森鴎外、最後の定価は三百十円に訂正

（軍記物による尼子氏一辺倒の出雲の中世史は修正せねばならない段階にきている。）

前号でのべた備後地毗庄を中心とする山内首藤氏の一族一揆は、領主制を展開する山内首藤氏が、内乱を乗り切るための努力のあらわれである。これと山一つで接している三沢氏がすでに休制を整えており、婚姻関係もあるから、文書は当地に残っていないが、山内首藤氏と同じ行動をしていたことも想像できる。しばらくのち、三沢氏が横田庄請代官として横田庄内へ移城できたのも、当地方の掌握がしっかりしていたからである。

先に鰐淵寺僧頼源が、三処郷地頭職の安堵を後年願い出たことを述べたが、その裏にはその地の百姓との確執があったであろうと触れた。この時代はすでに守護支配の侵透と、配下の百姓の抵抗によって国人領主層（地頭や成長土豪）は、動揺と分裂をくりかえしていた時代である。それらは先学の研究にみられるところである。

直冬軍の京都侵入

先に述べた1353（文和2）年5月、山名時氏は伯耆を発し京都に突入した。義詮は南軍を支え切れず京都を放棄した。その後鎌倉から尊氏も義詮援助のため行動を開始し、山名時氏は京都から退ぞき義詮は京都に入った。翌'54（文和3）年6月、直冬は尊氏代として鰐淵寺に祈願している。南朝から総追捕使に任命された直冬を主将とする石見勢中心の反幕府軍は、山名時氏父子の伯耆軍勢とともに、'55（文和4）年、待望の京都に入った（このころ倭冠が高麗船40余隻を略奪している）。しかし占領は長続きせず、近江からの尊氏と播摩からの義詮軍に挟撃され、直冬軍は京都を去った。直冬を最も強力に支えていた山名時氏・師義父子も軌道修正をせまられた。しかし二度にわたる義詮の京都放棄はその権威を低下させていた。

'66年鰐淵寺に守護佐々木道誉祈願
'57年6月（南朝）天皇後村上の綸旨重ねて鰐淵寺に、頼源に三処郷を安堵。

足利尊氏の死

'58（延文3）年4月、九州遠征を計画中の尊氏が死んだ、死因は背部の出来ものようであるという。（この頃倭冠は高麗を侵略し船300隻を焼く）父尊氏の死は有力守護を押さえ、南軍の軍事勢力に対するよき相談相手を義詮は失った。京都奪回の功績をたてた佐々木道誉ほかの守護諸将は幕内での発言力を強め、相互の対立もあらわにし出した。

'59（延文4）になると、後村上の南朝は楠正儀を中心に畿内の土豪・野伏を集めて幕府軍に対抗した。12月義詮は北朝から征夷大将軍に任ぜられた。'60（延文5）南畿で合戦が続いた。国貿易により巨富を持つ山陽の幕府内でも南朝に降るものも出て動揺がひろがったので、将軍家の権威を高めるため、足利一門の斯波氏を家臣が任ぜられる将軍の執事として、義詮の絶対化を計った。

1361西に降った直冬は鰐淵寺に祈願。
6月には三処郷は三度目の安堵をうけるほど不安定。12月

南軍は4度目の入京。義詮は光厳を奉じて近江に敗走。間もなく京都を奪回して帰った。

'63（貞治2）年春直冬方であった長門の大内弘世が誘いをうけ、周防・長門の守護安堵の条件で幕府に帰順した。朝鮮・中勢判断の巧みさから、9月幕府との和睦を決意し、伯耆・因幡ほか3国の守護職保障条件で帰順した。南朝勢力は地に落ちた。

'67（貞治6）4月遂に楠正儀は道誉を介し南北両朝の和睦を進めたが、幕府方の拒否で成立しなかった。11月義詮は政務を子義満に譲り、細川頼之を新管領に任命した。12月義詮は38才で死去した。日ごろの大酒と風邪のこじれとも、高血圧症であったともいう。政治は義満と頼之のコンビで動き出した。

'68（応安元）5月蒙古来襲の噂さあり、12月義満は征夷大将軍となり、'69（仝2）年正儀は遂に幕府に降参した。'71（仝4）年3月北朝後円融天皇践祚する。このころ『太平記』ができた。この前後数年間、倭冠の高麗への侵略がしきりとある。やがて義満の明国への進出へと発展する。

次回は出雲守護となった山名満幸と横田庄、そして横田庄をめぐる将軍義満と山名一門の対立による明徳の乱、そして南北朝合一と横田庄までを述べて本連載を終わる。

続いてNHKテレビとからめて、奥出雲にも史料の多い信長の時代を連載する予定。

何かかなしく　簸の上短歌会

葛の花の浮きて流るる裏川に畑に行かむと鍬をぬらしぬ　常盤　はるまさ
胎盤を下げたるままに母牛は起たむと跪く仔牛をなむる　佐藤喜代子
人の世は何かかなしく吾亦紅畔の日ぐれをゆれつつるたり　永井弥生
紫苑咲きコスモス揺るるを見つつ行く父母のみ墓へつながる道を　野村節子
寝入り端をゆさぶり電話のベルの音孫は野球に勝ちしと告ぐる　松浦愛子
散りしけるガラス破片のひろごりの外に一羽の鳥死にゐたり　小早川恵子
足冷ゆれば電気毛布にくるまりて夫は今宵の月光を問ふ　岡田時子
萩ゆれて露をこぼせる苔寺の庭苑静けし洛北の朝　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第202号
（2月号）
1992. 2. 1
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

信長の時代の奥出雲①

序―欧州は大航海時代・アジアでは倭寇

マルコ・ポーロ（1254～1324）

13世紀半ばから14世紀始めのイタリヤのベネチアの人で、宝石商人である父ニコロ・ポーロ、叔父マッフェオ・ポーロに従って、1271年東方へ船で旅立ち、途中から陸路で小アジア・イラン・パミール・東トルキスタン・甘粛・長安（西安）を経て中国北辺を横断し、上都（内モンゴル自治区）でフビライ・ハン（1271年蒙古を元と改めた世祖）に会い（'74）、そのまゝマルコは元朝に仕えて優遇されて官職につき、その間、中国の各地―河北・陝西・四川・雲南へ、さらに山東・浙江・福建へと広く旅行し、17年間に及んだ。その間にフビライ・ハンの日本への侵入があった。'74年の文永の役と81年の弘安の役である。

マルコはイランのモンゴル王朝イル・ハン国のアングル・ハンに降嫁する元朝の王女コカチンの旅行案内者に選ばれ、ようやく中国を離れ、福建省の泉川を出航し、ジャワ・マレー・セイロン・インドのマルラバを経て、イランのホルムズに着いた。

東方見聞録

任を終え'95年ベネチアに帰ったが、ジェノヴァとの戦争に巻きこまれ捕虜になり牢獄に入れられた。この間に物語作者ルスティケロに、旅行地の風俗・習慣のほか、元朝の宮廷の事情などを筆録させた。これがマルコポーロ旅行記『世界の叙述』（通称『東方見聞録』）である。

この中には日本を黄金の国として、ヂパングの名でヨーロッパにはじめて紹介した。その内容があまりにも珍らしいので、初めは信じられなかったが、そののち多くのヨーロッパ人がアジアへ旅行するにつれて、この本の記事の正確さが知られるに至った。

これは200年後、コロンブスのアメリカ発見の機縁となり、西欧の大航海時代の出現、そして欧州諸国の各地発見による分割支配・植民地獲得時代へとつながった。コロンブス後の中央アジア探検者は、この書を座右から離したことはなかったという。

コロンブスが中国に滞在するより150年前に、わが国東北地方の平泉には、藤原氏によって今日なお現存する、金色に輝く中尊寺の金堂が建立されていたのである。（来1994年のNHKでは、信長にかわる大河ドラマは、この建立者藤原氏の三代を予定しているという）

大航海時代

西ヨーロッパの15世紀初めから17世紀初めにかけては、イベリア半島の二国（ポルトガル・スペイン）をその先導者とし、それまでの地中海世界から目を地球全域に向け、主として大洋航海によって、それまで伝説的、空想的領域にあった世界の各地が、探検航海により次々と現実と確認されていった時代である。

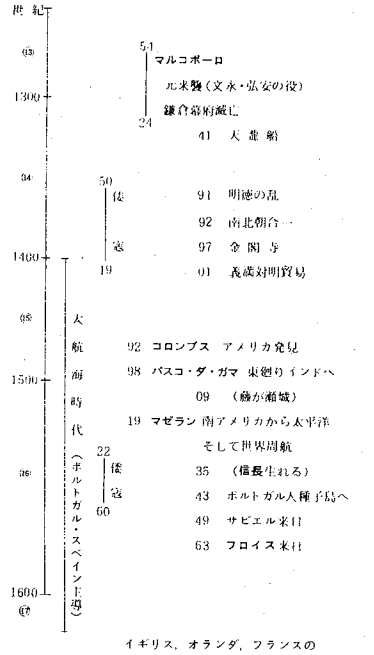
わが国では南北朝時代が終り、義満が金閣寺を建立し、明と国交を開いた時代から、織田信長の時代が終って、豊臣秀吉の時代そして江戸時代を迎えたころまでの間の時代にあたる。

この時代はヨーロッパ中心の立場からみて、地球全域にわたって繰り広げられたヨーロッパ人による「地理上の発見時代」でもあった。それがその後に続く17世紀（日本の近世）より、ヨーロッパ近代諸国家による、非ヨーロッパ地域の植民地化という事態を結果することになる。

そして宗教的には非キリスト教世界に対するキリスト教化が同時に進められた。**信長の時代**はこのわが国へのキリスト教の布教がはじまった時代であった。

イベリア半島（ポルトガル・スペイン）には、780年も前からイスラム教徒が侵入し、イスラム文化の華が咲いていた。この時代―地中海時代―にはイスラム商人の手によって、香辛料・絹・陶器・紙など東洋の物産が入っていたが、これを直接手に入れようとし、東洋に達する道を発見をする探検航海が、この地方の国で試みはじめられた。

ポルトガルでは王家がアフリカの北辺・西海岸そしてそれを南進したり、他方陸路で東海岸へと進んでいたが、それは15世



信長の時代の奥出雲①・太平記の時代と奥出雲⑨・短歌・川柳・俳句

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

紀後半であった。その世紀末の1498年にはバスコ・ダ・ガマが、アフリカの最南端喜望峰を東へ廻り、インド西海岸に達し、宿願のインド航路を発見した。以後ポルトガルはこの方面に大船団を送ることになる。

それから45年後の信長9才の1543年には、ポルトガル人がはじめてわが国の種子島に到着することになる。その6年後には、スペイン人フランシスコ・ザビエルが、ポルトガル国王の依頼でキリスト教のアジア布教に出ていたが、鹿児島に上陸し京都へ入洛した。

アメリカ大陸の発見

と言えば、クリストバル・コロン（コロンブス）であるが、それより5世紀も前に北アメリカに到った人もいるという。

コロンブス（1451～1506）はイタリヤのジェノヴァ生れで、毛織物業の父の家業を手伝って地中海を航海していた。マルコ・ポーロの『東方見聞録』ほかの当時の世界や宇宙に関する本を読み、西航して東洋（ジパング）へ達する計画をたて、ポルトガル王ジョアンに請願したが否決され、スペインのイサベル女王の援助を得て、1492年サンタ・マリア他2隻で、中部アメリカのキューバ島に達し、アジアの一部と判断して帰り、その後3回の航海を行ったが、キューバ島周辺にとどまった。

ポルトガル人バスコ・ダ・ガマがアフリカの南端を廻ってインドに達したのは、コロンブスが第3回航海に出発するころであった。

1494年ポルトガルとスペインはともにカトリック国であったが、両国が発見するであろう地域の所属の紛争防止のため、デウスの支配する土地の処分権はローマ法王にあるとして、境界線を西径46度37分の線とした。それは南アメリカの中央で、東をポルトガル西をスペインとしたので、ブラジルの公用語はポルトガル語、他はスペイン語となった（このころの日本は応仁の乱後で戦国の時代に移っていた）

コロンブスの発見地が新大陸であることがわかると、西へ回航すると東洋に至ると考えられた。ポルトガル人のマゼランは、はじめポルトガル国王に請願したがいれられず、スペイン国王カルロス一世の許可を得て、南アメリカ南端マゼラン海峡を経て、苦難の4か月をかけてフィリピンに達した。こゝでマゼランは戦死したが、乗組員が3年目の1522年に帰港して世界一周に成功した。

このころは信長が生まれる12年前で、わが国では周防の大内氏が日明貿易を独占し、山口が繁栄しているころであり、倭寇が東アジアの中国沿岸で盛んに活躍していた時代であった。

こうしたアフリカ南端を回航して東洋に達したポルトガルの築く世界貿易体制と、新大陸アメリカから太平洋を西航してフィリピンに達したスペインの植民地体制との衝突は、フィリピン南方のモルッカ諸島で激しくなった。

イベリヤ半島のこの2国の世界支配の体制の確立は、それに続くイギリス・オランダ・フランスその他のヨーロッパ諸国が絶対王政の形成を背景に、世界の富の収奪と権力の拡張を求めて、地球上のあらゆる地域を侵略していく糸口になった。そして大英帝国の成立へと進んだ。

経済はイタリヤ商人やイスラム商人による地中海貿易体制が崩壊し、ヨーロッパ諸国が近代資本主義を形成させる方向へと向ったのである。

倭寇の活躍

「倭寇」とは中国・朝鮮の文献にみえる名辞で、本来の意味は、日本人の寇賊行為ないしその行為をする人物・集団をさすが、時代や地域によって違いがある。文字がでるのは5世紀初頭の高句麗広開土王の碑文にあり、日中戦争の時の日本軍を、中国では20世紀的倭寇といっていた。豊臣秀吉の朝鮮出兵は向うでは万暦倭寇といった。

活躍時期は、14～15世紀初頭までの朝鮮半島と中国大陸の沿岸で行動したもの、16世紀の後半に中国大陸南岸や南洋方面で行動したものとに分れるが、後者は前者と違い中国人が主体となっていたという。

古くは1223～1232年に記録があるが、大規模な集団行動が起るのは、1350年以後で、毎年のように朝鮮半島の沿岸をあらした。'55年には高麗船40隻を略奪、'58年は高麗へ侵略して300余隻を焼くという大きい記録がある。

だが他方既述のように足利直義が商人に命じて、中国貿易で得た5,000貫文（5,000石相当）で、天龍寺を創建したり、'63年には周防の大内弘世が中国貿易で巨利も得ている。また蒙古来襲の噂さもあった。'91年の明徳の乱、'92年の南北朝合一のころは、高麗への侵略が激しかった。この年王氏高麗王朝にかわって季氏朝鮮王朝が成立すると、鎮圧策を継承する一方、倭寇懐柔政策も採用した。

1397年足利義満によって金閣寺が建立され、1401年には義満は元寇以来はじめて明と国交を回復し、日本国王と称した。このころから中国大陸への倭寇は鎮静へ向った。

また朝鮮は1419年倭寇の巣窟とみられた対島に、大軍を送り込んだ。応永の外寇（朝鮮では己亥東征という）という。これを機に朝鮮は対島の宗氏を優遇して、倭寇再発防止にも備えたのでさらに沈静化へ向った。

応仁の乱（1467～1497）の数年前に、出雲人が中国の寧波を侵したという記録があるが、極めて少なくなった。

1483年義政は銀閣寺を建立、'86年

太平記の時代と奥出雲⑨

終章 南北朝合一

山名氏と横田庄と明徳の乱

山名氏の惣領時氏が丹波・伯耆、その長男師義が丹波、三男氏冬が因幡、五男時義が美作の守護となり順風に乗ったが、1370（応安3）年氏冬が没し、'71年北朝後円融が即位すると間もなく、山名氏の基礎を築いた時氏が世を去った。'72年には、横田庄内の仙洞御料所に安堵状が出された。師義は但馬の守護職も手に入れた。'76（永和2）年山名氏の惣領を継いでいた長男師義が他界したが、動揺もなく、弟（五男）時義が惣領職とともに師義の跡をすべて継いだ。

'77（永和3）年義満（か）は「僧侶以外のものの寄宿を許さず」の禁制を岩屋寺に届けている。'78年には義満は室町の新第（花の御所）に移居した。この年山名義理（時氏の二男）が、紀伊、氏清（時氏の四男）が和泉と、畿内の先進地域の守護職を得たうえに、いずれも幕府の重職についた。

79（康暦元）、管領細川頼之が罷免され、斯波義将がかわった康暦の変が起こり、結果斯波派の領袖であった山名氏は、なくなった師義の4男**満幸**が**出雲**・隠岐、時義が備後の守護職を得て、一族で11か国を有するという最大の守護大名に成長した。

66か国の六分の一を有する山名氏を「六分一殿」と呼んだという。やがて幕府の直轄地ともいうべき山城までも手にして発言権を増大した。これは石見も手に入れた大内氏や、管領を退いた細川氏などにも脅威となったが、若い義満にとっても将軍の権力確立に深刻な脅威を与えた。そこで義満は山名氏の内部対立を巧みに利用して、勢力削減をねらいはじめた。

'82（永徳2）年4月北朝は後小松天皇が践祚した。山名師氏の子**氏綱**が摂津国馬来郷から、**馬来氏**と名乗り、義満から横田庄の南隣**馬木郷**を領して入った。

'83（永徳3）山名の惣領時義より**岩屋寺**へ寺領安堵状　南朝の長慶は後亀山に譲位、明の太祖は日本と国交を絶ッ

'85（至徳2）5月10日横田庄内馬場八幡宮は山名時義が願主で遷宮を行う

'87（仝　4）時義は岩屋寺へ田3反寄進

山名氏の勢力は着々とこの横田庄内にも扶殖されていった。

'89（康応元）年時義が死没した。**満幸**は横田庄内の下中村内下宮分（角）の1.2町を、時義の志をついだ祈祷のため岩屋寺に寄進。

時義の嫡子時煕が惣領職を嗣ぐと、義満の山名分裂策は露骨となって、義満は時義が生前に将軍の下知に応じない無礼な振舞があったとして、氏清や満幸は尼子経久は月山富田城に入り、1509年三沢遠江守為忠は横田藤が瀬城へ移った。

100年余りたった1523年周防の大内氏が日明貿易を独占し、山口を繁栄させたころから約40年間はふたたび、倭寇の集団活動が始まったが、日本人は少なく中国人が大部分であり中国官憲の圧迫で根拠地を日本に移した。その一人王直はポルトガル人が種子島にはじめて来た時の船員にも加わり、のち大活躍して中国人の首領となった。

1534年信長生れ、41年尼子経久、毛利元就を安芸吉田城せめるが攻れて敗退する。

染むる夕焼

簸の上短歌会

振り向かず君の心に添うべしと念ひて五十年めぐる　永井弥生

来し方

蕎麦を刈り豆を引きたる山畑の案山子の顔を染むる夕焼　野村節子

改札口に乗客跡切れ駅員の空鋏鳴らす山峡の駅　佐藤喜代子

病院に痛みわかちし友の名の新聞に訃報のりてをりたり　岡田時子

飛び散れるガラス破片のひろごりの外に一羽の鳥死にゐたり　小早川恵子

いささかは部屋冷ゆれどもあけてをく初雪見ゆる縁の障子を　常盤はるまさ

妻眠る奥津城の径りんどうのほのか匂ひて夕映へをれり　安部夕波

斐の上川柳二月号

ねんごろな挨拶いまの人は誰れ　高木白虹

一日が孫のリズムで終りかけ　藤原千代子

幸せの位置で今年も歳重ね　横山まこと

お年玉やるも貰うも恵美須顔　若槻白馬

飲む遊ぶ明日のための充電と云う　松田牛歩

年頭の決意人には言われない　児玉哲呂

独り居も年末年始はよくしゃべり　安部正子

孫去んでやっと私のお正月　松浦亜以

授かった孫が主役で年が明け　藤原のぼる

近頃の親孝行には金がいる　松浦久寿子

孫嫁におとそ注がれてえびす顔　安部春恵

初詣で今年も無事で鈴をふる　渡部ミツコ

家々の暮れは多忙な急ぎ足　真綿よし子

八十路坂まだまだおせちまかせない　森山悠子

前号訂正　1頁左欄外（申・）　4頁1段10行体・

に命じて、時熙・氏幸兄弟を討たせた。満幸は父師義の総領職が時義（師義の第4弟）の系統に移ったことに不満をもっていた。その結果、時熙の分国但馬を氏清（師義の第3弟で満幸の叔父）に、氏幸（満幸の兄）の分国伯耆・隠岐を**満幸**に、時熙の分国備後を細川頼之に与えた。

そこで満幸は山名一族の中心的存在となり次第に専横になった。

横田庄の仙洞御料所代官として京より下っていた**安部氏**は、'79年の康応の変後**山名満幸**が出雲守護となってから、**馬木郷**へ**馬来氏**が入った　'82（永徳2）年ごろから、仙洞御料所横田庄を横領し代官（**石原氏**）を送り込んだので代官を退いた。（安部氏系図と文書による。明徳の乱後に10年間退いた代官に返へり咲く）

義満は'92（明徳2）年、管領にふたたび細川頼之を登用し、一転して山名時熙兄弟の罪を許した。そうして横田庄を横領した満幸の出雲守護職を改易したので、足利対山名の対決へと進み明徳の乱が起った。（詳細は当誌既刊号や、拙著『奥出雲横田とたたら』に詳細あり）

この乱で**満幸**は出雲・隠岐・伯耆・丹後4か国の兵を率いて京都に迫まり、京都北西の内野で戦ったが、12月26日敗れた。この時参加した郡内三沢郷ほかの国人領主**三沢氏**5代尾張守為忠が内野で討死した。

敗走した満幸は分国丹後に入られず伯耆に走った。そして出雲は守護代塩冶氏に富田で籠らせたが、国中はすべて京都方に加わり、塩冶一族30人のみであった。この時山名方に加った**馬来氏**初代**氏綱**は富田城下吉田で討死した。

乱後山名氏は11か国から3国（伯耆・因幡・但馬）に削減され、勢力は大きく後退した。

'92（明徳3）南北朝が合体し北朝の後小松天皇となり、翌年上皇後円融が没し、（北朝の上皇料所＝仙洞御料所）横田庄は子後小松に伝領された。

その領内の岩屋寺の寺領は院宣で安堵、'94（応永元）年勅旨をもって伝領の半分は後円融院追善のため、皇室の菩提寺・京都泉涌寺の塔頭雲龍院－現存する－へ寄進された。

12月義満は太政大臣、義持は征夷大将軍となった。

翌応永2年3月、京都で満幸を討った功によって、出雲・隠岐は再び佐々木（京極）氏の高詮（佐々木＝京極道誉の子）にその領内の岩屋寺の寺領は院宣で安堵、'94（応永元）年勅旨をもって伝領の半分は後円融院追善のため、皇室の菩提寺・京都泉涌寺の塔頭雲龍院－現存するーへ寄進された。

12月義満は太政大臣、義持は征夷大将軍となった。

翌応永2年3月、京都で満幸を討った功によって、出雲・隠岐は再び佐々木（京極）氏の高詮（佐々木＝京極道誉の子）に与えられた。－以後100余年、一族尼子氏に譲るまで永く本貫地近江北半国とともに領有した。－

この乱で最も好遇されたのは大内義弘で、和泉・紀伊を得て6か国の守護となり、将軍義満や諸大名の脅威へと成長した。

その翌年義満出家、その翌'97年金閣寺が完成した。

（これからの横田庄は資料多いが本誌既刊号で）

二月句会抄

粥種も二三種ほどや七日粥　浅野としお
年令故に坐る上座や隙間風　岡田踈花
浮き沈みテトラポットや春の湖　岡田麗水
天寿終え安けし顔に冬日差す　小川月舟
初日記駄作を添えて埋めにけり　恩田和美
道中を案じて受話器に雪の嵩　加納信子
子鴨待つ親鴨雪の川瀬とぶ　楠房子
枯笹の葉擦れに過疎の韻をきく　高木白虹
年始行く郷のせせらぎ変わりなく　中沢美紀子
煩悩を立ち切りトンドへ燃やしけり　新出谷一華
荒れし掌に去年の病を落とす春　錦織富江
切干のいよいよ細り寒に入る　渡部夕峰

佐々木（京極）道誉と足利直冬

道誉の集めた茶道具の逸品は、村田珠光・武野紹鷗にうけつがれ、その道の鼻祖といわれているし、能楽における道誉の精神は世阿弥にうけつがれて、現代にまで生きている。また立花の礼式を書きのこし、これものちの華道の基本になっている。

78才の生涯を閉ぢた近江国犬上郡甲良庄（一族**尼子氏**の出身地の近くで、のち**三沢氏**が領した近く）の勝楽寺に残る、中岩円日和尚の弔文にあるように、貞心を堅持し、道徳を積むことを心がけ、風雅と兵馬の道をいそしみ、納得のいく生涯を送ったばさらぶりである。これをつぐのが数人おり、斉藤道三、そして天下とりへ駈け上った織田信長であった。

尊氏の子直冬は叔父直義の猶子となり長門探題となったのは1349年であった。備中・備後・安芸・周防・長門・出雲・因幡・伯耆8国の支配者であり、有能な武将であった。'51年には九州の武家を支配する鎮西探題となった。父直義の死後もよく戦い、実父尊氏と弟義詮に抵抗し、京都も占領した。尊氏が死んだ'58年にも対決は結着していなかったが、このころから九州の武家は彼のもとを去り、'62年最も頼みにしていた山名時氏の離反以後は義詮との戦いの記録はないが、66年までは西中国の政務をとった記録はある。直冬の没年は不明であるが、養父直義・父尊氏・養母登子・兄竹若・弟義詮・基氏・妹頼子のうちで最後に死んだ。

石村禎久によれば、直冬が石見銀山の露頭堀をしたということが、石見の「小笠原十五代記」にあるという。これは直冬に忠誠を誓っていた近くの地頭吉川氏が、石見国守護大内弘世から管理をゆだねられていたことからであろうという。最後は江津市都治の慈恩寺（臨済宗）で晩年を過し、74才で没したという。子冬氏は備後に住い、孫が僧となったとも伝える。

義満が臣下としては最高位の太政大臣となったのは、異例中の異例で、武家では平清盛に先例があるのみ。義満は南北朝合一をなし、明国との貿易で巨利を得て鹿苑寺金閣を設け、こゝを中心に外来文化の尊重、宗元の名画・五山文化・寺院建築と力を入れ、北山文化の華を咲かせ、室町時代の最盛期をもたらした。（完）

（高橋一郎）

会員頒布一部百五十五円／六九二ノ一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0－601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 203 号
（3 月 号）
1992. 3. 7
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

信長の時代の奥出雲②

序Ⅱ　キリスト教の伝来と山陰

香辛料

ヨーロッパの15世紀に大航海時代が出現する原動力の一つに香辛料がある。60年も前に西洋史を教わった時、香料ともいわれたから、西洋人はハイカラな者ばかりいるからと受けとっていた。ところがこれは食物に混入するために需要が高かったと知って驚いたのは、新らしいことである。

ヨーロッパでは胡椒の栽培が無理で、インドあたりから沢山の中間商人をわずらわして、地中海経由で輸入していた。値段はやたらに高く一般の人々の手にはなかなか入らなかった。

このころのヨーロッパ人の食生活は極めて貧弱で、飼料事情がわるく、冬までに種豚以外のすべての豚を、塩漬けの肉として春まで保存せねばならない。そのための食塩の量は莫大なもので、塩気や臭気はなかなかぬけない上に、食塩の脱水作用で肉はかさかさで、鼻をつまみながら、舌がひりひりする乾燥肉を、無理矢理にのどに押し込んでいた。

この時塩漬けの肉の味を少しでもましにするには、塩漬けの時に胡椒その他の香辛料を混入しておくことだった。そこで需要が生活の上下を問わず広がった。

最初に香辛料をたやすく入れようと努力したのが、ポルトガルだった。やがてスペインが加わった。

15世紀のポルトガル・スペインの両国にはキリスト教が根付いていた。

キリスト教布教は貿易とともに

16世紀（三沢氏が藤が瀬城に入った）になると、古くからキリスト教のカトリックが定着していたフランスから北や東のヨーロッパでは、宗教改革や宗教戦争の時代で、政情不安で、大航海時代の到来でも、海外進出どころではなかった。カトリックの権威も後退していた。

ところがイベリヤ半島のスペイン（次のオリンピック開催国）やポルトガルはその外にあった。

スペイン人宣教師ロヨラやザビエルは1534年にイエズス会を結成し、ローマ法王権至上主義を再確認し、カトリックの失点を海外への布教で埋めようとした。この年が奇しくも信長の誕生した年であった。

1540年軍隊的規律をもつイエズス会はローマ法王に公認され、ポルトガル国王は、サビエルにインド布教を命じた。

こうして布教と貿易による香辛料のヨーロッパへの流入が、車の両輪の如く廻り出した。

ザビエルはスペイン北部の貴族の家に生れで、パリ大学に留学、宣教師ロヨラの感化をうけたのである。会の結成後ザビエルはローマ法王の使者、イエズス会の東インド管区長の資格をもってインドのゴアに達し、インド各地を巡り、さらにマラッカからモルッカ諸島まで布教した。

その間マラツカの教会で最初の日本人として鹿児島出身のヤジロウ（アンジロウ）らに会い、彼らの母国日本にキリシタン宗門を広める大いなる熱意を抱いた。いったんゴアに引き揚げて準備を整え、マラツカ経由で、1549（天文8）年8月15日鹿児島に第一歩を印した。薩摩・平戸を経て山口でも同僚フェルナンデスと伝道し、'51年初めに堺に達し、ついで京都に入ったが、戦乱のため天皇も将軍（足利義輝）も権威がなく、有力者のだれにも相手にしてもらえず、日本では「肩書き」と「土産」の必要なことを痛感し、都での布教をあきらめ、落胆のうちに西下した彼は、周防の大内義隆を再度訪れた。明との勘合貿易（正式な貿易）で山口は繁栄し、治安もよかったので、平戸に預けてあった数々の珍奇な品を献上して、その好意（布教の公認）のもとに山口で布教し、2か月の間に人が受洗するほど大成功をおさめた。ついで豊後にポルトガル船が入港したとの知らせでその地に移り、大友宗麟に謁したのち'51年ひとまず離日してインドに帰った。翌年中国布教を志してゴアから旅立ったが、広東沖のカンチョアン（上川）島で病死した。

ルイス・フロイス

その後日本に残留したものの、あらたに派遣されたイエズス会士は、都を布教の中心にしようとしたが思い通りにいかなかった。サビエルが日本を去ってから12年目の'63（永禄6）年7月来日し、'65年1月末京都に入ったルイス・フロイスも例外ではなかったが、'68（永禄11）年10月、織田信長が足利義昭を奉じて都に入ってから状況が変っていった。

フロイスはポルトガルのリスボンに生れ、16才ごろイエズス会員となってインドに向い、ゴアでサビエルや鹿児島出身のヤジロウらにも会った。早くから文筆の才能があり、来日後織田信長の寵をうけ、岐阜・安土・京都などで信長と親しみ、興味

信長の時代の奥出雲②・横田三十三番札所めぐり①・奥の細道・短歌・川柳・俳句

深い報告書をヨーロッパに送って広く読まれた。『日本史』はザビエル以後の布教史で、当時の信長・秀吉時代の国内事情を知る一等資料（12巻の大冊）といわれる。これが日本ではじめて日本語で活字化が完成されたのは、こゝ10年ほど前である。

山陰のキリシタン（キリスト教信者）

鳥取県八頭郡若桜町の**鬼が城**は14世紀半ばに矢部氏が築城したが、1575（天正7）年16代矢部山城守は尼子勝久、山中鹿之助の攻撃によって落城し帰農した。

その末孫で現存する矢部氏宅には、当時から伝わる厨子におさまる千手観音があるが、あきらかに原体はイエス像であるという。

この城の落城の年は、ザビエル渡来後26年のころ、フロイスは渡来12年後でまだ日本に滞在し布教している時代である。当時大村純忠・大内義隆・大友宗麟・大村理専・結城忠正・清原外記・高山右近などのキリシタン大名をはじめ指導者的信徒も出し、全国で30万人の（日本人口1,500万）信徒がいたという。矢部氏がキリシタン大名であることは疑いない。

また**鹿野**城主亀井玆矩は、1610（慶長15）年御朱印を受けて、南蛮貿易をしており、1591（天正19）年朝鮮出兵にも従軍し、九州名護屋に駐留し、キリスト教の宣教師（伴天連）を通して西洋文明に接している。江戸時代になると長崎に家臣を派遣し、南蛮貿易にも力を入れ、さらに家臣をシャムにも送る先覚的大名であった。

城下の近くの酒津には、遺物や秘話が残っているが、1620（天和6）年、ポルロ神父が伯耆国を巡回しており、こゝに立寄って信徒を激励したことが報告書にしるされているという。

亀井氏は2代の時、**津和野**に転封されているが、津和野の地は今日もカトリックの盛んなところである。研究書にゆずるが、亀井玆矩が切支丹信仰に入ったことは、己の信ずることもあったであろうが、南蛮貿易を有利にするためには伴天連と結びつかねばならなかった。他の貿易する諸大名と同じであった。

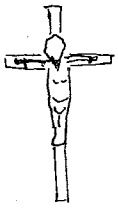
さらに**羽衣石**城主南條氏も朝鮮出兵に参加し、しばらく名護屋に滞在している。南條氏も入信している。

また**鳥取**城主池田長吉も摂津のキリシタン大名池田家と因縁がある家柄で、この縁によってキリシタン大名となり、さらに**米子**城主中村一忠（母はキリシタン大名池田信輝の一姫）へと伝わり、**松江**の城下町にも流れているといえるという。

このころの山陰地方にはかなりの隠れ切利支丹がいたといわれる。これを慰問し激励するため1620（天和6）年、ジョアン・パプチスタ・ポルロ神父が来ている。高松・丸亀から山陽方面を巡教して、洗礼者もふやし、美作から**出雲**に入り、**伯耆**に入り大山山麓で配流の憂目にあっている一団を慰問したことを、ローマに報告している。当時の遺物が近年発見されている。

以上山陰のキリスト教については、松江の安部金一さんの助言で、鳥取の松田重雄著『池田藩主と因伯のキリスタン』を読み、その一部を借用した。

尚**安来**地方にも隠れキリシタンの遺跡があることをつけ加えておく。



横田三十三番札所めぐり①

末法思想と観音信仰

平安時代の貴族、僧侶たちは、永承七年（1052）をもって末法の時代に入ると固く信じていた。

末法思想というのは、仏法の変遷と推移に関する一種の予言で、釈迦入滅の日より1000年を数えて、正法の時代（教えによって修業が行われ、悟りも得られる）から、像法の時代（教えと修業はあるが、悟りが得られない）を経て末法の時代に入るとしていて、この時代は教えだけで、修業も悟りもなくなるのである。すなわち仏法による済度は絶望的で、弥勒の出現によって救済されるまで、永い暗黒の生死に耐えねばならないという。

武家階級の台頭や僧兵の横暴などで、切実感をもって一般にこの思想がひろまった。絶望的になった群衆は済度を求めて霊場を巡りはじめる。彼岸への欣求であり、現世における救いでもあった。いわゆる巡礼である。

平安中期に定められた西国三十三カ所の霊場はこうして始まった。観世音菩薩とは最も衆人に親しまれる修業する菩薩で、33の化身を有して信仰者のために、随所に出現して救いをたれるということから、この観音信仰は盛んとなり、鎌倉時代初期には関東に霊場が設けられた。

出雲の三十三番札所が設けられたのは明らかではないが、室町時代からのようである。この33番を決めるにあたって、中心となったのが横田の岩屋寺（本尊十一面観音）であったが、最後に数が多くなり自らも辞退して決定したと伝えている。これに対し異説もあったが、最近発刊された『大社町史』の中世編を読むと、出雲における岩屋寺の地位が明らかである。やはり岩屋寺説を肯定したい。

したがって仁多札三十三番も横田札三十三番の観音霊場めぐりも、一番が岩屋寺となっているのもうなづける。一般に札所巡りが普及したのは江戸時代からと言われるが、横田札については江戸時代前と考えられる。それは「元禄元年（1688）、五反田六兵衛、横田三十三番観音詠歌を興行す」との同時代の記録がある。この時から、（4頁へ）

松島や　あゝ松島や松島や

―奥の細道二人三脚急ぎ旅

こけしとそろばんとたたら

1991年の秋は3年続いての秋の東北の旅に出て、蔵王山の東麓遠刈田温泉に一泊した。こゝも10余年前、当時では日本最古といわれた白石製鉄遺跡を訪ねた折立寄ったので、二度目であった。

学会の会場が伝統産業こけし会館だったので、同じロクロを主要工具とするそろばんとの関連で調査もしたところで、なつかしく、1万点を越すという東北を中心とする各地のこけし、名工のこけしの蒐集品をゆっくり見たり、伝統工芸工の製作の実演について、いろいろたずねることができた。こけしの組合長の講演も聞き膝をつき合わせても語り、横田への来訪をすゝめた。

今まではひとりか山妻とふたりで、学会の前後にゆっくりと、芭蕉の奥の細道の足跡をたどっていたが、この度は学会の見学コースにほゞ組み込まれるようになっていたし、学会前後の予定の都合で、急ぎ足であった。

地元の会員で案内役でもあった尾崎保博さんの助言で、ほとんど見逃がすことがなかったのは幸だった。尾崎さんは釜石市の志波彦神社・塩竈神社の権禰宜で、付設の博物館の学芸員で、昨年の2月の横田史談会主催の第9回横田たたら勉強会にも参加された方である。帰ってしばらくすると、研究物を送って頂いた。

歴史の楽しさ

昨年度の第17回郷土史研究賞の受賞作の特賞は、坂田大爾の「文観僧正私論―元弘の乱と西大寺律宗」であるが、選考委員の評によると、「謎の妖僧後醍醐側近の文観を律宗西大寺末寺形成の過程で捉えた研究であるが、今までは文観は悪僧とされていたが、それは太平記の作者が己の宗派の立場に立って文観を許さなかったという視点から、そういう風に書いたのであって、播摩国に寺をもつ文観は西大寺にも関係があり、西大寺は鎌倉時代から著名な僧を出し、それらが土木事業をやった事業僧でもあった伝統の中で、文観は各地に講を結んでいて全国から情報網を持っていたので、後醍醐の参謀僧としての実益があったことを見落してはならないという。優れた論文だが惜しむらくは書かれるのが遅かった。

早く出て吉川英治が読んでその著『私本太平記』に組込んでもらっておれば、NHKの昨年の大河ドラマ「太平記」で、坂田説が採り入れられたのではないか」と。

昨年は多くの人が片寄った南北朝史観を改められ、正しい足利尊氏像を得たのであるが、文観についても単なる妖僧としてではない面も出たであろう。

奥の細道と芭蕉の敬神

尾崎論文の要点を転載する。芭蕉に関する数多くの著書を読んでいるが、尾崎の述べているような見解は、はじめて知ったからである。三つのことが書かれている。

① 1689（元禄2）年3月奥の細道の旅に出た年の秋には、伊勢神宮の遷宮が行われている。芭蕉は『おくの細道』の最後は、「蛤（はまぐり）のふたみに別れ行く秋ぞ」と結んでいるが、その前に「長月（旧9月）六日になれば、伊勢の遷宮拝まんと、まだ舟に乗りて」とある。

これに関して今までは極めて軽るい解釈が行われていたが、尾崎は始めから芭蕉は間に合うように、日程を組んでいたのであると、次のような見解をとっている。このことは『延喜式神名帳』（10世紀初頭に編集されたもの）をたづさえて旅行に出ていることからも裏付けられるという。

一家（ひとつや）に遊女も寝たり萩と月は、北陸の親知らずを越えて市振の関での有名な句である。解釈はいろいろに分れる。遊女が伊勢参宮するので道中一緒してほしいと頼むが、芭蕉は方向は同じだが寄り道が多いと断り、「伊勢の大神が道中守ってくれる」とさとした。

同行の弟子曽良の『随行日記』には書いてない。芭蕉の虚構であるが、そのゆえに重要である。芭蕉は『笈の小文』で、文学とは人間の日常生活と精神と芸術とが一体になったところに成立すると言っている。

遊女は乞食僧姿の芭蕉そのものであり、伊勢の信仰の巾広さを語るとともに、遷宮の日を常

柴栗句会抄

老妻と祝ぎ追儺の豆を一つ噛む　浅野　としお
生きる気迫物の芽堅き大地破る　岡田　踈花
亡父亡母の住みにし離れ冬障子　小川　月舟
風花の時には牛の瞳つむらせて　恩田　和美
湯煙に風花舞ひ散る露天風呂　楠　房子
小さな春手提げに下車す山の駅　高木　白虹
一服のお茶にも春の来る韻や　中澤　美紀子
幼児の撒きし靴の中より福の豆　新出谷　一華
刺のある言葉に感謝冬の薔薇　門脇　花子
還暦の厄を払ひて夢新た　加納　信子
嫁も娘も遠くに住みて寒の餅　錦織　富江
大嘘（くそ）悼ることなく一人部屋　渡部　夕峰
細り行く夢引きづりて春を待つ　峯石　美代子
明治遠し旧正月の雑煮祝ぐ　糸原　古志

前号訂正　3頁2段3行「攻れて」抹消・全3段18行　ツをつ・

されど世界に　　簸の上短歌会

戦争は骨身に泌みゐる来し方をされど世界に戦いは止まず　永井弥生
買上げの終りし畑の叢に末成りの南瓜色鮮やけし　佐藤喜代子
終の日のことを呟く妻をなだめ宥めながらにわれも危ふし　常盤はるまさ
その太き嘴に血をにじませて横たう鳥はすでに動かず　小早川恵子
亡き曽父が泥箱背負ひ拓きたる峡田はいまし埋められゆく　岡田時子
歳窯を焚くと身仕度整へし夫の背に風花の舞ふ　野村節子
子ら去にてひそけき厨にふつふつと七草粥の煮ゆる音のす　仝人
冬の雲ながるる空や比叡山木立の奥の延暦寺静けし　安部夕波

斐の上川柳三月号

米寿越し白馬は駆ける白寿まで　安部春恵
誕生日祝う食卓二人だけ　横山まこと
脈搏に終着駅のあせり聞く　高木白虹
定刻にお茶を飲んでる年金者　児玉哲呂
大物の口に世界が耳を立て　藤原千代子
ボケ進み達筆届かぬ友偲び　安部正子
戦争の傷あと止めどなく浮上　松浦亜以
宿題の点検役がまわされる　藤原のぼる
暖冬と聞こえは良いが作不安　中林もりえ
長命の秘訣は消ゴム持って生き　若槻白馬
年賀状手書き伝わる温かさ　真綿よし子
福は内あとには豆がころぶだけ　渡部ミツコ
蜜吸えば蝶も女も逃げたがる　松田牛歩
新人は人の倍ほど頭下げ　松浦久寿子

に頭におくが故に、かく語らせたのである。芭蕉は忍者であったという説もあるほど、早く歩いているが、それは遷宮の日にあわせるためであったとみる。『おくの細道』の冒頭の文と、終章の文は結びつけて読むとそれを言っているという。

② 持参している『延喜式神名帳抄録』、周到な名勝地の下調べとともに、行程の中にある神社名も調べてあることは、これらの神社が道中の守護であり、道しるべでもあり、何にもまして伊勢へのみやげでもあったとみるのである。このことは塩竈神社や羽黒山神社の項その他にも、神名帳をひもといて、その地の神をまつる風俗を確認し参拝しているのである。

③ 西行法師、能因法師はともに芭蕉が師と仰いだ人である。西行は平泉が亡ぶ前に2度訪れている。芭蕉が平泉で流した涙は時代の涙であり、西行にたどりついた涙であるという。

以上ははじめて接した見解であって、興味深いものであったのでこゝに紹介した。

塩竈神社ほか

宮城県塩釜市にある陸奥国の一宮である。1607（慶長12）年藩主伊達正宗によって造営、その後代々が造営に努力し、4代綱村（**亀千代で母は横田庄藤が瀬城主三沢氏の末孫の初子**）が完成させたが、現社殿はその後造営のものである。

随神門を入った右の方に天然記念物の塩竈桜がある。この桜を見物することに芭蕉は、奥羽行脚の目的の一つともしていたようである。また社殿の前には古い宝塔があって、鉄の扉の表面に「奉寄進　文治三年和泉三郎忠衡敬白」の文字がある。1187年平安末期藤原秀衡が没し、奥州藤原3代の危急存亡の年である。庇護にたのめるためのものであろう。

下って博物館の方へ行くと、「芭蕉翁奥の細道碑」があって、こゝでの文章が抄刻してある。だらだら坂を下ると、芭蕉止宿の地という碑がある。裏参道を出てやがて御釜神社に到る。こゝを拝んで芭蕉は松島へ渡った。曽良は

松島や鶴に身を借れほととぎす

と句を作ったが、本人は待望の絶景に接して、もはや句をよむどころでなく、句作を断念して眠ろうとしても感激のあまり眠ることができなかった。

そして瑞巌寺に参詣した。こゝでの芭蕉の文は極めて短く句作もない。ところが寺院内のあちこちに碑が多く、多くの人の句が刻まれていて、それもほとんどが松島をうたったものである。（寺の本堂ほか塀・門にいたるまでほとんどの建物は国宝）

正岡子規は1893（明治26）年ここを訪れて、句碑林立すれども殆んど見るべきものなしとしている。海岸に出て五大堂、観瀾亭を経て朱塗りの渡月橋を渡ると雄島である。こゝにも句歌碑の類がおびただしい。

（2頁より）御詠歌が催されたことが確かである。御詠歌の作詞者が六兵衛なのか、依頼して完成したのをはじめて興行したかである。するとそれだけの雰囲気が早くから育っていたことをしめすものである。

号を追って岩屋寺から写真と歌を載せることとする。



会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0▌▌601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第204号
（3月号）
1992. 4. 4
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

堀出し写真が語り出す昔①

横田・西城間の乗合自動車

改造したアメリカ製フォード車

―八川―三井野―西城着3時、下の写真は1925（大14）から'37（昭12）まで、備後西城村と横田村間を一日一往復していた、6人乗り（ほかに助手1人添乗）の乗合自動車である。当時の運転手の間瀬場恵次（明治35・飯石郡志々村八神生れ、旧姓川上）さんは今も90才で健在で、この写真も提供いただいた。

西城町中町の宮崎純朗（のち町長に、現在は子息が歯科医）が個人で創立した、「比婆郡西城町自動車商会」所属のものであった（のち西城自動車株式会社となる）。

朝7時油木発―小鳥原（しとどばら）―西城停留所（佐島旅館）8時半発―三井野経由―八川停留所（古市松島旅館）―横田停留所（宮本屋旅館）着。帰りは午后1時発

その後小鳥原―油木終着。こゝで宿泊という路程であった。横田・西城間は2時間かゝった。

筆者も1度父に連られて西城の親戚を訪ねたことがあった。三井野の蛇行する急坂の両側には、雑木が鬱蒼と茂り、今日のように深い谷底が見えて身震いするという感じは少なかったが、昼でも薄暗く、道幅は狭く、車が通る時人がよけるには、人が山肌にピッタリとはいつくばらなくてはならぬほどだった。カーブも肘曲りの状態が多く、一度には曲れないところもあった。

名運転

間瀬場さんは福山方面で陸軍大演習が行われた時、昭和天皇の車を運転したという腕前で、記念品は家宝とされている。スポーツマンで、走ること（横田で毎年開催の陰陽陸上競技大会でリレーで優勝）、テニスと当時での万能選手だった。いくら腕は良くても道路の幅員には勝てず、当時地元の人に頼んで5か所の曲り角だけは、山側を削ってもらったという。

その人は八鉾村の古崎運蔵だった。調べてみると八川の人で、大正初年にこゝに移り（三井野から少し下ったところ）、農業のかたわら土木事業もし、また近くの『七ケ所釿』（米子の坂口家経営）の大鍛冶場も引きうけ、村会議員にもなり、戦時中に八川へ帰っている。

いま坂根駅前に住んでおられる佐伯福蔵さんの話では、祖父の代には旧道の入口で店を開いて



先駆者の努力

状況であった。この路線よりも5年も前に、乗合自動車が走りはじめた横田、大東間なども、興味ある話があるが別の機会に。

昭和10年ころから木次線が全通した12年まで、横田・坂根間にスイッチ・バック工事の人夫を運ぶため、朝夕2回の乗合自動車が運行した。木次に本社のあった三葉自動車株式会社の車で、運転手は大東町の故木村義信（大2生）であった。間瀬場さんも写真ではハンチング姿の美男子である。この木村も同様で興味ある話が残っている。また横田・大東間に自動車をはじめて走らせた別な木村も、東京仕込みの腕の良い美男子であった。筆者もよく憶えている。いまでも90才前後の当時の娘さんに話を聞くと、あこがれの的であったという。何にしても今日の国際航空路のパイロット級の社会的格付であった。雨が降るとセルロイドののぞき窓のついたシートを、車の車側に吊り下げるだけで、車が走ると透き間から雨が吹き込んだが、愚痴を言うものはいなかった。

この話は、西城町の新山勝勇・落合徳市（横田生れ）・間瀬場、古市の古崎壮一の皆さんのご協力によってまとめたことを誌し感謝する。

（横田史談会　高橋一郎）

堀出し写真が語り出す昔①・信長の時代の奥出雲③・短歌・川柳・俳句

信長の時代の奥出雲 ③

序Ⅲ——諸大名の経済基盤

守護大名から戦国大名へ

鎌倉幕府の創設とともに、頼朝は功績も考え各国の有力御家人を各国の守護に任命した。その職は軍事・警察と任国内の行政にあった。室町時代になると領国内の武士も支配し、荘園を侵略して勢力をのばし、領主化を遂げ守護大名に成長した。応仁・文明の乱（15世紀後期）以後、約1世紀にわたる戦国動乱の過程で、戦国大名が各地に登場し相互に抗争を展開、群雄割拠の時代となった。室町幕府の支配統制力の後退によるが、この戦国大名の成立には、一つは守護が、もう一つは守護代（官）や国人（地頭が土着して小領主に）などが、それぞれ権力的発展を遂げたのである。**前者**はとくに東国・九州という畿内から離れて展開した守護が多く——武田・今川・六角・大内・大友・島津などが代表——、**後者**では伊達・上杉・後北条・織田・斉藤・朝倉・浅井・毛利・長宗我部・龍造寺・相良の諸氏などで、地域的な偏りがない。

守護大名とは室町幕府という体制を背景とし、経済的には荘園を、軍事的には管轄下の国人級の動員を可能とするにとどまる権力的性格をもっていた。**戦国大名**は、幕府の保障を絶対的必要条件とせず、荘園制的支配秩序を否定する方向をもち、在地の小領主（**三沢氏・馬来氏**）・土豪（**安部氏**）・名主（**小池氏**）といった惣村の中心的存在への、直接的な軍事動員を可能にしたという権力的性格をもった。別に言えば、中世半ば以降の耕作技術の発展、商品作物や手工業品の拡大、在地への剰余生産物の留保、名体制（開拓地を中心に私的な土地をもつ名主が惣村の指導者となっていた。大閤検地で解体した）の分解と、小百姓経営の進展、惣村の展開（名主を中心に郷村単位に惣をつくり、自衛のため武装し、年貢減免や代官非法を訴えて土一揆・国一揆をおこした。秀吉によって兵農分離が完全となると本百姓——**年貢を納める**——と水呑百姓——**納めない**——に分れた）といった社会の基礎構造の急激な変化とそれへの対応が、守護大名にかわって戦国大名が登場する誘因ともなった。

戦国大名それぞれの権力構造

大名の家臣には、大名の一門・譜代・外様とに分れた。このうち譜代衆が家臣団の中核に据えられ、外様は領国支配の拡大・深化のなかで新らしく服属した国人層であり、独立的性格がとくに強く、その編成は大きな課題であった。また一門衆も独立的性格があり、一門の間の対抗意識もあり、動向には要注意であった。上表にも記しているように、親子兄弟の間にも相剋がはげしかった。信長が尾張統一の寸前には、うつけ者の声を隠れ蓑として、すべての所領を分け与え、やがて次々と押さえて行くという状況は、NHKテレビが刻明に放映している。尼子氏が急速に崩壊した原因は、一門の争い家臣統率のまずさで、これに引きかえ毛利氏の固い成長は、配置と統卒の巧みさにあった。

戦国大名の中には中世後期に

織田氏	今川氏	斉藤氏	武田氏
守護代 → 戦国大名	守護 → 戦国	守護代 → 戦国	守護 → 戦国
尾張	三河国今川荘	美濃（土岐氏の下で）	甲斐（承久の乱で）
（下段に）	足利氏一門	道三の父は京都の僧	清和源氏系
93 越前織田庄の荘官か神官	①範国 尊氏に功あり 1336 遠江国も ②範氏 84 駿河国も 弟今川了後著の『難太平記』		
	⑦氏親（戦国大名へ）検地を行う	94 ⑫道三生る	
①信正 33（天文2）美濃に築城 34 ③信長生れる 48 道三と和し娘を妻に 51 18才で後継 59 織田一族の統卒 60 今川義元を討つ 64 尾張統一 67 斉藤竜興を追い 73 室町幕府滅亡 76 安土城へ 天下統一へのり出す 82（天正10）本能寺にて自刃	19 ⑲義元生る 36（天文5）3か国大名に 60（永禄3）桶狭間にて信長に破れる	33 土岐氏の守護代 42 美濃を支配 ⑬義龍父道三を追放 56 ⑭竜興 67 信長に追われ美濃を失う	07 ⑯信虎 14才で 21 ⑰信玄 41 父を追放し大名に 川中島の合戦 73 近隣7か国も（大正元） 病死 80 ⑱勝頼自刃亡ぶ

	大内氏	毛利氏	尼子氏	三沢氏	山名氏
成長	守護大名 → 戦国大名	小領主 → 戦国大名	守護代 → 戦国大名	新浦地頭 → 小領主	守護 → 戦国
発生	周防	安芸吉田	出雲（京極氏）	仁多郡三沢郷	伯耆
祖	朝鮮半島からの渡来人	学者大江広元	宇多源氏佐々木・京極氏系	清和源氏信濃小笠氏系	清和源氏新田氏系
世紀					
14	㉓弘幸㉔弘世 足利尊氏に功あり（周防・長門・石見） ㉕義弘 明徳の乱山名氏を討ち6カ国守護に	㊶①時親 吉田の郡山城へ 南北朝時代	①高久	⑤為忠（尾張守） 91 明徳の乱に山名方で討死	一族で11か国を領し六分一殿と（）満幸 明徳の乱に破れ 出雲守護を失う
15	㉚義興	07 ⑫元就	④経久 86（文明16）富田から追われる	横田庄の三領家の代官 ⑨為在 84 尼子氏を追放	
16	07 ㉛義隆 25（大永5）全盛期7か国守護 日明貿易 学問・サビエルに布教許可 51（天文20）陶晴賢に敗れ滅亡	23（大永3）27才で領主に 大内氏に従う 40（天文9）尼子を破る 55（弘治元）陶氏を自刃させ大名に 66（永禄9）富田城を陥落 70 10か国大名 71（元亀元）病死 ⑬輝元	急速に拡大、家臣の内容伴わず国内国人小領主掌握下手。衰退早い。 ⑥晴久 46（天文9）毛利攻め失敗 58（永禄1）石見銀山掌握 7か国大名に ⑦義久 富田落城 ⑧勝久 78（天正6）上月城落ち自刃	09 ⑩為忠（遠江守）藤が瀬城へ移る 51（天文10）尼子氏在国の代官として家臣を横田へ 61 横田町作りへ 富田城おち、代官に復す ⑬為虎 上月城を攻める 91（天正19）安芸へ移住	因幡一国 80（天正8）秀吉に降る

検地政策をとりはじめ、所領貫高を明らかにして軍役を賦課し、さらに農民の掌握へと進んだ。そして農業生産力の向上に努力し、商工業者への保護と統制で商業の発展をはかった。城下町の発展、市場圏の形成である。港湾の整備や鉱山開発へと進むものもあった。こゝで表にあげた戦国諸大名の一部の経済政策と経済力を一瞥して置くことにする。

周防の大内義隆

半島渡来人の末裔という大内氏は、足利尊氏の時代から船来品のもたらす経済力で財政基盤を強くしていた。14世紀末の明徳の乱後義弘は積極的に朝鮮との通交をして、莫大な利益を得た。その子の16年間の在京以後代々がそれぞれ10余年在京したのは、その背景には朝鮮貿易全盛時代があったからである。㉛義興は幕府がもっていた明との勘合貿易の実権を握った。1回船は3～4隻で、その利益は莫大であったが、この公貿易以外の私貿易の利益も多かった。

石見銀山は大内・尼子・毛利の戦力源であった。大内氏が山口に西の京といわれるほどの文化を育てた反面、在京年数の長期化さらに京都での堂塔建立100か所などは、義隆が家臣団から見放され、900年の伝統を誇る大内氏に終止符を打つ原因ともなった。

駿遠参3か国の戦国大名今川氏

義元が1536（天文5）年家督をつぎ'60（永禄3）年天下人織田信長の前に敗死するまでの24年間の経済力は、検地政策の強化によった。在地紛争の解決に役立ち、支配関係の整備につながり安定化をもたらした。勿論年貢の増収にもつながった。

また広い直轄領地における生産物資や銭貨もしっかり握り、農業以外の手工業生産や職人についてもかなり把握しており、流通経済についても、東海道の伝馬制、海上交通における船主への保証の返しとしての統制策もとられていた。

駿河・遠江・三河3国のこうした状況は、広い地域の上に、当時としては極めて生産力の高い土地柄であったから、このような政策が考えられもした。

前号訂正　1頁5段1行5,000・人追加　4頁5段16行観瀾閣・

美濃の斉藤道三

義隆・義元とほゞ同時代に全盛期を築いたのが道三である。

道三が戦国大名となったころの美濃は疲弊していたという。原因の一つは美濃に多い木曽川などの大河川とその支流が引きおこす毎年のような水害と、位置上越前・美濃などの外部勢力の進攻に常にさらされての田畠の荒廃であった。道三が娘を信長に嫁がせたのも、この外敵の進攻を少なくするねらいもあったという。そして農業振興策即ち灌漑用水路の整備に努力し、あわせて新田開発も行ったという。また交通量の多い木曽川ほかを上下する舟運の関所収入もかなりの金額であったという。

幕府の束縛からはなれて、独立的に領国内をまとめてゆくには、それぞれの地の地理上位置や地形を生かした政策によって、経済力の増強を計っていった。

天下人織田信長

織田信長の政権は、一部では宛行状では地名だけでなく、その生産高表示の方向に踏み出していて、検地の必要を前提とする方向に進んでいたという。信長は道路修策・橋の加設に力を入れたことは、フロイスの報告書にもあるという。船舶による水運にも眼を向けている。一方関所の廃止を打ち出し、商品の流通、商人の往来、社寺祭詣者・一般交通者の動きに大きな影響を与え、関料も不用となり流通は活発となった。

一方、銭貨の獲得、金貨・銅銭に対する新らしい方向を踏み出し、枡の統一をはかり、庄園内はもとより庄園間の閉鎖的な交易へ新らしい方向を踏み出したという。

出雲の尼子氏の動きの片鱗

尼子氏の経済については以上の諸氏と違って研究が進んでいないが、近刊の『大社町史』の中から抄記すると、

美保関を中継基地とした水運に加えて、宇龍や石見温泉津が銀や鉄を中心に大変な賑わいをみせるようになった。それも北国船によって直接諸国の船が入るようになった。尼子氏滅亡後の1569（永禄12）年には宇龍から斐伊川沿の鉄であろうか運び出している。温泉津は銀山の銀であって、尼子氏の流通政策の名残りと考えられる。

宇龍港では因幡・但馬・北陸・東北の諸国の船、「唐船」「御印判舟」（尼子の許可船）が出入し、種々な名目の税もかけられている。「御印判舟」から徴収ものは尼子氏に上納されていたものであったであろう。

斐の上川柳四月号

夕方になれば忙しい悪いくせ　若槻白馬
水ぬるみ蛙も恋を語りかけ　渡部ミツコ
逃げて行く月日はひもでしばれない　真綿よし子
同年のボケ聞き心は曇り空　安部正子
気のついたとき取り返せない溝をみる　藤原のぼる
勲章の無い胸開いて語り合い　松田牛歩
勝て勝てとテレビたつを押して観る　児玉哲呂
押絵する見猿聞か猿後ひとつ　安部春恵
除雪車の休みが続く雪不足　横山まこと
抜け穴を作る思案の立法府　高木凡太
淋しさをまぎらす為の電話する　松浦久寿子
孫の守り他の話題はうとくなる　藤原千代子

柴栗句会三月

火に仕ふ男となりて野火を守る　浅野としお
妻老いて吾に蕗味噌絶やさざり　岡田蹊花
真東に神の山据え余寒晴　糸原古志
裸野に風背負うてる六地蔵　小川月舟
春愁や生涯付き添う薬飲まな　恩田和美
鼻寄せて馴づく仔牛や春やそこ　楠房子
春なのに一本畷での風痛たし　高木白虹
一日を無口に過ごし戻り寒　中澤美紀子
余寒なお声昂ぶりぬ魚の糶り　新出谷一華
一雨ごと生きる証しの芽吹き初む　門脇花子
初金やすり足の足袋諸作通り　加納信子
農談会重ね着一枚余寒かな　錦織富江
つり具屋の山女魚解禁知らすビラ　渡部夕峰
粉雪と道くさしている赤い傘　峯石美代子

早春譜　簸の上短歌会

粥正月とんどと過ぎて無為われの部屋の紅梅　永井弥生
ふくらみにけり
ひと代から四代へのたたらの宿終へて今宵の　仝
しまひ湯に聞く雨の音　人
魁けて紅梅一輪咲きたればひねもすわれも明　岡田時子
るくをりぬ
雪少し残れる畦に摘みとりし蕗の薹朝の味噌　野村節子
汁に浮かす
山に沈む夕日よ止まれ病む妻の痛みやすらぐ　常盤はるまさ
刻の間の欲し
代償の如く孤児らは電機器具を買いて発ち行　仝
く母国に住めねば　人
値の合はずつれ戻したる牛の仔は常の如くに　仝
飼い葉喰ひをり　佐藤喜代子
筑後路の早春の野は夕映えて釈迦ケ岳しばし　安部夕波
茜に染りぬ
夕冷えし祇園の街をこっぽりの音ひびかせて　仝
舞妓は行けり　人

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第205号
（4月号）
1992. 5. 8
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

村松将監と平賀縫殿（上）・信長の時代の奥出雲④・短歌・川柳・俳句

松江藩家老
村松将監と平賀縫殿（上）

推恵大明神の由来

松江藩2代藩主（1666寛文6～1675延宝3）隆綱は江戸藩邸で一女児を拾い養女とした。長ずると日御崎検校（祠官）尊俊の妻とさせた。尊俊はわが家の家系と藩主の女婿であることから、極めて驕慢であったので、日御崎神社の神主どもはしばしばその無道を訴えていた。綱隆は怒り'72寛文12年妻を離縁させた上尊俊を追放しようと、当職家老村松（初代）将監・小田伊織・村松民部に、罪状を列記した書を送った。

'73延宝元年3月尊俊は杵築大社の領内の鷺浦に流されたが、日御崎社の領内の荒木へ移されんことを請うた。ところがかえって妻を神谷富保の子富明に再婚させ（富保の妻は平賀（初代）縫殿より入嫁）、翌年8月改めて尊俊を隠岐海士村に移し、帯刀・外出・通信を禁じ、10人扶持を給し給事2人をつけた。この時の護送人は渡部喜三右衛門で足軽2人を従えた。4年後の10月2日尊俊はこゝで没した。

ところが綱隆が'75延宝3年閏4月に頓死したのをはじめ、松平家には不祥事が頻りと起ったので、1733享保18年6代宗衍の代社を建立して尊俊の霊を祭り推恵社と呼び、のち明神そして'71明和8年7代治郷の代大明神と称した。

権臣村松将監

村松初代将監直賢の本国は駿河国、生国は武蔵国で1616天和2年（大阪夏の陣の翌年）14才で、越前国福居で結城（のち松平）直政に召抱えられ13石を給された。その後加増'38寛永15年に直政が松江藩主になると従い、2000石を宛行われた。のち家老となってさらに加増、'64寛文4年8月内膳と号し、6000石を給せられた。その翌年藩主より将監と改号を命ぜられ、権臣として最高位にのぼった。直政没後2代藩主（'66寛文6～'75延宝3）は綱隆となった。その権臣としての専横は2代3代の将監と続いた。

こゝに初代将監の権臣振りの一端を示す絵巻物二巻がある（財糸原記念館蔵）ので、これを通してそれをみることとする。

将監は島根郡西尾村（現松江市西尾町）新山に別荘を設けた。その山荘に菩提所を設け、村松山内善禅寺と呼んだ。近くには寛永5年松江藩主堀尾山城守忠晴が、富田より移して建立し、次の藩主松平直政が増築した円流寺（天台宗）があったが、これよりも華美にして豪壮この上もないものであった。のち村松氏の失墜によって間もなく廃寺となり、1725享保初年には跡形もなくうせてしまった。

絵巻物上下2巻は、村松氏の来歴にはじまり、夢知らせ、立地の様子、仏像の由来とその姿、院内の結構などが彩色の絵で描かれ文章も綴られている。これは将監が浄財を募るために作った趣意書で、1666寛文6年に当時江戸前期の幕府の奥絵師として一番格式の高かった中橋狩野派の祖狩野法眼永真（'13慶長18～'85貞享2）の筆になるものである。松江藩家老としての地位を誇示する巨匠の作品である。

この寺は後とり壊され、今の白潟寺町本縁山誓願寺の山門・本堂に再建されているという。本堂の釘鋲に丁字巴を附てあるのも、また釣鐘もそれであるという。

'74延宝2年家老香西隆清が左遷されたのも、3代藩主綱近の'80全8年佐藤平兵衛が罪せられたのも、当職中の村松が関係したものという。

大番頭兼代官役で700石を領していた佐藤平兵衛は、全年10月仁多郡横田へ追放された。平兵衛の父は藩主直政の大阪冬・夏の両陣に従って功があったので、罪1等をゆるし扶持米を賜ったが、平兵衛はこれをうけず蟄居もせず、平民となることを欲した。その後横田の百姓から米を貸取ったり、横田町の源右衛門（富田屋）にわが儘なる書付けを届けたりしたとして、10年たった'84貞享元年御徒目付2人、御徒4人足軽10人を横田に送り、父平兵衛と子平左衛門・勝右衛門・勝和の4人を捕えて引きあげ、3日後松江にて死を賜った。

この時の家老は2代将監隆次（2代藩主隆綱の1字を賜る）で、死没の前年であるが父に劣らず権力を握って驕っていたという。平兵衛の罪はそれ程ではなかったが、隆次はこれと善くなかったので、けしかける方であったという。両家の飼犬が喧嘩して村松方の犬が傷つけられたので、2度とないようその犬を放遂せよと申込んだ。平兵衛は犬の首をとって送り、生きものであるから帰るかも知れぬのでこのようにしたと言わせた。またある時村松方へ殿様の御成があった。佐藤方に枝振りのよい松があったので、かねて目をつけていた将監はこの際にと所望した。平兵衛は承知して置いて、あとから松を根元から切って村松方へ届けた。かねての村

松のわが儘を悪んでいたからであったが、隆次は大袈裟に申立て藩主に讒言し、親子4人を切腹へと追いこんだという（桃節山資料）。

村松（3代）将監静賢と平賀（2代）縫殿隆寛

静賢は初代の第4子で'85貞享2年兄の後を継いで3代となった。村松の専横奢侈は衰えをみせず、藩主が参勤交代で帰国するたびに、留守中の報告をする目付が、口にしない時はないほどであったという。

3代藩主綱近の'89元禄2年2月21日、仕置役乙部九郎兵衛可明・仝棚橋玄蕃ほかは、村松静賢の邸に至り、旧悪の儀にて殿様御難儀の由、是非もなくお暇を申付けると申渡した。これは'74延宝2年よりの洪水の水はけ川違いの論争が、平賀縫殿隆寛との間におこり、諸家一統将監を恨み下治らざるのことが、藩主の上聞に達したからともいう。

また一説には村松、平賀両宿老の天神川の堀さらえに関しての両人の落度があったためともいう。静賢は国外に遂われ京都に住み祐心と号した。隆寛は島根郡本庄村に蟄居したが、家宅の普請料に銀百枚を賜い、百人扶持をも給せられた。

平賀隆寛の父で初代平賀半助は'38寛永15年松江にて招抱えられ、直政の右筆（側近の書き役）となった。娘が美貌で綱近の側室となり、婦徳も高く御国御前と呼ばれ（4代吉透の母）、養法院といゝ能書家でも聞えが高かった。よって隆寛は立身し禄2000石を賜り、隆の1字も賜った。養法院と同じく能書家であった。村松に退けられ1706宝永3年蟄居中に没した。（2代のちには禄1000石に増給され、家老格に復帰し、明治維新に於ても重責を果した。）

当職棚橋玄蕃近正

3代藩主綱近の1696元禄9年5月21日（元禄2年家老仕置役に）、綱近の1字を賜い正充を近正と改め、1000石を加増され2000石となる。

罪あってその禄を収め、仁多郡岩屋寺に蟄居を命ぜられた。玄蕃の父勝助は月照院（直政の母）の姉を妻とし、越前大野にて直政に召出され、400石を給せられた。松江へ入部後2000石を給せられ家老分となった。1家繁栄して7家に分れ七棚橋の称があった。玄蕃は蟄居の翌10年6月20日の夜岩屋寺を脱出、多里より京都へ逃げ伏見に住んだ。間もなく召帰され秋には打首となった。

綱近は正徳4年に至り倅権之助に家を継がせ1000石を与えたが棚橋は昔日の面影は失われた。

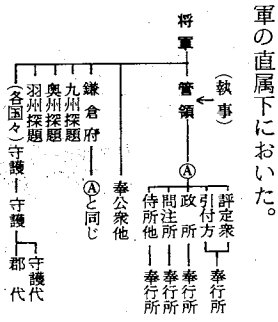
（松江藩列士録、絲原家文書—『古代よりの聴書』ほか、松江市誌を参考として）

（横田史談会・高橋）

室町幕府の管領制

3代将軍義満が幼小でその補佐役の執事となった細川頼之が推進したのが管領で、将軍権力確立の大きな支えと制度化した。

執事（足利家の家政機関）と引付頭人（公的な裁判機関の長）とを統合したのが管領で、この下に主従制的支配権分掌の諸機関と、統治権的支配権の分掌機関を統一し将軍の直属下においた。



信長の時代の奥出雲 ④

序Ⅳ—14世紀末明徳の乱から15世紀（上）

室町幕府、室町時代とは、広義には足利尊氏が「建武式目」を制定し、武家政権を樹立した1336（建武3・延元元）年から、1573（天正元）年15代将軍足利義昭が織田信長に追放され足利氏が亡んだ約240年の武家政権とその時代で

幕府体制の形成期（南北朝時代）
将軍権力の確立期（応仁の大乱までの狭義の室町時代）
守護領国体制の解体期
（大乱後の戦国時代）

とに分ける。

（文中ゴヂック文字は当地関係の地名、人名など）

15世紀の特質

序Ⅰで述べたように、ゆれ動く世界史とくに東アジア史との深いかゝわりでひろがった15世紀の日本の歴史は、社会のすみずみまでひろまった下剋上という風潮によって特徴づけられる特質があらわれる。

庶民がはじめて歴史の主役として登場し活躍するということである。農民たちの一揆、堺・博多商人たちの富裕や高利貸の群、猿楽・茶の湯・作庭などの東山文化の基礎をささえた無名の人々、中世の戦略、戦術を根本から変えることを余儀なくした足軽・雑兵・野伏たちは、これまでの歴史を一変させる活躍を生じた。働く人々の汗と土の臭がむんむんとしていた。

商品貨幣経済が画期的な発展をとげ、新らしい経済観念や価値が芽ばえた。拝金思想そしてそこから現世肯定、合理主義の思想の成熟である。

そして今日に伝わる日本の伝統文化の多くが、しっかりと根をおろした記憶されるべき時代であった。

それらはヨーロッパのルネッサンスにみられたような雑学・雑芸的なたくましさや、庶民性あふれる文化であった。

身分制に抱束されない解放的な雰囲気、形や形式にこだわらない自由な風潮を土台にして生れたもので、文化における一種の下剋上現象である。狂言、御伽草子（今日の子供向けの昔話の多くの元となった）、小歌などは、庶民を主役としてその感情をそのまゝ反映して花開いたものである。今に至るまで力強

く生きて愛されている庶民文化である。

また日明・日朝貿易は西陣・博多織を興し、木綿の大陸からの移植は衣料革命の出発点となり、大陸農業技術の導入など、古代とは違った国際交流、異国情緒を伴い、日常生活や基本的な産業の技術革新に結びついた時代である。

こうした激動の世のゆえに、またわが国の文化の幽玄、閑寂の境地が、文化・思想をもつらぬいたといわれる。

「塵塚物語」

明徳の乱の立役者の一人山名満幸の叔父で山名氏惣領の時義の孫持豊（宗全）は山名の嫡統として、応仁の乱（1467～1477）の西軍の総大将であった。

宗全がさる大臣の公卿と話して、ひと通り聞き終わると、口を開いた宗全は、「よくわかった。もっともであるが、先例のみを引き合いに出される点はよろしくない。すべての「例」を「時」にかえる考えになってほしい。私も先例を踏むことは知っている。しかし例とはその時のことが例になるに過ぎない。先例にとらわれ「時」すなわち現代の時勢を見失うのはよろしくない。だいいち例を言うなら私ごとき匹夫がどうして、あなたのような高貴なお方と、こうして話ができようか。例ではない。これこそ今の時の勢いに他ならぬ。今後もっと私以上に猛悪な人が登場するかも知れません。あなたが時勢を察するなら、私が不肖なれども必ず護って差上げる」

と語ったという。生涯をひたすら実力で生きぬいた宗全の人物の一端を、彷彿とさせる逸話である。公家や貴族は南北朝内乱の時代に政治的実力を失っていたが、それが応仁の乱を通じて最後にその生命を失っていったのである。

15世紀前半（応仁の乱前夜）

1398 伯耆「大山寺縁起絵巻」成る。

'99（応永6）大内義弘百済王の末裔と称し朝鮮に土田の給与を求める。義弘幕府の上洛の命に復せず堺に留る。幕府これを攻め堺城にて義弘討死。この時出雲の赤名氏は出雲守護（1392より）京極高詮に従い義弘と戦う。この年『尊卑分脈』（諸家の系図の集大成）を著した洞院公定没。

1401 京極高光出雲守護に。

'02 高詮山名満幸を京都五条高倉の宿にて誅す。

14世紀後半から伯耆守護として、のちには出雲守護として**横田庄**に勢力を扶殖していた山名氏は、明徳の乱で退いたので、御所領代官**安部氏**4代は再び復帰し、横田盆地の南一角に進出の拠点をつくりはじめ、一方諸国に鉄を商うと系図に記す。

他方郡西部の地頭で国人領主に成長した**三沢氏**は横田庄への進出の機をうかがう。

幕府は1394の横田庄の御所領の半分を泉涌寺雲龍院へ寄進したものについて安堵する。こゝで横田庄は石清水八幡宮・京都御所・泉涌寺の三領家の所領が入りこむことになる。

この年以後毎年の如く明使しきりと来日し義満引見す。'04には明使「日本国王之印」を義満に携える。今川了俊（今川義元の祖。多数の著書ある武将）『難太平記』を著す。

'09 義満没。

'12 後小松天皇譲位上皇となるが横田庄の半分は保持す。'28に至り後花園に譲る。

'13 京極持光 出雲守護に。

'19 朝鮮 対島に来冠するがこ

指先ほどの春

簸の上短歌会

早春を子にとどけむと着ぶくれて指先ほどの蕗の薹をさがす　永井弥生

春の夜の軒の雨音怪談の語り上手な亡祖母のお鉄漿　仝

歌詠みて八十路越ゆるに何ならむ小鳥は花は常の如くに　岡田時子

つづまりはふたりならむか春の池に動きそめたる鯉を見てをり　野村節子

子らはみな家庭持ちたり夫とのみ齢重ねてゆかむすべなし　仝

枝々は露をむすびて朝の庭に灯るがに咲く福寿草の花　佐藤喜代子

生くる意欲湧くかこの朝病む妻が味噌汁うましと呟きくれぬ　常盤はるまさ

滑り終りてアルベールビルの氷に何思う聖子倒れてしばし動かず　仝

から松の芽吹き幼なく小諸なる城址に立てば浅間山かすむ　安部夕波

斐の上川柳五月号

仏さま会いたくて子等お彼岸に　安部正子

入れ歯して六十五才を思い知り　松浦亜以

タッチャンと呼べば笑顔がこだまする　藤原のぼる

イヤリング甘いささやき待っている　松田牛歩

生き字引き亡くなって知る有難み　松浦久寿子

はすの葉の上で母子が語る夢　安部春恵

待つことのがまん病院で鍛えられ　児玉哲呂

エチケット知らぬ電話の顔が見え　高木凡太

初節句笑顔たえない三世代　真綿よし子

どっこいしょいつもひ孫に真似をされ　若槻白馬

あばしれて客に云いわけしてるママ　藤原千代子

親のすねかじって横田すてて出る　渡部ミツコ

しまい風呂やっと幸わせとっぷりと　森山悠子

訂正　2頁今川―今川了俊・3頁尼子―84・（文明16）毛利―97・⑫元就

れを破る（応永の外冠）

'21 出雲大社と日御崎社との間に堺論争起る。長く解決せずのち**三沢氏**も、守護の奉行人として仲介にも立つ。

各地の守護大名・国人領主の間に争いしきりと起り、農民や馬借などの一揆、諸寺の衆徒・神社の神人などの蜂起も頻発す。

'30（永享2）代官**安部氏**開拓した稲田に移る。

'39 京極高数　出雲守護に。郡西部の国人領主**三沢**⑤信濃守為忠は、横田庄内へ進出した。この年の馬場八幡宮の遷宮棟札には本願地頭として名を連らねる。

'41 嘉吉の乱（将軍足利義教は権臣の横暴を押さえ、尊氏以来の宿願を果したが傲慢で信頼を失い、赤松満祐によって殺された。山名宗全が満祐を攻め自殺させ平定した。幕府の威信地におち、山名氏の勢力再び抬頭）で京極高数討死。持清守護に。畿内に嘉吉の土一揆しきりと。

'49（文安元）**為忠**綸旨院宣にまかせと、**岩屋寺**に文書を発す。横田庄を地頭請所として公に支配するに至ったか。神社の神人の強訴がくりかえされる。各地の一揆も相変らず起る。

'57（長禄元）横田庄大催（13世紀はじめ石清水八幡宮荘官催として来住）**小池氏**の相続争いに為忠が仲裁を行う。各地に土一揆。近年（'38,'44,'56,'57）彗星出現、暴風雨、大雨洪水、流行病続き幕府諸国に祈願命ず。

'59 京都西郊で土一揆。近畿で暴風雨洪水。

'60 畿内地震、皆既日蝕、炎旱大風雨重なり大飢饉となり死者多数。

'61 前年に続いて京都中の死者82000人と誌す。

'62（寛正3）岩屋寺一揆のために一部焼失。京畿に土一揆。

'63 にも土一揆起る。

広仁・文明の大乱

将軍義満・義持・義教が統治して15世紀前半は、室町時代の歴史の中では、将軍の威令が最も行われた時代であったが、相対的な意味であってもろもろの不安な兆候をかゝえていた。

既述した如く土一揆・徳政一揆の頻発、相つぐ疫病・天災・飢饉等一連の社会不安に加えて東国の動乱さらに守護大名家・国人領主の家々での家督相続争いの政治問題他など、幕府をゆさぶる大きい問題を表面化しようとした時代であった。

鎌倉時代には惣領の意志と指名によって、家督を継ぐものは簡単にきまったが、この時代の決定には支配下農民たちの抵抗を弾圧する必要、惣領制の解体・再編成にもとづく所領の惣領単独相続化の傾向（かつては分割相続が一般的）―**三沢氏**は14世紀初頭以来単独相続であった。別に拙稿の論文に―、鎌倉時代になかった将軍家の相続介入と認承等々、複雑な諸要素がからんで政争に発展する危険多分にはらんでいた。

各地の守護大名家に起ったこの問題は、幕府最高首脳の地位にあった管領家の斯波・畠山にも波及し、幕府体制は重大な局面を迎えた。

将軍家の認承もその権威が確立されていれば、争いは起り得ないはずであったが、守護大名家の相像争いには、細川、山名などの実力者のみでなく、将軍側近もかんで複雑にした。8代将軍義政の後継をめぐって、側近の対立は、細川勝元（幕府第一の実力者）と山名宗全とを各々うしろ立てとして対立した。両者は婿と舅の間柄であったが、歴史の表舞台で将軍と己の運命をかけ雌雄を争うことになった。

ことの起りは、現職管領畠山政長が、山名宗全の将軍だきこみによって解任され、宿敵畠山義就に更迭されたことである。機先を制せられた細川勝元は、「畠山一族間の個人的私闘としたい」腹の将軍の命で自重していたが、結果として見殺しにし「君臣の道」で「弓矢の道」を失ったと世論の批難をうけた。

そこで勝元は山名・畠山義就派討伐の決意の下、幕府に出仕せず戦備をひそかに固めたのである。

1467（応仁元）年5月26日、満を持した細川方は行動を開始した。両陣営の位置から細川方は東軍、山名方は西軍と呼ばれ、山名方が陣を布いた因縁から、西陣の地名が生まれて今に至る。

東軍主力細川一族の領国は、北陸・畿内・四国と日本の中心部、山名方の領国は細川方の外縁の東西の遠隔地であった。細川方の地方は生産力の最も高い地で、京都への補給も容易であったが、山名方は全くその逆であった。

東軍の優位は動かし難いが、領国での守護の家臣団組織、国人領主や土豪・地侍がどう掌握されているか、戦場がある京都に近い山域、大和の国人領主や土豪、地侍、あるいは土一揆以来の実績をもつ野伏・悪党たちと、自己の陣営にどうとり組むかが、両軍の勝敗に大きくかゝわるのであった。

柴栗句会四月

めらめらととぼとぼと畦焼けてゆく　糸原古志
足元の陽炎蹴って母に子が　浅野としお
穴を出しばかりの蛇の優しき瞳　岡田踩花
つれづれに老樹の春を描きをり　小川月舟
下萌えを踏まれぬ哀し車椅子　恩田和美
ゆらゆらとぼんぼり揺らす花の雨　門脇花子
鳥帰る鍬杖に立つ視野遥か　加納信子
うぐいすに心通わすおろち橋　楠　房子
障子あけ花も見せたい母もなし　高木白虹
自問して答につまる春愁や　中澤美紀子
花の下鐘楼成りて童唄（永祥寺撞堂）　新出谷一華
ふる里の桜並木の駅抜ける　錦織富江
春風を入れて労わる古たんす　峯石美代子

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 206 号
（6 月 号）
1992. 6. 6
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

信長の時代の奥出雲⑤

序Ⅳ―14世紀末明徳の乱から15世紀（下）

相国寺の決戦

（東軍）細川勝元・斯波義敏・畠山政長
（西軍）山名宗全・斯波義廉・畠山義就

十分に戦備を整え、将軍の牙旗（居所に立てる大旗）まで得て足利義視を総大将とした東軍は、大義明分の点でも明らかに優勢であり、準備が立ちおくれ、「公方の御敵」とされた西軍の動揺は、かくしようもなかった。

この西軍の劣勢を救ったのが、大内政弘、伊予の河野氏の大船600隻とも2000隻ともいわれる、大水軍の東上であった。京都文化にあこがれ、中央政界に関心のあった義弘は、さきの応永の乱で義満に討たれ、多くの守護職と海外貿易の拠点泉州堺を失った痛手は大きかった。日明・日朝貿易に深いかゝわりをもつ大内氏にとって、堺を支配し貿易の実権を握ろうとしていた細川氏とは利害が対立したから、山名氏に結びついた。この年（1467応永元）8月、大内・河野の2万の軍が京都に入った。

（この年遣明使が明へ、雲舟等楊随行）

10月になると幕府に隣接する相国寺をめぐって東西両軍の主力が投入され、大乱中最大の激戦となり、二条以北の100余町3万余字ことごとくが灰燼に帰した。

汝ヤシル都ハ野辺ノ夕雲雀
アガルヲ見テモ落ルナミダハ

の歌のごとく焼土と化した。

翌年秋、政争をきらって去っていた義視が、勝元の再三の要請で京に帰った時、従った兵は騎馬武者20数騎と野武士2000人という構成であったという。相国寺の決戦以后は小ぜり合いが続くだけであり、悪党・野伏・足軽の乱暴狼藉・略奪放火の容赦ないくり返しであった。これは下剋上時代の実体を示しているものであった。

出雲守護京極持清は東軍の有力武将として京都・近江に転戦、出雲は**尼子**清定に全面的に任せざるを得なかった。

こうした情勢は諸国でもあり、諸国での戦乱が各地に波及することになった。一介の地頭（越前の朝倉氏など）が名門の主家に代わって守護につくということが起りはじめた。まだ甲つけず、ただ一剣をもって敵軍に突入する命知らずの雑兵・足軽が登場して、戦略・戦術の転換をもたらすようになった。狭い京都に陣をしく大軍に兵糧を補給するのは大変である一方では、その補給を断つには、洛中の隅から隅までを知りつくしている土一揆の経験のある洛中牢人・乞食・悪党らを利用することになり、兵の質よりその量へ、武力戦中心から、経済力・補給力も加わった戦へと変ってもいった。

出雲での動き（応仁の乱前）

尼子氏が守護京極氏の一族として出雲に入ったのは、正長から永享（1428～1429）のころである。

明徳の乱で再び守護に復した京極氏が、応仁の乱までの間（1392～1466）75年間の間に、出雲国内で公的な格式で守護職としての権限にもとづいて発した文書は80通ある。このうち当事者に直接あてたものを除くと、ほとんどが出雲州衆（初代守護佐々氏系と新補地頭系）であって、京極氏はその実力を無視できなかったのである。（奥出雲132・133合併号に詳論してある）

尼子氏が入国して20年を経てからはじめて、尼子氏の名が登場するが、それも出雲州衆と必ず連名となっている。守護代官とは言え力倆不足であったのが、漸く認められ出雲州衆＝国人衆と並列的となったのである。

国人衆の中では**三沢氏**の名が最も多い。前号にも述べたが、このころは国人衆中で三沢氏が最も実力を持っていたと思われる。

出雲での動き（応仁の乱から）

1468（応仁2）年、出雲東部きっての名族で、安来庄十神山城の松田備前守は、伯耆守護山名教之の上洛中の留守を守っていた山名六郎のあと押しをうけて富田城を攻め、守護代尼子清定を攻めたが、落とすことが出来なかった。こゝで清定は自ら兵を動かす名目ができ、十神山城を攻め、岩坂・外波の諸城を攻め、三沢氏の代官福頼十郎左ヱ門を討取った。秋に入ると大原郡の馬田氏を攻め、出雲郷・湯郷の諸城を攻め、山名六郎や松田備前守のたてこもる十神山城を陥落させ、美保関へ進出し山名党を退かせた。この清定の健闘に対して、守護京極持清はしきりと感状を発し、恩賞として松田氏の各地の所領や、各地の代官職を与えた。こゝに尼子氏の戦国大名への足がかりが生ずることになったのである。

明けて'69（文明元）年、周辺の諸城へと征服戦を進めた。

'70（全2）年、京都の乱をさけ一休宗純らが地方へ去る。

足利一族の間にも不和で対立が起る。

この年、三沢郷地頭で横田庄を地頭請所として支配していた**三沢6代対島守為在**は、仁多・大東・能義・八束の各郡にわた

信長の時代の奥出雲⑤・村松将監と平賀縫殿（下）・短歌・川柳・俳句

る、広汎な地域的連合の国一揆（国人衆による一揆）を起した。これを何とか押さえた尼子清定は、これら三沢一味の知行の差押えを持清に要求した。押さえられたのは、三沢・多胡・山佐・佐方・飯沼・下笠・野波・小境の諸氏で、守護の権威を背景としたものであったが短期間だった。

8月4日守護持清没し、嫡孫の孫童子が京極の主となり（持清の長男で孫童子の父勝秀は2年前没）、叔父の政経が後見をした。そして尼子氏を守護権限宛行者にしたが、不足とみえてしばらくの間は、前と同様に国人衆の合力を頼んでいる。翌年閏8月、病弱な孫童子にかわった政経は、出雲・隠岐・飛弾3ケ国の守護となり、2年後の文明9年近江守護を加えて、京極氏の実権を握った。

清定は'71（文明3）の夏から伯耆・美保関・能義郡東部へと兵をすゝめ、伯耆の山名党の進出を押さえたので、月山富田城への進出は防ぐことができた。

'72（文明4） 山名宗全、細川勝元と和を検討するが、不調。

'73（仝 5） 山名宗全没。つゞいて細川勝元没。

'74（仝 6） 一休大徳寺住持となり再建に着手（2月）4月山名・細川両氏の講和成立。

'74（仝6）年、清定は長男又四郎（のちの経久で17才）を上洛させて守護政経に会わせ、文明7年から11年までの5カ年間、美保関の公用銭（舟役運上金など）年額5万疋（500貫、約500石）上納を4万疋とすることに成功した。

この年の和睦成立の前、三沢信濃守為忠（5代。家督は譲って6代為在。）は老将ながら西軍に属する守護京極氏に従い上洛していた。京極氏と同族なのに東軍である六角氏との戦いで討死した。それは備後における三沢氏の所領のすべてを、その地の国人山内首藤氏の手に渡すきっかけとなった。（山内首藤氏文書による）

'76（文明8）年の4月から5月にかけて、能義郡土一揆が富田城を急襲した。これは美保郷の領有問題で争い、不利になった松田三河守を張本人とする国一揆であったようであり、三沢為在が後押しもしていたという。

この時守護政経は前年10月末、江北の一戦に敗北し出雲に下っていたので、すぐに清定は一揆征伐の感状を得、美保関代官職を安堵された。

その翌年清定の没後、又四郎は京都から帰国し経久と名乗り家督を継いだ。

'77（仝9）年11月、西軍の諸将は各々の分国に兵を率いて帰り、応仁の大乱は終結をみた。

大乱は終ったが、大乱が引き起した下剋上の風潮は全国に波及して、動揺を繰返へしていた。

こうした時代、25才の若き尼子経久は、既得権をそして守護代官の立場を逸脱する方向へと歩んでいたようである。

'82（文明14）年12月19日、室町幕府は京極政経と尼子経久に重大な指令を発した。

「出雲・隠岐両国の段銭（田地の段別に応じて臨時に課せられた税、幕府の財源の一つ）を、京極持清のとき、その被官人の要求で免除したのをよいことにして、公役以下を勤めなくなったのはけしからん。そこで免除を廃し、永享年中の例のとおり、諸役を勤めるように京極政経に仰せつけたから、左様心得よ」

というのである。

だが経久はこれをけって寺社本所領を押領し、段銭を納めず公役も怠った。そこで文明16年3月17日幕府は、ついに三沢・三刀屋・朝山・広田・桜井・塩冶・古志らの国侍に、経久討代の軍令を発した。これらの国人衆はすべて出雲中部・西部の武将である。出雲東部を制覇した尼子の勢力はこのころ中部から西部に伸び、三沢・三刀屋らの反撃の構えが芽生えていたが、これと一致し、8月から行動が起され11月に経久は敗れ去った。

松江藩家老と横田

村松将監（しょうげん）と平賀縫殿（ぬい）（下）

8・9代平賀縫殿

本庄村に蟄居を命ぜられた2代平賀縫殿の死後、3代義人は蟄居中でも給せられていた父の扶持米を引継ぎ城下に移った。4代筑後は加増され、5代縫殿はさらに加増の上中老格式を得1767（明和4）年には家老仕置本役となった。

6代主税は関東筋川普請御用の副奉行も勤めた。7代筑後は家老朝田丹波の2男であったが、家老仕置役となり、再度江戸勤

そして塩冶掃部助が守護代＝出雲の代官となった。

再び経久が富田城に復帰したのは、'86（文明18）年である。これについては経久が策を用いて奪取したとする説が行われているが、'96（明応5）年の守護京極氏の文書では、幕府外様衆の宍道、国人の神西・三沢の諸氏が明記されていて、'99（仝8）年漸く経久の復権がみられるのである。

1492 コロンブスの北米発見

'93（明応元）禁裡御料横田庄からの年貢未進がある。

8代縫殿

1854（嘉永7）3月、異国船防禦に備えて家老並となる。（家老並とは家老に続く重臣で家老を勤めたり中老を勤めたりする家柄。平賀はこれであって禄高は1000石であった）

数年来諸外国の船が頻りと日本の各地に通商を求めて来航する。

3月3日には再度神奈川沖に来たアメリカのペリーと、日本は日米和親條約（神奈川條約）を締結した。11月27日元号が安

政となる。異国船の渡来に備えて武州本牧の警衛が強化されていたが、（本牧は現在の横浜市東部の一地区）縫殿は士大将として翌年1月本牧に出陣し1年余滞在した。

'62（文久2）年6月縫殿は病気のため隠居し、嫡子卯之助が襲名し9代となる。隠居後は楽所と号し自適するが、10月没す。

9代縫殿は若くして藩主のおぼえよく諸役に引き立てられた。10代藩主定安の若殿や吉姫の世話役として江戸勤めをした。このころより漢学にも志した。'64（元治元）年の長州征伐には、武者奉行として藩主定安に従った。'66（慶応2）年には格式家老並となり御仕置添役と若殿用向きを勤め、第2次長州征伐には石州路へと出陣し、'67（仝3）年暮には京都警備のため上洛した。

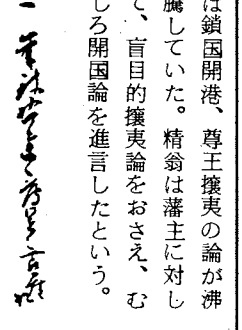
この年の半ばからは、薩長芸3藩の挙兵討幕の密約、大久保・岩倉らの王政復古の計画が行われ、将軍徳川慶喜は在京10万石以上の諸藩の重臣を二条城に集めて大政奉還を諮問、翌日将軍は大政奉還上表を朝廷に提出す事態となった。一方密勅をうけた長州藩・薩州藩は兵を京都へと進めていた。将軍の親藩である松江藩は上洛しその警固にあたるのが勤めであった。12月9日朝廷は王政復古を宣言した。

雨森精翁（1822文政5～1882明治15）

藩士妹尾清左エ門の3男で、漢学者として名をなし、藩主定安の生母の里方の祭祀を行うため、その姓雨森を襲がされるという、破格の遇を受けた。

神童といわれ藩校明教館に学び、勤学の念の厚きが通じて17才、藩における藩費遊学第1号として大坂（のち大阪）に学んだ。脚気にかかり帰藩養生し、やがて江戸に遊学、昌平黌の林大学頭に師事し、佐藤一斎・安積艮斎の諸大家にもついて研鑽を深め、師一斎に代わって経書を講ずることもしばしばであり、学殖識見断然時流をぬいたという。時に21才であった。

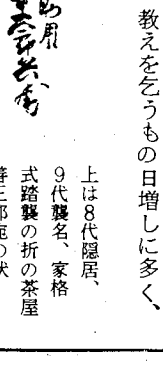
藩命によって帰国し、幕府が松江藩に命じた「南北史」の校勘出版にたずさわって8年、完成し幕府に献上すると、'50（嘉永3）年末には城下で養生塾を開いた。'58（安政5）年江戸勤番となって、藩主定安の学問の相手も勤めた。そのころ国内では鎖国開港、尊王攘夷の論が沸騰していた。精翁は藩主に対して、盲目的攘夷論をおさえ、むしろ開国論を進言したという。



'64（元治元）年10月、征長の役に際しては藩命によって中国地方親藩の間を東奔西走した。'66（慶応2）年には藩校修道館儒学総教授に任ぜられ、藩主ならびに若殿の侍教を仰せつけられた。翌年の第2次征長の役には、口田儀まで出陣した。

維新後は「万機公論に決す」という大鉄則によって東京に開設された公議所の公儀人に選ばれ、特別な委員にも加わって信望をあつめたが、病のため辞して帰松した。'69（明治2）年48才の時である。のち平田村上ケ分に転住し、精翁と改めた。のち公職について広島県にも歴任し、仝8年官を辞し平田に帰った。54才であった。招請によって京都に出、諸山の僧侶に講書するかたわら著述につとめたが、重患にかゝり、仝11年平田に帰った。

間もなく私塾を開いて亦楽舎と称した。名声を聞いて集まり教えを乞うもの日増しに多く、



上は8代隠居、9代襲名、家格式踏襲の折の茶屋善三郎宛の状

柴栗句会五月

縦書が斜に流れ日脚伸ぶ　糸原古志
白牡丹夕闇堰きて暮れさせず　浅野としお
子宝よ孫宝よ一気に田植終う　岡田踩花
五月来る亡友の表札残り居る　小川月舟
橋脚か赤い灯に浮く夕霞　恩田和美
新茶摘む手許に山の風そよぐ　門脇花子
春雷の一つが孫を泣き止ませ　加納信子
筍の煮立つ音ふと春惜しむ　楠房子
五月雨にぬれて呟く道標　高木白虹
人恋うるごとくまつわる今日の蝶　中澤美紀子
耕耘機眠りし春田覚ましけり　新出谷一華
山里に春のかけ橋ループ橋　錦織富江
花の芽のぽつぽつでかけてうれしくて　峯石美代子
青葉寒郵便配達素通りす　渡部夕峰

前号の題名「松江藩家老と横田」と追加

常に100名を下らない盛況であった。いたずらに書物にとらわれず、修己知人、漢土の風に染まらず、日本人の自覚のもと、学問を活用し有用の人物たれという方針であった。門下からは千家尊福・木幡久右ヱ門・横山耐雪など多くの知名人を出した。

明治15年5月27日、門下生一同が還暦の嘉筵を松江で催した。地方空前の盛会であった。このあと病いに犯され、9月61才の生涯を閉ぢた。

精翁と縫殿親子

9代縫殿はのち藩主のおぼえもよく重用されたところをみると、精翁が藩命によって江戸より帰って、「南北史」校勘に従ったころから、教えをうけたと思われる。精翁が江戸勤番をして藩主の学問の相手をしているころ、格式中老（1000石）の縫殿は、'63（文久3）年江戸勤番となり、若殿・吉姫の世話役として励んだ。その労として当時としては珍らしい時計を拝領している。

第1次長征には精翁と同じく出陣しており、精翁が藩校の総教授になった時には、縫殿は格式家老並で若殿御用向となっている。精翁が第2次征長の役で口田儀まで出陣した時には、同じようにこゝまで出陣している。

また'69（慶応4）隠岐騒動の時、士大将の添役で精翁が行った時、縫殿は総指揮官であった。

精翁とのかゝわりの深い縫殿は、静遠あるいは半梅居とも号しすぐれた詩人であったという。

縫殿の嫡子は卯之助である。父は詩作については心ある人には教えていたというほどであった。父の薫陶をうけた卯之助もこの道に進んでいたものとみえ、精翁が平田に開いた亦楽舎に学び、塾頭となっている（明治13～14年ごろ）。塾頭は師範代にあたり師匠に代って教育する立場にあるから、門人の中で最もすぐれた人である。号を楽之といった。

平賀縫殿2代と横田・茶屋2代

横田町六日市に茶屋という商家があった。8代9代の縫殿より、茶屋5代賀三郎と6代善三郎宛の10数通の書状がある。当時の茶屋の向いには郡家（現鉄屋宅）があり、藩主や家老あるいは巡見使の宿泊や休憩が度々あった。その間に平賀と茶屋との間に交流が生じたものである。茶屋は松江市茶町の商家茶屋の流れで（木次の商家茶屋を経て）もあった。

異船渡来・長州征伐への出陣・江戸勤番・家老御仕置役拝命のそれぞれの度毎、隠居・婚姻・死亡の度毎に便りが届けられている。

藩主にかゝわるこうしたことの発生した時には、郡内の鉄師に便りが届けられ、その度毎に金銀が有難き仕合わせと上納されている（横田町誌参照）。

藩主だけでなく家老なども同様でそれぞれの筋をたどって援助を受けたものとみえる。明治維新になって家老職を失った時、地方商人からの借入金が返済できず、商人を倒産に追いこんだものもあったという。

上納金のほどは明らかでないが、記録によると当時茶屋は、次のような商業についての株仲間の座をもっていた。呉服・宿屋のほか荒物・陶器・椀・小間物・紙・砂糖のほかに6品目。その度の見かえりの座もあろうか。

（精翁については、岩成虎夫さんの研究に負うところが多い）

春の夜空に　簸の上短歌会

億万のさくら花びらつぶやくか春の夜空の星　常盤　はるまさ
のきらめき
妻病みて共に出で来ることのなきわが山畑に　仝
菜種梅雨降る
ふんわりと降りて路面に吸はれゆく櫻花のさ　人
かりを時ならぬ雪
年ごとに力衰ふ今日漬けし漬物石は孫とのせ　佐藤　喜代子
たり
歌詠みをしばし忘れて山鳩の啼くをききつつ　仝
友ら想ひぬ
父母も土に還へらむ傾むきし墓石彼岸に起し　人
参らす
巡る寺巡る寺はみな花の中杖ひくわれにうぐ　岡田　時子
ひすの声
いささかの生命の焔もやすごと春のひと夜を　永井　弥生
智恵子抄よむ
還らざる人への愛をあきらめし春の夕べの孤　仝
愁に沈む

斐の上川柳六月号

連休は楽しくもない田植唄　横山　まこと
行ってきます玄関とび出すランドセル　若槻　白馬
ループ橋渡って嫁ご早くこい　田中　有樹絵
扶けにも邪魔にもなるか妻と旅　高木　凡太
よい線が出そうで燗の準備させ　松田　牛歩
孫の守りママに渡して気がゆるみ　藤原　千代子
鏡さえ見なけりゃ若いつもりなの　渡部　ミツコ
ゆるされる心で胸が広くなり　真綿　よし子
仏壇に花色々と母思ふ　安部　春恵
都会並み車くるまの三連休　松浦　亜以
連休は農夫となって土まみれ　安部　正子
竹の子はいいなどこでも頭出し　児玉　哲呂
面倒はうやむやにして一人行く　松浦　久寿子

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第207号
（7月号）
1992. 7. 4
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

信長の時代の奥出雲⑥

序V—貢納からみた16世紀横田庄

（お断り）　山積した仕事に追われて、自由に郷土のことに触れられず、とかく堅い読みものになって恐縮です。本号も仕事のついでに本紙のために綴ったもので恐縮です。ですがこれほど100年間の荘園の貢納資料がまとまるのも山陰ではそう例がありません。やはり約束した執筆のついでに、中世の横田（12世紀末～17世紀末まで）の資料を年月日別にカードにしていますが、1000枚を越す数となりました。資料があることは、横田がすばらしいところであったということです。指導点検を頂いて編年資料集を完成したいと思っています。30年来の念願に届いたようです、出版は高い上に売れませんから見込みはないでしょう。こんなに沢山あるところは地方でも少ないでしょうが。

貢納の記録

横田庄は石清水八幡宮と京都御所・泉涌寺塔頭雲龍院の三領家の荘園であった。八幡宮への貢納の記録は今のところ、その片鱗も発見されていない。雲龍院に関しては泉涌寺文書の中に督促にまつわるものが10通あまりあるが、京都御所に関しては記録が多い。最も多いのは『御湯殿の上の日記』であり、ほかに数冊ある。本号はこれらの記事を年代表として、16世紀の時代（1511永正8～'90天正18）の当地方を概観する。

御湯殿の上の日記

禁中御湯殿の上の間で、天子近侍の女官が書いた当番日記で、室町時代初期（1477文明9）から江戸末期（1826文政9）に至るまでが伝存している。わずか欠損しているが、現在は『群書類従』補遺の『御湯殿上日記』全11冊として出版されている。

内容は里内裏制皇居天子常住の常御殿の中に御湯殿上と呼ぶ間があり、そこに常備されていたのでこの名称がある。男官が書いた『殿上日記』にならい、当番の女官が交代して執筆していて、女房文体（仮名文）で、中には天子みずからも一部執筆している。記事は天子の動静を主とし、恒例・臨時の行事、任官・叙位、下賜・進献等のほか、皇族・女官の動静などを含んでいる。この種の日記に準じた女性日記はかなり多いが、当書は室町時代以後の宮廷の根本史料で、宮廷語の特徴たるもじ詞・女房詞など、時代語の研究にも重要なものといわれている。

読みづらいが、この言葉になれると面白く読まれる。先学に導かれ1960（昭40）年代から町誌編集のために幾度か、横田庄を求めて読んでみた。

実隆公記

公卿・三条西実隆（1455康正元～1537天文6　83才没・嵯峨の二尊院に墓）は、1506（永正3）年念願の内大臣就任を達して隠退、62才で落飾しその後も幕府・諸大名間を奔走して皇室経済の扶持に尽力、公家社会最高の文化人と仰がれた。20才から死の前までの63年間の毎日の記録がこれである。天皇の信任があり、将軍・大名から重んぜられ、朝廷や幕府を中心とする政治上の動きがわかり、応仁・文明の乱後の荒廃ぶりや世相、荘園制の崩壊の急速に進んだ時期の事実、朝廷・公家の経済的窮迫、さらに文化史に関する史料も多く、歌人としても古今伝授をうけ、最高の文化人であるとともに、地方の大名・土豪・富商との接触記事も多く、地方の文化意欲の芽生えを察知するにも好史料である。横田庄の記事が散見しているが、岩屋寺等との文化のつながりの記事はなかった。

『言国卿記』は公卿の山科言国（1452享徳元～1502文亀2　52才没、権中納言まで昇進）の、29年間の記録で、簸川郡遙勘郷等の山科家の荘園をめぐって、当地の三沢氏が現地での代官を依託されている記事がある。三沢氏の使い成吉が貢納のため上洛し、出雲の銘酒を持参し、供応もうけるが、再度の接遇を要求したので已むなくこれに応じたことなども書かれている。

『看聞日記』は後崇光院伏見宮貞成親王（1372～1456）—持明院統の崇光天皇（北朝）の孫で、後花園天皇の実父—の、1416応永23年～1446文安5年の33年間の日記で、『看聞御記』ともいう。

南北朝動乱を機に皇位を独占するに至った持明院統内部での皇位継承をめぐる、政界中枢部の脈動が、克明に描出されている。北朝系荘園であった当庄のことも垣間見える。

貢納の記録

『御湯殿上日記』は忠実に記録されているので、当庄の記録の中心で、その他の記録を加えて、次に表にしたものを掲げた。

14世紀の横田庄の記録は多いが、15世紀は極めて乏しい。

皇室経済の研究によっても、室町後期・応仁の乱以後から、1562永禄12年までの100年間は比較的多いが、応仁・文明の乱中はさすがに少ない。

その中の16世紀横田庄の貢納記録はかなり多くある。その中の貢納額と貢納物を書いた。

皇室領から貢納があると、御領の申次（言上のとりつぎ役）、

信長の時代の奥出雲⑥・短歌・川柳・俳句

貢納に奔走した廷臣には1割を下賜され、廷臣にも領賜されるのがつねであった。

金額は疋である。1疋は10文といわれた。時代によって異る。

この表の期間中の米の値段をみると、1石が1000文で、大永・永正の各地で戦乱のあった時は1000～400文と上下が激しい。世の中が落ちついた天正年間は1石が2000文ともなる。

この表をみるためには

5000疋↓50000文↓50石↓125俵

10000疋↓250俵　20000↓500俵

としてみると、手っとり早い。

（尚　疋は　絹・木綿の数量単位でもあり、二反を一疋と呼んだ時もある）

年間の年貢総額は

20000疋で200000文＝200石＝500俵

位であったようである。貢納の良い年、悪い年、延滞してあとで貢納した年がある。まだ代替りの御礼として割当とは別に納めている時もある。少し時代をみながら、数字の増減の意味を考えてみるが、一つの推定である。

年代を追って横田庄をみる

三沢10代遠江守為忠が、横田庄を地頭請所とし、代官としてこの地に、藤ケ瀬城を築城して入ったのは1509永正6年である。貢納の記録はその2年後永正8年からある。1493明応元年、泉涌寺文書によれば、横田庄は年貢を未進している。こうした背景が三沢氏の横田への進出となったものと思われる。1514永正11年には20000疋、満額とみえる貢納をしている。

三沢11代為国の'26大永6年は32000疋を納めているから、前年度の分も貢納したものであろうか。絹・綿・用脚（銭）の貢納は前年度の不足分の足しにしたものとも考えられる。

京都での横田庄の代官は、庭田重親であると記録にある。翌'28享禄元年には、26000疋（260石・650俵）を納めている。

'31享禄4年には尼子経久の攻撃をうけて、為国は子とともに捕えられて富田城に幽閉されたという。

三沢12代は為幸である。貢納の記録が毎年誌されている。'39天文8年の文書によれば、横田庄には尼子氏の支配がおよび、森脇以下の家臣が庄内に駐在し為幸は三沢城に居たと考えられる。文書によれば横田庄は3領家への貢納を続け、中村市場がかなり賑わったことが伺える。

大催小池（杠）氏、岩屋寺、その他の商人の出入りが多いことが記録にある。'14永正11年尼子の兵火にあって焼失した岩屋寺は、快円の努力によって8分通り復興したことが、この年天文8年の快円の記録で明らかであり、快円の誌した『快円日記』にその経過、寄進者と額、大工や仏像彫刻者などが詳細にある。（横田町誌、本誌53・58・63号を）

このころまでが尼子経久の最も得意な時代であった。三沢氏も尼子氏と手を結び、その戦列に参加している。貢納も立直りをみせている。（織田信長は5才）

第一線を退いた祖父経久らの諫めも聞かず、尼子軍の総師詮久（のちの晴久）は、'40天文9

記録にみえる16世紀 横田庄の御所への貢納

年月のみは記事のみの年、㊎は泉涌寺分、○印は金額・量不明

紀元	年号	月	貢納額（疋）	貢納物
1511	永正8	1	5,000	○
12	9	8	3,000	用脚（銭）
14	11		20,000	
	12			
26	大永6	7	19,000	
		11	3,000	絹・綿・用脚
		12	10,000	
27	7			
28	享禄元	3	13,000	
		10	13,000	
29	2	12	5,000	
30	3	2	○残り追加	
32	天文元	10	3,000	
34	3	9	7,000	
35	4			
37	6	4	10,000	
38	7	4	10,000	
		6	○	あめ
39	8	6		
		12	15,000	銀30枚
40	9	4	5,800	
		12		
41	10	5	10,000	
42	11	9	3,000	絹・銭
			2,000	
		10	○	絹・かね
43	12		㊎	

年秋安芸吉田の郡山城に毛利勢を攻めるべく兵を進めた。その兵3万余、守るは44才の毛利元就の率いる精兵2400余と城下の領民あわせて8000余人。

三沢為幸はこの戦い討死し、翌年正月14日朝、尼子軍は積雪の中国山脈を越えて逃げ帰るという結果となり、尼子氏の衰勢は決定的となった。この年の暮経久は84才の生涯を閉ぢた。

三沢13代は才童子丸4才（のちの為清）である。'42天文11年には当地代官代替り御礼として、2000疋を貢納している。

'45天文14年12月、尼子晴久は横田庄在番の森脇山城守家貞に所務の條規を与え（中村市場のこと関連の條規もある）、公用192貫800文を徴して、この中から禁裏・泉涌寺・石清水八幡宮に進めさせ、残額は之を納付させた。（192貫800文は19280疋となる）

その後天文16年までは貢納の記録がない。その間たびたび催促が行われているが、滞納の理由は明らかにできない。

'48天文17年、「やっと10000疋の上納が行われた」と当番の女官は誌している。

'51天文20年、横田庄下中村（現大字横田字角）に伊賀多気神社が再興された。藤ケ瀬城下に街並があらわれ（今日の六日市・大市の街並の原型）、その氏神としてこの地に勧請された。

棟札によれば地頭森脇山城守家貞とあるから、街づくりの中心は森脇であった。このころから中村市場（現大字中村字馬場のエヘン橋北詰の西側一帯）にかわって、六日市場やがて大市場が開設されることになり、それが、今日地名として残ることになる。

それから'58永禄元年までは何とか貢納が続くが、以後8年間は貢納は杜絶えている。このころが、毛利氏が出雲においても兵を留めて尼子氏に攻撃をかけ優勢を占めているころで、三沢氏は毛利方でこれに加った。

'66永禄9年、尼子氏は富田城の開城によって毛利氏に降った。

毛利・尼子の戦乱によって貢納が滞っているから、毛利元就に督促をするよう、天皇からの綸旨も届けられている。

しかしその額も少なく、間もなく滞納された。このころはすでに横田庄だけでなく、皇室領の各地の貢納も極めて徴々たる状況であることが、研究によって明らかになっている。花園制の崩壊期に入っている。やがて戦国大名によって、領国内の把握に力が注がれはじめ、検地の動きもあらわれて来て、貢納も義理だてに過ぎなくなってくる。

織田信長が本能寺で没するのは、'82天正10年6月2日である。'90天正18年の『100石が銭にて』の記録を最後に貢納は終りを告げたようである。

三沢氏もまた馬木氏も安芸に移り、あとへは新らしい毛利氏の家臣が駐在する新らしい時代となる。

紀元	年号	月	貢納額（疋）	貢納物
1544	13			
45	14			
46	15			
47	16			
48	17	2	10,000	
		8	○	絹・綿など
49	18	4		
		9	5,000	絹・綿
50	19	7	3,000	
			(泉) 昨年分 1,000 今年分 1,000	
51	20			
	22			
		9	10,000	
56	弘治2	5	3,000	
		9	10,000	
57	3	12	100	うち絹20疋
			10,000	
58	永禄元			
		4		
		9	10,000	
			1,000	
		12	○	
61	4			
62	5			
65	8	9		
66	9	7	3,000	
72	天亀元	11	100	
79	天正7			
86	14			
88	16			
90	18	10		100石が「銭」にて

追記

『言継卿記』は従二位権大納言山科言継の日記で、仝家は藤原氏の一流、冷泉家の分家である（1507永正4～1579天正7、71才没）。

天正4年までの約50年間の記

斐の上川柳七月号

挨拶も待たずに食べる老人会　児玉哲呂
聞きぐるし自分ばかりの通り道　渡部ミツコ
食べ物に羽が生えてるルーブ橋　藤原のぼる
いい天気お茶を摘みつゝ茶摘歌　安部春恵
筍のように育てと孫寝顔　若槻白馬
終点で気がつくボタンの掛け違い　松田牛歩
亡き妻のそばえ旅立つ兄送る　安部正子
たわいない話仏前に語りかけ　松浦久寿子
みんな出て食うもくわぬも老夫婦　高木凡太
初孫の写真に語り皺のばす　田中有樹絵
孫渡しそれから野良に精を出し　藤原千代子
どの花もいいとこ見せて咲き終り　真綿よし子

柴栗句会六月

入梅とのみ記し今日の日記とづ　糸原古志
通夜の灯が消されて探し五月闇　浅野としお
肌開けて涼風容れる塩番茶　岡田踈花
大正を偲ぶ館よ竹の秋　小川月舟
菖蒲園観光ガイドへ空耳で　恩田和美
更衣袖丈みじか二年生　門脇花子
青葉陰由来の石碑に小石積む　加納信子
逝きし友送りて空し走り梅雨　楠房子
片ちびの靴の年輪黴模様　高木白虹
更衣タンスの底に遠き日や　中澤美紀子
家古りて開け閉め軋む梅雨じめり　新出谷一華
梅は実に歳月遥か子は親に　錦織富江
髪切って白毛の目だちや梅雨の坂　峯石美代子
著莪の花五百羅漢に語りかけ　渡部夕峰

晩春譜　簸の上短歌会

地下足袋をとんと履き込み今日も又山菜つみの　永井弥生
袋背負ひぬ
我が家に住みつきし仔犬夕ざりの道尾を振りて　野村節子
われに従ふ
語り合ふのみで満ち足る愛なりきそっとそのま　佐藤喜代子
まの遠き青春
山畑の茶摘みにのどに飴一つ指はほのかに新茶　岡田時子
のにほふ
人生は予期せぬことをうべなふも終日仰向き妻　常盤はるまさ
は臥しをり
逢へばまた別れのありてアカシアの花散る径を　安部夕波
君遠ざかる

録であって、『実隆公記』とならび戦国期屈指の記録であり、自筆原本が残っている。家領と三沢氏との関連がわずか書かれている。事件・朝廷の財政・芸能・美術など貴重な記録がある。

言継の貧窮も相当で、蚊帳を入質した話、アルバイトに町衆相手の診療・投薬のことも散見される。

公家・皇室の戦国時代の経済

朝廷の臣を公家（くげ）と呼ぶ。国の種々の職掌を家職とし世襲し請負う一方、それを全うする経済的基盤として公家領荘園があった。

応仁文明の乱はこの基盤を一挙に崩壊させた。邸宅はもとより、家領荘園からの年貢収入も多く武士に押領された。言国・言継の記録に当地の地頭三沢氏が登場するのは、その実力を認めて、大社周辺の家領を依託されたからである。

1490文明10年の朝廷の儀式への参加が、公郷27人中3人（中御門・日野と三条西実隆）のみであったのは、装束を調えることができなかったからという。

皇室の経済については50年前に出版された奥野高広の研究があるのみであるが、それによると応仁の乱後は領地は49ケ所ある。その中に横田庄が時代によって上下はあるが中位にある。

研究によれば、1521大永元年から1569永禄12年までの49年間の平均年収入額は、62057正＝620貫文（1550俵）。他に禁裏修理費として献上されたものを加えると750貫文（1875俵）ほどになる。

室町時代前期では年間収入は7500貫文であったというから、1/10ということになる。この苦難を主体的に乗り切ったのは、三条西実隆や山科言継・甘露寺親長らで、それらの記録にくわしい。

江戸時代の朝廷の経費は100％幕府の丸がかえ、必然的に口を出すのは当然、その点戦国時代には窮乏だったが自由があった。

公卿（くぎょう）と公家（くげ）

太政大臣・左大臣・右大臣を三公、大納言（だいなごん）・中納言・参議および三位以上の官人を卿という。併せて双方を公卿といった。この中で任に就いている官人を現任公卿といった。

鎌倉幕府成立以後、地位を確立した武家・武家衆に対し、京都朝廷の朝臣を公家・公家衆といった。

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第208号
（8月号）
1992. 8. 1
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

仏像からのぞいた仏教

本誌連載の観音信仰を、信仰者には必要ないことであろうが仏教の中でどう位置づけるか、みて置こうというのである。葬式仏教にはよく接するし、法事仏教も知る機会はあるが、仏教そのものには入りこめない。歴史の流れは、時代を追って人の心の流れを描き出す。近ごろの新宗教に感ずることを、昔の人はそれぞれ派生する宗派仏教にも感じたであろう。いま宗教論に面と向わず、庶民に親しまれる仏像の分け方と、その発生をたどって、時代に分け入ってみることにする。

仏像は本来礼拝の対象であるが、発願者や製作者の心がうつり、さまざまなものがあり、それが高度の芸術性を有するものにもなって、美術鑑賞の対象となっている。

大別して、如来・菩薩・天部・明王・羅漢の5つに分けられる。

如来

諸尊（高貴な方々）の最高位に位置し、「悟りを開いたもの」である。日本に多くみるのは次の6体、

釈迦如来——「お釈迦様」と呼ばれる。前6世紀～前4世紀に生れた（諸説あり）、仏教の創始者で、広く衆生（一切の人類や動物）を済度したインドの直覚者。

薬師如来——衆生の病苦や暗黒を救う仏。右手をあげ左手には薬壷をのせる。日本では釈迦如来より少し遅くれた7世紀（白鳳時代）より広く信仰された。

阿弥陀如来——西方極楽浄土に住む仏で、浄土教の本尊。この仏を信じ名号を唱えるものは、その功徳によって必ず極楽浄土に往生すると説かれている。

インド・中国・朝鮮を経て7世紀後半から日本へ。鎌倉時代法然によってこの経と仏像を中心に浄土宗が独立した。

弥勒仏（弥勒菩薩）——は釈迦につぐ位置にあって、56億7000万年の後の人の世に生れ、悟を開いて釈迦に代ってこの世を救うという。

大日如来——密教（簡単にいうと秘密性・神秘性が多いもの。真言宗・天台宗）において最高の仏格をもち、如来一切の諸仏菩薩の本地（ものの本源）となる。空海が9世紀初め中国から日本に伝えた。（本地垂迹説は、日本の神は本地である仏が、衆生を済度するため姿を変えて日本にあらわれたものという。平安時代から江戸時代末までの、日本の仏教・神道の教え）。

盧舎那仏——この仏は太陽の光り輝くが如く、全宇宙にあまねくみちる（偏照）真実の仏身で、釈迦の法身（その体現されたもの）をさす。

奈良東大寺の大仏さん、唐招提寺金堂の本尊がこれで数は少ない。

仏像はこのように時代の流れと信仰者の思いでいろいろの仏相がえがかれ、像となっていた。次からは、修業者・仏法守護者が像となったものである。

菩薩

悟りを求め、衆生を救済しつつ、成仏を成就する機をまつ修業者のことで、一般大衆＝衆生の先導者として手本となり、同行者となるものである。

インドのバラモン教で説かれる神から転化した言葉が菩薩。

聖観音、十一面観王、千手観音、如意輪観音、勢至菩薩、日光・月光菩薩、普賢菩薩、地蔵菩薩、虚空蔵菩薩がある。この中に観音さん＝観音菩薩がある（後述）

路端のあちこちに立つ地蔵さんは地蔵菩薩である。釈迦の入滅後、弥勒菩薩が出現するまで無仏の世界に住んで衆生を教化・救済する菩薩（修業者）で、平安時代より盛んとなった。一般民衆へのひろがりとともに、願いごとによって、子安地蔵、六地蔵、延都地蔵など、さまざまな、修業同行者として生まれ庶民に愛されてきた。

天部

仏教に帰依し、仏法の守護にあたる尊（修業者）。二つに分類される。

貴顕天部——梵天、帝釈天、吉祥天、訶梨帝母、弁才天、伎芸天

武人天部——四天王（持国天、広目天、増長天、多聞天。このうち多聞天を独立させると毘沙門天となる。岩屋寺の毘沙門さん）、十二神将、執金剛神などがあり、多く甲冑に身をかため、武器をとり、念怒相をあらわす。本尊を守護するような位置に置かれる。

明王

大日如来の命令をうけて、魔障を紛砕する威徳のある尊。修業者。多面多臂の非人間的業相の像が多い。

不動明王（五大明王）、金剛夜叉明王、愛染明王（岩屋寺）のほか5種と多く、本尊を守護するように配さ

仏像からのぞいた仏教・横田三十三番札所②・信長の時代の奥出雲⑥・短歌・川柳・俳句

れる。

羅　漢

はじめは仏弟子への尊称であったが、日本では十六羅漢、五百羅漢といわれるように、仏道修業者全般を指すことが多く、釈迦の十大弟子、各宗派の祖師、高僧も含めていう。聖太子像・役行者像も厳密に言えばこれに含まれる。

横田三十三番札所めぐり②

観世音（観音）菩薩　（観音さんと略称する）

仏教の慈悲の精神、すなわち仲間に対する友情と悩める者に対する同情とを人格とした菩薩（修業者）の代表的なもの。来世を願う信仰にもとづく阿弥陀如来の脇侍となり、教えを守るという7世紀（白鳳時代）から江戸時代に至るまで、これほど広く信仰されたものはなく、造像もすこぶる多い。

菩薩（修業者）思想の流れの中で育ったもので、弥勒菩薩信仰と同じくらい早く、インドで観世音菩薩信仰が成立した。

一心に観音の名を称えれば、即時その音声に感じて、衆生の七難（火難・水難……）を救うために、種々の姿を現すと説き、そこに三十三身があるというのが、「三十三観音」「三十三所札所」信仰がおこる。

観音像はその変化相によって、聖観音、十一面観音、如意輪観音、馬頭観音、准胝観音、4手観音の六観音の信仰、さらに不空羂索観音を加えた七観音の信仰が生まれた。

説話の上では、観音の住処がインドのポータラカ（補陀落）山であるという信仰が生れる。日本では紀州の熊野の那智山とされる。日本の日光は、補陀落がなまって二荒、つまって「ふだら」これを音読で「にっこう」と読み、これを好字「日光」にしたもの。

観音はインド→中央アジア→中国→チベット→朝鮮半島から日本へと伝った。中国では6～9世紀に、観音信仰の種々の教典が翻訳され、各種の観音信仰が生れる。

日本では7世紀末の律令国家の精神的支柱となった玄昉にはじまって盛んとなり、国家的な天災・疫病、あるいは兵乱迫害という現世利益を期待してひろまったが、10世紀（平安中期）になると、抜苦与楽を願う個人的信仰へと移り、観音を本尊とする寺院建立が盛んとなった。そして西国三十三所の霊場が定着してゆく。

観音像の変化相はさきの七種があるが、インドのヒンドゥー教の影響をうけたものである。

聖観音は一面二臂の姿で、慈悲仏にふさわしい顔容をもつ。

十一面観音は、頭の上に11の化仏の面をもち、その表情は慈悲相、威怒相、寂静相などがある。（以下諸観音の説明略す）

岩屋寺の十一面観音は、1514（永正11）年尼子氏の兵火の折、切開けの奥の伊勢谷に難をのがれていて、後日御光によって発見、本堂の復旧とともに安置したものと、当時の復興中心者、院主快円は記しているが、実際は、木造の坐像であり、室町時代のものである。

ところが数年前、東京大学史料編纂所所蔵の岩屋寺文書の複写物を入手して読んでいるうち、1342（康永元）年から仝3年までの文書10数通―岩屋寺寺領に関する論争の往復文書―の中の、元年10月の文書に、明治初年の同寺の名僧宣明が、冒頭に貼紙して次文はこのようであるとして、「……行基菩薩草創、十一面観音者、等身泥仏」と書いている。

するとこの泥仏は永正の火災に焼失しているとみえる。責任感から先のように書いて、実は坐像の木像仏を作って本堂に安置し、尼子氏にも復興に協力してもらっているので、快円はそのように書きのこして、名誉を保持しようとしたものと考えられてくる。泥仏とは木造の木組みの軸に粘土で像をつくったもので極めて古いことになる。岩屋寺は13世紀始めころまでしか遡れないが、これで一挙に数世紀も古くなることになりそうであるが。

横田三十三番札所
第1番　馬場　金巌山**岩屋寺**
（御詠歌）
山中に　巌の松の木間洩る
ひかりぞ寺の法のともし火

信長の時代の奥出雲⑥

序Ⅵ―戦乱を支えたもの

横田庄の動きを考えてみたい。

横田庄の貢納の状況にふれたが、滞納の背景には代官の動向があるのか、動乱による輸送の障害なのか、地頭請所代官としての三沢氏が出雲国内に実力をもつ背景とかゝわりがあったのか、また農民一揆の発生があったのか、片鱗らしきものも見えるが記述には不足である。まず諸般の基礎的なことを点描し、

貨幣と物価

当時の貨幣は金属貨幣と物品貨幣に分けられる。前者には金貨・銀貨と銅銭が、後者は主に米であった。銅銭は鎌倉時代以後に多く、中国から輸入された唐銭・宋銭・元銭・明銭が大部分で、数の上では宋銭が圧倒的

に多かった。当地方の古い銅銭にまじる中国銭にもやはり宋の年号のものが多い。これらは原則として1枚が1文であった。15世紀後半以後、悪銭と呼ばれる劣悪な貨幣の流通が顕著にみられる。そこで悪銭による支払いを拒否したり、悪銭による支払いについては、増歩を求めたりする、撰銭が一般に広く行われるようになった。これによって商取引に支障をきたすことも多く、たびたび撰銭禁止令を出したが、一時的に止まるだけであった。

16世紀後半戦国大名は軍資金の獲得のため、金山・銀山の開発に力を入れた。佐渡の金山、大内氏の石見銀山などが著名で16～17世紀の金・銀の産出量は飛躍的に増大し、貨幣として鋳造され、使用されるようになった。しかし金・銀貨は主に貯蓄用・贈答用や、軍功に対する褒賞用として用いられるのみで、大名間や一般の商取引にはほとんど使われなかった。

これと違って米は布とともに、支払手段として用いられていた。多額の支払には米、少額の支払いには銅銭が使用される傾向が強かった。

京都では（1548年）
米1石 1149～1515文
炭1荷 200文 みかん10 20文
鎌1丁 25文 足袋1足 350文

であった。奈良は米は769～833文で京都より安く、地方にゆくほど安くなった。

岩屋寺僧快円の'44（天文13）年（信長12才・2年後に元服）の記録によると、春には1升100文となったとある。極めて高騰している。この年は飢饉のため春から餓死者の数知れずと書いている。その年の旧7月21日の**中村市場**（エヘン橋北岸に開設）では下って30文、旧8月1日の同市場では17文弱と下り、秋には豊作の気はいも見えたと述べている。

税　金

百姓が納税者、徴収者は領主（侍）

領主のほとんどは、戦国大名とその家臣（給人）と、その他京都の公家・中央地方の有力社寺である。**当庄**では京都の御所と泉涌寺・石清水八幡宮である。当庄以外の仁多郡内の他の郷村の領主は三沢氏であった。

給人（家臣）は戦国大名に納税の義務はなく、百姓から年貢を徴収する権利を大名に認められていて、代りとして戦国大名に対して軍役・普請役などの、侍としての奉公が課せられるのが原則であった。

租庸調の制度も平安期以降は、次のように変り大きく分けて三つとなり、これに反銭と棟別銭が加わった。

年　貢　耕地への基本税「分米」「分銭」といって、米・銭で納める。

公　事　土地にかゝる税で、米・麦・野菜・果物・魚介・塩・薪炭・菜・蓙などと雑多で、それが米・銭で代納され、年貢と変らぬような例もあり、戦国大名はこれを本年貢に加算して、年貢の増徴を図るようになる。

夫　役　人身にかゝる税で、陣夫役と普請役が主で、ほかに郷夫・船役・町役・堰役・伝馬役などもあった。陣夫役は物資輸送、城・道・橋の改築などの労役で、普請役は平時の築城・築堤・築橋の労役に服するものであった。

反　銭　本来は内裏・伊勢神宮などの造営に当てる臨時のもので、鎌倉期以来特定された公田を対象とするものであったが、戦国大名の時代には領内のすべての地にこれを課すようになる。ただ有力な家臣・社寺は不入として反銭を免除された。16世紀末、**三沢為虎**が、毛利氏に対し、**横田庄**は京都御所の荘園のため、反銭は免除されている旨を届け出た文書が残っている。

棟別銭　反戦が土地にかけられたものに対し、同じ目的で棟別（戸口）にかけられたのがこれである。

課税額

いろいろである。反銭については、関東の後北条氏では一率に貫高（近世では石高が土地の生産性を示すに対して、中世のこれは土地を現実の年貢高で表示すると考えられている）の6%としていて、反当30文であったが、安芸の毛利氏は50文、尼子氏は100文200文という高額な例もあり、500文というのもあった。（永禄初年で信長30才のころ清州居城時代で今川義元を討ったのち）家臣団の脆弱性の上にこの公事・夫役・反銭・棟別銭の課税額は、戦国大名の領国支配の強弱を示すものである。

空木散る　簸の上短歌会

孫のため植えたる桐のたかだかとうす紫に初夏の夕べを　永井弥生

これからは馬耳東風ときめし朝少し濃目に紅ひきてみる　仝

早苗田に来たりし山鳩水呑みて喉上げて又呑みて喉上ぐ　人

夕昏るる裏の水辺に焦げ鍋を洗ふかたへに雨蛙鳴く　佐藤喜代子

病む妻は今日のひと日をわれは先のことを思ひて今日を生きゐる　岡田時子

風薫る青葉の陰に眠る友手向けし香華に面影の顕つ　常盤はるまさ

父と母妻も眠りし奥津城にうつぎの花の散りて春逝く　野村節子

愛といふことばの重みかみしめて去りゆくひとに名残り惜しみぬ　安部夕波

仝　人

前号訂正　1P2段30行従・3段最後諸・2P表19段かね・3P4段5行荘園制　5段2行馬来氏

の高額は、尼子氏の命運にかゝわったものと思える。尼子氏は**横田庄**から三領家への貢納額以上を税額として徴収し、貢納後の残額を少なからず吸上げている。こゝらが前号で述べた横田庄での滞納、一部貢納などの記録があらわれた原因であろうか。

年貢はほとんどが11月と定めている。そして検地によって、多額の増分を打出した。隠し田の摘発である。これには本分の2倍の例もあるほどで、戦国大名にとっては、無から有を生ずる「打出の小槌」であって、その経済力・軍事力が一段と強化・拡充されるもとであった。

こうしたなかで、樋口の表小**池氏**・稲田の**土居安部氏**などは、半農半士で、本分についてのみは百姓並に年貢を負担した。その他はすべて手許に残り所有することができた。

戦国期の城と城下

中世の城を絵に書くとき、中世の城趾の上に、近世の城の天守閣を中心とする構えをもたせることがある（町民会議編―横田―もこのように誤まり、ほかに数多くの誤まりがある。織田信長が当地の鉄を注文して鉄砲を製作したとあるが、文書研究からはそのようなことは全くない）。中世の城は、山に矢来（竹や丸太を縦横に組んで作った仮の囲い）が中心である。

平素は城の麓あたりに館（やかた）を設けて住み、戦いになると山に籠って敵を迎え打ち、貯蔵する食糧と水のある限り、攻撃軍の消耗と後方攪乱を計って、自滅や引きあげを待つのである。

今日当県下でも、一町村の城趾というものは、4～5か所もあるといわれるのは、そうしたものの数である。こうした拠点があるということは、いかに根深く領主が村に在って、地域支配を行っていたかということも知ることができる。

横田庄内でも、1551（天文20）年前後は、中村（五反田から現横田町）をはじめ大呂・竹崎・蔵屋・原口・下横田に、尼子氏の家臣が駐在していた。

藤が瀬城はそれより40余年前に、三沢氏が横田庄代官として築城したものである。

中村市場は、16世紀半ばまでは、馬場とエヘン橋の中間地の河州で、定期に立って繁昌していた。築城後は城下に家並が集りはじめ、市の機能もこゝに移り、**六日市場**・**大市場**と呼ばれ、のちこれが集落名となって、今日に至っている。中村市場については既刊本誌の164 165 166号に詳述したので省く。

市・市場（庭）

特定の場所と時間に、生産者と消費者が集合して交易を行う形態で、当初は行商と未分化。語源には諸説あり、五十路（いち）、集道（いち）があるが、斎（いち）とする祭礼起源説が有力。種々の祭神を祀る場合が多い。中世には全国的市場網ができ、各地で定期的な斎市が開かれた。近世に入ると店舗商業の発達とともに衰えた。

交通・政治・産業・祭礼の要所に開設されたが、当地の**中村市場**は横田庄の中心横田八幡宮の門前にあたり、陰陽・雲伯の交通・産業の中心でもあったし、京都の領家との往来もあって、早く発生したものである。地方では備中新見庄の市が13世紀後半発生で早いとされるが、横田庄関連資料からみると、13世紀前半発生したものと、極めて古い発生と考えられる。

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇―一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

斐の上川柳八月号

今年また古里つめた宅急便　真綿　よし子
段取りが悪くていつも忙がしい　藤原　のぼる
おさしみとビールの好きなシャレた父　中林　もりえ
盃を持って上役へ尻尾振る　松田　牛歩
地獄見て極楽となる別府の夜　横山　まこと
旅に出る話し弾んで気もそぞろ　松浦　亜以
笹まきに昔の母の手をしのぶ　渡部　ミツコ
休肝を今日も料理が邪魔をする　児玉　哲呂
丹精の花の命が短か過ぎ　安部　春恵
畑仕事孫の守りより楽なこと　藤原　千代子
久方の雨で嬉しい長昼寝　安部　正子
にわか雨笑って別れる水喧嘩　若槻　白馬
休肝日何か理由をつけて呑み　松浦　久寿子
雰囲気が酒を呑ませる同窓会　高木　凡太
孫の声聞きたいだけに電話する　田中　有樹絵
写真より本物の孫早く来い　森山　悠子

柴栗句会七月

せめぎ合ひ仙人掌赫き花かかぐ　糸原　古志
展望台おろち大橋の夏探る　浅野　としお
雨紫陽花訪わず訪われずひた籠る　岡田　踄花
郭公の遠音を聴きて午睡かな　小川　月舟
ドラム鑵風呂曠野の果は夕焼くる（回顧）　恩田　和美
耳鳴りの鳴り止まぬまま半夏生　加納　信子
束の間の命灯せし恋蛍　楠　房子
ペタル降り坂道汗の押しぐるま　高木　白虹
屋根も灼け道も灼け今日土用入る　中澤　美紀子
濡れ落ちし毛虫のごとく栗の花　新出谷　一華
寂しさも不便さも慣れ夏住居　錦織　富江
迷い蝶草取る我の背にもつれ　峯石　美代子
青田風教会の鐘渡り来る　渡部　夕峰

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる①・横田三十三番札所めぐり③・小字めぐり⑨―六日市(上)・俳句・短歌・川柳

奥出雲

題字　糸原風亭書

第209号
（9月号）
1992. 9. 5
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる①

神有月・神無月・神等去手

東アジアの中で、日本の神話・古代史を位置づけている研究者、三品彰英・井上秀雄・宮崎市定・江上波夫、韓国の徐廷範ほかの諸説を紹介する。国際化について、こういう面も大切である。まず韓国の有名な言語学者でシャーマニズムにも造詣の深い徐廷範の近著から

シャーマニズムとは

シャーマンとはいわゆる巫女のこと、4世紀の邪馬台の女王卑弥呼はシャーマンでもあったという。自らをトランス（忘我・恍惚）に導き、神・精霊・死者の霊などと直接に交流し、その力を借りて託宣・予言・治病などを行う宗教的職能者のこと。

このシャーマンを媒介とした霊的存在との交流を中心とする宗教現象をいう。極北・シベリア・中央アジア・北米のインディアンに一般的にあり、類似の現象は南アジア・東南アジア・オセアニア（南太平洋諸島）等にもみられる。中国・朝鮮・日本では巫術などと呼ばれる。

大社造りの本殿の特色

間口の柱の数は奇数であり、神体は西に向けて置かれている。

横田の伊賀多気神社もこれである。神体を横から拝んでいる。

これに対する梅原猛の説は次のようである。

哲学者竹山道雄（「ビルマの竪琴」の著者）・建築学者石田茂作も述べているように、法隆寺も出雲大社も間口の柱数が奇数で、柱間が偶数である。これらは真中に柱があって、出口がないという意味である。そこには神の死霊が住んでいる。それを手厚く祀れ、2度と死霊が地上に現われて災いをもたらし、われわれの政治を邪魔しないようにという意味であると、大著1巻で詳論している。

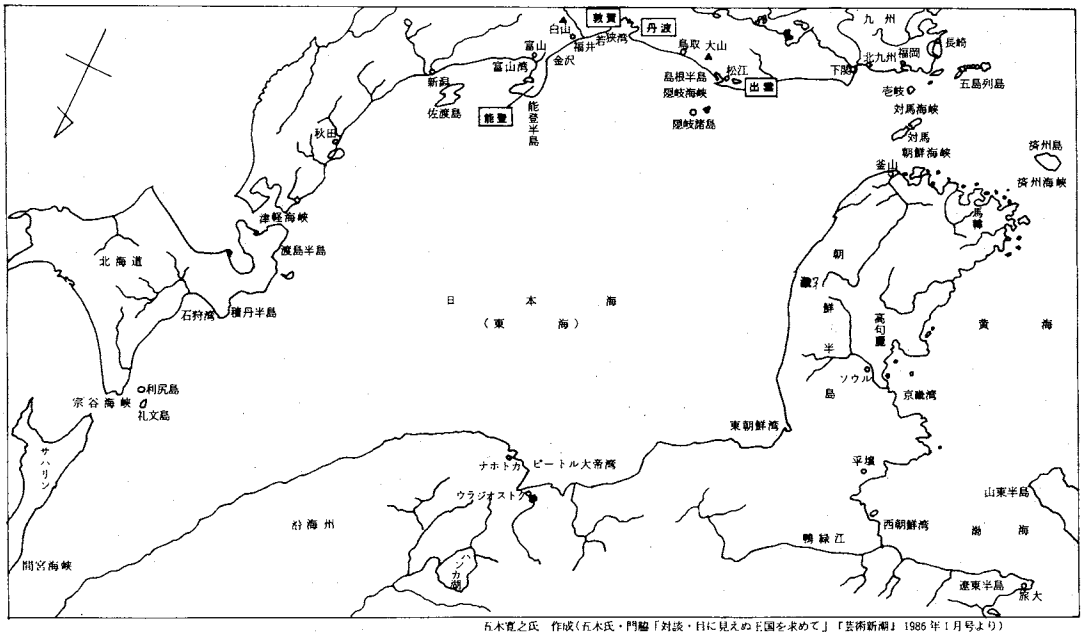
陰暦10月はなぜ神無月というか

出雲に全国の八百萬の神々が集るため、各地の神々が不在となるので神無月といい、出雲は逆に神有月という。出雲は神々で一ぱいになる。そこで一週間の祭事が行われる。「神迎えの儀式」である。

新羅に面した稲佐の浜から上陸する神々を神主が迎える。南向きの本殿で祭神は西向きに鎮座している。この儀式では、竜蛇となって全国から来る全国の神々を迎えるのである。これは出雲大社だけでなく、日御碕神社・佐太神社でも伝承されている話である。

今では稲佐の浜で儀式としては、竜蛇に代って「御幣」によって神を迎え本殿に導く。そして本殿の東西にある「十九社」を宿舎として、一週間滞在する。

沿海州・朝鮮・遠東からみた日本



五木寛之氏　作成（五木氏・門脇「対談・日に見えぬ王国を求めて」『芸術新潮』1986年1月号より）

この間の会議は、公的な政治のことではなく、私的なこと－身の上相談と縁結びなど－であるという。

一週間がつきると、各地への神々の出発を「神等去手」という。神主の「おたち、おたち」の声で神々が出雲大社を出発し、ひとまず斐伊川の「万九千社」に集合、最後にこゝで八百萬の神のうち、西方から来た一万九千の神々は会議をし、出雲大川（斐伊川）にかゝる「神立橋」から出発する。

中国の『三国志』の中から

290年ごろ陳寿によってまとめられた、全65巻の記録である。その中に『魏志』36巻がある。この中に倭人伝があり、邪馬台のことが記述されている。

3～4世紀のこの『魏志』の中の東夷伝の、韓国の高句麗・穢・馬韓の各項には、それぞれ文に長短はあるが、陰暦10月には国中大会があり、神を迎えてまつり、飲酒・歌舞も行い、豊穣をもたらした天神＝太陽神に感謝の念をあらわしている。

出雲の神在祭もこれと同じ全国の大会である。全国各地の八百萬の神に加えて、西からの神は韓国から招いたもので、合同会議であろうか、稲佐の浜は新羅からの国引の地である。出雲大社の神体は西向きで稲佐の浜へ向いている。その向うには新羅がある。

927年の『延喜式』の神名帳（全国の神社の最初の登録簿）には、皇居内にある神社3社のうち、2社は韓神社とある。そして神楽歌に「あれ韓神の韓を招ぎせむや」とある。韓神一万九千を招いて全国から集り、祖先に感謝し仰き讃える行事であったであろうか。天孫系の神々も韓国が「高天原」であることを意識していたから、抵抗もなくこれが成立し、今日まで続いている理由ではなかろうか。

『日本書紀』続いて『出雲国風土記』が完成して20年後の、1749年（孝謙）のころの記録から、神無月の称があり神等去手も言われている。

八百萬の神々が出雲大社に集る時には、全国の神々が陸地から来ても必ず稲佐の浜から上陸するというのは、古代の人々がその祖が海の彼方から来たことをうかがわせることである。

また「御幣」で迎える。これは「ぬさ」という。神に祈る時の捧げ物である。はじめは木綿・麻を用いたが、のちには紙を使うようになった。ぬさは韓国語のノウク（魂・神霊）と同源語であろう。韓国でも今は主に白紙を用いている。神等去手は「韓へ去る」という意味であろうか。

出雲の民俗学者の解釈は

出雲ではこの神在月の期間をお忌さんといって忌みつつしんだ。お忌さん最後の神送りの日のことをカラサデさんといって、この晩には最もつつしんだ。これにはよく「神等去出」という字があてられる。しかしこれはあて字であって、本当の意味はよくわからない。あるいはカラッ風のカラ、サデ箒、サデ掻きのサデなどと関係がある語かもしれない。

この晩に外便所へ行くと、カラサデさんに尻をなでられるという。守るべき忌を守らないものへのいましめのことばが、しだいに妖怪ものを育てたであろう。（筆者も70年前祖母からこの頃になると聞かされたものだ。）

（文責 横田史談会 高橋一郎）

横田三十三番札所めぐり③

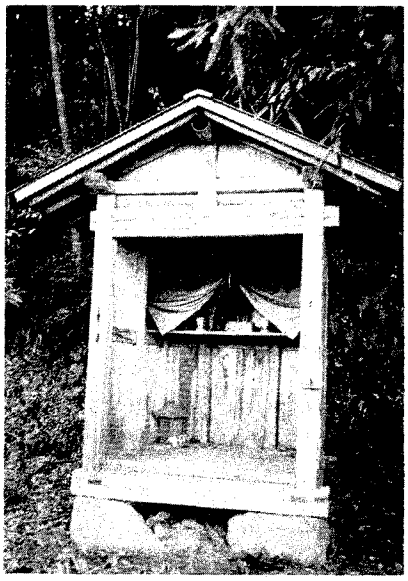
第2番 中村・馬場 **善慶庵** 山桜杉むら松に鐘の声

（紙屋のうしろ） 善慶庵とむべもいふなり



第3番 大呂・代山 花散れる御法の庭も木の下や

木ノ下葉蔭坊（しもむかいの奥） 末葉ぬかずく南無観世音



小字めぐり⑨

横田町（2）

六日市（上）

——横田町の原点——

322年前の街並

下図は1670（寛文10）年の家の配置図である。この年の横田町地銭帳（屋敷台帳）の数字を縮尺で復元したものである（詳細は『横田町誌』・奥出雲123号で）。

六日市　東西68間（約136m）
　南北小路巾4間（約8m）
土橋　長さ12間（約24m）
　巾　4尺
大市　南北132間（約264m）

家の軒数は

六日市　16
大市　42.5 ＼ 58.5

でこの他に御役御免屋敷（庄屋などの役職者・寺社関係者・盲人の住居は税を免除されていた）が16あった。この数は両街の本通りのみで、本通りの裏は横田村と呼ばれていた。その軒数は別である。

この当時郡内の町には、三沢・上阿井・亀嵩の3町があり、約20軒宛で合計58軒あった。

この年を遡る120年前の1551（天文20）年には、伊賀多気神社が氏神として再興新建造されているから、花月堂から花渓庵一帯（現田村宅から村上宅にかけての山麓）には、侍屋敷をとりまいて根小屋（山城の麓の城下町をいう）が出現している。

当時はまだ下中村と呼んでいた。

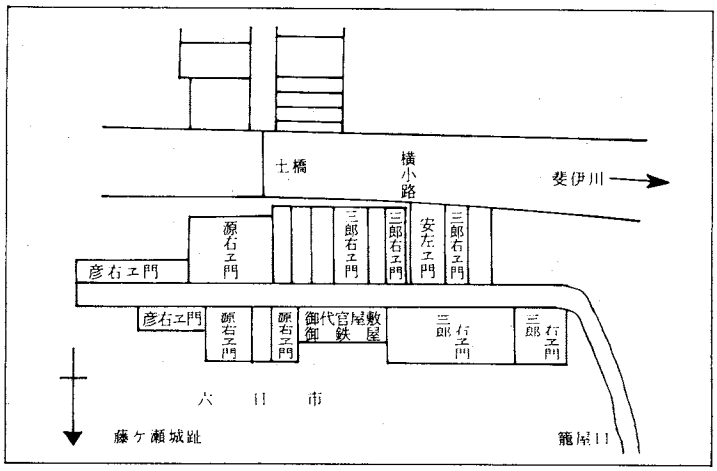
その後に六日市の街並みが出現している。それについては奥出雲123号に詳細を記述。

町づくりの中心

1601（慶長6）年松江藩最初の藩主堀尾吉晴が国内を巡郷した折、六日市の五反田屋を本陣とした。五反田屋はこれを記念し富田城主にあやかり、富田屋と改めた。今の田村である。図面でいうと北側の源右ヱ門宅（左側で、現大里屋方）であった。

堀尾家が断絶すると京極氏が藩主となり、制度も整いはじめ1625（寛永2）には仁多郡の代官は芦田瀬兵ヱである。この年大市で大火があったとの記録がある（この図の50年前にあたる）。

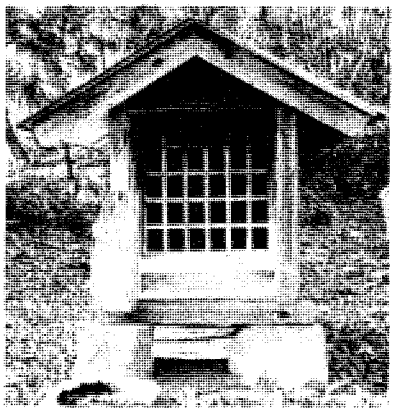
1637（寛永14）年には伊賀多気神社の遷宮が行われているが、代官は芦田瀬兵ヱ、本願は杠又右ヱ門・田村源右ヱ門・田中善



六日市は横田の街の成立の原点　これ以上の変更は町の歴史の破壊につながる

第4番　大呂・代山　大慶庵（堀江令二宅の上）

よも山のにしきうちはへみ仏の　照す誓ひをあふぐ里人



（写真撮影提供者　横田史談会員　佐世川徳雄）

柴栗句会八月

老鶯に口笛をもて応答す　糸原古志
死なず居て今日有難き原爆忌　浅野としお
為すこと無く老いにし吾か秋海棠　岡田踈花
帰省子と置座に座して星語る　小川月舟
臥せし躬やかなかな時雨に涙密む　恩田和美
想い出を日傘に包み折りたたむ　門脇花子
留守に来て盆僧焚きし香の跡　加納信子
山紫陽花咲く陸奥の旅果てぬ　楠房子
佗しさを残し皆去ぬ十七夜　高木白虹
滝水のこだまとなりて丸木橋　中澤美紀子
雨上がり青田へ渡す虹の橋　新出谷一華
泳ぐ子に入道雲の重くあり　峯石美代子

半夏生あとさき　　簸の上短歌会

五葉松の父の形見の盆栽の変らぬ姿に来し方思ふ　永井弥生
甘き香の笹はしっとり手に馴染み粽作りにひと日座りぬ　〃
山岳部に息子きわめし立山を雪ふみしめて夫と今立つ　野村節子
再びは訪ふことなからむ立山にふたりならびてカメラに収まる　〃
戦場はときに理性のうすれるをPKOと言ふも危ふし　常盤はるまさ
憲法をなし崩し解釈する術は昭和維新とふ士官らに見し　〃
五十余年の昔遊びし友は今瑞穂の町に住むと告げにき　景山悦子
笹巻の熱き滴のしたたるをもちて旅館に友を訪ねぬ　〃
夫と植えし造林山に喘ぎ来て谷の真清水笹の葉に汲む　佐藤喜代子
言い過ぎし言葉を裡にくり返し馬鈴薯つよく束子にて洗ふ　〃
苔むして蚯蚓も覗く父祖の墓よろめきながら清めまいらす　岡田時子
来年のことを思ひて子に送る粽余分に入れて荷造る　〃
生活の貧しさゆえに小女らが売られて越へし野麦峠に佇つ　安部夕波
はまゆうの咲ける砂丘去り難く暮れゆく海を君とみてゐし　〃

斐の上川柳九月号

ビールまだ冷えず氷を入れて飲む　横山まこと
牛歩などモー参ったとネリをかみ　児玉哲呂
売店の笑くぼに余分買わされる　高木凡太
一雨が欲しい真夏の雲を見て　安部春恵
暑さ逃げかけ足で来る秋の風　安部正子
久しぶり川柳会に亡夫と出る　松浦久寿子
つまずいて見ねばわからぬ石もある　若槻白馬
この暑さ汗と出費は寝ても出る　渡部ミツコ
涼み台出して話題はバルセロナ　真綿よし子
教え子の語りそのまま四十年　松浦亜以
精農になれず草見て草を取る　藤原のぼる
健康にいいと納豆食べてみる　石原冬明

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　振替口座松江〇一一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

右ヱ門である。杠は樋口・表で中世以来の旧家で実力者である。

すると大市・六日市の実力者は、田村・田中となるが、田中氏については、今もって明らかにできていない。

1648（慶安3）年の藤ケ瀬旧城内の諏訪神社の棟札によると、庄屋は前記の杠又右ヱ門であり、本願は田村（源右ヱ門の子）与三兵ヱと中沢九郎右ヱ門である。

それから19年後の寛文7年の伊賀多気神社の遷宮棟札によると郡代官は龍野九郎右ヱ門・庄屋杠又右ヱ門・本願田中助五郎・田村与三兵ヱである。

1672（寛文12）年の諏訪神社の棟札では、組頭春田七郎兵ヱ、庄屋安部庄三郎、本願は諏訪中沢三郎右ヱ門景貞と田村源右ヱ門吉信である。

すると氏神伊賀多気神社の本願には田村・田中両氏はいずれにも登場、諏訪神社の本願には田村・中沢両氏がいずれも登場している。両社に登場するのは田村氏である。格式・実力ともにあるのは田村氏であり、格式では田中氏が中沢氏の上とみられるが、実力としては中沢氏が上であり、中沢氏は田村氏とともに武家の流れをしめしている。

図面の中で三郎右ヱ門は中沢氏（現沢屋の祖）であって、大市に於ても同名の屋敷があるから、実力をもっていたものとみえる。

諏訪神社は城主三沢氏が出身地信濃国の諏訪神社（源氏の氏神）を勧請したものである。中沢氏の祖は、同じく信濃国の諏訪神社領の領主神中沢氏の一族が、承久の乱の功賞として、大原郡海潮村を領して降り、のち牛尾氏と称した。尼子氏の敗退後牛尾氏の一族は、中沢氏と称して、附近に居住している。その流れが横田へ下三処を経て定住したものである。こゝに諏訪神社の棟札に本願として登場するいわれがある。

代官屋敷

現鉄屋（須山満枝）から昭和電気までの家屋は一棟である。天明4（1784）年まで160余年こゝに代官屋敷があって、仁多郡の行政・徴税の元締の場所であった。代官は3郡くらいを兼務していたから常駐はしていなかったが、郡内の豪農の中から選任された下郡（1人）と与頭（2人のち3人）が出勤して事務を処理していた。六日市の西端の裏に郡窄が1613（慶長18）年に置かれた。（現六日市公民館・元登記所の地）

横田町の高札場（高札とは、法度や控書、犯罪人の罪状などを板札に墨書して掲示）は、かつての田村本宅の入口、吉重橋よりにあたった。

こうして横田町の中心は六日市にあり、経済的にも幕末まではこゝに実力者が居住していた。号を追って点描をこゝろみたい。

（大市から土橋を渡り、大川沿いに東へ進むと岩山につきあたり左折して、六日市の往還（中央通り）に通ずるのと、大川沿いに西へ進んで横小路から六日市の往還に通ずるのとが、大市・六日市の連絡であった。市がたつのは往還の両側であり、牛馬市主として馬の市がたつのは、やはり往還の両側に杭を打って繋ぐということが行われ、社会衛生の思想が発生する明治末期まで、こういう状態であったという。

1722（享保7）年藩の買上制廃止により御鉄屋は廃止したが、以来こゝは鉄屋の名称が残った。

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第210号
（10月号）
1992. 10. 3
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

信長の時代の奥出雲⑦

—信長の尾張統一まで

信長出生前の当地方

1509（永正6）三沢⑩遠江守為忠　藤ケ瀬城に移る。（—石清水八幡宮・京都御所・泉涌寺の3領家の庄園の地頭請代官として

'11（全8）為忠の第2子為幸　尼子経久に従い在京中。

船岡山の合戦に参加。

'14（全11）尼子留守隊が藤ケ瀬城を攻めあぐみ、岩屋寺に火を放って引揚げる。

'17（全14）阿用合戦で経久長男政久討死。馬木の杠氏も。

為忠隠居第1子為国つぎ、三沢城には為幸。

'21～'28（大永年間）尼子大内両氏石見銀山をめぐり度々戦う。やがて抬頭する毛利元就備後で度々対戦。

（三沢氏尼子方で参戦）

'31（享禄4）経久藤ケ瀬城を攻略（豪雨をついて夜の奇襲、為国子為元捕られる。天文5年富田に斬らる）為幸⑫代となるが、横田へは代官。

信長出生（1534天文3年）から

'37（天文5）馬木・杠氏たたらを吹く（出雲で最も実名のわかる早い鉄師）

'40（全9）経久の子晴久、父の戒めをきかず安芸吉田の郡山城に毛利元就を攻める。（岩屋寺院主快円20年にわたる努力で大半を復興す）

'41（全10）為幸討死（子才童子丸4才⑬為清となる）

尼子方敗れて出雲へ帰る。間もなく経久死す。

三沢氏ほか備後の諸氏とともに11氏大内方へ。

'42（全11）大内毛利軍、赤穴（名）を経て富田城を囲む。

'43（全12）出雲国人衆三沢ら10氏尼子方に復帰し、大内軍引揚げる。

この年出雲国人衆の雄三沢氏と結んで、京都方を味方にすべく、尼子氏横田へ。

'44（全13）備後甲山城主（庄原）山内直通の娘、馬木の馬来氏の後妻に入る。

'45（全14）横田庄には総代官森脇山城守家貞（中村代官）をはじめ竹崎・大呂・蔵屋・原口・下横田に各代官を尼子氏送りこむ。

（文書の上では明瞭に20永年17に中村市場—エヘン橋北側—がある。起源は13世紀半ばまでさかのぼるか）

織田家は尾張他越前・遠江の守護斯波（しば）氏（3管領の1人）の尾張の守護氏であった。信秀の2男に信長は生まれる。乳母の乳首をかみ破り、何人もの乳母が交替したという。13才で元服翌天文16年、三河の今川義元側の吉良大浜を攻め、帰途付近に放火し、野陣をかけて帰った。

この年には隣国美濃の斉藤道三との対立が激化したが、翌年秋和を結び、道三の娘濃姫が10才で信長の妻として迎えられた。

典型的な政略結婚であった。

信長の日常の遊びはすべて軍事的な意味での訓練が主であった。信長文書の研究によれば、この年すでに信長名で、尾張熱田八カ村に制札を出している。

政治への関心のはしりである。

'51（天文20）年父信秀は流行病にかかって没した。『信長公記』には、葬儀での信長の素行が記されている。信長らしい父への愛情表現であり、警戒をかわす演出であったと思われるが、これがうつけものといわれるわけでもあった。こうして庶兄2人を押しのけて家督をついだ。

以来尾張の大うつけ振りは各地の反乱分子の色わけを濃くした。それを見きわめて自己の権力の足がためへの行動をはじめた。

こうした異常振りをたしかめたいと、舅の斉藤道三は信長との初の会見を申入れた。信長は意表をついて伴800人をつれ、いち早く鉄砲を戦力にとり入れた鉄砲500挺をはじめ朱槍500本などをもってあらわれた。この'53（天文22）年のころは信長の書状が急激に増加して来て

信長清洲城に入る

'56（弘治2）尼子晴久は石見銀山をめぐって毛利元就と石見で戦い敗れて帰る。

'59（永禄2）晴久銀山を攻撃。毛利方新原崩れにより敗軍し芸州へ。晴久銀山山吹城には本庄常光を入れる。

元就、本庄常光を懐柔し味方とする。

'60（全3）毛利軍出雲へ入る。赤穴にて三沢、三刀屋、赤穴の諸氏、元就に降旗を申し出る。（郡内横田庄ほかから尼子勢力一掃される）

'61（全4）本庄常光父子毛利軍に討たれる。

（高田の鍋坂城主で三沢の家臣布広左京亮が能野・手尾・白鹿の諸氏と尼子方へ服す）

'62（全5）晴久、石見銀山山吹城を押さえ、守備を置いて帰る。

間もなく元就山吹城を奪う。その勢で出雲へ

信長の時代の奥出雲⑦・横田三十三番札所めぐり④・中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる②・俳句・短歌・川柳

入り洗合（松江の西）に陣す。（12月晴久死し義久継ぐ）

'63（全6）元就白鹿城を降す。元就長子隆元死す。

'64（全7）元就富田城を攻めるも落ちず、洗合に帰陣す

'65（全8）再び富田城を攻める。城中勢気全く失う。

'66（全9）富田城兵留るもの300人食糧尽き、義久弟2人をつれて城を出元就に降る。天野隆重に富田を守らせ吉田へ帰る。元就10カ国の大守に。

四周緊張の状態はますます強くなった。'55（天文24）信長は清洲城を攻め織田信友を殺して入城した。ついで織田信次が逐電し、信友攻略の最大の功労者叔父の織田信光が不審の死をとげる。こうして一族の討伐が進んだ。

'55（弘治元）、清洲城攻略の論功行賞の知行宛行状があらわれる。

信長の領国経営の積極性のあらわれである。木下藤吉郎（秀吉）が家臣となったのもこの頃。

尾張の政情不安に加え、隣国道三の美濃も混乱した。父子の争いは道三の討死となった。この年父信秀の代からの宿老林通勝・柴田勝家らに助けられて弟信行が背いた。信長はこれを囲み勝利したが、'57（弘治3）再び反旗をひるがえした。遠ざけられていた柴田勝家の告げで信長は、信行を清洲城に招き殺した。統一のため弟の犠牲もやむなしと判断したのである。

'58（永禄元）岩倉城による織田の嫡流家の織田信賢が、斉藤義竜（道三の長子）とはかり信長を攻撃したのでこれを攻めた。こうして尾張の国大半を統一した信長は、翌2年2月2日上洛して将軍足利義輝に謁見した。

このあと越後の長尾景虎（上杉謙信）も上洛し謁見している。いずれも将軍に報告し承認を得て、実質的支配に進むことをねらったものである。

帰るや信長は岩倉城を攻め破却したので、尾張は完全に統一された。

このあと同じく三河の今川義元の上洛行動を迎えたが、これは信長にとっては幸であり、義元にとっては大きな誤算だった。

'66（永禄3）、義元の先遣部隊は西進し、織田方の2砦を陥落して勝に酔いしれた。敗報を聞いて寝た信長は夜半突如として出陣を決意した。桶狭間の狭い窪地で昼食をとっていた今川軍が、2時頃のにわかの豪雨に見通しを失っている時、2,000の兵をつれて間道を通った信長は、突如ここに突入した。25000の義元もこゝでは300ほどの旗本だけ、奇襲に義元は服部忠治の一番槍に続いて、毛利良勝によって首をはねられた。義元方は総崩れ、松平元康（徳川家康）も岡崎城へもどり、今川から独立した。

'61（永禄4）美濃に兵を出して押さえ、翌5年正月には清洲城で信長と家康と会盟した。この年も美濃に兵を進め、暮には岩倉城に信賢を攻略し、完全な尾張統一を完成した。

信長が父の跡を継いでからこの年までが10年であった。尼子経久が出雲を一応手中におさめるのには、1486（明応18）年富田城に入り1531（享禄4）年**横田藤ケ瀬城**を攻めて出雲の諸将をなびかせるまでに45年かゝっている。（この間幕府から正式に出雲守護を京極氏から引継いだのは1524（大永4）年である。尾張の国人衆（三沢三刀屋氏のごとき）のことは調べていないが、地形的にみると、平原部での割拠である。これにひきかえ、出雲は山間部が多い。こゝに盤踞（ばんきょ）した国人衆は、地形を利して勢力を貯えながらに自由であったかも知れない。尾張の平原部は台風一過被害甚大という状況もあったであろうか。

'63（永禄6）年3月、信長はその女を家康の嫡子信康に嫁することを約束した。こうして同盟が結ばれる。これから信長は西へ美濃・伊勢へと進出、家康は東の遠江、駿河へと進出することになる。そして'80（天正10）年の本能寺の変で信長の突然の死まで、両氏の同盟は崩れることなく続いた。

（尼子氏にはこのような盟友がなかった点も、歴史を見るにも大切な点であろう。）

この年の春、信長は小秋山へ築城して城を移し、美濃攻略の拠点とした。

'64（永禄7）年美濃を攻めている。一方孫子の兵法にいう、遠交近攻策をとり、美濃の西の近江の戦国大名浅井長政と同盟を結び、妹お市を嫁がせて同盟が成立した。

明智光秀が信長に仕えたのはこのころであった。

横田三十三番札所めぐり④

第5番　大呂・山奥　高隆庵

奥の山のぼりたどれば丸小田の空吹く風に罪は消えなん

（藤原匡治方の上）



写真提供
横田史談会　佐世川徳雄

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる②

古代の朝鮮仏教と日本仏教（上）

『日本書紀』の読み方が浅かった

日本仏教史を専攻し、古代朝鮮仏教と日本仏教研究の第一人者田村円澄の考えを紹介する。同じ『日本書紀』でも、古代朝鮮の研究から、在来の読み方が浅薄であったことが知られる。

文化センターであった。

先進文化としての仏教

仏教といえば、家に仏壇があり、寺ではわけのわからぬお経、葬式・法事と関係のある宗教だとしか思っていない。だがこういう状態は近世（江戸時代）以降のことである。こゝではこういう仏教にならない前を考える。

仏教伝来は6世紀、日本でも東アジア世界でも、仏教は時代の先端を行く文化で、当時の日本は掘っ立て小屋住い。そこへ三重・五重の屋根をもつ塔が建ち、上には九輪がそびえ、金堂は朱塗りの丸柱。大きい屋根には趣向をこらした瓦があり、大きい鴟尾が棟にのる。堂内には異国風の仏像・彫刻・絵画がある。こうした先進国からの総合的な文化に人々は驚いたに違いない。当時の寺院は先端を行く思想・学問そして芸術・生活までが手本となったこと、戦後のアメリカ文化の吸収ぶりを思い出すと、当日での仏教の影響は測りしれないものがある。

指導者渡来僧の影響

奈良時代（710～）の前の飛鳥・白鳳時代（仏教伝来・聖徳太子・蘇我氏滅亡・壬申の乱・大宝律令の時代）の仏教界の指導者は、朝鮮半島から来た人か、またその渡来系出身者が大部である。最も多いのは百済人。今の韓国の西半分が百済で、東半分は新羅、38度線から北そして旧満州の南までが高句麗である。この百済の僧が主として、次いで高句麗の僧が指導者であった。

新羅とはわけがあって僧はあまり来ていない。

寺の中で僧と弟子の対話は指導者の国の言葉―韓・中国語―であって、これに習熟しないと仏典もわからないし僧にはなれない。しかもあとで述べるように、渡来僧たちは仏教のみならず、政治の制度・法律にもくわしく、学問も深かったのである。

幕末に於ける蘭学（オランダ）、明治時代の英国・独乙の政治・

仏教渡来の事情

『日本書紀』を忠実に読むと6世紀の前半には大和の蘇我・物部・大伴・葛城の諸豪族たちは、多数の部下を率いて半島に行っている。なかにはそこの女姓と結婚して子供もできている。紀ではそれを韓婦・韓子と記している。その日本人を父とする韓子が成人して、百済の官人となり、日本と百済の外交折衝に当っているものもある。

こうして仏教伝来よりも以前に、韓国語や中国語を話す日本人は、学問や仏教を半島でよく知っていたのである。

538年百済の聖王は北の高句麗と東の新羅の圧力に押され国家の非常時に直面した。その時倭王（まだ日本とも天皇とも言わない時代）欽明に、軍事援助を求め、見返りに仏教を伝えたのである。（伝来の年は『元興寺縁起』の説で）

仏教の教えを一般民衆に伝える僧が来たのではなく、仏像と

柴栗句会十月号

立秋や昨日と違ふ風の彩　浅野としお
紫苑愛し母なりしかな紫苑供う　岡田踩花
寝たきりと噂に聞きし敬老日　小川月舟
萱の花休耕田への径沮む　恩田和美
降る雨に秋の音きく夕べかな　門脇花子
宇宙より学ぶ科学や月仲秋　楠房子
きき飽きし過疎にも過疎の花すすき　高木白虹
十六夜や人それぞれの今宵かな　中沢美紀子
秋風や読書のページめくりけり　新出谷一華
秋雲も映しておりぬ道路鏡　渡部夕峰

斐の上川柳十月号

部屋の隅ゴム風船が夏語り　松浦亜以
缶ビール今日も墓石においてあり　松浦久寿子
同席の老婦の話は聞き役に　高木凡太
盆終り驚く空のビールビン　若槻白馬
やっとこさ寝た子に電話のベルが鳴る　藤原千代子
長生きをしてねと言われ老いを知る　松田牛歩
早起きし朝顔と会う夏の朝　安部春恵
ウォーキング妻と歩調を揃えてみ　児玉哲呂
物忘れしたくはないが年のせい　中林もりえ
飛脚便全国股に金配り　藤原のぼる
独り居て誰に遠慮もない昼寝　安部正子
孫帰り我が家のペース狂わせる　渡部ミツコ
バルセロナ手に汗野球で夏がゆく　真綿よし子
よく喋るだが真実の無い話　横山まこと
その人が居るので話カーブさせ　石原冬明

前号訂正　2頁2段23行749・

若干の経典が、百済王から宮廷に贈られたのである。宣教師ザビエルがやがてフロイスが日本に来て、庶民に布教をはじめたキリスト教の伝来とは根本的に違う。これも古代仏教理解の上で重要な点である。

仏教受容の対立と天皇

受容の対立といえば、蘇我・物部両氏のことである。両氏の対立は仏教伝来以前からあった。

物部氏（大連―天皇に職掌を氏の名にして従属する大豪族の連のうち、最も天皇家に近い連）は、天皇家の軍事力の中核で、しばしば半島に行っているから、仏教をよく知っているのに、受容に反対したのは別の理由がある。

蘇我氏（大臣―本拠地をもちその地名を氏とし独立性がある大豪族の臣のうち、最上位）は渡来人の流れで、蘇我稲目の父は高麗、その父は韓子という。韓婦の子を韓子というが、（一般的に）、こゝでは名前としてつけているから、極めて血のつながりは韓国と強った。

天皇家と正式に結婚ができたのは、独立性のある臣姓の豪族で、従属する家柄の連姓豪族はそれができなかった。

仏教受容の判断も、蘇我氏は天皇家から相対的に独立していたから、受容という判断ができたが、連姓の物部氏は天皇家に右ならえをせざるをえなかった。

つまり天皇家は受容に必ずしも賛成ではなかったのである。

これが重要である。天皇の住居は同時に宗教的な意味があったと考えられる。各豪族それぞれ自己の守護神を祭っていたが、大王＝天皇家はそれとは違う神―太陽か（天照大神はずっとのち）―を祭っていた。

その司祭者である大王＝天皇が亡くなると、その死のけがれで、従属する家柄の連姓豪族は

清涼集　簸の上短歌会

池の辺のみそ萩を巡りて蝶ふたつ父来ますらむ母来ますらむ　永井弥生

アルバイトに初出勤の孫送る緋扇の花咲く門辺に立ちて　野村節子

涙して砂をつめゐる球児らに甲子園の陽よ労はりて照れ　佐藤喜代子

寄合ひの笑ひとどかぬ田のはづれ蜻蛉群れとぶ音のなき空間　小早川恵子

その奥に闇のある星空見上げつつ臥す妻看取るは輪廻にかあらむ　常盤はるまさ

若き日に愛の想ひを告げし女性ふるさと遠き街に老い住む　安部夕波

拒否から受容への天皇家

蘇我氏などの諸豪族には、本拠地（本貫地）があって、数世紀も住みついているが、天皇家にはそれがない。大王時代から代々の大王そして天皇は、一つの宮に2代以上住んだことがなく、代替りごとに移っている。

天皇が宗教的な側面をもっておると、仏教という新らしい宗教に拒否反応を示すのは当然である。受容に際し天皇が一番恐れたのは、神のたたりであった。

日本の神には姿はないが、たたりは非常に恐ろしいとされていたし、今日まで残っている。天皇の地位なりその権威は、神と結びつけて意義があった時代だから、その神と外国の神（仏）を並べて祭ることは、非常な危険を冒すことであった。天皇個人の問題より、天皇の地位・権威に直接かゝわる問題で、仏教に対し傍観者であった。その従属者物部氏はそれに従った。

仏教伝来から1世紀100年たって、舒明の639年、宮廷にはじめて寺を建て仏像を招き入れた。それまで欽明・敏達・用明・崇峻はもとより、次の仏教に深く帰依した推古も、宮廷に仏像を入れたことはない。

639年に32年間の唐留学から帰ったばかりの僧・恵隠が、宮廷で経典の講義をしている。多くの豪族は仏教をうけ入れたのに、100年の間天皇家は仏教を拒否した。信仰の自由はなく、天皇の地位は甚だ宗教的であった。

従って、はじめて寺が建ったのは、639年ではなく、反対派の物部氏が倒れた直後、蘇我氏が建てたのが法興寺いまの飛鳥寺が宮に及ぶとされ、代替りごとに、けがれなき宮に遷った。その時連姓豪族は、それに従って土地を移している。

であって、仏教伝来より半世紀後の596年である。

この時代の仏教受容の主体は豪族で、これらが寺を建てた。この時代の仏教を「氏族仏教」といゝ、この豪族たちの建てた寺を「私寺」という。

豪族たちが仏教を受容したのは現当二世の利益を得ようとしたからで、現世では一族が繁栄し、「当」は来世のことで、亡くなった父母を含めて、来世の安穏を祈ったのである。

日本の神々もそれと同じで、これに加えて五穀豊穣が加っていたので、素直にうけ入れられた。

法隆寺が焼失した670年以後は白鳳時代（それまでは飛鳥時代）であるが、受容の主体は天皇で、その寺は「官寺」で、仏教の力で日本を擁護する「国家仏教」へと進む。お経も護国思想の強い教典で、天武・持統・文武の時代である。日本の律令体制の完成期、その主は天皇で、この体制を擁護する形で仏教が受け入れられてゆく。つぎは仏僧の役割と大陸の問題へ。

（文責　横田史談会　高橋）

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第211号
（11月号）
1992. 11. 7
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団ⓒ

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる③

古代の朝鮮仏教と日本仏教（中）

―弥勒半跏思惟像と聖徳太子

天皇天智の弟皇子大海人（のちの天皇天武）が、天智の皇子大友（天皇弘文）を倒した壬申の乱（672）後の、天武、持統の時代が、わが国の律令体制が完成し国家が整ってゆく。その主は天皇でその体制を宗教的に擁護するような形でとり入れられてゆく。これまでに受容した仏教は130年間、「氏族仏教」（飛鳥仏教）として、その地盤を築いていったが、白鳳時代の仏教は新しく「国家仏教」として発展してゆく。

弥勒菩薩信仰

643（皇極2）年に聖徳太子の長子山背大兄王一族23人が、蘇我入鹿によって滅ぼされる。一族が最期を迎えたのは、王家の寺である法隆寺であった。

この寺は670年に焼失した。それが再建した時代は白鳳仏教＝国家仏教の段階（7世紀後半）である。私寺法隆寺が焼けて、再興すべき氏族も滅亡しているのに、なぜこんどは官寺として再建されたか。再建にまつわる問題は諸説あるが、これに対し田村説は、聖徳太子崇拝が太子信仰となったという。太子に対する崇拝は、半跏思惟像であろうという。奈良斑鳩法隆寺の近くの中宮寺の本尊や、京都の太秦の広隆寺の半跏像は著名である。

この像は若き日の釈迦である。

出家前の釈迦つまり悉達太子が、生・老・病・死という人生の問題に苦悶している姿をあらわしたものという。中国では5世紀に早くも大同の雲崗の石窟に出現している。

本来は太子像で、6世紀後半の中国では弥勒像に変ってゆく。

弥勒は第二の釈迦であって、いまは天界の兜率天に住んでいて、釈迦の救いに漏れた人たちを救うために、待機しているのが弥勒菩薩である。

釈迦没後56億6,000万年という、気の遠くなるようなを経て、これが人間世界に下りてきて、第二の釈迦として人々を救うという。弥勒に対する信仰が、この半跏思惟像と結合して、それが仏教の伝来とともに朝鮮半島に入って、高句麗・百済を経て新羅に入って来た。とくに新羅では、この半跏思惟像が多くの信仰を集めた。

新羅には、花郎（ハラン）という青年貴族集団の首領があった。花郎集団は、新羅の青年貴族が集まって、武芸を練ったり、歌を詠んだり、あるいは一しょに酒を飲むというような、若者組織であった。

663（天智2）年百済の白村江で、日本は新羅、唐の連合軍と一戦を交えた。その時の新羅の戦力の中核はこの花郎集団で、その時の中心人物の花郎は金庾信で、当時弥勒の生れかわりだといわれていた。花郎集団の青年貴族たちは、弥勒信仰によって結ばれた同信の集団でもあった。

一般に仏像は人間とどこか違う感じがして、異国的で人間ばなれがしているが、この半跏思惟像は、若くて親しみ易くて、人間的である。この若く美しい半跏思惟像が、つまり弥勒菩薩の生れ代わりが、花郎であり、新羅の青年貴族の心をとらえたのである。

この信仰が、仏教伝来の538年に入って来ている。この時百済王は天皇欽明に「太子像」を贈ったと明記している。そしてその後も百済や新羅から、この像は送られて来ている。

この時ともに伝えられた悉達太子の一代記には、半跏思惟像が悉達太子像とあるから、日本人はこれは釈迦の前身であるということを知っている。そこで太子が聖徳太子とつながり、若い釈迦悉達太子と重なったと思われる。これが重要である。

聖徳太子信仰



広隆寺弥勒半跏思惟像

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる③・横田三十三番札所めぐり⑤・信長の時代の奥出雲⑧・俳句・短歌・川柳

聖徳太子は622（推古36）年2月に没するが、その7月には新羅の眞平王はこれを悼み、日本に使者を派遣し、仏像・金塔・舎利（釈迦の骨）を送った。両国の親密さをしめすものである（詳細は略）。この時の仏像は太秦の広隆寺に、その他のものは難波の四天王寺に納められた。

写真左の広隆寺の宝冠弥勒はこの時のものであるという。右はこれより少し古い6世紀後半の新羅時の金銅弥勒半跏思惟像である。筆者は1976年京都での韓国美術五千年展で、両者ならべてあるのを見た。釘づけになっていろいろの角度から眺めた。今図録を出して、別の仏像写真



集の広隆寺のものと比べてみた。

広隆寺のものは木造である。日本には珍らしい赤松を素材としてつくられているので、朝鮮半島渡来説を裏付ける有力な根拠ともなっているという。

聖徳太子建立の寺としては、法隆寺・四天王寺・中宮寺・橘寺・広隆寺・法起寺・葛木寺の7寺があったといわれる。中宮寺の本尊も美しい弥勒半跏思惟像である。多くのこの像の中では最も女性的ともいわれる。筆者もひかれ幾度となく訪れた。その他の法隆寺をのぞく5寺は、すべて半跏思惟像であったと伝える。太子信仰の拠点であった寺である。

弥勒信仰は新羅で青年貴族の間に根をおろした。百済・高句麗を滅ぼし、朝鮮半島統一に力を尽した金庾信はその指導者、弥勒の生れ代りとして信仰された。こうして成立した新羅の国家仏教は日本に伝えられると、聖徳太子を思慕する人びとにとって、太子は弥勒の生れかわりと信仰されるようになった。釈迦の太子とともに王権の出身「太子」であった。

新羅の民族的エネルギーを結集したこの新羅仏教は、大国隋に使を送った聖徳太子を追想し、ここに日本仏教の生誕とその権威の源泉を求めたのである。

こうして氏族仏教は、律令国家の成立にあわせて、国家仏教へと変っていったのである。

やがて諸国に国分寺、国分尼寺が建立され、その頂点にたつ奈良の東大寺が建立されて、国家仏教が盛時を迎える。

当時の仏教界

6世紀の中ごろ、仏教が百済から、日本の飛鳥地方（奈良盆地南部）に伝えられてから、蘇我氏を中心に渡来系有力氏族の支援で崇仏・造寺が進められた。

7世紀前半には畿内を中心に40近くの寺院が建った。その先頭は蘇我馬子の建立による飛鳥の法興寺（現飛鳥寺）であった。

これらの寺院に住した僧尼は、朝鮮半島や中国本土からの渡来僧ないし渡来系氏族出身僧が大部分であった。法興寺に迎えられたのは高句麗の僧慧慈、ついで百済の僧慧聡であった。大化改新のブレーンとして活躍した僧晃や請安は、中国系渡来人の漢氏の出身であった。このように飛鳥・白鳳時代の僧で、史上に名を伝える者の99名までは、朝鮮や中国本土からの渡来僧、ないし渡来系氏族出身僧で占められ、かれらの努力で日本に仏教は根を下した。さらに奈良時代の行基・智定・良多・慈訓や、最澄（仏教大師）なども渡来系氏族の出身であった。

このようにして、仏教を伴って入った学問は、次第にわが国の思想に加えられていった。国家体制確立の支えとなる神道もこれによって（詳細は略）内容をかえ、神話もまとまっていった。これが律令体制成立の時代である。

やがて日本書紀が編集されると、こうした学者・僧によって、中国の史書を範として執筆されることになった。世界のうちで最も新しくしかもよくまとめられた日本神話は、律令国家の権威づけのため歴史につなげて完成されたのである。

（本紙79・82号の高田寺根源録考の前半部分は後世の創作であるとの意見は本文ほかの説にもとづくものである）

（横田史談会　高橋一郎）

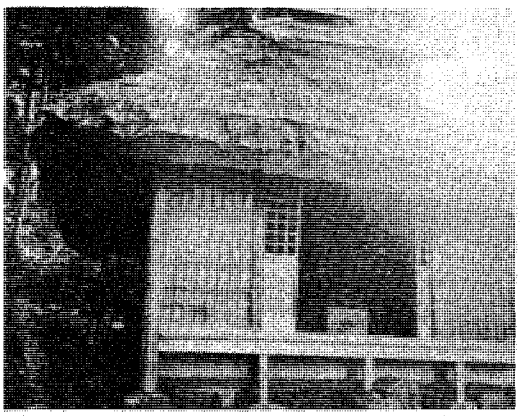
横田三十三番札所めぐり⑤

第5番　大呂・中丁

大秀庵

（畑　茂方　横）

大空のひいづる影をたのみつつ参る心は菩提なるらん



写真提供　横田史談会　佐世川徳雄

信長の時代の奥出雲⑧

—信長の中国地方とのかかわり

尼子氏再興第一戦

1566（永禄9） 降伏して富田城を、明け渡した尼子三兄弟（義久・偏久・秀久）は、両川（一男吉川元春・三男小早川隆景）の主張を退けて死を免じた元就によって、安芸に護送された。かわって富田城に入ったのは、毛利の将吉川広家（妻は三沢為虎の妹）で、これより雲石は毛利氏の領内に入り、35年の支配が続いた。この年数は尼子経久が出雲守護となって尼子氏が去るまでの期間より長い。発掘によれば富田城の改修はこの間にかなり行われているという。

'67（全10） 信長は美濃の斉藤氏を滅ぼし、10年目ようやく美濃に入り、稲葉山城に入り、岐阜と改名し、天下への夢をつなぐことになった。足利義昭を奉じて入洛し、義昭は参内し翌11年、征夷大将軍に任ぜられた。信長は分国中の関所を撤廃して、広域交流の道を開いた。（既述）

'69（全12） 信長は義昭からの副将軍任命を蹴って、伊勢平定へ兵を進め関所を撤去した。この年ルイス・フロイスが入京し、信長より念願していた京都での居住と、布教の許可を得た。

京都に上っていた尼子窄人、山中鹿介らは、東福寺にいた尼子新宮党の遺子を還俗させて、尼子勝久と名乗らせ、6月島根半島より新（真）山に入り、間もなく富田城を攻撃したが、奪回出来なかった。明けての

'70（元亀元） 2月迫り来る輝元を将とする毛利軍を、布部山に迎え撃ったが大敗し、

'71（全2） になると、末次城・真山城も失い、尼子主従は京都に走り、再興の第一戦は実を結ばなかった。

6月毛利元就は居城吉田城で、75才を一期として没した。

'72（全3） 12月甲斐の武田信玄は、徳川家康を三方原に撃破し浜杉城に迫る。

'73（元亀4・天正元） 武田信玄は陣中で没した。将軍義昭と信長との仲はうまくゆかなかったが、和約によって小康状態となった。

6月になると義昭は誓約を破り、ふたたび兵を挙げるため、毛利輝元に兵糧米を求めてきた。

町幕府は滅亡した。信長は年号を天正と改元した。

実は永禄から元亀に改元される時、信長は天正を望んだが、これを押さえて義昭が元亀を推して思った通りにしていたことがあった。

夏・猫・槿　簸の上短歌会

欲得も未練も果てて終の日を蚕の如く透きてありなむ　永井弥生

七十歳のわれに卒寿の母ありて今日も雪袴を繕ひくれぬ　〃

種を蒔きし畠の土を掘り乱し隣家の猫の用を足すなり　佐藤喜代子

愛らしき白猫なれど種蒔きし畠ほじくる時は憎らし　〃

オートミールの蒸しパンのみの新婚の生活がわれの戦後史なりき　常盤はるまさ

隠しゐる食べもの発き住民の哀願ふりきりし兵たりし夏　〃

息子とまがふ声して話すが聞え来るアルバイト終へて孫の帰り来　野村節子

赤蜻蛉背に止まらせて老犬は槿の花の下に眠れる　〃

夏去りし海辺の丘に少年は今日も来りてトランペット吹く　安部夕波

夏終りし浜辺の民宿は閉されて潮騒のひびきは秋を奏でる　〃

'74（天正2） 三沢為清は隠居し子為虎に譲り、亀嵩に城を築きはじめる。

京都に入った尼子窄人らは、戦国の舞台が未完の天下人織田信長の意志によって、回転の速度を早めようとしているとみた鹿介らは、信長の援助を得て因幡国に進出し、鳥取城を奪って再興第二戦を演じた。このころ三沢為虎、三刀屋氏らは、毛利氏に誓紙を出してその旗下にあった。

'75（全3） 因幡の鬼城に拠った尼子勝久・山中鹿介らは、毛利勢の小早川隆景・吉川元春の攻略を受け、伯耆・出雲奪回の企回は、もろくも崩れまた京都へ舞いもどった。

'76（全4） 2月信長は安土城に移った。

6月義昭は上杉献謙信に書を送り、毛利輝元とともに信長を討つよう命じた。

尼子氏再興第二戦

7月宇治の槙島城に拠って挙兵しようとしたが、逆に攻められ逃れて、堺から船で毛利の領内に至り、毛利輝元・小早川隆景に援助を求めた。

将軍の職は解任されていなかったが、槙島城退去の時点で、室

尼子氏再興第三戦

'77（全5） 7月安土城においては、千利休を茶頭として茶屋びらきが行われた。

尼子氏再興の第三回戦の舞台は山陽に移り、播州上月城となった。ここはかねてから毛利氏の支域であったが、12月秀吉がこれを落とし、尼子勝久、鹿介をこ

柴栗句会十一月号

金木犀吾より妻に強く匂ふ　糸原古志
瞑想の牡牛秋日を反芻す　浅野としお
草の実も払わでどっかとお茶の座へ　岡田蹊花
大斐伊をゆったり流す秋陽かな　小川月舟
庭掃かれ今日より出雲神在月　恩田和美
風鈴と箱にしるして音納む　門脇花子
切葱の目に沁む朝や鳥渡る　加納信子
秋霖に憂う農夫の日焼け皺　楠　房子
鯊釣って母も少女となりはしゃぐ　高木白虹
すれ違う人もおぼろに短か日や　中澤美紀子
蟷螂の鎌その儘に枯れて果つ　新出谷一華
久方に芒の庭の風うまし　錦織富江
我病みて夕顔の白尚白し　峯石美代子
両の掌の恵みの温み今年米　渡部夕峰

斐の上川柳十一月号

金丸さん反省猿を贈ろうか　松田牛歩
一円貨何も買えないだが必要　横山まこと
哲学や倫理はどこぞ金まみれ　松浦亜以
仕事して自由のきかぬ手をさすり　安部春恵
白髪抜くうちはまだいい私など　児玉哲呂
稲架のこと気にして風の音を聞く　藤原千代子
追悼式亡夫が私を見ています　安部正子
目の裏に生きる亡母に励まされ　松浦久寿子
昼寝して秋の夜長をもて余す　若槻白馬
群集でおりなす秋の農作業　真綿よし子
三才児知恵のすぐれに胸を打つ　渡部ミツコ

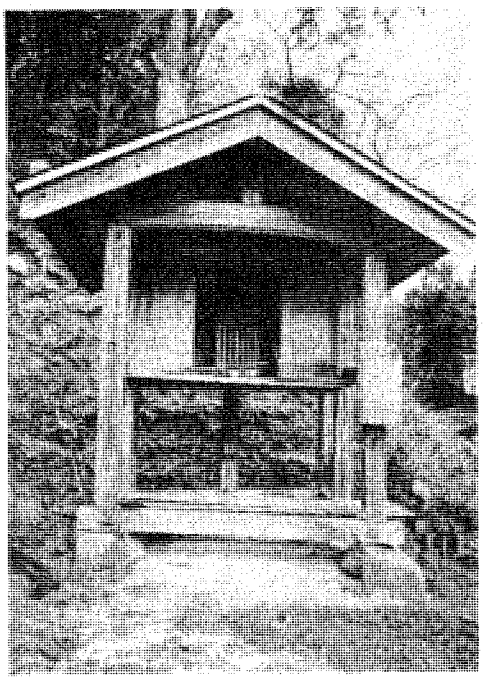
こに入れた。
この年三沢為清は亀嵩域へ移った。

78（仝　6）信長が当面の敵としていた上杉謙信が没した。
間もなく信長の去陣、中国総師羽柴秀吉と、毛利の総師輝元を補佐する毛利の両川との対決へと戦局は進んだ。
秀吉軍の最前戦として上月城に籠もった勝久、鹿介らは、4月中旬毛利3万の大軍に包囲された。三沢為清、為虎親子は毛利方で戦線に加わっていた。
上月城の戦いは、7月3日尼子勝久、氏久らの切腹で5日に開城し、再興第三戦は終った。それは出雲尼子氏の完全な滅亡を意味した。尼子牢人らは主家断絶ののち諸家に仕えた。
鹿介は降人となって西へ送られ、儚中松山城のふもと、高望川（甲部川）と成羽川の合流点の合の渡しで、輝元の家臣によって暗殺された。7月17日山中は川中でとどめを刺された。年34才（39才とも）。

第7番　大呂・小国
海運山　妙厳寺
御仏の弘誓の深さ霧の海
神も御船をはこびけんかも



第8番　竹崎・樅の木　秀月堂
秋の月影を頼みに旅ころも
みのきることもいひてこそ行く
（長沢荘富方裏）



会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第２１２号
（１２月号）
1992．11．5
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団ⓒ

信長の時代の奥出雲⑨

－信長にとっての宗教と茶道

安土宗論

1579（天正7）正月 信長は堺の豪商津田宗及を安土城に案内し、間もなく上洛、二条城に入った。西に兵を進めていた秀吉の前に備前の宇喜田直家が降り、伯耆の南条元続は秀吉に通じ、毛利輝元に叛いた。

5月中旬のある日、関東の浄土僧霊誉玉念が安土城下で法談をしたところが、法華宗徒の建部紹智らがその説法に対して議論をしかけてきた。これに霊誉は若輩でなくしかるべき法華僧ならばと返答をした。そこで京都から法華宗の長僧たちが安土に下ってきたので、騒ぎが大きくなり、信長は家臣を遣わして和解させようとしたが、法華宗側では調停に応せず、遂に宗論ということになった。

5月27日安土の浄土宗の浄厳院で、判者として南禅寺の景秀鉄叟ほか一人が信長によって指名され、信長の家臣のきびしい警固の下で行われた。

宗論がいくつか行われたが、最後に玉念（浄土宗）が、安土の西光寺の貞安（法華宗）に、「妙」という字の意味について問うたが、それに答えることができなかった。（ルイス・フロイス「日本史」）結局、日蓮は打擲（ちょうちゃく）（棒でなぐられ）され袈裟をはぎとられ、法華宗は以後、他宗を誹謗しないという一札がとられた。

当地大馬木の杠日記の中には当時すでにこのことを記録している。法華宗に全郷折伏による改宗が行われた馬木郷にとっては驚天動地の出来事であったようである。

このことは突発的な事件とみえるが、信長による法華宗弾圧としてしくまれたものという見方がある。

かっての各地の一向宗一揆の平定、石山本願寺との戦い（実はこゝに兵糧を送りこもうとする毛利軍との戦いであった）などの延長のものという。

'80（全8） 信長は大和の諸城の破却を指示し、ついに郡山城だけを残して破却された。そして大和一国の検地を行い、着々と地盤固めをしていった。

中国地方を支配する毛利氏にとってこうした動きによって起る、諸将の向背には極めて敏感となり、昨年に続いて、この年も**三沢為虎**は近隣の諸将とともに、誓紙を出す状態であった。

安土セミナリオの建設許可

'81（全9） 2月、イエズス会の巡察使ヴァリニャーノ、オルガンチノ、ルイス・フロイスが信長を正式に訪問し、デロードの椅子、砂時計、眼鏡などを贈り、長時間観談した。

イエズス会の教育機関であるセミナリオの建設許可が有馬に続いて安土にも出された。聖職志願者の予備教育を行うほか、音楽・工芸なども教えた。その後山口・大村・長崎にも設置されていった。

2日後には皇居横で馬揃えが行われ、天皇が全廷臣をともなって見まもる中、五畿内隣国の大名をすべて集めたこの馬揃えは、信長一世一代の晴れ姿であった。家臣団統制の完成と、その威力を内外に印象づけるための、信長による一大威示行動であったのである。

2か月後、ヴァリニャーノが、信長領内の巡視と布教の許可を求めたところ、信長は心やすくそれを許可している。さらに、ヴァリニャーノが帰国するといった時には、天皇の要求にも無視し続けた「安土を描かせた屏風」を与えたほどあった。

秋には信長は鷹狩りの帰り、セミナリオに立ち寄り、バテレンからの願いをいれて、さらに沼を埋めたてて敷地を広くしている。

10月半ば、秀吉は因幡の鳥取城主吉川経家を、兵糧攻めによって降伏させた。

信長の中国進出

82（全10） 正月、吉川元春は広瀬富田城に入った。

3月信長は出陣、武田勝頼を目指した。一族からも見離されていた勝頼は、さらに近侍の謀反にあい、天目山麓で妻・子とともに自刃し、名族武田氏も滅亡してしまった。信長は勝頼の首を実検し、飯田・飯島から上諏訪へと、戦のための進軍ではなく、戦跡旅行とよぶにふさわしい旅をしたことになった。

3月、信長は秀吉に大兵を率いて中国の大守毛利氏征伐に向わせ、一方四国討伐にも向わせた。

当時の信長の領国あるいは支配下にある国は、畿内・東海道・信濃・北陸・関東の一部と、中国地方の因幡・備中以東の30カ国に及んでいた。

秀吉は備中に入ると、毛利氏の前進基地備中高松城に攻撃目標を置き、周辺の諸城から攻略し、高松城を大軍によって包囲

信長の時代の奥出雲⑨・古代朝鮮仏教と日本仏教㊦・川柳・短歌・俳句・横田三十三番札所めぐり⑥

した。

高松城から注進によって、毛利の援軍が馳せたのは4月20日であった。吉川元春は出雲・石見の兵を、小早川隆景は備後・安芸と周防・長門を率い、総勢4万騎であった。

秀吉が完全に高松城を包囲しているので、毛利勢はこれを突破して援軍を入れることはむずかしかった。そこで秀吉勢との決戦を決意したが、安国寺恵瓊の進言で輝元はこの戦斗を中止した。それは中国・四国の諸将に織田信長は誓紙を配っており、それに内々志を通じているものがある。敵方の動向をしばらく見るべきであるというのであった。

この時、吉川陣営にも動揺があるというので調べてみると、**三沢為虎**の部下**三沢雲波**なるものが通じていたのである。為虎はこれを斬って潔白をしめしたという。（このことに関しては、すでに詳細に記述しているので略す）

5月、梅雨増水の時を前にして、高松城の周囲の川の水をせきとめて、水攻めに入った。

さしもの城兵も、次第に食糧も乏しくなり、落城は時間を待つばかりとなった。

この情報が秀吉から信長に伝わると、この機を逸せず、本国を空にしている輝元を攻め、一挙に九州へ軍を進めようと決意した。

一方、高松城主清水宗治、自らの死をもって城兵を護ろうと、舟を浮べて自害し果てた。

出陣した信長は安土を発って、わずかの手兵とともに京都の本能寺に入った。

6月2日夜、敵は本能寺にありと叛逆した明智光秀によって、信長はこゝにおいて横死した。

都に上ってから15年目である。

光秀が叛逆に至るまでのことはこゝでは触れない。

信長の時代の終り

信長につぐ実力者であり、長い間ともに戦ってきた徳川家康は、この時不運にも泉州の堺で見物旅行をつづけていた。兇変を知ると家康は伊賀路を経て、ほうほうの態で三河に帰国した。

一方、備中高松城で毛利勢を相手に水攻め作戦を遂行をしていた秀吉は、すべてを秘して毛利方と和議をなし、信長の横死3日後の4月5日には、早くも軍を返えして、明智光秀打倒に向った。秀吉の胸中には、弔合戦というより、この機会をとらえて一気に光秀から天下を奪いとることにあったであろう。

6月13日、秀吉は京都南方の隘路口、山崎で光秀と決戦を交え敗退させた。その夜、光秀は小栗栖の里で土民に襲われて死んだ。

15日、信長の次子信雄が安土城に入ったが、城は信雄の放った火によって焼失してしまった。

26日、清州城に会した諸将を押さえて秀吉は、信長の跡目相続の有力候補であった信長の二、三男を出しぬいて、嫡孫三法師のかつぎ出しに成功した。秀吉は天下制覇の野望をとげるためには、当時3才の三法師を立て置くのが最も都合がよかったからである。

上洛した信長は本能寺の変の前日、その書院で茶会を催している。この時の茶会は博多の豪商島井宗叱（宗室）を招き、信長秘蔵の名物茶器を披露するのが目的であった。この茶会に安土から運ばれた茶器や絵には、九十九茄子・珠光小茄子・紹鷗白天回・小玉澗の絵・牧谿のくわいの絵・貨狄花人・蕉なしの花人・宮王釜など、天下の逸品ぞろい38種に及んでいた。これらのものはことごとく灰燼に帰した。

秀吉は毛利を相手に、柴田勝家は北陸に、関東にも出陣していたから、信長のまわりに軍勢がないことをみたのが、光秀が挙兵にふみきった最大の要因でもあった。信長にも、茶人である明智光秀が、茶会開けをねらって謀反をおこすとは、夢にも思わなかったであろう。信長にも油断があったのである。

信長が自らの誕生日を聖日とし、「予自らが神体である」といゝ出したことに対して、まずキリシタン宣教師たちが、危倶の念をいだいた。すでに不吉な前兆といわれる彗星の出現などがあったが、フロイスは本能寺の変における信長の死と関連して、フロイスの『日本史』の中でこう述べている。

「しかるに信長は、創造主にして世の贖い主であられるデウスにのみ捧げられるべき、祭祠と礼拝を横領するほどの、途方もなく狂気じみた言行と暴挙に及んだので、我らの主なるデウスは、彼があの群衆と衆人の参拝を見て味わっていた歓喜が、十九日以上継続することを許し給うことがなかった。」

信長のキリスト教への接近、その理解、そして行動。あるいわ天守閣とその内部構造などの構想。信長の生涯の生き方と決して別ではなかったことを知ることができる。激越な生涯であった。

―昨年の太平記に続いて、今年は信長の時代。出来るだけ当地方とのかゝわりを浮きぼりにしようと試みた。

協力を頼まれて、中世の当地方の古文書資料のほとんどを集め、それをまとめる仕事があったので、何とかまとめることができたようである。退屈であったことお許しの程を

（横田史談会　高橋）

―完―

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる④

古代の朝鮮仏教と日本仏教(下)

—民衆仏教の伝導者・行基

奈良時代の前、七世紀末までの飛鳥・白鳳時代の僧で、史上に名を伝える者の99%までは、朝鮮や中国本土からの渡来僧、ないし渡来系氏族出身僧によって占められており、新らしく伝来した仏教は、かれらの努力によって、しだいに日本の国土に根を下していった。さらに奈良時代の行基・良弁・最澄なども渡来系氏族の出身であった。

一方日本からも多くの僧が渡海し仏法を学んだ。大唐学問僧・新羅学問僧と呼ばれたかれらは、飛鳥・白鳳時代を通じて、その数は40名となるが、やはりこれらは渡来系の人であった。

在家仏教の誕生

飛鳥・白鳳・奈良時代の寺においては、僧以外の一般のもの—在家者はそこに入ることができなかった。寺の建物はすべて僧の礼拝する場所、学問する場所であった。これが可能になるのは古代が終って中世になった鎌倉時代以降のことである。

現在寺の本堂に畳が敷いてあるのは、在家者が坐って説教を聞くところとして、鎌倉時代から建てられるようになったもので、法然とか親鸞などが出て来てからである。すなわち古代においては在家者の立場というものはあまり考えられなかった。ところがその中で、在家者に仏教を伝えた人があった。それは行基で、日本の仏教界にたいして大きな転換を促した先覚者であった。

行基

行基は河内国に生れた。こゝは朝鮮からの渡来人が多く住んでいたところで、行基の両親はどちらも百済系渡来氏族だった。

行基は出家してのち、長い間37才まで山林修業をした。そうして超人間的な力をつけようと努力した。こうした呪験者が崇敬された時代であり、そのひとりに道鏡もいたのである。

行基は修業後、大和の国へ母とともに移ったが、こゝは大和の土師氏の本拠地であった。土師氏といえば、日本最大の規模をもつ仁徳天皇陵とか履中天皇陵をつくっている。こうした土地に住んだことが、後年行基が池を掘ったり道を造ったりした技術を学んだことになるという。

この移って来たころは、奈良の都の造営がはじまり、全国から役民(えきみん)が動員されて、奈良に集まって来た時である。過酷な労働が課せられたため、役民の逃亡、流浪がしきりと発生し、政府は対策に苦慮した。

この流れの中で逃亡した人たちが出家をして、行基の弟子となるものが多かった。それらは遠国の東国とか西国からの人たちであった。

こうして、正規な手続きを経て僧や尼になったもの(官度僧)でない僧や尼の姿をしたものを私度僧という。

行基は民衆の教化は寺の中ですべきものという時代に、流逃する人々のために、寺の外で教化活動を行いはじめた。

この二つの点が、当時の政府の非難をうける対象となった。

私度僧たちは乞食をし、托鉢(たくはつ)をして生活を支え、一軒一軒と

斐の上川柳十二月号

齢し聞かれとっさに若く嘘を云う　高木凡太
ユーターン言うが年寄りだけが増え　横山まこと
老の旅助け合いつつ和やかに　安部春恵
独り居の老押売りが目をつける　松浦久寿子
連れだって嫁と見に行く文化祭　藤原千代子
居て困る留守なら淋しい孫が居る　若槻白馬
紅葉にルーブ賑わう人の波　真綿よし子
ひと仕事終えて迎える孫を抱き　藤原のぼる
恩人の弱み知ってもつつかれず　石原冬明
看護婦のしぐさに白がよく似合う　児玉哲呂
計算で答の出ない義理人情　松田牛歩
病床の寝息たしかめ灯り消す　佐佐木千世
紐落し組に一人もない淋し　渡部ミツコ
塗ってみたけれど造作変らない　松浦亜以
老人会ボケるひまない忙がしい　安部正子

ひたひたと寂　簸の上短歌会

のぎの長き赤米は重く穂をたれて三瓶高原に風わたるなり　永井弥生
時雨して木犀の花の散りしく日寡婦となりたる友へ文書く　仝　人
秋草の今を盛りの寺庭に水子地蔵は花柄着つけて　岡田時子
年久しく百姓すれど衰へる身体しおもへば子らに従きゆく　佐藤喜代子
松茸を小さく揺りて抜くときに秋とふ季のさわやかさおもふ　常盤はるまさ
マフィアがらみの政治糾すにやすやすとクーデター言ふいつか来た道　仝　人
茶の色に指染りきて紫蘇穂摘むよき香漂ふ小春日の畑　野村節子
夕顔の君と呼ばれし名はみゆき京に生れて京に逝きにし　安部夕波
夕顔のほのかに白く匂ふ夜は今も顕ちくるみゆきのおもかげ　仝　人

前号の訂正　2頁1段13行　新羅時代・全4段2行　99%・7行　良弁・3頁3段1行　浜松城。4頁3段6行　出陣

訪ねあるく、行く先の豪族の下には逃亡した役民たちが、かくまわれてその支えで生活をしている。

こうした人々の口伝えが、無事に帰国した人々によって、地方の人々に知れわたってゆく。都には偉い坊さんがいて、逃亡した人、病気の人にたいして、救いの手をさしのべていることなどが伝えられると、おのずから行基の名前は全国に広まって行く。行基の足跡が、開いたという伝えのある寺が、東国地方から九州にまであるのは、こうした偉大なる救済としての行基の名が、口から口へと伝えられて、全国にゆきわたったといえる。

当地の岩屋寺が行基開祖と伝えるのも、ずっと後世になってそういう話の流布によって、つくり出されたものであろう。

一方、行基には女性の信者も多かったと、『日本霊異記』にのっていて、行基の呪験力によって女性の命が救われた話などがのっている。

こうして行基をとりまく、いろいろな集団は大きくなっていた。政府が手を焼いている役民の救済を、行基は着実に果たしていた。

奈良の都の造営工事のために全国から集められた役民の、宿泊・休息する場所も必要になって来た。そのため行基は大和・河内・摂津の国に49の院を建て

これはのち聖武天皇が全国に建てた国分寺と国分尼寺のさきがともみることができるという。

新羅で民衆仏教をひろめた元暁

奈良に遷都がはじまって約10年たった時点で、行基の集団が

柴栗句会十二月号

山の陽を追うて小豆を移し干す　糸原古志
回廊を巡れば秋の深む韻　浅野としお
竹馬の友泉下に声なし落葉のみ　岡田踩花
乱れ咲く菊にも疲れ見え初めぬ　小川月舟
そそくさと事告げ去れり秋の暮　恩田和美
渡り来てまだ群解かずコハクチョウ　門脇花子
リフォームの秋衣は老母の手織り布　加納信子
終わったとつぶやく農夫稲架くずし　楠房子
俗塵を避けてひっそり冬の薔薇　高木白虹
あかや黄の渓にうつりて秋の舞う　中澤美紀子
落つる陽を尚とらへ咲く石蕗の花　新出谷一華
遠い日の竈壊して秋深む　錦織富江
ダム静か紅葉の谷を抱きしめて　峯岸美代子
名残虫古き鉄路の陰に鳴く　渡部夕峰

ている。

こうして行基は自分の行う土木工事に対する協力者を得ることに容易な立場が生れてもいた。院には○○院と□□尼院とあって、女性の立場で行基のさまざまの事業に協力してもいる。

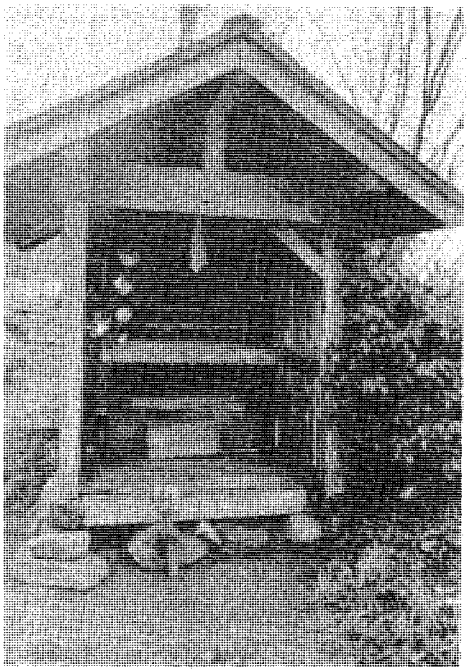
政府から、私度僧の集りであること、寺院の外で宗教活動をしているという二点から、非難をうけている。しかし警告であって処分はうけていない。

それは当時の仏教教団の監督をしていた、天皇の任命した僧官が次のような顔ぶれであったからだといわれる。

5人の僧官の4人までが新羅に留学している。その時代は新羅の僧元暁が活躍している時代であった。元暁は村々に入って、村人たちとともに仏を讃える歌をうたうというような、民衆仏教の布教であって、新羅における民衆仏教の創立者であった。

こうした姿を長い留学中に眼のあたりにしており、人々から崇敬され帰依されていることを知っていたのである。そして秘かにその姿を行基に重ねて見ていたのである。

先進国新羅の仏教事情は、当時の日本の仏教界に敏感に反映していたのである。



横田三十三番札所めぐり⑥

第9番　竹崎・山根側　観音寺　（追谷境）

かみね山はこびあゆみて観音寺
頼む心は後の世のため

会員頒布一部百五十五円／六九十二六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江6―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲
題字　糸原風亭書
第213号
（1月号）
1993．1．2
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜①

ヒュゲェニンの『大砲鋳造法』

埋もれていた系譜

10余年前絲原記念館が設立され、それに伴って膨大な古文書の整理にかかわって、目録も完成した。その中に明治初年の一冊と数葉の熔高炉に関する文書があるのを知っていたが、ついに最近まではその存在を頭の隅にとどめるにとどまっていた。

それには二つの理由があった。近世の企業たたらに関する調査研究によって、幾つかの新らしい発見があったので、その追求に今も追われていること。また文芸・芸術品・農業・畜産に関する文書も極めて多いので、それの解読整理にも時間を費したことである。未発表ではあるが絲原家では、大正初年に入って福禄寿製銑工場が経営されて成功していることも整理し終えたこと（本連載で要点記述予定）などが、調査研究の時数の上からの理由であるが、今一つは、在来の先学の研究によれば、砂鉄製錬に於て角炉による製銑事業は、明治中期に広島鉄山がはじめた鉄滓吹き角炉がはじまりであったこと、それが変遷を経て1918（大正7）年、横田町に設けられた鳥上木炭銑工場が、戦中戦后操業されて、1965（昭和40）年まで続いたものであるとされていたのを、その歴史のすべてであると思って、角炉に関するものを軽るく考えていたからである。

2年ほど前、絲原家文書の中で封紙3葉を綴った文書を見て、今までもっていた角炉の変遷史に疑問をもつようになった。

そして雲・伯・備の研究者に協力をお願いして、この文書の内容についての検討に入った。

ご多忙のなか詳細な資料を届けて頂いた方、こんな事実は今まで見聞したことがないから、この際腰をすえて調査したいと便りを頂いた方もあって、完了していないが、この連載ではその一部は明らかにできたので記述する予定である。

一方明治初年の文書について、大橋周治・岡田広吉の両氏の指導を頂いたところ、これは1876（明治9）年操業を開始した、群馬県の中小坂製鉄所と構造・規模が類似する内容の工場の建設見積り書であることが判明した。

この製鉄所は官営釜石製鉄所の建設がようやくはじまったころ（操業は明治13年開始）、熱風の送風をもって、磁鉱鉱を洋式の木炭高炉で操業したもので、わが国の本格的な機械制製鉄の最初であって、唯一の近代製鉄所、また最大の製鉄所でもあった。

さらに高炉のみでなく、錬鉄炉（パッドル炉）――高炉でできた銑（ずく）（銑鉄（せんてつ））を溶かしてかきまぜ、炭素をへらして錬鉄や鋼をつくる――その他を備えた、わが国最初の製鉄所であった。

そして民間資本によって経営もされた最初のものであった。

明治9年の絲原家文書は、中小坂製鉄所と構造、規模は同じであるが、磁鉱石と木炭ではなく、砂鉄と木炭によって高炉で銑を生産し、パッドル炉で鋼の生産を計画しているのである。

今日まで、先学が研究された製鉄史の中で、このような事実は全く記述されていなかったので、非常に緊張をしている現在である。忠実に文書の紹介をすることも必要であると思うが、その前にこれをめぐる、松江藩・奥出雲の鉄師・絲原家の事情を明らかにしたいと思いこの連載の筆をとったのである。

予定している項目としては、

○ヒュゲェニンの『大砲鋳造法』と松江藩
○幕末における諸藩における反射炉。
○中小坂製鉄所と絲原家の計画。
○釜石を中心とする地方での大島高任の先駆的業績。
○洋式高炉釜石製鉄所の出現。
○明治中期からの広島鉄山の角炉研究と操業。
○奥出雲に於ける銑生産の増量への試みと電気炉の問題。
○奥出雲に於ける旧式角炉。
○大正初年の雲伯備の銑生産をめざす角炉。
○福禄寿製銑工場から鳥上木炭銑工場等。

『大砲鋳造法』の渡来

1836（天保7）年、当時外国事情を覗く窓であった長崎出島にオランダから一粒の種子がもたらされた。その種子とはこの書のことである。正式書名は、ヒュゲェニン著『ロイク王立鉄大砲鋳造所における大砲鋳造法』である。大砲鋳造用溶解炉の**反射炉**と、溶解原料の銑鉄製錬炉の**高炉**について述べてある、当時のオランダの製鉄技術書であった。

この書がわが国に与えた影響と功績は実に大きく、わが国の鉄鋼業が今日世界に誇るに至る花を咲かせた種子となったことである。しかもこの書の三種の翻訳書の一つは、当松江藩が抱えた一人の蘭学者によって書かれたということは、極めて興味多いことである。

ヒュゲェニンの「大砲鋳造法」・島根県議会史にみる奥出雲の人々・俳句・川柳・短歌・横田三十三番札所めぐり⑦

天保6年は松江藩10代藩主定安（12代ともなる）が、美作の津山城主松平斉孝の4男として生れた年である。（18才で松江藩の代斉斎の聟養子となる）この年オランダ人が数多くの海外の書を幕府に献上した。天保7年は水戸藩主徳川斉昭が砲台を助川に築いており、ロシヤ船がエトロフにわが国の漂民を送り届けるとともに、彼我両国の交渉を希望している。この年の秋は作物不作によって、各地に乱民が起る騒々しい年であった。

翌8年は大坂に於いて大塩平八郎の乱が起るなど天下騒然たる有様であり、外国船の渡来も各地にあり、各藩しきりに砲台を設け、大砲を鋳たり軍艦をつくる情勢となった。

このような時代に、ヒュゲェニンの『大砲鋳造法』が、わが国にもたらされた。ヒュゲェニンはオランダの軍人であって、砲術家としても活躍した。1815年エルバ島を脱出して再起したナポレオン軍と連合軍との戦いの際には、砲兵倉庫の充実をはかった。やがてナポレオンはワーテルローで惨敗した。

この書を出版したのは1826（文政9）年である。それから10年たってわが国にもたらされたのである。

この書の翻訳書には3書がある。

『西洋鉄熕鋳造篇』の書名のものは、訳者は手塚謙蔵で、協力者は大島高任（あとで詳述予定）であって、1850（嘉永3）年初めに完訳されている。手塚は周防（山口県）の人で、1838（天保9）年に長崎で蘭学を修め、高島秋帆について砲術を学び、天保14年江戸に出て、大島高任を知る。

第2の訳書は『鉄熕全書』である。筆頭訳者の伊東玄朴ほか三名の手になるもので、伊藤は佐賀藩に生れ、1823（文政6）年長崎で、シーボルトの鳴滝学舎に学び、江戸で医業につき、佐賀藩主鍋島直正の侍医となり、他方塾を開いた。

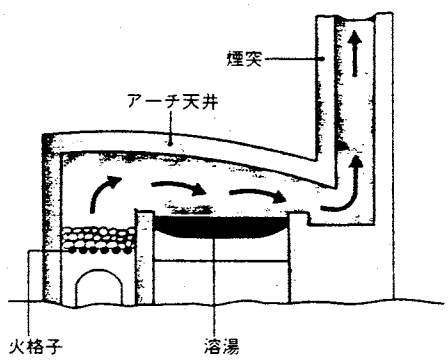
その門下生が共訳者となっており、その中から、わが国に於て最初に佐賀反射炉を築造し操業した立役者もでている。完成したのは1850（嘉永3）年5月のようである。海岸備砲を急務とする藩主たちは、翻訳の進み状況を相互に連絡しつゝ、完訳を待ちかねて、反射炉築造に入っている。こゝで第3の翻訳書の紹介の前に反射炉についてふれておく。

反射炉

日本史で幕末のところになると、伊豆の韮山に江川英龍（太郎左ヱ門）が設設した（1858）反射炉や、萩の長州藩の反射炉のことが話題として登場する。

反射炉は製鉄のための炉ではなく、溶融温度の低い金属を溶解するための炉である。幕末には大砲鋳造用の青銅を溶解するために各地で用いられ、さらに和銑（近世の企業たたらで生産された銑鉄）を溶解して鋳造するためにも試みられた。

図のような炉で、燃料燃焼室、溶解用炉床、煙突が横にならび、炉床が浴槽形をしており、炉内の火炎や炉壁からの輻射熱によって、溶融温度の低い金属を溶解するための炉であって、燃料から出る不純成分が溶解物に入らぬことを利点とした。大物の鋳造即ち大砲の鋳造には反射炉が欠かせないものとなった。そしてこの反射炉の導入は、これに供給する銑鉄を生産するための高炉の築造が、まづ薩摩藩鹿児島に、ついで南部藩の大橋（釜石市内）に出現していった。これが（明治13）年釜石に官営製鉄所が設立することにつながっていった。



第3の訳書『鉄熕鋳鑑』

翻訳者の金森錦謙は備中の生れで、少年のころ長崎に出て、蘭学を修めた。1830（天保元）年には坪井信道門の塾長となり、緒方洪庵らとオランダ文法を輪講していた。1849（嘉永2）年に松江藩の蘭学御用に迎えられ、仝6年麹町中屋敷に引越し、7年には10人扶持で抱えられ、定江戸新番組御次番となった。この間に翻訳が進められていたであろうとされている。記録によると嘉永5年に翻訳が完成している。

この年松江藩主9代斉斎は、津山藩主松平斉孝の4男定安（18才）を養嗣とし、前々年に出生した第1女熙姫に配するの内約をした。やがて聟養子願が許可となり、赤坂の松江藩邸に入る。翌嘉永6年斉斎は隠居し、定安を相続者とする。翌1854（安政元）年1月江戸を発して始めて松江に入る。

2月になると国内巡遊に入り、杵築社のほか、近くの経ケ崎砲台、差海村鉇山の砲台、多岐村、口田儀村の砲台、楯縫郡釜屋及十六島の砲台を巡検して、松江城に帰還し、間もなく、三保関加鼻砲台、秋鹿郡の古浦、江角の2砲台を巡検し、古志原村にて砲技を覧るなどして、4月はじめ江戸の藩邸に入る。

島根県議会史にみる

奥出雲の人々①

全国最初の県会の発足

1869（明治2）年6月17日、版籍は奉還され封建制度はこゝに終止符をうち、旧藩主はそのまゝ知藩事に任命されたが、各藩割拠の体制は依然として存続していた。4年7月14日廃藩置県が断行され、旧藩主を政府は県令に任命し、3府72県9府県が国家行政の下に一貫した統制の下に置かれた。

4年11月には出雲では、松江・広瀬・母里の三県が廃止されて島根県となり、石見では旧幕府領（銀山周辺）、津和野・浜田県が廃止され石見一円の浜田県が成立した。

隠岐については、元年11月鳥取藩が臨時にそれを取締ることになり、仝2年2月隠岐県が置かれ、仝4年12月鳥取県に編入された。その後種々の廃合があって、明治9年4月18日浜田県が島根県に合併、次で8月21日隠岐国を含めた鳥取県が島根県に合併され、こゝに出雲・石見・隠岐・因幡・伯耆の5州23万700戸が島根県の管轄下に入り、浜田県令であった佐藤信寛が第5代島根県令となり、鳥取県庁舎は支庁舎となった。

そして今まであった浜田地方民会とか、松江にあった島根県集議所を廃止して、県独自の県会組織することになった（明治10年7月27日布告）。

戸数2000戸に議員1人を選出することとし、出雲35、石見29、隠岐3、因幡20、伯耆20の計107人を選出した。初の県会は仝年10月5日松江市外中原町の清光院において開かれた。

この県会は明治11年7月の大政官布告による府県令規則によって生まれた県会に先だつこと1年、実に全国においてその例を見ない先鞭をつけたものであった。

議県は21件であった。大別して町村の民費関係・教育・土木・巡査・芸娼妓関係のものであった。

芸娼妓取締の規則を設け風儀を正し健康を保護して、衛生警察の実効を挙げんという趣旨のもとに、営業の箇所は出雲では、松江和多見、安来、美保関、杵築、石見では温泉津、浜田、高津、伯耆では米子灘町、境町、因幡は聚楽園、隠岐西郷の11か所として、鑑札を交付して病気の検査も行うことを定めている。遊伎は貸席以外では一切営業できぬが、客に誘われて舟行するか、習慣によって港内に碇泊する客船に泊することは云々などともある。

県議会制度の発足

1878（明治11）年大政官布告によって布県会規則ほかが定められ、各郡から選挙されることになった。

選挙人は20才以上の男子でその郡内に本籍を有し地租5円以上を納めるもの。被選資格は満25才以上の男子で、その府県内に本籍を有し、満3年以上居住し、地租10円以上を納めるものとなっていた。

任期は4年で2年毎に半数を改選した。

選挙された議員は49名であった。雲州の割当数は16人であったが、当郡では湯村（現木次町

柴栗句会一月号

枯野径音なく刻む万歩計　糸原古志
虎落笛夜更けの音色つのらせる　浅野としお
裾絡み枯葉捲き上ぐ師走風　岡田踈花
紅葉愛で妻と日向を頒ち合い　小川月舟
紅葉降り膝をほむらに車椅子　恩田和美
残る日の幸ささやかに年用意　門脇花子
嫁取りの話つまづき蜜柑むく　加納信子
道標拾い手袋かぶせ置き　楠房子
地下の寄り欠伸ころして聞く夜長　高木白虹
そぞろ寒気のせくばかりはかどらず　中澤美紀子
柿一つ残して鴉は雲へ消ゆ　新出谷一華
任期終え枯れ野踏み出す夫送る　錦織富江
霜枯やもふくの衿に風わたる　峯石美代子
笹鳴や沼の水面の陽を返す　渡部夕峰

斐の上川柳一月号

目の保養させてもらった菊整理　安部正子
歳月は止まらず余生減るばかり　松田牛歩
降る雪を見てから畠に飛んで出る　松浦久寿子
大根とごはんの煮える匂い好き　松浦亜以
冬日背に母を偲んで小豆よる　安部春恵
体操で口も鍛えて婆元気　田中有樹絵
老友が吾れを待たずにひとり逝く　高木凡太
待て待てというが孫には追いつけぬ　児玉哲呂
ひとしきり話した後で酒を酌む　藤原のぼる
暮れ足の早さに仕事追いつけず　藤原千代子
木守柿一つ寂しく秋深し　若槻白馬
辻つまをやっと合わせる年の暮　石原冬明
隠し芸笑いとまらぬ忘年会　渡部ミツコ
軒き下に大根ぶらり冬仕度　真綿よし子
前の字が付く肩書きで案内状　横山まこと
まくら辺に山茶花さして晩秋語る　佐佐木千世

内）の川角松蔵が当選した。

第2回選挙は明治14年2月で定数（この時から50名）50名の半数が改選された。川角は続いて議員として留まった。

鳥取県の独立

東西に長い五州一県の島根県は、とかく折合いがうまく行かず、とかく因幡国に対しては、西高東低の嫌か多かった。明治13年ころから島取藩士族による分県運動と高まり、境県令も分県が望ましいと中央に具申し、参議山県有朋の当地方民情視察もあって、鳥取県が置かれることになった。（明治14年9月12日の大政官布告第42号）

明治15年7月、第3回の選挙によって半数17人の改選が決った。

明治17年4月には第4回の選挙が行われ、半数が改選されたが、温村の川角に替った、佐白村の馬庭又右ヱ門が当選した。

廃藩置県に伴う行政区域の変遷

県内を「区」に分け、その中心地に区役所を置いた。仁多郡は第22～25区までの4区　28村となった。

第22区　9村

佐白村―佐白村・前布施・上布施
八代村―八代村・中村
三成村―下三成村・三成町
上三成・湯野原・神畑・矢谷・広瀬
馬馳村
三所村―下三所村・里田・石原・角木・乙多田
上三所村
郡　村―郡村・高柴・簾・塩原・郡村・大内原
高田村―高田村・琴枕
亀嵩村―亀嵩町・中湯野村

土蔵のある風景　簸の上短歌会

訪ふ人もあらざる秋の日は昏し小さき鍋に芋を煮てをり　永井弥生
霜の朝最後のつる菜を摘む指に息絶へし赤とんぼ一つ触れたり　全
紫蘇の実を扱きて染まりし指先を病院の待合室に持てあましをり　佐藤喜代子
乳房を切りたる姪はベットにゐて手を振りくれぬ街は冬雨　全
黄金虫青菜の陰にひそみをり温き冬陽にかすかうごきぬ　景山悦子
紅葉の映ゆる備後路に老われら声あげやまずバスにゆられつつ　岡田時子
まうからぬ否まうかると論じ合ふ峡の農継ぐ若きらの顔　常盤はるまさ
暴力団の関はる責を問ふ言葉テレビにひびき霜夜はふけぬ　全
ゆるるなき真昼陽の中音のして芙蓉の花のひとつが落ちぬ　小早川恵子
ペン先に触れたる虫をいたぶりてむごき心をのぞきみる夜　全
弾けたる餅米のごと木犀の散りつくしたり土蔵のかたへ　松浦愛子
姑逝きて杳かとなりぬ摘み摘みし垣根の茶の木枝古りにけり　野村節子
歳若き人の葬りの庭隅に白き山茶花の一輪咲きて　全
兄の葬りを帰る夜汽車の窓にみる石見の海に漁火あかるし　安部夕波
日本坂越ゆれば水車のまわる小屋冬静かなり花沢の里（静岡県にて）　全

第23区　8村

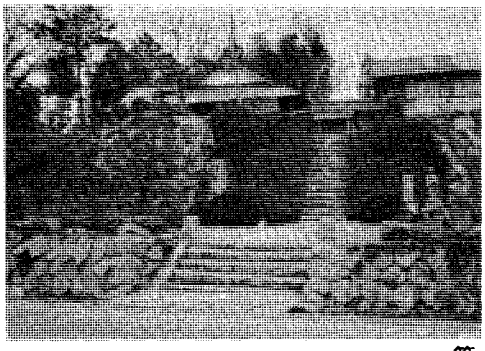
中　村―馬場村・五反田・樋口・蔵屋
大呂村
竹崎村
稲原村―稲田村・原口村
八川村
下横田村
横田村―横田町・加食村・大曲村・横田村・角村
大谷村―大谷村・雨川

第24区　7村

高尾村―高尾村・小白・久月
三沢村―三沢町・堅田村・原田・鞍掛・林原
北原村―北原村・下布施
平田村―小原村・石・平田
湯　村―槻屋村・湯村
鴨倉村―下鴨倉村・上鴨倉
河内村―四日市村・河内・大吉・乙社

第25区　4村

大馬木村
小馬木村
下阿井村
上阿井村―上阿井町も



横田三十三番札所めぐり⑦

第10番　竹崎　大龍寺

名にしおはばたどりて
もみん烏上に
かよふともし火大龍の道

（写真　佐世川徳雄）

会員頒布一部百五十五円／〒六九―一八　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

十数年を経て整いだした 奥出雲地域の歴史民俗の博物館

——地域振興の施策のお蔭——

17年前の夢と願い

右下の資料①は、本誌の最初ころの誌名『横田文化』の9号特集増頁号の第1頁(部分)である。

誇り得る歴史・民俗資料・遺跡・遺産の豊富な横田の、それらを保存して町民が再認識して、誇りに思いそれをこれからの町作りの一つの基礎にしてほしいとの願いを込めて述べたものである。本誌3頁の資料②は、同じく同号にのせた、各種資料とその保存利用施設の案である。

また同号には、町内の歴史・民俗・遺跡・遺物・文書・施設・伝承の具体名をすべて掲げ、さらに町内地図にその所在地も明らかにした。

その後の動き

この号はかなりの数を印刷し町内外各方面に配布し、その年の秋には伝手を得て上京し、文化庁の総務課長に面会した。

当時は年間一～二館程度の数の資料館、或いは博物館が、国の補助対象になるという時代であったので、全く私の面談は猪突の行動にすぎなかったが、課長は担当の係長を招いて、説明を聞き善処するようにと指示された。別室でこの印刷物にもとづいて説明した。その時阿波の藍染めの伝統技術の国指定と、その保存に関する補助の話中であったが、それを中断して対応されていた。係長は地域をあげての特色ある、中世横田庄・今日までもある企業たたら、日本のそろばんの主産地は、極めて特色のあるものである。来年度には入らぬが、再来年度（53年）には可能性があると思う。地元町の意欲と熱意による体制をつくり、県を説得して申請されるがよかろうとのことで、この規模ならば、1億5,000万円程度であるから、補助対象となるとのことであり、町の努力に期待するということで感謝して帰った。

帰ると当時の町長ほかと、議会、教育委員、文化財専門委員会、文化財所有者、文化に関心のある方、7～8名の方にお集り願って数回意見を交換し懇談をした。

しかし町村単位でこうした企画がまだあらわれる時代でもなく、統合中学校建設直後などの当町の財政事情もあって、啓蒙の段階に留まってしまった。

（三頁へ）

奥出雲
題字　糸原風亭書
第214・215号
(2・3月合併特集号)
1993. 3. 5
(M125・T81・S67)
奥出雲編集集団©

資料1

横田文化

No. 9
昭和51年 1月4日
横田の文化財
特集増頁号
奥出雲文化協会

豊かな文化財が失われぬうちに

奥出雲歴史民俗資料館の建設を

世界的な砂鉄製鉄・雲州そろばん
荘園「横田庄」をめぐる古代・中世
近世・近代の遺産

負債償還の責務

私どもは敗戦後、私どもの祖先先輩に大きい負債を背負い込んでしまった。ヨーロッパ各国を廻って、良き精神・物質両文化の伝統の中に育まれているかの地を知り、戦後あまりにも伝統のないアメリカ文化追従にすぎ、古きは悪しきと捨て去った誤りを知った。公害・開発の痛手による文化財再認識もまだおそくはない。横田の私どもが受け継いできた、奥出雲の歴史民俗資料の数々は、私どもだけのものでなく、日本の宝物である。この地のものは私どもが声をあげ、努力してゆかねばならない責務がある。

たたら遺跡

世界に誇れる唯一の

この遺跡のかたわらで、今日尚砂鉄採集が行われている。古代製鉄のメッカであったことが、古代神話の実在の地とされたのが簸の川上「横田」である。平安時代初期に石清水八幡宮の荘園となり、それが京都朝廷の御料所となり、のち平安末期から幕末までの朝廷の陵墓があり善提寺であった、京都のみでら泉涌寺にも分けられて、三沢この地をを去って毛利氏が領地とするまで、まさに五百年余、京都と深い関係があった。この間この荘園をめぐって、平家・源氏・北条・足利・山名・尼子毛利の諸氏の争いが繰りひろげられて波乱万丈の歴史を展開し、古文書も数多く残っている。今後の研究の余地も多い。荘園末期は、この地を維持せんと左大臣菊亭（今出川）晴季が朝廷の通任代官となった。（秀吉を関白太政大臣に推した実力者）これは何が理由であるか。横田庄の鉄資源によるものである。

徳川時代に松江藩の財政を強力に支えたのも奥出雲の砂鉄である。日清戦争を鉄の立場からみると、その需要の約七割をみたしたのは奥出雲である。

今日、日本刀の原料玉鋼の唯一の産地もここである。また県産物輸出品の三分の一はこの地の玉鋼を材料とした鋼製品である。そして今日、玉鋼の生産の増加は各方面から望まれている。諸外国で数学教育の上からも注目されてきた「そろばん」を今日あらしめたのは、幕末から明治初年の横田の職人の「ろくろ」改良の賜物である。そしてこれは日本工業技術史上において極めて画期的な発明でもあった。



私どもの初夢

文化施設への提言・明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜②・出雲大川流域物語④・俳句・川柳・短歌

今月は特集のため合併号としました。

展　開

その翌年、絲原義隆絲原記念館創立者で現理事長から、君の話していた資料館の件はその後どうなっているかとの問合わせがあり、休止状態の旨を話したところ、絲原記念館を創設したいから協力とのことで、古文書（昭和30年代はじめの『八川村誌』編集の折の整理に続いて、昭和40年代はじめの『横田町誌』編集の折の整理に続いて、それまでの倍の数量）と、絲原家の近世企業たたらの遺物による経営の実際の復元展示に、協力参加することになった。

これで一般の町民の認識が高まり、この方面の研究者の便も多大となり、横田町の活性化の先駆ともなると、関係者の方々の熱意にも押されて没頭できた。

文書整理の中から、在来の近世企業たたらの歴史についての研究について、幾つかの重要な新発見があり、貴重な資料の価値を再認識するとともに、学界へも報告しその評価も受けることになった。

現職中から雲州算盤協同組合の強力な協力で調査していたことを、『雲州そろばんの今昔―歴史とその技術―』の出版へとこのころ漕ぎつけた。調査費に協力頂いたので、出版後は一切組合の手にゆだねた。7千冊は印刷されたが、ほとんどは組合員から、お得意や研究者への贈呈であったらしい。これで念願の資料館つくりの基盤もでき、組合の支出で、算盤の蒐集のかなりまとまったものも獲得できた。これが誘い水となって、地元の協力も高まり、種々の工具その他も集まり、組合に資料室も設けられた。

中世横田庄は、出雲ではもとより近県にも珍らしい古文書と文化財に恵まれていると、思うだけであった虚をついて、岩屋寺の若干の文書と文化財が流出するという不幸なことになった。ここうした折、並河孝義鳥上木炭銑工場長の御努力で、早くから仄聞していた『日刀保たたら』が復活することになった。

これを契機に奥出雲の絲原記念館を中心に、出雲地方の、各地の近世企業たたらの連繋した保存と利用についての提案を、学会誌や、地方紙さらに県の観光パンフレットに登場させた。

間もなく念願の、雲州そろばん伝統産業会館が竣工し、資料館も実現した。

今また、絲原記念館や日刀保たたらと連繋をもった、「奥出雲たたらと刀剣館」が、建設中である。わが国ではじめての近世企業たたらの歴史・遺跡・経済・経営・技術を、写真・模型・映像・原料・生産品の各過程とその科学的分析が公開され（たたら場・大鍛冶場・小鍛冶場ともに）、『日刀保たたら』のすべてが、すべて実物で展示、さらに美術刀剣鍛錬場までが完備することになった。

また「羽内谷鉱山」の鉄穴流しの本場も修復されて、操業の公開も行われる。

本誌175号に提案した企業たたらをめぐる、資料館構想は9分通り実現することになった。（あとは出来れば木炭銑工場の修復と活用のみ）

また念願していた中世横田庄の古文書の収集は、仁多郡内はもとより、周辺の出雲各郡、雲伯備の周辺部のものとともにほぼ完成し、その数1500余件となった。島根大学の井上寛司教授の御配慮で、全国各地のものも集まっている。編年資料集刊行へ

提言　横田町教育文化財団の設立を

横田町には、「雲州そろばん伝統産業会館」・「横田郷土資料館」が開設されている。さらに今春は、「奥出雲たたらと刀剣館」が竣工開館する。これらは単なる展示品を公開する資料館ではない。今後の運営さらに研究調査による整備、そしてこゝでの町民の学習、それによる横田町のこの方面の事業の発展も計って、町に活気をもたらす重要な施設である。

そろばん会館の運営委員会も形ばかりのようで、展示の管理も不足である。まだ未完成であり、ある資料も十分生かされておらず、ましてや積極な整備充実には程遠い現状である。勤務者の人の数もあるが、委員会はもとより勤務者も、入館者の切符を扱うだけの機能しかない。これではこの館設置の意義の初歩の目的に副っているだけである。

これから開館される**「たたらと刀鍛館」**についても、運営についての構想も明らかでないようであるから、このまゝでは「そろばん会館」と同じ轍を踏むことになる。ところがこの館は「そろばん会館」以上に、計画的な運営を行わなければ、来館者の顰蹙（ひんしゅく）を買うことは明らかである。まだまだ企業たたらの研究は入口にある段階で、研究が進むにつれて、改訂や補充を行わねばならないし、現段階では予算の関係で、はずされているものがある。これらは企画展を開いて補うこともできるが、計画的に増設すべきものもある。こうしたことは単なる能吏に頼るだけでは不可能に近い。平素の研究活動の積重ねにまたねばならない。

美術刀剣鍛錬場の年二回程度の運営もあり、直接関係はないが、「羽内谷（はないだに）鉱山の鉄穴流し本場」も関連施設であり、これの公開操業もある。

いずれも当地の人々が完成した日本はもとより、世界に誇る施設であり、『日刀保たたら』は現に操業し、刀匠3人も絶えず作

資料2 ―横田文化9号3頁から―

保存と利用に必要な施設案

おびたゞしい資料を収蔵し、展示し、閲覧し、研究するに必要な部屋数の試案

―①とは小中学校の教室と同じ大きさ①を示す。

1考古収蔵庫 ①
考古展示室 ②
屋外展示場 各種模型
縄文早期から古墳末期そして鎌倉期までを含めて、おびただしい破片がある。これを復元修復して(180)点。このうち馬場八幡宮の大型細身銅剣、稲田神社の五鈴鏡、小万蔵出土の県下に例の少ない最古の楕円押型文上器小片など貴重なもの多数

2歴史収蔵庫 ①
歴史展示室 ②
屋外展示場 各種模型
伊賀多気神社、岩屋寺、馬場八幡宮、小馬木八幡宮ほかの県指定文化財をはじめ、為清の弓、棟札(2)点(5)点

3古文書収蔵庫 ―②
古文書展示室 ―②
古文書・図書閲覧室 ①
ト蔵文書は実物を他は各家の文書のリコピーを役場に所蔵する―文書目録完成、保存完全 (数字は冊数)

中世文書
杠（表）平安時代下向の大催 (113)
杠（山本）たゝら師 (9)
安部（土居）仙洞御料所代官 (9)

たゝら文書
ト蔵（本家） (260)
〃（大迫）幕末百姓一揆関係も多数 (73)
〃（山根） (6)
〃（ほか） (4)
糸原（湯迫） (163)
〃（高口） (38)
桜井・永瀬・田部・安部（華蔵院ほか諸家 (227)
ほか諸文書 (84)

社寺関係
岩屋寺ほか郡内 (60)

中世諸家
三沢氏ほか (27)

近世以降
検地帳 実物並フイルム及写真 (38)
横田町分66 仁多町ほか (49)

江戸時代郡家文書 御用留を主とし元禄から明治十五年まで 97

行政文書 横田他四ケ町村のもの整理済明治元年より昭和32年迄 (489)
―石清水八幡宮、仙洞御所、泉涌寺の荘園関係、中世の三沢、尼子、毛利関係、たゝら関係等極めて貴重品を所蔵 (民俗資料関係)

4たゝら関係収蔵展示室 ②
たゝら屋外展示場 実物や模型世界に誇るもの、現地遺跡と鳥上木炭銑工場と関係して

5そろばん関係展示室 ②
工具(400)点と創業時と現代までの工程推移
製品60点 村上吉五郎、高橋常作、村上朝吉ほか

6生業関係収蔵庫
生業関係農、林、畜展示室(1) ②
日常生活資料展示室 ①
生業関係屋外展示場 実物模型
収集済み保存中のもの (300)点
調査完了収集可能のもの (400)点
(以上室数 計17 屋外展示場4)

7管理関係として
会議室、研修室、研究室
未整理分収蔵庫、調査室
事務室など
たゝら遺跡の保存、開発にともなう現地の保存や出土品保存、製鉄史等の研究のため、専門員の常駐が必要とされる。
保存展示のみでなく、研究ならびに、観光としても貴重なものとなる。

刀に励んでいる。

管理は清掃・空洞・冷暖房・入館者対応・警備ということではすまない。数くとも研究意欲のある若い学芸員2人は必要であって（他の館も兼ねるとして）、常に展示品の管理、保全、さらに調査・収集・研究・企画展の立案実施、町民その他への学習の場の提供、研究記録の発行等も行わねばならない。すなわち在来の施設管理方式では設置の目的は達せられない。近くの佐白にある「奥出雲多根自然博物館」の運営は、よい手本である。

絲原記念館、横田町の図書館にある県内他町村にない古文書庫との関連も極めて大切である。さらに町内の社寺・旧家さらに遺跡・文化財は少なくない。その調査、保存或るいは公開展示等も考えられる。

こゝに「島根県教育文化財団」について、要点を述べて置く。

こゝでは 県立博物館と 県立風土記の丘博物館と
県立少年自然の家
が運営されている。

目的 教育委員会の基本的施策に即応して、委任をうけて事業並びに県内の教育文化の振興に関する事業及び、青少年の育成に関する事業を行う。

事業 施設の管理・運営。教育文化の振興。独自の事業。

資産 当初の寄附にかゝる―建物・内容物。資産から生ずるもの。事業に伴う収入。寄附金品及び補助金

その他 役員・職員等、会計については略す。

こうしたことを手本（モデル）として、横田の実態に即した機関を設置しなければ、突あたり場あたり、行きづまると町税負担に寄りかゝることになって仕舞う。展望のない、そろばん会館の現状を見るにつけ、抜本的方策を考えないと、重荷となり、町の誇りが塵をかぶることになるのが気にかゝる。

の夢がふくらんで来ている。

地方の時代の効果

地方活性化の施策のための補助金がこうした資料館建設を可能にした。しかし活性化そして観光者誘致が先に立って、十分な調査もないまゝ建設がすゝむものが多い中で、当町は資料が豊かな上に、それが保存に意を払われていたため、充実した施設となっている。しかしこうした施設が文化行政からの主導でないため、自治・観光・国土などの諸省庁の主導のため中味に精粗を生じているが、当町のものはこの点、地元の意見を貫いて企画施工された。これを生かす運営を如何に行うかが、今後の課題である。（これについては別稿2・3頁の「提案」で）

これで終りではない、地域に生れ地域を育てて発展に尽した人、出でて全国的にまた国際的に貢献した人々の功績を顕彰する資料館も必要である。社会・歴史は人が育てるものである。

また町内各地区にある小資料館や文化財また遺産・遺跡の助成の強化も忘れてはならない。

（横田史談会　高橋一郎）

明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜②

ヒュゲェニンの"大砲鋳造法"下

——松江藩の動き

松江の海防体制

江戸の松江藩の屋敷で、『大砲鋳造法』の第3の訳書『鉄煩鋳鑑』が、金森錦謙によって翻訳されたのは、1852（嘉永5）年で、この年定安は松江藩主の養嗣子として、江戸藩邸に入り、翌6年藩主に、翌年（安政元）出雲へのお国入りをした。

1月松江に到着するとすぐ、簸川郡西海岸と島根半島の北側の藩士を派遣し、鍛冶場を製鉄所と改め、西洋式大砲・雷火銃（ゲーベル）製造へと進んだ。製造の基礎が固まると、その年台場（海岸砲台）の築造をさらにふやし、定安は巡視した。江戸に出て洋式砲術の研究をした荒川扇平を、台場築造御用掛にしたり、別に唐船番隊も組織して海寇に備えた。

一方藩士のみでは不足であると、農民より農兵を募集し、組織して松江に於て錬兵した。文久3年3月仁多郡より32名を招抱え、その後10余名を加えた。

全年5月横田村角に陣屋を築造した。6～7間四方の土居で、人夫98人、明俵828表、縄30尋28束を用いた記録があり、藩士数名（與外（くわはず）・森宗馬300石、與士、中野伝左ヱ門130石、仝小川健助、仝水戸伊之助、仝坪坂小源太）が、郡中の子弟を五畝歩の操練場で実習をした。藩士の宿所は伊藤伝兵ヱ（広島屋、当時は大市の現西田村）方。五年間続いたが明治元年廃止された。

大砲は青銅製か銑製か

1853（嘉永6）年6月から翌年6月までの一年間の、全国の大名の7割の180の大名から届けられた、「大砲鋳立諸家届」によると、その1374挺のうち一貫目砲（弾丸重量）以上の砲は550挺であり、そのほとんどは青銅砲であったとみられている。くわしい説明は後述にゆずるが、鉄製砲は砲身に孔や気泡があって、発射の際砲身が破裂したので、戦国期以来青銅製鋳砲が用いられていた。

大砲鋳造に備えて反射炉が最も早く築かれたのは佐賀藩で、それより4年後に薩摩藩に、それより2年後、ペリー浦賀来航より半年後の、1854（安政元）年2月に、第3号反射炉が伊豆の韮山に築かれた（反射炉の遺跡としては世界唯一）。

韮山は幕府の天領で、25万石の世襲代官江川太郎左ヱ門英意によって、幕府の請負的性格のものであった。

江川は蘭学を長崎のシーボルトの門で学び、1841（天保12）年高島（秋帆）流西洋砲術も修得した。この江川は1849（嘉永2）年7月4度目の海防建議書を出して、①砲術、②艦船、③海岸の砲台（台場）の整備が当面の

の砲台を巡検し、古志原に於て砲技をみた。（設置間もなく）

その後武備訓練の奨励のために、江戸・松江においてともに積極的であり、安政6年までしげく行われた。

62（文久2）年には、二隻の軍艦（中古のイギリス製鉄船とアメリカ製の木造船で、それぞれ砲四門から六門設備）を長崎で購入し、第一、二八雲丸と命名し、幕府の所用にも貸出すほどであった（後述）。

翌年には長崎へ艦船運用修業

あかね雲

簸の上短歌会

晩秋の茜にわれも染まりゐて母に似通ふ雲一つあり　永井弥生

新春の玄関に並ぶ孫達の靴のサイズの去年と変れる　野村節子

亡き父の使ひし鍬の肩先に慶応元年と焼印のあり　佐藤喜代子

分娩に力める牛の吐く息が霜夜の牛舎にあらあらと立ち　仝人

家に病む妻にこころのいそぐ旅土佐に来て蜜柑パパイヤを買ふ　常盤はるまさ

正月の日々の行事をおくりきて七草を過ぎとんど粥炊く　景山悦子

七草の芹の香匂ふ厨にて昭和帝（みかど）を偲び参らす　岡田時子

夕冷えし四条通りを過ぎ行けば祇園はあかり華やぎてをり　安部夕波

愛の炎燃ゆる夕べをしんしんと雪降りやまず北の湯の町（花巻にて）　仝人

急務であるとし、大砲も青銅砲でなく、「ヅク」すなわち銑鋳造砲でなければならないことを提言している。

松江藩では定安登場の前に、『大砲鋳造法』の翻訳を終え、砲術の訓練とともに台場を沿岸に設け、艦船の購入を進めていて、他藩にそう遅れをとっていない。砲術は旧式のものでなく高島流の洋式のものであった。

こゝで追ってみたいのは、設備した大砲は青銅製か鉄製か、製鉄所はできたが、大砲鋳造まで進んでいたかである。そのためしばらくまた廻り道をする。

松江藩翻訳の『鉄煩鋳鑑』の写本は、加賀藩前田侯爵家の尊経閣文庫にある。出版は1856（安政3）年にされ、慶応元年にもあるが、松江藩関係文書にも県内にも、写本も版本もまだ発見されていない。現存するのは、加賀藩・韮山・水戸・岩手県大東町・仙台の金属博物館・銃砲研究家所荘吉ほか数か所である。

さらにこの訳本によって松江は具体的にどのように対応したかも不明である。そこで廻り道をして、他藩から松江藩の事情を推理してみることにする。

古代からの製鉄法（外国）

①火床炉――最も古いものとされているもので、炉は椀形や深皿形の浅いものである。

②炉体が高くなる――炉体が発達して高くなる。すると鉱石（鉄は酸化鉄としてある。これを加熱して酸素を奪う、これを還元という）の還元雰囲気域をひろげていった。そして炉は地下へ、さらに半分地下で地上部分へと炉体がのびる構造となった。

③吹子の発達と風量の増加――吹子の風量が増加すると、炉底には鉄滓を混在する鉄の小塊片のかたまりから、半溶融の鉄塊へと発展して行った。

これを直接法といゝ、鉄塊を砕いて鉄・鋼をつくる。

④水車動力で送風が強化――炉内の温度が高くなり、含有炭素量を増加して、流れ出る溶鉄＝銑鉄ができるようになった。

これを間接法といゝ、銑の炭素をへらして、鉄・鋼をつくる。

この方法は中国では紀元前400～200年ころの漢代に行われていたが、西欧では14世紀後半である。中国との差は1700～1500年の遅れである。

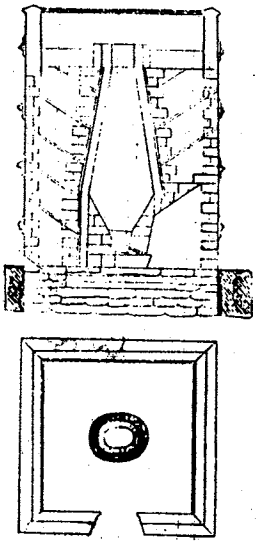
これが**銑鉄製錬炉＝溶鉱炉＝高炉**である。

『大砲鋳造形』の高炉と反射炉

西欧に於いて19世紀初めに到達した製鉄法が、ヒュゲェニンの『大砲鋳造法』としてわが国に入ったのである。

反射炉は間もなく佐賀藩に設けられ、やがて10か所にひろがったが、鉱石から銑鉄をつくる高炉はしばらく遅れた。（これについて後述）

高炉



幕末に導入された高炉の構造

柴栗句会一月

手造りの注連縄嬉れし恵方棚　高木白虹
鐘の音や　心静かに去年今年　新出谷一華
酉の歳迎ふよいやらわるいやら　糸原古志
水洟をすする仕種を稚子真似る　岡田踈花
串一つ残して冷えしおでん鍋　渡部夕峰
夢うすき　齢となりし年迎う　錦織富江
年忘れ幼な日浮べわらべ唄　門脇花子
迎春と名の無き賀状主はだれ　楠　房子
三姉妹ほのかに染まる今朝の春　中沢美紀子
初鶏や卻の余韻谷渡る　恩田和美
拍手を打つ浄暗の森深し　加納信子
寒牡丹一つは激しき性の彩　浅野としお

斐の上川柳二月号

酉の鳴く農にあかりをあててほし　藤原のぼる
呆けられぬ百歳姉妹をお手本に　佐佐木千世
老の身も試練の度に強くなり　松浦久寿子
隣国の首領選びを真似したい　田中有樹絵
ちらちらと少しは欲しいお正月　松浦亜以
皺ひとつのばし揃って初詣で　藤原千代子
どくろ巻きおろち鎌首三井野原　若槻白馬
手を振って孫と正月去って行き　児玉哲呂
弟が出来て翔子は姉素振り　安部春恵
喜寿の峠越した山谷を振り返り　安部正子
生きて来た証しが皺の初鏡み　高木凡太
神様に人に云えない事を云い　松田牛歩
お妃のニュース晩酌追加させ　石原冬明
初夢をみんなで話し福とする　真綿よし子
熱燗え足音かるく暮の町　渡部ミツコ
初孫は爺ちゃん好きと付きっ切り　森山悠子
太ること気にしながらも又ばくり　礒島恵子

円筒状（シャフト型）の炉で周囲はレンガと石囲いでされ、口に炉口、炉は下で朝顔型となり、流出口（銑鉄・鉄滓）は下にある。

投入された鉄鉱石と木炭（のちにはコークス）は、上部で燃焼し、中央部で鉄は酸素を失って還元し、下部に溶解し吸炭して銑となる。（わが国の近世企業たたらの製鉄の原理と同じである。

反射炉

これについては、前号とこの号で補正追加してあるが、これは、銑鉄を溶解するための炉である。

西欧では、18世紀末～19世紀初めに、反射炉が完成し、銑鉄の質が良くなり、鋳造した鉄製砲も発射によって砲身が破裂しないようになった。そこで西欧では砲兵戦時代が招来し、高炉と反射炉が急速に数を増した。

この本には、高炉の築造から操業法、反射炉の築炉と操業法、大砲の鋳造法、さらに原料鉄鉱石に関することまで誌されている。

日本が反射炉鋳造法、高炉法を導入して、製鉄の近代化へと急な進歩をとげ、西欧から2世紀半の遅れを半世紀でなしとげることができたのは、この本が手引であり、蘭学者の努力の賜であった。

反射炉はのち改良されて、パドル炉となって、銑鉄溶解炉から、銑鉄精錬炉—炭素へ減らして鋼とする—となった。

19世紀に入って転炉・平炉が発明され、銑鉄から大量の鋼が生産されるまで、製鋼炉として用いられた。

わが国にパドル炉が入ったのは19世紀末の明治初年である。それを高炉とともに設置して、銑鉱石でなく砂鉄で試みようとする計画が奥出雲の一角で樹てられたのである。

反射炉は初期型（前号）と改良型（この号）と、パドル炉へと段階がある。

わが国でも反射炉と高炉の出現は、海防のための大砲を造るためであり、鉄鋼石が少ないことから高炉がおくれ、和銑（企業たたらの砂鉄からの銑）を用いて鋳造するため、反射炉が導入された。

近世企業たたらとこしき炉

こゝでわが国に於ける銑生産と、鋳鉄法について簡単にみて置くことにする。

原料は砂鉄と木炭であって、

○四日押（4昼夜操業）では、銑を生産する。

—全国各地で操業

○三日押（3昼夜操業）では、銑を生産し、炉底に半溶融の諸鉄の塊（鎚）を生産する

—奥出雲とその東辺、

西辺で操業—　鎚の中に鋼があり、それを除いたあとの歩鎚と銑を大鍛冶場で割鉄（包丁鉄）とした。この収入が経営の8割を占めていた。従来この点の理解がされていなかった。

なお、銑の一部は鋳物用として売られていた。反射炉がわが国に入るまでは勿論、一部では今もわが国では、銑を溶解して鋳型に入れるための溶解炉は、こしき炉である。（多くは改良されたもので、キューポラ　樽の意　という）

これで銅の溶解もし鋳物つくりをしたが、温度が低く溶解する量も少く、反射炉にくらべて劣ることは明らかである。

靖国神社の庭にある一貫百匁砲（砲弾の重さ）は慶長16年1611の作であるが、研究の結果では鋳鉄砲ではなく、数多く鉄片を張り合わせた鍛造品であることがわかった。その後の砲は青銅砲であって、その鋳造法の書の中のこしき炉の絵が上のものである。

誇り得る鉄生産

前号の補正

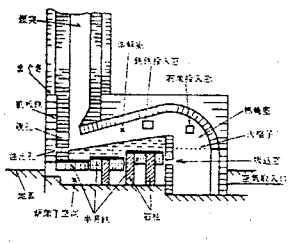
前号の「銑生産の系譜」の記述で、原稿への印刷の指示が不十分で欠落がありました。ご厚意ある指摘も頂き、追加します。

（前号213号2頁3段13行を訂正して10行を挿入する）

解する炉であったが、高炉による銑鉄が生産されるようになると、その増産に伴い、銑鋳造物の大形化の要求に促され、ヨーロッパではわが国に導入された19世紀半ばには、改造され銑鉄溶解炉として用いられ、他方では銑鉄精錬炉（パッドル炉とも呼ばれた製鋼炉）にも用いられた。幕末に（以下に続く）

（前号全前の27行の次に8行を挿入し、改造された図を挿入する）

のち鉄鋳造物の大形に応じてその溶解炉としてこの反射炉が採用されて、溶解温度の高い銑鉄に対処して、炉床は煙突下側に設けた注出孔の方向に傾斜し、天井との間を狭くして火炎が、装入溶解物に直接当る構造に変った（左図）。



18世紀に於ける先進地イギリスとわが国の生産量を、大橋周治の計算でみると、1780（天明初）年の「大坂登鉄高」をもとに計算してみると、中国地方の銑鉄生産量は15000トンとなる。これに奥羽地方の産鉄量を加えると、18世紀初めのイギリスの銑鉄生産の年間量18000トンに、ほゞ匹敵することになる。このころはイギリスではコークスによる高炉が発明されて（ドイツ・フランスではまだ木炭高炉）、量産に入った時代である。

つまり18世紀来の日本の鉄鋼（鋼は少ない）生産構造も、生産水準も、わが国の製品の和鉄の品質がおとることを別とすれば、ほゞイギリス同じであったということになる。

極めて原料からの歩留りの悪るい企業たたら操業であったのに、これだけの生産をあげていたことは誇りでもあった。

これが明治27年になると、和鉄の生産量は減少しないのに、釜石製鉄所の高炉だけで、これを越る13000トンを生産して、近代社会の鉄需要をまかない、ついに近世企業たたらを衰退への押しやってゆくことになる。

（高橋一郎）

出雲大川流域物語④

川を渡ると三津池

―今も生きている出雲国風土記の記述

物語の地こゝである

『出雲国風土記』（以下『風土記』とす）には、布勢の郷と三沢の郷には次の伝承が書かれている。

布勢郷とは、昔大穴持命（大国主命）が宿られたところでそれで布世といったが、のち布勢郷と改められた。

三沢郷には、大穴持命は息子の阿遅須枳高日子が生れながらは立って父の前を通り外へ出て、前の川を渡り坂を上って、清水の湧き出るところへつくと、「此処」と言った。そこでその水に沐浴しているうちに、唖病はなおった。

（そこで仁多の長は出雲朝廷ー大穴持命と息子の居所ーに参向する時は、この御津の水で沐浴斎戒するのがならわしとなっている。――古田武彦の解釈）

これで今でも（『風土記』の時代即ち8世紀初め）、姓産婦はその村の稲を食べない。もし食べるものがおれば、生れてくる子が十分に口が利けないからである。

そこで郷名を「御津」と呼んでいたが、のち「三沢」にあらためられた。

すると大穴持命が神から夜に霊告をうけたのは、前の夜の宿泊地であったと考えると、布勢郷がその地で、布勢から少し東南へ進むと川がある。出雲大川である。（当時大原郡の部分だけを斐伊川と呼んでいた、のちこれが出雲大川全体の呼名となった。――くわしくは本誌130号を）

現在右岸の布勢の小字に佐々木があり、そこから川を渡ると、三沢の字光田（もと三津田）であって、国道314号線をよぎって山を30mほど登ると、こんこんと清水の湧き出ている三津池がある。

大穴持命の息子が「唖病」を発病したのは、その誕生地である。出雲郡（現簸川郡）の高岸郷であると、「風土記」にある。

今の出雲市塩冶町の神戸川の北岸、高西の地である。

光田（もと三津田）の下方に神田があって、今も昔語りとして唖病の問題があるところである。

三津池をめぐって

今日こゝを訪ねると、池の上手には、左右2個の岩石がそそり立っていて、その周囲には小岩石がとりまき、正面のものは祭壇のようになっている。

縄文時代までの信仰の中心は巨石信仰であった。典型的な岩石（陰陽石）の信仰の聖地のようである。その下段の三津池は神の泉として、信仰の聖なる池であった。

それにひき寄せられて、大穴持命とその息子は、首尾よく治癒したという話になったのであろう。

三津池の下方の神田と呼ぶ土地は、江戸期以前については定かでないが、江戸期から明治期にかけて、また大正・昭和の戦時中にかけて、下作田として耕作されていた。現在も水田跡であることは明らかである。

明治時代の一家族も、唖病者を続いて出して不幸だったと記録にある。故老も知っている昭和の時代の耕作者も、以前の家族と全く関係のない一族であったが、同様な人を重ねて出していたと言う。この問題についてはこれ以上は触れないでおく。

三津池をめぐる信仰

明治35年の三沢神社（祭神は阿遅須枳高日子命）の由緒書には、この地は三沢村大字三沢字三津田（光田ともいう）で、三津山の北面に三津池があり、その下には神田があると、当時の様子がくわしく述べてあって、少しも疑うところがない。

また光田の現住人の話によれば、明治時代半ばこゝの春の祭は大変に賑ったという。今も両巨石と三津池の間には、数段の

前号訂正　1頁2段19行　・　卦紙　1頁4段31行の洋式を××削除

削平地がある。当時こゝに祭礼の時には、みやげもの屋や中食の弁当屋が開かれたという。

川向いの佐々木の大徳寺の近くの農家の主婦は、この賑やかな人出をみながら炊事して、鍋の中に入れた筈の団子をすべて、いろりの中へ投込んでいたという話も伝えられている。

また三成町の駐在さんが、この賑わいを整理するために、邪教呼ばわりもしたところ、数日後に頓死したとも語り伝えている。

過疎化がはじまった昭和32年ころまでは、光田の人々は、春の祭礼には、この三津池を清めてまつり、直会も開いて楽しんだ。それは長い伝統であったという。最近これをまつって顕彰しようという動きもある。

三沢城趾の刀研ぎ池＝三津池説

10数年前から、突如として三沢城趾の刀研ぎ池に、三津池という立札と由緒が出現した。領主三沢氏の物語りの中の刀研ぎ池としてあったのに、これが古来よりの三津池であるとする理由はどうしても見当らない。

地域庶民の神社信仰にも心を配っていた三沢氏が、これほどいわれのある三津池を、しかも生ぐさい刀研ぎ池にすることは考えられない。

また「三沢氏系譜」には、城山の頂きに大きな石があって、亀の形に似ていたので、この山を亀嶽と呼んだと書かれているほどである。三津池はこの山にはなかったのである。

―この三津池をめぐっての、詳細な考証は、今春発行の出雲国風土記研究会発行の『風土記論叢第3号』に発表するので、あわせてお読み頂けば幸いである。（横田史談会　高橋一郎）

感謝

本号・前号の「銑生産の系譜の記述については、**大橋周治・芹沢正雄**両氏の著書や論文、さらに御指導によったものであることを記し、感謝致します。

斐の上川柳三月号

万年床昼と夜とを間違える　若槻白馬
煮凝りを探して独り酌む留守居　高木凡太
亡夫見上げ今年は米寿と話しかけ　安部春恵
ぬるま湯に育った罰が今きびし　松浦久寿子
春めいた日射しに白髪気にかかる　藤原千代子
腕ひとつ女の底にある強さ　渡部ミツコ
雪降りて安堵するのも又おかし　礒島恵子
顔ぶれを覚え病院馴れてくる　児玉哲呂
ひらり見ていた顔のままニュース読み　松浦亜以
残念とつぶやく病夫に言葉なし　佐佐木千世
珍客ではずみ料理の手が力む　安部正子
添え寝した孫振袖を着る育ち　石原冬明
鬼は外投げた福豆はね返り　中林もりえ
かじられた塵が今頃痛くなり　横山まこと
ショッピング孫ものばかり目に入る　田中有樹絵
百才で税金払うきんぎんさん　松田牛歩
冬だけは我が世の春と趣味にこり　真綿よし子

南に向きて　簸の上短歌会

汐鯖の青き模様に子は母と故郷の生活を常思ふとふ　永井弥生
節分にさきがけて三椏の花二つ雪なき峡の南に向きて　〃人
銀色の産毛きらめく猫柳に風やわらかくそよぎてをれり　岡田時子
大雪の兆ならむか雷ひびき小屋の犬泣くを夢さめて聞く　〃人
思はざる告白を聞く宴のストーブの炎わが頬にあつし　佐藤喜代子
大水に圧されて葦は弓なりに茎しないつつ光りをかへす　〃人
雲上はいまだ明るく今発ちし暮れたる伊丹の街の灯の色　常盤はるまさ
春一番に庭雪消えて埋めたる大根の首にやわら芽の見ゆ　〃人
線なりし飛行機雲のあはあはとほぐれてをりぬ峠道越ゆ　小早川恵子
雲うすく北よりの風吹き出づる杉ひと枝のゆらぐと見えて　〃人
いく月を卵を産まぬ鶏なれや春を恃みて餌を持ちやる　野村節子
テレビジョンに映る女性の服装のやさしき色に春は立ちたり　〃人
海鳴りを遠くに聞きて暮れなずむ花巻の街雪ふりしきる　安部夕波
北海の渚に拾ひし櫻貝病む枕べに京子は置けり　〃人

柴栗句会二月

たたら炎の脈とる村下寒の汗　浅野としお
着ぶくれて夫婦喧嘩も生きる芸　糸原古志
豆撒きを大人の遊びと訝る瞳　岡田踩花
窓につく春雪波紋消えてゆく　小川月舟
水仙の瓶凍てにおいなき寂　恩田和美
春兆し夢ありし日を振り返る　加納信子
受験パス日々平穏の声届く　門脇花子
経の声癒やせぬ病や落椿　楠房子
春雪を冠る野仏只寡黙　高木白虹
春雪にひっそり打つや古時計　中澤美紀子
一トしきり音なく積る春の雪　新出谷一華
霞む眼に春の動きを拾い読む　小川錦織
春雪を踏みしめ渡る生活橋　峯石富江
風花や髪長き娘と擦れ違う　渡部美代子
　　夕峰

会員頒布一部三百十円／〒六九―一八　島根県仁多郡横田町二、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる⑤島根県議会史にみる奥出雲の人々②・横田三十三番札所めぐり⑧・俳句・川柳・短歌

奥出雲

題字　糸原風亭書

第216号
（4月号）
1993. 4. 3
（M125・T82・S68）

奥出雲編集集団©

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる⑤

狐の嫁入り（晴天雨）

番外―東アフリカ・朝鮮では―

当地方での使い方

子供のころ日が照っているのに雨が降ると、「狐の嫁入りだ」「狐の祝言だと言って、殊更に俄雨（驟雨）の中を飛びまわったものだ。こうした気象現象を、日照り雨・天気雨・日当たり雨・日和雨・てらてら雨・狐の祝儀などと、主として西日本各地で呼んでいる。

1732（享保17）年刊行の戯曲の『檀浦兜軍記』には、「ヤァたった今迄くわんくわんとした空であったが、エエ聞こえた、狐の嫁入りのそばえ雨（戯え雨・たわむれ雨）晴らして往かう」という悪七兵ェの科白がある。また1780（安永9）年刊行の『大通俗一騎夜行』第2巻には、「大日照雨が降ると狐の嫁入りで結納もやらぬ先の押推量」というのがある。

また子供のころ、夜の山裾に赤い灯の行列が点滅するのを二度みたことがあった。あれは狐火だとか、狐の嫁入り祝言の行列だと教えられた。これは狐が口から火を吐くことから生ずるという俗信も聞いた。狐がもつという怪しい幻術と結び合わせたものであるが、実は燐が燃えるからであると教えてくれた人もあった。これは実際には土中の燐化水素が雨あがりなどに、自然に発火するものであろうと教えられたのは、ずっと後に師範学校に入って榊という化学の教師が、身の廻りの種々な現象を化学的に化学分子式を用いて解説した一連の話の中であった。

民俗学調査では各地に、いろいろの例があるが、こゝでは省略し、以下に小馬説を紹介する。

朝鮮半島の場合

日照り雨を「狐が結婚式を挙げる」という。また「虎が妻家へ行く」ともいゝ、結婚式は若者（新郎）が娘（新婦）の家に行く儀事からはじまる。日朝ともに、日照り雨を表わす換喩（たとえがえ）的な表現はよく似ている。ともに狐が人里と山（異界）の中間領域である野の代表的存在と考えられているためであろう。

東アフリカでは

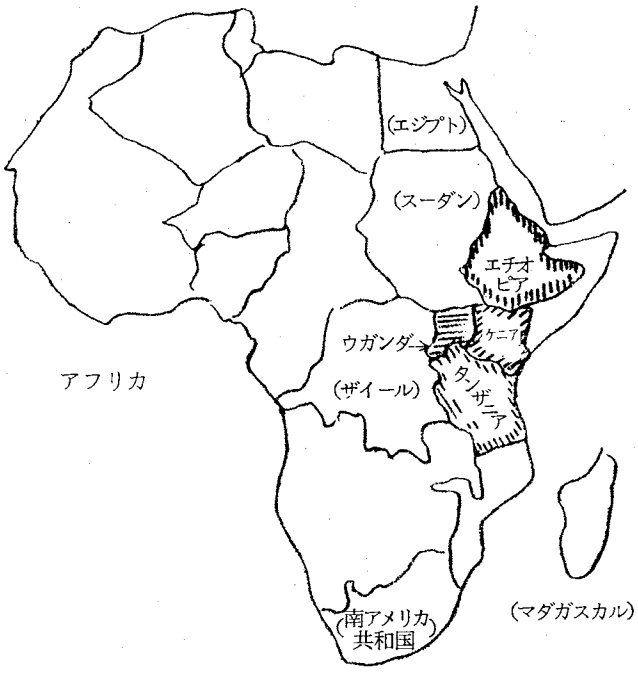
東アジアから東アフリカという、地球上の地理的にも歴史的にも隔絶した二つの地域で、日照り雨に与えられた表現がよく似ていることをくわしく述べる。

東アフリカで代表的なのは「ハイエナが結婚式を挙げている」である。

ケニヤで最大の人口320万をもち、ケニヤ独立運動の中核となり生活の近代化が最も進んでいるギクユ人の間では、「ハイエナが〝まさに〟結婚式を挙げている」。やはりケニヤの18万人のエムラ人、84万人のメル人の間では、「ハイエナ（後者では祖霊の意強い）が、〝まさに〟割礼をしている」と言い、日照り雨は魔物のごとく恐ろしい。その時子供が外で遊んでいたら、親が子供を必ず屋内に、棍棒で打ちすえても呼び入れなければならなかった。もし遊んでいれば、父親や氏族の長老が山羊を一頭供犠して浄化儀礼をしなければならなかった。（大人は差支えはなかった）この儀礼を怠るとやがて早魃が起こり、飢餓が到来するといわれている。

ハイエナ＝犬に似た哺乳類動物。アフリカに棲む夜行性の集団による腐肉を食べるもので、かつては沢山棲んでいて人々が恐れていた。

ケニヤ第4の人口173万人のカムパ人の間では、「ハイエナが子供を産んでいる」。タイタ人（15万）では「ハイエナが結婚式を挙げている」という。しかし子供を呼びもどすことはない。



タンザニヤのスワヒリ人・ザジバル人・ヤオ人・マコンデ人・サムバマ人は、「ライオンが出産している（またはした）」という。これは日照り雨はライオンの出産と同様に、滅多に遭遇することのない極めて珍らしいことだからだという。子供を外から呼びもどすことはない。

ふたたびケニヤにかえり、ケニヤ第2の人口212万を有するルイヤ人の間では、「ヒョウが出産した」に類する表現がある。

ルイヤ人は日照り雨を危険な状態だと考えている。ヒョウやハイエナが出産するゆえに、日照り雨の時に凶暴になると言っている。こゝでは子供を外に出さない人が少なくない。それはマラリアになる。風を引き易い、発熱するともいう。落雷の被害も多い。そこで浄化儀礼（子供と同じ黒い色の山羊または鶏で）をするともいう。

また日照り雨の時に、子供を川に行かぬようにするものもある。それは急激な増水や鉄砲水に見舞われる危険があるからである。

またハイエナや山猫、ヒョウは「夜走り」妖術師の使い魔とされ、それに妖術師が背中に裸で跨って走りまわると、誰かが必ず死ぬというところもあるという。

さらにウガンダの数種人の間にも、ヒョウ・ハイエナの出産を言っている。エチオピアでは狐が出産するとも言っていて、これまではヒョウ・ライオン・ハイエナ・祖霊等であったが、日本語の狐に近いものになっている。

まとめると東アフリカでは、「〇〇（動物）の出産」が圧倒的に多い。そして動物ではハイエナが12例。ヒョウとライオンが5例で計22例は、いずれも往々人里に現われては人を襲う、極めて危険な野獣である。このうちでも特にハイエナとヒョウは、妖術師に関する観念複合と密接に結び付けられている。

東アフリカと日本・朝鮮半島の比較

これまでのこの連載では、大陸から日本へ、奥出雲への民族の渡来に伴う事象・習慣や思想の紹介であったが、今回はそれには触れずに、それぞれ（日・朝は同根かも知れないが）独立して発生したものという民俗学的思考と、文化人類学的思考による考察を導き出し、新らしい学問を提唱されているのを紹介した。

また日本の古代神話についても民族移動に伴って大陸から伝ってはいるが、やはりそこには地域の風土に育った民族思考の特色があるという学問もあらわれている。神話解釈をさらに深め拡げるものである。出雲に関連した部分も、いずれ紹介したい。

東と西の2地域は、地理的にも隔たり、シルクロードの陸の南・北の2つの道、また海上の道を考えても相互交流の跡は見出し難い。（断片的には1～2あるが）だが両地域の日照り雨に関する言語表現と観念および慣行が、表面的な微差を越えて、極めて相関的な印象を与えてくる。

雨地域を分けると、「狐の結婚」と「ハイエナの出産」である。日・朝では結婚が人生に於ける最も重大な移行期であるが、アフリカではそれは出産である。自分の集団の永続のために婚入する女性の出産能力が、両地域とも変らない。だが東アフリカでは、女性は男性と同居し、1～3人の子供を出産し終えた時に初めて正式に男性の集団の成員と認められる。これで離婚が不可能となる。充分な出産能力の証明できなかった女性は、親元に返され、婚資は戻さねばならない社会習慣である。

日本・朝鮮の動物は狐でありアフリカでは種々あるがハイエナが中心である。ともに狐は狼・熊と比べて、ハイエナはライオンやヒョウと比べて、圧倒的な動物的な力を持たない腐肉食の獣であり、いずれも往々人里に現われる代表的な野獣である。またアフリカには狐とする例も少ないがあった。

まとめ

「狐の嫁入り」も「ハイエナの出産」も、ほぼ同一の論理構成を持った表現である。通常は見られない天象の混乱である日照り雨は、人々の情緒を乱し不安に陥入れ、その不安はやがて自分たちの身の廻りの生活に発生するのではないかということになってくる。そこで「晴／雨」の混乱をあらわに表示するのは禁厭となり、原因と結果を置きかえる表現である。「狐の嫁入り」「ハイエナの出産」が代用されるのである。

「狐が結婚式を挙げるから、日照り雨になった」「日照り雨になったから狐が結婚式を挙げる」とたとえを替えたのである。

人間の世界とその外部（異界）の中間部を代表する獣（狐／ハイエナ）が、人生段階の移行（結婚／出産）といういずれも中間的なものが選ばれている。こうして「狐・ハイエナ」と「結婚／出産」と日照り雨の三者がともに中間的な共通点を介して、隠し比喩的連想が働いている。がそこにはこの表現の中に一層積極的な心理的意味をもっているのである。つまり自然界における意味不明の混乱（日照り雨）を、人間界と動物界の中間的存在、人間との出会いの多い（狐／ハイエナ）と、人生段階に於ける必然的結婚／出産に重ねあわせて理解をし、密々に不安を解消しようとしたもので、東アフリカの数多い人種でも遙るか東の日本、朝鮮半島でも同じである。

以上は神奈川大学日本常民文

化研究所所員小馬徹氏の、同研究所論集9に掲載の論文の要旨である。記して感謝し、誤まりがあれば本紙の編集者の責任である。

論者の学問的論点は省略させて頂いた。別の機会にユングの深層心理学をとり入れた比較神話学の立場からする、オロチ退治神話の一段と深まった考察を紹介する。

（横田史談会　高橋）

島根県議会史にみる 奥出雲の人々 ②

郡の統合分離

1879（明治12）年郡役所が設けられ郡長は

～明治17.3　藤岡暢茂

であった。翌13年2月には仁多・大原両郡が合して一郡役所の下に置かれ、続いて藤岡が勤続した。のち

～明治17.5　千家尊賀
～全　22.6　門野直道

（事蹟については本誌118号に）

～全　24.12　若槻　敬
～全　29.1　毛利弥八
～全　29.8　古川龍造

で、郡役所は大東町にあったが明治29年分離して、郡役所が三成村に置かれると、新らしく

29.8～明治35.4　井川　洌
～全　36.6　勝田　懋
～全　39.4　片野淑人
～全　40.11　山本良次郎
～大正2.1　藤田幸年
～全　6.6　川辺哲哉
～全　12.3　吉村政次郎

で郡制は大正12年4月から廃止となった。

明治22年の関係郡の状況は

収入税目	仁多郡	大原郡
総高割	11,665.222	18,739.805
地租割	8,659.917	14,135.203
戸数割	1,584.470	2,334.522
営業税	1,300.660	1,914.328
商業税	662.415	1,247.255
工業税	638.245	667.015
雑種税	117.325	323.050
屋店税	0	24.750
理食屋税	28.075	68.295
髪人税	0	12.000
湯税	700	12.950
船税	0	11.450
車税	1.000	23.500
力車税	4.000	62.250
荷水車税	14.800	33.000
乗馬税	6.000	3.000
鳥獣猟税	500	3.500
漁業藻税	30.700	19.675
採税	0	0
稼税	2.100	0
場市税	0	13.600
芸妓税	0	0
遊芸遊牛税	19.600	8.700

	人口	戸数
島根県	七〇〇、二八三	一四九、〇三七
松江市	三三、六五八	八、五三四
大原郡	二九、三〇五	六、三七三
仁多郡	三、三七一	四、三六九

明治23・6・27付で仁多郡大原郡長若槻　敬は県知事籠手田安定に、県秘第一号の諮問に次の如き意見をのべている。仁多・大原・飯石郡を合併すれば大原郡木次村に郡治庁を移し大原郡と呼称すべしと。

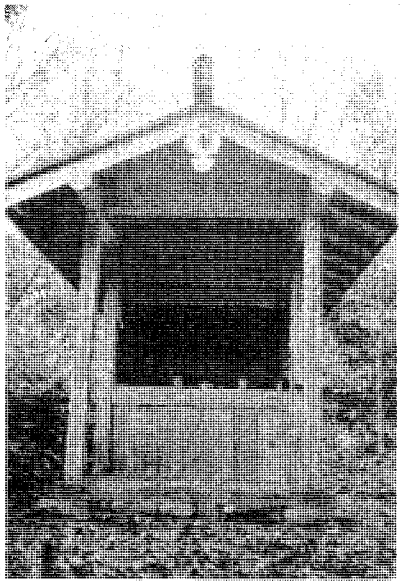
これに対し仝年7月に郡合併の件の建白書が、八川村大谷の絲原武太郎と阿井村上阿井の桜井三郎右エ門から出され、合併によって戸数も増加し、県税郡費の経済上大いに得るところありと述べている。また「不肖**治兵衛**等粛ミ謹シンデ書ヲ裁シ我ガ仁多郡ノ…」と建白書を呈し三郡の合併はわが郡の安危の決切迫の折、採納賜はば郡民千載の幸福であるとしているのは、村長　**中沢治兵衛（横田）**、馬庭又右エ門（布勢）、長瀬平三郎

横田三十三番札所めぐり ⑧

第11番　竹崎・山郡　林照庵

（林・田辺彰一方の上）

おぼつかなたづねもならぬこの山の林の光たのみゆきつつ



（写真　佐世川徳雄）

三月柴栗句会

間歩を出て春日に酔ふてつまづけり　浅野　としお
風光る洗心の文字墨ふかく　糸原古志
寄せ鹿のさがしき耳や風光る　岡田麗水
廃屋や無心に膨らむ草木の芽　岡田蹊花
啓蟄や濡れたる玩具遊ばせて　小川月舟
梳かる牛抜毛が軽く東北に舞ふ　恩田和美
風光る丘の校舎を卒業す　加納信子
廃校に想ひ出残こし卒業す　門脇花子
指先きに遊ぶファミコン春炬燵　楠　房子
日脚伸び遊び疲れて母の膝ざ　高木白虹
帰りぎわ葱堀る母のありがたき　中澤美紀子
北指して翔つ白鳥の親子らし　新出谷一華
老婦人赤いスカーフ春に揺れ　錦織富江
孫の声大きく聞こえて春近し　峯石美代子
風たかる湖面を滑る漁舟　渡部夕峰

斐の上川柳三月号

目立たない花にも蝶は来て止まり　石原冬明
冬の下昔の写真などを見る　児玉哲呂
目を入れぬ達磨のまゝで老を知り　松田牛歩
腰のばし夢路歩いた夢を見る　安部春恵
かすむ瞳に選句の文字があざ笑う　高木凡太
これからは甘える者のない旅路　松浦久寿子
出る孫に横から応援婆ばの役　安部正子
吾がまちで賃は安いが働くか　藤原英生
年寄りえ内証話は出来ぬ耳　横山まこと
植音を電動がんなが消してゆく　田中有樹絵
巣立つ子等決意を胸に見送られ　佐木千世
叱っても慣れてる母がいいと言う　中林もりえ
猫柳活けて仏に春を告げ　若槻白馬
劣等感いつもどこかに持ちつづけ　藤原千代子
中学を終える息子に夢託し　磯島恵子
もどり寒ずっしり重い綿帽子　真綿よし子
ありのまゝ言って喧嘩の親子仲　渡部ミツコ
張り合いになるがと重荷背負わされ　藤原のぼる

土はほっこり

足を病む老の炭やく煙らし向ふの山にこの冬を　永井弥生
立つ雪の消えし畑に入れば足うらに土はほっこり生き　〃
ゐるごとし雲間洩るる陽に淡雪の舞ひながら行方は知れず　〃
庭に佇むサイゴンに共に働きし婦長さんに病む妻に代り賀状を書きぬ　野村節子
日に四たび便器洗ひて年迎ふ今宵はとくに念入りに洗ふ　常盤はるまさ
炭焼きて吾等を育てし亡き父の働きし山に初雪の降る　〃
大雪に埋れし遠き幼き日杓子祭をひたに待ちゐき　佐藤喜代子
廃屋となりし隣の草屋根を雪崩のごとく雪ずり落ちぬ　景山悦子
春立ちぬいずくか知れず呼ぶごとく叫ぶごとくに鳥の鳴くなり　岡田時子
陽の射せば溢るるごとく雫して櫻の枝に春の雪なる　〃
少年に追はれて逃ぐる野良犬の叫べる声は風に消へゆく　小早川恵子
海鳴りをはるかに聞きて夕茜空を染めつつ岬暮れゆく　安部夕波

簸の上短歌会

税	1,200	
税	23,200	
税	0	
税	0	
税	0	
税	0	
税	0	
税	2,000	
税	0	
税	0	
税	0	
税	0	
入	0	
雑	32,800	
所	800	
車	8,000	
師	0	
優	0	
席	0	
宿	0	
受	0	
市	0	
撲	1,000	
車	0	
収	0	
覧	0	
寄	0	
動	0	
芸	0	
人	0	
自	0	
遊	0	
俳	0	
人	0	
雇	0	
鶏	0	
相	0	
牛	0	
雑	2,850	

（亀嵩）、金坂儀一郎（三成）畑久太郎（鳥上村長鈴木寛造代理助役）、山本寿作（八川）、枝木林五郎（馬木）、杠六郎左エ門（阿井）、村尾亭太郎（三沢）、川角文左エ門（温泉）等連署のものである。

明治17年4月の第4回選挙の半数改選で17名が当選した。仁多郡では**佐白村馬庭又右エ門**であった。翌18年12月に残余の15名の半数が第5回選挙によって改選された。

明治19年12月の第24回臨時議会に於て、この年9月24日の洪水により提防が決潰した。横田川・大馬木川の修覆工事費の追加支出が協議され論戦が展開された。この年の被害は第1種道路42カ所延長850間1歩、橋梁12か所16間3歩、堤防105カ所延長3,677間4歩の11月18日にこの二件が加わったので難行したが、議員**田村権次郎（横田）**の努力が実を結ぶことになった。

明治20年11月の通常県会に於て、議会内の常置委員高橋久次郎ら4名より、本県尋常師範学校に関する意見答申が行われている。それによれば、

第1に校長・教頭・幹事・舎監の校内整理不行届のこと。第2に教員の欠席の多きこと。第3に監事舎監の生徒を過すこと苛酷なること。第4に舎監の生徒を過する不信切なることの4項目があった。

第3のことは今年の天長節の祝日に外出時間を伸延する慣行を行わず、生徒よりの数回の嘆願も斥けたが、午後1時になって特別に9時までの掲示を出した。ところが外出して9時前に帰校したところ門が閉されていた。ところがこれは偽造の掲示であったのに、処罰したことをいう。

また別件で5名の退学者を出しているが、これは優秀な生徒であり、先の事件に於て禁足させられた者を重ねて罰を科したものであって、地方税によって養成している師範学校生徒を中途で逐うのは不経済である、生徒の萌芽をつむことである。復学をと迫っていて、質疑が行われている。

後日物語であるが、5人のうちに**仁多郡三成村の坂田重次郎**がいた。大志を抱き上京し、一橋高等商業を終え外交官試験を経て、朝鮮馬山浦の領事となった。日露開戦となり、馬山浦は極東の良港で大艦隊の根拠地として極めて重要地点であることを帝国海軍に報告し、連合艦隊は東郷平八郎のもとゝにたむろし、バルチック艦隊の邀撃に成功することになった。この裏に坂田の功績があった。

のち小林寿太郎外相の下で通商局長となり、その媒酌で結婚（夫人は昭和30年代末死去）し、ロンドン・スペインの公使を歴任した。米国大統領の仲介で日露間の講和となり、小村外相、高平駐米大使を全権とし、坂田スペイン公使は随員としてポーツマス会議に列席した。講和後惜しくもスペインにおいて客死した。（島根県議会史ほかより）

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第217号
（5月号）
1993. 5. 1
（M125・T81・S67）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治以降の奥出雲に於ける鉄生産の系譜③・島根県議会史にみる奥出雲の人々③・俳句・川柳・短歌

明治以降の奥出雲に於ける鉄生産の系譜③

——幕末佐賀・薩摩両藩の動きから

先進地・佐賀藩

戦国時代に渡来した型式と鋳造法によって、佐賀藩では1798（寛政10）年に青銅砲を製造した。

こうした情勢下の1836（天保7）年に長崎の出島を経て、ヒュゲェニンの『大砲鋳造法』が入って来て、その翻訳にも入った。

長崎砲台強化の必要にせまられ、同じくオランダから輸入した砲を模して、青銅法の本格的製造にとりくんだのは、'43（天保13）年に蘭伝砲製造所を設けてからで、その数は

'44（天保14）～'65（慶応元）203門

うち'56～'58（安政4～6）に136門であった。これに対し鉄製砲は、

'51（嘉永4）～'67（慶応3）195門

で、青銅砲と並行して製造されている。

この17年の歩みはめざましいもので、西欧が歩んだその歴史の100年分にあたるものである。

この鉄製砲195門のうち要塞砲は125門あって、その移出先は

幕府へ　77　阿波藩　20
対島藩　3　佐賀藩（自藩）25

であって、そのほとんどは、品川台場・鳴戸海峡・対島海峡・長崎という、最重要地点に配置されている。

佐賀藩鉄製砲の歩み

反射炉は'50（嘉永3）年末に完成し、銑鉄の溶解にとりくんだ。材料は石見産の砂鉄銑、木炭は日向・肥後産のものであった。嘉永4～5年にかけて16回の溶銑そして砲の鋳造を試みた。

第5次以降は溶解もうまくゆき、中空の砲身ができたが、試射の結果は砲身破裂に終った。16回の試鋳で11門ができたが、5門はすべて破裂し、他も完成とは言えないものであった。

この原因は不明であるが、砂鉄銑の品質上の問題であったようである。これを克服して先に述べたように、諸藩のうちで最も大量につくった。'58（安政5）年に輸入銑が入ったが、鉄製砲はほとんど（148門）これまでにつくられている。安政6年秋幕府に鉄製砲3門献上ののちは、巨砲がつくられなかった。

時代は西欧が鋳鋼砲へと向い、アームストロング砲時代となっていた。佐賀でもこの模造もしたが、製品への技術の対応ができず、輸入品にたよった。佐賀・薩摩の輸入品が、維新の上野の戦い・会津攻めの戦いに使用される。

佐賀藩成功の裏には

横田町にも数回来訪したことのある、ドイツのE・パウアーは、本誌214・215合併号に載せている、「こしき炉」と「踏みたたら」を使用して、砂鉄銑（白銑）を鉧銑に改鋳して、反射炉による溶解に適した鋳物銑がえられたと述べている。

これについては見解が分かれているが、「こしき炉」によって第一次溶解をしたのは事実とみられる。

白銑―破面が白色で、性質硬く、低温度で溶解し流動性が少なく、鋳物によくなく、錬鉄（割鉄・包丁鉄）とする。

鉧銑―破面が鉧色で、性質軟弱で流動性が良く、鋳物に適する。

こうして製造された砲の威力については、外人船将ハービスが語ったところによると、命中しても船体には少しの傷害を与えるだけで、おそるべき威力なしと言っている。強硬な攘夷論者の薩長の志士たちが、忽然として開国論へと転向した裏には、馬門戦争・薩英戦争の体験が、彼我の大砲の威力の格差を認めたからであるともいわれる。

こうした佐賀藩が巨額の費用を投じて、各藩に先がけて進んだのは、①長崎に近く蘭学者が多く、洋式砲術を知るものが多く、地理上海防優先せざる得なかった。そこで特産品収入をすべてこれに振り向け、職人の組織を兵器製造むけに編成し、その指導にあたるものをもって、精錬方という理化学研究所を設置したことであるという。嘉永6年には見学者が相次いでいるが、松江藩の者の名は見えず、大砲購入藩にも入っていない。また当時の松江藩の財政は容易ではなかった。この点は後でさらに解明することにしたい。

薩摩藩高炉製鉄へ

鹿児島の藩邸近くには1850（嘉永5）年、洋式製鉄、反射炉による鋳砲事業のほか、ガラス製造、製紙、搾油、地雷製造など多彩な近代工場群を経営して集成館となずけた。近くには蒸気船を建造した造船所もあった。

のちには機械紡績織物工場も英国人の指導によってはじめるなど、幕末諸藩の中では群を抜いていた。藩主島津斉彬の方針によって、一方製煉所を設け、新技術を工業化する前の試験研究を行なう研究所とした。これを集成館の諸工場で実現してい

くという画期的なものであった。
その一部は今日保存されている。

そして佐賀藩に続いて2番目に、1854（安政元）年反射炉によって鉄製砲の鋳造事業をはじめた。さらに佐賀藩では手をつけなかった高炉による近代製鉄法の導入を試みた。これは鉄製砲のためのみが目的ではなかったと見られる。反射炉は銑鉄を溶解するが、在来の銑鉄では鋳砲の材料として不向きであるので、洋法の銑をと、洋式熔鉱炉をつくり、砂鉄鉱、藩内の岩鉄鉱をもって、良銑をつくり、反射炉に熔し鋳砲に成功した。

この高炉は、佐賀藩主から贈られたヒュゲェニン著、手場謙蔵記の『西洋鉄熕鋳造篇』にある設計図によったものとされている。原料は砂鉄と鉄鉱石、送風は水車動力、燃料は木炭・石炭の併用であった。

これは安政元年7月という。この月斉彬の急死で、集成館の事業の全体が一時停止し、'86（文久3）年の薩英戦争で英船に砲撃され姿を消した。

高炉は日産700Kgであって、3年後の安政4年、南部藩の釜石に建設されたわが国3番目の、洋式高炉の生産量は750～930Kgであった。（第2番目の高炉は函館であったが成功しなかった）

集成館の高炉は安定した継続操業の城には達しなかったので、工業化の成功は釜石鉄山のが最初で、高島高任の功績とされることになった。

薩摩藩の反射炉

佐賀藩におくれること2年の'53（嘉永6）年夏の第1号炉はうまくゆかず、'56（安政3）年の第2号炉では最初の鋳造砲が出来たが、試射で破裂し、翌年の第3号炉ではじめて成功した。

薩摩藩の製砲事業は佐賀藩と同じく天保年間に、青銅砲6門の鋳造が最初であって、'46（弘化3）～'63（文久3）に、794門という数字があるが、このうち反射炉によって鋳造された鉄製砲　58門
他は青銅砲　736門　とみられて、製砲数は佐賀藩の

鉄製砲　195門
青銅砲　203門　＞398門

に対して2倍であるが、鉄製砲については、はるかに佐賀藩の後塵を拝したことになる。

さらに薩英戦争（'63文久3）で、薩摩製砲の威力は発揮できず、これ以後鉄製砲は造られなかったようである。明治維新以後、日本の陸軍は日清戦争ころまでは青銅砲を用い、海軍はやゝ早い時期に鋳鋼砲の国産化へと向うことになり、不振であった奥出雲の企業たたらが、少し勢いづくことへとつながってゆく（のち詳述する）。

薩摩藩主島津斉彬

幕末の藩主の中で、産業貿易をふくむ経済政策の一応の体系をもって、藩政の運営に当った人物は、島津斉彬が最も突出していた。輸出への配慮（陶磁器・ガラスなど）もし、大砲についても隣国支那への輸出の指示もしているという。

青銅・鋳鉄あわせて794門の大砲のうち、500余門は火薬などとともに国内の諸大名に売られている。（松江藩が求めたかどうかは明らかにし得ていない）

薩摩と中国地方の企業たたらの炉の間には違いがあった。天保年間に砂鉄から銑鉄を製錬する藩営のものがあった。

薩摩の砂鉄製錬は中世にもさ

エコロジカル・デザイン

生態学的計画
「二十一世紀は十八世紀末の安藤昌益の蘇（よみが）えりで」

三年ほど前から、エコロジーとか、エコミュージアムとかが唱道されている。言ってみれば最近100年間の、ほんの一部の人間のおごりたかぶったことに対する、つけが廻ったことである。すなわち産業革命以来人間拡張の歴史をくりひろげてきた結果、地球環境の均衡を破壊し、危機的状態に陥れたのである。

それも本格的に環境悪化をしたのは、せいぜいこゝ100年である。しかも環境破壊と引き換えに、高エネルギー消費型文明生活を満足したのは、人類55億のうち7億人で、残り48億人はこれからと待機していたが、すでに地球は「持続不可能な発展」になっている。

どうすれば「技術可能な発展」の方法があるかのために、昨年「地球サミット」が開かれた。今までの生活から生産からすべてを大転換せねばならない。それは生態学的計画によらねばならないという。絶対的に子供たちの幸福のためにとり組まねばならない。

ドイツでは、都心の周国に配置された無料駐車場に車を置き、そこからバスや地下鉄などに乗りかえて、都心に向う方法をとりはじめている。車そのものの交通量を減らすこととの連携が、必要欠くべからざるものである。混雑を防ぎ、自動車の油の消費量の抑制から、排気ガスの充満を防ぎ、人々の体力の回復もねらい、樹木も人の健康も考えたものであるという。考え方の転換を計らねばならない。都市計画の根本的改変をせまるものである。

エコロジー（生態学的）とは、人間と動物・植物・土がつねにつながりがあり、一体化した生き方があると、やさしくもい

かのぼるといわれ、明治初年まで行われていた。炉は底辺方4尺で高さ15尺の高炉型で、送風は独特の水車吹子で、操業は3昼夜から7昼夜の操業が可能であった。

こうした伝統が、洋式高炉を全く奇想天外のものとしてでなく受け入れる条件をもっていたのが、先進地となったもとであろうといわれている。

（本号の記述は、大橋周治著『幕末明治製鉄論』を要約させて頂いたものである。誤まりあれば編者による）感謝。

島根県議会史にみる 奥出雲の人々③

1884（明治17）年の第4回県会議員半数改選によって、仁多郡からは佐白の馬庭又右ヱ門が当選した。仁多郡畜産史（本誌148149合併号）によれば、明治15年に**絲原権造**は南部七戸産の良馬を購入し、低迷していた県下の産馬改良に先鞭をつけ、19年には**馬庭又右ヱ門**はやはり南部産の種馬を購入し、21年まで130頭を産出した。又右ヱ門は性豪気で、所有する愛馬に鞭打って、辛の谷を越え県会に出席したという逸話も残している。

明治20年9月の第6回半数改選では、仁多郡からは松江市北田町の園山勇が当選して一期4年を勤めた。

当時の県知事は籠手田定安で松江尋常中学校には小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が勤めていた。八雲は常に下げ羽鷲の紋付を着て白足袋を履いていた。

知事は病床に伏していた八雲の見舞に2人の娘を、当時としては例のない洋装をさせ、立派な駕籠を持たせて遣した。その駕は繊弱で気むづかしかったので、八雲は手に負えず、間もなく西田千太郎教頭に譲られた。その籠はヘルン記念館にある。

明治23年には第1回の衆議院議員選挙が行われた。第7回の半数の県議会議員の改選では、当郡はなく、全25年3月の第8回改選で、横田町村一村戸長**中沢治兵衛**（六日市・前沢屋）が当選した。

11月の県会に於て、7番議員藤井朝一郎（大原郡）他7人とともに、11番議員**中沢**は、島根県の農事改良と進歩のために、農学校設立の必要の**建議書**を提出した。当時隣県倉吉にあった農学校には、当県から30～40人の生徒が入学していることを踏まえたものであった。同議会には市町村土木補助費について、国庫補助を要請する意見が出されているが、その1例として、11月10日の暴風雨にあった水害地の貧民の悲惨な生活が述べられている。議事録の一部をのせると「仁多郡横田村ニ**前田政次郎**ナルモノアリ維新前ハ地価千円モ所有シ庄屋役ヲモ勤メ居リタルモノナルカ近来家政上困難ニテ今日ニアリテハ僅カニ地価百円位モ所有スルニ過キサルモ矢張リ旧来庄屋役ヲ勤メ居リシトキノ家屋ニ居住シ恰モ水害地ノ中央ニ位セルモ庭中ノ巨樹ニ支ヘラレ為メニ辛フシテ流亡ノ難ハ免レタルトモ其惨状ハ甚シク頃日北条侍従カ同家ヲ臨視セラレシ際食事ヲ為シ居リシカ其食ニ供シ居ルモノハ水災ノ為メ砂入リニナレル稲ヲ覚束ナクモ扱キ落シテ之ヲ挽ケル俗ニ石糠餅ト

える。こうした思想の持主が、わが国の東北岩手県八戸（はちのへ）市にいた安藤昌益（しょうえき）である。昨年は生誕290年（1703元禄16）、没後230年（1763宝暦13）であった。敗戦後の1950（昭和25）年岩波新書の中で、『わすれられた思想家－安藤昌益のこと』という上下2冊が発売された。著者はハーバド・ノーマン（訳者大窪愿二）である。初版本が私の書架に40余年の日を経た色で置かれている。歯ごたえがあったもので、やたらと線が引かれている。

それから25年後のころ去る日刊中央新聞の文化欄で、安原延寿によって紹介が連載されたことがあり、切抜きがある。

自然については、西欧では自然と人間が分離され、時には対立するもので、自然は人間が征服するものと考えている。東洋では自然と人間が分離できず、自然の中に人間が埋没している考え方であるという。これに対し昌益は両者を止揚した、「直耕」の自然観を唱えている。自然が自然に豊かに発展している。

天人同営の創造と生産が根本にあるのであって、人間が自然を必要とすると同じように、自然も人間が必要であるということである。自然の愛護と育成によって人間も育つということで、今日の言葉でいえば、資源愛護となる。今日人間は自然破壊の元凶で、遂に逆に自然が人間を苦しめること　った。

昌益は働き盛りの時代15年を八戸で過し、相続く冷害による餓死者7,000人或は猪の異常繁殖による農作物の食いつぶしの害による死者3,000人のすさまじい状況に出あい、名医師として必死の活動をしながら、自分の医学や自然観に疑いや不信の念を抱き、これらに徹底した再検討を加え、「直耕」の自然そしてこれの実現への「互性」の主張へと変っていった。

安藤昌益の思想には学ぶべきところが多い。今日必要とされることを、すでに250年前に唱道実践していたのである。つけやきの流行のエコロジーにならぬよう。

この地に生れて、これに近い思想をもって講演や機関誌で語りながら、戦中になくなった思想家があった。別の機会に。

（蓬　頭　子）

唱フルモノニ青菜ヲ交ヘテ食シ居リシカ警部長ハ試ニ之ヲ食セントセシカ迚モ咽喉ヲ下ルモノニアラスシテ人間ノ食物トハ思ハレサリシ程ニシテ且其家内ノ様子ヲ見レハ家広ケレト坐板ハ皆其用ヲナサス僅ニ藁屑ヲ一隅ニ敷イテ住スル者ノミナレハ侍従ハ落涙シテ其実況ハ帰京之上奏聞ニ及フヘシト語ラレタリトノコトナレハ其他ハ推シテ知ルコトヲ得ヘシ去リ乍ラ其罹災民モ復旧工事季節ニ至レハ労働者ハ一時ノ生計ニアリ付クヘキモ之レカ為メ地方税ニ於テ巨額ノ臨時費ヲ要シ所詮県民ノ負担ニ堪ヘサル所ナルカ此困難ヲ軽カラシメントスルニハ…」（傍点筆者）

同じ紙面に　　簸の上短歌会

箱一つに老いたる客のまばらにて花冷えの中木次線
はゆく　　永井弥生
カンボジアに散りたる若人と巨悪なる画廊の記事の
同じ紙面に　　仝　人
末の子の住む比津の里久びさに訪ればめぐりは菜の
花ざかり　　野村節子
淡雪の止めば折々陽の射して庭木刈る息子の背も温
くからむ　　仝　人
国民のための政治とふ然あれど平然として絶えざる
賄賂　　常盤はるまさ
かつて母に贈りしルーペいまわれの蒐集切手の箱に
収まる　　仝　人
裸木のはざまを抜けて昇りゆく伯母焼く煙たゆたい
をれり　　佐藤喜代子
ふたりして農にはげみし遠き日を恋あかす如夫と語
らふ　　仝　人
雑草に混じりし蓬丹念に畔に摘みつつ曽孫を思ふ
岡田時子
大島の旅思はせてわが庭に八重椿赤く咲きそめにけ
り　　仝　人
死の影も恐れはせじと病む友は洗礼受けしよろこび
を言ふ　　安部夕波
旅を来し足摺岬の断崖に佇てば春呼ぶ海の声する
仝　人

明治26年11月には、斐伊川土功費についての建議書が出されている。1634（寛永10）年以来本来に至るまで、凡そ300年間に洪水劇甚7回に及んでいる。かっては50～70年に1回であったが、近年は短縮して、明治6年、19年、本26年と水害が続いている。こゝに於て抜本的治水工事を行うため、斐伊川土工費を国庫支払に願いたいと、県会議長名で内務大臣へ提出している。同時に石見郷（江）川についても提出されている。

この時島根師範女子部の存置が否決されている。勤務年限が短くて経費支払の利なしというのが理由である。また郡吏員の給料旅費値上げにからんで、人員削減が打出され、5番議員**中沢治兵衛**はこれに対して反対の論陣を張っている。県案の賛成者が多く否決され、第3次会でやっと欠席者が多いなかで、9名の同意を得て過半数となり、大巾増額が決定した。また山陰には尺寸の鉄道もない、山陰6州（但馬～長門）の人口180万中当県は70万である。産業振興・軍事上も陰陽連絡上も急務であるとの建議案を可決している。

斐の上川柳四月抄

春来ても枯木に花は咲きませぬ　　若槻白馬
庭先のそこやかしこに春を見る　　磯島恵子
さよならとハンカチだけが細く見え　　渡部ミツコ
二次会と聞いて急用作り出し　　松田牛歩
雪囲い解いて庭木が伸びをする　　児玉哲呂
もどり寒重ね着をして炬燵番　　安部正子
下駄箱が靴箱となるこの時代　　松浦久寿子
定年で心の鎖ゆるくなり　　藤原英生
なるようになるわと老いもまた楽し　　松浦亜以
湯がたぎりお茶にしようと一人言　　安部春恵
病む友の顔みて話題少し変え　　真綿よし子
筝演奏終わり狙にむきなおる　　田中有樹絵

柴栗句会四月

がら空きの木次線来る花曇　　浅野としお
外山より春が濃くなる奥出雲　　糸原古志
生き延びなん初物の芹つくしんぼ　　岡田蹊花
日々に次ぐ政争よそに花吹雪　　岡田麗水
花冷えや浜の言葉の今日も来る　　小川月舟
このへんに住居がほしいそら豆の花　　恩田和美
暮れ残る峡のはざまの山桜　　加納信子
花冷えやギブスにしみ入る夜半の冷え　　楠房子
春秋を偲ぶ山門一人静　　高木白虹
月あかり芽ぶく韻のしたような　　中澤美紀子
梵鐘の風に誘われ春動く　　新出谷一華
遠い日をたぐりて母と花の土手　　錦織富江
伊予柑をはぐ指先の指若く　　峯石美代子
春の泥かむる土工の歯の白く　　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町二、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第218号
（6月号）
1993. 6. 5
（M125・T81・S67）
奥雲出編集集団©

明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜④

——幕末　伊豆韮山の反射炉

世界で唯一つの反射炉遺物

伊豆の韮山は幕府直轄領で、代官は江川家が代々世襲していた。太郎左ヱ門英龍は蘭学を学び、高島秋帆から高島流砲術を伝授されて師範ともなっていた。

1850年代に入って反射炉による鉄製砲が、佐賀・薩摩の両藩で開始される以前英龍は、鉄製砲の製造・軍艦の建造・海岸砲台の築造を、当面の三大急務と主張した建議を幕閣に出す一方、鋳鉄砲製作の研究をすゝめていたが、幕府が許可をしなかったので、佐賀より三年おくれ、最初のペリー来航から半年後の1853（嘉永6）年12月にはじめて着手することになった。この月には青銅砲30挺の製造計画も出していた。

英龍は佐賀藩の協力も得て、1854（安政元）年反射炉を完成させたが、安政の大地震ついで英龍の死によって中止した。子の太郎左ヱ門英敏が代官をついで、父の死後一か月後操業をはじめ、鋳型などを造った。その後二年半の間休止し、安政7年7月から再開した。

このころの松江藩では、安政元年舅養子藩主定安がはじめて入国し（韮山で英龍の死後はじめて反射炉が操業されたころ）、藩内を巡遊し、沿岸各地の砲台を巡検した。詳細は不明であるが、今まで述べた佐賀・薩摩両藩の鋳砲状況から判断すると、備えたものは青銅砲であったと考えられる。藩の蘭学者金森錦謙の翻訳も2年前に完成しているが、松江藩では鋳砲には至っていないようである。

韮山では安政年間には、試し溶解が4回、溶銑による18ポンド砲鋳造が3回行われたが、完成されたのは2門であった。鋳砲の質が不良で、西欧通りできないのは、砂鉄銑であるとしているが、製作数も技術も遙かに、佐賀・薩摩には及ばなかった。文久年間（1861～1863）には幕府直轄となり移転のため、操業中止となったが、1863（文久末）年から1864（元治元）年にかけて青銅砲が128挺鋳造された。しかし100門は銅の品質不良のため失敗作であったという。

1856（安政3）年の記録によると、原料の銑銑は江戸と大阪から、石炭は常州炭と西国筋のものが、下田を経て入っていて、銑銑は岩鉄鉱銑と砂鉄銑であったという。この銑を反射炉に入れる前、たたら炉で再溶解をしている。

岩鉄鉱銑は磁鉄鉱製錬による銑鉄で、柔鉄と呼んでいる。これは分析値からみると、江戸送りのものは、東北の釜石・棚倉地方あたりから岩鉄鉱銑を買い求めたものとみられる。ヒューゲーニンの書で推奨しているものを入手していたのである。龍英も生前にこのことに関心をもっていた。

このように韮山の反射炉は十分な成果をあげず、品川台場の幕府の備付鉄製砲は、すべて佐賀藩に依存したものであった。

一方湯島鋳砲場の青銅砲は、鋳物師の請負で、江川家の管理下にあったが、積極的とり組みは見られなかった。175門の青銅砲が製造されたが、技術は旧態然たる手工業段階に止まるものであった。従って在来の江川礼讃の韮山鋳砲事業は、技術的にも軍事的にも大きいものではなかったが、先にのべた三つの建議を通して幕閣を動かし、体制づくりを進めたことゝ、その門弟の中から、その後造船業・海軍の創設に、多くの人材を出したことは功績といえる。

（以上は前回と同じく大橋周治説の紹介が中心であって、それに故芹沢正雄著『洋式製鉄の萌芽』ほかの論文を参考として述べたものである）

原料銑について

あとの記述の上からこのことについて一括してまとめておく。

佐賀藩——燃料は安政2～3年に自藩内で炭層調査をしており、隣藩からも石炭を買求めているから石炭であった。

銑銑は石見産の近世企業たたら吹きの砂鉄銑が使用された。そのため溶解に支障が生じ、鋳砲が破裂し易すかったようである。（低温製錬のたたら銑であるため）従って再溶解を行ったようである。韮山では佐賀の先例によって、銑をふいごで沸かし、砂型に流し入れて棒状にしたものを反射炉に投入したという。鋳砲の要訣は溶解湿度を高め、反射炉内の高温保持が必要と、『大砲鋳造法』に力説している。

薩摩藩——前号に述べたが、燃料は木炭が主で、銑鉄は藩営の鍋島製鉄所や各所での砂鉄銑を使用し、伯州銑も用いたともいう。

韮山（にらやま）——前述したが、芹沢は科学分析から、緊迫した大砲製造の要請から、砂鉄銑が主として用いられたとしている。石見銑も用いたという。次の水戸藩では雲州銑を用いたともいう。

明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜④・島根県議会史にみる奥出雲の人々④・のぼりはりあい・俳句・川柳・短歌

島根県議会史にみる
奥出雲の人々④

府県制度の改正と議員改選

1899（明治32）年には郡役所が設けられた。この年には府県制度が改正され、沖縄県をのぞいて、9月22日全国一斉に県議会議員の改選が行われた。

この時の投票率は73％で、高率は松江・能義・簸川・邇摩の90％、仁多郡は40％であった。

仁多郡は**中沢治兵衛**が当選し、この期からはこれまでの経験を生かして、記録でみると、活発な動きをしめし、質問はもとより各種の調査委員としても活躍している。

当時の社会情勢を、今日と比較してみるのも興味があるので二～三引用紹介する。

電灯料が予算に登場

1900（明治30）年3月の議会に於いて、県予算にはじめて、衛生病院費の中に電灯費という費目ができ、364円94銭が新らしく計上された。これについての質問と答弁（議事録記載のまゝ）を、

○十二番（**中沢**）　第二項五目ノ電燈費是ハ更ニ新設ニナツタモノト見ヘマスカ成程「ランプ」ヨリ電燈ノ方カ便利ニハ相違ナカリマセウカ経済上カラハ余程金カ増サウト思ハレマスカ此電燈カナケレハナラヌト云フ必要ノ理由ト尚電燈ト「ランプ」トテハ経済上トレ程相違カアリマスカ比較シタ所ヲ承ハリタウ御座イマス

○番外（高井警部）　電燈ノ必要ト申スコトテ御座居マスカ電燈ヲ付ケナクテハ病院ノ仕事ノ上ニ何レ丈ケ困難スルト云フ程ノ必要ハナイノテ御座居マスケレトモ御承知ノ通リ電燈ハ安全ニ致シマシテ衛生上最モ宜イ……追々世ノ中カ開ケルニ随ヒ世間ニ採用スルコトニナリマシテ当市内ニハ其会社カ出来テ居リマスカラ成ルヘク善良ナル文明ノ燈火ヲ採用シタイノト今一ツハ近来石油ノ代価カ騰貴致シマシタノデ比較上大ナル差異ハアリマセヌノテ少差ナルハ電燈ヲ採用シタ方カ宜カラウト考タノテ御座イマスソレカラ電燈ト「ランプ」トノ経済デ御座イマスカ「ランプ」ヲ点スルト云フト石油代並ニ「ランプ」ノ取換芯ノ代価等ヲ括メマシテ百弐拾参円七拾四銭五厘之ヲ電燈ニ改メマスト其費用カ弐百八拾壱円八銭五厘テ彼是差引石油ヨリ電燈ノ方カ費額ノ増加スルコト百五拾七円三拾四銭是丈ケ電燈費ノ方カ多フ御座居マスカ僅カニ是丈ケノ金額ノ差異テアリマスレハ安全ニシテ文明ノ燈火ト云ハル、電燈ヲ採用シ様ト云フコトテ斯ク積算シタテノ御座居マス

○二十番（竹原）　電燈費新設ノ為メ消耗品費ニハ影響セヌノテアリマスカ影響スルトシマスレハ幾ラ位増減スルコトニナリマスカ又三十二年度ニ於テ費用ノ剰リタモノカアリマシテ其剰リタモノテ足ラヌモノヲ補ハレタト云フ様ナコトハアリマセヌカアリタトシマスレハ其事ト又現今院長科長ノ給料ハ幾何テアリマスカ前年ノ予算ト異ナリテ居ルノテ御座イマスカ其コトヲ承ハリタウ御座イマス

以下略

（竹原は簸川郡選出）

明治34年の県税賦課規則

年毎に変更があっているが、今日と比べて興味あるものは、

職工　20才未満の者は半額

一等　年税2円50銭
琴三味線職、時計師、写真師、煙火製造人

二等　年税2円
洋服仕立職、彫刻師、蝙蝠傘職、仏師、簪（かんざし）細工職、馬具製職、鉄砲製職等々

三等　年税1円50銭
庭造師、靴製職、表具師、菓子職師、和服マントシヤツ仕立職、料理人、酒杜氏、馬車人力車製職、轆轤（ろくろ）細工職、撃剣稽古具製職等々

四等　年税1円
素麺（そうめん）温飩（うどん）製職、硝子細工職
木工、木挽、左官、石工、算盤製職、足袋製職

五等　年税80銭
桶工、畳刺、鍛冶、紅白粉（べにおしろい）製職、傘提燈職、木櫛製職
鋳物職、釘村下、割鉄鍛冶
大工、仝下ケ、ラムネ製職、下駄挽、醤油杜氏等々

六等　年税60銭
鋳掛職、鑢目立職、絹布洗張職、綿打、革細工職等々

七等　年税40銭
竹細工職、弓弦製職、研物職、下駄直職、鏡磨職等々

市場　牛馬市に限る

一等地　日税1円50銭

横田町　邑智郡出羽・田所

二等地　日税1円20銭
宇賀荘村、**八川村下横田**、大東町、掛合町、頓原町、安濃郡志学、邑智郡阿須那、美濃郡高津村

三等　日税80銭
一・二等地以下の町村

遊芸稼人

一等　月税70銭
能狂言、浄瑠璃、手踊、軽業、曲馬、人形遣、足芸、三味線弾、軍談、浮節、手品、独楽廻

二等　月税50銭
新内、祭文、常盤津、歌謡、物真似、落語家、居合抜、伊勢神楽、影人形遣等々

中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる⑥

のぼりはりあい（幟張合）

——横田の400年余の石合戦

のぼりはりあい

石合戦をともなうこの行事は、横田町の六日市と大市とが、出雲大川（斐伊川）を挟んで行う伝統行事で、伝承によると中世以来行われたという。1864元治元年の記録もある。六日市・大市の街づくりが出現したのは、1509（永正6）年　六日市の北の背後の高鍔山に三沢氏が藤ケ瀬城を築いてからである。'51（天文20）年にこゝの氏神として、伊賀多気神社（出雲国風土記登載）が再興建立されている。

横田庄の中心であった、馬場の中村市場がやがてこゝに移って、六日市場・大市場として栄えた。1648（慶安元）には両町の表通りだけで（裏通りは横田村という）73軒あり、六日市には代官屋敷があった。18世紀初めの1713（正徳3）年の記録によると、両町にそれぞれ夷堂があって、市も開かれ商家も存在したことがわかる。

夷堂の祭礼は、恵比須祭として、旧暦6月10日（新暦となると7月10日、昭和45年からは7月20日となって現在に）に行われて来ている。

この行事はもとは旧暦5月5日の端午の節句に行われていたのが、いつの頃からか恵比須祭の前夜に、のちは、旧暦7月18日の山上さんの祭にあわせて行われている。

この行事の当日は、両町六日市、大市別に1か所飯の焚出し所を構えて食事をともにし、数日前より車にて近隣の集落や他村より集めた麻幹（苧殻）を束ね、これに松脂を塗った松明を多数作って準備をした。

日が暮れると川の両岸に六日市・大市の人々が、それぞれこれに火を點じて並べる。しばらくすると大市は安楽寺の上（愛宕神社がある）に、六日市は藤ケ瀬の山上（金比羅神社がある）に松明を運び點化する。のちには双方共に互に罵詈的文字を現わし、数次取替え取替えしてこれを経続した。文字を出すには竹にぼろ切れをつめて石油を入れ、これを八手木（稲架用の木）に組み合わせ、火をつけると文字が現われる。

そして2週間も前から両町でそれぞれ集めた、苧殻・麦藁に火をつけて焚きはじめる。場所は終りごろは、大市は蔵屋新道の判官宅（今の稲田神社参道入口）から、東第一常会の石原恵吉宅まで、（当時は途中ほとんど家がない。現在の東本町の出現については後日掲載予定）、六日市は、角の陣場の前から六日市の中島屋の東端までの間であった（それぞれ1Km余）。

この間に石合戦が行われたという。両町からそれぞれへ嫁・婿に行っているものは実家に帰って参加する。女は石拾い男はそれを投げ合った。男は頭や体にぼろ切れをまいて怪我を防いだ。時には近隣の集落にまで、衝突の舞台が拡がり、さらに損害を引きおこし、負傷するものも出たが、別に咎めるものもなく、遊戯的戦闘として明治維新まで続いたという。

幕末には横田町の公然官許のこの特許的行事を、参千貫にて譲りうけたいと申し込んだ、能兼郡の村もあったが、これに応

斐の上川柳五月抄

いびきまで息子に似てる孫と寝る　児玉哲呂
連休が終り疲れが出たと妻　横山まこと
農機具の音高らかな大連休　安部正子
次の花どちらが咲くか水をやる　藤原英生
まだあてにされる元気よ有がとう　藤原千代子
ふたりして晩酌一合きょうも無事　松浦亜以
一日を寝巻のままで叱られる　若槻白馬
筍の声が聞こえる雨上り　藤原のぼる
連休もすぎて楽しみ一つ消え　渡部ミツコ
日だまりの道を急いで毛虫行く　磯島恵子
娘は宝何より嬉し親思い　真綿よし子
生れ子を盗られ泣く母捨てる母　高木凡太
あの二人うわさ通りの匂いする　森山悠子

晩春詠

簸の上短歌会

堀炬燵に寒のもどりをひっそりとセピア色のアルバムに子を探しをり　永井弥生
新緑の谷間流るるせせらぎに素足ぬらして幼ら遊ぶ　野村節子
刻置きて踵痛むと呼ぶ妻に馴れつつ吾れも老ひてゆくらむ　常盤はるまさ
春の陽を背に浴びながら山畑にわが影を打つごとく鍬振る　佐藤喜代子
さなぎだに春の終りは侘びしきを葉櫻の径に残り花散る　岡田時子
春雨の夕べほろほろ鳴く蛙背戸の小径を人の行くらし　安部夕波

前号訂正　1頁題名　鉄生産を銑生産に　同頁4段21行　馬門を馬関に

じなかったという。間もなく明治維新となり廃止されたが、次のような形で1916（大正5）年ころまで続いた。（1919大正8年記録）

子供が中心の行事となり、子供が他村（今日の大字）にも廻って、燃えるものは何でも集め、大市は南枝寺より町まで、六日市は五反田より六日市まで、2Kmにも及んで燃やし続けた。多く燃えるものを集めるため、金を貰らへば薪を求めて積んで準備をしたという。

のちには川の両岸で焚火をする様になった。そのはじめには先づ大市は安楽寺上の愛宕山に、六日市は藤ケ瀬山上に鳥居の如きものを薪木で作って石油をかけ、初め火をした。これをさせまいと両町の子供がそれぞれ遠まわりして、こわそうとする。

そこで争いがはじまる。これを燃やし終ると、川岸に出て貯えておいた薪木を燃やしはじめる。遅くまで燃やすためには、いろいろ作戦をして相手に油断をさせる。さらに川を渡って薪木を盗みに行ってつかみ合いとなった。（1933昭和八年筆者故老より聴書）

筆者が小学校のころは、大市と六日市の子供が、両方の山を陣地として戦争ごっこに、年一度ではなく、明けくれたものである。それは1935（昭和10）年ころまでも続いたであろうか。

石合戦の歴史

横田の「のぼりはりあい」は、焚火と石合戦が組合わされているが、焚火が主であったのか、石合戦がはじめであったか、定かでないが、焚火は稲作と関係がありそうである。石合戦はそのおこりは、稲作地帯の農穫を祈る新年の行事であったとする説が有力になって来ている。「のぼりはりあい」に対する検討は先にした通りである（既に故人となった話者によるので多少、話が前後している）。

以下この問題について、大林太良著の『正月の来た道』の研究の概要を述べる。

石合戦は印地打（いんじうち）とか石撃（いんじ）として記録にある。もとは正月行事で一種の年占いであって、勝った方が神の恵が深いということを予期して行われている。稲作の豊穫をもたらすというので、農耕儀礼の性格が多い。記録では、讃岐・美濃・肥後などにあって、天正（1573～1592）のころにも行われている。

また13世紀初め鎌倉初期の、弁内侍日記・平家物語・源平盛衰記・義経記・北条五代記そのほかにも記録がある。

朝鮮についての研究によると、高句麗・新羅の昔から、李王朝末まで行われていて、日本との比較をすると、同じいのは、

①期日　正月か端午の節句

②場所　野原か川原、時には市街で

③担当　子供青年であるが大人が加わり、後には大人の行事になる。

④はじめは小石の投げ合いで、必死の争闘となって、禁止もできなかった。

⑤集落の争いである。

である。

日本は神社の祭礼と附随したものが多い。朝鮮からの移住者の団体が日本にもたらしたようである。すると稲作の渡来時代から奈良時代までのこととなる。記録に見ると、朝鮮では農耕儀礼よりも軍事的要素が多く加わって普及したようである。

中国では石合戦の例は揚子江以南で、農穫を確保するための儀礼として行われている。そして圧倒的に正月行事として行われている。

そして農耕儀礼として、大勢は水稲栽培と結びついている。

ここうして石合戦については、日本へは直接に水稲耕作文化として中国の南部から直接日本に入ったものと、朝鮮の高麗を経由して軍事的な色彩が濃くなったものとして入ったものとがあったであろうと推定している。

以上では説得力がないが、アジアの自然のリズムの重要な折目節目の年中行事の中での、正月行事のあり方、若水を汲むこと、正月料理、来訪者＝マレビト信仰等と合わせ考えると、大林の説は極めて説得を加えて来るが、それはその著書にゆずる。

当地の「のぼりはりあい」は中世の町作りとともに出現したようであるが、そして戦国の城下の気風を領主の方向に向けるためにも用いられたのかも知れない。

故老の話は聞くべくもない。何か記録でもと思うが、今のところ以上を出るものはない。

（文責　編集者）

柴栗句会五月

抱きし児の鼓動がうれし子供の日　浅野　としお
春惜しむ来年の春ありやなし　糸原古志
明治の祖母大正の母茶摘歌　岡田蹊花
若葉光僧の会釈とすれ違う　小川月舟
アイシャドー牡丹見入るしげしげと　恩田和美
今日ほどに若葉侘しき納骨式　門脇芒子
さじの背でつぶす苺や友の病む　加納信子
五月晴れ歩け歩けの老二人　楠　房子
麓より彩る初夏や風の声　高木白虹
矢印の少し傾き春惜しむ　中澤美紀子
独り住む老母気儘に薔薇の花　新出谷一華
竹の子の角つまづけり老の足　錦織富江
雨上る朝牡丹の蕾大　峯石美代子
草を刈り畦を整へ農を守る　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

千利休の秘伝を伝える『山上宗二記』一巻を書いた

奥出雲
題字　糸原風亭書
第219号
（7月号）
1993. 7. 3
（M125・T81・S68）
奥雲出編集集団©

千利休の秘伝を伝える『山上宗二記』と岩屋寺

——梅雨晴れをまちつゝ

高野山安養院

去る6月10日高野山に登り、金剛峯寺のある本中院谷の東の小田原谷ー かっては高野聖の発祥の地、いまは高野山の中心地ーの安養院を訪ねた。

休憩した珠数屋四郎兵衛商店の横の道を行って、少し坂を登ると、めざす宿房安養院があった。高野山には戦国以来の諸大名が寺檀の関係を結んだ寺や墓所が多い。こゝは毛利元就と結ばれていて、境内本堂横の小高いところに毛利氏の墓石が並んでいた。

こゝで1588（天正16）年、山上宗二は雲州横田の岩屋寺のために、そして宗程（三沢氏13代為清）にも、千利休流茶法の秘伝書『山上宗二記』一巻を書いたのである。

前もって聞いてはいたが、そのことに関する伝承も、関係する古文書も見聞きすることはできなかった。1888（明治21）年、南院出火による大火でこの一帯は、三宝院（空海の母阿刀氏の住居を移したという）、不動院（907延喜7創建）などを残しただけで類焼し、本尊を搬出するのがやっとであったという話であった。時間もなくなり岩屋寺から入山した登栄が院主となった無量光院は訪ねることができなかった。今は修業僧の道場であるという。

山上宗二記をめぐって

本誌74～76号で、「横田の茶道前史」として、村田珠光ー武野紹鷗ー千利休の系譜をたどり、絲原記念館の館蔵品にふれた。

1984（昭和58）年絲原記念館開館3周年記念特別展として、「不昧公の茶の心を探る」が開かれたのを機に、千利休以後から不昧流の祖松平不昧までを、展示館蔵品の解説を交えて、本誌102～104号に記述した。その折、『山上宗二記』（茶道古典全集）、やはり利休の弟子古田織部・小堀遠州などの諸書を、知識を得るために走り読みし、不昧の茶祖片桐石州の『茶道三百条』やその関連書を読むことができた。そして館蔵品の『石州三百ケ条』3巻（不昧が石州の『茶道三百条』を解説したもので、不昧流のもととなったもの。不昧の直筆書）も比較し、数多くの不昧の直筆、不昧をめぐる人々の直筆文書、こうした茶書だけでなく茶道具等についても紹介した。その時にはまだ、『山上宗二記』岩屋寺本（表千家所蔵）は、一般には知られていなかった。

この書は1981（昭和50）年秋、東京国立博物館で特別展「茶の美術」が開催された折、はじめて、表千家蔵『山上宗二記』が公開された。これが雲州岩屋寺本と呼ばれるものである。

この書を知ったのは次のような経緯によるものである。

1988（昭和63）年6月の終り、横浜の千原弘臣さんから電話で岩屋寺についての照会があり、返事を重ねたところ、前年に発表になった『茶道雑誌』掲載ほかの論文を頂いた。拝読して岩屋寺の寺歴に貴重なものを加えられたことと、進めている中世横田庄の編年史料集に新らしいものを加えて頂いたと喜んだが、調査中の別のことに追われて、当地の関連史料の追求には進んでいなかった。その後間もなく東京の山下桂恵子さんから、同じく岩屋寺について問い合わせの電話があった。

翌'89（昭64）年4月、千原さんより『千利休居士三世元伯宗旦』（淡交社刊）の大著を頂いた。宗旦の数多くの手紙や書き物をもとに編まれた、在来の宗旦像を一新する、人間味あふれる宗旦を描かれた重厚な伝記であった。

その後当地の資料をお届けしたが、その秋上京の折新宿でお会いする機会に恵まれた。経済人で茶道はもとより茶道研究にも深く打ち込んでおられる方であった。茶人らしい物腰や話を通して教えられることの多いひとときを過した。

その後調査執筆に追われながら、さる大著の執筆協力のために、全国的規模で史料集めにも入って、横田庄と毛利氏ほかとの関連文書もかなり多数入手したが、このことに関すると思われるものはなかった。そこで山口県文書館ほかその地の研究者に問いあわせとも思ったが、資料館の企画そして推進検討のため余裕がなく月日がたった。

それから3年、'92年4月、明治大学の渡辺誠一教授の来訪をうけ、岩屋寺に関する資料を提供した。岩屋寺を訪ねられた結果は、この件に関して核心に触れられたようであった。フランス文学が専門であるが、室町芸術に造詣が深く、茶室もお持ちと承った。

今年に入って4月、山下さんから、『年報月曜ゼミナール』第1号が届いた。「山上宗二記を贈られた『宗程』」という紹介文が載っていた。続いて渡辺さんより、明治大学教養論集通巻257号社会科学・人文科学1993、

千利休の秘伝を伝える『山上宗二記』と岩屋寺・俳句・川柳・短歌

の抜刷「『山上宗二記』の諸写本との比較研究(1)」を頂いた。そこで何とかして皆さんのご研究の役に立つ史料・情報をと心にかけている昨今である。安養院訪問もその一つであった。

渡辺さんの論文は長編のようであり、その中で相当解明せられるような論述がみられるので期待しているところであるが、その時を待つとして、岩屋寺のある当地方の方々に、山上宗二のことや『山上宗二記』の茶道書に於ける価値、さらに岩屋寺本(表千家蔵)について、これまで知り得ていることの要点を綴ることとした。

山上宗二(やまのうえそうじ)(1544天文13～'90天正18)

安土桃山時代の茶人で千利休の高弟、屋号薩摩屋、号は瓢庵・堺の町人茶人山上宗壁の子。千宗易(利休)について20余年茶湯を修業したが、22才のころには一廉の茶人であったことが、今井宗久の日記でわかるという。

そして織田信長に親近し、のち明智光秀の丹後旅行に随い、細川幽斎・忠興父子の招宴にも列した。信長の死後は宗易(このころはまだ利休と号せず)と同じく、豊臣秀吉に親近し、天正11年正月からは秀吉お抱えの茶頭(茶堂とも、茶の湯つかさどる役)の一人となった。

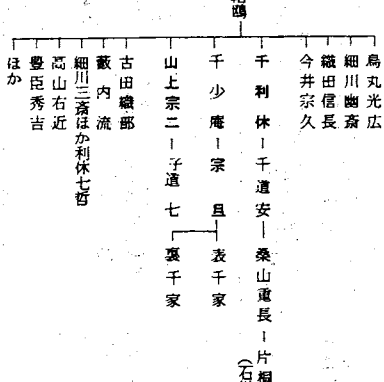
宗二は一面猟介で傲岸な性格もあって秀吉の機嫌を損じ、同年10月9日には牢人して北国へ下った。その後前田利家の庇護をうけ、時々京都・大阪へ上って茶会を催したり、大阪城の大茶会にも参加し、同13年正月には秀吉の有馬湯治に随行した。利休の茶会にも客となっている。

しかし秀吉の茶頭に復帰することなく、天正14年秋には大和郡山にあって豊臣秀長の茶頭を勤めていたが長く続かず、15年には高野山に登り、安養院主らへ茶の指南をしつゝ、『山上宗二記』の編述にあたっていたようである。

ついで翌16年2月下旬には畿内を出て東国へ下り、4月ごろ小田原に到着し北条氏の庇護をうけ、板部岡江雪斎らに茶湯を指南した(これにも『山上宗二記』1巻を贈っている)。

北条氏討伐で小田原城攻めの秀吉に同道した利休は、宗二との再会を喜び、取りなしをして湯本で秀吉に伺候したが、そこでまた憎まれ口をたたいたため、小田原落城に先立ち、天正18年4月11日(或は2月27日とも)に47才で死を賜った。(『長闇堂記』によれば—秀吉公にさへ、御耳にあたる事申て、その罪に耳鼻をそがせ給ひしーと)

その子道七も父に似ていて、一旦は徳川家康の茶頭に取り立てられたが、やがて浪々の身となった。ともにその業績が世が下るとともに輝くのに、生存中は悲運の茶湯者であった。



『山上宗二記』

茶湯の秘伝書。天正16(1588)年成立。村田珠光の『一紙目録』ほかを参考とし、千利休の時代に至るまでの茶湯の歴史を略説し、ついで茶器(茶壷・天目とその台・茶碗・茶釜・香炉・香合・香・墨蹟・絵画・茶入・花器)の名物品について、形状・銘の由来・価格・伝来を解説し(よって本書が茶器名物集といわれる)、さらに茶人の心得・茶人伝などを記し、最後に宗二の質問に対する利休の返答の章がある。

諸本は12種あってこの中に雲州岩屋寺宛(表千家蔵)がある。

伝授相手によって内容に多小の差があるが、利休とその時代の侘び茶の本質を知ることのできる利休流茶法の秘伝書であって、貴重な文献という。

参考—桑田忠親著『山上宗二記』解題(茶道古典全集六巻)『山上宗二記の研究』。筒井紘一著『山上宗二記を読む』

岩屋寺本『山上宗二記』

(表千家蔵)

この本は、これ以上の『山上宗二記』を再び発見することは不可能だと考えられるほどの逸品であるとされている。

筒井紘一著『山上宗二記を読む』(1987(昭和62)年 淡交社刊)は、岩屋寺本を定本として記述されている。渡辺誠一論文ではこれを原本と考える方向で定本をまとめる比較研究をしておられ、この本によって曖昧であった流浪中の宗二の消息を明らかにもしてくれる部分も含んでいるとされていて、当地方の歴史にも貴重な史実が加えられるかも知れないと期待しているところである。

しかし筒井書には、岩屋寺本の最終部分の一部が記載されていない。

幸に千原さんからの便りには、その部分もあったのでいろいろ検討ができたが、その後幸に岩屋寺本の写真の複写も見ることができて、さらに岩屋寺との関連を身近に知ることができた。以下その部分を読み易く書いて、それらをとりまく、高野山と岩屋寺そして宗程(三沢氏11代為

清一宗程の文字は1578（天正6）年の岩屋寺への願文に初出する）とのかゝわりをみる。

本文が終る少し前に

先年茶湯拙子ニ御談合ノトキ、此道ノ奥ノ奥ヲオ尋ネ候トイヘドモ、口伝ノ秘事テハ残シ奥カ。今度高野（山）ニ罷リ出デノ節、当安養院並成就院（小田原谷の南の南谷にある）各々懇望ニ就テ、廿年ノ稽古漸ク三百日ニ指南セシメ、師（利休）ヨリ申シ渡サルル通リ一巻ニ仕立テ、両人へ渡シ奥、然□宗程様御数奇道ニ執心ノ由、粗□ノ間此ノ一巻進上奥。総ジテ茶湯ニハ昔ヨリ以来書物無ク……

中略　（本文終り）

右ノ如ク申入両人エノ巻物ニ仕立奥、次ニ此ノ如ク思イ従イ送リ申奥、宗程様へモ進メ申シ度ク奥……

……

瓢庵
宗二（花押）

天正拾六年二月吉日

雲州　岩屋寺

参

……

次ニ□□□是非共ニ宗程様ト尊老へ送リ奉ルベキ由、達シテ申サレ奥条、意見ニ随フ者也、今日東路ヲ指テ罷リ下リ奥、御披露冀イ奉リ奥、ヨツテ件ノ如シ

住む所もとめかねつゝあつまさして　行くハこしきに　猶もなりひら

瓢庵
宗二（花押）

同年二月廿七日

雲州

岩屋寺

参

天正14年末ころから姿をみせなくなった宗二は、秀吉の目の届かぬ高野山中に登ったのであろうか。

歌の終りの「なりひら」は在原業平であろう。平安初期の人、六歌仙中随一の歌人。曽祖父母は平城と桓武両帝であったが、藤原氏の権勢のため臣籍に降下し不遇に終った。しかし純真多感な性格は、和歌に人間の真実や愛情の美しさをうたい、後世のあこがれの的となった。失意と望郷のうちの東下りの歌もある。

宗二が小田原にとどまらず、平泉まで旅をつゞけていたら、後世俳人松尾芭蕉が「奥の細道」についで出した紀行文「笈の小文」の部分の著名な文の中に、西行（和歌）、宗祇（連歌）、雪舟（絵）、利休（茶）に続いて、宗二の名も書き加えたであろうといわれる。

この岩屋寺本は巻子本であるため、紙継ぎがあるが、その裏側はすべてにわたって宗二の花押がなされている。たとえ宗二の自筆本ではないにしても、最も原初的形態をとどめたものといえるという。また原本か、もとの巻物ニ仕立奥、次ニ此ノ如ク思イ従イ送リ申奥、宗程様へモ進メ申シ度ク奥……

（そして最後に　巻子（巻物）の裏にサカサの花押を記しウラ判の理由が付記してある）

「ウラ判態サカサマニ記し奥弥々他見成サル間敷ク奥、クリ返シ他見御無用ニ奥也此悉　宗程様へ御申上越奥也（花押）」（解読とゴチックは筆者、誤読お許しを）

柴栗句会六月

耳を研ぎ樹音を探る白樺　浅野　としお
労働はかなわぬ余生日の遅き　糸原古志
峡田守るのみの生き甲斐谷卯木　岡田蹊花
竹の秋登る参道磴崩る（摩尼寺）　小川月舟
浴衣着て孫が腕組みして見たり　恩田和美
まあきれい思わず声洩れ菖蒲園　門脇花子
一の糸こと更きしむ梅雨じめり（大正琴）　加納信子
青葉山昏る店の仕舞い客　楠　房子
梅雨冷てうとまし針の秒刻む　高木白虹
衣更えきのうの顔もころもがえ　中澤美紀子
断崖に佇てば吹き上ぐ夏の風（万座毛）　新出谷一華
葉ざくらの陰に一息万歩計　錦織富江
葉ざくらの下でねんねか乳母車　峯石美代子
夏つばめ駅長発車の合図する　渡部夕峰

アカシアの雨　簸の上短歌会

瑠璃色のブラウスに白きあかしやの花映ゆる日よ　永井弥生
友に逢ふべく年毎に茶を摘むゆびも根も萎へ長き五月のひと日なりけり　〃　人
たちまちに夕焼は空を覆ひたり鍬かつぎ戻るわれも野山も　〃　佐藤喜代子
スコップを田に突き立てて友はやがて煙草を出して火をつけにけり　〃　人
日照田には水湛へあり庭池に注ぐ筧は点滴のごと　〃　岡田時子
東京の息子帰るとききたれば長病の夫は手足うごかし　〃　人
孫娘に抱かれし遺影はほほえみゐて梅雨はれし朝の青葉の道行く　〃　野村節子
付合いよきひと代終られしその女の葬列は長く墓につづけり　〃　人
床擦れのしやすき妻の腰あたりに塗りたる薬のほのかにほふ　常盤はるまさ
畑沿ひの樅の大樹にあるなしの風か終日さやぎゐるなり　〃　人
アカシアの花を散らしてふる雨に傘まわしつつ子の帰りくる　安部夕波

前号訂正　4頁2段13行と5段1行　豊穣

しくは限りなく原本に近いものであって、これほど貴重な書はないという。草稿本に近いため、文章の推敲がなされていないため、流布本の方が文意が通じ易い部分もあるという。

山上宗二の数少ない手紙の一つと比べると、花押はほゞ同一であるので、原本ではないかとも思われるという。

宗二は利休流茶の湯秘伝書を後世に残したいと願っていたが、秀吉を激昂させた頃から、その願望を具体化しようとしたと思われる。高野山に登ると1587（天正16）年2月、俗道七に最初の秘伝書を与えた（これは1600（慶長5）年の写本が残っている）。

先の岩屋寺本の末文をみると、はじめの日付は、「天正十七年二月日」となっていて、2月の何日かに雲州岩屋寺住職へ伝授すべ書いたが、すぐ送らずしばらく手元に置き、その後行間に小文字でその後の文を書きそえ、「同年二月廿七日」とし、東下りのことを書き添え、さらに日付の脇に小さく、「住む所もとめかねつゝあつまさして行ハこしきに猶もなりひら」と書いていて（東）、そして同日の二月廿七日付の、桑山修温大夫（和歌山城主）へのものとともに発送している。

畿内に住むことが不可能になって、岩屋寺本に急ぎ書き入れをし、東国へ下らなければならぬさびしさも書きながら、名所を見て廻れるのだから楽しみもあろうと、小田原さして北条氏を頼って下って行った。

宗二と岩屋寺と宗程と高野山

岩屋寺と高野山——岩屋寺は真言宗、1110年には出現していた石清水八幡宮横田庄の鎮守・横田八幡宮の神宮寺としても荘内の信仰を集め、16世紀兵火に焼失するまでは21坊を有し、出雲国内でも鰐淵寺と肩をならべる寺勢があった。

1539（天文8）年、三領家（京都御所・石清水八幡宮・京都泉涌寺）より地頭請所代官として、岩屋寺復興に尽していた三沢氏の家臣石原義扶は、当寺に高野山より大塔阿本上人のすゝめで、弘法大師座像を寄進した。今日まで受け継がれ地方民の信仰が厚い。徳川初期には隣村の亀嵩出身の当寺の僧澄栄は、高野山千手院谷の無量光院の院主となっており、弘法大師と同時代の僧の作といわれる経典も収蔵されていた。明治・大正期には当寺出身の傑僧雲照律師が高野山に入っている。

岩屋寺の宗程——三沢氏13代為清は、1574（天正2）年ごろ隠居し、横田庄の北方三所郷亀嵩に城を築き、天正5年移っている。天正6年の岩屋寺修覆の折の願文では為清は宗程を称している。

為清は3才にして三沢氏をついだが、戦国群雄対立時代を見事に生きぬき、尼子・毛利両氏に従い各地に転戦、勇武の将としての記録もある。

また横田庄では、出雲国内でも早くから市場（中村市場）が開設され、諸国との交流が活発であって、文物・技術者の流入も多かった。

こうした横田庄の情勢からすると、宗程が茶の湯を求め、高野山に近づいたのかも知れない。

また考えられるのは、経歴のすべてが明らかになっていない宗二のある時、当地方への放浪のことがあったのかも知れない。

なお永禄9年からは出雲は毛利氏の支配下に入り、その一族吉川元秋（毛利元就の5男）が広瀬の富田城に入っている。吉川元秋の妻は、為清の子で三沢14代為虎の妹であった。高野山安養院は毛利元就と、無量光院はその孫輝元との寺檀関係があった。

先に述べたようにこれ以上の史料などは今のところ発見されていない。

別の吉川家は関ケ原の役後、毛利家が萩に移ってしばらくしてから、毛利支藩として岩国藩吉川元秋（毛利元就の5男）が主となった。初代広家は茶人で千宗易（利休）に茶を学んだらしい。以来岩国藩では古田織部流が主流をなしつゝ、大名好みの茶道が後世まで承け継がれている。

さらに三沢氏は毛利一族10氏の次に位する禄を食み、支藩長府藩が成立すると2番家老として明治維新まで仕えた。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳六月抄

出て行けと言われぬ大事な一人っ子　松浦　久寿子
咲き終えた花の姿に老い思う　安部　春恵
我れ先におしゃべり続く同窓会　松浦　亜以
アルバイト言へば外孫来てくれる　横山　まこと
反抗期親も本気で腹を立て　児玉　哲呂
わだかまり心の窓をひとつ閉じ　藤原　のぼる
隠居部屋気まま暮しも味気ない　若槻　白馬
五月晴れいとも男児と舞い上り　真綿　よし子
植付の慰労の旅でまた疲れ　石原　冬明
恋らしい娘この頃長電話　森山　悠子
強情と頑固が競う老夫婦　松田　牛歩
カンボヂヤ戦中辛い留守思ふ　渡部　ミツコ
三十年夏の訪れ子を想う　安部　正子
待ちわびた恵みの雨にいやな風　藤原　英生
死んだ子に想いを寄せて石を積む　高木　凡太
もう五十いやまだ五十とひとりごと　加納　治江

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 220 号
（8 月 号）
1993. 8. 7
（M 125・T 81・S 68）
奥雲出編集集団©

明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜⑤

——水戸・豊前・鳥取・長州・福岡・備前の諸藩

第四番の反射炉ー水戸藩那珂湊（なかみなと）

佐賀・鹿児島・韮山について1863（安政3）年2月に火入れされた水戸藩の反射炉は、藩外から招かれた南部藩の大島高任（29才）、薩摩藩の竹下清右ヱ門、秋田三春藩の熊田嘉門の三人の蘭学・技術者を中心に行われた。

燃料は助川ほかの石炭で、韮山と同じく乾溜してタールを抽出したのちコークスとして用いた。銑鉄は南部・上州・備中などのもので、南部の砂鉄銑が多く用いられた。備中も同じ砂鉄銑、上州小坂鉄山は磁鉄鉱であったので、岩鉄から製鉄した銑鉄（鉱石銑）と考えられる。

1・2回は溶解に失敗、3回目に砲一門を試鋳した。4回目は木炭を使用したら溶解に成功し、第5回までモチール砲（臼砲）の鋳造に成功した。こうして半年間に8回操業して砲4門が鋳造されたが、1門は不良品で完成したのは3門に止まった。

4年12月南部釜石では大島が**高炉による銑鉄**つくりに成功、5年4月にはこゝで製錬された鉱石銑（南部柔鉄という）が水戸へ送られはじめた。この年には砲が6門鋳造された。

ところがこの事業の推進者水戸斉昭が江戸で、幕府より謹慎を命ぜられた。安政の大獄の前ぶれである。全工場は閉鎖された。

4年後の文久2年10月再開されたが、2年後の元治元年8月筑波山によった天狗党（勤皇派）に対抗して、諸生党（佐幕派）は那珂湊反射炉に陣を敷いて戦い（天狗党の乱）、こゝの施設は戦火で砲壊されて、ふたたび復旧されることはなかった。

製作砲数（佐賀100門・薩摩数10門）ではもとより、品質・性能でも、これらの2藩に遠く及ばなかった。約3カ年で18門合格したものはさらに少なかった。

銑鉄は山陰の砂鉄銑とこれについで南部砂鉄銑でまかなっていた。水戸藩の製砲数の少ないのは鉄銑不足とされている。それは立地条件ではなく、藩財政の窮乏によるものと考えられるという。

（砂鉄銑を並鉄・鉄鉱石銑を熟鉄という）

この事業にかゝわった大島は、「鋳造技術にもよるが原鉱である。砂鉄は西洋ではチタン酸化鉄で、鉄を脆弱にするから砂鉄銑で鋳造した大砲は必ず破裂する」といっている。これはヒューゲニンが『大砲鋳造法』において原料鉱石の選択が決定的であるといったのと一致している。

大島は故郷南部の釜石の磁鉄鉱をそこに西洋式高炉を建設して製錬し、その鉱石銑を水戸に供給したい希望を着工の時から提言していた。

モチール砲2門を鋳造し終った、1856（安政3）年8月、大島の帰国を許し、そこで高炉建設の可能性を追及させ、一方水戸藩では、竹下・熊田に上州小坂鉄山にゆかせ、そこの鉄鉱石を製錬する場合、高炉はその山元か水戸領内かどちらに建設するが有利か、鉱石輸送費、木炭・石炭の価格、人夫賃など比較検討させている。また斉昭の実子慶徳が養子となった鳥取藩からその地の鉄鉱の標本を得て分析し、鳥取藩に高炉建設を勧誘して、竹下をその担当者することも検討されている。（岡田広吉は県西日南町上萩山の雲州鉄鉱（赤鉄鉱）ではないかと、調査し報告されていて、報告書を頂いている）

結局財政が許さず具体化しなかった。その上藩外から技術者は砂鉄銑による鋳砲を拒否する動きもあって製砲事業を遅らせた。やがて藩外3技術者が去ると、藩内に技術者も育成されておらず、事業は停頓してしまった。しかし水戸藩の反射炉鋳砲事業が、釜石における洋式高炉への契機となった意義は大きかった。すなわち「大橋高炉」が本邦の洋式製鉄法第一号となったのである。

豊前ー安心院（あじむ）の民間経営第一号

天領韮山、水戸のような大藩が十分に効果をあげないのに、'55（安政2）年に島原藩の飛地豊前安心院で、いち早く民間経営で反射炉・鋳砲製造業が開始されている。

「反射炉碑」（碑文あり）と数百の煉瓦など有力な資料が残っている。碑文によると、3年間に砲10門を鋳造したという。その人物は当地の加来家一族であるが、西南戦争の折焼打ちにあってすべてが焼失したという。

加来家は加来郷の地頭の末で、当時大地主であり、酒造・搾油・製蝋・鍋釜鋳造など7種の事業も経営していた。一族には文人・医者もおり、師としては当時異色の儒者で蘭学修め、自然科学者でもあった帆足萬里がいた。

燃料は木炭と筑豊の田川石炭を用い、砲数は22門という。また鳥取藩の武信家経営の反射炉築造から操業まで協力し、鋳砲

明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜⑤・心に焼きついている思い出・短歌・俳句・川柳・記録

を成功に導いた。安政3年に訪れ、武信新九郎は協力を得て翌年建設にとりかゝり、加来家の全面協力で、佐賀・薩摩について多数の鉄製要塞砲を作製し成功した。こうしたことは幕府の弱体化とは別で、農商工階級の力の増大に加えて、民間でかなり高い知的水準に達していなければ不可能であったことは、特筆すべきことである。

また賀来家は島原藩にも出向して、鉄製砲10数門、後に青銅砲も鋳造している。

これらはヒューゲニンの『大砲鋳造法』によったものとする資料もあるという。

鳥取藩の六尾（むつお）の反射炉

六尾は現東伯郡大栄町にある。そこに伯耆きっての大庄屋武信潤太郎という人物がいた。

鳥取藩が砲術の革新にも積極的に力を入れたのは、水戸の徳川斉昭の実子慶徳が、藩主池田家へ養子として入ってからである。家臣を実家の水戸に派遣して諸砲術関係の製法も学ばせた。

'74（安政3）年水戸の那珂湊の反射炉第1号が完成したのを知った在江戸の藩主慶徳は、武信一族に命ずることになる。伯耆きっての大山林地主・大庄屋で、米の回漕も営む武信家がその経営を委ねられたのである。

この時武信家はすでに豊前の加来家の次男で、砲術家の中心技術者であった惟準を伴って帰っていた。

'75（安政4）年、武信家は技術者の中心人物をつれて応援にかけつけた加来家の協力を得て着工した。

燃料は木炭、銑鉄は伯耆の砂鉄銑と古鉄（鍋釜・鋤・鍬）であった。古鉄も農民の苦情から強制的買上げもうまくゆかず、藩は人形峠の麓でたたら場を経営して材料銑鉄の不足を補った。

古鉄使用は鋳物師が普通行う方法であり、倉吉には古くからの有力な鋳物師もいた。六尾の反射炉が民間委託事業として、韮山・水戸に比べても、製砲で大きな成果をあげたのは、要塞砲としては小型のものが多かったこともあろうが、古鉄使用の効果を認めることもできるではないかとみられている。

因伯の海岸各地の砲台に備えられた数は37門、大阪天保山砲台への5門、他近隣諸藩への10門（備前藩1、浜田藩9）以上を加えると58門以上となり、佐賀藩についで薩摩藩とほゞ同数の製砲数となる。（これに対し芦沢は末期は銅製砲であろうとの見解を述べている）

そして'64（元治元）には長州藩からの指導要請をうけており、加賀藩からは'66（慶応2）年見学者が来ており、のち指導にいっている。

武信潤太郎は蘭学者ではなかったし、鳥取藩にも鋳砲事業に役立つほどの蘭学者はいなかったようである。従って豊前の賀来家の指導が武信家の財力と経営力と識見を動かして、農商工階級の工業への進出となったものと特筆すべきであろう。しかし維新を契機とする社会的激変と、武信家の相続争いが重さり、廃絶し古文書も逸散した。

長州藩萩の反射炉は失敗

現在遺跡が残ってはいるが、ヒューゲニン著の蘭書にもとずいた佐賀・韮山と違い、反射炉に似たものを作ったというに過ぎないというのが、今日の定説となっている。しかも安政5年は諸藩に比べて最も遅かった。

長州藩は地理上、藩政でも蘭学・洋式兵制採用なども早かったし、兵器製造に関する技術者は足軽の上の準士格として遇せられていた。江戸・長崎への派遣も行われていた。

しかし佐賀藩では反射炉の操業や鋳砲技術の伝習は断わられたので、薩摩にも申入れをしたが、こゝでも対抗的立場から断わられた。

長州には蘭学は極めて早い1758（宝暦8）年に入っていて、新らしい技術をとり入れる動きもあったが、政治的風土は偏狭な攘夷論が支配的であり、幕末の長州藩は多数の志士・政治家・軍人を生んだが、島津斉彬、鍋島直正のような開明藩主をもたなかったのが響いていると思われる。

ヒューゲニンの著書の訳者の一人手塚謙蔵は、周防国の出身であって長州藩人であり、幕府の「蕃書調所」の教授にもなり、のち長州藩にも仕えたが、ある藩士に要撃されて、危く難をのがれのち変名して佐倉侯の下に庇護されたということもある。

福岡藩と備前藩その他

筑前**福岡藩**では藩主の計画の下、鋳物師磯野七平によって担当されたが、鉄製砲の鋳造には至らなかったが、青銅砲は鋳造された。

藩主長溥の積極性から、西洋科学技術の伝習は多彩かつ積極的であったが（薩摩の島津斉彬の大叔父にあたる）、保守的家臣団の抵抗・妨害は薩摩よりも強かった。

備前藩では大多羅（おおだら）で、ヒューゲニン著金森錦謙訳『鉄煩鋳鑑』の図面にもとずいて、反射炉と鋳砲が行われているが、詳細は解明できていない。

この藩での動きは1863（文久3）年、水戸藩主徳川斉昭の9男が、藩主池田家の養子となってからである。中心は庶民の建築大工の大棟梁尾関滝右ヱ門であったが、経済力の弱さで成功しなかった。

土佐藩には反射炉はなかったが従来の方法で青銅および銑鉄製の大砲をかなり活発に鋳造している。

津藩にも反射炉はない。藩の鉄砲製造所についても不明であるが、鋳物師阿保家があって青銅砲はかなりの数が鋳造された

心に焼きついている思い出

古市のキリスト教救世軍

松浦龍二

横田町横田の旧家岡崎家の当主は、夙にキリスト教の信仰厚く、私財を投じて横田の町に当時田舎としては、西日本最高と言われる立派な本格的キリスト教教会を建設された。その教会は戦時中幾多の変遷を経て、現在でも田舎町では珍らしい洋風の景観を見せている。

昭和四年頃であった、当時キリスト教救世軍日本最高位の山室軍平少将が来町されて、横田小学校の講堂で講演されると言うので、私たち八川小学校の高等科生も聴講に歩いて行った。

（このようなところにも松浦準蔵校長の教育方針、理念の一端をうかがい知ることが出来る）

講演内容は全く記憶にないが、容姿だけは其の後の新聞写真等で度々お目にかかったこともあってはっきり覚えている。講演内容は記憶に無くても、日本で一番の人の話しを聞いたと言う体験が、その後の私の人生にどんなにプラスになったかわからない。

山室軍平少将来町と言う一事を見ても、岡崎家が奥出雲に蒔かれた地・塩の導くもその大きさに頭の下るばかりである。斯くして横田の教会には他所から牧師さんが派遣駐在されて、布教活動を活発に行われたようであった。

この牧師さんは、救世軍の少尉で、私たちは小隊長は何日おきかに古市に上って来られた、その夜になると、私たち古市、土橋あたりの物好きそうな男の子が、古市下の恩田時雄さん宅の前に集って横田隊の到着を待った。

耶蘇を毛嫌いする家庭も少なくなかったし、夜道に女の子が出るなどもっての他と言う時代であったから、集まるのは男の子だけで、多い時でも12～13人位であった。

大人は土橋の屋号鏈谷の恩田嘉蔵さんが八川隊の隊長で、もう一人は古市上道（古市古沢代宮家の横から新宮神社方面への道）の松崎佐一郎さん（大正十四年八川小卒）であった。横田教会の牧師である小隊長は、男の人であったが、当時は女の人で黒紺のバンドのついたワンピース、横かぶりの三角帽、黒靴下、黒皮靴、黒縁眼鏡の、子供心にも魅力的には見えない人であった。（私服の時はとてもやさしい親切な婦人であったという）

横田隊は小隊長を先頭に大太鼓を響かせ乍ら到着する。こう書くと大変な人数の部隊のように思われるが、横田隊の総勢は4～5名であった。

八川隊と合流した、この夜の一隊20名ばかりは、先ず、恩田宅前で太鼓に合わせて救世軍軍歌を歌い小隊長の説教を聞き終ると我々は大声でアーメン ハレルヤと呼称して行進に移った。当時、古市の街並みは現今同様家が続いていたが外灯や防犯灯と言ったものは皆無であったから、明りと言えば小隊長のかざす、手提提灯の明りのみで、暗闇の中のわずかな明りの中に浮かぶ黒づくめの小隊長の姿は神秘的よりもむしろ怪奇的に見えたものであった。

自動車一台通るでもない暗い道を提灯一丁の明りを先頭に太鼓の音のみドンドンドンと響かせて行進を続け、屋号角（安部）の前、役場前の三叉路で前記の街頭集会をしたのち、藤川屋（田中屋旅館のすじ向い）に到着する。藤川屋の長屋の往還（道路）に面した板の間が仮の教会所で木製の長椅子が並べられ、私たちはそれに腰掛けて歌を習ったり、お話しを聞いたりしたが、内容は全く記憶になし、やたらに「ハレルヤ」「アーメン」と言ったり、集会が終った時煎餅菓子二・三枚を貰ってよろこんだことはよく覚えている。

前記の松崎佐一郎さんは、高等科を卒業して間もない若い青年であったが、熱心な信者であったようである。ある年のクリスマスイブに、私たち古市少年隊をつれて横田の教会に行き、キリスト教劇を主演、兼演出等一切をされた。

私も出演したがどんなことを演じたか忘れてしまった。終ってから貰った赤いリボンのかかったプレゼントのケーキは生れて初めてのものであった。

現在覚えている軍歌は次の二節のみである。

○青赤黄の三色にあらわされる救いの旗印のことわり知るや

○酒飲むな　禍いは　酒が元ぞ　酒飲むな

—『八川の思い出話』第五話より—

（横田町八川出身　木次町在住）

と推定される。文書によれば松江藩その他からの注文書がある。

文書の中には鉄製砲の図面などもあるが、鋳造・鍛造は明らかにできない。

肥後藩には反射炉はないが、幕末に鋳物業もしていた増永三左ヱ門が在来の鋳物技術に鍛造技術を併用して、鉄製砲・青銅砲を30余門つくったという。

松江藩では蘭学者金森錦謙を抱えてヒューゲニンの著書の翻訳させてはいるが、その実現はない。くわしくは後で述べる。

（今月も大橋周治著『幕末明治製鉄論』を中心に、芹沢正雄・E・パワーの著書を要約させて頂いたもので、感謝する）

（横田史談会 高橋一郎）

朴の葉餅の出來る頃

簸の上短歌会

杳き日に母を待ちつつ夕ぐれを蛍ぶくろと野に吹かれをり　永井弥生
顔中を口にし餌を欲る子つばめに身をひるがへし親鳥のとぶ　仝
着替えする吾れを眼で追ひ病む夫は帰る時刻を幾度も問ふ　佐藤喜代子
誰が出ても変らぬと言ふ投げやりが変らぬ自分を忘れてゐぬか　常盤はるまさ
六十年は短かしと思ひ長きとも愚鈍なるままに嫁ぎ来れば　岡田時子
日赤病院の即売場にアクセサリ求むる女性の患者幾人　野村節子
朴の葉にくるみし草餅歌友よりとどけられ来ぬ梅雨晴れし朝　仝
実らざる愛の別れはせつなくて雨の夕べの岡山の駅　安部夕波
ふりむけば山脈はるか連なりて吉備高原の夕映えの空　仝人

柴栗句会七月

孫と住むよろこびこめて菖蒲葺く　浅野としお
朝まだき沼のしじまへ映る合歓　岡田蹊花
子等嬌声通り過ぎたり合歓の花　小川月舟
野仏の童顔可愛ゆ糸蜻蛉　恩田和美
紫陽花や今日に明日の彩かさね　門脇花子
青田風入るにまかせ過疎住い　加納信子
病む母に土産とつるす風鈴音　楠房子
惜景の晩夏の霊峯神ながら　高木白虹
紫陽花の奥にお団子の張紙や　中澤美紀子
梅雨深し掌てくぼに数う玉薬　新出谷一華
梅雨空を見上げて明日の旅支度　錦織富江
無器用な旅の友なり缶ビール　渡部夕峰

感謝して回顧

横田史談会も1975（昭和50）年に発足してから18年がたちました。高令化しましたが頑張ります。よろしくお願い致します。

○奥出雲（準機関誌）は、220号を数えた。高令の方が減るが、幸い町外や県外の方が増え、町内の若い方がボツボツ増えて何よりも嬉しい。

幾人かの篤志を時々頂いて、なんとか赤字が。

○古文書を読む集い　192回

現在は13名ほど、発足以来では30余名。大変に力をつけられた。床間の軸物を読むため、和歌・俳句・漢詩の解読も。この集いに『出雲国風土記』の輪読に続いて、『日本書紀』をはじめ42回でその前半を終える。

○史蹟めぐり　26回

日帰りのところは2回目の探訪へ。

○見学会　8回　講演会　8回
講　座　8回

最近は高令化のためのびのび。

○主催する研究会

△たたら勉強会　12回

全国的規模のもの6回で大変好評を頂いている。

近世たたらの全国調査も終了し、集計研究も完了。

今年秋に第13回開催準備中。

（県組織）

△近世史研究会　2回
△出雲国風土記研究会　2回

（全国組織）

△たたら研究会横田大会
△産業考古学会横田大会

○その他

△横田の**紹介**写真展（松江市で）
△横田の**仏像**写真展

お蔭様でこのように続いてまいりました。

この上ともよろしくお願いいたします。

△陰陽郷土史研究会　4回
△先覚者を語る会　1回

○協力又は共催

斐の上川柳七月抄

目と鼻と耳もまじえて糞談義　田中有樹絵
一坪の庭にトマトもひまわりも　中林もりえ
世は不況神様だけが景気づけ　藤原英生
八ケ月ぶりにコタツを休ませる　松浦亜以
負けて勝つ手を知る妻は燗の量　松田牛歩
買いそうな顔で試食をして廻り　児玉哲呂
乗りかえたローカル線にある安堵　藤原千代子
暴風雨あらゆるものを吹きとばし　安部正子
病む足をいたわりながら玉入に　渡部ミツコ
どしゃ降りの雨が山野を変える川　真綿よし子
孫寝かせ団扇が動く愛の風　若槻白馬
若返る為のネクタイ派手にしめ　高木凡太
母の日も彼岸も盆も宅急便　松浦久寿子
花に手を葉かげの蜂に又やられ　安部春恵

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 221 号
（9 月 号）
1993. 9. 4
（M 125・T 81・S 68）
奥雲出編集集団©

古い記録を綴り合せて

―里人（さとびと）＝庶民の歴史はこゝから

盂蘭盆会

仏壇を整えるために、諸用具の入った箱から道具をとり出していると、包んだ紙にいろんな古い紙があった。帰省している孫をを相手に半日かゝって飾りつけをしたあと、古い紙につられ過去帳などの袋を古い帳箪笥の底から引き出して見た。その中に今まで時々見たが読みのこしたところもあって、ついつりこまれて読んでいった。

その中に「ころり病云々」とあるので、ころり病の言葉を念のため『広辞苑』で引き出した。コロリ・虎狼痢・古呂利とあり、（ころりと死ぬ意を掛ける）コレラの異称とある。幕末の蘭法医書にも、緒方洪庵の『虎狼痢治準』があるという。

今年の夏の冷夏はエレニーニョ現象が原因という。赤道周辺で続いている海水温上昇が、沿岸に集中豪雨もたらすからであって、過去の冷夏はすべてこれで説明がついていた。しかし最近はそうとも言えないという説もあらわれている。それはともかく、この夏は冷くて良かったが、野菜の不作を招き、秋の稲の収獲も心配である。

47年前の敗戦の夏は暑かった。今も思い出すと複雑である。戦中戦前の夏は伝染病の流行が絶えたことがなかった。今は予防・健康管理・医療体制の充実で、全く恐ろしいものではなくなっている。その古い記録によると安政5～6年、それから25年たった明治17年ころは、当地でもコレラが流行している。その数は明らかではないが、県立図書館所蔵の古文書をひもとくと、安政5（1858）年には港長崎で発生したコレラは、港美保関に伝わり50～60人が死亡、境港10人、米子70余人、松江は400人の死者が出たという。松江藩主松平定安も京都から急遽帰国、杵築大社で祈祷をしたという。この流行は8月1日から9月15日まで西方に向けて箒星（ほうきぼし）（彗星（すいせい））がみれたからとされていて、この祈祷の結果彗星の正体は「玉藻の前」（キツネの化身）と判明、祈祷後の9月15日これは姿を消したという。

ところが翌年ふたたび流行し、松江600～700人、米子150～160人、鳥取では2,000余人の死者が出ていて。二年目の流行の被害が大きかったことがわかるが、翌安政7年の記述にはコレラの被害の記述はなく、流行は収まったものと思われる。

このようにして古い記録の中から洪水とか干魃とかの項目を拾いあげてみると、名もなき民のくらしのあり方が浮びあがってくる。別な記録をみるとこの2年間は特別な酷暑だった。

古い記録を綴り合せて・古文書収蔵庫の完備・銑生産の系譜⑥・横田三十三番札所めぐり⑨・短歌・俳句・川柳

町立図書館の中に　古文書収蔵庫の完備を

本紙214 215号に、第9号（1976昭51）の紙面を縮少再録した中に（3頁）、横田町で集めた古文書の部類別数（左記に再掲）がある。これは現在コミュニティーセンターの図書室のロッカー数架に収蔵してあり、別にそこの地下にまた役場の文書庫の中にも分散していて、保存上も利用上も十分でなく閲覧も不便である。図書館が新らしくなるにあたり、是非とも完備したものを期待したい。横田の歴史を人々の生活を産業を、心の流れを読みとれる資料である。県内の市町村の中でこれほどよく集められたところはないと言われ、誇り得る文化財である。

中世文書―杜家（山本と表）・安部家（土居）			131冊
たたら関係―蔵家・絲原家・町外桜井・田部家ほか			851冊
寺社関係―岩屋寺ほか（中世・近世・近代とも）			101冊
中世文書―石清水八幡宮・京都御所・泉涌寺・三沢氏			27冊
毛利氏・尼子氏関係			53冊
近世以降―諸書			38冊
郡内各町村検地帳（写真とその原版フィルム）			115冊
仁多郡家御用留（元禄～明治15まで）			97冊
行政文書―町内旧町村分（明治元～昭和32まで）			487冊

これらは25年前の横田町誌編纂の折、町長の英断により町村でも最も早く電子コピー機を購入し、県内外から借用して（県庁や広島大学ほかから特別貸出しも含め）、臨時職員によって複写製本したものである。横田町はもとより仁多町の歴史を綴るには、まだまだ十分に価値があり、町誌改訂はもとより、書き残された部門の資料も豊かにある。これに絲原記念館所蔵の1万点を越す近世以降の文書とともに、他町村に誇り得るものである。これに各地区にある集落の記録の保存庫を設けると、庶民の歴史資料の宝庫となる。（4頁下段に解説）

（筆者の手元には現在、横田町を含めて仁多郡内の中世資料が全国から集められて、これ以上はないだろうという1,500点が整備されている。）

明治以降の奥出雲に於ける
鉄生産の系譜 ⑥
——南部藩釜石の大橋炉ほか

わが国の近代高炉第1号

岩手県釜石市から約40㎞離れた橋野川上流に、遺跡として保存されている橋野高炉跡を見学したのは、もう20年も前の1973（昭和48）年11月2日であった。

明治維新前に、わが国で最大の鉄鉱山であった釜石鉱山の周辺には、建設されて操業していた高炉は全部で10基あった。

開始	場所	基数
1857（安政4）	大橋	3
'58（仝 5）	橋野	3
'60（万延元）	佐比田	2
'65（慶応元）	砂子橋	1
'67（仝 3）	栗林	1

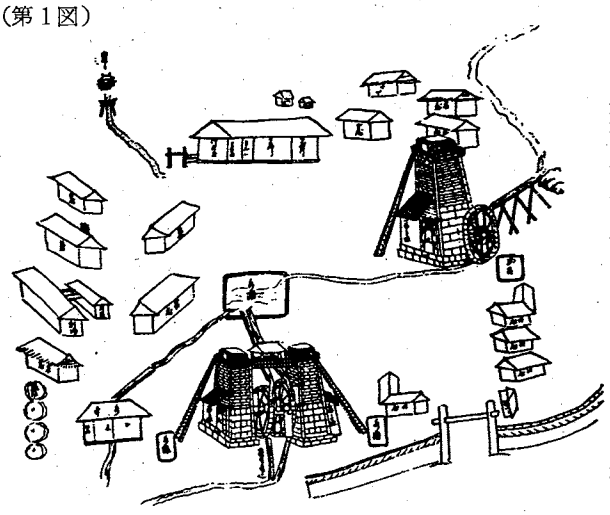
この10基のうちの1つがこの遺跡で、本格的に鉄鉱石から銑鉄を製錬した高炉の記念碑ともいえるものである。わが国で最初に建設され操業を開始した大橋の1番高炉や2・3番高炉は、今は小学校の敷地となって痕跡もとどめない。

この最初の大橋1番高炉は、前220号記述の如く、水戸の那珂湊にわが国で第4番目の反射炉を築いた南部藩の大島高任が、大砲鋳造の原材料として砂鉄銑にあきたらず、故郷の南部藩に帰って、釜石で産する磁鉄鉱をもとに鉱石銑を製錬するために建設したものである。

なお217号で紹介のように、ヒュゲーニン著『大砲鋳造法』によって、最初に高炉を築いたのは薩摩藩であったが、安定した操業には至らなかった。ついで函館でも試みられたが成功せず、わが国の高炉第1号となったのは、この大橋1番高炉である。

この大橋の3基の高炉の配置見取図は第1回の如くで、右上が第1番高炉で、下の2基は文久年間に増設された2・3番高炉である。

（第1図）

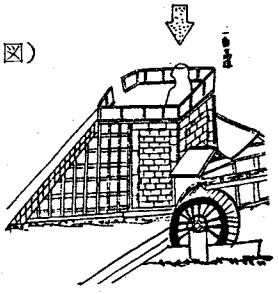


幕末の大橋高炉図（「大島高任行実」収）
「大島高任行実」の編者は文久初年頃の現場見取図と推定

大橋1番高炉の構造（推定）

これは明らかになっていないが、岡田広吉「ヒュゲーニンによる高炉の叙述と釜石鉄鉱山大橋高炉」（『鉄と鋼』第73年第14号）の論文から、そこと、これをもとに設計したもので推定されていることがわかる。

（第2図）

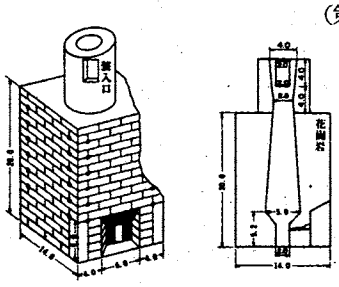


送風動力は水車起動によることは第1・2図でわかるが、吹子はわからない。記録によるのを、一般向けに誤まりないよう述べる。

高炉の外観は第2図のようで、規模は記録や絵巻物、橋野2番高炉などを参考とすると第3図の如くで、方14尺（4.24 m）、高さ20尺（6.06 m）、上部の細い筒形の原料挿入口のあるとこが8尺（2.42 m ＝第2図の上の人の上半身形の部分）、それにこの下にやゝ広い基壇があって三層となる。あわせて30尺（9.09 m）となる。

これをヒュゲーニンの原著にある図ー第4図ーと比べてみると第4図の如きもので、吹子は円筒形であったが、風力が弱かったために、作成した大工が夜逃げするなどの騒ぎもあったが、在来の日本の吹子を縦ながの長方形にして成功した。

（第3図）



高炉成功の要因

炉の構造は第5図の如く記録などからみることができる。

館充の論文によると、その要因は大島高任の本領と力量の上に、① 砂鉄製錬のたたら操業において、銑鉄製造が行われていて、その設備や技術の経験があったこと。② 鋳物製作のための「こしき」炉による銑鉄再溶解法の技術が確立していたこと。

その円形断面シャフト炉とその操業、使用耐火物などの経験が蓄積されていたこと。③ さらに釜石地方に餅鉄(磁鉄鉱礫)があって、その使用を含めて塊鉱製錬についての伝統があって、大橋もこれについて知見があったこと。などを指摘している。

高炉の初の操業

最初の火入れは安政4年12月1日であった(戦後この日が鉄の記念日となる)。そして最初の出銑日は12月10日であった。

1回の操業毎に2週間前後の炉の修理後に火入れ操業という形態であったが、1回毎(3～4日)に炉が壊されて再築炉される『企業たたら』に比べると、画期的な進歩であった。

出鉱量は10日夜に200貫(0.75t)つづいて250貫(0.937t)とあるが、操業状態も話にならないくらい低く、1日に1tという製銑能力であった。それでも企業たたらと比べて年間で3倍の生産能力があった。(35,000貫131tに対し100,000貫375t)そして安政5年には待望の鋳砲原料として2,760貫(10t余)の銑鉄(東北地方では鉧と呼ぶ)を水戸に船で移出した。

こうして明治初年まで合計10基が稼動し、年平均1炉が5～6万貫の銑を生産し、10基で50～60万貫(2,000t)程度の製銑をしていたことになる。

燃料は木炭を用い、鉄鉱石の焙焼(融解点以下で一度焼くこと)は行わず、(橋野高炉からは薪炭で野焼して砕き、さらに焼いた)、溶媒剤としての石灰石とともに高炉に装入した。

建設への新らしい動機

すでに述たように、佐賀・薩摩・水戸の反射炉などは、諸大名による西欧技術の導入、産業近代化の試みで、領主の強烈な海防意識に発し、鉄製砲の製造という軍事目的のために巨額の藩費(公費)を費して経営された。これに対し釜石の高炉製鉄は、貫洞瀬左ヱ門と大島高任二人の願いによるものであるが、南部領内の砲鋳造が動機でなく、水戸藩の那珂湊への銑鉄供給が主な動機であった。貫洞は土着の士分でありまた豪商であって、これが最初の出資者であった。のちには領外からも出資者があらわれるが、いずれも利潤を得る関心を主とするものであった。

しかし先に述べたように安政5年7月、水戸藩の政変によって鋳砲事業は終って仕舞った。

その余波は出資者にも大打撃を与え、また藩営ではじめた橋野高炉も打撃をうけた。その後紆余曲折があって高炉群は、大規模な鋳銭工業を市場として、操業を続けることになり、これで巨利を得ようとする商人出資の支配人経営、資本家経営へと発展していった。

一方南部地方は相次ぐ凶作で疲弊した農山村の解体が促進され、農民を土地から引きはなし大量の専業労働者群を生み出していたから、洋式製鉄の導入後は、賃銀形態も現物給から貨幣賃金、前貸制から後払いの高賃金へと変っていったという。

さきのように技術的にも、また、このように経済的にも、ずっと近代化に近づいていたといえる。こうした社会条件の中で、すぐれた釜石の鉄鉱資源の存在と、それを開発する技術の導入者大島高任がいたので、急速な工業化へと向っていったのである。そして日本の資本主義生産の発生地帯の一つとなったと言えるという。

また大島高任は技術者であるばかりでなく、上申した藩政改革案を通してみると、当時としては他に例を見ない、産業・通商・財政をまがりなりにもまとめた経済政策を、また経済と教育・軍備を関連させた政策を提案している。大島はこのように異色の経綸家であった。

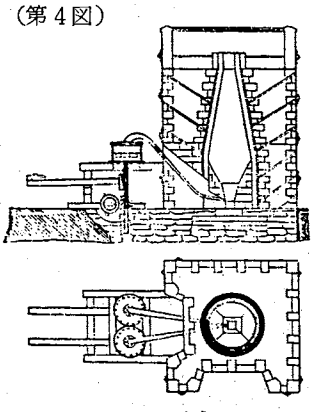
それらはすべてのち明治政府の手で実施されていったことと、同じものであったのは、いかに先覚者であったかを知ることができるのである。

だが晩年に非鉄金属鉱山の現場技術者として歩んだのは、維新内乱において南部家が〝朝敵〟となったことが影響しており、経綸を発揮できなかったともいう。(横田史談会 高橋一郎)

以上やゝくわしく述べたのは、本連載の一つの中心主題である明治初年の当地絲原家の角炉建設計画を種々考察するに、すべてが相関するからであった。

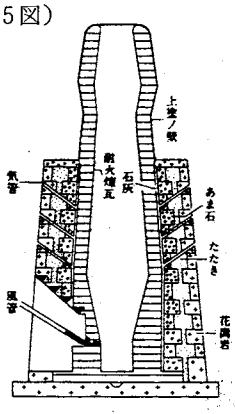
次号から「松江藩と蘭学」に入る。本号も大橋周治・館充・窪田蔵郎・岡田廣吉の諸氏の著書や論文に負うものである、図なども引用させて頂いた。感謝申上げる。

(第4図)



原著にあるふいご方式

(第5図)



橋野2番高炉の説明図

前号訂正　2頁4段20行　思われる　全頁5段24行　土佐藩

斐の上川柳八月抄

秋風が吹いて老化も急ぎ足　松浦亜以
片言の電話の向うを想像し　田中有樹絵
テレビまで雨が降ってる日曜日　児玉哲呂
お早うと児の挨拶に声が出ず　横山まこと
けもの達とうもろこしの実り知り　安部春恵
雨続き畑に立ってため息し　安部正子
老の血も少しはたぎる夏祭り　松浦久寿子
長雨によう降りますの合言葉　真綿よし子
聞く側もリズムに乗って唄い出し　藤原千代子
退院の目安婦長にそっと聞く　森山悠子
独りいて風呂まで電話もってゆく　渡部ミツコ
妻ねごと夫の耳がぴんと立つ　若槻白馬
乗せられて乗った自分が悔まれる　藤原のぼる
長雨にあじさいまでも疲れ顔　礒島恵子
豪華船乗って見たいな山育ち　藤原英生

雲母坂は雨　簸の上短歌会

ままごとの如き些かの煮炊きにも慣れてふたり　永井弥生
の暮らしも半年
馬鈴薯を植ゑたる畑にもさくらにも名残りの　仝
雪のしきり降りくる
寝たきりの妻に見せむと改修されし集落道を　常盤はるまさ
カメラにをさむ
老いたれど犬の力の強ければ夕べの道をわが　野村節子
引かれゆく
つくばひて高菜を洗ふ門川に椿一輪流れ来たれり　仝
また一人級友の訃のありし夕べ米研ぐ水のな　佐藤喜代子
かなか澄まず
疎まるる齢となりて言ひたきを控へて花の丘　岡田時子
に来て和ぐ
軒下に捨て置かれたる蕪ふたつ黄もあざやか　松浦愛子
に小さき花着く
遠き日に吉井勇を訪ひたりし白川通り過ぎ雲母坂は雨　安部夕波
南伊豆の五月の海はきらめきて石廊崎灯台は　仝
るかに望む

柴栗句会八月

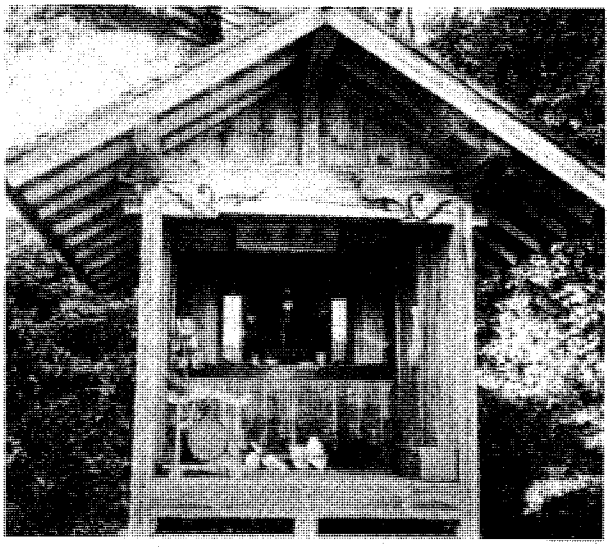
心天難なく老の喉こす　浅野としお
鰯雲平家平の秘める夢　糸原古志
万緑の稜線なべて神の峰　小川月舟
かなかな時雨波打って侘し日が暮るる　恩田和美
たたみおく風鈴吊し風を呼ぶ　門脇花子
捨て切れぬ古りし寄せ書終戦日　加納信子
お茶座敷ちとのぞき行く鬼やんま　楠房子
おろち橋隠れ平家や秋の声　高木白虹
ペタル踏む少年の声蝉時雨　中澤美紀子
雨止みて風が乗せくる祭笛　新出谷一華
訪えば栃子香る雨の糸　錦織富江
蛍とぶ岸辺の我が家孫もなし　峯石美代子
くもの囲や山の祠の扉を開く　渡部夕峰

横田三十三番札所めぐり⑨

第12番　福頼（大黒屋の近く）

曇華庵（どんげあん）

曇るてに
木くらからぬ
曇華庵
花見し玉たれの
霧こもるらん



（1頁下段から）**集落の記録について**　町誌執筆の折、さる集落の自治会長引継文書の中に、そこの共有物の歴史的文書があり、拝借したが、頁数の関係で記述には入れなかった。その後10余年を経て再び拝見し要点を記述し検討した。発表にあたり慎重を期してしばらく前に拝見を願ったが、引継がれていないとのこと。次第に増える文書、自治会毎の収蔵棚（各に鍵をつけて）を設ける必要を痛感したので、この際提案したい。

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

松江藩と蘭学（上）・出雲大川流域物語⑥・俳句・川柳・短歌

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 222 号
（10 月 号）
1993. 10. 2
（M 125・T 81・S 68）
奥雲出編集集団©

松江藩と蘭学（上）

明治以降の奥出雲における鉄生産の系譜⑦

6代宗衍（1731享保16～1767明和4）**7代治郷**（1767明和4～1806文化3）

享保16年3才で襲封した宗衍は、1746（寛延元）年に、江戸で荻生徂徠について学んだ宇佐美恵助を藩儒に招いて江戸藩邸に文学所を設け、1758（宝暦8）年には国元松江で桃源蔵に藩校文明館（治郷にいたり明教館となる）を開設させた。藩政改革の一環であったが、財政窮乏の極にあった。

恵助は世子治郷（不昧）の侍講も命じられていた。桃は安濃郡川合村の医師の子で、江戸に出て桃東園の養子となり、林大学頭の門に入って朱子学を学び頭角をあらわし、宝暦7年36才で松江に帰省し、藩主の求めによって儒官となった。(37年在職)

1766（明和3）年家老の朝日丹波が仕置役となり、翌年からは「御立派の改革」がはじめられ、まず38才の藩主の隠居を迫まり、17才の治郷が襲封したが、政治から遠ざけられ、丹波が改革をとりしきった。

不昧は8才から宇佐美恵助の儒学を受け、19才で大巓和尚に禅を学んだが、18才から石州流の茶道を伊佐幸琢に学び、20才で早くも茶道の秘伝を受けるほどだった。そして恵助の諫言も退けて茶道具収集に努め、藩政をかえりみなかった。1783（天明3）年には、飯石郡三刀屋と神門郡大津の町場で世直し一揆が起り、家臣からもきびしい上書が家老に出されるという批判も受けることになった。時は幕府においても松平定信による寛政の改革が実施されているときであった。不昧が御直捌として藩政をとったのは46才になってからである。各種の親政を行ったが、茶道具の心はそのまゝで、著名なもの四分の三までが親政時代であるという。

一方藩における書籍出版は盛んであった。(不昧40年在職)

このころの庶民の学問

出雲で南蛮医術を早く導入したのは、6代宗衍の時代に、長崎で学んで帰った飯石郡吉田村の渡辺道斎であった。

不昧の晩年の文化から次の文政年間（化政期）には、紀州の華岡青洲の門に学んだものが、多かった。出雲32・石見23・隠岐3の人々が入門している。

横田町では**小池文専**（文化15）

竹崎村では**鈴木景順**（天保11）がいた。

1838（天保9）年に大坂で緒方洪庵が開いた適塾には、出雲石見から14人が学んでいるが、奥出雲にはいない。

飯石郡三刀屋町では横山元造によって1796（寛政8）年青藍塾が開かれ、1848（嘉永元）年まで50余年間、漢学と医学を300人もの人に教えている。

9代斉貴（1822文政5～1853嘉永6）

蘭学を中心に洋学が盛んになるのは、不昧の孫斉貴からである。

松江藩主荻野平内は、1788（天明8）年、大槻玄沢が刊行した『蘭学階梯』に、また「蘭癖大名」として名高い福知山藩主の朽木昌綱が1789（寛政元）年に著わした『新撰泰西輿地図説』にも序文を書いている。朽木昌綱は杉田玄白に師事し大槻玄沢ほかの蘭学者と交り、松江藩主不昧に茶道を学んでいる。その奥方は不昧の妹幾百姫である。昌綱はまた玄沢の財的後援者でもあった。こうしたことからのつながりであろうという。（朽木の数代前と横田藤ケ瀬城主三沢為虎の兄の子孫との間にも縁組があり、そこから、仙台藩主伊達綱村の母初子が生れている）

斉貴はこうした時代と松江藩の学風のうちに成長しており、さらにその奥方は、長崎に近い佐賀藩鍋島斉直の娘充姫であった。奇人といわれ西洋趣味の収集家でもあった。360個もの時計を集め、電信機・写真機・噴水器・鉄製金庫・医療器具を集めたり、蘭書や翻訳書も長持三棹ほども所持していたという。

藤岡雄一（松江出身）について測量術・砲術も学んでいた。

斉貴は高島秋帆の弟子下曽禰信敦を師として、藩士荒川扇平・佐々六郎らに教を受けさせたが、下曽禰の賓客金森錦謙を迎えた。錦謙は本国備前、生国備中で、少年時代長崎に遊び、蘭人にも蘭学を学んでおり、蘭学の大家緒方洪庵の門もたたき、高野長英の門人内田弥之助について天文・測量も学び、1849（嘉永2）年、新番組として抱えられ、十人扶持を給せられ、斉貴の許に藩士となり江戸藩邸に移った。斉貴には兵学（砲術）・地理・医術を教えた。さらに斉貴と次の定安（1835天保6～1850明治15）に、兵法・医学に関する、自他の著・訳書・外交文書を進献し、1862（文久2）年5月1日江戸で没した。

進献した著訳書としては、『竹島図説』『百幾山新識』『鉄熕鋳鑑』『海陸両防秘策』『歩

兵使用雷銃新書』の五書のほか6書がある。医書もあるが、彼の本領は兵学者であったことが知れる。

錦謙（建策）は江戸では著名で、勝海舟の手記の中の「江戸在住蘭学者」に、医家にして兵学者として、金森建策の名があり、ほかに金森の教えをうけた間宮繁之進などの名もあり、津山藩士箕作阮甫の名もある。

松江藩の開明

このように治郷（不昧）から松江藩は開明的方向へ進み、斉貴に至って頂点に達していた。

これよりさき、将軍吉宗が洋書の禁をゆるめてから（1720享保5）、蘭学は盛んとなり、人間平等観・国際的友愛感情が拡がる一方、これにともなって幕政への批判がひろがり、老中松平定信の寛政の改革（1787天明7年から）となり、寛政異学の禁となり、洋学への抑圧と統制がはじまった。そして蛮社の獄となった。

渡辺崋山・高野長英・江川英竜・川路聖謨・安積良斎・佐藤信淵ら30名があがった。その中に松江藩士が2名、関係深いものが4名あった。このことは松江藩の開明ぶりをしめすものである。

島根県立図書館にオランダ人のハルマ辞書が2冊（蘭仏辞書と仏蘭辞書）ある。現存するのは5冊で、静岡県・長崎県と京都大学の図書館が他の3冊であるが、当県立図書館のものは、完本であって、文字通り天下一品であるという。

これは蛮社事件のころ天保10～13（1839～1842）年のころ手に入れたもののようである。さきにのべた長持三棹の中の書籍である。

このハルマ辞書は小森桃塢（1782天明2～1843天保14）が、師の海上随鴎から譲渡されたものである。この小森の門人の蘭学者は、1817文化15～1841天保12年の間に中国地方の門人は43名おり、そのうち出雲人が20名いたという。出雲1国で九州よりも四国よりも多かったという。（この中に出雲国馬木の人**松田貞哉**がみえるが、出雲市の馬木か、**横田町の馬木**か興味のあるところである）

すると門人の多い松江藩主で蘭癖家斉貴の耳にいち早くとどくことも必定である。「蛮社事件」（天保13）「高島秋帆事件」（仝13）と相次ぐ洋学弾圧と無縁ではないであろう。松江藩主の抵抗ともみられるか。

このハルマ辞書が、金森建策・庄司郡平・間宮繁之丞・布野雲平など、江戸松江藩邸にいた当代一流の蘭学者の目に触れたのである。

また県立図書館には、斉貴の集めたフランス人のショメールがある。百科辞典・詳細・精緻なる図版多数挿入したものである。佐久間象山もこれをみて、ガラスを作ったり、日本も将来ヨーロッパと同じ肉食になると予想して、養豚をはじめたりしている。松江藩医学生は西洋科学知識の多くをこれから受容したであろうことはたしかである。

これらの図書を閲覧してさまざまのことども思ってみた。また近く金森建策の『鉄貢鋳鑑』にまみえることができるのも楽しみにしている。

（この項については、佐野正己著『国学と蘭学』や松江市誌に負うところが多い。記して謝す）

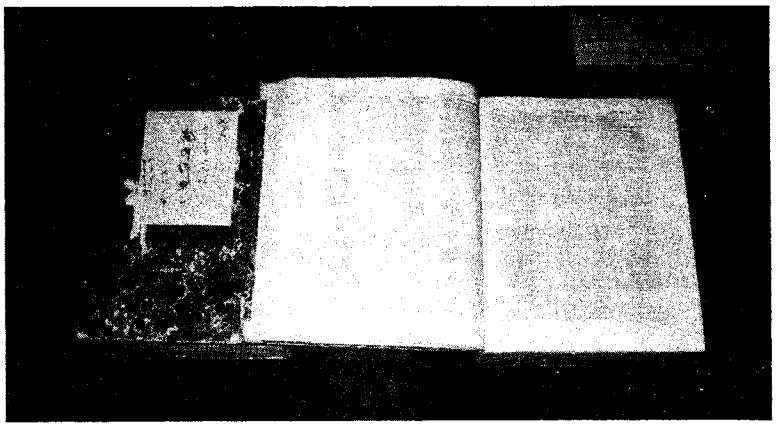
（横田史談会　高橋一郎）

左の写真　ハルマ辞典　わが国唯一の原書の完本2冊　開いたのが、仏蘭辞典　閉じたのが　蘭仏辞典

（県立松江図書館蔵）

この本は、1781（天明元）年にオランダのヘーグで、前書「仏蘭」は第4版、後書「蘭仏」は第6版として出版されたもので、日本には数年後に輸入されている。

また本の裏表紙の内側に「布野雲平」の文字がある。金森建策の弟子布野運平が、斉貴から長持三棹一ぱいの諸書とともに譲渡されたものである。



紙面の都合で掲載しなかったが、ショメールの原著百科辞典を蘭訳したもの―家庭百科辞典―がある。

正編7巻と続編9巻がある。これは1巻が頁数にして、ハルマ辞典の2倍で判型も一まわり大きく、堂々たる百科辞典である。

斉貴の蘭学癖というにはあまりにも貴重なもので、幾多の雲藩の俊才を育てたことは確かである。

出雲大川流域物語⑥

舟運と樋の谷道

宍道湖に注いだのは

江戸時代になって堀尾氏断絶によって、かわって入部して来たのは京極若狭守忠高であった。

その翌1635（寛永12）年出雲大川は大洪水にあった。これよりさきほとんど毎年のごとく水渦をくり返していたので、忠高は大阪より水学者川口昌賢を招いて設計を依頼した。昌賢は下流の西代村・灘分村（平田市の西代町・灘分町）に百日逗留して設計し、工事は甚だ大規模に行われ、上流の木次土手から下流西代村まで築堤が行われた。（そこでこれを若狭土手という。木次町では350間637mであったと『雲陽誌』にある）

また忠高は、1612（慶長17）年から前藩主堀尾氏によって禁止されていた砂鉄採取の禁を、'36（寛永13）年かねてからの陳情を入れ解いたので、20数年振りで奥出雲では企業たたらの操業がはじまった。惜しいことに忠高は寛永14年死去し子がなく、またまた断絶し、松平氏が藩主となった。この16年5月20・21の両日出雲地方は大洪水にみまわれ、これ以来は流れは東流して宍道湖に注ぐようになった。

舟運のはじまり

'58（万治3）年秋郡奉行は奥田源右ヱ門にかわって、龍野九郎左ヱ門がなった。杠日記によると「性強暴にして不仁也。故不勘定の百姓籠舎或は殺さるるもの多し。大過は格別小過も許さず政事悪し」とある。これから処刑者（実名がある）の記録があらわれる。

龍野はその性格から土木事業に積極的で、のち貞享年間（'84～'87）に出雲郡出西村の2里余に及ぶ岩樋の開削を完成した。

'64（寛文4）年、龍野は**三成**に川方役所を置くことに成功し、翌年川譜請を始めた。堀子は備中から招いた喜兵ヱで、これが完成すると、美作から川舟船頭藤井三右ヱ門ほか1人を雇い、仁多郡の藩への上納米こゝから熊谷村まで輸送するようにした。

川方役所（運租府）が置かれたのは、三成のほか下流へ、北原・熊谷・出西・庄原と五か所で、仁多・飯石両郡の上納米を運んだ。

20年後の'86（貞享2）年から2度の洪水のため、'88（仝5）年まで3年休止し、その後再開し、1715（正徳5）年、下流の来原岩樋が出来て荒木村に川方が置かれると、新市に川方がおかれ、仁多郡の上納米はこゝまで馬で運ばれ、こゝから舟で大川を下り、来原より高瀬川を利用して荒木川方へ輸送されることになった。

'21～'22（享保6～7）年と連続の洪水により、舟運が困難となった。6年の閏7月15日の洪水では**大馬木**田保の新田がすべて流れ1人が流出している。7年2月は**仁多郡**中では飢人6043人となり、願が聞きとどけられ3月分と4月15日までの860俵を給って餓死をしのぎ万民歓喜したと記録にある。その夏7月18日夜より24日まで大雨洪水が続き、山崩もあり田畑の流失が多かった。49年前の延宝2年寅の洪水以来のことという。水位は**三成**・**北原**で2丈5尺、**湯村**で3丈位、流出倒壊家屋210軒、山崩死人15人、牛11匹が失われたとしるしている。

また6年丑年の凶作は潰者424人でこの持高3,600石であり、これは5か年賦で納めることになっている。このように達しが出た享保8年には9月遂に**三成**川方も利益なしと閉鎖され、駄送によって大東もしくは木次を経て宍道までの5里以上については一里につき4分づつの駄賃が、村々の蔵元より支給された。この不況のあぶりで鉄師の経営も苦しくなった。こうして再開した舟運も30年にして、三成～新市間は終った。そして上熊谷・新市の川方も閉鎖された。

樋の谷道の開削

それから36年たって、木次町で紙座役を勤めていた、中沢屋4代孫兵ヱは、上納米木次出しを条件に、樋の谷道の開削を申し出たところ、藩もわたりに舟と申し出通りに命じた。

1756（宝暦9）年6月、藩主の命を受けた孫兵ヱは、費用420貫120文すべてを自力によって、数十間の怪岩奇石の難所の開削工事を行い、6月21日着工、8月2日に完成した。

柴栗句会九月

種袋振って封切る夕立ちて　浅野としお
日向ぼこ縁側のあるわが余生　糸原古志
何時までも見詰めて佇つや早生稲熱　岡田踄花
秋草を抜く背に薄日老いの日々　小川月舟
客去んで忘れし秋扇一茶の句　恩田和美
指先に匂いこくして花茗荷　門脇花子
鬼やんま机上の日記を見て去りぬ　加納信子
あお栗の窓に昼湯のちぎれ雲　楠　房子
秋雨の糸降る狭庭の常夜燈　高木白虹
出雲路に阿国歌舞伎の秋はこび　中澤美紀子
朝市の露の茄子も買い足しぬ　新出谷一華
亡父の忌や空の一点鰯雲　錦織富江
刈草の香を掻き寄せし畷道　渡部夕峰

前号訂正　2頁1段14・15行 '59（仝6）佐比内　砂子渡、3段7行 第1図

そして新市からの舟運が再開した。

孫兵ヱは田畑山林を所持せず代替払にて蔵敷渡世をしていたので、他の銀主からも費用を借用していたが、その元利返済は以後藩より下さることになる、仁多米1俵につき、1合8勺の蔵敷米をもってあてることにしていた。

ところが仁多米2万俵とみて90俵の蔵敷米をみていたが、その後年々金利は上る一方、2万俵の予想も、凶作や現地の為替米取引（米のかわりに他のもので）などのため、木次出しになる高がめだって減少し、したがって蔵敷米も少くなり、借金の返済に窮し生活も苦しくなってきた。

孫兵ヱの死後跡を継いだ千六は、'67（明和3）年松江藩に愁訴し、蔵敷米が6割にもみたない現状を訴えている。

この中沢家の窮状をよそに、樋の谷道のおかげで上納米ばかりでなく、そのほかいろいろの物資が運ばれ、また人びとの往来の上にも多大の便宜がもたらされた。

これによって木次は仁多からの駄送と、大川舟運の接点としての町の性格が定まり、活況を帯びてくるのである。

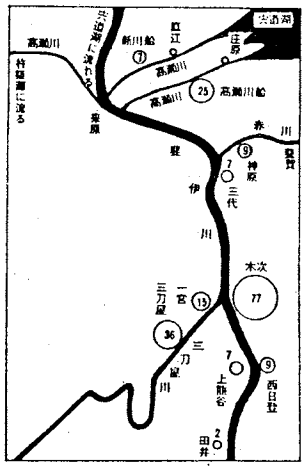
それより16年たった'81（天明元）年やっと窮状をみかねた藩は、樋の谷道普請借金を郡方にて半分弁償することにした。このころから舟運はいよいよ盛んとなった。'95（寛政7）年には樋の谷道の改修が行われた。

中沢家の回復は容易ではなかったとみえ、その後も藩への愁訴を行ったことが、絲原家の文書にある。鉄師**桜井禄三郎**より同じく鉄師**糸原徳右ヱ門**への便りに、中沢家からの願い出の文によると、私ども鉄師も樋の谷道の恩恵をうけていることも書かれていて藩役人から話ももれて耳に入った。鉄師一同何とか協議して善処すべきではないだろうか、よろしく高配をたのむとの意が述べられている。

対処については明らかでないが、'99（寛政11）年藩では中沢屋兵蔵に年に米10俵ずつ下さる旨の仰せがあっている。

1825（文政8）年秋、木次大水害によって樋の谷道の大改修が行われている。

船籍所在地分布図
（大東高校「あかがわ」誌より）
図中の数字は船の隻数



その後の舟運

右の図は天保年間の大川沿いの船籍所在地分布であって、木次を中心として西日登・上熊谷・一宮の船数は合わせて108隻にも達している。

川舟は高瀬舟で3人の船頭分担して運航した。これらについては別の機会にゆずる。

木次から仁多へは極めて難路で1891（明治24）年ころ、試みに三沢まで開いたがすぐに止めになった。木次までは陸上の便がよくなるにつれ舟運は衰えた、それでも昭和の初めごろには、まだ1～2隻姿をみせていた。

斐の上川柳九月抄

留守役の愛犬が呼ぶ珍客来　渡部ミツコ
怖い金今も昔しも命とり　若槻白馬
隣席の終始仲良き老夫婦　藤原千代子
内閣は変われど冷夏物価高　藤原英生
忙がしい時に限って客が来る　児玉哲呂
束の間を鳴く蝉孫は容赦せず　松浦亜以
手鏡を持つ手が白髪数え出し　中林もりえ
言う事は言ったが本音誰が聞く　横山まこと
休肝日決めた日付はいつか消え　松浦久寿子
盆送り暑さ知らずに秋の風　安部正子
百円市品の数より客多し　磯島恵子
ひとりっ子同志両家でうばい合い　森山悠子
鍬やすめ腰を下ろして夏の空　安部春恵
空すみて洗たく物もふる回転　真綿よし子
一呼吸おいて昇った血を静め　藤原のぼる
齢ひとつ加へて頑固若返り　高木凡太
孫真似ではたと我が身を振り返る　田中有樹絵

重い夏巡る　簸の上短歌会

捨て小猫を邪険に摑めばやわらかく温き血の脈脈と掌にったわれり　永井弥生
せめても雨の止み間に立ちませと送りの盆に供養の団子　仝
気をつけよスピード出すなと雨の中バイクで朝出の孫に声かく　人
目覚むればかすかな雨音絶えずして吾が裡の闇深まりてゆく　野村節子
曽孫より米寿を祝ふ花束を受くる夫の涙しやまず　佐藤喜代子
かのいくさを首相はじめて侵略と明言するを日記に留む　岡田時子
「宇垣特攻軍団の最期」を讀みて眠れざりわれもおなじ二十代なり　常盤はるまさ
通り雨すぎし川面は日に映えて矢田の渡しの昼静かなり　仝
　　人
　　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九ー一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0ー601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥雲
題字　糸原風亭書
第223号
（11月号）
1993. 11. 6
（M125・T81・S68）
奥雲出編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

松江藩と蘭学（下）

明治以降の奥出雲における銑生産の系譜⑧

斉貴と金森錦謙

松江藩に於ける蘭学の興起は、藩主斉貴の奨励擁護によるところが多大である。

斉貴は豪宕不羈の性格であった。水戸烈公斉昭は1846（弘化3）年ころ、諸侯中に有為の人材が輩出することを願って、書状を宇和島藩主伊達宗城に送って、当代の諸侯や世子の中23人を挙げてその人物について問合わせた。宗城はこれに対して一人ひとり附箋をつけて答えた。その筆頭は松平斉貴であった。

それには当時大名中の逸材、佐賀の鍋島閑叟（直正）の妹が斉貴の室（奥方）であったところから、烈公はその影響を期待した問合わせをしているが、宗城はそれほど評価はしていなかった。しかし問合わせの真先にもって来るだけの評判は、烈公も聞いていたであろう。斉貴は今まで述べたところからみても、鍋島閑叟の蘭癖だけは受け継いでいた。

斉貴は自ら高島秋帆の弟子下曽禰信教を師とし、藩士荒川扇平・佐々六郎ほか4人をも学ばせたが、やがて下曽禰の賓客金森錦譲を迎えたのである。斉貴の集めた多数の洋書は、布野雲平に渡され、洋学教育に利用された。金森に教えをうけた布野は英学を、間宮繁之烝が蘭学、入江文郎（のち渡欧パリにて客死）が仏学を学んだ。

この蘭癖大名斉貴と蘭学者金森との交情は、『海陸両防秘策』（後述）にしみ出ている。斉貴は蘭書の価値を認識し、殊に嘉永の始より貨財を惜まずさかんに購求めて、蘭学研究者に貸与して研究させた。錦織はその英明な決断に対して満腔の感謝の文章を綴ると共に、その退隠を心から愛惜している。養子定安が藩主となるや、これにも近づいて書物を進献したが、斉貴には最もよき保護者、理解者を見出していた。

錦謙の進献した書と藩政

最初のものは1849（嘉永2）年9月の『竹島図説一冊　同図面一枚』である。ついで『鉄熕鋳鑑』で嘉永6年2月に献上した。

これは実際の鋳砲事業と関連した翻訳事業であった。さきにのべた嘉永6年10月に献上した（9月に斉貴は退隠している）『海陸両防秘策』には、第一篇で『鉄熕鋳鑑』について述べ、亜墨利加船渡来以後は、2～3万石の小藩にても、2～3挺の大砲を鋳造しないところはない。

軍艦の製作は格別であるが、早く数挺の大砲を急造されたい。

都では銅錫の定価も頗る高騰し鋳匠（鋳物師）の工費も昔の倍にもあたって、とても十分に鋳造できないが、まず数挺を急いで鋳造されたい。本国雲陽（雲州）で大砲を鋳造せられれば、鉄は国産であり、鋳匠の工費も江戸ほど過多ではあるまいと思う。但し鉄熕の鋳造は銅熕の鋳法とは格別なるものであるから、鋳法を知らずしてみだりに造れば、忽ち破裂して軍用に供されない。先の殿様に奉献した『鉄熕鋳鑑二十冊』は鉄熕の鋳法を論説せし書であるので、これによって造れば銅熕に勝る堅固なる鉄熕ができる。右の書によって西洋流砲製の大要を知ることができる。本国在住の砲術家にも見せ、鋳砲の匠工に読ませて鉄熕を充分に鋳造せられれば、雲陽の輝武は上り、日本の鴻益ともなる（意訳）と述べ、さらにその利益を累々と綴っている。

一方1855（嘉永7・安政元）年、荒川扇平・宮沢群蔵が、鋳筒懸となり（烈士録）反射炉を築いて大砲を鋳たが、試砲に当って砲身が破裂し、村松幸左ヱ門が死んだという記録がある。これについてはあとで詳述する。

先にのべた献上書『海陸両防秘策』は、米艦来航の正確な情報を蒐集報告するとともに建言を加えたもので、その中に品川沖に効果のない台場を築くより、浦賀の海の防備を厳にすべきであるとき、そこに砲台蒸気船に砲を備えるべきだとし、国禄（石高）に応じて諸侯に軍艦を製作させ、参勤交代も舟行とすべきであるとも献言している。

蘭書による兵学智識を活用した純戦術論である。藩主定安によって、他藩に先がけて軍艦が松江藩に購入されたのも、この建言によるものと思われる。

さらに1856（安政3）年4月には、『歩兵使用雷銃項言一冊』を献上している。火縄放より火燧石放へ、さらにそれより雷紛へと火器の変遷をといている。これは先の『海陸両防秘策』の中にもふれていたことであるが、新武器の操作が書かれている。

これは後述する松江藩に設けられた『雷火銃製作所』のもととなったのであると思われる。

その他医学に関する訳書・著書もあるが、異国船の来航のたびの諸情報にもとづく、外交に関する進献が相ついで行われている。詳細は控えるが、このよ

松江藩と蘭学（下）・小字めぐり⑩大市東本町(上)・短歌・俳句・川柳

うにして錦謙は藩の洋学教育だけでなく、これらを通して幕府の諸施策の実施についても、その一源流をなしてもいたといわれる。

これらの履歴のことは、県立図書館蔵『新番組抜取牒』の「金森建策」によるものである。

斉貴は39才で退隠した。参勤交代の制度に反し、江戸滞在をしばしば延し、江戸の生活に淫し蘭癖も度をすぎたようである。

嘉永4年11月2日、当職塩見増九エ門宅広は諫死した。斉貴はにわかに帰国し、福井・津山・佐賀の諸侯（縁者）は相図って、遂に6年9月の退隠となった。翌月剃髪して瑤光翁と号し、5年後の安政5年江戸へ再び上り、さらに5年後の文久3年3月14日、49才で没した。

斉貴のこのような晩年の逆境にもかゝわらず、金森は終世斉貴に誠意を尽し、安政4年斉貴より一年前に生涯を終えた。

第10代定安（1853嘉永6～'72明治5 20年間 第12代として明治10～15 6年間）

津山藩より養子として入り、跡を継いだ定安は、1863（文久3）年には改革令を出したが、幕府の文久の改革に応じた藩政改革で、当藩では藩校改革が中心であった。儒学・国学・洋学・武芸の各道場の総合藩校を設けたが、その中でも洋学の採用がねらいであった。これもすでに斉貴によって金森錦謙が用いられて江戸で行われていたものであって、国許へ人材を移すだけでよい面もあった。斉貴の蒔いた種は定安の時代に於いて、多方面に花咲き実を結んだのである。

1863（文久3）年、殿町の家老の屋敷を移し、その跡に藩校を建設した。'65（慶応元）年6月22日完成し、文武館をはじめ城下各所に散在していた諸稽古場22を統合し、修道館として開校した。儒学・国学・英学・蘭学をはじめ各種武術・馬術などで、総合大学ともいうべきものであった。

錦謙の教えをうけた

蘭学の間宮観一

英学の布野雲平（緒方洪庵の下でも学ぶ）

に、庄司郡平が（1866慶応2年江戸から帰った）仏学を講じた。

明治に入るとフランス人2人を雇入れた。

当初から身分制度のなかで、教育効果をあげるには教師の地位向上が先決であるという、藩儒桃裕行の建言を入れて改善した。のち蘭・英・仏の諸学は修道館洋学所となった。

民衆の教育と西洋医学

民衆の教育については寺小屋が中心であったがこれについては別の機会とし、西洋医学について述べて置くと、いずれも蘭医学者であった。

各地に派遣されて学んでいた者を中心として、1869（明治2）年7月、松江に医学校が設置され、漢法医学から西洋医学へと進んだ。そしてこれを推進するために、各地に支校が置かれた。出雲では10郡に1か所ずつ置かれ、ほとんどが寺院内に置かれた。

仁多郡では**三成町**の善勝寺で、こゝの仁多郡医師世話役は**横田町**の**石原淳斎**（本誌24号参照）で、教育を受けたのは、24才から57才までの17名の医師である。

その氏名は左の通りであって、これ以上のことは明らかでない。蘭学の詳細についても明らかに出来ない。

湯村　勝部行助　51才

下布施村　横山元格　43才

馬馳村　千原秀斎　46才

三成町　佐々木寛蔵　44才

〃　藤原元達　45才

〃　中林寛十郎　34才

三沢町　長瀬元随　32才

高尾村　藤原元徳　41才

大内原村　杠　元斎　28才

大馬木村　渡辺秀積　48才

小馬木村　潮崎文逸　29才

八川村　安井文英　24才

〃　坪井柳見　40才

横田町　小池澄斎　33才

〃　石原淳斎　50才

蔵屋村　杠　貞策　57才

大呂村　坪倉昌伯　45才

竹崎村　嵐谷謙策　36才

（石原淳斎の御軍用書類による）

この号は桃裕行著『松江藩と洋学の研究』ならびに、新旧松江市誌ほかによるものである。（横田史談会　高橋一郎）

本誌125号の「出雲大川流域物語④」の「三津池」についての詳細な論文は次の研究誌に載っています。

『風土記論叢3号』

ご希望の方には紹介します。

小字めぐり⑩

横田町（3）

大市東本町（上）

—出現して70年—

大市の本町

横田町の本通りの大市・六日市は、1551（天文20）年より少し前に、六日市を拠点として出現した（本誌123号参照）。

第1図は1670（寛文10）年の横田町地銭帳にもとづいた略図である。本通りは南北132間（約264m）、幅員は4間（約8m）とある。戸数は庄屋・寺社関係ほか若干の御免屋敷を除いて42.5軒あって、六日市16軒を加えると58.5軒であった（209号参照）。郡内で町があるのは、三沢・上阿井・亀嵩の3町で、合計58軒あったから、横田町が最も大きかった。

本通りから東西に通ずる小路は東側に1条、西側に3条（うち1条は中途まで）で、いずれもそれぞれ井戸に向って通じていた。横田町はほとんどが氾濫

した川床や葦の生えた沼地が、砂利の堆積で埋ったところで、井戸の水質の良いところは限られていた。井戸のあるところはいずれも堆積地でないところである（地質調査によって確認。大市の項で詳述の予定）。

本通り南の安楽寺は現存の3寺のうちで最も古く、大市・六日市の古くから土着の家はこゝの檀家（浄土宗）である。

南の㋐「寺の前小路」は六坂・原口・稲田へ通ずる道であってこゝに井戸があった。

㋑は「永祥寺小路」（江戸時代は永祥庵という）で井戸があり藩の備荒貯蔵が2棟あった。

㋒は中途までの小路で先端に井戸があった。さらに北には西へ通ずる㋓「善徳寺小路」があり、井戸があり、突き当りの丘は中世以来惣持寺があり、三沢氏の一族が住んで（一時代官として）いた。寺は善徳寺とともに明治時代までであった。

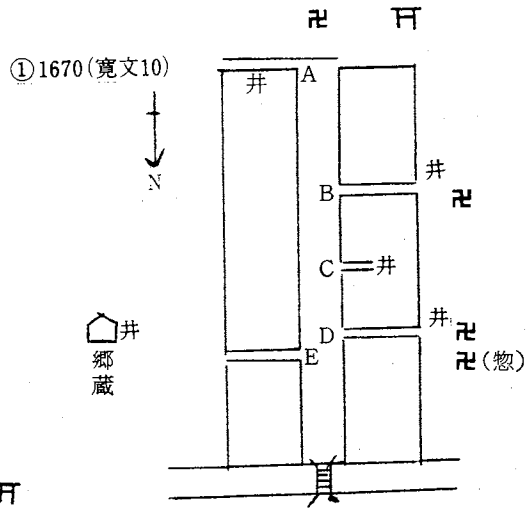
ついで東側に1条小路があって㋔「蔵元小路」といった。今の大市公民館の北端あたりに、郷蔵が置かれていた。

学校小路と岡崎小路名の出現

岡崎家は1882（明治15）年、本通りを改築し郵便局舎とし、東に向って本宅を改築し、小路に入口を設けたので㋐はこれからは（郷蔵もなくなっていた）、「岡崎小路」と呼ばれた。

明治6年小学校は善徳寺・永祥寺で開校されたが、明治8年からは備荒貯蔵2棟を改造して移った。仝19年秋の台風で1棟が倒壊し民家を借り、現在地に校舎を新築し、仝21年7月移転した。このころ堂本家が移転したので、こゝに通学路ができ㋕「学校小路」ができた。220年振りで小路が増えたのである。

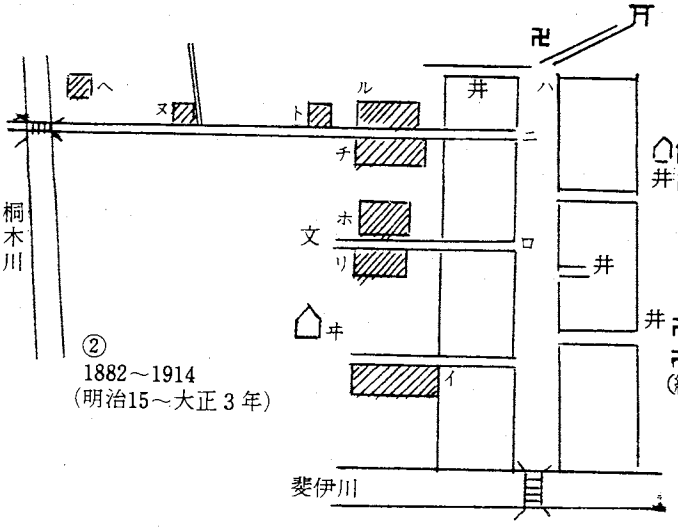
1899（明治22）年松江～尾道間の道路第2種西城道として、大市上から古市まで1里2町（㋑員1間5分）が開通し㋖荒神坂が出現した（その後昭和に入って当時より10m余低い現在の坂道となる）。仝24年岡山へ通ずる第2種多里道（1里4町・㋑員1間5分）が、米田家の移転によって蔵屋まで通じ、蔵屋新道と呼ばれた㋗。仝31年学校小路に横田村役場が新築され、広島屋（現大市下の西田村）から移った㋘。それは4頁図の構造であって、昭和31年改築されるまで（現存の旧庁舎）、59年間使用された。（部長派出所は大正3年から）仝39年稲田福田家（綿屋）4代が、蔵屋新道桐ノ木川の西の袂を少し入ったところに新築して移り㋙、岡崎家は水利の便の良いのを生かして水車による製米業も営んだ。田圃中の一直線の新道の半ほどにはじめて1軒家が出現した。仝41年になると白根家3代が新築して移って来た㋚。



東へ発展

1913（大正2）年岡崎家は小馬木・稲田・山郡の住人で、横田に職工場を経営するために今の大同書店の若槻家は初代が廃業したものを移築したものである。東端の㋘に入居したのは、小馬木・稲田から分家してこゝに移り、はじめは米穀商などを営んだ。当時の松陽新報に広告が掲載されている。それに載るのは、簸上清酒合名会社。運送業ほか松井豪一商店。仁多蚕館の宮地にあった（後述）。

こうして簸上清酒合名会社。運送業ほか松井豪一商店。仁多蚕館の宮の駒の『福みが東に向って発展する糸口が頼釣』が、できたのである。

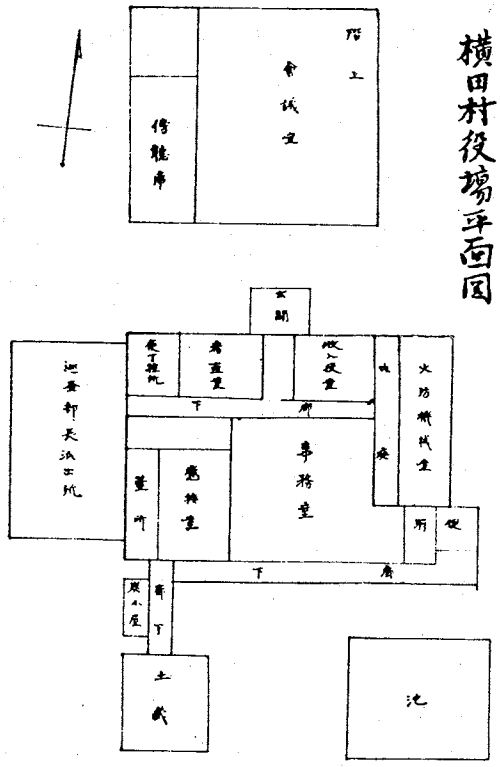


大馬木に福禄寿木炭銑工場を経営するために廃業したものを移築したものである。

㋚に入居したのは、小馬木・稲田から分家してこゝに移り、はじめは米穀商などを営んだ。当時の松陽新報に広告が掲載されている。それに載るのは、簸上清酒合名会社。運送業ほか松井豪一商店。仁多蚕館の宮

前号追加　1頁3段　御直捌（ちきさばき）

横田村役場平面図



田忠太郎。簸上蚕館の堀江運一。米穀商の若槻龍三郎と山本慶太郎。

旅館では宮本楼と平野屋（兼菓子製造）と久村屋（兼糀製造）

雲州特産八雲算盤卸商の堀江為右衛門。

菓子卸小売商では妹尾香味堂と藤原共力堂。

ついで蔵屋新道から六坂を経て原口へ通ずる新道ができると、大正3年福田家（綿屋）から分家福田家（綿田屋）が分れ家を新築して移った ㊒。

次いで ㊓へ土地の所有者田村家がこれも家を移築して借家とし、八代・馬馳からや村内の原口や大市から4家が移って来た。

こうして現在は本町常会内の住人となってはいるが、今日の東本町出現への糸口となった人達である。

（お気付きのことがあればご教示をお願いいたします）

ロシアよく見よ　簸の上短歌会

議事堂を何故撃つのかと素朴なる疑ひもなきロシアよく見よ　常盤　はるまさ

ロシアには未来はあるや映像は砲煙あがる議事堂を見す　仝　人

医師の持つ器具の音のみ治療室の窓より柿の実ゆるるを見をり　佐藤喜代子

入れ替り来る候補者は新築のわが家まづ褒め名を告げて行く　仝　人

長梅雨に姿わるきや仏前に横向きしままの紫苑の花は　岡田時子

近づけばつと鳴き止みし蟋蟀の再び鳴くを厨に佇ちて　仝　人

木犀の香り漂ふ朝の庭に町議会議員候補の出陣祝ふ　野村節子

黄昏にししうどの花浮く如き山添ひ道を選挙カーにて行く　仝　人

核実験核廃棄物投棄と隣国のモラルに怒りと悲しみ極まる　永井弥生

屋根をたたく驟雨の後に月冴えてくりかえし詠歌の練習つづく　仝　人

遠き日に妻と来りし落日の越前岬にひとり来て佇つ　安部夕波

柴栗句会十月

老二人無言の語り日向ぼこ　浅野としお

かまきりの踊る姿のまま枯るる　糸原古志

葉鶏頭絢爛輪廻の翳秘めて　岡田蹊花

秋日向嬰児を抱きし胡座温む　小川月舟

小豆飯小さきことほぎ妻の古希　恩田和美

秋日和一つ買いたす旅みやげ　門脇花子

選挙カーしがらみ引いて秋の風　加納信子

とんび立つダムに紅葉の彩ゆらぐ　楠房子

黙然と何かがいとし初炬燵　高木白虹

あきらめてなおふり向けば月のぞき　中澤美紀子

孫去んで残りし籠に虫の鳴く　新出谷一華

秋陽射し部屋一杯に古着出す　錦織富江

萩こぼる閑居に集む陽の温み　渡部夕峰

斐の上川柳十月号

番付けに乗らぬ余生の友が逝く　高木凡太

久々の音声盆地は目をさまし　加納治江

町議戦親戚縁者やたらふえ　田中有樹絵

年毎に病気話題のクラス会　松浦久寿子

不平ごと聞いてあげるも老の役　安部春恵

正当化しようと余分な口を利き　松浦亜以

法要の亡夫五十年我も老い　安部正子

醒めた目で見れば世の中裏が見え　藤原のぼる

紫陽花もあばたになって地に帰る　若槻白馬

後手後手になってきっかけつかめない　藤原千代子

異状気象笑顔が見えぬ野良仕事　松田牛歩

どの人も入れて上げたいこの一票　真綿よし子

公約はみんな良い事ばかり述べ　渡部ミツコ

いつもとは違う田んぼの稲の色　礒島恵子

キャラメルをむけば妹が口を開け　児玉哲呂

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第 224 号
（12 月 号）
1993. 12. 5
（M 125・T 81・S 68）
奥雲出編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

松江藩の武器と軍艦

明治以降の奥出雲における銑生産の系譜⑨

松江藩の鉄炮

西洋の銃炮は戦国時代以後わが国に伝来されていて、松江藩でも鉄炮足軽も組織された。松江城下の足軽町は今の雑賀であって雑賀の鉄砲組と呼ばれ、一に鉄炮町と言ひ後には雑賀町といわれるに至った。1688（元禄元）年には古志原村に鉄炮搏場を設け、砲術の稽古が始まり、炮術師範役も置かれていった。

1718（享保3）年には唐船が楯縫郡川下浦（平田市内）に抜荷のために現われた時に、師範役足立弥次兵衛が弟子13人を率いて出動し、砲弾を発射して追払った。それより唐船番隊が設けられた。

その後砲術師範役に諸種の流儀が出来た。1番小屋に菅谷流2番小屋に小谷流、3番小屋には火戦法、4番小屋には木戸流があって、いずれも100目以上の筒はなかったが、治郷（不昧）の時代には300目の大筒を用い、火業師、浦野城太夫を江戸に派遣し、旗本佐々木甚三郎について学ばせ、藩士に伝習させたのでこれを俗に大筒小屋といった。

これが5番小屋佐々木鉄炮流といわれた。これらの小屋は何れも城下郊外の川津村と法吉村に散在していた。

唐船番隊

先に置かれた唐船番隊もその後平穏のため、有名無実となっていたが、寛政の初め露艦が北辺をさわがせたことから、幕府は外船と判れば諭して退去させ、聞かない時は打払うべしと政令を出したので、治郷は1793（寛政5）年2月再組織して、城内に於てその予習を行った。

1839（天保10）年　隣の清国が阿片に端を発し英国と戦いを始めたので、各藩に警戒を厳にせよと触書を出した。

1849（嘉永2）年2月には、異国船1隻が隠岐国島前に来り、兵16人が上陸もするということがあった。

唐船番隊には鉄炮関係を含めて総勢670名ほどがいたが、先に述べた海辺台場には砲術に関するものが多数置かれている。

外船が出現すれば唐番船隊が召集され防衛にあたるが、一方隊の御手当郷夫6000人を、国内10郡にて寛政11年宗門改百姓人高に割賦して、必要あらば各村の庄屋は之を率いて出府し、一定の集合所（**仁多郡**は津田馬場・飯石郡は乃木浜など）に於て命令を待つこととし、市内酒屋にはこれの兵糧米の焚出しをさせるなど周到な準備計画ができていた。

松江藩の鉄炮の数量を鉄炮改役の記録などからみると次のようである。

年代	軍役	足軽用	計	軍役に従うべき者の俸禄
1840（天保11）	130	260	390	500石以上
元禄年間	312	300	512	300石以上
1636（寛永16）	356	380	736	300石以上

松江藩と鋳物師方・釜甑方

松江藩に於ける鉄行政は、1726（享保11）年から整備されていった。これについては当誌でたびたび詳細に述べているので略すが、それ以後松江藩は最も多い産額を誇る和鉄生産地へと成長する。

鋳物商品の生産は中世以来の伝統をつぐ能義郡布部村の字波が中心であったが、漸く1716～1735年（享保）の頃、藩の事業として多々納虎蔵が鍋釜の鋳造をはじめたという。

「享保頃雑賀町立図」（下村所蔵）によると、当町洞光寺の東側の道を南に上ったところに「イモジ」とある。鋳物師の意味とすると鋳物場があった場所と考えられる。明治になってから雑賀町の売豆紀神社に合祀された、火除稲荷社はもとこゝにあったという。

イモジ方がのち釜甑方となるのであるが、その時代は明瞭に出来ないが、1756～1757（宝暦6～7）年ごろ藩営の鋳物工場として設置され、伊藤政右ヱ門（1772明和9年没）が宰領したと伝えられている。この場所は次のような考察からすると横浜町と考えられる。

「文化年間松江絵図」（1804～1817）に、横浜町円成寺の東、家老の神谷と三谷の下屋敷との間に釜甑方の名があって、（表口26間5尺約49m、後口28間5尺約52m、東入23間2尺約42m、西入39間約71m）の敷地である。そして（文久元）年の「才賀町絵図」にもそれが確認できる。これを「延享年間松江城下之図」（1744～1748）と比べてみると、「用屋敷」とあり、また延享5年（1748）の鉄炮町立図」でみると、「御材木蔵」となっているあたりといわれる。

これからみると、洞光寺近くのイモジ方が、宝暦6～7年ごろこゝに移されて釜甑方と改称されたと考えられる。それをその近くの円成寺の記録とあわせみるとさらに濃厚になってくる。

「宝暦九年（1759）十月、釜甑方役所にて当寺殿鐘を鋳、拙堂和尚鉛を作る」とあり、また「

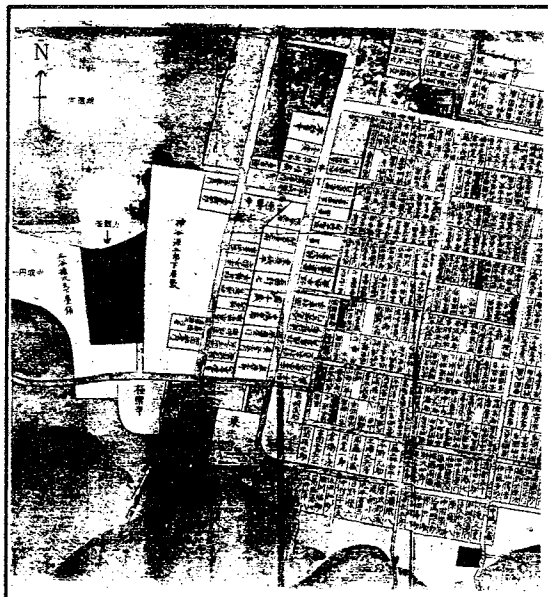
松江藩の武器と軍艦・川柳・短歌・俳句

明和元年（1764）八月二十二日、釜甑方において鍋、釜並釣鐘鋳物類望に応じて仕立屋遣候間、他領より取越候儀御法度之旨御觸」とある。国内で生産され広く一般にも行渡るようになったようである。

このように大きい釣鐘も鋳造できる技術もできたようであるが、寛政年間（1789～1801）には、近江国から源蔵を、のちには安芸国から森脇重助などの技術者を招いて、銅壷・火鉢・燭台なども作られるようになった。

その後1808（文化5）年、石見と出雲の関所のあった田儀で、国産保護のため、他国出し、御口入の禁制品が多く示されているが、その中に出入とも鍋、釜があげられている。

また天保のころの「出雲国益角力見立大番附」にも、主要国産として東方上位に釜甑方鋳物があげられている。



文久元年酉十二月　松江城下才賀町絵図（絲原記念館蔵）

鉄炮鍛治で炮術師の榎並家

元祖善六は福島正則に仕え、寛永年間には堀尾吉晴に仕えて200石の鉄砲師、次の京極若狭守にも200石で抱えられた士分であった。「松江藩列士録」によると製作に関係したものの主なものは次のようである。

4代長三郎			
1738	元文	3	怒鯨大筒
5代庄太夫			
'60	宝暦	10	激雷大筒
'64	明和	元	破浪大筒
〃	〃	2	大　大筒
〃	〃	6	異風鉄砲
'74	安永	3	猶電大筒
'82	天明	2	怒鯨と大龍大筒
〃	〃	3	閃電200日玉大筒
6代庄太夫			
'94	寛政	6	100目玉大筒
1804	文化	元	機括大筒
〃	〃	6	代張大筒
〃	〃	9	破暁大筒
'15	〃	12	一機大筒
〃	〃	13	千雷大筒
〃	〃	14	神龍大筒
'20	文政	3	発節大筒
'26	〃	9	100目玉大筒
			仏狼機

で、そのほか13件があり、射撃に関する15件とともに、それぞれ御褒美を頂戴している。

2代目長三郎は、1675（延宝3）年大筒の御用で仁多郡に出張している。5代目庄太夫は三助（不昧の弟雪川）に格別に愛顧をうけている。

7代は長三郎であったが、父6代庄太夫が長命であったので親懸りの期間が29年間あった。

この間江戸に出て本格的な砲術の修業をした。許されて自費で1830（天保元）年江戸表に出て、井上左大夫について大筒仕立の修業をして帰り、翌年再び自費で上京し、中筒より五貫目玉迄及び火術一通りの伝授をうけ、さらにその翌年、三貫五百目玉の秘事業向口授伝授を得て帰った。その翌々5年上京し同様に井上左大夫の教えうけた。全6年にも上京し井上より御流儀の免許を受け、外記流（ゲベル）の秘事も会得して帰った。

長三郎はこれらの会得した砲術を藩主の前で次々と披露して（車台に仕掛けての撲ち方、早撲ちなどにも成功して）、褒美を頂戴した。

外記流砲術によって、松江藩では天保15年から、500・300・100目玉鉄砲の製造が考えられ、これが具体化したのは、1845（弘化2）年からである。武蔵国の足立郡川口の鋳物師文左ヱ門に、500・300・100目玉鉄砲2挺ずつと、猟犬駿御筒1挺が注文され、3月25日が江戸屋敷に納められた、試し打ちは井上左大夫父子によって行われたが、首尾よく終った。この時新銃発射のための車台などの諸道具とり揃えに長三郎は成功し、船番御台場砲術方頭取となり、その秋には「十列」に取立てられ、海辺防備重大視の時、重要な人物の一人となった。また長三郎は狡虎唐銅鋳筒の鋳立にも与がった。あとでのべるが大筒は、いわゆる大砲ではない。

このように国元で長三郎が砲術師として腕をふるったのは、蘭癖大名9代斉貴の時代であり、一方江戸屋敷に於ては蘭学者金森錦謙が抱えられて、訳書や落書そして献策をしきりと行っている時代であった。

定安の時代

1853（嘉永6）年定安が藩主となった6月3日、米艦が突如として浦賀に入り、和親通商条約を強要して来た。松江藩は江戸の畑ヶ谷下屋敷と国元古志原村に於て砲術の訓練を行った。

翌安政元年1月ペリー再び来朝。定安は2月はじめて松江に入部するや、藩内の砲台を巡検した。杵築（出雲）大社と日御碕神社に参詣し、経ケ碕・カケ山の砲台を、ついで多岐村小浜

の上、口田儀村山ノ下の砲台、半島部の釜屋及び十六島の砲台を経て帰城し、翌日三保関の加鼻砲台、ついで古浦・江角の2砲台を巡検して帰城した。そしてさらに砲技その他槍剣2術も観て士気を鼓舞した。

11月本牧警備（浦賀）のため平賀縫殿は200人の兵とともに駐留し困難な任務に耐えて、2年半の勤をした。

寛永の鎖国令とともに幕府は大船の建造を禁じたが、米鑑が渡来すると、大船の建造を許したため、諸藩は競って造船術を研究するに至った。

安政元年5月、幕府は浦賀で英国式船鳳凰丸を新造した。松江藩では人参方押合の宮次郡蔵が、長崎で西洋型帆船製法を習得し、安政初め安流丸を建造し、八軒川に浮べた。

1855（安政2）年には、釜甑方に近い乃木の鋳物場の辺りに、鋳造筒（砲）製造のための反射竈（反射炉）を設け、鉄砲鍛冶村松幸左ヱ門によって鉄製大砲の製造をはじめた。たたらで生産した銑を反射竈を使って溶融し（鍋や釜を作る鋳物用の銑では砲は造れない）、砲筒を作成した。（記録にこうあるが検討を要する）

ここで造った砲を荒和井に据えて、安部山に向って強い火薬で試射したところ、破裂もせず合格したという。このころ某鉄砲鍛冶が鋳造した大砲を古志原の鉄炮遠町場で試射したら破裂し、鍛冶職は即死したという。この件は前号に述べたことと記録に齟齬があるが、あとで検討する。

安政4年、松江藩は本牧警備にかわって大阪表警備へ移り、4か所の砲台守備の任についた。この年金森錦謙は生涯を閉ぢた。

翌5年日米修好通商条約は井伊大老の独断によって結ばれ、台風の眼となった。この情勢下松江藩は京都山崎の地の警備に移され、親藩中頼りにされる藩となっていた。670人の兵力で、大砲13・小筒100・雷火銃50の新鋭武器をもっての駐在であったという。

1862（文久2）年、榎並長三郎は武蔵国川口の鋳物師について、ラエフル筒ならびに合金物の製作を習得し、細川越中守の鉄砲細工人丸子某について、ミニヘル筒製作も学んだ。藩では雷火銃製作所を設けた。

（1870明治3年には高橋権八を）して仁多郡八川村に釜甑方の支所を経営させた。翌4年には廃藩となりその名も鋳鉄所となり、属吏鈴木半左ヱ門に購入方を命じた。中根は仝3年業成らぬ間に没したが、客貌魁偉にして気慨あり、陽明学を修め書をよくし、藩士中の錚々たる人物で、海軍建設の功労者であったという。二人は10月長崎に於て、米人所有の英国製鉄艦ゲゼール号と米国製木船タウタイ号を購入した。

鉄艦全長192尺　巾27尺　80馬力
大砲6門　329屯　10万ドル
大船全長144尺　巾21尺　70馬力
大砲4門　182屯　7万ドル

軍用方奉行中根平左ヱ門・同からの借財の協力もとりつけた。

軍艦二隻の購入

藩主定安は先に安流丸を建造したが、1862（文久2）年8月、江戸在勤の執政朝日千助に外国汽船の購入を命じた。千助は諸有司と謀り、極度に財政は困難であったが、藩政を改革し冗費を節約して外船を購入することにした。高率課税や藩内の豪家からの借財の協力もとりつけた。

12月奉行は両艦を曳航して長崎を発し、平戸・馬関から瀬戸内海を通り、尾道・鳥羽・下田・浦賀の諸港に投錨し、11日を費して品川に入港した。鉄艦を一番八雲丸、木艦を二番八雲丸と命名した。翌3年正月中根を軍艦奉行、鈴木を国副奉行として乗艦し、18日品川を出発し約2週間を経て、2月2日島根県大井（大橋川下流）沖に投錨した。以来こゝを碇泊地と定めた。

これより松原木工・太田主米を軍艦奉行とした。

このころ国内は攘夷論圧倒的となり、長州藩は外艦を馬関（下関）に砲撃し、薩藩は英艦と鹿児島湾に戦うなど風雲急を告げたので、松江藩も唐船番隊の一部を隠岐につかわし、さらに杵築・川下等に砲台を築き、海岸の防備に当らせた。

この時、幕府は八雲艦2隻を官船に供し、品川に回航するよう命じた。仝年12月8日八雲丸は大井沖を出発したが、木船はたちまち故障を生じたので、加賀港に入って修理を加へ、27日抜錨し28日長門国須佐港に入った。鉄艦は27日無事品川に到着であった。

柴栗句会十一月

夜汽車来る音がつまずく冬の闇　浅野　としお
補聴器がさとくコスモスの風掬う　糸原古志
朝霜や塵焚く煙威勢あり　岡田踩花
缶ビール回し飲みする秋普請　小川月舟
月細り空の深さへ唄をやる　恩田和美
秋晩の風の言葉を肌で聞く　門脇花子
ななかまど山寄り合いて国境い　加納信子
山の店俄か時雨に客散らし　楠　房子
佇つ人の肩より暮るる日短か　高木白虹
そぞろ寒独り煎茶熱くして　中澤美紀子
丹精の菊甲斐ありて金の札　新出谷一華
枯尾花どこかに一つ忘れ物　錦織富江
柏手や父掌を添えし七五三　渡部夕峰

雑詠拾遺

簸の上短歌会

平凡な吾が家のくらしを折折に鼬が庭より見上げてはしる　永井弥生

雨つづき馬鈴薯の大方は無惨にて鍬につく泥の殊更おもし　〃

野薊に騒ぐ風あり揺れている花に小さな虻の離れず　佐藤喜代子

食ふための蒟蒻玉にあらざれば堀り寄せいそぐ夕暮れ畑に　常盤はるまさ

軒下に蒟蒻玉が陽を浴びてこの秋も終りと告ぐる如くに　〃

草抜きもひ弱となりて思ふ程捗らぬわれと今に思ひぬ　岡田時子

立秋を過ぎたる今日は真夏日と漸く梅を籠に干したり　景山悦子

傷害児と共に生きゆく末の子夫婦笑顔絶やさず常に明るく　野村節子

暑き日は続くことなくいつしかに百日紅咲き初秋のかげみす　安部夕波

日まわりの西に傾く日暮れどきカナカナ鳴きて夏終はらむとす　〃

斐の上川柳十一月号

生き方を少しは変えて見るつもりその先の事には触れずテレビ観る　藤原のぼる

天の声この値段なら出せますか親不幸してても肩はもんでます　松浦亜以

お帰りと弁当箱に話しかけ声かけてあげると老婆話し出し　児玉哲呂

古稀過ぎて半世紀ぶり戦友と飲む大根をぶらぶらさげて暮れ早い　松浦久寿子

数ず知れぬ人生ハードル今日を生き世の流れ姑は嫁に従うて　足立玉恵

亡き父に似た人に逢い声をのむ中国の花嫁迎え町が湧き　藤原千代子

米不足二杯目からはそっと出し賑やかな会話がはずむ丸い膳　藤原英生

成婚と不作で泣いたり笑ったり　安部春恵

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇―一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

した。

将軍家成は幕府の軍艦順動丸に搭乗して大阪に向わんとしたが、幕府の船艦欠乏していたので（各藩で艦船のあるのは、薩摩藩ほか1～2の藩であった）八雲丸は供奉艦として品川を発し大阪に至った。幕府軍艦奉行勝麟太郎（海舟。1860万延元年日米修好通商条約批准のため、外国奉行が渡米する際、成臨丸の艦長として日本人最初の太平洋横断航海に成功した。）は運転の迅速を常としたことを喜び、幕府はこれを賞した。

1865（慶応元）年には幕府の御用船となり、仝2年長州戦争に参加したが、幕府の敗戦で官軍方の御用船となり、奥州戦争に参加した仝4年、能登塩洋岬で暗礁に乗り上げ沈没した。

松江藩の製鉄所開設

1863（文久3）年6月、2隻の軍艦が大井沖に停泊するや、増田善蔵ら4名は軍艦運用修行のため、肥前国長崎へ向った。一方西洋流砲術師佐々六郎をして西洋銃隊も編成せられた。これらに必要な砲銃の備えのために製鉄所開設へと進んだ。

鉄砲師勝部台之助らをはじめを抱え、古流砲術師役鉄砲鍛治場受榎並純平を製鉄所肝煎頭取に命じ、新規西洋流大砲及雷火銃製造に従わせた。

そしてこれらを据付ける海岸砲台の築造などのため、早くから江戸で洋式研究をしていた、古砲術師役の荒川扇平を起用した。そして一方西洋流銃隊の習成所および大調練場も完成した。

松江藩の操練は、始めはオランダ式であったが、中ごろ英国式に変り、1870（明治3）年にはフランス人ワレット、アレキサンドル両人を傭入れて、フランス式を採用した。その精鋭にして練熟していたことは諸藩中に比類なく、ことに野戦砲隊のごときは、幕府軍を除いては比肩するものなしという評判であった。

当時の松江藩の常備兵員砲数は、

歩兵26小隊	（1小隊35人）		
砲兵4砲隊	（1砲隊砲4門）		
騎兵1小隊			
大砲	4斤旋条砲	25門	
12吋射擲煩		32門	
手臼砲		11門	
小銃	2種	2671門	
24斤当煩		1	1門
18斤当煩		1	1
12斤旋条砲		2	2
6斤当煩		6	6
3斤山当煩		5	5
6斤旋条砲		5	5
20拇射擲煩		1	1
11拇半山射擲煩		1	1
15拇射擲煩		2	2
29拇臼砲		1	1
20拇臼砲		6	6
13拇臼砲		2	2
他に砲兵騎兵用銃		394	394
拳銃		64	64

（旧・新の「松江市誌」と雑賀町公民館発行「雑賀の今昔」その他に負う記述である）

横田史談会　高橋一郎

『奥出雲横田とたたら』横田の古代中世近世と現代の歴史を、最新の歴史観も加えて展開。後半はこゝで育った日本一の近世企業たたらの実際を記述。大学などで入門手引の要望があり、わずか印刷しました。ねだん1000円〒210円。

『風土記論叢3号』には『出雲国風土記』三津池の考証が掲載。中央からも好評の論です。ねだん1500円〒210円です。（筆者はいずれも高橋一郎です）

奥出雲

題字　糸原風亭書

第225号
（1月号）
1994. 1. 7
（M125・T81・S68）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

横田を育てた人⑫

雲州そろばんを地場産業への功労者

村上朝吉と高橋常作（上）

—序章—

わが国算盤生産高の70％を占める当地製造業を、地場産業へ育てる基礎を固めたのは**村上朝吉**である。

今も用いられている、珠削りの手廻しろくろを完成させ、その工具と製法技術を積極的に公開し、多くの弟子を養成し、そして量産体制を発足させ、その販売を西日本に行商圏をもつ、簸川県の差海商人に依託したという、まことに先駆的役割をしたのが**村上朝吉**である。この村上朝吉を刺戟したのが、同じく町内の**高橋常作**であり、常作が算盤製作に打込んだのは、隣村亀嵩村に住む同じく大工の**村上吉五郎**であった。

算盤を必要とする風土

中国で算盤という言葉があらわれるのは、1279（弘安2）年の静修の詩の中で、算盤の効能については、1366（康安5）年の中国人の随筆の中にはじめて出るという。そして最も古い算盤の図が入っている本は1371（将軍足利義満）年発刊のものである。日本ではそれから200年たった16世紀の終り豊臣秀吉の時代に、日本人によってはじめて本が出された。その後その他の本も参考にして、京都で吉田光由が『塵劫記』を著して、算盤普及の糸口を切ったのは1627（寛永4）年（将軍徳川家光）である。

この頃から大津で算盤がつくられるようになった。（明治初年から当地方で今の大きさの算盤が製造されるように成ったが、それまでは、算盤と言えばいわゆる問屋算盤型の大きいものであった）

当地方に『塵劫記』が入ったのは何時ごろか明らかでないが、現在発見されたものでは、150余年後の版本であって、それも和鉄製精錬業者（鉄師）が所有したものである（雲州そろばん伝統産業会館所蔵）。ところが鉄師家の古文書の1760年代の宝暦年間の勘定書を見ると、すでに平均値を出すのに、算盤を用いて、小数点以下10数位まで出して記録している。番頭が計算器を用いて遊びの数値を出して記入しているのがわかる。したがって大津算盤も入っているし、地元の大工が暇をみつけて、粗末な珠があって動くだけの算盤を製作していたのである。

それから60年もたったころ、芸州広島の塩屋小八の作ったそろばんが、国境を越えてこの地に入って来た。今までの発見では現存するのはすべて鉄師の購入したものである。（鉄師絲原氏購入のものは絲原記念館が、鉄師桜井氏・山根氏が購入のものはそろばん会館が所蔵）山根氏のものは、村上吉五郎が算盤づくりを志すものになったものである。

天保初年鉄師絲原徳右ヱ門は亀嵩の大工吉五郎が算盤を作るらしい、良いものであれば作らせて見てはと、留守役の番頭に便りを出している。

また吉五郎の算盤が売れて行ったのは、年貢米を受けとる地主とか商家であったが、鉄師は鉄業経営のためには桁数の多い数字を扱い、掛算・割算を必要としたから、早くから算盤を購入する必要があったのである。

さらに幕末になって寺子屋が増えたが、その中で算盤を教えるものは少なかった。ただ横田町（郡内の五町のうち、三沢・亀嵩・阿井・三成の四町の家数合計は、横田町より少なかった）では、ほとんど寺子屋が算盤をしていたほど、商業活動が盛んであり、牛馬市も中国地方で有数の地位にあったのである。従って需要があり、それに応えるためにあとで述べる、高橋常作や村上朝吉の製作意欲・改良工夫へのひたむきな努力を誘発したのである。

先鞭をつけた村上吉五郎

亀嵩の村上吉五郎は三人兄弟の末子（はじめ祐三郎）であって、三人とも父の弟子で大工であった。1789（天明9）年亀嵩町が失火によって全焼した時、真宗東本願寺派の聞善寺も類焼した。本堂が再興したのは22年後、庫裡は35年後であった。この間の1808（文化5）年、聞善寺の二男啓準（17才）は本山での修業をすゝめられ、京都東本願寺へ上った。この時22才の吉五郎はその人足をすることになり、かたがた寺の復興の参考に寺々の見学をすることになった。そして吉五郎の兄2人も同道し、上洛後は3人で家の造作などの労役をして路銀を稼いだという。

そろって腕が良かった。この間京都の街で算盤の製作も見たとも二人の兄の家では言い伝えられている。大津算盤は珠つくりに舞錐即ち手ロクロを使っている時代である。

1811（文化8）年、勧進でやっとまとまった金で、聞善寺本堂は、三人兄弟の見聞も加えて完成した。4年後24才になった啓準は帰郷して住職となった。（兄は木次町の西善寺住職に）学識豊かな青年僧侶のかもし出

横田を育てた人⑫—村上朝吉と高橋常作・宝暦天明期と田中時代・横田三十三番札所めぐり⑩・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

す風流の道は、この町に新風も吹き込んだ。

こうして吉五郎と啓準との交友は深まった。42才を初老といゝ昔は隠居するのが習しであった。吉五郎も家を19才の長男新助に譲り、二男政右ヱ門をつれて岩戸屋を創設した。このころかって鉄師であった山根家伊豆屋儀右ヱ門（鉄不足のため廃業し地主を専業としていた）から、仝家にあった、芸州塩屋小八作の算盤を見せられ製作をすゝめられた。

腕の良い吉五郎はこの製作にいどんだのである。枠は樫の木、珠は梅の木、芯竹は藁屋根の裏にあるすゝ竹、いずれも堅い材料である。最も苦心したのは均一な珠を作ることである。舞切りで作るのは大変であった。舞切り（手ロクロ）の回転する力は弱いから堅木削りは大変である（大津算盤も舞錐を使うが、柔かいふくらしの木などを用いていた）。そこで2人挽きの大きいロクロを、小さくして用いたが満足できず、とうとう足踏みロクロの工夫に成功し、珠削りが容易に出来るようになった。

珠を削るのに「ギーッとコン、ギーッとコン」と音がしたという。右足で踏むと縄が引きしまって軸が廻るが、すぐに踏み板は床に着く。そこで左足で踏んで廻して右の踏み板をあげる。

そして踏むと「ギーッとコン」と鳴って踏み板は床に着く。この「ギーッとコン」の間に、軸にさした珠材にのみをあてゝ珠を削るのである。廻転の力は強いが持続が短い。だが舞錐による回転時の軸の動様そして回転力の弱さの欠点が除かれたから、大変な進歩であった。吉五郎はそれを持前の器用さで補って、立派な算盤の珠を製作した。

播州では珠材が柔かいために明治30年末までこれを用いた。

雲州から手廻しロクロ（次号参照）が入るとこれに一挙に転換。

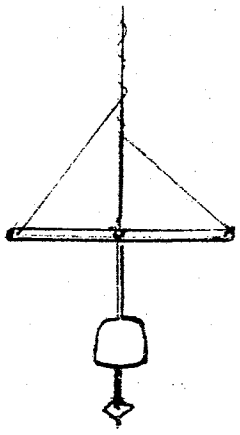
しかしできる数の大巾を増量は望めなかったから、算盤の丁数も若干の増量にとどまり、名人芸の域を脱することはできなかった。

算盤製造が地場産業として成長するには、最も工夫を要する珠削りの工具の開発であった。吉五郎の努力は足踏みロクロ（往復回転使用）の工夫までで止まった。踏む距離はわずかで、回転が早くなって刃物近づけると、抵抗が加わって回転が遅くそして弱くなる。堅木ほどその度合が強くなる。一つの珠を削る努力は大変なものであった。

そこで横田の高橋常作の開発の苦心があり、今日から見てもその考案は実にすばらしいものである。これを一転してどこの家にもあった糸引き車を利用しての珠削りに成功したのが**村上朝吉**であった。これが今日の雲州算盤と産地形成をした母体であったのである。そして今も尚高級品の算盤はこの器械によって削り出されている。名人職人の手の感触が加わるからである。

（『雲州そろばんの今昔—歴史とその技術』　高橋一郎著からの再構成である）

1図



手ロクロ（舞錐）

往復回転

力が弱く不安定

穴明け用の錐であったのを利用した。

2図

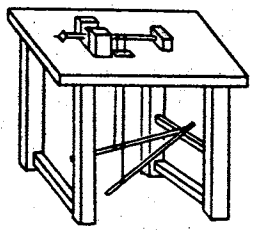


二人挽ロクロ

往復回転

道具が大きく、算盤用珠削りにはうまくゆかず短期間。

3図



足踏みロクロ

往復回転

村上吉五郎の工夫したもの。

横田の先覚者

—本誌で紹介した人

（氏名下の数字は号数○は碑あるもの）

勝平大喜　12　青木実三郎17

角村の三名工15（佐伯景幽・安部吉重郎・佐々木吉左ヱ門）

安部吉重郎184 186　○細木芦角星171

妹尾勇吉22　○小林徳一郎32

雲照律師48　井上栄太郎75 76

卜蔵孫三郎78 83 86

岡崎喜一郎109　○卜蔵梅之丞113

○善徳寺三代記140

他に殖産興業功労者（農業・林業・畜産・鉱業・工業）や歌人・俳人さらに三沢氏歴代や岩屋寺僧快円などは文中でとりあげている。いずれ改めて独立して記述予定。

宝暦・天明期と田中時代

江戸幕府が宝暦と改元することを命じた1751年11月3日と、寛政への改元を令した1789年2月3日までの約40年間（宝暦・明和安永・天明）は、江戸幕藩政の享保の改革と寛政の改革との間に位する。いわゆる田沼時代である。

享保の改革

徳川8代将軍吉宗の政治（1716享保元～'45延享2）をいう。吉宗は基本的には緊縮政策を励行し、通貨統一をはかった。民意を聞くため下意上達のため目安箱を設置し、他方幕府官僚体制を固めて将軍専制を強化した。新田開発をすゝめ、広く甘藷・人参・櫨などの栽培奨励など実利的施策も成功したので、幕府の財政は安定をみた。そして漢書洋書の輸入制限をといたので、蘭学興隆の基となった注目すべき時代でもあった。

たゞ1732享保17年の西国を襲った蝗害は、46藩236万石が62万石という収穫で、飢人260万以上、餓死者1万余も出した。

田沼時代

田沼意次は紀州藩の足軽の子、藩主徳川吉宗が将軍として江戸城に入ると、父意行は従って幕臣となった。その後吉宗に代って家重が9代将軍となると、意次は本丸に移り、側用人となり1767（明和6）年老中に準ぜられて幕政に参加し、やがて田沼時代という全盛時代を築きはじめる。

それは商品経済の発展と共に、商業・高利貸資本と結ぶ方向に極端化していったので、幕府権力の経済的な基礎であった本百姓が、商業資本にも収奪されるということになり、藩領主経済の破綻となり、武士の生活も苦しくなった。一方勢い幕府政治は、商業・高利貸資本と結んで腐敗を引きおこした。

その最盛の天明期に入ると、この時代は歴史気象学のうえで小氷河期に属していたが、特にこの期は目立った寒冷期であって、江戸時代最大の飢饉と言われる「天明の飢饉」に見舞われ（当地方については別の機会に）、それが意次の退陣を早める一つの要因ともなった。田沼親子時代いわれるほど意次の改革を助けた、子意知は城中で刺されて没した。以来急速に意次の勢も衰え、失脚し失意のうちに没した。

寛政の改革

松江定信は家治に変って11代将軍となった家斉の補佐役となり、幕政の立直しを期待され、田沼以後の改革に乗り出した。倹約令にはじまり、備荒貯蓄の策、江戸市中の風俗統制、都市流入人民の帰村令、物価抑制策そして寛政以来の異学流入の禁止と朱子学の奨励等であった。

これらは一貫して幕府内部の綱紀粛正による支配機構の整備と、荒廃した農村立直しと本百姓の確立、商業・高利貸資本の抑圧であった。立直りをみせたが、あまりの復古的政策は、発展する社会の中で破綻を来たしはじめ、定信は失脚し改革は挫折する。

歴史は

1992年（一昨年）1月号は、壬申の年のため、申に因んだ歴史を拾いあげてみた。その中で立花隆の『サル学の現在』を引用した。立花は『文芸春秋』に載せた「田中角栄の研究」で、評論家として登場し、この論文は遂に田中角栄元首相を退陣に追いやる契機へとも発展した。

年末田中元首相は病に勝てず没した。

数種の新聞をみると、どれの大きい見出し文字は同じで、「列島改造論」「ロッキード事件」「金権政治の源流を作る」とある。尺度の大きな政策構想力、並はずれた日中国交正常化に代表される決断と実行力、人情の機微を知る才能など評価されながらも、きれいごとでは政治にならないとばかりの、金をともなう感覚と手法を膨らませたことは、政界ばかりでなく、経済道徳の低下までももたらしていったと手厳しい。

立花隆は何が正しいかを考える前に、何が利益になるかを極限の形にもっていった田中の退陣後は、その方向は変らず、さらにとことんまで腐敗して、今日の惨状になったと述べている。

歴史は明日への夢を育むが、忘れず教訓も残している。

（蓬頭子）

斐の上川柳十二月号

縁のない億をゼロだけ数えてみる（まり子）

故里の味何処にでも売れており　森山悠子
夜食にも色味カロリー三拍子　中林もりえ
旅帰りまず漬物でお茶をのむ　児玉哲呂
次つぎと堀れば出てくる闇の金　若槻白馬
老人会少し派手目に身づくろい　松浦久寿子
紐落し豊作みたいな顔ばかり　渡部ミツコ
待った雨新聞広げ眠りこけ　安部正子
秘めた過去語り肩の荷少しおり　藤原のぼる
冬近く残菊供えひとり言　安部春恵
遠く来て道連れほしい独り酒　高木凡太
目も口も笑って朝のリズムです　眞綿よし子
降りるたび土産が増えるバス旅行　藤原千代子
米作り主役の寿命あと僅か　松浦亜以
皺の数男の顔は履歴書だ　松田牛歩
駆け足で太陽が行く午后三時　横山まこと
米輸入瑞穂の国も様がわり　田中有樹絵
減反の罰があたって米輸入　石原冬明
高いびき二匹の猫もまねをする　足立玉恵

柴栗句会十二月抄

木枯に押されて揚る糸の月　浅野としお
老の瞳に切絵のごとく掛大根　糸原古志
鮮かに舗道は影曳く冬木立　岡田蹊花
短日や街の灯盆地を抱き居る　小川月舟
哺乳瓶転がる庭の石枯るる　恩田和美
遠吠えに師走の夜半を目ざめたり　加納信子
友の愚痴聞きつ見上ぐる木守柿　楠房子
冬鴉残照惜しむ声遠し　高木白虹
ねんねこの赤いホッペや師走町　中澤美紀子
風が風呼んで枯野を疾走す　新出谷一華
語らずも坐る炬燵の仕倖せを　錦織富江
きみ逝くを知らで咲きけり八ツ手花　渡部夕峰

掌に掬ふ　簸の上短歌会

大銀杏の残照燃ゆる校庭を犬連れし人の影よぎりたり　永井弥生
限られし病室の窓に見も知らぬ人の流れを今日も見てをり　〃
訪づれし隣の廃屋いよよ朽ちて欠けし茶椀の転がりをれり　岡田時子
孫われらに祖父接ぎくれし甘柿を採らざるままに秋深みゆく　佐藤喜代子
籾摺機より流れ出る米に青米の多きを言ひて子は掌に掬ふ　〃
庭隅に埋められたる大根の葉の色づくもありて日暮れのはやし　常盤はるまさ
如何程の銭にもならぬ蒟蒻が軒下に陽を浴びて並べる　〃
紅葉の映ゆる下道菩提寺の晋山式の行列は長く　野村節子
めぐりまだ覚めやらぬ霜ふかき庭山茶花の花咲き静もりて　〃
夕映えし浅間の嶺の白煙が流るる空や信濃路は秋　安部夕波

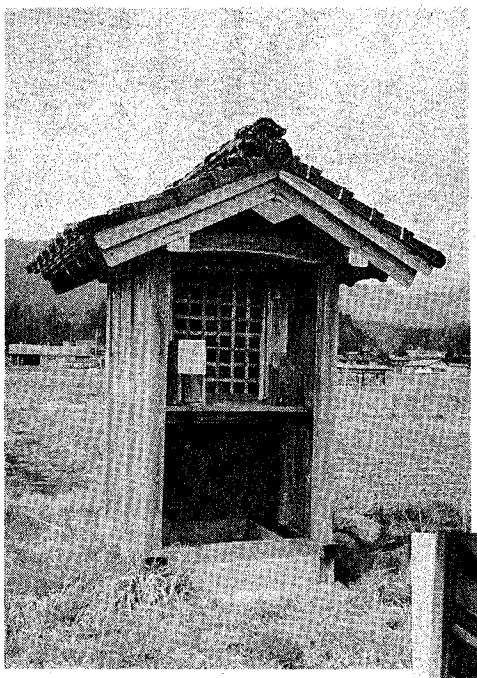
横田三十三番札所めぐり⑩

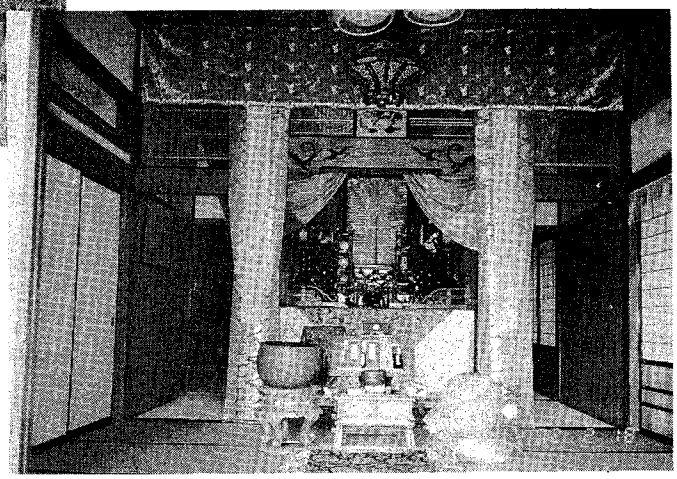
第13番　蔵屋・別所　**報恩寺**

にほひくる山路の露に
ぬれながら　椛をつむや
報恩のため

第14番　樋の口　**野水庵**

（大川端　水田の中）





今ぞ知る深き誓の
朽ちざるを　いづる野中の
水をむすびて

（写真　会員　佐世川徳雄）

会員頒布一部百五十五円／〒六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 226 号
（2 月 号）
1994. 2. 1
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

近世（江戸時代）の三大飢饉

享保・天明・天保の餓死年（上）

—全国そして奥出雲—

飢　饉

わが国では米を主食にしている。米のできが悪いときは不作、米のできがひどく悪いときは凶作の年といわれている。飢饉の起る主な原因は気象異変である。古代・中世においては水利の便が十分でなかったため、旱魃のとき植付けができず凶作になった。近世以後になると水利の便が十分になったため、旱害は次第に克服されてきたが、夏の気温が低くて稲の生育が阻まれ、不作・凶作になったことが多い。これを冷害という。有名な**天明の飢饉**は、（記録からみると日本の歴史はじまってはじめて）主として冷害や洪水に伴って起った代表的な例である。

また虫害のために凶作、飢饉が、中世の戦国時代にも、庶民は飢えになやまされたのである。現代にあっては、日本の飢饉というものは考えられなくなったが、近世まで日本に分割支配が続いていた間は、米穀の偏在がひどかった。穀類が不足になると、領主は穀留（こくどめ）をしたため、穀類の流通が阻まれ、不足のところと余裕のあるところが相隣りして偏在し、隣領では飢饉に苦しみ、自領では比較的楽に暮らしたというような矛盾をはらんでいた（同じような状況は現在でもインドとか、アジアの発展途上国などで見られる）日本には『常陸国風土記』のころから、東国には、雨年に豊作なく、旱魃に不作なし、という諺がある東国では割に気温が低いので、旱魃になるような年には、かえって豊作になりやすく、雨の多い年には冷害になりやすいことを表現したものである。これに反し西日本では旱魃に不作になることが多く、そういう意味で西日本には弘法大師が創ったといわれる溜池や用水堀が多いのである。東洋には、天災が多発するのは政治が悪いからだという思想がある。

飢饉では多くの庶民が長期にわたって苦しむのであるから、飢饉は為政者が悪いためだとして、政権の交替が行われたことが多い。その一例として、**天明の飢饉**の最中に、田沼意次の政権が倒れ、松平定信を老中首座とする政権が誕生したことをあげることができる。そこまで行かなくとも、年号が改められて、縁起直しといった例が多い。飢饉に伴う最も顕著な社会現象は、穀類価格の暴騰である。それによれば穀類の価額が高くなったのは、主に飢饉の年で、その他に内乱（顕著な例は明治維新のとき）の年がある。穀類の値が高くなると、細民がこまり、餓死とまでは行かなくとも、疫病がはやり、人口が激減する。近世日本の人口の激減は**天明の飢饉**のあとで起っていることが実証されている。また飢饉の年には、物情の不安を象徴する百姓一揆とか、打毀（ぶっこわ）しが多発する。特に江戸や大坂の打毀しは**天明の飢饉**や**天保の飢饉**、慶応の凶作に伴って起っている。地方史にとって飢饉は最も痛烈な事件として多くの話題になっている。飢饉のとき人肉を食ったというような記事もあるが、これは疑わしい。文化人の旅行記などには、地方で起った飢饉の惨状が述べてあって、史家の参考になっている。飢饉の際、御救（おたすけ）小屋を建てたり、救米を払下げ、または授与したり、飯米の喰延し、かてものの奨励、消費の節約などの社会政策がとられ、米穀の買占め禁止、囲米（かこいまい）の摘発などが行われ、穀留が実施されたなどは、旧幕時代のみならず、太平洋戦争中にも実施されたことでもある。穀留の実施などのような、物価の不安定なときに政府の発動する最も強力な手は、物価安定政策であり、洋の東西を問わず、時の古今を通じて変わることのない政策であると断言できる。国際連合の調査によれば、世界の人口は急速に増え続け、世界の食糧生産の増加が追いつかず、世界の食糧不足の時代は近いという。

享保の飢饉　—享保17年1732—

享保17年は、前年の冬以来気候不順で寒気がうすく、春に入ると雨が多く、それに夏に入っても冷雨が続き、各地で洪水・川欠による田畑の荒廃が目立っ

近世の三大飢饉（上）・横田を育てた人(12)—村上朝吉と高橋常作（中）・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

た。また低温によって作物の成育が悪いうえ、それに誘発されて大規模な虫害がおこったのがこの飢饉の原因で、畿内以西が大被害を受け半作以下の藩は46藩にも及んだといわれている。虫害を与えた虫の種類については幕府の公式文書にも、イナゴを意味する蝗という字を用いているところから、イナゴであったと考えられる。しかし同じ被害地である岡山藩が、その二年後に作成した『備前国備中国之内領内産物帳』絵図の部には、「蝗ノ内」として「稲ノ葉ヲ食フテ害ヲナス或ハサネモリト称ス」としてウンカ様の虫を、また「長サ五六分色青シ稲ノ葉ニ生シ節ヘ食ヒ入ル虫ナリ」としてズイムシ様の虫をあげているところなどから、この時の虫はイナゴ・ウンカといったように特定の害虫一種類に限定しないほうがよいようである。被害については諸説あるが、私領万石以上の領分については、享保18年正月段階で、飢人96万9946人、餓死人7448人、斃死牛馬2353疋と幕府に報告されているので、それをあげておく。もちろん、これに万石以下所領と天領を加えるともっと多いはずで、通説にいわれている餓死者1万2000人、斃死牛馬1万4000疋というのは、実態に近いだろう。もっとも被害がひどかったのは伊予松山藩（15万石）で、その前5カ年平均で12万石余の年貢収入があったのに、この年は皆無で、飢死3489人、斃死牛馬3097疋と報告されている。翌年の種籾を枕に餓死したという「義農作兵衛」の話は松山近郊農村でのことである。ために藩主松平定英は、かねてからの指示にかかわらず、備えが不充分だったとして幕府から出仕を停止されている。幕府の対応は素早く、7月20日には勘定所役人を被災地へ派遣、また勘定吟味役神谷久敬を大坂にやって救済の総指揮をとらせている。救援の方法としては、被害のなかった東山・東海・北陸諸藩などの米を西国に回送するとともに、幕府自身も多量の救援米を送り、また島津継豊（鹿児島藩）以下蝗害地の大名に、おのおのその石高に応じた恩貸金を与えるなどした。この飢饉は大規模なものであったが、幸いに翌年は豊作だったため一年で収まっている。しかしそれが社会に与えた影響は絶大で大都市にも波及し、連年低落を続けてきた米価が数倍に暴騰し、大坂・江戸の住民の生活を脅かし、不安の空気を生じた。1733年正月25日には、幕府の御用米商高間伝兵衛が大量の米を隠匿しているとの噂に怒った江戸の窮民約1700人が伝兵衛宅を破却した。大都市最初の打毀である。混乱は次の麦の収穫期から鎮静に向かったが、享保の改革の緊縮・府庫充実政策を一頓挫させた事件であった。

享保の飢饉と出雲・仁多郡

（出雲私史から）――享保17年の蝗害は稲17万4320石余（松江藩の石高18万6000石）で、諸郡の民は騒動し、神門郡の源左衛門・伊助は陣頭に立って松江に出て訴えたが、捕えられ曝し首となる。幕府は金12000両を松江藩に貸出し官米（関東米）を、石州大森代官に運び、出雲国内の食の乏しいもの10万人をしらべこれに与えた。この4万俵で何とかしのぐことができた。翌年になり借入金の償還を免じて、藩主以下庶民に勤倹をすゝめた。

（江日記・絲原家古代よりの聴書から）――享保11年1月大雪のため1か月の間に馬100匹牛472匹死す（郡中）。この年鉄師20余人を9人のみに許可される――鉄方御方式――（郡内では卜蔵・杠・糸原・山根・桜井）。享保14年5月高野山本町火災、6月三成町2丁焼失。享保16年5月8日大雷電、雹・雪降る。小馬木村小森で大勢で田植中へ落雷あり、8才の男児死す。6月は雨降らず、原口天満宮にて雨乞祈願の笠踊り奉納（戦時中まで遺風あり）、間もなく雨降る。

享保17年大雪（6～7尺、山中は1丈3尺）で3月中旬まで消えず、峠は馬もこさず（馬木ゝ麦のでき悪し。5月末より霖雨、大水出る。暑さ弱く稲や草のでき悪し、盆後から稲に虫つき、出穂にも虫つき悉く枯れる。コバイウンカという由で、諸国一円に発生するという。稲によっては稔るものがあるが米粒は皆くだけて捨てる。前代未聞の大変也。

8月から玄米払底し、釘や鍛冶屋も中止。酒屋も造酒停止、流れ者一切入国はもとより出国も禁止となる。仁多郡は6000石の減収という。当秋は西国大凶作に付、諸大名方に拝借金10万石より15万石までは1万両、15万石より20万石までは1万2000両、その他1万石より以上、御知行に応じて拝借を許す。凡42か国余で前代未聞の凶作。御恵拝受○古今の名将軍様と仰せ奉る由○村町の無田の者、飢に及びイノコ堀に八川、竹崎へ参り、大雪をのけて堀る。首縊りするもの多し。

享保18年　正月より飢人へ3月まで2000俵の米を下さる。しかしイノコの根を堀って餓死を防ぐもの多い。2月三成町20軒焼失、宍道町でも火災。3月松江の外中原町大火、侍方200軒、百姓家450軒焼失。

大凶作に付公方（幕府）より美濃国の米を、当国へお廻し下さる。釘1か所も吹かず、農民は賃仕事を失い難儀する。秋の米の出来悪るく、秋訴し救助米として当年より5か年間に、2万5000俵下さる。8月11日己の刻（前10時）大地震あり大いに障子などふるう。酉の刻（后10時）まで地震たびたびあり。

享保19年は天候順調であったが、連年の不作で下地悪るく、百姓難儀し、潰百姓50人、追放

にあう。(杠・絲原ともに、大馬木村—現横田町大字大馬木住人)

(仁多郡略談から)——「十七年壬子七月上旬ヨリ稲虫発生ス形チ少々翼アリ。恰モ蜉蝣(かげろう)ノ如シ稲根ヨリ湧発シテ雲霞ノ如叢飛シ故ニ雲霞虫の称アリ。又糠虫トモ云フ。稲害最モ甚シ稲ノ木枯死シテ更ニ結果ヲ見ズ。四国中国九州皆此ノ害ニ罹レリ。此被害残高二分乃至五分、出雲ハ三分位ナリ。最モ東国北国ハ虫害ナク豊穣ナリ。当国ハ九月頃ヨリ飢饉ニ迫リ、下男下女ヲ解雇シ、飢者ハ葛根蕨ヲ食ス　当時米升ニ付烏目六十銭大豆一升四五銭ニ騰貴ス　将軍家ヨリ国守領主拝借金被仰出、当国守一万二千両借用、寅ヨリ五ケ年間ニ弁償スベキ事。横田六ケ所ノ百姓四五百人凶年秋訴セント城下へ出ントス、諸役人追懸意宇郡大谷村(玉湯町ノ南ノ奥)ヨリ追返ス。

十八年二月廿三日三成町出火家数二四軒焼失ス」

8月11日大地震、小地震20余に及ぶ。春夏は前年不作のため飢饉未だ医せず、葛根・蕨根・むしを・野老(ところ)・山芋(やまいも)・野芋(のいも)科を上食とする。カツマカ・トコロ・榎葉・ムシヲ葉等を食う。

7月中旬より8月まで諸国に疫病流行し、老人や飢者多く死す。幕府より当国へ米廻送されて救助せられる。藩への秋訴によって1年5000俵づゝ5年間下さる。

19年下郡は稲田村土居の安部孫右衛門となる。

(出雲と仁多郡については、4種の記録から抄出した。重複もあるが、比較すると意外に情報の正確さに興味がわく)

—会員の方から、今年は天明年間以来の飢饉というがと話があり、この連載を。

横田を育てた人⑫
雲州そろばんを地場産業への功労者
村上朝吉と高橋常作(中)
—常作のロクロ改良—

日本で最初に独創のロクロ

村上吉五郎が考案した「一人引き足踏みロクロ」も、わが国の技術史上画期的なことであったが、横田の高橋常作が開発した下図のような「はずみ車付足踏みロクロ」は、さらに貴重な工具の出現であった。常作が明治初年前後に考案したその部品が写真であり、常作の孫の虎之助が生存中の記憶をもとに復元したのが下図である。(現在模作品が「雲州算盤伝統産業会館」の資料室にある)

このような「はずみ車付」(クランク式)回転構造の器械のわが国に於ける発生とその発達を調べてみると、長野県の岡谷市にある岡谷蚕糸博物館に収蔵されている、足踏座繰器が最も古いものであった。この地方はかつて群馬県と並んでわが国の養蚕地帯で、蚕の繭から生糸をとり出し紡糸する作業の過程で、この座繰器が使われて極めて能率があがり、長い間これが用いられたという。当博物館によると、明治初年に長野県の松代藩士の叙三郎の考案となっているが、当時すでに中国では足踏式が用いられているから、それをもとに製作したものであろうとのことであった。

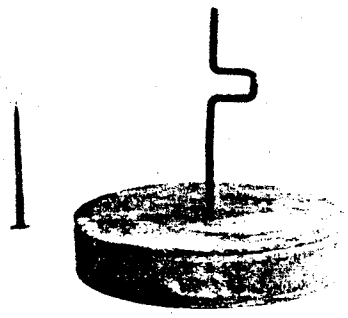
すると常作は全く独創的にこの器械を考案したことになる。吉五郎が最も苦心したのが珠削りの方法・工具であった。そして「一人引き足踏みロクロ」に到達した。既述したようにこの器械にも限界があって、十分ではなかった。常作も同様に壁に突きあたり、その妻が夫は狂人になったかと思うほど、一年半わが家の土蔵にこもって、常軌を逸した工夫に没頭した。その仕事場には当時では珍らしい柱時計の歯車なども置かれていたというから、常作は時計のこゝの構造からヒントを得たのではないかと思われる。「はずみ車」によって一方回転することは、往復回転と違って、踏めば踏むほど加速し、珠を削るにあたってのノミの抵抗も少なくすることが出来たのである。珠削りを飛躍的に容易にし、削った面も滑かにし量産を可能にしたのである。

はずみ車を回転させるのには下の踏み板を踏むのであるが、ベルトははじめは綿糸と麻糸をより合わせて、松やにを塗り込んだものを用い、鹿皮が手に入るようになるとこれに替わったという。金具の細工は近くの馬場の稲守房太郎という錠前作りの名人だった鍛冶屋であった。

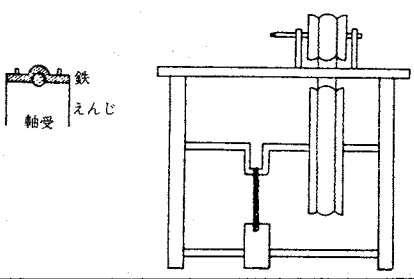
常作の生い立ち

村上吉五郎におくれること45年　1832(天保3)年(吉五郎が最初のそろばんを作ったころ)

3—1　足踏みロクロの部品



3—2　足踏みロクロ復元図(部品実物と高橋虎之助の回想から)



前号訂正　2頁1段10行（鉄不況のため）　2段10行　回転

柴栗句会一月抄

年賀書きなつかしい人顔浮べ　安部春恵
番組みの料理はみんなうまい顔　児玉哲呂
ああ寒い着ぶくれ重さ感じない　若槻白馬
祝い餅三方にのせて松の内　足立玉恵
松の内胃は丈夫かと母は言う　松浦久寿子
しきたりを嫁にゆずって孫の守り　藤原千代子
今年こそ今年こそわと年重ね　渡部ミツコ
宅配にどっさり盛った老母の味　真綿よし子
年賀状また逢いました古き友　礒島恵子
マンションの窓元旦のご来光　藤原のぼる
食べる数聞いて雑煮の餅を入れ　松浦亜以
子等行きてホットしていて又淋し　安部正子
自販機もボケか釣銭少し出し　横山まこと
老二人炬燵でミカンの寝正月　田中有樹絵
頂きをめざし怪我なくマイペース　石原冬明
ここ堀れと教えてほしい戌の年　松田牛歩

斐の上川柳一月号

上弦が下弦に移る寒の闇　浅野としお
初釜や仏にも湯気たてまつる　糸原古志
米寿の春真先に拝む祖仏の霊　岡田踄花
包帯の裾より滲みる隙間風　小川月舟
寒鴫に医者の言葉を聞きこぼす　恩田和美
子も孫も正客として初点前　加納信子
娘の去んで今朝の炬燵の空一つ　楠房子
ぢっとしてうつろう季節の春を待つ　高木白虹
おだやかに音せぬ町や二日午後　中澤美紀子
元旦の倖せ運ぶ窓を開け　新出谷一華
健康を祈る破魔矢孫の手に　錦織富江
長老と戦史繙き年酒汲む　渡部夕峰
年新たひめくりめくる厚さかな　峯石美代子

暮から春へ　簸の上短歌会

通り抜けの小さき路地の地蔵尊に花いっぱいの京　永井弥生
の年の瀬
デパートに今年おさめの買物と夫に籐の杖をもと　〃
めぬ
灰皿に莨押しつけ博労は子牛の値つけると袖競り　人
はじむ
全焼の隣家の庭の糸桧葉は黒焦のまま雪を被れり　佐藤喜代子
朝々の餅をよろこぶ老いし夫は臥ると言えど常の　〃
如くに
庭樹々の被ぐ淡雪に朝の陽の燿いて部屋ぬちまで　岡田時子
も明るし
寝たきりの妻にのみかかはる日々なれば今朝の積　〃
雪は一大事件
視力とみにうすれし妻に朝の看取り終ればねもご　常盤はるまさ
ろに涙拭きやる
遠山に炭焼く煙のぼりいて夫焼く煙は川の辺に立　〃
つ
子ら去にてうつろの如き冬真昼二人の部屋は湯の　野村節子
たぎる音
釈迦堂は冬日穏しく境内に影を落して子らの遊べ　〃
り
安部夕波　人

蛇足　この小誌の号数を12で割ったら、20年目に入っていると気付き、月日のたつのが早いのに驚いています。皆さんに読んで頂くから、助言を頂くから、協力を頂くから感謝し、元気を出して続けています。それが健康保持のもとにもなり感謝しています。

30余年前に、横田町誌編集のため町内4地区で、80名を越す協力委員をお願いし、沢山の資料を集めて頂いたのに、予算と編集方針の制約から、採用できなかったものを、罪ほろぼしに載せたいとはじめたのが小誌でしたが、地元の沢山の方の支えと、全国各地や外国の方々の知遇で今日に至りました。その間絲原記念館・島根大学・県立図書館・全国各地の研究者・研究機関・図書館、さらに出版社の協力で、山ほどの頻しい資料が得られ、整理に追われています。感謝の極みです。老令のため去られる数に比べて若い人の加入が少ないのが残念ですが、篤志家の御厚志と植田軽印刷所の御厚意・愚老の頂く布施で続いています。資料の考証の不備がないよう先学の指導でたどります。よろしくお願い致します。

会員頒布一部百五十五円／〒九二六　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　振替口座松江0－601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 227 号
（3 月 号）
1994. 3. 5
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

横田を育てた人⑫

雲州そろばんを地場産業への功労者

村上朝吉と高橋常作（下）

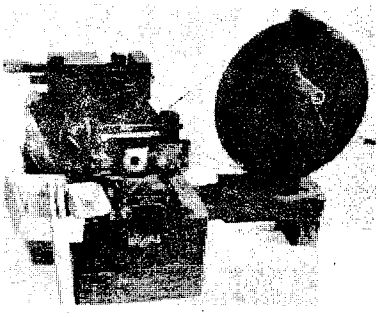
—朝吉の三つの功績—

朝吉の三大功績　今日の基礎

村上吉五郎が足踏みロクロを考案し、高橋常作が足踏みロクロをクランク式に進歩させて、回転軸が永久回転するようになった。珠削りが次第に進歩したが、村上朝吉は日本の家庭に糸引き車としてある手廻し方式に眼をつけ、苦心の結果手廻しロクロを完成させた。これで堅木が削り易くなり、正確で一定した形の珠ができ、珠の形の大小も調整の仕方で自在にできるようになった。これが功績の第1で、ついでこれまで吉五郎、常作も秘伝としていた技術を、公開し多くの弟子を養成して量産へと進めた。この第2の功績についで、第3の功績も加えることになった。

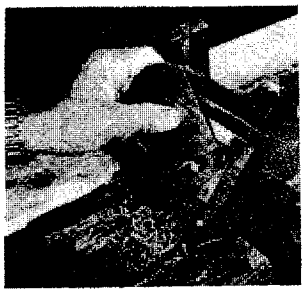
手廻しロクロ

量産されると地元の需要を超えた品物の販売が必要となってくる。朝吉の実家は横田町で旅館を営んでいた。そこには四季折々の物産のほか呉服類も行商する、簸川郡の差海（さしみ）商人が頻りと拠点して泊っていた。この商人群は中世以来中国地方一円に行商圏をもっていた。（現湖陵町の商人達）この商人に販売を託したのである。強力な永年培った販売網は、明治の役場・銀行の設置発達の波に乗って、販路を拡げ、雲州そろばんの質の良さはその名声を高めた。それは冬の大工職人の暇仕事から、専業従事職人の成長、そして地盤産業の定着を招来した。



手廻しロクロ

右側の把手をもって回転させると左側の軸が回転する。



珠の削り方

回転軸にほゞ珠の形にした珠材をさして、鉋の刃で削る。

珠削りの順序

①珠材（乾燥し切った梅の木）を角棒にする。
②四隅を削って8角棒にする。
③それを珠の高さに切る。
③舞錐（225号の2頁の手ロクロ）で中央に穴を明ける。
④これを写真右のロクロの左回転軸にさし込んで、鉋（かんな）の支え板（かがみ板という）を上にかぶせ、ロクロを回転させ、鉋の刃を近づけて削る。
木の堅さによって回転速度を加減する。一定の形の珠が削れる。
鉋の刃の支え板の深さによって、珠の大小の差ができる。
（詳細は　筆者著『雲州そろばんの今昔—歴史とその技術』で）

村上朝吉の生い立ち

朝吉は横田町大市の旅館「宮本屋」五代村上利助の三男として、1841天保12年5月5日に生れた。12才の春2軒北隣の宮大工木綿屋の弟子となり、安政5年18才で独立した。当時は大工といってもいつも仕事がある時代ではなかったので、暇な時には当時需要の上向いていたそろばんの製作を手がけた。1864（元治元）年24才のころ、いくらか生活が安定したので、古くから鍛冶を業としていた同じく大市の千田六太郎の妹を妻として、川向う六日市の町尻の六坪ほどの借家を新居とした。義兄の六太郎も朝吉の弟子となり、そろばん製作に励んだ。かたわら六太郎は鍛冶技術を生かして種々の工具を工夫した。そして朝吉が考案した手廻しロクロとセットにして、立金（入門料）をとって希望者に教えた。朝吉の弟子は30数人に及んだ。その中から横田の名工を数多く輩出した。これらが地盤産業形成の中心者となった。

朝吉は明治13年（1850）宮城県博覧会に出品し二等賞を得た。（一等賞該当なし）その後大市に移転し、現村上時計店の地に住居を営み、大住屋と称した。

子孫は時計店を営んで現在に到るが、そろばんの伝統は弟子で義兄である千田保太郎からその子保太郎に伝わり、養子亀吉（朝吉の孫）その子美一郎へと伝承されている。（4頁へ）

横田を育てた人12—村上朝吉と高橋常作㊦・横田三十三番札所めぐり11・近世の三大飢饉（中）・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

近世（江戸時代）の三大飢饉
享保・天明・天保の餓死年（中）
―天明の全国そして奥出雲―

天明の飢饉

西日本が旱魃で不作になると東日本は豊作であるが、西日本が寒冷であると東日本は冷害となる。天明の飢饉は記録からみると日本の歴史はじまって以来はじめてという冷害によるものであった。

昨年の作柄もこの後者の型で、東北地方は7月下旬から8月上旬にかけて気温が10度以下であって、作柄指数は全国平均75に対し、東北北海道は50、青森県だけをみると28、そのうち西半分の日本海側は34、東の太平洋側南部地方は1、北部地方は0であった（島根県は79）。（10月15日発表のもの）

近世中期の収穫量は10a（1反）当2.5俵（10斗）である。上納が7斗手取りが3斗である。従って農民はこのうちの多くを換金して生活にもあてるから、主食はヒエ・アワ・ムギ・マメである。これも米が不作の時はやはり出来が悪るいという。

1902年（明治35）の横田村の調査では、明治20年ころから600戸の戸数のうち、飯を食べるような、ぜいたくをする家が40戸程になったと述べている。江戸時代は良くて交り飯、雑炊・かゆである。不作の時は押して知るべしである。

最近のさる新聞の歌壇に

えごの実を拾う嬰の子もり唄
米が足らずば子を捨てよとや
（山形県　清野弘也）

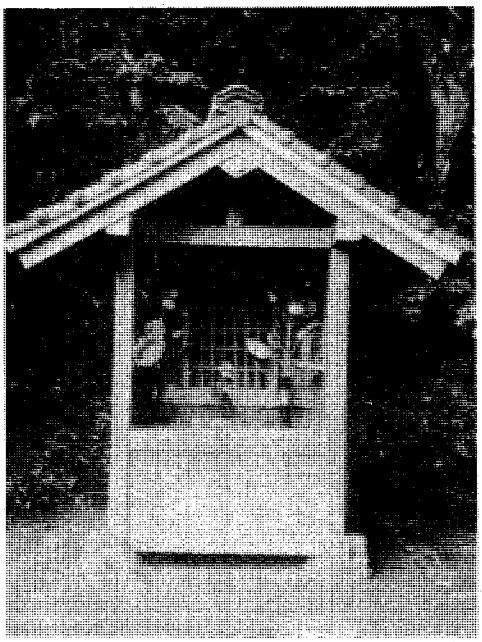
不作年の多い東北が生んだ子守唄が歌い継がれているのである。

天明年間（一七八一―八九）の諸国の大飢饉とは、天明二年奥羽および四国・九州の大凶作、同三年蝦夷地・奥羽・関東・九州の大飢饉、同四年奥羽をはじめ北日本を中心に諸国凶作・不作、同六年奥羽・関東大洪水、諸国大凶作など全国各地を凶作飢饉が襲ったが、なかでも特にはなはだしかったのは天明二・三年の奥羽地方の大飢饉であった。すなわち津軽藩領では天明二年四月下旬より風雨の日が続き、土用になっても冷風が止まず大霜が降り、袷や綿入れが入用で麦は腐り稲は青立ち蝉も鳴かず諸虫不足、収穫は四分作に終った。翌三年も同様に冷害が続き、同年七月関東では浅間山が大噴火して大降灰となり、甲信越から奥羽にまで灰が降って冷夏となった。ところがこの年、津軽藩は処置を誤り、四十万俵を江戸・大坂に廻米して上納はすべて米納を強制した、このため藩領内の米穀が欠乏し、米価は高騰、五月・六月には米の売買が全く止まった。領民の家田畑を捨てての逃散や騒動が頻発したが、秋に入ると町方在方を問わず食料が尽き、草根はもとより牛馬や犬猫、はては死人の肉まで食い、餓死者が続出、目をおおう惨状となった。これに対して藩当局は幕府より一万両を借金して施行小屋を設け、中国地方や秋田から米の買入れを計ったが及ばず、翌四年には疫病の流行もあって餓死逃亡はなお続いた。この間の死者十三万余（一説では二十万）、他国への逃散二万、空屋絶家三万五千余と伝えられる。このような状況は程度の差はあれ奥羽各地にみられた。八戸藩では天明四年領内百姓総数五万一千六百十

横田三十三番札所めぐり⑪

第15番　五反田・川平　**高源寺**

高くとも運びあゆまんひとたびは
みなもとにこそ　かへるとはきけ



（写真　会員　佐世川徳雄）

四人のうち、餓死・病死・逃散、計三万人余に達したという。天明五年、東北地方を訪ねた菅江真澄は、その遊歴記『楚堵賀浜風（そとがはまかぜ）』に、草むらに白骨が散乱し窮民が打ちひしがれている様子を記し、寛政七年（一七九五）刊の橘南谿の『東西遊記』も、天明六年、路傍に人骨累々、村々の家数が激減し一宿一在所一軒も残らず死に絶えた里のことや、人肉相食み殺人も多かったとの里人の話など、南部・津軽の荒涼とした情景を書き留めている。高山彦九郎の『北行日記』は寛政二年、同様の悲惨な話を詳記しており、この地方の爪跡の深刻さをうかがわせる。天明飢饉がこのような惨状となったのは、陸奥では記録の上では、これまでにない大凶作といわれ、卯歳（1783）の飢饉という。これは霖雨、低温、霜害、冷害などの自然的悪条件だけでなく、天候不順だけが原因でなく、この地方の農村に対する貢租の収奪が限度を越え、農業生産が荒廃していたためでもあった。過酷な封建的搾取や分裂割拠の支配体制による津留・穀留政策の犠牲という政治的・社会的原因が飢饉の惨状を極度に悪化させた。このために津軽藩では一七八三年九月～八四年六月にかけて、領内人口のうち八万一一〇〇人余の餓死・病気（むくみなど）による死亡、八戸藩では六万五〇〇〇人のうち餓病死者三万人余と記録されており、また陸奥辺境部各地では人肉相食む凄惨な話が伝えられている。

農業再生産の確保と農村復興を中心とする藩政改革を進めていた上杉鷹山の米沢藩や松平定信の白河藩では、餓死者を出さなかったと伝えられる。その他幕府や全国の諸藩では、米銭の施与、救米払下げ、御救小屋の設立や米穀買占の禁止など飢饉対策に努め、またこの飢饉を機に囲米・郷倉などの備荒貯穀政策を促進した。一方、凶作や米価高騰に起因する一揆・打ちこわしは天明年間を通じて頻発し、幕府老中田沼意次の失脚を早め、松平定信の登場とその首導する寛政改革をもたらすこととなった。



天明の飢饉



食料を求めて他国に逃れる農民（『凶荒図録』より）

（右の絵は国史大辞典より転載）





牛馬犬猫で飢えをしのぐ農民（同より）

文明の飢饉と出雲・仁多郡

（「出雲私史」から）天明2（1782）年5～6月に霖雨洪水あり4万9,444石を害し、米価沸騰し一升100銭になる。全国すべてであったが出雲はこれをのり切った。天明3年6月から雨しきりに降り、8月に至っても止まず洪水の害がでて、冷気頓に加わり、収穫は4万石余の減少であった（松江藩石高18万5,000石）。そこで群臣の禄を減じた。

天明4年6月20日、今市町は

柴栗句会二月号

炉火盛り手まねで示す老村下　浅野　としお
せせらぎに季節のひびき猫柳　糸原古志
豆撒きの鬼問い詰める子の真顔　岡田蹊花
蕗薹のひとつ転がる厨春　小川月舟
寒空へ声を放てば心和ぐ　恩田和美
行きずりの会釈にとまどう目出し帽　加納信子
寒の空犬も行けたか小さな星　楠房子
豆撒きの幼児に手を副え声もそえ　高木白虹
春立つ日かすかにうごめく韻のして　中澤美紀子
行きずりの故里訛り冬の旅　新出谷一華
亡母くれし箪笥の中の春ショール　錦織富江
何なくも来てさえずりし凍てし庭　峯石美代子
通るだけ雪掃いて臥す老の門　渡部夕峰

一つ灯の下

簸の上短歌会

チャルメラの音色は長く尾をひきて本読む炬燵に今宵もとどく　永井弥生
炎天寺は一茶ゆかりの寺と聞く陶器の蛙が春陽を仰ぐ　仝
老ふたりきびしき寒を籠りゐて夕べ鴉の啼くをきくなり　岡田時子
雪かづく庭石それぞれ貌もちて藤柵の石は宝船に似る　仝
母かともわれを思ひしや幼子はキュツキュツと靴鳴らし寄り来る　佐藤喜代子
ダスキンの取替屋さんが来ただけの雪降る長きひと日が暮れる　仝
畑作りに熱心なりし病む妻に姿よき白菜を選びて見せぬ　常盤はるまさ
相次ぎて妹を義弟を喪ひし妻は臥床に言葉少なし　仝
餌持ちて鶏舎ひらけば雛鳥の六羽がわれに競ひ寄り来る　野村節子
一句詠む夫と一首のまとまらぬ雪の夜更けの一つ灯の下　仝
旅終へて帰る夕べのふるさとはしんしんとして雪ふりつづく　安部夕波

斐の上川柳二月号

命日に好きな花そえ鋏置く　真綿よし子
三世代道化役者も板につき　森山悠子
外は雪コタツの守りでウトウトと　礒島恵子
玉子酒ほんのり気分風邪払い　渡部ミツコ
愛国の文字複雑な目で眺め　児玉哲呂
巨木見てはかなき生命人の身は　松田牛歩
孫去んで穴がポッカリ空く心地　高木凡太
人の世は悪を肥しに善育て　若槻白馬
押し絵して打ち込む時は兄無心　安部正子
冗談も程度があると湯気を立て　松浦亜以
冬の部屋千両赤く老い和む　安部春恵
成人の外孫花のように来る　藤原千代子
雪男出たと言いたい過疎の村　田中有樹絵
煮リンゴや飴がた食べて歯の話し　足立玉恵
古稀の坂のぼって友と酌み交し　横山まこと
交替で医者のお世話になる夫婦　藤原のぼる
皆望む福祉やっぱり遠くなり　松浦久寿子
豊年の前ぶれにして雪をかく　石原冬明

大火を失して294戸を延焼した。
この月大雨洪水があり、8月暴風雨しばしば至り、5万3740石を害し、5年は稲稍く熟し、群臣の禄を復した。6年9月大雨洪水と蝗の害があって9万2,650石余の減収によって群臣の禄を減ず。
7年清原太兵ヱを普請奉行として、7万余の役夫を2～4月にかけて使い佐陀川（川巾20間40m、長さ2里約8km）を開通する。これで湖水の水勢を殺ぐことができるようになった。
（「**郡略談**」）『三年癸卯、凶荒ニテ飢饉ノモノ騒立乞者ト号ス。御城下其外役人ノ方へ詰メ寄セタリ　正月二十日里方ノ百姓本郡へ入込み、横田辺迄来テカガリ火ヲ焚キ人心穏カナラズ、依テ正月二十三日各所へ役人出張鎮定セリ。
飯石郡三刀屋宮内屋下郡市兵ヱ居宅ヲ破壊セシ等乱暴アレバ一騒鎮静ノ後ヲ、飯石大原仁多ノ三郡出張一騒者ノ吟味アルモ主謀者明ナラズ、飯石郡ニテ三人、入獄、二月飢者銭千百九貫六百文御恵与仁多郡養米不足は操上米三千俵入梅入ヨリ土用前迄雨天且北風、七月中旬ヨリ山谷皆蒙々タル霞気ニテ鎮□□ニ至リ晴レス　故ニ草稲ハ可成出来シモ成熟セズ、米銭ニ御労リアリ飢者ノ為メニ葛根、蕨根・ムシヲ・トコロ藁餅其外種々御仕様仰出格別死者ナキモ、膨病（腹のふくれる病気）ニ罹ルモノ甚ダ多シ、米壱升百三文塩壱升四拾文造酒停止、十一月銀札通用国中銀札千貫目拾　年賦ニテ貸附』
（「**絲原家古文書**」）天明7未正月、下郡次郎兵ヱ（安部・稲田土居）与頭又右ヱ門（馬庭・馬馳花屋）仝祐右ヱ門（長瀬・三沢塗屋）仝彦右ヱ門（村尾・馬馳竹ノ倉）から、郡奉行荒井助市へ次の文書を出している。
天明3～4年来の凶作は、出雲始めての飢饉で、天候不良の上温度低く、仁多郡の如き山間地方は殊に被害がおびただしい。
互助により救済するも日に日に増加する飢民は如何ともできず、6～7年の頃米価は暴騰し、金壱両につき米一斗八升の割に達した。郡内の極貧者餓死に瀕するもの男女3698人（すでに男2人女3人死亡）を書き出し藩より救助あらんことを（大意）と。
藩庁に於て財政困難であるが救助米を下附して来た。
米190俵2斗2升6合5勺
3,698人の3月1日より29日迄日数29日分
この3月の29日分のほか正月1日より30日迄の飢扶持も願い出て下附されている。
こうした一方一方、郡氏に対してきびしく殿合書を以て節約を訓諭している。その要点は日常生活衣食住全般はもとより、冠婚葬祭万般にわたってこと細かく定めている。
衣類では布地はもとより袖裏のこと、普請、仁義のこと、婚礼・葬儀・法事・祭も一汁一菜のこと、祭には親類も呼ばぬことまである。農作業の蓑笠はだめで竹皮笠とあり、足袋も禁止、色あいについても制限があった。

（1頁5段より）

朝吉の弟子のうち腕の良かったのは、千田六太郎・松浦茂五郎・安部丑太郎・恩田金次郎・三宅亮兵衛・糸賀久兵衛・岡田儀兵衛・小田原猪蔵らで、これらもそれぞれ弟子を育てて、雲州そろばんを地場産業へと築きあげて行ったのである。
こうした業績の花咲くなかで朝吉は、明治21年11月20日惜しくも48才の盛りで生涯を閉じた。

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 228 号
（4 月 号）
1994. 4. 2
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

近世（江戸時代）の三大飢饉
享保・天明・天保の餓死年（下）
―天明の全国そして奥出雲―

天保の飢饉

天保4年（1833）から同7年にかけての全国的飢饉をいう。前後数年をふくめて「7年飢渇（けかち）」ともよばれ、享保の飢饉・天明の飢饉とならぶ近世の大飢饉であった。天保初年より天候不順が続いたが、833年春から夏にかけ、四国を除く各地が冷害にみまわれた。このため東北・北関東地方で極端な不作となり大飢饉となった。同4年、奥羽地方は6月に大洪水、8月に冷害に見舞われ、山菜でしのぎ犬猫まで食する飢饉に陥った。関東にも大風雨があり、全国各地とも平年の三分ないし七分作で米価騰貴し、各地に餓死や捨子、行倒れが出て、騒動が起った。

1834年と35年の夏は、比較的天候に恵まれたが、餓死者と病人による労働力減少などで、生産が回復しなかったところに、つづく同5年、6年も不作で米価は高騰し、そこへ追打ちをかけるように同7年には全国的な凶作となった。天候不順・冷害・再三にわたる暴風雨などのため、同年の作柄は全国平均四分作、うち古米食込高を差し引けば三分作なみという状況で、翌8年にかけて大飢饉の様相をみせるに至った。たとえば奥州仙台藩領では農民の離散餓死や田畑の荒亡はなはだしく、死者は数万にのぼったとみられ、江戸では諸物価が高騰し、農村よりの流入者や行倒れが止まず、その惨状は天明の時にも劣らなかったと伝えている。ただ、さきの経験をふまえた領主側の対応によって、被害を若干くいとめられることができたのはせめてもの幸いであった。すなわち幕府は、同4年江戸の救民賑給を行い9月と11月に白米5升ないし3升を支給し、同7年には7月より9月の間に白米6千5百余石、銭10万9千余貫を延べ35万人、1人当り男5合、女3合の割合で10日分ずつ給与し、第二次の救恤では同年11月より翌8年4月の間に白米1万5千余石を延べ41万人に給与、また同年3月および5月に各2万俵ずつを町々に給付した。さらに神田佐久間町・花房町・柳原土手などに21カ所の御救小屋を設けて、延べ5千8百余人を収容し、翌8年には品川・板橋・千住・内藤新宿などの府外にも小屋を建てて行倒れの防止に努めた。このほか酒造制限、小売値引下令、囲米の売却、廻米策、隠米禁止などの政策をとったが、諸藩がそれぞれ飯米の確保を計ったため、江戸・大坂への廻米が激減し、諸政策は十分な効果をあげえなかった。大坂においては、町々の窮民を調査して川崎・将棋島の囲米を賑給し、富商たちも救恤したが、不十分で窮民を救うには足りなかったので、こうした事態と町奉行の無策を憤慨した大塩平八郎の乱をひき起すこととなった。京都では西陣の困窮者に対する町奉行所からの1戸当り米3升・銭3百文の給付のほか、心学講舎の長期にわたる施行などがあった。先の天明の飢饉以後、各藩や郷村では郷倉などを設けて備荒貯穀に努めてきていた。たとえば水戸藩では天保4年の救恤の後もなお貯穀があり、同7年の飢饉では乞食・流浪者にまで賑給している。しかし奥羽地方をはじめ各地の備荒策には限度があって人々を飢餓に追やり、この飢饉での全国の死者は疫病死をふくめ20万から30万人に及ぶと推定される。

米価が暴騰した。しかも、都市で食糧品以外の購買力が減退したので、特産物生産地などでは、米価暴騰と生産減という二重の不況となり、人々を苦境に陥れた。このため、各地の都市と農村で打毀が続発した。とくに甲斐（甲州一揆）や三河（加茂一揆）では大騒動に発展し、「世直し」を求めるに至ったので、武士の中からも幕藩の政策を批判する者が出た。先の大塩平八郎がそれで、またこの飢饉を契機とする一揆や打ちこわしは、大塩味方を称した能勢一揆や生田万の乱など、奥羽・中部・畿内・中国の各地方に続発し、幕藩体制の深刻な行き詰まりを露呈した。

松江藩では、奥出雲では

天保3年1832 11月12日の洪水で



天保の飢饉
施行小屋の炊き出し（「天保宝伝」より）
瓦版「大飯炊きのたきやう」

（次頁の絵とともに「国史大辞典」より転載）

近世の三大飢饉（下）・明見禅師（上）・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

2万7521石の損害減収。**全4年**は気候不順で稔らず8万6023石余の減収。**全6年**6月には洪水、のち秋まで甚だ雨多く洪水、9万9137石余の減収。**全7年**夏は大雨と洪水、平地の出水2丈3尺、山崩れ7005カ所、圧死者男女4人。減収13万8636石余。米価1升250銭に、貯える白米を放出し、群臣の禄を減じ、米に代えて金支給する。

全8年2月22日の大阪の大塩平八郎の乱にあたっては、大阪の松江藩邸の留守居役大野豊時が、兵を率いて馳せ、糧食及町奉行第の後を守り翌日還る。3月平八郎父子は誅に伏した。6月3日安来町の大火で279戸が焼失。12月松江白潟灘町から天神町、寺町へ751戸、寺社16、土庫29を焼く。八束郡揖屋村も火災178戸を焼失する。

全11年三刀屋町大火で145戸と倉3棟を焼失。4年後の**弘化元年**1844には意東村144戸蔵10戸焼失。その後毎年各地の村々で100～200戸単位の火災があり、洪水も多かった。18年後三刀屋町では282戸・倉139・寺5を焼いた。

仁多郡の詳細は不明であるが、**天保2年**は昨年の水害のため玄米1俵が5割の値上りで銭3貫240文となった。そこで15年前の文化13年に下郡作兵衛（大谷・高口）の提案で郡備銭が貯えてあったが、それをもって美保関から、奥州の秋田米を買って、前年の水害による困窮者を救済し喜ばれた。**全4年**も不作で7449石9斗1升2合であった。（宝暦末年が1万7500石余であるから半作以下となる）そこで造酒用米は⅓に減ぜられた。**全6年**6月9日から大雨4～5日及び増水潰乱殊の外で、下流の町は水退かず損害甚だ大きく、郡内で玄米1俵3貫720文、里郡では7貫620文となった。**全7年**にも大豆1俵3貫800文、梅雨は旧6月初旬まで続き、棉の大不作で国中で50本ばかりという。凶年で稔り高9041石、畑物は1分5原作で、現米6貫文、大豆5～7貫文、小豆7～12貫文と値上りし、酒米は2歩に減ぜられた。翌秋までに至るまでの食糧が不足であるから、調査がはじまり、1人に付1合ずつと定めて厳重な調査が行われ、足らざるところは、種々の菜や草木の葉を食うようにした。殿様より2万貫・若様駒次郎様より6,000貫下され難渋者に配布された。

全8年には前年より飢餓のため粗食した者は腫病を患い難渋したが、凶年のため治療もできず死ぬるものが多かった。傷寒病（急性熱病か）が大流行し、飢饉のため衰弱している時で、死者が多く、諸国でもその数知らずと言う。玄米3貫680文、大豆4貫文・小豆5貫500文、蕎麦2貫800文。

全9年、郡牢は横田町から三成の矢谷村へ移転された。この後天候順調になり収穫も回復していった。物価をみると

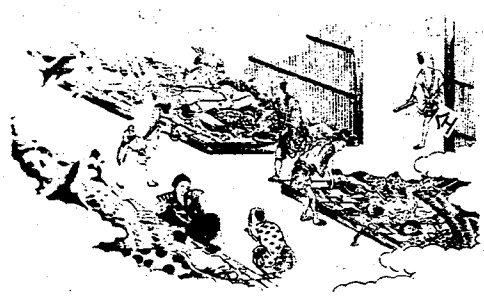
	松江	上松（仝）
米	10年 2.貫800文	12年 3.120
米	3. 200	3.890
江豆	5. 000	
豆	3. 600	3.360
麦	3. 600	3.360
餅	1. 800	

12年は「地方金融よろしい」とあるが、**13年**には商売六ケ敷、草鞋などでも自由販売することが禁じられたとある。





御救小屋に収容された罹災者（「宝辺峯山「荒蔵流民救護図」より）



仁多郡にかゝわりある宗教人⑧

明見禅師（上）

―曹洞宗総持寺派の先駆者たち―

当誌に宗教人として掲載した人々は、勝平大喜（12号）・雲昭律師（48）快円大門閣梨（53 58 63）、岡崎喜一郎（109）、安国寺恵瓊（124）、善徳寺僧三代（140）、夢巌祖応（191）。

平安仏教

大陸文化の吸収・消化に努力して来た日本では、9世紀には最澄・空海は同時に入唐し、最澄は天台宗を、空海は真言密教を学んで帰国し真言宗を開いた。のち天台宗も密教の色彩を濃くし、鎮護国家と現世利益の秘密修法を、国家的・政治的要請によって修し盛行したが、10世紀ころからは、貴族の個人的要請によって、加持祈祷を伴い貴族の日常生活の中へ入っていくようになる。一方それらより以前に出た行基によって広められた民衆仏教は、地方へと浸透し、地方での造寺、造仏は一段と盛

んになっていった。そして在来の神の観念も変化して、神に人格的な性格が現われ、祖先神として歴史上の人物を祀ることもみられるようになった（菅原道真など）。そして神仏習合（神と仏の信仰を融合する）も次第に深まって行った。これらの仏教の基本は末法（仏の教えが信じられず守られず、言葉としての教えのみが残る）の世における往生のあり方であって、加持祈祷に傾いていった。

鎌倉教仏

こうした貴族の考える浄土教を批判した法然（源空）は、往生浄土の道は、人々の救済を誓った弥陀の本願を信じ、ただ念仏を唱えることだと説き、時戒（いましめを固く守る）や作善（写経や僧に施し、仏像・堂塔の造営）を無用とし、ひたすら念仏にたよる浄土宗を開いた。その弟子親鸞は徹底した信の立場にたち、行（すべての善行）や戒律（仏の定めた邪非を防止する規律）を否定し、弥陀の本願は罪深い悪人の救済にあり、仏の他力を信ずれば、悪人も往生できるという悪人正機説を唱えた（『歎異抄』はその要約）。これが浄土真宗である。一方浄土宗から分れた一遍は時宗を開いて、諸行を遊行し、踊念仏によって布教し、神道とも結んだ。これらの浄土宗、浄土真宗、時宗の念仏の教えに対して、法華経の題目を唱えて往生することを主張し、法華（日蓮）宗を開いたのが日蓮である。こうして仏教は一般民衆の間に普及しはじめた。

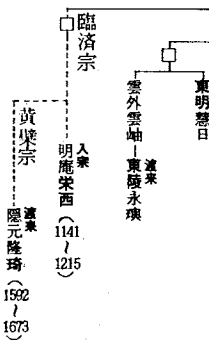
禅宗

これに対し中国から禅宗が伝った。鎌倉前期に中国から茶をはじめて日本に持ち帰った栄西は、宋から臨済禅を伝え、京都・鎌倉に寺を建立し、幕府上層武士の信仰を集め、宗・元の禅宗の渡来が続いた。栄西の弟子道元は、師と異なる道を歩んで渡宋し、曹洞禅を伝え、権勢を退け、坐禅によって自力で悟りを開くことを勧めた。そして地方の山中に、日本ではじめて僧堂を設けて本格的修学者の育成にあたった。

禅宗のはじまりは、6世紀の初め、インド僧の達磨（ボーディ・ダルマ）が開いたもので、唐より宗初（8～10世紀末）にかけて、中国文明の再編とともに、民族自らの宗教として独自の教義と歴史をつくり、鎌倉時代以後、日本にきて結実した。経論の学問によらず、坐禅と問答によって直接に仏陀の心に目覚める「見性悟道」を説く。

近世中国の仏教はみな禅宗を名のるが、日本では曹洞・臨済・黄檗の三派をいう。

仏陀は迦葉に正法眼蔵（仏教の精粋）を伝えたという。それから28代目が達磨（面壁八年は著名）で、達磨は中国へきて初祖となり6代目が慧能（636～713）である。広東省生れで眼に一丁字もなかったが、労働と参禅で正法眼蔵を得た。日常の工夫と創意を求める。自性の見覚めを坐していった。即ち真理はわれわれの言語、文字による表現を超えているとし（不立文字）、



柴栗句会三月抄

虚空に繰る凧糸陣を広げゆく　浅野としお
田に畦に雪おき忘れ二月逃ぐ　糸原古志
些かの褪せを兆せり春障子　岡田踩花
春近し待合室に春膨れて　小川月舟
退院や匂い失せにし瓶の梅　恩田和美
冬晴れや天の深さの飛行雲　加納信子
遠き日の雛箱出して娘等想う　楠房子
廃校の運命や空し春の雨　高木白虹
あがきつつ春はそこまで来ては引き　中澤美紀子
雛の間へ片言幼に案内さる　新出谷一華
春運ぶ風の音にも声のあり　錦織富江
孫住める町に春風道づれに　峯石美代子
啓蟄や孫のはずみし笑いごゑ　渡部夕峰

斐の上川柳三月号

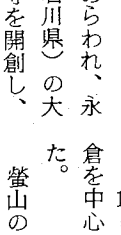
春おぼろ心の中で花づくり　真綿よし子
米不足マスコミどうも騒ぎすぎ　藤原のぼる
孫生まれわが家未来に夢を呼び　森山悠子
残雪のかい間に見える春の音　礒島恵子
声少しおとし電話の内緒ごと　藤原千代子
日曜は猫も揃ってお茶の席　足立玉恵
齢なんだネックレスなど邪魔になる　渡部ミツコ
使い捨て美徳がゴミに泣かされる　若槻白馬
タイ米が売れる頃には秋となり　藤原英生
晩酌を一杯ついでは返し待ち　中林もりえ
炬燵番長々したと外眺め　安部春恵
畑打ち飛び出た蛙そっとのけ　松浦久寿子
殿様と言ってくれるなからかうな　児玉哲呂
あれだけの演技やっぱり金メダル　松浦亜以
嬉しさもあたり見廻し遠慮がち　田中有樹絵
本気かと聞けば笑って酒を注ぐ　松田牛歩
大雪は豊作の証信じたい　安部正子
買い渋る財布孫には口が開き　田中芳春

訂正　3頁5段3行天明

師から弟子へ直接に心で心を伝える（以心伝心）といわれて、その系譜が重んぜられた。慧能の弟子の5～6代あとから曹洞宗と臨済宗が生まれた。

曹洞宗

鎌倉時代の初期、道元（1200～1259）は24才で入宋し、天童のもとで開悟し28才で帰国建仁寺に入り、34才で山城国宇治の聖宝林寺を建立し、日本最初の僧堂を開いて本格的修行者の育成にあたったが、名声の高まりは旧仏教側から圧迫も加わり、1244年越前国（福井県）の領主波多野義重の招きでこゝに移り、**永平寺**を開創し、入滅まで10年間正法眼蔵ほかの著作と、弟子の養成に専念した。優れた人材も集まり第4代目螢山（1268～1325）があらわれ、永平寺から加賀国（石川県）の大乗寺ほかと次々と寺を開創し、能登で開いた**総持寺**では優れた人材を多く輩出し、曹洞宗が全国的に普及する基盤が確立した。



特に民衆の要請に応えて呪術的要素が加えられると大いに隆盛をみた。道元を高祖、螢山を太祖とする一仏両祖の信仰を中心として、永平寺と能登から後世神奈川の鶴見に移った総持寺を両大本山とする一大宗団に発展した。

系譜にみえる東明は1309年に東陵は1351年に中国から来日し、鎌倉を中心に禅風の挙揚に努力した。

螢山のもとには明峯・峨山の二哲が出て、明峯は加賀の大乗寺を螢山から継承し、峨山は同じく螢山が開いた能登の総持寺を継いで2世となった。峨山の下には25哲が育ち、曹洞宗は全国的に武将領主の間にも伸張した。峨山の弟子の無外・通幻・大源・大徹などは傑出していた。

通幻寂霊（1322元享2～1391明徳2）は通幻に師事する）

頼之は（1329～1392）将軍足利氏の一族で、一族で8か国を世襲し、室町幕府の管領（今日の首相級）として将軍義満の信任も得ていた。明徳の乱には一族2,000人を率いて功をあげ、軍事と幕政に重きをなした。また夢窓疎石に師事し禅に深く傾き、数人の禅僧とも親交があり、創建5か寺、再興数が寺に及んだ。さらに和歌・連歌にも秀れ、和歌は勅撰集に13首入られ、漢詩文にも通じていた。子孫に応仁の乱の東軍の総師細川勝元、江戸初期の細川幽斎へと続く。

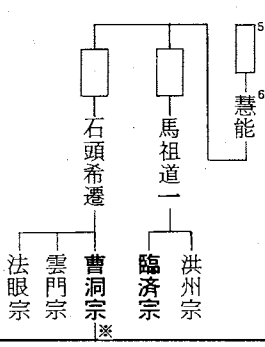
（細川首相へと）

通幻は間もなく加賀国の聖興寺の開山となったが、法弟にゆずり、1382（永徳2）年から1388年まで総持寺に再任し、後円融上皇（北朝）の親任をうけた。1386（至徳3）年（65才）越前の龍泉寺を再興し開山となった。（この寺は福井県では最古の飛鳥時代創建の寺であった）こゝでは領主本多家の知遇をうけ、弟子10哲も得た。のち加賀の聖興寺など2か寺の開山となったが、1388年（67才）には3度総持寺に招かれ、3年後（明徳2）こゝで70才の生涯を終えた。

系譜について

(註)入宗—日本人で中国の宋へ留学し帰った者
渡来—中国からわが国へ渡来し永住した者

中国禅宗系譜



砂金こぼるる如く

さらさらと砂金のこぼるる如くにて外灯に光る如月の雪　永井弥生
人は苦の器と思へどこの春の明るきさへもいたみにつづく　仝
鳥上の鄙に集へる老どちの編める〝そよ風〟にこころゆたけし　岡田時子
病む友も逝きたる友も混りゐて夢の同窓会果てることなし　佐藤喜代子
復田を決めて耕す峡の田に息子は肥料を大振りに撒く　仝人
挿まれし広告びらの部厚きや今朝配らるる新聞の音　常盤はるまさ
昨夜降りし雪深ければ登校の児童の列の頭のみ見ゆ　野村節子
早春の雲うつして澄める一碧湖晶子の歌碑を湖畔にみて佇つ（伊東にて）　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（5月より　01400—8—601）

奥出雲
題字　糸原風亭書
第 229 号
（5 月 号）
1994. 5. 7
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

仁多郡にかゝわりある宗教人⑧

明見禅師（下）

——亀嵩・総光寺開山

明見禅師

三沢郷地頭領主（4代為常・法名正喜が）の嫡男として三沢に生れる（この年楠木正行四条畷にて討死）。7才にして生母を失う。9才で武将として教養を積むため、能義郡雲樹寺の孤峯（臨済宗・のちの三光国師）に師事する。すでにこのころ世俗の寵栄はわが望むところにあらずと言っていた。13才で帰郷し横田庄の岩屋寺の妙音院の真諒について真言教を学び、やがて志を立てゝ本山高野山に登って書典を修めて下らなかった。

孤峯——1271年に入宋して修業し帰朝。1322年52才で雲樹寺に入る。66才後醍醐天皇から神器北朝に移り室町幕府開かれる。明見が師事したのは孤峯85才の時である。このころより南朝衰退に向う。1361年91才で死去。

明見はたまたま母の忌日に帰郷すると、父のすゝめで古剣禅師に師事させられる。その学徳を敬慕し、仏門に志すが父の反対にあう。

1368（応安2）年22才の時、父の死により心を決して、秘かに郷里を立ち鎌倉に至り、円覚寺（宋から無学祖元を執権北条時宗が招いて、1282開山した臨済宗）に入山（この年通幻総持寺5世となる）、そこで大拙祖能（こゝで東明恵日・夢窓疎石らに参じて、元に渡って修業し帰国）に師事し、遂に出家する。

—やがて将軍義満の時代— 仕えること8年、この間通幻の弟子大徹・大源そして古剣に参禅し、'76年それらの師通幻を慕って、6年前に通幻が開いて住んでいた丹波国の永沢寺に入山した。時に明見30才、通幻55才であった。

—このころ山名師義歿し、足利義満室町の花の御所へ移る—

以来再び通幻が総持寺へゆくまで6年間、その後12年間の18年度（48才まで）修業する。この間38才の時伝衣の袈裟をうける。'91年通幻歿す。

—この年山名満幸の横田庄横領に端を発して明徳の乱起る。'92年南北朝合体、'93年満幸出雲で挙兵する—

'94年（応永元）48才の明見は郷里に帰る。三処郷塩原（現在地名あり）の明等（法名）の寄進で、郡村に総光寺を開山し、教えを弘める。（のち現在地に移転）—この年満幸、京極高詮に討たれる—

翌'95年49才で師通幻が開いた越前国竜泉寺の住職に迎えられ、その翌年近くの興前寺の開山となり領主の外護をうける。8年後の1404（応永11）年帰郷して、妙厳寺（現蔭涼寺）でしたため、明見から見貞への総光寺の住持職ならびに寺領田畑の譲状がある（総光寺文書）。

1406（応永13）年、60才の時能登国の総持寺に招かれる。

——のち鎌倉の鶴見に移され、永平寺とともに曹洞宗の二大本山となり今日に至る。明見の師通幻が三度迎えられて住職となっており、通幻の師峨山が2代で、初代は峨山の師宝山で開山である——

1410（応永17）年明見はこゝを辞して再び、丹波の永沢寺（師通幻が開山。明見18年修業の寺）に住職として入って、余生を送らんとした。

その年の5月下旬の一夜山が鳴り、谷にこだまし誦経の如く聞えたので、衆人が怪しんだ。この時明見は私も老いたそう長くないと言葉をもらしたという。

しばらくして不快をおぼえたが、5月末になるといつものように、身を浄め坐禅に入り、常の如くであったが、6月3日端坐したまゝ成仏した。年64才。入門以来43年。著名な弟子には、予厳・中的・通谷・明庵・天窓・節通・実菴・春庭・閑室の9人があった。

総光寺は見貞が継ぎ、実庵が

明見の修業の跡、順①～⑩

出雲
①雲樹寺（1355）
⑥総光寺（1394）
三沢郷出生（1347. 正平2）
②岩屋寺妙音院（1359）

丹波
⑤永沢寺（1376）
⑩　〃　（1410）歿（1410. 応永17）

越前
●永平寺
⑦竜泉寺（1395）
⑧興前寺（1396）

能登
⑨総持寺（1406）

鎌倉
④円覚寺（1368）

紀伊
③高野山

明見の修業の跡、順1～10

仁多郡にかゝわりある宗教人⑧明見禅師・歴史研究において・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

つぎ、春庭がついだ。春庭は三沢氏の横田庄での菩提寺晋叟寺の開山ともなった。

戦国時代の寺院の経済基盤

戦国時代に共通していたことは、争乱に伴う旧秩序の崩壊と、新勢力による新らしい秩序の構築という社会変革の土俵の上にあらゆるものが置かれたということであろう。これは寺院についても例外ではなく、支配権力の分散とともに、経済基盤の主要なものである寺領の保持には、時代の担い手である、地方の戦国大名（毛利・尼子・山名など）や国人・在地領主層（三沢・三刀屋・山内など）の保証や安堵が必要となってきたのであった。彼等は、領国・領地支配のため宗教統制も積極的に行い、寺院も経済基盤の保持のためにも、彼等の政策を受け入れざるを得ないという時代でもあった。

戦国期の15～16世紀に彼等の外護を受け地方に、集中的に展開を果たした宗派に曹洞宗があった。本稿で述べた明見が、修業で移って行った寺は、記述しなかったが、それぞれその地の大名・領主の外護を受けていたのである。

総光寺は明見の生家である三沢氏の外護をうけているし、丹波の永沢寺は、戦国大名細川頼之が、明徳の乱後所領として得た丹波国ほかで外護して創建した5か寺の一つであり、細川氏（足利幕府の管領家、のちの勝元は応仁の乱の東軍の総師）はほかに数か寺の寺院の復興もしている。

越前の永平寺は、日本の曹洞宗の始祖道元が、領主波多野義重の外護（権力や財力で外から保護する）のもと、1844（寛元二）年に開山した寺院であり、戦国期には朝倉氏の外護をうけて所領を安堵されていた。さらに出世道場として地方から登山してくる寺院からの収入も貴重な財源であった。出世道場とは住持が勅宣によって定められる寺院で、その寺院の住持になることは大変な名誉であった。永平寺へは住持を勤め「前永平」の称号を得るため、多くの僧侶が登山したのである。（京都の大徳寺も同様で、住持の交替が多く、「前大徳」も多い）この出世のためには納入銭が必要であった。これをもって寺の修造費に充てていたのである。その額は一つの史料からみると、下野の宇都宮成綱が、菩提寺の成高寺の住持が永平寺に登山する際の祝い金として、一万疋（100貫文）の銭を助成している。

現在に換算すると約2,000万円の高額になる。相当の助成で、宇都宮氏の力を示す良い機会となっている。たとえ半額納入されたとしても、永平寺には莫大な収入となったと思われる。

こうしたことがいろいろな方法で行われたことを示す史料は、各地にあるという。

横田の晋叟寺の文書によれば、先祖代々の供養のため、祠堂修復の目的で寺院に喜捨した米（祠堂米）を地下人に貸し付けて利殖し、堂宇の建立をしている。勿論戦国時代には、三沢氏をはじめ武士の寺領の寄進も行われている。

坐　禅

明見が永沢寺で端坐中に成仏したというのは、坐禅を行っている間のことである。

坐禅は仏教の修行法・実践法の一つで、禅・定・禅定などともいい、結跏趺坐などによって精神統一をする。インド古来の瞑想法を仏教がとり入れ、特に中国で坐禅を最重視する禅宗が成立して唐・宋代に発展に発展した。そして二つの流派に分かれた。一つは看話禅で、公案（課題）をもってそれを工夫参究して、大悟に至るを期して坐禅するものであり、これに対し公案を用いずひたすら坐禅する黙照禅が生まれた。

もとは坐禅のみが禅の形態ではなく、行往坐臥の四威儀がみな禅の形態とみられ、行禅・住禅・坐禅・臥禅が考えられた。釈迦は四威儀すべてに禅を修業し、横臥した状態で涅槃に入った、すなわち禅に入ったまゝ釈迦は亡くなったことになる。「歩くも禅、坐るも禅、語るも黙するも動くも止まるも、からだはつねに安らか」といわれている。だがそのうち坐禅が代表的禅の修業とされた。一種の禅通力をもつ修行法と考えられた。

戦国時代つねに動乱戦乱の中に身を武将が、この坐禅に救いと力を求めて、競って禅僧を招いて寺院を創建し、寺領を寄進し安堵したのである。明見は坐禅のうちに成仏したところに、当時崇敬を集めたのでもあろう。

坐禅の形

インド出土の仏像でみると、左足が右ももの上に置かれ、その左足を押さえるようにして右足を重ねて組む形が一般である。

この足の組み方をして、手はいろいろの表現をしているが、禅定に入っているときの手印は、右手のひらの上に右手のひらを重ねる形である。すなわち手も足もいずれも**右で左を圧している**形である。これを結跏趺坐という。これに対し足の組み方に、左足を右ももの下に置き、その左足の上に右を重ねる形の、半跏趺坐もあるが、これも**右が左を圧する**形である。

ところが**中国禅**宗では、**左が右を圧する**というまったく逆の形で伝えられて本流となり、わが国に伝えられた。

もとはいろいろの坐法があったが、結跏趺坐がもっともすぐれ、仏像はほとんどこの坐相をしている。半跏趺坐は初学者の坐法で、結跏趺坐はもっとも優れた坐法とされている。

日本における坐禅

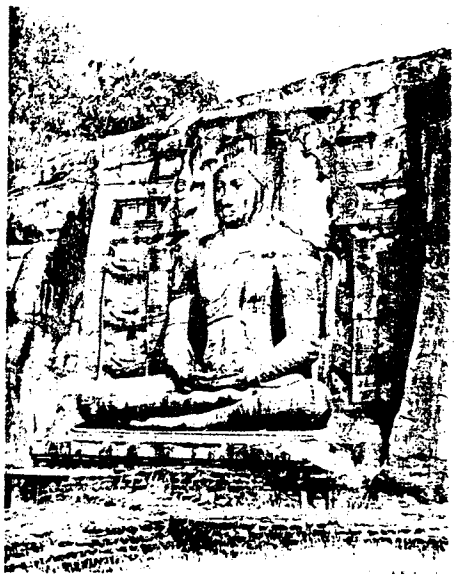
中国の成立した禅仏教を受容し、独自の展開を遂げたのが、日本の禅宗である。

中国では後漢のころすでに坐禅が説かれている。6世紀中葉には、南インドから中国に渡来した菩提達磨の禅宗が成立した。彼は嵩山少林寺で壁に向かって坐禅をし、「面壁九年」の伝説をつくった。俗にいう「だるまさん」のおこりである。

日本の禅宗はすでに述べた如く、中国禅宗の継承で、鎌倉時代に始まる。臨済宗は最初、栄西（茶をはじめて中国から日本に持ち帰る）が伝え、京都鎌倉の両五山派の禅が盛んとなり、発展し江戸時代に白隠が大成させた。この派は看話禅で、無字の公案をあれこれと参究し、対坐して見性や悟りを目的とする。

曹洞宗は道元が日本に持ち帰って伝え、坐禅の仕方を決め正式に実修した最初の人である。この派は黙照禅で、現成している実相をあるがままに諦観することで、無所得・無所悟である。





結跏趺坐（5世紀）←インド出土→ 半跏趺坐



▲一般人の参禅
曹洞宗は壁に面して
（臨済宗は対坐して）



理想的な坐禅像▶

いずれも足は跌坐に組み、手は定印を結ぶ。呼吸は腹式で臍下丹田を心掛け、心は解き放ち、浮んでくる想念を追いかけないようにする。坐禅中に睡魔に襲われたら警策で打ってもらう。

（写真に）夏は涼しく、冬は温かくし、静かな場所で行う。暁天夜坐というように、時は朝と夜が適する。

禅は念仏とともに中世の日本仏教運動の焦点であった。近代思想の中では、「善の研究」で知られる、京都大学名誉教授西田幾多郎や、英語にも通じた鈴木大拙などが再評価の道を開いた。戦時中には、戦国時代と同じく、坐禅が興隆した。

横田町出身で臨済宗国泰寺派管長であった勝平大喜は（本総12号参照）、英語のできる禅僧であったが、鈴木大拙はこの大喜のもとに参禅し、「禅の研究」（英文）で海外にも知られた。

昨年は勝平大喜の50年忌が行われた。

（横田史談会　高橋一郎）

（写真はいずれも国史大辞典から）

斐の上川柳四月号

米不足パンもうどんもあるじゃない　児玉哲呂
おやすみと言って仏間の灯り消す　松浦久寿子
掘り残す午蒡芽を出し掘れ掘れと　安部春恵
笹刈ってやさしい母さん子牛飼い　足立玉恵
転作地天気どうあれ米作ろう　安部正子
知っていて知らぬふりするタイミング　藤原のぼる
自民党野党になれば天ノ邪鬼　若槻白馬
火をつけて頭上げれば禁煙か　渡部ミツコ
石松の片目もうらら客招く　高木凡太
世の中は交替劇のまっさかり　田中有樹絵
コシヒカリどこかで出番待っている　松浦亜以
ゆっくりと歩けば風もやわらかい　真綿よし子
内孫は予想通りの花と出た　森山悠子

歴史研究について

『雲陽誌』

出雲の地誌で、松江藩主3代綱近が1705（宝永2）年に、年番頭役兼御書方御用の黒沢長頭、斎藤豊宣に命じて国中の社寺、古跡などを集録したもので、のち5代がこれをうけついで、1717（享保2）年に長頭の子長尚によって完成されたもので、私撰の父祖の学をもとにしてつくられた藩撰地誌である。

特に『出雲国風土記』の記載の神社は、古今を対照してあり、地誌は叙述が多彩である。内容は信頼性の高いものであるが、やはり粗密があって、慎重にとり扱う必要のあるものもある。

次へ総光寺についての記述をのせる。――線部分は古文書等によってさらに検討することが必要である。

こうしたことは、『雲陽軍実記』など中世のものにもあてはまって慎重を要する。中世については「尼子氏研寄会」によって、資料集がまとめられているので、それを中心に検討をすゝことが基本である。当地方のことについても同様である。

西湯野

摠光寺　禅宗瑞洞山と号す。本尊阿弥陀如来聖徳太子の作なり、本堂五間半に十一間、庫裏山門寮あり、応永元年三沢氏郡村に七堂伽藍を建立して百貫の地を寄附せられしが、中古亀嵩に城を移てより以来、摠光寺を斯処に曳て不見和尚を開山とし、三沢家代々の崇敬の霊場なり、毎年六月三日開山忌門中のこらす会式あり、不見和尚雲の袈裟とて会猶伝来せり、土人語侍は旱する時此袈裟をいたし雨をいのれば今もかならず雨降となん、

鎮守大神宮は三沢氏の勧請なり、寺宝として佐々木大膳大夫元光諸役停止の證文国主代々の御判あり。

開山は不見明見和尚であるが、時代にあやまりがある。七堂伽藍も疑わしい。



衒ふならねど　簸の上短歌会

風寒き畷に蓬を摘みし夜は脈打つごとくあかぎれ疼く　永井弥生
杣道にみづきの花房ゆるる中くぐもれる声の山鳩しきり　仝
他愛なきことのみ多き日記帳馬鈴薯植えぬと今宵はしるす　人
今日よりは素直に生きむ病みこやる夫との争ひひたすら避けて　佐藤喜代子
よき老いを衒ふならねど朝ごとに髭あたりる鏡に向きて　仝
南天の幹ひろがるを抱へつつビニール紐で括り結ひたり　常盤はるまさ
早春の伊豆高原に陽は満ちてこぶしの花の白きそよめき　人

柴栗句会四月抄

残り鴨懺悔の日々と声漏らす　浅野としお
初蝶や四温の波に誘はれて　糸原古志
花終れば心定めて農一筋へ　岡田踄花
春泥や孫の手を引き引き返す　小川月舟
ものの芽の青さが匂ふほのかなる　恩田和美
花見酒老は昔を語り合い　加納信子
着て脱いで三寒四温に戸惑いぬ　楠房子
はるばると人生旅なり春の夢　高木白虹
春うらら末っ娘旅立ち父寡黙　中澤美紀子
酔眼をふと見上げれば冴ゆる満月　新出谷一華
春眠を覚ます夜半の風の音　錦織富江
草むしる日々なり春陽まぶしくて　峯石美代子
裏川に春田の泥を落しをり　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400―8―601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 230 号
（6 月 号）
1994. 6. 4
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

松江藩に反射炉はなかった・衣がえの六月・天平の僧 行基(上)・俳句・川柳・短歌・横田33番札所めぐり 12

松江藩に反射炉はなかった

明治以降の奥出雲における銑生鑞の系譜 ⑩

資料『近世雑事』

本誌223・224号で「反射炉を築いて」大砲を鋳たと記述したが、これは『雑賀の今昔』の記載をそのまゝ採用したものであった。その後この件に関しての執筆者井上猖介氏・資料提供者野津隆氏・編集委員長の中沼郁氏にあい、いろいろ承り資料も拝見した。

資料は『近世雑事』で、これは『松江市誌』の執筆者野津精一郎（子息野津隆）が、松江藩家老大橋茂右衛門の弟黒川卓郎より受領せられたもので、明治末年に黒川によって記録せられたものという。「反射釜之事」の項に、「乃木口鋳物の辺に工場を建設し高き烟出しを構ひ、国産の鉄を此器械にて錬鉄と為し短筒の鉄砲を鋳る。……其頃村松幸左衛門と云える鉄砲鍛冶あり、曽て鉄の大砲を鋳て古志原に於て……あとは既述の通りとある。

この反射釜を『雑賀の今昔』では反射炉として記載されていることが判明した。

武蔵国（埼玉県）川口鋳物では

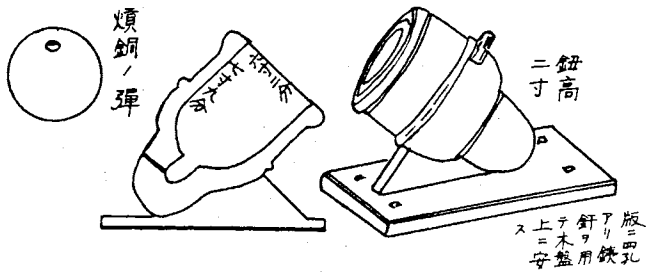
松江藩の鉄炮鍛冶で炮術師の榎並家のことについては、本誌224号に述べたが、榎並長三郎が川口に赴いて銃筒の製法を学んでいるので、念のため川口に於ける鋳造法を調べることゝし、埼玉県埋文センターの赤熊浩一氏の御配慮で、川口市史通史編上巻・近世資料編Ⅱなどをみると、反射炉はなく、こしき炉による再溶解で鋳造を行っている。記録によると、幕末にはかなりの藩から大砲の製造の注文が、川口の鋳物師に行われているが、その多くは発射されていないと誌されている。

本誌224号に榎並家が鋳造して18箇の大筒も大砲というべきものではなく臼砲であった。（図の如きもの『雑賀の今昔』から）

後猊駁筒と呼ばれるものは、架空の動物名をつけたもので、半鐘形の筒で砲身1尺（約30㌢）余、口径は大人の頭が入るくらい、台上に斜めに据えられ、玉を入れるとその半分くらいが露出して、すこぶる不格好なもので、蛙が坐っている格好に似ているところから、人々から糞蛙と仇名をつけられ、ギャー砲とも呼ばれたものであった。兵器ではなく、火薬の性能を試験するものであった。

松江藩鋳物場

224号に記載した鋳物場は東と西は家老の神谷と三谷の下屋敷があり、広さも780坪程度であって、既にみた反射炉を設けた藩の現場と比べてみると、極めて狭く、周囲は人家の密集地である。しかも動力用水車用の水路を設ける地形になく、必用な用水を引くことの出来る場所でもない。単なる鋳物場にすぎなかったと思われる。



第七図　試薬臼砲（糞蛙）西洋砲術便覧（榎並家所蔵）より

松江藩の記録から

明治初の藩の職制や『旧藩事蹟』を調べてみると、釜師方では、鍋釜・銅壺・鉄火鉢などを製作している。反射炉を設備したような職制等は一切ないし、長州征伐の折松江藩が所持した大砲などは舶来品を江戸から購入したものであったとある。したがって本誌224号の4頁に誌した、明治3年の松江藩の砲名などは、他藩に比べてかなり優れたものになっており、施条砲など優秀なものが入っていると指摘も頂いている。

松江藩主斉貴の知遇を得て、蘭学に没頭できた金森錦謙は、『鉄熕鋳鑑』の翻訳をして献上し、さらに『海陸両防秘策』を以って雲州での大砲鋳造を訴えたが、その前進はみたものゝ、反射炉設備までは進まなかったとみなければならないようである。

斉貴の次の藩主定安は、美作の津山藩から養子として入っているが、養父斉貴の意志を尊重し、錦謙の建言によって、他藩に先がけて軍艦を松江藩に購入しているが大砲鋳造までは進まなかったようである。定安が既述のように島根半島をはじめ日本海岸沿岸に設けた砲台も、その製品は、他藩製の青銅砲が主なものであったと考えられてくる。（資料提供に御協力頂いた方々に厚く御礼申上げます 高橋一郎）

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

天平の僧 行基（上）

――岩屋寺とのつながりは

開山行基説の根拠

天文年中（1532～1554）20年の歳月をかけて岩屋寺を復興したのは快円である。その記録は快円の書残した、『大永の古記録』と『快円日記』である。この快円日記の冒頭に（意訳して）

一、横田庄岩屋寺再建立の旦那は、関東最明殿（最明寺入道北条時頼）の未亡人六波羅の尼―岩屋堂殿妙音で、北条式部大夫時輔（北条時宗の異母兄）の母である。正和2年（1313）12月28日没する。

一、当山最初の建立開山者は行基菩薩である。再興したのは天台宗の末僧祐円法師で、号は源真阿闍梨という。この法師の壇那が妙音禅尼である。

と述べている。

北条時宗は13世紀末、文永・弘安の2度の元の来寇を防いだ、鎌倉幕府執権である。時輔はその異母兄（母は妙音禅尼）であるが、北条家内の相続争いから遠ざけられ、京都六波羅探題として京都にあった。そして出雲国内では横田庄のほか竹矢郷その他多くを所領としていた。のち争いは頂点に達し時輔は暗殺されたという。（諸説あり）

その後も横田庄は妙音禅尼の手に残ったと見えて、寄進の文書が少からずある。横田八幡宮を八川から現在地に移したのも妙音禅尼と伝えるから、馬場を中心とした中村が横田庄の中心地となり発展した基礎を築いたとも言える。記録によれば岩屋寺への寺宝の寄進も行われている。

快円が岩屋寺の開山を行基と快円日記に誌したのには、岩屋寺にあったおよそ200年前の次の文書に基づくと思われる。

康永元年（1342）に、岩屋寺院主祐円が、寺領保持に関連して訴えた文書案が9通ある。その中の1通の最初に

「右、抑当山岩屋寺者、行基菩薩草創、本尊十一面観音者（等身 肥後仏身）」

の貼紙がある。これが岩屋寺文書の中で唯一のそして最も古い

衣がえの六月

明治・大正そして昭和のごく初め生まれの者は、この6月1日ともなれば、黙っていても一斉に霜降りの夏服、そして帽子に白い覆いをしたものだ。それだけにこの日はシャレッ気のあるなしにかかわらず、服装身なりに無関心でおれず、なんとなく朝からそわそわ、うきうきしたことを憶えている。誰もだった。女学生のセーラー服もまっ白になって、どこもよけいにまぶしかった。その学生や生徒の夏服よりもっと印象的だったのは、警察官の服が上も下も白服に衣がえされることだった。そして平素は遠慮がちに見えるのに、白服になると何となく親しみ易くなったことも憶えている。

そして腰のサーベルがよけいにこっけいにも思えた記憶がある。

ほんとうに6月1日は一斉に職場でも夏服になり、白い帽子やカンカン帽、白い靴になった。どこに由来するだろうかと思っていたが、最近宮中秘話を集めた本を読んでいたらこんなことが眼に入った。

『源氏物語』の有名な冒頭のくだりに、「いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひける中に」とある。「更衣」とは女御の次に位する天皇の奥方の称で、この名はもとは天皇の更衣（ころもがえ）を司る女官の呼称だったものだろうといい、衣替えは古くは旧暦4月1日行われた行事で、宮中では服装だけではなく、室内装飾から几帳（屏障具の一つ。室内に立てて隔たりをするもの。台の上の横木に布のとばりを掛ける）の類に至るまで、いっさい夏物にとり替えられた。

明治維新になって宮中に参内することが多くなった、足軽出身の薩長藩を中心とする、新政府の役人が、これにならって初めたのが起りのようで、役所を中心に学校そして一般に拡がったともいうが、

一つ脱いで後に負ひぬ衣　　芭蕉

がえ

の句があるように、江戸時代以後宮中にならって拡がったともいわれる。

更衣は10月1日にも夏から冬へともう一度ある。

また出雲大社では6月1日に、涼殿祭が行われているという。

来るべき夏の暑気を無事息災に過せるようにとの願いからで、境内銅鳥居の裏側にある御手洗井から宮司以下神職が、本祖の東方一丁あまりの出雲森に参向して、ついで再び御手洗井に房る道筋に真菰（い草のむしろ）を敷き、立砂を盛りながらこの上を宮司が歩むという行事である。折から風かおるなかを神職の白装束とマコモのみどりが、いかにも夏来るの涼感を誘い出すという。



ものである。

行基を生んだ時代背景

百済の聖明王が、仏像と経論を大和朝廷にもたらしたのは、欽明大王の3年（538）であるという。だが民間に仏教をさらに早く伝え流布したのは、百済人をはじめとする渡来人であった。やがて中央の大和地方では、仏教受容をめぐって、崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏の抗争が起る。地方に於ては北九州とか瀬戸内海では、かなり早い時期から大陸文化の洗礼を受けているし、地方における仏教受容の担い手たちは、生活にある程度の余裕と教養をそなえた地方の豪族層や、村落の民間有力者たちであった。

7世紀後半から施行された律令制は、土地の公有を原則としたため開墾が進まなくなり、（私有できぬため意欲喪失）人口増加に見合って、口分田（満6才以上のすべての人民に割当てられる田。男子には二反＝23㌃、女子にはその⅔。その収穫の約3％を田租として徴収）を与える余地がなくなり、租庸調の負担から逃亡する者など、農民の窮乏は深刻化していった。

「下野国の国司が、管内の農民が凶作にあい、飢えて子を売らんとすると報告して来たが、天皇はゆるされなかった」（『日本書紀』天武天皇の5年（678）とある。養老7（723）年4月（元正、実力者長屋王、行基56才）には三世一身法を発令して、新たに溝池を造って開墾した者には、本人・子・孫の3世にわたって、土地の私有を認め、旧溝地を利用して開墾した者には本人一代に限って土地の占有を認めた。天平15（743）年（聖武、実力者橘諸兄、行基76才）にはついに永世私有を認める旨の発令をし、庶民の開墾による私有を促進ようとしたが、墾田が貴族や寺社に集中するばかりで、天平18（748）年、天平神護元（765）年には、それぞれ墾田の売買と、開墾の禁止を発令したのであるが、宝亀3（772）年―空海誕生2年前―には、再び墾田の私有を許可した。

こうした情勢の中で行基の布教を伴う社会事業活動が行われた。『続日本紀』―『日本書紀』の続篇史書―には、天下に周遊して路傍に井を堀り、各地の海や川のへりに船を置き、橋を造る。山城国の宇治橋は行基の創造するものとあって、民間に伝道し、土木技術をもって多くの池、溝、樋、堀、橋、道を造り修理した。周遊して教化すると化を慕いて従うもの千を以て数え、工事はすべて予想の如く成功したと伝える。

行基に追従し、あるいは共鳴した優婆塞・優婆夷（出家しない仏教信者の男と女）には、律令制の矛盾による班田農民の分解といわれる情勢の中で、在地において土地を農民から集めて新らしい地位を確保しようとする地方豪族や村落の有力者が多かった。三世一身法が出された背景には、こうした地方豪族と結んだ行基（56才当時。86才で没）の池溝開発を政府が認めざるを得なくなり、開墾地の私有を認めることになったものといわれる。

そして知方の豪族は―国造やその一族の郡司。例えば出雲国国造の出雲臣や一族の各郡郡司―旧来の神胤（国拓神の子孫）という誇りをもつ族長であったから、仏教受容も伝来の固有信仰（初期神道）と密着していっ

春まけて

簸の上短歌会

排気ガスにいたみし樹樹にも新しき芽ぶきの見えて靖国の苑　永井弥生
公園の欅の梢の向ふには故郷へつづく深き蒼空　〃　人
眼を病める夫君に従き添ひ上京の歌友の狭庭に山茶花淡く　野村節子
纏まらぬ一首の短歌に拘りて夫の寝息の傍へに灯す　〃　人
夫病みていく度目の冬と指折りて此の年の雪とみに重たし　佐藤喜代子
新築の家に馴染めぬ夫なのか帰る帰ると日毎言ひ出す　〃　人
春光りを吸ひつくすごと木蓮の蕾は空に威勢よくふくらむ　岡田時子
早春の逗子の砂丘歩み来て相模の海の落日をみる　若槻白馬
暮れてゆく若狭の海に漁火のゆらめく見れば旅愁こみあぐ　安部夕波

斐の上川柳五月号

好きな山足が老いてゝふと淋し　安部正子
連休も一日ぐらい雨がいい　田中有樹絵
犬と猿急に握手をする不思議　児玉哲呂
蕗のとう仲間とはなれまるくなる　松浦久寿子
どんな日か昨日と同じ陽が昇る　松田牛歩
有難さやっと判った日本米　若槻白馬
次々と芽の出る畑に老忘れ　安部春恵
山が呼び足の痛さはどこえやら　藤原千代子
夕食の膳をにぎわす木の芽たち　礒島恵子
ひとつしてひとつ忘れてゼロになる　松浦亜以
ペタルふむ初夏の風うけ若返り　渡部ミツコ
茶柱が立ったえんぎに今日たのし　足立玉恵
出るところあって活しに花が咲き　真綿よし子
おいそれと消えぬ悲しいわだかまり　藤原のぼる

前号訂正　1頁1段3行　正喜か）・3段11行　年間・3頁5段20行　本誌・

て、神仏習合へと進んでいった。

律令制度の下での僧尼令では、中国を範とした「僧尼は寺に寂居して教へを受け道を伝える」ことや、「僧徒は浮遊せしめることなかれ」という消極的なもので、積極的な自利利他の社会的宗教活動を否定したものであった。

ところが行基の宗教活動はそれを破るものであり、しかも社会情勢がそれを積極的に受けいれる情況になっていたのである。

行基の生い立ち

行基の生涯については、『大僧正舎利瓶記』を中心に研究されている。行基の死後に火葬されて50日近くたってから、弟子の一人であったであろう真成によって墓誌に刻まれたもので、墓所の中に埋められていた銅筒の中の銀瓶に納められてあったものである。現物は国立奈良博物館所蔵であるが、全文の写しが墓所のある奈良県生駒市の竹林寺にある。

行基は通称で法諱（存命中の正式の名）は法行。668（天智7）年、和泉国大鳥郡蜂田里で、父は高志才智、母は蜂田古爾比売の長子に生れた。父は百済から渡来した王仁の子孫と称し、母も百済系の渡来人の氏族の生れであった。

天武10（681）年14才で出家し、徳光禅師から具足戒（僧尼が守るべき戒で、修業によって徳が備った者に）を受けたという。

このころ飛鳥寺で学んでいた。こゝでは道昭が講義していた。その教えを徳光を経て継承したのである。

道昭　百済系の渡来人の子で629年河内国に生れ、25才で入唐する。唐において玄奘三蔵（三蔵法師）に師事した。玄奘はインドから大量の経典を唐にもたらし、都の長安（西安）で漢訳に従事していたのである。（『西遊記』はこの時の玄奘の旅行記『大唐西城記』をもとに書いたもの）

その師の最も得意とした法相宗を道昭は受けついだ。帰国後は天興寺に住む。僧たちはこぞって、その教えを乞うた。晩年には諸国を修行し、路傍に井戸を掘り、川に渡し船を設けたり、橋をかけたりした。文武天皇2年（698）―行基31才―には大僧都に任命され、仝4年に亡くなった。遺言によって火葬とした。わが国の火葬のはじめという。

柴栗句会五月抄

深呼吸薫風不思議な味をもつ　浅野としお
まだ残る木の芽の匂ひ指先に　糸原古志
児の幻影老鶯へ曳く杖重し　岡田蹊花
啓蟄や座卓の上の薄埃　小川月舟
蛙ころころ幼児ぽろぽろ飯こぼす　恩田和美
小手毬の花房重く活け終る　加納信子
春眠の寝覚めは昨日を忘れ居り　楠房子
ひとり逝く又ひとり逝く竹落葉（戦友の老い）　高木白虹
嫁ぐ娘に春さんさんとふりそそぎ　中澤美紀子
島に来て牡丹に一と日を酔いにけり　新出谷一華
田植田を右に左に万歩計　錦織富江
途中下車してつつじ咲く彩の中　峯石美代子
木々芽吹く城趾新たな息づかい　渡部夕峰

横田三十三番札所めぐり⑫

第16番　樋口　南枝寺境内

法の郷の
南に見ゆる蓮葉や
にごれる水もすみかなるらむ



会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、四一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400―8―601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 231 号
（7 月 号）
1994. 7. 2
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

天平の僧　行基（中）

——社会事業と寺院建設

行基の生い立ち（続）

698（文武2）年薬師寺が建立され、行基もこゝに移って、

法相宗——一切存在は識（心）の作り出した存在で、阿頼耶識以外に何物も存在しないと説く。阿頼耶識とは、人間存在の根底をなす意識の流れ。経験を蓄積して個性を形成し、またすべて、心的活動のよりどころとなる——や

菩薩道——さとりを求めて修業する人の道で、自利（自分の利益）・利他（自分を犠牲にして他人に利益を与えること）の行を成就して悟りに到る——の利他の行を修め、山林修行（世俗を離れ、山中で修行する）を開始した。

704（慶雲元）年には、生家を寺とし家原寺と号し、翌年には母を伴い平城右京の佐紀堂に行き、慶雲四年に生馬仙房に移り、孝養を尽しながら修行に励んだが、710（和銅3）年母を亡くした。彼は母の死後ますます粗末な服を着、苦食をなめ、和銅5年まで生馬仙房で修行を続けた。このような山林修行は、経典に基づく学問的思想深化より、禅定（心を静めて一つの対象に集中する宗教的瞑想）による悟りの境地を求めたものと思われるが、この間に彼は宗教者としての自覚を高め、菩薩行としての民間布教を志したのであろうといわれている。

行基が民間布教を始めた年次は正確には不明で、家原寺を設けたのは37才、母没後からとすれば43才で、決して若くはない。

いわば政僧や学問僧として認められなかった彼は、既成の官僧としてのコースを歩まず、民間布教による実践活動に人生の意義を見いたしたからであろうといわれている。

仏教実践活動の開始

行基が民間布教を始めてまもなく、717（養老元）年4月23日僧尼令違犯として禁止する詔が出された。

①官職を置いて、それに有能な人物を任ずるのは、愚民を教導するためである。近ごろ人民はほしいまゝに髪を切って、たやすく僧服を着るが、見かけの僧で、心によこしまな盗人の気持ちをかくしもつことによって、偽りが生まれ、悪るいことが起こる。

②すべて僧尼は静かに寺の中にいて、仏の教えを受け、仏の道を伝えるべきである。今小僧の行基とその弟子たちは、街の道路に乱れ出て、みだりに罪福を説き、徒党を組んで家々を訪ね、食物以外の物を迄い、人民をまどわい、僧侶も俗人も乱れいで、それぞれの階層の人民は生業をすてゝいる。釈迦の教えに違反し、他方法令を犯している。

③昨今僧尼はいともやすく病人の家に行って、偽って、人をまどわすようなあやしげな心で祈り、法にそむいてまじないの術を使い、吉凶を占い、老人や幼い者をおどしおびやかし、次第に見返りを求めるようになっている。

であって、直接行基を対象としているのは②である。しかし実際には③のようなことが少なくない、一般民衆はこうした呪術的な行為にひかれたと思われる。

行基の社会事業

行基の布教は多くの人々を引きつけ、時として千人程度の集団にもなった。中には小豪族や農民が課役を逃れるために、僧形となったり、出家するものもあったであろうが、乞食の際、余物を受けたのは、道場を建立したり、社会事業を行なう資力を集めるためと思われ、単なる乞食僧ではなかった。養老元年の詔は、ある程度実効があったのか、この年には道場の建立はなく、養老年間の道場の建立数は少ない。

養老七年の三世一身法（前号解説）による溝池田疇の開発の自由化に伴い、彼に追従し運動を支持した豪族、農民の力を結集して進められ、布施屋（道路沿いに設けられた、往来する人々を宿泊・接待する施設）・橋・直道・池・溝・樋・船息（港）・堀を造った。特に725（神亀2）年に道昭の建てた山崎橋を再建したことは、道昭の事業を継承する意図がうかがわれる。政府の治水開田政策と合致する社会事業は、聖武天皇の仏教信仰とあいまって、次第に公に認められるところとなり、731（元平3）年には、行基に従っていた61才以上の優婆塞と55才以上の優婆夷等の法の如く修業する者の入道を許されている。行基の布教及び社会事業が最盛期を迎えたのは天平2・3年（63 63才）で、道場建立の数も最も多い。（天平21年82才没）

社会事業については次頁の表の通りである。

三世一身法による行基の行動は、政府の方針に対立するものでなくなったので、かって「小僧」と指弾された行基が、この

天平の僧行基（中）・島根の名建築（上）・横田三十三番札所めぐり⑬・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

頃より「大徳」とよばれるに至り、のち大僧正に就任する萌芽の一つはこゝに端を発すると考えられるという。

道場「四十九院」の建立

これに対し行基が建立した道場は次の通りで、政治の手の届かなかった事業として、行基がなし得た偉業といわれている。年代順に数を揚げると

704（慶雲元）家原寺（和泉）
（全2〜4）3寺（和泉2・大和）
716（霊亀2）1寺（大和）
718（養老2〜5）3寺（大和・河内・右京）
724（神亀元〜4）6院（和泉5・尼院2・河内）
730（天平2）7院（摂津・尼寺3）
731（天平3）8院（河内2・摂津・尼院2・山城4・大和）
733（天平5）2院（河内・尼院1）
734（天平6）5院（和泉2・山城・尼院1・摂津2）
737（天平9）3院（大和2・尼院1）
740（天平12）5院（山城・尼院2）
744（天平16）5院（摂津・尼院1）

以上で49院である。

ほかに建立年不詳の寺が、河内と右京に1寺ずつ、749（勝宝元年）に和泉に大庭院を建立している。

国別にみると、

山城10　大和6
右京2
摂津15　河内7
和泉12

計52（内尼寺13）

であって、行基の出身地和泉国とその東の河内国と北の摂津国即ち今の大阪府が34寺を占めている。行基の活躍の舞台であったのである。

このうちかなりの数が具体的所在地が不明であるが、発掘調査でみつかるものも出ているが、行基の院は布施屋などに起源するものであることから、その堂宇に小規模なものであったことが想定できるとされている。そのことは、行基が各地に多くの拠点をつくりつつ行動しなければならなかった実情を物語っているといわれている。

なほ行基の土木事業の成功の陰には、同じ百済至の渡来人であった古墳築造技術者土師氏との関係が深かったことがある。土師氏は垂仁大王（天皇）の后の死に際し、殉死の制を廃し、埴輪（人物などの土製品）を陵墓に立てることを進言したという。伝統的な家業として喪葬に関することを司っていた。四つの支族があって、一つは桓武天皇の母高野新笠の家系があり、二つには垂仁大王陵古墳の築造者、三つにはさきの皇后や成務大王陵古墳のある、佐紀盾古墳群の築造に関与した者、四つには応仁大王陵古墳その他がある古市誉田古墳群の近くに居住した者があったといわれる。

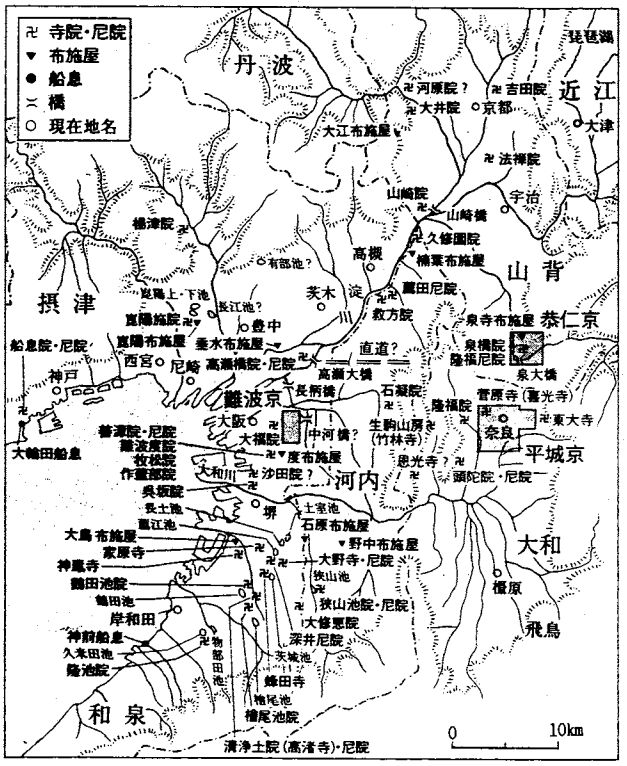


図46　行基ゆかりの土地

1. 架橋六所
泉大橋（山城国相楽郡泉里）
山崎橋（同国乙訓郡山崎郷）
高瀬大橋（摂津国嶋下郡高瀬里）
長柄
中河
堀江（以上、三所同国西成郡）
2. 直道一所（高瀬より生駒大山に登る道）
3. 池十五所
狭山池（河内国北郡狭山里）
土室池（和泉国大鳥郡土師郷）
長土池（同所）
鷹江池（同郡深井郷）
槽尾池（同郡和田郷）
茨城池（同郡蜂田郷）
鶴田池（同郡早部郷）
久米多池（泉南郡丹比郡里）
物部田池（同所）
崑陽上池
同下池
院前池
中布施屋池
長江地
有部池（以上、摂津国）
4. 溝七（六？）所
古林溝（河内国茨田郡古林里）
崑陽上溝（摂津国河辺郡山本里）
同下池溝（同所）
長江池溝（同国西成郡）
物部田池溝（和泉国泉南郡）
久米多池溝（同国）
5. 樋三所
高瀬堤樋（河内国茨田郡高瀬里）
韓室堤樋（同郡韓室里）
茨田堤樋（同郡茨田里）
6. 船息二所
大輪田船息（摂津国兎原郡宇治）
神前船息（和泉国日根郡近木郷）
7. 堀四所
比売鶴堀川（摂津国西成郡津守村）
白鷺鶴堀川（同郡津守里）
次田堀川（嶋下郡次田里）
大庭堀川（河内国茨田郡大庭里）
8. 布施屋九所
大江布施屋（山城国乙訓郡大江里）
泉寺布施屋（同国相楽郡高麗里）
崑陽布施屋（摂津国河辺郡崑陽里）
垂水布施屋（同国豊嶋郡垂水里）
度布施屋（同国西成郡津守里）
楠葉布施屋（河内国交野郡楠葉里）
石原布施屋（同国丹北郡在〈石？〉原里）
大鳥布施屋（和泉国大鳥郡大鳥里）
野中布施屋（同郡土師里）

「天平十三年記」による行基の事業
（地名表記は原文に従う）

左右の図表とも千田稔著「行基」中公新書より転載

行基の生誕地は、百舌鳥古墳群の近くに住んだ土師氏の一族とのつながりがあったようである。したがって土師氏の思想をつよく受けたのが行基であり、仏教のみならずその土木技術にも関心をもち、積極的にその技術を先にのべた社会事業に動員して利他の仏教思想を実現していったと考えられている。

（前号の岩屋寺古文書の中の「泥仏」とは泥像ともいゝ、塑像である。木で芯をつくり藁をまいて土をつけて形を整え、表面に土を塗ったもので、白鳳から天平の時代―652～792―に唐から伝って流行した仏像である）

島根の名建築
横田相愛教会
――仁多郡内（上）

建物の所有者、岡崎洋三方に次のような文書がある。

昭和57年12月20日

岡崎洋三殿

社団法人日本建築学会

会長　清家　清

拝啓　貴殿におかれましては、ますます御清栄のことと……

本会では皆様の御協力のもとに昭和49年から全国に残る明治・大正・昭和戦前の建物の所在調査を行い、このたび「日本近代建築総覧」をとりまとめました。全国13,000棟にのぼる建物リストが完成しました……上記リストではその中から、建築学的に見まして、貴重であると思われますもの約2,000棟をとりあげておりますが、

貴　旧救世軍会館　は下記の理由により、その一つに選ばせていただきました。つきましては、このことを御報告申し上げるとともに、今後とも大切に御使用下さいますよう御願い申上げます。……　敬具

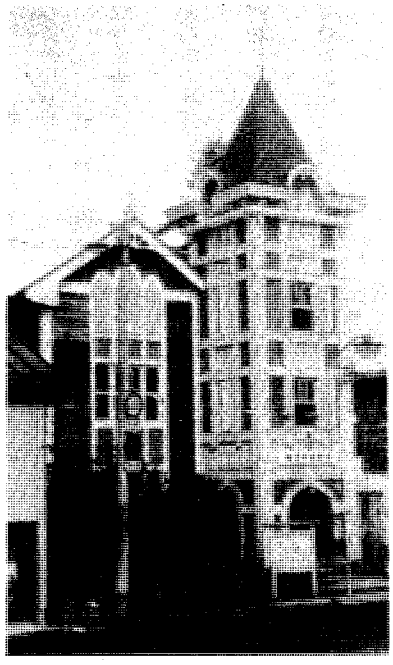
記（番号に○を付した項目が選定のおもな理由です）

①姿形がよい。
②技術史上大切である。
③すぐれた建築の設計による。
④特色ある景観を構成している。
⑤地域の歴史をたどる上で大切である。
⑥その時代の建築様式をよく示している。

7. その他

この建物は熱心なキリスト教信者であった岡崎喜一郎（本誌109号参照）―所有者岡崎洋三の父―が、71年前の1923（大正12）年私財を投じて救世軍横田小隊会館として建築したものである。

建物はヨーロッパの中世のゴチック教会に見える、尖塔アーチ（窓や門や橋の開口上部）をもつ擬石風の外装をした四階をもつ木造部分（入口半円アーチはローマに由来する）と、窓に尖頭アーチ三連を持つ木造2階のものである。当初は内部の礼拝堂正面にはステージがあり、2階の部屋も観覧席風にできていて、教会でありながら音楽会や演劇も楽しめる村の公民館的な教会であった。創設者のキリスト教を軸とする、農村社会建設の夢と人材を育てる意図を十分に果たしたものとなった。



十五年戦争に入った宗教事情と、所有者が創立からついだ局長である横田郵便局舎が手狭になったため、教会は旧教会・幼稚園・女学校々舎（いずれも岡崎の私立）に移して、郵便局舎となり、40余年後の'78（全53）年ふたたび教会に復した。郵便局はそれまでの教会のあった地に新築されて移った。

この建物の設計者は、現在も松江で設計事務所を主宰する成田光男の祖父である。設計者の成田光二郎はもと家業は来待石を加工する石工であったが、軍隊に入り大陸へ渡って建築をみてから、建築家を志したという。

帰国後清水組（現清水建築）に入社し、初代日本銀行松江支店（大正7年完工）などの現場を監督しながら勉強し、のち独立して建築家となった。光二郎の作品は今も松江を中心に数多く残っている。仁多郡内には、馬馳の「千原医院」がそれである（次回に紹介）。

施工者は横田町中村の馬馳の内田氏の祖父武之助である。内田は大正初年横田小学校の大きい木造の体操場や、横田の国竹の山上に設けられた森林測候所も建てた腕の良い大工であった。

木造の体操場は12間と8間の当時としては、近隣にない大きいものであったが、梁はすべて複雑な組手によって支えられていて、四周以外には柱を持たない構造で、評判をとったもので

前号訂正　1頁題　銑生産・4頁1段18行　弟子の一人

あり、測候所も間取りや事務室に洋風な構えをもつものであった。

設計も施工も実によくできていて、木造造りでありながら外部の壁にヒビ割れ一つないものであったが、'90(平成2)年今後の永年保存のために、外装を落して再装されたが、内部の木造部分も、材料もよく吟味し時間をかけて造ってあって、いたみ少くしっかりしたものであったという。

建築学会の便りの中の選定理由の3も、東京駅とか帝国ホテルの設計者でないが、成田の業績とそれが長く保存され使用されているところを見ると、山陰地方では該当すると思われる。さらにこの建物が地域の人々がひとしく誇りとしているものであり、この建物が宗教と教育活動の拠点として、65才以上のかかわりあった人を育て、地域文化に貢献があったことも、ひとしく認めるところで、**7.その他**も該当と思う。当時米千石を超える建物と評判され、心を耕して愛する郷土建設を目指されたこの会館は横田の誇りである。

胡蝶花に想ひを

簸の上短歌会

五ケ月のをさなきいのち巻きこみし新建材の真黒き煙　野村節子
五ケ月のいのち奪はれしみどり児は晩春の空の星と瞬く　〃
掌にのるほどなりし児の骨は胡蝶花咲く先祖のかたへに眠る　〃
兄あねにただ労はれと弟の五十回忌了へて別るるに言ふ　常盤はるまさ
朝毎のこのしばらくを佳しとして栗の若芽を眺めつつゐき　〃
雨けぶる山のなだりに著莪咲きて父の忌の日の巡り来にけり　永井弥生
日に増して欅のこずえは盛りあがり窓に五月の風吹きぬける　〃
アカシアの花を散らしてふる雨に春の名残りのささやきを聴く　安部夕波

柴栗句会六月抄

虹の根が絶へて夏野甦へる　浅野としお
風熄むと竹は一枚皮を脱ぐ　糸原古志
児還らず植田すくすく伸び育つ　岡田踈花
秘仏にも夏の涼しさとどきおり　小川月舟
芽木の朝少女髪梳く多感なる　恩田和美
持ち歌の先を越されて梅雨の宿　加納信子
通り過ぐ牛舎の匂う走り梅雨　楠房子
破れ傘ちさな諍いちさな悔い　高木白虹
嫁ぐ娘のほほえみまぶし父の日や　中澤美紀子
梅雨入りや一病持つ身の足重し　新出谷一華
梅雨寒や老の生活炬燵おく　錦織富江
蕗の皮はぐ指先に想いよせ　峯石美代子
明け易し農夫真顔で夢語る　渡部夕峰

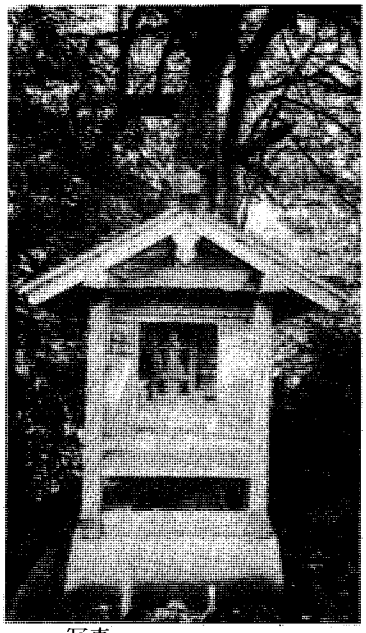
斐の上川柳六月号

跳び出した昔し昔しのラブレター　高木凡太
不景気の風でも花はぱっと咲き　松浦久寿子
竹の子は鬼が角出すように生え　児玉哲呂
夏蒔きの大豆まきつゝ秋思い　安部春恵
腹一ぱいごろりと横に老人会　児玉えみ
はかどらぬ仕事のわけは孫が負い　藤原千代子
好物が冷凍室で待っている　中林もりえ
声そろえ唱えるお経身の宝　田中有樹絵
足の裏見せた老母の腰曲り　若槻白馬
おいお前頼りは家内だけとなり　横山まこと
蛙鳴く予報は今夜おそくから　足立玉恵
遺句集にふれて在りし日懐かしむ　安部正子
雨がわり桶をかついで水をやり　藤原のぼる
伸び盛りスカート又もきつくなり　松浦亜以
改革をいいことにして予算無視　藤原英生

横田三十三番札所めぐり⑬

第17番　稲田・石塔山　峯松庵

峯の松千代のふるいを
とことはに　結び置きぬる
誓かしこし



（写真　横田史談会　佐世川徳雄）

— 会員頒布一部百五十五円／六九一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0140018601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所 —

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 232 号
（8 月 号）
1994. 8. 6
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

天平の僧 行基（下）

——大仏造立

行基の登用

行基の菩薩道（前号参照）の利他の行を修める行動は、その熱心さのあまり呪術的な行為も生じ、民衆の心を引きつけ、その布教には千人にも及ぶ集団の輪の出来ることが度々であったという。そしてその道場の建立も次々と進み、各種の社会事業も行われて、池・溝・樋・堀は水田耕作を便にし、年貢上納はもとより移動する民衆は、道・橋・港・改修の設置とともに、宿泊のできる布施屋に限りない利便を受けた。こうした実績は、はじめは民衆をまどわす小僧として、中央からは非難されたが、養老7年723の三世一身法の発布、その翌年の聖武天皇の即位した年から、行基の活動は聖武天皇の事業を行基が展開して行くかのようになり、元平9年732行基70才のころからは、天皇の評価は変化し、行基大徳の事はと言われるほどになり、このころ以後は政府が行基の後追いをしているほどになっていった。

天平10年代に入ると、聖武天皇は恭仁京（京都府加茂町の木津川北岸に計画した都で、次の宮のため停止する）、この東北に位置する紫香楽宮造営（近江国甲賀郡紫香楽村）国分寺の建立を行うが、政府は行基及び彼に従う優婆塞の持つ土木技術と労力を積極的に活用するようになった。

天平17年745、恭仁京の西の東河の加橋工事に、750人の優婆塞が召され、行基の徒も加わっており、工事完成後得度（剃髪して仏門に入ること）を許されていて、政府の施策も大きくかわり、行基も菩薩道の立場から協力していた。

天皇の大仏建立の発願

さる天平12年天皇は河内国の知識寺に詣で、盧舎那仏（毘盧舎那仏—輝きわたる、万物を照らす宇宙的存在としての仏。密教では大日如来のこと）を礼拝して、その立派さにひかれるとともに、この寺が寺名のように仏教を信ずる豪族や民衆が（これを知識という）、自発的に資財や労働力を提供し、その力を結集して造立した寺院や仏像であることに感動した。そして自分も民間知識を結集した仏像を造立したいとの心を抱いたのである。

天正15年天皇は紫香楽宮に行幸、こゝに伊賀寺を建立し、河内の知識寺の仏像を先例とする誓願を発した。こゝを大仏寿造の場所として選んだ理由は明らかでないが、こゝには百済からの渡来系氏族の甲可臣氏がおり、同じ百済からの渡来家氏族の文氏とかつながっていた。文氏の子孫が行基であることから、聖武天皇の意をうけて、甲可臣氏の後ろ楯をもって、大仏建立を意図したのであろうと考えられている。

天皇は造営の資財を民間知識によることと宣言し、一枝の草、一把の土を持ち、像を助け造ろうと願う者をも包含した、菩薩道の思想に基づくものであった。天皇はそれに期待をかけ、行基に大僧正の地位をも与えたのであろうと考えられている。

大仏建立の挫折

聖武天皇は治政に、仏教を利用し仏教の呪力により国家を鎮護しようとした側面も見逃せないが、諸記録を通してみると、民間知識を結集することによって菩薩道の実践をめざし、貴族から民衆までの仏教教化を意図したであろうと考えられるという。

菩薩道の思想を通して、天皇と行基は和していった。行基は特に中小豪族や民衆の知識の力を結集する面で実績を生かして協力した。

したがって前号の表をみるとこのころ道場の建設が一院もないのは、盧舎那大仏造立に精魂を傾けていたためであろうとされていて、それをしめす記録もあるという。

天皇は恭仁京の造営を天平15年12月26日に停め、翌年2月26日に難波に遷都した。4月13日に紫香楽宮の西北の山に火事が起きたが、大仏造立は続行され、11月13日には仏像の体骨の柱を立て、聖武天皇は親しくその縄を引いた。翌17年には紫香楽宮を新京とするまでに至ったが、4月11日に宮城の東の山に火事が起こり、聖武天皇は一時的にもせよ避難しようとした。このような状態で紫香楽宮を造営しつづけることは困難になり、官人や僧侶に諮問して都を平城に還した。

めまぐるしい遷都の背景には、当時朝廷の首班であった橘宿禰諸兄と、光明皇后と結びついた藤原朝臣仲麻呂の主導権争いが複雑にからみ合っていたと言われる。

伊賀寺の盧舎那大仏も放置され、平城京に新たに大仏を造立することになった。金鐘寺（金光明寺、今の東大寺）の大仏である。この間、行基は、天平16

天平の僧行基（下）・島根の名建築（中）・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

年に都が難波に移るとともに彼も摂津に出たらしく、難波京のある西成郡に新たに5箇所も道場を建立した。

甲賀寺造仏協力以来、聖武天皇と行基の間も親密さを増したらしいが、突然、彼は天平17年正月21日に、僧綱の最上位である大僧正に任命され、封戸を100戸施されている。この急な昇進は大唐学問僧正玄昉をトップとした仏教界に波紋を投げ、行基に反感を持つ僧もいたであろう。学問僧智光が嫉妬したという伝説はその一例であろうし、同年の11月2日に玄昉が左遷されたのも何らかの関係があったかもしれない。しかし、行基自身は『大僧正含利瓶記』に『然りといえども以て懐うところ在らず、勤苦いよいよ励む」とあり、大僧正任命もそれほど心に留めなかったらしい。

天武・持統（天武の皇后）と朝廷の集権の実はあがったに見えたが、諸豪族の蠢動は続いていた。大宰府に左遷されていた藤原広嗣は反乱を起こした。時の政治の得失を指摘し、権勢を誇っていた僧玄昉（唐に留学した僧で、聖武天皇の生母の看病をして治癒するや、急に声誉がたかまり、天皇一家の信仰を得、政治顧問として、国分寺・東大寺等の建立にも深くかゝわり、天平文化の開花につくした。その間専ら行基は民衆のための道場と社会事業に力を尽していた。やがて行基を認めこれを起用する勢力によって行基は大僧正として玄昉の上に任ぜられた。しかし行基は先に託したように、それも意にとめなかった。政治に登場し過ぎた玄昉は、平城還都后急速に、各方面で背を向けられ、筑紫に左遷された）と吉備真備（玄昉とともに入唐し学問を修めて帰朝した）こそが天地の災異の原因であると上表し、反旗をひるがえしたが、のち捕られて斬られた（藤原弘嗣の乱）。

以来天皇は平城京から恭仁京、紫香楽宮そして難波京、さらに平城京と宮都を転々とした。

「さまよえる都」であった。はじめに大仏建立を企図した紫香楽宮の地は、頻繁に山火事が起っている。計画に反対する一派の暗躍を想像することができ転々と都の変るのも、そうした暗闘のなせるところであろう。

今まではこれらのことについては東大寺大仏開眼にのみ目を注いで、このことについての検討はあまりされていない現状である。

新らしい大仏造立と行基

さまよえる都から平城京に還都して、三ケ月後に大和国添上郡で再開された。平城京の東、外京に接する土地、今の東大寺の地である。東大寺建立以前には金鐘寺という小寺があった。聖武天皇の夭逝した皇太子を弔うために建てられたもので、この地が選ばれたのも、①僧良弁（百済系の子孫、東大寺良弁杉の由来の主、聖武天皇から智徳兼備をもって崇教をうけ、金鐘寺住持に迎えられ、のち大仏鋳造の中心的役割をし、開眼供養をし、初代東大寺別当となる。仏教界秩序確立と、奈良時代の国家仏教、育成に努力、僧正となる）が、華厳経の研究をし、華厳世界の教主盧舎那大仏造立の地となる契機となった。②国分寺建立の詔がでると、金鐘寺が大和金光明寺となったこと。③大仏という巨大な像をつくるにふさわしい広がりの地形があったこと。④この地の東に行基が初期に建立した天地院のあったことなどが考えられるという。

六年前に東大寺大仏殿西南の発掘調査で建立当時の木簡や銅塊が出土した。その中に次のようなものがある。

「大原郡佐世郡司勝部□知麻呂□」の文字のある木簡である。

大原郡は出雲国で古くから銅の産地であった。郡司勝部某が大仏鋳造のための銅をこの地から運んだものである。（724年『出雲国風土記』にも大原郡郡司大領（主席）と郡司主帳（書記）に勝部臣がいる。また『続日本紀』の天平12年740年6月に「大原妥女勝部鳥女云々」―妥女は郡司の女が京へ出仕する）

勝部という姓をもつ集団は、渡来系の秦氏のもとにあったが、秦氏が銅などの金属加工の技術をもっていたことから、この勝部氏も関連の仕事に従事していたと解することもできるという。

この発掘調査でみつかった銅塊は、成分分析の結果では、山口県美禰郡美東町の長登銅山のものとされているが、出雲の銅も用いられていたのである。

これらの銅を用いて行われた鋳造の指揮をとったのは、国中公麻呂ほかの人物で、天智朝に渡来した百済系の工匠である。これらの技術者（大鋳師の称号与えられている）も行基と関係があったとみられる。

大仏鋳造と九州の宇佐八幡との関係もあることは記録に明らかで、宇佐八幡は近くの香春山という銅産地と関係深く、この社も神羅の国の神とされ、新羅系の渡来人がまつり、それも秦氏の一族で、銅とかゝわりがある。

このように新たな大仏造立にも行基は各方面にかゝわりをもったであろうが、すでに78才であり、実際の活動は弟子たちがその手足となって活動したと思われる。天平18～19年にかけては道場の建立も見られない。仝20年には右京の菅原寺で老身を養い。すでに病を得ていた行基は、天平21年2月2日の夜、右脇に臥し寂した。82才であった。

行基はすでに生前菩薩と呼ばれている。『続日本紀』の記述の中にも、「早くから都や地方を周遊して、多くの人を教化した。僧侶や俗人で教化を慕ってしたがう者は、ややもすれば千人に達することもあった。和尚の来ることを聞けば、巷に人が

（3頁下段へ）

島根の名建築

馬馳の千原医院

——仁多郡内（中）

大原郡大東町から主要地方道の樋の谷トンネルを抜け、佐白そして八代の町の横、馬馳の木次線出雲八代駅をさらに奥へ進むと、右手の鉄道踏切りのそばに至る。こゝを横切って小さい谷間を400米進むと右手のやゝ高いところに、千原医院と本宅がある。この病院の建物も名建築としての保存が要請されている。

大正13年1924から翌年にかけて建築完成したものである。前回紹介した横田相愛教会に続いて、同じく松江の成田光二郎の設計したもので、施工者は地元三所の石原藤太であった。

建物のファサード（外観）は白が基調で、神戸市内の北野町あたりの洋館を思わせるものである。窓の桟は直線的なデザインで、ベイ・ウインドー（張り出し窓）らしきものがうかがえる。ベイ・ウインドーは、19世紀の洋館に盛んに使われていた手法で、近代建築の中では、失われていく要素の一つであるという。そのベイ・ウインドーの内側が縁側になっているのが、日本的で面白く、しかも部屋を広く見せるという効果を十分発揮している。部屋の壁は、版画のようなクロス張りで時代を感じさせる。出入り口の扉の枠には、マツキントシュ（チャールズ・レニー・マツキントシュ＝19世紀のイギリスの建築家で、日本的なデザインを建築に使った）の、バラのデザインを思わせる飾りがあしらってある。



当初は外部の建具はすべて木製の白ペンキ塗であったが、最近古くなって、アルミサッシを用いて、建築当時のままに修理されている。

千原家は古くから代々が医者を業とし、幕末の秀斎（秀介）の子啓介（のち秀斎と号す）は、北西隣の日登村（現木次町）の横山家（代々医師・明治時代医師であり、漢学・漢詩にも全国的に著名な横山耐雪の家）の長男医師禎介の娘を妻として、子宝に恵まれた。

啓介（本誌24号で紹介）は、九州の大分の著名な広瀬淡窓のいなくなるほどに、争ってやってきて礼拝をした。それらの人々の器量にしたがって導き善に向わせた。またみずから弟子たちを率いて、橋をつくり、堤を築いた。その評判を聞いて多くの人がやってきて、労働を提供したので、またたくまに工事は完成した。人民は今に至るまでその恩恵を蒙っている。……弟子たちは継承して行基の教えを守り、今に至るまで住持している」とある。

地方から奈良に貢納のために、大仏建立のために出たものは、この様子をみるだけでなく、教えをうけ、施設の恩恵をうけ、工事の奉仕に加わったものが多く、それらが帰ってそれらを伝える。さらに僧はその教えとその業績を地方で伝え、奉仕したであろう。これが今日、全国の寺で行基開基と称せられるものが多い由来である。横田圧岩屋寺もその一つであったと思う。生前から菩薩と呼ばれ、菩薩といえば、行基菩薩と民衆が称したのは、民衆の援助と知識を結集し、社会事業を行い、知行合一を通じて信仰を植えつけたのであった。朝廷・貴族に近づき国家仏教を指向し造寺造仏へと進んだ空海（弘法大師）、最澄（伝教大師）と違った民衆の友、先達であったとされるのである。大仏も天皇の権力のみの造立でなく、中小豪族や民衆の参加を集めて造立されたところに、各国国分寺の総本山としての東大寺の今日までの歴史の原点があるという。「行基菩薩」菩薩とは修業する立派な人のことで、民衆の先達者として親しまれたからこう呼ばれた。菩薩と呼ばれた名僧はほかにない。こうした点を総合して、地方人に仰かれたのが、岩屋寺開基とされたのであろう。横田の土豪郡司が当日都に入って、眼のあたり敬仰したか、民衆も知っていたし、広い意味の弟子僧が当地に入っていたかであろうか。

（この連載は、井上光貞・千田稔・松本裕美・根本誠二ほかの著書や論文を参考にさせて頂いた。

横田史談会　高橋一郎

前号訂正　3頁2段20行　③→3・　全頁3段　109→110・号

感宣園塾に、横山禎介の弟恭介とともに学んだ。啓介の長男の春甫は明治十七年東京大学医学部を卒業している。一年先輩に津和野の森鷗外がいて、医師としても文学者としても著名である。その作品に「雁」がある。

「僕」と同宿の医学生岡田は、毎夕きまって散歩にでかけ、無縁坂に囲われている高利貸の妾と「窓ごし」に挨拶する間柄となる。だんだん自己にめざめてきたお玉は、救いを夢みて、岡田に思いを寄せるようになり、旦那が留守になるある夕べのこと、岡田を誘おうとして待ち設けている。それは岡田にとって、ドイツへ留学する前夜にあたっていた。彼は下宿の食事の都合から、偶然、「僕」と連れ立って最後の散歩にやってき、また不忍（しのばず）の池（上野）で投げた石で雁を殺してしまう。邪魔がはいって、むなしく岡田の通過を見守るお玉は、無言の恨みをこめて坂の中途に立ちつくすのであった。

この小説は、近代日本の女性のめざめと青春の挫折を扱った芸術的完成度の高い作品と、文芸作品史上の評価をうけている。

登場人物は、僕（鷗外）と主人公岡田とお玉が中心で、ほかにお玉の父親（爺いさん）と、高利貸の末造とその妻お常などであり、そして終りごろに、不忍の池で登場する同じ大学の医学生の石原である。柔術にもこり競漕にもこるが、ほかは医学研究一本の学生である。お玉が岡田と会わずじまいになる糸口となった男である。3人は石原の下宿でさきの雁を肴にして、夜の更けるまで過した。この中のモデルの一人が千原春甫であるという。春甫は当時明治天皇の侍医の候補者にもあがった人であった。弟で六男の芳は木次町錦織家に入り、東京大学を出て、のち島根県立松江病院々長や島根県医師会長を勤め、名医の名声を得ている。

春甫のあとは養子の寛（昭36 76才歿）が継ぎ、内科医で特に神経痛の名医として評判が高く、中国各県から診療をうけるものが多く、出張診療も名古屋方面に及んだ。こうした医家の伝統の中で、寛の求めに応じて、この建物が生まれたものである。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳七月号

政界の水と油がどう溶ける　若槻白馬
食べ頃はどうかメロンなでてみる　児玉えみ
豊作を夢見毎日田をながめ　安部正子
バラバラとめくって漫画だけを見る　児玉哲呂
生き方を変えて健康とりもどし　藤原のぼる
手作りの粽送ってばくらとし　松浦亜以
泣きに来て母の顔見て泣き笑い　高木凡太
宴会が初めて課長踊らせる　松浦久寿子
雑草に追われて今日も暮六ツ　安部春恵
深山蜘蛛ネットにかゝる梅雨の雨　足立玉恵
クーラーが家族みんなを呼びあわす　田中有樹絵
雑踏の中の緑に深呼吸　磯島恵子
この暑さいつまで続くうんざりし　真綿よし子
昨日まで犬猿の仲いま同志　藤原英生
大ジョッキ飲み乾しほっと今日も無事　渡部ミツコ
子を生んで女は強くなって行き　森山悠子

身辺あれこれ　簸の上短歌会

神なりと言へど権力に圧されてはアラハバキ　常盤はるまさ
神と言ふを思へる
汝の惹かれし万葉の論かさり気なく展げたる　仝
本に書き込み多し　人
ねもごろに案内する汝とそぞろ行くさくら八　仝
分の比叡の山を　人
家焼けて嬰子も逝かせしことのみがこころに　岡田時子
顕ちて涙あふれ来
嬰子のふた声泣きしが甦り庭の笹百合かすか　仝
揺れをり　人
二人三人と年毎に減りて今日も又同窓の友の　野村節子
葬りに会ふ　人
灯の点るわが家のありて夕ざりを猫車押し畑　仝
より戻る　人
風そよぐあかしやの丘の学舎よいま核問題に　永井弥生
ゆるる北朝鮮
友のゆく十万億土を照らしませ梅雨晴れの落　仝
日大きく紅し　人
みちのくに胡蝶花の花散る晩春の旅に訪ひに　安部夕波
し賢治のふるさと
人の世の哀しみ秘めて散りてゆく沙羅双樹の　仝
白き花片　人

柴栗句会七月抄

声の似る兄弟撃ち合う水鉄砲　浅野としお
一粒の愛一粒の恋さくらんぼ　糸原古志
大紫陽花萎れ頻りに雨を欲る　岡田踈花
渦巻いて花芯の赫く薔薇の花　小川月舟
熱帯夜受話器の向こうも熱帯夜　加納信子
窓に来て悲しい羽音鬼やんま　楠房子
空梅雨の日照りに喘ぎペタル踏む　高木白虹
炎天に物売りの声遠く近く　中澤美紀子
マネキンの粋に着こなす藍浴衣　新出谷一華
田や畑雨の待たれる梅雨の明け　錦織富江
蛍火に手をつなぎ行くパジャマかな　峯石美代子
香水の香と擦れ違ふ帰り道　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九二八　島根県仁多郡横田町二、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第 233 号
（9 月 号）
1994. 9. 2
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

横田庄と日野家（上）

――テレビ小説「花の乱」に因んで

はじめに

女の性が舞台裏でどのように、良きにつけ悪しきにつけ、男に影響を与えるか、それが歴史上の主役の男の場合どのようであったかを、織田信長、豊臣秀吉・秀頼、徳川家康・秀忠・家光・家綱・綱吉とたどって連載しているのが、朝日新聞の遠藤周作の「女」である。これらには長い時代多くの女が登場するが、NHKテレビの「花の乱」では、日野富子を中心とするものである。

1991年の同じテレビ小説「太平記」に因んで、14世紀末の明徳の乱を中心に、「太平記の時代と奥出雲」を連載した（193～202号）。1992年には同様なテレビ小説に因んで、「信長の時代の奥出雲」（202～212号）を連載し、15世紀初めから応仁の乱そして、信長の本能寺の自刃（16世紀1582年）までを終えている。

この二編でこの時代の横田庄の大きい動きは出つくしている。だが重複するが、若干の資料を得ているので、将軍義政の御台所富子の実家日野家と横田庄のかゝわり、そして明徳の乱、60年後の応仁の乱と当地方を綴り、横田庄の置かれた位置を明らかにし、後日詳述したい横田庄のきめ細かから史実の背景を眺めて置きたい。

日野家

官職も権大納言どまりの中級貴族でありながら(2頁註参照)、歴代足利将軍家に娘が嫁し、権勢と栄華を日野家にもたらしたような例は歴史上珍らしい。

日野家は藤原（中臣）鎌足の子藤原（北家）不比等の孫右大臣内麿（平安京の建都の中心的役割をつとめ、贈太政大臣従一位をうけた。その弟は冬嗣で功により左大臣となり、娘順子を仁明の皇妃に入内させ、藤原氏隆盛の基礎を築いた）を祖としその子参議真夏の孫家宗の時には、山城国宇治郡日野（現京都市伏見区）に法界寺を創建した。

その5世の孫資業は（11世紀半ば）そこに薬師堂を建立し、日野を家名とした。（現存し阿弥陀堂は当時のもの、薬師堂は重文。真言宗）

公家で家格は名家であるが、その後代々儒道・歌道をもって文章博士として仕えた、中級公卿の上位であった。

後醍醐天皇の討幕の企てが発覚して斬られた、日野資朝・俊基が一族にいたが、日野氏は北朝に仕える公卿の家であった。

権中納言が極官（最高）であったが、俊光から権大納言に、重光からは贈左大臣等になった。明治維新からは伯爵で、支族には裏松・烏丸・柳原・日野西ほか8氏がある。

日野家が頭角をあらわすのは南北朝時代に入って、賢俊という逸材があらわれてからである。

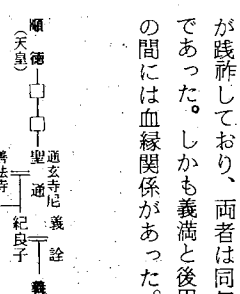
俊光の子で、歌人であった父に似て歌をよくし、『風雅和歌集』や、わが国で初の連歌撰集といわれる『菟玖波集』の作者として知られる人物である。1336（延元元・建武3）年1月、新田義貞の軍勢に敗れて西国へ逃れた足利尊氏のもとへ、持明院統の光厳院（北朝）の院宣を届けたのが、すでに出家して醍醐三宝院にいた賢俊であった。尊氏はこれで息を吹きかえした。以後両者の結びつきは堅くなり、護持大僧正、東寺長者等に任ぜられ、「将軍門跡」とあだ名された。尊氏を後楯として、宗教界に睨みをきかせ、政治にも介入した。（正平12 1357 59才没）

賢俊のあとを受けて日野家の人で勢力を得たのは、賢俊の兄資名の娘宣子である。後光厳院に仕え従一位に叙されて岡松一品と呼ばれた。（弘和2 1380 没）

足利将軍とその夫人

今谷明著『室町の王権―足利義満の王権簒奪計画』その他によって、その動きをたどって見る。

義満は数え9才で元服（1358生）、翌年には家督を継ぎ、11才で亡くなった父義詮のあとの征夷大将軍に任じられ、15才のとき御教書（三位以上の公家の命をその家司が奉じて出した文書）に花押を書く判始の儀を行い、独裁政治へと進んだ。永和のはじめごろ（1375）、18～19才になった義満は正室を娶った。日野宣子の兄時光の娘業子で、6才年上であったが、尊氏以来将軍家と親しい日野家と縁組し、宣子を通じて宮廷に近づきたいという意図から出たものであった。1371（応安4）年北朝後光厳の譲位と院政開始により後円融天皇が践祚しており、両者は同年令であった。しかも義満と後円融の間には血縁関係があった。



両者は母親同士が姉妹であり、ともに石清水八幡宮の社僧通清の女であり、紛れなき〝いとこ〟

横田庄と日野家・俳句・川柳・短歌

同志である。

義満は皇家との同族意識は強く、天皇や公卿に対してまったく劣等意識の感情はなかった。これが義満の王権簒奪（後述）の野望を抱かせる根本にあった。

（この項は次号に続く）

横田庄をめぐって（日野・安部・山名の諸氏）

石清水八幡宮横田庄に対し、北条氏打倒をねらう後醍醐天皇は、北条時輔（故）の母尼妙音の死によって、横田庄が空白となると、禁裡御料所としての支配を考え、八幡宮に対しても一部復権を計るなどしていた。1331（元徳3）年幕府の奉請によって持明院統の光厳天皇が即位し（北朝のはじめ）、やがて笠置の城が陥ち、後醍醐は神器を光厳に渡し、間もなく後醍醐は隠岐に流島となった。この時日野資朝・俊基が斬られた。横田庄はこのころ北朝御料所となったとみえて、光厳天皇の蔵人所の非蔵人（註記参照）であった**安部**泰時が、その代官としてこの年横田庄の大八川に下った。（横田庄内の現大字八川・下横田と竹崎の一部を含む地域が北朝御料所と推定する。のち光厳が譲位して上皇として院政をとると（1336建武3延元元）、仙洞（上皇）御料所へと移る。

『尊卑令脈』（最も網羅的な系図集。南北朝時代の洞院公定が作者）と、『公卿補任』（古代から明治元年までの、従三位以上の者の歴名を官職順に列記し略伝も註記してある）で検討してみると、このころ日野賢俊の兄で宣子の父資名が、蔵人頭を勤めている（のち権大納言に）。文書の註記に頭弁の語もある。蔵人所の長官である蔵人頭は2人で、それぞれ頭弁・頭中将と呼ばれた。頭弁は弁官（中流貴族の実務能力者）から、頭中将は上流貴族の近衛府の官人から、それぞれ選ばれて任命される。それに当時弁官の選任はほゞ日野氏流藤原氏の家系に定着していたという。

こうして院と日野氏の関係は深かったことが考えられる。

この院の蔵人所に、非蔵人（註記参照）として安部氏が出仕していたのである。こうした横田庄が北朝に関係が深かったことを、念頭に置かないと、古文書の読みこなしと、歴史を綴るのに誤まることとなる。

安部氏は清和源氏満仲流（源頼朝は満仲流）が信濃に土着した信濃源氏のうち、その宗家となる小笠原氏の流れで安部野に住んだのが祖で、のち安部と姓を改めたが、京に上って院の蔵人所に非蔵人として仕えていた。この安部氏が院の横田庄代官となって下り、大八川に居を構えた。1331（元徳2）年から1382（永徳2）年まで52年間、山名氏の勢力が浸透するまで、代々が代官職を継承した。1391（明徳2）年明徳の乱で山名満幸が敗れると、仙洞御所と日野氏につながる安部氏は再び10年振りに代官に復した。（将軍義満が正妻として日野業子を娶ったのは、1375年ころである。横田庄は上皇・日野氏・将軍を結ぶ糸によって、特異な荘園であったと思われる。勿論実益のある荘園でもあった。これについては202～210号で詳説）

山名氏の抬頭と横田庄

足利尊氏は光明天皇（北朝）を擁して、1336（建武3延元元）年建武式目を定め（室町幕府成立）、'38（暦応元延元3）年征夷大将軍となる。そして南朝と戦った。やがて、1392（明徳3元中9）年南北朝合一がなる。

この間、山名氏は、1350（観応元正平5）年の観応の擾乱で、尊氏の弟直義に味方して、尊氏と戦い、尊氏の執事高師直を討ったが、尊氏の巻返しにあい、山名時氏は、但馬・因幡・伯耆・丹後・丹波・美作・出雲・隠岐・紀伊・和泉の10国の守護職を没収された。

1358（延文3正平13）年尊氏が没すると、山名氏は、時氏・師義・義理と3代にわたって、幕府に対抗する勢力を養い、1368（応安元正平23）年義満が将軍となると、山名氏は、時氏の3男で、師義の養子となった時義が、義満に接近し、1371（応安4建徳2）年には、時義の子時熙が義満の小姓となり、1372（応安5文中元）年には、時義の子氏清が義満の小姓となり、1373（応安6文中2）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1374（応安7文中3）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1375（永和元天授元）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1376（永和2天授2）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1377（永和3天授3）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1378（永和4天授4）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1379（康暦元天授5）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1380（康暦2天授6）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1381（永徳元天授7）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1382（永徳2天授8）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1383（永徳3天授9）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1384（永徳4天授10）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1385（嘉慶元天授11）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1386（嘉慶2天授12）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1387（嘉慶3天授13）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1388（嘉慶4天授14）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1389（康応元天授15）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1390（康応2天授16）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1391（明徳2天授17）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1392（明徳3元中9）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1393（明徳4元中10）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1394（明徳5元中11）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1395（明徳6元中12）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1396（明徳7元中13）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1397（明徳8元中14）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1398（明徳9元中15）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1399（明徳10元中16）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1400（明徳11元中17）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1401（明徳12元中18）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1402（明徳13元中19）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1403（明徳14元中20）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1404（明徳15元中21）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1405（明徳16元中22）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1406（明徳17元中23）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1407（明徳18元中24）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1408（明徳19元中25）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1409（明徳20元中26）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1410（明徳21元中27）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1411（明徳22元中28）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1412（明徳23元中29）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1413（明徳24元中30）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1414（明徳25元中31）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1415（明徳26元中32）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1416（明徳27元中33）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1417（明徳28元中34）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1418（明徳29元中35）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1419（明徳30元中36）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1420（明徳31元中37）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1421（明徳32元中38）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1422（明徳33元中39）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1423（明徳34元中40）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1424（明徳35元中41）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1425（明徳36元中42）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1426（明徳37元中43）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1427（明徳38元中44）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1428（明徳39元中45）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1429（明徳40元中46）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1430（明徳41元中47）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1431（明徳42元中48）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1432（明徳43元中49）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1433（明徳44元中50）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1434（明徳45元中51）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1435（明徳46元中52）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1436（明徳47元中53）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1437（明徳48元中54）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1438（明徳49元中55）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1439（明徳50元中56）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1440（明徳51元中57）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1441（明徳52元中58）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1442（明徳53元中59）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1443（明徳54元中60）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1444（明徳55元中61）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1445（明徳56元中62）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1446（明徳57元中63）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1447（明徳58元中64）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1448（明徳59元中65）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1449（明徳60元中66）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1450（明徳61元中67）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1451（明徳62元中68）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1452（明徳63元中69）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1453（明徳64元中70）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1454（明徳65元中71）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1455（明徳66元中72）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1456（明徳67元中73）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1457（明徳68元中74）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1458（明徳69元中75）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1459（明徳70元中76）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1460（明徳71元中77）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1461（明徳72元中78）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1462（明徳73元中79）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1463（明徳74元中80）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1464（明徳75元中81）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1465（明徳76元中82）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1466（明徳77元中83）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1467（明徳78元中84）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1468（明徳79元中85）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1469（明徳80元中86）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1470（明徳81元中87）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1471（明徳82元中88）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1472（明徳83元中89）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1473（明徳84元中90）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1474（明徳85元中91）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1475（明徳86元中92）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1476（明徳87元中93）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1477（明徳88元中94）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1478（明徳89元中95）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1479（明徳90元中96）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1480（明徳91元中97）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1481（明徳92元中98）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1482（明徳93元中99）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1483（明徳94元中100）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1484（明徳95元中101）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1485（明徳96元中102）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1486（明徳97元中103）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1487（明徳98元中104）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1488（明徳99元中105）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1489（明徳100元中106）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1490（明徳101元中107）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1491（明徳102元中108）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1492（明徳103元中109）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1493（明徳104元中110）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1494（明徳105元中111）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1495（明徳106元中112）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1496（明徳107元中113）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1497（明徳108元中114）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1498（明徳109元中115）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1499（明徳110元中116）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1500（明徳111元中117）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1501（明徳112元中118）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1502（明徳113元中119）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1503（明徳114元中120）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1504（明徳115元中121）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1505（明徳116元中122）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1506（明徳117元中123）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1507（明徳118元中124）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1508（明徳119元中125）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1509（明徳120元中126）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1510（明徳121元中127）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1511（明徳122元中128）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1512（明徳123元中129）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1513（明徳124元中130）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1514（明徳125元中131）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1515（明徳126元中132）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1516（明徳127元中133）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1517（明徳128元中134）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1518（明徳129元中135）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1519（明徳130元中136）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1520（明徳131元中137）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1521（明徳132元中138）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1522（明徳133元中139）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1523（明徳134元中140）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1524（明徳135元中141）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1525（明徳136元中142）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1526（明徳137元中143）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1527（明徳138元中144）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1528（明徳139元中145）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1529（明徳140元中146）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1530（明徳141元中147）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1531（明徳142元中148）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1532（明徳143元中149）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1533（明徳144元中150）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1534（明徳145元中151）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1535（明徳146元中152）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1536（明徳147元中153）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1537（明徳148元中154）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1538（明徳149元中155）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1539（明徳150元中156）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1540（明徳151元中157）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1541（明徳152元中158）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1542（明徳153元中159）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1543（明徳154元中160）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1544（明徳155元中161）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1545（明徳156元中162）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1546（明徳157元中163）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1547（明徳158元中164）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1548（明徳159元中165）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1549（明徳160元中166）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1550（明徳161元中167）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1551（明徳162元中168）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1552（明徳163元中169）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1553（明徳164元中170）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1554（明徳165元中171）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1555（明徳166元中172）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1556（明徳167元中173）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1557（明徳168元中174）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1558（明徳169元中175）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1559（明徳170元中176）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1560（明徳171元中177）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1561（明徳172元中178）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1562（明徳173元中179）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1563（明徳174元中180）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1564（明徳175元中181）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1565（明徳176元中182）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1566（明徳177元中183）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1567（明徳178元中184）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1568（明徳179元中185）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1569（明徳180元中186）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1570（明徳181元中187）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1571（明徳182元中188）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1572（明徳183元中189）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1573（明徳184元中190）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1574（明徳185元中191）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1575（明徳186元中192）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1576（明徳187元中193）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1577（明徳188元中194）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1578（明徳189元中195）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1579（明徳190元中196）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1580（明徳191元中197）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1581（明徳192元中198）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1582（明徳193元中199）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1583（明徳194元中200）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1584（明徳195元中201）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1585（明徳196元中202）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1586（明徳197元中203）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1587（明徳198元中204）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1588（明徳199元中205）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1589（明徳200元中206）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1590（明徳201元中207）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1591（明徳202元中208）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1592（明徳203元中209）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1593（明徳204元中210）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1594（明徳205元中211）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1595（明徳206元中212）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1596（明徳207元中213）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1597（明徳208元中214）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1598（明徳209元中215）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1599（明徳210元中216）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1600（明徳211元中217）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1601（明徳212元中218）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1602（明徳213元中219）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1603（明徳214元中220）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1604（明徳215元中221）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1605（明徳216元中222）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1606（明徳217元中223）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1607（明徳218元中224）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1608（明徳219元中225）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1609（明徳220元中226）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1610（明徳221元中227）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1611（明徳222元中228）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1612（明徳223元中229）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1613（明徳224元中230）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1614（明徳225元中231）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1615（明徳226元中232）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1616（明徳227元中233）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1617（明徳228元中234）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1618（明徳229元中235）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1619（明徳230元中236）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1620（明徳231元中237）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1621（明徳232元中238）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1622（明徳233元中239）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1623（明徳234元中240）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1624（明徳235元中241）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1625（明徳236元中242）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1626（明徳237元中243）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1627（明徳238元中244）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1628（明徳239元中245）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1629（明徳240元中246）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1630（明徳241元中247）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1631（明徳242元中248）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1632（明徳243元中249）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1633（明徳244元中250）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1634（明徳245元中251）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1635（明徳246元中252）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1636（明徳247元中253）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1637（明徳248元中254）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1638（明徳249元中255）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1639（明徳250元中256）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1640（明徳251元中257）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1641（明徳252元中258）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1642（明徳253元中259）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1643（明徳254元中260）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1644（明徳255元中261）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1645（明徳256元中262）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1646（明徳257元中263）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1647（明徳258元中264）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1648（明徳259元中265）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1649（明徳260元中266）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1650（明徳261元中267）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1651（明徳262元中268）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1652（明徳263元中269）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1653（明徳264元中270）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1654（明徳265元中271）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1655（明徳266元中272）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1656（明徳267元中273）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1657（明徳268元中274）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1658（明徳269元中275）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1659（明徳270元中276）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1660（明徳271元中277）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1661（明徳272元中278）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1662（明徳273元中279）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1663（明徳274元中280）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1664（明徳275元中281）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1665（明徳276元中282）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1666（明徳277元中283）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1667（明徳278元中284）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1668（明徳279元中285）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1669（明徳280元中286）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1670（明徳281元中287）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1671（明徳282元中288）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1672（明徳283元中289）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1673（明徳284元中290）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1674（明徳285元中291）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1675（明徳286元中292）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1676（明徳287元中293）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1677（明徳288元中294）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1678（明徳289元中295）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1679（明徳290元中296）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1680（明徳291元中297）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1681（明徳292元中298）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1682（明徳293元中299）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1683（明徳294元中300）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1684（明徳295元中301）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1685（明徳296元中302）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1686（明徳297元中303）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1687（明徳298元中304）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1688（明徳299元中305）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1689（明徳300元中306）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1690（明徳301元中307）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1691（明徳302元中308）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1692（明徳303元中309）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1693（明徳304元中310）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1694（明徳305元中311）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1695（明徳306元中312）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1696（明徳307元中313）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1697（明徳308元中314）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1698（明徳309元中315）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1699（明徳310元中316）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1700（明徳311元中317）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1701（明徳312元中318）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1702（明徳313元中319）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1703（明徳314元中320）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1704（明徳315元中321）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1705（明徳316元中322）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1706（明徳317元中323）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1707（明徳318元中324）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1708（明徳319元中325）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1709（明徳320元中326）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1710（明徳321元中327）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1711（明徳322元中328）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1712（明徳323元中329）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1713（明徳324元中330）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1714（明徳325元中331）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1715（明徳326元中332）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1716（明徳327元中333）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1717（明徳328元中334）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1718（明徳329元中335）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1719（明徳330元中336）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1720（明徳331元中337）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1721（明徳332元中338）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1722（明徳333元中339）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1723（明徳334元中340）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1724（明徳335元中341）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1725（明徳336元中342）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1726（明徳337元中343）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1727（明徳338元中344）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1728（明徳339元中345）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1729（明徳340元中346）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1730（明徳341元中347）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1731（明徳342元中348）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1732（明徳343元中349）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1733（明徳344元中350）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1734（明徳345元中351）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1735（明徳346元中352）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1736（明徳347元中353）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1737（明徳348元中354）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1738（明徳349元中355）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1739（明徳350元中356）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1740（明徳351元中357）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1741（明徳352元中358）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1742（明徳353元中359）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1743（明徳354元中360）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1744（明徳355元中361）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1745（明徳356元中362）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1746（明徳357元中363）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1747（明徳358元中364）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1748（明徳359元中365）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1749（明徳360元中366）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1750（明徳361元中367）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1751（明徳362元中368）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1752（明徳363元中369）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1753（明徳364元中370）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1754（明徳365元中371）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1755（明徳366元中372）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1756（明徳367元中373）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1757（明徳368元中374）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1758（明徳369元中375）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1759（明徳370元中376）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1760（明徳371元中377）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1761（明徳372元中378）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1762（明徳373元中379）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1763（明徳374元中380）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1764（明徳375元中381）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1765（明徳376元中382）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1766（明徳377元中383）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1767（明徳378元中384）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1768（明徳379元中385）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1769（明徳380元中386）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1770（明徳381元中387）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1771（明徳382元中388）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1772（明徳383元中389）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1773（明徳384元中390）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1774（明徳385元中391）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1775（明徳386元中392）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1776（明徳387元中393）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1777（明徳388元中394）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1778（明徳389元中395）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1779（明徳390元中396）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1780（明徳391元中397）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1781（明徳392元中398）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1782（明徳393元中399）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1783（明徳394元中400）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1784（明徳395元中401）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1785（明徳396元中402）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1786（明徳397元中403）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1787（明徳398元中404）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1788（明徳399元中405）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1789（明徳400元中406）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1790（明徳401元中407）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1791（明徳402元中408）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1792（明徳403元中409）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1793（明徳404元中410）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1794（明徳405元中411）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1795（明徳406元中412）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1796（明徳407元中413）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1797（明徳408元中414）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1798（明徳409元中415）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1799（明徳410元中416）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1800（明徳411元中417）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1801（明徳412元中418）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1802（明徳413元中419）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1803（明徳414元中420）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1804（明徳415元中421）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1805（明徳416元中422）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1806（明徳417元中423）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1807（明徳418元中424）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1808（明徳419元中425）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1809（明徳420元中426）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1810（明徳421元中427）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1811（明徳422元中428）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1812（明徳423元中429）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1813（明徳424元中430）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1814（明徳425元中431）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1815（明徳426元中432）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1816（明徳427元中433）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1817（明徳428元中434）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1818（明徳429元中435）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1819（明徳430元中436）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1820（明徳431元中437）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1821（明徳432元中438）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1822（明徳433元中439）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1823（明徳434元中440）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1824（明徳435元中441）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1825（明徳436元中442）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1826（明徳437元中443）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1827（明徳438元中444）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1828（明徳439元中445）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1829（明徳440元中446）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1830（明徳441元中447）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1831（明徳442元中448）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1832（明徳443元中449）年には、時義の子満幸が義満の小姓となり、1833（明徳444元中450

て尊氏は弟直義と対立し、国内は南朝党・直義党・尊氏党の三つ巴の争乱の渦中にまきこまれる。これに直義の養子直冬（尊氏の庶長子）が加って複雑な様相となった。西国に下った直冬の討伐に配慮してか、'50（観応元）年尊氏は2度にわたって岩屋寺に祈願文を届けている。'52年直義は毒殺によって生涯を終えたが、直義党は直冬によって組織を立直し対抗を続けた。

この間にあって伯耆守護職山名時氏は三党の間を揺れ動きながら、因幡・出雲・隠岐の制庄に成功した（守護職を得たのではない）。'52（観応3／文和元）年には時氏の子師義が岩屋寺に寺領を寄進しているが、そのことを示す文書である。この年直冬は九州をのがれて長門に至り南朝に降る。'53年南朝軍は時氏も加わって京都に突入。間もなく尊氏の子義詮は京都を回復し、後光厳天皇を奉じて尊氏が入京。'54年直冬石見を発して京都へ向う。年末尊氏後光厳を奉じて近江へ。明けて1月直冬・山名時氏ら入京。以後三党入り乱れて戦い、度々九州遠征にも及ぶという時代（1356～1362）'58尊氏没）が続いて7年に及ぶ。'63（貞治2）年長門の大内弘世に続いて山名時氏も幕府に帰服し、南朝勢力は急速に衰退した。時氏の帰服は幕府側の好条件の誘引によるもので、時氏は伯耆に加えて丹波、その長男師義は丹後、三男氏冬は因幡、五男時義は美作の守護職を安堵された。

'67（貞治6）将軍義詮没、翌年義満将軍に（11才）
'70（応安3）氏冬の死
'71（全4）時氏の死
'72（全5）後円融天皇即位にあたり、仙洞御料横田庄安堵
'76（永和2）師義の死
'77（全3）将軍義満の禁制岩屋寺へ

と山名氏は不幸が続いたが、動揺もなく、師義の弟時義が惣領職をつぎ、一族も次々と畿内先進地域（紀伊・和泉・但馬）の守護職を得た。

諸大名の要求により、義満は細川頼之の管領職を罷め、四国に帰らせ、斯波義将を管領とした。（'79（康暦元）年の康暦の政変。管領は幕政の担当者で将軍に継ぐ職）。そこで斯波派の領袖であった山名氏は、義幸が出雲・隠岐（のち満幸へ）、時義が備後のそれぞれの守護職を獲得して、一族で11か国の守護を有する最大の守護大名に成長した。（全国66国の六分の一となるので、「六分一殿」と呼んだという）さらに幕府の直轄領ともいうべき山城の守護職まで手に入れたので、これを背景に幕府内での発言力を増大させた。石見守護職も手に入れた長門・周防の大内義弘その他の諸大名にとっては脅威となったが、それ以上に将軍の権力確立に努力して、王権をもめざす若い28才の義満にとっては、深刻な脅威であった。

明徳の乱

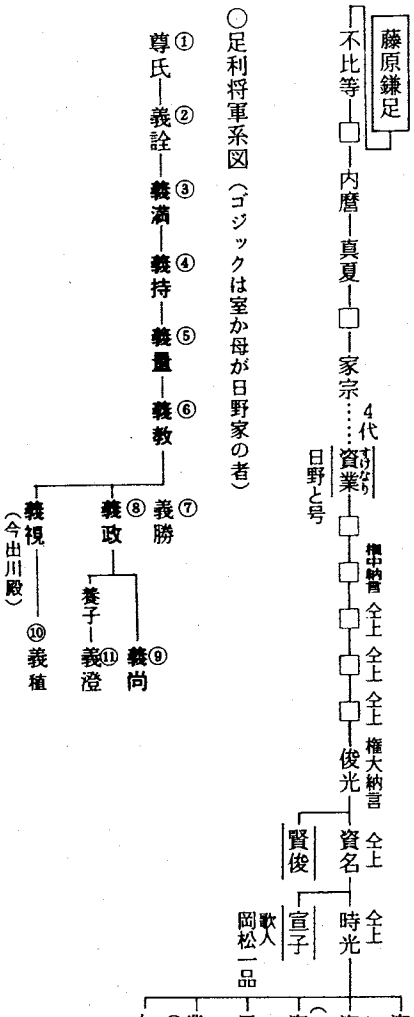
'79年の康暦の政変で出雲守護職を得た山名氏（義幸）は、横田庄内にも次第に圧力を加えたとみえて、

'82（永徳2）年　安部氏は代官を退き、馬木郷には山名氏の一門の馬来氏が入った。

山名の惣領時義は、

'83（全3）年　院宣にまかせ

○藤原－日野家系図（女名でゴジックは将軍の室か生母）



○足利将軍系図（ゴジックは室か母が日野家の者）

前号訂正　4頁3段28行　この建物が

ヴェラ船通山付近吟行句集

頂は神降臨の夏の山　浅野としお
稲田姫あそびしあたり赤とんぼ　糸原古志
緑陰を女の降りる湯宿かな　小川月舟
積雲や峡の谷水細くなり　加納信子
雲高く昼湯の窓に赤とんぼ　楠房子
遠き日のたたら偲ばむ花すすき　高木白虹
山の宿往く夏おしみて語らいて　中澤美紀子
山の温泉に五体沈めて蟬を聞く　新出谷一華
深き峡曲がりて出逢ふ秋の蝶　渡部夕峰
炎天の街ゆくにんげん黙々と　恩田和美
忘れたきこと忘れじや終戦日　錦織富江
西瓜食む真白き歯なみだけの顔　峯石美代子

斐の上川柳八月の句

短パンをはいて十ほど若返り　児玉哲呂
花も木も人も一息入れた雨　安部春恵
カナカナと鳴いて暑さを忘れさせ　松浦久寿子
お月様笑って落ちてる露天風呂　若槻白馬
真夏日で鍬を持つ手に玉の汗　真綿よし子
すんなりと言葉に出せぬ弱味もち　藤原千代子
待ちわびて横田しりめに逃げた雨　渡部ミツコ
冷房で暑さ気にせぬ旅が出来　安部正子
日まわりも天気続きで首いため　児玉えみ
通院をよい事にして羽のばし　森山悠子
星空に負けじと蛍光り飛ぶ　足立玉恵
暑さ増し日毎ビールの量が増え　磯島恵子
年祝い病魔は膳の下におり　石原冬明
かん水が飲む水よりも高くつき　藤原英生
この暑さあの世とやらは涼しかろ　松浦亜以

てと岩屋寺の寺領を安堵し

'86（至徳2）年　横田八幡宮の遷宮には本願守護として登場

'88（仝4）年　には岩屋寺に寺領を寄進している。

この間義満は山名氏の内部対立を巧みに利用して、勢力の削減をねらい。'89（康応元）年時義が没すると、山名一族間の守護職の異動を行って、同族の争いを助長した。不満を抱いていた満幸は出雲のほか伯耆・隠岐を得るや、山名一族の中心的存在となって、次第に専横になった。この年満幸は岩屋寺に横田庄内から寺領を寄進するなど、仙洞御料所の押領に踏みこんだ。代官安部氏を退けて、山名氏は本貫地丹後の石原庄（福知山の東北）から石原宗正を横田庄に送り、下横田に駐在させていた。

領主である仙洞御所（北朝）上皇後円融からの、返還を命ずる御教書が三度に及んで、はじめて満幸は御代官を差向けられれば応ずると答えたので、院司で別当の中納言日野家斉が代官として、下司斉藤太郎ェ門尉光秋を伴って、横田庄に下向した。

ところが山名方の石原氏は、庄内の村主（庄屋）・地下人（農民）をそそのかして、二人を追い立てたので、二人は千死を遁れて都に帰り、事の次第を奏上した。上皇の逆鱗は激しかった。上皇・日野氏・義満の間柄もさることながら、山名制圧の機をねらっていた義満は、急いで満幸の守護職を解雇した。

'91（明徳2）年のことである。管領も斯波義将を更迭し、細川頼之を再び登用するなど、山名打倒の手を打って来たので、満幸は叔父氏清らを誘って挙兵し京都に迫ったが、山名軍は敗北した。（詳細は既述済みで省略）

（高橋一郎）

追記

日野家斉は五位蔵人であったとみられる。追われて逃げる時、一夜を明かした橋のあったという所という、「ごよん橋」という地名が庄内の代山（大字大呂）に伝わる。

満幸は丹後・伯耆・出雲・隠岐の兵を率いて入京し、京都の西北内野で戦った。この時仁多郡西部の国人領主三沢尾張守為忠が討死した。

安部氏は15世紀に代官を三沢氏と変るまで、仙洞御所に伺候している。

この山名時義の孫が、応仁の乱の西軍の総帥山名宗全である。

（次回は「足利将軍と夫人（続）」・「義満の王権簒奪計画」ほかへ）

さまざまの夏

簸の上短歌会

母の死を知らすに妻は声にならぬ声に応へぬ　常盤はるまさ
寝たきりのまま
飢餓の日の慣ひはいまも残りゐて庭の菜園に　仝　人
モロッコ豆たわわに
焼け残る桧葉の古木に蜩のしきりに啼きて夕　岡田時子
昏れむとす
つきまとふ納払ひつつ合歓咲ける朝の畑に小　野村節子
豆を蒔きぬ
照り返へす炎天の下蟬時雨ききつつひたすら　仝　人
馬鈴薯を掘る
友の軒に十薬の数多干されゐて伝言板は畑に　永井弥生
ゐると
みちのくの旅に求めたる風鈴に二人のかわら　仝　人
ぬ夏巡り来ぬ
馬鈴薯の白き花咲く丘の径行けば海辺の街が　安部夕波
きらめく
下町の風情を残す根津通り鷗外旧居に初夏の　仝　人
雨ふる

会員頒布一部百五十五円／六九二六　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一四〇〇―八―六〇一）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 234 号
（10 月 号）
1994. 10. 1
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

横田庄と日野家（中）

―テレビ小説「花の乱」に因んで

公家指向の足利義満

1368（応安元）年、征夷大将軍に任ぜられた義満は、（下の年表参照）管領制のもと着々と独裁政治へと進み、一方公家（公卿）となること指向した。'75（永和元）年ごろ、幾人かの側室をもっていた義満は、18才で正室を迎えた。日野大納言時光の娘で6才年長の業子であった。時光の妹宣子は後光厳院に仕えて従一位に叙せられ岡松一品と呼ばれていた。尊氏以来将軍家と親しい日野家と縁組し、宣子を通じて宮廷に近づきたいという、義満の願望から出た結婚である。

'78年21才で権大納言となり従一位に叙せられ、花の御所と呼ばれた室町殿に住んだ。さらに内大臣・左大臣へと進み、'83年26才で准三后（じゅさんぐう）となった。准三后は准三宮ともいゝ、平安時代以降皇族や上級公卿に三宮（太皇太后宮・皇太后宮・皇后宮）に準じて、年官・年爵（年給の一種）を給与し経済的に優遇する法で、後には年官・年爵はなく名だけの優遇法となった。皇族や天皇の外戚公卿以外では例がなく、このころでは北畠親房、足利義満・義政が任ぜられた。

'91（明徳2）年の明徳の乱で山名氏を押さえて将軍足利氏の基盤を確固なものにすると、尊氏以来の宿願であった南北朝合一を翌3年10月実現した。すなわち南朝の後亀山天皇は吉野から京都に帰り、神器を北朝後小松天皇に渡したのである。

この年12月28日、4年前に辞した左大臣に還任し准三后をうけた。この年明徳の乱で山名氏の押領をとかれた仙洞御料所横田庄代官に、**安部**氏3代宣時（現稲田土居安部氏はこの末孫）が十年振りに代官に復した。仙洞御所と日野氏・足利氏のかゝわりの間柄、**安部**氏の復帰へは当然の成行きであり、やがて大八川から新開拓地稲田に居を構えて移る。以来当地方の貴種として江戸時代を通じて、代々が下郡役を勤めることになるのである（郡内の土豪で安部氏ほど下郡役を勤めた家はない）。

'93（明徳4）年、義満（36才）は左大臣を辞し、翌5年征夷大将軍を辞して12月太政大臣に任ぜられた。（関白は一条経嗣、太政大臣の前任者は徳大寺実時）才）北山に別荘を建てた。金閣である。全6年応永の乱は大内義弘が討死で終る。1401（応永8）年には日明貿易がはじまり、義満の夢がふくらむ。

（これより7年のちの応永15年51才で没するまでは後述）

足利将軍とその夫人日野氏

めざましく栄進する義満の夫人として業子（日野氏出）も、准三后・従一位を授けられたが、義満との間に子が生まれなかっ

			足利3代 義満	
1367	貞治 6	10才	2代父義詮卒により家督を継ぐ	権大納言 日野時光卒（40才）
			（補佐役を統合し管領制をとり、執事細川頼之をもって任じ将軍権力の確立）	
68	応安元	11	従四位上	
			任征夷大将軍	
73	6	16	任参議兼左近衛中将	
75	永和元	18	従三位に初参内	
			このころ時光の娘業子（6才年上）を正室に	
78	4	21	従二位権大納言	
			右近衛大将（室町の花の御所に）	
			従一位	
79	5	22	（管領　斯波義将）	
81	永徳元	24	内大臣	
82	2	25	左大臣　蔵人所別当 後円融院別当	
83	3	26	源氏長者、淳和院別当兼奨学院別当 准三后	
88	嘉慶 2	31	辞左大臣	
90	明徳元	33	明徳の乱 南北朝合体	
92	3	35	左大臣還任	
93	4	36	辞左大臣	
94	5	37	辞征夷大将軍 任太政大臣	
95	応永 2	38	辞太政大臣出家	4代義持（10） 任征夷大将軍 任権中納言
97	4	40	（北山別荘金閣）	
99	6	42	応永の乱	
1401	8	44	日明貿易	任権大納言（16）
08	15	51	義満卒	

翌年（明徳5・応永元）備後国地毗庄（庄原市周辺）地頭山内通忠はこの乱の功により横田庄ほかを宛行われているが、後世の記録からすると八川村内の旧尾園村あたりである。

'95（応永2）年38才の6月3日太政大臣を辞し出家した（法名道有のち道義と改める）。

子義持は10才にして征夷大将軍となった（応永2年12才で権中納言、全8年に16才で権大納言）。

守護山名満幸解易後出雲守護は、この年京極高詮が補任された。

出家した義満は応永4年（40才）北山に別荘を建てた。金閣である。全6年応永の乱は大内義弘が討死で終る。1401（応永8）年には日明貿易がはじまり、義満の夢がふくらむ。

（これより7年のちの応永15年51才で没するまでは後述）

横田庄と日野家（中）・資料断片①・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

た。男児1人を儲けたが夭折したともいう。長男義持をはじめ、義嗣・義教ら8人の男児は、すべて側室腹である。なお義持の生母は藤原慶子であるが、日野業子が准母となっている。業子は、花の御所と呼ばれた室町殿や北山殿で、義満とともに暮したが、'05（応永12）年7月11日北山殿で世を去った。54才で法名定心院。

このあと義満の妻となったのは、日野時光の長男資康の娘康子である。業子の姪に当る。このころの日野家の当主は、康子の一つ年下の弟重光で、従一位大納言に任ぜられ、将軍の縁者として世にときめいていた。

義満すで48才で成人に達した長男義持をはじめ多くの子女を持ち、次男義嗣を生んだ春日局のほかに幾人もの側室を擁していて、あらためて妻を迎える必要もないようであったが、日野家が将軍家の縁の切れることを好まず、康子を送りこんだであろうか、康子は正室をさす御台所とは呼ばれず、南御所と呼ばれていた。康子も子が無かった。

'06（応永13）年12月、後小松帝の生母通陽院が発病し重態となった。帝に続いて女院御所にも義満も参向した。

その夜義満は、「後小松帝の即位後11年目の明徳4年（1393）に、父後円融上皇が世をさられている。通陽院が亡くなれば1年間の服喪が、一代の間に2度となる。これは不吉である」と言いだしこじつけめいているが、関白一条経嗣を味方につけて、強く主張したので、帝も聞き流すわけにはいかなかった。

○後円融上皇崩御によって横田庄は後小松天皇に伝領されたが、翌応永元年、勅旨をもってその半分を後円融院御追善のため、菩提所である京都泉涌寺の塔頭雲龍院へ寄進された。これから横田庄は石清八幡宮と御所と雲龍院との三領家の所領となって、16世紀まで続く。

○この時の京都御所蔵人所の役人は、日野氏の一族左中弁日野西資国である。

○応永2年3月　京極高詮は京都で舞い戻って来た山名満幸を討ち功によって出雲・隠岐の守護職を得た。

数年前から義満は、主権者として日本国に君臨しはじめていた。太政大臣もすでに辞しており、帝位を望んでいたのである。明と貿易のため、義満は明帝に国書を送ったが、そこには「日本国王」と自称していて、実態をこの上に得たかった。

義満は二度の服喪（諒闇）を避けるため、後小松帝は別の母を持てば、通陽門院が亡くなっても母ではないので、服喪の必要はないと提案した。

その母はほかでもない、義満の夫人康子である。絶対権力者義満の発言にさからう者はいなかった。康子が後小松帝の准母と決まった。当然義満が帝の父となる。これが義満の目的であった。

'06（応永13）年12月27日、通陽院は55才で亡くなった。ただちに日野康子（義満の正室）は准后宣下を受けた。後小松帝は服喪しなかった。

年明けの正月19日、康子と重光を生んだ池尻殿は、三位に叙せられた。

康子の院号は北山院と定められた。もともと女院の院号は、帝（天皇）の生母・内親王等に贈られるもので、一条天皇の生母東三条院にはじまる。皇妃・皇女でない康子に院号が贈られたのは、前代未聞のことであった。

史料断片①

―「仁多郡古代中世編年史料集」草稿から―

天永2（1111）年6月25日付の松江市竹矢町の枚浜別宮遷宮の文書があるので、恐らく横田庄も、京都南西の男山の石清水八幡宮の荘園として、別宮が既に存在していたであろうと推定している。

1143（康治2）年の千家文書によれば「出雲国内の荘園増加し、国力大いに減ず」とある。

そして1158（保元3）年12月3日の石清水八幡宮の文書の中に、その庄園として、「出雲国横田別宮・安田別宮・赤穴別宮・枚浜別宮・日蔵別宮・新松別宮・白上別宮・大田別宮」の8社があらわれる。

それよりもっと古いものは、ほかならぬ733（天平5）年2月30日勘造の『出雲国風土記』であって、その中に横田郷・三処郷・布勢郷・三沢郷の四郷がみえる。この地名は『和名類聚抄』（931～938）では、三沢郷が三沢郷（現三沢・三成）と漆仁郷（現温泉）・阿位郷（現阿井・馬木）に分れて、この地方に人口が増加したことを示している。すでに『出雲国風土記』では、三沢・漆仁地方には神社が多く、住民が多かったことがわかる。

この時代のことはすでにくわしく述べているので、重復を避けるが、この時代から石清水八幡宮の庄園として、横田庄が出現するまでの378年間の当地方の動きはどうであったであろうか。

勝部鳥女――『続日本紀』（『日本書紀』＝『日本紀』に続く国撰史書六国史の一つで、文武～桓武天皇まで）巻第13の聖武天皇の天平4年（740）6月の頃に、「大原采女勝部鳥女は本郷に還せ」とある。当時流人（流罪に処せられたもの）に対する処分には、①入京、②本郷に帰す、③赦に入れないがあるが、この時京に入らしめられた者女1人を含む5人、赦されなかったものは女1人を含む6人が名を連ねている。いずれも殺人か私鋳銭にかゝわったものか、強盗・人妻に奸せる者などであったようである。勝部鳥女は、大原郡出身の采女であった。采女とは当時、各部の郡

3月23日新女院康子の晴の入内の日がきた。華かな行列はまばゆいほどだったという。

北山第（殿）を上皇の御所仙洞になぞらえていた義満は、こののちはいよいよ上皇気取りで、愛する次男義嗣の元服を、親王同様に内裏で挙行するという有様であった。

このころから義満は体の不調を訴え、翌年1408応永15年5月6日夕刻この世を去った。51才だった。朝廷からは太上天皇の尊号を贈ろうとしたが、幕府の実力者斯波義将が辞退したとされている。ただ相国寺の過古帳には、鹿苑院太上天皇とあるという。康子は11年後の'19年（応永26）年に亡くなった。

足利将軍の生母日野氏

義満の長男義持（正室日野業子・康子の子でなく側室藤原慶子の子）は、10才の時から将軍になったが、実権は父義満かもち、名目将軍であった。

義満が亡くなった時は、義持は23才、管領斯波義将の助も適切で、交代期を無事切り抜けた。弟で次男の義嗣は、父義満の側室春日局の腹で生れたが、局が寵愛していたので、これを後継者にしたいと考えてもいた。9才年下の義嗣は兄の相続に不満で謀反を企てたが殺された。

4代将軍義持の正室は、例に従って、日野家の娘を迎えた。義満の正室で後小松帝の准母の北山院康子の妹日野栄子である。栄子はこんどは目出度く男子を儲けた。義量である。17才の'23（応永30）年3月、義持から譲られて5代将軍についた。義持は出家した時に38才。

こゝに日野家としてははじめて、将軍の生母を出した。

だが残念ながら、出家後も政治の実権は父にあり、不満から酒や女色に溺れたため、わずか19才で亡くなった。

その死の3年後父義持は病死した。一人息子に先立たれた義持は世継を定めていなかった。重臣たちは病床の義持と相談の上、義持の弟4人の中から籤で選ぶことにした。死後それによって、天台座主大僧正義円ときまり、還俗して義教と名乗り、6代将軍となった。

早速日野家は将軍夫人を送りこんだ。日野重光の長女宗子で

おのおのの夏　　簸の上短歌会

岩清水したたる峠に孫と来て笹の柄杓にさざめき掬ふ　永井弥生
いねがたく本よむ畳に蝶ひとつみどりの羽を閉じてねむれる　〃
夕闇に蛍ぶくろのほの白くはるけき君の白絣とも　〃
父親の声にあまりに似る孫といく歳ぶりの夏を過しぬ　常盤はるまさ
寝たきりの妻にまつはる蝿を追ふわれの一生もおおかたを過ぐ　〃
逝きし児に西瓜供ふる七夕の日ぐれをひとり法子蝉きく　岡田時子
掌を合はす地蔵刻めるみどり児の石塔たちて新盆迎ふ　野村節子
遠き日のつはものどもの夢いずこ川中島の夏草ゆれて　安部夕波
蜩の声に暮れゆく山里に夕顔白し藤村記念館（於馬籠）　〃

司（郡役人で大領・小領・主政・主帳）のうち小領以上の家族から選んで（小領以上の姉妹及び子女の形容端正しき者を貢れ）奉仕させた、天皇の後宮の女官で、律令制では水司・膳司に配属された。采女を出す郡に、その諸経費の財源として田が支給された。采女田という。これが後世ときに玉の輿にのることもあり、恩賞として賜ることもあった。宮内省には采女を司どる役所（采女司）があり、その長官は采女正ともいった。また采女には采女の丁（従丁や従女）もいた。おゝむね京にて生涯を過すならわしであったから、郷に帰らせられたことは、よほどのふつゝかがあったものと思われる。

六年前に東大寺大仏殿西南の発掘調査で建立当時（749天平感宝元年）の木簡や銅塊が出土した。その中に「大原郡佐世郡司勝□知麻呂□」の文字のある木簡があった。郡司勝部某が大仏鋳造のための銅をこの地から運んだことを示すものである。

大同2年（807）5月の類聚国史の中にも、出雲の采女勝部公真上がみえる。『出雲国風土記』の大原郡には勝部君虫麻呂があり、出雲・神門郡にも、勝部臣、君、首の姓が広くある。

文徳実録　（六国史の一つ。文徳天皇の850～858年）巻3の、仁寿元年（851）12月15日の項に、「使者を遣して伯耆国の飢民に賑給（貧民に対して政府が米塩を給すること）す。出雲国飯石仁多両郡の百姓に復一年賜う」とある。この記事の前後には公卿への叙位の記事が多く、伊勢大神宮への奉幣のことにまじってこの項がある。よほどの凶作に見まわれたものと思える。

三代実録　（六国史の一つ、清和・陽成・光孝帝30年間）巻9の清和天皇の、貞観6年（864）10月1日「天皇侍臣とともに音楽を奏させて宴をなし、いつものように禄を賜う」とあり、次に「出雲国仁多飯石両郡の百姓の課役を二年後せられる。農蚕よろしからざるなり」とある。3日には内殿に於て60人の僧が大般若経を3日に及んで読経した。7日には夜北山に光があって雷の如くまた朱雀門前に5尺ばかりの赤光がみえたとあり、そして2日のち地震とある。

前号訂正　3頁系図　重子⑥義満室・4頁4段10行　解易

ある。重光はすでに亡く子の義資の代であった。宗子は若くて亡くなり子もなかった。ところが宗子の妹重子が義教の傍らにいた。宗子の生前から仕えていた。日野家の念には念を入れた縁結びのようであった。宗子の死後、正室には三条尹子が入って、重子は側室のまゝであったが二人の男児をもうけていた。義教の息子は6人いたが、長男義勝と次男義政は、ともに重子が生んでいた。

'41（嘉吉元）年6月24日、将軍義教は赤松満祐の京都の邸に招かれ、そこで満祐父子のために殺された（嘉吉の乱）。義教は恐怖将軍といわれるほど、恣意的で横暴なところがあった。満祐は庶家の赤松貞村が義教に寵愛されることに強い不満をもっていたのがこの乱の原因であった。同席していた諸大名の中にも、数名の死傷者が出たが、不思議にも中国地方の大名が多かった。出雲・隠岐守護京極高数、石見守護山名熙貴はその場で討死し、周防・長門守護大内持世は重傷を負い一か月後に死亡した。

前代未聞の事件に、幕府は一時なす術を失ったが、やがて山名氏惣領の持豊（宗全）を惣大将とする討代軍が、播摩に派遣され、赤松の本城（竜野市の木山城）を攻め落したので満祐らは自殺した。

赤松の3か国守護職は没収され、山名氏に与えられた。かくて山名氏は、明徳の乱の敗北による壊滅的打撃から50年余りにして、但馬・因幡・伯耆・備後・安芸・石見・播磨・備前・美作・伊賀の10か国を領国とする大守護大名に復活し、管領家細川氏と勢力を二分するまでになった。嘉吉の乱後に得た美作・備前・播磨が、細川氏の領国備中を取り固むかたちとなったことは、その後細川氏と強く対立する要因となり、応仁の乱の引き金になるのである。

嘉吉の乱の翌2年（'42）11月、わずか9才の義勝が、足利氏7代の征夷大将軍に任じられた。

山名氏系図（略）
（太字は横田にかゝわりある人物）

時氏
- 師義
  - 義幸
  - 氏幸
  - 満幸
- 氏冬
- 氏清
- 惣領家
  - 時熙
    - 時義
      - 持豊（宗全）

征夷大将軍①

日本の歴史は、飛鳥―奈良―平安の天皇王権時代が700年、次の鎌倉―室町―江戸の武門王権時代が700年、その後今に続く近代の国民時代の100年と続く。この武門王権の頂点に、征夷大将軍いわゆる将軍が位置した。

頼朝・尊氏・家康が、鎌倉・室町・江戸の各時代の歴史の人口に立つ人物で、それぞれの時代が形成されてゆく。そしてこれらの人物とあとに続く人物達即ち征夷大将軍達の歴史は、'天皇王権に、正面からいろいろな挑戦をした歴史でもあった。

ところが鎌倉幕府創立以前にも征夷大将軍があった。これは蝦夷と呼ばれた東国の抵抗衆を征伐する軍事行動を指揮する、征蝦夷大将軍の意味であった。

最初には奈良時代794（延暦13）年の大伴弟麿が任ぜられた。その副将軍が坂上田村麿であって、20年間10万の大軍を率いて、蝦夷に壊滅的打撃を与え、その功により大将軍に任ぜられた。天皇王権700年のうち20年余の対蝦夷への武将である大将軍で、のちの大将軍とは異なるものである。

柴栗句会九月抄

晩夏光少年ブランコ反りて漕ぐ　浅野としお
白萩のほころべば風秋となる　糸原古志
庭を打つ大夕立の慈雨となる　小川月舟
足裏の汚を見せてひる澤の児　恩田和美
松蝉や筆にたどりし弥陀の面　加納信子
一雨の肌に覚える秋かすか　楠房子
永らへて八月六日雲を見る　高木白虹
深呼吸秋めく風をほしいまま　中澤美紀子
落蝉の一声泣いてそれっきり　新出谷一華
仏恋い亡父の命日今朝の秋　錦織富江
新涼や岩に腰掛け眼鏡拭く　渡部夕峰

斐の上川柳九月の句

ダイエット味覚の秋のつらいこと　石原冬明
赤とんぼ稲の穂まねき見ておどる　足立玉恵
雨降らず猛暑に水のお中元　松田牛歩
盆の客終れば秋の風になり　真綿よし子
夏仕事残したまゝで陽は短か　渡部ミツコ
そわそわと発車間際に思い出し　藤原千代子
代議士が言う国民は誰のこと　藤原英生
ぼけぬ様何かしてると嫁が言い　藤原のぼる
定位置で夜ごと聞かせる虫の声　高木凡太
茶柱を一人で見てる静かな日　松浦久寿子
三十度冷えた緑茶でおもてなし　安部正子
採りたての枝豆ゆでて孫を待つ　児玉えみ
たっぷりと時間があって無計画　松浦亜以
病むことを思えば暑さ我慢出来　安部春恵
家中の涼しいとこへうろうろし　児玉哲呂

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400―8―601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 235 号
（11 月 号）
1994. 11. 2
（M 127・T 83・S 69）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

横田庄と日野家（下）

——テレビ小説「花の乱」に因んで

横田庄と日野家（下）・征夷大将軍（2）・史料断片（2）・川柳・短歌・俳句

将軍義政

足利7代将軍義勝は在位8か月ほどで翌嘉吉3（1,443）年に没し、6年後の'49（宝徳元）年にその弟義政（母は同じで日野重子）が元服して（14才）、征夷大将軍に任ぜられた。

義政が成人すると将軍の近臣大館氏の出で、義政の乳人だった今参局が、性の手引をしたのがきっかけで義政の愛妾となり、側近にあって大きい勢力を得た。26才を過ぎた義政には今参局ほか数人の側女がいたが、正室に迎えられたのは日野富子であった。伏魔殿の如き義政をめぐる殿中には、暗闘が繰りひろげられ、富子は姑で叔母にあたる将軍義政の母重子と、義兄の日野勝光と組んで今参局を遂に自刃に追いこんだ。

義政は僧籍にあった弟を還俗させて義視となのらせ、富子の妹美子を正室として迎え入れた。（美子の子がのち、富子の子9代義尚のあとを継いで10代将軍義稙となる）

日野勝光は二人の義妹を通して将軍家と深く結びついて、とんとん拍子に出世し、'55（康正元）年富子が将軍夫人となると同時に従二位大納言に進んで、日野家としては最高の位についた。（横田庄仙洞御料所代官は4代安部又治郎宣豊の時代）

'65（寛正6）年従一位とのぼりつめ、関白二条持通と並ぶことになった。ほかに年功からも家格の上からも、多くの公卿がいたのをとび越えており、翌年には院（上皇の仙洞御所）の執権職についた。これも実入りの多い職務であった。

'67（文正2・応仁元）年には内大臣に任ぜられ、日野家初の大臣となった。将軍夫人富子の後楯によるものであることは明らかであったから、〈押の大臣〉と世間は陰口をたたいた。応仁の大乱の起る直前である。現金をくれれば請願はいくらでも受けとるとうそぶいて、依頼者は絶えなかったという。

大乱が膠着状態になっていた'73（文明5）年、富子の子義尚が9代将軍になると、伯父ということでさらに昇任、文明8年左大臣となったが、間もなく病を得て48才で世を去った。

'80（文明12）年16才の将軍義尚は日野勝光の娘常子（従妹）を正室に娶った。ずっとのち義政の末弟政知の子で、10代義稙（'90延徳2に将軍）のあとをついで11代将軍（1,502文亀2）となった義澄は、富子の同母の兄永俊の娘を娶るという重縁であったが、もう将軍の権威は地に落ちていた。10代義稙は細川政元に追われ阿波で没し、11代義澄も大内義興によって京を追われた。

応仁の乱

（1460応仁元～'77文明11）

義政29才富子25才に男の子なく、側妾の子はすべて女。そこで弟義視を還俗させ、24年の将軍生活の煩わしさからのがれ、趣味の世界へと義政は志した。

'65（寛正5）年富子懐姓、義視の元服式の2日後に男の子（義尚）を生んだ。

義視の後見人が細川勝元であるので、勝光と富子はこれに対抗するため、力を具えた山名持豊（宗全）に義尚の将来を託した。これに畠山、斯波両氏がそれぞれ一族間の主導権争いがからみ、勝元と宗全に協力を頼んだ。こうして大乱の構図ができ'67（応仁元）年東西両軍の激突がはじまった。

（西）宗全　畠山義就・斯波義廉・日野富子
（東）勝元　畠山政長・斯波義敏・足利義視

将軍を擁した東軍が緒戦は有利であったが、大内政弘が大軍を率いて入洛すると西軍が勢をもりかえした。焼けるものはすべて焼き尽した戦も、文明年内（'69～'89）になると膠着状態になった。その間義政は連歌の会・酒宴を連日の如く催していた。

文明5年宗全が没し、あとを追うように勝元が没し、義尚は9才で10代将軍となった。

戦乱は地方へと拡大し、それぞれの大名は膝元に火がついて、一日も早く帰国したい。反将軍系の西軍の将は、将軍家へ帰参の形で休戦して帰国を望み、勝元の斡旋をたのんだ。手ぶらではない。勝光は絞りとれるものはためらいもなく絞りとった。それを富子は見習って蓄財の術を振うことになった。

文明6年勝元の子政元と、宗全の子政豊の東西の総師の子が会見し和を結んだが、講和反対側がいて即停戦とならなかった。小ぜりあいが続き、翌7・8年も停戦に至らず、11年目の'77（文明9）年となって、西軍の主力で和のきっかけを作った一人畠山義就は、講和反対派であったが、9月京都の陣を撤収した。最後まで残っていた大内政弘が兵を引き上げたのは、11月11日で、これで西軍は解体し、応仁の乱はやっと終った。11月20日幕府で天下静謐の祝賀会が開かれ、守護大名、公家が参集し、乱は完全に幕を閉じた。

'79文明8　日野勝光没　48才

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

'89 延徳元　将軍義尚は母富子にみとられ没す。25才。父義政が再び将軍職に。7か月間。

'90 2　義政中風にかかり没。55才。10代将軍義稙（富子の妹美子と義視の子）。義視が将軍の父として政治をみる。富子許さず細川勝元の子政元を味方として義稙を廃し、義政のもう一人の弟政知の子を将軍職につける。11代義澄である。

'96 明応5　富子没す（57才）。義澄は富子の葬儀にも出ず、供養塔も建てなかった。

挿話

戦乱中、いつまでもわが子義尚を将軍への決断をしない義政に、富子は不満と倦怠を覚え、艶があって活気に満ちた男性にひかれたという。2才年下の後土御門帝（北朝後崇光院皇子）。一休（宗純）和尚は、後小松帝の皇胤であったが、足利義満の皇位簒奪計画の犠牲となって出家させられた。伏見宮家から皇位についた先の後花園帝は、一休を「皇家の正嫡」と呼んで、一休とともに国を憂えていた。一休は幕府批判を詩に託して帝と交したものも多い。金にあかしての戦乱収拾の和平工作は眼にあまり、これを吟じた一休の辛辣な詩も多い。美人傾城の詩は富子の女人政治批判の痛烈なものであり、王朝政治を正すべき前関白の一条兼良が、富子に追従するのを嘆じたものもある（義政の夫人日野重子によって、太政大臣と関白を兼ねたいきさつもあるが）。一休は富子を中国の唐の玄宗皇帝の楊貴妃のおごりと比べて、「雌鳥が刻を告げれば国亡ぶ」とし、凄惨な末路を死で迎え、「三生六十劫」にわたって、地獄の苦しみの輪廻をさまようと断定している。

兼良の長男で出家し奈良興福寺大乗院の尋尊は、一休と同じ立場をとっていた。

応仁の乱前後の出雲地方

明徳の乱後出雲守護に補任された京極高詮（のり）は、守護代隠岐氏に替えて甥の尼子持久を富田に送った。だが持久の子清定が応仁の乱で活躍するまでの'70年間の動向は明らかでないが、有力国人として蟠踞していた、**三沢対島守**や神西・牛尾・松田等々の対策に苦労した時代であったであろう。

次の京極持清は大乱には、東軍の有力武将として京都で活躍し、出雲国人の中でも、赤名・三刀屋氏などは上洛して戦いに加わった。安来荘の荘官松田氏の蠢動を清定は'68応仁2年に押さえたが、'70文明2年には国人一揆が起り、**三沢氏**を張本人として山佐・多胡ほか出雲東部の有力国人衆が参加した。清定はこれの鎮圧には成功した。その子経久は京都にいて室町文化の影響もうけて、'79文明11年、乱の終るとともに帰国し、父のあとを継いだ。経久は戦国大名を意識し、美保関の関銭をかすめとるなどしたので、京極政経は全16年、経久追放の命を出した。応じたのは出雲中・西部の**三沢**・三刀屋・朝山・塩冶・古志その他で、意外に多く、経久は守護代職を剥奪され流浪の身となった。

横田庄内の仙洞御所（院）御料所代官安部氏は、3代宣時（又五郎）は、明徳の乱后10年振りに代官に復した。

1430（永享2）年安部氏は開拓でできた稲田に家を設け、代畑といった。そして宣時の子又次郎16才を住まわせた。又次郎はのち4代を継いで宣豊といった。御所（院）公用で船で上洛の途中、暴風雨にあい、敦賀の港にたどりついた。その間稲荷神を念じたことが上聞に達し、許しを得て伏見稲荷神を勧請し、宅地内に祀った。今も現存する。

この頃日野勝光は院の執権職。1509永年6年、三沢氏が藤が瀬城を築いて入ると、代官を退いたと安部家の記録は誌している。

将軍義政と東山文化

義政の母重子は義政を溺愛し、甘えん坊に育て、妻富子も勝気であり、日野勝光も幕政に口をはさみ、義政は次第に捨てばち的な現世逃避をした。その中から生れたのが東山文化といわれるものであるといえる。

だが義政は幼にして風雅の素質をもち、文化人であった関白一条兼良が、義政を評して、「光源氏の再来と見まがうほどの優美」といったという。18才の時後花園帝から「義成」の名を賜わったが、成の字の中に「戈（ほこ）」をふくむので、武威より王道の政治をと「義政」としたという。

猿楽を盛んにし、銀閣寺を建立し、こゝに設けた東求堂（とうぐ）は草庵茶室の源流といわれ、多くの美術品、茶器も集め「東山御物」と呼ばれた。一休の下にいての ち佗茶（わびちゃ）の祖となった村田珠光に「珠光庵主」の額を、のち池坊の始祖となった池坊専慶に「花道家元」の号を与え、喫茶を茶道へ、挿花を華道への道も開いたという。（義満の皇位簒奪計画は次号の「補遺」で）（高橋一郎）

征夷大将軍 ②

——出雲人とのかゝわり

多賀城（現仙台市の北東）に国府とならんで置かれたが、801（延暦20）年征夷大将軍坂上田村麻呂が胆沢（いさわ）の蝦夷にとどめをさす大勝利を収めてから、こゝに鎮守府も移された。従って鎮守府将軍も移っている。

これに対して征夷大将軍が置かれるのは、蝦夷に大乱があったりなどし、特別に大軍を興す

鎮守府将軍

征夷大将軍とほぼ並行して、同じ蝦夷経営のために置かれた軍政官に鎮守将軍がある。10世紀以降は鎮守府将軍と呼ぶ。

この将軍は、蝦夷の統治、警固のために駐留する鎮守の衛卒たちを指揮する守備隊の司令官であって、その軍政府として鎮守府が置かれた。奈良時代には

ときにその最高指揮官として任命されるものであるから、臨時の軍職であって、この時は奥羽国司はもとより鎮守府将軍もその指揮下に編成されるから、位はそれらより上位の者が任ぜられた。従ってよほどの大事でもない限り、要職であるが常置でなかったから、任命されていない。

のちの源頼朝の征夷大将軍とは、一方では京都朝廷に対して東国の軍政権を独立させるためのものであるとともに、他方では、東国における他の現地諸軍職（特に平泉の藤原秀衡下に組織された陸奥国守り鎮守府将軍体制）に対する優越支配権を正当化するものであった。このことは後で詳述することにして、坂上田村麻呂時代までの征夷に伴って生まれて来た俘囚について述べて置く。

俘囚　**出雲**の俘囚の乱

8世紀ころから律令政府に帰服した蝦夷（古代奥羽地方の住民で、異民族視されていた）を俘囚と称し、全国各地特に関東以西に移配して同化策をとった。

798（延暦17）年政府は相模・武蔵・常陸・上野・下野・**出雲**等の諸国に勅し、「帰降の夷俘、徳澤是れ憑む、宜しく毎に撫恤を加え、帰望無からしむべし」としている。

延暦19年には**出雲国**へ新たに俘囚60余人が配置されている。おそらく出雲へはかなりな俘囚が移配されたものと思われる。しかし、俘囚はなかなかなじまなかったとみえ、全17年の太政官符に「件の俘囚等、つねに旧俗を存し、いまだ野心を改めず。狩漁を業となし養蚕を知らず。加えて以て居住定らず。浮遊すること雲の如く、調庸を徴するに至れば山野に逃亡す」という状態であった。これに対し、政府は爵位をあたえ、課役を免じ、衣服を給するなど、かなり忍耐強く懐柔策をとった。

ところが、この政策の優遇策よりもさらに輪をかけた優遇したのは、**出雲介**石川清主（国司の次官相当を介という）である。

すなわち俘囚の冬服は絹と布を混給すべきところを、清主は絹のみを給し、各人に剰田一町ずつをあたえそれを農民に作らせた。とくに新しくやってきた60余名の俘囚に対しては、おのおの絹一疋・綿一屯をあたえ、56日ごとに饗応し、毎月一日には訪問してようすを聞き、そのうえ農民を使って俘囚の田を耕作させるなど、まるで賓客に対するような優遇をしたのである。清主がなぜ、このような常規を逸した過分な優遇をしたのかわからない。

俘囚へのこのような同化策は政府の出費を増大させることになったので、9世紀になると、政府はしだいに強圧策に転じた。

その結果、各地で俘囚の叛乱がおこった。**出雲**の**荒櫃の乱**が起っているが、全国的にも早い例という。（「荒櫃」とは叛乱の首領の名前か、「荒々しく強い」という形容語なのか明らかでないが、出雲でおこった俘囚の乱である）

荒櫃の乱は弘仁4年におこったと考えられ、かなり大規模なものであったらしく、その乱のため、穀倉地帯の意宇・出雲・神門三郡の未納稲16万束が免除され、さらに出雲一国の田祖が免じられている。乱の中心は島根郡から国府のある意宇郡へ発展し、農民の反抗もこれに合流したようである。

注目すべきは、叛乱を征圧した功によって、遠胆沢公母志にうえ外従5位下が授けられたことで、俘囚のなかにも叛乱の鎮圧に加担する者もいたのである。

仝5年2月15日、「**出雲**国俘囚、吉弥侯部高来、吉弥侯部年子に各々稲三百束を賜ま。荒櫃の乱に遇い、妻奴を害せらるるを以てなり」（類聚国史）とある。俘囚は妻子と共に移配されていた。ある国では「父母と共に皇化に帰し野心を聞かず、孝行已にあらわれる。特に位三階を進める」という記述もある。

俘囚優遇に対する別な考え方

柴田弘武の意見では、**出雲**の国司が優遇したのは、和鉄製錬や鍛冶技術をもつ俘囚であったからだろうとしている。全国各地の地名「別所」が俘囚移配地で製鉄と関わることを示する考えると、大和50、武蔵39、遠江20、常陸19、近江18についで、**出雲**は6位17か所の別所があるという。

これを認めると俘囚優遇の理由が明らかになるという。（俘囚の別所地名については、「鉄と俘囚の古代史」に）

玉湯町の玉ノ宮製鉄遺跡は8世紀末のようであるが、これが別所谷にある。また最近発掘された頓原町の板屋Ⅲ遺跡は縄文

（4頁5段中ほどへ）

斐の上川柳十月の句

母の忌や思い出話し泣き笑い　藤原千代子
離乳食婆ばも一緒に口を開け　森山悠子
こおろぎの声しずまりて冬案じ　足立玉恵
言い違い気付かぬままに会議する　石原冬明
好きな山味覚の茸も夢に出る　真綿よし子
大人気今は邪魔もの扇風機　渡部ミツコ
豊作も凶作の穴埋るだけ　藤原のぼる
講師も禿げ生徒も禿げて並んでる　児玉哲呂
豊作に子等への米も重くなり　安部春恵
のど元を過ぎて暑さを恋しがり　松浦亜以
あの酷暑米豊作でありがたい　安部正子
猛暑でも虫は平気でなっぱ食べ　児玉えみ
留守居してハイと応えて何んだっけ　高木凡太
人生の初めと終り紙おむつ　横山まこと
楽しい日続いて不安ふとかすめ　松浦久寿子

前号訂正　3頁下段23行　光孝帝　4頁2段3行　討伐軍

夏から秋へ

湯の如き花立ての水に母の忌の斎は冷たき素麺ときめる　永井弥生
間引菜と秋刀魚の夕餉ととのへて老いたるふたりに恙もあらず　〃
広庭に萩の白花たわたわと揺れに揺れつつ風はもう秋　岡田時子
修羅の心とみにうすれてうからのねぎらひくるるを素直にうけぬ　〃
かきわけて大豆畑をよぎるとき今朝も作業着は少し濡れにし　常盤はるやま
黄を帯びる里芋の葉に置く露の今朝も少なく暑さ増すらむ　〃
火に逝きて半歳を経ぬみどり児の新墓つねに花に埋もる　野村節子
犬小舎のかたへに植えし菊数本黄色が咲きて老犬眠る　〃
夕顔のほのかに匂ふ窓ひらき秋を奏でる虫の声聞く　安部夕波
乾きいる土のいのちのよみがへる夕べの雨を聴きつつ眠りぬ　〃

柴栗句会十月抄　簸の上短歌会

縞柄が似合ふ初老の敬老会　としお
木犀の香や縁側に髭を剃る　古志
秋日和缶を転がし下校の児　月舟
秋愁やヘルプの言葉優しかり　和美
秋彼岸老いにし母に歩を合す　信子
老いし女野菊無心に摘む哀れ　房子
全身もて至芸の極致や秋舞台　白虹
コスモスの花ゆれて旅に出たくなり　美紀子
無縁仏小さき墓碑へ萩の花　一華
古着みな思い出ありや秋袷　富江
地に帰るトンボ秋日にじゃれて見ゆ　美代子
牛追ふて歩く老農霧の中　夕峰

史料断片②

——「仁多郡古代中世編年史料集」草稿から

賑給（貧民に対して政府が米塩を給与すること）

前号で、文徳実録・三代実録の中にみえる、**仁多**飯石両郡の賑給についてみたが、『類聚国史』（菅原道真編の勅撰史書。『日本書記』以下五国史を部門別に分類して収録したもの）によると、出雲・石見では、701（大宝元）年から883（元慶7）年までの180年間に31回の賑給をうけている。

律令制下の農民達は、祖庸調（現物税）・雑徭（年60日以内の無償労働の義務）・出挙（国が春に官稲を営農資金の名目で貸し付け、秋に3～5割の利稲とともに回収。資金がのち租税的となる）など、中央政府の過酷な収奪に苦しんだ。そのみじめさは万葉歌人山上憶良の「貧窮問答歌」がしめしている。そこで農民の劣悪な生活環境は、わずかの天候不順でも直ちに貧窮のどん底に落ちた。

農民は過酷な収穫に対して、逃亡・浮浪によって戦をいどんだ。

神火事件

これは重課に苦しむ郡司、土豪層も巻きこんだ農民たちが、税をのがれるため、証拠となる正倉（官倉）の官物を焼くと、国司は管理の責任を追求されるので、それをのがれるため、中央政府に対し、神火によって正倉が焼けたと報告する、政府も最初はそれを信じたらしく、神火の初見史料である天平宝字7年（763）の勅に（続日本紀）、「神火しばしば至り、官物を損ず、これ国郡司等、国神に恭しからざる咎なり」とある。ところが、812（弘仁3）年の太政官符には、責任を避んが為につねに神火と称すと、神火の本質を見ぬくようになった。

814（弘仁5）年の太政官符によると、右大臣藤原園人は次のように奏上している。

国司の都合ばかりを考えるので、農民は苦労し正倉を焼いている。国司の不正をただすべきであると。

8世紀後半から9世紀にかけての地方政治の乱れを示すものであるが、注目すべきことは、国司の不正と、そのためにおこる神火事件は、「彼の出雲最も此類多し」といっていることである。9世紀初期における出雲国内の不穏な世情を物語るものである。弘仁4年に起きた俘囚の乱（別稿「征夷大将軍」②参照）にも農民が参加しているのである。そのために意字・出雲・神門三郡の末納の稲16万束を免除しているのは、これによって乱を拾収したであろうと考えられる（日本紀略）

こうしたことは石見でも起り、884（元慶8）年に石見国司襲撃事件という、より積極的な闘争が繰りひろげられた。『三代実録』にくわしく記録されている。

（2頁下段より）

・弥生から奈良時代の住居趾も発掘されており、西日本では珍らしい、円筒形の竪型炉が出土している。それが東北地方に多いから、俘囚の移配に伴う、製鉄技術の伝播ではと、いろいろの推理が生まれてもいるが、今後の出土例や時代測定その他の判定にまたねばならない。

〈お願い〉

印刷所の協力で頑張ってきていましたが、一月号から若干値上げをお許し頂きたいと思います。

— 会員頒布一部百五十五円／六九十一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所 —

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第236号(12月号)
1994.12.3(M127.T83.S69)
奥出雲編集集団
横田史談会
©

征夷大将軍③

木曽義仲の任命

征夷大将軍の歴史のうえで、重要な転機をなすのは、木曽義仲の任将軍の事実であるという。源頼朝の任将軍は、義仲が始めた新例を固定化したものという風にさえ、みることができるからである。すなわち寿永年中、義仲が奏請して征夷大将軍に補せられたのは、「征夷」の名称になんらかゝわりがなく、将軍の名を仮りて天下の兵権を専らにせんがためであったが、目的を達せず敗死した。

頼朝の征夷大将軍は、義仲のこの意図を承けて、達成しなかったことを達成した。職を拝して総国の総追捕使を置く事を許され、幕府を東国に卜して、天下兵馬の権とその掌握を達したのである。

義仲の征夷大将軍は、古代の征夷・征東の形式に従って、現在の政敵頼朝を朝敵として討つというものであった。新らしい東夷・東国の敵を、朝敵・国家の敵として討つものであった。

坂上田村麻呂の後任文屋綿麻呂が、811（弘仁2）年に任ぜられてからのち義仲まで、370年後任はなく、（この間関東の平将門の乱の時、藤原忠文が940－天慶3－年に任ぜられているから、それからでも240年の歳月が経っていて）義仲がまったく新例を開いたものである。この義仲任この意図を承けて、達成しなかったことを達成した。職を拝して総国の総追捕使を置く事を許され、幕府を東国に卜して、天下兵馬の権とその掌握を達した

源頼朝の征夷大将軍

この征夷大将軍を歴史的にしたのは頼朝である。この将軍の名の下において幕府という形の武家政権を創始し、日本史の中世を制度化し、江戸時代末まで700年にわたる封建制度のありかたを定めたのである。

頼朝にとって「東国領掌」即ち「東国行政権」を握る武家政権が主張であり、「鎌倉殿」と呼ばせたのである。東国支配権として関東武家支配をその頼朝にして鎌倉幕府を開いた。

朝敵の立場を脱して従二位に進んで、まったく公卿の班に列しても鎌倉に住んだ。これは都における朝廷秩序とは体系を異にする、東国に独立した支配の体系であることを京に主張したのである。従二位権大納言に進み、右近衛大将になっても、東国常任の武門支配権としての征夷大将軍を要求し、1192（建久3）年に任命された。即ち東国支配、武門の東国経営を権威づけとしたのである。

しかしこの任命も後白河法皇の反対でできなかったが、法皇の死で実現した。義仲にさえ許したものがなぜはじめにできなかったかである。それは在京官として節刀を賜い、全権を委任する形をとらない征夷大将軍は認めないという理由からである。

義仲は強要したが在京し節刀を親授されたからである。（節刀―中国の制にならい天皇が将軍や遣唐使の長官に賜った刀。天皇の権限を代行する意味をもつ）

その間の経緯は略すが、頼朝はそれを果したという新らしい点があった。そして鎌倉幕府の実質的成長は、1186（文治元）年の諸国総守護職ならびに総地頭職補任であって、総合御家人総領主権として、諸国総追捕使としてもっとも権威ある地位に置いた時からである。

2代頼家、3代実朝と征夷大将軍と続くが、2代は総領の甚六で、頼朝代行の尼将軍政子の指導政治で、その下での北条執権体制が始まるまでの、つなぎ的にしか考えていない。力関係はそうであるが制度上はこの政治形式が最終的に定着し、幕府＝将軍体制を確立したのは、この時代であるという。

将軍の中味は諸国総追捕使＝総守護職で、別名で全国国々の守護の統治権者であって（表）、その軍事警察権行使の代償としての総地頭職、全国津々浦々の地頭の統治権者（裏）であったのである。征夷大将軍はその地位の儀礼的追認の形式であった。この点をしっかり認識しないと、天皇と将軍の関係があいまいになる。（別の機会に）

「諸国総守護職」は鎌倉殿の固有の権利であるとし、武家慣習法上の地位であって、これが武家政権存立の要件と考えていた。

そして征夷大将軍は朝廷から発生的に与えられるものと考えていた。頼朝がなくなって直ちに頼家は、総守護職と総地頭職とになったが、征夷大将軍になったのは3年6か月経ってからである。

3代実朝の時からは、最初から征夷大将軍に任じられて、鎌倉殿―御家人の頭梁―の地位の経承が行われるとなり、幕府主権者、武家の唯一の最高の君主形式とする伝統が確立したのである。

以来鎌倉幕府の威望は強力に全国的に及んだ。単なる「東夷を征する職」でなく、まさしく「四夷を征する職」であった。鎌倉幕府の最高君主は鎌倉殿で

征夷大将軍③・日野家と横田庄（補遺）・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

あった。その支配権は東国沙汰権（沙汰権＝政務を裁断・処理する権限）で、その行使は関東沙汰と呼ばれた。その命令書は関東御教書・関東施行状といわれた。鎌倉幕府は東国の武門政権で、関東幕府そして全国幕府であったということになる。

室町将軍の特色

鎌倉時代は、公家と武家、朝廷と幕府、天皇と将軍とは、二つの政府、二人の国王権を争うものになってはいたが、鎌倉幕府はその将軍支配権を形式的には朝廷支配の下に位置づけ、地域的には東国支配にその主たる権力行使を限定する形をとって、二つの王権を争う対立は表面化しなかった。

ところが14世紀建武中興政府のもとでは、征夷大将軍の独立は否定されて、朝廷内武権に回収された。公家一統というのは、幕府的なものを朝廷が合わせ行うことを意味した。

しかしやがて組織をもつ武士は、武士による幕府＝将軍制の復活を要求し、天皇も摂政関白もすべてのみこんだ。幕府が一統政府であり、したがって将軍が唯一の政治主権であるという政治形式を生み出したのである。

建武の強気の公家一統主義が反動として生み出したものである。そして朝廷に対する公家（公卿諸家）に対して、公方・公儀という言葉が、将軍の地位をあらわす敬称となって来て、本来は公家と同じく朝廷について称せられたのが、征夷大将軍の専称となって、幕府そのもの、公武統合の政府となり、将軍は新公家になっていった。

そこで3代将軍義満が、「日本国王」を称し、道鏡の例にならって、みずからを法王と考えたのも行きつくところであった。死後「太上天皇」と尊号を贈られた。それも公家の方が武家に精神的に屈服して、「鹿苑院天皇」に少しも抵抗を憶えないところまで堕落してしまったのである。そうしたのである。そして「室町国王」「足利天皇」に祭り上げられるところまで、将軍権威を悪化した。これらは足利権威の上昇ではなく、公家権威・下降によって生じた変革であった。

その後戦乱に明けくれ、よれよれの主権者となった。天皇も公家も命運をもとにし、政治的にはほとんど滅亡と言ってよいほど式微に落ち込んでしまったのである。

鎌倉時代や江戸時代の朝廷のように、どのように圧迫されても、締め上げられても、とにかく武家に対して一線を画しておれば、武家の衰微を、公家の興隆の機に転じうる好機もなかったわけではないが、室町朝廷のように、公家も足利べったりの政治では、身も心も許して一体の関係になっては、一蓮託生になるよりほかはなかった。

中世の**仁多郡**の古文書をながめて、右に述べたことを感ずることは少ないが、このように知ってみると、足利尊氏から義満にかけての時代の姿勢を、垣間見ることができるようである。

それ以後は、鎌倉殿の影も朝廷の影も、古文書や公家の人々の日記類にも**横田庄**は全くみられなくなり、領家や守護大名、地頭の文書が多くなってくる。

別稿「横田庄と日野家」（補遺）参照の程を。次号では江戸幕府の将軍の特色に触れる。本稿は岩波講座「日本歴史」や、高橋富雄の著作によるものである。

横田庄と日野家（補遺）

――足利義満の皇位簒奪計画――

緊迫する公武

1371（応安4）3月、後光厳の譲位と院政開始により後円融天皇が践祚したのは14才の幼年であった（いずれも北朝）。この時将軍義満も幼少で（後円融と同年で、いとこ）、管領細川頼之の手で幕政が行われていたが、対公家協調路線で、慎重な政策と相まって公武の関係は比較的安定していた。

'82（永徳2）年後小松天皇（北）が践祚して後円融が院政を聴くことになった。正月征夷大将軍義満は左大臣に昇進、こゝに同年の衰退を背負う天皇家の後円融と、日の出の勢の足利家の将軍義満が、国政の場で相まみえることになった。後円融が――仙洞御料所横田庄の主――'93（明法4）年に没するまで、2人の間で激しい権力斗争が行われた。

義満は祖父尊氏、父義詮と違って、征夷大将軍のほかに王朝の公卿として最高位まで昇りつめ、天皇家との奪権斗争を行う考えがあった。

かって13世紀初頭の承久の変の後鳥羽、14世紀初めの元弘の変の後醍醐は、いずれも危機の天皇家の君主であったが、幕府は決して天皇家の王権奪取までは考えていなかった。だが後円融は義満の挑戦をうけて、歴代天皇ではじめて、「王位を奪われる」という恐怖感を抱いたと思われている。

宮廷内の実力者で摂関家の長老で准后二条良基をはじめ、後光厳上皇に仕えた二品尼宣子までが義満に肩入れをした。義満の正室日野業子は、宣子の姪であり、結婚の媒介者でもあった。

こうして廷臣たちは争って義満に追従阿諛することになり、義満が他人の美しい妻女を所望して側室に入れることは有名で、公卿や義満の弟義詮や、日野家の当主資康も、差出しいずれも栄達を得て、妻を取られたというみじめさは微塵もなかったという。後円融の孤立感は一入深まっていった。

後小松天皇即位

即位の大礼をいつ行うかという問題も、義満は二条良基と協議し、上皇の勅許なきまゝ定めるという状態であって、後円融は数々の疎外感から種々の噂さをばらかれ、ますます孤立化し苦悩は重なっていったようである。それは後円融の周辺に、義満に立ち向うだけの老練な廷臣がいなかったからである。しかし義満の天皇からの奪権という本格的行動は、明徳の乱後、後円融の死の'93年後のことである。

廷臣・僧侶の官位叙任

公卿（廷臣）の官位は、年にいくたびか回ってくる恒列の臨時の除目（人事異動）によって決定発表された。

この人事異動一覧を示す原案である「折紙」が、後円融の死後、義満の手で作成されるようになって、形式的にも名目的にも任命権者の地位に義満が就いたことを示すようになるという。恐らく死ぬまで手放さなかったといわれる。

さらに高級の僧官・神官の辞令についても同様の方向に進んだ。

さらに「王法・仏王は車の両輪」といわれた仏教を牛耳っておくため、今まで皇族の多くが入室した多くの有力寺院の門跡に対しても、義満の子弟を入室させていった。南都の興福寺はこれに最後まで抵抗したが、この寺をのぞくほとんどの有力寺院は、義満の子義持が将軍になった時代までに、そのもとに組み入れられてしまった。

国家祈祷権の獲得

宮廷祭祀はこの間衰ろえながらも、律令祭祀の基底にある神祇や神道が、天皇家の祖先としての性格をもつものであるので、それを上廻る「武家の祭祀」「国王の祭祀」という、新らしいものを構築せねばならなかった。そこで考えられるのが、義満の依るべき宗教的権威は、神祇をのぞいた仏法と陰陽道となってくる。

当時の国家的祈祷としては、朝敵・謀叛人追討や、天下静謐・地震や慧星などの天変地妖を攘う修法である。

1346（貞和2）年、足利直義が幕府主催の密教修法を行ってから、'70（応安3）年、天皇だけが主催する天変祈祷を将軍義満が行うと、この主催権は皇室から足利家に移ってしまった。こうした情勢を考えながら、当地方の**岩屋寺**・鰐淵寺等の義満の願文を位置づける必要があることになる。

そして最高の祈祷主催者、最高の司祭となるために、征夷大将軍を辞し（'95広永2）、義持に譲ったが、実権は手放さず院政を敷き、西園寺氏の山荘を接収して、壮厳な北山第を造営し、室町第から北山第に武家の政庁を移し、最高政策を決定し、国家最高の祈祷の祭祀もこゝで行った。

今日金閣寺（鹿苑寺）を義満の山荘跡というのは誤まりで、国家の中心的な政庁であり宮殿であったことである。

祈祷は高僧によって宮廷のそれより重視される傾向となって、朝廷のそれに消極的・不協力的となっていった。（財政上の問題がひそんでもいた）僧侶以外はすべて廷臣で、義満の他は武家の出席もなく、国家的公的なものとなっていた。

叙任権と同様、祭祀権も継承したことをあらわしているし、地方の寺院にも及ぼして行った。

柴栗句会十一月抄

菊枯れて人形の袖綻びぬ　浅野としお
鳥髪の嶺借景に今朝の霜　糸原古志
立冬の宇宙の何処かで音生ず　小川月舟
月が画く己の影のさむざむと　恩田和美
天幕の内に溢るる菊花展　加納信子
賑わいの終りし町角木の葉散る　楠房子
櫓の軋み海より冬を運ぶ音　高木白虹
うつむけばそっと肩なで秋桜　中澤美紀子
審査待つ秋陽へ跳ねて錦鯉　新出谷一華
紅葉晴れ孫と遊んでひと日老ゆ　錦織富江
蔦紅葉からんで今日もあざやかに　峯石美代子
杣の秋遮断機上る踏切場　渡部夕峰

斐の上川柳十一月の句

皺いっぱい作って老いのいい笑顔　松浦亜以
足音で息子の機嫌すぐ分る　松浦久寿子
もう少し待ってと結論先送り　藤原のぼる
呟払いそれが挨拶すれちがい　高木凡太
柿もいで荷物の詰めに一つ入れ　藤原千代子
忍び寄る寒さ猛暑を恋しがり　安部正子
豊作で文化まつりもえびす顔　安部春恵
茶をすすり思いは紅葉から雪へ　田中有樹絵
今日だけは婦人検診用がない　児玉哲呂
趣味多忙やっとの思い間に合わす　真綿よし子
野球ファンテレビの前で揉めている　渡部ミツコ
婆さんを叱れば孫が向って来　藤原英生
暗やみにピーポーみんな顔を出し　児玉えみ
珍らしく肉まんふかし家庭の日　足立玉恵
赤い柿高所恐怖で見てるだけ　横山まこと
足らないで騒いだあとの米余り　石原冬明

前号訂正　3頁2段22行輪をかけて優遇

さらに陰陽道を重用し、中国崇拝思想に強く傾いてもいたのである。(これについては略す)

岩屋寺などの古文書にみられる、「天下静謐」「凶徒退治」の祈祷の指示はこの一貫であって、いえば遠大なる王権簒奪計画の一環であったとみられるのである。

改元・皇位への干渉

改元については鎌倉幕府以来幕府の政治に利用されて来ていたが、義満は次第に主導的となり、「明徳」を決める時も義満の〝仰〟が、後円融院によって呑まざるを得なくなって決定しているのである。

さらに皇位継承に干渉が行われており、南北朝合体の条件に両統迭立が入っていたが、義満としては当然皇統は北朝の後小松一統にのみ抑え固める考えであり、そのように進んだ。(その違約を責めて後南朝の叛乱がのち、繰り返へし勃発した)

そのためには種々の手を打っているが省略する。伏見家の家司庭田経有の日記には、皇祖以来の皇統が断絶するとの危機意識を表明し、義満の野望をみてとり、警鐘をならしているという。は明帝に対しみずから臣を表明した。

日本国王への道

中国の記録では、二度の日本から「国臣」の国書に府し、「日本は明を盟主とする東アジアの冊封体制の中に入った。

これから日中の公式な国交(平等ではないが)が成立し、日本国王」のものでないと認定されず相手にされなかった。そこで義満は将軍をも天皇をも超越した立場、「国王」となることを考えた。詳細は略すが、1403(応永10)の明の永楽帝へ宛てた表文に、「日本国王臣源表す　臣聞く……」ではじまり、署名「日本国王臣源」とし、義満は、明銭が公定貨幣として流通頒賜された何万貫という銭貨があった。そして室町期のわが国の貿易の利益があり、義満が明帝から

十字の花の　簸の上短歌会

紫蘇の穂をこぐ膝の上に尺取虫リズムをとりて屈伸しゆく　永井弥生
散りしける十字の花の木犀を小さき熊手に寄せる日のくれ　人
廃屋の池のあたりか小春日を菖蒲は一本濃き紫に　人
裏川の溢るる流れに逆らひて沢蟹ひとつ底にはりつく　常盤はるまさ
飼われるるものの如くに夜々背戸に猩寄りくる子猩もつれて　人
炎天に弱りし蒟蒻(こんにゃく)は伸びわるきまま枯れ色に　人
峡に秋来る　人
老犬は日ぐれの道をほのあかるきしりうどの花のもとによりゆく　野村節子
無病息災をなぞり夫の磨く瓢箪六個それぞれの表情を見す　人
菅笠に同行ふたりとしるされし遍路の姿が夕陽に浮かぶ　安部夕波

わが国は東アジアに冠たる武器輸出国の地位を築いたという。

このような東アジア交易圏の成立は、国王の国際的認知という政治的効果を生み、朝鮮との間にも適用され、回礼使、ついで通信使(本誌192~4号)による日朝間の外交ルートが成立した。

そして義満は「中国崇拝政策」を押し進め、三百人にも及ぶ接遇にも、粋をこらし、輸入品の工芸品などの唐物崇拝を、明銭の伝播力によって国内に広く行きわたらせた。

そして義満は弟義嗣の元服は内裏にて行い、立太子の礼に准じて行ったのである。これは皇位を後小松に禅譲を強要するか、後小松の病死を待って、義嗣を天皇に据え、子義持はそのまゝ将軍として、足利氏の独占で政権を磐石の安泰に置く考えだったとも思われる。しかし天は義満に味方せず、元服の3日後病魔に冒され、不治の病の床に着いたのである。

その後、和漢の学に通暁した後花園によって、天皇家の権威が回復へと向うのである。(本篇は義満の10万本日本刀輸出の

わが国の製鉄・造刀の実態追求関連のものであり、有力武将の古文書の探究を加えて稿を改めて述べたい。本稿は今谷明氏の論文に負うものである。)

西陣(にしじん)(歴史・地名)　京都上京区の北西部の総称。

地名の由来は1467(応仁元)年に勃発した応仁の乱の際、山名宗全が率いる西軍の陣が置かれたことによる。乱終結から10年を経たころ、すでに西陣という地名として定着したという。

平安京の創設以後この地域には織物に関わる町があって、織手たちが貴族等に高級織物を供給していた。応仁の乱の際には他国へ離散するということもあったが、乱後帰住し織物の生産を再開し、これが現在の西陣織の源流となった。江戸時代後期には織屋2120軒、機数約2580機を数えたという。京都の歴史と産業を支え続けた地域といえよう。

前号でお願いしましたが、一月号より一部一七五円にさせて頂きたいと存じます。

会員頒布一部百五十五円／〒六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第237号（1月号）
1995.1.7（M128.T84.S70）
奥出雲編集集団 横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

猪突猛進を排す・征夷大将軍④・懐古と感謝・俳句・川柳・短歌

猪突猛進を排す

——干支の効用——

十二支

今年は亥の年、すなわち猪（いのしし）の年という。

1子　2丑　3寅　4卯
5辰　6巳　7午　8未
9申　10酉　11戌　12亥

を十二支という。

これは月を呼ぶための符号であって、はじめから順に1月から12月まで月につけたのが、十二支の起源であった。木星（歳星）は12年で天空を一周するが、その木星の天空上の位置をしめすものとして、十二支が使われた。

はじめはいずれもその月と関係のある象形文字（ものの形を簡単にし太文字）であったとされるが、その符号が作られたのはいつのことか一部を除いてわからない。

中国の夏（中国最古の王朝紀元前21～16世紀 4,000～3,500年前）の時代では寅の月を正月とし、殷（夏に続く王朝前16～11世紀3,500～3,000年前）の時代には丑の月を正月としていたが、のち漢（2,200～1,800年前の時代）の時代から動物名をあてて十二支を呼ぶようになった。

1子—鼠　2丑—牛　3寅—虎
4卯—兎　5辰—竜　6巳—蛇
7午—馬　8未—羊　9申—猿
10酉—鶏　11戌—犬　12亥—猪

単に月をあらわす符号であった十二支は、後には月ばかりではなく、年や月などを呼ぶための符号としても使われるようになるが、このことと呼びやすさや、わかりやすさを狙って動物名をつけたことが、さまざまな迷信や俗説を生む遠因となった。

十干

甲　乙　丙　丁　戊　己
庚　辛　壬　癸

はもともとは、日を数える符号であった。1か月を3つの旬（上・中・下旬）に分けた一つの旬に含まれる10日間を指示した12の最小公倍数である60組となる。そこで61回目は還暦といって人生の祝となる。

歴史研究での効用

この干支にとらわれると、今日では生活がしにくくなって、困ることが多い。子年だからこう。丑年だからこうと昔はいろいろ制約もうけたが、今はほとんど考えなくなった。

ところが歴史研究で古文書の年代を判定する時には、極めて好都合である。

三沢為清が署名した文書がある。ところが年号がなく、単に「丁丑卯月十日」とあると、それはすぐに1577年の天正5年と決定できる。丁丑は60年に1回しか廻って来ない。為清は57才で死去しているから、天正5年と決定できるのである。貴重な手がかりとなる。

ところがただ単に十二支の中の「卯」とのみある時には決定については、いろいろの文書その他で考証することになる。

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と闇をてらせり
その塔のすがたかしこし
むさぼりて厭かぬ渠ゆえ
いざここゝに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

ものである。戦前は学校の成績をあらわす記号でもあって、順序を示す序数とされていた。

ところがこれが十二支と組みあわされて（干支）となり、甲子にはじまって、乙丑、丙寅……と続いて癸亥に終る。10と12の最小公倍数である60組となる。そこで61回目は還暦といって人生の祝となる。

今年は亥年—猪の年である。猪突猛進という。大変な年であるなどと言っても信ずる人はいないであろう。ただ慎重に事を運ぶようにとの戒めとするには

本誌の誌名の書体を先月号から改めました。揮毫はお馴染みの糸原風亭さんです。「横田文化」を「奥出雲」と改めて20年近く親しんで頂きました。かなり刷りずれも生じましたので、御厚意によって新しく揮毫して頂きました。島根書道界の重鎮米沢天涯さん（松江）が、「奥出雲」と改めた当時、その筆蹟を見て絶賛され、横田の人と知ってさらに驚かれました。それも当然です。風亭さんは現代日本書道界の雄であった、故上田桑鳩先生の直弟子で、現在横田町のホシザキ（星崎）冷器株式会社の社長糸原猪史夫さんです。

役にたとう。今年は

十干の2番の乙と十二支の12番の亥との組み合わせ乙亥で、60年先の2055年にまためぐって来る。

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

征夷大将軍 ④

—源頼朝を手本とした徳川家康は、頼朝がとった権限の限界をのぞき、将軍を天下人として江戸幕府を存続させた—

鎌倉幕府

すでに述べたように、源頼朝にとって、東国の王者たることは、東国の征夷を通しての四方の武力支配をすることで、それが征夷大将軍支配の基本であった。これは都に於ける天皇の正義とこれに基づく公家の支配に対して、西日本で育ったものではあるが、東国に住む王者としてはじめてこれから独立し、逆にこれに優越する正義を対置してゆくという、東国の道義であり、武家の論理の主張でもあった。頼朝は東国鎌倉に鎌倉幕府を開くという、全く新らしい歴史を開いた。だがしかし、それは、京都世界・朝廷政治の相対的独立を認めたうえでの武家支配にとどまっていたのである。即ち公武二元主義であった。

室町幕府は

東国を離れ京都で、京公方政府となることによって、公家政府を、武家政府の外に置くという、鎌倉幕府の二元主義、相対主義をとらず、公武混合的幕府の道を歩んでいった。武家という性格を曖昧不純にし、公家的性格に変身し、武門政権であることの要求も責任も解消し（鎌倉幕府と比較すると明らか）、ミイラとりがミイラになって、征夷大将軍、武家の長者ということを、単なる名目上にのみ、中味のないものにした。これは次の江戸幕府の将軍体制と比較すると明らかである。

足利氏につぐ織田信長や豊臣秀吉は、同じく廷臣武家（朝廷の臣たる武家）となって、長い乱世の中世の混乱を収拾した。これは、将軍ではなかったが平清盛が殿上人（公卿）である武士として歩んだ道であり、足利義満・義政が将軍であり公卿であった道と同じ方向である。

秀吉は将軍になって幕府を再興しようと、足利最後の将軍義昭の猶子（いわば養子）となろうとしたが、義昭は将軍は源氏以外にはなれないと拒絶し、歴史の威厳を示して、武家の背阜も示した。（家康はのち源氏の系図を求めて徳川氏の祖を源氏としたと伝える。）

ところが公家（公卿方）は、すでに足利将軍に天皇の尊号（記述）を捧げて恥じるところがなかった。そして落ちぶれた将軍義昭に猶子を断わられて引き下がった天下人秀吉を、公家側の右大臣菊亭晴季（横田庄にかかわりのあった公卿）は、それではこちらでと、いそいそと秀吉のため、関白太政大臣という、朝廷最高の座を明け渡し、源氏になれないなら、それ以上の姓もと、豊臣の新らしい姓まで用意したのである。地に落ちた公家の状況であった。

織田・豊臣の大臣関白政府は、古代的土壌に鉢植された、武家の伝統も甘えのうちに麻痺してしまったものであった。

江戸幕府

ところがこれらを見てとった徳川家康は、家康の武家主義は、信長や秀吉の甘えと感傷を根こそぎ取り払った専制主義であった。足利幕府のような京公方の先例をとらず、信長や秀吉のような廷臣武家の道もとらず、源頼朝を最大の政治指導者と仰いで、公家と距離を置く頼朝の方式をもすてて、（公武二元主義）これを構造的に否定・解体して武家一元主義をとった。将軍主権主義であり、歴史の妥協を徹底的にはぎ取ったのである。

頼朝の『吾妻鏡』と、承久の乱後編纂された政治・法制の諸問題に対処する51カ条の法典『御成敗式目』を手本として、家康は『禁中並公家諸法度』を定めた。これは天皇や公家をもすべてこの法の下に置く武家立法で、天皇主権を否定している。日本歴史上最初の革命憲法といわれるわけである。

江戸幕府の将軍政治は征夷大将軍があるべき武家の要求に徹して、公家の正義と支配とを系統的に破壊し尽し、日本史上、天皇政治・公家政治に制度的に終止符を打ったのである。

家康は義満のように、国王とか、まして天皇だのということをいわなかった。天皇とか朝廷とかいう畏れ多さ、尊さはそれとして置いて、別な将軍の尊貴の観念を打ちたてた。天皇・公家には情をかけることはあっても、一宿一飯の恩義にもあずかるものではないと考えていたから、家康の生涯には、錦の御旗がかつがれることがなかった。勅命や勅使が介入することを、家康はまことに慇懃無礼に拒否した。武は武によって立つので他の正義によって正当化してもらう必要はない。これが家康であった。「軍中、将軍の令を聞く、天子の詔を聞かず」。400年前、鎌倉の主従はそう考えて、幕府政治を発足させた。それが家康によって成熟し切った体制に結実した。朝廷に政治のかけらも残さない完全なる将軍公儀体制が、武家で完結する政治正義のもとに、3世紀徳川300年の天下政治を開くことになった。

江戸幕府の特色

奈良時代の前代に律令制度が中国の制度を範として確立すると、天皇は現人神、明神として日本を統合する神聖君主とされてきた。天皇の意志がつまり国家意志なのであり、その宣ることがつまり法規なのであった。

鎌倉・室町幕府がその独自の武家法を制定する場合でも、それは国の最高法規は朝廷法（公家法）で、ただその下の下級法規だけが武家法の掌るところであるという立前をとってきた。

ましてや、天皇や朝廷を外から抱束する法律というものはありえなかった。そしてこの不文律が、軍事的・政治的に無力になっても、天皇と朝廷が、日本における最終政治主権であるという慣行をささえていたのである。

1615（元和元）年の「禁中並公家諸法度」は、この不文律をくつがえし、国の最高法規の制定者は将軍であって、天皇でも朝廷でもない。天皇も公家も、幕府が一方的に制定して与えたこの法律によって、その法的地位を定められ、その政治的行動の基準も与えられる。これに従わないものは、天皇・公家すべて問責・処罰の対象になる。しかもその判断も一方的に幕府の権限に属する。

こうして出来た内容・性格の武家立法に、公家を代表して前関白二条昭実も、将軍・前将軍と並んで署名し、京都二条城に召集されてこれを読み聞かされ公家全員が、その順守を誓ったという。いってみれば50年前無條件降伏した敗戦国日本が、突きつけられた降伏文書に調印したと同様なものである。朝廷政治の政治主権は、こうして法的に消滅したのである。

来日した外国人が、将軍皇帝体制と呼んだり、備前国大名は「上様は日本中の人民を天より預り成され候」と将軍に言ったという。

徳川氏が家康を日光に東照大権現として祀って諸大名の総力を結集して東照宮を建立したのも、皇祖天照大神の神威を受ける天皇に対して、東国に新たな武家王統を開いた神祖という考えがあった。（既述の朝鮮通信使はいつもここに参拝している）

3代将軍家光の自筆文書の中には、天皇の神祖天照大神、武家の神祖八幡大菩薩、徳川の神東照大権現、そして征夷大将軍のこの四者の完全なる一体の上に、支配の基礎を置く将軍哲学が読みとれるという。天照大神も八幡神も天皇と一体であることから、東照大権現との合体を通して徳川将軍との一体へと進められた。そして武士は伊勢よりも日光に信仰も経済も心を注ぐようになり、やがて中国儒教の朱子学が幕府の国学として中心にすえられて行って、古来の国学は衰退し、朱子学によって武士道が完成してゆく。（完）

（本篇は高橋富雄の著作を中心として述べた）

—今年のNHK大河ドラマは将軍「徳川吉宗」。その時代は間接であるが奥出雲経済確立に影響を与えている—

柴栗句会十二月抄

冬至芽を探れる老いの一人ぼち　浅野　としお
鮫鰊鍋沖の漁火更けてゆく　糸原古志
孫の手に小春日握り日向ぼこ　小川月舟
咽喉乾き落ち葉の渓に伏して呑む　恩田和美
冬ざれの音して背戸の井手流る　加納信子
師走風ふところ閉めて客は去ぬ　楠房子
古家並思い出詰まる十二月　高木白虹
じりじりとヒタヒタとせまる冬の韻　中澤美紀子
街路樹へ秋日ことんと落ちにけり　新出谷一華
古井戸にこだわる余生木の葉髪　錦織富江
縁側にためておきたき冬日差し　峯石美代子
街へ出し序に訪ふて日記買ふ　渡部夕峰

斐の上川柳十二月の句

松葉杖つく嫁いとし胸痛む　安部春恵
武蔵丸首かしげてはぬっと立ち　児玉えみ
通帳がひきしおとなるお年玉　松浦久寿子
とめ袖の柄にもしたい銀杏の葉　足立玉恵
女房が朝から小言さんりんぼ　高木凡太
まだ若い言ってはみたが息が切れ　児玉哲呂
柿のれん昔懐かし風物詩　安部正子
孫の手を心配してるシクラメン　藤原千代子
柿の木が三食昼寝の鳥の宿　田中有樹絵
あの仕事自分がしたとほのめかし　松浦亜以
丸坊主ムースをつけてだれと会う　中林もりえ
戦友会一等兵が指揮をとり　藤原英生
師走来てどこも負けじと大チラシ　真綿よし子
見上げられ落葉になれば掃き捨てか　渡部ミツコ
当分は忘年会が暦埋め　藤原のぼる
戦友会赤い夕日に目がうるむ　石原冬明

いまのうつつ　簸の上短歌会

レーガンのアルツハイマー病告白に何やらふ　永井弥生
うっと素直になりぬ人言へる撫（なづ）の木いっぽん水一石船通山はいま　仝
撫もみじ　人
霜の朝陽のさし来れば見はるかす船通山は錦　野村節子
繡に映ゆ
二反歩の山の畑に五日目も来たりて夫と豆引　人
きをしぬ
日にいく度病夫のこぼす愚痴ききて老いわれ　岡田時子
ともに愚痴をこぼしぬ
虎刈りになるも礼言ふ病む夫の頭を刈りぬ日　仝
向の縁に
人知れずに熟柿の落ちるごとくにもわが命終　常盤はるまさ
をおもひみたりき
紅葉に染まりし大原寂光院訪ふ人まれに秋の　安部夕波
日暮るる
なわのれんくぐりて汲めるコップ酒街の酒場　仝
の夕べあたたかし　人

前号訂正　会員頒分一部一七五円

懐古と感謝

回りに　算盤があり　職人が住んで仕事をし、問屋さんが忙しくしているのを、いつも見て暮らしていたのを、大切にし、残して置きたいと、折々に関って来たのにすぎません。

横田の大きい商家の主婦だった祖母は、村上朝吉の苦労時代に関わりを持ったと言い、そのころの彼の算盤は今も我が家にあります。父は仕事柄毎日算盤を手にし、見取算は当時では自慢の腕前でした。私へ師範学校入学の祝いにと当時若い名工といわれた亀吉作の算盤をくれたのは、隣家の兄貴分幡さんで、以来ずっと今も愛用しています。亀吉は「二代朝吉」を襲名した、初代朝吉の孫です。

師範学校ではこの算盤で指導をうけ、戦中に算盤が小学校で必修となると教えました。戦後は日本一の腕前講師桧山氏を呼んで、教師仲間に指導してもらったり、中学生の競技大会の世話もしました。やがて日本商工会議所の珠算検定の、特別出張検定の誘置もできました。しばらくして、のち横田町誌編纂にしたがって、算盤のことも調べて見ると、かなり今までは、一方的なことばかりしか、言伝えられていないことがはっきりしました。期限も限られていたので、簡単に記述し、その後算盤組合の協力や援助で、休日を利用して調査を始めました。

名工の職人の一人ひとりを何度も訪問し、時には数人ずつ集まって貰って、歴史を師匠を、技術を生活を語って貰いました。

子供のころ雨の日、遊ぶ所がないので、よく近くの職人さんの職場の縁側に頬づえをついて、家内中分業でいろんな作業をされるのをみたものです。調査を始めてみると、凡てその仕事はわかっていたのですが、180にも及ぶ工程があるとは、思いもかけませんでした。しかも一つひとつ工程によって工具が違い、その使い方の工夫と苦心ばかりでなく、その工具が一人ひとりの工夫によって、生まれたものであることを知った時には、先人の努力と伝統の有難さをひしひしと感じました。温かい家族の協力が作品の背後にあることも記録し伝えなければと思いました。かって、珠や木屑を遊び道具にせがんでも、貰えなかったのは、捨てるところがないほど、巧く利用し細工されたからだったのだなと、ようやく気が付きました。

地元の名工の作品、工具も記録し写真に撮って分類しました。一方暇をみつけて、北は宮城県から南は鹿児島県の大隅半島の先端までの各地を訪ね、材料・作品を調べ記録し、出来たのが、『雲州算盤の今昔――その歴史と技術』であり、1977年（昭和52）松江文庫で出版、雲州算盤協同組合の努力で、発行部数では地方出版では抜きん出た上に、商業ルートに乗って全国各地に配付されました。組合にはお得意への贈呈もかなりあって大変にご迷惑をかけたようです。私の収益分100冊はすべてご協力頂いたお方に贈りました。その間に発見した種々のコレクションも組合の手によって買いもとめられ、作品・工具が多く集まって、これがのち完成した雲州算盤伝統産業会館の資料室の中心となりました。出版後間もない昭和56年創設の島根県ふるさと伝統工芸品振興委員会委員を委嘱され、くしくも雲州算盤は「島根県ふるさと伝統工芸品」の最初の指定を受けました。やがて国の「通商産業大臣指定の伝統的工芸品」となり、伝統工芸士の養成もはじまり、これにも協力することができました。昭和60年からは中国ブロック伝統産業審議会委員もつとめ、県の委員とともに今日に至っています。

国の指定後間なく、雲州算盤伝統産業会館が完成し、発展の基盤が確立しました。やがて算盤や木工の技術職人の後継者育成や工芸士の技術錬磨の機関が、横田町に設立されますが、その糸口を付けることが出来たのも幸いでした。

横田町はこの地の職人が120年まえの明治10年ころ、現代の型の算盤を開発した、雲州算盤の発祥の地であります。そして地場産業として全国の産額の7割を占めています。職人のそしてすぐれた名工が支えた町であります。

この仕事は私の暮らしや本職・趣味や研究の合間を縫うて、やってきたことで、全く皆さんのお蔭です。この度のことは全く恐縮の至りです。こんな良い郷土に育った恩返しの一つが出来たことを嬉しく思っております。町や業界の今後のご発展を願っています。（高橋一郎）

（横田史談会の高橋一郎代表は、1か月ほど前の11月に、第11回伝統的工芸品全国大会に於て、学識経験者4人の中に加えられ、橋本龍太郎通商産業大臣より功労者表彰を受賞しました。一冊子に載った文の一部を転載）

コウジ

（歴史）横田町大市の地名、本町通りは、カンコウジ（南安楽寺方面）・ナカコウジ（中央）・シモコウジ（北吉重橋方面）と三つの地域に分けて呼んでいる。小路、すなわち小さい道の意から発した語と思われ、小さい道に囲まれた小さい地域の呼称となったものといわれる。山陰地方で主として用いられている。各コウジに葬式組があり、村区分の最小単位である。

町場で多く用いられ、安永年間（1772～1780）の『物類呼称』によれば「小路コウジは京、江戸では横丁、大阪・伊勢松坂ではショウジ」とある。横田の街が16世紀に出現し、荘園として京都に関係があったからであろう。

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400―8―601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第238号（2月号）
1995.2.4(M128.T84.S70)
奥出雲編集集団
横田史談会
©

祭文と祭文語り・短歌・俳句・柳川

神事から娯楽へ
祭文と祭文語り
―当地方最後の語り部・亀嵩の菊川一休斎

大正末年のころ

小学校2～3年生の夏、盆が終った頃のことである。夕方いつもとは早く行水をさせられ（わが家にはすでに五右衛門風呂があったが、夏は大きい盥に湯をはって、汗を流すのが、習慣となっていた）、そして祖母好みのかたい糊のついた、肩がピント張った浴衣を着せられ、普段などは緒だけ結んで仕舞うのに、この時はその上にしごき（帯）をさせられて、水泳で日焼けした肌は、かたい浴衣に触れるといたい。祖母はしごきを結びながら、今夜は六日市の町尻の△△屋で祭文があるから聞きに行けといって、2銭の大きい銅銭を手に握らせ、弟と二人を押しだした。「まあまが時は用心すーだよ」と2声、3声声をあびせかけた。二人は一目散に街灯もない町を目指す町尻へと馳せた。△△屋の表座敷の最ん中には60燭光の裸電球がともされ、その下には箱の上に華やかな布が掛けられている。子どもたちも大分集まっていた。

祖母は二銭銅貨を渡す時「必ず縁側の箱の中に投げこむのだよ」と言ったが、誰も入れるものはいない。

（祭文語りを招く時は、世話人があって、愛好者や近くの家を門付けあるいて寄附を集め、一定額に達するとそれですましていた）。祖母は律義なところがあって、知らぬ風は出来ぬという考えだった。そんなことはあとでもいやという程聞かされたことだが、二銭銅貨は入れず腰にしめている、しごき帯の間へ入れてぐるぐるとねじって仕舞っておいた。弟と庭石に尻をくっつけて腰掛けてまっていると、やがて咳ばらいとともに入って来た祭文語りは、法螺貝いで声を出してから語り始めた。演題は「石童丸」だったのでわかり易く、固唾を飲んで聞いた。

（この話は小さい時から祖母や母から寝物語で聞いたものであった）しかし母から聞いた荒筋話よりもずっと長く、風景や情況も交え、声色も使われるから楽しかった。

次のものは大坂商人の女色恋物語りで、興味も薄すれ眼気を催し、弟はもう私の膝の上で鼾をかいている。ふと横を見ると祖母が浴衣がけに団扇片手の姿で聞いている。これなら弟のことは安心と、これも面白くないとしきりに私語している友達と、日中の水泳や魚取りの自慢話に興じはじめた。時々大人から叱られるとその時は舌をペロりと出して黙るが、しばらくするとまた始める。時には祭文語りが一きは高い声を出して注意を引くこともあった。

やっとのこと終ると祖母はぐったりとした弟を負ぶって帰りはじめた。六日市から大市へ渡る木橋（吉重橋）の上にかゝると、涼しい風が流れて、汗ばんだ肌が涼しい。しごき帯をといて体に風を入れようとすると、さっき忘れていた銅貨が、ころころと橋の上を転がった。祖母の顔をみるとけわしい。私がそれを拾うと祖母はさっきの△△屋へ、私の手を引っぱって引返へし、私には聞えないが勧進元の人達にしきりと頭を下げている。おわびをしているのだったろう。祖母はずっと昔わが家に嫁に来た時は、六日市やその町尻の人達には大変心安くしてもらっていたから、これだけでなく、すべてに心を尽していた。私はあの二銭銅貨があれば、一厘の飴玉が20こもかえたのになあーと、うらめしくも思ったものだった。

祭文はこうして、あちこちの祭の余興としても、勧進元の世話で公開されていた。いつの頃まで流行したのか、浪花節が流行し、やがて映画も時々上映されはじめると、途絶えはじめたようである。昭和一桁代であろうか。

亀嵩の祭文語り菊川一休斎

本名は宇治部岩一（1986明治19～1968昭和43）

祭文の全国的な調査を立正大学や仏教大学の研究陣が、かなり前からされていて、次第にその系譜や分布が明らかになりつゝある。山陰での祭文語りとしては、この菊川一休斎とその師である、鳥取県日野郡日野町の黒坂五区（旧黒坂村）の菊川歌丸（俗称げんさん）と、そのもう一人の弟子に、日野町本郷の川上熊一と人がいたことが現在わかっていて、一応当地の両地方日野郡、仁多郡では、埼玉県から伝えられたということになっている。菊川一休斎とその師の菊川歌丸は、埼玉県の菊川家4代目を継いだ人で、その師は菊川家3代の菊川一心斎といった。歌丸は黒坂に帰り、山陰、山陽の祭文語りの中心であったという。現在歌丸の家はあるが（現在は渡辺家）、かっての菊川家は三重県へ移住されたとも伝えている。

山陰地方の民俗学研究者の方々も、祭文・祭文語りについて

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

は手を染めておられないようであって、各方面に照会したが、明らかにできず、日野郡影山猛氏に尋ねたところ、古文書もないという。立正大学の研究者にこの話を伝えたところ、現地調査をされたというから、しばらくすると詳細が判明すると思うので、この文の修正や決定版をこゝで報告できると思う。

一休斎は21才頃から視力が次第に薄すれて、22才から歌丸に師事し、祭文語りを修業したのである。22才は明治40年頃であるから、私がはじめて祭文を聞いたのは、一休斎の40才代半ばのことであろうか。年の程は全く憶えがないから、歌丸が来ていたであろうかとも思われる。

数少ない貴重な祭文語りとして、郡内はもとより郡外各地へも招かれて、独得な節廻しで、当時の娯楽の乏しい時代に、人々に楽しみを与えておられたと言われている。

幸に、宇治部一休斎の歌祭文は、明治百年記念の敬老の日（昭43年5月15日）、亀嵩の有線放送の番組にのった、録音テープが残っている。満81才の一休斎の張りのある祭文語りの一節と、藤原信子アナウンサーの上手な質問で楽しめる。特意な語り物は、「石童丸」「八百屋お七」などであったようである。

祭文（もとの意味）

神祭りの時に奏上する言葉を一般に祝詞というが、祭文ともいうことが、古代から中世にかけて例がある。中世以降になると、

陰陽師　加持祈祷をする者

修験者　修験道の行者で兜巾をかぶり、篠懸を結い袈裟をつけ笈を負い、金剛杖を持ち、法螺を鳴らし、山野を巡りあるいて修業する者で山伏ともいう。

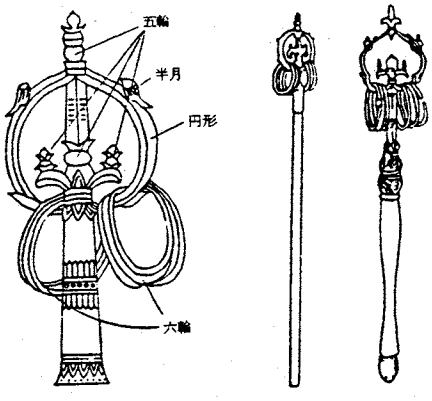
巫女　神がかりの状態になって、口寄せ（招き寄せた霊魂の思いを自分の口を通し願った人に伝える）などする女性。

などの手によって、山伏祭文・歌祭文・説教祭文などとして民間に広まった。

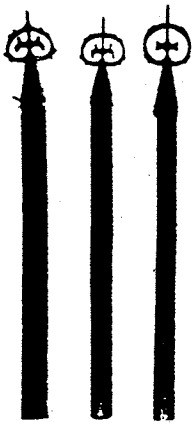
祭文はもともと神に願うことをのべたものであるが、のちには祭文は、独得の節のおもしろさから、信仰を離れて歌謡化し、江戸時代には、祭文語りによって三味線や法螺貝にあわせて歌われる歌祭文がもてはやされた。



法螺貝と金杖とを持って口演する桜川好玉氏
（「信濃毎日新聞」）



錫杖と錫杖頭（『修験道辞典』より）



桜川好玉氏愛用金杖

歌祭文・祭文語り

神仏混淆（わが国国有の神の信仰と仏教信仰とを折衷して融合調和すること、奈良時代に始まる。神仏習合と同じ）では、宗教行事が俗化の方向へとすゝみ、祭文はすでに平安時代から芸能化の傾向があって、祭文俗化の担い手は、山伏修験の者たちで、中世には室町時代には、山伏が祭文を俗化芸能化した、もじり祭文（著名な話の文句をかえて、滑稽なまたは風刺的な言いまわしにしたもの）を語り歩き、山伏祭文と呼ばれた。しかしまだ宗教的要素をもっていた。江戸時代になると、娯楽的祭文となり、大道芸能化し、錫杖（写真に、修験者のもつ杖、頭部についている環にさらにいくつかの小環をつけたもので、身を守たり、自分の存在を知らせたり、経をよむ時調子をとる。祭文語りはこれを1/3位の短いものにして持った）や法螺貝を伴奏楽器にして、音頭や結びの文句に祈願の形式用語を残しながらも、時事トピックス類を語り廻った。地方では都方面のニュースの情報源としても楽しまれた。そしてこの歌祭文が祭文と呼ばれるようになった。

元禄期（1688～1804）には三味線を伴奏楽器として、完全に芸能

化し、享保期1716～1736には全盛時代を迎え、山伏出立ちの者が錫杖を打ち振り、法螺貝を口にして語り、歌祭文では三味線を伴奏楽器として多彩な旋律をとり入れた。

そして「色祭文」「心中祭文」とも呼ばれて一種の「くどき」（調子にのせない単純な節廻しの語り）の調子もとり入れた。「八百屋お七」「お染め久松」「お夏十郎」「おさん茂兵衛」「お千代半兵衛」「おしゃん伝兵衛」などで、心中・恋愛・犯罪・姦通などの主人公を題材とし、歌詞を刷り物にして配りながら、門付として語り歩き、著名な神社の祭礼には小屋掛けして歌祭文を聞かせる。

門付芸として歌祭文を語った者たちは、室町時代以前の山伏の流れを汲む下級芸能人で、流れが二派あった。江戸時代に近江派は、はじめに法螺貝を伴奏楽器として「デロレンデロレン」と、合の手を入れたので、でろれん祭文、貝祭文などと呼ばれ、京都鞍馬派は、ちょぼくれ・ちょんがれ　などと呼ばれた。

また歌祭文に経文を交えた阿呆蛇羅経を語り歩るいたものもいた。



法螺貝

写真はすべて立正大学人文科学研究所年報第28号の小山一成論文より転載

貝祭文

一般的であったが、今わずかに残る貝祭文（デロレン節）について、立正大学の小山一成教授の研究の要点を引用しのべてゆく。亀嵩の宇治部岩一の菊川一休斎はこの系譜に属するとみられるからである。

前に述べた山伏祭文から発達した説教祭文が、近世後期には、江戸で盛行したため、デロレン祭文と呼ばれる貝祭文は押されて、武蔵国北部（埼玉県）に本拠を移し、やがて福島・宮城・岩手・山形・秋田・青森等奥羽地方に中心地を移した。

昭和15年当時山形県演芸共和会に属する祭文語りは70余名にのぼり、年中渡世の者30人で、県下の農山村のほか、宮城・岩手・新潟等の海岸地方まで巡回していたが、今は明治末期から大正元年生れの3人が生存しているが、高令化のために口演活動はなく、後継者もいない状態である。

ところが現在はるか西の江州（近江国）滋賀県にひとり熱心な、江州音頭玉居2代目桜川好玉がいる。その由来は次のようである。

伊賀（三重県西部）上野の山崎派祭文の元祖山崎東雲斎は、上州（上野国＝埼玉県）の小島大住院（大重院とも）の出身といい、宇治部・菊川一心斎の師である。鳥取県日南町の菊川歌丸も、元祖は武州小島大住院宜明であると名乗っていたという。（武州は武蔵国のことで広く、こゝでは埼玉県の部分である）

またほかにもそう名残っているものもいるという。現在小島には大住院はないが、小島に隣接する榛沢郡岡部村の山代に、万宝院の桜川雛山がいて、彼が江州に施して、近江国滋賀県神崎郡神里村において、西沢寅吉（のち桜川大龍）に祭文を伝授



桜川好玉氏の新調衣裳

寅吉は後輩の奥村久左衛門（初代真鋳家好文）の助力を得て祭文を音頭に仕立て、創始したのが江州音頭、正式の呼称「江州八日市祭文音頭」であると伝えている。これは貝祭文と密接な関係を保持して今日に至っている。

この江州音頭は、その後先の八日市の桜川大龍派（西沢寅吉）と八日市の真鋳家好文派（奥村久左衛門）の二流に分れる。

現在八日市真鋳家の流れを汲

想ひとつ浮く

簸の上短歌会

小山ひとつ隔てて向ひは片時雨友より返信（たより）今日もとどかず　永井弥生

足らざりし管理を言ひていじめ苦に死にいそぐ子供あとを断たざり　常盤はるまさ

山茶花も紅葉銀杏も柿の葉も土に還らむ雨に散り散る　野村節子

奥津城を囲む木立は落葉して白き墓標に冬の雨降る　安部夕波

柴栗句会一月抄

川はさむ街を沈めて山眠る　浅野としお
たわいなき初仕事なり眼鏡拭く　糸原古志
雑踏の流るる街の鰯の市　小川月舟
街はづれ寒灯寂し翳を追ひ　恩田和美
埋れ火の淡き思い出賀状来る　加納信子
亡父の事子に聞かせおく大晦日　楠房子
三杯の屠蘇に無口のはじけけり　高木白虹
初明り松の先より遠く近く　中澤美紀子
煩悩を抱きつしみじみ除夜の鐘　新出谷一華
足病みて大きく座る冬着かな　錦織富江
初明り灯して夫の背が拝む　峯石美代子
屠蘇の盃重ねし老いの赤ら顔　渡部夕峰

斐の上川柳一月の句

休耕田元に戻らぬよもぎはら　藤原英生
背を丸め呆けないようにと鈴を振る　渡部ミッコ
ひと廻り若いつもりで古稀迎え　藤原のぼる
肩書をひとつ外すに知恵がいり　石原冬明
公式の様新年は挨拶し　藤原千代子
やさしさがリンゴと共に送って来　足立玉恵
老いと云うおまけのついた歳もらい　松田牛歩
せいくらべ下の孫まで抜いていく　児玉えみ
お目出とう冷たい屠蘇は腹にしみ　松浦亜以
こだわりのおせちが膳の華となり　中林もりえ
意にならぬすべて亥年のせいにする　田中有樹絵
三が日すんで今年が動き出し　児玉哲呂
餅つきをひ孫手伝い可愛い手　安部春恵
みんな寄り暮しのリズムちと狂い　安部正子
年とりてしきたり少しかえて見る　松浦久美子
四世代孫の力を借りており　森山悠子
隠やかに明けて春らし音をきく　真綿よし子
おセチにもあきてダイコン煮メする　礒島恵子

— 会員頒布一部百七十五円／六九十一八　島根県仁多郡横田町二〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

む安土町の初代桜川好玉（真鋳家代からいえば三代目と同門）の門に出て、二代目を襲名したのが、現在活躍している、桜川好玉である。

本名を加藤善也といい、江州音頭発祥の地滋賀県八日市市建部に住む。滋賀県庁に勤務、かたわら先祖伝来の農地を耕作し、その上口演活動に奔走の生活である。好玉によれば、この勤務と農耕とは聴衆におもねることによって生ずる、芸の品格下落を防ぐためであるという。

こうした祭文復興への努力はそれのみでなく、知恩院で加行を受け、僧侶の資格を取り、さらに京都の仏教大学にも学び、卒業論文に「祭文の研究—デロレン祭文と江州音頭のかかわりについて」をまとめ、その力作は激賞されたという。

まとめ

研究によれば、①一席の構造　②演目　③高座　④衣裳　⑤用具　⑥発声　とあるが、こゝではその一部を紹介するにとどめる。

祭文語り即ち演者は、本題に入る前の最初に、法螺貝を口に当て吹くのではなく、拡声器代りにし、のち五分間にわたり「デロレン、デロレン」と発声を続ける。この特徴的な発声は、「デロレン節」呼称の由来ともなった奏法であり、口演者が声を調べ、座席を落着かせるための演奏法である。ある人はこれには「悪魔払い」という呪術的な意味をもつともいう。

衣裳は羽織なしの黒紋服、下は縞の袴が基本である（2頁写真）。

馬場の八幡宮の放生会などでは、小屋掛けして、この衣裳に鉢巻をしていた記憶をもつ故老もある。

安楽寺の一畑さんの祭りの余興としても、こういう姿であったと話してくれた人もある。

桜川好玉は先ごろ、江州に祭文を伝えた、幕末の北埼玉修験万宝院こと桜川雛山の二代目を襲名し、盛大な式典を催した。幕末から明治初年の北埼玉が祭文の中心地であった伝統を重んじたものであるという。昨年米子市の仏教婦人会の招きで来た時の衣裳は（3頁写真）、古い山伏流を復活して演じ好評だったという。

この文は亀嵩の一心斎の養子宇治部トクエ、立正大学小山一成、日野郡影山猛の方々の御厚意によって成ったものである。なお「日本庶民生活資料集成一七巻」「民間芸能」そのほかを参考とした。

（横田史談会　高橋一郎）

「まーまがとき」は「逢魔が時（オオマガトキ）」（オオマガトキ）。大禍時の転じた言葉で、禍（わざわい）の起る時刻の意味で、夕方の薄暗い時。たそがれ、おまんがとき。

地名のおこり　垣内（かいと）

垣根の内を意味する「かきつ」「かきと」から変化した呼称。古代から確認でき、もとは垣によって囲まれた耕地を意味したが、11〜12世紀にかけて農民的な開発の進展のなかで、屋敷を中心として田・畠・林、さらに荒地を含んだ垣内が出現する。また開発予定地を垣で囲み、それを垣内と呼んだ例もある。どちらの例にしろ単なる居住空間としてよりも、荒地などの開発をともなう場合が多く、したがってその領域に対して非常に強い所有権をもっていたから、地名として残存していったと考えられる。また、中世後期には数軒の家を含む一まとまりの集落を意味するようになり、集落という意味で現在の地名として残っている例も多い。

奥出雲

題字　糸原風亭書

第239号（3月号）
1995.3.4（M128.T84.S70）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

敗戦後50年の歴史①—青年団演劇㊤・奥出雲のたたら製鉄史㉓・川柳・短歌・俳句

敗戦後50年の歴史①
横田町青年団演劇のあゆみ（上）
—第二期・合併横田町40年代より現在まで

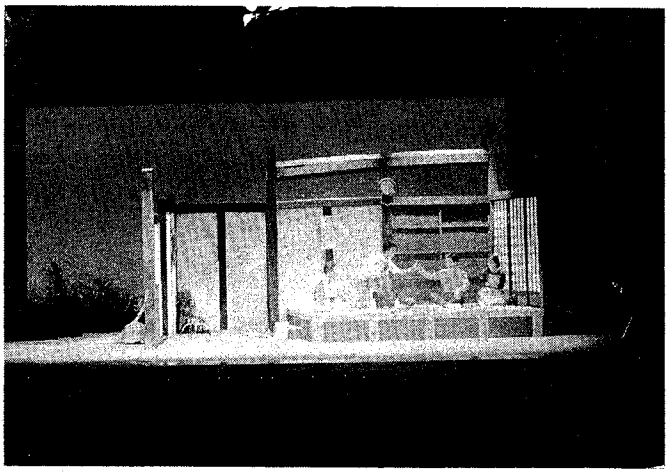
演劇のあゆみ

青年団の演劇は昭和40年代頃より横田町年末余芸大会の出し物として、職場のグループなどと共に取り組み発表し続けて現在に至っている。

昭和46年から島根県連合青年団主催の青年大会文化部門にほとんど毎年出場している。当時は青年の悩みや地域の課題を取り上げた創作劇を中心に活動を続けてきたが、昭和49年頃からは木下順二等の文学性の高い作品にもとづいた既成台本にも取り組んだ。昭和52年には全国大会で最優秀賞に舞台美術部門でも優秀賞に輝き、全国の青年団演劇の頂点にたった。しかし昭和56年で一度途切れそして、昭和59年にUターンで入団したものや高校で演劇活動してきたものが入団し再び創作劇を中心に取り組み始めた。活動を始めるに当たっては練習場の確保が大きな問題であり、様々な苦労、困難な条件の中で取り組み続けて来たが、その成果が認められ平成3年には、青年団OBの助言もあり、町で文化創作館が建設され、活動の拠点となる念願の練習場が確保できた。そして、その翌年の平成4年（1991）全国青年大会で2度目の最優秀賞に輝いた。この年の舞台美術部門でも優秀賞に、また脚本賞も受賞し演技の完成度のみでなく、舞台を支えるスタッフのレベルも高く評価された。

そして、この永年の活動が沈滞しつつある社会情勢下で認められ、平成6年（今年）には横田町多根要之助賞という栄光を受けた。

自分たちの住む地域を題材に

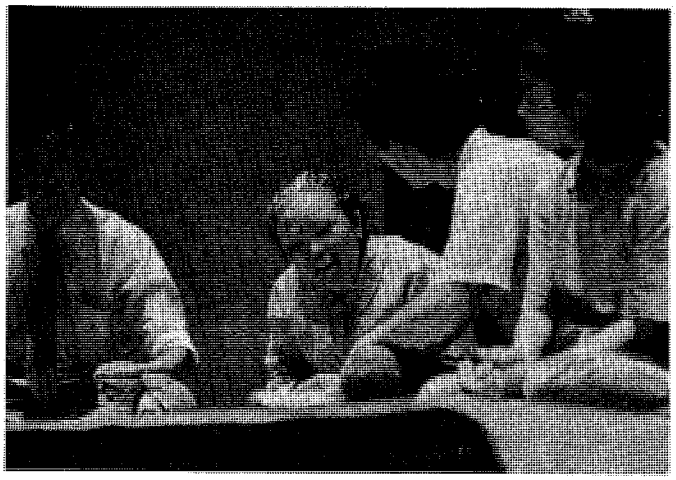


1991年の舞台装置

	作品名	作者	成績 県大会	成績 全国大会
1965 昭和40	「行かばその道は開かん」	矢壁明生淋		
'66 41				
'67 42	「牢破り」	矢壁明生淋		出場
'68 43	「今もおろちは生きている」	矢壁明生淋	出場	
'69 44	「生きるがゆえに」	矢壁明生淋		
'70 45				
'71 46				
'72 47 第21回	「鯛」	矢壁 章良 自作	努力賞	
'73 48 第22回	「橋の上」	高橋 洋子	出場	
'74 49 第23回	「糸車」	深沢 七郎	出場	
'75 50 第24回				
'76 51 第25回	「仏舎利塔」	首俣 奉明	最優秀	優秀 舞台・最優秀
'77 52 第26回	「二十二夜」	木下 順二	最優秀	最優秀 舞台・優秀
'78 53 第27回	「みみずと蘇」	藤田 保平	優秀	
'79 54 第28回	犬を喰ってはならない」	作間謙二郎	最優秀	優秀 舞台・優秀

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

		作品名	作者	成績 県大会	成績 全国大会
'80	昭和55	第29回	「息子」	小山内 薫	努力	
'81	56	第30回	「八人の腕時計」	小松 幹生	優秀	出場
'82	57	第31回				
'83	58	第32回				
'84	59	第33回	「英雄たち」		努力賞	
'85	60	第34回	「空は光り もう鳥は帰らない」	佐藤 良和	優秀	出場
'85	61	第35回	「石よ突け」	水上 勉	最優秀	出場
'86	62	第36回	「あの娘がほしくて 花いちもんめ」	荒金 勇吉 自作	優秀	
'87	63	第37回	「ラジオショー」	矢島 浩三 自作	優秀	優秀 舞台・優秀
'88	平成元	第38回	「鮎」	矢島 浩三 自作	最優秀賞	出場
'89	2	第39回	「ムー」		努力賞	
'90	3	第40回	「野村電機山の 奥村工場」	青木 隆 自作	最優秀	優秀
'91	4	第41回	「山の奥村 定住計画」	青木 隆 自作	最優秀	最優秀 脚本賞 舞台・優秀
'92	5	第42回	「山の奥村の 作造じいさん」	青木 隆 自作	優秀	舞台・優秀
'93	6	第43回	「地蔵菩薩と漬物石」	青木 隆 自作	優秀	



1991年の舞台の一場面

人形劇グループ

人形劇は数人のグループで手軽にできることもあって、学校や青年のグループなどにより、よく取り組まれる。

本町で継続的な活動として人形劇に取り組んできたグループとしては、人形劇団「どーる」がある。彼等は昭和51年ごろ、横田大劇での歳末余芸大会で八川地区の青年団が上演した影絵劇に触発され、人形劇を始めた。影絵劇を中心に5～6本の作品をもち、町の文化芸術祭での発表や、町内外の幼稚園小学校などで公演活動を続けてきた。構成メンバーのほとんどが青年団で演劇活動を行ったものであり、発声法などの基礎的な練習にも力を入れてきた。

昭和54年頃には、再び八川地区の青年団でも、指人形を中心とした演劇活動をすることは、集団的に地域の課題を、また自分自身の生活を見つめ直す学習を進めて行くものであり、こうした活動は、町づくりへの活動そのものとしてとらえても良く、その縮図であると言って良いと思われる。青年団で経験したこの演劇活動が、地域の課題に集団的に取り組む姿勢が、必ず大きな力となって実を結ぶことを期待している。

としていくつかの作品に取り組んだことがある。

青年団で継続的に人形劇に取り組むようになったのは昭和56年に島根県連合青年団の主催する青年大会の正式種目として人形劇が位置付けられてからで、昭和59年には県大会で優秀賞を、昭和61年には県大会で最優秀賞を獲得、さらに、同年11月には東京で行われた全国青年大会で島根県代表として出場し、見事全国最優秀賞に輝いた。

前述の演劇活動も、この人形劇も青年団の活動として取り組まれ、それぞれが全国青年大会で最優秀賞（日本一）を獲得、青年の活動としては全国レベルに達している。今後も横田の文化活動の一層をになうものとして、息の長い活動が期待される。

出演成績

昭和59　「やまたのおろち」
　県大会優秀賞
'85　61　「杜子春」
　（芥川龍之助作）
　県大会　最優秀賞
　全国大会　最優秀賞
'86　62　「ザ・だいこん
　ストーリー」
　（藤原　功脚色）

県大会　優秀賞

'87　全　63　「花咲かじいさん」

県大会　最優秀賞

全国大会辞退

'88平成元　「こぶとりじいさん」

県大会　最優秀賞

以後、青年団の人形劇としては大会に出場していない。しかし、全国大会最優秀賞受賞当時のメンバーを中心に、人形劇団「我楽多」を結成し現在に至っている。「我楽多」は地域の子供達を対象にして、民話・昔話を中心に5～6本の作品をもち、公民館・幼稚園等で地道な公演活動を続けている。

以上横田町青年団提供の資料によって記述。

次回は敗戦直後から十年余横田町の人々に心の糧を多く与え、県内から注目を浴び好評を得た、横田町青年団演劇活動の第一期を、当時の中心的推進者の方に回想執筆を依頼しているので、折を見て掲載する。御期待下さい。



奥出雲のたたら製鉄史㉓

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編15 ―享保の改革と奥出雲 上―

―8代将軍吉宗の登場

197号から久方振りの掲載となる。しかも「8代将軍吉宗の登場」である。NHKテレビジョンの大河小説に歩調を合わせてである。享保11年の松江藩の鉄方御法式の施行は、藩の鉄行政ひいては藩財政に貢献したものである。それはとりもなおさず奥出雲の農鉱一体の基盤を確立し、近世企業たたらを発展させ、日本の和鉄生産業の半数以上を占めるに至らせ、量だけでなく質の良さも伴ったのである。この享保の藩政はどこに由来するか、極めて乏しいしかも間接的な史料から推理を試みてみたい。しばらくは、近松門左衛門流に、紀州・江戸めぐりをすることゝ致そう。

藩主吉宗の登場

紀州和歌山の徳川家二代藩主光貞の三男は頼方、すなわちの吉宗である。

頼方は元禄8年（1695）12歳で主税頭に、翌9年には左近衛権少将に任ぜられ、翌10年4月に越前国（福井県）丹生郡において3万石の所領をあたえられた。3万石の大名になったわけだが、彼みずからが領地に行ったわけではなく、紀州藩の家臣をやって治めさせていたようである。

このまゝであれば頼方は、御三家庶流の一小大名として一生を終わり、その才能を世にしめすことなく終わったはずであるが、宝永2年（1705）におこった思いもかけない不幸が、いや彼頼方にとっては思いもかけない幸運が、彼を紀州55万石の大大名におしあげてしまった。まず5月に紀州家三代藩主になっていた長兄綱教が死に、そのあとをついだ次兄頼職も同年9月に急死、その1か月まえの8月には父光貞も死んでしまっていたので、御三家第2位の紀州藩主の地位が頼方にまわってきたのである。父光貞は80歳という高齢であったのでふしぎはないが、長兄綱教は41歳のはたらきざかり、次兄の頼職にいたっては26歳の青年であったので、この連続的な死亡は異様で、頼方の紀州藩主就任を幸運以上とみる人も多かったはずである。

頼方はこの年の12月、従三位・左近衛権中将の叙任をうけ、将軍綱吉から吉の一字をもらって、名を吉宗とあらためた。そして翌宝永3年には伏見宮貞致親王の娘、真宮理子を夫人にむかえ、さらにその翌年には権中納言に昇進した。

藩主としての吉宗の在位期間は、宝永2年10月から正徳6年（1716）4月までの足かけ12年間であるが、藩政はすぐれ、窮乏した藩財政の建直しと、綱紀粛正の二点は特に業績をあげ、江戸中期代表の名君と評価されている。緊編財政、小役人の整理、

斐の上川柳二月の句

外は雪出かけた鬼も帰ってき　児玉哲呂

雪ずりを余震とまがい身ぶるいす　田中有樹絵

餌求め雪の中飛ぶはぐれ鳥　松浦久寿子

大震災老に似合った見舞金　安部正子

震災が政治の姿婆に利用され　小早川古葉

手の内を見せぬ笑顔にほれ直し　真綿よし子

ケーキより和菓子がいいで年わかり　児玉えみ

雪が降る一人でみかん皮を剥ぐ　安部春恵

我が力甘くみるなと地が怒り　藤原のぼる

雪道をゆずる好意の擦れ違い　高木凡太

被災者の健な気さ逆に教えられ　松浦亜以

震災のテレビ毎日胸をしめ　藤原千代子

また今日も雪を配ってブルが行く　横山まこと

老いが見え鏡二・三度拭いたけど　松田牛歩

激震はいとし五千の命とり　足立玉恵

縁側で背伸びしてみる雪日和　石原冬明

父親の奮起で生きた寡婦も老い　渡部ミツコ

四股踏んで孫と相撲をとった夢　藤原英生

同窓会禿や入歯で気勢挙げ　田中芳春

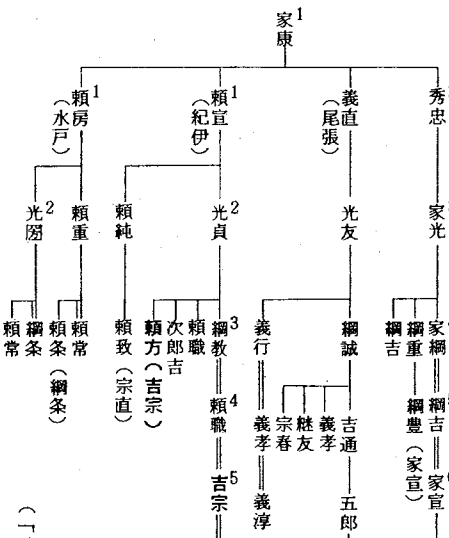
灌漑用水工事に力を入れて農村の復興に力を入れた。

吉宗将軍への登場

正徳2年（1712）10月6代将軍家宣が死に、その子家継が4歳であとをついで7代将軍となるが、その家継が正徳6年4月に8歳で死亡、将軍家の血筋が絶えるという大事がおこった。このような非常事を予想しておかれているのが御三家で、そのなかから一人えらばれて将軍家にはいるのが道筋である。6代将軍家宣が病に伏したとき、家宣は新井白石を枕頭によんで、世子家継はまだ4歳の幼年であるので、自分の亡きあとは尾州の吉通に将軍職をゆずろうと思うがと相談したことが『折たく柴の記』に記されている。尾州徳川家は御三家の筆頭でもあり、吉通は英邁のほまれも高かったので、もし彼が生きていれば、彼が8代将軍になったろうことは、ほぼまちがいのない。ところが、この吉通が将軍家継死亡のすこしまえ、正徳3年7月に死亡し、またその子五郎太もその年の10月に死んで尾州家の正系が絶えていたので、御三家の第二位、紀州家の吉宗に将軍職がまわってきたのである。

家宣の死亡は50歳のときであるので、ふつうにはまだ死ぬ年ではなく、ましてその子家継が死んだのは8歳であり、さらに吉宗より優先順位にあった尾州の吉通の死が25歳、その子五郎太もすぐそのあとを追っているのだから、吉宗が将軍職になれたということは、さきの彼が紀州藩主になったことよりも、さらにさらに希有な、ほとんど考えられないくらいの幸運というものであった。そのうえ吉通の死亡が尋常でなく、食後急に血を吐いて悶死しており、しかも医師がそばについていながら、ぜんぜん看病しなかったともいわれ、当時からその死因を不審がる者も多かった。室鳩巣の『兼山秘策』にもそのことが記されているほどであり、また尾州藩士の日記（『鸚鵡籠中記』）には、このころ紀州藩の間者が尾州藩邸をうかがっているという風説がのせられているなど、吉通死亡の結果おこった吉宗の将軍職就任を、幸運以上に感じとる者もあったようである。

将軍家・御三家関係系図



（「日本の歴史」第20巻—小学館刊—から）

松飾り明日はおろさむ

枯草のはざまを縫ひて水のゆく昏れのこりたる冬陽の中に　永井弥生

松飾り明日はおろさむストーブにふくよかに匂ひ小豆煮えをり　〃　人

水道の栓ゆるめむと外に立つに北風うなりつつ吹雪しきりに　岡田時子

病む夫を抱へ火災に遭ひたるも宿命として生き抜きゆかむ　〃　人

あやまりの多き来し方と老いたれば年のはじめにつつしみおもふ　常盤はるまさ

馬声蜂音をいぶとよみきて諾ふを万葉人は如何おもふらむ　〃　人人

新しき年を祝ふと集ひたる孫らおおかたわが背丈越す　野村節子

幾山河越えられし翁のその面輪うたげの席にしづかに坐す　〃　人

夕もやの深く閉ざせる出雲野は遠風のごと川鳴りきこゆ　安部夕波

柴栗句会一月抄

詩心を醒ましぬ凍ての蝶動く　浅野としお

どこからか寄りて奇数の寒ン鴉　糸原古志

枯れし野を風を心と抜けて行く　小川月舟

あかときのなゐの報せに躬が寒し　恩田和美

畑大根雪の下にて太りけり　加納信子

風花の舞い散るみちに眼境拭き　楠房子

孫去んで残るかまくら縫いぐるみ　高木白虹

拍子木のかじかみ星の冴えわたり　中澤美紀子

深々と雪三尺に籠りけり　新出谷一華

世に疎し音にも疎し冬ごもり　錦織富江

みな去んでその空間が寒々と　峯石美代子

嬰児の片言交じり年の豆　渡部夕峰

会員頒布一部百七十五円／〒九一二八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一四〇〇—八—六〇一）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第240号（4月号）
1995.4.4（M128.T84.S70）
奥出雲編集集団
横田史談会 ©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲のたたら製鉄史㉔

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編15 —享保の改革と奥出雲 中—

—8代将軍吉宗の政治

年貢の取りかた

江戸時代三大改革といえば

享保の改革 1720年代中心 大岡越前守忠相 筆頭老中松平定信（松浦静山の祖父）

寛政の改革 1790年代 筆頭老中水野忠邦（全8冶郷）

天保の改革 1830年代 筆頭老中水野忠邦（全9斉斎）

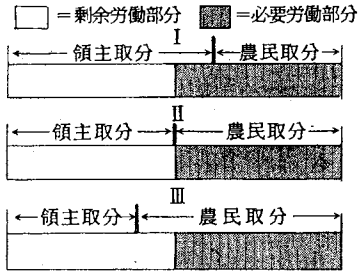
で、徳川8代将軍吉宗は、もっとも成功したといわれる享保の改革を遂行して、徳川幕府中興の英主といわれる人物である。徳川の将軍は家康から慶喜まで15人いるが、吉宗は8代でそのまんなかにあたる。その在職は享保元年（1716）から延享2年（1745）までの30年と4か月であり、徳川15代の将軍の平均在職年数は17.5年であるから、吉宗はたいへんながい。また徳川時代は265年あるので、そのまんなかをとると吉宗の享保20年にあたり、彼の時代はまさに江戸時代のまんなかということになる。

豊臣秀吉は年貢の取りかたを規定して、「年貢はその年々の稲のできぐあいをよくしらべたうえ、その$\frac{2}{3}$を領主が取り、のこる$\frac{1}{3}$を農民に取らせるようにせよ」といっている。徳川政権については、このように年貢の取りかたの基準を明確にしめした規定は見あたらないが、徳川政権もほぼ全面的にこの方針をうけついだと考えてよいようである。では収穫物の$\frac{2}{3}$を年貢に取られるということは、農民の生活にどのような意味をもったのであろうか。

人間の労働の成果は、これを明日への命をささえてゆくに必要な部分（これを必要労働部分という）と、それをうわまわった、蓄積にまわしたり他の人が使ったりできる部分（これを剰余労働部分という）との2つにわけることができる。さて江戸時代における農民の労働の成果の配分を考えてみると、図にしめしたような3つのばあいが考えられる。

第一はⅠのように、領主が取りたてる年貢量がひじょうに多くて、それが農民の必要労働部分にまで食いこむ場合である。しかしこのような状態がつづくと、農民は明日への命をつないでゆくことができず、農村は荒廃して領主は必要な年貢さえ取れないことになってしまう。またこのような状態を、「民を亡所にする」といって、幕府は諸大名とりつぶしの理由にしているので、例外的事例として存在することはあっても、こうしたケースは一般的には存在しえないといえる。

江戸時代の収穫配分図



第二はⅡのように領主が取りたてる年貢が、農民の労働の成果の全剰余労働部分におよぶばあいである。徳川家康は、「年貢は農民を生かさぬよう殺さぬよう、ぎりぎりいっぱいの線まで取るのがよい」といったと伝えられているが、「生かさぬよう殺さぬような線」とはまさにこのような線であった。それは具体的な数字になおすと、豊臣政権が規定したように、その年の稲の出来高の$\frac{2}{3}$を年貢に取りたてることであったと考えられる。それは稲以外に若干の収入があるとすると、ほぼ「六公四民の年貢」ということになろう。

かわりゆく農民

このように農民から全剰余労働部分を取りたてることは、近世初頭にはほぼ達成されていたと考えられている。しかしそのようなことが、いつまでもつづいたわけではない。徐々にであるが領主取分の比率がさがり、農民の手もとには年貢を納めたあとに、少量ではあるが一定量の剰余がのこるようになってゆくのである。このようにして、ある時期からあとはⅢのような状態が一般化するのである。

ではこのような変化が、いつごろ、どんな理由でおこったかということは、簡単には説明できないが、ここでは慶安から寛文のころ、すなわち1650年代を前後するころにおこり、そのもっとも大きな原因は、領主と農民とのあいだの力関係の変化、すなわち農民闘争の結果であるとしておきたい。**江戸時代のはじめに6割強であった幕府の年貢率が、100年ほどのちの正徳2年（1712）には2割8分9厘にまで下がっているのである。このことは全江戸時代をとおしてみても注目すべき大変化であって、その影響はあらゆる方面におよんでいる。**

まずその影響の第一は、農民

奥出雲のたたら製鉄史㉔・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

の体質の変化である。農民がその生産物のうちから、全剰余労働部分にあたるものを、年貢として領主に取られていたのは、豊臣政権から徳川四代将軍家綱の初政ころまでの約一〇〇年間くらいだと考えられる。この時代の農民生活は、鍬・鎌とか塩といった、ごく一部の品を除いて、ほかはすべて自分たちの手でつくりだすという自給経済、すなわちみずから使うためにのみ物を生産する（このような状態を使用価値生産という）状態にあった。そこでの農民は、年貢納入をすまし、あとはみずからの生産物がその生活を満たしさえすれば、それでもう十分だという考えかた、生活態度をもっていた。つまり自足的な非経済人的体質とでもいうべき農民が一般的であったのである。

たたら研究において、地下構造をふりまわして、論ずる傾向は大きい誤まりを犯す。たたらに於て、近世では元禄から享保にかけて、近世企業たたらは成立したが、操業回数は少ない。農民は協力して小さいたたら自給たたらを操業して、農具を造らなければならなかった。

経済史の欠落した、たたら研究の現状は悲しむべきことであり、経済史の欠落した近世企業たたらの研究は、技術の発達史も明らかにし得ないのである。当地方の鉄の道文化圏の六市町村の現状も、真実の文化圏を明らかにしていない。

ところが、農民の手もとに剰余労働部分の一部がのこるようになると、この状態はかわってくる。手もとにのこった剰余がどのようなきっかけで交換されるようになったかは、個々の事情によって異なるだろうが、そんなに時間を要しなかったことは疑いない。**ひとたび剰余が、それがいままでにない豊かさを農民生活にあたえるものであるとわかると、それはとめどもなくひろがるものであって、より多くの品を交換にだそうという意欲を農民たちにかきたてる。**そのために自給経済時代にもっていた〝今日の生活を満たせば足る〟という自足的意識はしだいにうすれ、**すこしでも多くのものを生産し、それを交換にだして、より生活を豊かにしようという、飽くことを知らない経済的労働人間へと農民をかえてゆくのである。**

この変化は、農民の意識をかえるのみでなく、具体的な生活の仕様をもかえてゆく。まずかわったのが農業のありようである。**それまでの自分たちが消費するためだけのものであったのが、売るための農業生産にかわったのである。**そうした変化はまず米作のうえにあらわれた。

米の品種改良と特産物農業

売るために米を作るようになると、味の良い品質の良いものを作ることに眼を向け、さらに端境期という収穫直前に米を売出すと1俵の値段が2俵分に売れるということから、早稲への品種改良が急に進んだ。

生活の必要から自家消費用にのみ作っていた作物も、適地に集中的につくられるようになって、特産物農業がはじまる。

こうした新しい産業は四代将軍家綱の治世である慶安～寛文ころにはじまり、綱吉が五代将軍になったころに一般化し、元禄～享保期に定着する。現在名物・名産といわれているもののなかには、この時期に端を発するものが少なくない。このころ展開した特産物農業のなかで、もっとも規模も歴史的意味あいも大きかったのは、国民衣料としての木綿、灯火用の菜種・蝋・国民的嗜好品としての煙草などの栽培であった。

ながいあいだ、わが国庶民の衣料としては麻が用いられてきた。木綿がわが国にもたらされたのは室町時代とか、もうすこしおくれて戦国時代だとの説もあるが、それが庶民の衣料としてひろまるのは江戸時代になってからである。商業としての農業がすすむにしたがい、綿作に適した近畿・中国筋は木綿の特産地として栄え、またたくまに麻を庶民衣料の座から追いはらってしまった。

またながいあいだ、庶民は日没とともに夕食を終えて寝るという、夜の時間のない生活をつづけてきたが、生活に余裕ができるようになると、しだいに灯火を生活にとり入れて、夜を生活の時間に加えるようになった。それに決定的な役割を果たしたのが、菜種・生蝋などの灯火原料が、特産物として各地で大量に栽培されるようになったことである。

今日嗜好品の王座を占めている煙草も、木綿と同様戦国時代にひろがりはじめたものである。徳川幕府もはじめは煙草を吸うことを、きびしく取締ったが、にもかかわらず、庶民生活に余裕ができるようになると、喫煙のふうは急速にひろまり、元禄時代には事実上禁令を解除せざるをえなくなり、煙草の特産地として有名なところが各地に生ずるようになる（最初に煙草が栽培されたの九州平戸だといわれている）。

農民が全剰余労働部分を年貢として取られ、まったく自家消費のためにのみ農耕をおこなっていた時代には、農民の生活に影響をあたえるのは、領主の良し悪し、気候の順不順、災害の有無といったことのみで、それらにさえめぐまれれば、彼らは乏しいが安定した生活を送ることができた。しかし農民の手もとに剰余がのこるようになり、商業的農業が浸透するにつれて、前記条件のほかに、個人の資質とか労働意欲、なかんずくその経済能力が農民生活を大きく左

右するものとして加わってくる。ここでは農民たちは豊かになる条件をもつと同時に、没落の危機にもさらされることになるわけである。

こうして豊かになる上昇農民と、良くも悪くもならない現状維持農民と、しだいに貧乏になって、やがて田畑屋敷まで手ばなす没落農民の三つに分かれてゆく。

新らしい商人の台頭

江戸初期の特権商人は、幕府呉服商人茶屋四郎次郎のような、領主の財政をめあてとした、利潤をかせぐ商人で、領主財政が困窮しはじめる慶安～寛文ころから弱まりはじめ、元禄文化の奢移の時代から享保の時代に多くが没落する。これとかわって、元禄～享保期に台頭する新興商人があった。

農民の手もとの若干の剰余を集めて商品として消費者と結ぶ商人の発生である。安く買い高く売りつけることができて、消費水準が高まりかけている潮にのって、短期間に巨大商人に成長するものがあらわれた。

三井家の祖三井高利は、御問屋と店前売を行って、1代で日本一の大商人に成長し、今日の三井系商社や事業の基礎を確立した。越後屋という。三越である。

幕府財政の窮乏

江戸時代の領主財政（幕府・各藩）は、慶安～寛文期（1650～1660代）に赤字がめだち、元禄～享保期にはすでに完全にゆきつまり状態になっているところが多かった。後述するように松江藩も例外ではなかった。

5代将軍綱吉は、幕府財政のたて直しに力を入れたが、後半には寺院建築など多大の出費を要することが多く、新井白石の登用もさしたる効果なく、悪化し、8代将軍吉宗の登場のころは最悪の状態であった。

吉宗は享保の改革で、紀伊藩主12年の改革の経験を生かし、㋑行政機構の改革 ㋺人材の登用、㋩政治のよりどころとなる法の整備を行った。

一方地方支配機構を整備して監督を厳しくした。

吉宗は実学に興味をもち、法律・経済についての研究を積極的に進めた。

一方新田開発の推進をして年貢増収を計った。享保時代は注目すべき時代であった。意欲を持ちはじめた農民の努力と相まって、100年前と比べて約3倍となる急成長であった。

大岡忠相（ただすけ）（越前守）を江戸町奉行に登用し、享保九年二月「物価引下令」を出してまず対処した。

そのため生活必需品ー真綿・木綿・布など、米・醤油・酒・味噌など22品目の各種商人の仲間結成を進めた。**やがて株仲間という組織が生まれ、問屋・仲買・小売というわが国固有の商品流通組織へと確立していった。**

さらに物価問題解決のための貨幣改鋳を強行することなって、やっと享保改革の物価問題はいちおう解決をみた。

一方これと両輪の一方をなす政策で重要なのは、消費の抑制と新規商品の禁止であった。

その他の改革

物価問題とならんで元禄～享保期がかゝえた問題は、世界第一という消費人口をかかえた巨大都市江戸のさまざまな問題であった。

消費の抑制と新規商品の禁止

柴栗句会三月抄

嬰児の歯が三枚となる早春賦
「雪」とだけ三月四日の日記とづ
和布売りまんさくの道登り来る
春愁う生涯大地に立てぬ足
日脚伸ぶ友を見舞いの峠越ゆ
母の忌の墓石に積もる名残り雪くて
何に漁る春の川風夫婦舟
明日への手がかりさぐり水温む
猫柳土堤にホッホッ芽吹き初む
諍いつ労わり合いし春隣
風に遇い雨にも遇いて春生まる
わらんべの声の遠退く斑雪径

浅野　としお
糸原　古志
小川　月舟
恩田　和美
加納　信子
楠　房子
高木　白虹
中澤　美紀子
新出谷　一華
錦織　富江
峯石　美代子
渡部　夕峰

斐の上川柳三月の句

歌留多とり孫が取るまで待っている
親らしくなって行く子を見てる幸
夢を見た皆元気かと電話する
懐しい賃上げ読んでる老眼鏡
ボケ防止なりそなことはなんでもし
ご先祖の恩に感謝の賀の祝い
やれやれと資本が終り嫁してゆく
ばらの鉢老い慰めて日向ぼこ
公金も大手と飛車の救済金
手まねきでお茶を呼んでる午後三時
怖いものやっぱり地震と火事おやじ
また一つ呆けた事してあきれ果て
出る釘にならぬようにと少し引き
老人保険嬉しくもあり又さびし
大正の泥天神も何か欠け
目のこやしテレビの料理とヘアーヌード
残雪を眺めて畑の野菜欲し
酒が出ていゝ知恵の出る戸主の会
そうねーで家庭の中は今日も無事

藤原　千代子
森山　悠子
渡部　ミツコ
藤原　英生
児玉　哲呂
石原　冬明
安部　正子
足立　玉恵
小早川　古葉
児玉　えみ
真綿　よし子
松浦　亜以
藤原　のぼる
横山　まこと
高木　凡太
松田　牛歩
安部　春恵
松浦　久寿子
田中　有樹絵

がある。庶民や農民の生活に余裕ができると、豊かな生活を求める姿勢へと変っていった。

粗末な麻の衣料から、暖かい丈夫な木綿類のものへ、そして絹織物までが生活に入りこんできた。食生活も腹を満たすだけのものから、より美味なものへ、他人より一日でも早く珍らしいものをと、〝初物食い〟の風習がひろがったので、これを制限する禁止令が度々出された。

そして享保5年1720 5月には、

④むやみと使いすてるようになった消費者の行為を戒め

㊀主食である米穀と医薬品以外の品は、増産したり新製品をつくり出すことの禁止

の触を幕府が出すことになった。

翌6年には、羽子板・雛人形・子供の遊び用の人形まで制限するほどになった。

さらに大岡忠相は、主食・医薬品など生活に必要な品以外の、商品を製造販売する業者96業種を選び、組合をつくらせ、その組織を利用して、幕府の指示を守らせ、物価政策に積極的に利用しようとした。当時の情勢を知るため、その96種を列挙しておく。

扇屋・紺屋・菓子屋・紙屋・雛人形屋・瀬戸物屋・椀問屋・皮細工・小間物屋・きせる屋・糸組屋・火鉢土器屋・塗物屋・布物屋・絹紬問屋・鼻紙袋屋・はん木屋・練人形屋・絵馬屋・唐紙屋・たばこ入屋・玉細工・錺屋・鋳物師・金具屋・指物屋・塗師屋・蒔絵師・下傘請売・銅細工・唐金細工・はし屋・下駄屋・紙子屋・紺屋形彫・子供手遊類・戸障子細工・合羽屋・駿河細工・櫛引・鯨細工屋・作り花屋・だくわしや（駄菓子屋）・さし傘・仕立屋・水引屋・小刀屋・煎餅屋・べつかうや（鼈甲屋）・菖蒲甲屋・三味線屋・錫屋・雪駄屋・土人形屋・琴屋・屏風屋・御用達人・菖蒲刀屋・揚弓屋・経師・張貫人形屋・飴屋・正平染屋・花火師・筆屋・花毘布屋・白銀屋・印籠師・縫箔屋・挑灯屋・硝子屋・青具師・彫物師・鍔師・鏡屋・毛せん屋・ふすへ（襖）革屋・籠屋・革細工人・もも引屋・革羽織屋・革足袋屋・鞄屋・呉服屋・京都出店糸組屋・はりこ屋・請菓子屋・紙漉屋・うちわ屋・唐木細工・挽物師・硯師・みす屋・あかね染・紫屋・ひもの屋（干物）。

元禄以来の庶民の生活の向上は、ずいぶん多様な商人・職人を生み出していたものである。

このような過剰消費を押さえ、新規の拡大を禁ずるということは、当時の社会の総体状況からみると正しい処置というべきであるが、世上の評判はかならずしもよくはなかった。

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど、江戸の大火は多かった。不燃化と避難場所（火除地）の建設、火消制度の創設、などが行われた。消防隊の出現である。

享保7年1722 4月、幕府は最初の人口調査を行うが、女子の全人口に占める比重は35.27％であった。これは町方人口で、武家人口についてはさらに女子の比重は低くかった。江戸詰の武士のごく一部は家庭をもつが、多くは妻子を故郷に残してきている。

このことと江戸の公娼・私娼の存在とは無関係ではなかった。

公娼であった吉原を移転して広くし、昼夜の営業を許した。（遊女は3905人だったという）

そして一方、社寺の門前町にある岡場所（私娼）は徹底的に取締られ、私娼の抱主の家財産のすべてを没収すなど次第に強化されていった。

女子が少ないことは家族をもたぬ人間が多いこと、不景気の物価高に助けを必要とする底辺に動めく貧窮者もかなりの数に達していた。

1722 享保7年には目安箱（投書箱）からの提案で**施薬院**さらに**小石川養生所**の設立など庶民への施設も設けられた。養生所は内科医7人、外科医4人、眼科医1人という日本唯一の総合病院であった。

極めて大急ぎで吉宗の政治改革の要点を、時代の動きをからめて述べたのである。次回ではこの波が松江藩に波及し、さらに奥出雲にも影響を与えた点を乏しい資料からふれてみることとする。

（本稿についてはNHKテレビ「八代将軍吉宗」の番組の考証指導者、近世史学者の大石慎三郎氏の諸研究にもとづくものである。

（横田史談会 高橋一郎）

近詠拾遺

簸の上短歌会

玻璃の如つめたく蒼き冬の空被災地の夜の冷
えいかばかり　永井弥生

凍てる餌を啄み産みし鶏卵の温きを掌にのす
大寒の朝　野村節子

入院の老いたる夫の賞でてゐし佗助は白き小
花をつけぬ　岡田時子

長病みに臥するに妻は健康の番組けふもつけ
てみてゐし　常盤盤はるまさ

山脈は遥か連なり空碧く越後国原信濃川きら
めく　安部夕波

会員頒布一部百七十五円／六九一八 島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二 編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第241号（5月号）
1995.5.6（M128.T84.S70）
奥出雲編集集団
横田史談会 ©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

敗戦後50年の歴史②
横田町青年団演劇のあゆみ（中）
―第一期―敗戦直後草創期の回想

足立富義

終戦は、三重県の鈴鹿海軍航空隊で迎えた。営庭で機密文書が燃やされ、その煙が空高く舞い揚がるのをなんとも言えない空しい気持で眺めたのである。

それから一ケ月ぐらい後に、郷里に引揚げてきたのであるがそのころは戦場に工場に動員された顆しい人びとの引揚げが始まっており、横田にも多くの人が帰えってきた。

町では、（安部憲吉町長）国民学校講堂で復員軍人の慰労の会を開く等の催しをされたりした。

しかし、敗戦という有史以来の出来ごとに人びとは為す術を知らず、食糧は配給制で、一日二合そこそこの米、米の代りにカボチャや芋の葉まで配給され空しい気持で眺めたのである。

だがこの配給量では生活できず、ある者はなけなしの財布をはたき、箪笥の底にしまっていた衣類まで売払ってヤミ食糧を求めるといった状態であった。

そして、これまでのあらゆる権威は失墜し道義は地をはらていた。

こうした中にあって、青年たちの間に「これでよいのか」「これからの日本人はどうなるのか」「なんとかしなければ」という気持が起りはじめていたのである。二十年の暮れ頃である。

青年団の結成へ

一方、文部省は昭和二十年九月十五日「新日本建設の教育方針」を発表し、その中で、青少年団体に対しては次のように自発能動切磋の団体の育成を推奨し、学徒隊解散に伴い「青少年ノ共励組織ヲ欠クニ至ツタノデ新ニ青少年団体ヲ育成スルコトトシタ、新少年団体ハ、従来ノ如キ強権ニ依ル中央ノ統制ニ基ク団体タラシメズ原則トシテ郷土ヲ中心トスル、青少年ノ自発能動、共励切磋ノ団体タラシムルモノデアッテ、曩ニ学徒隊ノ結成ニ伴ヒ解散セル、大日本青少年団ノ如キモノヲ復活スルモノデハナイ。」と新しい青少年団体の性格を明らかにした。

つづいて同月二十五日「従前のいわゆる宮制的あるいは軍国主義的色彩を一擲し、郷土団体としての特色を発揮せしむること」を目標とする「青少年団体設置並びに育成に関する一文部次官通牒が各都道府県の知事に発せられた。

島根県においても直ちに内務部長名で各市町村長、国民学校長並びに青年学校長にこの通牒の写しと設置要領が送られたのである。

このようなことはまだ何も知らず虚脱と空白の毎日を過していたのであるが、ある日、小学校の同窓生の一人が尋ねて来てこれからの新しい青年団をつくるのに努力してくれぬかといってきた。（誰かの依頼を受けたのであろう）

これまでのような青年団を復活するというのでなく、青年の自主的な新しい青年団をつくるということで努力しようということになった。

それから、国民学校の職員室の隣りの応接室で、有志青年の集りを開き、そのとき出席した者が準備委員となり、新しい青年団体の結成を目ざすことになった。

先ず部落単位に会合を持つこととし、そのときの資料として出した部落懇談会の栞は次の通りである。

部落懇談会の栞

仮称横田町青年同志会

困難なる現下の状勢に我々は一刻も安閑としては居られない。国民の物心両面に亘る質の向上、之を吾等は青年の純粋さと熱情と実行力を以てどうしても解決しなくてはならない。具体的に左に掲げる様な項目を我等は今こそ起って実際に移すべきだ。そしてその為には実行するにつけ、又更に勉強するにも強い同志が一人でも多く必要なのだ。

一、当面の問題
㈠政治研究会の設置　㈡吏員の官僚的態度の撤廃　㈢配給の円滑適正化運動　㈣結婚様式等の生活改善　㈤中央常会への関与

二、恒久的問題
㈠戦没者遺族の援護　㈡農具修理加工事業　㈢技術講習会　㈣体育方面への積極的参加　㈤演劇、講演会の活発なる実施

三、其の他
㈠道路整備等に対する労力の提供　㈡開拓事業の実施　㈢討論会　㈣食糧増産運動展開

各部落会の実施期日並に準備委員氏名

大　市　一月一〇日　藤原、高根
岡崎、藤原
六日市　一月十八日　足立、甲斐
白根、智原
原　口　一月十五日　宮田、糸原
川島、足立
稲　田　一月十四日　石原、真田
五反田・ヤリメ・馬場　安部、峯石
一月十二日　若槻、松浦
大　曲　一月十七日　浅野、足立

敗戦後50年の歴史②―青年団演劇㊥・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう

真田　蔵屋・樋口・加食

そして、横田町の戦後の青年団は、横田町青年会として昭和二十一年一月二十六日に国民学校講堂で結成式を行った。

会則に、「本会ノ目的ハ、新日本建設ノ為社会的文化的中枢タルベキ青年の資質向上ニ努力シ民主主義社会ノ確立ニ挺進スルニアリ」とし、会員資格は

一、正会員　横田町ニ在住スル男子ニシテ十五歳以上廿五歳以下ノ同志

二、準会員　横田町出身者タル生徒学生中ノ同志

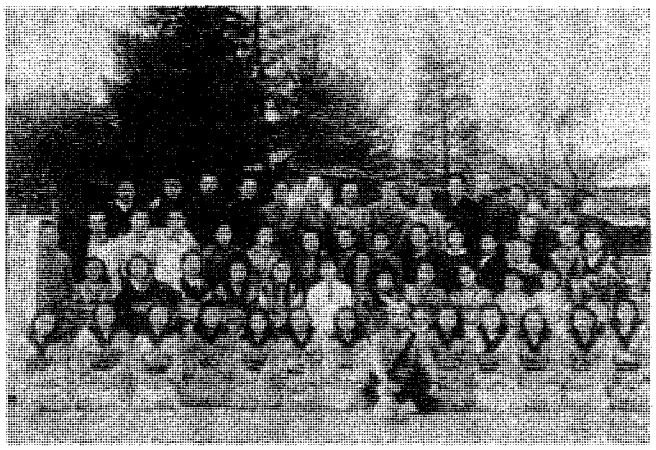
三、賛助会員　廿八歳以上ニシテ本会ニ於テ必要ト認メ推薦セル者

次いで、同年一月三十日には横田町女子青年会が発足しており、始めは男女別々の組織として発足したのであるが、後に男女は一つになるべきであるとして合併した。

二十一年三月二十一日

横田町の青年活動がすぐれているということで、文部省の社会教育課長が視察のため来町されることになり次のような人びとの出席のもとに横田町青年会公論会が開催された。

文部省社会教育局
社会教育課長　寺中雄作
〃　仝課　吉多川
島根県教学課
佐藤
細木
大仁教育事務所　木村　慎
横田町
横田農林学校長　中村主計
仝教諭　安田昭彦
横田・八川・鳥上組合立
青年学校長　真田喜六
仝教頭　中田鶴吉
仝教諭　孝忠一郎・高橋一郎
内田直一　影正菊枝
横山偕子
横田国民学校長　高橋壮介
仝訓導　高橋　村上孝雄
青年会
会　長　足立富義㉖
副会長　景山藤吉㉗
〃　石原　正㉕
幹　事　藤田繁雄㉖勝部　正㉕
高根保夫㉖若月亀吉⑳
川島喜博㉓浅野俊夫㉒
真田康夫㉖甲斐一郎㉒
岡崎献一㉕
支部長　小林恒由㉗智原利生㉒
伊藤嘉吉㉕寺西愛明㉑
峯石　勉㉓
会　員　浅津良三㉑原田友春㉖
藤原健治㉓藤田義雄㉑
小川昭男⑳白根勝義㉖
横山　誠㉒谷口国雄㉑
渡部武雄㉓藤原秀雄㉔
女子青年会　真田豊江㉔他15名



活動の第一歩は娯楽から

これらの青年団に流行的に行われたのは戦時中の極度の耐乏生活によって失われていた慰安娯楽を取り戻すための演芸会であった。

二十年暮れから二十一年前半にかけて県下各地でぞくぞくと青年団体が結成されていった。その名称も青年団、青年会、青年協議会、青年連盟等さまざまであった。

人びとは娯楽に飢えていた。内容は股旅ものや、やくざ踊りなどが多かったがどこもかしこも満員で、夜を徹して行われるものもあった。

この演芸会は人びとに非常によろこばれ大人も子どももそれのみがたのしみのようになり、遠い所まで見に行き、だんだん舞台も派手になっていった。こうした青年団に対し演芸会青年団という批判の声もあったが、この事がすさんだ世相に笑いと明るさをとり戻した意義は大きかった。

横田町でも英霊遺家族、未帰還留守家族の慰労もかねて、第一回の芸能大会を二十一年四月四日午后二時から国民学校講堂で開催した。

この芸能の夕は、異常な盛会裡に夜おそくまでつづけられたのである。

そのときのプログラムを見ると舞踊一八、独唱、合唱、安来節、コント、演劇等で三十八種目にもおよんでいる。（四頁に）。

これは各部落支部単位に出場数をまとめたもので、なかには同じ出しものが二つもあるのでその部落支部に出かけ、どちらかをとり消してくれるよう話したが、劇等のように長い間練習してきたものは今になってそれは出来ないと涙ながらに反対され、結局全部やろうということになってしまった。

青年会本部ではこのなかでせめて将来の演劇運動の片鱗でも示そうと、菊池寛原作の「父帰る」小塚公平作「明け行く空」「川辺のセレナーデ」等を出しの声もあったが、この事がた。

費用は祝儀によってまかなわれたが、当日の会場の講堂がはち切れる程の人でうまり、窓までのぼる者が出て、あくる日になってみると窓ガラスが三十数枚もこわれており、戦後の物資不足のときであったのでこれをうめあわせるのに大変苦労した。

費用も多くかかり折角の祝儀もそのため全部使ってしまうことになった。

また、横田町青年会では、各種の研究会、同好会の育成をはかることにしていた。

高橋一郎先生等の指導で音楽同好会、文学同好会等が芽を出していたが、とくに演劇は演劇文化部を発足させ、練習日程を組み、部員心得等までつくって熱心に取組んだ。

演劇文化部部員心得

一、協同精神の徹底
二、創意をいかすこと
三、服従すること
四、倫理的であること
五、規律をまもること
六、経済を厳重にすること

第一回研究発表を十一月二日、国民学校講堂で

民主新憲法祝福「芸能祭」として開催した。

プログラムは

一、三番叟　女子部員
二、祝歌・合唱　オリオンコール
三、舞踊　女子部員
四、劇　湖の娘（一幕）
　原作　八木隆一郎
　演出　安部夕波
　藤田繁雄
五、劇　戦艦大和の乗員
　作　小塚公平
　（青年会幹部などが出演した）
六、劇　一本刀土俵入り（三幕）
　原作　長谷川伸
　演出　足立富義

開会にあたってのあいさつ

このたび、私共横田町青年会演劇文化部が新議会によって新しく制定された民主新憲法を祝福して、青年芸能祭を開催しましたところ、多数の皆様方の熱烈なるご協力とご支持とを頂きまして、ここにかくも盛大に芸能祭を挙行致し得ることとなりましたことは、主催者と致しまして、深く感謝に堪へないところでございます。

ここに皆様に対し、厚く御礼を申し上げますとともに、今後とも更に一層の熱意あるお力ぞえご支援を頂きますよう謹んでお願い申し上げます。

さて、新憲法の問題につきましては、今晩私共が演じます「戦艦大和の乗員」という劇の中で、相当に述べることになっていますので今は省略いたしまして、

このたび横田町青年会内に演劇文化部を創設することに致しました趣旨につきましてこの機会に少しく述べさせて頂きたいと思います。

既に皆様もご承知のように終戦以来日本全国的に、各地に於て青年会主催の演劇大会が熱狂的人気の中に催されたのでありますが、心ある識者からは、このため却って、青年会の前途を案ぜられるようなことになったのでありました。

それはなぜかと申しますと青年達が、ただ芝居の役者や映画俳優の真似をして、頭にチョンマゲのかつらをかぶり顔に白粉を塗り、古い低級な封建的な精神に少しも真剣な反省や検討を行おうとはしないで、仕事を休み、ただ古い芝居の真似をして満足していたからであります。しかし私共横田町青年会演劇文化部の者は、その精神において、これらとは全然違うのでありまして、私共は、この私共のやります演劇によって、少しでもこの社会全体を、新しく光

小さきひみつ

簸の上短歌会

かそかなる湧水に添ふ冬いちご見つけし日より小さきひみつ　永井弥生
くち色の落葉の中の冬いちごルビーの如く冬陽に光る　〃
みどり濃き葉と紅き実の冬いちご哀しくもりんと雪舞ふ山に　〃
冬いちご二三本あるそこのみは雪ふる山と思へぬはなやぎ　〃
冬いちご人には告げず小春日を落葉かさこそと逢ひにゆくなり　〃
期末試験未だ終はらぬかと孫の帰省待ち佗ぶ夫の白髪の目立つ　野村節子
会合に帰りの遅き夫を待つ冷ゆる夕べの又も時雨れて　〃
ふるさとは雪ふるならむ房総はすでに春なり菜の花ゆるる　安部夕波
早春の房総千倉に旅を来て花の香にふれ花の径ゆく　〃

柴栗句会四月抄

初鳴き背戸に住ませる二三日　浅野としお
黄砂ふる蜂連なりて重なりて　糸原古志
初蝶や墓参の孫にまつわりぬ　小川月舟
若布売り媚も売りたり浜言葉　恩田和美
ふきのとう厨の闇に匂いけり　加納信子
底知れぬ暗き世相や春寒し　楠房子
鳥帰るだんだら畑の忘れ鍬　高木白虹
もの憂げに蝶のひらひら庭よぎり　中澤美紀子
ふる里を包む灯りや月朧　新出谷一華
世の動き震災、人災、春寒し　錦織富江
夕方の雨にやさしや黄水仙　峯石美代子
み仏に姿を重ね遍路杖　渡部夕峰

明化したいという精神を有しこの演劇を演じますことによって演じます私共の精神が深く、清く向上しますとともにこれを見て頂く皆様方にも、その心の奥深い精神を清め高めて頂きたいということを深く念願しているのであります。

舞台装置の不十分なことや芝居全体に面白さが足りないという欠点なども今後大いに研究するつもりでございますから、このたびはこの私達の精神のあるところだけご理解くださって、そのお心でもって、最後までご覧下さいますようお願いを申し上げます。

なお今後とも、私共の文化活動について、お心づきのことがございましたらご遠慮なくご教示ご指導を頂きますようお願いを申上げご挨拶とします。

なおこの「芸能祭」には、松江市での文化団体みづほサークルからその指導者である田所龍代島根県連合青年団長となり、員会社会教育課長として栄任、市氏、作家の大江賢治氏に来町してもらった。

また、このときの演劇の脚本は進駐軍（広島）の検閲を受けなければならなかった。

斐の上川柳四月の句

天災の日本列島今人災　安部正子
地下鉄は乗らないように子に電話　児玉哲呂
空眺め梅の香かいでひと休み　安部春恵
種もみをつけて百姓くりかえす　足立玉恵
雪解けて地中の垢が浮上する　田中有樹絵
青い空何かやる気が見えかくれ　松浦亜以
オーム教何が出るかとまずニュース　藤原のぼる
ゆづられた席で年寄りらしくいる　松浦久寿子
吾が鎌で向うずね切るおろか者　松田牛歩
売出しの目玉をねらう主婦の列　真綿よし子
合格の電話の声で春になり　児玉えみ
痛いとこつかれてぐっと唾を呑む　渡部ミツコ
年金が孫の入学祝いする　横山まこと

活動の多機化

青年団の活動は、演芸会ばかりではなかった。民主主義の理解のための講習会、封建性の打破、結婚簡素化運動、配給の適正化運動、青空市場の開設、世論調査、各種の文化活動、機関紙活動等をそれぞれの地域で展開していったのであるが、戦後の社会は混乱しており、これまでの指導者は自信を失い、社会的に指導してきた団体もなくなり、いち早く起ち上がった青年団がかろうじて団体としての組織的活動を展開していったように思う。それだけに行きすぎやいさみ足もあったことと思う。

しかし、日本は、再び立ち上り今日のような姿になったことをよろこばねばならない。

筆者は横田町出身で、横田町青年団結成後、仁多郡青年協議会を結成し会長となり、昭和23年4月、小林文慶に続いて第2代島根県連合青年団長となり、仁多郡選出の県議会議員を経て、要職を経て勇退。現在松江市に浜田市出身の国会議員大達茂雄　在住の方である。御多忙の中ば文部大臣の秘書となり、ついで　お願いし、標題について往時の文部省に勤務し、島根県教育委　回想記の執筆をお願いした。

〔資料〕

プログラム編成

演劇

1	父帰る	(40分)
2	川辺の小夜曲	(30分)
3	明けゆく空	(50分)
4	喜劇　脱線電話	(20分)
5	〃　お地蔵さん	(35分)
6	〃　脱線金色夜叉	(15分)
7	求婚娘	(10分)
8	木曽の勘八	(20分)
9	歌舞伎	(60分)
10	安兵衛往家の場	
11	終戦像 五反田農村	

歌曲

1	朗か建設ボーイ（町）	
2	踊る弥次喜多（町）	
3	独唱・出船の渚 ・勘太郎月夜	
4	〃・波浮の港 ・朝だ元気で	
5	春たけなわ（原口）	
6	合唱 ・数曲（同好会）	
7	安来節（蔵屋）	
8	斯くして恋に 敗れたり	
9	安来節	

舞踊

1	南京の花売娘	(町)
2	悲しき子守唄	(〃)
3	野崎小唄	(〃)
4	お駒恋姿	(〃)
5	時雨旅	(〃)
6	妻恋道中	(〃)
7	めんこい小馬	(角)
8	桜道成寺	(〃)
9	剣舞（太田道灌）	(〃)
10	京舞子	(〃)
11	愛馬花嫁	
12	湖畔の乙女	
13	誰か故郷を	
14	幻の影を慕いて	(町)
15	港シャンソン	(〃)
16	舞踊	(蔵屋)
17	流転	(〃)
18	旅笠道中	(〃)

会員頒布一部百七十五円／六九—一八　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第242号（6月号）

1995.6.2（M128.T84.S70）

奥出雲編集集団
横田史談会 ©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

出雲国鉄師と伯耆国鈩師近藤家

影山猛

近藤家の諸控帳から

この記事は、伯耆国日野郡根雨の鉄山師近藤家所蔵の慶応元年から明治三十二年にかけて、天保七年設置された近藤家大坂出店から数日毎に根雨本店に送られて来る手紙、それには大坂の鉄の市況、政界の動きと社会の出来事、また得意先を一回四〇日以上かけて毎年外商に出掛ける手代達が知らせて来る各地方の世相と鉄の商況、それに伯耆国で稼業する鈩労働者が必要とする扶持米を安く買求めるため必要な米の価格調査、また激しく変動する金銀銭比価などを知らせて来たが、この手紙を更に根雨本店で要点のみ略記した「大坂鉄店（出店）諸控帳」三冊の中で、時に触れてある出雲鉄山師達の動向と売鉄関連事項をぬき出しさらにこれに加えて他の資料をもって補足したものである。

この控帳には、大坂鉄問屋達の動向のほかに、全国から大坂に出荷される鉄の中でも、広島鉄、備中鉄については多出するが、幕末、明治初期には出雲産鉄の大坂出荷鉄についてはあまり記載がない。ただ諸工廠をはじめ政府筋に鋼・包丁鉄など納入し出した明治中期頃から大正期にかけては、出雲鉄山師達との競合、または共同して納品して来たことが、控帳や根雨本店の記録に残されている。

横田町誌等を参考として記述された武井博明氏の『化政天保期における鉄の流通』によると全国的な維新前後の鉄の流通の数的概略は、六・七割は大坂売、二割は日本海沿岸、一・二割が九州・四国・大坂以東へ販売されたとしてある。

一方、幕末明治初期の仁多郡産鉄の売捌先は、桜井三郎右衛門家産鉄で七割方は北国売、糸原権造家では、化政期までは大坂鉄問屋売、松江売は文化十年頃よりはじめられ、明治初期は「北国向方宜敷、年に但馬船積下り」とされ、卜蔵甚兵衛家は松江売とされている。従って仁多郡は化政期以降、日本海沿岸地方への鉄の販売量が増大したとみてよいとしてある。

これに対して根雨近藤家経営の各鉄山からの大坂出荷、他鉄山師買入れ出荷鉄を一手に売捌いた、大坂西区靱南通四丁目に置かれた近藤鉄店（出店）の売捌先は、天保十年の売懸帳では、大坂回りの摂津のみで販売総数量の五三・五%、これに和泉の刃物生産都市である堺を入れると全量の六四%を売捌き、北国売は極めて少ない。

このことから、出雲と伯耆の産鉄は、お互いの商圏において大きく競合することはなかったと言える。

田部・卜蔵家が何時頃大坂に出店を置いたかは不明であるが少くとも文化年間大坂鉄問屋十八軒の中に名が見えず、天保十年近藤家大阪出店売懸帳の中の摂津内での取引先三八軒の中にも名前が出て来ないことは、それ以降とみられるが、いずれにしても化政期以降、在来の大阪鉄問屋は次第にその支配力を失なって、山元鉄山師達が次々と大阪に出店を構えて商圏を広げる時代となって来る。

近藤家文書に田部長右衛門・卜蔵伝一郎が、大坂荷受問屋・仲買人として始めて名前が見られるのは、明治十二年三月二十三日、大阪高麗橋三丁目に、諸商法会議所が設立され、大阪知事を議長とし、五代友厚を副議長として発足したときである。鉄の商人は、東京積株・荷受問屋株・仲買人株の三組にわけられ、それぞれ信証金と称する資金拠出を割当てられ、それで公債証書を買求めることを強制され、田部・卜蔵家は荷受問屋株二等として一五〇円、また仲買人株としても卜蔵は二等五〇円田部は同三等二〇円を課せられたときである。

この措置に、大阪鉄商業取締役として近藤喜兵衛・名越愛助（伯耆国上石見出身）が任命されているが、共に東京積株・荷受問屋株・仲買株の三組に属して、三八〇円を課せられていることは、おそらく取引商内業積による割当てであり、このことからこの時期には、出雲鉄山師達は、大阪市場に大きな比重をかけていなかったことがわかる。

このように、伯耆と出雲の産鉄が国内各市場で大きく競合しなかったことは、意図されたものかどうか不明だが、広島鉄の大量の放出に絶えず価格操作を余儀なくされ、津山鉄の安売りに怯えていた近藤家出店が出雲鉄と対立はあまりなかったのは事実である。

但し近藤家も明治中期になると北国売に力を尽すが、これも大阪出店に配置していた一〇人程の手代による外商でなく、地元伯耆国の商人と特別の契約を結び販売させたものである。

出雲国鉄師と伯耆国鉄師近藤家・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

だが、明治後期からの、軍部への鉄鋼売込みは、雲伯鉄山組合が出来るまで、かなり激しい競争があった。

幕末からの、中国地方産鉄に関係すること、及び出雲鉄山所達の動向を控帳などから年代順に従ってひろってみると、慶応元年は景気もよく、鉄も値上りして割鉄一駄（二七貫目）九両前後で取引きされたが慶応二年には金と銀の相場が二月には一両一〇二匁、七月には一四三匁などと日々に大きく変動したため、鉄をはじめ諸商品の取引が停滞したことがあげられる。そのため金相場の高騰で支払不能となり奉行所へ出訴に及んだ商取引も出る始末であった。

またこの年は米相場も高騰し二月には一石銀五四〇匁であったものが七月には一貫五〇〇匁になり、金建の関東では一一の国で一石が一〇両以上にもなった。この高値に目をつけた商人が、アメリカより米を輸入し、大阪を売り歩いたが、米は細くて長く、折れていたので不人気であったと知らせて来ている。

慶応三年は大政奉還があったが、金銀相場の乱高下もやっとおさまった。しかし米価は高く春銀一貫四〇〇匁にもなり、各地で不穏な気配もみられたが、八月半ばに諸国の豊作が見込まれ、十月には銀五〇〇匁までに下落し人口は安堵している。鉄の景気も好調で和鉄もよく捌けたが、次第に異国鉄が出回りはじめ、和鉄は一駄八両前後であったのに、輸入鉄は平値の四両で売出されて、次第に和鉄を圧迫し出した。従って小鍛冶も大名・武家屋敷の門扉・櫃・箪笥・長持などに打つ金具は洋鉄を使用しはじめ、和鉄は大工道具・包丁・船釘などに限定されはじめて来る。

明治維新から

明治元年は鉄の商況は極めて不振で、異国鉄の安値におされて和鉄も六両前後に値下げせざるを得なくなったが、鉄問屋筋ではその理由を、諸藩が今最も必要とする大量の鉄砲を、外国に注文すると一、二箇月で手に入るため、国内鉄砲鈑冶に注文しなくなったことをあげている。

この年五月には、三条実美らが関東に下向するため、その費用五〇万両を至急調達しなければならないとして、鉄荷請仲間へも御用金一、〇〇〇両の拠出割当があったが、近藤出店以下三店は手元不如意であると断ったので、卜蔵店、備後屋喜六店以下十一店で四〇〇両集め差出した。しかしこれでは不足であると残金支払を更に強要されたので仕方なく、七月には十一店の平等割で六〇〇両を支払っている。

この年通貨制度も改革され、太政官金札など発行されたが、小判などの正金との取替を政府は強要したので正金は次第に流通市場から姿を消すと共に金札の価値が下り、翌年四月には正金一〇〇両に対して金札は一八五両までに下落した。また各国地方では金札を嫌い、諸商品の代金は正金の支払を要求したので都市部では正金が姿を消すと共に物価の騰貴が続いたと大坂より知らせて来ている。

明治十二年頃には、近藤出店はその商圏を、関西から東海・東山・北陸道筋、関東に拡げ、その取引先は各地仲買人を中心として五三軒に及んだが、出雲出身鉄山師の出店はこの取引先の中にはない。

十五年には松方デフレが浸透し、大阪からの報告では「本年は諸国共非常の大不景気、米価及び銀貨等追々下落、農・商共大困難を極め仕り、商内無数、且つ洋銭釵甚だ盛んに流行し、和鉄下直物は極めて不捌」とあったが、十六年の鉄価は前年の平値、七・八円に下落、十一月

伯耆国の鉄山師

（出雲では鉄山師のことを鉄師と呼び、たたら用木炭山を鉄山という）

中国地方では鉄師・鉄山師すなわち鉄山の経営者は、三つのタイプに大別できる。伯耆国ではその一つの中世的土豪の系統をひくものでは、阿毘縁の木下・山上の古都がそれである。木下家は尼子氏の家臣といい、古都家は建長年間、日野郡印賀にはいって製鉄をはじめたという。その二は、前期資本型の大鉄山師で、江戸時代のなかごろから活躍するもの、根雨の近藤家はこの典型である。近藤家のばあい、商人から出発して資産をつくり、安永八年（一七七九）に釜一・鍛冶屋一をもって鉄山業をはじめた。それが天保・嘉永と急激に成長し、大坂に出店をおくほどになりこの間、旧型の鉄山師を圧倒してその釜を買いとり、藩内随一の大鉄山師となって、明治以降も活動するのである。

また生山の段塚家・黒坂の緒形家は豪農出身ではあるが、江戸中期から進出して大庄屋もつとめる大鉄山師となる。さらに藍の買いしめなどもおこない、在方商人としても活躍した。結局、後者のタイプの鉄山師は、江戸時代のなかごろ以後、商品経済の発展にともなう鉄生産の増大に乗じて台頭した農・商出身者で、旧型鉄山師をおさえて藩権力とむすび、急速に成長していったのである。しかし、かれらの生産構造自体には根本的なちがいはない。これにたいして、三番目のタイプとして、幕末期に続出した小鉄山師があるが、これはあまり大きな役割ははたさなかった。

追悼

本紙57号（1980年1月号）から柴栗句会抄を毎月載せて頂いて、読者から好評でありました。掲載について当初から先月号まで世話を頂いていた小川昭男（月舟）さんと、当地方俳句界重鎮の岡田正造（蹊花）さんが、5月下旬、急病と高令で御逝去になりました。本紙にそれぞれ載った最後の句を載せ、謹しんで哀悼の意を表します。

大紫陽花萎れ頻りに雨を欲す　蹊花

初蝶や墓参の孫にまつわりぬ　月舟
（先月号）

には各地方にも不況が波及、外る。

商中の手代から「信州地方も極めて不印（不況）の由、飯田辺は随分豪商の有三土地の処、当年は頭分と称し屈指の家柄株か鎖店あるいは身代限り等致し、何共不憫千万」と知らせて来ている。

十七年も不況は続き、安鉄しか売れなかったが、田部産鉄も近藤家鉄より二円安い四円六〇銭で大阪市場に売出している。この不況の原因を出店は「大蔵省は紙幣四〇九万円を焼却処理」したのもその一因とみている。この不況を契機として近藤家当主は鈩経営の省力化をはかり、二十年代には大鈑冶部門の気鎚化をはかって福岡山製鉱所をつくり、鈩送風に水力を利用してトロンプをそなえた。

十九年頃より鋼の注文が軍の兵器商、政府筋工廠からきはじめる。二十二年頃から横須賀工廠からも錬鉄の注文が出始め、雲州鉄山師達も玉鋼、薄鉄を納品する。七月には田部産玉鋼一〇〇ポンド二円二五銭で、また桜井家二円三五銭、糸原家は二円三〇銭で兵器局へ納め、薄鉄は四円で仕切っている。二十三年春には砲兵工廠が錬鉄二万ポンドの注文を出し一駄七円三〇銭で納め、横須賀工廠も買上げ

二十四年には、五月に横須賀工廠で入札があり、また赤羽根工廠でも玉鋼二万ポンドの入札があったが、納入産鉄業者は、いずれも出雲田部・桜井・糸原を指定してあったので除外された、近藤出店は不公平であると憤慨し、今後もこのようであれば伯耆鉄は採用されぬであろうと出店手代が上京し、後の造兵大技監小河平（おこひら）才蔵氏自宅を訪問して納入方を懇願、「出雲産も伯耆産も同じ品質」との言質を得て、その足で兵器局へ出掛け、入札参加を要請するが、「決定してしまったから此度は辛抱せよ」と軽くいなされてしまった。この直後仲買人田中安太郎が出店を訪ずれ「この玉鋼二万ポンドは、雲州三家が申合せ、高田商会へ委任したものである。伯州も雲州も同じで問題はない。今自分は雲州産玉鋼を五千ポンド所有しているが、残りはないので、これを売払えば至急伯州鋼を積出してほしい」と依頼して来た。そこで出店は本店に、田中氏は小河平氏の差図をうけて来店して来たのでそうさせてほしいと許可を求めている。このように雲・伯の鉄鋼売込み競争は続き、二十五年の造兵廠一〇万ポンドの入札では玉鋼を一〇〇ポンドにつき出雲より三銭安い価格で近藤が落札し、薄切断鉄は雲州側が落札した。

二十八年になると造兵廠、兵器局いずれも玉鋼（一個五四―一九〇匁）七万キロの納入は、田部・桜井・糸原に加えて伯州の近藤も指名して来る。其後三十三年にも田部長右衛門支店は鋼をかなり高い十一円前後で売出すが、近藤支店もこれに対抗し、それより一〇銭安で売出をはじめる。

雲伯銕山組合の設立

このような競合をさけるために、三十六年には懸案の雲伯銕山組合がつくられ、田部長右衛門、桜井三郎右衛門、近藤喜兵衛、糸原武太郎四家の約定書に従って、三十七年には呉工廠へ鋳鉄約一一万キロを四家共同で納品し、また東京谷廣賢氏を代理人として各工廠へ鋼鉄を売広めて行く。三十九年には呉海軍工廠へ包丁鉄一五〇万キロ、頃

鋼一〇〇万キロ、鋤鉄三〇万キロ、其他東京海軍造兵廠へ玉鋼五万キロなども四者が平等に出荷納品することになる。

この各工廠への納入には、鋼鉄の品質について厳しい規制があり、特に燐・硫黄分の除去を要求して来るが、近藤家は度々各所に依頼してみるが思うように除去は出来なかった。一方軍部は良質の鋼材を求めて、スウェーデンの木炭精錬低燐性銑鉄を特殊鋼材料として多く輸入して来だしたので、近藤家もこれに対抗して四十一年頃より除燐工法を研究し、燐分〇・〇一五の銑をつくることに成功し、大正三年には、これまでの鋼押し工法をすべて低燐性銑鉄工法に変更することになった。

近藤家では、生産費切下げのため大正八年より、従来の角炉と並行して丸炉を築き、鉄滓の再度吹を開始し、石炭を投入して不純物を除去する方式を採用し、製鉄業挽回を試みるが、時すでに遅く、鉄価暴落により大正十年九月には操業を打切り、近藤家の鈩の火は遂にすべて消えることとなった。

（日野郡江府町在住の筆者紹介。当誌にも度々執筆の好意を頂いているが、根雨の近藤家の文書の整理と調査の研究に取り組み山林関係・交易関係の論文多数。「たたらの里」（伯耆文庫5）がある。

この度は特にお願いして御多忙中を、近藤家文書にあらわれた出雲国鉄師についてお願いした。厚くお礼を申し上げる）―本論文中の出雲の鉄山師の呼称は原文のまゝで―

柴栗句会四月抄

みどりの日国旗をたてて種を蒔く　浅野　としお
雛の軸武者絵に替えて一つ老う　糸原　古志
ここ住み処六尺の床夕湖凪　(故)小川　月舟
咲き初めし祝ぎの日の白牡丹　恩田　和美
老眼の目にもオウムの記事を読む　加納　信子
鯉のぼり音痴の婆々の子守唄　楠　房子
五月雨の軒場に雫く夜の静間　高木　白虹
若葉風心の扉少しあけ　中澤　美紀子
遠蛙聞きてふる里懐かしく　新出谷　一華
住みなれし土を返すやみどりの日　錦織　富江
あちこちの痛みのはしる菜種梅雨　峯石　美代子
笑い初む鳥髪山を目で登る　渡部　夕峰

斐の上川柳五月の句

毒ガスに備え我が家も小鳥買う　田中有樹絵
お茶の間のテレビオームが一人占め　藤原のぼる
海外が安全だねと旅に出る　児玉哲呂
花の顔みな陽の当る方を向き　藤原千代子
鯉のぼり家にもほしいな女の児　渡部ミツコ
匙加減ひとつが老妻の隠し味　藤原英生
葉わさびは晩酌追加させている　児玉えみ
南風桜散らして蛙呼び　足立玉恵
今日も又畑や庭の草退治　安部正子
明晰な頭脳集めて罪犯し　松浦亜以
筍を貰って木の芽摘みに行き　横山まこと
腹立てる息子に我も腹が立ち　松浦久寿子
農繁期あれもこれもと種をまく　安部春恵
連休は青田にかわりいい日和り　真綿よし子
本当の齢は鏡の裏にある　松田牛歩
ふんふんと世間話しは聞き役に　高木凡太
世を乱す自作自演のハルマゲドン　小早川古葉

晩春拾遺　簸の上短歌会

ひそやかに露ふふみつつ花みづき咲き満ちて　永井弥生
杣道人も通らず
畑にも吾にも恵みの雨にしてとろりとろとろ　全
他愛もあらず
陽の匂ひふふめる布団にくるまりて田植を終　野村節子
へたる安らぎにをり
ひと雨が欲しいと花散る椚山に乾きて伸びぬ　全
椎茸を採る
早春の雨にけぶれる城ケ島白秋詩碑に潮騒ひ　安部夕波
びけり
シクラメンの花ひらく朝夢ひとつあすへつな　全
げて外は雪ふる

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一四〇〇―八―六〇一）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

第14回　横田たたら研究会ご案内

主　題　1　中近東から我が国への、製鉄法の伝播について
　　2　古代・中世・近世・近代・現代の各種たたら操業による、粗鋼、銑と鋼の生成のメカニズムの究明
　　発掘・復元実験・文書記録・調査記録・操業体験を通して、その発達をもたどる
　　3　「鉄穴流し」の本場の本格的作業（3時間）の実演見学
　現在に至るまで我が国の和鉄生産の本場で始めてなしうる、発表・討議・見学会。
　当研究会のこれまでの総集編であり、考古学・文献の研究者、各種たたら操業実験研究者のご参加を期待いたします。
主　催　横田史談会　　協賛　しまね文化ファンド
後　援　島根県横田町　横田町教育委員会　産業考古学会　たたら研究会ほか
日　時　1995年　8月26日（土）・27日（日）　2日間
場　所　横田コミュニティーセンター
日　程　第一日　11時～12時30分　講　演　「鉄の来た道 ――― トルコから日本への軌跡」
　　講師　金属博物館　参与　窪田蔵郎
　　（永年の南北の現地調査による新発見も加えて）
　1時30分～5時30分　発表と討議　（ビデオ上映して）
　①　古代製鉄炉から見た粗鋼の形成　（復元実験による）
　　A　竪型炉（羽口1・送風機送風）　於　千葉県立房総風土記の丘
　　たたら研究会委員　穴澤義功
　　B　小箱型炉（羽口2・踏吹子脈動送風）　於　横田町
　　島根大学山陰地域研究総合センター
　　島根大学教授　田中義昭
　②　中世たたらの発掘資料から
　　D　箱型炉 ――― 島根県石見、中の原・タタラ山第一遺跡
　　島根県埋蔵文化財センター
　　主事　間野大丞
　③　近世企業たたらの諸記録・諸調査記録の紹介
　　D　奥出雲圏で完成した三日押操業　（箱型・両側羽口片側19・天秤吹子及び水力吹差吹子脈動送風）
　　――― 銑と鉄
　　『鉄穴鉾』（絲原家文書）・『砥波鉾』（俵国一報告）
　　『樋廻鉾』（榊藤夫報告）
　　産業考古学会幹事　高橋一郎
　④　現代の操業の体験から
　　E　『日刀保たたら』　於　島根県横田町
　　国指定保存技術保持者玉鋼製造（たたら吹き）　村下　木原明
　　続いて　研究討議シンポジュウム　講師・発表者、冶金・分析研究者（たたら研究会会委員
　　大沢正己・日立金属テクノクス取締役清水欣吾）による
　　＝終わりに　ビデオ・テープ「日刀保たたら」「鉄穴流し」上映と解説＝

第二日　見学
　8時出発　車にて町内移動
　羽内谷鉱山　鉄穴流し本場　にて　3時間　解説と操業
　かつての本場（保存のため　修復）にて
　かつての鉄穴師　数名による　選鉱作業の開始から終了まで
　（昼食）　車にて移動
　奥出雲たたらと刀剣館
　解散　2時

参加申し込み　締切　7月31日厳守　（盆前につき）
詳細は下記へ照会下さい。
〒699-18　島根県仁多郡横田町横田1061-2　横田史談会
（代表　高橋一郎方　TEL　0854―52―0191）

奥出雲

題字　糸原風亭書

第243号（7月号）
1995.7.1（M128.T84.S70）
奥出雲編集集団
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

おくのほそ道⑥

閑さや岩にしみ入蝉の声
五月雨をあつめて早し最上川

鳴子温泉

20数年も前の秋11月、東北の釜石でのたたら研究会に参加し、2日目はバスでリアス式の三陸海岸を北上し、宮古市近くの田野畑村の製鉄遺跡などを見学、少し離れたところにある出雲から来たその職人の草にかくれた小さな墓石をなぐさめ、竜泉洞を見学し、盛岡市を経て同夜は花巻温泉に泊った。翌日午後からは同行の並河孝義（鳥上木炭銑工場長）さんと平泉を訪ね、その夜は鳴子温泉で泊るため、夕方陸羽東線鳴子温泉駅に降りた。その夜はどの旅館も満員ということで、夕食をとって最終便で仙台へ行き、夜行列車で東京へ向うことにし、数時間何とか温泉気分を味うことにした。

タクシーの運転手の案内で小料理屋に入り、ことの次第を話して夕食をたのんだ。私はこの町は鳴子こけしの本場でもあるので、是非今夜でも工人の職場を訪ねたいと話したところ（そろばんの歴史に関して、各地のろくろを調べていた）、心安い工人がいるから呼びましょうと手配してくれた。その間に大衆浴場のかわりに、わが家の五右衛門風呂でよかったら、源泉は変らぬからとすゝめられ、すっかり温まったところえ、工人がやって来た。話しているうちに当地の中堅きっての腕の良い人で、高橋武男という私より三カ月先輩にあたる人であった。あとから送って頂いた大きいこけしは、美しいもので、わが家のこけし棚の中ではピカ一である。またお上さんは粋な姿ものごしの人で、岡山県の島根県寄りの出身で、流れ流れてこの地にたどりつき永住をきめ、弟を呼び寄せてこの店の経営をまかせているとのこと、重ねがさねの奇縁を謝し、12時前に仙台へ向った。



涼み塚「涼しさをわが宿にしてねまる也」

鳴子から出羽国の尾花沢へ

樹々の緑濃いゝ初夏のこの度は、芭蕉の「おくのほそ道」の尾花沢・立石寺・大石田の足跡を訪ねるを主とし、山形市を宿に、河北町も訪問した。元禄二年の芭蕉の訪問より一月ほど早く、情緒を味うには充分だった。

旅僧姿の芭蕉は門人の曽良と鳴子で湯あみして、西の奥羽山脈を越えて出羽国に向う街道中の最大難所を、万一をおもんばかり案内の究意な反脇指を構えた若者につれられて越え、尾花沢（市）に着いた。まず訪ねたのが鈴木清風宅であった。

今、尾花沢郵便局の向い側に鈴木清風宅址がある。数度の火災に類焼したという。裏庭に残る人磨神社がその名残りであるが、少し離れたところに「芭蕉・清風歴史資料館」がある。

清風は俳号で、本名は嶋田屋・鈴木家3代八右衛門である。

当家は代々慶安の頃から諸物品の買継の他、金融業を営み、京都・大坂・江戸などに出張し広く商売を行なった。清風は長ずるにつれて父の命で各地に長期滞在して荷受問屋との交渉にあたるとともに、商人達の間にも流行した俳諧を学び、多くの俳人と交流し、30幾才代の若さで二冊の選集を公刊したことはすでに地方だけでなく、京都や江戸の一流俳人と伍し、貞享2年1685芭蕉とも接触、田舎の金持旦那芸ではなく、出羽俳壇の中心人物として隠然たる勢力をもっていたとされている。

清風の活動は、①出羽商人に対する金融（大口は紅花および米の商取引）②周辺農村に対する金銀貸付（全体の4割）③「紅花大尽」と呼ばれていたほど、最上紅花の大規模な買継問屋で、米も青苧も取扱っている。近くの（4キロ隣）大石田の最上川の河岸商人、舟主に対する貸付、自己所有の川船による下流酒田への自分商荷輸送。④大名貸で、羽州街道の要衝の地尾花沢と近くの大石田河岸を利用した多角経営の元禄期の豪商であった。

芭蕉は「おくのほそ道」で清風の人格をほめ、その厚遇ぶりを簡潔に記述している。清風家に3日間あとは清風のはからいで少し離れた養泉寺で7泊した。

おくのほそ道⑥・短歌・俳句・川柳・横田三十三番札所めぐり⑬

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

寺は当時修築直後で木の香も新らしく静寂な滞在を味った。

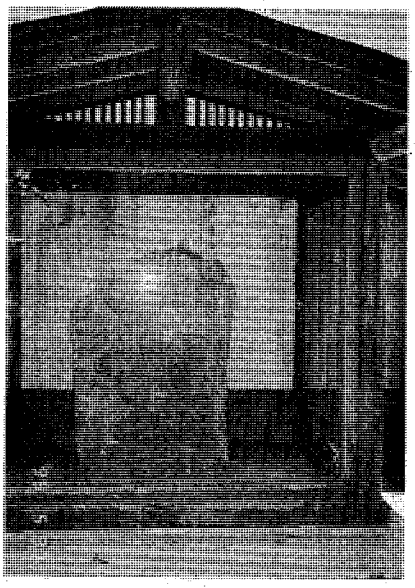
こゝで多くの俳人と吟歌仙（36句からなる連歌俳諧の形式）を興行した。境内には翁の句碑があり「涼み塚」とある。碑面には**「涼しさを我が宿にしてねまる也」**とある。元禄7年翁歿後87年の宝暦12年1762に建立されたことが、碑陰の漢文の碑誌の刻文に見える。

この芭蕉の句を発句として、それに清風・曽良ら四人がつゞけて五吟歌仙を興行し巻物としたものが残っているという。

亭主清風へお世話になるという挨拶の発句で「あなたの広いお座敷のこの涼しさに、まるでわが家のような気安さであぐらをかかせてもらいます」よの意である。これに続いて清風は、**「つねのかりやに草の葉を焼」**と続け、「すゞしさ」「ねまる」から農家にみたてて付句した、風格のある脇句といわれている。「わざわざお訪ね下さったが、田舎のことで、これという蚊遣りもありません。普段のまゝの蚊遣りに夏草の葉を焚くだけですという」亭主の謙遜の挨拶とみえる。芭蕉と旧知の間柄を示す清風のほのぼのとした情感がうかがえる。当時は囲炉裏にヨモギなどの乾草をたいて煙で蚊を追い出した。（曽良以下の情感こもる句もあるが略す）

養泉寺の本山は比叡山延暦寺今の住職は52世といっておられた。明治28年の火災の焼失でその後の復興が続いている。

（こゝで芭蕉は立石寺へ詣るが）

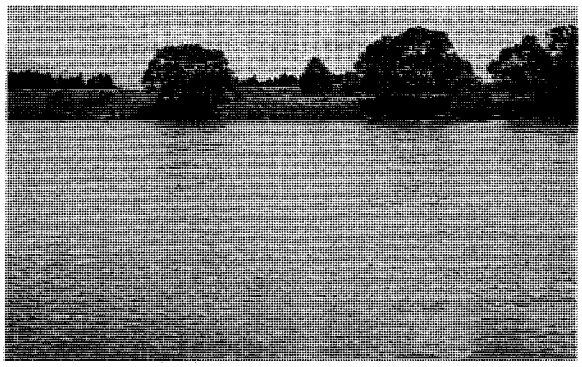


覆堂の「さみだれをあつめてすゞしもがミ川」

大石田（町）

尾花沢市の西南4キロに位置し、当時は河口の酒田港へ下る最上川の川船の発着所（河港）と栄えた。清風の拠点の一つであった。この附近は写真にみるような川であるが、最上川の中流のこの大石田の位置を、出雲の出雲大川（斐伊川）に移すと横田あたりになる。斐伊川流域を初めとする四吟歌仙である。その真蹟が伝存するという。

近くの西光寺の境内裏庭に、**さみだれをあつめてすゞしもがミ川**　芭蕉の句を刻んだ碑が、ガラス張りの覆堂の中に安置されてあった。真蹟を拡大して、明和6年1769建立されたと傍らに誌されてあった。文字はかなり風化している



大石田の河岸船役所跡附近

とは比べものにならない大河であって、かつてのこゝの賑い振りがうかゞわれた。訪ねた日は左の方の手前の岸では釣人が竿をたれた、長閑な日和の日であった。芭蕉はこゝから最上川下りの船日和を待って滞在中、誘われて俳諧の指導をした。「曽良日記」の中では、芭蕉の発句は「五月雨を集めて涼し最上川」ので、傍らに同じ句形を刻した副碑（昭和55年建立）が屋根で覆われて建てられてあった。

河岸船役所跡の解説板によると、元禄時代には、大石田船290隻、酒田船250隻を数え、移出した米は年間24万俵を越え、500有余の船が毎日最上川を上下する様相は、まさに壮観であり、寛永の頃、江戸・大阪に向う客は5月から8月までの間3600余人を数えたという。私は俳句で相像した最上川の景観が、全く出雲的な倭少なものであったことを知るとともに、この近くに架かる大橋と背景の平地遠くに聳える山々の姿の美しさに去り難さを感じた。

「涼しさ」を歌って亭主にしめした挨拶の意は五月雨の晴れ間を見て下る芭蕉の情緒では消え、「早し」という端的な表現に変った。句の焦点が変って「おくのほそ道」の中には、**「五月雨をあつめて早し最上川」**と、最上川の大観をとらえた句となっていられた。

立石寺（通称　山寺）

この寺は貞観2年860、清和天皇の勅願によって、養泉寺と同じく慈覚大師（円仁、伝教大師最澄に学び、第3世天台座主）の開基の寺で、芭蕉は尾花沢滞在中すゝめられて馬でこの寺を訪ねた。

今は国鉄山寺駅近くの登山口から奥の院までの山道は、随所の石段が1015段あって、かなりの時間を要する。はじめにこの山の川向いの丘の「山寺芭蕉記念館」から、この山をみたら、全

山を覆うように50余りの堂宇があり、修業場の大岩や洞窟も多く壮観であった。登山口では「名勝及史蹟山寺」「奥の細道立石寺」の標柱が迎えてくれる。

山の中ほどにある大きい仁王門の少し手前の左の岩盤の上に「せみ塚」があり、碑面に「芭蕉翁」右側面に小さく、**「静さや岩にしミ入蝉の声」**と刻してあるが、風化していて読みづらい。建立は宝暦元年1751ころであるという。この句はその後、再案（修正）を経て、「おくのほそ道」に載る**「閑さや岩にしみ入蝉の声」**に落着いたものであろうという。

この蝉について、小宮豊隆と斉藤茂吉（山形県出身）の論争が行われたが、「にいにい蝉」を主張する小宮説がよかろうとされているという。

私は「しみ入る」にこだわりをもっていたが、この山は凝灰岩を主とする地質で、それを生かした修業用の洞窟が多いことを知り、奥出雲の花崗岩地層と違って、蝉の声はしみ入るように聞えるであろうと、詩情ばかりでなく物理的にもそうであったのだと思って、芭蕉が静寂さとしみ入る声に詩情を吐露したのはさすがだと思い、耳をすまして追体験をと思ったが、蝉の鳴くのには一カ月程早いと、茶店の人が答えてくれた。

五大明王を祀って天下太平を祈る道場である五大堂により道をした。山寺随一の展望台で、陸奥西線の山寺駅や、かなり巾のある深い谷間の向うの奥羽山脈の連峰の緑を美しく感じた。

（この山寺には、俳人高浜虚子・年尾父子の句碑をはじめ、いろいろの句碑、芭蕉・曽良の像などが多く設けられている。）

河北町の紅花資料館

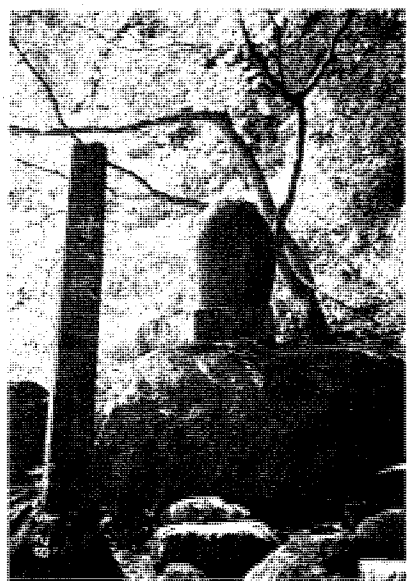
清風宅での五吟歌仙の中にもあり、「おくのほそ道」の中にも収められている。

まゆはきを俤（おもかげ）にして紅粉（べに）の花

（やがては女の唇をいろどる料となると聞く最上地方特産の紅花。そういえばその花の形も女性が化粧に使う小さな刷毛、あの眉掃きの形を彷彿と思い浮べさせる。なまめかしくもやさしい感じをただよわせて咲いている紅花の花よ）

芭蕉は河北町は訪ねていないが、この地方特産の紅花の咲きそう頃であったから、この句を作ったものと思われる。（実は花は黄色、染料となると紅）、紅花資料館は芭蕉とはかゝわりはないが、特産物であり伝統工芸としてその染色技法が伝承されているので訪ねた。

この資料館は広大な旧堀米邸の寄附を受けて生かして設けたものである。堀米四郎兵衛家は代々名主をつとめ、江戸中期より農地の集積を計るとともに、



せみ塚「静さや岩にしミ入蝉の声」

旦月の久闊　簸の上短歌会

著莪の道につづく小さき薬師堂丹精の瓔珞（ようらく）を　永井弥生
友と飾る日
家も人も空しくなりし一隅に落椿あり木漏れ陽およぶ　仝
臨終の夫の枕辺に親族（うから）らの言葉は空し青葉風吹く　岡田時子
亡き夫の好みし色の杜若（かきつばた）今朝草わけてとりて来にけり　仝
慟哭を直視と言ふも国会決議言訳めきてもどかし虚し　常盤はるまさ
思想いまカオスの時代（とき）かかっこよいとオウムスポークスマンに集ふ娘ら　仝
時鳥鳴きゆくけさを句を愛し自然を賞でし叔父みまかりぬ　野村節子
群がりて鶏のこぼれ餌啄める雀の中に子雀もゐて　仝
夕映えし丘の竹林しばらくは明るさ残して小鳥は帰りくる　安部夕波
検温を終えて去りゆく看護婦の足音聞きつつ昼を眠りぬ　仝

柴栗句会六月抄

桑の実や唇そめし友は亡く　浅野としお
嫁のばら舅の薔薇と咲き競ふ　糸原古志
曲線美妖しき観音風薫る　恩田和美
唇に初夏の陽が触れ風がふれ　加納信子
小さくて苺のような今朝のバラ　楠房子
古里よ三日見ぬ間の青田かな　高木白虹
ぽっかりと心のすきまバラを買う　中澤美紀子
夏雲や静かに逝きて消えにけり　新出谷一華
バラの花遺作となりし人惜しむ　錦織富江
今日ありて明日は見えない花卯木　峯石美代子
昨夜の雨のこる真紅の薔薇を剪る　渡部夕峰

（950石—飯石の田部家よりやゝ多い。山林もあったが、田部家には遙かに及ばない）紅花商を営み財をなした。江戸末期には167名の農兵を組織するなど、地域の治安にも貢献している。

昭和56年10代目当主（東京大学名誉教授—ヨーロッパ中世史—堀米庸三）より、敷地・建物・古文書・民芸品のすべての寄附をうけ、それらとともに、紅花の栽培から染色までのすべてを公開してある。

紅花は室町後期から、貴族のあでやかな衣裳や口紅として重宝された。享保時代以後は全盛期で、寛政12年1800には、全国で1,020駄＝168トン、時価にして17億円余で、そのうち80%が奥州地方の産で、442駄がこの最上地方であった。米4俵が1両の時、それと同じ量が100両もしたという。その後化学染料や戦争で一時途絶えたが、最近は「最上紅花」は生きを吹きかえしているという。

それから間もなく四国の徳島を訪れたところ、こゝと河北町は姉妹都市として提携していると知った。紅花資料館に藍染が展示してあるのを見て、紅と藍の対比で展示が美しくしてあるのだろうと思っていたが、提携都市で、「藍の館」の展示の中にも紅の衣裳がひときわ映えて美しさを増していた。

最近、伝統工芸の町の資料館「藍の館」は、藍染の老舗の奥村家が土地屋敷・用具・膨大な文書のすべてを寄附されて設けられたもので、奥村家は別なところで株式会社奥村商事として多角な経営を行っておられるという。

斐の上川柳六月の句

年老いて二人旅する夢を見る　松浦久寿子
腕白もとろりとろりと熱の中　藤原千代子
まずまずの味み男の台所　児玉哲呂
低温に又もなやみの米作り　真絹よし子
旅プラン天気ばかりが気にかゝる　渡部ミツコ
枝豆は鳩にないしょでそっとまく　児玉えみ
同窓会古稀ともなれば待ちわびる　藤原のぼる
落着いてお針持つ日はいつくるか　安部春恵
この日まで母の在りしがありがたや　渡部かおり
八十でまた駄々っ子に逆っ戻り　松浦亜以
出かけるに着る物迷う寒暖差　安部正子
梅雨冷えで炬燵の世界に逆戻り　田中有樹絵
ほととぎす夜どうし鳴いて嫌われる　足立玉恵
一人言誰に聞かせる老の愚痴　松田牛歩
明日はあす今日を大事に吾が余生　藤原英生
オウム狂服の色まで憎らしく　小早川古葉
若返る薬を買いに旅に出る　高木凡太

にはこうした提携出品が多くなって来ている。伝統が生み育てた工芸品を尊重し、誇りと育成への地域の努力のあらわれであろう。

徳島県の板野町のこの「藍の館」では奥村家の文書資料を多数頂いた。江戸時代の交易流通を知るのに貴重なものである。

芭蕉の巡った奥の細道の国々のすべてを巡って見たい。そして著名な俳句の遺跡はできるだけと思い、山形を終えて一応成就できた。欲を言えば旅の門出の深川と、伊賀の上野はもう一度訪ねたいとも思っている。

山形でも徳島でも、当地方の御三家の如く、地方の産業経済の発展とともに、地域文化のため、往時も今も貢献しておられることを知ることができた。

この度の山形の旅は、ハウスに咲誇っていた紅花の黄色と、これまた日本の主産地となっている、さくらんぼの早いものの枝が、赤い実でたわわになっているのが、眼に焼きついた数日であった。

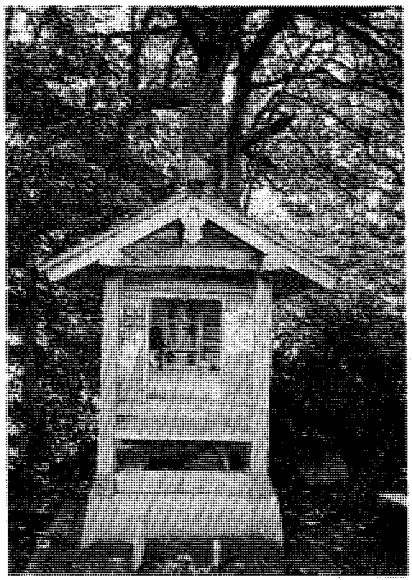
（横田史談会　高橋一郎）

次号は徳川吉宗と松江藩
主宜維

横田三十三番札所めぐり ⑬

17番　稲田代畑　峯松庵

峯の松　千代のふるいほとことはに
むすび　置きぬる誓かしこし



（写真　横田史談会　佐世川徳雄）

会員頒布一部百七十五円／六九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任・高橋一郎（振替口座松江01400—8—601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第244号（8月号）
1995.8.5（M128.T81.S70）
奥出雲編集集団
横田史談会

奥出雲のたたら製鉄史㉕

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会の文化の総合史

近世編16 — 享保の改革と奥出雲 下 —

8代将軍と6代藩主宣維

松江藩主と将軍吉宗

5代藩主宣維（宣澄改め）は、宝永2年1705 8才で襲封した。この頃出雲国内は毎年災害相ついだので、歳未だ幼ない藩主のため、宝永7年3月幕府は目付を遣わし諸郡を巡検せしめた。正徳4年5月、18才で宣維は江戸から始めて出雲に入国した。

宣維は始め享保5年9月、佐竹秋田藩主の末女順姫（直政の外孫）を娶ったが、翌年5月卒したので、7月将軍吉宗は使を越前藩主に遣し、出羽守（宣維）の再婚を促し、伏見宮一品中務卿邦良親王の女岩姫を媒せんとすすめた。越前藩主は伏見宮の外叔父であった。宣維はこれを陳謝し、国内の凶荒相つぎ出費困難によりしばらく猶予を願い、3年後の享保の年11月降嫁御入輿のことがあった。夫人でのちの天岳院である。2男をもうけ長子は宗衍で、6代藩主をつぎ、次子長孝は美作津山藩主の養子となり、その5世の孫が松江藩に養子となり10代藩主となった定安である。（定安については本紙の既刊号に詳しく記述）

伝えによれば岩姫降嫁の折のお土産として、知行高1万石につき1箇づつの割にて、18万石により擬宝珠18箇を持参され、府内橋梁の欄干を装飾されることになり、松江大橋南北の橋詰に4箇づゝ中央2箇、京橋南北に4箇づゝ使用された。松江府城の目貫きの場所である京店通りは、京都三条通りに似せて庇（ひさし）を長くしその下を往来した。京店の呼称とともに宮家との縁組に由来するといゝ、松江に京風の生活文化が浸透したのもそれからであるという。

かつて初代藩主直政は靈元天皇即位の時、将軍の名代として京都に使したが、享保元年1716中御門天皇の女御に近衛家熙の女尚子が入って、大婚の式が挙げられたが、この時宣維は奉賀使となり、将軍吉宗の名代として上洛、10月19日幕府から賜った馬にて江戸を発した。従うもの50騎で弓・鳥銃・長槍など、直政の名代上洛の例に準じ、副使なども従えて、11月15日入京、警備厳重の中参内し、幕府ならびに雲藩の献上物を、天皇・法皇・女御・女院に進めて祝詞を言上、拝謁し天盃を賜り、法皇ほかにも拝し、5日後には勅によって少将に任ぜられ重ねて天盃を、そして法皇ほかからの賜物をうけて、12月2日京都を発し16日江戸に還り、21日幕府に復命した。これすべて藩祖直政の古例に由ったもので唯一の場であった長崎では、外国の諸贅沢物の輸入が多くて正貨の流出が甚だしく、新井白石の建議でその地方の藩主（諸侯）に厳禁の令を出したために、各地に来船するに至ったようである。

宣維の治政

森林保護に心を注ぎ、享保4年藩内有用樹木を検し帳簿に記録し濫伐を禁じた。一方土地開拓を謀り、享保5年より、西川津村の干拓工事を行い、伊豆屋・矢野原の両新田ができた。また享保6年竹崎村の卜藏孫三郎（現横田町竹崎の鉄師卜藏家）の願を許可し、孫三郎は鉄師としての砂鉄採取の法を利用して、仝8年より荒島村の日白池の干拓を始めた。今日の卜藏新田である（これについては本誌7883 86号に詳述）。

享保2年以来、度々異国船が出雲沿海に到来した。藩では何らのこれに処する施設や武備もなく、幕府の異船撃攘令もあって、急いで備えに力を入れた。

2代のちの藩主治郷の世になって唐船番が設けられることになる。

当時の異国船の多くは清国船で、反物、砂糖、菓子等の密貿易が目的であった。対外交流の

享保15年6月5日幕府から紙幣の通用を許しを得15年限りとしたが、国内に信用乏しく、5カ月後札銀との引替をはじめたが、仝16年8月27日宣維病んで江戸で卒した（34才）ので、その累は長子宗衍の代にも及ぶことになった。

一方宣維の在世27年間幕府にても財用乏しく、各藩にそれぞれの石高に応じて献納を命じていた。

享保（20年間1716～1735）期間の松江

このころについてさらにふれると、

（正徳5年1715藩主参勤交代で江戸へ）
（享保元年1716藩主奉賀使（既述）

この年将軍吉宗は各藩の情勢把握するため巡見使を設けた。（仁多郡担当郡奉行は葛西源右

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲のたたら製鉄史㉕・横田三十三番札所めぐり⑬・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

衛門）。翌2年巡検使松平与左衛門（2000石）他2名が、伯耆・隠岐を経て5月16日横田泊、三沢を経て石見へ向かった。横田では国中鉚差出帳（仁多大原飯石神門4郡）を求めて持帰った。（松平初代直政入部の砌提出された、出雲鉄師御改帳の筆頭鉄師は大馬木村杠治兵衛＝太部左衛門であった）

この年お上不如意により10郡で2万俵献納を求められ、仁多郡内の頭立の者で1000俵を差出した。

（5月18日藩主江戸より帰城）

この年10月、さらに貸米32,000俵の下命があり、郡内頭立の者で4109俵分の金子を上納した。

享保4年横田八幡宮遷宮（郡奉行小倉源右衛門）。この秋先納米25,000俵を国中に割てた。翌5年3月藩主は杵築・御崎両社参拝後、江戸へ参勤の旅に出発した。

8月鉄方御買鉄御役人に、頭は知田惣右衛門、その下に桑原惣右衛門・岡本善右衛門がなったが、10月知田の死亡で板倉兵左衛門に替わった。9月藩主宣維は順姫を娶った。この年変転していた御買鉄制も13年振りのこの秋廃止となった（これより幕末に鋼の一部を専売とするまで）。

宝永3年の大風・地震、正徳元年の城下松江の大火と災害が続いていたが、この年秋には大風雨のため47,000石の減収となり、藩財政は逼迫の状態であった。

享保6年順姫の死により、将軍吉宗のすすめる婚儀も延期を願い出た。その年も大風雨増水のため69,400石の減収という大凶作と続いた。

竹崎村（横田町）の卜蔵孫三郎は、荒島村日白池の干拓を申請した（岩屋寺本堂上葺完成）。

仝7年4月有沢家4代（2000石）が家老兼軍用方役として登場、財政立直しにあたることになった。

ところが7月には49年振りの寅年の大雨となり、横田町で1丈8尺3寸、北原村で2丈5尺、湯村で3丈という増水となった。横田町では富田屋前で2尺5寸、蔵元小路でも2尺5寸という床上浸水を記録した。

往還、井関、雨提、板橋等の流失、破損が多く国中の被災者165,515人を数えた。仁多郡内では横田町500人、大内原750人、北原800人そして死者115人。仁多郡は大凶作となり、6043人が飢えにさらされ、藩に願って312俵を、さらに追加を得て合わせて860俵で、郡内安堵することができた。

郡奉行は前年から拓植官兵衛であったが、この年から鉄方御役人は筆頭が矢島徳右衛門、その下役は桑原喜太夫、岡本善右衛門であり、国中の鉄師の鉄方頭役は田部長右衛門であった。

藩の財政逼迫も原因であろう。三郡の鉄師と鉄方役所御役人との間に、享保5年御買鉄制廃止までの買鉄代金清算をめぐって論争がこの年はじまった。（詳細については本誌163 165 171 172 176 179 183号に詳述した）

享保中期は将軍吉宗の中興振興時期でもあった。

すでに述べたように松江はその極に達し、諸藩士の減禄をみない年はなかった。だがこの間藩主の収石は毎年1万石宛増収となっている。

それは享保8年から始まった寸志米によるもので、一定の額を各郡が上納したもので、すべて下々の負担であった。

（この年藩主江戸より帰城）

享保6・7年の大凶作、大洪水は鉄方も影響をうけて衰微した。そこで下郡役を長年（正徳元年から享保13年まで18年間）勤めていた横田の稲田代畑の安部七郎左衛門の陳情が重ねられた。

かねて申請していた卜蔵孫三郎の荒島の干拓工事はこの年から始められ16年間をかけて完成した。（本誌78 83 86号に詳細）

仝9年当地は大雪となり、仁多郡の山中は積雪1丈2丈、食べるものを失って里に出て、捕獲された猪鹿 頭・猿 頭であったと記録されている。

2月藩主参勤・将軍吉宗に拝面翌10年藩主帰城

鉄方御法式制定

享保5年御買鉄制廃止から6年たった享保11年松江藩は鉄方御法式を制定した。この制定に到るまでの経過および、この御法式が奥出雲が明治18年でわが国の和鉄生産額の半分を占めるまでの基礎になったことはあらためて記述することにする。

この時の家老は有沢土佐（12年12月まで）である。

8月藩主宣維は杵築（出雲大社）三崎（日御碕神社）の参拝を終えて江戸へ参勤

この時代の絲原家は6代勘右衛門（清親）であって、享保元年から仝18年まで当主であった。

古市の新宮神社の建立、蔵屋の毘沙門尊像が京都にて修復された。

この年は大豊作であった。

仝12年藩主宣維松江へ帰城

仝13年藩主江戸へ参勤、日光へ社参

仝14年若君（幸千代）誕生

仝15年松江に帰城

仝16年江戸へ参勤・病没

豊作で一息入れた松江藩も仝13年からは毎年、富農層に対して年貢の先納を行わせてしのぐ財政状況であった。

井戸平左衛門の登用

享保16年9月、井戸平左衛門は江戸城勘定役であったが、将軍吉宗の眼にとまり、天領である石見国大森代官に抜擢された。翌年石見地方の大飢饉にあたり、農民の苦しみをみるにしのびず、町人や富農から寄付や、手持金をもって甘藷を求めて栽培をすゝめる一方、代官所の米を独断で放出して危機を救ったが、このため18年4月、平左衛門は備後

笠岡の陣屋へ配置替えとなった。しかし甘藷栽培は当地方に拡がり、つねに農民の食糧確保を支えたので、今に至るまで井戸神社のほか、村々で庶民の信仰をうけている。

松江藩の鉄山行政

これの基本資料は、『鉄山旧記』と『享保年間三郡御買鉄ニ関スル一件』とそれに『鉄方御條目』である。

このうち『鉄山旧記』の中の「鉄方御法式御書出し」が骨格で、「享保年間三郡御買鉄ニ関スル一件』は、御法式御改めの原因の一つの原因となったもののようである。「鉄方御法式」は、全国にも例のない法式で、享保12年から明治初年まで140余年継続されて施行されたもので、出雲の和鉄製精錬が全国で質量ともに首位になったことの基礎であったのである。

これらの三つの文書は絲原文書として絲原記念館所蔵であり、『新修島根県史』資料編その他に収録されているが、正確に読むことが必要である。その要点は本誌197号に表として掲載して置いたが、その表の解説の要点を記述して置く。（近く発表予定）

『鉄山旧記』は絲原家文書であるが、前文にあたる歴史記述は杠家文書の『杠日記』が骨子となっており、「鉄方御法式」関係文書の署名入り文書は、竹崎の鉄師卜蔵家の分家大呂の山根卜蔵家の『鉄山根元』の写しであり、これに付随した文書のうちの二つの文書は重複しているが、これは絲原家にあったものを書き加えたものである。さらに若干竹崎の仲間文書が書きとられて加えられている。（別途考証）

幕政と藩政の動き

松江藩では理由は明らかでないが、享保6年1921から御買鉄制を解いて、鉄師の私売となった。

仝7年4月からは有沢家4代土佐が、家老仕置職となった。

有沢家は藩祖直政に供奉して来国した。家祖織部の長男が2代、3代土佐は家祖織部の二男で、元禄15年1702家老となり、宝永4 1707その職を退くまで、藩主宣維に従って江戸にもでている。

（宝永3年7月より享保4年11月まで家老仕置役、三谷家3代権太夫である）

有沢4代土佐は2代織部の嫡子で3代土佐（叔父）の養子となり4代を継いだ。正徳5年1715 2月から家老として御仕置役見習をし、享保7年1月11日御仕置役兼御軍用方として仝12年12月11日まで6年間その任にあった。その後は3代三谷権太夫が御仕置役として、仝16年2月まで勤めた。

（4代土佐はその後延享3年1746城代家老となり、江戸にも出かけている。仝4年6月16日引退）

4代土佐が仕置職となった享保7年の年末に「三郡御買鉄論争」が起り、既述のように、結末はうやむやのうちに時がたち、鉄師の私売がそのまま続いている。

享保9年には、詳細に前回述べたように、大岡越前守忠相が登用されると、江戸に於いて株仲間が結成されはじめ、拡がっていった。

こうした動きは、これまで述べた諸般の状況から総合推察してみると、松江藩ではそれらの検討の結果、鉄師の株仲間を組織させ、仝7年末の藩の失態の繰替えしをさけ、藩財政の一翼としての鉄師株仲間の先納銀制を確実に確保しようとしたようである。（運上銀＝営業税は、釜・鍛冶屋から徴収している）

その制定までの経過と概要をのべると、

松江藩九鉄師の登場

（飯石・大原郡・神門郡については鉄師名のみで、詳細は文書がなくて不明であるが、これに準じたものである）

Ⓐ享保10年12月には申触書（正式文書）が鉄師に届けられる。多数いた鉄師のうち、実績があって、大水田地主層である9人に許可を与えることとした。仁多郡—卜蔵・杠・絲原・桜井・山根・大原郡—石原飯石郡—田部と分家田部　神門郡—桜井の9家である。

Ⓑ鉄師一同は検討し、仝11年正月、これに対し「釜・鍛冶屋ケ所分帳」をしたため、申触書に対しての上書を連署して提出した。

Ⓒこれによって藩は直ちに仝月『鉄方御法式』御改めの正式布告をした。

——以上絲原家文書

Ⓓこれをうけて鉄師一同は直ちに仝月18日、「仁多郡鉄山（木炭山）箇所分ケ帳」を差出し、6人（実は仁多5飯石1のその他は文書なく不明）の具体的な鉄山名を細かく書いて連署し上書した。

（郡内5鉄師の所有する鉄山は67ケ所で、数年ごと順繰りに、釜場の移動をした。）

——以上卜蔵家文書写し

Ⓓ'さらに「仁多郡鉄穴場所村分ケ覚」を連署し上書した。

——右も卜蔵家文書写し

Ⓔさらに、宝暦4年1754「仁多郡鉄穴鑷取番付極帳」があるが、仲間文書の写しである。

Ⓕそして宝暦11年1751の『鉄方御條目』—鉄穴ケ所制限令—（絲原家文書、署名入り）が出され、続いて3通の関連文書がある。

Ⓖそして仲間文書の宝暦4年以降明治4年までの『鉄方御条目』の修正文書の写しが、8通ほどある。

（資料名—杠家文書「杠日記」、絲原家文書「古代よりの聴書」、「新修島根県史」、「旧松江市誌」「出雲私史」ほか）

斐の上川柳七月の句

粽巻く頃にはいつも母の顔　松浦亜以
老兵が又またひとり逝く便り　高木凡太
ボーナスと聞いても縁のない暮し　田中有樹絵
老夫婦二人になればごみも出ず　藤原千代子
あわ風呂は心の垢をふき上げる　渡部かおり
香典が続き家計簿にらむ顔　児玉哲呂
オウムで明けオウムで暮れる目が疲れ　松田牛歩
忙しいけど解決もしてうれし　藤原のぼる
人ごとと思いし我もひざ痛む　安部正子
八十路すぎ笹巻出来てホットする　安部春恵
運動会ころんだ友を待つ園児　渡部ミツコ
雨続きお米たのむと又電話　石原冬明
法要は加工新茶で仕出しとり　足立玉恵
ご馳走の食いだめしたい旅の膳　児玉えみ
運動会孫に引かれる踊りの輪　小早川古葉
雨のためリズムくるわす運動会　真綿よし子
粗大ごみふるいにかけてリサイクル　藤原英生
折角の平和オウムが傷をつけ　田中芳春

雪より白き　簸の上短歌会

ひそやかに水鏡して雪の下雪より白き花をかざせる　永井弥生
看護婦の詰所の前に一礼し老母を残して階下る夜　〃
亡き父の使ひし机に筆数多転びしままに部屋隅にあり　岡田時子
教へ子より夫もらひし杖二本物置にあり埃を払ふ　〃
笹山にひそと咲きたる山百合にほのかなるものの漂ふごとく　常盤はるまさ
ようやくに雪の消えたる畑に来て伸びやはらかき白菜を摘む　〃
身罷りて七七日経ぬ青葉沁む叔父のみ墓辺に　〃
ひぐらしの啼く喘ぎつつ登るに松のさやぎゐて先ず碑の放浪記よむ　野村節子
坂道をくだれば街は夕映えてビル建築の鉄塔ひかる　〃
　　安部夕波

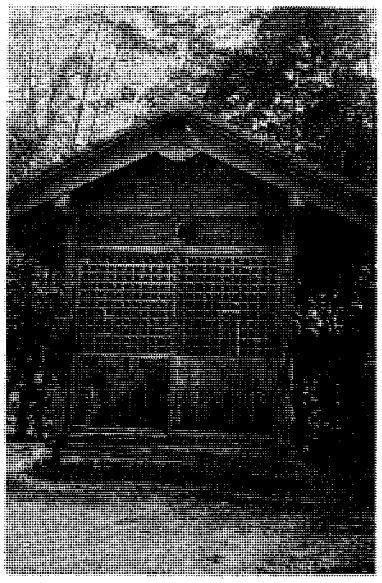
柴栗句会七月抄

若鮎は荒瀬の色に育ちおり　浅野としお
花菖蒲研を競ふといふ言葉　糸原古志
草矢射て失墜の風に舌打ちす　恩田和美
耳鳴りに蝉の鳴き声重なりぬ　加納信子
眼鏡拭く老師刈り込む松新芽　橘房子
懐かしき紙の風船吹いて見る　高木白虹
蝶もつれ艶めき競ふ花菖蒲　中澤美紀子
義父の忌や幾年巡る栗の花　錦織富江
無造作にくくられ朝市花菖蒲　新出谷一華
うすものに着替へて紅もひゐてみる　峯石美代子
三尺寝老妻眼鏡かけしまゝ　渡部夕峯

横田三十三番札所めぐり⑬

18番　稲田・極楽　道場庵

御仏の誓ひむすべるあやめ草
たどりのぼれば極楽の堂



参勤交代

江戸幕府の大名統制策の一。起源はすでに徳川家康の時代より諸大名が幕府の意を迎えるため、妻子を江戸にとどめ江戸参府を行ったことに見られる。それを法制化したのが1635（寛永12）年の武家諸法度であり、これにより大名は關東大名の半年交代、對馬宗氏の三年一勤の他は、毎年4月を交代の期として、隔年度の江戸居住を命ぜられた。これによりよく中央集權の實をあげ得たけれども、大名は出費の増大になやみ、窮乏化する藩財政を補おうとして、年貢の重課、国産の奨励等の経済政策をとった。ただ諸大名ならびにその家臣らの江戸居住による江戸の繁盛、交通網の整備、中央と地方との文化的交渉は注目される。しかし大名財政の逼迫は如何ともし難く、1722（享保7）年7月上げ米の制をとり、大名の江戸在住期間を半年とし、救済策を講じた。'30（享保15）年旧に復したけれども、幕威の衰えとともに有名無實の制度と化し、1862（文久2）年遂に三年一勤百日在府の制をとったが事實は行われず、'65（慶應1）の復旧案も無效に終った。

会員頒布一部百七十五円／〒六九一一八　島根県仁多郡横田町一、〇八二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江〇一四〇〇―八―六〇一）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第245号（9月号）
1995.9.5（M128.T81.S70）
奥出雲編集集団©
横田史談会

鉄の来た道①
——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の集録）

鉄文化発祥の地はどこか

本日のテーマのシルクロードですが、イラクとアフガニスタンは湾岸戦争の後遺症でまだ行っておりませんし、他の国々にしましても点と点を結んだようなお粗末な旅なのです。またこの、テーマの話は『シルクロード鉄物語』として、七月の末に雄山閣出版より出ましたので、本日はその概要と、書かなかったようなお話を若干いたしまして、責を果たしたいと思っております。

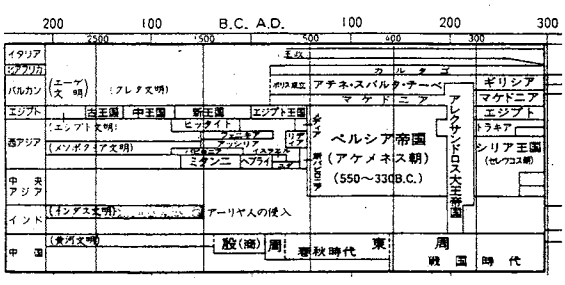
話の順序といたしまして、日本でよく「製鉄技術の発祥地」といわれておりますトルコから始めまして、東へ東へと日本に戻るように運ばせて頂きます。

世界で最初に鉄を造ったのは、トルコにいたヒッタイト人だと良く言われております。これは一体どういう経緯で、そう言われるようになったのでしょうか。この点につきましては2つ程理由があります。それは紀元前3千年紀の末頃の遺跡から発見されました鉄製品で、最も立派なものが、中央トルコのアラジャホユクと言う大遺跡から出ていることが1つです。ここにあります13王墓のK号墳という、紀元前2千3百年頃のルウイ族とされているお墓の中から、（もう少し下るのではないかという話もありますが）黄金で飾られまして豪華な鉄製の短剣が発見され、またその前後の地層で鉄製品数点が見つかりました。50年程前にこれらの一部をハミット・ズーベアコーセイ博士が化学分析をしましたところ、ニッケルが4～5%検出されまして、そのためこれは流れ星の隕鉄で造ったものと言うことになりました。

もう1つの理由は、かつてカイセリや、イスタンブールの古物商に、鶏の足跡のような古代の楔型文字といわれる文字で書かれた粘土板が多量に出廻り、その流出先がカネシュ＝キュルテペの村にあるこの遺跡と判りまして、回収される一方で判読の作業がされたのですが、その中にアムートウと書かれたものが何枚かありました。古代言語学者の研究結果から、これが「天の金属・神の金属さらに具体的には服飾用に使われた鉄と推定される金属」ということになりまして、他の金属はそれぞれ金とか銀とか固有の名柄があるところから、これは鉄を意味しているものと推定されました。

ただ最も具体的に書かれていました1枚が、ドイツの調査隊が本国に持ち帰りまして、ベルリンの博物館に保存してあったものですから、戦災で灰燼に帰してしまったものと思われます。これには金の5倍・銀の40倍の価値のあることが書かれていました。

私は何とかその現物を見たいと思いまして、トルコ文化観光省に直接会って話しましたら「良いですよ。探して見て下さい」とのことでした。しかし簡単にそう言われましても、あの鶏みたいな字が私のようなものに読めるはずはありません。しかし運良くイスタンブールで開催されておりました、大ヒッタイト展の会場で、古アッシリア語の鉄＝アムートウ・金の5倍と言う文字と、アリンナの鍛冶神という言葉が、傍の小さなラベルに英語で書いてあるのを見つけました。



しかし考えてみますと、鉄は原始的にしましても技術が判りますと、銅よりも資源がずっと多く、添加物は希少金属なので値段が高いですから、当然それに代わるものとして量産へと進みます。原始国家の成立期にこれ程武器の調達に都合の良い金属はありません。したがいまして、人間が鉄を造ることを知った時期に入っていたとしたらですね、余りにもこれは過大な評価に過ぎると思います。

また鉄を造れなかった時代、あるいは過度期としますと、隕鉄なら空から落ちて来たものですから、希少性がありその位の値段は当然つけられたことでしょう。何故かと申しますと、隕鉄は他の天体から大空を流れてくるときに高温に晒され、それが冷える時に鉄分とニッケル分では固まる速さが違いますので、ウイドマンステッテンと申しま

鉄の来た道①・年貢のおさめどき・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

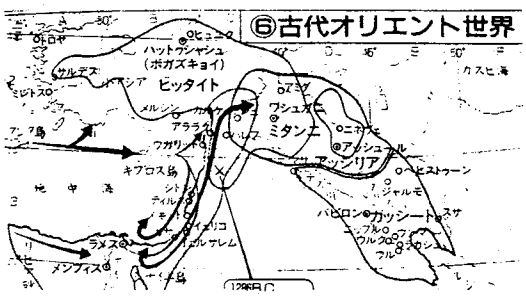
す、格子状の模様を造ってしまいます。従ってこれを研磨しまして、宝石の代わりにブローチやボタンにして珍重されたと思います。

それでは何時、誰がこの辺りで人工の鉄を始めたかと申しますと、その点については面白い文献が残っております。それは紀元前ちょっとの頃、ギリシャのアリストテレス系の学者が編集したもので、偽アリストテレスの『異聞集』といわれている本です。

大部分の皆様はご承知でしょうが、この本の第48項に「カリブスとアミソスの鉄の製法は極めて独特であり、河川で運ばれてきた砂から採れる。ある人はこれを洗って炉で溶かすといい。また別の人は再三洗ってから熱し、この地方でピリマコスと呼ばれている石を添加する。こうして造られた鉄はどんな鉄よりも上質のものになる。錆び難いが、沢山は生産されないものである。」とまあこんな風に書いております。古代製鉄の学会でもこの解釈を廻りまして、先生方の間でいろいろと論議がされております。私はもちろんこんな難解な古代ギリシャ語なぞ判りませんので、余り学問らしくありませんが、それより百聞は一見にしかずと、磁石をもって彼らが住んでいたと目されております、東北トルコの地を歩き廻ったわけであります。

このカリブスという民族は『アナバシス』というギリシャの紀元前四〇〇年頃の本で見ましたら、トラブゾン市の南方、エルズルム市の北側辺りに住んでいたことが判りました。この本はペルシャ王アルタ・クセルクセス2世の弟のキュロス副王が反乱を起したとき、アテネの歴史家クセノフォンという人が、傭兵となって外人部隊で従軍し、実際にトルコを一周して彼等に遭遇したことを記している日誌なのです。その頃既に製鉄専業の人々だったと書いてあります。

ベックの「鉄の歴史」に書かれているように、クルド人などがこの山は全部鉄デミールですなどと言ったのは、外人に対する迎合で全くの間違いでしたが、琵琶湖の五倍もあるバン湖の北側で、大量に良質の湖岸砂鉄を見ましたし、ロシアのアルメニア共和国との境にあるアニの遺跡でも見ました。ドウバヤジットの町外れでは、皆様御承知のアララット山の麓で、クルド人の反乱で戦車が出動している間を縫って歩き廻り、豊富な砂鉄含有土砂を見つけ、また鉄糞らしいものも一握り採集しました。これらがウラルトウ王国などで鉄源として使われていたのかも知れません。



しかも、カリブス族の造った鉄の原料と考えられますものを、運良くトラブゾン市の南30kmにあります。スメラ修道院の近くで発見することができました。採集しましたのは山中でしたが、200mと離れていない処に幅が20m位の川が北へ向かって流れておりました。ここに持ってきておりますが磁鉄鉱の顆粒状のものと砂鉄の混じったものです。恐らくこの川底に沈澱している砂を採集すれば、先程申しました『異聞集』に書いてある通り、長い年月に水洗分離された砂鉄などが採集されるものと思われます。分析をいたしましたらFeが62%もありましたので、粒状の点と相まってですね、これを原料に還え鉄を造ったら、すばらしいものが出来るだろうと想像されます。

またピリマコスという石につきましては、溶媒剤的な役割のようですから、多分この鉄源を採集したときの水洗の廃砂、またはコンマゲネ王国、アンティオコス王の遺跡のネムルート山などは全山石灰岩ですし、他にも随所に石灰岩の山があって大理石の産出も見られましたから、石灰岩のことではないかと思います。

ポーランドのピアスコウスキー博士のように、硫砒ニッケル鉱を添加したとの学説もありますが、その産出については聞くことができませんでした。それから燃料の薪や炭はこの辺りは樹木があり十分供給できたでしょう。

このカリブス族は粘土板では、既に紀元前13～14世紀には現れていると言われておりますので、僻遠の地の少数異民族であり、少し遡らせて考えれば、初めて人工で鉄を造った人達の1グループと言えるかも知れません。

こんなに乏しい貴重な鉄ですからこそ、アッシリアの＝特に紀元前750年頃のサルゴン二世王など、喉から手が出るほど獲得したくて、ウラルトウやもっと西側のタバルというヒッタイトの東半分辺りまで、侵入をくり返していたのではないでしょうか。

まぁーこう見てきますと、最初に申しましたヒッタイトの製鉄は、ヒッタイト人が直接造っていたのでは無くて、隷属したハッテイとかプロトヒッタイトなどの辺境に住んでいた従属民族に造らせていて、それを武力で独占していたことが想像できます。アダナでウーリアンと呼んでいましたから、ミタンニに従属したフルリ人とも思われます。またそのことを示した粘土

斐の上川柳七月の句

急死した友の墓参につい涙　安部正子
応えない地蔵に愚痴を言ってみる　高木凡太
馬鹿垂れと気安く口にできる仲　松浦亜以
短パンをはいて短かい脚を出し　児玉哲郎
一人言朝顔笑って聞いている　渡部ミツコ
そうめんを食べて一寸の涼とする　真綿よし子
歯の治療あなたまかせに口をあけ　児玉えみ
猛暑にも負けてはおれぬ盆掃除　藤原のぼる
痛み止め飲んで動いてまた痛み　安部春恵
まごころも立場の違いで溝ができ　渡部かおり
色あせた鏡掛けにもある思い　藤原千代子
楽しみはビヤガーデンに家族連れ　足立玉恵
笑ってはいるが心はしかめ面　田中芳春

丘の日はるか　簸の上短歌会

八月十五日を寧ろ知らざる若者の増えきて戦　常盤　はるまさ
争も風化しゆけり　人
妻の漫瓶日課となりし夜濯ぎに仰ぎ見る星よ　人
兵の日はるか　人
じりじりと夏の太陽照りつける狭庭に淡く昼　野村節子
顔の咲く　人
堅土を割りて芽を吹く隠元豆のやはきみどり　人
の陽に真向ひぬ　人
新築の家の独り居あけ放つ部屋を訪ふもの虻　岡田時子
に蚊に蝶　人
子を置きて夫の遺骨出迎へし幸子は広島の原　人
爆に逝く　人
値の戻る日を待つと友は並びゐる牛にブラシ　永井弥生
する滝の汗して　人
あはあはと合歓の花咲く里の道手押車の老婆　人
がひとり　人
定期バス止まれば暑し山の街蝉鳴く声を聞き　安部夕波
とめにけり　人

柴栗句会八月抄

まほろばを囲む山脈秋意満つ　淺野としお
葦猛るまむかひに聳つ大蛇山　糸原古志
露草を素足で踏みたき車椅子　恩田和美
城山の万緑風にあらがひて　加納信子
乱世の城趾しのばむ河鹿の音　高木白虹
山閑か秋をさがしに風の径　中澤美紀子
斐の川の豪雨静もり夏は果つ　新出谷一華
水と生き川音涼し山の里　錦織富江
新涼を求めて孫と山に入る　峯石美代子
肥の川の流れ豊かや残暑なを　渡部夕峰
川の面に雲浮ばせて尚残暑　杠房子

板文書に、ヒッタイトの首都がボアズキョイ遺跡から出土したものがあります。これは外国の王から鉄剣の贈与を求められたのに対して、ヒッタイト王が「今は鉄バルジル」（この場合はアッカド語で書いてあった）を造るのに良い時期ではない、キズワトナの倉庫にもない、後日送ります。」と婉曲に断わっている文書なのですが、この文面からは、明らかに人工の鉄の時代になっていることが窺えます。

重要なのは年代を決定する関係人物なのですが、発見当初はヒッタイトの紀元前1300年頃のハットゥシリシュ3世（BC1298～1266）から、エジプトのラメス2世宛と推定され、その後に発信者は同じなのですが、受信者はアッシリア王と考えられるようになりました。現在はこの方が主流になっているようです。欧米などの学者の研究成果なのでしょうが、私にはどうも剽悍なミタンニを亡ぼし（BC1270）、バビロンを征服した（BC1290）アッシリアが、おとなしく手紙で頼んできて、少し斜陽化しはじめたとはいえ爛熟期のヒッタイトから断わられて、ハイそうですかと納得しただろうかと思うのです。

余り学問的な考え方ではありませんが、ウラルトウの東の方で、一寸と略奪をやればですね、刀の二振や三振何とでもなるのではないかと、ロマンなのですがそんな風に考えております。

このボアズキョイでは、鉄の出土品は極めて少ないと言われておりますが、粘土板文書のように鉄板に文字を書いたものも出土しております。また1910年頃にこの地を調査しましたドイツの考古学者のウインクラーという人が、詳細は不明ですが鉄で造ったものの残骸を発見したとも報告しています。ですから確かに鉄器文化を独占した帝国だったわけです。

ここに調査に参りまして、広大な遺跡の城壁の傍で、ふと風にそよぐ草を見て私は唖然としました。その雑草は極く小さな紫の花をつけていましたが、葉の形が何とヒッタイト戦士の亡霊でも現れたように、甲冑をつけた兵士の形をしていたのです。ちょうど壇の浦の平家蟹のようにですね。

なおこのヒッタイト帝国は紀元前12～11世紀に海の民とよばれる蛮族によって亡ぼされたと

年貢のおさめどき

駒原邦一郎

徳川吉宗は、享保7年（1722）に上納米の制度を設けた。そしてその翌年には石高の制度をきめた。これによって天下の各藩は根新しい石高をとりきめるために田畑、屋敷などを一筆毎に測量してその面積を求め、さらにその土地の地味ゆ水利などの関係をあんばいして石盛をきめた。石盛とは、一反歩の土地からとれる農作物のでき高を、米に換算して示したもので、それぞれの持ち高は名寄帳に書いて、その3割から5割が上納米の量であった。

当時は地番がなかったので、地味や道路、水路、谷その他の自然の条件をまとめて「何々輪」と呼ぶ「輪」をつくった。この輪の田地を上上田、上田、中田、下田、下々田の5段階に分けて石盛をきめ、これをまとめて村全体の石高とした。

その年の石高を知るためには、地方役人がきて土地の検分をいていた。辻見というのは、地方役人が村へやってきて、庄屋、年寄、頭百姓などともに一つの輪のなかの標準的な田んぼを坪刈りして実際の高を知り、これを基準にしてその輪のなかのとれ高を決めるやり方だった。

また見積もり法というのは辻見と坪刈りをあわせておこなうもので、郡や村の役人が命じられて責任をもって調べた。

地方役人の構成は藩にその頭取がおり、その下に本地方、さらに添地方がいて彼らが村々の調査にあたった。添地方が検見に廻るときには多くの随員をつれ、田方御検地帳をもってカゴに乗ってきた。郡の下郡役（したごおりやく）は乗馬でこれに従った。

こうして村の年貢高がきまるとやがて徴税書として下札が渡され、村では庄屋が責任をもって百姓から上納米を徴集し藩に納めることになっていた。

収納のときがくると、年番の庄屋が蔵方となり、年寄役のほかに相府、米見、斗引といった専任の係りを設けて米を受けとることになっていた。百姓は割り当てられた米を、この納め蔵まで運び役人に手渡す。この際「納米桝」という京桝より一割一分も大きいマスではかった量を持ち込まねばならなかった。そのうえに、欠米、込米といって石当たりいくらと余分に納めるのがしきたりだった。

こうして納米が終われば、役人はたったひとこと「皆の衆たいへんご苦労であった」と告げるだけだった。

それでも百姓たちは、年貢米が無事に納められれば幸せな思いにひたった。家に帰って「女房、よろこべ、ことしの年貢おさめもこれですんだ」といって喜び合うのだった。彼らは翌日からまたおかゆをすすりながら、来年の年貢を果たすためのいろいろな仕事にとりかかるのである。（駒原さんは敗戦後郷里阿井村で商売の傍ら、熱心に郷土史をまとめ、自費出版を重ねられた。その中から、この記事を借用し掲載した）

お蔭様で第14回たたら研究会は、北は岩手県から南は大分県まで22都府県から100余名、県内地元で50余名の参加者があり、内容もわが国たたら製鉄の歴史的研究の本筋が見えて来たと言っても頂き、講演・鉄穴流し本場作業の実演とともに好評を得ました。感謝申し上げます。

いわれ、鉄の文化や技術はこれを境に独占が破れ、東西に流出伝播したと言われております。この蛮族は海から攻め込んでおり、エジプトも攻撃していますので、おそらくギリシャ系の多島海域の民族ドーリア人とかアケーア人などか、あるいはフリギア辺の新興勢力でしょう。とすればこの辺りにも継続的に初期鉄器文化は根づいていたはずです。またシリアのマリ遺跡（ユーフラテスの中流ですが）では出土した紀元前15世紀頃の粘土板文書に、既に鉄製の指輪、腕輪、その他の装身具、さらに短剣や槍先などを記載してあったとされています。

窪田氏紹介

1926年生まれ。明治大学専門部法科卒業。日本鉄鋼連盟に37年間勤務。富山大学、金沢大学、岩手大学（鉄鋼技術史）、東北学院大学の非常勤講師（考古学特殊講義）、金属博物館参与を歴任。

著書『鉄の生活史』（角川書店）、『改訂　鉄の考古学』「増補改訂鉄の民族史』「鉄の文明史』（雄山閣出版）、『製鉄遺跡』（ニュー・サイエンス社）その他。論文も多数。

（ご厚意により連載します）

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町二、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第246号（10月号）
1995.10.5（M128.T81.S70）
奥出雲編集集団
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

鉄の来た道②

——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の記録）

ペルシャの鉄文化

最初にお断りいたしましたように、イラクには湾岸戦争の影響で行かれませんでしたので、ペルシャについては主としてイラン側からの話になってしまいます。

東洋史に大きく栄光の歴史を占めているペルシャなのですから、鉄器の文化もさぞ突出したものを持っているはずと、まずテヘランの国立歴史博物館に参りました。ここにはイランの著名な遺跡から出土した鉄製品が展示されておりました。

主としてイラン西部のザクロス山脈中央部のルリスタン地方出土品をはじめ、シャミ神殿遺跡、それに続いて後にお話いたします。ペルセポリス遺跡のものなどがありました。

展示品には短剣と鉄鏃が多く、ルリスタンのものには紀元前8～7世紀に遡ったもので束頭の飾りの部分などには、青銅板や青銅釘が用いられており、鞘は革か木で造ったものとみえて腐敗したらしく、錆びて幾分細くなった鉄の剣身部分だけでした。青銅の部分は金でメッキがしてあったかも知れませんが、その痕跡はハゲてしまったのでしょう、見当りませんでした。また同じ年代頃の鉄を鍛造鍛接して造った、馬の轡がありました。この頃ではまだ青銅製のものが主流だったようです。当時としたら珍品だったのかも知れません。

また将軍が戦闘のときに指揮用に使ったものではなかいと思われる、紀元前14～10世紀にも遡る闘斧がありました。刃の部分が鍛鉄製、柄をすげる袋の部分は青銅鋳造で動物の飾りがついたもので、前10世紀としても、ルリスタン文化の終り頃ですから随分古いものです。反対に幾らか新しいものとしては、パルティア時代のシャミ神殿遺跡から発見されました、青銅鋳造の獣脚の破損したものがありました。これは鋳造するときに、芯に鉄棒を入れて造ったもののようで、芯金の鉄が折損した部分に見えておりました。

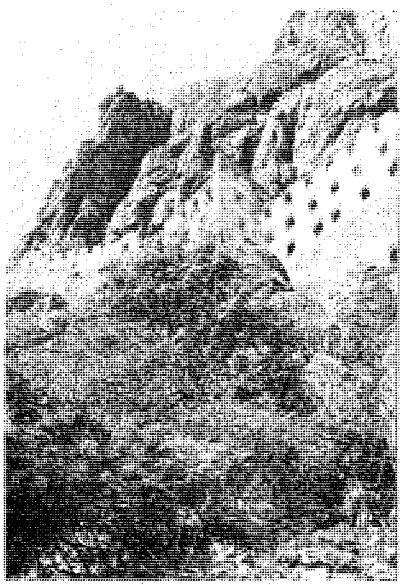
北側のエルヴルス山脈の西端部にありますデーラマン遺跡も、初期鉄器時代の製品を出土したことで知られていますので、ガレクテイ、ハッサニマハレなどの物を期待していたのです。とくにウルミア湖の南部にあるハサンルはコルサバード東一七〇kmの場所にあり、ここで出土の鉄器は総計二千点に達しているとのことなので、せめて工具類程度は見られるかと思ったのですが、これも収蔵はされているのでしょうが、同館の展示では見られませんでした。

さて、テヘランから航空機で一時間三十分、南部のケルマーンへ飛び、ルート砂漠の南口＝粘土だけで造られた城や民家の密集するバムの集落を見て、ナイチンゲールの生れた町シラーズへと入りました。ここは前述しましたウルミア湖の方から、騎馬民族の形でイラン人がザクロス山脈を南下してきて、紀元前七世紀の初め頃から定住をし始めています。しかしまだ纏まった勢力ではなくて、エラムやメディアの属領状態でした。名実ともにペルシャを建国させたのはメデア王国を亡したキュロス2世王でして、紀元前五五〇年のことなのです。

周知のペルセポリスはこのシラーズの町から60km、イラン人はここのことをタフテ・ジャムシードと呼んでいます。ダレイオス1世、クセルクセス1世の命によって、紀元前五百年頃に着工され、前三三二年に放火によって、現在見られるような廃墟と化しています。伝説ではこの放火はアレキサンダーの占領後に、愛妻タイスの酒席での思いつきの一言から出たものと言われております。

ここで古代としては珍しい鉄の使い方のしてあるのを発見いたしました。それはペルセポリスの建造物群の中でも中心的な存在になっている、アバダナ（謁見殿）の石段です。ここは観光写真で良く知られておりますが、下段の方は当時アケメネスペルシャに服属した多くの周辺民族が、貢物を献上しに来た姿をレリーフ状に彫り、上段に行くと大王の親衛隊の兵士の列がワンパターンの横図で彫られています。

鉄を見つけましたのはこの上段の処でです。この永遠不壊の巨城の建設には、人海戦術で十



前号2頁3段の東トルコのスメラ修道院

鉄の来た道②・奥出雲の中世・近世を育てた武士たち㊤・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

分な基礎工事がされていたでしょうが、それでも将来の地盤沈下や地震での破損などを考えたのでしょう。そうした時に力の掛ってくる石段やグリフイン（怪獣）のような安定の悪い大型石造彫刻の要所要所に、鉄の大きな鎹を使って補強の工事が施されていました。

石段の巨石と次の石との接合部分に両者にかけて巾7㎝、長さ30㎝程の浅い蒲鉾形の溝を彫り、その両端部分に直径2.5㎝位の孔を明け、そこに寸法を合せて造った鉄の鎹を打ち込んで連接してあるんです。そのままでは形も良くないし錆もきてしまうので、その部分には溝の大きさに合せた鉛の板を叩き込むか、あるいは溶けた鉛を流し込み、最後に表面を削って平滑に仕上げたものと思われます。

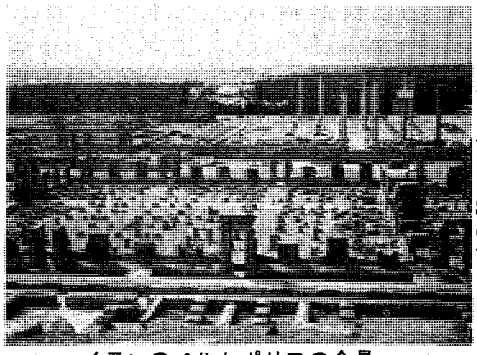
従来古代の築城工事で礎石にこのような工法が採られていた場合、鉄が使ってあれば大抵の場合は錆びて朽ち果てていまして、鉛の痕跡だけが残っていたところから、楔に鉛の棒を使ったとされてきました。しかし紀元前五百年の工事で、既に鉄の棒を建材として使用していたのです。このアパダナの場合、芯まで錆びてやせ細った鉄棒の表面に極く僅かしかも不均一に鉛が残留していました。恐らく溶融鉛を注入した時に不完全な合金層のようなものを形成し、幾らか防錆効果を生じたために、錆化した鉄が残っていたのでは無いかと思われました。

前に話しましたトルコのアラジャホユクでも城壁の巨石の積み上げに、直径3-4㎝位、深さ14㎝位の孔を上下に明けてあるのを見掛けましたが、恐らくほぼ同様な理屈から枘状に3-4㎝径で長さ20数㎝の、鉄棒を挿入していたものと思われます。

周囲を見渡せば豪華巨大な建築遺構群で、しかもそれらには前述しましたような彫刻のほかに、大王の勇壮な獅子狩とか怪獣退治、兵士の群像、古代文字などのレリーフが数え切れないほどあり、こんな錆だらけの小さな鉄などは、何だこんな物と研究者に見向きもされなかったのでしょう。

刀剣や鏃が大部分で、あとは一時的な工具類程度の時代に、このような部分に超高価な鉄をかなり沢山使っているのには、誠に驚かされました。

レリーフで描かれている刀剣は、兵士は40㎝位の短剣ですが、形式は博物館にありましたルリスタン形のものではなく、もう少し洗練されたアケメネス形のものに移っていました。このペルセポリスの造られた頃になりますと、服従民族に王者の威風を示す必要などがあったのでしょう。王や貴族の刀剣には長大化と豪華さが求められたようで、博物館に展示してありましたこの出土品は、形はアケメネスですが長さが80㎝位ありました。



イランのペルセポリスの全景

次にイランと言えば、やはり印度方面からの物資搬送のルートですから、伝えられていますダマスカス向けのウーツ鋼や、それで造られた刀剣は無いものかと思いまして注意して廻りました。古いものはなく10世紀末になってですが、フイルドウーシーによって書かれ、ガズニ朝のマフムードに献上されたシャー・ナメ＝王の書というのですが、これにはザッハーク竜王やインド産の鉄剣などが出てきます。そうしたことから何か残っていないかと思ったからなんです。もっともこれは吟遊詩人の唄うのを聞きましたが、歴史というより日本の浪花節です。

待望の、刀身にダマスカス模様の現れた剣を見ましたのは、イスハハンの四十柱の宮殿でした。ずっと新しい時代のものでして、17世紀の製作で長さ1ｍを超える立派なもの。次に見ましたのはテヘランでパーレビ前国王が建てましたレザー・シャー＝夏の宮殿の敷地内に設けられました軍事博物館の一室。この方はもう少し古くて年代は14世紀、兵士が駐屯していて撮影もメモも禁止でしたが、ラベルにティムール・ガーニ司令官の佩刀と言うように書かれていました。

材質については、このダマスカス剣について、きれいな模様は炭素鋼とニッケル薄板の重ね鍛造と言われていまして、現在ナイフなどでそうした製品が造られ売られています。しかしこれらの剣はニッケルを使わずに、高炭素の銅板と低炭素の銅板を複雑に組合わせたもの、ワイヤーの場合もありますが、そうしたものを捩るとか曲げるとかして鍛造しまして、成形研磨の前後に熱処理や薬品仕上げをして、そうして流水紋のような模様を現したものと思われました。

イラクにつきましては現地に入っておりませんので詳しくは申しませんけれども、バビロニア帝国の軍備や文化は、かなりの鉄素材がなければ出来なかったと思います。アッシリアのいた北半分の地域はまだ北部から略奪してくることも出来たでしょうが、南半分の地は資源的にも鉄産地は遠く離れ、しかも周囲に強豪がおり、そのうえ自国は低湿地が多いという立地条件から、余り恵まれていませんので、文明国でも鉄製品の入手には苦労させられたはずです。

従いましてこれは鉄に限った話ではありませんが、ユダヤ民族流離の始まりとなったバビロンの捕囚の話のように、エルサレムなどから熟練労働者を強制連行して所要の品を充足したものと思われます。

北のアッシリアが狂暴な人種でミタンニとかウラルトウにしばしば侵攻し、そして鉄の確保を計ったのは有名ですが、この首都のドルシャッキン村、当時のコルサバードの城内にあった倉庫に一六〇トンもの鰹節形をした半成品の鉄塊が備蓄してあったことは有名な話です。

ただこの鉄の入手方法ですが、確かにトルコのカネシュにあっ

奥出雲の中世・近世を育てた武士たち

——中世編 (上)

た商館などを通じて、アッシリア植民時代とよばれる頃には、隊商によって購入もしていたようです。しかしその点からドイツのルードウヒ・ベックやオットー・ヨハンゼンは、その著書にこの当時鉄は既に平凡な金属になっており、アッシリアではフェニキア人などから買い、鋼つまり上質のものはカリブス人から買っていたと書き、略奪をある程度でしょうが否定しています。いくら何でも大部分が超貴重な兵器に加工される鉄が、平凡な金属とまではなっていなかったでしょう。またもし購入していたとしたら想像もつかない高いものについたはずです。

鉄の蒐集で知られたサルゴン2世王の子、センナケリブの宮殿跡（ニネベにありますが）から出土したユダ王国のエルサレムの60㎞南方にあるラキシュ攻防戦の図で見ましても、往時のこの種の記念絵画の常として勝者の側は誇張し、武装など充実したものに描かれるはずですが、押し寄せる多数の弓兵など、絵からの想像では金属の使用は部分的で、甲冑・楯などを見たところでは重装備とは言い難いものです。

いずれにしましても、中国では鉄器の所有形態は寡占であったにしましても、使用面では普遍的な様相を示しているのですが、中近東のこれら諸国では、どう見てもおぞましい武力・権力による集中の姿しか浮び上って参りません。

承久の変（1221・承久3）

鎌倉前期の内乱。後鳥羽上皇は鎌倉幕府の執権北條義時を討伐する軍を発したが、義時の反撃を受けて敗れ、鎌倉幕府の支配が確実になった戦乱である。上皇の義時討伐の直後動機は白拍子亀菊の賜った荘園の地頭廃止の命を義時が聴かなかったことであるが、根本の目的は鎌倉幕府が守護地頭の支配を通じて軍事財政の実権を掌握し、朝廷の権力が著しく狭められたのを回復することであった。当時源実朝の横死、幕府諸権臣の闘争が相次いだので、上皇は近江の佐佐木氏をはじめ近畿の有力な幕府部将を動員して、1221年（承久3）5月15日討伐に着手した。しかし幕府は藤原頼経を迎えて将軍とし、武士団の結束は上皇の期待に反して動揺せず、関東より三方から西上する有力な軍勢には抗し得なかった。戦後幕府は仲恭天皇を廃し、後鳥羽上皇を隠岐に、土御門上皇を阿波に、順徳上皇を佐渡に配流し、後堀河天皇を擁立して、以後皇位継承は幕府の承認を要する素地を作った。また六波羅に北條氏の一門を探題として三河以西の諸国の政務を処理させた（六波羅探題）。また幕府に反抗した朝臣・武士の所領3000余ヵ所を没収し、いわゆる新補地頭を設置し、執権北條氏を中心とする幕府政治が確立した。

源氏の諸流

源氏の起源は、814年（弘仁5）嵯峨天皇の皇子朝臣信以下4皇子4内親王に賜姓したに始まる。その後淳和天皇の時も源姓賜姓の事があり、仁明天皇は35年（承和2）以後の皇族賜姓はすべて源氏とする事にした。文徳・清和の時にも源姓賜姓あり、73年（貞観15）皇族はやむをえぬ場合を除き一様に源氏とする事に定めた。8親王4源氏もこのとき定まった。そのうち**清和源氏**と**村上源氏**が最も名高い。清和源氏は清和天皇皇子貞純親王の王子六孫王経基の後をいう。清和源氏には摂津源氏（経基の子満仲摂津多田に土着したその裔。多田源氏ともいう）・大和源氏（越智氏、満仲の次子頼親の後）・河内源氏（満仲の3子頼信の後）等がある。頼義・義家・義光・義親（頼朝等の祖）・義国（新田・足利氏の祖）等はすべて河内源氏の流であった。

村上源氏は村上天皇皇子具平親王の子師房が源姓を賜わったのに始まる。

ほかに宇多天皇から出た宇多源氏、花園天皇・正親天皇から出た源氏もある。近江の佐々木氏は宇多源氏の末流である。佐々木氏は鎌倉幕府成立によって守護が諸国に置かれると、近江以世の中国・四国に栄えた。近くでは当出雲のほか隠岐・伯耆ほかである。当地守護佐々木氏は隠岐・塩冶・富田・古志などに分かれ、主として出雲北部に土着した。

出雲に所領を得た新補地頭

承久の乱における京方（後鳥羽院方）は近畿諸国を中心とし、美濃・尾張・三河・伊予にわたる13ヶ国の武士であり、乱後敗北した京方の所領で没収されたものは三千余箇所に及ぶといわれている。出雲においては、在来の地頭（本補地頭）で本領を安堵されてそのまま残ったもの、勇敢勲功の深浅によって所領を充行われた地頭（新恩地頭）——出雲国内の武士もあるが、東国の武士が多い——がある。後者の中には補任地頭（従来地頭が存在したところに新しく任命されたもの）と新補地頭（地頭の先例のないところに補任されたもの）がある。

そこで文永8年（1271）の「出雲国杵築大社御三月会相撲舞頭役結番事」（千家文書）にあらわれている諸武士の検討の中から浮かんで来る。このうち守護佐々木氏一門、六波羅南奉行北条時輔（伯耆の守護職ももつ）、寺社領等に関係あるものをのぞいた地頭名を検討してみると、その出身地のほとんどが東国武士で、関東諸国出身者と、信濃を中心とする中部地方諸国出身者に分れる。そして出雲の中世にまで存続して国人として力を持ったのは、そのうちの伊那源氏の末流が多く、地盤は奥出雲であることが判明する。

守護であった佐々木氏即ち宇多源氏流の近江源氏と、清和源氏流の信州伊那源氏の二流に属するものが、平野部と山間部とに割拠したようになっている。近江源氏は近江の平野部に成長し、伊那源氏は南信濃の天龍川峡谷沿いの山地に成長している。この2流が出雲に於ても平野部に近江源氏（佐々木氏流、京極氏そして尼子氏もこの流れ）、伊那源氏は出雲奥部に補せられ

九月号訂正　1頁二段四行　記録・三段27行　名稱・四段の年表の紀元年数は未確定・観光者の次官に・2頁四段13行　還元鉄

斐の上川柳八月の句

この叫びそ知らぬ顔で核実験　藤原千代子
終戦日雷までもさわぎたて　児玉えみ
汗だくで洗濯入れた夏もすみ　真綿よし子
集まれば痛いところの発表会　渡部ミツコ
ローソクに遺影もかすかゆれている　松浦久寿子
めくる手に余生迫い込むカレンダー　高木凡太
稲刈りになって猛暑の裏が来て　藤原のぼる
ふと気づく介護教室男はいない　渡部かおり
土産もう買ってくるなと見送られ　松浦亜次
予定表見ては頭を切り替える　児玉哲呂
帰路のバス話題は次の旅プラン　田中有樹絵
梨送り電話で暑い夏見舞い　足立玉恵
待った雨続けば愚痴を言いたがり　安部正子

風りんりん　簸の上短歌会

空澄める敬老の朝孫よりの女曽孫の誕生知らす　野村節子
たわやすくマインドコントロールと嗤へども　常盤はるまさ
われも信じし神風神話
戸障子も未だそろはぬ新築の日暮れ佛間ゆ香のただよふ　岡田時子
テレビにて亡き龍彦ちゃんの笑顔に逢ふ吾れは七十年を生き来たりしに　永井弥生
足裏に吸ひつく如き藁草履亡母偲びつつ萩の山径　〃
吾亦紅紫苑コスモスのびやかに野をゆく風もりんりんとして　〃
暮れてゆく石見の海に漁火のゆらめく見れば旅愁こみあぐ　安部夕波

柴栗句会九月抄

ゐるはづも無き月舟や蔓珠沙華　淺野としお
大蛇嶺に容美き雲秋あかね　糸原古志
法師蝉鳴く鳴けば寂し妻伏せり　恩田和美
鬼ヤンマ一寸と止って向きを替え　楠房子
振り向けば来し道はるか鰯雲　高木白虹
派手かしら問いかけ着てみる秋の彩　中澤美紀子
風鈴のいつしか細りて夏は逝く　新出谷一華
夏は逝く小銭欲しがる孫も去り　錦織富江
月見草のこして草刈る人の愛　峯石美代子
祭髪少し派手目に吾子も結ひ　渡部夕峰

ている。北出雲の平野部（といっても今日の平野は当時はまだ水利技術も十分でなく、また湿地沼地の干拓も進んでいなかったから、水田は主としてその周辺の丘陵地に近いところから、丘陵地にかけての地帯にあったとみてよいと思う）の生産や軍事上の重要な土地は、守護佐々木氏（近江源氏）一門が鎌倉幕府創設まもなくのころから知行しており、承久の乱後の行賞ではその間へ、出雲・伯耆・因幡の武士が大きい所領を、関東武士がその間の各地の大小の土地を振りあてられている。そして斐伊川ぞいを奥部にかけて、伊那源氏が与えられている。そのうち中世まで生き残って国人として活躍したのは伊那源氏で、平野部の小領主や奥部の比較的大きい領主であった関東武士で、名を留めているものは極めて少ない。

これはどう解釈すればよいであろうか。

後述するように承久の乱後、中沢・諏訪部・三沢の諸氏はいずれもすぐに領地に下っていない。遠い関東や中部奥地の武士で、その近隣にも地頭職を与えられたものは、出雲で大きい所領を得たものは別として、地頭自らがすぐに来住していないとみてよい。しかしやがて時がたって家督相続にからまる配分の問題から、一族内の紛争が起った武士たち、また関東地域と違って開拓余地の少ない中部地方奥地の武士たちにとっては、出雲の領地は切実な問題となってきたに違いない。他方全国各地の在地地頭による領地拡張欲は相互の争いや、領家の遠い寺社領、不在の地頭領の蚕食へと発展しはじめて、幕府の権威・守護の威圧の低下とともに激しくなってきた。さらに元の来襲に備えて、東国武士の西国所領地への西下の勧奨も起ってきた。中にはこの際領地に赴いて、周辺の土地に手を染めようとするものも出ている。これらは地域の情勢の違いによって種々の様相を呈して進行して行った。

文永11年の役後は、合戦に参加した諸将が論功行賞に不満を濃くして、幕政の弱体化に拍車もかけるとともに、地方に於ける領地紛争も数を増していった。出雲では佐々木氏一門の成長、在地地頭の成長が考えられる。その中で奥出雲に移り住んだ伊那地方出身の地頭たちは、出雲・伊那両地の、地形・風土そして開拓・生産様式、古くから行われていた牧（官政牧の手馬の飼育）の伝統、さらに用兵上の条件が相似ていることが、経験第一のこの時代には極めて有利に働き、諸氏ともに強力な地盤を形成し、有力な国人となったと考えられる。

会員頒布一部百七十五円／六九〜一八　島根県仁多郡横田町一、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第247号（11月号）
1995.11.5（M128.T81.S70）
奥出雲編集集団◎
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

鉄の来た道③
——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の記録）

東西鉄文化の拠点パミール

インダス河、ガンジス河の流域に栄えました古代文化は、往時はパキスタンと言う国は無かったわけですから、北から北西にかけてのアフガニスタンや、さらにロシア領になってトルクメン、ウズベク、カザフなどの共和国辺りへと伝播して行きました。これらも昔はペルシャ領になったり、アレキサンダー大王の遠征の東端になったりし、大宛とか粟特とか大月氏などとも呼ばれておりましたし、エフタルや吐蕃が席捲していた時代もありましたが、とにかくその方向へと浸透しています。

また一方でパミール高原を越えて、北東の中国新疆ウイグル自治区へと大きな影響をもたらせました。さらにそれは河西回廊を通って中国本土、つまり長安の都へとも流れ込んでいます。これらの地は古くから匈奴をはじめとしまして、ウイグルやキルギス、その他の民族が次々と占拠していた地域ですので、当然鉄の文化もそれら北方系の技術をミックスしたものになっていったと思います。

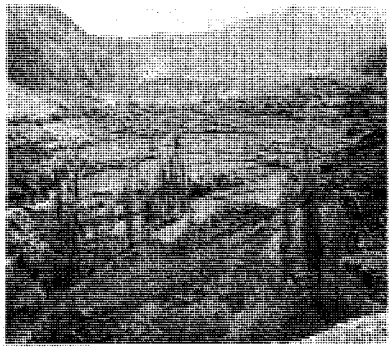
勿論、南側寄りでも多数の枝道や河川を利用して、ヒマラヤを越え、中国のチベット方面にも影響を与えておりました。

御承知のようにこうした辺りが、利のあるところ何処までもと、キャラバンで交易に出掛けまして、流砂、天険、土匪の襲撃などで最も苦労した場所です。こうしたところを西へ西へと、中国の絹織物が運ばれたわけです。余り知られておりませんが、同じこの道を、鉄も一緒に運ばれていったのです。

東側の鉄が続々と西のローマへ運ばれたのは、ウーツ鋼がその名を馳せたよりも大分早く、紀元前後の一世紀頃ではなかったかと思われます。ローマのプリニュースと言う歴史学者が、現代で申せば百科事典の御先祖様のような『博物誌』と言う大冊の本を編纂しているのですが、その中に「世界で最高の鉄は東から運ばれてくるセレスの鉄である。それは定評のあるペルシャの鉄よりも上質のものだ」と書いているのです。

このセレスが一体何処なのか何人もの学者によって、その産地が古代から追求され続け、著書で論証されております。

従来セレスが中国と想定されましたのは、中国産の絹のことをセルと呼んでいたからでして、これに接尾語としてスがついてセレスになったのであろうと考えられたのです。この当時中国は漢の時代であり、凶奴対策のためにいくらでも金儲をしなければならない状況で、既に鉄官という国営製鉄所が各地に設けられて、中央の一元的統制の下に盛に操業されていました。従いまして高度な技術に達していましたことは事実です。後に話いたしますが、洛陽の西50数kmの滬池という遺跡で発掘されました鉄斧に、偶然か意識的にか球状黒鉛鋳鉄という、想像もつかない高度の技術が駆使されたものがありました。この技術は何と昭和26年特許で、日本の鋳物業者が造り始めましたのは昭和30年代になってのことです。



パキスタンのフンザ地方

ですからこのような進んだ中国の鉄だと言うことも考えられなくはありません。しかし、高品質な鉄は既にインドでも造られていたことが推定できますし、その北上した技術は現在のパキスタンやアフガニスタンの北東部などで、結構生産されていたことが想像されます。

パキスタンのイスラマバードの北西40kmのところにあります、タキシラの町などはサンスクリット語の町名で、隊商交易の拠点なのですが、ここは地理的条件を反映して、ギリシャ文化のほかにサカやスキタイのような遊牧民の文化も混じり、それにインド文化が加わった形をしています。ここの博物館でシルカップ遺跡の出土品を見ましたら、紀元前一世紀から後一世紀にかけてのもので、刀剣をはじめ斧や鍬、それに鍛冶道具や釘なども出土しておりましたが、それらの中に小さなと申しましてもシャフトの長さで70cm程直径は25cm位の鉄製の車輪がありましたのには驚かされました。またこれらに混じって鉄塊＝先程イラクのところで説明しましたのとほとんど同じような鰹節形のものや、直径や一辺が30cm位あります、鍛冶屋がそれを何にで

鉄の来た道③・俳句・短歌・川柳・奥出雲の中世・近世を育てた武士たち—中世編㊥

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

も加工できる丸や四角の鉄板がありました。こうしたものの出土から相当高度な鍛鉄の文化をもっていたことが判りました。

年代は少し後になりますが、孫悟空の一行つまり唐の求法僧・玄奘三蔵が『大唐西域記』で書いております道筋を見ますと、この辺りでは天山北側のステップ路をイシク湖へと抜けて、そこから西へ迂回しつつ南下していますが、達磨悉鉄帝国と言う国を通過しております。中国文献は当字が多いので、この文字もお経のギャーテイのテイに鉄の字を当てたとも言えますが、この地は別名をワハンと言いまして、現在のアフガニスタン東部から蛇の頭のように細長くパミールへと伸びている地域の一部で、ワハンとは本来鍋・釜と言う意味です。こんな地名が連線と続けられた地域はそうはありません。原始製鉄なりによほど製鉄が発達していて、その操業が長年続けられてきた地だと思います。南へ接するスワトウ渓谷なども古来の鉄産地です。

『前漢書』には西域諸国としてこの辺の国々で、鉄産のあったところを数ヵ国列記しております。とくに大宛現在のタシケントの南側ですがなど、良馬精鉄を産するとなっていまして、主要なオアシス国家では皆少量ずつでも製鉄と鍛冶をやっていたようです。否鍛冶屋がいなければオアシス国家は成立できなかったといえるでしょう。

現在パキスタンから中国に入りますには、中国・パキスタン公路の紅真拉甫峠を通るのですが、この付近は多数の枝道や河川がありまして、間道のような形でかなり通行がされていたようです。その中でも明鉄蓋達峠は最も良く知られておりまして、名称からしてその昔、鉄を運搬したような気がします。ピラリの中間側検問所の手前で公路が二股になっていまして、そちらに行く道は封鎖され通行止めになっておりますので調べることができませんでした。

中国の古典にしばしば賓鉄＝はるか彼方から運ばれてきた鉄＝という言葉があります。その影響か日本でも『東大寺献物帳』に、唐様の刀子として、この賓鉄の名称が使われております。この峠は賓鉄が西から運ばれてきた道ではないかと思われます。標高4800mのこの峠は初老の私にとりましては、空気が稀薄で酸欠で青い顔をして、一袋150円の空気袋を抱えて歩きました。

この道を下ってきますとパミール北部で突出した、ムスタング7546m、コングール7595mが眼前に現れます。これが伝説の崑崙山のモデルと考えられますが、その麓を通りましたとき、『列子』の湯問に書いてあります「周の穆王が西戎を征服したとき、西戎が崑崙の剣を献上した。その剣は肘の長さ、つまり45cm位あり、十分に鍛えられたもので、赤色の刃をしており、玉を切るのに使うと泥を切っているようである。」と書かれていたのを思い出しまして、この辺りの話かなと想像を廻らしました。

中国の学者は天山山脈東端、蘭新鉄道で敦煌入口の柳園と烏魯木斉の中間哈密をこの剣の製作地と考えていますが、私はこの話自体伝承なのでしょうが、仮にそうしたことがあったとすれば、コングールの西側とか、パキスタンのスワトー渓谷、または前出のアフガニスタンのワハン地域の鉄による作品ではなかったかと考えております。

奥出雲の中世・近世を育てた武士たち

——中世編 (中)

信州伊那谷の一部の一望の中に、仁多郡全域がすっぽりと入る

信州（長野県）の天龍川沿いの伊那谷を南端の飯田市から、最上流の諏訪湖までをたどることは、長らくの念願であったが、やっと車で走行できた。三沢氏（元飯島氏）の出身地飯島町は半日かけ、飯島氏の嫡統が戦国末まで住んだ館にもたたずんだ。背には木曽山脈から天龍川への河岸段丘がゆるやかにつらなり、川の向うにまた広い奥行のある河岸段丘で赤石山脈へと続いている。これらはすべて一望できる。この視界には仁多郡全域が入るだろうと、帰って地図を重ねてみると、全域より更に広く雄大である。横田よりは倍近い高地にあるが、両山脈の豊富な水に恵まれ、冬季の雪も少なく好日が多いという。家屋の構造もそのようである。かつては牧の本場であった。この地形の利を生かし機動力ももつ土豪武士が成長した。従って奥出雲に新補地頭として来住した、伊那源氏の中沢・三刀屋・三沢その他の諸氏は、伊那谷に比べ規模は小さいが、似た地形風土を生かして土着し、営々と開拓して土豪武士となったのである。

出雲の諸種の戦国軍記をみると、山岳地帯の戦いでは、三沢氏を陣頭に奥出雲の武士団が駒を進めている。西の大内、南の毛利の間に接して、この土地を拠点として出雲の主導権を握った理由もうなづける。

土着と武士団編成

左の三沢氏の系図と地図によって土着の経緯をみると、来住は飯島（三沢）3代為長で、鴨倉山に砦を構えその下に居を構えた。低い山であるが、東は横田庄の西端の山（のちの藤ヶ瀬城）、西は三処郷の要衛を見下せる城山、東南には高尾、馬来の矢筈山、南には阿井、西は飯石を望める山を遠望できる要地であった。

為長は砦の周辺鴨倉に、庶弟たちを西の林原、北の堅田、東

ムスタングの北西部辺りは歩いていて、よくキルギス族の放牧をしている姿を見掛けました。キルギス人といえばルーツは後で申しますが、バイカル湖の西側のミヌシンスク辺りから出現していまして、早くから金属文化の一翼を担った民族です。面白いのは『新唐書』の回鶻伝のところでキルギスにふれておりまして、そこで鉄を雨生鉄つまり山砂鉄を原料に製錬し、この鉄で造った刀は非常に鋭くて犀の皮で造った鎧でも切ることができ、突厥に売り込んでいたと書かれています。

この突厥という民族は中国の古文献に何回も出てきます。トルコ帝国のルーツとされていて、トルコの建国年数はこの突厥独立の年から起算しております。鉄産を母胎にしました強大な遊牧国家です。独立前は宗主国柔然の鍛冶奴隷のような立場だったのですが、姫に求婚してドナられ拒絶されて発奮をしたのでしょう。まあそれだけではないでしょうが後に下克上で乗取りに成功した国です。

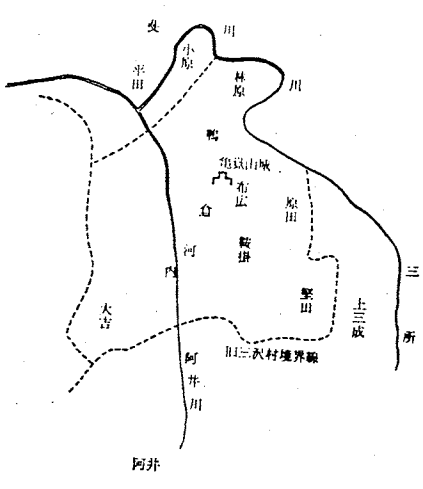
そこに鉄製の刀を売り込んでいたというのですから、どう考えても、突厥と同等またはそれ以上の鍛冶技術をもっていたものと想像されます。

キルギスの刀剣材料の砂鉄は迦沙とよんでいたとのことで、当地のマサとよく似ていますが、まさか関連は無いでしょう。しかし砂鉄による鍛刀という点では日本刀のルーツとも言えそうな話です。故里であったロシアのミヌシンスク地域の伝承を、後世になって創作したものと思います。

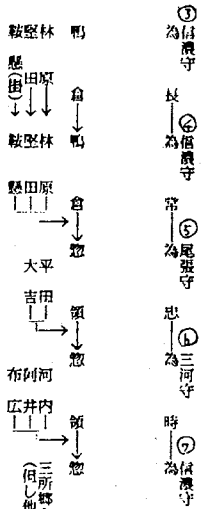
さてカラクリ湖からガイズ河に沿って1.5時間程下りますと、ウパルと言う小さな町に入ります。変わったところの無いうらぶれた宿場町なのですが、珍しいことにここの老人達はウイグル語と少し違う突厥語を話します。さらに1.5時間で西域No.2の大都市喀什に入ります。ここの10万人バザールとよばれる大掛かりな露天市では、新疆西部の人々のあらゆる生活物資が売られ、鉄製品も農工具、家庭用品など豊富な品揃えが見られました。近代の所産でしょうが、ブリキ板を細く切ってパネルピンで打ちつけた、花嫁の衣装葛籠は鉄の民芸品として出色のものでした。ナイフ専門の店も3~4軒ありましたが、ナイフはほぼ南へ60km行った英吉沙の製品でして、新疆省内で扱われているものの8割を占め、家内工業的に400年程前から生産しているとのことでした。日本の三条か三木のような町です。車庫（クチャ）には立派な刃物工場があって量産していましたが、ここの製品は余り見ませんでした。材料はいずれも自動車を解体したバネ材が使われていました。

このクチャに代表される新疆の古代製鉄は、何といいましても西暦400年前後の北魏の時代に麗道元によって書かれました『水経注』に出てくるものが有名です。同書には「屈次（亀茲つまり現在の庫車のことですが）の北200里（現在の80km）に山あり、夜は火が燃え、昼は煙が上がる。人々はこの山の石炭を採って、この山の鉄鉱石を製錬する。製品は西域のオアシス国家36国に供給している」とそんな風に書かれています。歩いて見ますとクチャ市の北方にありますスバシ故城から、さらに30~2km程北に入った天山山脈の鞍部でして、阿艾山という製鉄遺跡がありまして、ここの老人達はウイグル語と少し違う突厥語を話します。さらに1.5時間で西域No.2の大都市喀什に入ります。ここの10万人バザールとよばれる大掛かりな露天市では、新疆西部の人々のあらゆる生活物資が売られ、鉄製品も農工具、家庭用品など豊富な品揃えが見られました。近代の所産でしょうが、ブリキ板を細く切ってパネルピンで打ちつけた、花嫁の衣装葛籠は鉄の民芸品として出色のものでした。ナイフ専門の店も3~4軒ありましたが、ナイフはほぼ南へ60km行った英吉沙の製品でして、新疆省内で扱われているものの8割を占め、家内工業的に400年程前から生産しているとのことでした。日本の三条か三木のような町です。車庫（クチャ）には立派な刃物工場があって量産していましたが、ここの製品は余り見ませんでした。材料はいずれも自動車を解体したバネ材が使われていました。

このクチャに代表される新疆の古代製鉄は、何といいましても西暦400年前後の北魏の時代に麗道元によって書かれました『水経注』に出てくるものが有名です。同書には「屈次（亀茲つまり現在の庫車のことですが）の北200里（現在の80km）に山あり、夜は火が燃え、昼は煙が上がる。人々はこの山の石炭を採って、この山の鉄鉱石を製錬する。製品は西域のオアシス国家36国に供給している」とそんな風に書かれています。歩いて見ますとクチャ市の北方にありますスバシ故城から、さらに30~2km程北に入った天山山脈の鞍部でして、阿艾山という製鉄遺跡がありまの鞍掛に配して、砦を囲んで開拓に従事させ、孫で5代為忠の代にはそれらを惣領の支配下に収め、5代の庶弟は西の平田、南の大吉の開拓を行わせ、6代為時はそれを総領として支配し、その庶弟らは河内・阿井・布広に配して開拓させた。その間100余年を閲している。この地盤の上に立って、7代為忠は三処氏の地盤であった三処郷を支配下においた。経緯は明らかにできないが、南北朝時代鰐淵寺僧頼源が建武中興の功績で三処郷の地頭職を受領しているが、岩屋寺（北朝方）との対立で、勢をそがれている。一方このころ三沢氏は実力を貯え、守護京極氏の代官尼子氏を凌ぐ勢で、やがて横田庄へ進出し、三領家の代官として横田へ居城を移すことになる。



三沢氏の所領の拡張



す。一般的には北山とか白山あるいは阿褐田山とよばれ、ヤマタノオロチの話に似た、殺さないで王の乗物としているのですが、龍退治の伝説があります。その東寄りには可可沙製鉄遺跡が見つかっており、いずれも漢代から操業が続けられていたものと推定されています。

このほか南側の方では民豊県の尼雅、洛浦県の阿其克山などで製鉄遺跡が出ています。

この地域は鉄鉱石の産に恵まれておりまして、今申しましたような天山山脈の中には小さな鉱床が幾つもあります。北側にと天山を下ると伊犁河の流域、北疆ではアルタイ山脈の西側、南疆では昆崙山脈もパミール寄りの付近に幾つもあります。他にも小さなものが多数ありますようです。

とくに古来鉄産で知られた哈密の付近では磁鉄鉱の良いものが採れます。この鉱石は哈密市の南60kmにある雅満蘇のもので、現在では蘭新鉄道などで甘粛省の酒泉にある鉄鋼コンビナートに送っていますが、新疆の人々は将来ここに大製鉄所を建設したい夢をもっています。

宋応星の『天工開物』によれば、ここの刃物は物凄い切れ味だと記しています。これは鉱石の良いところから技術も進んだでしょうが、量産されるようになり、長安に送られて高い評価を得たことによるものと思います。考古学的な面からは市外の柳樹泉農場の早期鉄器時代（秦代と言っておりますが）墓地から、刀子と指輪が出土しております。蒙古系の人のもののようです。漢代の遺跡でも鍬や鋤が発見され、年代を追って鉄製品が中原とそれ程遅れずに、普及し使用されていたことが判ります。

なお哈密の手前に吐魯番と言う町があります。世界一おいしいと自慢する葡萄の名産地です。孫悟空が觔斗雲に乗って暴れ廻ったという火焔山は、小説ですが郊外にその怪奇な山容を400kmに渡って連ねております。ここには漢から唐にかけての漢人と北方民族との抗争の歴史があって、交河故城や高昌国の遺跡が残り、また鉄器出土でも知られたアスターナ古墳群があります。壁画の国外流出事件として騒がれているベゼリク千仏洞もここにあり、斧のミニチュアのようなウイグル時代の剃刀などを出土しています。

柴栗句会十月抄

故郷を遠しと想ふ枯蟷螂　淺野としお
二三回振って風鈴おさめけり　糸原古志
妻の声細き受話機に虫時雨　恩田和美
あさり貝秋の一夜をつぶやけり　加納信子
アンコール拍手に揺ぐ花すすき　楠房子
新藁の青き匂いの草履編む　高木白虹
仲秋の雅び調べに魅せられて　中澤美紀子
故安部由蔵村下
秋天へたたら炎遂に燃え尽きぬ　新出谷一華
秋時雨偲ぶ故人の句集読む　錦織富江
菜を洗う手許や釣瓶落しなり　峯石美代子
噂してささの肴や温め酒　渡部白虹

斐の上川柳九月の句

稲ハデも少なくなって過疎の村　児玉哲呂
お年だね言われたくない腰をのし　渡部ミツコ
時きうつり会う人皆んな知らぬ顔　高木凡太
する事が山ほどあって今日楽し　真綿よし子
なまり色空をながめて秋淋し　安部正子
チラシ見て買った気分で畑に行く　田中有樹絵
コスモスは知らぬ私にこんにちは　児玉えみ
そよ風に香りを乗せて金木犀　足立玉恵
ハンドルにまかせ行く手は萩の波　渡部かおり
いいですよ軽く受けたが大仕事　横山まこと
胸中を察してくれる友と逢う　松浦久寿子
貧乏県だけにしわ寄せ接待費　藤原のぼる
一人居て膝を撫で撫で秋偲ぶ　安部春恵
きのこ狩り出合い頭のつくり顔　小早川古葉
留守番に東京へ来て昼寝する　藤原千代子
新米の煮える匂いに頬ゆるみ　松浦亜次
暖房の列車お客は一人だけ　田中芳春

柿剥ぐ頃　簸の上短歌会

目をとほく茸の山を語る夫のやさしき面輪に　永井弥生
木犀かをる
あぢさゐのさかりに入院の母に今日柿を剥ぎ　仝
つつ従弟の訃告ぐ
嫁入りの道具入れたる箱の中にわが四才の晴　岡田時子
着の端切
紅葉散る夕べに逝きし母を恋ふわれ六才の頃　仝
なりしかな　人
いちにちのこと語りつつ臥す妻を娘は看取りす　常盤はるまさ
る夜のおそきに
月待つと篝火かこみ儲からぬ儲かるなどと低き　仝
会話に　人
台風に吹きよせられしや街なかに栗の毬玉数個　野村節子
転べる
この年もまづまづの出来と新米の袋を夫は息子　仝
と運ぶ　人
朽ちてゆく漁船は浜に放置され加露の港は雨に　安部夕波
暮れゆく

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第248号(12月号)
1995.12.5(M128.T81.S70)
奥出雲編集集団◎
横田史談会

明治維新以降の奥出雲における
銑生産量の系譜⑪

絲原権造

農鉱一体で明治維新を乗り切った奥出雲鉄師

奥出雲の主流銑生産

雲州松江藩が、鉄師のうち大水田地主層の9人にのみ許可し、多くの鉄山（木炭林山）を貸与して、近世企業たたらを育成し始めたのは、1726（享保11）年である。この中の奥出雲の東部地帯は真砂砂鉄の多い地帯であった。そのころの一代操業は四昼夜の四日押（鋼も出来る）で、銑を生産し（ほぼ同量の鋼は割れず放棄）、これを大鍛冶場で割鉄（錬鉄）として出荷していた。1760年代になって鋼を割ることを考案すると、鋼（1／3）と歩鋼（2／3）に分け、歩鋼を銑とともに割銑としてから、やっと赤日砂鉄地帯が四日押で銑のみを生産し、これを割鉄とする企業たたらの生産性と肩を並べることになった。

割鉄価格は当初から明治20年代までは、凡そ鋼の2倍であったので、当地の鉄師の収入の八割は割鉄であった。19世紀に入ると、一昼夜短縮して若干の生産減となっても収益は、僅かに多いことを試算し、それへの改良を進め、安政年間には完全に三日押（銑と鋼はほぼ同量）に転換した。短縮によって年間操業代数は、2割増となり、奥出雲の企業たたらの生産高はわが国の首位へと進み、1885（明治18）年には、わが国和鉄産額の5割を占めた。（釜石の洋鉄産額は和鉄産額の4％。但洋鉄の輸入額は別）

寛政年間の鉄不況時代に、地主本業に専念するものが退いて五鉄師となり、明治10年代からは四鉄師に、そして1923（大正12）年の一斉廃業を迎える。

そのうちの三鉄師は敗戦後までは、大水田地主であるとともに、日本の三大山林地主でもあった。その三家の一つ、仁多郡雨川村（現横田町雨川）の絲原家11代権造を紹介する。

1850（嘉永3）年24才で家督を継いだ。そのころは四日押から三日押への転換期にあたっていた。それは半期毎の詳細な勘定書に明らかであるばかりでなく、名番頭忠四郎のその間の苦心の記録が残っている。ひるむ忠四郎に権造は断呼として推進した。

このころの藩主は蘭癖殿と呼ばれた松平9代斉貴である。奥方は蘭学の先達藩佐賀の鍋島斉直の娘である。斉貴は藩士を高島秋帆の弟子の下に送って、洋式兵学・砲術学を学ばせる一方、のちヒュゲーニンの『大砲鋳造法』の訳者の一人となった、金森錦謙を迎え蘭学をとり入れ、訳書『鉄熕鋳鑑』を完成させ、その進献する諸策を次々と実行した。次の10代安定も彼を重用し、献策を入れ他藩に先駆けて軍艦も購入し、鉄砲も貯えたが、反射炉建設の献策の実現までは進まなかった。（本誌230号参照）

権造の先覚的萌芽

権造の手元には数代前から購入されていた和漢の万巻の書に加えて、当時の物理学・化学・博物学の和訳本も整えられていた。藩主との交誼も深く、11代藩主直應の信任は特に篤かった。1870（明治3）年には八川村（雨川村の隣）の当家の私有地に、藩の釜甑方（鋳造所）の支所も置かれた。

このころの絲原家蔵の古文書に、溶鉱炉に関するものが3種ある。近世企業たたらの銑生産の経験から、こうした方向へ眼が向くのは当然であり、当家が明治維新前後の情勢に応じたことを示すものであるが、その経緯・系譜を明らかにし得ない。幸い資料編として掲載を頂いたので、諸賢の御指導をお願いしたい。（本誌では後で掲載）

当地方の鉄師の基盤は、地主として田畑から上る年貢収入と、それに近い和鉄収入であった。そして郡内農家戸数の1.5倍の人々が、製鉄業に常雇・季節雇として従事する農鉱一体の地域であった。

明治維新を迎え殖産興業の気運も醸成され始めた。権造もこうした基礎と時勢を検討した結果、仁多郡長へ建白書を提出し、銀行の創設、農産物の価格保持、倉庫会社の設立、産物輸送道路の改修新設、農業教育の振興を進言した。明治10年代後半から自らそれに着手し、その子と孫に継承されて、大正初年までにそのすべてが実現した。

その一方在来の製鉄業は郡を挙げての支援の下に進められていた。1976（明治9）年四月には英国人ゼームス・ワットソンが訪れ、同11年には日本の炭田・油田発見の功労者米国人ライマンが、地質鉱物調査の折絲原家を訪ね、二つの鉄場や大鍛冶場をつぶさに視察して報告書を作成している。科学者の眼は専門分野を超えて、和鉄製精錬業の特色とその欠陥も指摘し、さらにその適切な改善策までも提案している。こうしたことを踏まえて権造は、他の鉄師とも協力して改善に努力し、さらに増産へと進めた。

明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑪・鉄の来た道④・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

農村基盤の育成へ

一方権造は、明治7年の島根県告諭による「吸利の実」を目標とする農業の経営、特に国富増強を目的とし、輸出振興と関連する蚕業と製茶の改良も目指した。

農事試験係の任命を受け、2か所の私有地を提供して試験場を設けた。新しい作物も含め250余種の試作をして郡内に配布したが、特に力を入れたのは水稲・大麻・桑苗であった。これから今日も優秀米とされる仁多米が生まれた。養蚕では明治15年には郡内の養蚕農家数を県下最高へと発展させて、製絲伝習所2か所の設置へと進んだ。また牧場も設け馬牛の繁殖と育成を行い、後年八川村への国立種馬所誘致の基礎を築いた。また県内でも最も早く地主層を中心とする農談会を組織し、北九州の林遠里、関東の船津伝次平らを招いて、在来農法の再評価による農業家養成へ進み、農業技術の改良も行い、さらに大山林地主として植林に心を尽くした。これは企業たたら廃業後の山林の再生をかけた木炭生産の基礎となり、それが昭和30年代後半の燃料革命までの木炭王国島根の主産地となった。

権造の晩年には、和鋼の優秀さに着目した海軍の指導もうけ、品質向上に努め、その価格は割鉄と肩を並べることになった。しかし三日押の鋼生産量は、たたら炉の構造上増産は不可能であった。

この時権造の胸中には、果たせなかった明治初年の溶鉱炉による木炭銑の製錬、バドル炉による和鋼精錬の夢が去来していたであろう。

それは明治末年絲原家も協力して遂に成功した、和銑の電気炉による製鋼法につながるものであり、子で12代武太郎が1917（大正6）年に操業を開始した福浸寿製銑工場へと続くものである。この工場は昭和40年操業を中止した鳥上木炭銑工場に、一年先んじて設置された同型のもので、日産3トンの順調な生産を企業たたらの一斉廃業まで続けた。

明治17年産業振興の功労により、藍綬褒賞を贈られた。明治21年隠居し、同28年69才で没した。（産業考古学会々報75号に依頼により掲載したものをそのまま掲載した　横田史談会　高橋一郎）

鉄の来た道 ④

——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の記録）

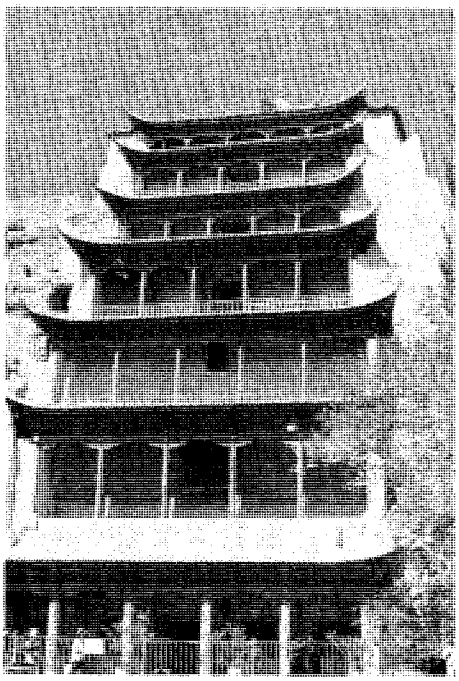
河西回廊から長安の都へ

さて蘭新鉄道で前述の哈密を経由し柳国に出れば、そこは東洋史で有名な、凶奴と漢や唐などが争った祁連山脈の北側であり、河西回廊と呼ばれている地です。この山脈中に鏡鉄山という磁赤鉄鉱の山があります。

まず敦煌では観光写真で良く知られている莫高窟に参りましたが、その第96窟に中国としては小ぶりな鉄鐘が2個放置されてありました。さらに敦煌市の博物館にも、それよりはやや大きい程度のものがありました。余り古いものではなく、100年か200年程度のものでしたが、銘文から見て、もし有名な嘉峪関で鋳造したものとしましたら、400㎞の道程を運送手段の心細い時代に、苦労して運んだものと驚かされました。

河西回廊は現在の甘粛と陝西の二省なのですが、さらに先の新疆とでは雰囲気が全然違っておりました。『貞観政要』の議案辺第35によりますと、大臣の褚遂良が唐の太宗に「高昌への道は砂漠が千里も続き、冬の風は氷のように冷たく猛烈で、夏の風は焼けつくような熱風」と表現しており、毎年千人の将兵を高昌に送り込んでも、河西回廊の何処かが凶奴などに侵入された場合、急場の役にたたないから、もっと近くに兵を配備した方が良いのではないかと上申しています。私もここを歩いていて、薄青い幻のような蜃気楼や巨大な竜巻に遭遇しました。正に『大唐西域記』の表現している絶望的な状況を髣髴させる地帯でした。

そうした地域だったので、古い鉄製品が纏まって見られるのは、このコースでは嘉峪関以東で、本当の西域では漢兵などが駐屯した場所の付近に限られます。例えば王維の「君に勧む更に一杯の酒を盡くせ、西の方陽関を出ずれば故人なからん」の、玉門関と並ぶ陽関の関所などは、その近くの南湖という聚



敦煌の莫高窟

落に遺跡がありますが、僅かに刀子などが出ている程度です。ここで小さな蒸器が発掘されていますが、これが不思議なことに、鉄と青銅が自然に混ざり鋳型の中で比重で分離しながら固まったような鋳物でした。それにしてもシルクロード沿線での鉄の普及は、主として張掖武威以東が中心と言えそうです。

張掖の西夏が建設した大仏寺は幸い文革の破壊を免れております。ここは34mもある涅槃仏があることで知られていますが、それよりもこの大仏を収蔵した大建築に、釘が一本も使われていないことに驚かされました。それにもかかわらず、多分それより何百年も前に漢人が入植して使ったものでしょうか？近傍で出土した漢代と推定された牛耕用の犁がありました。

蘭州まで来ますとここは中原と回廊を結ぶ交易、軍事の要地でしたので、黄河の流れも幸いして漢代から栄えておりまして、出土した鉄器もかなりあり、古いものや珍しいものがありました。蘭州の甘粛省立博物館で平涼県から発見された戦国時代の鉄鍬、その近傍で発掘の同じ時代の鋤の刃先などがあり、天水県から発見された秦代の銅詔鉄権などを見ることができました。

注目と言うよりも呆れ返りましたのは、武威の雷台県で発掘されました前漢時代の鉄製で金貼りされた洋傘の骨で、直径で140cm位あり、何と折りたたみ式のものでした。それに赤や黄色の布地が張られ、白氏の詩石楠樹ではないですが「傘蓋低垂、金翡翠云々」といった、陽貴妃のような美女が侍女にかしづかれて、嫋やかに現れてくる姿をその前で想像してしまいました。ここからは直径21cmの金銀で飾られた鉄の鏡も発見されています。

見ることはできませんでしたが、ここの雷台県火屋家庄で発見された銅柄の鉄剣は東周のものでして、中国出土鉄器では最古クラスのものだそうです。

ここは山西省ほどではないですが、30年程前までは土法製鉄が盛んに行なわれていた地方で、10トン位の小さな高炉とのことですから、古来からの伝統が続いていたものと思われます。

次に陝西省に入りまして長安の都に参りました。現在の西安市ですが、人口617万人、もうどなたも御承知の秦の始皇帝の居た都で、唐代には日本と仏教などの面で交流のとても多かった処です。有名な始皇帝の兵馬俑坑からの6000体に及ぶ兵士の陶で造られた俑は、さらに昨年2号坑が完掘されましたので、恐らく8000体を超えているでしょうが、これらの等身大の兵士俑が所持していた、実戦に使える武器だけでも大変な量です。しかし秦は初期には地理的に鉄採掘に弱かったことから、鉄器の大量生産をすることができず、柔化処理などに十分には習熟していなかったのではないでしょうか。

若干の農工具を除いては金属は青銅製が主流で、武器は90数%青銅だったと言ってよいでしょう。ただ車の軸受けに使われた六角の大きなナットのような鋳物が鉄なのは、鋳鉄＝多分白銑組織のものでしょう＝磨耗に対する硬度が要求される場所に使われたからだと思います。

この秦が抬頭した戦国七雄の時代は弱肉強食の時代ですから、国によっては武備の充実に資源の豊富な鉄を活用し始めていたと見えまして、前漢末の劉向が編纂した『戦国策』の韓策（韓国ではなく中国の春秋戦国の一国）の中で「韓の兵士の帯剣は総べて冥山で造られており、裘鎧、墨陽、合膊、鄧師、宛馮、龍淵、大阿等の名剣もあり、一剣百敵を倒すことができる」と書いています。

また魏の国が邯鄲の占領に意欲を燃やしたのも、そうした鉄製武器の産地を確保するという目的からと思われます。天下統一のためには鉄製武器の確保が必須要件となりつつあったことが想像できます。

さて市内にありました陝西省立の歴史博物館は正に古代鉄器の宝庫でした。随分各国各地の博物館を見て廻りましたが、これほど鉄器の充実した展示を見たのは初めてでした。

収蔵してある品々の数が十一万点といいますから、そのうちで鉄器を5%としても6000点位にはなるでしょう。周恩来の指示で満4年で完成したもので、唐代建築の風格をもつ建坪56,000㎡の立派なものです。

春秋時代から秦代にかけての初期鉄器文化のものから始まり、漢代、唐代と一目で原始的なりに量産への歩みと品質の向上が判るような展示でした。春秋のものでは東周の鳳翔県秦公一号大墓から出土した鉄鋤があり、合せ型を使用した刃巾で15cm位の仲々精巧なもの。戦国時代のものでは藍田県大寨から出土した40cm余りの鉄剣、これは白銑鋳物を脱炭する柔化処理をしたものなのか、あるいは還元鉄で造ったものか、よその国の物ながら調査したい意欲が湧きました。そんなことを言い出したら忽ち怒られるに決まっていますが……。

秦代に入りますと臨潼県つまり兵馬俑坑も含めて始皇帝陵の付近のもの、ここの鋳鉄製の板斧や鍬先は非常にシンプルなものでした。また皇帝のお膝元らしくこの時代を代表する鉄権（はかりの原器）がありましたが、これは歴史図鑑などに出ているものと少し異なり、背が高く底面の狭まった風鈴状のやや小さなものでした。

漢代になりますと本格的に鉄官の制度が動いて、生産も軌道に乗っておりますので、量も多く品種もバラエティに富んだものとなっておりまして、長安城

の武器庫から出土しましたものには刀剣、戈、斧などのほかに大量の農工具も見つかっております。珍しいものに鉄製の戟と呼ばれた枝付きの鉾がありました。若干細いのでこれは実戦用と言うよりも権威の象徴ではないかと思われました。農具類では隴県出土のものがありましたが、既に2頭曳きの犁用と思われる大きな刃先なども出ておりました。長安城の武器庫跡などの遺跡では、鋳鉄や鍛造の工房が見つかっており、鉄器も多数出土しております。また陽陵の囚人墓地からは多数の首枷、足枷など囚人の刑具が出土しています。唐の時代のものは鉄製品が流通期に入っておりますので、製造経験を積み、形式も洗練されたものとなっていて、長轅の犁なども立派なものが使われていたようです。敦煌で原野の中に広大な映画の野外大セットが造られていて、そこに宋代の鉄商の店がありましたが、きっと行とよばれた同業組合をつくっていた商人の家が、長安の町にはそんな佇いで何軒もあったのではないかと思います。

この町で鉄の大きな鐘を見ましたのは鐘楼と西門の上でしたが、2つとも高さが1.7~8m程もある立派なもので、恐らく西域遠征に出発する征西将軍の出陣などの折には、乱打されたものでしょうが、よじ登って見ましたが陽鋳が文革の影響でしょうか、削られていたり残っていても画が崩れていたりで、はっきりしておりませんでした。しかし鐘楼は明の洪武17年創建といわれ、鐘は明清のものでしょう。西門のものは損傷した字の跡が統のようにも見えましたから、光緒か宣統の頃のものかも知れません。大形でも花弁の外反りが弱く近代的なデザインのとてもスリムな形をしていますから、確かに新しい時代のものです。いずれにしても、余り叩かれ過ぎてひび割れをしたり、戦火にあったりして、何回も造り替えられたものでしょう。

大橋周治先生御逝去

今夏の横田たたら研究会には元気で御出席御指導賜りました。幕末明治初期の製鉄史について御世話に成りました。お礼を申上げ、哀悼の意を捧げます。

柴栗句会十一月抄

どんぐりがころりきせつをさましけり　浅野としお
恍惚と芭蕉の疵ほぐしおり　糸原古志
雲の穴高枝の柿は残し置け　恩田和美
菊焚いて女の嘘を燃やしけり　加納信子
峠道ズーット先まで枯芒　楠房子
刺を秘め嘘と真実の冬薔薇　高木白虹
何もかも黄昏ゆくよに秋や行く　中澤美紀子
孫の婚告げ佛前へ菊手向け　新出谷一華
小春日や無心の中の草むしり　錦織富江
新米の餅つややかに腕の中　峯石美代子
霜枯れの蟷螂戦ふ構へなく　渡部夕峰

斐の上川柳十月の句

山紅葉今年は色がまだ少し　児玉玉恵
私利私欲主張する世に野茂受賞　小早川古葉
損得も何も思わぬお人好し　藤原千代子
一切を忘れるように旅に発つ　児玉哲呂
合点がいかぬお金の減り具合　松浦亜以
四五反の田んぼ抱えて近代化　藤原のぼる
花好きな病むかあさんに菊送る　安部春恵
追う程の夢はないまま生きている　松浦久寿子
酔う程に嘘と真との夜の酒場　高木凡太
作品で友の安否をたしかめる　田中有樹絵
秋深しわかれに青葉紅をつけ　松田牛歩
御仏前片足伸ばす老のひざ　安部正子
魚焼く匂いがさそう空腹を　渡部ミツコ
童心で輪なげしてみる秋日和　児玉えみ
土に生き明日を信じて種をまく　真綿よし子

我れよりほかに　簸の上短歌会

カルトなど蔑みながらこの国にマインドコントロールやすやすとして　常盤はるまさ
変遷を諮ふされどはやければ私有局舎を拒みたりしに　仝　人
何の夢見るや時折り笑み浮かべ眠る曽孫に秋の陽やさし　野村節子
素枯れたる棚田の畔に寒わらび我れよりほかに知る人もなし　永井弥生
漬けてよし酢の物によしつややかな蕪はぎしぎし掌の中に鳴る　仝　人
山峡の無人の駅は夕映えて白き山茶花ひとひら散りぬ　安部夕波

会員頒布一部百七十五円／〒六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第249号（1月号）
1996.1.6（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

鉄の来た道⑤

——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の記録）

民族乱立の地シベリア南線と蒙古

次に極く簡単にシルクロードの北側にあって、いつも鉄文化で大きな影響を中原に与えていました、ステップ地域、内外の蒙古、その関連で山西省、さらに極東地域にも及んで見たいと思います。

風光明媚なバイカル湖の東南部にあるウランウデの町を経由して、流れ込むセレンガ河の上流は、すべて蒙古北部に源をもっておりまして、オルホン河、トラ河などが北進次々と合流しております。国境線をはさんだこの広大な地域が、古代に製鉄民族たちが常に南進の機会を窺う前進基地としていた地なのです。

中国文献は地域、時代によって同一のものでも表現を変えていますので、どの人種と明確には言えませんが、丁靈と書かれたチュルク系の人達が主だったと思います。これと現在の蒙古の南側を横に二分するようにして、匈奴がおれ、西側よりのエニセイ河上流辺りには堅昆と書かれた、これもチュルクの一派ですがキルギス族がいたようです。時代が降って東胡系の鮮卑や鮮卑の奴隷であった柔然がこの辺りを東から西へと席捲する頃になっても、ちょっと北側にはこの丁靈や堅昆は依然として割据しておりました。そしてそこから発生したのがですね、異種族か表現上の問題なのかは別として鉄勒テスルクのことでしょうが、さらに時代が下っての高車（これは漢人のいうウイグル）や突厥、ウイグルなどの種族でした。勿論西側から入ってきたスキタイやサカ族の影響も無視

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と闇をてらせり
その塔のすがたかしこし

むさぼりて厭かぬ渠ゆえ
いざこゝに一基をなさん

正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

することはできません。さらにツングース系のブリヤート族なども何等かの影響を与えているものと思われます。

金属文化の点から考えますとバイカル湖の西側200㎞位にある、少し西に離れるとエニセイ河上流のミヌシンスク盆地の周辺に同名の鉄山を中心にコンドーマなど多数の鉄山があり、クズネツの豊富な石炭と相まって、現代ロシア鉄鋼業に繋っています。ミヌシンスク盆地などはこの両種族（丁靈・堅昆）とも、タガール文化の時期などに関係があったものと思われます。これらは発掘遺物としては短剣程度で、青銅製のものが主体ですが、中国特にアルタイを越えた向こう側に影響したものでしょう。逆の印度側からの伝播と考え合わせますと難しい処ですが……。ともかく乏しいながら金属文化に初期の鉄文化が入ってきたことは間違いのない処です。

この付近は豊富に鉄鉱石が埋蔵されておりまして、湖の東南岸にはムショオル、クルバ、ウェルネヂンスク、バリアジンスク、ミソウスクなどを始めとし中小の鉱山が沢山あります。西側もアンガラ河の西岸にオートからイルクーツクにかけて、数々の鉱山が見られもう

ツビンスカヤ自治共和国やハガス自治州辺りにも未調査ですが、かなりの資源のあることが判明しています。

こうした立地条件ですから、古代からタガールやこれに続くパジリクの文化を生み出し、その流れは南側のアルタイ北部山岳地へと連なっています。従いましてこの付近にはショール族などという古代の製鉄人の化石になったような民族もおりますし、その東南・蒙古のコッソ湖に近い国境地帯ですが、トウアという古代には新疆北部まで進出していた製銅・製鉄民族の子孫も住んでおります。

これ程資源に恵まれれば、人智の発達に伴って金属文化が生まれるのは当然のことでしょう。しかしこの付近で発見された初期の鉄製品は、ロシア語の文献が読めないので判らないのかも知れませんが、青銅製品が多く鉄は非常に少ないというのが実情のようです。もう少し西へ行ってリンゴとスケートの町アルマータ付近も、鉱産資源に恵まれた地域でして、ここで近世のものでしたがキルギス族の原始的な鍛冶炉や製品を見ました。また

鉄の来た道⑤・宮沢賢治誕生百年—詩一編・奥出雲中世・近世を育てた武士たち—中世編㊦・俳句・短歌・川柳

近傍にあります前5世紀のスキタイの特長をもつ、イシククルガンの黄金製鉄剣などを見ますと、1200kmも北東のウランドウルクで、青銅製で同じ年代の全く良く似たデザインのものが発見されております。そのためギリシャ系工人の存在が言われますが、これらが移入されたものでなく、この地方で剣身だけでも造られていたとしますと、既にかなりの製鉄技術をもっていたものと推測されます。

インククルガンが出てきますと、当然その隣りに位置したフェルガナ、中国で言うところの大宛の地が注目されます。『前漢書』の「良馬精鉄」つまり汗血馬と良い鉄の産する場所の記述からしましても、紀元前に鉄産が中国中原に知られていたのですから、この辺りへの、あるいは周辺からの技術伝播は無視することができません。

西トルキスタンの遺跡もニサ、アナウ、メルブなどの城塞都市の遺構が残っていましたが、その現場を歩きましても、ロシア考古学者の採集が丹念なのか土器のカケラすら少なく、まして鉄片や鉄滓などは全くありませんでした。ニサ遺跡は付近に剽悍なクルド族が住んでいて、昔は武器や農具の自給をしていたのでしょうが、話を聞くことも出来ませんでした。第1遺跡の写真を撮るにも南を向いてカメラを構えると、そちらはイランだからとストップが掛り容易ではありませんでした。

アシハバード市のトルクメン歴史博物館でも鉄製品の展示は非常に少なく、長さ35cmの短剣が一振と鉄鏃が一本に過ぎませんでした。マルギアナの兜や鎧が造られた地と言いますから、もう少し何か展示してあっても良さそうなものなのですが……。

次にジンギスカンの軍勢が草原を疾駆した蒙古。そこには前述しましたように古い鉄の歴史がございます。アルマータの美術館で見たのですが、製鉄民族として知られたチマルク系の軍団が、狼印の旗をなびかせて鹿狩をしている岩壁画がありました。製鉄民族の主流は狼をトーテムとしていたようです。

蒙古人の発生ははっきりとしておりませんで、匈奴の子孫とも言われていますが、東北方面から内蒙古に6世紀頃移ってきた室韋（シツソ）が蒙兀（もうこつ）とよばれ、蒙古人の祖となったとも言われておりまして定かではありません。室韋の一部は韃靼人とも書かれたタタール人で、そのためヨーロッパでは10世紀頃から、蒙古人のことをタルタル人とよんでいます。

実際に蒙古人に会ってみますとその外見は、ウイグル人やキルギス人よりも漢民族や朝鮮民族に近く、文化的にも文字などウイグル文字から借用したといわれていますが、素人見には満州文字に近く、外蒙古ではロシアの影響でキリル文字です。鉄を表現するのにチュルク系のテイメールとなっていますから、文化の上でも確かに複雑な混血を経ているのでしょう。

この地で鉄が発見されたエピソードとしてジンギスカンの騎馬隊が、ある山の付近を走っていて、急にスピードが落ちたので調べてみたら、馬の蹄鉄を大量良質の磁鉄鉱が吸いつけて引っぱっていたという有名な話があるのです。しかし唐代の『貞観政要』という本によりますと、太宗の4年の箇所に匈奴が領有していた、陰山北側の鉄山の地

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

奥出雲の中世・近世を育てた武士たち

——中世編 (下)

三刀屋郷の諏訪部氏（三刀屋氏）

三沢氏（もと飯島氏）と同じく承久の乱（1221）の戦功によって、同じく伊那源氏の諏訪部扶長は、三刀屋郷と越後の佐味庄を受領した。

扶長—助守—助親—助光

（助長）（三郎入道助守）（扶親）（扶光）

このあとで三沢8代遠江守為忠＝藤ヶ瀬入城の二男が諏訪部氏＝この時はすでに三刀屋氏と改姓＝に入り忠扶といった。

文永8年1271の千家文書によれば、三刀屋郷は諏訪部三郎入道子となっている。これは助親である。助親は三刀屋氏文書によれば、文永元年に父助守から譲られているから、来住在地しておれば、「入道子」という表現はないはずと思われる。伊那に（或は越後）に住んで、三刀屋郷・佐味庄を保持していたものと思われる。文永8年より5年後の建治二年に、助親は北条泰村・時宗によって、文永元年亡父より譲りうけたことを確認されており、正応4年1290助親が子助光に譲ったことを6年後の永仁4年に、北条宣時・貞時によって確認されている。諏訪部氏は三沢氏と同じ13世紀末ごろこの地に下ったであろう。

牛尾荘の中沢氏（牛尾氏）

信州の諏訪湖のほとりの諏訪神社は、当地方の各地の諏訪神社の本社である。本社の神官家には上社の諏訪氏（神氏）と、下社の金刺氏があって、ともに神社自衛のためには、社領の領家として諸職を掌握し、経済的・軍事的・信仰的に一大勢力を維持し、中央の為政者との関係を深くして、領地も拡大していた。信濃の武士は諏訪神社への信仰が厚かったから、幕府の信任は諏訪神社への信仰を深めたので、鎌倉幕府は八幡宮とともに、この神社へ厚い信仰を寄せた。したがって出雲地方へ新補地頭として降って来た関東武士の在地、或はその城内には諏訪神社の末社が勧請されており、地方を育てた武士の神社として、ほとんど「諏訪さん」とよばれ

が出てきますので、間違いなく現在の包頭の大製鉄コンビナートが出現して、その原料供給先となっております、製鉄所から140㎞程先の向雲鄂博（バインオボウ）の鉄山と推定されます。匈奴が領有していたのですから、以前からここで原始的な製鉄が行なわれていたのでしょう。

案内して頂いた蒙古人からは鉄板焼はジンギスカンの遠征の時の陣中料理といったことしか聞けませんでしたが、ことほど左様にこの地の鉄の消費量は少ないところでした。しかし寺院に参りますと新しいものですが直径1.8mもある、大きな鋳物の天水槽がありました。宗教だけは別格といった感じです。出土しております鉄器を内蒙古の省立博物館で見ましたが、赤峰とかフフホト郊外の遺跡で割とバラエティに富んだ農工具類が発見されております。秦の重量原器も飾り気のない実用的なもが出ていました。また匈奴の居たところらしく武器が多く、とくに鏃が2千本程を発見されています。

もっとも北寄りの外蒙古になりますと経済的な貧困が影響して調査がされていない為でしょうが、鉄器はほとんど発見されておりません。博物館も鉄鉱石など陳列してなく恐竜の骨と卵がメインでした。

鉄鉱石は南ゴビのマンダル・オボーと言う処で掘れるとのことでしたが、中性子照射化分析で調べました結果では間違いのようでした。他にも2～3産地を聞きましたが、とにかく余り鉄資源に恵まれているとは申せません。ツングース語で鉄を意味するセレンが河も鉄産は下流だけで、蒙古領の上流地帯には余り無いようでした。

こうした状況を考えますと匈奴が南進したのは食料の確保や通行権の問題だけでなく、鉄の獲得も目的だったかも知れません。

しかし中国の歴史では突厥の出自などの部分に、蒙古の鉄についての歴史的記述がしばしばあります。一例をあげますと、唐代の『周書』の異域伝などが詳しく書いています。スエーデンのドーソンが書きました『蒙古史』は、これらの文献から纏めたものでしょうが、この話はトルコの歴史教科書にもエネルゲコン神話の題名で採録されております。私が見ましたものは高校2年のものでした。

牛尾氏は諏訪神氏の末流とはいえ、周囲の多くが伊那源氏の諸氏であり、同じ土地・風土に住み、その地の歴史の中で開発・生産に従うとともに戦って来た小領主であるから、系図の上では別であるとしても、諏訪部（三刀屋）・飯島（三沢）と同質の小領主としてこの地で居住し、成長したとみて差支えないと思われる。

三領主の違い

諏訪部・中沢両氏はともに、本文㊥の三沢氏のところで述べたように、拠点を設け次第に開拓をしながら領地を拡げ、勢力を拡大して行ったであろうが、三沢氏と違って諏訪部氏が三刀

柴栗句会十二月抄

年の瀬を生きるよろこび炭を切る　浅野　としお
あしたから日が伸びでゆく冬至粥　糸原古志
枯野道野地蔵着けたる緋も枯る　恩田和美
熱燗に木枯の音遠のけり　加納信子
したたかな鳥の顔や木守柿　楠　房子
裸木の生命蓄へ春を待つ　高木白虹
そぞろ寒背すじ伸せば骨が鳴る　中澤美紀子
帰る夫待てば師走のすれちがう　錦織富江
奥出雲梵鐘韻ゐん冬に入る　新出谷一華
すれ違う気持押へて炭をつぐ　峯石美代子
すれちがい多きこの頃日短か　渡部夕峰

祝　横田史談会20周年
奥出雲150号

高速両面同時印刷／写真植字製版
電算システム／レーザー入力・編集
総合印刷／無線綴製本

有限会社 植田軽印刷

代表取締役社長　植田　稔

仁多郡仁多町三成４５３－１
TEL・FAX(0854)54－0114

この蒙古の技術は古代トルコ族のものでしょうが、これはずっと前の山西省の土法製鉄にも、地域的に大きな影響を与えています。中世以降は完全に山西の地域は大鉄産地となっており、中国の土法製鉄の四割を占めていました。外蒙は広大な土地に希薄な人口なので、鉄文化は遅れてしまったようです。今回の調査では鉄でなく恐竜の卵が見つかってしまいました。マルコポーロの「東方見聞録」にも記載されているオゴタイハーンの都城でありました、カラコルムのエルテネーズ遺跡に残っていました、コルバン・ゾーに属するものと思われますが、この高さ2.3mの鋳鉄製香炉には、山西省で鋳造したことが鋳込まれておりました。金火匠人の文字もありましたから明・清頃の作品で寺院への奉納物として置かれたものでしょうが、随分遠隔の地を輸送してきたものです。山西省から工人が来て蒙古人を使役し出吹きをした事も考えれば考えられます。

またウランバートルにありますボグドハーンの釘を一本も使っていない宮殿にも高さ1.1mに及ぶ大きな鋳鉄の鐘がありましたが、これまでに見た中国辺の鉄鐘とは比較にならない下手な作品で、湯流れが悪く何箇所も大きな鋳がらくりがしてあり、そのため文字も三分の一は消えていました。デザインも少々変なので同地での倣製とも思われますが、清代の感豊11年（1861年）とありましたから、あるいはこれも山西か河北辺りで造られた安物かも知れません。

しかしいずれにしましても3～5世紀頃には、このウランバートルの南側を流れるトラ河、その上流のオロンテス川などの辺りを製鉄技術をもった騎馬民族が西南進していったのです。

山西省の豊富な資源は匈奴を始め後には、鮮卑、契丹などの技術系統の影響を強く受けて発達し、現在でも犂などは原始的な鋳造法で造っております。太原にあります歴史建造物の公園になっている晋祀の鉄人像は、東洋の製鉄史では必ず登場する作品ですが、大部分補修改修され一体だけが昔の姿で伝世していました。

また中岳廟や少林寺にも鉄人や鐘、鍋などが遺存してありました。さらに仏教聖地の五台山のお寺の釣鐘や香炉、鉄塔などは、日本の梵鐘などのように青銅ではなく、例外なく総べて鉄の鋳物でした。

屋氏と改姓するのもずっと遅く、後世の勢力拡大も少ないのは、地の利を得ているのになぜと思わざるを得ない。わずかに伺い知る資料から判断すると、一族の団結の違いによると思われる。牛尾氏はいつまでも牛尾荘に立て籠っており、三刀屋氏や三沢氏とくに三沢氏と比べて、勢力拡大がなく、しかも三沢氏が常に尼子氏と勢力が拮抗する状態であったのと違い、尼子氏と身内的な主従関係をもっていて、尼子氏が毛利氏に敗れて長門へ下る時にも、わずかの武士とともに付添って行っている。

ともあれ奥出雲の三氏はともにその力量の差、勢力範囲の差はあれども、この地域の中世の発展に尽した功績は認めねばならない。

標題では「近世」もあるが、これは本誌239 240 244号連載の「享保の改革と奥出雲」で充当し、改めて視角を変えて起筆したい。

斐の上川柳十一月の句

俄か雪冬の用意に慌て出し　安部春恵
ワッペンを胸に弾んだ老いの旅　渡部ミツコ
今年また追っかけられて十二月　真綿よし子
ごそごそと食後の薬り老人会　石原冬明
国際化毒グモまでも仲間入り　児玉えみ
法話聞く時雨の音を背なで聞く　藤原千代子
見覚えの女振り向くすれ違い　高木凡太
恋愛も今は女性が主役なり　児玉哲呂
政治家のウソなど民は馴れている　小早川古葉
それらしき事も出来ずに年が暮れ　渡部かおり
年賀状書けぬこの手が憎らしい　足立玉恵
齢なのか今年の寒さ身にこたえ　安部正子
雪をみて急にあれこれ気にかかり　松浦亜以
雪降れば人かげも無い過疎の町　横山まこと
冬仕度済んでないのに雪しきり　田中有樹絵
やれ忙し連発の妻ドラマ見る　田中芳春

遠風のごと　簸の上短歌会

剪りしまま山に捨て置く間伐の檜は匂ひ訴ふるごとし　常盤　はるまさ
大根も白菜キャベツも畑にあり積む雪に術なく窓に見てをり　野村節子
霜枯れし菊のひと群を刈り了へて染みたる匂ひにしばし目を閉づ　永井弥生
夕もやの深く閉ざせる出雲野は遠風のごと川鳴りきこゆ　安部夕波

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江〇一四〇〇―八―六〇一）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲
題字　糸原風亭書
第250号（2月号）
1996.2.3(M129.T82.S71)
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

鉄の来た道⑥
——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の記録）

セレと言う名の鉄造り

最後に東の端の中国東北地方（満州）、それにシベリア極東地区・北朝鮮・韓国などですが、これらの地域は古代トルコ語地帯ではなく、鉄を現す言葉はガラッと変ってしまい、ツングース系のセル、スルといったものになります。これらの地域はシルクロードから外れておりますし、まだ現地へ行っておりませんので詳しいことは申せませんが、鉄産はかなり古くから行なわれていたようです。

赤い夕日と高粱の満州ですが、ここは中国でも東北地区・中国古典の表現では、この付近には粛慎（みしはせ）とか、貊人、穢人などが居住し、続いて挹婁とか沃沮、扶余などとよばれた民族がおりました。中国古典は編纂の都度同じ民族でも呼称を変えて表現したりしていますので、一々戦乱淘汰があったとは考えられませんが、血縁やトーテムによる部族集団が形成されていたようです。これらの北方系人種が温暖の地を求めて南下し、原満州族を構成したわけですが、やっと国の形が整ってきますのは、7世紀の末にその中の挹婁の一部でありました勿吉という種族の下にいた靺鞨が独立国家を造ったのが、後に発展・拡大し、六九八年独立の渤海国となったわけです。この国が奈良朝期の聖武天皇の七二七年に日本と修交をもったことは、皆様御承知のことと思います。

黒龍江省の博物館には出土鉄器が若干あると聞きましたが、まだ見ておりません。しかし内蒙古に寄った遼寧省の北栗県西官営子馮素弗墓から出土しました、鉄蓋付きの銅鍋は北方民族の物らしい品でした。西暦四百年頃に熱河を地盤としていました、五胡十六国の北燕のものとされています。さらに建平県張家営子遼墓からも、契丹時代の馬具が出土していて、その中には鉄鐙や鉄轡がありました。

文献に鉄の産出がでてきますのは、前述の渤海からでして『新唐書』北狄伝の記載です。鉄利府という名の役所が置かれ「伊、蒙、陀、黒、比の五冊を管轄していたとされています。しかしこの文献に出てきます鉄産地の位城と言う場所は、黒とだけ書かれている黒水靺鞨の領内らしいのですが判っておりません。鉄利府の所在地は満鉄の調査機関の文献では、現在のハバロフスクと言われております。しかし哈爾浜の北東に古くから栄えた鉄力という町があり、従前は鉄驪とむずかしい字で書かれ鉄山包とも呼ばれていました。地名からは関連がありそうです。また位城もこれに似た場所は伊春、依蘭、依安などがあります。依蘭などは集荷地としたら松花江沿いで恵まれた土地です。

アムール河沿いで鉄製品を出している遺跡は、ハバロフスク市から若干西寄りに、紀元前11～6世紀のポリツエ遺跡があります。そのすぐ南には大分後のものですが、女真時代のナデジンスコエ基地があり、若干西へと移りますと靺鞨のトロツコエ墓地があります。そして同市の南側にはやはり女真時代のコルサコヴォ墓地があります。それにしても出土した鉄製品から見ますと、靺鞨以降急速に量が増え、生活用具の分野に入ってきています。ハバロフスクの郷土博物館で見たのですが、渤海時代として1m超の剣、鏃、釘鋏、車軸などが展示されており、普及の様相が偲ばれました。

この時代は極東の広範な地域に中国人が進出しておりまして、日本海北部に面した沿海州やハバロフスクからかなり北の方まで、中国の影響が及んでおりました。沿海州などは1860年の北京条約締結まで中国領だったのです。

板倉源次郎や間宮林蔵の調査で、この地の原住民達が鉄を欲



新疆ウイグル自治区カシュガル市の大バザールで見掛けた金物商人

鉄の来た道⑥・宮沢賢治誕生百年②・奥出雲に於ける銑生産の系譜⑫・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

しがっていたことを記しており、物々交換をするのに斧、小刀、古釘、それに毀れた鍋まで持って行ったとされていますが、果たして鉄が近世までこの地で造れなかったのでしょうか。極寒の地で製品の輸送がままならなかったことは確かでしょう。しかし夏場はそれ程ではありません。十分輸送できます。

またウスリー河の両岸（沿海州と満州の境界付近）は鉄鉱床がしばしば見られます。ウラジオストックの北方250kmにあるオリガなど数ヵ所の鉄鉱山が知られています。さらに吉林省の南側ですが、大栗子、藍泥溝、八道溝、七道溝、老嶺など著名な鉄山があります。大興安嶺の山中でも二～三の処で操業していたと聞いております。それにアムール河中流先程の伊春の東にチ・ガンがあり、川口の近くにはニコライエフスクの大鉄山があります。

この辺りは発掘調査が余り進んでいないと思いますが、吉林省の南部では古くから土法製鉄が行われており、東寧では渤海時代の鉄器の発見が報告されております。

いずれにしても極寒の地ですが靺鞨や渤海と日本とは奈良時代の初めから交通もあり、地理的にも樺太（サハリン）のところは冬期に徒渉できる程です。こうした北端の地では無いにしても、公的私的に日本海という自然の交通機関を利用して、鉄文化についても伝播流入が無かったとは言い切れません。

遼寧省に入りますと鞍山、弓長嶺、宿兜溝をはじめ、厖大な埋蔵量をもっておりまして、時代は若干後になりますが、九百余年の頃に遼の太祖は渤海の製鉄工人四千人を遼城に移して働かせ、また金の時代の一二三六年には一七六〇戸の製鉄工を、南満州、多分遼城付近からさらに山西省の大同へと強制移住をさせております。

明の洪武帝が千三百八七年に満州統治の拠点として、開原の町を選んだのも、南側に鉄嶺を抱えておりますので、北の押えとしてこの地での武器調達を計算に入れていたものと思われます。いずれにしましても文献類を総合しますと一千六百年前後には遼寧で年間二百トン程度の鉄を造っていたものと想像されています。

清代は瀋陽付近の採鉱禁止などもありましたが、製鉄は細々と続けられており、十九世紀後半頃は、小土管のような形の坩堝に破砕された鉄鉱石と木炭が入れられ、これを百七～八十組立て並べて隙間や周囲をコークスで覆い、点火して吹子で送風すれば一昼夜で銑鉄ができ、それを再溶解して所要の器物に鋳造していたと言います。（完）

本誌250号達成・横田史談会創立20周年を記念し、特志の御厚意により、窪田先生の論文を一つにまとめ、写真なども追加、増刊号として無料配布致します。

節　分　大寒より15日目、立春の前日にあたる日。今年は2月3日（土）。昔は門口にヒイラギの葉やイワシの頭を刺し、豆撒（まき）きをした。寺院などでは、追儺の式を行う。7世紀末中国から伝って宮中の大晦日の行事であったが、近世民間では節分の行事となった。「福は内、鬼は外」とまくが、丹波国綾部の大名丸鬼家では、「鬼は内、福は内、富は内」と撒いた。

宮沢賢治誕生百年②
農民芸術概論綱要

「詩一編」（手は熱く　足はなゆれど　－前号掲載－）との出合い

横田町本町の小林薬店（戦後しばらくまで書店兼業）は、昵懇（じっこん）であったので着荷の度に手伝って、書籍・雑誌を見せてもらっていた。敗戦後「どうなりますかね」と主人と話しながら、私は生き方を求めて読みあさっている時、さる雑誌でこの詩を見つけた。この奥出雲にも数回なにかの区切り毎（ごと）に第一面に掲げて来た。1947昭和22年第二回（第一回は県と共催）横田町文化祭に「耳で聴く総合雑誌〝横田文化〟を開催し（土曜会担当）、総合雑誌風に表紙・口絵・写真・俳句・川柳・短歌・随想・解説・論文を、選者や本人の登場で発表する企画で、小学校の講堂で開催、200名を越え300名も越える町民の来会で、生き方を求める熱心な雰囲気を醸し出した。目次も紙に版画（探美会員安部恭一作）も交えて印刷した。25年の第四回には開催に続いて、第5号としてそれらも収録して、本誌型6頁の印刷物として旧横田町全戸に配布した。その一頁にもこの詩をのせている。耳で聴くの表紙文字、第5号の表紙・現在の奥出雲の題字はいずれも糸原風亭（当時探美会員）の筆蹟で続いている。この詩に文化活動の歩みの指標とする意味を持たせてきた。この賢治の詩はあまりわかり易いからか諸紙誌に載ることも極めて少なかった。以来50年。この詩の賢治の心までは深入りしなくても理解頂けると思う。

宮沢賢治との出合い　1933昭和8年37才で逝った賢治の作品集がはじめて出版されたのは全14年で、十字屋書店から戦時中では上質紙に装訂も箱も豪華なものであった。それを友人藤原道夫君が医大卒業記念にくれたのである。「雨ニモマケズ」「春と修羅」などの詩、童話「風の又三郎」「セロひきのゴージュ」「ドングリと山猫」等々傑作が収録されていた。戦時中の抑圧

明治以降の奥出雲における銑生産の系譜⑫

和銑生産の近代化への萌芽

—絲原家の3部の文書から

製鉄史研究家の疑問に対して

日本の和鉄生産の本場—技術・生産量とその質もともに—を築き上げた奥出雲の経営者＝鉄師は、近世企業たちが銑生産を主力としながら、なぜ西欧がわが国と同じく竪形炉（シャフト炉、高さ1m余・直径30cm余の粘土製の円筒形の炉）で、鉄鉱石と木炭で、主として銑を生産していたのを近代化し、溶鉱炉とし木炭を用いて銑の連続操業をはじめたのに対応して、箱型炉（現在の『日刀保たたら』の様式）から高炉に向わなかったかと、疑問を投げかけられる。

中には石炭が未発見でコークスがなかったし、鉄鉱石がなく粉状の砂鉄であったこと、煉瓦の製法が遅れたことなどであろうと言われる方もあるが、それが遅れた条件ではないと言えることを、絲原家の操業記録の中から発見して約10年前に発見して発表した。そしてそれを別な角度で裏付ける三つの古文書を知りながら、数年前ごろから先学者、芹沢正雄・大橋周治（以上故人）・岡田廣吉の三氏の指導で、やや明らかにすることができて、まず三文書の概要を「産業考古学会報75号に報告し、少し前進した見解を去る1月13日の山陰中央新報文化欄に発表した。さらに深く述べる考えであるが、それまでの中間報告をここでしばらく述べてみたい。

松江藩で近代化の遅れたのは

たびたび述べるように奥出雲では、文化年間（1804～1817）の半ばから、赤目砂鉄も用いるが真砂砂鉄の多い当地方の、四日押（四昼夜操業）で銑を主とする企業たちの操業を一日短縮して、三日押とする合理化がはじまっている。そして天保年間はその短縮への取り組みに最も苦心している時代で、嘉永年間を経て30年たった安政3年1856にやっと完全に三日押に転換した（鉄師によっては二～三年遅れたものもある）。その結果短縮しただけ年間の操業代（回）数は二割増となり、80代を超えた。こうして奥出雲は生産量に於て質とともにわが国の首位に立ち、全国の50％余を占めた。

この間とその前後合わせて50年間の経営・操業記録の数字を分析して、若干解説して報告した。（アグネ社月刊「金属」ついで1991年仝社『金属の文化史』に集録。近く詳細な検討を発表予定）

全く以心伝心の技術操業の企業なので、鉄師・担当番頭・村下ら職人の努力の跡は、番頭の覚書に残っている。従って渡来したオランダの物理化学をとり入れる余裕もなく、まして新しい製鉄技術をとり入れる余裕もなかった。絲原家には和漢の萬巻の書のほか、蘭学書の物理・化学の書の訳本も備えられてはいたが、改良完成まではその余裕がなかったのである。

外来の製鉄技術書『大砲鋳造法』

このことについては、本編の①～⑪まで（本誌213 214•5 217 218 220 221 222 223 224 230 248）でくわしく述べてある。この本がわが国に入ったのは1836天保6年である。最も操業改良に苦心中であり、この本的な一本道の思想・世相の中で教師としての立場を歩みながら、この作品集に接して、別の世界の夢を追って、今にして思えば和らぎを憶えていたようである。全16年から世相は一段と緊迫した。全18年出版の『宮沢賢治素描』『宮沢賢治覚え書』は、私の読みが浅く甘いことを指摘してくれた。

農民芸術概論綱要

戦時中歩いて通勤している小学校での宿直の夜には、その村の青年有志と読書会を続けた。柄にもなく岩波版『吉田松陰全集』その他の知識で、その村塾精神にあやかりながらであったが、相手はすべて農民青年、時局を憂えても、藩を国を憂える村塾青年とは次元が違う。主題のとり組みに迷うた時魅せられたのがこの綱要である。

詩の型の短文が、序論。農民芸術についての興隆・本質・分野・主義・製作・産者・批評・総合の8部と結論の10編に、各々10行前後で論じられている。韮才にして要点さえも誤まることを恐れて紹介できないが、私は賢治の生涯の指針と思って頼った。

1926大正15年30才の時到達し得た綱要で、花巻農学校教師在職中で、岩手国民高等学校講師としてここでこの講義をしている。翌年3月31日退職、独居自炊の生活に入り、開墾耕作に従い、著作をし、羅須地人協会を設立し各種の文化活動を起した。

序論の中で

「世界がぜんたい幸福にならないうちは
個人の幸福はあり得ない」

と述べている。敗戦後この言葉は、いろいろな人々の心の拠りどころとして深刻に引用されたり、時には組織体の目標の中にスローガン的にとり入れられて、著名となったのである。概論8章の中にこの心は貫かれている。最後にこう述べている。

われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようではないか。

最近、戦後3度目の宮沢賢治再認識の高まりが見え、著作集・研究書が数多く出版されている。

蓬頭子

前号訂正　1頁　題名　銑生産量の系譜　の　量　を削除

が松江藩のお抱え蘭学書金森錦謙によって完訳され、『鉄熕鋳鑑』として印刷、藩主9代斉斎に献ぜられたのは1853嘉永6年であるから、三日押に完全移行の3年前である。

最も早く別人の手になるこの本の最初の訳本で、鉄の大砲（青銅砲は遥かに遡る）を製造したのは佐賀の鍋島藩（藩主の妹が松江藩主斉斎の奥方）で、1851（嘉永4）年から1867（慶応3）年までに、一方では反射炉を用いて青銅砲を製造しながら、石見産の銑を移入し、反射炉を用いて195門製造している。わが国用いて鉄製大砲を製造した。わが国では最初で1856（安政元）年7月のことであった。しかし安定した操業には至らなかった。やはり砂鉄銑が適さないと見た東北南部藩の大島高任は、南部藩の釜石で産する磁鉄鉱による銑生産を決意し、1857（安政4）年、釜石市の近くでヒュゲーニンの溶鉱炉（高炉）をもとに、大橋1番高炉を設計建設し、送風動力は水車起動によって成功した。生産した銑は反射炉でなく、伝統の鋳物製作用の「こしき」炉によった。

企業たたら炉と違い1代毎（3～4日）に炉を壊して再築炉することなく、煉瓦炉であったから、木炭は使用するが、粘土のかわりに溶媒剤として石灰石を投入した。1日で1tの製銑能力で、企業たたらの3倍の生産能力をもつものであった。

絲原家文書は、

①「溶鉱炉仕組概略」
　幕末期のもの

②「溶鉄高炉建築費概表」
　明治五年頃のもの

③「溶鉱炉連築諸費積」
　明治九年のもの

である。号を追って検討したい。

（横田史談会　高橋一郎）

既述の如く佐賀藩に続いて、佐賀藩の訳本と技術者の指導で薩摩藩が製造し、次々と他に拡がった。しかし薩摩藩をのぞく他藩はすべて、銑を入手して反射炉で溶融して鋳型に流して大砲を造った。隣の鳥取藩は銑の入手の量を補うために、民間から鍋・釜等の鋳物品を徴発して、庶民の不満もくすぶったという。

唯薩摩藩は科学の研究も早くから進めていたので、地元の砂鉄と鉄鉱石そして木炭を用い、溶鉱炉で銑を生産し、反射炉を用

柴栗句会一月抄

気を配る嫁をいたわり年酒飲む　浅野　としお
初日の出山にも肩といふところ　糸原古志
街師走人の明暗それぞれに　恩田和美
古着解き身巾広めに縫い初め　加納信子
娘の去んで無言の車窓に月凍てつ　楠　房子
息ひそむ雪の集落降り止まず　高木白虹
七種をいただき普段の顔となり　中澤美紀子
気配りに疲れし齢年を越す　錦織富江
米寿祝ぐ寿の字の朱盃初明り　新出谷一華
仕舞い風呂浸りて寒夜の月を見る　峯石美代子
鍬の疵着けしままに年明くる　渡部夕峰

斐の上川柳一月の句

ネズミ年無理な期待をかけられる　児玉哲呂
七まわり子年迎えて春たゝえ　安部春恵
大掃除懐かし下駄をはいてみる　渡部ミツ子
親馬鹿が子持ち娘にお年玉　高木凡太
締切日駄句を練るのも一夜づけ　渡部かおり
目出度さを束ねてバイク走り去る　小早川古葉
除夜の鐘あれば猪消えていく　児玉えみ
鍋料理猫も席とる家族の輪　足立玉恵
親子孫そろってかしわ手初詣　松浦亜以
寝正月して年越しの疲れとり　藤原のぼる
珍客にてんてこまいの老二人　石原冬明
母の顔思い出させておせち盛り　真綿よし子
臍出して登校の列雪が降る　松浦亜以

瞳のなき竜を　簸の上短歌会

終戦のかなしきまでに明るき夜泥ぬりし土蔵の厚き壁見し　永井弥生
終戦に戸口に掛けられし蔦口や竹槍見つつ母と呆けをり　仝　人
庭隅の萩の花むら月光にそこのみ明るく虫の音すだく　野村節子
夕さりて草陰に鳴くこほろぎの声しきりなり月のぼり来ぬ　仝　人
軍装のわれの写真にロマンねと平和に倦みし孫の言へるに　常盤はるまさ
七十路のいまも瞳のなき竜をわが裡にして終る一生か　仝　人
白銀の北アルプスを仰ぎみて奥飛騨路ゆくわれは旅人　安部夕波
藤村の詩に魅せられて三たび来し伊良湖岬の夕凪の海　仝　人

会員頒布一部百七十五円／六九十一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第251号（3月号）
1996.3.2（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団
横田史談会 ©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑬

「溶鉱炉仕組概略」

——洋式銑鉄生産の研究（その一）

仕組概略の復元図

絲原記念館の古文書展示棚にこの文書が公開中であるが、この文書整理の折には慶応3年1787群の中にあったものである。その中の「溶鉱炉の外部」の項の文章の寸法書きをもとに復元図を作成するとⒷ図の如くなる（一部細部の寸法書きなく、関連の寸法から推定して完成）

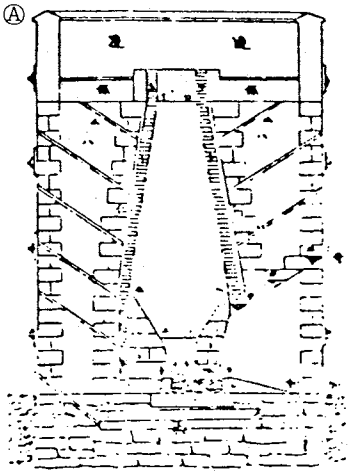
Ⓐ図はこの連載の第1回（213号）と第2回（214215合併号）に述べた、ヒュゲェニンの『大砲鋳造法』の中の溶鉱炉（高炉）の図である。縮尺を同じにしてある）Ⓐ図はヒュゲェニンの『大砲鋳造法』を松江藩のお抱え蘭学者金森錦謙が翻訳して、安政3年1856に出版されたものの転写であって、これと同じ溶鉱炉とみて差支えないと思う。これをさらに追ってみると、ヒュゲェニンの書にある溶鉱炉と反射炉を設けたのは薩摩藩のみで、最も早く実施した佐賀藩や、薩摩藩に続いて実施した伊豆の韮山以下はすべて既述したように、溶鉱炉はなく反射炉だけであった。佐賀藩は嘉永3年1850に設けられている。

薩摩は佐賀藩主鍋島直正から「西洋鉄熕鋳造篇」を贈与されて、それにもとづいてわが国最初の洋式高炉を完成して操業に入ったのは嘉永5年7月という。そして反射炉で鋳砲事業も成功させている。そして安政5年1858 7月藩主島津斉彬が49才で急逝すると、修成館に諸工場を設けて先進的諸工業を行っていたのもほとんど一時停止された。そのため高炉の操業はその後行われず、1863（文久3）年の薩英戦争に際し英艦の砲撃で破壊され姿を消した。

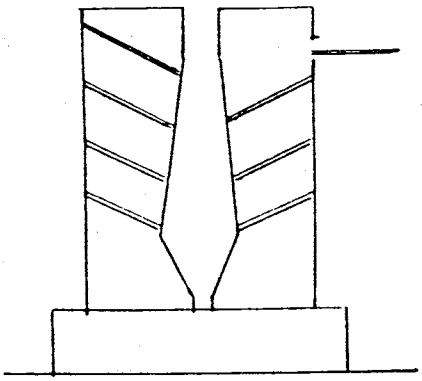
作業写生図

絲原記念館には前記の古文書と同じ袋の中に溶鉱炉の略図の中で、一人の男が上部から原料を挿入している姿を描いたものがある。横の走り書きからみると、現場を視察したことがわかる。

Ⓐ



Ⓑ



寸法は縮尺（一部は推定）

すると高炉の操業がⒷ行われたのは薩摩でしかないから、ここを藩に訳本も贈与されているなど絲原家の鈩場関係者が、安政5の関係があって、絲原家が藩のすすめで視察に行ったか、独自に赴かせたのかも知れない。

既に本誌248号で述べたように当主権造は先進的識見の持主であった。

この連載で述べたように、今までの松江藩の資料では、他藩なみの反射炉も設けられておらず、高炉は勿論設けられていない。この調査に対する鉄師権造の処したことについてはあとでまとめて推論することにする。

薩摩藩の砂鉄製錬

大橋周治著『幕末明治製鉄論』によると砂鉄製錬は600年前までさかのぼり、種子島・知覧その他六地域で明治初年まで行われていて、琉球人の細工による水車鞴を用いた、当地方の鈩炉より高く、高炉に近いものであった。このような銑鉄生産の伝統が薩摩にあったから、洋式高炉法をまったく奇想天外のものとしてでなく受けいれる条件をつくっていて、他藩では計画さえもしなかった、ヒュゲーニンの訳書にもとづく高炉を設けたであろうとしている。

次頁上段に知覧の炉を掲げておく。

（横田史談会　高橋一郎）

明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑬・宮沢賢治誕生百年③・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

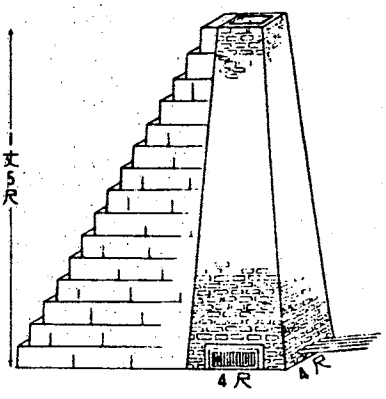


図6　知覧の砂鉄精錬炉
出所：島袋　前掲書
注：同書の図は底辺（4尺）に比して高さ（1丈5尺）をいちじるしく縮めて描かれているので縮尺を合わせて書き換えた。

底の右側は4本の粘土製羽口であった。で、薩摩独特な水車鞴で送風する。段をのぼり上から木炭と砂鉄を挿入し、銑鉄は炉底にたまる。その間鉄滓は底より稍々上部にあけられた穴より外部に流出させた。1操業は3～7昼夜を炉外に流出させた。（大橋著書より）

銑が出来上がると炉の側方を割って、赤熱された銑鉄を長さ2m重さ32kgもある鉄で、10数人の力で取り出した。別のところでは当地方のように適宜銑鉄

むかしばなし

鶴女房

―奥出雲昔話集から

（語り手　馬木・千原貞四郎　採録　田中瑩一）

何だか、薪かなんぞ、木樵り鶴を放いてやったら、しいたらへ行って木い樵っちゃ町へ出て売り、毎日毎日爺さんがしちょったら、いつだか道ばたに鶴が罠にかかっちょって、ひいから「お爺さん。おら、子にしてくれ」（それから）、そい助けてやった。（そうしたら）そのお爺さんは子がなかったら、したらそれからしばらくしてからいい娘が来て、

宮沢賢治誕生百年③
雨ニモマケズ／風ニモマケズ

十一月三日

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
欲ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラツテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジヨウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ
東ニ病気ノコドモアレバ
行ツテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ツテコハガラナクテモイイトイヒ
北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ

この詩に接して友人と二人で語ったのは、ともに賢治の科学的態度や西欧文学の教養から、キリスト教の愛の精神であろうと解した。そういう近隣の風土で育ち、特に友人の家庭は熱心な信者であったからである。賢治の精神の中には合理や必然を詠った痕跡は微塵もなく、ただ精神へ精神へと高く昇るものに満ちているとも解した。

友人はのち父の跡を継いで町医者となり、このような心境を医療に尽くすと考えていた。当地方でも最も早くオートバイによる往診を、奥の奥まで行ったのもそのあらわれであり、戦後新しい器機も設備も備えて地域医療にも尽くした。

賢治は盛岡高等農林学校の農芸化学科を卒業し、地質を修め、実験指導や土性調査に従事し、母校の助教授推薦を断って、花巻農学校の教諭として、農林の実際上の指導者を養成することを志した。だが間もなく退職し、自炊生活をしながら本格的開墾に入り、農耕に従って肥料設計2,000枚以上を設計し、38才で死ぬるまで一貫して続行した。農事相談を無料で行い、ゴム靴をはいて東奔西走の生活の連続だった。機を逸せぬ指導に常に心を痛め昼夜の別なく田畑を見廻った。農民たちは「農民の父」と仰ぎ、「肥料の神さま」と尊敬した。東北の寒冷な風土の悪条件の克服との闘いのために、科学的操作と技術を指導した。

こうしたなかでの自分の心構えの詩であって、「デクノボウ」＝木偶坊＝役にたたない人とか、気転がきかない人をののしって

「お前、子にしてごせちい（くれという）が、こうにゃ食うもんだいなんだあ（わが家には食べる物も何も）無い。おらがやあやこや毎日薪ども売って口すぎちょうやなことで、わあわあ（われわれ）が二人食うほどよか（しか）ない。子養うほどない。米だい何だいよう儲けんだけん」

「いや、そげなこたあしてもらわいでもええけん」

ほから、娘が、爺さんや婆さんの留守んなったころ、こう、じっと体、たいしたこう、体ばたばた世話やいちょったら、爺さんや婆さんがもどったらいい織り物こしらえちょって、ほから

「これ持って行って、町い持って行って、こりゃ高あに売れえけん売らさい」

ほから、それ持って出て、

「買あてごせ」ちいたら、

「こらとてもえらいもんだ。鶴の羽衣いいて大金にもなあもんだ」いいて、何ぼだったかね、高い金出いて買あてもらあた。

で、もどってまた金儲けてやっちょったらそのあげくにまたそこんとこ通うたら裸鶴がおって、体の羽根や毛がみんな抜けた裸鶴がおったちいてね。助けてもらあた礼に体が裸になあほどの着物を持って、

「おらが着物でこしらえたやっだけん」いいていいたげな。ちいやな（というような）ことですがね。



サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボウトヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ

という語については、何といわれようと自分の道を突き進む人を言っているのだろうと解していた。

間も無く研究書によっていろいろ理解を深めることができた。この詩は賢治の死後、使用していたトランクの蓋裏の内ポケットから、偶然に発見された手帳に書かれたもので、その写真をみると推稿もしてない。詩の冒頭の欄外に十一月三日とある。そして最後には日蓮の「十界曼荼羅」の中心部の二尊四菩薩を書写している。

この手帳と共に両親と弟妹にあてた遺書がある。賢治が没した昭和8年1933 9月21日より2年前の9月21日上京し肺炎を再発し、高熱に喘ぎながら死を覚悟してしたためたものである。

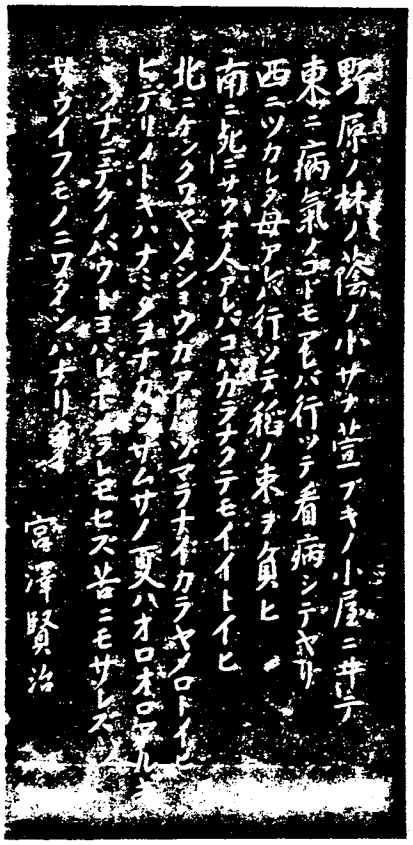
「厚い御恩に対して背くばかりであった。御恩は次の生又その次の生で報じます。信仰でなくお題目で私をお呼び下さい。それで絶えずおわびのお答えをします」（要点）とある。帰郷してからのこの詩は闘病生活の中での心境を記した、透徹した深い題目信仰の詩であることを知った。

谷川徹三は明治以後の日本人

詩　碑

岩手県花巻町内のもとの羅須地人協会のあった跡にある高さ11尺（3.3m余）の水成岩に刻まれた、右の詩の後半である。数千の詩の中からいろいろの意見が出たが、碑文の筆者で彫刻家の高村光太郎や谷川徹三・草野心平らの意見できまったが、長いので細字となると読み難いとの意見で、賢治の父の政治郎が最後にこれほどと決定した。地元の石工金藤清六が一か月かけて刻みつけ、六日後の昭和11年11月23日に除幕されたものである。

この写真は碑文の拓本の縮小版である。滑らかな石面に鮮やかに刻みこまれた碑である。



詩碑（高村光太郎筆）拓本

前号訂正　2頁　3段　30行　九・鬼家

ぎりぎりの決断　籤の上短歌会

団塊の世代とわが子つぶやくに孫らの就職は超氷河期と言ふ　常盤（ひもす）はるまさ
政治家のぎりぎりと言ふはむなしくて終日粉雪降りしきるなり　全人
子を産みて強くなれりとゴールせしマラソンランナーカトリンドーレ　全人
後れ来てテープを切りしランナーは独り歩きて控に消へる　全人
いつよりか耳遠き日々となりたれば長生きのきざしとうからは言ふ（とも）　岡田時子
十余年前に別れし旧友よりの漢方薬は有難きかな　全人
風邪の（ほ）床上げたる夫とひさびさに茶を汲む居間に早春の陽のさす　野村節子
夫ありて息子と嫁と孫の居て夕餉に湯気たつ鍋をかこみぬ　全人
花がらを焼くくすぶりの傍に来年を言ひて落葉積みゆく　永井弥生
雪除きて寒わらびの穂をたしかめぬ黄砂とぶ日の柊の下　全人
吹雪く夜は狐の鳴きし幼な日の鳩岡山は山鳴りのする　安部夕波

柴栗句会二月抄

寒月が育つ山脈肩どころ　浅野としお
葉牡丹の渦のゆるみて二月尽　糸原古志
夢をかけ絵馬に祈りの受験生　恩田和美
屋根雪崩夢のつづきをつまづかせ　加納信子
今日も又旅して北より春の雪　楠房子
春浅き夢の続きぞ惜しまれて　高木白虹
蕗の薹（とう）見つけて何やら嬉しくて　中澤美紀子
炬燵守り押される如く今日も過ぐ　錦織富江
寒卵ぽとり独りの朝餉とす　新出谷一華
寒林をぬけきて庭にさえづりぬ　峯石美代子
雪霏々と厠の窓に言葉投げ　渡部夕峰

の詩の中で、美しく深くそして精神の高さでは最高と賞揚している。

「農民芸術論」の中で「法を先とし……農村を最後の目標」と述べているが、「法」は法華経の教えと解するのが正しく、法華経の中心は二尊四菩薩と日蓮は説いているという。私の理解の及ばぬところであるが、この精神がこの詩という。

はじめの四行は丈夫なからだ。

「欲ハナク……ソシテワスレズ」は、「貧（ヒン）」「瞋（シン）」（いかる）「癡（チ）」（おろか）の三毒におかされた修羅（しゅら）（阿修羅＝混乱した世界）の境界を脱して、名利にとらわれず菩薩道（悟りを求めて修業する人の求める道）に精進するという心境であり、

「東ニ病気ノコドモ……ツマラナイカラヤメロトイイ」は、生老病死の四苦に悩む四衆（民衆）を導くための利他自行に生きる精願である。

ヒデリノトキ……ワタシハナリタイ」は、菩薩道を願う理想像が「デクノボー」であり、法華経の「常不軽菩薩」という。

賢治が日常奉掲礼拝していた日蓮の「十界曼荼羅（まんだら）」の中心部の二尊四菩薩とは、

南無**無辺行菩薩**
南無**上行菩薩**
南無**多宝如来**
南無妙法蓮華経
南無**釈迦牟尼仏**
南無**浄行菩薩**
南無**安立行菩薩**

で、法華経では釈迦・多宝如来の二尊が併座し、無数の地湧菩薩たちの上首である四菩薩に末法の世において法華経を弘めることを依嘱したという。

（逢頭子）

悪口・面罵や瓦石・刀杖の難に耐えて修業し、その功徳で仏となる菩薩（修業者）で、釈迦が前世における修業の姿であると説く。日蓮の末世における法華経行者は、不軽菩薩の行動に徹することが肝要であると教えたが、それを日蓮遺文の愛読で理解した賢治が、「デクノボー」の姿（イメージ）であらわしたものであると理解するようになった。

それでこそ、度々賢治が書物の上で説かれたり、作品が見なおされて、生きかえるのであろう。

斐の上川柳二月の句

逝った子の年をかぞえて炬燵番　安部正子
どか雪をうらみ炬燵とすもう取る　田中友樹絵
趣味ひとつ気長に暮す雪ごもり　渡部ミツコ
兎も角も気にかかること棚に上げ　渡部かおり
動燃のもんじゅの知恵が漏れて出る　田中芳春
外吹雪内も鍋物吹いて食べ　児玉えみ
天気図のダルマが多く出て困る　真綿よし子
ちゃん付けて呼んで無邪気に古稀祝い　松浦亜以
茶に招ばれ夫にコーヒー入れて行く　藤原千代子
写経する手先き次第に力入る　松浦久寿子
元気かと聞かれてちょっと考える　児玉哲呂
鍋料理米の御飯は売れ残り　小早川古葉
残り火を燃す何かを寝て待とう　高木凡太
もう五十いやまた五十とひとり言　加納治江
競い合うバブルのツケは高くつき　藤原のぼる
冬日和老いの心に活を入れ　安部春恵
大相撲見る楽しみもボケ防止　足立玉恵
大寒がことさら過疎へ押しかける　横山まこと

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲
題字　糸原風亭書
第252号（4月号）
1996.4.2（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団
横田史談会
©

秀吉の時代の奥出雲①

信長・秀吉・家康と毛利・尼子

三人の生涯

日本歴史における信長・秀吉の時代のしめる位置はまことに大きい。それは近代日本につながる多くのものが、この期に芽生えているからである。下剋上の戦火は全国に蔓延、地方の群雄は天下の覇者たらんと機を窺った。登場した合理主義者、信長によって天下統一、秀吉によって整備され、家康は幕府創立に成功した。

年表に見るように三人ともほぼ同時に呱々の声をあげた天文っ子だが、生まれた境遇は余程異る。

天文初年期は周防の大内氏は西国7か国を制して全盛時代。毛利氏は安芸の山中の吉田の郡山城で、実力を貯えていた時代。尼子経久は急速な成長を遂げたが、掌握力の不足から国人衆の向背が常ならず、戦いに明け暮れていた。三沢氏は横田庄を三領家の代官として支配するため、藤ヶ瀬城に移城し奥出雲の重鎮をめざしていた時代である。

信長は尾張国の守護代織田氏の家老織田備後守信秀の三男として那古屋城内に生まれた。秀吉は尾張国中村の農民弥右ェ門の子、家康は三河国の豪族松平氏の宗家8代目広忠の長男として岡崎城内に生まれている。

この中で最も下級の氏素姓は秀吉であるが、一番苦労したのは家康であった。秀吉にも貧困の苦しさがあったが、庶民の明るさの中に育ち、自分の意志のままに生きる自由があった。家康は今川と織田の強国に挟まれた弱小大名の子、3才で母と引き離され、6才より19才まで、13年もの間両家の人質生活で、灰色の青春であった。だが青年期以降の生活は前二者ともに常に活気にあふれ、劇的でしかも旭日昇天の勢いをしめした。

近代日本の原点を築いた三人

まず第1は**土地制度の改革**。秀吉は耕地面積と生産高を把握するため、全国的に検地を実施し、これをもととしてしきりに諸大名の領地替えを行なった。

その度に与える朱印状のもと統一政権を樹立し、江戸時代の幕藩体制の基礎ができた。この太閤検地は今から400年前に全国的な戸籍と土地台帳をもったことで、明治以後の日本の近代の急速な発展はこれに負うことが大である。

第2は**貨幣経済**の発達である。貨幣の鋳造は鎌倉初期以来途絶えていた。戦国期になると諸国の金銀山の採掘が進み、天正・慶長期には大判・小判をはじめとする金銀貨が鋳造され、金（ゴールド）殺到（ラッシュ）の時代を迎え、わが国資本主義経済の基礎が形成された。

第3は**都市の発達**であって、今日の東京・大阪をはじめ全国の地方都市のもとは、この時代の戦国大名が開いた城下町に由来しているのは、一般的に知られてもいることである。

第4は商工業の発達である。信長・秀吉は権門勢家（官位が高く権勢のある家）を後楯とした閉鎖的な座を廃して、楽市・楽座をはじめ、新規な商人にも自由な営業を認め助長した。このため武器の発達は、鋤・鍬・鎌をはじめとする農工具の改良も促進させ、農村にも次第に富をもたらしていった。

第5は**交通の発達**である。信長は上洛に際して沿道や伊勢の関所を撤廃した。これにより商人の活動範囲は広まり、庶民には社寺参詣や旅の楽しさが与えられた。人々の交流は急速に文化の浸透をもたらし、信仰の普及も広くなり、街道の往還の賑わいもふえ、道路も整備されていった。

信長・秀吉に仕えた太田牛一という武人は、『太閤さま軍記のうち』という著書の中で、秀吉時代には、日本国中金銀や南蛮・唐土・天竺の名物珍奇にあふれ、路頭に乞食もいないと記しているという。

型やぶり秀吉

三人の中で最も親しさを感ずるのは秀吉といわれる。農民の出でありながら関白大政大臣にまで立身出世したことに、庶民の欲望を満足させるものがあるのかも知れない。いまひとつの人気の秘密は、その性格自体に人間的魅力があったこともあげられよう。

明け広げな性格である。自筆の手紙は今日約200点ほど知られているが、その多くは妻妾に宛てたもので、中には「ゆるゆる抱き合って物語しよう」などと書いたものもあるという。

朝鮮の国使と会見の席に赤ん坊の鶴松を抱いて出て来たり、ルソンの使者として来たスペインの神父と会見した時、神父の縄のような帯の結んだあたりを手に取ってもてあそびながら会談して、使者を驚かせた話もある。

温かさにあふれてもいたようだ。愛妻おねが病気になれば、

秀吉の時代の奥出雲①・宮沢賢治誕生百年④・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

尼子氏	三沢氏	織田氏	豊臣氏	徳川氏
守護代→戦国大名	新浦地頭→小領主	守護代→戦国大名	農民→戦国大名	小領主→戦国大名
出雲（京極氏）	仁多郡三沢郷	尾張	尾張	三河
宇多源氏佐々木・京極氏系	清和源氏信濃小笠氏系	（下段に）	農民	豪族松平氏
①高久	⑤為忠（尾張守） 91 明徳の乱に山名方で討死	93 越前織田庄の荘官か神官		
④経久 86（文明16）富田から追われる	横田庄の三領家の代官 ⑨為在 84 尼子氏を追放			
急速に拡大、家臣の内容伴わず国内国人小領主掌握下手。衰退早い。 ⑥晴久 46（天文9）毛利攻め失敗 58（永禄1）石見銀山掌握 7か国大名に ⑦義久 富田落城	09 ⑩為忠（遠江守）藤が瀬城へ移る 51（天文10）尼子氏荘園の代官として家臣を横田へ 61 横田町作りへ 富田城おち、代官に復す ⑬為虎 上月城を攻める 91（天正19）安芸へ移住	①信正 33（天文2）美濃に築城 34 ③信長生れる 48 道三と和し娘を妻に 51 18才で後継 59 織田一族の統卒 60 今川義元を討つ 64 尾張統一 67 斉藤竜興を追い 73 室町幕府滅亡 76 安土城へ 天下統一へのり出す 82（天正10）本能寺にて自刀	①秀吉 37（天文6）中村に生れる 51 武家奉公を志遠江へ 54 清洲城織田に仕える 66 木曽川と長良川の墨股に砦をつくる 69 京都奉行となる 70 信長・家康連合軍浅井・朝倉を討つ 71 近江滋賀の陣で戦功あげる 74 筑前守に任官 長浜に城を城下町をつくる 77 中国平定のため京都を出陣 81 中国へふたたび出征 82 光秀を山崎に破る	⑧家康 42（天文11）岡崎城内で生れる 47 今川義元の人質となる 60 今川義元敗死で岡崎で自立 66 徳川姓となり三海守となる 69 遠江国を大略平定 72 家康 武田信玄に破れる 75 織田・徳川連合軍武田軍を敗る 82 連合軍に武田家滅ぶ 84 家康子を秀吉へ人質として送る
⑧勝久 78（天正6）上月城落ち 自刀				

宮沢賢治誕生百年④

詩集『春と修羅』第二集より

告別（作品第三八四番）

おまへのバスの三連音が
どんなぐあいに鳴つてゐたかを
おそらくおまへはわかつてゐまい
その純朴さ希みに充ちたたのしさは
ほとんどおれを草葉のやうに顫はせた
もしもおまへがそらの音の特性や
立派な無数の順列を
はつきり知つて自由にいつでも使へるならば
おまへは辛くてそしてかゞやく天の仕事もするだらう
けれどもいまごろちやうどおまへの年ごろで
泰西著明の楽人たちが
幼齢弦や鍵器をとつて
すでに一家をなしたがやうに
おまへはそのころ
この國にある皮革の鼓器と
竹でつくつた管（くわん）とをとつた
おまへの素質と力をもつてゐるものは
町と村との一萬人のなかになら
おそらく五人はあるだらう
それらのひとのどの人もまたどのひとも
五年のあひだにそれを大抵無くすのだ
生活のためにけづられたり
自分でそれをなくすのだ
すべての才や力といふものは
ひとにとゞまるものでない

	大内氏	毛利氏
成長	守護大名→戦国大名	小領主→戦国大名
発生	周防	安芸吉田
祖	朝鮮半島からの渡来人	学者大江広元
世紀 14	㉓弘幸㉔弘世 足利尊氏に功あり（周防・長門・石見） ㉕義弘 明徳の乱山名氏を討ち6カ国守護に	㊶① 時親 吉田の郡山城へ 南北朝時代
15	㉚義興	07 ⑫元就
16	07 ㉛義隆 25（大永5）全盛期7か国守護 日明貿易 学問・ザビエルに布教許可 51（天文20）陶晴賢に敗れ滅亡	23（大永3）27才で領主に 大内氏に従う 40（天文9）尼子を破る 55（弘治元）陶氏を自刃させ大名に 66（永禄9）富田城を陥落 70 10か国大名 71（元亀元）病死 ⑬輝元

斐の上川柳三月の句

住専を黄門さまはどうさばく　児玉哲呂
進路聞き頭お金が気にかかる　田中友樹絵
温泉もいいが負けない家の風呂　松浦亜以
卒園の曾孫がねだるランドセル　高木凡太
ねんごろに育てた子牛長野行き　足立玉恵
雪の下コタツで旅行の話だけ　渡部ミツコ
分別が自由にさせぬ泣き笑い　藤原千代子
日曜日あれもこれもが空回り　加納治江
年毎に飲み友達がうとくなる　石原冬明
犬のため自分のためかする散歩　横山まこと
洗濯機だけ働いてドラマ見る　児玉えみ
母の忌にそれぞれ老いた顔合せ　安部正子
降る雪は消える間もない奥出雲　真綿よし子
駒ひとつ動かすだけで七冠王　松浦久寿子
年老いて昔をたどる冬の日々　安部春恵
重箱の角をほじくる税矛盾　藤原のぼる
春節句いまだ我身は冬の顔　渡部かおり
誕生会年金来るまで日延べする　田中芳春

下剤の心配までし、戦死した部下の母を慰めるため自ら見舞いに訪れたり、蜂須賀小六や松下加兵ヱなど、かって恩を受けた人物には生涯意をつくした義理堅さがみられたという。

また播磨の豪族小寺官兵ヱ（黒田如水）は、織田につくか毛利に味方するか、去就に迷っていたが、秀吉に「お前のことは弟のように思っている」などといわれてすっかり参ってしまっている。孫娘のように若い側室達も、秀吉にかかれば、無条件降伏だったという。道で行きあった

云はなかつたが
おれは四月はもう學校に居ないのだ
恐らく暗いけはしいみちをあるくだらう
そのあとでおまへはいまのちからにぶり
きれいな音が正しい調子とその明るさを失つて
ふたたび回復できないならば
おれはおまへをもう見ない
なぜならおれは
すこしぐらゐの仕事ができて
そいつに腰をかけてるやうな
そんな多数をいちばんいやにおもふのだ
もしもおまへが
よくきいてくれ
ひとりのやさしい娘をおもうやうになるそのとき
おまへに無数の影と光の像があらはれる
おまへはそれを音にするのだ
みんなが町で暮したり一日あそんでゐるときに
おまへはひとりであの石原の草を刈る
そのさびしさでおまへは音をつくるのだ
多くの侮辱や窮乏のそれらを噛んで歌ふのだ
もしも楽器がなかつたら
いゝかおまへはおれの弟子なのだ
ちからのかぎりそらいっぱいの光でできた
パイプオルガンを弾くがいゝ

数千という賢治の詩の中で、最も評価の高いものが『春と修羅』の第一・二・三集という。私にとっては難解なものが極めて多い。それは磨かれるのを待っている宝石の原石といわれるが、ここにあげた「告別」は賢治の詩にしては、仏教用語も少なく科学用語を駆使してない珍らしく、平明な言葉で書かれている。読めば意味も明らかで、調子が整えられ音楽的であるのでここに掲載した。

前号訂正　4頁　4段　11行　誓願・全12行　「ヒデリノトキ

裸木は生命育まむ　簸の上短歌会

大学の合格知らす孫の電話に称えながらも苦言忘れず　岡田時子
宮の谷の圃場整備に消えてゆく猫柳は春の風に揺れをり　〃
図らざるどか雪うけて傷みたる黒大豆の粒ていねいに選る　常盤はるまさ
今日も雪けふも寒しと書くほかは何もなくひと日は長く短かし　〃
吹雪く日の峠を一つ越して来る若き豆腐売りを門に出て待つ　野村節子
水ややに温める小川の水底に流れに逆らひ動く魚見ゆ　〃
裸木は生命育まむ枝々はかたきふくらみ見せて踏張る　永井弥生
クラス会の欠席理由に家族三人の加齢は二百五拾と書きぬ　〃
雪晴れし北岳山に山鳩はこもれる如くひねもす鳴けり　安部夕波

柴栗句会三月抄

雨の日は雨愛しむ老の春　淺野としお
木の芽張る枝に忘れし鴫の贄　糸原古志
啓蟄や練り歯磨きをひねり出す　恩田和美
薄ら日の当るそこだけ水仙花　加納信子
愛しさを誰はばからぬ猫の恋　楠房子
吾れと生きし雛天神に寄す想い　高木白虹
春はまだ何処の空か来ては引き　中澤美紀子
躓づいて心の支え探す春　錦織富江
峡の故里木の芽の風はまだ固し　新出谷一華
狭庭にも芽ぶくものありふり返る　峯石美代子
みどりごの仕種を愛でつつ若き妻　渡部夕峰

た町人や農民らにも馬上から気楽に声をかける男であったから、誰も彼も秀吉に接したものは、その魅力にひかれ、水火の中に飛び込むことを厭わぬ気持にさせられてしまう。

信長は従来のしきたりや権威に反発する不行跡面があるといわれるが、合理主義者でしかもたぐいまれな決断・実行力の持主であったあらわれとする研究者がほとんどである。その具体例は紙数が尽きたので省略するが、テレビ日曜日ドラマでも、それが十分演出されている。

家康は器用人、地味で堅実な行動、浪費をしない倹約ぶりは「たぬき爺ちい」と呼ばれる所以であるか、多趣味であって鷹狩をはじめ、能・茶湯・立花・香・囲碁も得意であった。勿論剣術・馬術・射撃・水泳にも巧みで、70才を過ぎても鍛練を怠らなかったという。

「織田がこね羽柴がつきし天下餅　寝ているままで喰うが徳川」

という狂歌もある。

（桑田忠親・石井進・永原慶二の著書のお世話になった）横田史談会　高橋一郎

この詩は、農村の窮状を見るにつけ、農学校教師の職にいたたまれず、辞職して自分も農民の一人として生きようと決心した賢治が、教え子の一人で、音楽の天分に恵まれた少年に向かって語りかける形で作られた作品という。

弟清六の回想を読むと、詩を書き出すきっかけは、イギリス盤のヴェートーヴェンの「運命」を聴いたことからという。賢治にとって音楽は重要であった。〈辛くそしてかゞやく天の仕事〉といっていて、すぐれた音楽には心をいやし浄化し、新しいものを生み出す力があるとしていた。教師をやめて農民の中へ入って行こうとする時の賢治の構想の中で、音楽は一つの確固とした位地を占めていたとされている。

この少年にはモデルがあったという。花巻農学校の一年だった生徒で、農業実習の時、回っている水車を見て、何気なく即興の旋律（メロディー）を口ずさんだり、別の実習の時に、ふざけて当地方の民族芸能の鹿踊り（筆者も20数年前秋日和の下でしばらく見とれたことがある）の太鼓打ちの真似をしたのを賢治は見かけ耳にとめて、少年の内にひそむ音楽的天分をみてとって、その後いきなり少年に聴かせたのが、ヴェートーヴェンの第五交響曲「運命」の第一楽章だった。少年の受けた衝撃と感動をじっと見た賢治は、この少年の音楽的天分を高く買い、賢治がなくなるまで続いた。賢治が上京の時（大正15年12月）花巻駅に見送りに来た少年に、「チェロを持って上京する。真剣にやる。君はヴァイオリンを勉強してくれ」と言ったという。愛蔵のヴェートーヴェンのレコードも数枚贈ったという。生前この詩は少年に見せていない。弟子への語りかけの形をとりながら自分自身に向けたものだった。（少年は県内の小中学校の教師を勤めた）詩の中で「素質と力」の難しさを語り、さりげなく別れを告げている。〈すこしぐらいの仕事ができて／そいつに腰をかけてるやうな〉多数のものに向けられた厳しい視線。後半で〈ひとりのやさしい娘をおもふやうになる〉想う淋しさや悲しみが芸術のエネルギー源ともいっている。こうして退職し農民の友となった。最終行は〈そらいっぱいの／光でできたパイプオルガン〉と心を宇宙へと広げている。（諸氏の手引に感謝　蓬頭子）

会員頒布一部百七十五円／〒九一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第253号（5月号）
1996.5.2（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治維新以降の奥出雲における
銑生産の系譜⑭

「溶鉄高炉建築費概表」
「溶鉱炉建築諸費積」明治九年

——様式銑鉄生産の研究（その二）

長サ七尺八寸七歩

二、溶鉄高炉建築費概表

これにも製作年がないが、賃金が円銭となった明治五年（一八七二）から同七年ころのものと見られる。これの要点を作図と数字で略述する。明治八年外国製蒸気機関による送風で、鉄鉱石・木炭で高炉・錬鉄炉等による銑鋼一貫工場として設置された、群馬県中小坂製鉄所に類似するかとも思われる。

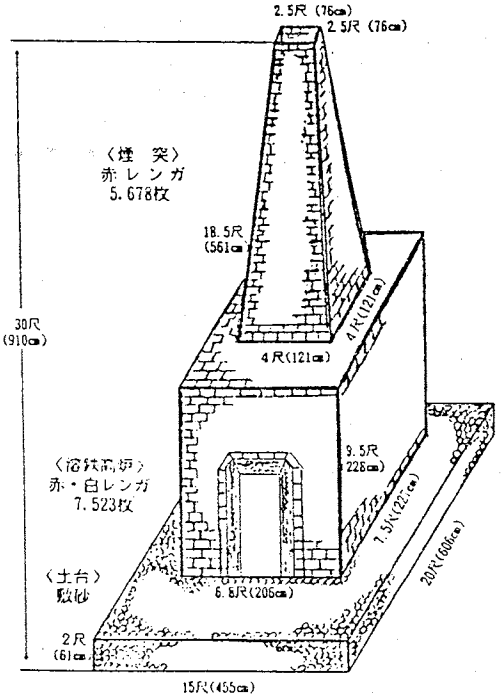
・高炉・煙突・敷石（左図の如く）
・扇風器一、・水車（廻り二丈四尺）
・ピュドレ炉
　高サ七尺
　煉瓦白一、四三五枚
　赤一、七四五枚
　ルストル一四本
　巾　三尺八寸五分　など
・ダ　ン　炉　煉瓦白一、二三五枚、赤　六九五枚
　高サ五尺二寸
　長サ五尺六寸五分
　他鉄棒一四本
　　鋳鉄棒一二本など
　巾　四尺三寸六分
・職場　四間に一〇間
　二階三間四方（木炭砂鉄置場）
・職人　一日二交代、二四時間勤務
　高炉係　四人
　ピュドレ炉係八人
　ダンロ　八人
　鍛　方　一六人
　小廻人夫　二人

・総工費
　三九三円五十七銭五厘
（筆者注　扇風器一、鉄棒一三本の価格と運賃未定。職場建築材料と石材は自前のためか記入なし）

・砂鉄溶解鉄鋼製造見込　一日分

・砂鉄	7.298トン
歩留り	5歩5厘
・銑鉄	4.0146
内鍛鋼	2.400
錬鋼	1.6146
・同上収入	147.09円
・原料・人件費等	37.78
・差引利益	109.31

（筆者の計算で斤をトンに、1トン価格36円75銭、中小坂製鉄所では18円05銭）



・溶鉱炉　煉瓦石（外中内）五、二四六
　敷石　二間四方高サ三尺

・水車八尺、風車・水箱・ポンプ
・培炎炉（砂鉄焼釜）、釜屋三間に五間
・総工費　二四六円八七銭

（筆者注、二、の建築費概表と比べると　溶鉱炉・水車・培炎炉のみ。物価単価・賃金単価は五倍である。材木・石等は自前である。従って、上図より規模の小さい、のちの角炉にあたるものであろうか。寸法・数量の記載なく描画できず）

—（財）糸原記念館の御協力を謝す—

三、溶鉱炉建築諸費積　明治九年

糸原権造の選んだ道

以上三種類の在来の近世企業たちにかわる銑生産法—西欧の近代製鉄の高炉をとり入れた——に転換して、低温還元による低生産性（砂鉄使用量の70％前後を鉄滓として廃棄する）から脱して、新しい時代に対処しようと糸原権造は志したものであろう。

先に述べたように、安政元年1856薩摩がこの三種類の第一の高炉（ヒュゲーニン式）に先鞭をつけ、安政4年には東北南部藩の大島高任（たかとう）が、釜石市近くで附近の鉄鉱石を用いて、同じくヒュゲーニンの溶鉱炉（高炉）によって銑生産の成功をなしとげた。

しかし糸原家をはじめ奥出雲の鉄師の置かれた農村社会環境と、そこに於ける地位は、248号の「糸原権造」で述べたように、その家業経営は、個人の恣意によって容易に変えられるものでなく、150年余にわたる農鉱一体の農村地域社会の領主的存在であったから、研究し検討した結果選んだ道

は、在来の企業たたら製鉄業の経営改善と、本来の農村の基盤産業である農業の改良との二本建の推進であった。先に述べたように農業振興は見事に結実して行った。（詳細は本誌58～62号の「仁多郡農談会」に）

近代製鉄業の初期の低迷

ここでしばらく大橋周治著『幕末明治製鉄論』の「民営製鉄の可能性と限界」の要点を引用させて頂く。

明治初年に民間資本による近代製鉄業が成立する可能性が全くなかったわけではないが、戊辰戦争、明治2年の凶作、その他の悪条件が重なって、いずれも著しい経営難におちいっていた。そして東北釜石鉱山を中心とする製鉄業は、維新政府の派閥抗争もからんで、民間資本による製鉄近代化の一つの可能性は失われた。民間資本による製鉄近代化の実際の試みは、官業の釜石製鉄所の創設以前に群馬県西部の中小坂製鉄所にみられる。ここの高炉は本号に紹介した絲原家文書の第二のものの、これよりや規模の大きいものである。若干小さくして絲原家は独力で計画しようとしたのか（当時は全国的に新企業はこの傾向が多かった）、あるいは奥出雲の鉄師に呼びかけ、民間資本による事業としての構想であったのか、絲原家の文書の中や書簡の中をみても明らかに出来ないが、結果としては実現に至っていない。

中小坂製鉄所

特色を拾いあげると

① 最初の蒸気機関、しかも熱風送風による洋式の木炭高炉で、わが国では本格的の機械制製鉄所の設備を輸入して、新設された唯一最大の近代製鉄所であった（官業釜石製鉄所の操業開始4年前）。

② 高炉のみでなく、錬鉄炉（パッドル炉）・鍛鉄・銑鉄鋳造設備をもつ、小規模な銑鋼一貫の作業形態をもっていた。パッドル炉の完全操業による錬鉄生産も、わが国では最初にして唯一のものであった。

絲原家の前掲第二の計画書は、これより規模は若干小さいが同様のものであり、その規模での生産高の試算まで行っているところをみると、相当の計画実現へ踏みこんでいたものと見える。

③ 今までの設備機械はオランダを経由して入っていたが、ここのものは「英式」で、ほとんど輸入にたよったものであった。絲原家の操業試算の数字を中小坂と比べてみると、土地・砂鉄・建物資材等はすべて自前のものを提供しているから、建設費は極めて少ない。

中小坂製鉄所は工場の近くの鉱脈が断えたので、多大の費用をかけて新鉱脈発見のために試掘を行ったが、折から西南戦役が起こって、予期した政府資金の供与が得られなかったため、廃業して政府に買収・移管を申し出た。

そして明治10年には鉄鋼輸入量は、国内生産に倍する程になって、しかも外国銑鉄のダンピング攻撃にあって、永く耐えることは困難であった。当奥出雲の近世企業たたらもその影響をうけて、経営困難となり、当地方の全村長は農村救済のため、製鉄業への官からの救済を嘆願し繰り返す状態であった。

このように民間の近代的製鉄業の形成を、明治10～20年代を通じて困難にした。釜石製鉄所

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

宮沢賢治誕生百年⑤
羅須地人協会

岩手県花巻市の花巻農業高等学校（賢治が盛岡高等農林学校を卒業し、学校に残ることを断わって教鞭をとった、花巻農学校の後身）を訪れると、敷地内に羅須地人協会の復元建物があって、表の黒板には賢治の筆跡を模した、「下ノ畑ニ居リマス」の文字が書かれている。大正15年1926（30才）に農学校を退職後、ここで独居自炊し農耕生活を始めた家で、もとは市内の桜町にあった。その跡には当時をしのばせる手水鉢や賢治が自ら耕した田圃などが残され、「雨ニモマケズ」の詩碑も建てられている。この建物は明治45年賢治の祖父喜助が建造したものという。

賢治は一時人造宝石業を考えたが、農学校教師となり貧しい農村に触れた。やがて退職して協会をひらき農民の中に入ることになった。はじめは東北砕石工場の技師となり、やがて開墾に従い野菜や花を作り、ここでの集会で土壌学や植物学、肥料学、地人芸術概論やエスペラントなどを講じた。肥料設計・農事相談・講演に歩き、約3年間独居自炊生活を続けた。農民劇や農民音楽の創設をもくろみ、レコード・コンサートや音楽合奏もした。詩や童話や農民芸術概論綱要を書き、新たな時代・田圃の未来を構想した。農業と農村に科学と芸術を生かした新興文化を目ざしたのであって、農民教育に肥料設計に稲作指導に力を尽くして燃えつき逝ったのである。

「農業に従うものにも、もっと明るい、強い、正しい、生き甲斐のある生活を見出そう。自分も地人の一人となり、地人は地人としての新しき世界を創造する」という実理想を実行しようとしたものと、賢治の没後間もなくその友人が出した伝記に記している。「羅須」の語義について、賢治自身「何の意義もない」と語ったというが、命名考は各種多様で20数人の人々が発表している。

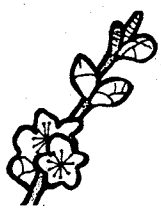
敗戦後すぐ職業はもつがどう生きるかと悩むものが寄合って20名を越えて不定期に集まっていたが、勤めの関係で土曜日が多

も第一次、第二次操業を通しても軌道に乗らず、16年には廃業になった。中小坂はこのころ官業経営となったが間もなく廃業し、明治17年後は何人かの経営者が交代したが、明治40年末まで断続的に操業し、外国人技術者を導入しながらも充分な成果もおさめずに終った。

こうした情勢をみると、絲原権造が選択した道は賢明であったとみることができる。明治15年1879はわが国の鉄の総生産額の89.7％を中国地方がしめ、島根県は52.4％（6,368トン）を産出している。奥出雲の4鉄師が主力であった。

この時の釜石の占める割合は3.7％に過ぎなかった。

しかし明治社会全般の近代化は、鉄の需要増と多様化をもたらし、奥出雲にも再び新しい波が押し寄せて来て、鉄師は銑生産の工夫に力を注ぐことになる。



秀吉の時代の奥出雲②

——挿話1　奥出雲に関係ある人々

4月21日のNHKテレビの「秀吉」は、天正2年1574の時代までを放映した。当地方に関係のある登場した人物をあげると、

森蘭丸　信長に仕えた。のち本能寺の変で信長に殉じ自刃する。この係累は美作の津山藩主となり、子孫は伯耆国に在住。

堀尾茂助　永禄2年1559、16才で秀吉に仕える。のちの堀尾吉晴である。徳川幕府となると、出雲・隠岐両国の初代藩主となる。城を広瀬の月山から松江の亀田山に移す。現在の松江城。出雲廻国の折り、安部源太左ヱ門の案内で藤ヶ瀬城に登り、夜は五反田屋（現富田屋）に泊まる。3代で子なく断絶。

安国寺恵瓊（えけい）　備中高松城水攻めで毛利輝元の信任を得、大名となる。のち三沢為虎、三沢の蔭涼寺とのかかわりもある。

柴栗句会四月抄

大水車日ねもす廻し燕子巣立つ　浅野　としお
長かりし昭和を憶ふみどりの日　糸原　古志
懶（だ）るそうに落ち行く点滴暮れかぬる　恩田　和美
春のどか犬の欠伸を貰いけり　加納　信子
子の巣立ち遠き日の想ひ我れ老いし　楠　房子
白墨の文字もそのまま巡る春（二十四の瞳校舎）　高木　白虹
鐘楼のかすかに眠く花曇り　中澤　美紀子
掌にもちし物探しおり四月馬鹿　錦織　富江
道草の下校の兒等へ散る桜　新出谷　一華
乳飲み兒を抱いて春日と遊びおり　峯石　美代子
初音聞き切り株に座す山日和　渡部　夕峰

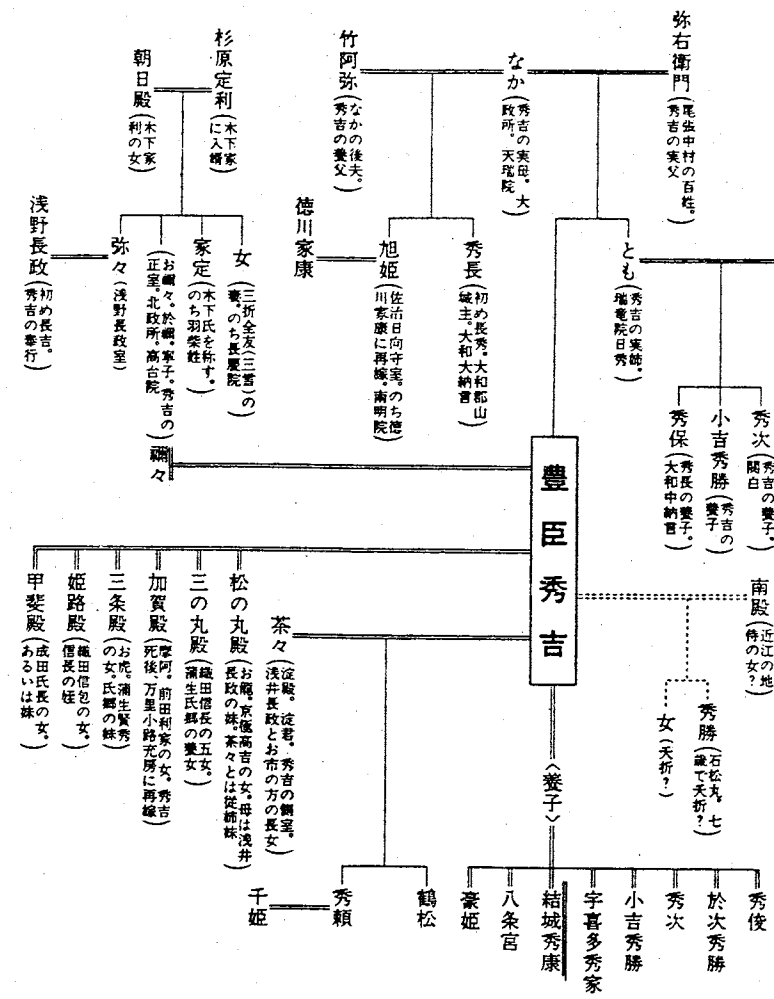
かったので土曜会と名付けた。（キリスト教会で文化活動の感化をうけた種蒔く人々が中心。教会は横田町大火から昭和52年11月まで郵便局に転用）まずお互いが所蔵する本を持出して筆者宅の玄関の隅の本箱に収納し土曜会文庫と名づけ、会員に自由に貸出した。集まると読後感の話が夢を混えて多かった。そして松江方面から時には中央から来町される方をとらまえて座談会も開催し、町角に案内のポスターも貼った。秋の文化祭には「耳で聴く総合雑誌」奥出雲と銘打って、紙不足時代、小学校の講堂で段上に本人や選者が登場し、意見発表・俳句・川柳・短歌の発表・歌曲の発表・座談会も行った。

一方手に入り難い「世界」「改造」などの総合雑誌、「群像」「展望」などを共同購入して回覧をした。戦時中小さい殻に立てこもったからと、文庫本の世界史の輪読も加えて、口角泡をとばしたものだった。会場は組合立青年学校のち中学校（今の横田大劇）の宿直室や裁縫室を借りた。今もある屋内の土間を利用して、レコード・コンサートを続けた。多い時は50人を越えることもあった。そして12年余り、いずれの会も150回を越えたが、書物の普及、ラジオの普及・映画の常設館の出現で先細って行った。他に洋画の鑑賞会、青年男女のまた一般の合唱団も当初から並行して盛んで、音楽協会がもとじめで音楽会は多い時には年三回も開催された。それに島根大学のオーケストラ、吹奏楽、合唱も毎年秋には参加が恒例となり、小中高の合唱団、中高の吹奏楽も加わっていった。一方青年団の演劇活動も盛んで、昭和二十一年からの文化祭は探美会（書画展・茶道）も加わって、県内でも珍しい存在だった。昭和22年には「横田町文化祭のうた」も会員の手で生まれ、今も歌われ50年の愛唱が続いている。

ふりかえってみると、宮沢賢治の生んだ道—まことに次元が低く、生産性はないが—を追いかけていたとの感も深い。ただ農村の余暇を楽しみ、何かを模索して、ひたむきであったことは、宮沢賢治の羅須地人協会にはひけをとらないものであったと思うし、今もこの地に生きている。再び賢治の地を訪れたい。（蓮頭子）

前号訂正　2頁年表―尼子・織田両氏の下の行　自刃・4頁3段19行　所以であるが・仝4・5段　ベートーヴェン（2か所）

豊臣秀吉をめぐる家族構成



①ＮＨＫテレビを見るのに混乱する秀吉の妻妾と子の一覧系図

禰々（ねね）　正室
茶々（ちゃちゃ）　側室

②秀吉の養子結城秀康について

秀康は徳川家康の子で秀吉の養子となり、のち越前藩主結城晴朝の養子となり結城姓をつぐ。その第3子が直政で、14才の初陣を大阪冬の陣で軍功をあげ、越前大野城・信濃の松本城の城主を経て、出雲松江藩主京極家断絶のあとをついで、出雲・隠岐の藩主となる。松江藩主松平家初代・松平直政である。したがって直政は家康の孫である。

斐の上川柳四月の句

世を去ればいいことばかり噂する　渡部ミツコ
ほろほろと誘う春日の旅プラン　真綿よし子
米寿越し強がり言わぬことに決め　石原冬明
都市計画進めば困る事ばかり　横山まこと
うぐいすは鳴いても梅はまだかたい　足立玉恵
住専に借りて返さぬことを知り　児玉えみ
大正も次第に頑固に明治似る　松浦久寿子
雪が消え草と戦争春一番　安部正子
ファックスで笑いが届く孫だより　田中有樹絵
みそ汁に春の香りを蕗のとう　安部春恵
花冷えと言うが積雪戻り寒　藤原のぼる
仏壇に今日も感謝の声ちょっと　児玉哲呂
甲子園の孫に届けと声涸らし　松浦亜以
先生と間違えられて慕われて（小豆島）　高木凡太
五十肩春の日和りもこもりがち　藤原千代子
折り込みのバーゲンチラシにまるをつけ　加納治江
思い出をつくる未来に職が無し　田中芳春

早春の夢　簸の上短歌会

寒椿の色さえざえと元朝を先づみ佛に茶湯を捧ぐ　永井弥生
老杉に新年の光さんさんと鎮守の階つつしみのぼる　仝
わが一世この谷守り子も孫も野花摘みつつ小鳥も呼びし　岡田時子
春立てばこの谷圃場に決まりしと集落の老の肩威嚇めく　仝
冬支度出来ざるままにこの雪と会ふ人毎にこぼす年の瀬　野村節子
思ふ事の半分も出来ぬと喜寿となる夫はつぶやく雪降る師走　仝
藤村の詩に魅せられて三たび来し伊良湖岬の灯台白し　安部夕波
黒潮の流るる海や早春の夢呼ぶ伊良湖は菜の花ゆるる　仝
椰子の実の詩碑を訪ねて歩み来し恋路ヶ浜の松林の丘　仝

会員頒布一部百七十五円／六九―八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江〇一四〇〇―八―六〇一）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

贈呈

奥出雲

題字　糸原風亭書
第254号(増刊号)
1996.5.4(M129.T82.S71)
奥出雲編集集団
横田史談会

©

鉄の来た道

——トルコから日本への軌跡

窪田蔵郎

（第14回横田たたら研究会講演の集録）

本日のテーマのシルクロードですが、イラクとアフガニスタンは湾岸戦争の後遺症でまだ行っておりませんし、他の国々にしましても、点と点を結んだようなお粗末な旅なのです。また、このテーマの話は『シルクロード鉄物語』として、昨年七月に雄山閣出版より出ましたので、本日はその概要と、書かなかったようなお話を若干いたしまして、責を果たしたいと思っております。

話の順序といたしまして、日本でよく「製鉄技術の発祥地」といわれておりますトルコから始めまして、東へ東へと日本に戻るように運ばせて頂きます。

1 鉄文化発祥の地はどこか

よく世界で最初に鉄を造ったのは、トルコにいたヒッタイト人だと言われております。これは一体どういう経緯で、そう言われるようになったのでしょうか。この点につきましては2つ程理由があります。それは紀元前3000年紀の中末期の遺跡から発見されました鉄製品で最も立派なものが、中央トルコのアラジャホユクと言う大遺跡から出ていることが1つです。ここにあります13王墓のK号墳という、紀元前2300百年頃のルウイ族とされているお墓の中から、(もう少し下るのではないかという話もありますが)黄金で飾られました豪華な鉄製の短剣が発見され、またその前後の地層で鉄製品数点が見つかりました。50年程前にこれらの一部をハミット・ズーベア・コーセイ博士が化学分析をしましたところ、ニッケルが3～4%検出されまして、そのためこれは流れ星の隕鉄で造ったものと言うことになりました。

もう1つの理由は、かつてカイセリや、イスタンブールの古物商に、鶏の足跡のような古代の楔型文字といわれる文字で書かれた粘土板が多量に出廻り、その流出先がカネシュ＝キュルテペの村にあるこの遺跡と判りまして、回収される一方で判読の作業がされたのですが、その中にアムートウと書かれたものが何枚かありました。古代言語学者の研究結果から、これが「天の金属・神の金属さらに具体的には、服飾用に使われた鉄と推定される金属」ということになりまして、他の金属はそれぞれ金とか銀とか固有の名称があるところから、これは鉄を意味しているものと推定されました。ただ、最も具体的に書かれていました1枚が、ドイツの調査隊が本国に持ち帰りまして、ベルリンの博物館に保存してあったものですから、戦災で灰燼に帰してしまったものと思われます。これには金の5倍・銀の40倍の価値のあることが書かれていました。

私は何とかその現物を見たいと思いまして、トルコ文化観光省の次官に直接会って話しましたら「良いですよ。探して見て下さい」とのことでした。しかし簡単にそう言われましても、あの鶏の足跡みたいな字が私のようなものに読めるはずはありません。しかし運良くイスタンブールで開催されておりました、大ヒッタイト展の会場で、古アツシリア語の鉄＝アムートウ・金の5倍と言う文字と、アリンナの鍛冶神という言葉が、傍の小さなラベルに英語で書いてあるのを見つけました。

しかし考えてみますと、鉄は原始的にしましても技術が判りますと、銅よりも資源がずっと多く、添加物は希少金属なので値段が高いですから、当然それに代わるものとして量産へと進みます。原始国家の成立期にこれ程武器の調達に都合の良い金属はありません。したがいまして、人間が鉄を造ることを知った時期に入っていたとしましたらですね、余りにもこれは過大な評価に過ぎると思います。

また鉄を造れなかった時代、あるいは過度期としますと、隕鉄なら空から落ちて来たものですから、希少性がありその位の値段は当然つけられたことでしょう。何故かと申しますと、隕鉄は他の天体から大空を流れてくるまでに、超緩冷の状態におかれ、また大気圏で高温に晒され、そうしてそれが冷える時に、鉄分とニッケル分では固まる速さが違いますので、ウイドマンステッテンと申します、格子状の模様を造ってしまいます。従って初めはこれを研磨しまして、宝石の代わりにブローチやボタンにして珍重されていたのだと思います。

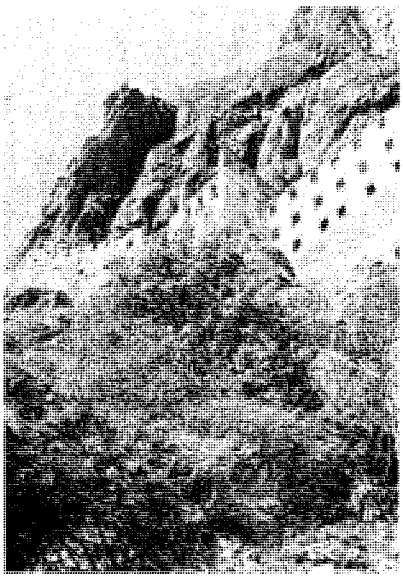
それでは何時、誰がこの辺りで人工の鉄を造り始めたかと申しますと、その点については面白い文献1冊が残っております。それは紀元前ちょっとの頃、ギリシャのアリストテレス系の学者が編集したもので、偽アリストテレスの『異聞集』といわれている本です。

大部分の皆様はご承知でしょうが、この本の第48項に「カリブスとアミソスの鉄の製法は極めて独特であり、河川で運ばれてきた砂から採れる。ある人はこれを洗って炉で溶かすといい。また別の人は再三洗ってから熱し、この地方でピリマコスと呼ばれている石を添加する。こうして造られた鉄はどんな鉄よりも上質のものになる。錆び難いが、沢山は生産されないものである。」とまあこんな風に書いております。古代製鉄の学会でもこの解釈を廻りまして、先生方の間でいろいろと論議がされております。私はもちろんこんな難解な古代ギリシャ語など判りませんので、余り学問らしくありませんが、それより百聞は一見にしかずと、磁石をもって彼らが住んでいたと目されております、東北トルコの地を歩き廻ったわけなのです。

このカリブスという民族は『アナバシス』というギリシャの紀元前四〇〇年頃の本で見ましたら、トラブゾン市の南方、エルズルム市の北側辺りに住んでいたことが判りました。この本はペルシャ王アルタ・クセルクセス2世の弟のキュロス副王が反乱を起したとき、アテネの歴史家クセノフォンという人が、傭兵となって外人部隊で従軍し、実際にトルコを一周して彼等に遭遇したことを記している日誌なのです。その頃既に製鉄専業の人々だったと書いてあります。

ベックの「鉄の歴史」に書かれているように、クルド人などがこの山は全部鉄デミールですなどと言ったのは、外人に対する迎合で全くの間違いでしたが、琵琶湖の五倍もありますバン湖の北側で、大量に良質の湖岸砂鉄を見ましたし、ロシアのアルメニア共和国との境にあるアニの遺跡でも見ました。ドウバヤジットの町外れでは、皆様御承知のアララット山の麓で、クルド人の反乱で戦車が出動している間を縫って歩き廻り、豊富な砂鉄含有土砂を見つけ、また鉄糞らしいものも一握り採集しました。これらがウラルトウ王国などで鉄源として使われていたのかも知れませんですね。

しかも、カリブス族の造った鉄の原料と考えられますものを、運良くトラブゾン市の南30㎞にあります。スメラ修道院の近くで発見することができました。採集しましたのは山中でしたが、200mと離れていない処に幅が20m位の川が北へ向かって流れておりました。ここに持ってきておりますが磁鉄鉱の顆粒状のものと砂鉄の混じったものです。恐らくこの川底に沈澱している砂を採集すれば、先程申しましたように、多分この鉄源を採集したときの水洗の廃砂。またはコンマゲネ王国、アンティオコス王の遺跡のネムルート山などは全山石灰岩ですし、他にも随所に石灰岩の山がありまして、大理石の産出も見られましたから、そのような石灰岩のことではないかと思います。



東トルコのスメラ修道院
写真下部の辺りで鉄源を採集

ポーランドのピアスコウスキー博士のように、硫砒ニッケル鉱を添加したとの学説もありますが、その産出については聞くことができませんでした。それから燃料の薪や炭は、この辺りはトルコで最も雨量が多く樹木があり十分供給できたでしょう。

このカリブス族は粘土板では、既に紀元前13～14世紀には現れていると言われておりますので、僻遠の地の少数異民族のことでもあり、少し遡らせて考えれば、初めて人工で鉄を造った人達の1グループと言えるかも知れません。

こんなに乏しい貴重な鉄ですからこそ、アッシリアのⅡ特に紀元前750年頃のサルゴン二世王など、喉から手が出るほど獲得したくて、ウラルトウやもっと西側のタバルという旧ヒッタイトの東半分辺りまで、侵入をくり返していたのではないでしょうか。

まぁーこう見てきますと、最初に申しましたヒッタイトの製鉄は、ヒッタイト人が直接造っていたのでは無くて、隷属したハッテイとかプロトヒッタイトなどの辺境に住んでいた従属民族に造らせていて、それを武力で独占していたことが想像できます。アダナではウーリアンと呼んでいましたから、ウラルトウ方面ではミタンニに従属したフルリ人とも思われます。

また鉄の産出を示した粘土板文書に、ヒッタイトの首都のボアズキョイ遺跡から出土したものがあります。これは外国の王から鉄剣の贈与を求められたの

に対して、ヒッタイト王が「今は鉄バルジルᵘ（この場合はアッカド語で書いてあった）を造るのに良い時期ではない、キズワトナの倉庫にもない、後日送ります。」と婉曲に断わっている文書なのですが、この文面からは、明らかに人工の鉄の時代になっていることが窺えます。

重要なのは年代を決定する関係人物なのですが、発見当初はヒッタイトの紀元前1300年頃のハットゥシリシュ3世（BC1298～1266）から、エジプトのラメス2世（BC1290～1224）宛と推定され、その後に発信者は同じなのですが、受信者はアッシリア王と考えられるようになりました。現在はこの方が主流になっているようです。欧米などの学者の研究成果なのでしょうが、私にはどうも剽悍なミタンニを亡ぼし（BC1270）、バビロンを征服した（BC1290）アッシリアが、おとなしく手紙で頼んできて、少し斜陽化しはじめたとはいえ爛熟期のヒッタイトから断わられて、ハイそうですかと納得しただろうかと思うのです。余り学問的な考え方ではありませんが、ウラルトゥの東の方で、一寸と略奪をやればですね、刀の二振や三振何とでもなるのではないかと、ロマンなのですが勝手にそんな風に考えております。

このボアズキョイでは、鉄の出土品は極めて少ないと言われておりますが、粘土板文書のように鉄板に文字を書いたものも出土しております。また1910年頃にこの地を調査しましたドイツの考古学者のウインクラーという人が、詳細は不明ですが鉄で造ったものの残骸を発見したとも報告しています。ですから確かに鉄器文化を独占した帝国だったわけです。

ここに調査に参りまして、広大な遺跡の城壁の傍で、ふと風にそよぐ草を見て私は唖然としてしまいました。その雑草は極く小さな紫の花をつけていましたが、葉の形が何とヒッタイト戦士の亡霊でも現れたように、甲冑をつけた兵士の形をしていたのです。ちょうど壇の浦の平家蟹のようにですね。

なおこのヒッタイト帝国は紀元前12～11世紀に海の民とよばれる蛮族によって亡ぼされたといわれ、鉄の文化や技術はこれを境に独占が破れ、東西に流出伝播したと言われております。この蛮族は海から攻め込んでおり、エジプトも攻撃していますので、おそらくギリシャ系の多島海域の民族ドーリア人とかアケーア人など、いわゆる新興ペリシテ人達の集団でしょう。とすればこの辺りにも継続的に初期鉄器文化は根づいていたはずです。またシリアのマリ遺跡（ユーフラテスの中流ですが）では出土した紀元前15世紀頃の粘土板文書に、既に鉄製の指輪、腕輪、その他の装身具、さらに短剣や槍先などを記載してあったとされています。

[11] ペルシャの鉄文化

最初にお断りいたしましたように、イラクには湾岸戦争の影響で行かれませんでしたので、ペルシャについては主としてイラン側からの話になってしまいます。

東洋史に大きく栄光の歴史を占めているペルシャなのですから、鉄器の文化もさぞ突出したものを持っているはずと、まずテヘランの国立歴史博物館に参りました。ここにはイランの著名な遺跡から出土した鉄製品が展示されておりました。

主としてイラン西部のザクロス山脈中央部のルリスタン地方の出土品をはじめ、シャミ神殿遺跡、それに続いて後にお話いたします。ペルセポリス遺跡のものなどがありました。

展示品には短剣と鉄鏃が多く、ルリスタンのものには紀元前8～7世紀に遡ったもので束頭の飾りの部分などには、青銅板や青銅釘が用いられており、鞘は革か木で造ったものとみえて腐敗したらしく、錆びて幾分細くなった鉄の剣身部分だけでした。青銅の部分は金を貼るかメッキがしてあったかも知れませんが、その痕跡はハゲてしまったのでしょう、見当りませんでした。また同じ年代頃の鉄を鍛造鍛接して造った、馬の轡がありました。この頃ではまだ青銅製のものが主流だったようです。当時としたら珍品だったのかも知れませんね。

また王か将軍が戦闘のときに指揮用に使ったものではないかと思われる、紀元前14～10世紀にも遡る闘斧がありました。刃の部分が鍛鉄製、柄をすげる袋の部分は青銅鋳造で動物の飾りがついたもので、前10世紀としても、ルリスタン文化の終り頃ですから随分古いものです。反対に幾らか新しいものとしては、パルティア時代のシャミ神殿遺跡から発見されました、青銅鋳造の獣脚の破損したものがありました。これは鋳造するときに、芯に鉄棒を入れて造ったもののようで、芯金の鉄が折損した部分に見えておりました。

北側のエルヴルス山脈の西端部にありますデーラマン遺跡も、初期鉄器時代の製品を出土したことで知られていますので、ガレクテイ、ハッサニマハレなどの物を期待していたのです。とくにウルミア湖の南部にあるハサンルはコルサバード東170kmの場所にあり、ここで出土の鉄器は半分は槍先と鉄鏃ですが総計二千点に達しているとのことなので、せめて鉄鏃位程度は見られるかと思ったのですが、これも収蔵はされているのでしょうが、同館の展示では見られませんでした。

さて、テヘランから航空機で一時間三十分、南部のケルマーンへ飛び、ルート砂漠の南口＝

粘土だけで造られた城や民家の密集するバムの集落を見て、ナイチンゲールの生れた町シラーズへと入りました。ここは前述しましたウルミア湖の方から、騎馬民族の形でイラン人がザクロス山脈を南下してきて、紀元前七世紀の初め頃から定住をし始めています。しかしまだ纏まった勢力ではなくて、エラムやメディアの属領状態でした。名実ともにペルシャを建国させたのはメデア王国を亡したキュロス2世王でして、紀元前五五〇年のことなのです。

周知のペルセポリスはこのシラーズの町から60㎞、イラン人はここのことをタフテ・ジャムシードと呼んでいます。ダレイオス1世、クセルクセス1世の命によって、紀元前500年頃に着工され、前332年には放火によって、現在見られるような廃墟と化しています。伝説ではこの放火はアレキサンダーの占領後に、愛妾タイスの酒席での思いつきの一言から出たものと言われております。

ここで古代としては珍しい鉄の使い方のしてあるのを発見いたしました。それはペルセポリスの建造物群の中でも中心的な存在になっている、アバダナ（謁見殿）の石段です。ここは観光写真で良く知られておりますが、下段の方は当時アケメネスペルシャに服属した多くの周辺民族が、貢物を献上しに来た姿をレリーフ状に彫り、上段に行くと大王の親衛隊の兵士の列がワンパターンの構図で彫られています。

鉄を見つけましたのはこの上段の処でです。この永遠不壊の巨城の建設には、人海戦術で十分な基礎工事がされていたでしょうが、それでも将来の地盤沈下や地震での破損などを考えたのでしょう。そうした時に力の掛ってくる石段やグリフイン（怪獣）のような安定の悪い大型石造彫刻の要所要所に、鉄の大きな鎹を使って補強の工事が施されていました。

石段の巨石と次の石との接合部分に両者にかけて巾7㎝、長さ30㎝程の浅い蟻形の溝を彫り、その両端部分に直径2.5㎝位の孔を明け、そこに寸法を合せて造った鉄の鎹を打ち込んで連接してあるんです。そのままでは形も良くないし錆もきてしまうので、その部分には溝の大きさに合せた鉛の板を叩き込むか、あるいは溶けた鉛を流し込み、最後に表面を削って平滑に仕上げたものと思われます。

従来古代の築城工事で礎石にこのような工法が採られていた場合、鉄が使ってあれば大抵の場合は錆びて朽ち果てていまして、鉛の痕跡だけが残っていたところから、楔に鉛の棒を使ったとされてきました。しかし紀元前五百年の工事で、既に鉄の棒を建材として使用していたのです。このアパダナの場合、芯まで錆びてやせ細った鉄棒の表面に極く僅か、しかも不均一に鉛が残留していました。恐らく溶融鉛を注入した時に不完全な合金層のようなものを形成し、幾らか防錆効果を生じたために、錆化した鉄が残っていたのでは無いかと思われました。

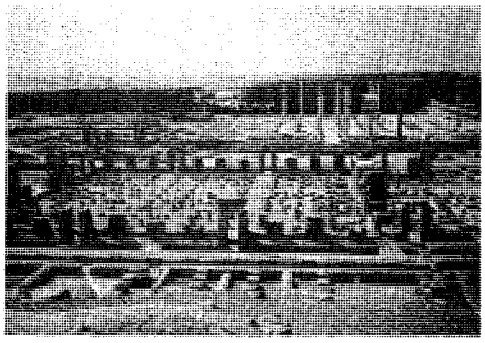
前に話しましたトルコのアラジャホユクでも城壁の巨石の積み上げに、直径3-4㎝位、深さ14㎝位の孔を上下に明けてあるのを見掛けましたが、恐らくほぼ同様な理屈から枘状に3-4㎝径で長さ20数㎝の、鉄棒を挿入していたものと思われます。

周囲を見渡せば豪華巨大な建築遺構群で、しかもそれらには前述しましたような彫刻のほかに、大王の勇壮な獅子狩とか怪獣退治、兵士の群像、古代文字などのレリーフが数え切れないほどあり、こんな錆だらけの小さな鉄などは、気付いても何だこんな物と研究者に見向きもされなかったのでしょう。

刀剣や鏃が大部分で、あとは生産用の工具類程度の時代に、このような部分に超高価な鉄をかなり沢山使っているのには、誠に驚かされました。

レリーフで描かれている刀剣は、兵士は40㎝位の短剣ですが、形式は博物館にありましたルリスタン形のものではなく、もう少し洗練されたアキナケス形のものに移っていました。このペルセポリスの造られた頃になりますと、服従民族に王者の威風を示す必要などがあったのでしょう。王や貴族の刀剣には長大化と豪華さが求められたようで、博物館に展示してありましたこの出土品は、長さが80㎝位ありました。

次にイランと言えば、やはり印度方面からの物資搬送のルートですから、伝えられていますダマスカス向けのウーツ鋼や、それで造られた刀剣は無いものかと思いまして注意して廻りました。古いものはなく10世紀末になってですが、フイルドウーシーによって書かれ、ガズニ朝のマフムードに献上されたシャー・ナメ＝王の書というのですが、これにはザッハーク竜王やインド産の鉄剣などが出てきます。そうしたことから何か残っていないかと思ったからなんです。もっともこれは吟遊詩人の唄うのを聞きましたが、歴史という



イランのメルセポリスの全景

よりも日本の浪花節です。

待望の、刀身にダマスカス模様の現れた剣を見ましたのは、イスハハンの四十柱の宮殿でした。ずっと新しい時代のもので、17世紀の製作で長さ1mを超える立派なもの。次に見ましたのはテヘランでパーレビ前国王が建てましたレザー・シャー＝夏の宮殿の敷地内に設けられました軍事博物館の一室。この方はもう少し古くて年代は14世紀、兵士が駐屯していて撮影もメモも禁止でしたが、ラベルにティムール・ガーニ司令官の佩刀というように書かれていました。

材質については、このダマスカス剣について、きれいな模様は炭素鋼とニッケル薄板の重ね鍛造と言われていまして、現在ナイフなどでそうした製品が造られ売られています。しかしこれらの剣はニッケルを使わずに、高炭素の鋼板と低炭素の鋼板を複雑に組合わせたもの、ワイヤーの場合もありますが、そうしたものを捩るとか曲げるとかして鍛造しまして、成形研磨の前後に熱処理や薬品仕上げをして、そうして流水紋のような模様を現したものと思われました。

イラクにつきましては現地に入っておりませんので詳しくは申せませんけれども、バビロニア帝国の軍備や文化は、かなりの鉄素材がなければ出来なかったと思います。アッシリアのいた北半分の地域はまだ北部から略奪してくることも出来たでしょうが、南半分の地は資源的にも鉄産地は遠く離れ、しかも周囲に強豪がおり、そのうえ自国は低湿地が多いという立地条件から、金属加工をやるには余り恵まれていませんので、文明国であっても鉄製品の入手には苦労させられたはずです。

従いましてこれは鉄に限った話ではありませんが、ユダヤ民族流離の始まりとなったバビロンの捕囚の話のように、エルサレムなどから熟練労働者を強制連行して所要の品を充足したものと思われます。

北のアッシリアが狂暴な人種でミタンニとかウラルトウにしばしば侵攻し、そして鉄の確保を計ったのは有名ですが、この首都のドルシャッキン村、当時のコルサバードの城内にあった倉庫に一六〇トンもの鰹節形をした半成品の鉄塊が備蓄してあったことは有名な話です。

ただこの鉄の入手方法ですが、確かにトルコのカネシュにあった商館などを通じて、アッシリア植民時代とよばれる頃には、隊商によって購入もしていたようです。しかしその点からドイツのルードウヒ・ベックやオットー・ヨハンゼンは、その著書にこの当時鉄は既に平凡な金属になっており、アッシリアではフェニキア人などから買い、鋼つまり上質のものはカリブス人から買っていたと書き、略奪をある程度でしょうが否定しています。いくら何でも大部分が超貴重な兵器に加工される鉄が、平凡な金属とまではなっていなかったでしょう。またもし購入していたとしたら想像もつかない高いものについたはずです。

鉄の蒐集で知られたサルゴン2世王の子、センナケリブの宮殿跡（ニネベにありますが）から出土した、ユダ王国のエルサレムの60km南方にあるラキシュ攻防戦の図で見ましても、往時のこの種の記念絵画の常としては勝者の側は誇張し、武装など充実したものに描かれるはずなのですが、押し寄せる多数の弓兵など、絵からの想像では金属の使用は部分的で、甲冑・楯などを見たところでは重装備とは言い難いものです。

いずれにしましても、中国では鉄器の所有形態は寡占であったにしましても、使用面では普遍的な様相を示しているのですが、中近東のこれら諸国では、どう見てもおぞましい武力・権力による集中の姿しか浮び上って参りません。

(III) 東西鉄文化の拠点パミール

インダス河、ガンジス河の流域に栄えました古代文化は、往時はパキスタンと言う国は無かったわけですから、北から北西にかけてのアフガニスタンや、さらにロシア領になっているトルクメン、ウズベク、カザフなどの共和国へと伝播して行きました。これらも昔はペルシャ領になったり、アレキサンダー大王の遠征の東端になったりし、大宛とか粟特とか大月氏などとも呼ばれておりましたし、エフタルや吐蕃が席捲していた時代もありましたが、とにかくその方向へと浸透しています。

また一方でパミール高原を越えて、北東の中国新疆ウイグル自治区へと大きな影響をもたらせました。さらにそれは河西回廊を通って中国本土、つまり長安の都へとも流れ込んでいます。これらの地は古くから匈奴をはじめとしまして、ウイグルやキルギス、その他チベットなどの民族が次々と占拠していた地域ですので、当然鉄の文化もそれら北方系の技術をミックスしたものになっていったと思います。

勿論、南側寄りでも多数の枝道や河川を利用して、ヒマラヤを越え、中国のチベット方面にも影響を与えておりました。

御承知のようにこうした辺りが、利のあるところ何処までもと、キャラバンで交易に出掛けまして、流砂、天険、土匪の襲撃などで最も苦労した場所です。こうしたところを西へ西へと、中国の絹織物が運ばれたわけです。余り知られておりませんが、同じこの道を、鉄も一緒に運ばれていったのです。

東側の鉄が続々と西のローマへ運ばれたのは、ウーツ鋼がその名を馳せたよりも大分早く、

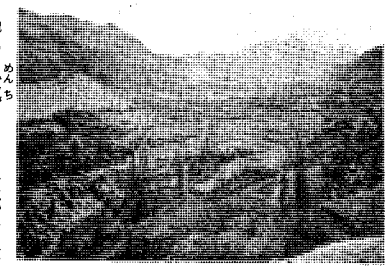
紀元前後の一世紀頃ではなかったかと思われます。ローマのプリニュースと言う歴史学者が、現代で申せば百科事典の御先祖様のような『博物誌』と言う大冊の本を編纂しているのですが、その中に「世界で最高の鉄は東から運ばれてくるセレスの鉄である。それは定評のあるペルシャの鉄よりも上質のものだ」と書いているのです。

このセレスが一体何処なのか何人もの学者によって、その産地が古代から追求され続け、著書で論証されております。

従来セレスが中国と想定されましたのは、中国産の絹のことをセルと呼んでいたからでして、これに接尾語としてスがついてセレスになったのであろうと考えられたのです。この当時中国は漢の時代であり、匈奴対策のためにいくらでも金儲をしなければならない状況で、既に鉄官という国営製鉄所が各地に設けられて、中央の一元的統制の下に盛に操業されていました。従いまして高度な技術に達していましたことは事実です。後にお話いたしますが、洛陽の西50数kmの滻池という遺跡で発掘されました鉄斧に、偶然か意識的にか球状黒鉛鋳鉄という、想像もつかない高度の技術が駆使されたものがありました。この技術は何と昭和26年特許で、日本の鋳物業者が造り始めましたのは昭和30年代になってのことです。

ですからこのような進んだ中国の鉄だと言うことも考えられなくはありません。しかし、高品質な鉄は既にインドでも造られていたことが推定できますし、その北上した技術は現在のパキスタンやアフガニスタンの北東部などで、結構生産されていたことが想像されます。

パキスタンのイスラマバードの北西40kmのところにあります、タキシラの町などはサンスクリット語の町名で、隊商交易の拠点なのですが、ここは地理的条件を反映して、ギリシャ文化のほかにサカやスキタイのような遊牧民の文化も混じり、それにインド文化が加わった形をしています。ここの博物館でシルカップ遺跡の出土品を見ましたら、紀元前一世紀から後一世紀にかけてのもので、刀剣をはじめ斧や鍬、それに鍛冶道具や釘なども出土しておりましたが、それらの中に小さなと申しましてもシャフトの長さで70cm程直径は25cm位の鉄製の車輪がありましたのには驚かされました。またこれらに混じって鉄塊＝先程イラクのところで説明しましたのとほとんど同じような鰹節形のものや、直径や一辺が30cm位あります、鍛冶屋がそれを何にでも加工できる丸や四角の鉄板がありました。こうしたものの出土から相当高度な鍛鉄の文化をもっていたことが判りました。



パキスタンのフンザ地方

年代は少し後になりますが、孫悟空の一行つまり唐の求法僧・玄奘三蔵が『大唐西域記』で書いております道筋を見ますと、この辺りでは天山北側のステップ路をイシク湖へと抜けて、そこから西へ迂回しつつ南下していますが、達磨悉鉄帝国と言う国を通過しております。中国文献は当字が多いので、この文字もお経のギャーテイのテイに鉄の字を当てたとも言えますが、この地は別名をワハンと言いまして、現在のアフガニスタン東部から蛇の頭のように細長くパミールへと伸びている地域の一部で、ワハンとは本来鍋・釜と言う意味です。こんな地名が連綿と続けられた地域はそうはありません。原始製鉄なりによほど製鉄が発達していて、その操業が長年続けられてきた地だと思います。南へ接するスワトウ渓谷なども古来の鉄産地です。

『前漢書』には西域諸国としてこの辺の国々で、鉄産のあったところを数ヵ国列記しております。とくに大宛現在のタシケントの南側ですがなど、良馬精鉄を産すとなっていまして、主要なオアシス国家では皆少量ずつでも製鉄と鍛冶をやっていたようです。否鍛冶屋がいなければオアシス国家は成立できなかったといえるでしょう。

現在パキスタンから中国に入りますには、中国・パキスタン公路の紅其拉甫峠を通るのですが、この付近は多数の枝道や河川がありまして、間道のような形でかなり通行がされていたようです。その中でも明鉄蓋達峠は最も良く知られておりまして、名称からしてその昔、鉄を運搬したような気がします。ピラリの中国側検問所の手前で公路が二股になっていまして、そちらに行く道は封鎖され通行止めになっておりますので調べることができませんでした。

中国の古典にしばしば賓鉄＝はるか彼方から運ばれてきた鉄という言葉があります。その影響か日本でも『東大寺献物帳』に、唐様の刀子として、この賓鉄の名称が使われております。この峠は賓鉄が西から運ばれてきた道ではないかと思われます。標高4800mのこの峠は初老の私にとりましては、空気が稀薄で酸欠で青い顔をして、一袋150円の空気袋を抱えて歩きました。

この道を下ってきますとパミール北部で突出した、ムスタング7546m、コングール7595mが眼前に現れます。これが伝説の崑崙山のモデルと考えられますが、その麓を通りましたとき、『列子』の湯問に書いてあります「周の

穆王が西戎を征服したとき、西戎が錕鋙の剣を献上した。その剣は肘の長さ、つまり45cm位あり、十分に鍛えられたもので、赤色の刃をしており、玉を切るのに使うと泥を切るようによく切れる。」と書かれていたのを思い出しまして、この辺りの話かなと想像を廻らしました。

中国の学者は天山山脈東端、蘭新鉄道で敦煌入口の柳園と鳥魯木斉の中間哈密をこの剣の製作地と考えていますが、私はこの話自体伝承なのでしょうが、仮にそうしたことがあったとすれば、コングールの西側とか、パキスタンのスワトー渓谷、または前出のアフガニスタンのワハン地域の鉄による作品ではなかったかと考えております。

ムスタングの北西部辺りは歩いていて、よくキルギス族の放牧をしている姿を見掛けました。キルギス人といえばルーツは後で申しますが、バイカル湖の西側のミヌシンスク辺りから出現していまして、早くから金属文化の一翼を担った民族です。面白いのは『新唐書』の回鶻伝のところでキルギスにふれておりまして、そこで鉄を雨生鉄つまり雨で洗われて堆積した山砂鉄を原料に製錬していて、この鉄で造った刀は非常に鋭くて犀の皮で造った鎧でも切ることができ、突厥に売り込んでいたと書かれています。

この突厥という民族は中国の古文献に何回も出てきます。トルコ帝国のルーツとされていて、トルコの建国年数はこの突厥独立の年から起算しております。

鉄産を母胎にしました強大な遊牧国家です。独立前は宗主国柔然の鍛冶奴隷のような立場だったのですが、姫に求婚してドナられ拒絶されて発奮をしたのでしょう。まあそれだけではないでしょうが後に下克上で乗取りに成功した国です。

そこにキルギスは鉄製の刀を売り込んでいたというのですから、どう考えても、突厥と同等またはそれ以上の鍛冶技術をもっていたものと想像されます。

キルギスの刀剣材料の砂鉄は迦沙とよんでいたとのことで、当地のマサとよく似ていますが、まさか関連は無いでしょう。しかし砂鉄による鍛刀という点では日本刀のルーツとも言えそうな話です。故里であったロシアのミヌシンスク地域の伝承を、後世になって創作したものではないかと思います。

さてカラクリ湖からガイズ河に沿って1.5時間程下りますと、ウパルと言う小さな町に入ります。変わったところの無いうらぶれた宿場町なのですが、珍しいことにここの老人達はウイグル語と少し違う突厥語を話します。さらに1.5時間で西域№2の大都市喀什に入ります。ここの10万人バザールとよばれる大掛かりな露天市では、新疆西部の人々のあらゆる生活物資が売られ、鉄製品も農工具、家庭用品など豊富な品揃えが見られました。近代の所産でしょうが、ブリキ板を細く切ってパネルピンで打ちつけた、花嫁の衣装葛籠は鉄の民芸品として出色のものでした。ナイフ専門の店も3~4軒ありましたが、ナイフはほぼ南へ60km行った英吉沙の製品でして、新疆省内で扱われているものの8割を占め、家内工業的に400年程前から生産しているとのことでした。日本の三条か三木のような町です。庫車（クチャ）には立派な刃物工場があって量産していましたが、ここの製品は余り見ませんでした。材料はいずれも自動車を解体したバネ材が使われていました。

このクチャに代表される新疆の古代製鉄は、何といいましても西暦400年前後の北魏の時代に麗道元によって書かれました『水経注』に出てくるものが有名です。同書には「屈次（亀茲つまり現在の庫車のことですが）の北200里（現在の80km）に山あり、夜は火が燃え、昼は煙が上がる。人々はこの山の石炭を採って、この山の鉄鉱石を製錬する。製品は西域のオアシス国家36国に供給している」とそんな風に書かれています。歩いて見ますとクチャ市の北方にありますスバシ故城から、さらに30~2km程北に入った天山山脈の鞍部でして、阿艾山という製鉄遺跡がありました。一般的には北山とか白山あるいは阿褐田山とよばれ、ヤマタノオロチの話に似た、殺さないで王の乗物としているのですが、龍退治の伝説があります。その東寄りには可可沙製鉄遺跡が見つかっており、いずれも漢代から操業が続けられていたものと推定されています。

このほか南側の方では民豊県の尼雅、洛浦県の阿其克山などで製鉄遺跡が出ています。

この地域は鉄鉱石の産に恵まれておりまして、今申しましたような天山山脈の中には小さな鉱床が幾つもあります。北側にと天山を下りますと伊犂河の流域、北疆ではアルタイ山脈の西側、南疆では昆崙山脈もパミール寄りの付近に幾つもあります。他にも小さな鉄山が多数ありますようです。

とくに古来鉄産で知られた哈密の付近では磁鉄鉱の良いものが採れます。この鉱石は哈密市の南60kmにある雅満蘇のもので、現在では蘭新鉄道などで甘粛省の酒泉にある鉄鋼コンビナートに送っていますが、新疆の人々は将来ここに大製鉄所を建設したい夢をもっています。

宋応星の『天工開物』によれば、ここの刃物は物凄い切れ味だと記しています。これは鉱石の良いところから技術も進んだでしょうが、量産されるようになり、長安に送られて高い評価を得たことによるものと思います。考古学的な面からは市外の柳樹泉農場の早期鉄器時代（秦代と言っておりますが）墓地か

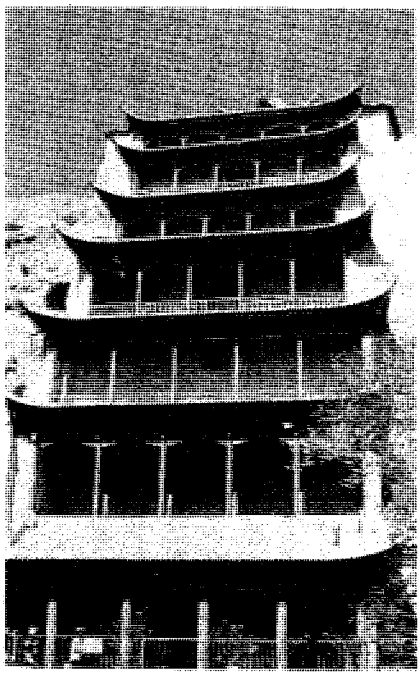
ら、刀子と指輪が出土しております。蒙古系の人のもののようです。漢代の遺跡でも鍬や鋤が発見され、年代を追って鉄製品が中原とそれ程遅れずに、普及し使用されていたことが判ります。

なお哈密の手前に吐魯番と言う町があります。世界一おいしいと自慢する葡萄の名産地です。孫悟空が觔斗雲に乗って暴れ廻ったという火焔山は小説ですが、郊外にその怪奇な山容を400㎞に渡って連ねております。ここには漢から唐にかけての漢人と西北民族との抗争の歴史があって、交河故城や高昌国の遺跡が残り、また鉄器出土でも知られたアスターナ古墳群があります。壁画の国外流出事件として騒がれているベゼリク千仏洞もここにあり、斧のミニチュアのようなウイグル時代の珍しい形をした剃刀などを出土しています。

Ⅳ 河西回廊から長安の都へ

さて蘭新鉄道で前述の哈密を経由し柳園に出れば、そこは東洋史で有名な、匈奴と漢や唐などが争った祁連山脈の北側であり、河西回廊と呼ばれている地です。この山脈中に鏡鉄山という磁赤鉄鉱の山があります。

まず敦煌では観光写真で良く知られている莫高窟に参りましたが、その第96窟に中国としては小ぶりな鉄鐘が2個放置されてありました。さらに敦煌市の博物館にも、それよりはやや大きい程度のものがありました。余り古いものではなく、100年か200年程度のものでしたが、銘文から見て、もし有名な嘉峪関で鋳造したものとしましたら、400㎞の道程を運送手段の心細い時代に、苦労して運んだものと驚かされました。



敦煌の莫高窟

河西回廊は現在の甘粛と陝西の二省なのですが、さらに先の新疆とでは雰囲気が全然違っておりました。『貞観政要』の議案辺第35によりますと、大臣の褚遂良が唐の太宗に「高昌への道は砂漠が千里も続き、冬の風は氷のように冷たく猛烈で、夏の風は焼けつくような熱風」と表現しており、毎年千人の将兵を高昌に送り込んでも、河西回廊の何処かが匈奴などに侵入された場合、急場の役にたたないから、もっと近くに兵を配備した方が良いのではないかと上申しています。私もここを歩いていて、薄青い幻のような蜃気楼や巨大な竜巻に遭遇しました。正に『大唐西域記』の表現している絶望的な状況を髣髴させる地帯でした。

そうした地域だったので、古い鉄製品が纏まって見られるのは、このコースでは嘉峪関以東で、本当の西域では漢兵などが駐屯した場所の付近に限られます。例えば王維の「君に勧む　更に一杯の酒を盡くせ、西の方　陽関を出ずれば故人なからん」の、玉門関と並ぶ陽関の関所などは、その近くの南湖という聚落に遺跡がありますが、僅かに鍬先と刀子などが出ている程度です。ここで小さな蒸器が発掘されていますが、これが不思議なことに、鉄と青銅が自然に混ざり鋳型の中で比重で分離しながら固まったようなそんな鋳物でした。それにしてもシルクロード沿線での鉄の普及は、主として張掖武威以東が中心と言えそうです。

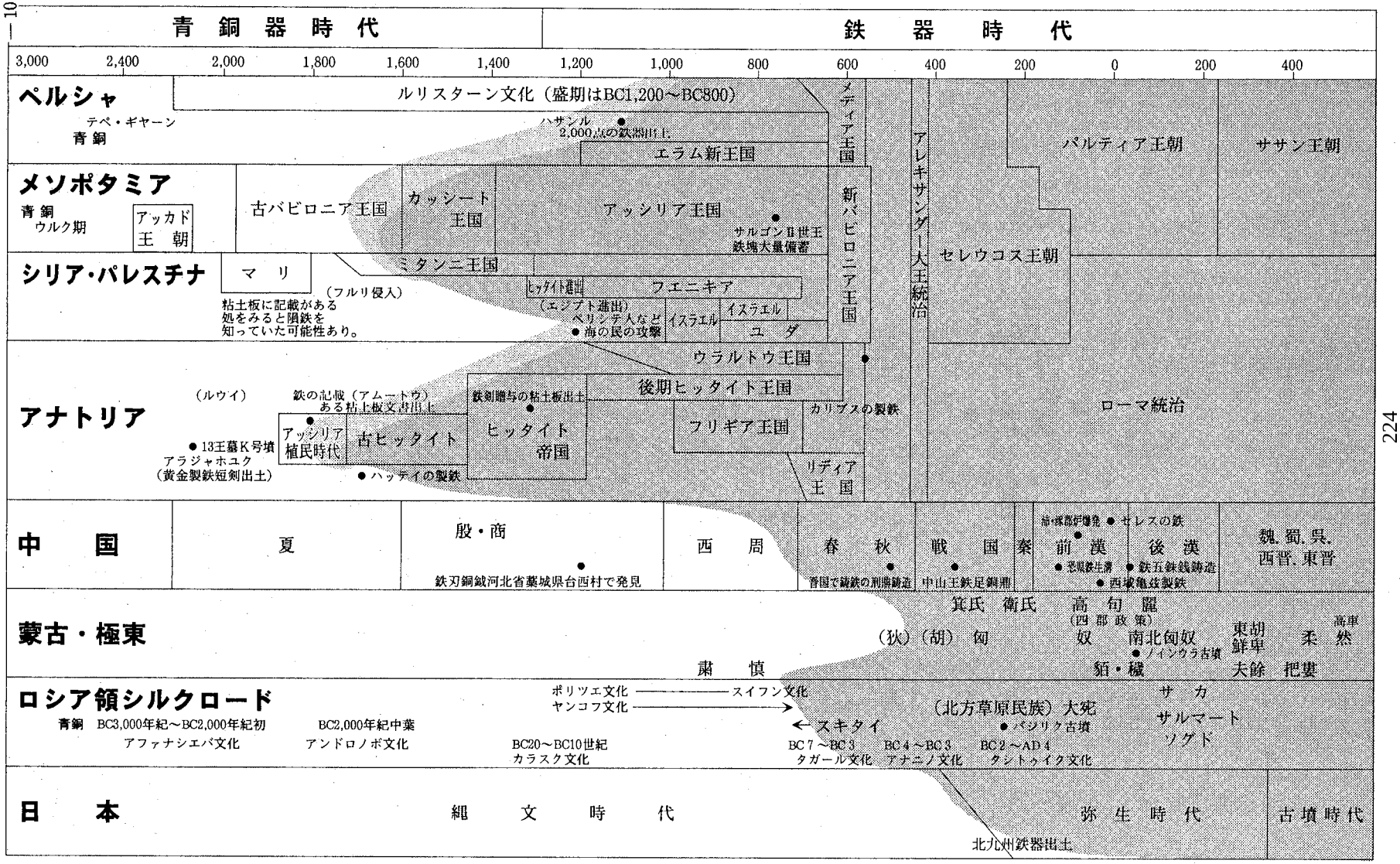
張掖の西夏が建設した大仏寺は幸い文革の破壊を免れております。ここは35mもある涅槃仏があることで知られていますが、それよりもこの大仏を収蔵した大建築に、釘が一本も使われていないことに驚かされました。それにもかかわらず、多分それより何百年も前に漢人が入植して使ったものでしょうか？近傍で出土した漢代と推定された牛耕用の鋳鉄犁がありました。

蘭州まで来ますとここは中原と回廊を結ぶ交易、軍事の要地でしたので、黄河の流れも幸いして漢代から栄えておりまして、出土した鉄器もかなりあり、古いものや珍しいものがありました。蘭州の甘粛省立博物館で平涼県から発見された戦国時代の鉄鍬、その近傍で発掘の同じ時代の鋤の刃先などがあり、天水県から発見された秦代の銅詔鉄権などを見ることができました。注目と言うよりも呆れ返りましたのは、武威の雷台県で発掘されました前漢時代の鉄製で金貼りされた洋傘の骨で、直径で140㎝位あり、何と折りたたみ式のものでした。それに赤や黄色の布地が張られ、白氏の詩石楠樹ではないですが「傘蓋低垂、金翡翠云々」といった、楊貴妃のような美女が侍女にかしづかれて、嫋やかに現れてくる姿をその前で想像してしまいました。ここからは直径21㎝の金銀で飾られた鉄の鏡も発見されています。

見ることはできませんでしたが、ここの雷台県火屋家庄で



シルクロード鉄関係遺跡概略図

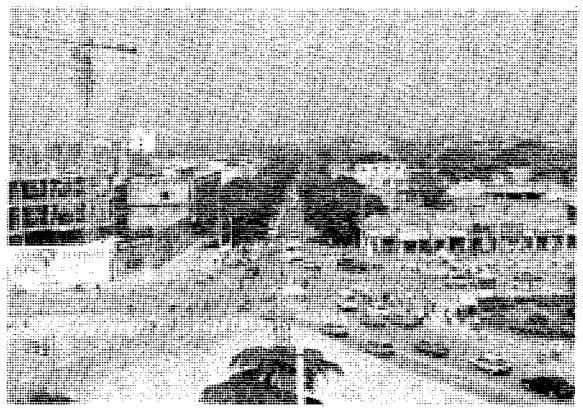


注）アミの部分は鉄器を知った時代と推定

発見された銅柄の鉄剣は東周のものでして、中国出土鉄器では最古クラスのものだそうです。

ここは山西省ほどではないですが、30年程前までは土法製鉄が盛んに行なわれていた地方で、10トン位の小さな高炉とのことですから、古来からの伝統が続いていたものと思われます。

次に陝西省に入りまして長安の都に参りました。現在の西安市ですが、人口617万人、もうどなたも御承知の秦の始皇帝の居た都で、唐代には日本と仏教などの面で交流のとても多かった処です。有名な始皇帝の兵馬俑坑からの6000体に及ぶ兵士の陶で造られた俑は、さらに1994年秋2号坑が完掘されましたので、恐らく8000体を超えているでしょうが、これらの等身大の兵士俑が所持していた、実戦に使える武器だけでも大変な量です。しかし秦は初期には地理的に鉄の採掘に弱かったことから、鉄器の大量生産をすることができず、柔化処理などに十分には習熟していなかったのではないでしょうか。



西安城西門よりの展望

若干の農工具を除いては金属は青銅製が主流で、武器は90数%青銅だったと言ってよいでしょう。ただ車の軸受けに使われた六角の大きなナットのような鋳物が鉄なのは、鋳鉄＝多分白銑組織のものでしょう＝磨耗に対する硬度が要求される場所に使われたからだと思います。

この秦が抬頭した戦国七雄の時代は弱肉強食の時代ですから、国によっては武備の充実に資源の豊富な鉄を活用し始めていたと見えまして、前漢末の劉向が編纂した『戦国策』の韓策（韓国ではなく中国の春秋戦国の一国）の中で「韓の兵士の帯剣は総べて冥山で造られており、棠谿、墨陽、合膊、鄧師、宛馮、龍淵、大阿等の名剣もあり、一剣百敵を倒すことができる」と書いています。

また魏の国が邯鄲の占領に意欲を燃やしたのも、そうした鉄製武器の産地を確保するという目的からと思われます。天下統一のためには材質より量の点で鉄製武器の確保が必須要件となりつつあったことが想像できます。

さて市内にありました陝西省立の歴史博物館は正に古代鉄器の宝庫でした。随分各国各地の博物館を見て廻りましたが、これほど鉄器の充実した展示を見たのは初めてでした。

収蔵してある品々の数が十一万点といいますから、そのうちで鉄器を5%としても6000点位にはなるでしょう。周恩来の指示で満4年で完成したもので、唐代建築の風格をもつ建坪56,000㎡の立派なものです。

春秋時代から秦代にかけての初期鉄器文化のものから始まり、漢代、唐代と一目で原始的なりに量産への歩みと品質の向上が判るような展示でした。春秋のものでは東周の鳳朔県秦公一号大寨から出土した鉄鋤があり、合せ型を使用した刃巾で15㎝位の仲々精巧なもの。戦国時代のものでは藍田県大寨から出土した40㎝余りの鉄剣、これは白銑鋳物を脱炭する柔化処理をしたものなのか、あるいは還元鉄で造ったものか、よその国の物ながら調査したい意欲が湧きました。そんなことを言い出したら忽ち怒られるに決まっていますが……。

秦代に入りますと臨潼県つまり兵馬俑坑も含めて始皇帝陵の付近のもの、ここの鋳鉄製の板斧や鍬先は非常にシンプルなものでした。また皇帝のお膝元らしくこの時代を代表する鉄権（はかりの原器）がありましたが、これは歴史図鑑などに出ているものと少し異なり、背が高く底面の狭まった風鈴状のやや小さなものでした。

漢代になりますと本格的に鉄官の制度が動いて、生産も軌道に乗っておりますので、量も多く品種もバラエティに富んだものとなっておりまして、長安城の武器庫から出土しましたものには刀剣、戈、斧などのほかに大量の農工具も見つかっております。珍しいものに鉄製の戟と呼ばれた枝付きの鉾がありました。若干細いのでこれは実戦用と言うよりも権威の象徴ではないかと思われました。農具類では隴県出土のものがありましたが、既に2頭曳きの犂用と思われる大きな刃先なども出ておりました。長安城の武器庫跡などの遺跡では、鋳鉄や鍛造の工房が見つかっており、鉄器も多数出土しております。また陽陵の囚人墓地からは多数の首枷、足枷など囚人の刑具が出土しています。唐の時代のものは鉄製品が流通期に入っておりますので、製造経験を積み、形式も洗練されたものとなっていて、長轅の犂なども立派なものが使われていたようです。敦煌で原野の中に広

大な映画の野外大セットが造られていて、そこに宋代の鉄商の店がありましたが、きっと行(こう)とよばれた同業組合をつくっていた商人の家が、長安の町にはそんな佇いで何軒もあったのではないかと思います。

この町で鉄の大きな鐘を見ましたのは鐘楼と西門の上でしたが、2つとも高さが1.7~8m程もある立派なもので、恐らく西域遠征に出発する征西将軍の出陣などの折には、乱打されたものでしょうが、よじ登って見ましたが陽鋳が文革の影響でしょうか、削られていたり残っていても画が崩れていたりで、はっきりしておりませんでした。しかし鐘楼は明の洪武(コウブ)17年創建といわれ、鐘は明清のものでしょう。西門のものは損傷した字の跡が統のようにも見えましたから、光緒か宣統の頃のものかも知れません。しかし大形でも花弁の外反りが弱く近代的なデザインのとてもスリムな形をしていますから、確かに新しい時代のものです。いずれにしても、叩かれ過ぎてひび割れをしたり、戦火にあったりして、何回も造り替えられたものでしょうね。

Ⅴ 民族乱立の地シベリア南縁と蒙古

次に極く簡単にシルクロードの北側にあって、いつも鉄文化で大きな影響を中原に与えていました、ステップ地域、内外の蒙古、その関連で山西省、さらに極東地域にも及んで見たいと思います。

風光明媚なバイカル湖の東南部にあるウランウデの町を経由して、流れ込むセレンガ河の上流は、すべて蒙古北部に源をもっておりまして、オルホン河、トラ河などが北進次々と合流しております。国境線をはさんだこの広大な地域が、古代に製鉄民族たちが常に南進の機会を窺う前進基地としていた処なのです。中国文献は地域、時代によって同一のものでも表現を変えていますので、どの人種と明確には言えませんが、丁靈と書かれたチュルク系の人達が主だったと思います。これと現在の蒙古の南側を横に二分するようにして、匈奴がおり、西側よりのエニセイ河上流辺りには堅昆(けんこん)と書かれた、これもチュルクの一派ですがキルギス族がいたようです。時代が降って東胡系の鮮卑や鮮卑の奴隷であった柔然がこの辺りを東から西へと席捲する頃になっても、ちょっと北側にはこの丁靈や堅昆は依然として割拠しておりました。そしてそこから発生したのがですね、異種族か表現上の問題なのかは別として鉄勒テュルクのことでしょうが、さらに時代が下っての高車(漢人のいうウイグルの先祖)や突厥、ウイグルなどの種族でした。勿論西側から入ってきたスキタイやサカ族の影響も無視することはできません。さらにツングース系のブリヤート族なども何等かの影響を与えているものと思われます。

金属文化の点から考えますとバイカル湖の西側200km位にある、ミヌシンスク盆地などはこの(丁靈・堅昆)両種族とも、タガール文化の時期などに関係があったものと思われます。これらは発掘遺物としては短剣程度で、青銅製のものが主体ですが、中国特にアルタイを越えた向こう側に色濃く影響したものでしょう。逆の印度側からの伝播と考え合わせますと難しい処ですが……。ともかく乏しいながら金属文化に初期の鉄文化が入ってきたことは間違いのない処です。

この付近は豊富に鉄鉱石が埋蔵されておりまして、湖の東南岸にはムショオル、クルバ、ウェルネギンスク、バリアジンスク、ミソウスクなどを始めとし中小の鉱山が沢山あります。西側もアンガラ河の西岸にオノトからイルクーツクにかけて、数々の鉱山が見られもう少し西に離れるとエニセイ河上流のミヌシンスク盆地の周辺に同名の鉄山を中心にコンドーマなど多数の鉄山があり、クズネツの豊富な石炭と相まって、現代ロシア鉄鋼業に繋っています。ツビンスカヤ自治共和国やハガス自治州辺りにも未調査ですが、かなりの資源のあることが推定されています。

こうした立地条件ですから、古代からタガールやこれに続くパジリクの文化を生み出し、その流れは南側のアルタイ北部山岳地へと連なっています。従いましてこの付近にはショール族などという古代の製鉄人の化石になったような民族もおりますし、その東南・蒙古のコッソ湖に近い国境地帯ですが、トゥアという、古代には新疆北部まで進出していた製銅・製鉄民族の子孫も住んでおります。

これ程資源に恵まれれば、人智の発達に伴って金属文化が生まれるのは当然のことでしょう。しかしこの付近で発見された初期の鉄製品は、ロシア語の文献が読めないので判らないのかも知れませんが、青銅製品が多く鉄は非常に少ないというのが実情のようです。もう少し西へ行ってリンゴとスケートの町アルマータ付近も、鉱産資源に恵まれた地域でして、ここで近世のものでしたがキルギス族の原始的な鍛冶炉や製品を見ました。また近傍にあります前5世紀のスキタイの特長をもつ、イシククルガンの黄金製鉄剣などを見ますと、1200kmも北東のウランドウルクで、青銅製で同じ年代の全く良く似たデザインのものが発見されておりますので、そのためギリシャ系工人の存在が言われますが、これらが移入されたものでなく、この地方で剣身だけでも造られていたとしますと、既にかなりの製鉄技術をもっていたものと推測されます。

イシククルガンが出てきますと、当然その隣りに位置したフェルガナ、中国で言うところの大

宛の地が注目されます。『前漢書』の「良馬精鉄」つまり汗血馬と良い鉄の産する場所の記述からしましても、紀元前に鉄産が中国中原に知られていたのですから、この辺りへのあるいは周辺からの技術伝播は無視することができません。

西トルキスタンの遺跡もニサ、アナウ、メルブなどの城塞都市の遺構が残っていましたが、その現場を歩きましても、ロシア考古学者の採集が丹念なのか土器のカケラすら少なく、まして鉄片や鉄滓などは全くありませんでした。ニサ遺跡は付近に剽悍なクルド族が住んでいて、昔は武器や農具の自給をしていたのでしょうが、話を聞くことも出来ませんでした。だいいち遺跡の写真を撮るにも南を向いてカメラを構えると、そちらはイランだからと言った具合で、すぐにストップが掛り容易ではありませんでした。

アシハバード市のトルクメン歴史博物館でも鉄製品の展示は非常に少なく、長さ35㎝の短剣が一振と鉄鏃が一本に過ぎませんでした。マルギアナの兜や鎧が造られた地と言いますから、もう少し何か展示してあっても良さそうなものなのですが……。

次にジンギスカンの軍勢が草原を疾駆した蒙古。そこには前述しましたように古い鉄の歴史があります。アルマータの美術館で見たのですが、製鉄民族として知られたチュルク系の軍団が、狼印の旗をなびかせて鹿狩をしている岩壁画がありました。製鉄民族の主流は狼をトーテムとしていたようです。

蒙古人の発生ははっきりとしておりませんで、匈奴の子孫とも言われていますが、東北方面から内蒙古に6世紀頃移ってきた室韋（しつい）が蒙兀（もうとつ）とよばれ、蒙古人の祖となったとも言われており まして定かではありません。室韋の一部は韃靼人とも書かれたタタール人で、そのためヨーロッパでは10世紀頃から、蒙古人のことをタルタル人（タルタロ人が正しい）とよんでいます。

実際に蒙古人に会ってみますとその外見は、ウイグル人やキルギス人よりも漢民族や朝鮮民族に近く、文化的にも文字などウイグル文字から借用したといわれていますが、素人見には満州文字に近く、外蒙古ではロシアの影響でキリル文字です。鉄を表現するのにチュルク系のテイメールとなっていますから、文化の上でも確かに複雑な混血を経ているのでしょう。

この地で鉄が発見されたエピソードとしてジンギスカンの騎馬隊が、ある山の付近を走っていて、急にスピードが落ちたので調べてみたら、馬の蹄鉄を大量良質の磁鉄鉱が吸いつけて引っぱっていたという有名な話があるのです。しかし唐代の『貞観政要』という本によりますと、太宗の4年の箇所に突厥が領有していた、陰山北側の鉄山の地が出てきますので、間違いなく現在の包頭の大製鉄コンビナートが出現して、その原料供給先となっております、製鉄所から北へ140㎞程先の白雲鄂博（バイユンオボウ）の鉄山と推定されます。突厥が領有していたのですから、匈奴時代からここで原始的な製鉄が行なわれていたのでしょう。

案内して頂いた蒙古人からは鉄板焼はジンギスカンの遠征の時の陣中料理といったことしか聞けませんでしたが、ことほど左様にこの地の鉄の消費量は少ないところでした。しかし寺院に参りますと新しいものですが直径1.8mもある、大きな鋳物の天水槽がありました。宗教だけは別格といった感じです。出土しております鉄器を内蒙古の省立博物館で見ましたが、赤峰とかフフホト郊外の遺跡で割とバラエティに富んだ農工具類が発見されております。秦の重量原器も飾り気のない実用的なものが出ていました。また匈奴の居たところらしく武器が多く、とくに鏃が2000本程を発見されています。

もっとも北寄りの外蒙古になりますと、古代の鉄器は少なくて元代のものが主です。

鉄鉱石は南ゴビのマンダル・オボーと言う処で掘れるとのことでしたが、中性子照射化分析で調べました結果では硫化鉄鉱のようでした。他にも2～3産地を聞きましたが、とにかく余り鉄資源に恵まれているとは申せません。ツングース語で鉄を意味するセレンガ河も鉄産は下流だけで、外蒙古領の上流地帯には余り多くは無いようでした。

こうした状況を考えますと、匈奴が再三にわたり南進したのは、食料の確保や通行権の問題だけでなく、鉄の獲得も目的だったかも知れません。

しかし中国の歴史では突厥の出自などの部分に、蒙古の鉄についての歴史的記述がしばしばあります。一例をあげますと、唐代の『周書』の異域伝などが詳しく書いています。スエーデンのドーソンが書きました『蒙古史』は、これらの文献から纏めたものでしょうが、この話はトルコの歴史教科書にもエネルゲコン神話の題名で採録されております。私が見ましたものは高校2年生のものでした。

この蒙古の技術は古代トルコ族のものでしょうが、これはずっと前の山西省の土法製鉄にも、地域的に大きな影響を与えています。中世以降は完全に山西の地域は大鉄産地となっており、中国の土法製鉄の四割を占めていました。元代は遠征のための軍備として、かなりの鉄製兵器を造ったでしょうが、その後は広大な土地に希薄な人口なので、鉄文化は遅れてしまったようです。マルコポーロの「東方見聞録」にも記載されているオゴタイハーンの都城でありました、カラコルムのエルテネーズ遺跡

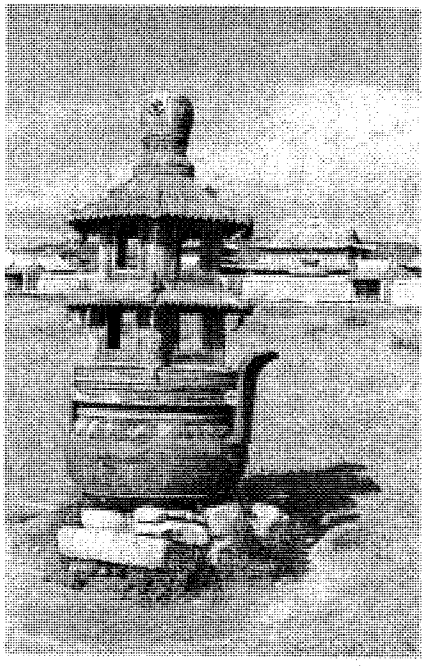
に残っていました、コルバン・ゾーに属するものと思われますが、この高さ2.3mの鋳鉄製香炉には、山西省で鋳造したことが鋳込まれておりました。金火匠人の文字もありましたから明・清頃の作品で寺院への奉納物として置かれたものでしょうが、随分遠隔の地を輸送してきたものです。山西省から工人が来て、蒙古人を使役し出吹きをした事も考えれば考えられますね。

またウランバートルにありますボグドハーンの宮殿にも高さ1.1mに及ぶ大きな鋳鉄の鐘がありましたが、これまでに見た中国辺の鉄鐘とは比較にならない下手な作品で、湯流れが悪く何箇所も大きな鋳がらくりがしてあり、そのため文字も三分の一は消えていました。デザインも少々変なので同地での倣製とも思われますが、清代の咸豊11年(1861年)とありましたから、あるいはこれも山西か河北辺りで造られた妄物かも知れません。

しかしいずれにしましても3～5世紀頃には、このウランバートルの南側を流れるトラ河、その上流のオロンテス川などの辺りを製鉄技術をもった騎馬民族が西南進していったのです。

山西省の豊富な資源は匈奴を始め後には、鮮卑、契丹などの技術系統の影響を強く受けて発達し、現在でも犂などは原始的な鋳造法で造っております。太原にあります歴史建造物の公園になっている晋祀の鉄人像は、東洋の製鉄史では必ず登場する作品ですが、大部分補修改修され一体だけが昔の姿で伝世していました。

また中岳廟や少林寺にも鉄人や鐘、鍋などが遺存しておりました。さらに仏教聖地の五台山のお寺の釣鐘や香炉、鉄塔などは、日本の梵鐘などのように青銅ではなく、余り年代の古いものではありませんが、例外なく総べて鉄の鋳物でした。ただ、これらの鐘楼に撞木が無かったのが気になりました。



モンゴル人民共和国
カラコルム・
エルデニゾー内
ゴルバンゾーの手前
にあった鋳鉄製香炉

Ⅵ セレと言う名の鉄造り

最後に東の端の中国東北地方(満州)、それにシベリア極東地区・北朝鮮・韓国などですが、これらの地域は古代トルコ語地帯ではなく、鉄を現す言葉はガラッと変ってしまい、ツングース系のセル、スルといったものになります。これらの地域はシルクロードから外れておりますし、まだ現地へ行っておりませんので詳しいことは申せませんが、鉄産はかなり古くから行なわれていたようです。

赤い夕日と高粱の満州ですが、ここは中国でも東北地区。中国古典の表現では、この付近には粛慎(みしはせ)とか、貊人、穢人などが居住し、続いて挹婁とか沃沮、扶余などとよばれた民族がおりました。中国の古典は編纂の都度同じ民族でも呼称を変えて表現したりしていますので、その都度戦乱淘汰があったとは考えられません。血縁やトーテムによる部族集団が形成されていたようです。これらの北方系人種が温暖の地を求めて南下し、原満州族を構成したわけですが、やっと国の形が整ってきますのは、7世紀の末にその中の挹婁の一部でありました勿吉という種族の下にいた靺鞨が独立国家を造ったのが、後に発展・拡大し、六九八年独立の渤海国となったわけです。この国が奈良朝期の聖武天皇の七二七年に日本と修交をもったことは、皆様御承知のことと思います。

黒龍江省の博物館には出土鉄器が若干あると聞きましたが、まだ見ておりません。しかし内蒙古に寄った遼寧省の北栗県西官営子馮素弗墓から出土しました、鉄蓋付きの銅鍋は北方民族の物らしい雰囲気の品でした。西暦四百年頃に熱河を地盤としていました、五胡十六国の北燕のものとされています。さらに建平県張家営子遼墓からも、契丹時代の馬具が出土していて、その中には鉄鐙や鉄轡がありました。

文献に鉄の産出がでてきますのは、前述の渤海からでして『新唐書』北狄伝の記載です。鉄利府という名の役所が置かれ「伊、蒙、陀、黒、比の五州を管轄していた。」とされています。しかしこの文献に出てきます鉄産地の位城と言う場所は、黒とだけ書かれている黒水靺鞨の領内らしいのですがまだはっきり判っておりません。鉄利府の所在地は満鉄の調査機関の文献では、現在のハバロフスクと言われております。しかし

哈爾浜（ハルピン）の北東に古くから栄えた鉄力（テツリ）という町があり、従前は鉄驪（テツリ）とむずかしい字で書かれ鉄山包とも呼ばれていました。地名からは関連がありそうです。また位城もこれに似た場所は伊春、依蘭、依安などがあります。依蘭などは鉄の集荷地としたら松花江沿いで恵まれた土地です。

アムール河沿いで鉄製品を出している遺跡は、ハバロフスク市から若干西寄りに、紀元前11～6世紀のポリツエ遺跡があります。そのすぐ南には大分後の新しいものですが、女真時代のナデジンスコエ墓地があり、若干西へと移りますと靺鞨のトロツコエ墓地があります。そして同市の南側にはやはり女真時代のコルサコヴォ墓地があります。それにしても出土した鉄製品から見ますと、靺鞨時代以降急速に量が増え、生活用具の分野に入ってきています。ハバロフスクの郷土博物館で見たのですが、渤海時代として1m超の剣、鏃、釘鎹、車軸などが展示されており、普及していたことが偲ばれました。

この時代は極東の広範な地域に中国人が進出しておりまして、日本海北部に面した沿海州やハバロフスクからさらにかなり北の方まで、中国文化の影響が及んでおりました。ウラジオストックの北部沿海州などは、1860年の北京条約締結まで中国領だったのです。

板倉源次郎や間宮林蔵の調査で、この地の原住民達が鉄を非常に欲しがっていたことを記しており、物々交換をするのに斧、小刀、古釘、それに毀れた鍋まで持って行ったとされていますが、果たして鉄が近世までこの地で造れなかったのでしょうか。一寸と疑問を感じます。極寒の地で製品の輸送がままならなかったことは確かでしょう。しかしそれも夏場はそれ程ではありません。十分輸送できます。

またウスリー河の両岸（沿海州と満州の境界付近）は鉄鉱床がしばしば見られます。ウラジオストックの北方250kmにあるオリガなど数ヵ所の鉄鉱山が知られています。さらに吉林省の南側ですが鴨緑江の北縁には、大栗子、藍泥溝、八道江、七道溝、老嶺など著名な鉄山があります。これらの属する渾江や通化市では製鉄所が稼働していますが、かなり古い時代からの操業経緯があるようです。大興安嶺の山中でも二～三の処で操業していたと聞いております。それにアムール河中流先程の伊春の東にチンガン鉄山があり、河口の近くにはニコライエフスクの大鉄山があります。

この辺りは発掘調査が余り進んでいないと思いますが、吉林省の南部では古くから土法製鉄が行われており、東寧では渤海時代の鉄器の発見が報告されております。

いずれにしても極寒の地ですが靺鞨や渤海と日本とは奈良時代の初めから交通もあり、地理的にも樺太（サハリン）のところは冬期に徒渉できる程です。こうした北端の地では無いにしても、公的私的に日本海という自然の交通機関を利用して、鉄文化についても伝播流入が無かったとは言い切れません。

遼寧省に入りますと鞍山、弓張嶺、廟兒溝（ベショーゴウ）をはじめ、厖大な埋蔵量をもっておりまして、時代は若干後になりますが、九百余年の頃に遼の太祖は渤海の製鉄工人四千人を遼城に移して働かせ、また金の時代の一二三六年には一七六〇戸の製鉄工を、南満州、多分遼城付近からさらに山西省の大同へと強制移住をさせております。

明の洪武帝が1387年に満州統治の拠点として、開原の町を選んだのも、南側に鉄嶺を抱えておりますので、北の押えとしてこの地での、武器調達を計算に入れていたものと思われます。いずれにしましても文献類を総合しますと一千六百年前後には遼寧だけで年間二百トン程度の鉄を造っていたものと想像されています。

清代は瀋陽付近の採鉱禁止などもありましたが、製鉄は細々と続けられており、十九世紀後半頃には、小さな土管のような形の坩堝に破砕された鉄鉱石と木炭が入れられ、これを百七～八十組立て並べて隙間や周囲をコークスで覆い、点火して吹子で送風すれば一昼夜で銑鉄ができ、それを再溶解して所要の器物に鋳造していたと言います。

むすび

以上シルクロードを廻りまして見てきました鉄について、



新疆ウイグル自治区カシュガル市の大バザールで見掛けた金物商人

概略を駆足でお話いたしましたのですが、このような周囲の国々の鉄文化の流れの末端にあって、日本の鉄文化は地理的に接近しております、中国・韓国などから原始的な製品・技術を導入し、それを先人達の永年にわたる辛苦の結晶によって、改善に改善を加えて進歩させ、普及させてきたものです。

鉄は日常使われております金属の95%を占めています。資源は他の金属と較べまして隔段に豊富です。今回は昔の話を中心にしまして近代については省略しましたが、とにかくこの鉄が現在では社会の隅々まで浸透し、人間の生活を豊かなものにしました。だがその反面、この地球の何処かで不幸ももたらしています。いわば両刃の剣なのです。この鉄が今後どのような文化を展開して行きますか、それは今後にこの鉄を活用していく人達の英知に掛かっていると言えるでしょう。

窪田氏紹介

1926年生まれ。明治大学専門部法科卒業。日本鉄鋼連盟に37年間勤務。富山大学、金沢大学、岩手大学（鉄鋼技術史）、東北学院大学の非常勤講師（考古学特殊講義）、金属博物館参与を歴任。

著書『鉄の生活史』（角川書店）、『改訂　鉄の考古学』『増補改訂　鉄の民族史』『鉄の文明史』（雄山閣出版）、『製鉄遺跡』（ニュー・サイエンス社）、図説『日本の鉄』（小峰書店）。論文も多数。

横顔

アイアンロードの夢見続けますか

（中央紙の「この人」掲載）

定年後、十年かけてシルクロードの道程をたどった。狙いは絹ではなく、鉄。日本へ鉄文化が流入した足跡を求めての調査だ。このほど刊行された「シルクロード鉄物語」（雄山閣）はその結実。鉄の歴史学を探って八冊目の著作だ。

―なぜ「鉄」なのか。「もともとの歴史好きに、就職した日本鉄鋼連盟の仕事が結び付いただけ」と事もなげだが、当時（一九六〇年代初め）ほとんど顧みられなかった分野だ。現に「まずは資料集め」と神田の古本屋を片端から訪ねたはいいが、関連書籍一つ手に入れにくい状態だったという。

「その未開発ぶりが逆に刺激となったのですよ。素人が手掛けるにはむしろ好都合だろうと」。当時三十一歳。古代の鉄の産地をつぶさに調べ上げる途方もないフィールドワークは、その後四十数年にわたって続けられている。

「学問は事実（データ）の積み重ね」が信条。足で稼いだ無二の記録は、次第に学会の注目を受け始め、請われるままに著作も重ねた。大学で講義を受け持ち、教え子の幾人かが研究者として巣立っている。しかし、その恩師は「生涯アマチュア」を自認してやまない。「専門教育も受けず、自己流の調査を続けてここまで来た。学者ではありません、いうなれば日曜大工ですよ」

（丸山　孝記者）

「鉄の来た道」の連載分および本号分は、ともに転載・引用については執筆者のお許しを得て下さい。（文中の数字は編集者で横書きとさせて頂きました）

飯塚一雄先生御逝去

産業考古学会理事長として、昨夏の横田たたら研究会には元気で御出席御指導賜り、横田町には毎年、年によっては数回御来町頂いていました。産業考古学会の育ての親の一人でありました。

横田のこの方面の調査研究は多数あって、紹介頂いていました。昨夏の大会については、『会報』や『日立』にも詳細にも報告して頂きました。

お礼を申上げ、哀悼の意を捧げます。

感謝



昨1995年8月26～27日の第14回横田たたら研究会は、北は岩手県から南は大分県まで22都府県から100余名、県内や地元で50余名の参加を頂き、盛会裡に開催することができました。

内容もわが国たたら製鉄の歴史的研究の本筋が見えて来たと言っても頂き、講演・鉄穴流し本場作業の実演ともども好評を頂きました。感謝申し上げます。

第14回研究会開催にあたっては、「しまね文化ファンド」の助成事業に加えて頂くとともに、横田町・横田町教育委員会・ワイエスエス鳥上工場の絶大なる御援助を頂いたことを御披露し御礼申し上げます。

なお、㈶絲原記念館・たたら研究会・産業考古学会からも御協賛御後援頂いたことも感謝申し上げます。

これらの諸団体や篤志家のお蔭で、窪田先生の御厚意をも賜り、講演を全収録し、横田史談会創立20周年、『奥出雲』250号記念増刊号として印刷し、研究会に御参加頂いた方々や会員に贈呈致すこととしました。数多い御厚意に感謝致します。

去る一月には松江で三日間、日本金属学会主催の「国際金属歴史フォーラムしまね」が開催されました。再来年にはこれを踏まえて本大会が松江で開かれるとのことであります。今年は当会も15回として「日刀保たたら見学会」を終えました。来年はフォーラムしまねの成功のために、当地方の研究を充実促進させる方向で、再び皆様に御協力頂けることをと、当会一同念じております。

（横田史談会　代表　高橋一郎）

しまね文化ファンド　助成事業

六九九―一八　島根県仁多郡横田町一〇六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江01400-8-601）頒布・横田史談会（振替口座　01410-9-12404）仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　0854-52-0191）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第255号（6月号）
1996.6.7(M129.T82.S71)
奥出雲編集集団©
横田史談会

秀吉の時代の奥出雲③

—18才で信長に仕え28才で存在を認められるまで—

—桑田忠親著『豊臣秀吉の研究』を中心に。秀吉について書かれたものは『秀吉事記』『太閤記』『太閤素生記』『絵本太閤記』などいろいろあって、諸説がある。また当時日本に来朝したキリスト教宣教師の見聞記、ルイス・フロイスの『日本史』『イエズス会日本年報』などがある—

生立ち

秀吉は天文6年（1537）2月6日、尾張国愛智郡中村の百姓弥右門・なか夫婦の二番目の子として生まれた。姉ともは、のち三好吉房（一路法印常閑）に嫁し、秀次・秀勝・秀保を生んでいる。

弥右衛門は織田信秀の鉄砲足軽をつとめ、同じ愛智郡の御器所村生まれのなかを妻としたという。しかし、鉄砲伝来は周知のごとく天文12年であり、鉄砲足軽という職名は疑問である。この時代は、まだ兵農未分離であり、農耕のかたわら、戦時に足軽のような軽輩として徴発された身分であったと思われる。『日本史』の中で秀吉の出自についてふれ、「貧しい百姓の伜として生まれ、若い頃には山で薪を刈り、それを売って生計をたて、極貧の際には古い席以外に身を掩うものがなかった」と述べているあたりが、あたらずとも遠からずといったところであろう。

のちに、関白・太閤と出世するに従って、秀吉は自ら天皇の落胤、はては日輪の子とまでいいだすが、宣伝効果をもねらった偽系図作りの最たるものであり、もとより事実ではない。なお、秀吉の生まれを天文5年1月1日とするものが多いが、最近の研究では天文6年説の方が有力である。

その弥右衛門が天文12年、戦場でうけた傷がもとでなくなり、やがてなかは織田信秀の同朋衆筑阿弥と再婚する。同朋衆といっても、信秀の同等の身分という意味ではなく茶道・お伽などのほかに、雑用係をつとめる城内の小間使いに過ぎなかった。もっとも、この段階では病気のためすでに引退していたといわれている。

秀吉は、この養父筑阿弥とうまくいかなかったらしく、尾張の光明寺という寺に入れられてしまった（『太閤記』）。これは天文13年、秀吉が8歳のときにあたる。このあたり『太閤記』の描写はいきいきとしており、例の腕白〝日吉丸〟時代ということになるのであるが、日吉丸という名前そのものは『太閤記』の創作であり、事実というわけではない。

小年期

やがて秀吉は、寺を追い出され、しばらく尾張の土豪クラスの農民の〝奴婢〟として雇われ、薪はこびなどを行っていたが、その主人に目をかけられ、商人になることをすすめられた。そして、主人にいくばくかの金を

この頃の奥出雲

新補地頭として三沢郷を領した飯島氏が、三沢郷に来住したのは13世紀末から14世紀初頭である。この頃周防の守護大名大内氏は、朝鮮半島から渡来定住して20代を越えていた。毛利氏が安芸吉田の郡山城に小領主として居を構えたのは、14世紀半ばである。

この14世紀半ば出雲国守護は宇多源氏の佐々木氏から、京極氏へと変ったころである。出雲国内には13世紀初頭からの、古い地頭出身（宇多源氏系）の土着武士が各地に蟠踞し、13世紀末からは、関東武士（多くが清和源氏系）の新補地頭（三沢・三刀屋などの諸氏）が所領地に来住し、主要な土地土地に土着していた。

したがって出雲守護となった京極氏はこれらの土着国侍（国人衆とも呼ぶ）を統御して、国内を支配することに力を尽くしていた。（これらのことについては本誌既刊号に度々記述し、尼子家臣団の分析もくわしく試みて実態を明らかにした）

従って15世紀に入って、京極氏は代官尼子氏を本貫地近江国から出雲国に派遣し駐在させたが、京極氏はことあるごとに、国人衆に頼ることが多かった。（既述）この頃三沢氏は横田庄の三領家の代官職を請負って、奥出雲に拠点をもちながらも、出雲の平原部にも隠然たる勢力をもっていた。こうした情勢の中で代官として下った尼子氏も、徴税官としての支配力の弱さから、得やすい美保関港に於ける関銭の横領へと及んだので、主人守護京極氏の怒りにふれ、三沢氏ら国人衆によって、文明16年1484富田城を追放されたのである。

16世紀（1536年秀吉生れる）になると周防の大内義隆は全盛期を迎え、大永5年1525には西中国7か国の守護職を得、明貿易にも手を染め実力を貯えた。安芸吉田城の毛利氏も元就の時代となっていた。

三沢10代遠江守為忠は、横田庄内の藤ヶ瀬城に居を移し、三領家への貢納の請負を一段と掌握する。それが公的権威の裏付けとして、四隣をにらむのに、役立ったのである。

秀吉の時代の奥出雲③・この頃の奥出雲・宮沢賢治誕生百年⑥・横田三十三番札所めぐり⑭・短歌・川柳・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

もらって町に出、商人に仕えることになったという。時代としては10歳から14歳ぐらいのときである。

もっとも、『太閤素生記』によれば、天文20年、秀吉15歳の春、亡父弥右衛門の遺産として永楽銭一貫文をもらい、中村をあとにして清洲の町に出、永楽銭で木綿針を買い、それを売りながら東海道を東へ下っていったという。秀吉は、はじめから武家奉公を考えていたのであろう。仕えるなら、尾張の大うつけといわれた信長より、いまや日の出の勢いにあり、海道一の弓取りといわれた今川義元をめざしたものと思われる。

秀吉はこの年、すなわち天文20年、今川義元幕下で、遠江国頭陀寺城主松下加兵衛之綱に拾われることになる。そこで秀吉は奉公につとめ、草履取りから次第に納戸の出納もまかされるようになっていったのである。ところが、秀吉がそのように取り立てられていくのを妬むものも出てきた。物がなくなるとすぐ秀吉のせいにされたり、同僚からもいじわるされるようになった。みるにみかねた松下之綱は、秀吉に路用を与えて尾張中村に帰したのである。わずか3年間の奉公であったが、秀吉は一生、之綱に対して恩を感じており、賤ヶ岳合戦後、丹波・河内・伊勢の内で2000石を与え、さらに小田原征伐後は、遠江久能城1万6000石の大名としている。

さて、尾張中村に舞いもどった秀吉は、天文23年、織田家の小者頭がんまくと一若の推薦によって、織田信長に仕えることになった。18歳のときであった。小者というのは小人ともいわれ、中間の下位におかれ、走り使いその他の雑用に従事するもののこと。秀吉は、松下之綱のもとで、一度は納戸の出納を預けられるまでになったが、信長のもとでまた草履取りから奉公をはじめなければならなかったのである。

天文23年といえば、信長はわずか21歳、父信秀の家督を継いでまだ4年目である。尾張国内はまだ動揺を続けており、しかも今川義元が尾張に勢力を伸ばしつつある時でもあった。秀吉としては、かなり考えた末での選択であったと思われる。

秀吉の忠勤ぶりは、信長のはく草履をふところであたためていたといったエピソードにもみられるように、抜群のものがあ

（3頁1段へ）

（1頁5段から）

富田城に復帰した尼子経久は、四隣の国々へ兵を進め領主権を手に収めるが、補佐役に恵まれず、名軍師・相談役に乏しく、遂には大切な一族新宮党までも滅すに至った。孫晴久は天文9年安芸吉田城の毛利攻めに失敗した。翌年は三沢氏の幼ない当主為清を押さえて、横田庄へ代官を派遣して進出を計ったが永禄年間に入ると、一門あげて衰退へと向った。

横田庄はすでに定期市が開かれ、隣国からの商人・牛馬商人入往来も多く、岩屋寺を中心として、京都方面はもとより、遠く北陸路からも、職人の来住があり、寺坊の増築さらに仏像の彫刻等も行われ賑わいを呈した。岩屋寺中興僧快円の日記等にはそれらの記事が多い。この天文年間、秀吉の少年時代のころ藤ヶ瀬城下に街並がととのい、六日市場ついで大市場が開かれる。（今日の横田町横田の六日市、大市である）。三沢氏が良馬を求めて併設した牛馬市場は、中国地方では最も古い開設といわれている。これらが横田の文化的風土を育てた土壌であった。（了）

宮沢賢治誕生百年⑥

童話　風の又三郎

あらすじ

9月1日　谷川の岸の小さな分校に赤毛の子供が北海道から転校してくる。高田三郎である。父の転勤に伴う転校。朝、この子が一人教室におり、みんなをきょろきょろ見ると強い風が吹く。それと、名前の三郎とを結びつけ、嘉助たちは彼を風の又三郎だという。9月2日、始業前、三郎が運動場の広さを歩測していると風がざあっと吹く。嘉助は「やっぱりあいつ又三郎だぞ。あいつ何かするときっと風吹いてくるぞ」という。授業中、佐太郎が妹かよの鉛筆を取り上げたことを知り、三郎は鉛筆を佐太郎に与え、自分は消し炭を使う。9月4日、日曜、一郎は、嘉助・佐太郎・悦治・三郎を連れ、祖父と兄の働く上の野原へ行く。牧場の馬と遊ぶうち一頭の馬に逃げられ、それを追いかけた嘉助は霧の中で倒れて異様な幻覚・幻聴を体験、風の又三郎が空に飛びたつのを見たりする。意識を回復して逃げた馬と三郎に会い、一郎の兄も安心。帰途、三郎と別れた嘉助は「あいづやっぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ」といい、一郎は強くそれを否定する。〔9月5日〕雨のあがった放課後、一郎・嘉助・佐太郎・耕助・悦治・三郎は葡萄とりに出かける。知らずに煙草の葉を一枚むしった三郎は、みなにそれをとがめられる。耕助はしつこく三郎をからかう。葡萄とりの最中、耕助は二度、栗の木の下で雫をざっと浴び、それが三郎のしわざだとわかる。「又三郎、うなみだいな風など世界中になくてもいゝ」と迫る耕助に、なぜ風がなくてもいいか箇条を立てていえと三郎は反論。耕助はついに返答に困り笑いとなる。両者は和解し、一郎は三郎に葡萄を五房与える。9月7日　むし暑い放課後、一郎・嘉助・耕助・三郎たちは水泳に出かける。三郎は一郎たちの泳ぎ方がおかしいと笑い、きまり悪くなった一郎は石取り遊びをしようと、さいかちの木に登って白い石を淵に落とす。みなは水にもぐる。向こうの河原のねむの木の所に大人が4人現れ、発破をかける。一郎の命令で、

り、次第に信長に認められていったのである。

おねと結婚

小者としての忠勤ぶりが認められ、秀吉は、やがて数年して小者頭にとりたてられるようになった。小者としての職種がら、信長の身のまわりの役をつとめることが多く、ことあるごとに信長の目につこうと動いていたらしい。たとえば、早朝の火事のとき、信長が出ていこうとすると、すでに秀吉が馬を用意して待っていたとか、鷹狩に出る時なども、声がかかるとすぐ控えていたなど、とにかく信長におし、信長は次第に勢力を拡大していくが、その翌年、永禄4年8月3日、秀吉は25歳で、弓の衆浅野又右衛門長勝の養女おねと結婚した。おねはこのとき14歳。杉原定利入道道松の娘で、浅野長勝の養女という名分で結婚したのである。したがっておねはその後も杉原氏の名でよばれている。

木下藤吉郎と名乗る

正確にいつからかということははっきりしないが、おねと結婚し、浅野長勝と同じ足軽長屋に住むころから〝木下藤吉郎〟を名乗るようになった。

ところで、木下を名乗るにいたったことがらについては、いくつかの説がある。たとえば、大きな木の下で信長に謁し、木下姓をもらったというもの(「イエズス会日本年報」)、それと大同小異であるが、永禄元年9月朔日、狩に来た信長に直訴して仕官した秀吉が、直訴した場所が木の下だったということから木下を名乗るようになったというものである。いずれも信ずるに足らない。

また、父弥右衛門がすでに木下という苗字を持っており、その子秀吉がそのまま木下姓を名乗ったという説もある。

自分を売りこんでいたのである。

さらに、ただ売りこむだけでなく、頭脳的な面でも手腕を発揮して、信長に認められていった。有名な清洲城の塀の普請はその一つの典型であるといえよう。ふつう「割普請」として知られているが、100間(約180m)の塀を10組に分け、それぞれに分担責任者を決め、競争で修理させ短期間で完成したという。また、薪奉行を命ぜられて年間の費用を3分の1に削減するなど、アイデアによっても信長の信頼を得ていた。

桶狭間の合戦で今川義元をたおし、信長は次第に勢力を拡大

菜の花の沖　籏の上短歌会

見えざる司馬遼太郎氏なり　されどいまこの　永井弥生
菜の花に俤の顕つ　今年また納屋に燕の戻りきて庭に雪柳白くこぼるる　仝
テレビドラマまことわが性なぞりゐる如きを　見せて言葉もあらず　常盤はるまさ
臥す妻は欠かさずテレビドラマ観る　ただそれのみが安らぎなりや　仝
引出しの奥より出でし写し絵にならびし友の　多く逝きたり　岡田時子
わが米寿祝ふと花束ささげくる曾孫の仕草の　あどけかりけり　仝
みどりの日と言ふもわれには軍服の亡き父浮かび歳月おもふ　景山悦子
新緑は輝やくばかり　風なぎて寂かなる山に　蕨摘みゆく　仝
燕はいずこの古巣へ還るらむ　近代家屋に見られずなりぬ　野村節子
散歩みち心得し犬に引かれつつ茜に染まり黄昏をゆく　仝
草笛を鳴らして子らの帰りくる河畔につづく菜の花小径　安部夕波

みんなは下流へ泳ぎ、知らぬふりをして遊び、発破で浮き上がった魚を捕り始める。三郎は鮒を2匹「魚返すよ」といって発破をかけた庄助の所へ持参。「きたいなやづだな」と庄助は変な顔をする。他の子供らは小さな生洲をこしらえ、魚を入れておく。一人の変に鼻の尖った洋服を着てわらじをはいた人が、ステッキみたいなものを持って現れるや、子供らは専売局の人が三郎を連れにきたのかと疑う。そうでないらしいことを知った子供らは、その人に対し「川を濁すなよ」と叫ぶ。〈みんなも何だかその男も又三郎も気の毒なような、おかしながらんとした気持ちになり〉、家に帰る。

9月8日　佐太郎は用意しておいた〈魚の毒もみにつかふ山椒の粉〉を持ち、みんなと一緒にいつものさいかち淵に行く。佐太郎の毒もみは失敗し、その間、三郎は黒い鳥を見ている。きまり悪くなった佐太郎は鬼ごっこをしようといい、みんなは何べんも鬼ごっこをする。そのうちに黒雲が垂れこめ、雷雨。みんなは着物をかかえ、ねむの木の下へ集まる。誰ともなく「雨はざっこざっこ雨三郎／風はどっこどっこ又三郎」と叫び、三郎は一目散にみんなの所へ走ってきておびえている。雨の晴れ間を待ち、それぞれ帰宅。

9月12日、第12日、　嵐の朝、一郎は嘉助を誘い朝早く登校。モリブデンの鉱脈を掘らぬことになって高田三郎の父は会社から呼ばれ、三郎が父に伴われて転校したことを、先生から二人は聞かされる。「やっぱりあいづは風の又三郎だったな」と嘉助。風はまだやまず、窓ガラスは雨にうたれてガタガタ鳴っている。

映画に演劇に「風の又三郎」は、子供向けに好評を得ている。この作品の評価は他の賢治の作品とともに、いろいろに分かれる。一般的にいえば村童物語の集大成とみる。他の作品と同じく村童スケッチが、風の精と科学啓蒙話とともに組み合わされている。

また嘉助に代表される村の子供たちが〈三郎〉を通して〈又三郎〉への親しみと畏れを抱く心理描写が作品の主題としてい

斐の上川柳五月の句

正当化しようとエイズのお偉がた　松浦亜以
咳ばらいひとつわたしも生きている　児玉哲呂
トイレまで列を作って行楽地　藤原千代子
芽が出たかまだかと畑うろうろし　安部春恵
春が来てテレビにあわせ畑仕事　田中有樹絵
なぜかしら隣の畑よくできる　児玉えみ
連休に三世代連れ古稀の旅　藤原のぼる
植物も人もとまどう温度差に　安部正子
山菜に七十五日の縁起食べ　足立玉恵
山登りそれは私のバロメーター　渡部かおり
困っても口に出さぬが眉間じわ　田部都
久びさに用事ないのに電話くれ　松浦久寿子
新聞のチラシは朝の第一歩　渡部ミツコ
減反に農機具だけは欲しくなる　石原冬明
満開の桜にしばしお茶をくみ　真綿よし子
講演会終った途端に目がさめた　田中芳春

柴栗句会五月抄

若葉萌へその先きの山雪のこす　浅野としお
いつしかに巣立ちし空巣とのぐもり　糸原古志
若葉窓頬杖ついて恍惚と　恩田和美
温顔に春日遊ばす道租神　加納信子
笹柄杓娘と酌む谷水山若葉　楠房子
蟠り解けし若葉の降る小道　高木白虹
若葉風日御崎（みさき）巡れば磯の香の　中澤美紀子
親と子の許す笑顔や紅つつじ　錦織菊江
群なして海猫島を丸く翔ぶ　峯石美代子
魂眠る碑濡らす若葉雨　渡部夕峰

その他、信長に仕えたばかりの秀吉が、信長から姓名をたずねられたとき、前の主人松下加兵衛にちなんで木下と答えたともいわれている。のち、秀吉が丹羽・柴田という信長の老臣の一字ずつをとって羽柴と名乗るようになったことを考え合わせると、松下から木下の発想は全く否定しさるわけにはいかないが、実際は、妻となったおね・の実家が播州龍野の木下氏から出ているということで、木下を称するようになったものかと考えられる。この間、秀吉は足軽から足軽組頭へと着実な出世をしていくが、軍功をあらわし、確かな史料に秀吉の名がみえるようになるのは永禄7年、28歳のときである。その年7月、信長は城を清洲から小牧山に移し、いよいよ美濃への攻略を開始する。それも巧みな秀吉の土豪（地侍）らの懐柔工作の成功によった。

こうして信長による美濃攻略の足がかりの一つが秀吉の活躍によって確保された。秀吉にとってみれば、このときの戦功によって、織田家中においてその存在を認められるようになったという点で、重要な意味をもつものだったのである。

るとみる人もある。

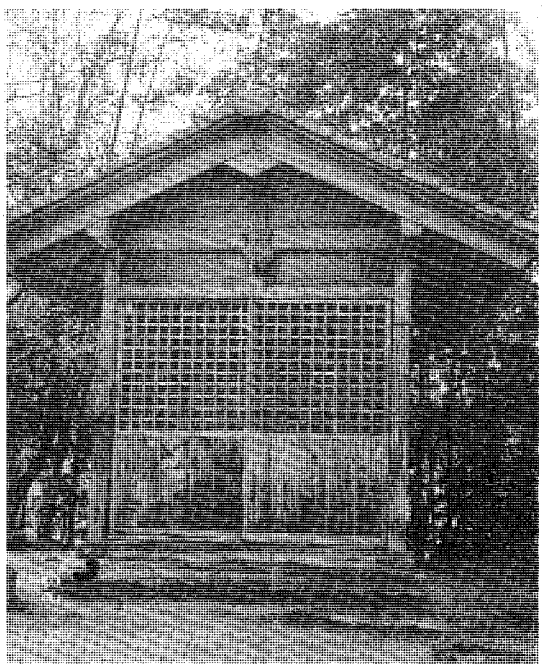
「風野又三郎」という初期の形のものは、科学と民話と村童描写とは別々で、教訓性をあらわに出しているが、〈風の又三郎〉では転校生高田三郎を中心に、素朴な東北の童子の生活と心理が、生き生きと描かれているとする人もある。

教え子の松田浩一は宮沢先生と並んで歩きながら、風というのが科学的にどういうものか、人間にどんないいことをしてくれるのか、またどんなふうに人間を困らせたりするかを、子どもにわかり易くおもしろく話されて、原稿の清書をたのまれたという。9月1日は210日である。

横田三十三番札所めぐり⑭

第18番　稲田・代畑ノ上　**道場庵**

御仏の誓ひむすべるあやめ草
たどりのぼれば　極楽の堂



会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第256号（7月号）
1996.7.6（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑮

幕末から明治初年の経営の苦境と生産高

幕末の生産性

長年の努力の結果三日押に完全に転換し生産性の年間2割増を達成したのは安政3年1856である。

安政5年1858の生産高と利益は、前期（盆切りまで）42代と後期41代分で

銑・鍒1,099駄余（77%）値段銀73貫905匁（76.6%）

鋼209駄余（23%）値段銀22貫556匁（23.4%）

合計銀96貫464匁

が釜場の収入で、諸経費を差引くと利益は――15貫264匁

この銑・鍒（鋼をとったのこりの歩鍒）の量の上に、他から83駄を買入れて1,182駄とし、3か所の大鍛冶場で割鉄とし（77%余の歩留り）、930駄余を得た。この売価は、銀149貫432匁5で、諸経費を差引くと利益は――15貫125匁

これを米に換算すると（米価は上昇を続けていた別表①）この利益は、釜場・大鍛冶場で各580俵、計1,160俵の収入となる。（絲原家の4年後の年貢米収入は1,750俵）

出雲の企業たちの経営は順調に生産性を向上し、鉄師（大地主層のみ）は拡大を続けて、外国からの洋鉄の輸入増の影響も少なかった。安政5年より8年たった慶応2年1866は第2次長州征伐の戦いが開始されているが、欧州各国との修好条約も結ばれ、開かれた外交関係は新しい時代を迎え、軍艦をはじめ兵器の輸入も増加して行った。

8月、近畿大暴風雨で被害甚大。諸国も同様で大凶作、米その他諸物価ますます急騰し、全国各地に一揆、打ちこわしが頻発した。

慶応3年1867には、前年1石銀1,447匁まで急騰した米価は40%の暴落960匁となった。この年8月下旬に名古屋方面からはじまった「ええじゃないか」踊りは、たちまち全国に拡がり1ヵ月以上にもわたって続いた。これは一種の打ちこわしで、大衆混乱であった。10月将軍徳川慶喜は大政奉還を朝廷にした。

そのころからさらに米価は40%の暴落、割鉄は13%値下がり、鋼は5%の値上がりであった。

釜場の収入は395俵分の赤字となった。割鉄の値下がりにかかわらず、大鍛冶場は若干の黒字を計上し、釜場の赤字は差引若干に留まったが、これから鉄師の経営は不況時代に入った。（別表①参照）

明治初年の鉄師の経営

前回に述べたように洋鉄の生産性が高くしたがって、生産原価が安いことを知った絲原権造は、洋式溶鉱炉方式を導入して改革を考えたが、別表②に見るような、当地方の農鉱一体の状況から（鉄師は領主的存在）、それを慎重に考慮し、農業の構造改革に向かった。

表をみると、仁多・飯石両部は農家1戸当1.5人が製鉄業に関係している実態であった。

鉄師の経営は苦しくなり、鉄師締合書（しまりあい）を交わして経営諸経費の節減もはかったが、どうにもならず、5割操短の生産制限の実施や、山野開拓という副業でもって急場をしのぐという対策も打出した。

ところが、明治10年1877の西南の役とそれに続く物価高騰の過程で、これまで下落していた価格もややもち直して、13年までは収支計算も漸騰しつづけたが、それも束の間のことで、15年からは、経営は赤字に転落して行った。

別表①　値段の変遷

	米（1石・銀・大阪）	割鉄（24貫入・銀）	鋼（30貫入・銀）
1826 文政9	57.0	102匁1分	匁 分 厘 毛 75.1.1.5
30 天保元	84.9	97.4	68.4.1.0
35 6	84.2	84.7	61.4.1.7
40 11	60.6	92.0	73.3.2.8
45 弘化2	91.4	181.0	148.1.6.0
50 嘉永3	138.5	147.5	88.1.5.0
56 安政3	79.7	156.0	89.4.5.8
58 5	126.0	183.1	107.6.5.0
60 万延元	135.4	168.0	103.1.6.7
65 元治元	422.3	276.9	円 銭 厘 4 74.1
67 慶応3	960.0	391.0	4.55.8
68 明治元	483.0 5円98	238.0	4.71.2
70 3	9.20	円 銭 厘 4 94.4	3.40.2
74 7	7.28	9.81.2	9.74.9
75 8	7.28	9.50.0	8.68.8
78 11	6.03	6.25.0	5.76.9
80 13	10.47	8.65.4	6.26.6
81 14	10.49	10.34.6	7.06.3
82 15	8.86	8.62.5	5.86.0
83 16	6.45	6.38.8	?

米価は日本史総覧（近世Ⅱ近代）から
鉄価は絲原文書から（24貫と30貫に注意）

明治維新以後の奥出雲における銑生産の系譜⑮・宮沢賢治誕生百年⑦・俳句・短歌・川柳・横田三十三番札所めぐり⑮

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

それでも10年以前の危機では、かつてのような藩の助成も、特権もなかったが、経営者の鉄師だけで何とかしてゆこうと対策をねっていたが、10年代後半になると、製鉄業の危機は経営内部にとどまらず、地域社会の問題として提起されるようになった。（別表④生産高参照）

明治17年2月には、まず郡内有志の八川村荒木暁一郎、横田

（3頁へ続く）

別表②　明治初年の製鉄業従事者

	所有釜	仝	鍛冶屋	製鉄場関係	関連召抱人	合　計
仁多郡	7		15	2,300	3,500	5,800
（絲原）	1		2	510	1,200	1,710
大原郡	1		2	340	650	990
能義郡	4		12	1,160	3,200	4,360
飯石郡	3		6	2,040	6,130	8,170
神門郡	1		2	160	400	560
合　計	16		37	6,510	15,080	21,890

第30回横田史談会史跡巡り
備中・成羽町と横田㊤

6月27日、日帰りの史跡巡りこぼれ話3話。

㊤成羽町三村氏の祖、南隣りの星田村（現美星町）の三村氏ならびに一族の末孫信原氏と、横田町馬木郷。㊥吹屋ふるさと村－銅山とベンガラの里。㊦町立としては極めて優れた成羽美術館と資料館。

35年前1961『島根県横田町誌』の中世編執筆のため、旧『島根県史』に登載の、雲州仁田郡真木村の地頭職信原氏（三村氏の一族）について疑点があり、成羽町・星田村（現美星町）・備中町・川上町の教育委員会に照合し、研究者の協力を頂いたが、確証を得られないまま、簡略に県史の要点を引用して置いた。県史の原資料は昭和3年1928成羽町信原成器から提供をうけた一冊の「信原氏系譜調査」であるが、これは明治17年1887に信原信太郎氏がまとめられた旨が奥書にある。

その後昭和52年1977に新見市史の編集委員の浅原公章氏から、美星町史史料篇の三村氏関連のものや、その他の研究の詳細なものを頂いた。

ついで川上町史編集のため町教育長一行が来宅され、さらに三宅隆通氏の再度の来訪をうけて、高梁市史の中の三村氏の記述の複写物や、三宅氏の著書を頂いてみると、より三村氏やその一族という信原氏についての疑問が深まった。そして数年前成羽町を訪れいろいろ聞込み調査も加え今日に至った。

高梁市史によれば、三村氏は清和源氏の流れで、新羅三郎義光を遠祖とし小笠原氏を名乗り、常陸国三村郷に住して三村氏と改め、のち信州へ移り、13世紀元弘元年1331三村孫二郎能実の時、備中の星田村（現美星町）に移り、足利直義によって地頭を得、次第に土豪となって力を加えた。隣の成羽は京都の天龍寺の荘園であったが、しきりと三村氏の侵入が行われたことを誌す文書があるという。（仝寺蔵明徳4年1396文書）

（4頁へ続く）

宮沢賢治誕生百年⑦
初めての童話集　『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』

あらすじ　二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬二疋つれて、狩猟で深い山へ入りました。山の中で道に迷ってしまい、腹をすかせているうちに、忽然と現れた立派な西洋造りの家を見つけました。そこには料理店の看板がかかっているので、虚栄心が強くひとりよがりの二人が入っていくと、次々と現れるのは、店主の奇妙な注文を書いたいくつもの扉と長い廊下ばかりで、

RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE
山猫軒

「肥ったお方や若いお方は大歓迎」と書いてありました。喜んで奥へ行くと「鉄砲と弾丸をここへ置いて下さい」とか、「壺の中のクリームを顔や手足にすっかり塗って下さい」、「頭に瓶の中の香水をよく振りかけて下さい」など、いろいろと注文がうるさく、二人は訝かりながら、さらに奥へ行くと、「塩を体にもみこんで下さい」と書いてあるので、やがて二人は、店主の山猫によって西洋料理にされるため、注文を受けていたことに気がつき、恐怖のあまり声も出ず泣き出します。が、危機一髪で犬と猟師に救われ、山鳥を十円分買い東京へ帰りました。ただし、恐怖で紙くずのようになった顔だけはもとに戻りませんでした。

宮沢賢治の名は詩によるよりも、数多く残した童話によって世に知られている。この童話は最初の第一童話である。イーハトヴについては、あとで述べるとして、賢治の思想は童話によって最良に表現されているとする人が多い。尋常な人間世界から離れて、夢の世界、動物の世界、あるいは死の世界に遊び、いずことも知れぬ外国の風土に、故郷岩手を擬していることも、非現実の世界こそ、賢治の理想を語るにふさわしかったからにほかならないといわれている。弱者、愚者への愛情や自己犠牲の精神も、仏教思

村岡崎健蔵、湯村川角松蔵、佐白村馬庭又右ェ門らが代表となって、鉧製鉄の不振が仁多郡全体に対して重大な影響を及ぼすことを9種目あげて、具体的に記し、広島県が行っているような県としての助成を嘆願した。

製鉄業の衰退は地域住民の生産と生活に大きな影響を与えることになるにもかかわらず、県からは何らの措置もとられなかった。そこで絲原権造は、島根県会に宛て嘆願書提出するとともに、郡内各町村々長に、製鉄業の復旧維持について方策を諮問し、町村長としての対策を要望したのである。

出雲の生産品の主力は銑

今日、「たたら」と言えば、「玉鋼」「日本刀」と連想して、過去の企業たたらを理解し、評価するが、それは大きな誤りを犯しているのである。鉄の道文化圏の六市町村の展示や、出版物にも、その誤りが多い。

このことについては、今までも書いて来たが、今後冶金学的立場も加えて、軌道を正したいと思っている。

別表③は、明治8年のものと推定する。（絲原権造が鉄師頭取に任命されると、全鉄師から生産高の報告を各鉄師に求めていて、絲原家文書には数鉄師のものが残っている）

表や下の註記を読めば、銑生産に主力があり、それを大鍛冶場で割鉄とした収入が、この年で70％に及んでいて、鉄師の収益の大部分を占めているのである。鋼を玉鋼と当地方で呼称するのは、海軍省に納入するようになってから、その形状によって区別するためであった。

別表③　明治初年の出雲国の鉄生産量

	鉧					鍛冶屋		
	鉧数	鋼	銑	鍮細	合計	代金	鍛冶屋数	割数	代金
		駄	駄	駄	駄	円		駄	円
仁多郡	7	2,450 (8,575円)	5,250	3,850	11,500	21,840	14	7,140	27,132
大原郡	1	350 (1,225)	750	550	1,650	3,120	2	1,020	3,666
飯石郡	3	1,050 (3,675)	2,250	1,650	4,950	9,360	6	3,060	11,628
能義郡	6	2,100 (7,350)	4,500	3,300	9,900	18,720	15	7,650	26,775
神門郡	2	700 (2,450)	1,500	1,100	3,300	6,240	4	2,040	7,140
合計	19	6,650 (23,275)	14,250 (21,375円)	10,450 (14,630円)	31,350	59,280	41	20,910	76,041

全生産量中　割鉄は68.2%　鋼は31.8%である。
仁多郡がいずも国内に占める位置は、鉧数で約37%、鍛冶屋で約34%、割鉄生産量で約34%、鋼生産量で37%で、各々⅓強であった。

奥出雲の鉄生産の最盛期は

別表④をみると、島根県が和鉄・洋鉄を含めての全国の生産高で最高を占めるのは、明治15年1882の52.4％で、6,368ｔである。

別表④　和鉄・洋鉄の生産高
（洋鉄は釜石・八幡の両製鉄所）

	1879	1882	1889	1899	1901	1904
	明治12	〃15	〃22	〃32	〃34	〃37
中国地方	86.0	89.7	79.1	38.6	29.1	20.2
鳥取県			15.9	11.5	9.7	9.4
島根県	50.8	▲52.4	33.8	15.6	12.3	9.1
広島県(官営)	11.8	5.3	14.4	5.5	2.3	
〃 (民営)	15.0	1.7	10.0	5.9	4.6	
岡山県	8.4	7.9	4.9	0.2	0.2	0.1
岩手県	7.2	8.6	19.9	61.2	65.9	79.8
釜石製鉄所	0	3.7	14.3	55.0	51.1	69.9
その他	7.2	4.9	5.6	5.4	14.8	9.9
その他	6.8	1.7	1.0	0.1	5.1	極少
八幡製鉄所	(生産高)				釜石の⅓弱	釜石の2倍弱

▲実数6,368ｔ（全国総実数12,164ｔ）
数字は全生産量に対する割合(%)

想の体現を目指した賢治の行動の現われで、読むものに自然な共感を覚えさせるところに、賢治の童話の魅力があるといわれる。

この童話は、徹頭徹尾、人を食った構想の運びであり、巧みに設計された奇抜な物語であるとし、殺生を道楽とする狩猟家への鋭い諷刺であり、そしてユーモア（笑い）であるとされている。

「イーハトヴ」は一つの地名であって、童話「不思議な国のアリス」に出てくる「鏡の国」と同じ世界の中のものであろうといわれ、「ドリームランド＝夢の国としての日本岩手県」であろうといわれる。地方の岩手県に非常な自信と愛着をもつ賢治が、つくり出したものである。現実の岩手県ではない「ドリームランドとしての」という重要な限定がある。「岩手県」でない、「日本岩手県」といっているところが重要である。生まれ育って、もの心ついた時からここで感受性が形成され、賢治詩や童話の芽が育ったから、いろんな作品が生まれたという土地であることである。

（蓬頭子）

柴栗句会六月抄

柿の実が落ちて上向く臍に似て　浅野としお
国穢り稲佐の浜より若布売り　糸原古志
日を掬いキラキラ散るや竹の秋　恩田和美
菖蒲湯や子育ての日々なつかしむ　加納信子
たたずめば代田に落すとんびの輪　楠房子
蟠り解けし若葉の降る小道　高木白虹
つつじ萌ゆ銅剣謎を秘めしまま　新出谷一華
卯の花の頃はやさしくなれそうで　中澤美紀子
耐えて来し長き病や葉桜に　錦織菊江
わらび汁酒粕もとき朝すがし　峯石美代子
鍬胼胝にまづ唾をして春田打つ　渡部夕峰

卒然と　簸の上短歌会

釣り人は河原の蕗を一抱え持ちて車に戻り来にけり　永井弥生
五月晴れの今日は貴女の誕生日又頑張らうねと病母の頬撫づ　〃
霧雨にけむる寂けきひかりにし又嘆かひて君を言ふなり（悼小田君）　常盤はるまさ人
卒然と涙にじみて祭壇の君のうつしゑにわれは近づく　〃
若き日の面輪うつしゑに重ねつつ如来寿量品ねもごろに誦す　〃
発ちし孫の部屋に二本のチューリップ色褪せしまま瓶にさしあり　景山悦子
和歌山より空港乗りつぎ参加せる友あり松江高女同窓会　野村節子
七十を過ぎたる齢いつまでと寂しきことなど互に言ひて　〃
昨日よりの青葉嵐のおさまりてしきりに背戸に老鶯の声　岡田時子
ままごとに草摘む曽孫との毎日にわがさきゆきをおもひみるかも　〃
妹の葬り終へて帰る夜車窓に映る漁火わびし　安部夕波人

斐の上川柳六月の句

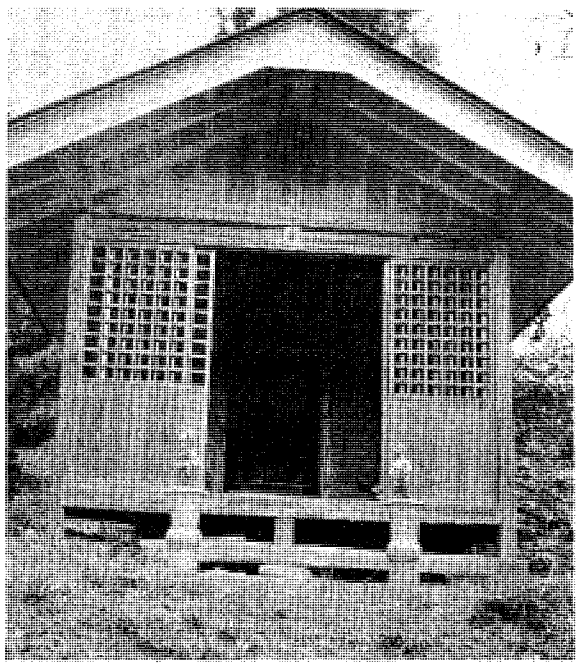
お似合いとほめ合っている衣更え　石原冬明
あげ羽蝶新婚旅行かひらひらと　渡部ミツコ
母の日はお花に電話もてること　渡部児玉えみ
久しぶり風が運んだよい噂　真綿よし子
隣席の貧乏ゆすり気にかかる　藤原千代子
どっこいしょこの一声が身を助け　安部正子
孫帰りしぼんだ風船部屋の隅　田部都
ばあちゃんの留守おとなしく孫昼ね　藤原のぼる
母の日の電話の用は妻ばかり　児玉哲呂
草花の首輪残して曽孫去き　安部春恵
脳味噌はのっぺらぼうか言葉出ず　松浦亜以
世の中を怒って笑って五七五　松田牛歩
玄関に母の日ですと赤い花　渡部かおり
八重垣の池に賽銭適齢期　足立玉恵
ひとつ終え間なしに仕事二つ増え　田中芳春

美星町史の資料編の三村氏系譜には、信州洗馬郷三村氏のかなり詳しい研究が載っているが、洗馬郷の三村氏と、星田村に遷住した三村氏については、諸種の遺跡等の検討から関連性が薄いことも指摘してある。ほかに因幡の三村氏、讃岐高松藩の三村氏さらに新見市の三村氏の系譜も検討してあるが、種々な異同がある。また美星町内で発見された三村穣家文書の全文が載せられているが、執筆者は、これらは写文であり、文書形式からも疑点があるとしている。『島根県史』そして『横田町誌』の信原氏については、私の疑問は深まるばかりで、それらが原本とした信原氏系譜は、これら諸系譜にもとづいて明治初年に作成されたものであろうと考えるに至っている。

この度成羽町を訪れて、町史の記述の中に星田村三村氏の子孫、三村信濃守家親が天文3年1533毛利氏の援助で天竜寺荘園成羽郷に侵入、鶴首城の大改造を行って、戦用の城としたとあるのを読んだ。

私は二度目の訪問であるが、源樹寺の本堂は大改築中であった（備中巡礼第11番札所）。永禄9年1566、三村修理大夫家親が美作で、宇喜多通家の刺客に殺されたので、子元親（高梁市の松山城主）が城下の頼久寺に葬ったのち、現在の成羽の佐原にその菩提を弔うために創建したのがこの寺であって、寺の東方に121cmの大理石製の法篋印塔には、「開基　源樹大居士」と刻されている元親の墓があった。

（横田史談会　高橋一郎）



横田三十三番札所めぐり⑮

第19番　稲田・的免　**福寿庵**

ゆきかえる道のちまたにことぶきの
妙なる法を伝ふ松風



会員頒布一部百七十五円／六九ノ一八　島根県仁多郡横田町一、〇八二ノ二　編集発行責任者　高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第257号（8月号）
1996.8.2（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

秀吉の時代の奥出雲④

—永禄8年1565 29才より天正4年1570 40才まで—

一夜城の築城と京都奉行

永禄8年1565 11月2日誘降（降伏の誘い）に戦功のあった坪内喜太郎利定に藤吉郎は知行宛行状を出した。それは良質な史料とされている、木下藤吉郎秀吉と署名のある最初のものである。

翌9年は秀吉を一躍有名にした、墨股一夜城の築城が行われた。信長の岐阜攻略の交通上・軍事上の要地であったが、低湿地帯であった。重臣らの失敗のあとをうけ、用材を筏に組んで渡し、数日で完成した。（一夜城は誇張）翌10年信長は美濃奪取に成功する。

翌11年足利義明を擁して上洛する。信長は義昭を将軍とすると岐阜に帰り、秀吉を京都奉行に加えた。永禄12年から翌元亀元年にかけて将軍側の政治に対して、奉行との二元政治が行われた。次第に明智光秀ほかとの連署状がへって、秀吉の単独署名のものが多くなってゆく。秀吉の地位の強化がわかる。

このころの奥出雲——天文10年1541尼子経久の子晴久は、備後吉田城毛利攻めに大敗する。

三沢為幸討死（子為清3才）。そして大内義隆石見銀山を攻略、この苦境のうち経久死す。

仝12年、晴久大内を破り反抗に転ずる。近国に勢を振うが、仝23年1554一族の新宮党国光が暗殺されたことによって、尼子氏は智将も失い威勢衰う。

永禄3年1560毛利元就によって毛利検地が始まる。元就石見銀山を攻略、手中に入れる。

姉川の戦いと志賀の陣

（元亀元1570～2年　34才～35才）

越前の戦国大名朝倉氏征伐のため、元年秀吉は軍功めざましく越前の金が崎城へ入ったが、北近江戦国大名浅井長政（妻は信長の妹お市）が反旗をひるがえした。信長は秀吉を残して帰ったが、この時さらに秀吉は武名を高めた。2か月、織田・徳川連合軍34,000と浅井・朝倉連合軍18,000は、近江の姉川をはさんで対峙し合戦となったが、織田が大勝利を得た。近江に残った秀吉は、ここでふたたび活躍をはじめる。

秀吉は琵琶湖竹生島の宝厳寺に対して、寺領安堵を出した。（こゝにはかつて尼子氏も寄進したことがある。既述考証済）

秋になると、石山本願寺（大尼子晴久死す。

仝9年毛利軍富田城を陥れ尼子80年にして亡ぶ。毛利氏は10か国の大名となり、部将吉川元秋（元就7男）富田城に入り、慶長5年に至る35年の間、雲石は毛利の支配下に入る。

元秋の妻は横田藤が瀬城主三沢為虎の妹であった。奥出雲の固めを考えたであろうか。

宮沢賢治誕生百年⑧

略年譜

ここで賢治の生いたちと成長と影響を与えた人々をみておく

西暦	年号	年令	事柄
1896	明治29	2	8月27日、父政次郎、母イチの長男として岩手県花巻市豊沢町4丁目11番地に出生（戸籍簿では8月1日出生）。ただし実際に生まれた場所は母の実家である宮澤善治方（川口町429番地）。家業は政次郎の父喜助が開いて発展させた質・古着商。この年の東北地方は三陸大津波や洪水、陸羽大地震さらに秋にも豪雨禍にみまわれた。
98		3	11月5日、**妹トシ**出生
99		32	父の姉で結婚に破れ実家に戻っていたヤギ（当時30歳）が子守歌のように賢治に「正信偈」「白骨の御文章」をきかせ、賢治も唱えたという。
1901	34	5	6月18日、妹シゲ出生。この年、豊作。
02	35	6	9月、赤痢を病み隔離病舎に入る。祖母の妹キン（51歳）が付き添って昔話をきかせた。父政次郎も看病中感染して入院。この年東北地方凶作。
03	36	7	4月、町立花巻川口尋常高等小学校（明治38年から花城尋常小学校と改称）1年入学。この年、前年の凶作のため東北地方飢饉。
04	37	8	4月1日、**弟清六**出生。この年2月日露戦争始まる。
05	38	9	童話を好み4月から担任の八木英三、教室で『まだ見ぬ親』（エクトル・マロ原作、五来素川翻案）を読みきかせ、つよい感銘を与える。12月、花城の新校舎に移る。この年東北地方大凶作。石川啄木の『あこがれ』出版。
06	39	10	8月、父および有志運営の夏期仏教講習会（大沢温泉。講師暁烏敏）に参加。この年鉱物・植物採集、昆虫標本作りに熱中。綴方の宿題で長詩「四季」を書く。

秀吉の時代の奥出雲④・宮沢賢治誕生百年⑧・備中成羽町と横田（中）・川柳・俳句・短歌・横田三十三番札所めぐり⑯

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

阪）が諸国の門徒に檄をとばし、信長に対抗して決起を呼びかけた。浅井・朝倉は30,000の兵を率いて連絡をとりながら、坂元にまで進出した。戦は膠着しいる時、伊勢の長島一向一揆の動きがあり、将軍・天皇を動かして暮、講和にもちこまざるを得なかった。窮地はなんとか脱した。

翌2年正月、信長は秀吉に姉川封鎖を命じた。北陸方面から大垣への商人をはじめとする往還の人間に対して交通遮断をし、越前朝倉と越前一向一揆と石山本願寺との連絡をたとうとした。8日近江へ出陣した信長は9日には、秀吉・光秀に命じて、比叡山の全山焼打ちをさせたのである。

秀吉近江三郡の大名　羽柴と称す（元亀3 1572 32才～天正4 1576 40才）

元亀3年信長の三男三七郎信孝が元服した。翌4年天正と改元。信長の将軍義昭との軋轢は日増に増大。ついで7月16日、宇治の槙島城に拠った義昭を包囲し追放した。

このころ秀吉は羽柴藤吉郎の署名をはじめた。将軍追放すなわち室町幕府滅亡が契機であったと言われる。

秀吉は浅井長政の小谷城をとりまく支城の城主即ち重臣を得意の調略で一人ひとり誘略していった。遂に完全に孤立させ城を攻めた。援軍としてきた越前の名族朝倉も自刃し滅亡した。

後顧の憂いをのぞいたので、秀吉は、信長の命をうけ、小谷城を攻め、長政も自刃した。夫人は信長の妹お市の方、その三人の娘、茶々、初、小督は助けられ信長のもとに届けられた。

元亀元年6月の姉川の合戦以来、3年余の歳月を要した、浅井、朝倉攻めも一段落し、秀吉には浅井の旧領北近江の伊香・東浅井・坂田（あとで当地方とかかわりがでる）三郡の12万石の地が、小谷城とともに与えられ、秀吉ははじめて一国一城の主、大名となった。

小谷城は不便なため、かつて京極氏の支城であった今浜に新城を築いた。天険の要害の城の山城は、時代流れで戦いより支配に重点が移り、平山城・平城へと移っていた。湖畔に面した今浜は、湖上輸送に利便であり、鉄砲生産地国友を掌握するにも便利であった。新しい城下町は天正2年1574かなりの月をかけて築城、翌3年ここに移り、商人を招いて急速に町を作り長浜と改称した。

天正2～3年にかけて、伊勢長島一向一揆、長篠の合戦、越前一向一揆の平定など、信長の天下統一事業は急転回をとげた。

秀吉の大活躍が力であった。

天正4年正月中旬、信長は安土に築城を命じた。

5月に入り、石山本願寺との戦いが本格化した。信長対本願寺の戦いというより、本願寺に兵糧を送り込もうとする毛利軍との戦いとなり、木津川河口の合戦で織田水軍は、毛利水軍に敗れた。そこで信長は秀吉に中国経略を命じ、秀吉は長浜から京に入った。秀吉にとって中国経略という、新しい重大任務を帯びることになった。

（この経略中尼子滅亡後の毛利輝元の下にあった藤ヶ瀬城主三沢為虎が、再び横田庄代官職を兼ねて国人衆として両者の合戦にあらわれてくる。）

（次は上月城・高松城水攻め・本能寺の変に進む、そして信長と秀吉との天下盗りの違いに触れて時代の推移も考えたい）

				12			11			10	
				大正1			44			43	
				17			16			15	

			09			08			07		
			42			41			40		
			13			12			11		

3月4日、妹クニ出生。鉱物採集にいよいよ熱中して「石コ賢さん」とよばれる。八月、夏期仏教講習会に参加、講師（多田鼎）の侍童をつとめたという。この年盛岡高等農林の関豊太郎教授（のち賢治を指導）、凶作と海流の関係を究明する論文を発表。

9月、国語綴方帳に「遠方の友につかはす」「皇太子殿下を拝す」を書く。

2月、国語綴方帳に「冬季休業の一日」を書く。3月、花城尋常高等小学校卒業。成績は6年間すべて全甲であった。4月、県立盛岡中学校（現在の盛岡第一高等学校）入学、寄宿舎自彊寮に入る。ランプの掃除など率先してやる真面目な舎生であった。余暇を見出し、近くの山野を歩いては岩石標本採集に熱中。Helpという綽名がつく。成績中以下。

6月、博物教師の山県頼咸に引率されて岩手登山。9月、英語教師および有志と再び登頂。この月、同室の親友藤原健次郎病死。柳田国男『遠野物語』、啄木『一握の砂』出る。

教師への反抗的態度を見せはじめる。この年あたりから短歌制作はじまる。8月、大沢温泉での夏期講習会に参加。島地大等の講話をきく。

5月、松島・仙台方面へ修学旅行。はじめて海を見て感激する。11月、静座法の佐々木竜眼に指導を受ける。この年、石川啄木死去。

3月、祖母キン死去。3学期、新舎監排斥の動きあり、賢治も加担、同級生と共に暴れ、4、5年生全員退寮となる。成績落ち、操行落第点となる。盛岡市北山の清養院（曹洞宗）に下宿。仏書に親しむ。5月、北海道修学旅行、帰盛後、徳玄寺（浄土真宗）に移った。秋報恩寺に参禅し、頭を剃りて登校す。この年岩手県大凶作。

第30回横田史談会史跡巡り
備中・成羽町と横田㊥

吹屋銅山と出雲の製鉄業

銅山のおこりについては

①平安時代大同2年807説

そして寛政3年1791から文化元年1804に吉岡銅山発見という

②南北朝応永10年1403説

文化元年1804の当地の大塚家文書に「四百余年に成申候々々」とある。

天文年間1532～1554に尼子氏の所領となり、大塚孫一ほかが請負人として経営した。永禄～天正年間1558～1591には毛利氏の所領となり、銅山役所で経営したという。この間数百の人家連なり、社寺遊女町その他軒を並べると伝う。

関ヶ原の合戦1600以降は備中松山城（高梁市）に入部した備中代官小堀政次、政一（遠州と号しお茶大名として築庭にすぐれ遠州流の祖）の下で、吹屋の大塚伊兵衛を請負人として、「村稼ぎ」の形で経営した。これまでの経営は領主交替があっても、その請負人は一貫して地元の大塚であり、農民の鋼山稼ぎを主力とした。奥出雲は鉄師は水田山林大地主で、そこに働らく小作人とは自然を相手とする農鉱一体の領主的存在であった。

ここは請負制のため、銅山内の危険と重労働の苦役の連続であって、石見銀山と同じ、近くには多数の五百羅漢の石像が供養としてまつられている。当地方にはみられない。

近世に入り元和4年1618山崎氏が因幡から成羽藩主として入部すると20年間は「村稼ぎ」的方法を改め、領内豪商の請負となったが、再び代官支配となり、ついで大阪、堺の有力な銅山師の請負人となった。そして代官は過重な運上銀を課したので、掠奪的採掘が行われ、生産は急増した。

元禄年間1688～になると、泉屋（住友の祖）が請負って、疎水大坑道の掘さくに成功して西国一の名銅山となった。20数年後四国の別子銅山の経営に移った。

その後休業、請負人の変遷があったが、地域住民のためと大塚家が経営を続けたが盛衰があって、明治6年1873三菱の岩崎弥太

斐の上川柳七月の句

老い一人トマト胡瓜に励まされ　松浦久寿子
残り酒囲んで笑顔寄ってくる　児玉哲呂
おじいちゃん揉んでに孫のトレーナー　藤原のぼる
捨てる気で出したに又も元のさや　よし子
手が増えたでも戸惑って図どらず　真綿友樹絵
留守の間に誰れの懇志ぞ貰い物　田中凡太
笹巻も終えてホットし句を作る　木春恵
旅帰りとたんに独り粗膳なり　安部ミッコ
警報になって小川の音を聞き　渡立玉恵
客だのに片付けのこと心配し　足児えみ
庭木にもはさみを入れて見栄える　安部正子
五パーセント田舎も一緒に走り出す　田部都以
丑の日の鰻は一切れづっとする　松浦亜かおり
身を削りて待ちぼうけ　渡部牛歩
強情と頑固が同居老の部屋　松田冬明
買置きの本読みつくす雨続き　石原千代子
よい方にばかりとれない意地もある　藤原まこと
新聞のちらしほどでもない売場　横山芳春
同窓の光が消えてまた喪服　田中

3月、盛岡中学校卒業。成績は次第に下降していたが4年修了時は90名中42番、卒業時は88名中60番であった。4月、肥厚性鼻炎手術のため盛岡市内の岩手病院へ入院。手術後高熱、チフスの疑い。父も看病中また倒れる。同年の看護婦に恋。5月末退院。家業への嫌悪や将来の希望のなさから悶々とした日々を送るが、秋、島地大等編『漢和対照　妙法蓮華経』を読み激しく感動。父から進学許可も出て受験勉強に励む。この年、第一次世界大戦。田中智学、国柱会創立。

（田中智学10才で出家、立正安国会（国柱会）創立、日蓮主義運動展開。高山樗牛・姉崎正治ら支持す）

1月から北山の教浄寺（時宗）に下宿。4月、盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）農学科第二部に首席入学、寄宿舎自啓寮に入る。指導教授関豊太郎。（同じ4月**妹トシ**は日本女子大学校家政学部へ入学）8月、願教寺で島地大学等の歎異抄法話を1週間聴く。この年、片山正夫『化学本論』刊行、賢治の座右の書となる。また初めて妙法蓮華経を読んで感激す。以後座右の書とす。（この年横田町の故**安部憲吉**ー県農会技師のち横田町長は、この学校2年に在学中。生前に聞いた話では賢治は黙々と活動していたという。）

3月、修学旅行、東京・京都・奈良の各農事試験場等を見学。5月、自啓寮懇親会で保阪嘉内作「人間のもだえ」に出演。7月、関教授の指導下に小菅健吉らと盛岡地方地質調査（翌年の「校友会会報」に調査報告文を発表）。8月、上京してドイツ語講習を受ける。9月、関教授指導の秩父地方土性・地質調査見学に参加。「校友会会報」に「健吉」の名で短歌29首を発表。

（蓬　頭　子）

柴栗句会七月抄

何着ても似合ふ女なりことに羅は　浅野　としお
ちょっかいをかけてやろうか雨蛙　糸原古志
病む妻に悲しき夜半の時鳥　恩田和美
新茶汲み浅き眠りをもて余し　加納信子
牛小舎を十字に仕切る親燕　楠　房子
敦盛草隠れ平家の声幽か　高木白虹
紫陽花を色濃く咲かせ老二人　中澤美紀子
恍惚の老母の嘆き梅雨ホーム　新出谷一華
日々待ちて子と酌む夫のビールかな　錦織富江
手の平を広げて幸のうすき梅雨　峯石美代子
水平ら湖面におとす合歓の花　渡部夕峰

小さきいたみ　簸の上短歌会

鍬つかひを止められしかば退院の日より素直に日々すごしゐる　常盤はるまさ
朝毎に目尻に涙ためてゐる寝たきりの妻昨夜も泣くや　全人
久しぶりに一族に逢ふやすらぎに母の葬りもぬくき雨なる　永井弥生
ほの白きほたる袋のうつむきにはるけき夏の小さきいたみ　全人
まごとに明け暮れし曾孫もこの夏は赤き水着でプールへいそぐ　岡田時子
小川辺に蛍は友を誘ふらむか点滅しげく空に舞ひをり　全人
今年きりと言ひつつ幾歳ささ巻のふるさとの味子らに届けぬ　野村節子
おばあちゃん　粽食べてる　美味しいよ　受話器にはづむ幼らの声　全人
癒ゆるなき病と知りしか三人の子らをたのむと姪は泣きたり　安部夕波

会員頒布一部百七十五円／〒九一八　島根県仁多郡横田町一、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇—九—一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四—五二—〇一九一）

郎が近代的経営に乗り出し、自家水力発電による揚水ポンプ、機械化、やがて洋式溶鉱炉精錬、輸送の近代化を計った。

最盛期には1,200人の従事者がいたという。第一次大戦後不況で昭和6年閉山。のち昭和25～47年まで吉岡鉱業所が経営して閉山となった。

弁柄生産と町並み

弁柄（べんがら）はインドのベンガル地方に産した赤色染料が日本に輸入され、地名が転化して名となったという。江戸時代の宝永4年1707から製法が入り、宝暦元年1751銅山で採掘する黄銅鉱と併合して出る硫化鉄鋼を用いてベンガラ生産が盛んとなり、製造所を設けて、10軒近くが製造して昭和47年まで続いたが、製法の近代生産法に勝てず廃業した。

吹屋町の町並は、山方地区（坑夫長屋、飯場）と町方地区（問屋・小売商）とに別れているが、今は後者が保存地区として昔の面影を残している。

弁　柄

硫化鉄鉱を砕いて、薪と交互に積重ね、30～50日間焼き続けて硫黄分をのぞき、のち3段階の処理を経て縁礬をつくる。これをさらに四工程の手間をかけて製品の弁柄とする。

九谷・伊万里の焼き絵や、輪島の漆器その他の塗料に使用された。

銅山経営やローハー製造を営んだ、広兼・西沢の両邸は公開されている。前者は映画「八ツ墓村」のロケーションの行われたところである。

横田三十三番札所めぐり⑯

第20番　原口（火の見の下）　普門庵

唯思へ普門のうちに入りぬれば
心にかかる雲霧もなし



写真　横田史談会　佐世川　徳雄

詩　七夕　宮沢賢治

瓜熟れて　籠にみつれば
大祖父の　舟を泛ぶる
七夕の　いろがみ購ふと
つゝましき　へさきのうなる
川ふたつ　こゝに集いて
はてしなく　水沫
（うなるーここでは髪を肩までのばした幼い子）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第258号（9月号）
1996.9.6（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団
横田史談会

©

秀吉の時代の奥出雲⑤

1577天正5年（41才）～1582天正10年（46才）
—本能寺の変まで—

この頃の奥出雲

1550永禄2三沢毛利の配下に。
3毛利石見銀山攻撃。三沢度々誓書を毛利へ。郡内尼子勢力一掃。
5毛利赤穴より出雲へ。
8〃〃富田城へ総攻撃。
9尼子富田城開城。
1570元亀元尼子再起し布部合戦大敗
1575天正2三沢為清隠居亀嵩に築城。
5〃〃亀嵩城へ
6上月城の合戦、三沢為虎参加。これより毎年為虎毛利に誓紙を出す
9秀吉鳥取城「渇泣し」の攻撃。
10備中高松城水攻攻撃。
信長の死により和睦。
三沢一族に離反者あり。

秀吉へ中国経略の重大任務

中国経略という重大任務を信長から与えられた秀吉は、早速、得意の調略によって味方とすべき武将への働きかけを開始した。その手はじめとなったのが小寺孝高、すなわち黒田官兵衛孝高、のちの如水である。孝高の父職隆が、赤松氏の一族で播磨御着城の小寺則職の家老であったという関係もあり、孝高も16歳で小寺氏に仕え、姫路城を預けられるほどの重臣であった。秀吉は、この孝高の子松寿（のちの長政）と別所重棟の娘との婚約を結ばせ、2月10日、松寿を信長のもとに送って人質とした。なお、5月には荒木村重・小寺政職らが一向一揆の英賀門徒と交戦するという一幕もあった。

しかし、秀吉は中国経略に専念できたわけではない。8月8日には、柴田勝家を総大将とする上杉謙信攻めの大軍が北国にむけて出発したわけであるが、これには滝川一益・丹羽長秀・前田利家らとともに、秀吉も播磨から急拠よびもどされ加賀に攻め入らされることになった。そして10月23日にはいよいよ秀吉の出陣となり、京都を発した。まず小寺孝高の姫路城に入り、播磨国内で秀吉方に味方する諸将から人質をそれぞれ取り、ついで但馬にまで兵を進めて岩淵城を攻めた。

こうした秀吉の電光石火の早わざに、西播磨の諸城はまたたくまに平定されていく。しかし、上月城はなかなか落ちなかった。秀吉は小寺孝高および竹中重治に命じて備前の宇喜多直家の支城播磨福原城を攻略させるいっぽう、自ら兵を率いて上月城を囲み、その救援にきた直家の軍と戦ってこれを破り、ついに12月3日、上月城を落城させることに成功し、尼子勝久・山中鹿之介幸盛を上月城に入れた。この時の播磨経略の戦功の賞として、秀吉は乙御前の釜を与えられ、以後、茶湯会をもつことが公認されたという。

翌天正6年正月一日、安土城で元日の茶会が行なわれ、秀吉・明智光秀・丹羽長秀ら主だった者12人が招かれた。しかし、2月23日には秀吉は再び播磨に入り、書写山に陣をしいた。秀吉にとっては新しい試練、すなわち三木城の別所長治が、一度は信長方に帰属していたにもかかわらず、毛利輝元と通じて秀吉に反旗をひるがえしたのである。

4月2日、秀吉は三木城の支城野口城を攻め、城将長井四郎左衛門をくだし、5月4日には、上月城を囲む毛利勢に備えるため陣を高倉山に移した。このころから動きはにわかに急になるが、5月16日には但馬の山名豊国が秀吉に好を通じてきたため、その所領を安堵している。ついで5月21日、上月城包囲に加わっていた清水宗治の居城備中高松城を秀吉の軍勢が奪い、ついで清水宗治によって奪いかえされるということがあった。

ついで21日、毛利勢と秀吉勢が上月城下で合戦し、秀吉勢が敗れ、ついに秀吉はやむをえず陣を書写山に移す。26日、秀吉らの軍勢は尼子勝久・山中幸盛をみすてることになった。

秀吉勢にみすてられた上月城では、毛利勢の攻撃を防ぎきれず、ついに尼子勝久は7月5日自殺、山中幸盛も降参して捕虜となり城を出たが、毛利氏の手によって殺された。

10月15日、秀吉は三木城攻撃のための付城において茶会を開いた。これは、秀吉自らが開いた茶会としては初めてのもので、信長から拝領した乙御前の釜を用い、同じく拝領の品である牧谿筆の月の絵を掛けて行なったという。

秀吉の姫路城入り

天正7年秀吉三木城の支城丹生山城を落し、三木城孤立化への足がかりができた。

年が改まって天正8年正月17日、別所長治が自殺して三木城は落城した。やっと秀吉は姫路城にもどることができた。

この年播磨の太閤検地を行った。この年織田政権下という条件のもとではあったが、秀吉の検地のはじまりとして重視される。

天正9年（1581）も前年と同じ

秀吉の時代の奥出雲⑤・宮沢賢治誕生百年⑨・短歌・川柳・俳句

ように、秀吉の本拠は近江長浜城で、そこには妻・母および養子秀勝がいた。しかし、秀吉自身は、中国経略の拠点として播磨の姫路城に居城することが多かった。

ちなみに、6月12日に、姫路城で茶会が行なわれているので（『津田宗及茶湯日記』）、そのころまでに姫路城は完成していたということになろう。この茶会では、尼子勝久が秀吉に献上した〝灰かずきの天目〟が用いられていた。

ところで、この春のこととして「異本塔寺長帳」は、秀吉の姫路城修築をあげている。秀吉と姫路城との関係は天正5年、中国経略にあたって、その拠点として黒田孝高の案内で播磨平定に動き出して以来のものである。もっとも、秀吉時代の姫路城の規模は、江戸時代の姫路城とは比較にならないくらい小規模ではあったが、それでも三層の天守閣を備えたものだったと伝えられている。

播磨・但馬が平定され、次の秀吉の攻撃目標は因幡である。6月25日、秀吉は2万余の軍勢を率いて備前・美作を打ち越し、但馬口より因幡に乱入、吉川式部少輔経家の楯籠もる鳥取城を囲んだ。

包囲の前から秀吉は兵糧攻めの緻密な計画を練っており、兵糧が城中に運びこまれるのを少しでも少なくさせるため、因幡に軍兵を進める前に、因幡中の米を時価の数倍で買い集めたといわれている。また、因幡の農民に対し虐待を加え、一人でも多く城中に逃れるようにしむけたという。つまり、籠城した場合、食糧を一日でも早く食いつぶさせようとしたものである。

8月13日、安芸より毛利・吉川・小早川の軍勢が鳥取城の救援のため大軍をくりだすという情報が信長のもとに入った。信長は、もし毛利が兵を動かしたら自身出馬するつもりであるといって、長岡藤孝らに出陣の準備をさせている。

籠城戦は長びき、その間に9月、毛利氏の水軍と、秀吉の水軍とが因幡の湊川口で戦うということがあり、秀吉の水軍の大将松井康之は伯耆泊城まで進んだ。

2万余の大軍に囲まれた鳥取城では、いよいよ食糧が底をつき、城中から助けを求めて柵に取り付く者もあらわれ、秀吉軍がそれを鉄砲で撃つと、腹をすかした城中の者が、まだ息のあるうちにそれに飛び付いて食うというありさまとなったという。さすがの吉川経家も守り通すことが困難であると考え、ついに4月25日、城兵の助命を条件に切腹し、城を開けたのである。秀吉は早速宮部継潤を城将として置いた。

ついで秀吉は、吉川元春の大軍と伯耆の馬山で4月28日対峙したが、適地に深入りすることをきらって兵を播磨にもどし、ついで鋒先を転じて淡路を攻め岩屋城・由良城を攻め、11月17日姫路に兵をもどした。ここに淡路が平定され、秀吉は仙石秀久に淡路を与えた。

11月20日、秀吉は播磨の清水寺に寺領を寄進し、12月22日いったん姫路城にもどって、安土にむけて出発。その途中12月27日、摂津の茨木城において茶会が行われた。このとき、紹鷗の小壺・釜・針屋肩衝などの名物茶器が用いられており、主君信長の影響をうけて、次第に秀吉も茶人の仲間入りをしていったことが

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

宮沢賢治誕生百年⑨
略年譜（中）

ここで賢治の生いたちと成長と影響を与えた人々をみておく

西暦	年号	年令	事柄
1917	明治6	21	1月、家の商用で上京、明治座で一幕見。7月、小菅健吉・保阪嘉内らと同人誌「アザリア」創刊、この年第4号まで発行、短歌・小品文などを発表。「校友会会報」にも筆名「銀縞」で短歌を発表。8月、高橋秀松らと江刺郡地質調査。9月16日、祖父喜助死去。10月下旬、弟清六らと岩手登山、柳沢より山頂に白光を見る。昨年に続いて特待生、級長となる。従弟宮沢安太郎、弟清六と共に下宿する。
18	7	22	2月、「アザリア」に断章「復活の前」発表。保阪嘉内、同号掲載の「社会と自分」中の表現がおそらく因となって退学処分となる。2月、得業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を提出、3月、得業証書取得。4月から研究生となり、9月まで関教授指導下に神野助教授・小泉教授（林学）と稗貫郡土性調査。この間、6月末に肋膜炎、1か月静養。8月ごろ、童話「蜘蛛となめくぢと狸」「双子の星」を弟妹に読みきかせる。6月、「アザリア」6号に小品文「峯や谷は」発表。12月末、**トシ（日本女子大学在学中）入院の報に母と上京**、翌年3月まで看病のため滞京。この年豊作、しかし米価暴騰、米騒動。
19	8	23	3月、**退院したトシ**を伴い一同帰花、家業に従事。「暗い生活を送ってゐます」と手紙に書く。この年郡立農蚕講習所へ出講したらしいが未詳。
20	9	24	5月、盛岡高等農林学校研究生を修了。関教授から助教授推薦の話があるが辞退する。帰宅、読書及び地質調査につとむ。

うかがわれる。津田宗及がこのときの茶会での御茶頭をつとめていた。

高松城の水攻め

天正10年（1582）の正月は、諸国にちらばっていた信長の部将たちも安土に集まり、信長に年頭の挨拶を行なった。秀吉ももちろんこれに加わっている。これが信長への最後の年賀になるとは知らず、一門・他国衆・在安土衆の順で信長に謁したが、あまり年賀の人が多く集まりすぎたため、安土城の百々橋から總見寺へ上るところの石垣が人の重みでくずれ、死者が出るというハプニングもあった。

正月18日、秀吉は姫路城内で茶会を開いた。客は津田宗及と山上宗二である。（宗二はのち横田へ来ている。219ページに）

翌4月4日、秀吉ら備前岡山城に陣を進め、備中高松城の清水宗治を誘降（信長に従えば備中一国を与える）しようとしたが、宗治はその誘いにはのってこなかった。

備中高松城の攻城戦は5月7日からはじめられた。秀吉は地形的な点を考え、足守川の水を堰とめ水攻めにすることとし、水攻めのための築堤工事が5月8日からはじめられ、それこそ昼夜兼行で、長さ26町（約2.8キロ）、高さ四間（約7メートル）の堤防が、わずか19日の突貫工事で完成したのである。おりからの梅雨で、みるみる高松城の周囲は水びたしとなってしまった。急報をうけた吉川元春と小早川隆景は、元春が寺山に、隆景が日差山に本陣を構え、秀吉軍に対峙する形となったが、秀吉もすかさず信長に応援をもとめ、いっぽうで講和の話も進めていたのである。

秀吉の軍勢は、25,000にすぎなかったので、援兵として明智光秀が備中に急行することになり、5月17日、光秀はその準備のために帰国している。

信長も西国へ出陣するため、まず上洛してわずかばかりの手兵を率いて本能寺に泊まったが、6月2日の早暁、明智光秀の謀反によってあえない最期をとげた。

信長が死んだというニュースが、備中高松城を包囲していた秀吉のもとに届いたのは、6月3日の夕方だったという。信長を討ったことを毛利輝元に知らせる明智光秀の密使が、誤って

季は静かに　簸の上短歌会

夏の夜を笛も太鼓も気負ひたち神々の舞に酔へる里人　永井弥生
橋の上に仏を迎へる子らもなく県外ナンバーの車流れる　〃
台風に藪は乱れて胡瓜の花に群れて蜻蛉の飛び交ひてをり　岡田時子
向日葵の丈余にのびておもおもと日暮れの庭に傾き立てり　〃
起きぬけにたす小用は昨夜呑みし酒の匂ひのしるくのこれり　常盤はるまさ
使ふことあらむと拾ひしゼムピンの筆入に溜りて十あまりいくつ　〃
軒下に秋海棠の蕾色づきて季は静かに移りゆくらし　野村節子
いつの日か二人眠るはこの辺り蝉の声しげき墓処浄めぬ　〃
安楽死が話題となりて癌故に苦しみ逝きし妻を想ひぬ　安部夕波人

1921

23	22	10
12	11	10
27	26	25

7月ごろ、田中智学『本化摂折論』や『日蓮上人御遺文』の抜き書きをつくる。10月、国柱会信行部に入会。父に改宗を迫る。ひそかに町内を寒行する。

1月23日夕、父母一家の改宗も容れられず、無断上京を決意す。時たま棚の日蓮上人遺文集が突然落下し、家を去るは今なりと、法華経・遺文集を携え旅費のみにて上京。国柱会本部を訪れ、高知尾智耀に会う。本郷菊坂町75稲垣方に間借、赤門前の文信社で筆耕、午後は街頭布教や国柱会本部での奉仕活動など。高知尾の奨めにより猛然と童話を多作。4月、上京した父を迎え、共に6日間の関西旅行。8月、**トシ病気の報**に大トランク一杯の原稿を持って帰郷。「愛国婦人」9月号に童謡「あまの川」掲載。（**トシは花巻高女教諭を9月に退職**）。12月、稗貫郡立稗農学校（翌々年県立に移管して花巻農学校となる）教諭に就任、代数・化学・英語・農業・土壌等を担当。「愛国婦人」12月号および翌年1月号に童話「雪渡り」を発表、稿料5円。生前得た唯一の原稿料である。童話「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」創作。

1月6日の日付（取材または初稿）をもつ心象スケッチ「屈折率」を書き、『春と修羅』収録詩篇制作はじまる。2月、「精神歌」作詞。7月中旬盛岡に毒蛾大発生、童話「毒蛾」の題材となる。9月、生徒6人と岩手登山。農学校で生徒ら「饑餓陣営」上演。11月27日夜、かねて**療養中の妹トシ死亡（26才）**、激しい衝撃を受け、これにより「無声慟哭」詩群を生む。11月、教室で童話「貝の火」を読みきかせ、生徒に感動を与える。

1月、童話原稿を東京社（婦人画報・コドモノクニ等を発行）に持ち込ませるが不

斐の上川柳八月の句

まだ愛は切れていないか夢を見る　渡部ミツコ
奥出雲その奥の意味考える　児玉哲呂
紫蘇となら赤く染めます青い梅　真綿よし子
丑の日はうなぎの悲鳴聞こえそう　児玉えみ
野菜だけたらふく食べて子ら帰り　藤原のぼる
焼石に水と出て行くボーナス日　松浦久寿子
米野菜車に乗せてえびす顔　石原冬明
息子より嫁が可愛い己が為め　安部春恵
台風は逃げて余米にまた苦労　高木凡太
豊作を保証するよな土用照り　安部正子
子年孫還暦の夫目を細め　渡部かおり
すし太郎サンショウ入れて祖母の知恵　田部都
朝二時間あとはぐったり炎天下　松浦亜以
あぶら蝉にいにい蝉は夏の歌　足立玉恵
仏より孫の帰りを待つお盆　田中芳春

柴栗句会八月抄

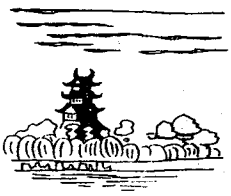
迎火や霊乗って来る風生まる　淺野としお
亡き友の切絵のちらし盆踊り　糸原古志
愛らしき指切り別れの日焼けの子　恩田和美
茄子焼いて一品そへる盆の膳　加納信子
鹿の居て千年杉の蝉時雨　楠房子
若鮎の躍る水着のアトランタ　高木白虹
明日こそ便りくる予感月見草　中澤美紀子
七夕や丹冊結ぶ幼な指　新出谷一華
汗かきて何処かに眼鏡置き忘れ　錦織富江
羅に着替へ紅も引いて見る　峯石美代子
夏の宵久方にする指ずもう　渡部夕峰
雷の顔し湧き立つ雲の峰　渡部みつ子

秀吉の本陣に来てしまい、つかまって密書をとりあげられたのだという。

信長の死を知った秀吉は、何ごともなかったかのように毛利の使僧安国寺恵瓊（えけい）をよんで講和をいそがせることにした。

落城寸前だった高松城の城主清水宗治は、自身切腹することによって城兵の命を助けること、備中・美作・伯耆3ヵ国を信長に割譲すること、この2つの条件を呑み、本能寺の変の2日後の6月4日、清水宗治は切腹して果てたのである。

信長の死が毛利方に知られないうちに講和にもちこむことができたのが、秀吉としては運の開けはじめであった。



私は学会への参加、信頼をうけた小論文や講演の準備、さらにいろんな調査への協力が多く、年を考え、鉄についても先送りさせて頂きます。
（横田史談会　高橋一郎）

1924

13

28

採用。4月～5月、岩手毎日新聞に詩「外輪山」童話「やまなし」「氷河鼠の毛皮」「シグナルとシグナレス」を発表。国柱会機関紙天業民報にも詩「青い槍の葉」等を発表。5月、花巻農学校開校記念行事として劇「植物医師」「饑餓陣営」を上演。7月末から教え子の就職依頼のため樺太に旅行、この紀行より挽歌詩群（青森・津軽・オホーツク）生まれる。交響管弦楽等のレコード多数蒐集。上京の度毎に図書館に通い、又各種映画演劇を観る。

病気にて欠勤中の同僚奥寺に給料の大半をさき、死に至るまで見舞し、臨終の夜。枕頭に懇（ねんごろ）に読経。

2月、教え子に童話「風野又三郎」原稿筆写を依頼。2月20日の日付をもつ「空明と傷痍」を書くことにより「春と修羅」第2集はじまる。3月、「反情」2号に詩「陽ざしとかれくさ」発表。4月、心象スケッチ『春と修羅』1千部を関根書店から自費出版。5月、白藤慈秀と生徒を引率して北海道修学旅行、帰着後「修学旅行復命書」を提出。7月、読売新聞で辻潤が『春と修羅』を賞揚。8月、農学校で生徒らと「饑餓陣営」「植物医師」「ポランの広場」「種山ヶ原の夜」を上演一般公開。12月、イーハトヴ童話『注文の多い料理店』刊行。このころ「銀河鉄道の夜」初稿成立。

花巻共立病院の花壇を設計し、院長佐藤隆房との交わり深くなる。花巻温泉の街路樹・花壇を設計し、同僚と工作す。

新潮社発行『日本詩人』12月に於て、詩人佐藤惣之助、「春と修羅」を激賞す。2月より11月までに「詩」約333篇創作せしも現存するもの65篇なり。

（年表は賢治の弟清六作製のもの中心に）

会員頒布一部百七十五円／六九二八　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第259号(10月号)
1996.10.6(M129.T82.S71)
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

宮沢賢治誕生百年⑪

童話　銀河鉄道の夜

——少年ジョバンニ(賢治)・同級生カンパネルラ(妹トシ)

童話を読む前に

賢治にとって妹トシは、年齢も近く(2才違い。前号年譜トシ)信仰を異にする(賢治は24才の誤り)(死亡26才は法華宗)肉親に於けるたった一人の理解者であり、大正8年3月退院帰花(花巻)後、静養中に賢治の短歌を清書するなど、兄の資質を最初に認めた最大の支持者・よき相談相手として、文学上、宗教上かけがえのない存在であった。トシは大正9年9月末から母校花巻高等女学校心得となり英語、家事を担当するが、翌年6月ごろから再度臥床、9月学校を退職、病魔を振りきれず11年11月27日享年24歳で彼岸へ旅立った。

この緊張した状況が、挽歌「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」に描かれているという。翌12年6月「風林」「白い鳥」までの詩作の空白期間は、賢治の傷心の深さをしめすという。それらの詩の中から拾ってみると、

…もろもろの現象は滅びゆくものである。
…青ぐらい修羅をあるいている
…とし子とし子／野原へ来れば／また風の中に立てば／きっとおまへを思い出す／…ただひときれのおまへからの通信が／いつか汽車の中でわたくしにとどいただけだ／とし子　わたくしは高く呼んでみようか

賢治はトシへの執着(修羅)を捨て切れず、その魂の行方を追って、大正12年夏休みになると北海道・樺太へと旅立つ(7・31〜8・12)。農学校生二人の就職依頼のため、樺太豊原市王子製紙株式会社(高農の先輩勤務)を訪ねる目的もあったが、トシ子からの通信を求めての傷心の旅であった。連絡船で津軽海峡を渡り、函館に上陸札幌に向う。(この間の挽歌などあり)稚内から宗谷海峡を渡り大泊港へ、そして樺太庁のある豊原市へ向い、会社に先輩を訪ね教え子二人の就職を依頼する。帰途植物採集し青森を経て帰る。「青森挽歌」に、

…おいおい　あの顔いろは少し青かったよ／だまってゐろ／おれのいもうとの死顔が／まっ青だろうが黒だろうが／きさまにどう斯う云われるか／

と、トシの臨修の相を。

賢治は、青函連絡船で三度海峡を渡っている。盛岡中学5年の北海修学旅行(大正2)と、この旅、そして最後は花巻農学校の北海道修学旅行(大正13)の引率者としてである。

オホーツク旅(2回目)から戻った賢治は、一つの物語を書きはじめ、幾度も推敲を重ねて、最初の姿と最後の形では、ちがう物語といっていゝほど変ったのが、「銀河鉄道の夜」である。

あらすじ

少年ジョバンニは、ある夜、町外れの丘にいるとき、とつぜん天気輪の柱というふしぎな光の塔に包まれて、銀河鉄道に乗ってしまう。気がつくと、その列車には、溺れた友人を助けるために死んだ親友のカムパネルラも乗っている。どうやらそれは死者たちを乗せて天上へ送り届ける葬送列車のようなものである。列車は、車窓に天の川の流れを見ながら、静かに星空の中を走ってゆく。

列車は宙空を走っているのに、ごとごととレールの継ぎ目を叩く音が聞える。その列車も最初の駅、白馬停車場に近づくころから、確かな手応えのある、天の大地を走るようになる。(銀河の中の白鳥座・わし座・たて座・いて座を通り、南十字星へと走る)白鳥停車場はプリオシン海岸見学のための下車駅で、太古からの動植物の化石が、じっと眠っている。天の川に舞い下りる鷺を捕って押し葉にする鳥捕りとか、渡り鳥の通り道の信号手とか、いろんな人たちに、ジョバンニは出会う。彼らはこのたびの死者ではなく、ずっと天に住む星空住人である。こゝにはそんな人びともいる。

列車は走り、鷲座、盾座の駅を経て、終点南十字へと向う。南十字の手前には、急勾配の下り坂があり、その坂があまり急なため、向う側からは列車が登りきれず、そのため死者たちが戻れないのだと説明される。

やがて列車は終着地に着き、カムパネムラは降り、ジョバンニはまた、ふいに何か分からないふしぎな力のために、この世の丘の上に引き戻される。ジョバンニのほほには一ぱい涙が流れていた。

この物語については、いろいろの解釈が行われているが、いろんな人の解釈を読んで、私はトシへのレクレイム(鎮魂歌)＝弔らい、と読んでいる。オホーツクへの旅で、賢治の科学に対する期待と豊富な学識がかきたてられて生んだものと思う。

先ごろテレビ対談で、宇宙飛行士毛利衛氏は、宇宙のただ中にあって、賢治になり切ること

(次頁3段へ)

宮沢賢治誕生百年⑪⑩・秀吉の時代の奥出雲⑥・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

秀吉の時代の奥出雲⑥

1577天正10年(46才)～1581天正14年(50才)

秀吉の天下へ

毛利輝元と講和を結んだ秀吉は、全軍を姫路城に集結させ、4日後には京都に出発、信長の弔い合戦に向った。光秀側1万余、秀吉軍勢3万余。光秀は秀吉軍を迎え撃つに京都郊外山崎の地を選んだ。毛利との講和から9日目、敗れた光秀は再起を期して坂本への脱出をこころみ、途中小栗栖(おぐるす)の竹やぶの中で、百姓のくりだす竹槍で殺され、2日後の6月17日、その首は本能寺にさらされて終った。

信長の重臣たちは尾張清洲城にて後継者、遺領の配分の会議を行った。秀吉はその養子となっていた信長の4男秀勝を喪主として、京都大徳寺で信長の葬儀を盛大に行い、後継者への道をさらに印象づけた。

天正11年、柴田勝家は賤ヶ岳の合戦で秀吉に大敗北、北ノ庄におちのび遂に自決した。秀吉の大勝を心よく思っていなかった徳川家康、慎重を期して祝いを送った。この間、秀吉はふしふしで茶会を催している。

秀吉は大阪石山本願寺の跡に城を築き、天下に号令の一大根拠にしようという考えをもっていた。

工事は30余ヵ国の城持ち大名によって進められ、わずか40日間に2,500以上の家屋を建てるという勢で、6万人が従事したという(大坂城完成)。

そのころ、秀吉は近江でかなり大がかりな検地を行い。その他山城・河内・若狭・越前・加賀・能登でも行われた。これまでは従来の土地関係を認める方向であったが、この年の検地からは、従来の占有関係を整理する方向をとっていた。

翌天正12年正月3日、大坂城内に設けた茶室の座敷開きが行われた。

このころから徳川家康は秀吉に対して警戒心をもち、信長の子信雄とともに敵対関係をとりはじめた。

ができたと話していた。一度この物語を読んで、童話の中の思想に成人の方は思いを走らせて頂きたい。トシとせずカムパネルラ＝男に、一般の人にしたのは、自分の私的な思いを普遍化しようとしたからであろう。この世に生きて死に、ふたたび輪廻転生してもらいたい佳き者たちが沢山いた。それらの者たちにも何か悲しみが救われる手だてはないか、そう賢治は考えたのではないか。

この物語よんで、いろいろの解釈の中から以上のような読みに私が到達したのも、こんな思いが心の奥にあって、ことあるごとに思い出すからである。

それは弱かった弟が、シベリヤ抑留1年余、100数十名の中隊のうち20余人のうちに残って帰国の途に。途中北朝鮮に再び上陸させられ漸く帰った。森林伐採生活の栄養失調は、帰国のよろこびも3ヵ月余、友人達の名を呼んでなくなった。丁度50年前のことである。

賢治の作品が、読む人によっていろいろに読まれるところに、賢治の作品の思想の豊かさがあるのだろうと思っている。

宮沢賢治誕生百年⑩
略年譜(下)

ここで賢治の生いたちと成長と影響を与えた人々をみておく

西暦	年号	年令	事柄
1925	大正14	29	1月、岩手県開設国民高等学校嘱託を兼務す。この頃上京し高村光太郎を訪問する。2月から森佐一、7月から草野心平と交渉はじまり、森編集「貘」、草野編集「銅鑼」に詩を発表しはじめる。オルガン・セロの独習を始める。タイプライターの練習を企てしも上達せず。8月、森佐一らと花城小学校で開かれた詩の展覧会に出品。入営中の弟清六音信絶えしを、病気の故と心配し、青森県山田野演習場に急行す。11月、早坂東北大助教授をイギリス海岸に案内してバタグルミ化石採集。12月、「虚無思想研究」12月号に「冬(幻聴)」を発表。
26	15	30	1月、尾形亀之助編集「月曜」創刊号に「オッベルと象」を発表。2月号に「ざしき童子のはなし」、三月号には「寓話・猫の事務所」を発表。「貘」「銅鑼」にも詩の発表つづく。3月末まで岩手国民高等学校で農民芸術論を講義。3月31日、花巻農学校依願退職、4月1日から下根子で自炊し独居生活をはじめる。花壇作り、開墾、青年たちを集めてレコード鑑賞会や合奏練習など。6月ごろ、「農民芸術概論」を書く。8月、妹たちと八戸へ小旅行。羅須地人協会設立もこのころか。近所の子どもたちに童話を読みきかせる。11月から協会定期集会はじまる。花巻及近郊の農村に数ヶ所の肥料設計事務所を設け、無料設計相談に応じ、農村を巡歴し肥料、稲作の指導講話をなす。謄写版にて詩集出版を企てしも、多忙のため実現せず。原稿用紙、肥料設計用紙多数を謄写印刷す。12月1日、労農党稗貫支部ができ、シンパとして協力。2日上京、図書館やタイピスト学校で勉強、オルガンや
昭和1			

そして小牧、長久手の戦いがはじまった。

この年の近江の検地には、計量の単位、田畑の等級、斗代（田畑一段当りの年貢収納高）が整備され、登録人決定に一定の基準がつくられつつある。こうして徳川時代の土地制度へと向っていった。

天正13年家康方に味方をした根来寺の僧徒と、雑賀の土豪・百姓一揆を征伐し、土豪＝地侍の切首、平百姓の百姓専従を指令した。一揆の首謀者としての武士的農民の絶滅を意図したもので、一般農民の農村への還住を促進するため、農耕具・家財などを貸し与えたりしている。

ついで高野山金剛峯寺の武装解除を命じた。高野山の刀狩りであるが、僧兵の持つ武器没収をねらったものである。

この年9月、秀吉は海外派兵の意志を公表している。10月7日の茶会の席上、秀吉は千宗易に利休居士の号を与えた。

11月公卿の間で左大臣就任をめぐって争われている間をぬって、秀吉は公卿菊亭晴季を動かして関白の任命をうけた。

聚楽第・大仏殿建立、豊臣姓へ

上皇の御所・仙洞御所の新築、聚楽第の新築、大仏殿の建立と天正14年は多彩多忙な年であった。

こうした一方、毛利勢は九州に駒を進めて、島津勢との戦いがいくつかみられた。

それをよそに、京都ではまた別な動きがみられた。12月16日秀吉の養女前子が、女御（天皇の側室）として入内したのである。前子というのは公卿の近衛前久の娘である。

そして12月19日、秀吉は太政大臣となり、豊臣の姓を賜った。

すでに秀吉は、五摂家の筆頭である近衛前久の猶子（名義上の世継）となって、藤原姓を称していたが、関白の時はそれでよかったにしても、太政大臣になるにあたっては新姓が欲しかったのである。秀吉の言い分は単純明解であった。中臣鎌足が藤原姓を賜り、その他、源・平・橘にしてもその時代の功臣がうけている。自分もそれら藤原鎌足、橘諸兄らとくらべて、決してひけをとらないというものである。

この頃の奥出雲

柴栗句会九月抄

駱駝の目砂丘ギラギラ焼け尽す　淺野　としお
爽籟や白砂に曳ける砂の紋　糸原古志
鳳仙花幼女抱き寄せ爪を切る　恩田和美
秋灯下卒寿の母の刺子かな　加納信子
萩こぼる名残り蝉鳴く農の道　楠　房子
釣竿先の踊り収めし赤とんぼ　高木白虹
虫の音のまして独りは切々と　中澤美紀子
山荘に憩えば既に風は秋　新出谷一華
秋茄子を少し辛目に炊いて見る　峯石美代子
遠雷を聞く一刻や夏の果て　渡部みつこ
門跡寺帝の遺筆秋障子　渡部夕峰

27	28	29	30	31
2	3	4	5	6
31	32	33	34	35

セロを習う。高村光太郎を訪問。29日に上野を発って帰花。

1月、「無名作家」4号に詩「陸中国挿秩之図」発表。2月1日、岩手日報に羅須地人協会の紹介記事が出たことから当局の取調べを受ける。3月、松田甚次郎氏の訪問を受け、同氏帰村後の心得を諭し、特に小作人たれ、農民劇をやれと激励す。後同氏作の脚本「篝火」を添削指導す。12月、「盛岡中学校校友会雑誌」に詩2篇発表。5月から肥料設計・稲作指導。夏は天候不順のため東奔西走の日々。6月までに第一次肥料設計数は約2,000枚に達す。この後継続するも数不明。寒害、水害、風害、旱魃、虫害等の予想ある度に、盛岡測候所や水沢天文台を訪れ、対策を講じ農村を巡る。

朝顔、菊、ダリヤ、トマトを栽培、白菜、甘藷等の収穫も多量により、自らリヤカーを引き町内に配給す。

2月、「銅鑼」に「氷質のジョウ談」、3月、「聖燈」に「稲作挿話（未定稿）」発表。石鳥谷で肥料相談に応じる。6月、大島に伊藤兄妹訪問（兄七雄の病気療養看護中のチエを）、東京で浮世絵展を見、演劇鑑賞も。8月心身の疲労を癒す暇もなく、気候不順に依る稲作の不良を心痛し、風雨の中を徹宵東奔西走に、遂に風邪やがて肋膜炎に罹り、帰宅して父母のもとに病臥す。12月急性肺炎。

病臥つづく。春、黄瀛来訪。4月、東北砕石工場主鈴木東蔵来訪。この年文語詩製作開始（?）。

春、やや回復、園芸を始める。詩「空明と傷病」他発表。

4月、東北砕石工場の技師に聘せられ、岩酸石灰及その製法改良、加工に従事し、これら製品の宣伝、販売斡旋のため岩手・秋田・宮城・福島・東京等を巡る。7月、岩手日報に稲作状況報告。「児童文学第一冊」に童話「北守将軍と三人兄弟の医者」

韮の花　簸の上短歌会

一泊の旅に来つるも病む妻と看護る娘の家居を思う　常盤　はるまさ

歯の悪るき妻が頼みし佃煮を宿の売店に先づ探したり　〃　人

黒き種子抱へて立てる向日葵に朝よりの雨つよくなりたり　岡田時子

栗の毬墓辺の径をせまくして実の二つ三つを墓に供へり　〃　人

畑隅に清楚に咲ける韮の花白蝶舞ひて何れか見紛ふ　野村節子

畦道を走りゆきにし老犬の散歩の歩み遅くなりたり　〃　人

間引菜の汁煮る夕べ忘れゐし軒の風鈴チリリンと鳴る　永井弥生

逆縁のかなしみふかき友へ送る筆遅々として萩のこぼるる　〃　人

妻逝きし病舎の窓は閉ざされて脳裏をよぎる遠き日かなし　安部夕波

斐の上川柳九月の句

あの名前額まで出て止まってる　児玉哲呂

風鈴もお役終って箱の中　安部春恵

音景色雑居暮しを豊かにし　田中有樹絵

涼風は良いがその先すぐ案じ　松浦亜以

太陽に雨に感謝の米作り　真綿よし子

虫の音は涼やかに鳴り早稲みのる　足立玉恵

米余り聞いて猪出かけてき　児玉えみ

家中を遊び場にして孫元気　藤原千代子

父細く母は大きく園児の絵　渡部ミツコ

手伝いもしたいがさせぬ親不孝　高木凡太

生きていた不思議を友と語り合う　石原冬明

パソコンもその内手出しするつもり　藤原のぼる

いい天気日曜百姓えびす顔　安部正子

頭てれ貫様出来たと慰める　松浦久美子

扇風機首をつかまれ片隅え　田部都

呆け始め過去には強い八十才　田中芳春

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町二、四六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

1577 天正5　三沢為清、出雲岩屋寺に寺務の掟を定める。

78　〃6　上月城の毛利方として戦死した子彦兵衛の菩提のため、父成田秀綱は一貫の土地を晋叟寺（横田）に寄進する。

79　7　公卿菊亭晴季を禁裏御料所出雲横田荘代官に任じ、納貢を催促する。

80　8　1月、三沢為虎、毛利氏に誓書を出す。

81　9　秀吉の鳥取城攻撃に、為虎城主吉川氏救援に。

83　11　毛利元秋、出雲富田城に入る。毛利氏しきりに出雲国内の社寺領の安堵（保証）をする。

85　13　三沢為虎、毛利輝元に奉公を誓い、亀高城の保持を願う。

富田城主毛利元秋没し、毛利元康を富田城主とする。

86　14　三沢為虎、伯耆八国寺住職死去により、岩屋寺をして寺務の半ばを管理させる。

横田庄代官菊亭晴季御所へ納貢す。

（横田史談会　高橋一郎）

32　33

7　8

36　37

発表。9月20日上京発熱、遺書を認める。帰宅病臥。11月3日、詩「雨ニモマケズ」（昭和11年建立の詩碑に刻む）を病臥のまま鉛筆にて手帳に草す。この年岩手県は冷害豪雨のため凶作。

3月、「児童文学」第2冊に「グスコーブドリの伝記」発表。植物性の食料を欲し、動物性食料を遠ざけ、漸次衰弱す。4月、佐々木喜善来訪。「岩手詩集」第1集に「早春独白」発表。「女性岩手」創刊号に文語詩「民間薬」「選挙」、同4号にも「祭日」「母」「保線工手」、「詩人時代」に「客を停める」を発表。

僅かに歩行可能、この間つとめて肥料の相談を受け、或は読書等のため、病気は一進一退をくりかえす。2月、「新詩論」第2輯に詩「半蔭地選定」発表。3月、「天才人」に童話「朝に就ての童話的構図」発表。「詩人時代」「女性岩手」等の作品の発表つづく。「現代日本詩集（昭和33年版）」に「郊外」「県道」を発表。6月、石川善助遺稿集「鴉射亭随筆」に追悼文掲載。7月、元「アザリア」同人河本義行が水死。8月、「文語詩稿　50篇」「文語詩稿　一百篇」を清書。9月、「北方詩人」に詩「産業組合青年会」を送稿（10月発行の号に掲載）。童話「ひのきとひなげし」に最終手入れ。

9月19日、花巻町鳥谷崎神社祭礼の最終の夜8時頃、神輿渡御を門口へ出て礼拝す。9月20日急性肺炎の徴候見ゆ。偶々その夜おそく迄肥料設計の相談を受け甚だ疲労する。翌21日午前11時30分、容態急変し喀血せるも意識明瞭なり。既に死期の迫れるを知り、父に「法華経1,000部を知己に配布するよう」遺言し、父それを誉めたるのに満足気に微笑す。1時30分、自らオキシフルを脱脂綿に浸して、身体を拭き終りて永眠す。23日安浄寺で葬儀（昭和26年、身照寺に改葬）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第260号（11月号）
1996.11.6（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団
横田史談会

©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

秀吉の時代の奥出雲⑦

1582天正15年（51才）～1585天正18年（54才）

—日本の統一まで—

千利休の高弟山上宗二（本誌219号参照）は天正14年（1581）ころは、秀吉の機嫌を損じて諸国に放浪していたというが、このころ当横田庄岩屋寺に滞在し、院主快慶や三沢宗程（為清）と茶の交わりをしたと思う。当庄には毛利輝元の支配が及んでいた。こうした関係で宗二は高野山安養院に移り（天文21年1552、毛利元就はこの寺の檀那となっていた。その後代々の墓所が近くに設けられる）、ここで師千利休流茶法の秘伝書「山上宗二記」を、岩屋寺院主と宗程のために認めたのである。天正15年の秀吉の九州出陣にあたり、三沢14代為虎（宗程の子）は、毛利軍とともに出陣に従っている。

九州の平定（天正15年51才）

天正15年（1587）、いよいよ秀吉自身九州の島津征伐に動くことになった。正月1日、秀吉は大坂城において諸将の参賀をうけたがただ年始の挨拶をうけるだけでなく、諸将が集まったところで九州征伐の部署を定め、これを示したのである。諸将は、すでに前年12月1日に出動準備の命令が下されていたので、別に大きな混乱は見られなかった。

3日、大坂城において茶会が開かれ、その茶会の席上で九州征伐の陣立てが定められ、「誰は幾日に軍勢を如何ほどずつ連れて出発せよ」という書き物が読み渡されたという。

実際に軍勢が出発したのは正月25日からであった。この日、先鋒の宇喜多秀家が15,000の兵を率いて出陣、以下、2月1日には宮部継潤・南条元続など因幡・伯耆の諸将が、2月5日には前野長泰・明石則実など但馬の諸将が、それぞれ続々と九州にむけて出陣をした。そして3月1日、いよいよ秀吉本隊が大坂を出発したのである。10日秀吉は筑後に入り、高良山に着陣、龍造寺政家・筑紫広門を味方とし、13日には肥後高瀬、16日隈本、17日宇土、18日八代に進んだ。

こうした秀吉勢の快進撃をみて動揺したのは島津側である。特に4月17日の日向根白坂の戦いで、島津義久・義弘の軍勢が秀次の軍に敗れて以来戦意を喪失、ついに21日、家老伊集院忠棟を人質として和を求めてきたのである。

日向路の秀長軍が15万、肥後路の秀吉軍が10万という圧倒的兵力にまさる秀吉側の勝利であるが、秀吉はなおも25日肥後佐敷、27日薩摩出水、5月1日薩摩阿久根と軍を進め、3日、薩摩川内の泰平寺に本営を置いた。秀吉はここで秀長の報によって島津の降服を知る。やがて8日、島津義久は薙髪して龍伯と号し、泰平寺に秀吉を訪ね正式に降服してきた。

キリスト教禁制と北野大茶会

6月7日、秀吉は筑前博多の宮崎（箱崎）に到着し、そこで九州征伐の論功行賞を行なった。その結果、筑前1国と筑後・肥後の各2郡は小早川隆景、筑後3郡は小早川秀包、肥前4郡は龍造寺政家、豊前6郡は黒田孝高、同2郡は毛利吉成に与えられ、また、松浦隆信の壱岐、宗義調の対馬などは本領安堵されている。

そのころ秀吉は、平戸に碇泊していたポルトガル船にパードレを通じて書を与え、ポルトガル船の博多廻航を要請したが、ポルトガル船長からは博多廻航不可との返事があった。秀吉のその時点での重大関心事は博多町の再興であった。それは、来るべき大陸侵略計画の一つの布石として、博多商人を対外侵略にむかって集中させようとするものであり、侵略都市づくりであった。都市計画は小西行長・長束正家ら5人の奉行の手によってすすめられ、6月11日、図面が完成した。

博多宮崎滞陣中に、秀吉はいよいよ朝鮮出兵の意図を具体的な形であらわしはじめた。6月15日、朝鮮国王が来朝すべきこと、遅滞した場合、出兵の意志があることを朝鮮に伝える役目を、対馬の宗義調に命じたのである。

ついで、世間を驚かすできごとが19日におこった。秀吉は突然、これまで保護を与えてきたキリスト教を禁止したのである。その禁止令は「日本は神国たる処、きりしたん国より邪法を受候儀、太以不レ可レ然候事」ではじまる5ヵ条のバテレン追放令の名で広く知られている。秀吉は19日夜、日本イエズズ会の副管区長ガスパル・コエリョのもとへ、バテレンおよびポルトガル商人の行為についての諸問状をつきつけるとともに、翌20日朝、諸大名を集め、バテレン追放を指示したのである。なお、秀吉は19日朝、宮崎の陣所で茶会を開いている。

秀吉が約1ヵ月の滞陣ののち博多宮崎を発したのは7月2日で、海路長門の赤間関に至り、10日には備前岡山に到着した。つづいて12日の夜、備前片上を出帆して海路大坂城に凱旋したのが14日、そこには勅使勧修寺晴豊が出迎えていた。

7月25日、秀吉は大坂から聚楽第に入り、29日に参内している。8月1日、聚楽第で廷臣らの八朔の祝いをうけ、5日に家

秀吉の時代の奥出雲⑦・宮沢賢治誕生百年⑫・川柳・俳句・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

康が九州平定のお祝いのため上洛、秀吉はこれを大津まで出迎え、一緒に京都に入った。

9月13日、豪華絢爛たる聚落第が完成、秀吉は大坂城よりここに入った。ついで16日には、廷臣らが秀吉の聚落第移住を祝っている。

10月1日、北野神社の森において、いわゆる北野の大茶会が行なわれた。これは当初10日間開く予定であったが、2日目に九州から佐々成政軍苦戦の報が入ったため、2日目以後は中止されたのである。大茶会の当日、秀吉が出した7ヵ条の沙汰書には、「若党・町人・百姓以下によらず、釜一つ、つるべ一つ、呑物一つでもよい」とあり、広く貴賤を問わず参加をよびかけ、茶亭八百余という大がかりなものであった。

三沢為清（宗程）は、天正16年53才で隠居していた亀嵩城で没し、近くの覚融寺に葬られた。岩屋寺と宗程に贈る「山上宗二記」2巻を書き了えた宗二は、6月東国へ出発して、小田原の北条氏の庇護をうけ、茶湯の指南をした。

刀狩令発布

天正16年1588（52才）正月6日、秀吉は大坂城を出て入京し、将軍としての重みを痛感しながら、聚落第で和歌会を催すなど、平穏な日々が続いた。

3月19日、両替屋久兵衛を金銀鑑識、両替の年寄と定めているが、この年はまた天正大判・小判を鋳造するなど、貨幣政策の点でも新しい一歩を踏み出している。3月29日、秀吉・家康そろって京都近郊で鷹狩りを行なった。また4月3日には秀吉から家康に茶器と米2,000俵が贈られており、このころ両者の関係は安定していた。4月2日、キリシタン領となっていた長崎が収公された。秀吉はこれを蔵入地とし、その代官として鍋島直茂を任命した。

関白政権の都の政庁として聚落第が完成したあと、秀吉がねらったのは、諸大名を絶対的に服従させることであった。

そこで仕組まれたのが、後陽成天皇の聚落第への行幸である。4月14日から5日間にわたってその儀式はとり行なわれ、特に2日目、天皇へ京都の地子銀5,530両余が御料所として与えられたあと、諸大名に対し誓紙をとり、関白秀吉への絶対的服従を求めたのである。16日に和歌会、17

宮沢賢治誕生百年⑫
童話 よだかの星

あらすじ―よだかはただ醜いゆえに他の鳥から嘲われ、蔑まれる。鷹は自分と似た名を持つことを嫌い改名を迫る。せっぱつまったよだかは羽虫・甲虫を食べた時に胸をつく悲しみを感じ、遠くの空の向こうへ行こうと決心する。空へ向かって飛び立ったよだかは、太陽やオリオン・大犬・鷲の諸星のそばへと願って断られ、力尽きて地へ落ちる。着地寸前にのろしのように飛び上がり、どこまでも上がってゆき、燃え続けて星となる。

賢治の文章を拾ってみると、

▽よだかは、実にみにくい鳥です。顔は、ところどころ、味噌をつけてやうにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけてゐます。

足は、まるでよぼよぼで、一間とも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見たゞけでも、いやになつてしまふといふ工合でした。

▽ところが夜だかは、ほんたうは鷹の兄弟でも親類でもありませんでした。かへつて、よだかは、あの美しいかはせみや、鳥の中の宝石のやうな蜂すゞめの兄さんでした。（中略）

それなら、たかといふ名のついたことは不思議なやうですが、これは、一つはよだかのはねが無暗に強くて、風を切つて翔けるときなどは、まるで鷹のやうに見えたことと、も一つはなきごゑがするどくて、やはりどこか鷹に似てゐた為です。

▽（一たい僕は、なぜかうみんなにいやがられるんだらう。僕の顔は、味噌をつけたやうで、口は裂けてるからなあ。それだつて、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巣から落ちてゐたときは、助けて巣へ連れて行つてやつた。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかへすやうに僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑つたつけ。それにあゝ、今度は市蔵だなんて、首へふだをかけるなんて、つらいはなしだなあ）

▽（あゝ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ、つらい、つらい。僕はもう虫を食べないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行つてしまはう。）

▽お日さんから、オリオン座から、大犬から、大熊星から、そして鷲の星からさえも。よだかは、同じ鳥類である鷲の星から

「いいや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちやいかん。又よほど金もいるのだ。」

と宣告された時、彼はすっかり力を落し、はねを閉じて、地に落ちて行く。そしてもう一尺で地面にその弱い足がつくという時、よだかは、俄かにのろしのようにそらへ飛びあがるのである。

▽けれどもよだかはしばらくたって自分のからだが「いま燐の火のやうな青い美しい光になつて」静かに燃えているのを見ることになる。自己の飛翔意志で達せられないものを、希望によって超え得たのである。

よだかの星とはどのような星なのであろう。すぐとなりはカシオピア座とあるが、恐らくつつましやかな微光を放つ取るに足りない程の星に違いない。それでもみにくく、鷹の仲間にもされず、さらに飛んで星になることさえ拒まれた末の巡礼のような魂の、究局の在りかをよだかは探りあてたといってよい。

小・中学校の教材となっている。宇宙飛行士毛利衛は、宇宙へ飛出して、中学生時代に読んだ、青く燃えて飛ぶ「よたかの星」を思い出し、すべて宇宙も地球もともに生きて行かねばと思ったという。今もそうだと。

（賢治が言いたかったのは）

日に舞楽が行なわれたが、あとはつけたりといってもよかった。

ついで、かねてから計画していた大仏殿の建立にかかり、5月15日、居礎の式が行なわれた。閏5月になり、前年蜂起した肥後の検地反対一揆が諸大名の応援によって鎮圧され、13日、毛利輝元・小早川隆景・吉川広家らは兵を収めて帰国した。

肥後の一揆に百姓が多く加わっていたことは、すでに天正13年あたりからはじめられていた秀吉の刀狩りを、さらに急速に押しすすめる要因となった。

7月8日、秀吉は「諸国百姓、刀・脇指・弓・やり・てっぽう、其外武具のたぐひ所持候事、堅御停止候」ではじまる3ヵ条の「条々」すなわち刀狩令を発している。表向きは大仏の釘やかすがいに用いるとうたっているが、その実は、多聞英俊にも「内証は一揆を停止するためなり」とみぬかれていたように、百姓の武装解除、武士と百姓の身分確定がねらいであったことはいうまでもない。たとえば、鞘のある刀は鞘をつけたまま京都に送ることが命ぜられているが、釘やかすがいに用いるだけなら鞘は不要である。一方で、この刀狩は、大陸侵攻のための武器調達でもあったとも考えられる。

なお、刀狩令と同じ日に、海賊禁令というものも発布されているが、これは明らかに秀吉の対外交易独占をねらった政策である。このころの秀吉は、鷹狩りに興じていたらしく、12月10日にも狩猟で得た雉子を天皇に献じているほどである。『多聞院日記』12月15日の条に「関白殿ヨリ天下ノ傾城国家ノ費也トテ被レ払了」とあり、秀吉が遊女を禁止したことがわかる。

天正17年(1589)3月、藤ヶ瀬城の三沢為虎、馬木夕景城の馬来元貞(祖父乗綱、父孝綱ともに病弱で、小馬木の小林城に残り、幼少の元貞が叔父とともに。孝綱は江戸時代はじめここにて歿)は油木を経て、安芸国広島に移り毛利氏に仕える。

天正17年(53才)長男鶴松誕生

天正17年(1589)正月14日、秀吉参内。大仏殿の建立が前年に引きつづき急ピッチで進められており、諸大名に木材や刀剣などの提出が命ぜられた。2月に入り18日、いよいよ大仏殿に安置する大仏の鋳造がはじめられた。8月には明人の塗師古道が招かれ、鋳造なった大仏に彩色をほどこしている。

2月25日夜、聚落第の番所の壁に落書があり、内容が秀吉の政治に対する批判であったため、落書を書いた番衆17人が捕らえられて殺された。しかも、その処刑は、第1日目に鼻を削ぎ、2日目に耳を切り、3日目に倒磔にかけられるという残酷なものであった。威嚇とみせしめのためであった。

5月20日、秀吉は聚落第に一族・公家・大名を集め、金賦りを行なった。秀吉の言い分では、「人の死生は定まらないものなので、先に配分しておくのだ」ということになるが、金6,000枚、銀25,000枚が公家・諸大名らに分配されたのである。

浅井長政とお市の方の遺児茶々が、秀吉の側室となったのは前年の天正16年。彼女はやがて妊娠し、山城国の淀城に移っていたが、この年5月29日、男の子を生んだ。棄子は育つという俗信に従い、「棄」と名付けられ、やがて鶴松とよばれるようになった。秀吉のはじめての子供ということで、公家・諸大名はわれがちにと祝いの贈物を届けた。鶴松は淀城で母の淀殿(茶々)と暮らしていたが、9月13日、秀吉は鶴松を大坂城に移した。これはわずか4ヵ月足らずの鶴松が、豊臣氏の後継者として定められたことを、内外に宣伝することにもなったのである。

なお、このころから秀吉の次の戦略目標は関東にむけられていた。小田原城の北条氏直は、再三にわたる秀吉の上洛催促を拒みつづけていた。懐柔策を得意とする秀吉は、努力を重ねたが事態は急転回し、秀吉は怒り、同時に北条氏討伐の機会到来と考え、11月24日、氏直に対する宣戦布告状をつきつけ、諸大名にもその宣戦布告状をくばった。

この宣戦布告状は右大臣菊亭晴季が草案を作ったという。秀吉の生い立ちなどにも及ぶ長文のものである。

なおこの同じ4月1日、秀吉は、検地関係者の礼物のやりとり等の不正に対し、厳罰でのぞむ方針を明らかにしている。これは片桐主膳宛ての「検地条目」に「礼儀・礼物一切取るべからず」と明記されたものであるが、こうした「検地条目」が出されたことじたい、検地に際しての検地役人による不正が少なからずあったことを物語っている。

11月22日には洛中の検地が始められているが、この年太閤検地の行なわれたのは、山城・大和・

斐の上川柳十月の句

大丈夫医師の言葉に足軽く　安部春恵
一人居の老いを慰めすだく虫　松浦久寿子
電話切り余韻に浸り昼寝する　田部都
あの暑さ遠くに逃げて重ね着し　安部正子
霊柩車人生最後の高級車　横山まこと
名月を何も忘れてあほう顔　渡部ミツコ
扇風機しまう間もなく炬燵出し　足立玉恵
彼岸花咲いて仏に会いに行く　田中有樹絵
新米はまず子や孫へ荷造りし　児玉えみ
豊作を皆農機具に献上し　石原冬明
雨の音聞いて二番寝してしまい　藤原千代子
一日がなんとかすんで飯となる　児玉哲呂
今日まだか明日は咲くか菊の花　真綿よし子
肩叩く孫は家族の和をほぐし　森山悠子
店先の松茸ちらっと見て流し　田中芳春

柴栗句会十月抄

沈黙は金老二人日向ぼこ　浅野としお
白菊を無造作に入れ備前焼　糸原古志
曼珠沙華父母の声雲に聞け　恩田和美
喪の家や菊の香重くまた哀し　加納信子
巡り来る月日の早さはぜ紅葉　楠房子
あげ栗のぽっり落つ音山の私語　高木白虹
雲流る木犀の風むさぼりて　中澤美紀子
蒼天へ見事に展べし鰯雲　新出谷一華
ひとりだけど一人じゃないよ秋の声　錦織富江
行く秋を惜しんで雲の流れ見る　峯石美代子
朱に染まりどこまで続く鰯雲　渡部みつこ
秋麗や手作りおもちゃ動き出す　渡部夕峰

揺れる秋　簸の上短歌会

しなやかにコスモスは揺れ言葉ひとつのみて　永井弥生
戻りし庭に夕映え
戸袋に網戸収める足許にヤンマは羽をひろげ　〃
ころがる　〃
亡き夫のこよなく愛でし白萩は圃場整備に掘　岡田時子
られたりけり
丸まると太れる初孫のうつしえにアンパンマ　〃
ンとうから等笑ふ
歯の悪き妻がこのめる佃煮を幾袋も買ふ買下　常盤はるまさ
手なれば
陽のあたりし縁もいつしか冷えくればふと何　〃
時かと臥す妻は問ふ
草叢にこうろぎすだく朝畑にことし終りの茄　野村節子
子をとるなり
山畑に豆引きをれば穂薄のかすかに揺れて狐　〃
よぎりぬ
夕映えはいつしか消えて闇迫る若狭の海に漁　〃
火ゆらめく

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

美濃・出雲・筑後・肥前・肥後・筑前・周防・長門・阿波・土佐の13ヵ国で、かなり広範囲におよんでいることが知られる。

12月1日、洛中、洛外の諸社寺境内および門前の地子が免除された。これは、比叡山の復興などとともに、秀吉の宗教政策の一端を示すものである。

このころ、肥後半国を与えられた加藤清正が肥後隈本（熊本）から大坂城までやってきた。このとき秀吉は、清正の戦功を賞し、さらに朝鮮出兵の準備を命じており、いよいよ朝鮮出兵が具体的な日程として、秀吉の頭の中に描かれつつあったことがうかがわれる。この年、秀吉は重ねて宗義智らを朝鮮王李昖に遣わし、その来朝を求め、李昖がこの求めに応じたという。

しかし秀吉にとって、この段階での当面の課題は、小田原征伐である。12月10日、家康が上京してきて秀吉に会い、聚落第において具体的な北条氏討伐の手だてについて相談しており、家康も全面的な協力を秀吉に約束している。

三沢為虎は輝元に従い、天正18年1590、小田原城攻撃に参加した。この年横田庄から貢納された品物を天皇から頒け与えられた官女達は、欣喜雀躍として下ったという。秀吉に同道して下った利休は、宗二との再会を喜び、取りなしをして湯本で秀吉に伺候したが、宗二はそこでまた憎まれ口をたたいたため、小田原落城に先立ち、4月11日（或は2月27日とも）に47才で死を賜った。（その罪に耳鼻をそがせたとも伝える）。『山上宗二記』利休茶道流の秘伝書として貴重であるが、生存中は悲運な茶湯者であった。

小田原征伐と奥州平定（54才）

このときの後北条側の兵力は、56,000ほどと推定される。

それに対し、攻める秀吉側は21万ないし22万である。秀吉は長期の籠城戦となることをみこし、4月6日、小田原城を見下す石垣山の頂に城を築いた。これが世に石垣山一夜城といわれるものである。

小田原城の守りは堅く秀吉が予期したように長期戦となった。そこで秀吉は、諸大名に女房などを陣中に呼び寄せるのを許可し、自らも淀殿を招致している。5月29日には陣中で茶会が開かれた。

この間、関八州にちらばる小田原北条氏の支城は、秀吉軍の各個撃破をうけつぎつぎと落城、小田原城は孤立していった。たとえば4月19日松井田落城、5月22日には岩槻が落城している。そこでついに、北条氏直も小田原城を守り切ることの不可能なことを知り、秀吉に降った。11日、氏直の父氏政、氏政の弟氏照が城下の医師田村安栖（あんせい）宅で自殺、氏直は氏規・氏房ら300余人とともに高野山に追放され、ここに小田原北条氏は滅亡したのである。

間もなく奥州も平定し、日本は完全に秀吉のもとに統一された。9月1日、京都に凱旋し、まる6ヵ月にわたる遠征を終った。

9月23日、聚落第で茶会が催され、25日から翌月14日まで、有馬温泉で遠征の疲れをいやした。

このころ、かねてより要請していた朝鮮の通信使が京都に到着、秀吉は11月7日、正使黄允吉、副使金誠一らを聚落第に引見、朝鮮が帰服を表明したものと錯覚し、征明（中国・明への出兵）の嚮導（きょうどう）（案内）を求めた。

奥出雲
題字　糸原風亭書
第261号(12月号)
1996.12.6(M129.T82.S71)
奥出雲編集集団
横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

秀吉の時代の奥出雲⑧

1501天正19年(55才)～1598慶長3年(62才)

—太閤検地、文禄・慶長の役、歿—

1591天正19　千利休に切腹を命ず。

毛利輝元に120万石を宛行う。

富田には吉川広家23,926石、出雲のその他は輝元の直轄地、亀嵩には冷泉民部338石と都西部にその一門50人1874石、横田1419石杉原将右エ門、八川595石祖式源吉などが来住する。

1595文禄4　伯耆日野山の産銀運上、右大臣菊亭晴季を流島す。

1597慶長2　五人組を組織させる。

慶長の役安部源大左エ門(横田)毛利氏の下で渡海するという。冷泉民部は討死す。

鶴松の死、関白から太閤へ

天正19年(1591)正月22日、秀吉の弟で、中国経略以来、山崎の戦・賤ヶ岳の戦・四国征伐・九州征伐など、秀吉に従いあるいは先鋒として秀吉を補佐していた羽柴秀長が死んだ。ついで閏正月3日ごろから今度は鶴松が病気となった。

秀吉は2月13日、突然利休に対し堺に蟄居せよとの命令を下し、ついで28日、京都葭屋町の邸で切腹を命じたのである。利休の死は各方面に波紋を投げかけさまざまな憶測を生んだ。当時の公家などの日記でみる限り、表向きの理由は、大徳寺の山門に自分の木像をまつったことにあったわけであるが、真相はより複雑で、秀長の死によって秀長＝利休路線が崩壊したことによる豊臣政権内部の苛烈な権力闘争の結果であるともいえる。

朝鮮との外交も次第に困難の度をました。朝鮮側は秀吉の出兵近しと判断し、全羅・慶尚両道の城郭を増築し修築した。

8月5日、鶴松が三歳で死んだ。このときも畿内の神社仏閣で病平癒の祈祷を行なわせ、医術の手をつくしたが、ついに夭折してしまったのである。秀吉は悲歎にくれ、自らの髻を切った。諸大名もそれにならって髻を切ったため、塚ができたという。秀吉は悲しみをまぎらわすため、七日清水寺に遊び、九日から有馬温泉に湯治に出かけている。

その悲しみをふり払うように、あるいは悲しみから逃れ去るように、朝鮮出兵計画が次次と指令されていった。

肥前名護屋城築城の指示があり、9月16日には諸大名に出兵の準備を命じている。

なお、この出兵準備と不可分の関係にあるのが、8月21日に出された身分固定法令で、侍・中間・小者などが新たに百姓・町人になることや、百姓が耕作を放棄し商売や賃仕事をすることなどを禁止した三ヵ条の条規である。兵農分離・農商分離を進め、身分の固定化をねらったのである。

11月、秀吉は関白職を羽柴秀次に譲り、自らは太閤となった。そこで秀吉は、関白としての心得などを記した訓戒状を秀次に与えている。

朝鮮出兵(文禄の役)と名護屋築城

朝鮮侵略が具体的な動きとして出てくるのは文禄元年(1592)になってからである。まず、正月5日、朝鮮を経て明にまで兵を進める出陣命令が諸大名に出され、禁制が発せられた。同じ日、秀吉自身名護屋城にまで出陣するための途中の宿駅を定めている。ついで諸大名に対し人質を大坂城に送ることを命じた。

こうした諸大名への出陣命令とともに、この年に入って農民の動員態勢も、次第に固められていった。

3月25日、名護屋城に入った秀吉は、自ら再三渡海しようとした。一方、朝鮮に上陸した秀吉軍は、さしたる抵抗もなく、三つの路線に分かれて京城に向かい、5月2日には国都京城を占領した。朝鮮国王は難を避けて北に逃れた。こうした緒戦における連戦連勝に気をよくした秀吉は、5月26日付で関白秀次に朱印状を与えた。これは大陸占領後の計画を内外に公表したもので、たとえば、後陽成天皇を明の国都北京に迎え、秀次を明の関白とし、公家たちにも今までの十増倍の知行を与え、日本の関白には羽柴秀保か宇喜多秀家を置き、日本の皇位には若宮(良仁親王)か八条宮(智仁親王)を就かせ、また朝鮮には織田秀信か宇喜多秀家を置こうという、実に宏大な大陸戦略計画が述べられていたのである。

いっぽう、朝鮮の戦線は、京城に総帥として宇喜多秀家が駐留し、6月12日、毛利輝元が慶尚道の開寧に、16日には小西行長が平安道の平壌に入った。また加藤清正も咸鏡道の咸興を占領するというように、破竹の快進撃であった。上陸軍の編成は、第1軍が小西行長隊、第2軍が加藤清正隊、第3軍が黒田長政隊、第4軍が毛利吉成隊、第5軍が島津義弘隊、第6軍が小早川隆景隊、それぞれが大体において高10,000石につき600人もの軍役を負担、総勢158,000の出兵であった。

こうした軍事的な占領とならび、秀吉は朝鮮を日本なみにしようとしていた。たとえば、増田長盛などは、捕虜にした朝鮮民衆の姓名を強制的に日本名に改めさせたり(『西征日記』)、朝鮮民衆の髪形を日本風にさせたりしており、安国寺恵瓊なども、朝鮮の子供たちを集め、「いろは」を教えこんだりしていたのである。もはやこの段階で朝鮮の各郷村に貢租を賦課、入明のための兵糧確保にもつと

秀吉の時代の奥出雲⑧・宮沢賢治誕生百年⑬・短歌・川柳・俳句・感謝

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

めていた。

大政所の死

この年、すでに80の老衰にあった秀吉の生母なか、すなわち大政所が重病となった。一度天正16年（1588）にも病気になり重態となったこともあったが、そのときには秀吉が清水・愛宕・伊勢などの諸神社に病平癒の祈願をしたりして、ほどなく回復していた。

しかし、今度は秀吉の朝鮮出兵などの心労も重なってか、重くなる一方であった。7月に入り、秀吉のもとへ大政所病気の報が伝えられ、秀吉はとるものもとりあえず、名護屋城を家康と利家にまかせ、7月22日、門司から船に乗り大坂に向かった。しかし秀吉が名護屋を出発した22日、その日に大政所は死んだのである。

29日、秀吉は大坂城に着いて大政所の死を知り、そのまま気絶してしまったという。

ところで、この年の前半、朝鮮半島において快進撃を進めた日本軍は、戦線が広範囲になりすぎたこと、兵糧が乏しくなったこと、さらに朝鮮の民衆が日本軍に抗戦しはじめたことによって、早くも困難な状況にたちいたっていた。何よりも朝鮮の李舜臣を中心とする水軍により、日本の輸送船団は壊滅的な打撃をうけて海峡の制海権を奪われ、補給路の確保すらできなくなっていったのである。

しかも、各地における義兵の蜂起とあいまって、厳寒のもとでの進軍は困難をきわめ、さすがの日本軍も戦線の縮小をはからねばならなかった。なお11月20日、明国の勅使として沈惟敬が和議のために平壌までおもむき小西行長と交渉したが、和議はならず帰国している。

なお、この年秀吉は二つの新しいことをはじめている。その一つは、一里塚の創始である。これは秀吉の名護屋出陣が契機となっている。すなわち、秀吉が名護屋に下った時、毛利領の河辺というところから名護屋まで一里ごとに塚を設けたもので、このとき一里は36町というように定めている。もう一つは、朱印船制度の制定である。すでに、倭冠の取り締まりを強化する海賊禁止令が天正16年に出されているが、さらに貿易を独占するため、公けの貿易船に秀吉の朱印を押した渡海免許状を与え、これを「朱印船」と称して海賊船でないことの証明としたのである。この年、秀吉は異国渡海の朱印状を長崎・京都・堺の商人に与えた。このころの朱印船の貿易範囲は交址・東京・東埔寨・六昆・暹羅・呂宋などの東南アジア諸国で、なかでも呂宋にはマニラを中心として、かなりの日本人が居住していたのである。

秀頼誕生、朝鮮から撤退

朝鮮遠征軍は戦地で年を明かし、文禄2年（1593）となったが、事態はますます容易でなくなってきた。とにかく、補給袋が絶たれ、義兵の決起によって泥沼に足をつっこんだ形になった上、さらに前年9月9日からは、明からの救援軍が鴨緑江を渡って朝鮮に入ってきていたのである。

淀殿が秀頼を生んだころから、撤退の意を固め、12月20日、朝鮮在陣の諸将の帰国を命じた。

この年から翌年にかけて、各地で太閤検地が広範囲に行なわれた。この検地は、特に「文禄検地」とよばれ、秀吉の封建的土地所有確立に一期を画するものであった。文禄3年に検地が施行された国々は、山城・大和・河内・和泉・摂津・伊勢・伊豆・相模・武蔵・常陸・陸奥・出羽・筑前・日向・大隈・薩摩の16カ

宮沢賢治誕生百年⑬

（童話）「グスコーブドリの伝記」を読んで

—小学生の金賞入選の読書感想文から—

グスコーブドリは大きな森で生まれた男の子です。グスコーブドリは、お父さんとお母さんと妹のネリといっしょにくらしていました。ブドリが十さいネリが七さいになった秋には金色にみのるオリザもとれませんでした。オリザというものは、お米のなえのことです。お父さんは、森に食べものをさがしにいったままもどりませんでした。お母さんは、お父さんをさがしにいったままもどらず、妹のネリも知らない男にさらわれてしまいました。その日から、ブドリは一人ぼっちでした。それからブドリは、妹をさがしながら仕事をしました。てぐす工場の手つだいや畑仕事などです。十一才のブドリが、仕事をしながら一人で生きてくのはすごいなあと思いました。ぼくも、家の手つだいをすこしはがんばろうと思いました。それから、火山局につとめて、ペンネンぎしという人に出会いました。つぎの朝、火山局の中をあんないしてもらいました。それからペンネンぎしや火山局につとめていた人たちといっしょに、はたらきました。ある日、村を通りかかったらブドリがのうふたちになぐられて気をうしなってしまいました。気がつくとブドリは病院のベッドにいました。ペンネンぎしがおみまいに来て、「きみに大切なおきゃくさんがいるんだよ。」とペンネンぎしと入れかわりに病室に入ってきたのは一人の女の人でした。ずっとさがしつづけていた妹のネリでした。

妹はけっこんして子どもが生まれてしあわせにくらしていました。そのころ町では、十年に一どの大ききんがせまっていました。もう町をすくうためには、火山をばくはつさせるしかありません。火山をばくはつさせれば、気温があがり作もつがみのるようになるからです。そこでブドリは決心したのです。

「さいごまで島にのこって火山のスイッチを、おす仕事をぼくにやらせてください。」ブドリは、自分のいのちとひきかえにその仕事をおねがいしたのです。

「ぼくは、同じ苦しみをあじわう子どもたちを、つくりたくな

国にもおよぶ。（この続きは省略）

文禄4年（1595）、秀次との関係はいよいよ破局的な段階をむかえた。拾（秀頼）の誕生により、秀吉は甥の秀次に関白職を譲ったことを後悔するようになっていた。秀次の方でも、そうした秀吉の態度は敏感に感じとっていたようである。

7月3日、聚楽第において、ついに秀次は謀反の疑いにより、石田三成・増田長盛ら秀吉の奉行の詰問を受けた。秀次謀反というのが事実がどうかは、この際あまり問題ではない。むしろ史実としては、秀吉側近の石田三成や側室淀殿らの捏造（ねつぞう）であり、実子を得た秀吉の心の隙につけ入った側近のでっち上げであった。秀次の世になれば石田三成ら秀吉股肱の臣は、冷飯を食わされることになろう、そうした寵臣の将来と秀頼の将来を考えたところに原因があったといわれている。

慶長の再出兵・伏見城に死す

冊封使が持参した国書の内容は、「爾（なんじ）を封じて日本国王となす」というもので、さきに秀吉が提示した七ヵ条とは全くかけ離れたものであった。怒った秀吉は冊封使を追いかえしてしまった。再出兵の命が下されたことはいうまでもない。

11月末になると、明の大軍が京城に到着した。ここに、慶長の役の主要な戦いとなった蔚山（うるさん）城の攻防戦が、12月から翌年正月にかけてくりひろげられたのである。

蔚山城の攻防戦は、前年暮から続けられていた。しかし、慶長3年（1598）正月、遠巻きの兵糧攻めにあい、おりからの厳寒も手伝って、籠城した浅野幸長・加藤清正らは苦戦を強いられた。その後、明軍はさらに増強され、日本軍は危機をむかえつつあった。

6月ごろから体調をくずし、平癒祈願も行われたが、秀吉自身も死期の近いことをさとり、7月13日、死後の体制を考えて石田三成・長束正家・増田長盛・浅野長吉（長政）・前田玄以を五奉行と定めて、遺言状を書いて秀頼のことを依頼し、その間7月25日には白銀1,000枚を朝廷に献上し、諸大名にも金銀・刀剣を分け与えて、ついに18日秀吉は息を引きとった。

いずれにせよ、秀吉の死によって一つの時代が終わったことだけは確かである。五大老・五奉行らに残された最大の課題は、いかにして損傷を少なく朝鮮から

山茶花散れる　簸の上短歌会

陽ののぼり陽のしづみゆく何も彼もわれには　永井弥生
何のかかわりもなく
母の逝き夫の病みてこの秋の受賞はきらきら　〃
われの生き甲斐
賞状を病みゐる夫によみ聞かす　しみじみふ　〃
たりのしづけき夜なり
病む夫に湖笛大会賞告げしと言ふ友の眦の光　常盤はるまさ
れるを見し
コスモスの窓辺にささやくごとくにも風はか　〃
らみて秋日昏れゆく
花を賞で華道極めし師の逝きて葬りの庭に山　野村節子
茶花の散る
幾十度通ひし山の畑なれ　豆引く二人に夕陽　〃
が赤い
杖つきて列車にのるに見知らぬ人の一期一会　岡田時子
か介添ひくるる
久々に旧友と会ひし土堤の道で話は盡きず　〃
文化の日の夕
夕虹の消えて暮れゆく越前岬　灯火一つはる　安部夕波
かまたたく

いんだよ。」

こうしてブドリのおかげで、火山はばくはつし町は平わになりました。

ぼくが、もしブドリだったら死ぬのがこわくてとてもできないと思いました。でもぼくも、ブドリみたいに強い人間になりたいです。

ぼくはこの物がたりをよんでとてもおもしろかったです。

—埼玉・高橋太一（8才）

賢治童話の代表作の一つで、作風は「銀河鉄道の夜」（259号）と対照的なものである。

（中間部分の物語を少し入れると）ブドリは自学して、イーハートーヴ火山管理局に勤め、ペンネンネム技師（博士）にであう。ブドリの意見を入れて特殊工事をしたお蔭で豊作になったが、誤解した農民がブドリを襲う。が入院したお蔭で妹のネリが訪れ、その半生を語り、その後幸せな5年ののち、ブドリ27才の時、冷害の予兆があった。技師の博士が、それを防ぐには火山を爆発させることだという。そして——

この童話に対しての評価は、肯定・否定の両者に分かれる。ごく少数の否定者は科学の限界を説明することなくブドリを死なせた失敗作という。

肯定派はブドリの死に客観的必然性はなく、虚構（フィクション）の必然とする。科学には限界があるが、また幸せは犠牲によってもたらされる。死を前にして賢治が考えたのは、農民の悲惨を眼前にしつつ科学の限界がみえたからである。ほんとうの仕事をしたいという使命感をみ、静かな情熱をこめて自己の生活圏への理想（ユートピア）を語った献身、賢治がブドリの状況に立てばブドリのようにしたであろうと読むことを忘れてはならない。問題提起に重点（ウエイト）があり、結果や解答として考えては読み誤りになるといえる。するとさきの小学生の感想文は、賢治の願いを読みとっていることになる。（蓬頭子）

（一応連載を終り、のちほど賢治と音楽・宗教などをまとめて述べてしめくくりたい。）

ら兵を撤退することができるかということであった。

早速、秀吉遺言の趣旨に従って、秀吉の喪を秘して特使を朝鮮に派遣し、停戦の工作をはじめたのである。停戦・撤退の命令は秀吉の死後10日たった8月28日に出され、その使いが釜山に到着したのが10月1日、12月までに全部隊とも帰還することができた。

こうして第2次出兵も、割譲要求地域の保障占領という当初の目標すら達成されないまま、朝鮮の地に戦いの爪あとをのこしながら終結することになったのである。

秀吉辞世の歌は、よく知られているように、

つゆとをちつゆときへにしわがみかな
難波の事もゆめの又ゆめ

というもの。百姓の子に生まれながら、太閤という栄華をきわめた一人の英雄の末路を語るにふさわしい。（この連載は桑田忠親氏著書ならびに歴史読本によって綴った）

こぼれ話　ことしの春、出雲国風土記研究会の例会が加茂町で。午後数か所の現地を訪ねて神原古墳へ（若干移動して公開）。「貴重な銅鏡が一つでは『神宝あり』と書かれているにしては少ないね」と笑った。やっぱりほんとうだった。近くから銅鐸が続々と。風土記の記述はいよいよ値打ちが上る。

感謝——島根史学会会報29号には島根地域中世史文献目録（稿）が掲載されている。1980～1996年の間に発表されたおびただしい論文中から選ばれた1092の論文（出雲503）の中に、次のように「奥出雲」に掲載のもの、及びそれを「山陰史談」に完成して掲載したものを入れて頂いている。光栄に思うとともに感謝する次第である。（筆者名のないのは本会代表の執筆のもの）

1997年は「毛利元就と奥出雲」を連載し、尼子氏も描き三沢氏研究の骨格を提示したい。

山陰史談

12,13号	「尼子経久の母馬木氏への疑問」1．2	1977
14,20	「奥出雲の新補地頭三沢氏」上．下	1978•84
26	「尼子家臣団分析の試み」	1993

（以上奥出雲にのせ完成して『山陰史団』に掲載したもの）

季刊文化財

48号	「奥出雲研究の一視点―中世史像とたたらの研究」	1983

奥出雲

81号	「三沢氏の支族」（三宅隆通）	1982
85•88•90~92	「杠城興亡記（上•中）」（浅原公章）	1982
92	「続杠城興亡記」（〃）	1982
82	「高田寺根元録－岩屋寺との関係－」	1982
127	「中世横田庄概観」	1985
164～166	「誇りうる中世横田庄－その政治と経済の動き－」	1988•89
167	「中世の城郭藤が瀬の遺構」（寺井毅）	1989
169	「能義宇波（上）尼子経久の母馬木氏の里」	1989
169	「能義宇波（中）宇波の城」（寺井毅）	1989
193～199	「太平記の時代と奥出雲（1～7）」	1991

この目録は1882（明治15）年以来の島根地域の中世史に関する研究文献・史料情報を精査・網羅したもので、島根中世史研究の全容を文字どおり鳥瞰することができる画期的なものと会報の編集後記にある。

（尚「奥出雲」207号の「信長の時代の奥出雲6」の横田庄の貢納の記録は学術論文にも引用されている。）

斐の上川柳十一月の句

用なしで朝の寝床が足を引く　渡部ミツコ
壊された家振り向かず横田を出　横山まこと
旅続き体に相談して決める　安部正子
どこかまだ色気匂わせ老婆坐す　児玉哲呂
無農薬だから野菜を子に送る　藤原千代子
うんうんと返事はしたが何んだっけ　高木凡太
お互いに気付かぬ振りの顔と顔　松浦亜以
コトントン松葉杖つく音あわれ　安部春恵
煙見ずごはんも風呂もたけている　児玉えみ
窓あけて冬の匂いをしかと嗅ぎ　藤原のぼる
ヤアだけの挨拶でゆく年の暮　石原冬明
名月をかくした雲をうらんでみ　田中有樹絵
入道雲すぐ雷がついて来る　児玉玉恵
風呂上り思い出せない句を惜しむ　田中芳春
人生は晴れに曇りに涙あり　真綿よし子
お相撲さん勝っても負けても笑わない　田部都

柴栗句会十一月抄

蟷螂は飴色に枯れ宙睨む　浅野としお
秋刀魚焼くこの高原に八十年　糸原古志
声もなく落暉の彩や鳥渡る　恩田和美
遠来の友を迎えてきのこ飯　加納信子
秋霖の旅は老いしを思い知り　楠房子
木枯の荒ぶ曝しての水車跡　高木白虹
秋深し遠くの人のなお遠し　中澤美紀子
職辞して余世を趣味に木葉髪　新出谷一華
木の葉髪行ったり来たり物忘れ　錦織富江
頬寄せて添い寝している堀り炬燵　峯石美代子
残る虫何時しか途切れ冬に入る　渡部夕峰
夕映の寝ぐら何処やら鳥渡る　渡部みつこ

会員頒布一部百七十五円／六六一ノ二　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第262号（1月号）
1997.1.4(M130.T83.S72)
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲と毛利氏①

120万石の毛利輝元　36万石へ

—「天下分け目」の関ヶ原の戦い

関ヶ原の合戦

1600年（慶長5）の月、徳川家の率いる東軍と、石田三成を中心とする西軍によって美濃国関ヶ原（岐阜県）で行われた戦い。

1598年（慶長3）豊臣秀吉が死ぬと、豊臣政権はたちまち内部分裂の兆しをみせ始めた。秀吉は生前から、家康の実力が諸大名のそれをはるかに超えているのを憂えて、前田利家を重用して家康に対抗させようとしたり、五大老・五奉行の制度を設けて、自分の死後における家康の独走を阻もうと考えていた。しかし利家も秀吉の後を追うようにその翌年に死んだので、天下の声望はいよいよ家康に集まり、その独走体制はさらに強まり、専横ぶりもまたひどくなってきた。

五奉行の一人であり、かねて家康に強い反感を抱いていた石田三成は、打倒家康を図ってひそかに策を練っていた。1600年6月、家康は、会津の上杉景勝が上洛の招きにも応ぜず、兵備を整えているというのを口実に景勝討伐の軍を起こし、その前年の9月以来、腰を据えていた大阪城を発して東下した。かねて挙兵の機をうかがっていた三成はこの機をとらえ、毛利輝元、宇喜多秀家、小早川秀秋らを主とする西国諸大名や、小西行長、増田長盛、長束正家、大谷吉継、安国寺恵瓊らの文治派諸将を糾合し、7月大いに家康の罪を鳴らして兵をあげ、家康の老臣鳥居元忠の守る伏見城（京都市伏見区）を攻めた。内心ひそかに三成の挙兵を期待しつつ、江戸を経、会津に向かっていた家康は、7月24日下野国小山（栃木県小山市）で三成挙兵の報を受けるや、すぐさま従軍の諸将を呼び集めて軍議を開いた。諸将のなかには福島正則、池田輝政、黒田長政、浅野幸長、山内一豊ら豊臣恩顧の大名が多くいたが、彼らはかねて三成にきわめて強い反感を抱いていたので、いずれも家康に従って三成と戦うことを誓い、軍議はたちまち決定した。

結城秀康や伊達政宗を景勝に備えて残し、その他の諸将には反転して西上することを命じ、自らはいったん江戸へ帰り、次男の秀忠をして、榊原康政、大久保忠隣、酒井家次ら主として徳川譜代の諸将よりなる一軍の将として中山道を進発させ、福島正則、池田輝政、黒田長政、浅野幸長ら豊臣恩顧大名よりなる主力部隊には、軍監として股肱の井伊直政、本多忠勝両将を添え東海道を西上させた。一方、10数日を費やして8月1日にようやく伏見城を攻略した西軍は、進んで大垣（岐阜県大垣市）に陣して東軍の至るのを待った。

西軍は、石田隊、島津隊を左翼として北国街道を扼し、小西、宇喜多、大谷の諸隊を中央とし、右翼の松尾山に陣する小早川隊とともに中山道を挟み、東方の南宮山に長束、吉川、毛利隊という陣形。これに対する東軍は、黒田、細川、加藤（嘉明）、田中の諸隊と家康麾下の井伊直政、松平忠吉の諸隊を右翼、福島、京極、藤堂の諸隊を左翼とし、池田、浅野隊をもって南宮山に備え、家康の本隊は桃配山に陣した。両軍の兵力はともに8万前後でほぼ伯仲であったが、西軍にはかねて東軍に内応していた諸将が多く、いざ開戦となって実際に戦闘に参加したのはようやく35,000。それにもかかわらず西軍の善戦ぶりはみごとであった。

この日も勝敗の帰趨が定まらなかった午前中、しきりに爪をかんでいらいらしていた。しかし午後になって、かねて内応を約しながらも、去就を明らかにせず形勢を観望していた小早川秀秋が、家康からの厳しい催促にようやく寝返りを決し、にわかに大谷隊の側背に攻撃をしかけたのを境に、西軍はみるみる総崩れとなり、午後4時ごろ東軍の地すべり的大勝が決定した。三成は伊吹山に逃れたが潜伏中を捕らえられ、後日、小西行長、安国寺恵瓊らとともに京都で斬られたほか、西軍の主将として大坂城にあった毛利輝元は安芸（広島県）など九か国112万石から周防、長門（山口県）二か国36万石に大減封されるなど、西軍に加わった諸大名は取潰し、減封などいずれも厳しい処分を受けた。それに伴い豊臣秀頼も摂津、河内、和泉（兵庫県、大阪府）で65万石の一大名に成り下がり、徳川氏の覇権が事実上確立するに至った。（岡本良一）

毛利輝元萩の城へ

公称36万9,000石、西国の雄藩毛利氏の城下萩は長門の北海岸にそそぐ阿武川下流の三角州にひろがっていた。王朝時代には川島荘ともいわれていたが、松本川と玉江川（一名橋本川）の二つの川に抱かれ、三面を山にかこまれ、背に海をひかえた山陰の西陬のこの地は、いかにも世間からおきざりにされたような辺鄙なところであった。

慶長5年（1600）関ケ原の一戦にやぶれて、中国10州120万石の太守から防長2州に削封された毛利輝元が、山口の仮住居からこの萩の指月山に築城して移ったのは、慶長9年11月である。それ以前は毛利氏の属将で石見

奥出雲と毛利氏①・第30回横田史談めぐり㊦・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

の津和野の城主吉見氏が領有し、大内義隆の滅亡後、毛利元就に附属した吉見正頼が家督を広頼にゆずってからは、この萩の指月山に別荘をつくって隠棲し、天正16年（1598）に歿したことが史実に徴せられる。

輝元は芸州広島城から防長に移るにあたり、まず2州の中心地点で山陽道の要衝三田尻（今の防府市）を城下候補地として徳川幕府の内意をうかがったが、許諾を得られなかった。毛利氏が街道の要衝をおさえて、再び徳川氏と覇を争う実力者となることを恐れたためである。そこで、輝元はいっさいの嫌疑をさけ、謹慎の実を示す意味で、思いきって不便で辺鄙な萩の地に退居することにしたわけであった。

それにしても、東は備後・伯耆まで進出して、中国10州の覇者となり、五大老の一人として徳川家康と勢力拮抗した毛利氏が防長2州にちぢこまって、敗戦の痛手から起ちあがる苦難は、言語に絶するものがあった。

毛利氏は中国10州を宰領するため、家の子郎党以外に多数の将士を家来として抱えていたが、その家臣団は輝元のあとを慕うと称して続々と防長2州に移って来た。つまり従来10州分のあがり高でまかなってきた人件費を2州分でまかなうというのだから、これは財政上当面するゆゆしい大問題であった。それに輝元が削封されたときは旧領諸国のその年の貢租米の収納をもう終えていたので、毛利氏の旧領へ転封を命ぜられてはいってきた新領主諸大名は、農民からとりあげる米がないという有様であった。で、広島城にはいった福島正則以下の諸大名は年貢米の返納をしきりに幕府にうったえ、幕府もまた毛利氏にむかって、六箇国のとりぶんをただちに還附せよと厳命して来た。いわゆる六箇国返租の問題が起ったのである。

これよりさき輝元は宏壮な広島城を構築したばかりであり、それに秀吉の朝鮮出兵に従軍して莫大な戦費を消費したことでもあり、倉廩もようやく乏しくなっていたやさきに、この悲境におちいったので、全く途方にくれざるをえなかった。おまけに、敗れたとはいえ防長2州の領主とあれば、あらたに恰好の居城も萩に築かねばならぬ。この土木工事費も莫大である。あれこれ考えると、さすがの輝元も、この際なまじ2州を領有して苦しむよりあっさり2州を返上して寺にでもはいった方がよいという気持にさえなって、遂に重臣にこの決意をつたえるに至った。多くの一族郎党家来たちにとっても、まさに死活の大問題であった。

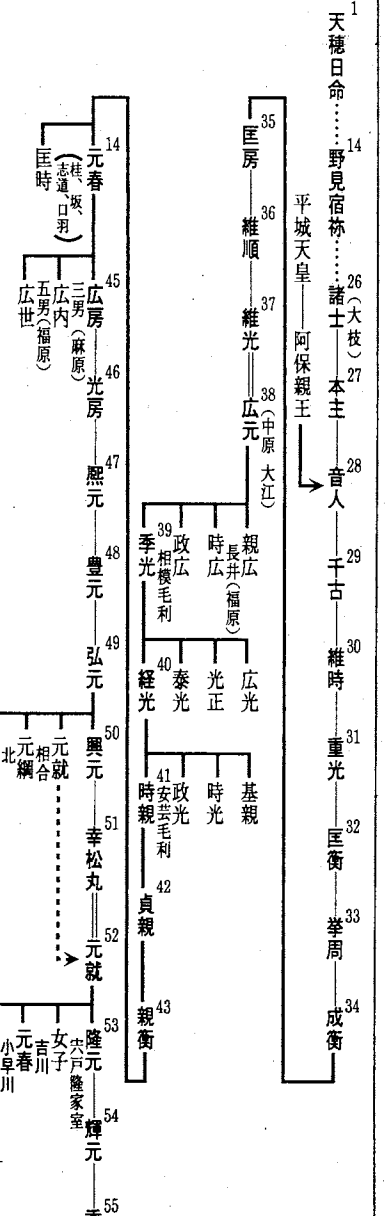
そこで家臣たちは石にかじりついてでもこの危機をのりこえる覚悟のほどを披瀝して、輝元の翻意を求め、元就の遺訓とつたえられるいわゆる百万一心を復興の合言葉としてたちあがったのである。家来たちの知行はすべて5分の1に減ぜられ、6箇国返租の問題は家来の知行高に応じて責任分担額が割当てられた。責任額のはたされぬものは家財道具を売りはらっても、その責に任ずることとされた。

いっぽう人件費節約のためには、老臣益田牛菴の考え出した瞽点と称する一種のくじびきで人員整理をする策も強行された。

犠牲は当然2州の農民たちにもつよく要求された。新しい検地によって貢租の収奪はいよいよきつくなった。長い戦国争乱の世が終りをつげて、農民たちは直接戦火によって田畠をやかれ荒らされることはなくなったが、敗戦領主の運命の支えとして、以前にまさる忍従の苦しい日々がつづいてゆく。年貢の収納は四公六民が当時の一般であったが、毛利氏では七ツ三歩成すなわち7割3分を収奪するという有様であった。

百万一心、士民団結のその合言葉は表面的にはまことにこころよい響きをもっていたが、主従士民ともどもにいのちをかけて孜々営々と2州を開拓して行った汗みどろの生活の実情は想像もできない苦しさの連続であった。敗戦の歴史は時代をこえて、常に人民を残酷な運命にあえが

毛利氏系図



第30回横田史談会史蹟巡り

備中・成羽町㊦

—町立美術館と倉敷大原美術館

せるのである。

こうして2州の祖先の士民たちが封建時代のきびしい道徳に辛くも堪えながら、自力できずきあげて来た生活の悲しいつぶやきや切ない思いが、2州の山にそばだち、川にながれて、いつか200数10年の歳月をすぎたのである。ふるさとを失った移住武士たちがいのちがけで建設した荻城下にも、いくたびか世代はかわり、人々は死に且つ生まれた。次第に数を増してゆく墳墓に苔がむし、ふるびてゆく屋敷町の赤土のねり塀にツタがまつわり、城下人口の峠の一本の松にさえ、ふるさとの匂いが色こくなって来るにひきかえて、人々は借金に苦しみながらも、次第に祖先の苦難の歴史を忘却の波で洗い消し、太平に馴れた営利享楽の生活にあこがれはじめた。参勤交替による都会の消費的生活の弊風が、300里の辺境にも、いつの間にか忍びこんでいたのである。所詮時世の波には抗しがたいというのであろう。

毛利家ならびに家臣団と三沢氏

1857安政4年の11月は吉田松陰が、自宅で松下村塾を開き、弟子達の教育を始めた。幕末の世情が大きくゆれ動き始めた年であった。

この年の正月元旦、萩城の一室小座敷の間で、藩主毛利敬親と諸代の家臣24名が、新年の酒宴を開いていた。家臣らが所定の席に着き、藩主が着座する。間をおかず、藩主の特命による接待役の永代家老福原数馬が挨拶する。その話が終ると、誰ともなく鋭い声で、

「殿っ　関東征伐は！」

「いや、まだその時期ではあるまいぞ！」

と藩主が、おもむろに首を左右に振って答えたという。

この正月行事が、世に伝えられている「御小座敷の儀」という行事である。二つの注目すべき点がある。一つは「徳川を討つ」という、毛利氏の執念を表した主従の会話のあることだ。関ヶ原の恨みをはらしたいという怨念は、長州藩士の誰もが持っていた気概であった。いま一つは、この席に連なる者が、家格によらず選ばれているということで、毛利元就時代の秘密会議に列席した家筋の藩士であったことである。

ここで毛利輝元に服して広島に移り、ついで萩に移った**藤ケ瀬城主三沢摂津守為虎**は、如何なる処遇をうけたであろうか。

（4頁5段へ続く）

倉敷の大原美術館と児島虎次郎

大原美術館は全国的にも著名で海外にも聞えている。この蔭には創設者大原孫三郎（倉敷紡績のちの倉敷レーヨンの経営者）と、成羽美術館の館蔵品の中心作家児島虎次郎（1歳年下）との信頼と友情に結ばれた話がある。

虎次郎の作品は大原美術館の近くのアイビースクエアの裏側の独立した建物に展示してある。数回足を運んだ。

虎次郎は1881明治14年、成羽町の新町（旧下原村）の、「橋本屋」旅館、仕出し・鮮魚・乾物商の家に生れた。4歳のころこの旅館に泊った岡山師範図画教師松原三五郎が、虎次郎の絵をみてその画才に驚き画家をすすめたが、祖母は失礼なと立腹した。5才で父をなくし、早くから家業に従いながら絵を学んだ。

虎次郎の従兄や親友、校長のすすめに祖母も承諾し、上京苦労を重ね1902明治35年21才で、東京美術学校（現 芸大）西洋画科に入学した。

岡山県人会世話人で、近くの高梁市出身の弁護士桜井熊太郎の紹介で、大原孫三郎の設けた奨学会の奨学生となり、以来死に至るまで援助を受けることになった。

成績優秀で1年とび越し卒業、研究科に進んだ。石井十次の岡山孤児院を描いた「なさけの庭」、郷里成羽を描いた「里の水車」は、東京勧業博覧会の美術展で一等賞を受賞し、前者は宮内庁お買上げとなって、虎次郎の出世作となった。孫三郎も喜び5年間の欧州留学を許して援助した。

31才でベルギーの美術学校に3年在学首席で卒業した。画風は点描を多く用いた明快な印象派風のものである。

私はその温かい色彩にひかれ、印象派好みに向い、パリの印象派美術館には滞在中三回訪れた。油絵に時折筆をそめるのもその心と表現を試みたいと思うからで、以来東京や各地での印象派展には足を向けている。

4年後1912大正元年帰朝、ふるさとに帰り石井十次の長女と結婚のち倉敷に住む。長男誕生後は、中国・朝鮮・ヨーロッパに出向き、古陶器類や西洋絵画の収集にあたった。これが大原美術館の誕生の糸口である。虎次郎を育てた孫三郎は、美術愛好という恩がえしをうけて、わが国でも当時先駆的な個人美術館を創設することになった。その大原コレクションの中核をなす作品は、虎次郎が孫三郎にすすめた収集品である。（虎次郎は昭和3年死去）

成羽美術館

虎次郎の若い時代から晩年の遺作までが展示され、その画業と遺徳を顕彰し併せて**町民の憩いの場**としようと、岡山県では町立第1号として昭和26年創設され、現在のものは1994平成6年新築された。（前に見学したのは旧館）池も巧みに建物に組み込んだ館の正面には、フランスのルーブル美術館にある、サムトラチ島で発見された、紀元前300年頃のギリシャ彫刻の代表作「サモクラケのニケ」（勝利の女神像）」の像がある。両翼を広げ舳に立つ生命力あふれた

註…アイビースクエア（赤煉瓦造りの建物の壁に草がまつわりついたホテル）

前号訂正　1頁1段中央　安部源太左ヱ門（横田・土居安部家）

柴栗句会十二月抄

輪禍の夜霜深しんと地を覆ふ　淺野としお
小春日やどこか余生のあたたかさ　糸原古志
琴の符を読み間違えて冬の雷　加納信子
山鳴りに明日は雪かと独り言　楠房子
冬耕の鍬を支えに腰伸し　高木白虹
重い腰はかどらないと蜜柑むく　中沢里江子
一年の夢まぼろしや年暮れる　新出谷一華
流行（はやり）には無縁となりし冬着出す　錦織富江
良き結果きいて冬陽が背にやさし　峯石美代子
七十年馬齢を重ね雪を掻く　渡部夕峰
初雪や急に隣りが遠くなる　渡部みつこ

としのは想　簸の上短歌会

新玉の光あまねき神苑に曾孫の拍手冴へてとおれり　岡田時子
日溜りに蒟蒻の泥を落しおれば猫も手伝ふごと寄りて来ぬ　常盤はるまさ
初雪に立寄る人もまれなりしか　百円市の品数多残りて　野村節子
癌に逝きし夫想へどかすかなる空腹感あり生きるはかなし　永井弥生
文学の小道を行けば夕しぐれ芙美子の詩碑をぬらしてすぎぬ　安部夕波

自由と勝利の象徴である女神「ニケ」が置かれている。ルーブル美術館の大理石像を眺めた眼には、この鋳造物はと不思議に思い聞いたところ、成羽町出身で東京で鋳物工場経営者赤木喜三郎の寄贈で、国産第1号の鋳物作品という。すべてが観光第一より、郷土愛のほとばしるもので、町の後継者育成への各方面の心意気が感じられる。

成羽町博物館

同じ建物の中にある、虎次郎の収集展示室で、エジプト古代美術館や、中国・朝鮮の古美術品など遺族の寄附による600余点があって、専門家の貴重な研究資料ともなっている。

さらに化石室がある。高梁中学の夏休み宿題に端を発し、藤岡一男は成羽の植物・貝化石に生涯を捧げた。北海道帝国大学の権威者大石三郎教授に師事すべく仝大学に入学し、成羽化石を世界的に著名にした功績をもとに、100種の化石（新種30種）が、図解・解説の中に置かれている。両館には複数の学芸員がいて、研究していて解説も要点を突いていたが、時間不足で急いであるいた。

ハード（建物）は造るが、ソフト（内容物等）の追加蓄積は全く考えず、観客のみを期待している自治体が多い。それに反しここは市町村のこの種の建物の中では群を抜いている。鉄の道文化圏六市町村の建物は低迷している。イベントも多くは的はずれ、研究者の指摘する誤りは随所にある。国や県の隠した不正支出は正さなければならないが、こうした市町村資料館の現状はこれと同罪だとする意見が案内するたびに耳に入る。関係者の奮起を望む。

（横田史談会　高橋一郎）

記録によると、毛利家の重臣（小早川、吉川そして宍戸ほか一族10人の次に侍べり、外様の家臣ながら11位、1万石の長州藩としては高禄を拝領し、のち支藩長府藩が置かれると、その2番家老として藩邸の門前に住み、下関に近い地にあって維新の動乱によく藩主を補佐した。

（横田史談会・高橋一郎）

斐の上川柳十二月の句

笑い顔キュッと変えるが首相なり　児玉哲呂
助手席で私もブレーキ踏むつもり　松浦亜以
雲行きの悪い時には止むを待ち　田部都
炬燵してストーブつけて雪を見る　藤原千代子
障子貼る母の小言のハケは口　松浦久寿子
言葉より文字が嬉しい時もある　真綿よし子
日曜日男ストレス碁になげる　渡部ミツコ
大根が家の日向たをひとりじめ　田中有樹絵
腰屈げてトボトボ好きな畑にゆく　安部春絵
議員さん同じセリフはもういやだ　児玉えみ
菊燃やし残り香惜しみ秋も更け　安部正子
豆おとし早く叩かにゃ日が暮れる　足立玉恵
みんな無事達者で年越す有難さ　石原冬明
不祥事や疑惑で平和片そびれ　田中芳春

会員頒布一部百七十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

この合併号の読み方—本誌8頁を見てから読んで下さい

奥出雲

奥出雲と毛利氏②

大内の基盤・毛利の成長・尼子の抬頭・三沢の盤据
—12世紀平安末期から14世紀応仁の乱後まで

題字　糸原風亭書
第263~4(1・2月)合併号
1997.3.1(M180.T83.S72)
奥出雲編集集団
横田史談会
©

歴史の流れ

○数字は下段本文の○数字と符号

11世紀		10世紀		9世紀	
1083	1051	1016	1000	946	939	905	889	873	860

平安時代

僧最澄に続いて空海没 ①京都・石清水八幡宮創建 ②皇孫に源姓を与える(清和源氏) 東北地方に反乱続出 ③皇孫に源姓を与える(宇多源氏 近江源氏) 高望王に平氏姓臣下(桓武平氏) 古今和歌集できる 東国で平将門の乱 荘園ますます増加し貴族や社寺に集中 ④皇孫源姓臣下に(村上源氏)『源氏物語』できる 藤原氏による摂関政治(摂政 関白)全盛 前九年の役 後三年の役 源氏の勢力東日本に振う

三沢氏 —小領主から家老へ

三沢氏については本誌創刊以来たびたび述べている。特に106号から長い連載をして奥出雲・出雲におけるその歴史をのべている。なお論文としては山陰史談(山陰歴史研究会)の14・20号にくわしくその系譜を考証している。ここでは、京極・山名・毛利・大内・尼子の5氏と三沢氏のかかわりについてのべてゆく予定である。

三沢氏の自出—信濃の清和源氏②

中世の信濃は内陸高原の地形の複雑さによって、小地を舞台としてその地盤を固める豪族が各地にあって、それらは分立にとどまり信濃一国を統一する大勢力も生まれず、たえず地侍の小ぜりあいを呈したという。

その小豪族は平安末期から鎌

京極氏・山名氏 —守護大名から戦国大名へ

山名氏の由緒

山名氏は清和源氏②の出である。源義家の子義国は下野国足利庄(現在の栃木県足利郡の全部と安蘇郡の一部を含む)に住んだ。義国の長子義重は上野国新田庄(現在の群馬県新田郡)を譲られて、新田太郎といい、新田氏の祖。次子義康は足利庄を譲られて、足利三郎を称して足利氏の祖となった。義重の三男義兼は本宗を嗣いで新田氏を名乗ったが、長男義範は上野国名胡郡山名郷に住んで山名氏の祖となった。

その後はほとんど歴史の表面にあらわれることなく、不明で

毛利氏 —小領主から戦国大名へ

侍読から地頭職に

天穂日命から出、一四代野見宿禰を経、二六代諸士のとき、垣武天皇から大枝の姓を賜わり、その子本主は、平城天皇の第一皇子阿保親王の侍女中臣氏のすでにみごもっていたのをめとり、音人が生まれた。そこで音人は親王の落胤といわれ、以来、毛利氏の家系は神別、血統は皇別と伝える。音人の代に大枝を大江に改め、以後、学問をもって朝廷に仕え、代々天皇の侍読となったが、わけても匡房が有名である。

そののち参議藤原光能の子広元が大江氏を相続し、源頼朝の招きに応じ鎌倉に下向、鎌倉幕府創業の功臣⑨となった。その

大内氏 —守護大名から戦国大名へ

特異な出自

大内氏は百済聖明王の第三子琳聖が推子一九年(六一二)、周防多々良浜(山口県防府市)に着岸し、吉敷郡大内県(同山口市)に土着、多々良氏を称したのに始まるという。もとより伝説の域を出るものではないが、大内氏の先祖が朝鮮半島から製鉄技術をもって渡来した渡来人だったことは確かであろう。平安時代末、盛房が周防介に任じられてからは、在庁の有力者として代々周防介または権介を世襲し、大内介と称した。したがって、大内氏の姓は平安末期⑥から用いられ始めたと思われる。

守護大名⑧㊴

鎌倉・室町幕府の職名。文治元年(1185)頼朝が大江広元(毛利氏の祖)の献策により、義経追捕と平氏反乱の防止を理由に勅許を得て、地頭とともに諸国に配置、各国の有力御家人(鎌倉時代において将軍と主従関係を結んだ幕府直属の家来)をこの職に任命。軍事・警察を中心の任務に、任国の行政にも関与した。鎌倉時代後期以降は、国内の武士を支配し、荘園を侵略して勢力をのばし、室町時代には領主化を遂げ守護大名に成長した。戦国時代には下剋上の風潮のなかで多くは滅んだ。

戦国大名㊼

戦国時代(室町時代の末期から戦国時代)、各地に割拠した大領主で、守護大名に代わって出現した。実力闘争による新陳代謝であったが、武士が表看板で変転の様相は実に凄じかった。中央では足利将軍家、地方では諸国の守護大名の凋落によって、伝統的権威を誇る上位のものを実力で打ち凌ぎ、これに代わって武家社会の表面にのし上ってきたのが戦国大名。地方によって種々あって、大内氏はそのまま発展し、尼子氏は守護代㊶から、毛利氏は3000貫の地頭⑧から。その成長の検討をすると、重要な要素がある。

国人衆

国人(こくにん・こくじん)達のこと。国衆ともいう。中世後期の在地武士。鎌倉時代の地頭級の系譜をひき、在地領主として領域を支配する。多くは守護勢力の被官として守護の領国制を支えた。

(毛利氏もはじめは、三沢・三刀屋・馬来・牛尾・佐世・赤名ほかの諸氏と同じ自出)

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

		1111	⑤石清水八幡宮横田庄出現
		51	保元の乱　1159平治の乱
		67	平清盛太政大臣　日宋貿易
		80	以仁王の命で頼朝ら源氏は、平氏打倒のため挙兵
		81	平清盛死す
		84	⑥一の谷の戦
		85	⑦壇の浦の戦　平氏亡ぶ
			⑧頼朝　諸国に守護・地頭を置く
			鎌倉幕府
		92	⑨源頼朝征夷大将軍に鎌倉幕府開設（武家政治の初）
		99	源頼朝没
			東大寺南大門完成
		1203	北条時政執権となる
			『新古今集』できる
			水田二毛作はじまる
			将軍源実朝殺される
			⑪承久の乱
			六波羅探題（京都に）を置く
			⑫新補地頭を各地におく
			親鸞浄土真宗を開く
			道元曹洞宗を伝える
			北条泰時貞永式目制定
			藤原定家没
			日蓮法華（日蓮）宗開く
			蒙古使節来る
			⑬北条時宗　執権となる。

倉初期にかけて、関東の平原に志を得られず、信濃の奥地へ入って来た清和源氏の諸流が、複雑な地形の各地に住んで開発に従い、その地名を名乗った多くの氏族であった。その主流は清和源氏であるが、北信濃は経基王の長子満仲の子である頼清流の村上氏と、頼清の弟の頼季流の井上・高利の両氏などであり、南信濃は経基王の末子満快流の源氏で、南信濃源氏または伊那源氏とよばれる諸氏であった。

清和天皇―貞純親王―（源）経基―
- 満仲　頼光……明智光秀
- 頼義―義家……頼朝……
- 満快（伊那源氏）……飯島・諏訪部ほか
- 木曽義仲

これらの諸氏は源平争乱の時代には、その時の勢のあるどちらかに与して動き、争乱末には木曽義仲とともに動いたから、不利な立場に落ちたが、鎌倉幕府創設とともに、いずれも幕府に忠誠な御家人となった。これらとは別な家系であった諏訪神氏もともになびき、武神諏訪神である。四代の孫時氏にいたって、ようやく頭角を見わすが、それ以前は、上野国山名に住んで、生活の苦しさも充分に経験したと伝えられる。

京極氏―侍所所司家の家格

近江時代③佐々木信綱（近江守護・惣領）の四男氏信が江北の所領を譲与され、京都の居館が京極高辻に位置したことから京極氏を称した。氏信は鎌倉御家人であると同時に朝廷から京都警固の任に当たる検非違使に任ぜられ、謀反人追捕等の活動を行なっている。以後、氏信の子宗綱、貞宗、宗氏と続き、いずれも在京の有力御家人として検非違使に任ぜられている。

（3頁4段中央へ続く）

山名氏の抬頭―横田庄―明徳の乱

「山名家譜」によれば元弘3年（一三三三）春㉑、足利尊氏は北条高時の命によって京都へ進発、山名時氏は尊氏に従って功

四男季光は父広元以来の相模国毛利荘（神奈川県厚木市）を領し、地名をもって毛利氏を称した。季光は三浦泰村の乱（宝治合戦）に味方して滅亡。このとき四男経光は越後佐橋荘にあって難をまぬがれ諸地頭職を安堵された。そのうち佐橋北条荘を嫡男基親に、南条荘と安芸吉田荘（広島県高田郡吉田町）を四男時親に譲った。

源氏の諸流

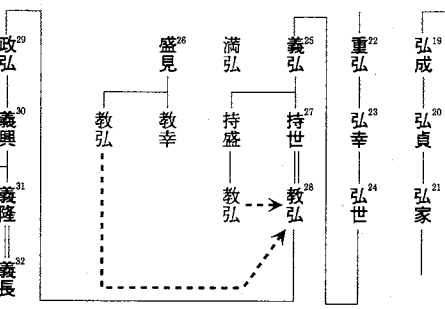
当誌25号にくわしく記しているが、平安時代に皇室経済の逼迫にともない冗費をはぶく意味もあって、姓のない天皇の子孫が姓を与えられ臣籍に下って地方の国々へ土地を与えられて移った。清和源氏②は清和天皇の流れで、八幡太郎義家・為朝・頼朝であり関東へ、また信濃国へ移ったのは信濃源氏―三沢氏はこの流れ。宇多天皇の流れが宇多源氏③で近江国に住み近江源氏といい、のち佐々木氏と称す。これが分かれて、六角・京極氏、京極氏の流れが尼子氏。

毛利氏安芸国に隠退―吉田城へ

時親は六波羅評定衆となり、河内加賀田郷の地頭職を与えら



大内氏系図



※28代教弘の父は持盛と盛見の二説がある

元寇⑭⑮の際には九州に出陣し、のち重弘は六波羅評定衆を務めたといわれる。

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

（三　沢　氏）

（山　名　氏）

（毛利氏・京極氏）

（大　内　氏）

14世紀

68 ㉙**足利義満**　征夷大将軍に

64 ㉘**山名時氏**　出雲守護となる

58 **尊氏没**

53 ㉗山名時氏佐々木高氏を破って雲隠を奪う

56 ㉖観応の擾乱

38 ㉕**尊氏北朝光明天皇より征夷大将軍に任命**（足利幕府）

このころより倭寇、高麗や中国の沿岸荒らす

36 ㉔後醍醐天皇吉野へ（南朝）

35 ㉓塩冶高貞　出雲国を領す（尊氏に与し）

34 ㉒**建武新政**

33 ㉑**鎌倉幕府滅亡**

32 ⑳後醍醐天皇隠岐へ

31 ⑲元弘の変　天皇笠置へ

光厳天皇（持明院統北朝へ）たてる

24 ⑱天皇の討幕失敗（正中の変）

18 ⑰後醍醐天皇即位（大覚寺統）

16 1336 北条高時執権

13世紀

86 ⑯大覚寺・持明院両皇統交互即位の議おこる

（横田庄は北朝持明院に傾く）

84 北条時定没

81 ⑮**弘安の役**　元大挙来襲

暴風雨で多数沈没

76 元に備え博多湾に石塁

75 時定　元の使を斬る

74 ⑭文永の役　元・高麗両軍北九州に上陸大風で退去

わが商船元と貿易

大内氏の抬頭—明徳の乱

大内氏が確かな史料によって歴史上に現われるのは南北朝時代からである。この時代の大内弘幸・弘世父子は、足利尊氏に従った鷲頭長弘に対抗し、南朝方に属して周防国を統一、ついで長門に進出して厚東氏を討って関門海峡を手に入れ、瀬戸内海の海上権を把握したので、経済的にも大いに発展した。かくして弘世は将軍義詮から周防・長門・石見の守護職を与えられ、根拠地を周防山口に移し、大内館を築いた。大内氏繁栄の基礎は、弘世の時代に作りあげられたのである。

弘世の子義弘は北九州に転戦して豊前守護職を獲得したが、**明徳の乱**㉜（一三九一）では足利義満を援けて軍功をあげたので、和泉・紀伊両国の守護職を得た。したがって、乱後の義弘は防・長・石・豊・泉・紀六ヵ国を領する大守護大名に成長した。義弘はこの強大な権力におごって幕府にそむき、応永六年（一三九九）㊲泉州堺で敗北した。この応永の乱によって、大内氏の勢力は大幅に衰退したのである。

しかし、義弘の弟盛見や子息

社の信仰を通じて一層の親密さを加えた。信濃の守護には、経基王—満仲—頼信—長子頼義—義光（新羅三郎といい八幡太郎義家の弟）—次子義清（武田氏の祖）の子の**遠光**（小笠原に住んで小笠原氏の祖）が鎌倉時代のはじめになっていた。

のちの北条氏執権時代も北条氏と信濃との関係は深く、承久の乱にも中山道の大将として、信濃国守護小笠原長清（遠光の子）と甲斐国守護武田信光（義清の孫で長清と従兄弟）が加わったから、南北信濃の諸氏の地頭補任は変動が少なく、その上他国の新補地頭職にも補せられるものが少なからずあった。

源満快の四世の孫の為公が、信濃守に任ぜられ、「上の平」に居館を構えた。「伊那の真人」と呼ばれ、その武将振りをたたえられるとともに、勢力を扶植した。その一門はこの地方各地に基盤をもち蕃衍した。

飯島氏三沢郷地頭職を得る

承久記にあらわれる飯島太郎の孫が飯島三郎広忠である。長府藩の三沢家に伝わる、「三沢家系図」「三沢家家譜」「三沢家

を樹て、山名家を興すこととなった。

建武四年（一三三七）三月当時、伯耆守護は石橋和義であったが、その後、間もなく山名時氏に代わった。高師直は、建武四年七月二三日付で、醍醐寺蓮蔵院領伯耆国国延保における甲乙人の濫妨を止め、それを醍醐寺の雑掌に交付するよう命じている。この御教書の受取人たる山名時氏は、伯耆国守護といえる。かくして、建武四年前半に、鎌倉時代を通じて上野国の豪族として、ながくその地を本拠としていた山名氏は、南北朝の動乱を機に伯耆国に進出、やがて守護大名として新しく発展することとなった。

その後、観応擾乱㉖を経て山名時氏とその一族は、山陰・山陽・畿内に勢力をのばし明徳二年（一三九一）までに一族で伯耆・出雲㉛・丹後・丹波・美作・若狭・備後・隠岐・因幡・和泉・紀伊一一ヵ国の守護職を歴任した。幕府にあっては侍所所司、山城守護、内談衆頭人などを兼任、六分一殿と呼ばれた。しかし、（全国66ヶ国の6分の1を領有）

れ在京していたが、晩年安芸に隠退し、吉田郡山に築城してここに住んだ。時親からその曾孫元春に至る四代は南北朝時代㉕で、毛利氏も動乱の渦中に巻きこまれた。そののち、毛利氏は、足利室町将軍の命をうけ諸所に出兵、転戦し豊元に至る。豊元は応仁の乱に㊶東軍の細川勝元に属したが、のち西軍の大内政弘に従って戦功をあげ、所領の拡大めざましく、新領一六ヵ所を得た。そして文明八年（一四七六）五月に没した。歳三三。

（系図は前号に）

（6頁4段へ続く）

（2頁3段より続く）

京極氏—山名氏抬頭のころ—**横田庄**

建武新政府㉒では、雑訴決断所の寄人を務め、天皇から上総山武郡武射北郷をあてがわれたが、中先代の討伐に向かった尊氏と行をともにして新政府に離反し、建武3年（一三三六）6月、尊氏の京攻めに呼応して瀬田橋に軍勢を集結させており、直義から近江国大将として一国の軍事を委任されている。同年12月、高氏は室町幕府⑳から若狭守護に補任され、ここに京極氏は初めて国持大名となった。翌々年

（三沢氏）——（山名氏）——（京極氏）——（大内氏）

室町幕府

14世紀

92 91 89 1378

㉚義満室町に移る（室町幕府）

㉛山名満幸 出雲隠岐の守護に

㉜明徳の乱 横田庄を満幸横領

義満、強大守護大名・山名氏清と満幸の反乱を鎮める 横田庄2領家（仙洞御所（北朝御所）・石清水八幡宮）に復す

㉝南北朝の合体 幕府権力の確立

㉞北朝後小松天皇が即位 父後円融上皇の追善のため横田庄御所料地半分を

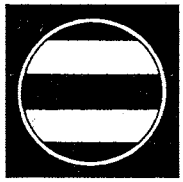
㉟皇室の菩提寺、京都泉涌寺雲龍院へ寄進され、横田庄の領家は3所となる

軍功覚書」（いずれも山口県文書館蔵）によれば、広忠は承久三年山城の宇治川渡河戦の時、多くの溺死者、討死者が出たのにもかかわらず、北条武蔵守泰村はじめ若武者九十五騎とともに渡河に成功し、京都に入って功績をあげたので、三沢郷地頭を拝領したとある。（承久の乱⑪）

しかし三沢郷は田積4丁程度であったので、本領飯島郷に居住して保持していたが（多くの西国拝領の新補地頭は同様であった⑫）下る。

ところが元の来寇⑭⑮によって西国の防備を固めるため、関東武士の西国領地への西漸を幕

明徳の乱㉜（横田庄をめぐって発生）によって但馬・伯耆・因幡の三国に激減、のち嘉吉の乱の戦功によって備後・安芸・石見・伊賀・備前・美作・播磨の守護職を獲得した。



（本号の山名氏終り）

には宗家の六角氏頼をさしおいて近江守護に任ぜられたが、被官の喧嘩から、暦応三年（一三四〇）に妙法門跡焼打事件を起こしたため、出羽国に配流という処分を受けた。しかし、翌年早くも赦免され、伊勢南軍の追討を命ぜられ、康永二年（一三四三）には出雲守護を加えられ、幕府内談衆・引付頭人等を歴任している。観応の擾乱㉖が起こると、直義は高氏の引付頭人・出雲守護を剥奪したため、高氏は一時南朝に降るが、直義没落とともに尊氏に帰参し、以後、一貫して尊氏方として忠功を励んだことにより、乱後三八ヵ所の所領をあてがわれるとともに、上総・飛騨・摂津の守護職に補任され、

の持世らの努力によって、中国・北九州で急速に回復をみせた。幕府は初め後継者問題で盛見と対立していたが、盛見が独力でライバルの弟弘茂の勢力を討つと、最終的には幕府も盛見の家督相続を認めざるを得ず、応永一一年ごろ周防・長門の守護職を安堵し、ついで筑前・豊前の守護職も与えた。盛見は永享三年（一四三一）、小弐氏と筑前深江で戦って戦死したが、彼は武勇にすぐれているのみならず、禅僧と交わり、詩文や儒学を学び、また朝鮮から大蔵経を求めて版行するなど、文化的にも目ざましい業績をのこした。

盛見の死後、義弘の子持盛・持世兄弟の争いとなったが、持世が持盛を抑え、大内惣領職と周防・長門・豊前・筑前四州の守護職を得た。そして北九州に進軍し、大友氏と死闘をくり返した。

嘉吉元年㊴（一四四一）六月、将軍義教が赤松邸において赤松満祐に殺されるという、いわゆる嘉吉の変のとき、持世も同席していて重傷を負い、それがもとで死去した。

持世のあとは、盛見の子教弘

斐の上川柳一月の句

舞い降りる雪にことしの希望（のぞみ）かけ　田中有樹絵
正月逃げもとの暮しの一人なり　安部正子
風邪ひいた味を古米のせいにする　児玉哲呂
年賀状いろんな牛がごあいさつ　児玉えみ
よなよなと何時しかいない老の蠅　田部都
長生きの秘訣あれこれ試みる　松浦久寿子
初電話向うに孫の笑顔あり　渡部ミツコ
七十路牛の歩みに身をまかせ　真綿よし子
爺と婆孫の花札よい相手　松浦亜以
御馳走を並べてみたが一人では　安部春恵
懐かしい正月唱歌口ずさむ　高木凡太
お悔みを箸おいて聞く老二人　石原冬明
好物の数の子もらい子に感謝　足立玉恵
初詣で孫の背丈に追い越され　藤原千代子
他人には言えて言えない伴侶あり　田中芳春

柴栗句会一月抄

初鶏の声が尾を引く牛舎より　淺野としお
寒雷や胸のつかえはふっきれず　糸原古志
淋しき言葉胸に秘め炬燵にて黙す　恩田和美
硯海の程良き濃さ筆始め　加納信子
元旦の訪う人も無く夕暮るる　楠房子
貞享の文字古る鳥居や初詣　高木白虹
寒椿小さく染まり胸の奥　中澤美紀子
年の瀬や胸のこだわり捨て切れず　新出谷一華
仏前に一人で話す小正月　錦織富江
ポケットの小銭まさぐる年の暮　渡部夕峰
初釜や母の古着も懐かしく　渡部みつこ

（三沢氏）——（山名氏・京極氏）——（京極氏）——（大内氏）

| 15世紀 | | |

（三沢氏）——（京極氏）——（毛利氏）——（大内氏・尼子氏）

15世紀

81 77 73 68 1467~77 57

土一揆いよいよ盛んに
太田道灌江戸城築く
㊵幾内を中心に郷村制（惣村）が形成される
㊶応仁の乱おこる
細川勝元（東軍）と山名宗全（西軍）の対立
京極氏（雲隠軍）細川方
大内氏（石見軍）山名方
（出雲守護代に尼子清定）
雪舟　明に渡る
（ボルトガル人の海外探検はじまる）
（イタリヤ・ルネサンス最盛期）
山名宗全・細川勝元没
㊷応仁の乱京都焼失で終る
戦国時代はじまる
一休宗純没

清水八幡宮庄園⑤となり、京都鎌倉との往来が頻りとあり、岩屋寺の建立、源頼朝の横田庄への代官派遣（小池氏現横田表杠氏の祖）⑨、北条時輔の所領⑭となり、横田八幡宮を中村の中心地馬場（岩屋寺の山麓）への移転再興⑮。北条時輔の実母尼妙音の横田庄保護。やがて北朝仙洞御所への八幡宮領の分割などで京都とのつながりは深く、御所の代官安部氏が下向し、仙頭御所の長官日野氏（将軍足利義満㉘の妻日野富子の家）とのつながりなど、奥出雲に横田庄は輝く存在であった。それが山名氏一族で出雲守護山名満幸の年にわたって侍所頭人を務めた。多賀高忠は寛正三年（一四六二）、所司代に就任しているが、土一揆の鎮圧や洛中の治安維持に殊功をあげ、以後、京極家の命運を双肩に担って活躍した。

応仁の乱㊶では、持清は東軍に属して、西方の六角高頼と近江各地で激戦を展開し、出雲・隠岐・飛騨の分国の軍勢を動員した。京都では多賀高忠が七千余の京極軍を率いて東山如意岳城に拠って山名持豊の軍と対峙している。これらの戦功によって、文明元年（一四六九）五月には持清に異例の近江守護職が与えられ、鎌倉以来、初めて京極氏が佐々木氏の惣領家となったのである。しかし、翌年持清は

常の如くに　簸の上短歌会

母さんの涙は父さんにはつらいよと息子はくり返しつつ歸りゆきたり　永井弥生
ふうわりと餅のふたつが鍋に浮き雪にこもれる今日のはじまり　全人
圃場田の底の底まで堀り起こし白山黒山沙漠のピラミッド　岡田時子
墓道の片方に竝ぶ曼珠沙華に化神の蝶か空に去り行く　全人
山畑の道辺に転ろぶ柴栗を拾ひつつをれば陽の傾きぬ　野村節子
背を丸め瓢箪いぢりに余念なき夫に秋の陽おだしく揺れて　全人
磯岩を蔽ふ重油は大蛇の如波よするときゆた　常盤はるまさ
り蠢めく
ふるさとに歸り来て五十余年経しことを運命としてわれは老いゆく　全人
義歯はづして常の如くに枕辺の机におきて床に入りぬ　全人
潮騒のきこゆる街に旅暮れて寒々として灯火またたく（小浜にて）　安部夕波

柴栗句会二月抄

滴りのリズムの中に春を待つ　淺野としお
葉牡丹の渦ほぐしつつ日脚伸ぶ　糸原古志
一本の釘に妻のモンペと吾が春着　恩田和美
客一人乗せて吹雪のバス走る　加納信子
延命の水汲む人や日脚伸ぶ　楠房子
戻り道足裏ほどの日脚伸ぶ　高木白虹
杖の先蕾かぞえて春を待つ　中澤美紀子
一ぱいの寒九の水を薬餌とす　新出谷一華
昨日春今日は深雪の雪を掻く　錦織富江
餅を搗く二人の手の皺向を秘む　峯石美代子
風邪三日総てを任せこもりけり　渡部夕峰
着古るしのスカー布濡らす春の雨　渡部みつこ

毛利元就の時代へ

—3頁4段中央から続く

その嫡男弘元は、細川氏（幕府）と前将軍を擁する大内義興（政弘の子）との間にあって、その心ゆれ動き、明応九年（一五〇〇）三月、八歳の幸千代丸（興元）に家督を譲り、郡山城の西北三〇〇貫の多治比猿掛城に、次男松寿丸（元就）を伴って隠退した。

幸千代丸は永正三年㊻（一五〇六）正月、弘元が三九歳で病没すると、いちはやく大内義興に属し、その偏諱をうけて興元と名乗り、義興に従って上洛して軍功をたてた。同八年帰国してから、安芸の国人領主小早川ぐれ、六カ国の守護職を継承するとともに、この時代、山口の文化は最盛期を迎えた。日明・日鮮貿易による豊かな経済力が文化の発展を促進した。

明応九年（一五〇〇）、さすらいの将軍足利義稙（よしたね）が、義興をたよって山口に下ると、彼は義稙を保護し、やがて、永正五年（一五〇八）義稙を奉じて大挙上洛し、将軍義澄を近江に放逐して義稙を将軍職に復し、自ら管領代となった。しかし、義澄は細川澄元らに援けられて反撃し、ここに将軍職をめぐって一〇年にわたる抗争がくり返された。義興の留守中、中国地方の国人層は大内支配から離脱していこうとした。とりわけ出雲の尼子氏は、この機会をとらえて芸備方面に進出し、勢力を拡大していった。

（本号の大内氏終り）

尼子氏

—守護代から戦国大名へ

出自と出雲下向

尼子氏は近江佐々木氏③の流れで、出雲の月山富田城（がっさんとだ）（島根県

4月号より印刷費の値上りのため本紙1部200円にお願いします。史談会員の会費は後半期より1,300円にお願いします。

15世紀 | 16世紀

1484 (43)塩冶氏尼子に代って守護代となる
85~92 山城国一揆、国内の自治を行う
88 (45)一向一揆 加賀国の守護を倒し「百姓持ちの国」を形成
86 (44)尼子経久 月山へ(文明18)
91 北條早雲伊豆国占領
92 (コロンブス アメリカ発見)
98 (バスコ=ダ=ガマ インド航路開発)
1502 村田珠光(茶道家)没
06 (46)雲舟 益田東光寺で没
09 (47)三沢氏藤ヶ瀬城へ(永正6)
17 戦国大名割拠(各地に争乱)
19 (ルターの宗教改革)
23 (48)大内・細川の船、中国寧波で争い、大内氏が勝つ
26 (50)横田に手馬市開かれる
32 日蓮宗信徒一揆、一向一揆と対立

(三沢氏)

土一揆さかんにおこる
義政 京都東山に別荘(銀閣)をつくる(慈照寺)
山城国一揆、国内の自治を行う
下剋上の流行
(マゼラン世界一周に出発)
城下町しだいに繁栄
皇室甚だしく衰える
文人招待により山口繁栄
鉱山開発(石見銀山も)
(49)大内氏、日明貿易独占

横領するところとなり、明徳の乱(32)となる。南北朝合体により(33)横田庄の一部は泉涌寺領にも分けられ(34)(35)、横田庄の貢納の良さと、京都と鎌倉と結ぶための近道は横田庄と手を握ることであった。

出雲に来住150年力を貯えた国人衆となった三沢氏は、明徳の乱の40年後横田八幡宮遷宮の棟札に「地頭信濃守為忠」(三沢7代為忠)の名を記すほどに成長する。(39)の翌年) 土着150年すでに、阿井・布勢・三処郷も支配下に置いていた。

しかもこのころ出雲の守護で本貫地近江国にいる京極氏が、出雲国内の諸論争に発給した文書を見ると、当時守護代であった尼子氏の力は弱く、三沢氏らの国人衆に宛てたものが多いことである。これは大内氏が周防以外の領国において宛てたと同様の状態である。これらの点を毛利氏の領国支配と比べると弱体であったことの原因である。

守護代尼子氏は近江より下って来て土着性ない武士であり、徴税官で、出雲国内の多くの国人衆から浮き上っていたのである。

そして尼子氏は追放の浮目を

(京極氏)

没し、京極氏も両派に分裂して争い、やがて佐々木惣領職は再び六角氏に戻ることになる。文明五年には持清の次男政経が近江一国守護に補任され、西方に走った持清四男の高清、六角高頼らと泥沼の争いを続けた。彼等が講和するのは応仁乱後の文明一三年のことである。しかし、江南は六角高頼が、江北は京極高清が抑え、政経は遠く分国出雲に没落していた。

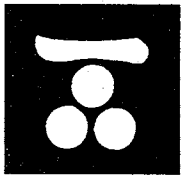
文明一七年に至って、政経の子、経秀が侍所頭人に任ぜられ、多賀高忠は再び所司代に返り咲く。そして高忠死後も、将軍による六角征伐が行なわれて、政経は一時的に近江守護に還任(延徳二=一四九〇)することもあったが、明応元年(一四九二)、幕府は高清を家督とする決定を行なった。しかし政経の勢力もなお江北に強く、高清は美濃守護代斎藤利国の援けを得て僅かに余勢を保ち、利国自殺後は海津に流寓するありさまであった。

尼子氏の台頭

この段階では、出雲で守護代尼子氏が台頭して戦国大名化への道を歩み、江北でも老臣上坂氏、さらに浅井氏が台頭して、大永三年(一五二三)には高清・

(毛利氏)

吉川(きっかわ)、天野、平賀ら八人と同盟的な一揆契約を結び、そのリーダーとしてしだいに地歩を強固にし、郡山東北甲立五龍城主宍戸元源と戦ったが、一進一退のうち永正三年八月、酒害のため二四歳で没し、二歳の遺児幸松丸が家督をうけた。その軍事面を後見した猿掛城の元就は、主家大内氏に反逆した安芸守護家の佐東銀山(かなやま)城主武田元繁を、二一歳の初陣で倒して武名をあげた。そして大永三年(一五二三)(48)を迎える。この七月幸松丸が九歳で早世し、毛利氏の家督は元就が本家を継ぎ、本城の郡山城に入ったのは二七歳のときの、大永三年八月一〇日で、「毛利の家わしのはを次脇柱」とは、このときの元就の発句である。驚を毛利にたとえ、次男で支城にあった脇柱の元就が、はからずも本家を継ぐことのできたことを詠んだのであり、元就の将来はここに開けた。



(本号の毛利家終り)

(尼子氏)

能義郡広瀬町)を本拠とし、一六世紀初頭には山陰山陽二道に覇を唱えた初期戦国大名の代表的存在である。

佐々木氏は京極・六角の二系統に分かれるが、尼子氏は京極氏の士族である。すなわち佐々木(京極)導誉(どうよ)(一三〇六~七三)の孫高久が、近江犬上郡尼子郷(あまご)(現、滋賀県甲良町(こうら))を給与されてこの地に住し(38)、在地名を名乗って尼子氏を称したのに始まる。その子持久は伯父京極高詮(たかのり)の守護代として出雲に下向し、富田城に拠って出雲尼子氏の祖となったといわれる。このことは、『陰徳太平記』の「持久始めて出雲の守護職と成って彼の州に下向す、是れ出雲尼子の初めなり」という部分によるものだが、もとより近世の軍記物をそのまま信ずるわけにはいかないだろう。しかも、持久の名は確かな史料には見いだせないのである。

尼子の名が出雲の確実な史料に現れるのは、永享一一年(一四三九)の日御碕文書「一神子言上状」の尼子四郎左衛門尉である。京極高詮は明徳の乱後、出雲・隠岐守護に還補され、出雲に下向しているが、それから三六年

(次頁4段へ)

印刷所と編者の多忙と編集形式の変形のため、2・3月号合併号とした。

前号訂正　1頁左欄外　第30回横田史談会史跡めぐり・5段（岡本良一）を削除

16　世　紀

73	59	58	53	51	49	47	44	43	1541	34
㊸室町幕府の滅亡	信長京都に来る	（イギリス・エリザベス女王即位）	後期倭寇の活動活発	㊷陶晴賢（すえはるかた） 大内義隆を殺す	（ザビエル日本を去る）	キリスト教伝（フランシスコ・ザビエル鹿児島へ）	大内義隆最後の勘合船を	ポルトガル船種子島へ	㊶尼子晴久吉田城の元就を攻撃	浅井氏京極家にかわり北近江を領有
			川中島の戦い				尼子晴久中国に勢力を	鉄砲・火薬伝える		織田信長 伊勢神宮遷宮費献上
							大内義隆最後の勘合船を	（コペルニクス 地動説発表）		

三沢氏藤ヶ瀬城に移る

1509（永正6）年㊼三沢氏は横田庄を地頭請所として代官代行を3領家よりうけ、藤ヶ瀬城を築城しここに居所定めた。その城は勢力を誇示するが如く横田盆地の一角で四周を一望し睥睨（へいげい）するが如くである。この頃大内氏の勢力は破竹の勢であった㊾。尼子氏はこの情勢と血縁（尼子・大内の政略結婚）の下、吉田城の毛利元就を攻めたが大敗した㊶。

（三沢氏）——（京極氏）——（尼子氏）

みて、塩冶氏（国人衆）が守護代となるが㊸、4年漸く守護代に復し月山城に入る㊹。このことは尼子氏が亡ぶまで、何かにつけてあらわれて来る。

高慶父子は国外に追放された。高慶の子高次は、浅井氏滅亡後、織田信長に仕え、本能寺の変では明智方に与し、一旦は没落の身であった。しかし妹を秀吉側室として赦され、文禄四年（一五九五）には大津六万石に封ぜられた。

関ヶ原の役では徳川方として大津に籠城、戦後は若狭小浜で八万五〇〇〇石、寛永一一年（一六三四）松江二六万石、三年後、竜野六万石に減封、万治元年（一六五八）、丸亀六万石となり維新に至る。ただし京極家の文書は、尼子氏の支流、萩藩の佐々木舎人家に伝来した。

（本号の京極氏終り）

（前頁5段より）

（尼子氏）——（尼子氏）

して初めて尼子の名が文書上に現われる。この四郎左衛門尉を持久に比定する見解もあるが、四郎左衛門尉を守護代とみることはむずかしい。尼子持久が明徳の乱後、守護代としてすぐ下向したという従来の見解は否定的となり、初めは隠岐氏や宇賀野氏が守護代であったことが確認されている。

尼子の歴史は佐々木文書により、持久の子清定の後半からようやく明るみに出てくる。清定がいつ家督を継いだのか判らないが、応仁の乱勃発のころはすでに彼の後半期に入っていた。

大乱中、清定は富田城にあって、京極氏の忠実な守護代でありつつ、地方で出雲東部の国人層をおさえ、美保関（みほのせき）での関銭徴収を委託され、しだいに経済力をつけて勢力を増大させた。

（本号の尼子氏終り）

本号の読み方

（横田史談会 高橋一郎）

編集のねらいがうまくできなかったが、まづ年表「歴史の流れ」と三沢氏とを対象しながら読んで、国内と奥出雲の流れをつかんで、（年表中の○数字と、下段の文中の○数字は符号している）そして各段の各氏を通して読み、鎌倉・戦国時代の流れを理解して頂く。次号からは毛利氏と奥出雲で進める。今月号の文は、藤岡大拙・米原正義ほか3氏の読み物を大幅に引用加除させて頂いた。感謝致します。

早春序曲　簸の上短歌会

まとまらぬ一首にこだわり降る雪を見つつ炬燵にひとつの湯呑　永井弥生
テレビにて広島の土筆を見て居りぬ　わが庭は五十センチの雪に埋まる　〃
野仏は人のゆきつく姿とか　冬の日ぐれのさびしきお顔　〃
寝る前にストーブに灯油充たしつつ今宵も妻よ安らかに眠よ　常盤　はるまさ人
寝しまに雑煮を祝ふ長病みの妻には餅を小さくしてやる　〃
わが植えし梅の苗木のようやくに芽吹きはじめぬ　六年前に植えし梅　岡田時子
潮騒の遠くきこゆる北の街　浜辺は寒き早春（はる）の夕映え　安部夕波

斐の上川柳二月の句

大根の煮〆も入れて荷物出し　藤原千代子
山茶花の枝折り帰り友とする　安部春恵
運動の一つに今日も雪をかく　石原冬明
孫達の育つ姿に老を知る　松浦久寿子
平凡に暮す日々こそ幸せで　真綿よし子
質問も与党になると気がぬける　児玉哲呂
ごみの山障子破っていいみやげ　安部正子
色も香も失せた女房の口達者　高木凡太
寒の上気温下って雪も降り　足立玉恵
医者帰りこれで噛めるとお茶にする　児玉えみ
新調のめがねで鑿穴までのぞき　渡部ミツコ
鬼はソトーよその家向き豆をまき　松浦亜以
とんど火に託す女の願いごと　田中有樹絵
初詣で神にお礼を言い忘れ　森山悠子
正直で真面目顔して知らんふり　田中芳春

会員頒布一部百七十五円／〒六九九―一八（電話・電送兼用）　島根県仁多郡横田町一〇二一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）　頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所　0854―52―0191）

奥出雲
題字　糸原風亭書
第265号（4月号）
1997.4.5（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団
横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治維新以降の奥出雲における
銑生産の系譜⑯

俵国一博士の報告書の誤読による誤解

近世企業たちは銑生産が目的

このことについては、先に諸論文を次の書ならびに、学術誌に控え目に述べている。

『金属博物館紀要』11号1986（英文）
『日本の産業遺産—産業考古学的研究』1980（玉川大学出版部刊）
『金属の文化史』1991（アグネ社刊）
『ふえらむ』Vol.1 1996（日本鉄鋼協会誌）
『バウンダリー』4・5月号1997（東京工業大学）
その他

これらを読んで頂くと、三日押（俵—鏈押法）四日押（俵—銑押法）もとともに、鉄師の経営目的は銑生産であることを述べている。真砂砂鉄の多い、伯耆西部・奥出雲・石見東部では、3昼夜操業（江戸末期までは4昼夜）で銑を生産するが、鏈が炉底にできたのである。これは根本は送風具の改良の遅れがもたらしたものと見なければならないと思う。いろいろ苦心の操業を重ねて来ている。幸いなことに鏈の中にできる鋼は燐P硫黄S等が少ない、優れたものだった。明治時代洋式近代製鉄で生産される鋼と比べて、格段の含有量の差があったので、陸海軍省の眼にとまったのである。その後科学技術の進歩でその差はなくなったが、戦時に入ると日本刀材料として、ねばり強さと、焼入れによる肌の美しさを生むことから珍重され今日に至っている。

この記述はこの連載では少し後でと予定していたが早めてのせていろいろ御批判を頂きたいと思った次第である。

俵調査報告研究書は『明治時代に於ける古来の製鉄法』、明治31年1898ころの調査で、発表は昭和8年丸善から刊行のものである。この本が日本刀の研究との関連で誤読されて今日に至っている。学問の世界の重さと筆者の非才からはっきりと言っていなかったが、ここではじめて、絲原家他の鉄師の経営勘定書で数字をとり出して、誤読されている基本的なことの一つをまず明らかにして置き、そして予定の連載計画通りに筆を進めたい。

乱暴な言い方のようであるが、奥出雲ほかの鉄師の記録からみると、真砂砂鉄の多い地帯のため、鏈が招かざる客として、実は困まっていたのである。（赤目砂鉄地帯にはこの悩みはほとんどなかった）この実情を克服するために、鏈割りに努力して成功し、さらに4昼夜操業（四日押）を三日押（3昼夜操業）に短縮して、年間の操業を2割増として増産へ進んだのである。鉄鉱石ではあるが、銑生産を最も早く成功させた（高温を得て還元鉄を溶融して銑とした）のは中国である。欧州が鉄鉱石から高炉による高温操業に成功して銑生産に成功したのはずっと後のことである。

わが国は鎖国による外来の技術の流入がおくれ、洋書の禁もあって科学思想の流入も遅れたから、いつまでも低炉と天秤吹子による送風量の限界を破れなかったのである。それを逆手に三日押の工夫に到達したものとも考えている。

加えて産業革命もなく、機械文明への進歩もなく、前近代的操業を続けたのである。しかし既述のように当奥出雲でも幕末から急速に脱皮することができず、30余年を経過した明治30年代になってようやく再び、近代化の芽が出だしたのである。企業たちは日本の誇る古代からの製鉄法と、鋼と日本刀の関係からのみ、評価するのは誤まりである。文化遺産としての製鉄法である。今は経済を無視した文化財であることを認識して置かないと、日本製鉄史の誤りを犯すことになる。『日刀保たたら』は安部由蔵村下が苦慮の結果開発した新三日押で、この中の⅓強の高価な鋼が得られ文化財鍛造に貢献しているのである。古来からの小規模のたたら（自給たたら）は、今日また復活していて、実験として試みられ、刀匠によってはこれによって生産した粗鏈（諸鉄混在）を再溶解し銑として、鍛造によって鋼を生産していることを忘れてはならない。中世の製鉄の主流はこれではなかったかという推測も有力である。

報告書の誤読、誤解

先に簡単にのべたが、二つの製鉄法が古来からと誤認されている。博士も述べておられるが鏈は割れず捨てていた。宝暦年間から割って鋼と歩鏈に分けたと記してある。鉄師の勘定書の記録と一致する。そして幕末までは鏈押法も四昼夜操業が主で（当地方では四日押とのみいう）ある。そして鉄の収入で鋼は2割程で、銑と鏈から鋼をとった残りの歩鏈で大鍛冶屋で精錬した割鉄（のち包丁鉄という、錬鉄・普通の鉄）収入が8割である。真砂砂鉄地帯も銑生産が四日押のち三日押の生産目標であったのである。この点俵報告ではここまで述べられていないことが、誤読に拍車をかけたのであ

明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑯・奥出雲と毛利氏③・川柳・俳句・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

奥出雲と毛利氏③

14世紀南北朝期から15世紀初めまで

横田庄にゆかり多い山名氏

前号の記述では、毛利元就が奥出雲とかかわりができるのは16世紀半ばの1540（天文9）年、三沢10代為幸が尼子に属して、安芸の吉田城の攻撃に加わる時からである。前号の武家の中で最も早く横田庄に登場するのは山名氏であるので、今月号ではそこに焦点をあててみる。

山名氏の登場は三沢氏雌伏時代

14世紀のはじめ鎌倉時代の終末期は、三沢氏は信州飯島郷から三沢郷に移住し、専ら周辺に一族を配して開拓を進め、家人を与み入れて地盤堅めをしている時代である。毛利氏も同じく吉田荘に一族時親が西下して、同様に雌伏している時代であった。

出雲守護佐々木氏とのかかわりを示す文書はないが、1391年の明徳の乱㉜後、山名満幸を京都で討った功績によって一門京極高詮が、出雲、隠岐の守護となってからかかわりが多くなる。

横田庄が文書の上で出現するのは1111年、京都石清水八幡宮の荘園としてである。寄進地系荘園と考えると、当地の郡司の努力によって開拓が進み、中央の事情に明るい郡司が、石清水八幡宮に頼ったものと見える。この文書のあと90年後の『源平盛衰記』に見える横田兵衛尉維之はその系譜のものであろう。源頼朝の下文の中にも維之の名が見える。そして代官が派遣される。

それから60余年後の1271文永8年の千家文書によれば、横田庄は北条時輔（時宗の異母兄・六波羅探題、伯耆守護）の支配下にあって55町歩とある。この記録の中には出雲国内に153の郷・荘があり、50町歩以上は25を数える。出雲の南半分の奥出雲でこのように広い郷・荘はないから、土地柄の良さと郡司らの努力が実を結んだものと見える。

遡るが733年の『出雲国風土記』では、仁多郡の亀嵩、馬木以西には神社数が8あって、横田郷は広い地域であるのに1つしかない。住民の少ないことを示す数字である。それから270年後には横田庄として登場し、さらに160年後には55町歩の大きい荘園となっている。何はともあれ住民をまとめた人材があり、人々の努力によって生産性が豊かな土地であったと思われる。

1316年北条高時が執権となった2年後、後醍醐天皇が即位すると⑰、側近とともに討幕へと動いたが失敗した。（正中の変）⑱それから7年後味方を加えた天皇は政権を朝廷へと動いたが—元弘の変⑲—、天皇は笠置へおちることになった。幕府は持明院統の光厳天皇を立てた。（のちの北朝のはじめ）その翌年後醍醐天皇は隠岐島へ遠流せられる⑳。翌年諸国の天皇へ味方する武士の蜂起によって高時は没し、鎌倉幕府は幕を閉じた㉑。このころ横田庄（石清水八幡宮領）の一部が仙洞御所の領地ともなり、院の役人安部氏がその代官として横田庄内へ下って来る。

その翌年後醍醐天皇によって建武の新政㉒となった。次の年塩冶高貞（初代出雲守護佐々木氏

る。冶金学上の炉内反応の問題も見方を変えなければならないと思われるが、ここでは私としては素人のため遠慮したい。

昔の産業も経済の原則が時代差はあるとはいえ根本である。

俵報告書の『砥波鈩』（伯耆真砂砂鉄の多い地帯三日押—俵錬押法）の1代の数字を検討すると

Ⓐは1代の全生産量である（トン）

Ⓑは単価で、鋼と歩錬には錬を割るための可成高額の費用が加算されている（詳細略）。

Ⓒは、1代の各製品高である。

Ⓓは大鍛冶場で割鉄とされた量である。Ⓔこの調査の年陸海軍がこれらを購入した10貫の単価である。勿論大鍛冶場の加工賃が入っている。Ⓕはこの単価を掛けた製品の総額であり、（）内の割合は製品総額に占めるそれぞれの割合である。

すると近世企業たたらでは、赤目地帯での四日押はもとより、銑生産のほとんどは割鉄とされ（地方によって製品名に呼名の違いがある）、真砂砂鉄の多い地帯でも、割鉄が収入の主体であることになる。従って奥出雲の卜蔵家が、三日押で錬も生産しながら、銑生産量を2倍とした努力の意味も明らかとなる。

このことが忘れられている。

割鉄（錬鉄）が当時の庶民の生活・生産用具の主体であったから当然である。こうした鉄師の企業経営の視点、社会の視点が、たたら研究から欠落していたのであった。

すると炉内冶金学的研究も検討する必要があるではなかろうか。安部村下は、「卜蔵の『原炉』で銑をつくらねば、鉄師はもうけにならぬと言われていた」とか、「銑づくりには錬はガンであった」と話していた。極言すれば三日押は四日押の変形、銑生産の過程にある操業というべきではなかったか。『日刀保たたら』は新三日押として検討する必要があるではなかろうか。

（横田史談会　高橋一郎）

Ⓐ 鉧場製品	Ⓑ単価(1貫目)	Ⓒ製品高	Ⓓ大鍛冶場へ	Ⓔ10貫で	Ⓕ
錬 2.1375㌧ 鋼 1.12	21匁.7	65匁.0	2.587㌧	2匁56匁	65匁(25.5%)
歩錬1.0175	9. 0	24. 3			
銑 1.575 （流れ銑と裏銑）	8. 8	37. 1	（製品は0.75歩留）		
合計3.7125		合計126.4	計1.9406(割鉄)	3匁72匁	255匁(74.5%)

の一門で篠川郡に土着して成長していた)が、足利尊氏に与して功を認められ、出雲国を領することになった㉓。

その翌年足利尊氏の離反によって天皇は再び京都を離れ吉野に移った㉔。(南朝のおこり) 2年後尊氏は北朝光明天皇(持明院統)より征夷大将軍に任命され、足利幕府が成立した。再び出雲守護は佐々木氏の嫡統京極氏に移った。

このころ山名氏は長い雌伏の時代を経て(前号述)、やはり関東武士源氏の足利尊氏に与して功を認められ、山名時氏は山名家を興し、伯耆に進出し、南北朝の動乱を機にこの国と隣国因幡の守護大名となった。そして時氏は隣国の横田庄へ、将軍を背景とし度々院宣を乞うて届け、当地方の武士の横妨を押さえた。この時院の役人でのち義満の室富子を出した日野家ともかかわりを持ち、岩屋寺の保護に務めた。

やがて時氏は雲隠の守護京極高氏(道誉)を攻め破り㉗支配下に置き、尊氏没後義詮将軍の時、出雲、隠岐の守護となる㉘次の将軍義満㉙となるころは、山陰のみならず山陽・近畿にも勢力を拡げていった。

山名時義は時氏その子師義の遺志を継ぎ、岩屋寺の寺領安堵や寄進を行い、馬場八幡宮の本願主ともなった。このころは山名氏は一族で11か国の守護職をしめ六分一殿(全国66ケ国)と呼ばれ、幕府の要職も占めた。この間山名氏の一門で摂津国の馬来郷に住んだ馬来氏綱が、馬木郷の地頭として来住した。1389年山名満幸が出雲守護となり㉛、この年岩屋寺に下中村(角以西)から寺領を寄進した。

名田　平安時代中期以降中世社会の荘園・公領にみられた土地制度の構成単位で、耕作する農民は田堵と呼ばれ、耕作権の強化がみられた。荘園領主(横田庄は鎌倉時代は石清水八幡宮のみ)は、田堵に荘園を割当名田として、農民の名を冠し永続的な土地の保有権を認め、年貢、公事(夫役)を確保する徴税単位として編成した。のち国衙領(国司の支配する国領・公地)にも一般化した。

のち大閤検地で解体した。

右の如く荘園の管理が行われている時代に、山名満幸が出雲守護となる前、1383年山名時義が岩屋寺に下中村から土地を寄進するなどしているのは、横田庄(当時の領家は石清水八幡宮と仙洞御所)で、横田庄の有利さ

斐の上川柳三月の句

いやだった冬つつがなく春迎え　安部正子
夕食の支度も忘れ立ち話し　松浦久寿子
爪を切る妻の眼鏡のまじめ顔　児玉哲呂
ランドセル期待を背負い胸張って　渡部ミツコ
冬眠もさめて老人動き出す　石原冬明
不具合になって考えあとずさり　藤原のぼる
バッチつけ汚職にサギとあきれさせ　児玉えみ
薄陽さしすずめが豆と雪遊び　田中有樹絵
二つ三つ消したい過去と暮してる　真綿よし子
正月に帰らぬ孫にもお年玉　田部都
退院のしらせに花の色も冴え　安部春恵
ループ橋今日も又降る雪の道　横山まこと
胸元のバッチ不正に拍車かけ　松浦亜以
その人の立場になって知る苦労　藤原千代子
牛売って年寄り農家手間はぶき　足立玉恵
背を丸め歩巾もせまく共白髪　松田牛歩
立ち話ししたい日もある孫自慢　森山悠子
春一番上着脱がせて野良仕事　田中芳春

横田庄内には多くの名田があったと思われるが、中世史料の中には若干名田名が出てくる。今日切図の中にも生きているものがある。

不輸　荘園が国家に対して租を納める義務を免れることで、荘園制の発展とともに、荘園領主は独自の土地支配を作り上げた。

不入　荘園内に検田・収入の役人の立入りを据否する権利で、不輸と一体となって荘園支配の独自性を作り上げた。

に目をつけて、領家を差しおいて、不輸・不入権を無視して、年貢等を私していたものとみられる。

満幸が守護となると㉛公然と領家でもないのに支配しはじめたので、領家の仙洞御所は、その役所である蔵人所(長官日野氏—義満の室富子の家)を経て院宣が下され、横田庄の返還を求められた。これに応じないので再び求められたが無視していた。3度目は御使い下向によってと上申したところ、日野氏ほかが下向して来たが、満幸は地下人をして追放したので上皇は激怒され、義満も山名一族の勢力に危機感を抱いていたので、将軍名によって満幸の出雲守護職を解易した。ここに義満と山名氏清をはじめ山名一族との対立に火がつき明徳の乱となった。1391明徳2年である㉜。(詳細は度々記述しているので略す)

満幸は出雲伯耆へ兵を率いて上洛し、山名氏の嫡統氏清らとともに戦端をひらいたが、京都の西北内野での氏清の討死によって敗北し、満幸は山陰を西へ、伯耆そして出雲へと敗走した。

この内野合戦の時、三沢5代尾張守為忠は一族(従弟為元ら)ほかと討死した。満幸に味方するもの少なく、九州へ走った。出雲富田の戦で、城下吉田村で、山名一族の馬木郷地頭、馬来氏初代氏綱も討死した。(明徳の乱については明徳記にくわしい。その中の哀話の一つの末孫は流

前号訂正　1頁　標題の三沢氏の盤踞

れて馬木郷に至った。その末孫が岩屋寺中興僧として知られる快円である。）

満幸が横田庄を横領したのは10年間であるが、仙洞御料所代官安部氏はこの間代官を退いて

いたと系譜にも誌している。

その後満幸は京に上って再起を期したが、京極高詮によって誅せられた。その功によって高詮は出雲・隠岐・飛騨三国の守護に復したのである。

調査こぼれ話

出雲国内の朝鮮関係神社

『出雲国風土記』の中の神社で、194年後に完成した『延喜式』でその神社名に続いて、『同社坐韓国伊太氏神社』とある神社が、意宇郡に3社出雲郡に3社ある。

（上段は出雲国風土記、中段は延喜式、下段は現在名）

意宇郡		（斐川町）
伊布夜社	御魂社	出雲神社
		神魂伊能知奴志神社
揖夜神社		（大社町）
揖夜神社	阿受撰社	阿須伎神社
（東出雲町）		（大社町）
由宇社		
玉作湯神社		
玉作湯神社		
（玉湯町）		
佐久多社		
佐久多神社		
本宮神社に合祀		
（宍道町）		
出雲郡		
曽伎乃夜社		
曽枳能夜神社		
曽枳能夜神社		

で、『延喜式』には中段の社名に続いて

伊布夜社同社坐韓国伊太氏神社と記載されている。同社坐とは韓国の伊太氏神社が合祀されているという考えが主流である。（兵庫県の日本海岸にもある）

韓国の韓は朝鮮半島の南部に古代に存在した加羅（加耶）のことであることは専門家の一致した見解である。伊太氏とは武の神などと解されている。

伊太氏は五十猛と関係があって、伊太氏は朝鮮音を基礎とし写したもので、五十猛は日本訓によってあらわされたものといわれる。

ほかに広瀬町にも韓国坐伊太氏神社がある。今では嘉羅久利神社というが、社伝によると『延喜式』のころは韓国坐伊太氏神社でよばれ、中古には加栗神社となり、のち現在名となった。

そのほか、松江市古曽志町の許曽志社（風土記）今の許曽志神社、平田市の韓鉏社（欠）今の韓竈神社、塩冶町の阿利社（欠）今の阿利神社、松江市生馬町の生馬社（欠）今の生馬神社さらに、催陁神社、宇留神社、筑陽神社なども研究によると韓国系の神社という。

すべてが島根半島と宍道地溝帯の南岸にあって、大陸との関係が深いことがわかる。

このほか新羅神社、百済神社という社名もかなりの数ある。

なお宮中には、『宮内省坐園社・韓神社二坐』とあって、現在もあるという。

地名による大陸・半島との研究でもつながりが多い。

（横田史談会　高橋一郎）

〜〜〜

奥出雲

題字　糸原風亭書
第266号（5月号）
1997.5.10（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団
横田史談会 ©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲と毛利氏④

毛利氏家臣団の組織化と三沢氏・尼子氏の比較

本誌262号系図参照＝季光―経光―**時親**（四男）―貞親―親衛―

元春

時親から曽孫の元春までの四代は、吉田に於て、南北朝の動乱の渦中に巻きこまれて、弱小地頭＝小領主の悲哀を味った。（吉田庄は横田庄よりはるかに貢納量の少ない領地）その後

元春―広房―□―□―豊元
　匡時（阪氏）
　広内（麻原氏）
　直時（有富氏）
　直時（中馬氏）
　直時（福原氏）

と続いた。豊元は前号記述のように応仁の乱㊶には東軍（細川勝元）、のち西軍（山名宗全）の大内政弘に従って戦功をあげ、所領拡大めざましく新領61か所を得て、文明8年1476 33歳で歿した。（横田庄は吉田庄と比べると広さはほぼ同じだが、水田の面積も三倍位と推定している。文化程度もはるかに横田庄が高かった）

毛利家臣団の組織化の過程（三沢・尼子両氏との違い）

庶家　この戦国時代に毛利家は右系図の（　）の庶家（本妻の子で後継者＝嫡子以外の実子）が、惣領家から分立（分かれて出た）した。

近世（江戸時代）家臣は、家老・寄組・大組等と形式上の身分を異にしていたが、直属する知行人としては、大体同質であった。それに対し戦国大名の家臣団は、まだその系譜により質が異っていた。先の庶家（分家）と譜代（代々の近臣）・国衆（土着武士）・外様（代々の主従関係のなかった侍・譜代でないもの）とに分かれていた。

毛利家の有力庶家は、坂・有富・麻原・中島・福原（それぞれ村名）・多治比（これも村名）の諸氏であるが、それ以後の庶家は、一名田（かつて一人の農民が所有していたもの）くらいを分与された小庶家である。

これらは毛利惣家が地頭職をもっていた吉田荘のみでなく、動乱期を利用して荘園の枠を越えて、その他（在地）の下級荘官や悪党（悪人の仲間）らと手を結び、西は内部荘、入江保（保とは土地の有力者が中心となって開墾した土地で開発者を領主という）東は高田別符（荘園の現地で公領に開墾された新しい荘園に組み込まれた所）に及ぶ一帯の地域を占拠した。

そして吉田に惣領家毛利氏がおり、先の有力庶家が、坂・有富……福原・河本の諸村に本拠を置いて、在地名を名乗ったのである。これらが惣領家を中心に盟約的に団結して武士団を構成した（新しい地縁的要素が加わる総領制）

近畿地方では荘園体制が遅くまで残っていたが、この地域は在地武士団の勢力が強く、荘園領主の権力は早く弱まり、毛利の領有している吉田荘・内部荘ともすでに永享のころ（15世紀中ごろ）には、ほとんど荘園領主の権力関係は消滅していた。（荘とは荘園で、中央の貴族・社寺の所有で、その持主を領家という。荘園以外の土地の所有者が武士のときは領主という。荘園の領家領主）（横田庄は世紀末まで続いた）ところが内部荘の西南隣、入江保では毛利氏一族が、この地を分割領有しているが、宝徳2年1450ころまでも年貢が領家におさまっていた。

他の庶家の領地は例えば、福原氏は福原村が本拠で、直営地が四町四反あり、門田（武士の屋敷の周辺、門前にあって、直営田、この大小が領主の身分差をしめす）名田16があり、その他は毛利勢力の各地に名田単位にばらばらにもっていた。これは他の庶家も同様で、惣領家も同じであった。従って庶家は惣領家の家臣ではなく、一族の団結は惣領を中心とする「一家中」で惣領を中心に集ろうとする求心的動きと、離れて独自の行動をする遠心的な動きもして、毛利氏も一族の統制には苦心した。しかし幕府の権威で庶家を罪科に処することもできた。

毛利氏は隣国備後の守護職山名氏の庇護をうけたが、被官ではなく、安芸の守護武田氏に対しては、組み込まれることなく対立し、武田氏も一歩も毛利氏の惣領制には踏みこめなかった。室町政権は守護領国制（守護その国を支配する）を重視したが、毛利氏はその圏外にあって国人領主として成長し、戦国大名へと進展した。

三沢氏の庶家については、『山陰史談』14号に系図をのせているが、当地3代為長には林原・堅田・鞍掛（地名）がおり、のち平田・大吉（地名）に庶家分出しているが、くわしい記録はないが、惣領の城のまわりの門田のようなもので、2代目になるとすべて惣領に組み込まれたと見える。これが三沢氏が堅い地盤を築き、強力な武士団をもった根本である。それが毛利氏よりかなり早くから国人衆として力を貯えた原因である。尼子氏は単なる武士徴税官であったから、三沢氏をはじめ三刀屋氏その他の200年にわたって地域の主となった国人衆には常に抵抗をうけることになった。

毛利氏は応仁の乱で東軍から西軍へ走って、本家の庶家に対する権力が急激に強くなった。これは次の譜代（直臣）の組織が整い、本家の代官・奉行として活用されたので、庶家も譜代と同じく本家の家臣へと組み込まれていかざるを得なかったからである。

現在まで尼子家臣団の総合的

奥出雲と毛利氏④・明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑰・短歌・川柳・俳句

研究はされていない。ただ筆者が当誌に載せ『山陰史談』26号に補正し転載したのが唯一のものであるが、一応の目安程度のもので、今後の研究にまつのであるが、尼子氏には毛利氏のような組織が見られない。勢にまかせた登場と進撃の強さのみを感ずる。

（尼子民文書より）

譜代（直臣）世襲的に同一の主家に奉行するもの。江戸時代には関ヶ原の合戦以前に徳川氏に仕えた直臣で大名になったものを譜代大名といった（松江藩主松平氏など）

毛利氏では ⓐ惣領家・庶家の被官から出た。赤川・渡辺（テレビで出たもの）、ⓑ庶家・小庶家の分家から出た、桂・口羽ら、ⓒ付近の小領主からの井上らで、これらの庶家は自分の被官をすてて惣領家へ出仕することを押さえようとしたが、強勢な井上氏は本家に被官して有力庶家と同格をねらった。

応仁・文明の乱から譜代は代官・諸奉行に任命されて、行政・司法の枢要の位置につく特権をもつようになったので、この波に乗って毛利は成功に向って踏み出した。

この時代毛利氏が着々基礎固めをしているころ、尼子氏はまだ一匹狼時代で、古くからの小領主＝国人衆（国衆）の力が強かった。三沢氏も国衆にあたる。

国衆

毛利氏でこれにあたるのは、芸備両国でかつて毛利氏と同じ中世封建的領主であった、熊谷・平賀・山内首藤（庄原の内）・天野・吉川・小早川・宍戸・出羽の諸氏をいう。元就時代以前までは毛利氏と対等のつきあいをしていたが、次第に毛利氏の実力伸張とともに婚姻関係か擬制的な兄弟の契約によって同盟関係に入った。いづれも各自の惣領体制をくずさず、独立のまま毛利の旗に下ったので、元就は家臣団化することが容易にできず統制に苦しんだ。

（四月上旬の放映にあらわれていた。）

三沢氏は南隣の馬木郷の馬来氏とは婚姻関係を重ねて同盟関係に入ったが、馬来氏はその家臣とはなっていない。山内首藤（庄原）氏とは婚姻関係でつながり、山内首藤と三沢・宍戸・馬来の諸氏間にも婚姻関係をもっていた。これが三沢氏の対毛利氏、また対尼子氏との関係にあらわれてくる。

元就は国衆の懐柔の必要性を説いているが、しばらくのち1537（弘治3）、子隆元、吉川元春・小早川隆景の三人（三子）にさとした手紙の中で、（これが三本の矢の作り話のもとになる）国衆の中に毛利家を良かれと思うものは一つもないと言いきっている。尼子氏も同様で、三沢氏ほかの国衆には手を焼いている。

やはり国衆（多くが元地頭職）は将軍直属の形態を保持していた。

真にこれら国衆が家臣団化するのは元就没後の輝元時代の慶長5年以降といわれる。

外様

譜代（代々）主従関係のない家臣、室町時代中期以降は諸大名の家格をあらわす。江戸幕府では関ヶ原の役以後、徳川に服属した大名で、要職から除外され、街道などの要地から遠い、比較的辺境に配置されるなど、譜代大名と厳密な差別があった。

毛利氏では、これには大内氏関係の防長両国、尼子氏関係の雲石両国のものである。これについては後の記述の時にゆずる。

戦国大名の家臣団

戦国大名の家臣団には、今までみたように系譜には種々あって、かつては小領主であって、その領内に市場を経営し、市場商人を支配下に置いてもいた。

三沢氏が、横田庄内の中村市場（現横田八幡宮前の道路の西側水田地帯、当時河川敷であった）に手を入れて動かしていた。牛馬市場も中国地方では最も早く、大永年間1521～1527に開設している。藤ヶ瀬に築城より10数年後である。のち天文12年より尼子氏が横田庄を請所とすると代官を入れて、主導権を握っている。断片的な記録によると、年貢を納める農民はこの市場にて米を銭にかえて納めていたようである。請所（三領家＝石清水八幡宮・京都御所・泉涌寺）代官は三沢→尼子→三沢と変って荘園は天正19年1591から記録がない。（荘園消失時代へ）

『御湯殿上日記』（宮中女官の日記）や泉涌寺文書をみると、殆んど銭納である。一度だけ若干の鉄が貢納にそえて納められている。

（戦国大名論集14『毛利氏の研究』藤木久志編—吉川弘文館を参考とした）

（横田史談会　高橋一郎）

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

明治維新以降の奥出雲における銑生産の系譜⑰

ライマンとコルシェット

—科学技術＝ヨーロッパの躍進と日本の低迷—

お雇い外人学者

先年筑波での万国科学博覧会の折、明治維新後招きにより来日した各界の多数の外人学者を写真入りで功績とともに紹介してある一角を見て、数の多さと功績貢献度の高いのに驚いた。

北海道大学で「青年よ大志を抱け」の言葉を残して帰国したクラーク博士をはじめ、数人しか私は知らなかった。その中に奥出雲へも来訪して近世企業たらに極めて適切な助言を行ったライマンもあった。

ライマン（1835～1920）は明治11年1878当地方を訪れた、アメリカ

の地質学者・鉱山学者で、北海道開拓使に招かれて明治5年1875来日、北海道の石炭・石油・硫黄を調査し、石炭鉱脈を発見し、東京の工部省に転じて石油調査にあたり、新潟油田を開発し、帰米1981後は地質研究の傍ら、東洋文明の紹介につとめた。

当地に来たのは地質調査のためで、ヘルンの来松する12年前の43歳の時で、能義郡出身の弟子であった安達仁造（25歳）が随行している。元島根大学教授大久保雅弘先生の紹介によってはじめて知り、英文のライマン・レポートを入手した。さすがに科学者で、絲原家の『鉄穴鉏』と近くの『宇根鉏』を正確に把握し記述し、現状への科学的な改良について意見を述べてあることを知った。

本紙に既述した絲原家11代権造にも大きな影響を与えている。別に7年後の1883伯耆の吉鉏を同じくお雇い外人鉱山学者として調査した。コルシェットの報告書もある。

両者の報告書によると、奥出雲、伯耆の近世企業たたらは、近代化即ち高炉へと進まねばならなかったが、送風力の増強への進歩がなく箱型低炉に止まっている。日本における科学思想技術の未開発、そして産業革命ひいては生活革命の到来が遅かった後進性によるものであるとしている。

又松江の矢田炭坑に眼を付けて、『鉄穴銑』の構造や操業、砂鉄、木炭原料の採取法にもメスを入れ、経営、経理の無駄排除、全般にわたる科学的検討を訴えている。さらに含有量は少ないが、無尽蔵な砂鉄と北海道の石炭とを結びつける点も考えている。鉄穴流しの合理化、風力についての水車の導入、操業に石炭を挿入することや、耐火性煉瓦を導入して溶鉱炉を高炉へ転換し、銑鉄の生産を行うと、操業の中断も必要なく、費用が膨大にかかる地下構造も簡単なものでよいものへと脱皮できるとしている。

俵博士の調査より20年前に既に俵博士が指摘もされなかった、科学技術の改良を指摘している。あとでのべるが、この二人より少し遅れて、欧州視察から帰朝して鉏場の低炉を高炉にする研究をし実施に移した小花冬吉氏も、赤目砂鉄地帯の四日押の銑生産の改良を目指したものであった。科学技術の進歩の第一歩であった。

ただライマンもコルシェットも、それより遅れて調査した俵博士も、銑、歩鋼を割鉄とする大鍛冶技術にふれながら、それが企業たたらの操業生産目的であることを軽視していたのである。

ヨーロッパも、鉄鉱石の製錬で出来た銑鉄を精錬（大鍛冶流鍛錬）して錬鉄（割鉄）の生産をしていた。それが科学思想の発達で、脱炭が錬鉄、鋼につながることから、銑鉄を溶解し、パドル法（かきまわし法）による脱炭で錬鉄、鋼の生産に早く移ったのである。わが国は角炉出現後も、企業たたらでは大鍛冶技術による割鉄（錬鉄）生産が中心であったから、真砂砂鉄も産する地帯が完成した三日押で副産物のように生産される、招かざる鋼の中の鋼が、錬鉄時代（鋼時代前の）少量の鋼の需要に応えたのである。

奥出雲鉄師も銑生産を目指した

絲原権造は既述（15号）のように、ヒュゲーニンの高炉＝反

想夫恋　簸の上短歌会

輸送船にて書きし父宛の葉書あり　冬の玄海　常盤はるまさ
の記憶あたらし　陽
亡き夫の殊に賞でにし木蓮を今日うらら　岡田時子
に剪りて供へぬ
春風に枝垂桜のゆれしげく干し物さながら花　仝
柄模様
眼帯をはずしたる眼に娘のくれし花瓶の薔薇　人
の鮮明に見ゆ　野村節子
生きている証と思ふ　病室のベットに伸びし　仝
爪を剪るなり　人
みどり濃き分葱のぬたの小鉢にも亡父かさな　仝
りて見えずなりゆく　永井弥生
吹雪く夜を潮騒の如地鳴りせし雑木林のあわ　仝
あわ芽吹く　人
山鳩はひねもす鳴けり　中山は辛夷の花の白　安部夕波
きそよめき

斐の上川柳四月の句

働ける事が感謝の齢となり　真綿よし子
年金のきびしいニュースお茶にがい　児玉えみ
金毘羅の石段かぞえ脳軟化　高木凡太
臥む人に春の光が元気づけ　田中有樹絵
お彼岸にお墓で長々話しする　松浦久寿
シューズまで買って歩けぬ一万歩　藤原千代子
まだこいと医者は仕事の顔で言う　児玉哲呂
旅行した十年前をなつかしむ　足立玉恵
七回忌老母を偲び香焚いて　安部春恵
花粉症に負わせやたらに鼻をかむ　石原冬明
春の猫寝てはおれぬと夜遊びに　松田牛歩
消費税上らぬうちに買い急ぎ　松浦亜以
にぎり飯すいたお腹にころげこむ　渡部ミツコ
彼岸過ぎ薄化粧した名残り雪　田部都
水仙も春を知ってゝ笑い出し　安部正子
ほほえんでくれたナースに片想い　森山悠子
例えばに続くせりふが出てこない　田中芳春

射炉について、第一号の薩摩藩の実情を視察させ、さらに群馬県中小坂鉱山の鉄鉱石と木炭の高炉銑生産とパドル炉による錬鉄、鋼生産を調査し、砂鉄で設置の方向に進んでいた。ライマンの来訪前から、来訪間もなくのころのことである。（これに向かわなかったのは総合的農村振興を考え、洋鉄及びその製鉄の時代に立ち向かうことは困難と予想した、賢明な判断であった。のち県営広島鉄山に於ける砂鉄の角炉製練法の研究の影響もあり、たたら炉（低炉）による銑生産の増強に鉄師が向い、それが効果をみせると、電気炉製鋼に努力して成功すると、広島の小花・黒田式の角炉を一斉に、鉞場の操業縮小による原料の供給で操業しはじめたのである。

俵博士調査の評価

日本刀の研究家であった博士が、企業たたらの三日押（博士は鍛に注目して鍛押法といい、鍛生産が主目的で、その中の鋼が日本刀の原材料として貴重と考えられた）の鋼を評価しすぎて、三日押を企業たたらの正しい位置で評価されなかったのである。真砂砂鉄地帯の副産物であることが、不明瞭であるままにされて置かれたことが、近世企業たたらの研究を、鋼、玉鋼にばかり向わせられたのである。言ってみれば、砂鉄製練史の遅れた部面を鋼に眼を奪われ、製鉄後進国の一文化遺産的生産技法に過ぎなかったのであるのに、直接製鋼法と過大評価されたのである。それが十五年戦争で軍刀の材料として鋼が浮び、評判をよび戦後は美術刀剣の原材料生産として鋼の需要が生まれた。そこで鋼を目的とする鍛生産のみの文化財的たたら操業技法を、苦心の末安部村下が開発したのである。地方では著名な刀匠は玉鋼を乗り越える為に、赤目砂鉄を原料とし二工程を経て銑をつくり、鍛造技術によって優れた鋼生産に挑んでいるのである。

外人学者コルシェットの眼

葉賀七三男・森口保ほかの方々の資料提供による記述

伯耆の四鉞場の四日押の調査を、鉱山学者コルシェットは、俵博士に先つこと5年前の明治16年1883東京大学教授岩佐巌氏と調査し、鉱石・製品・鉄滓の分析も係の肥田密三にさせている。その結果によって鉱山学者としてライマンの指摘を再論している。

①砂鉄採取法の改良は難しい。（まだ磁力選鉱考えていない。）
②輸送道路の改良大変である。
③水力による水車送風はできる。
④コークスの採用はまず困難
⑤石灰投入は炉を煉瓦で行って可能である。

何としても近代化のためには、高炉への転換が根本であると提唱している。

これらが共鳴して高鳴って、明治中期から、銑生産そして角炉へと進むのである。（詳細は改号で）

（文献）日本鉱業史料集（第二期明治編）② コルシェット「吉鉄山産出、鉄鉱、鉱滓、製鉄等分析」

科学技術の遅れを示す近世企業たたら

欧州でもシャフト炉（低い円筒型炉）で日本と同じく鉄塊（粗鋼）を生産し鍛練して錬鉄を製作していた。それがイギリスのエブラハム・ダービーによるコークス高炉法の発明で銑鉄生産が開始され、脱炭して錬鉄とする間接法一本に移行した。

わが国は科学技術の進歩に遅れて、前近代の近世企業たたらに止まったのである。鋼は直接法と誇っても鋼は20％程度であとは銑と歩鋼の間接精練による錬鉄生産であった。

大橋周治（『幕末明治製鉄論』によれば、江戸時代安永・天明初（1780）の「大坂登鉄高」年240万貫（9,000トン）を中国地方全体の割鉄生産量とし、大鍛冶の「卸し」作業（減炭）に於ける歩留60％とすると、中国地方全体の銑鉄生産量は15,000トンとなる。これに奥羽地方の銑鉄を加えると、18世紀初年代のイギリスの銑鉄生産年間18,500トンと匹敵する。すると原料の歩留と品質上の劣りを別とすると、生産構造も生産水準も同じであったとなる。

ダービーによってコークス高炉法の発明によって生産性が飛躍的に上昇した時期とほぼ同じであったということである。

それではそれ以後、イギリスのその後の急増に対してなぜ日本の生産は伸びなかったのか。それは次号に於いて、わが国とヨーロッパを比較してみて検討することにする。

（横田史談会　高橋一郎）

柴栗句会四月抄

遅霜の針解く日差し届きけり　浅野　としお
おいらくの指より温しつくしの子　糸原古志
字の名は工区番号春耕す　恩田和美
ま向かいの霞む遠嶺や蔦の輪　加納信子
花霞カタコト鳴ってるランドセル　楠房子
戦径を曲ればぽつり落椿（松山城）　高木白虹
動燃も政治もおぼろ二枚舌　中澤美紀子
饒舌と知りつつ嵌る四月馬鹿　新出谷一華
幾年か重みに耐えし春障子　錦織富江
叱られて散りゆく花に我れすがる　峯石美代子
青き踏む老の足裏の夕心地　渡部夕峰
顔巾に開けてお茶呼ぶ春障子　渡部みつこ

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇五ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第267号（6月号）
1997.6.7（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

奥出雲のたたら製鉄史㉖

新資料にもとづく特に東南部の
その技術・経済・社会・文化の総合史

近世編17—奥出雲における鉄の生産と流通㊤—

この連載は244号に続くもの。『島根県歴史の道調査報告書第四集』に執筆したものに、書き加えをした。

奥出雲の舟運　斐伊川の流れの勾配がゆるやかになる木次町から、下流の庄原（現斐川町）にかけての川では、寛文年間（1681～72）から上納米が、30～40年毎に一時途絶えることもあったが舟運びが行われた。明治に入ると道路の改良と交通機関の発達のため衰えたが、それでも物資の輸送が行われ、昭和の初めまでは1～2隻はあったという。

仁多郡三成村から木次町の新市までの舟運びは、川が狭く流れの勾配も急であったが、備中から堀子の喜兵衛、船頭の藤井三右衛門を雇い、寛文5年（1664）に困る生活から農民は救われ、働く意欲を抱き、地元で消費しない品物の栽培や生産をはじめたので、次第に地方の物産が多くなり、往還を通って各地に移出されるようになった。

当地方でもこのころから和鉄の生産量も増えはじめ、往還の輸送も活況を呈した。

近世企業たたらの成立

この地方の鈩場で天秤吹子が導入されたのは元禄4年（1691）からであるが、労力が急減し送風量は増加し生産量も急増したから、本格的な高殿が設けられ、今までの湿気の少ない秋のみの操業から、続いて積雪の多い冬にも操業されるようになり、この鈩場と大鍛冶場を一貫経営し販売する近世企業たたらが本格的となった。

やがて毎年操業が行われ、さらに次第に年間の操業月数も増加していった。これは砂鉄の採取量が増加し、木炭の生産量も増え、それらの輸送も次第に組織化されたからである。経営者即ち鉄師も急に多くなり、松江藩内（主に奥出雲で、広瀬・母里両藩の能義郡の一部と飯石郡西部をのぞく）でも、大小規模の企業たたらの鉄師は20数名となった。

ところがこれらの鉄師と藩の鉄奉行との間に確執が生じ、2ケ月余にわたる交渉でも進展しなかった。困り抜いた藩では「鉄方御法式」を定めて、享保11年（26）から実施した。まず多数の鉄師の中から、実績があり大水田地主である9人—仁多郡⑤、飯石郡②、大原郡①、神門郡①—のみに許可し、運上銀（営業税）のほかに、先納銀を納めさせた。これは藩蔵の在庫米が減少する4月から8月までの5ケ月間、鉄師に鈩場・大鍛冶場の数によって一定の銀を毎月上納させ、9月にはそれに利子をつけた額の米を、藩蔵に納まっている上納米から、養米（鉄師が雇人に支払う賃金用）という名目で返済した。かなりの量である。

これの見返りに藩は、9人の鉄師に実績を加味して藩有林を貸与した（平均で鉄師の支配する山の6割部分）。こうして製鉄業は鉄師の独占事業となった。その上藩への臨時の各種の上納銀にも応えたから、藩から経営についての保護もうけた。こうした政策が以来明治初年まで続いたが、わが国では松江藩のみであった。これが奥出雲がわが国の和鉄生産高の5割強を占める根本原因と、全国調査の結果私は評価している。

馬の頭数と製鉄業

奥出雲は真砂砂鉄が多いので、鈩場では流れ出る銑のほか、炉底に鋼が固まった。（他地方は赤目砂鉄のみで銑が流出するだけ）はじめは鋼は割ることができず放棄していたが、宝暦年間（1750年代）からは、1代（1回）の操業の生産量の増加とともに、鋼を割ることに成功し、生産量は2倍となり、やがて年間毎月操業へと進んだ。その裏には馬の頭数の増加がかかわっている。

鈩場の原料の砂鉄と木炭（奥山の鉄山—木炭山—で焼く）は、あちこちから人の背で運ばれていた。ことに木炭は量に比べて軽く、嵩ばるから、砂鉄より多い木炭を運ぶ回数は砂鉄に比べて大変多かった。そこで「砂鉄七里に炭三里」という言葉が生まれた。そこで25～30年生の雑木のあるやまに鈩場を移動させた。鉄山のせまいところでは3年、広いところでは10年と移動せざるを得なかった。

幸に藩の馬政が整いはじめる

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を
奥出雲のたたら製鉄史㉖・奥出雲と毛利氏⑤・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

と、重点が奥出雲とくに仁多郡に置かれた。飼育に適した地であることと、水田地主＝鉄師が牧畜振興と輸送力確保に熱心であったからである。馬の頭数の増加は膨大な二つの原料の集荷輸送を容易にしたので、天明年間（1781～88）ごろからは、鉄師は釜場を経営本位の適地に選んで固定した（永代釜）。そして大正末年の一斉廃業まで続いた。

（横田史談会　高橋一郎）

奥出雲と毛利氏⑤

16世紀（1500年代）初頭の動き

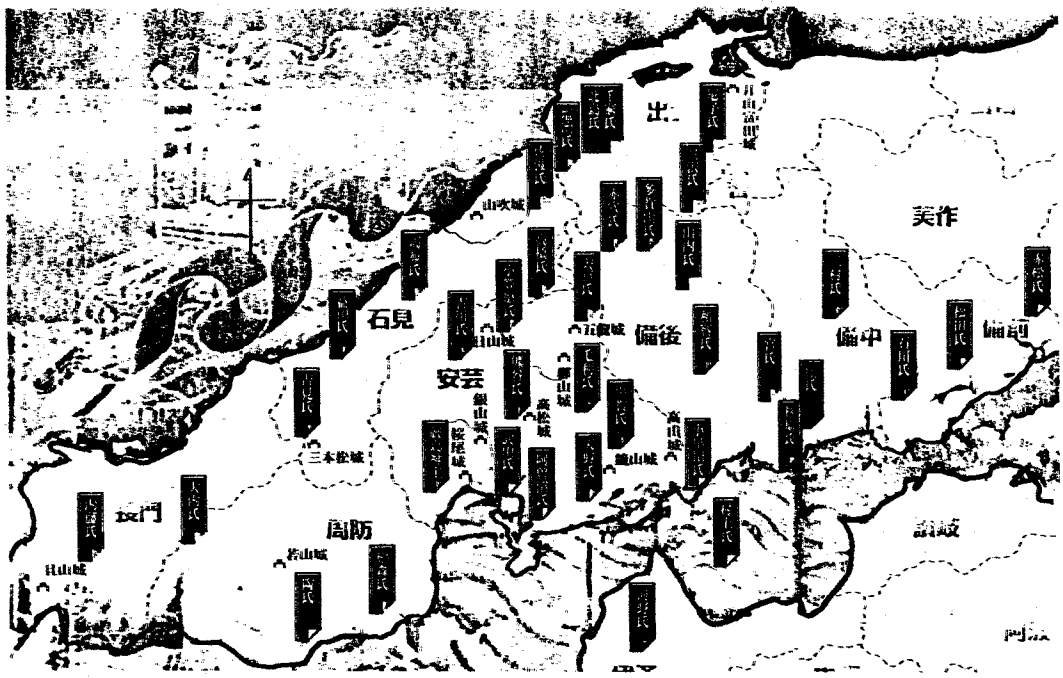
1985（昭和60）年秋、横田史談会主催で、第4回陰陽郷土史研究会を横田で開き、広島大学＝岸田裕之・秋山伸隆、島根大学＝井上寛司、島根女子短大＝藤岡大拙の諸先生を迎え「奥出雲の中世史について」講演を聞いて討議した（参加者は中国四県から136名。第1.2回は横田第3回は庄原市）。NHKテレビ「毛利元就」の考証担当の岸田先生の話の中で、勝った武将を持ち上げて語り継ぐことからのみでは真実の歴史が明らかにならない。敗者の中にこそ、地方国人衆、地方民多くは農民と少しの職人・商人の生き方があるとして、下図の中の高橋氏（石見・羽須美村）について述べて明らかにし、毛利氏を語られたのは、今も心の中に残っている。尼子・三沢両氏について考え、地方人の生き方を考えるにも基本的なことである。岸田先生の短い論文の中から抄出して後半で述べる。

下図は1500年代初めのころ（応仁の乱後）の中国地方の大名（大内氏）と国人衆の在所の略図である。これも引用であるが、この図を通して後半を読みくだいて頂きたい。

守護代尼子氏

応仁の大乱は1468応仁元年に起った。出雲守護京極持清は東軍16万の軍勢の有力な指導者で、出雲・隠岐・飛騨と近江北半の四ケ国の守護で、幕府の高官でもあった。持清の出雲の代官（守護代）は、一族の尼子清定で富田城おり、子経久は9才であった。出雲の国人赤名・三刀屋氏などは、上洛して合戦に参加していた。伯耆・石見は西軍の領袖山名氏の配下にあったから、出雲に山名党が侵入する恐れもあり、国内武士の中にもかなり呼応するものがいた。安来荘の松田氏などで、清定は山名党の進入を防ぎ、これに通ずる武士の討伐に明け暮れた。

京極家では1468文明元年、持清が死に、跡を継いだ孫童子も夭折し、文明3年には持清の弟政高（のちの政経）が守護であったが、この京極家の動揺は清定の動きを自由にしはじめた。仝6年嫡子17才の経久を上洛させて、恭順の意を示して5年間滞在させたが、政経は出雲に不安を感じて自ら出雲に下った。経久は都で戦乱で荒廃はしたが、王朝文化の残映を多感な時代に身につけた。1479仝11年出雲に帰って家督を譲られると、政経が帰国したのに乗じ、美保関の関銭をかすめ、寺社領を横領し、段銭を懈怠（なまける）した。たまりかねた政経は幕府の応援をうけて、1484仝16年経久追放を国人衆に発した。三沢・三刀屋・朝山・広田・桜井・塩冶・古志の中・



一五〇〇年代初めごろの中国地方の大名・主だった国人の在所略地図

（岸田小論文から転載）

西部の武士が応じ（信濃源氏系と京極の祖初代出雲守護佐々木系）たので、27才の経久の誤算は、富田城を追われて、守護代は佐々木系の塩冶掃部介となり富田に入った。

その後経久は許されて守護代に復した。1508永正5年、京極政経は「孫の吉童子丸」（265号系図参照、子経秀の長男）に、京極氏の総領職と、出雲・隠岐・飛騨三ケ国守護職・諸国にある諸所領などを与えるという譲状をしたためた。そして尼子民部少輔（経久）・多賀伊賀守の連名へ宛て、吉童子丸幼い故、この譲状と代々の証文を預けるから、時が来ればたしかに渡して欲しいとの文書も添えた。ところが経久は多賀を押しのけ、吉童子丸へ相伝すべき文書を自己のものとして渡さなかった上に、吉童子の行方は杳として不明となった。こうして尼子政権の成立へ、守護大名へと進んだ。

国人三沢氏

三沢信濃守為清は、東軍京極方で上洛し応仁の争乱に加わって、1475文明7年江州弓削で討死した。「間もなく三沢氏の備後国にあった若干の所領は山内氏に渡った。」跡は対島守為信（9代）が継いで、出雲国人衆の最右翼として陣頭に立ち、文明16年の経久追放を行った。

やがて次の三沢遠江守為忠（10代）になると、横田荘の三領家（石清水八幡宮・京都御所・泉涌寺）から、地頭請所として（代官にあたる）支配をまかされ、1569永正6年、横田藤ケ瀬城に移って、馬来郷をのぞく仁多郡を支配する立場となった。

大名大内氏

1500明応9年、足利氏の内紛から将軍足利義稙は、大内義興を頼って山口に下った。これを保護し、1505永正5年に義稙を奉じて大挙上洛し、将軍義澄を近江に放逐し義稙を将軍に復させ、自ら管領代となった。しかし義澄は細川澄元らに援けられ反撃し、将軍職をめぐって以来10年抗争が続いた。この間、即ち義興の留守中、地国地方の国人層は大内支配から離れようとし、とくに尼子氏は芸備へ進出しはじめ、勢力を増して来た。

「中国」の成立と境目

いま私たちは「中国」という地域呼称を用いているが、これは約650年前の南北朝時代中ごろの京洛の記録類に現れる。1349貞和5年に足利直冬が鞆に下向し、備中・備後・安芸・周防・長門・因幡・伯耆・出雲の8が国を成敗する「中国探題」についたなどと幾つかある。

したがって、中国は、このころには旧来の「西国」から独立し、いまの中国地方をおおう広域的な呼称として中央の支配者層に認識されていたと考えられる。この呼称の由来は、畿内・近国と九州との中間の地域というところにあるが、この〝中間〟とは政治権力の対立の所産である。

これ以後大内氏は、九州北部も領国に加え、明や朝鮮との貿易に基づく経済力を基盤にして中央権力から独自性を維持し、石見邇摩郡や安芸東西条を直轄領とし、ほぼ石見・安芸・芸予叢島辺を境目として、幕府・細川氏と相拮抗する。

このように中国は、中央権力からみると、東部は味方地であるが、西部は敵方地、中部は両者の境目という構図であった。

境目の芸石両国の国衆（国人）は、両勢力に相分かれての抗争の中から次第に地域意識に目覚め、協調してそれを高揚させ、永正9年（1512）3月3日の安芸国衆一揆契状のように自らの手による地域秩序の形成を進めるが、その国衆連合の盟主の地位を占めたのが、芸石両国にまたがって大領域を有する高橋氏、その滅亡（享禄2年〈1529〉）後は毛利元就（1497～1517）であった。

室町時代初めごろ、石見では国衆間に合戦が起こったが、彼ら国衆は、幕府・守護の命令よりも、地域国衆の調停を優先して事態を収拾している。そのあらわれが国衆同士が同年月日に同じ契約内容を書き上げた起請文を交換し、協約したものである。さらに婚姻などの形成と展開にともなって、この起請文は国衆間に張りめぐらされ、協約はますます強化され、地域社会における保障秩序としての機能を高めていった。

国衆連合が発展すると、軍事同盟から、さらに領主制の構造矛盾に関わる事柄についても協約する。その一つが人沙汰、すなわち国衆が領内農民層の逃亡の際にはお互いに返付を約束して、いわゆる人返しである。

安芸では、戦国時代、16世紀初めから中ごろにかけ、まず隣

柴栗句会五月抄

ふじ色といふ彩つかひ藤を描く　淺野　としお
母の日や明治の母の鯨尺　糸原古志
唄わねば淋しと思ふ鳥雲に　恩田和美
指五本拡げて数う入園児　加納信子
チョキばかり小さな指や鯉幟　楠　房子
畷道田植囃子の夢の跡　高木白虹
つつじ咲く橋の向ふのポストまで　中澤美紀子
躑躅燃ゆ池面をゆらし緋鯉動く　新出谷一華
春風に最上稲荷の幟り立つ　錦織富江
母の日に指をほぐして肩を揉む　渡部夕峰
美を競うからげし褄の躑躅柄ら　渡部みつこ

前号訂正　1頁3段30行　横田庄16・世紀末まで続いた・3頁1段24行『吉釣』・2段8行『鉄穴釣』

接する国衆間において下人、中間らの人返しが取り決められ、1560年ごろには毛利氏の呼びかけで多数の国衆間の協約に発展した。これらの緊縛対象は、領主の人格的支配に属する者であり、領主の領域支配権に属する百姓らの緊縛は、これより遅く、豊臣秀吉の統一政権下に実施された毛利氏の惣国検地以後のことである。

多数の国衆間において人返し協約が結ばれたのは、毛利氏が1557弘治3年に防長両国の大内氏を討滅して地域公権力化し、安芸国衆10名（元就・隆元の他、吉川元春・阿曽沼広秀・宍戸隆家・天野元定・天野隆誠・出羽元祐・天野隆重・小早川隆景・平賀広相・熊谷信直）と軍勢狼藉の禁止を協約した直後のことである。傘連判の形式をとる狼藉禁令は、どの国衆の家人であっても狼藉をしていたら、見つけた者が即座に成敗してもよいという内容である。家人の処刑はその主人固有の権利であり、見つけた者がことわりもなく処刑をすることは、主人権の否定あるいはその制限という意味をもつ。

軍勢狼藉もまた、毛利氏が防長両国の新しい支配者として臨むうえに解決しなければならない最重要の課題であった。

安芸国衆領内においても、相続く戦争によって農民層の逃亡が激化し、それが全体の軍事力編成や農業生産に重大な支障を生じて深刻化したため、各国衆は、個別の利害は別にして、国衆協調による秩序維持を最優先させて協約したのである。そして、これらの国衆間の協約は、毛利氏ら各国衆家中における命令と連動し、その機能を果たすよう徹底された。

このように時代の変革期には、全体の生き残りのために構造矛盾を調整し、個別の主権的権利を制限してでも新しい秩序を創出していく動きが現れてくる。

戦国大名毛利氏権力の中核は、このような安芸の国衆連合であった。元就が、自らの政治的地位の上昇の中で観念的にもより一層上位に立とうと努めながらも、安芸・備後・石見の国衆とは「義理」を欠かさないようにすることを旨としていることは、長年にわたって築き上げられてきた個別的盟約関係の役割とその重要性を的確に表現するとともに、この地域の固有の歴史的性格をよく示している。

元就が地域公権力にまで育て上げた国衆連合という境目地域国衆の地域の視座に根差した主体的な横の協約関係が、縦の主従関係に組み換えられるのは、関ケ原合戦に西軍方で敗れ、防長両国に移封されたのちのことである。

元就は、大永3年（1523）に家督を相続した。そして、大内氏や他の安芸国衆の援助を得ながら、享禄2年（1529）に高橋氏、天文10年（1541）には広島湾頭の銀山（金山）城に拠る武田氏を滅亡させ、それぞれの旧領を領有し、その経済力や機能を拡大していくが、大きな課題は家中をして元就の意に服せしめることであった。

毛利氏家中の成立は、高橋氏滅亡後の享禄5年（1532）に福原広俊以下32名の一族・家臣らが旧高橋氏領を含めた範囲において、灌漑用水の整備、負債者・被官・中間・下人らの人返しについて協約を結び、かつ違犯者の処罰は元就の権限とし、在地支配を共同で行おうとしたことに求められる。

（高橋）

斐の上川柳五月の句

春だのに腰が痛くてしかめ面　安部春恵
庭園というほどでない庭をもつ　児玉哲呂
猪は見えぬ竹の子堀ってたべ　足立玉恵
晴れてても蛙知らせてシャツ入れる　田部都
子と共に好きな春山気がはずむ　安部正子
ふき流し幸福そうに親子で見　真綿よし子
早乙女の姿も見ずに田植すむ　金阪柳月
花の芯働き蜂がしがみつき　渡部ミツコ
道がつく度に田圃がけづられる　藤原千代子
禁煙と言うがまたまた嘘を言う　横山まこと
そのように鳴くともとれるほととぎす　松浦久寿
手伝いが少しはできて田植すみ　藤原のぼる
よい雨と傘さしたまま立ち話　児玉えみ
新商品置いて月末請求書　松浦亜以
母の日は山菜づくしのお礼膳　田中有樹絵
疲れとる休みどころか農繁期　田中芳春

花もおん弟子　簸の上短歌会

老人医療費のこと日々伝ふるに老人におのれ混りて罪あるごとし　常盤はるまさ
チュウリップの歌を曽孫の唱ふのに似合いの友となれる吾れかも　岡田時子
うかららに今日何日か何曜日かと問ふこと多くわれ老いにけり　仝
山ざくら木々のあい間に浮雲の如くに咲けり比婆の山里　野村節子
五月晴に赤い靴はき二歩三歩曽孫の歩みを見飽かずをりぬ　仝
菜の花も道端の菫たんぽぽも今日は私とみ仏の弟子　永井弥生
どのみ寺どのお堂にも思ひあり扉撫でつつ札を納めぬ　仝
左ききの娘は包丁に鋏にと器用にこなしこだわりもなし　仝
浦見川渡れば三方の水月湖さつきの空を映して澄めり　安部夕波

会員頒布一部二〇〇円／〒六九三一八　島根県仁多郡横田町一〇三一／二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　電話・電送兼用　0854-52-0191）　振替口座　松江01410-9-12404）　頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第268号（7月号）
1997.7.3（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

奥出雲のたたら製鉄史㉗

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編18—奥出雲における鉄の生産と流通㊥—

馬の頭数と製鉄業

奥出雲は真砂砂鉄が多いので、鉧場では流れ出る銑のほか、炉底に鉧が固まった。（他地方は赤目砂鉄のみで銑が流出するだけ）はじめは鉧は割ることができず放棄していたが、宝暦年間（1750年代）からは、1代（1回）の操業の生産量の増加とともに、鉧を割ることに成功し、生産量は2倍となり、やがて年間毎月操業へと進んだ。その裏には馬の頭数の増加がかかわっている。

炉場の原料の砂鉄と木炭（奥山の鉄山—木炭山—で焼く）は、あちこちから人の背で運ばれていた。ことに木炭は量に比べて軽く、嵩ばるから、砂鉄より多い木炭を運ぶ回数は砂鉄に比べて大変多かった。そこで「粉鉄七里に炭三里」という言葉が生まれた。そこで25～30年生の雑木のあるやまに鉧場を移動させた。鉄山のせまいところでは3年、広いところでは10年と移動せざるを得なかった。

幸に藩の馬政が整いはじめると、重点が奥出雲とくに仁多郡に置かれた。飼育に適した地であることと、水田地主＝鉄師が牧畜振興と輸送力確保に熱心であったからである。馬の頭数の増加は膨大な2つの原料の集荷輸送を容易にしたので、天明年間（1781～88）ごろからは、鉄師は鉧場を経営本位の適地を選んで固定した（永代鉧）。そして大正末年の一斉廃業まで続いた。

表1

飯石郡	仁多郡	大原郡
294	377	190
706	2,006	255
2.4	5.3	1.34

上段は宝暦年間の数（雲陽大数録）、中段は明治10年ころの数（皇国地誌）で、下段は数の増加比である。（仁多郡には温泉村が含まれているが数は少ない。明治10年の大原郡は一村不明で推定数を加えた）

表2をみると、明治初年の絲原家では、製鉄場関係者（鉧場・鋼場・鋼造場・大鍛冶場）510人、関連召抱人（常雇の職員・鉄穴仕・炭焼・輸送ほかの兼業・副業）1,200人、計1,700人と馬500頭（専業のほかにいつでも動くに必要な抱え馬を含めて）であった。

農鉱畜一体の農村

9人の鉄師は広い水田を持つ地主で、多くの小作農民を抱えその労働力は賃仕事稼ぎに吸収でき、農耕用牛馬特に馬は運搬用に使用できた。その上広い山林も支配して製炭経営もできる小領主的存在であった。産業的観点で見ても、全国調査の結果では、この様な例は他藩に見ることができない、農鉱畜一体の地域であった。（他藩の鉄師は小資本家的経営者である）

表1は3郡だけを抜き出した馬の頭数の120年間の変遷を示すものである。

鉧場の操業技術の進歩

農鉱畜一体の農村である上に、松江藩の保護もあって、不況でも他国とちがい、倒産はなく操業短縮も少なくて経営ができた。その上不況打開のための技術改良に努力がそそがれた。近世企業たたらが確立したころは、鉧場の操業は1代（1回の意味で一回毎に炉を築いた）4昼夜で（四日押という）あったが、寛政の全国的不況後、天秤吹子の大型も進み、1代3昼夜に短縮の努力をはじめた。短縮しても原料・製品とも若干減少するが、純益僅か多い上に、年間の操業代数は、60代前後が2割増となって、時には80代を越えるようになった。完全に転換するには30余年を要し、安政末年（1850年代終り）であった。このころまでに奥出雲の生産額は極めて高くなり、わが国の首位となった。

（駄とは馬1頭の積荷の量、荷の品物により時により差があるが24貫から30貫である）

表2　明治初年の製鉄業従事者

	所有炉	鍛冶屋	製鉄場関係	関連召抱人	合　計
仁多郡	7	15	2,300	3,500	5,800
（絲原）	1	2	510	1,200	1,710
大原郡	1	2	340	650	990
能義郡	4	12	1,160	3,200	4,360
飯石郡	3	6	2,040	6,130	8,170
神門郡	1	2	160	400	560
合　計	17	39	6,510	15,080	21,590

この明治初年と経営の実態が同じい安政5年の絲原家の『鉄穴鉧』（現在地）の製品が出来るまでの物資の動きをみると、—操業代数の82代分（1代とは3昼夜操業のことでこれに築炉

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

1日を加えた4日間が必要。したがって年間328日）の総量―まず砂鉄・木炭・各種生木材・釜土などを山から鈩場へ運ぶのが第1の流れ、次に鈩場の製品の銑と歩鋼（鋼場で鋼を割って1／3の鋼をとったのこり）を、かなり離れたところの大鍛冶場へ精錬するために輸送する第2の流れ、それを再び『鉄穴鈩』の傍らの鉄蔵に運ぶまでの3つの流れとなる。これらの流れの総量を、500頭（500駄）で毎日運んだとすると99日を要する量である。桜井・卜蔵家もほぼ同量であるから、297日分となる。

ちょっと一服　お茶

	真砂砂鉄	赤目砂鉄
母岩1㎥の重さ	1.5トン	1.8トン
その中の砂鉄の量	19キロ	64キロ
それが鉄穴場でとれる量	5.4キロ	19.0キロ
鉄Feの質は	高い	低い
一粒の砂鉄に含む鉄Feの量は	若干少い	若干多い
一粒の形	大きい	細粒
一般的に	溶け難い	溶け易い

すると吹子の未発達の時代には、真砂砂鉄の多い奥出雲は、製鉄の本場だったとは考えられない。考古学・文書の上からも。

奥出雲と毛利氏⑥

領主と地下人

地下人（じげにん）

一般農民を庶民を指す。土着の人である。

以前に、「信長の時代の奥出雲」1992、「横田庄と日野家」花の乱に因んで1994、「秀吉の時代の奥出雲」1996、で触れたとである。とくに「横田庄と日野家」では、横田庄に端を発する明徳の乱前夜、日野家の侍、斉藤太郎左ヱ門尉が下向した折、地下人が、山名満幸の代官に力を合わせてこれを追い払い、上皇の激怒、将軍義満の満幸の出雲守護職解易処分、ついに山名氏清を中心に山名対足利の決戦は、義満の勝利に終ったことを『明徳記』を引いて述べた。「信長の時代の奥出雲」の中で、横田荘の年貢貢納と地下人について触れた。また三沢郷地頭三沢氏が、郷内各地に一様に分駐させて開拓を行い、強国な地下人を戦いの時には武士として、動員し、奥出雲の強豪国人衆に成長したことも、わずかな資料をもとに述べたのである。

豊臣秀吉が天下をとると、大閤検地とともに刀狩りを行ったことは著名である。この刀狩り以前の社会は兵農未分離であったというのは常識である。地頭で国侍（国人衆）として地方に盤踞した者は、地下人とともに開拓し主従関係を固く結んでいたのも常識である。代官尼子氏が出雲に下ってから一番手を焼いたのは、この国人衆の最右翼三沢氏であった。鎌倉幕府創設直後の守護一族で出雲国内地頭として下って土着した国人衆、三沢氏と同じく承久の乱後の新舗地頭で、蒙古来襲に備えて、関東から西漸して領地に下って土着した国人衆がそれに続いた。

これについても、十分ではなかったが、「尼子家臣団の分析」でこの誌上で述べた。これらの国人衆の領内には、苦労を共にした地下人が存在し、兵と農の未分離なものが、中世の戦いのあり方に大きくかかわっていたのである。

尼子氏も三沢氏もその地下人の動きの文書は極めて少なく、その動きを描き出すことはむづかしいが、（備後の山内文書には片鱗のうかがえるものがある）

毛利氏の膨大な古文書の中の数少ないそれらに関する文書をもとに研究されたものがあるので（山本浩樹氏）、その要点を紹介して、当地方の地下人のあり方を推理する手掛かりとしたい。

兵と農の二つの顔をもつ地侍と百姓＝地下人

豊臣秀吉もその一人であった。

この地下人の存在を考えて戦国争乱をみると、土地や城の争奪戦であるとともに、地下人の争奪戦という様相もおびていたことが浮かんでくる。紛争地域の地下人を味方につけることが、即ち戦いの主導権を握ることにも直結しているのである。

地下人は単に受け身一方の存在だったのみでなく、地下人たち（地下人一揆という集団単位で動くことも多い）がどちらにつくかを決めるのは、最終的には地下人の意志と独自の情勢分析に基づく判断によっていた。紛争が膠着状態に陥って長引く場合には、前線にあたる村々の地下人たちは、主体性を大いに発揮して、双方の大名に働きかけて半納（はんのう）（異なる相手に半分ずつ年貢を納める）という形で両者に属することを認めてもらい、ある種の暫定和平を実現して村の安全確保を図ることもあった。

これについて毛利氏が中国制覇へ進む基点となった。防長への侵攻にあたり、元就が地下人対策をいかに心を砕いていたか、また武装した地下人の存在がどのように戦略や戦術を規定していたかを研究の中から抄記して、戦国争乱の泥まみれの一端をうかがうことにする。

地下人の戦略対応

「はかりごと多（おおさ）は勝、すくなきはまけ」という元就の信条は、地下人を調略する場合に用いられた。

第1に、すでに服属している攻める城のある国内の地侍たちに「案内者」を務めさせて、進路上の村々の調略を一つずつ進めてゆく。単なる案内役でなく、地下人調略する先兵として前面に立って工作活動をさせた。各村々の情勢に明るく、影響力をもっている人材をがっちりと掌握し、その顔と力を最大限に利用しようとする。

第2の方法として、足軽侍を使って暴力的示威行為（殺人・

放火も含む）で地下人らを脅す「動」と、交渉によって懐柔する「操」の二つを併せ用いる。力の誇示が有利なら、手荒いこともする。他方相手方の能力の劣ることもふれまわす。

第3は、どうしても態度を変えない村には（今日の小字程度）、一村ごと討ち果たして見せしめにする。

第4には、味方についた村々から人質を取り、地下人たちの心変わりを防ぐ。

第5に、攻撃する者の主城のある近隣の村々まで味方につけると、主城のある城下の地下人の心持ちも変わるであろうから、その時期を逃さず、そこに「操」を入れて地下人を味方に引きこむ努力をする。

こうした綿密な組立てられた対地下人戦略を詳細に指示している。これは戦い遂行上、地下人の武力を大いにあてにしながら、一方でその存在を密かに恐れてもいた。元就の胸中を知ることができる。

順調に地下人を調略すれば、相手を完全な孤立に追いこめるが、不調に終ったまま軍を進めると、逆に自らを四面楚歌の窮地に隠れることになりかねない。

地下人調略の成否は、戦いの展開を決定づける重みをもっていた。この指示をしてから、陶軍の若山城を一気に陥落させたのは、約1年後の弘治3年1557 3月のことであった。

こうした手法は（それでも頑強に服従を拒む者には武力を用いて制圧する）、大内氏の領国防長侵攻以前の、安芸・備後の国人領主（国衆）たちを傘下に収めていった手法でも同様であった。本誌前号の地図にある国衆は、元就が実子を養子に送り込んだ、吉川・小早川両氏以外の多くはこの手法を用いたようである。

一段と激烈な調略と戦術

先の指示してから一年後の弘治3年1557の大内方最後の拠点を包囲攻撃中、元就は自分の陣営内が危機的状態に陥りつつあることを感じとった。毛利軍の目に余る狼藉（食糧や家財の略奪が中心）が地下人の反撥を招き一揆の蜂起さえ憂える事態となっていた。これが現実化すれば、防長二州の各地に飛火して、それまでの軍事活動の成果が水泡に帰し、毛利軍の退路さえおぼつかなくなる。

毛利氏も狼藉を野放しにしていたのではない。家臣から起請文を取ったり、惣領隆元が国衆たちと契約状をもって誓約したりして、狼藉厳禁の周知徹底を図ったりしている。

四月落城し、毛利氏の防長征服は達成されて、元就ら本隊が帰国すると、防長の各所で一揆が相次ぎ蜂起し、秋ふたたび毛利氏は再度防長へ出兵せねばならなくなった。この時も毛利軍の狼藉は止むことなく、一揆掃討の完了後、毛利一門と安芸国衆の11名は軍規徹底を再度誓いあっている。

だが場所柄によって狼藉を黙認したようであるが、味方地内では黙認はされなかった。敵地内においては、毛利氏をはじめ諸戦国大名が、敵地国内に兵を進めた際、相手の城下一帯などで、狼藉を黙認するどころか、大名自らが組織的で大規模な狼藉をする場合があっている。

城下一帯の地域では、地下人の多くが城主やその家臣の被官（いわゆる家来）となっていたばかりでなく、戦時には非戦斗員を含めて多数の民衆が城内（支城も含めて）に収容されることがあっている。（6月中旬の尼子氏の吉田城攻めのテレビジョン放映のように）戦国の城が戦時下の避難施設として、庶民に開放されたのである。城主側は地下人を城内に収容することで、彼等を敵方の調略から切り離すことができたのである。

軍を動員するのは已むを得ぬ時は別として、春・秋の農繁期を避けている。地下人を動員せず唯一の年貢である米の植付収穫を確実にするためである。しかし史料にみると、収穫を前にした敵地の作物を薙ぎ払う稲薙・麦薙や、城下の在家への放火など、地下人を標的にした生活基盤の破壊戦術を、毛利氏も尼子氏もほかの戦国大名も、ぎりぎりにおいて実戦にとり入れていることがある。

こうした作戦を仕掛けたとき、相手方が反撃しようとしないなら、生活基盤の破壊に動揺した城内の地下人たちは、城主を見限って攻撃方に内通する可能性が増える。もし城内から反撃に打って出ると、攻撃方はこの時とばかりに一気に攻撃を仕掛ける絶好の機会となる。さらに城下人を一体の存在として攻撃することになる。

そうすると攻撃軍は敵地と地

朴の咲く頃　簸の上短歌会

朴の葉につつむ草餅香りよく夫在りし日にかはらぬ六月　永井弥生
朴の花のあはひに亡夫の笑顔あり　百姓一年生の吾れに手を振る　全
降り注ぐ日射しの中にかあさんが出荷の花を植ゑいそぎ居り　人
うぐいすも郭公もいつしか鳴きやみて真昼の谷は風ゆらぐ音　岡田時子
長病みの妻を看護りてくるる娘が古りては時に妻と争ふ　人
常臥せの妻と看護りてくるる娘の嫁がず居れば病みてはならず　常盤はるまさ
犬と行く夕ざりの道に風立ちて白つめ草の甘き香漂ふ　人
銀山に犠牲となりし人祀る五百羅漢は顔ばせ隠し　野村節子
三椏の花を散らして降る雨の夕べほろほろ蛙鳴くなり　全
いつの日も陽のとどかざる藪かげの小径を行けばかなしみの湧く　安部夕波

柴栗句会六月抄

青梅の尻部の丸みより熟れる　浅野としお
山法師ここら雲伯砂鉄帯　糸原古志
花菖蒲咲かせて水車の空転り　恩田和美
芍薬を賞でて少女の寄り道す　加納信子
思い切りこだわり捨てゝの衣替え　楠房子
見せばやとホーランエンヤの肩車　高木白虹
生き甲斐は人それぞれと花菖蒲　中澤美紀子
洗い髪肩に遊ばす十九の娘　新出谷一華
一人には一人の支え夏の雷　錦織富江
更衣せし兒童らの生き生きと　峯石美代子
蛇消えし草葉の揺れをいつまでも　渡部みつこ
肩車きずな深めし夏祭り　渡部夕峰

斐の上川柳六月の句

ちょっとした油断に痛さ思い知り　松浦亜以
只なんかいやですあとがこわいから　児玉哲呂
ストウブの油抜いたがまた恋しい　安部正子
早起きで損した気持ちぎくり腰　田中有樹絵
米寿越えまめで泥田を歩く趣味　石原冬明
贈られた新茶はよけい味がいい　児玉えみ
子を叱る声が高くてそっと逃げ　金阪柳月
楽しみは今日の遠足お弁当　足立玉恵
京都でも頬冠りした顔を見る　松浦久寿
地球儀を回して我が家あるつもり　渡部ミツコ
浮き沈み耐えて夫婦の和む顔　真綿よし子
気前よく返事はしたが重い腰　田中芳春

内への糧道を完全に絶つことの物理的・心理的効果も大きく、長引きがちな攻城戦の決着を早めることができた。

尼子氏の吉田城攻は秋深い時であった2万（としておく）の尼子軍の中の小荷駄隊の少ないことを見てとった毛利方の地下人と食糧城中搬入によって、冬に入った尼子方の立場を苦しくさせた。尼子方は吉田の城下の在家に放火して見せしもしたが、寒さと食糧不足と大内氏の援軍が吉田城に到着して退路をたたれるを恐れ徹退敗走となった。

この戦いの12月、藤ヶ瀬城主三沢為幸は10数名の家臣と、敵将元就の近くで討死した。その子為清は3才、これをみて尼子晴久は三沢氏をおさえて念願の横田荘進出をはかり、三沢家の代官職として、横田荘を支配することになる。

先の手法は長期戦になる場合でも繰り返しこれを行えば、生産基盤を徹底的破壊することで敵方の反撃力を奪い、抗戦意志をくじくことになる。

永禄5年1562石見銀山を尼子氏から奪取し、石見を平定し、月山富田城を囲んだ元就は、包囲持久戦をとり、永禄8年この手法を用い、遂に尼子義久は降伏し開城した。

地下人の去就と国人衆の去就

たび重なる軍勢狼藉に稲薙・麦薙をはじめとする無差別テロ的戦術が加わり、戦争が大詰めを迎えるにしたがって戦場の村々を襲う破壊もまた激しさを増していった。運悪く自分の村が戦乱に侵された時は、被害を最小限に食い止めるために、しっかり戦況を見極めた上で、自らの去就を決断し、より強い者の保護を仰ぐしかなかったのである。

この現実は大名にも厳しいものだった。他大名の侵略を防ぐことができず、存亡の危機に直面した時、領国内の地下人たちが味方についてくれる保証はない。自軍の劣勢が明らかとなれば、あっさり地下人に見限られ、刃を向けられることにもなる。戦国大名の軍事力は強力そうに見えても、その郷村レベルにおける基盤は、意外に脆弱な側面をもっていたのである。

毛利氏と尼子氏を比べると、力と押しで東に西に軍を進めて国人衆を圧さえても、地下人、百姓侍をもつ国人衆は尼子になびいても、退却されると再び自らの道を歩んだから、尼子経久の性格も手伝い常に戦いにあけくれて軍力を浪費している。私は「尼子家臣団の分析」と各国人衆の生き方を文書や『関西陰徳大平記』（毛利氏の家臣の学者の記録）から、尼子氏と国人衆との調略による強固さはなかったと判断している。尼子氏は早晩毛利氏の対立者ではなくなる大名であった。（後述する予定）尼子軍団は蠅たたき戦いであった。三沢氏は記述のように固い領内結果をもっていたから恐れられた。とかく奥出雲の鉄と三沢氏と想像力を書き立てる史家は誤っている。昔は三沢氏は「ようころ兵衛」だといわれたが、地下人を大切に」領内の安定のため、情勢を見て処していることは明らかである。別に述べたい。郡内各地の小さい石や五輪塔は、尼子、三沢の合戦ではなく、こうした地下人の精一ぱいの三沢氏への協力の折に倒れた者を村人がまつったものであると私は見ている。

ふしてお願い

消費税の値上げの連鎖で、当誌200円にお願いします。これでも四苦八苦。横田史談会の会員の方は会費半期1300円で御協力を。

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第269号（8月号）
1997.8.1（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲のたたら製鉄史㉘

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編19—奥出雲における鉄の生産と流通㊦—

鉄場の操業技術の進歩（続）

さて、本調査の主題である2つの往還に関する鉄製品の出荷輸送である第4の流れをみると、絲原家では安政5年は一年間で製品が、割鉄と鋼で2068駄である（砂鉄使用量の1割5分に当る）。3家で約6200駄である。

絲原家がこれが出荷に1日30頭動したとすると70日分の量である。中継問屋が八代村でこれから大東町まで30頭とすると60頭1日動くことになる。桜井家も距離が同じだから、両家で郡内120頭である。卜蔵家は後述のように八代村までの間に横田町の中継問屋があるから郡内で90頭が動くことになる。合せて210頭となる。

仁多郡は、割鉄7,140駄、鋼2,450駄で合計約9,500駄であるから順調な伸びを示している。収入は割鉄27,132円（76パーセント）、鋼8,575円（24パーセント）である。

それから約10年たった明治15年（1882）のわが国の和鉄生産の総量をみると、外国からの安価な洋鉄が入り、和鉄は不況気味であったが、若干増加し、そのうち95パーセントが中国地方で、その半数以上の52パーセントが奥出雲産である。

以上は奥出雲の近世企業たちの概略である。仁多郡の牛馬とくに馬の頭数の伸びでは、江戸中期以降他に輸送手段がなかったから、和鉄生産量の増加と併行している。鉄の道は鉄とともにで、道の補修には砂利のない時代、処理に困った鉄製品の量の数倍の鉄滓が用いられたであろう。

単純計算すると3家で、郡内だけで1年間14,700頭の馬が運送に使われることになる。

また召抱人は、表2でみると郡内で5,800人である。このころの戸数は3,900戸であるが、商工業に従事する人を除くと、農家1戸で3人が常雇や季節雇で関係している。

表3は明治初年の生産量、金額である。安政5年の先の量と、勘定書で比べてみると、雇用者・操業代数も同じであるが若干のびている。それにこの数字の中には維新後の社会情勢の変化で、操業代数の少ない小資本家の鉄師が出現し生産した量が入っている。

仁多郡は、割鉄7,140駄、鋼2,450駄

和鉄輸送の道

仁多郡の輸送は、湯町八川往還を主軸としている。安来阿井往還はあとで述べる如く、能義郡の和鉄が比田から安来へと通る道であった。郡内の三鉄師（飯石郡の田部家を加えると四大鉄師）の文書からみると、次のようである。

絲原家は『鉄穴鉏』、桜井家は『宇根鉏』ともに三成を経由して八代村へ駄送し、ここで中継して三つに別れ松江に集荷される。

取引は江戸中期から鉄師自らも上坂し、番頭とともに鉄問屋と取引を決めている。出荷量が多いから1鉄師で10軒近くの問屋をもち、取引年数の長期にわたるものが多い。幕末から明治初期には、鉄師が共同で大坂に事務所を設け、交代で番頭を置き問屋と取引している。

先の径路で松江へ送ると松江の問屋（問屋とはいえ、鉄師の荷捌きだけでなく、藩への諸御勤め交渉、鉄師の宿泊、家庭用品さらに美術品購入等も行い、鉄師の出張所を兼ねたものであった）が一切を取り仕切っていた。

絲原家の問屋は記録でみると享保19年（1734）から140年後の明治初年まで、同じ問屋であった。

卜蔵家の場合は、明治末年から安来の和鋼組合の設立者の1人となった関係からであろう。

輸送は、竹崎・大呂を経て伯耆へ越えて大菅、能義郡の十年畑へ出て母里を経て安来へ駄送している。

駄送する専業の馬士が大原郡には生まれていて、鉄の輸送について宝暦6年（1756）加茂村の馬士が大東・木次に加入を申入れたが断られている。その後文化4年（1807）同じく加茂中の馬士が大東・木次に入ろうとした



左上　高殿の中（鉏場）のたたら炉（製鉄炉）
中央　絲原家『哲穴鉏』

奥出雲のたたら製鉄史㉘・奥出雲と毛利氏⑦・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

表3　明治初年の出雲国の鉄生産量

	釜						鍛冶屋		
	釜数	鋼	銑	鍮細	合計	代金	鍛冶屋数	割数	代金
仁多郡	7	駄 2,450 (8,575円)	駄 5,250	駄 3,850	駄 11,550	駄 21,840	14	駄 7,140	円 27,132
大原郡	1	350 (1,225)	750	550	1,650	3,120	2	1,020	3,666
飯石郡	3	1,050 (3,675)	2,250	1,650	4,950	9,360	6	3,060	11,628
能義郡	6	2,100 (7,350)	4,500	3,300	9,900	18,720	15	7,650	26,775
神門郡	2	700 (2,450)	1,500	1,100	3,300	6,240	4	2,040	7,140
合　計	19	6,650 (23,275)	14,250 (21,375円)	10,450 (14,630円)	31,350	59,280	41	20,910	76,341

仁多郡がいずも国内に占める位置は、釜数で約37パーセント、鍛冶屋で約34パーセント、割鉄生産量で約34パーセント、鋼生産量で37パーセント、各々3分の1強であった。

が公認されなかった。

幕末に木次町の馬士20余名が、鉄師一同に駄賃について考慮をたのんだ文書もあり、馬を求めるため鉄師に借金を願ったものもある。

幕末から明治に至る5年間、備後北部の鉄師が年間数千駄に及ぶ鉄を、次の経路で運ぶことの許可を得ている。

○大馬木・八川・横田・先の大菅越えで広瀬そして境港へ

○上阿井或は小馬木から、八代経由して松江

これらはすべて北国売りであった。

（次号では「生産と流通」についての補足を述べる予定）

◎八代 → 大東 → 湯町 / 木次 → 宍道 → 庄原 → 船 → 松江 → 北国廻り → 大阪へ（七〇パーセント）/ 安来（北国廻り）（三〇パーセント）

◎卜蔵家は（慶応元年）―（　）は中継問屋名

竹崎（『原鈩』）―横田町（吉田屋）―八代村（松屋）―大東町（今市屋）―湯町 / 木次町（岩倉屋）―宍道 / 庄原 → 船 → 松江（吉田屋）

奥出雲と毛利氏⑦

大内時代と文化

（横田史談会　高橋一郎）

大内時代と文化

放送を通して見える大内氏は、毛利氏の成長と尼子氏の凋落と、陶氏を描くために、極めて片寄ってしかも矮小化されている感がする。奥出雲とのかかわりは、三沢氏が雲備の11人の国人衆と語らって、大内氏に味方し、月山城攻めのさなかに、尼子方に一同とともに寝返ったことが大きいけれども、中国以西の守護大名から戦国大名へと成長した諸氏の中では、最も強大であったし、地方に於て文化が豊かであったことは、よく知って置かねばならないし、その経済基盤についても、明らかにして置くことが大切である。すでに263264合併号で、かなり述べておいたが、放送をみて冒頭に述べた感想をもつので、書きのこしを加えておきたい。

百済王族の誇り

「大内時代」という呼称が、山口県の地方史研究ではよく用いられる。戦国時代、毛利氏が台頭する前、大内氏が周防国の山口を中心に、中国・北九州地方を領国として、富強を極め、文化的にも優れた足跡を残したからである。（系図は合併号を参照）

大内氏の先祖は古代朝鮮の王朝百済の琳聖太子であると言う。室町時代初めの応永6年（1399）、大内義弘は李氏朝鮮に遣使し、大内氏の先祖は百済王の後裔であるから、このことについての記録と土地をいただきたいと申し出ている。のち享徳2年（1453）にも大内教弘が遣使して、琳聖太子日本渡来の記録を求めている。これは、日本の人が我が祖のことを知らないので、朝鮮の確たる記録を入手し、これをもって先祖を広く顕彰したいという意向からであった。当然のことながら土地の要求は拒絶されてしまったが、大内氏が自らの出自を誇りとしていたことがうか

がわれる。大内氏は室町・戦国時代を通じて、李氏朝鮮と良好な通交関係を維持するわけだが、朝鮮が先祖発祥の地であるという大内氏の思いが底流をなしていたからであろうといわれている。

源平の戦いが始まり、西海に逃れた平氏を追って源義経が瀬戸内海を西下すると、大内氏は源氏方に船を提供するなど協力して、周防国における立場の確保に成功した。鎌倉幕府が成立すると間もなく、大内氏は幕府御家人となり、周防国衙（役所）内に勢力を広げながら有力武士への道を歩み始めるのである。

大内氏が周防国を越えて飛躍するのは鎌倉末期、弘幸、弘世父子の頃からである。

大名への道程

鎌倉時代の終わり近く、弘幸は幕府に恨みを抱き、蒙古の軍勢を味方にして謀反を起こそうとした。幕府は驚いて説得したが弘幸が応じないため、ついに花園天皇の勅命によって光厳院の妃陽禄門院を弘幸の子弘世に賜り、石見国の知行を認められた。これで納得した弘幸は幕府と和睦したが、蒙古軍がおさまらないため困っていたところ、大内氏の守護神氷上妙見の託宣があって発見した石見銀山の銀を与えて帰国させた、というのである。

これは石見銀山の発見譚で、元寇や三条氏（陽禄門院は三条公秀娘）、鎌倉幕府をからめた話であるが、大内氏が全国区入りする時期の説話として興味深い。

弘幸の子弘世（1325～80）は南北朝時代の半ば、山口を府城として定めると共に、長門国厚狭郡東部を本拠とした厚東氏を圧倒して長門国を勢力下に置き、室町幕府にさそわれて北朝方に転じ、やがて周防・長門さらに石見国の守護職を知行するに至った。弘世はやがて九州の南北両朝の戦いに加わり、応安4年（1371）、今川貞世（了俊）が九州探題となって下向すると、弘世は子義弘と共に彼を助けて南朝の拠点太宰府を攻略した。このとき、義弘は今川貞世の弟仲秋の娘と結婚している。今川氏は足利氏の流れをくむ名門であり、今川氏と提携することによって中央における地歩を築き、あわせて九州北部に進出しようとする大内氏の戦略に基づく政略結婚であった。そして義弘は目論み通り、九州北部に勢力を広げ、将軍足利義満のもとで明徳3年（1392）、明徳の乱や南北両朝の合一に働いて将軍の信任をえ、ついには周防・長門以下7か国の守護職を保有するという大守護大名に成長した。しかし、大内氏の急成長ぶりはかえって将軍の警戒するところとなり、ついに義弘は応永6年1399、堺で将軍の兵と戦い、討死してしまった（応永の乱）。

応永の乱によって大内氏は失速したものの、周防・長門・筑前・豊前四か国の守護職を保ち、教弘（1420）のとき、山口の客館（築山館）を設け、領国内の交通体制を整えるなど、領国の整備は進められた。

大内氏が中央政界に復活するのは教弘の子政弘（1446）のときである。応仁の乱が起こると、彼は西軍の有力武将として11年間在京して戦った。この間、彼が都の公家や僧侶と交わり、彼らを山口に迎えて地方文化の興隆に寄与したのであるが、このことはのちにふれる。

斐の上川柳七月の句

三面鏡日焼けの顔でまだ元気　渡部ミツコ
身長は低いが大きな話しする　児玉哲呂
除草剤ふっても種草元気出し　足立玉恵
不自由になればやっぱり出るあせり　藤原のぼる
雨もらい茄子が生きいき腰をのし　真綿よし子
田草とりとんと昔の物語り　高木凡太
減反で老に似合いの米作り　石原冬明
訓練はもうすんだかと地震くる　児玉えみ
園児等と昔の腕でチマキ巻き　安部正子
籠の中駄馬の胡瓜が勢ぞろい　田中有樹絵
恋をする相手がなくて肌が荒れ　金坂柳月
知らぬふりするより辛い知ったふり　松浦久寿
笹巻を待ってる孫がいて嬉し　藤原千代子
台風は日本が好き邪魔にくる　松浦亜以
知らぬ顔あれは知ってるつくり顔　田中芳春

合歓咲く　簸の上短歌会

合歓の花咲く頃小豆は蒔けと言ひし姑逝きてより遥かとなりぬ　野村節子
宵闇にそこのみ白き藪草の花をし見れば亡き女想ふ　仝
棹竹えの呼声スピーカーより流れきて梅雨の晴れ間をワゴン車の行く　常盤はるまさ
ボイラーに沸かすに馴れて焚かれざる薪はいくとせ積まれて納屋に　仝
米寿すぎて今更歯科医とおもへども今朝もしずかにドアを開けたり　岡田時子
野の花を賞でし夫のみ墓には花筒一ぱいに撫子手向く　仝
季くれば今年も笹巻の粉挽きて作るたのしみ　永井弥生
送るよろこび
アカシアもポプラも裂けむばかりにて濁る斐伊川さかまき流る　仝
燈台を望む岬は夕映えて潮騒はるかなる街に旅来し　安部夕波

前号訂正　1頁表2の所有炉→所有鈩

大内氏が最盛期を迎えるのは政弘のあとの義興、義隆父子の時代である。義興は永正5年(1508)―三沢為忠が藤ヶ瀬城に入る前年―、管領に追われて大内氏を頼った足利義稙を擁して上洛し、将軍に復せしめた。以後、義興は10年間在京して国政を動かしたのである。義興を嗣いだ義隆(1507～51)は7か国の守護を兼ね、中国地方では尼子氏と対決して安芸国で毛利氏を助け、次いで出雲・石見国に転戦した。九州では豊前・豊後・筑前国に出陣して大友・少弐氏と戦って領国を確保するなど、その前半生はまさに戦国武将らしい生きざまである。しかしながら、彼の特質は後半生にあった。天文12年1543、出雲に遠征して尼子に敗れてのち彼は合戦から遊離し、王朝の臣つまり、公卿の色彩を濃く帯びるようになるのである。彼は四十二歳で従二位という歴代最高位に叙せられている。姻戚関係も華麗で、彼の祖父政弘は今小路氏の娘と結婚しているが、彼は内大臣万里小路秀房・広橋兼秀の娘と結婚している。彼の姉妹も足利義冬や土佐一条房家に嫁するなど、大内氏と公家との姻戚関係は応仁の乱以降、ことに義隆の代に至って最も密になったのである。

熱心だった対外貿易

南北朝時代、上洛した大内弘世は沢山の珍奇な舶来品や銭貨を都の人々に配り与えたので、世の中にこれほどの長者はいないだろうと大評判になったという。このことは、大内氏が早くから対外交易を手掛けていたことをうかがわせる。そして室町時代初め、我が国と李氏朝鮮との通交が始まると、大内氏も遣使、交易を開始した。大内氏は倭寇を禁圧すると共に、倭寇に捕えられた人を送還したり、李朝の使節を警護いるなど、誠意をもって接したため、李朝も大内氏に信頼を寄せ、来航者を統制し始めたのちも、大内氏には「通信符」(割符)を給付して貿易を認めた。戦国時代になると、戦費調達の目的もあってひんぱんに遣使し、交易を求めた。

対外貿易でもたらされた唐物と巨大な利益は大内氏の富強、そして中央における立場を支え、また山口を中心とした高度の地方文化、いわゆる大内文化の開花に貢献したのであった。

弘幸は応永の乱(1399年表㊲)の陣中で、討ち死にを覚悟しながらも和歌百首、連歌千句を作ったといわれる達者な武将であった。禅学にも造詣が深く、当時の高僧2人とも親交があった。

義弘の甥教弘は後村上天皇の皇子師成親王に師事して歌道を学び、自筆の『李花集』を拝領宗祇を山口に招いている。宗祇の『新撰菟玖波集』も政弘のすすめによって作られたものであった。わが国最高の水墨画家雪舟等楊の傑作の多くも政弘の時代の山口で制作されたのである。

大内氏最後の当主義隆は最も芸文に傾倒した大名として有名である。彼は儒学・歌学・有職故実・郢曲(俗曲)などを一流の学者について学んだが、そのレベルは高く、たとえば儒学では四書五経を講義するほどであったという。また、内外の書籍の収集、出版事業にも熱心で、大内館の文庫「山口殿中文庫」には貴重な書籍、写本が収められ、番衆が蔵書の管理・出納にあたっていた。こうした大内氏の当主に限らず、家臣のなかにも芸文に優れた人が少なくなかった。『吾妻鏡』(吉川本、重要文化財)を完成した右田弘詮はその一例である。家臣に限らず、山口の神主なども有職故実の大家山科言継にひんぱんに祭祀・神楽の故実について教えを乞うている。

こうした大内氏歴代の庇護のもと、城下町山口は京都に模して町作りがなされ、多くの公家・僧侶や文人が滞在して都の文化を伝えた。

天文19年(1550)のフランシスコ・サビエルの来訪とあいまって、山口は異国趣味豊かな国際都市として繁栄していたのである。

残念ながら、大内氏は天文20年、義隆が家臣陶晴賢に討たれて山口は荒廃し、大内文化の優れた文物の多くは失われてしまった。しかし、室町戦国時代、荒廃した京都の文化を領国に包容して維持し、展開させた大内氏の歴史的役割は大きいといわねばならない。

(国守進氏の論文を多く引用させて頂いた)

柴栗句会七月抄

ホッケーの選手闘ふ夏の日が戻る　浅野としお
梅雨前線眉をひそめることばかり　糸原古志
雷鳴に話の続き失えり　恩田和美
梅雨明けや母似の薄き眉を引く　加納信子
道路愛護苅り残こされる月見草　楠房子
帰り待つ杣の細道月見草　高木白虹
夾竹桃咲いてる午后の街が好き　中澤美紀子
更衣少し濃めに眉を引く　新出谷一華
月見草鉄道列車の土手に揺れ　錦織富江
夏大根おろして二人無口なり　峯石美代子
彫り深き弥陀の柳眉や夏伽藍　渡部夕峰
踊りの輪皺をかくして眉を引き　渡部みつこ

京都文化の山口移入が本格化するのは応仁の乱以後のことである。大内政弘は三条西実隆・一条兼良・近衛政家など、当代最高の知識人と親交があった。連歌にも造詣の深かった彼は宗祇とも親しく、二度にわたって

会員頒布一部二〇〇円／〔六九ノ八〕　島根県仁多郡横田町一〇六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　0854-52-0191）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第270号（9月号）
1997.9.5（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲のたたら製鉄史㉙

新資料にもとづく特に東南部の
その技術・経済・社会・文化の総合史

近世編20—奥出雲における鉄の生産と流通㈱—

補遺

多くの方、製鉄史を研究している方までも、無知であったり、誤認されていることを少し述べておく。

①鉄師の出荷製品とその量

当地方の釜場の操業は三日押であって、1代の製品の6分の3が銑、鋼が6分の3である。この鋼を鋼場で処理し、6分の1の鋼と6分の2の歩鋼に分ける。この銑と歩鋼あわせた6分の5が、2軒の大鍛冶場に送られ、加熱鍛練して炭素を減らし割鉄（包丁鉄・錬鉄で普通の鉄）となった。出荷にあたっては、その値段は割鉄は鋼の2倍であったから、鉄師の収入の8割前後が、2割前後が鋼であった。

（奥出雲、西伯・石東以外の全国各地は赤目砂鉄地帯では四日押—4昼夜操業—で、銑生産がほとんどであった。）

②鉄山の面積

釜場用木炭は、鉄山と呼ぶ雑木林の、それも25～30年たった木を、切株を残して丁寧に切り窯場で焼く。やがて切株からでた芽は25～30年先には大きく伸びて、また木炭用材となる。

1釜場で年間使用する木炭材の山は100町歩（100ヘクタール）が大鍛冶場2軒で30町歩必要であり、大きい谷間の両側で10町歩のところが10か所必要である。すると、30年周期で木を切って木炭を生産する一鉄師で300か所すなわち3900町歩ないと操業できない。松江藩は『雲陽誌』の書かれた享保年間、この山の使用を保証した。釜場は仁多郡で5か所あった。鉄師は山の乱伐どころではない。育成に力を注いだ。

③砂鉄の採取法

鉄穴流しは中世末から幼稚な方法がはじまり、宝暦年間（1751～64）ごろに完成に近づいていったから、砂鉄の採取量が増え、次第に毎年操業へ、やがて年間操業へと盛んになった。

流し方も高い崖面を下から次第に崩したから、山全体が一挙に裸になることはなかった。せまい平地の跡地は畑として株小作を入れて（釜関係の労働力増強となる）、次第に水田作りを進め新田開発をした。また下流の沼や河川敷を地上げして畑から水田へと転換させた。鉄山と水田開発は十分に水源涵養、保水力確保に役立った。相当な面積であることは、鉄師の水田・畑・山林の歴年の整理された台帳に明らかであり、時代を追った検地帳と符合する。

◎4鉄師の2家は横田町に—

奥出雲4鉄師の一人卜蔵家と「原釜」は、船通山西麓横田町竹崎にあり、絲原家と『鉄穴釜』は横田町大谷にあって、一斉廃業まで200余年間、両家ともそこで住み操業した。これを永代釜という。両家とも現在ここに住宅と関連施設があり、後者には㈱絲原記念館があり公開されている。

しん仁多郡風土記①

古い横田の姿

—『出雲国風土記』にみる—

奈良の東大寺の大仏建立より10数年前(733)に完成した『出雲国風土記』は、他の国々のそれより抜群の書で、研究が深まるほど、考古学の発掘のたび毎に、その正しさが証明されている。戦後私は出雲の歴史を書くとき、話したりするとき、この書を土台とすることにしている。

67年前の今の中学2年生にあたる高等科2年の夏7月末日近く、高等科全員が鳥上山（船通山）に登山した。

頂上に立ったとき引率教員の叫び声で、折り良く梅雨晴れ雲の動きの間から、大山と白波打つ夜見ヶ浜、三瓶山とうっすらと白く光って見える園の長浜の浜辺を見た。それは今も私の脳裏に浮かぶ。

焼き付いて忘れられない。数え切れないこの山の登山でこの両風景を一度に見たのはそれ以後記憶にない。尋常科のころ、全国で11番目に結成された（県内唯一）ボーイスカウト（救世義勇団）の夏のキャンプ生活で、別々に両浜辺から眺めた、二つの山の姿もそれに重なって来る。松江の学校に在学中、大山へ二度、三瓶山に三度登って両浜辺を別々に眺めたのも重なる。

以来両山とも度々頂上を極めたが、一望した両風景は、焼き付けを増すばかりである。戦時中加藤義成先生の名講義を重ねて聞いた

奥出雲のたたら製鉄史㉙・しん仁多郡風土記①・奥出雲と毛利氏⑧・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

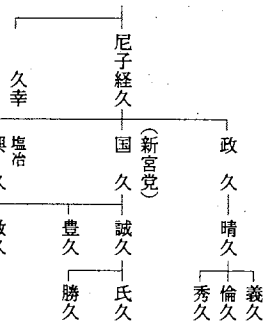
奥出雲と毛利氏⑧

—尼子氏衰退の因—興久の死と新宮党打倒—

塩冶興久の自殺

月山富田城主の尼子経久は、南麓の塩谷に弟の久幸を配置していた。北麓の新宮谷には二男国久を置き、さらにその北東の独松山を越えた吉田荘（安来市）を国久に知行させた。この吉田荘は守護権力の及ばない室町幕府奉公衆吉田氏のかつての本領の地であるから、経久はここを一門で押さえ足許を強固しようと考えたのである。

出雲の東部に本拠をかまえる尼子氏の、気になるところは西部である。ここには一宮杵築（出雲）大社も、「出雲国一寺」鰐淵寺もあり、かつての初代守護家佐々木氏の系譜をもった幕府奉公衆の塩冶氏もいた。出雲の統一を願う経久が塩冶氏に目を向けるのは当然のことで、永正15年（1518）以前に、三男興久を養子として塩冶氏に入れたようである。出雲きっての穀倉地帯といわれ、水運の中心でもあり、経済上もっとも重要地点と考えられている塩冶郷を尼子治下に吸収し、さらなる発展を期す経久の姿が想像される。



ところが塩冶興久は天文元年（1532）8月（数年前に遡るともいわれる）に、所領の加増のことから父経久に叛乱し、島根半島の中央、塩冶氏が歴史的に深くかかわっていたとされる佐陀（松江市）で挙兵したという。結果は備後本郷（庄原市）の甲山城主で、舅にあたる山内直通にかくまわれていた興久が、天文3年に切腹して一件落着したようである。

経久としては、わが子興久の犠牲なしに、平穏のうちに塩冶氏を尼子一門にくり入れようとしていたろうに、塩冶旧臣らの突き上げもあったろうし、また佐陀合戦はかなりの激戦で、しかも塩冶氏の背後に周防大内氏があるとの見解もあるところからみると、事はそう簡単には運ばなかった。

尼子氏にとって一大痛恨事、塩冶興久の事件は、名族の塩冶氏を完全に消滅させるために、経久が仕組んだのではあるまいか。興久の子清久は、天文7年（1538）の大坂の『石山本願寺日記』では「エンヤ息」と記されていて家督をついではいないとみられるし、同9年の「竹生島造営奉加帳」には「彦四郎清久」とあるだけで、塩冶を苗字としていないようである。また興久の塩冶氏所領を受けついだ新宮党の党主、兄の国久も塩冶氏を称していない。経久はやはり出雲西部の大物の塩冶氏を抹殺するために、わが子興久を止むなく犠牲にしたのではあるまいか。とすれば尼子衰史はさらに深刻となる。

このようにみてくると、興久の変わり果てた首をみた経久が「あっ」と叫び、そのまま腰が抜けて再び立つことはなかった、とする『陰徳記』の記事は真実味を帯びてくる。

人びと

横田郷（今の鳥上・横田の地区と、八川地区の大字大谷をのぞく範囲）には、600人余りの人が住んでいた。当時1戸の住人は数人から数10人にも及ぶ大家族もあって、平均すると20～25人くらいであった。1郷の戸数は50戸までに限られていた。社（集団＝氏の守護神）の数が1社であったから、この郷には30戸くらいあったであろう。その家々は盆地周辺の丘陵地の間を流れる谷川のやや開けたところの谷地田のかたわらに、2～3戸ぐらいずつで、郷内のあちこちに10か所くらいあった。（竹崎・代山県・五反田・馬場・蔵屋・原口・土橋・本郷・金川など）この郷内の男の働き手（正丁—20～60才）は120人くらいで、その1/3が兵役義務者とされその半数の20人が、大原郡にあった熊谷軍団に兵士として常駐し訓練を受けた（出雲国内には意宇と神門により大きい軍団があった）。あとの100人（1戸3.3人）が稲作などに従っていた。水田は研究報告で推定すると、60丁くらいであり、1丁当りの収穫は野生種の赤米で15俵余りであった。兵士は自分の糒・塩などの食糧や数多い戒具（諸道具・武器・衣服等）すべてを自弁で持参した。その上一人前の租（収穫した稲の一部）庸（労役のかわりに納める物）調（地方の産物）を国へ納める義務も負うていた。北隅（五反田の東）には正倉（租税の穀物倉庫）が

新宮党の壊滅

月山の北麓に東西に走る細長い谷を新宮谷という。経久の二男国久、その長男誠久、二男豊久（久豊）、三男敬久（久尊）、誠久の長男孫四郎らがこの谷に館をかまえていたので、世に彼らを「新宮党」とよんだ。国久の統率する新宮党3000人の武功は抜群で、尼子氏の「杖柱」といわれていた。しかしその実態はあまりわからなかったが、近年、先に述べたように、国久が塩冶氏の旧領を受けつぎ、晴久の補佐役として重要な役割を果たしていることや、また天文6年（1537）以降の尼子氏の美作国侵攻に、国久・誠久ら新宮党が深くかかわっていたことも明らかになった。

国久は兄政久が尼子領国の形成過程の半ば永正10年（1513、永正15年とも）に若くして戦没したので、叔父として晴久を援け尼子発展に尽力したと思われるのに、新宮党は天文23年（1554）11月1日、晴久のために一網打尽に滅ぼされた。それから12年で尼子氏は滅亡する。

新宮党打倒には毛利元就の謀略説、新宮党の内訌説や横暴説もある。新宮党の犠牲説をひいてみる。

天文21年4月に出雲をはじめ中国8か国の守護職に補任された晴久は、これを好機として家臣団の再編成に乗り出した。すなわち本田家吉を四郎左衛門尉から豊前守に、（尼子氏が横田庄を三沢氏に替って荘園支配をした時、原口村の代官も兼ねている）中井綱家を助右衛門尉から駿河守に、立原幸隆を次郎右衛門尉から備前守に、といったように通称から受領名への変更である。こうした例は横道久宗、大石綱秀らにも及んだようである。晴久は自己権力拡大のために、彼ら家臣団を側近・奉行に編成してがっちりと握り、積極的に新宮党を打倒した。つまり新宮党は当主晴久の権力強化のための犠牲になったと思うのである。

国久・誠久父子は早くから中央に知られ、石山本願寺と音信もしているし、天文20年には誠久、その長男孫四郎、二男甚四郎、国久の三男敬久、誠久の娘聟で先懸けする大河原孫三郎貞玉造（温泉）についでにぎわい尚らも知られていて、その強勢であった。（丁＝町ではない）

横田郷にはその住人たちが稲作の豊穣を祈る伊我多気社（現伊賀多気神社）が1社あった。

半島の新羅あたりから渡来したかなりの集団の人々も、出雲の平原部はもとより、大原郡あたりにも先住者がいて定住の適地がなく、古墳時代末期の6世紀はじめころ、横田郷内の各地に分散し、一つの祖（神）を中心に定住したのかも知れない。

出雲大川の流域

横田郷を流れる川は出雲大川（現斐伊川の古名）で、その源は伯耆と出雲との境にある鳥上山で、横田村を流れ横田郷を西へと進み室原川をあわせ、やがて三処郷（今の能義郡の比田地区も入る）の西南の端をよぎって三沢郷に入り、間もなく三沢郷と布勢郷の境に沿って流れていた。この川の仁多郡内の下流（大原郡木次町の温泉地区は当時は三沢郷内で、今から30年前に大原郡に移った）は漆仁川（漆仁は湯村の古名）と呼ばれ、川辺には薬湯（温泉）があって、王造（温泉）についでにぎわっていた。大原郡に入るとこの川は斐伊川と呼ばれ、下流の出雲郡（現簸川郡の東部）に入るとふたたび出雲大川と呼ばれ、西へ流れ神門の水海に入り日本海に通じていた。

当時の横田盆地の平坦部は湿地で、今の町並みのある地帯は葦の生いしげる沼地であった。川には、あゆ・ます・む（う）なぎがすみ、周りの山野の草木の種類は今と同じで、そこには鷹・鳩・山鳥・雉・熊・狼・鹿・狐・猿などがすんでいた。

三処郷は広くて住人も多く、2社があり（ほかに山の上に小社が2社）、布勢郷は狭くて1社、三沢郷は最も広く4社があった。社の数はそれを祖とする氏の数とほぼ同じであったから、社の数の多いことは開拓も早く、人口も多かったことをあらわしている。

大原郡は仁多郡より狭いが8郷あって、社は29社人口は4倍をこえていた。遥るかに早くから開けたところであったから、土着した古い実力のある豪族がいた。最も古いのは樋氏で樋郷（氏の名を郷名とした。のち斐伊郷と改める）の開拓者で、その祖をまつる樋社（今の斐伊神

柴栗句会八月抄

ギヤマンの彩を盛り出す晩夏光　浅野としお
天高し神話の大蛇モミュメント　糸原古志
名端居蠹が向きかへ対持せり　恩田和美
夏雲や古代を秘めるおろち山　加納信子
赤トンベ遠き古代のおろち哀話　楠房子
釣り竿の先に安らぐ赤トンボ　高木白虹
大蛇の見下す里の赤とんぼ　中澤美紀子
おろち吐くたたら火燃えて祭り果つ　新出谷一華
耳鳴りと蝉鳴く音の二重奏　錦織富江
風鈴の音に誘われて窓を拭く　峯石美代子
焼き上げし陶器に写る晩夏光　渡部夕峰

前号訂正　1頁の写真の説明『哲穴鉾』は『鉄穴鉾』

のほどがわかる。そういえば国久にこんなことがあった。天文16年のこと、杵築大社の社領内の地下人が山境を争って訴え出たとき、国久が自分の考えを指令したところ、晴久はそのようなことは当主の自分の権限であって、国久が「仰せ出す事ある」べからずと命じている。たしかに国久は晴久の権限内に立ち入っているし、塩冶氏のすべてを受けついだからには、さらに強力になろう。だが地下人の山境の相論のとき国久は、つまるところ、晴久様の裁許でよろしい、と、従っている。強力ということと謀叛とは必ずしも直結しない。やはり本家の晴久が戦国大名として権力を誇示しようとしたとき、分家の国久が邪魔になったための決断であったかと思う。なおまた新宮党の動向にたいし尼子家臣団内に複雑な対立があり、とりわけ譜代の家臣との間にもいろいろと矛盾を生じたことが、それに拍車を掛けたのであろう。

（米原正義氏の文章を大巾に使用させて頂いた。　高橋）

斐の上川柳八月の句

雨上がり稲のにおいを運ぶ風　真綿よし子
洗濯機あっても手洗いする老婆　金阪柳月
気のぬけたビール飲まされ鉢の松　渡部ミツコ
今のこともう忘れたととぼけ顔　児玉えみ
有難うその一言ですっとする　藤原千代子
おとうさん昼夜を問わず野球漬け　松浦亜以
少年の名前を言うは気をつかい　児玉哲呂
盂蘭盆会あれもこれもと仏の膳　松浦久寿
毎日の新聞ニュース世の狂い　安部正子
梅雨上りかなかな蝉の声ひびく　足立玉恵

盆あとさき　簸の上短歌会

役場より医療費明細書送られて罪を犯かせし思ひよぎりぬ　永井弥生
ちちははも夫も乗せる茄子の牛　大きく艶よきを孫と選べり　〃
二十年つづく健康体操に八十九才のわれも休まず　岡田時子
紫陽花の雨にうたるる藍の色　亡父の一言を思ふひととき　〃
出費多端と断りながら回覧に何時ごろよりか疑はずるき　常盤はるまさ
炎天のなかに入りゆくたまゆらを頭のうちを血のひきゆくごとし　〃
眼の手術終へて五ヶ月　時として忘れ勝ちなる目薬をさす　野村節子
二十日余を早く産れし嬰児の溢るる母乳を吸ふ力はも　〃
向日葵の西に傾く夕ぐれどき蜩鳴きて夏終らむとす　安部夕波

社）があり、その氏寺も建立していた。この豪族の勢力は郡内を流れる出雲大川をも樋川（のち斐伊川と改める）と呼ばしめるほどであった。ほかの豪族では勝部臣（渡来人系）・額田部臣がいて、当時はともに郡司（※郡の役人）をつとめ、それぞれ本堂層塔をもつ氏寺を建立していた（当時の礎石が残る）。

出雲国内の9郡には大小399の社があった。海岸沿いの平野部は渡来人の土着も早く、開拓もすすみ人口も多く、それぞれの祖をまつる社も多かった。寺院は国司（国の役人）のいる意宇郡に4、楯縫郡と出雲郡には各1、神門郡には1あった。これらの郡はいずれも平野部の早く開けた人口の多い地方であった。ところが奥地の大原郡には3か寺あって、楯郷の2か寺は僧5人と尼2人がいて、出雲でも最も大きかった。これは建立した豪族の信仰心はもとよりその財力も相当なものであったことをあらわしている。その上しばらくのち国の定めで国庁（出雲国の役所）が建立を義務づけられた、国分寺・国分尼寺の先鞭をつけたように、僧寺と尼寺があったのは大原郡だけであったことは、豪族の実力のみでなく、大和に遅れたであろうが、新文化受容への高い見識があったことを示している。

このような状況も加わって出雲大川は、中央へは大原郡内での呼称樋川（のち斐伊川）でもって誤まって伝えられ、『日本書紀』などの神話の中で、簸川や肥川とされたのである。

ずっとのちの中世半ばになると中央でも出雲大川を斐伊川と書き。いつしか古い読み方が失われて、音読して斐伊川となり今に至ったのである。

（注）**幕府奉公衆**　室町幕府の直轄軍。室町幕府では将軍の直轄軍として奉公方が組織された。奉公方は足利氏一門や守護の庶流、足利氏の根本被官、有力国人層で構成され、五番に編成されていた。この奉公方に所属した者を称した。在京守護の軍事力とともに将軍権力の軍事的基盤を構成した。

したがって塩冶氏は尼子氏にとっては、眼の上のたんこぶであった。

（横田史談会　高橋一郎）

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六／二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）
（電話・電送兼用　〇八五四－五二－〇一九一）　振替口座　松江〇一四一〇－九－一二四〇四）　頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第271号(10月号)
1997.10.4 (M129.T82.S71)
奥出雲編集集団©
横田史談会

奥出雲の近世企業たたらの発達過程①

—自然と生活、および古文書の社会科学的考察に基づいて—

序章　I

はじめに

現在まだ未完のものはそのまま続けていって、この新しい連載を始めたのは次の理由による。私の考えにいろいろ御意見を賜って感謝しているが、もう一度副題のような、まことに僭越な立場から総合的に述べて、御指導を賜りたいと思うからである。別の未完の二つをこの観点からとらえ直したと考えられるとも思っている。

現在のたたら研究が、盛んな考古学と冶金学と、明治四十年の調査研究と、日本美術刀剣の研究とによって、少しいびつ(失礼な言葉であるが)になってはいないかと思っている。

私の幼ない時からの、各種の現場の見聞と、正しく理解しようと、先人の研究を読み、技術者の話を覚え書きし、さらに幸にも鉄師家の文書を整理し系統的にまた関連づけて読んだ結果記録の中の経営経済の数字の推移、技術より道具、建物、地下構造の記録。技術者を使う立場の鉄師の家の番頭の苦心した様子を知る手紙等も加えて考えると、いよいよいびつではないかと思い、諸学会で報告し、断片的文章も発表して来たのである。経営経済と手紙から問題提起しているのである。

問題とは　四つ

Ⓐ①自給たたら(古代から現代に至る小規模たたら、で製品を粗鋼と仮称した。粗鋼を造り、大鍛冶・小鍛冶の技術で鉄製品を造った系譜をいう。(農民の間で行われ、のち農民は粗鋼造りまでを行った)

②企業たたら——銑生産を目的とする操業であるが、その出現が中世と考えられているが、遺跡発掘、古文書の上から判然となっていない。(私は初期企業たたらと仮称している)近世に入ると判然としてくる。そして鈩場と大鍛冶場と一貫して経営する企業となる。(私は近世企業たたらと定義づけている)

Ⓑ企業たたらは銑生産を目的としていた。近世には四日押(四昼夜操業であった。赤目砂鉄の地帯ではほとんど銑が生産され、真砂砂鉄地帯の四日押では銑のほかに鋼ができていた。(はじめは鋼は割れず放棄していたが、宝暦年間から割って、中の歩鋼(2/3)と鋼(1/3)に分けた。両者とも銑と歩鋼は大鍛冶場で割鉄とした。

Ⓒ幕末に、奥出雲及びその東辺西辺の真砂砂鉄の多い地帯の四日押は三日押に短縮され、増産へと進んだ。

Ⓓ幕末に、炉の改良と送風力の増加で、銑生産に進もうとしたが、たびたび述べたように旧来の操業を続けていたが、明治末年、洋式高炉方式をとり入れた角炉が開発され、これによる木炭銑生産時代へと入った。

の四つである。

現在の日刀保たたらは、三日押を改良して鋼のみを造り、鋼を目的としているので、私は新三日押と仮称している。企業たたらというより、伝統的工芸材料生産であるというべきであると考えている。

この連載では、まづ西洋と日本の鉄生産の歴史を比較しながら考え、ついで西洋のルネッサンス(文芸復興)そして産業革命の歴史を読んでおいて、古代からの奥出雲の自然と生活、古文書の中にみる製鉄史を、年表に従って明らかにしていきたいと思っている。

(高橋一郎)

鉄の技術史(2・3頁の年表で洋和比較して)

ペックの『鉄の歴史』の翻訳者中沢護人の解説を転載すると、鉄は人類の技術史上、銅よりもはるかに遅れて出現したとされており、有力な一説は次のように説いている。「銅の精錬はアナトリア(現在のトルコ)あるいはイランで紀元前6,000年紀に発展し、そこから東西に広がり、イギリスおよび中国に紀元前2,000年紀に到達した。一方、鉄の時代は紀元前1,500～1,000年の間に同じアナトリアで開始され、紀元前800年にヨーロッパに伝わり、ハルシュタット文化(鉄の文化)をつくった。中国には紀元前400年ごろ達した」(タイルコート『冶金(やきん)の歴史』)。これによると、青銅時代に遅れること約4,000年で鉄の時代が始まるということになる。なぜこのような遅延が生じたか。種々の理由があげられているが、説得的な根拠はまだ提起されていない。

鉄は小アジア以西、ことにヨーロッパでは中世まで長く錬鉄、すなわち半溶融の粘い鉄として製造され、溶融銑鉄(鋳鉄)は知られなかった。しかるに中国ではすでに紀元前から溶融銑鉄が製造され、農具その他に鋳造

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

された。ヨーロッパでは14、15世紀に水車送風による高炉法の出現で初めて溶融銑鉄が製造されるようになったのである。中国でなぜ早く鋳鉄が製造できたのか、ヨーロッパでなぜそのように遅れたのか。高度の製陶技術、効率の高い送風装置、石炭の使用などが理由にあげられているが、まだ十分に解明されていない。

ところで、製鉄において錬鉄と銑鉄の相違はどのようにして生ずるのか。製鉄炉の**炉内温度が高くないと**、鉄鉱石が還元されてできた鉄が炭素をすこしか吸収できず、こうした炭素の少ない鉄は融点が高く、そのため、軟化して粘い鉄になることはできても、溶融状態にはならない。この鉄から鉄鉱石の脈石部分が溶けて分離したものが**錬鉄**である。**炉内温度が高い**と、還元鉄の炭素の吸収が促進される。炭素の高い鉄は融点が低く、溶融状態になることができ、炉から流れ出る。これが**銑鉄**である。水車送風による高炉はこのような高い炉内温度を可能にしたのである。高炉法が出現するまでは中国をはじめ東アジアを除いて錬鉄だけが使用されてきた。

錬鉄のなかの比較的炭素の高いものは鋼とよばれ、他は単に鉄とよばれ、鉄と鋼の二つの種類の呼び方が長く行われてきた。鉄は軟らかく、鍛造性がよく、広い用途に加工された。鋼は硬くて強く、刀剣や道具に威力を発揮した。古代の冶金師は、鉄に炭素を吸収させて鋼に変えるセメンテーション（浸炭）技術をも発明して活用した。

ヨーロッパのライン川中流地域に高炉法が出現し、16世紀にイギリス・フランス・スイスその他各国に伝えられるとともに、様相が一変し、以後は製鉄技術はもっぱら欧米で発展し、その世界支配と軌を一にした。鉄の鋳造業が新たに大規模に発展し、鋳鉄砲が海戦に、植民地侵略に一役を演じ、芸術的に聖書物語を浮き出した暖炉板が部屋を飾り、大邸宅や墓所を囲む鉄柵が街の風景に新しい景観を添え、鉄の塩釜（しおがま）その他が製造場を活気づけた。一方、それまで鉄鉱石から直接つくっていた錬鉄と同じ可錬性の鉄が、高炉の銑鉄を精錬炉で溶解し脱炭してつくられるようになり、こうして直接法から間接法へ、一段階法から二段階法へ製鉄は移行した。この高炉―精錬―炉―ハンマーという新製鉄は鉄の安価大量生産に道を開いた。ついで18世紀に入ると、木炭を燃料とする製鉄から、石炭を燃料とする製鉄に大きく転換することになった。この転換は産業革命のイギリスで行われた。前半期にはダービー家の努力により、石炭を蒸し焼きにしたコークスを高炉で燃料とし、いわゆるコークス銑が製造されるようになり、中ごろにはB・ハンツマンの発明により石炭を燃料とするるつぼ溶解法でいわゆるるつぼ鋳鋼が製造されるようになり、さらに後半期にはH・コートの発明したパドル法により石炭焚（だ）きの反射炉でいわゆるパドル鉄（元どおり半溶融状の粘い錬鉄で、溶融状態にはならなかった）が製造されるようになった。さらに石炭を燃料とする蒸気機関車が送風と加工に変革をもたらした。石と木材にかわる「鉄の時代」が始まったのである。

19世紀に入って、石炭製鉄が他の国々へ波及しつつあったとき、その後半期、イギリスを起点としてヨーロッパで製鉄の大革命が行われる。1,855年のベッセマーの転炉法、64年シーメンズとマルタンの平炉法、78年トーマスの塩基性製鋼法などによって、るつぼ法の単なる再溶解のような小規模なものでなく、溶融鋼を銑鉄から大量生産できるようになった。溶けない錬鉄、溶ける鋼の区別がなくなり、いわゆる溶鋼時代、略して「鋼の時代」が始まった。それ以来製銑（高炉）・製鋼（鋳炉および平炉）・圧延の近代製鉄所方式が確立し、20世紀に入り鉄の生産は飛躍的に増大していった。電気炉による合金鋼の製造も登場し、重要性を増していった。

第二次世界大戦後、それまで100年安定していた製鉄法はまた大きく動きだした。1,951年オーストリアで発表されたLD法とよばれる純酸素転炉法が世界に急速に普及し、空気による転炉法と平炉法は衰退した。高炉出現以来姿を消した直接法を復活させ、錬鉄を製造してこれを電気炉で溶解し、こうして高炉を必要としない製鉄法の試みも活発化している。すでに工業化された連続鋳造をはじめとする作業

日本のたたら

6世紀後半	**砂鉄・木炭**（小形筒型）
8～9世紀	中国地方（長方形箱型）
10世紀	大矢（広島県）遺跡（鋳鉄生産か）
17世紀	天秤吹子出現企業化へ
19世紀後半	㊀奥出雲高炉（銑生産）を模索する。㊁洋式高炉日本へ。木炭銑角炉出現

金　属	世　紀	国　名	内　容	原　料
銅	BC.6,000年	アナトリア		木炭と鉄鉱石
	BC.2,000	イギリス・中国	← 伝る	
鉄	BC.1,500~1,000	アナトリア	（ヘルシュタット文化）	
	BC.800	ヨーロッパ		
	BC.400	中　国		
	BC.紀元前	中　国	溶融銑鉄　農具など	
	古　代	ヨーロッパ古代炉	→	
	AD.14～15世紀	ヨーロッパ ライン流域	水車送風高炉（溶融銑鉄法）	
			伝る	
	16	イギリス・フランス スイス	← 発達し世界各地へ	
	18	ヨーロッパ	産業革命が転期	燃料木炭から石炭→コークス
			るつぼ溶解法	
			ハドル法	
	19	〃	転炉・平炉等　溶けない錬鉄、溶ける鋼 鋼の時代となる	



の連結化、コンピュータによる自動制御など製鉄技術は面目を一新し、あらゆる鉄鋼需要を満たしつつある。

えてして誤って鉄の力を拡大解釈するが、鉄の使用開始期にはどの地域でも、極めて少量の利器に用いるだけであったから、鉄の出現そのものが文化水準を短期間に飛躍的に向上させたとみるのは文化史的に不正確とするのが今日の史学の考えである。

和鉄生産（たたら）の技術史

わが国の平安時代、10～11世紀の和歌や物語に、鋳物師がたたらを踏んで鉄を溶融・鋳造することが出てくる。このたたら（踏鞴の文字をあてる）は、木炭を燃料とする鋳鉄溶融用の炉に送風するための足踏み式ふいごである。たたらふいごを用いた炉もたたら（鑪）とよばれた。わが国での鉄器の使用は弥生時代とともに始まったが、国内での製鉄は6世紀後半から福岡県西部および岡山県吉井川上流山地などで、砂鉄から木炭を燃料兼還元剤とし海綿鉄塊を生産することが始まった。9世紀後半から律令時代にかけて、地方産鉄の中央政府への貢納が行われたことは、古文献に記載されており、出土木簡で実証された。産鉄地は中国地方山地、能登半島、鹿島灘沿岸、琵琶湖北方山地、福岡県西部、熊本県北部、利根川上流丘陵地などであった。中国地方山地の8～9世紀の製鉄遺跡の炉跡は、平面形が長方形ないし長楕円形をなしている。広島県豊平町大矢遺跡（10世紀）の製鉄炉跡では、長方形炉跡の下部に、近世のたたら製鉄炉の地下構造に類似した構造、および炉の両側にふいご用台座らしい場所が認められた。これらの炉では、たたらふいごを用いて砂鉄から鋳鉄を生産したものと考えられる。

近世から大正年間まで中国地方山地で盛行していたたたら製鉄法は、地上に粘土で築いた長方形の低炉に木炭および砂鉄を互層に装入し、炉の長辺下部に配置した多数の羽口を経てふいごから炉内に送風し、木炭の燃焼熱と還元作用で製鉄する方法である。操業の進行とともに炉材自体が砂鉄と反応して鉱滓を生成する。ほぼ四日間で炉壁内面が侵食されて操業を継続でき

おわび　いろいろの事情が重なり遅延しましたことお許し下さい

会員頒布一部二〇〇円／六九ノ一八　島根県仁多郡横田町一〇三ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

なくなる。この期間を一代と称した。操業法には赤目砂鉄を用いて銑を生産する銑押法、および真砂砂鉄から鋼を生産する鋼押法の二種があった。銑押法は古くからあり、鋼押法は14世紀から始まったという。赤目砂鉄は安山岩などのケイ酸分の低い母岩中の砂鉄（磁鉄鉱、チタン鉄鉱、赤鉄鉱からなる）であり、真砂砂鉄は花崗岩など高ケイ酸質母岩からの砂鉄である。銑とは炭素量が3％以上の鉄、すなわち鋳鉄（融点1,150度C）のことである。銑押法では、生成する溶融銑を炉体短辺下部に設けた湯地穴から流出させ、砂床で円盤状に凝固させ、小割りして製品とした。製品は生鉄とよばれ、鋳物原料として出荷された。鋼は炭素量1％前後の鋼（融点1,450度C）である。鋼押法では炉底に鋼塊が生成してくる。一代の終期に炉体を崩し、鋼塊を引き出しそのまま冷却するか、あるいは鉄池とよばれる池に投入して急冷する。冷却した鋼塊は銅場（銅は鋳鉄製の重錘）で破砕し、鋼作場で鉱滓や木炭屑を除き、破面、色沢、展延性によって品質を選別して製品とした。

銑を含まない上質部分が造鋼とよばれ、日本刀など刃物の刃部の材料となった。造鋼は玉鋼ともよばれ、リン、硫黄などの不純物を含まない点で優れた鋼材であった。上質部分以外の鋼や銑は、大鍛冶場において炭素量0.2％以下の包丁鉄に加工した。それにはまず左下場の火床において差しふいご（手押し式箱型ふいご）から送風する木炭火床で半溶融状にまで強熱し、炭素分を0.3～1％程度まで酸化、除去して左下鉄をつくり、続いて本場において火床で加熱、脱炭する作業と鍛打して鉱滓を絞り出す作業を繰り返し、厚さ1cm程度の短冊状の包丁鉄を製造した。包丁鉄（明治政府の統計では錬鉄という）は鍛接性がよく、農・工具や釘の材料となった。たたら炉は大約、一代当り砂鉄13トン、木炭15トンを用いて3.5トンの鉄を生産した。鉄の収率は60％程度で、鉱滓への損失が多かった。最盛期（1,890）には中国山地に230基ものたたら炉があり、その産鉄量は年間17,000トンに達した。

たたら炉は古くは野外に設けられ野だたらとよばれた。17世紀初頭から高殿とよばれる大型建家の中に設けられるようになった。高殿の中央の炉の位置の地下には排水、防湿、断熱の目的で、床釣とよばれる地下構造が設けられた。送風装置はたたらふいごのほかに、時代、地方によって差しふいごも用いられた。17世紀末にたたらふいごを改良した天秤ふいごが発明され、普及した。高殿内には作業長の村下以下の炭坂、炭焚、番子などの作業員の控所、原料置場が配置された。高殿を中心に元小屋（管理事務所）、米倉、長屋（作業員住宅）、鉄池、金屋子神社などで製鉄集落が構成され、山内とよばれた。山内を経営したのは、木炭供給用の広大な山林を所有する鉄師であった。

原料の砂鉄は、砂鉄を含んだ風化岩盤を掘り崩し、水流に沿って直列に設けた多数の沈澱池中で土砂を洗い流し、砂鉄を池底中に残すという一種の比重選鉱法によって採取された。この作業は鉄穴流しとよばれ、冬季、農家の副業であった。この見解は

【俵国一著「古来の砂鉄精錬法」（一九三三・丸善）
▽前田六郎著『和鋼・和鉄』（一九四三・河出書房）】

から

ひとつ灯して　　簸の上短歌会

いっぽんの蝋燭の如く身を燃やしスラムの聖女神に召さるる　永井弥生
潮騒の引きたるごとき送り盆をひとつ灯して今年はひとり　〃
返り咲く紫ふかき杜若　ぬくき陽に舞ふ黄の蝶ふたつ　〃
韓国の国花とぞ聞く日本と変わらぬ槿のいまさかりなり　野村節子
流暢な日本語に話す韓国のバスのガイドは林英美さん　〃
唯ひとつ覚へし言葉　韓国の「こんにちは」とふアンニョンハセオ　〃
年ごとにいのちは耳より衰へてもののあいろも弱り来し妻　常盤はるまさ
寝たきりに弱れる妻を撫でやれば言はざる痛み掌につたはりて　〃
朝ごとに声かけ漫ろあてがふに妻のいらへはうつろに弱し　〃
ありし日の夫が植林に通ひたる奥出雲高原を今汽車が行く　岡田時子
母逝きて八十年経ちし苔深き墓の木立は蝉しぐれのみ　〃
海に行きて帰りし子らは日焼けせし手足伸ばしていつしか眠りぬ　安部夕波

斐の上川柳十月の句

選挙車に負けじと吠える犬二匹　田中有樹絵
不利とみて開き直った未熟者　松浦亜以
気持ちだけはやり体がついてこぬ　藤原のぼる
医者に行く元気があっていいじゃない　金阪柳月
台風に名月吹かれだんご喰う　田部都
近頃はものも言えぬとよくしゃべり　児玉哲呂
困ったら仏に知恵を借りに行く　藤原千代子
ゲートボールバッタも仲間飛んでくる　児玉えみ
老いて未だ旅プランにはハイ賛成　安部正子
サンマ焼く臭い流れて猫帰る　足立玉恵
ダイアナ妃嵐が花を持ってゆき　渡部ミツコ
栗に柿手間をかけての味のよさ　よし子
孫抱いた重みにばばは老いを知る　真綿
気遣いもほど程にして老い重ね　松浦久寿
　　田中芳春

奥出雲

題字　糸原風亭書

第272号（11月号）
1997.11.1（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

奥出雲の近世企業たたらの発達過程②

―自然と生活、および古文書の社会科学的考察に基づいて―

序章　Ⅱ　ルネッサンス

わが国の近世（16～19世紀＝江戸幕府時代）をふりかえるにあたって、ヨーロッパのこの時代に一通り理解を深めておきたい。（2・3頁年表と対照して）

日本史では**中世**＝鎌倉～戦国時代、**近世**＝江戸時代、**近代**＝明治～大平洋戦争敗戦、**現代**と区切るが、ヨーロッパでは**中世**に続くのが**近代**であって、即ち14世紀半ば1337年（尊氏が将軍となる）から15世紀半ば1453年（応仁の大乱のはじまる10年前将軍義政）の間の百年戦争が終結したころから、中世が終り近代となる。ヨーロッパの中世の12・13世紀（日本の平安時代後期から鎌倉時代）から始まったヨーロッパの社会の変質は、封建社会の解体と近代化を、15世紀以後急に展開する。（日本の12世紀末は平清盛が宋と貿易し、海上交通の地盤を固め、兵庫（今の神戸）の港を栄えさせ、厳島神社を創建するほどであったが平家滅亡でこの流れはとまる）

ヨーロッパの近代化をつげる最初の重要な事象は、①ルネッサンス（文芸復興）②ヨーロッパの拡大（地理上の発見）、③宗教改革とみられている。ついで産業革命の到来である。これは18世紀後半（日本の宝暦年間）イギリスに於いて芽生えた機械の使用による生産方法の根本的変革で、技術上の変革から社会的変革（資本主義の確立）へと怒濤の如く時代が移る。（2・3頁年表参照）

①②③の事象はいずれにも新しい精神が強く流れている。①ルネッサンスにおいては、いままでの神中心的な考え方にたいして、人間中心的な、人間の個性とその自覚がはっきりみられるし、②地理上の発見・大航海には、未知なるものを求めて進む冒険的な人間の熱情、古い殻を破って新しい天地を求める自由な精神がうかがえるし、また③宗教改革には、堕落腐敗したカトリック教会にたいする批判精神、純粋な信仰で生きようとする新しい宗教的熱情がたぎっている。その意味では、これら3つの運動は、いずれも新しい精神に立脚し、古いものを打破しようとする改革的な性格をもっている。

ルネッサンスとは

再生・復興を意味し、最初は美術史上の用語であったが、今日ではひろく14世紀頃のイタリア人文主義からはじまり、他のヨーロッパ諸国にも波及した文化全体の復古革新の運動を意味している。ルネッサンスは単なる古典古代の〝文芸復興〟だけではなく、人間活動全般にわたる革新運動であり、文化だけでなく、政治・社会・宗教などでも革新の道をひらいたもので、近代ヨーロッパの形成に、宗教改革運動や地理上の発見とともに、大きな役割を果たした。その特色は一言でいえば、〝自然と人間の発見〟である。そこには新しい人間観、世界観がみられることである。その特色は

①現実の肯定　封建社会の解体と都市の発展などの社会的機運を背景に、封建的伝統によって束縛されない自由・独立の精神と合理的精神があらわれた。とくに新興都市市民のあいだでは、自然や人間を神中心的な見解から解放して、現実をあるがままに肯定し直視し、人間を人間として理解し、人間独自の価値を承認する、人間中心的な見解が強くなった。

②個性の尊重と自覚　この現実的人間の肯定は、神の模造物としての人間というキリスト教的価値基準の崩壊を意味する。そこからなにものにも拘束されない個人、自覚した我、精神的存在としての個性をもつ行動的な個人という思想が展開された。〝万能の天才〟

③人間の表現　この個性の尊重が、人間の心の動きや感情などへの深い関心をもたらした。たとえば文学における性格や心理の描写、絵画における肉体美の表現としてあらわれた。ルネッサンス絵画の題材としての聖母マリアは、神の子の母、天国の女王としてではなく、地上の一婦人としての理想像として表現される。**ボッティチェリ**は聖母マリアを女性美の典型として描いた。それはフロレンスやヴェニスの家庭や街頭に見出される市井の女性の姿である。こうして美の世界も信仰の世界から解放されたのである。

④世界市民主義　自我の肯定は個人主義の発達をうながした。その個人主義は、また〝わが故郷は世界である〟という民族や地域社会をこえて、人間と人間とが人文主義的教養によって結ばれようとする世界市民（コスモポリタン）の思想とつながる。

⑤自然の発見と認識　自然は神によって作られ、人間をのせる台座にすぎないと考えられていたキリスト教的自然観に対して、自然それ自体のもつあるが

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲の近世企業たたらの発達過程②・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

		時代区分 ヨーロッパ	時代区分 日本	
		中世	古代	（平安時代）
			中世	鎌倉時代
	1338 百年戦争始まる　羅針盤発明			南北朝時代 室町時代
	1453 全　終わる　火薬の発明 活版印刷術 フランスへ影響	近代		応仁の乱
	地中海時代から大西洋時代へ（イタリヤの衰退） 1517 宗教改革　ルター（ドイツ）　スペインへ影響 イギリスのネルッサンスの黄金時代（シェークスピア） マゼランの世界一周			戦国時代 1543ポルトガル人日本へ　鉄砲伝来
17	近代科学と技術の成立		近世	江戸時代
18	産業革命へ（日本の宝暦年間ごろから）			宝暦年間　蘭学が入る
19				
20			近代	明治維新（近代科学技術入り　20世紀初産業革命達成）
21			現代	第２次世界大戦敗戦

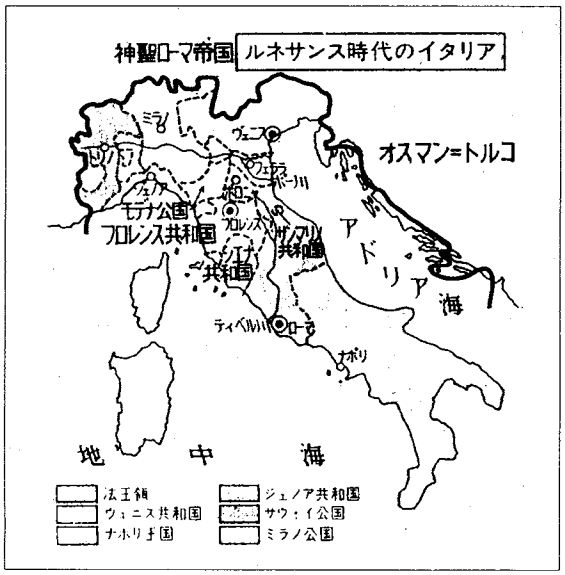
ままの美しさが表現されるようになった。岩石や樹木そのものの美しさをみとめ、自然美をたたえて登山のための登山を試みたペトラルカのヴァントゥール山登山は、このありのままの自然に対する新しい感覚のあらわれである。さらにこの感覚は自然の認識にまですすむ。それはあるがままの感覚的な自然の背後に、あるべき自然の姿、法則的な自然を見出すようになる。絵画における遠近法、肉体描写における解剖学の研究はその例であり、この自然の認識が、近代自然科学の出発点となった。

堅い文章となったが、日本の11～13世紀の文学、絵画・詩歌・思想を思い出しても、ヨーロッパとは大きい距離がある。500年以上の遅れを感ずる。さらに具体的にみることにしよう。

ルネッサンス発祥はイタリア

ルネッサンスは、イタリアで最も早く（14世紀頃から16世紀頃まで）しかも最もはなばなしく展開した。その理由としては次の諸点が考えられる。

①イタリア諸都市の発展　ヴェニス・ジェノアなどの沿岸都市



世紀	イタリヤ	ヨーロッパ
11	東方貿易	十字軍ヨーロッパ全土からエルサレムへ (キリスト教とイスラム教の抗争) 1091 第①回遠征
12	〃	② 〃 ③ 〃 ④ 〃 ⑤ 〃
13		1254 ⑥ 失敗

(イタリア)

	中心地	建築家	彫刻家	画家
14世紀	フロレンス出身の人文主義者 タンテ・ペトラルカ・ボッカチオ			チマフエ ジョットー
15	フロレンス	フルネレスキ フラマンテ	ギヘルティ ドナテルロ フルネレスキ	マサッチョ ギルランダイヨ フラ=アンジェリコ ホッティチェリ ヴェロッキョ レオナルド=ダ=ヴィンチ
16	ローマ ヴェニス	ミケランジェロ 聖ピーター寺院	ミケランジェロ 最後の審判	ミケランジェロ ラファエロ ティティアン ティントレット ジョルジョーネ ウェロネーゼ
17	(イタリアの衰退)			

は、11～12世紀頃（平安時代中後期）から東方貿易に従事し、とくに十字軍時代には遠征の通路、兵員・資材・船舶の供給地となり、十字軍以後もますます東方貿易によって経済的に発展した。また、フロレンス（フィレンツェ）・ミラノなどの内陸都市では毛織物工業・絹織物工業が発達した。それにともなって富裕市民を中心とする**自治権獲得運動などの政治活動が活発**になった。イタリア＝ルネッサンスの支持層は主としてこれらの市民層であった。

②古典文化の流入　この東方貿易の発展にともなって、ギリシア・ローマの古典文化を保持していたイスラム世界やビザンティン（東ローマ）帝国から古典古代の学問が流入した。ことにビザンティン帝国の滅亡（1453）後には、**タリソロラス**（1355～1415）らをはじめビザンティンの学者が多くイタリアに移住して古典研究が盛んになり、またフロレンスの**メディチ家**などの都市支配者、貴族、富裕市民、あるいはローマ法王などが、学者や芸術家を保護・奨励した。

③古代ローマへの関心　イタリアには古代ローマ帝国の遺跡や遺物が多く残存し、国民的過去としての古代ローマへの関心がとくに強かった。

④人材の招致　各都市国家内の平民と貴族の争い、都市国家相互間の争いなど当時のイタリア国内の内部抗争にあたり、各都市が競って有能な人物を招き、それが個性の伸長を生みだした。

NHKテレビの大河ドラマでここ数年は日本の中世を舞台としたものであったが、人間と戦いの場面がすべてで、人間性・科学思想に関する背景は全く描かれていなかった。しかしヨーロッパでは、わが国より狭いイタリヤが、その地理的位置と国民性から、早くから新しい時代への胎動が起こった理由は、以上のようなことからであった。

人間性の追求・新しい人間観の確立としてあらわれるのは、3頁の表の人物で、14世紀（日本の南北朝対立の後醍醐天皇から将軍足利義満の時代、横田庄に発した国内を二分すると思われた明徳の乱の終り）である。**ダンテ・ペトラル・ボッカチオ**である。

15世紀（応仁の乱ころ）末に

は、建築家・彫刻家のミケランジェロの「ダヴィデ」「モーゼ」の彫刻の傑作がある。ついで（藤ケ瀬築城・尼子氏抬頭のころ）「最後の晩餐」「モナ＝リザ」の著名な傑作を残したレオナルド＝ダ＝ヴィンチがいる。

これらの傑作を頭に浮かべて頂くと明らかであるが、いずれも人間尊重の新しい思想を芽生えさせたのである。だがこれらも都市貴族や一部の富豪の独占となって、貴族的な性格を強く帯びていった。のちに述べるアメリカ大陸などの地理上の発見の結果、商業の中心が地中海世界から大西洋沿岸へ移りはじめると、イタリアの経済的繁栄は打撃をうけ衰退しはじめ、17世紀（江戸時代前期）には没落していった。

この波はイタリアからネーデルランド（今日のベルギーとオランダ）に波及し、やや遅くドイツに伝った。特に宗教的・学問的分野に強く影響を与え、16世紀初頭のマルティン＝ルターの宗教改革としてあらわれた。ルネッサンスは世俗的な面で宗教改革として近代精神の覚醒をもたらした。両者はいずれも強い個人主義思想に支えられ、ルネッサンスは個人の解放と自覚、後者も教会よりも個人の信仰が重視され、これが近代の個人主義の形成に寄与し、科学の発達、大発見へと結びつき、大陸発見へと向った。わが国の歴史の流れと明らかに違いがある。13世紀以上の差がある。

フランスには15世紀末から流れが寄せ、イギリスでは16世紀後半エリザベス女帝時代に、シェークスピアを先頭とするルネッサンス黄金時代が出現した。

科学・技術の発展

古代ギリシャ（紀元前3世紀のアルキメデスら）の科学精神もルネッサンスによって流入し、実験と観察による研究がとり入れられ、科学と技術の発展に大きく寄与した。「鉱山学」のアグリコラ、解剖学の祖ヴェサリウス（いずれもドイツ）が出現した。

これらの中で三大発明といわれるのは、火薬・羅針盤・活版印刷技術である。

科学の発達はコペルニクス（1473～1543）の地動説となり、ガリレイ（1564～1642）は振子の法則、物体落下の法則を明らかにし、天体望遠鏡を実用化し、衛星を発見してコペルニクスの地動説を不動のものとした。地球球体説は地図であらわされる世界となり、コロンブスの新大陸発見となる。15世紀（応仁の乱ごろ）には溶鉱炉・ポンプ、16世紀には（尼子時代の天文年間）水力利用の機械や小銃が実用化された。

高温を生み出す水力水車は、鉄鉱石を半溶融のルッペから、銑生産へと進めた溶鉱炉の進歩へと進んだ。わが国のたたら製鉄炉と似た状況から、すでに戦国末期には一躍して高炉へと進み、わが国のたたら製鉄法をはるかに引き離している。

こうした中で、マルコ＝ポーロの「東方見聞録」が生まれ（1299）、コロンブスのアメリカ発見（1492）、ポルトガル人の日本への来航（1543天文20）となるのである。

（本号は堀米康三の諸著を参考とし引用も加えて記述した）

当誌は常に奥出雲をわが国の歴史の中に位置づけることを念頭においているつもりである。窪田蔵郎の「鉄の来た道」の登載もシルクロードと日本への道を考える意味で寄稿願ったものである。（横田史談会　高橋一郎）

（九月末から二週間余りの体調くずしと、予定した仕事の負担とを考えて、本紙の発行にしわよせしたことを深くおわび致します。復調しましたので軌道にのせたいと思います。）

斐の上川柳十一月の句

いつやるかみんな手帳を出してみる　児玉哲呂
過疎の里とり手ない柿鈴なりに　松浦久寿
洗濯をするか捨てるか迷う服　金阪柳月
朝冷えてもみじますます色を出し　足立玉恵
宅急便開かぬうちにゆず香　児玉えみ
色失せた菊をたむけて祈る朝　真綿よし子
毎日が事件だらけの地球上　田部都
神経痛あすは霜だと痛さ知る　渡部ミツコ
髭剃って一日だけの若返り　石原冬明
心がけ良いと自分でほめている　藤原千代子
執着を示さずいとも無表情　松浦亜以
足元を見られて株は売り出され　藤原のぼる
行中の除雪を願い手を合わす　田中有樹絵
ゆっくりと歩いたようで早や八十路　安部正子
何しても未だまだ負けぬ空元気　田中芳春

横田三十三番札所めぐり⑰

第21番　原口・梨峠（なしがたわ）　道知庵

人々の尋（たず）ねしちかひちりの外（そと）
道しるくゆく谷川の水



（写真　横田史談会　佐世川徳雄）

会員頒布一部二〇〇円／六九ノ一八　島根県仁多郡横田町一、〇六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第273号（12月号）
1997.12.6（M129.T82.S71）
奥出雲編集集団©
横田史談会

奥出雲の近世企業たたらの発達過程③

—自然と生活、および古文書の社会科学的考察に基づいて—

序章　Ⅲ　産業革命

産業革命とは

過去において、人類の文明史を画期した大きな事件は二つあった。一つは、人類が紀元前8,000年ごろにメソポタミア地方で農業を始めた「農業革命」、もう一つは18世紀イギリスで開始された「産業革命」である。**現在の産業革命**がつくりだした物質文明は、過去における二つの大変革に匹敵するような大きな変革に直面している。これを人類史における「第三の波」とよんでいるが、人によっては「第二の産業革命」とよぶこともある。

人類が道具を発明し使用するようになってから18世紀の中頃までは、だいたい生産は道具—それは手の延長とも考えられる——による手工業的なものであった。ところが18世紀（3頁年表参照）中頃からまずイギリスに始まった機械とその使用は、人類のこの長く続いた生産方法を根本的に変革するに至った。それにともなっておこった社会的変化（産業資本主義の確立、階級対立の明確化、社会問題の発生）もこれに加えて考えるようになった。

産業革命の遠因は、16世紀中頃以降のヨーロッパの森林資源の枯渇・欠乏・薪炭不足に伴う深刻なエネルギー危機であり、最も深刻なのがイギリスであった。克服として代替エネルギーとして石炭を開発し、17世紀半には、全世界の生産量のほぼ85%を占めていた。

ところが炭坑の排水、炭坑からの消費地への輸送問題、鉄鉱石溶解における石炭の利用の技術開発が急となった。これらを解決するなかで産業革命への条件が整備された。排水用のポンプの考案、蒸気機関の発明とこれがワットの完成で動力機の発明（1781）へと進んだ。

だが石炭輸送に絡んで登場したのが動力エネルギー危機であった。動力は畜力とくに馬力の供給に依存したが、家畜の増加は飼料の増産を引きおこし、飼料作物が盛んとなると、家畜と人間が食糧と土地をめぐって競合し、家畜の増加が人間の生存を脅かし始めた。18世紀のイギリスは畜力増加の社会的限界が危機的状況としてあらわれた。畜力の節約という問題と同時にこれにかわる効率的な動力をつくり出すことが、イギリス最大の社会問題となった。

そのため車輌の改良、道路の改修、運河の建設といった方面への投資が促進されたが、最終的には新しい動力の出現に向かった。それが1789年のワットの動力機である。それは水力・風力・畜力・人など農業社会の基本動力を凌駕して動力革命をもたらし、産業革命がまさに画期的な技術的基礎を確立した。

産業革命は農業文明社会から工業文明社会への移行を意味するから「工業化」という。イギリスからヨーロッパ各地へ、アメリカ、日本、ロシアへと拡大し、20世紀後半には、中国・韓国・東南アジア・中近東・ラテンアメリカ・アフリカに広がりつつある。それはエネルギーを人間や動物の筋力や、風力・水力といった自然の力に頼っていた。生活に必要な炊事や暖房、生産のための熱エネルギーは、主として薪炭に依存していた。

工業化は、エネルギーの生物的資源への依存から、石炭やガス・石油といった一度消費してしまえば、再生不可能な化石燃料へ依存へと進んだ。この背景には—新しいエネルギー体系への移行とその経済過程への適用——科学技術の進歩があった。

19世紀末からの新しい動力源—石油・電気による時代を第2次産業革命と呼んでいる。

イギリスの産業革命

序章を終えて本章に入ってからの理解のために、大いそぎでイギリスのこの歴史を延べておくと。（3頁年表及び10・11月号年表参照して）　イギリスは18世紀（1700～1800年。元禄末年—正徳・享保…宝暦・明和・安永・天明・寛政年間。将軍綱吉～吉宗・家重・家治）の中頃①フランスを破って世界の海上権を握り、ヨーロッパ第一の商業国として豊かであった。　②農村を中心とする毛織物工業が国民的規模でひろまっており、③中頃から農業経営が資本による機械化により大経営となり、自営農の多くが没落して賃金労働者となり、産業革命に必要な豊富な労働力の提供者となった。④植民帝国としてのイギリスは、商品の消化力が大きく、生産力の拡大が求められたこと。　⑤国内（大ブリテン島）に石炭や鉄などの工業資源に恵まれていたこと　⑥科学者ベーコン以来の諸科学の発達によって発明や技術の改良が盛んに行われていたこと、などがイギリスを発祥の地・中心へと育てたのである。

農業革命　技術の改良も早く条播機の開発、輪作農法による

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲の近世企業たたらの発達過程③・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

生産の倍加、家畜、飼料の増産や品種改良、科学肥料の発達も早かった。こうしたことから自作農民の多くは都市へ流入して賃金労働者となり、産業改革による工場生産の推進に役立った。

木綿工業　最も主要な工業は羊毛工業であったが、地理上の発見以後東インド会社がインド製の綿織物を本国イギリスにもたらすようになると、綿織物の需要が増大し始め、国内に木綿工業が発達した。この工業から産業革命がはじまった。それは新興産業で、ふるい慣習にとらわれず新しい技術が採用でき、インド・北アメリカなどから原綿（綿花）を輸入することができ、綿布の需要も年々増大したことによったのである。

四大発明　（紡績・織布機の発明）18世紀半ばから手織から機械織に入り、水力を利用するなど、4段階の発明が、30年の間に行われ生産の拡大をみた。

蒸気機関の発明　いままで動力としては、人力・馬力・風力（風車）・などが用いられていたが、1705年**ニューコメン**が**蒸気機関**を発明して、炭坑の排水ポンプに利用した。これを改良して蒸気機関を完成したのが**ワット**である（1765）。蒸気機関はやがて力織機、製鉄法、交通機関にも利用されるようになり、生産、運輸に飛躍的発展をもたらした。それだけでなく、蒸気機関の普及によって、工場立地の制約（いままでは水流にそって工場が設けられていた）が少なくなり、石炭や鉄の産地（イギリスではこの両者が比較的接近していた）の近くに、大規模な工場が建設されるようになった。こうして蒸気力はのち電力が動力源として登場するまで、産業や交通の原動力として大きな影響をもつことになった。

製鉄・石炭工業の発展　木綿工場から始まった産業革命は、機械の使用や蒸気機関普及によって機械そのものをつくる重工業の発展をうながしたが、1735年**ダービー**が**コークス製鉄法**を発明して銑鉄生産も急速に増大し、現代製鉄法の基礎がつくられた。さらに**スミートン**が送風管を発明し、さらにコート（1740～1800）が反射炉を用いて銑鉄の不純物をとりのぞく攪拌製法（パドル法）を発明し、またローラー圧延法などによって錬鉄とその加工が行われ、製鉄業は飛躍的に発展した。なお19世紀後半になってベッセマー法、ジーメンス＝マルタン法、トマス法などの発明によって鋼鉄の大量生産が可能になった。石炭は17世紀初めから製鉄に用いられるようになったが、採炭に蒸気機関が利用されるようになり、排水や換気が便利になって出炭高も飛躍的に増大した。

交通・通信の革命　このような工業生産の発展は交通手段の革命をひきおこした。原料や製品を遠く輸送する必要から交通上の改善がうながされた。すでに18世紀末から道路の改修や運河の開発が行われていたが、ここにも蒸気機関が利用されて革命的発展をみることになった。すなわち、1814年**スティーヴンスン**（1781～1848）が**蒸気機関車**を発明し、1825年から実用化され、30年には木綿工業の中心地**マンチェスター**と外港の**リヴァプール**間に、鉄道が開通した。また水上交通の面でも、1835年アメリカ人**フルトン**（1765～1815）が**蒸気船**を建造してハドソン川をさかのぼった。1819年にサヴァンナ号が初めて大西洋横断に成功し（所要時間29.5日）、19世紀中頃からは帆船にかわって蒸気船が広く用いられるようになった。通信部門では1835年アメリカ人**モース**（1791～1872）（モールス）が電信機を発明し、1839年には郵便制度が実施され、1851年に海底電信が設けられた。

各国に於ける産業革命

フランス——18世紀末、フランス革命によって封建制が廃止され、資本主義への道も開かれたが、資本の蓄積が十分でなく、小農民層が圧倒的に多かった。フランスでは工業より農業が優位をしめ、また鉄・石炭などの地下資源も乏しかったので、19世紀1825年イギリスが機械輸出の禁止を解くまでは産業革命は本格化しなかった。

ドイツ——1840年頃から産業革命が本格化し、**ロシア**——では1861年の農奴解放以来、産業革命は急速化した。**アメリカ**——では1830年頃から本格化し、豊かな資源と労働力の不足が機械化的農業、工業を発展させた。南北戦争（1861～1865）によって国内市場が統一され、産業革命は完成した。

日本の産業革命

鉱工業や運輸業に機械が導入されることにより、資本家と賃金労働者からなる資本主義的な生産様式が発展し、小規模生産を駆逐して、日本経済全体の中心を占めるようになった画期。機械の導入そのものは、幕末の幕藩営工業においてもみられたが、民間の綿糸紡績業や鉱山業などに次々と機械が導入されたのは、1886年（明治19）の銀本位制移行を契機とする企業設立ブームにおいてであり、このときに日本産業革命が始まったとみる。

日清戦争の賠償金で急速に重工業が発達した。終了時点については、機械制綿糸紡績業の確立（1897年に綿糸の輸出量が輸入量を上回ったことを指標とする）をもって終了とみる説もあるが、日露戦争（1904～05）を経て、民間の鉄鋼業や機械工業が発展し始め、織物業に力織機が導入されて手織機を圧倒し始める1907年（明治40）ころをいちおうの終了時点とみるのが通説である。

世紀	紀元	イギリス	ほか	日本
18	1709	●コークス製造法とコークス製鉄法発明		1693 奥出雲に天秤吹子
	10	蒸気機関発明 ―― 燃料革命（石炭へ）自然科学の発達		1744 神田に天文台設置
	60	**イギリスで産業革命始まる** ――		宝暦年間（将軍吉宗）
				奥出雲で鎚が割れるように
	64	①紡績機械発明		
	68	②水力紡績機の発明		
	69	ワット蒸気機関完成 ← 動力革命		
	79	③紡績機械の改良		
	84	●パドル製鉄法発明		
		④力織布機発明（④大発明完成）		
				74 杉田玄白ら「解体新書」
				75 長久保赤水の日本全地図
				76 平賀源内 エレキテル完成
				83 大槻玄沢「蘭学階梯」
				88 前野良沢「蘭学訳筌」
				古事記伝完成、円山応挙
19	1804	蒸気機関車発明 ― 交通革命		
	14	スチーブンソン仝上を製作 ←	**産業革命の波及**	1805 華岡青州 麻酔剤用う
			1830 フランスへ	11 天文学和訳はじめる
			40 アメリカ ドイツへ	杉田玄白「蘭学事始」
				伊能忠敬 実測図献上
				オランダ人シーボルト 日本へ
			60 ロシヤへ	48 鉛活字輸入
				57 大島高仕釜石で洋式高炉完成
				68（M19）**日本の産業革命始まる**
				1907（M40） 仝 終了

日本の産業革命は各部門毎の差が大きく、いろいろのひずみが生じたといわれる。

以上ルネッサンス・産業革命と廻り道をしたようであるが、自らを、日本を知るためには大切であると思ったからである。

わが国の封建制は19世紀末の江戸幕府が終って明治維新の到来まで続いた。今までみたように西欧では12～13世紀に芽生えた人間性の回復、自由の獲得は14～15世紀のルネッサンスで開花し産業革命へと進んだ、500年の差が生じている。

その反面芸術（絵画・彫刻）・工芸は伝統をまもる中に、心を傾注し時代の動きも投影して来た優秀さは忘れてはならない。

（横田史談会 高橋一郎）

奥出雲と毛利氏⑨

―尼子滅亡により戦国末まで―

1540天文9 三沢為幸尼子方にて安芸吉田城攻めに加わり討死。尼子経久の死。尼子退却。

41仝10 雲備の多賀山・山内・三沢など有力国人衆11氏は大内方に従う。

42仝11 大内義隆・元就とともに尼子を攻める。右の11氏は再び尼子方につく。

43仝12 尼子横田庄へ進出し、森脇家貞を総代官として代官四人を送りこみ、荘園を支配した三領家に貢納する。

尾園村は山内の所領。

45仝14 尼子晴久横田庄支配について注意書きを家貞へ。

岩屋寺院主快円の努力で焼失後の復興着々と進む。（焼いたのは尼子で横田攻め失敗により）

50仝20 大内義隆家臣陶隆房（晴賢）に攻められ死す。伊賀多気神社現在地に再興（代官 森脇家貞）

53仝22 尾園（八川）八幡宮山内によって遷宮される。

55弘治 陶晴賢元就と厳島に戦い自殺する。

57 3元就の自筆状によれば、

横田庄はその勢力下にある。

58 永禄元 石見銀山を尼子が攻め毛利敗れる。三沢尼子方へ。（木下藤吉郎・織田信長に仕える）

59 全2 三沢再び毛利方に。

全3 毛利、銀山を攻める。三沢、毛利方へ請書を出して忠誠を誓う。尼子の勢力郡内から一掃。

尼子晴久（詮久）死し子義久継ぐ。

全4 元就・隆元父子正親町天皇の即位費用を献ずる。

全5 三沢、毛利方で松江洗合いへ。のち白鹿城陥ちる。これより9年まで尼子毛利両氏の争い続く。

65 全8 御所より綸旨が元就に届く。毛利・尼子の争いで横田庄につき、三沢の貢納の遅退を諭させられる。

66 全の春、富田城開城。尼子時代80年が終る。天野隆重が城代として入る。

68 全11 吉川（富田）元秋（元就の5男）17才で富田城に入る。（妻は三沢為虎の妹）

69 全12 山中鹿介尼子勝久（新宮党の遺児）をたて出雲に攻め入る。毛利、三沢に人質を出させる。

70 元亀元 元就にかわって長子隆元は三沢を経て富田へ向い、布部合戦にて尼子軍を敗る。三沢方死者多し。元就病重く、守備兵を残して隆元帰城する。

75 天正3 三沢為清、毛利への忠誠を誓った起請文を吉川元春へ送る。

2 元就死す。

全5 三沢為清　岩屋寺掟法度を定める。

78 全6 三沢為清　岩屋寺本堂修覆にあたり願文を納める。

全7 毛利輝元、吉川元春をして横田庄下地代官三沢の貢納について諭させる。（御所の代官は庭田重保——在京都）

為虎毛利輝元に誓紙を届ける。

1580 天正8 為虎ふたたび起請文を輝元に届ける。

9 秀吉鳥取城を攻める。

10 備中高松城の水攻め。為虎毛利方で。織田信長の死により秘して秀吉和睦し帰る。

12 輝元、山内・三吉・久城。三沢の4氏に人質を出させる。

13 為虎　亀嵩城保持を願って起請文（神仏に誓って約束を守る）を輝元へ。富田城主吉川元秋（34才）死し、継弟元康（のち支藩厚狭毛利の祖）が入る。

豊臣秀吉関白となる。

15 吉川広家　雲伯を領し富田に入る。

16 吉川広家　九州へ攻め入る。為虎これに加わる。

17 三沢為清死す。

三沢為虎　安芸広島へ移る。（樋口小池のち杠と改姓は国境まで送るという）馬木氏も元貞が伯父にともなわれ安芸へ。祖父と父は病弱などにより馬木に残り生涯を終える。

18 秀吉の北条の小田原城攻めに毛利輝元加わり、三沢為虎これに従う。

90 天正19 文禄元 毛利輝元安芸出雲ほか8カ国を領す。吉川広家雲伯各半国と隠岐あわせて11万石をもち富田城に入る。仁多郡は輝元の直轄地。

樋口の大催小池氏、毛利より村役人を仰せつかる。

この号ではその後の奥出雲と毛利氏との関係を年表風に抜き書きした。戦国武将の間での政略結婚もあり（本紙既刊号に詳述、昨年11月号のローカル紙に系図を掲載）、また有力国人衆（三沢、山内・三吉ら）には人質を出させている。また事ある毎に起請文（神仏に誓って）や誓文を出させて陣営内への引き留めをしている。

三沢氏は仁多郡内で1万石を領していたが、萩城に移ってからも厚狭郡で1万石を宛行われる好遇をうけている。毛利一族10人についでの石高である。やがて厚狭郡に分家した毛利支藩長府藩の2番家老となり幕末まで仕えた。次号で三沢氏が去ったのちの郡内への毛利の家臣の配置をのべてこの連載を終わる。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳十二月の句

見えを切るだけで円安止まらない　藤原のぼる
真白な山は雲間に顔を出し　横山まこと
雪しんしん黙ってめくる政治面　児玉哲呂
忘年会皿盛りとりて酒をくみ　足立玉恵
寿命とは順に行かないはかなさよ　安部正子
ひ孫抱き腰の痛さを嬉しがり　松浦久寿
縁のない株だけれども腹が立つ　田中有樹絵
利廻りは期待できぬとタオル呉れ　小早川古葉
嫁ぐ孫送る門出の堪え涙　高木凡太
患者さん今日は微笑む顔を見た　田部都
何となくせかせか歩く年の暮れ　児玉えみ
世間では通らぬことを国はやり　金阪柳月
初雪に風のキッスが身にしみる　渡部ミツコ
軒先の柿もあめ色おいしそう　真綿よし子
豊作の柿に鳥もやって来ぬ　藤原千代子
七五三終えてばあさんばくらとし　松浦亜以
数多の恩報い足らないままに老い　石原冬明
来る年に望みをかけて除夜の鐘　田中芳春

会員頒布一部二〇〇円／〒六九一-一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇-九-一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四-五二-〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第274・5号(1.2月合併号)
1998.2.7(M131.T57.S73)
奥出雲編集団
横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲と毛利氏⑩

—毛利支配下の時代

毛利家臣の配置

1598 元正19 文禄元 吉川広家、能義・意宇両郡を領して(11万石)富田へ。その他の出雲は輝元の直轄地で、そこに配置した家臣は主として長門・周防の旧大内氏系のものであった。

奥出雲の諸将（国人衆）は長門に移ったがその待遇は、

三　沢　一〇、〇〇〇石(厚狭郡のほとんど)
宍　道　六、〇〇〇
三刀屋　一、八〇〇
赤　名　一、六〇〇
佐　世　一、四〇〇
多　賀　八七三

であった。

毛利家の「八ヶ国分限帳」によると、天正末年の総国検地によるよると仁多郡の知行高は、

◎石高　石斗升合　10,666,485
◎蔵入　石　474,000
◎宍戸元続　1,576,101
◎家臣50数名　8,616,384

であった。家臣をみると

冷泉民部　亀嵩　3,585石

毛利の直臣でなく、大内系の外様家臣で、厚狭郡内を領していたが、旧大内系家臣の出雲各地への配置換えによって移住した。

冷泉民部の一所衆50人で　1,874石
(郡内の西部を中心に。氏名略)

杉原将右ヱ門高広　横田　1,409石

祖式源吉宗安　下横田　589石

総安寺の開創

馬来　馬木若干

杉原は備後の神辺から配置替えになった。

1500 全5 98 全3 秀吉の朝鮮出兵に輝元参加。

97 慶長2 秀吉の朝鮮再出兵。冷泉民部討死。墓は亀嵩にあり。

秀吉歿す。

関ヶ原の戦　西軍石田三成敗れ、徳川氏の時代へ。

毛利氏防長2国29万8,480石3合2斗3合へ国替えとなる。

毛利支藩

長府藩　36,200石

元就の四男吉川秀元
(元清の次子秀元、養子として)

三沢為虎　家老に

岩国藩　30,000石余

元就の次男吉川元春の子広家

1612 慶長17 堀尾氏は斐伊川水系での砂鉄採取を禁止する。

1632 寛永9 堀尾2代忠晴によってさらに15石を加えられ岩屋寺は毛利家臣の来

91 文禄元 秀吉の朝鮮出兵に輝元参加。

92 全2 杉原広亮　晋叟寺へ寄進。

93 全3 毛利輝元　岩屋寺へ、年頭の祈念と樽料の礼を届ける。

95 全元 大馬木・小馬木両村で信原・星田氏ほかが所領を得る。馬来氏の残留者に若干宛行う。

1601 全6 堀尾吉晴　出雲・隠岐23万石余入国。

全年 堀尾　国巡りで横田へ三井野にて国境を確認し、奥地で働く農民に賞を与え、横田六日市五反田屋に泊る。のちの富田屋（田村）である。

34 全11 安部源太左ヱ門の案内で藤ヶ瀬城に登り、あり日の三沢氏の思い出を聞く。源太左ヱ門（稲田の現在の土居の中興者）は朝鮮出兵にも加わったという。

35 全12 堀尾氏の入国後、岩屋寺院主快教の訴えが入れられ、大呂村で15石を得る。

36 全13 堀尾氏は斐伊川水系での砂鉄採取を禁止する。

37 全14 忠高歿し嗣子なく亡ぶ

38 全15 この年秋、九州島原の乱。

39 全16 松平直政出雲18万6,000石、隠岐1万4,000石を領し松江に、入部する。

1633 寛永10 松江城　竹内有兵衛によって修理。天倫寺開基。小島清兵衛出雲藩塗師となる。

忠晴歿し嗣子なく33年で亡ぶ。

享極忠高入部。

岩屋寺はあらためて、馬場村15石、五反田村15石計30石の寺領を得る。

鎖国を断行し宗門改めを行う。

洪水により斐伊川東流して宍道湖に入る。

寺領30石となる。

（完）

（横田史談会　高橋一郎）

奥出雲と毛利氏⑩・奥出雲の近世企業たちの発達過程④・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

奥出雲の近世企業たたらの発達過程④

—自然と生活、および古文書の社会科学的考察に基づいて—

序　章　Ⅳ

5月松江で開催される1998年第4回国際金属歴史会議（BUMAⅣ）の準備の一つ第4回シンポジウム「多角的視点から迫る奥出雲のたたら製鉄の実像」のために用いた年表をもとに、愛好者のためにわかり易く連載をはじめたものである。

はじめに、古代中世の山間地農村の成立を考え、土地と生活の中から鉄の生産の発達を浮ばせたいと思う。

前号までで、ヨーロッパの製鉄史を追い、和鉄の製鉄史を重ねてみると、中世が考古学・文献学の上から明らかに出来ないが、わが国が科学思想発達のおくれから技術の展開がおくれ、発達が足踏みした近世（江戸時代）であることが明らかになったと思う。低温の下での日本文化の特色である伝統技術の伝承にのみ頼っていたのであると思われる。

幕末には近世企業たたらは、洋式をとり入れ高炉に向かって、本格的銑鉄生産に入ろうとしている。本紙251 253 256に述べている

が、それはそこで述べているように明治末年まで農業振興のために一時頓挫し、その後企業たたらは木炭生産の角炉へと移行しはじめたのである。

古代の横田郷から横田庄へ

『出雲風土記』の（1250余年昔）横田郷は、旧鳥上・横田と大字大谷をのぞく八川の3村の区域である。（現横田町の大馬木・小馬木と大谷は郡西部の三沢郷に含まれる）　880年前出現する石清水八幡宮横田庄は、この横田郷の中のほとんどの名田（開拓者の名をつけた区域の水田）が、横田郷の支配者（郡司系豪族）によって宮に寄進されたものと推定している。（『島根県横田町誌』参照）

横田郷のころの住人は、研究者の研究方法を当地に適用し試算すると、600人で大家族時代であるから30戸位だったと推定できる。こう述べると現在の横田盆地の出雲大川（横田川）流域の水田地帯がその生活地帯であったと思い浮べ、「鉄を造り種々の道具をつくり、それは堅い」とある出雲風土記の記述から、玉鋼はここで造られたと考えるのは誤りの第一歩であろう。

今の横田盆地は湿地帯や河川敷で、洪水のたびに氾濫している。（検地帳では江戸時代に入って、明治初期までに水田化している。『横田町誌』参照）

この地帯には多くの支流が注いでいて、それらの流れは深く、谷は切り立ったものではなく、両方の山は谷川へなだらかに傾斜している。それは8～10ヶ所あったと推定できる。3頁地図の○の集落にあたる。庄国の諸記録、豊富な横田庄の中世諸記録を綿密に検討すると、『雲陽誌』の記述につながり、さらに現在の地形・住居や寺社や遺跡につながってくる。

備中新見庄

岡山県高梁川の上流の現新見市にあった新見庄は資料での初見は、横田庄より70年遅く1184年である。京都の東寺の荘園となるのは100年後であるが、この百合文書は極めて多く、新見庄を復元できる貴重な資料が多い。荘園の歴史や経済などはここで省略して、村落の成立を推定した研究をここに述べて参考としたい（横田庄と新見庄は中世には交流が深い）。3頁の図がその一つで、これは平安時代後期（院政期）のものである。（復元図は鎌倉・室町・元禄と4時代がある）

この時代の中世の村の原型ができ上っている。図の上方の谷には百姓の名、谷の出口から下の大川までの緩傾斜地には、荘官などの領主の名がある。名の屋敷はやや小高い場所にあって、谷ぞいの湿地には、井（地図にあり）から水を引いて水田が下へ下へと棚田として開かれている。小農民は名主や領主の屋敷の下に小屋掛けして耕作に従っている。祠（ほこら）や寺もある。

これを当地方の参考として考証してみると、先に述べたように当地の集落の歴史が明らかになる。竹崎・大呂・五反田・蔵屋・原口・土橋・八川本郷（のち尾園村）・金川などで、いずれも中世に村となる。

稲作はわずかの湧水や井水を下へ下へと水田を造って落して棚田が出現している。まだ古代中世はじめは、谷川の水の利用技術の乏しい時代であるから、

こぼれ話①

気になること

ものの け姫

動画（アニメーション）映画で、自然と共存するたたら製鉄をうたっているが、本論で述べるように、この地方の住民は自然との共存を常に考え、自然の恵を享受していた。また映画に出るたたら操業は時代を考えると、外国の物語の写し絵であろう。

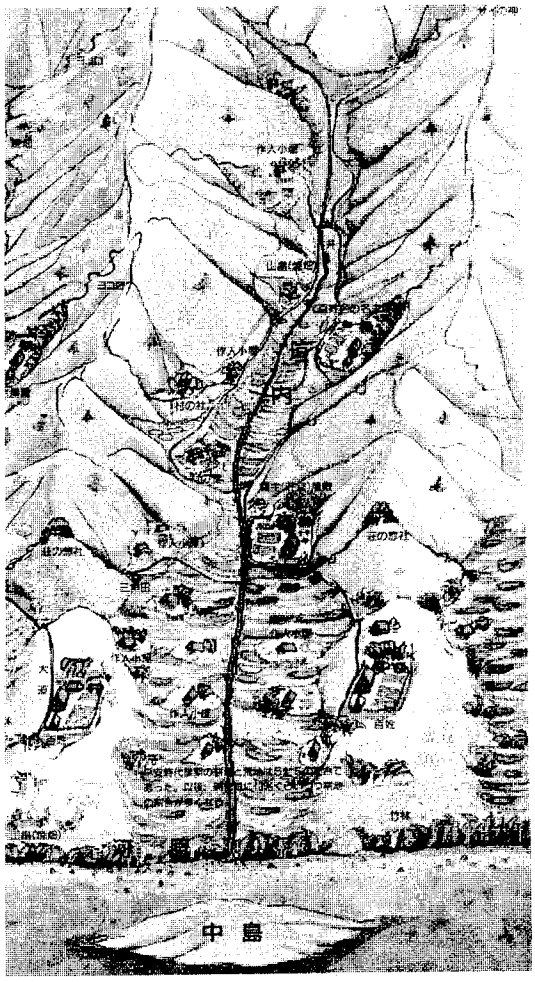
『街道を行く』（司馬遼太郎著）に

「山林を乱伐すれば雨期にはたちまち洪水がおこって田畑を流すし、水流に土砂がまじって、その水を引いている稲田が埋まってしまうこともある。」と。これも誤った見解である。

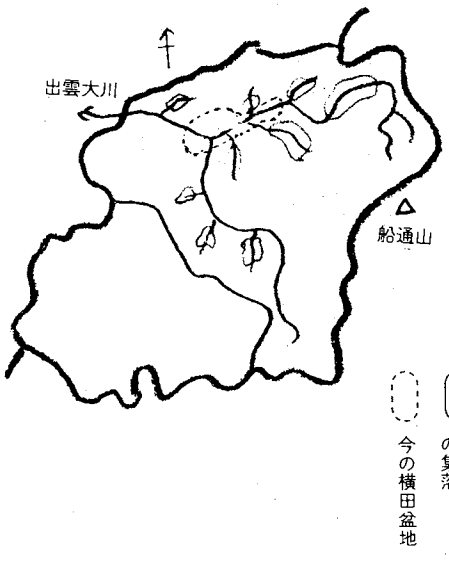
俵国一報告書の読み誤り

経済的な視点が少ない記述で、たたら＝鋼押し法＝玉鋼＝日本刀が短絡して、たたら本来の姿が埋没してしまっている。

鋼押法は当地では三日押という。銑生産量を3とすると鋼生産は3。鋼の中に鋼一、歩鋼2。銑3と歩鋼2で割鉄3強ができる。割鉄は鋼の2倍の値段。す



平安時代後期



農民が恐れたのは自然林に降る雨による洪水ではなく、旱魃による水不足であった。自然と山との共存が基本であった。

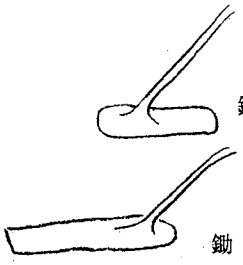
横田盆地が水田化するのは江戸時代である。中世の築城技術が地方にひろまり、藩主の石高制は、新田開発へと向う。横田盆地は次第に周辺から水田化するが、こんどは旱魃ではなく、洪水が農民の悩み、藩の苦しみとなる。江戸時代の記録『出雲私史』では洪水の記録が次第に詳細となる。

この水と開拓と水田のかかわりと農民生活は、当地方の動かすことのできない郷村成立の鉄則であった。このことを念頭に置かないと歴史判断の誤りを犯す。農具の発達から村の行事に至るまでこの原則からははずれていないことは、後で触れたい。

農具について

奈良時代を推定してみると、鍬・鋤・鎌などがある。これも律令制の下では、官人や豊農層の手中にあって、作人はこれを借りて仕事をしている。当地方の山間部では「鉄あり」とあるが、どの程度が用いられたのであろうか。鍬も鋤もその柄は木の枝を生かして製作したものである。

鍬は開墾の最初の時に用い、その後は大きい変化のある時に使っていて、水田や畑でも耕作の時は、鋤を押している。深耕でなく、肥料も用いない時代である。



図説『島根県の歴史』・『いにしえの島根』・インターネットの「たたら」

はいずれも鋼押法を誤って鋼生産であると記述してある。日刀保たたらは鋼生産が目的で、別な観点で評価すべきもの。

『和鋼風土記』

「この操業はたたらの操業を目ざしたものではなかった」と、ようやく書かれはじめた。この映画と書籍の功罪について、明らかにする時が来ている。

備中と出雲の鉄生産

江戸初期には備中がはるかに和鉄生産量が多いようである(統計上)。考えると関連することが多大である。

『鉄山必要記事』(鉄山秘書)

は著者が奥州の旅から帰ってから完成したものではないだろうか。検討を深めたい。

鋼は2割である。当地奥出雲のこの割鉄が日本の鉄需要の50%近くを充していた。(265号参照)

1603	11	12	36	38	39	59	66	72	87	91
	慶長16		寛永13	〃15	〃16	万治2	寛文6	〃12	貞享4	元禄4
江戸幕府	堀尾吉晴	松江城へ	京極忠高	松平直政			藩分封 広瀬・母里			
近世→ 次第に谷尻、河川敷に水田拡がる（洪水）										
（旧横田・八川・鳥上） 馬木										
							近世企業たたら			
		鉄穴禁止	〃再開		斐伊川東流		谷川 谷川尻 川			
			10人			13人	6人			
		とびとび年で 秋のみ（四日押） 銑（大阪相場）				（大鍛冶屋抱える）	ほぼ毎年 秋のみ（四日押） 割鉄（大阪相場）	〃	冬も 天秤吹子 高 殿	

Ⓐ
⑨藩政の年表は左方に

8	9	10	11	12	13	14	15	16	世紀
733　99				1111　84　92	71	25　38　91	66 ～ 77	36　43　88　91	紀元
					文永8			天文5　〃12　天正19	年号
平安京遷都 出雲国風土記				鎌倉幕府守護地頭		室町幕府 明徳の乱	応永の乱 応仁の乱	鉄砲伝来 刀狩 太閤検地	①時代 ②事件
棚田時代（干ばつ） ← 中世									③開拓
横田郷				横田庄（石清水八幡宮） ※新見庄	55丁歩 代官小池氏	（京都御所） 代官安部氏 ※東寺	（泉涌寺） 中村市場	横田市場 たたら（杠氏） 横田庄終り	④横田
自給									⑤たたら 自給
？初期									⑤たたら 企業

（この表は右⑨藩政の年表）

Ⓐ年表（絲原・杠・卜蔵・仲間文書　奥出雲163、165、244号に論文）

	鉄方御買上制	先納銀制	運上銀制	
1636（寛永13）	（再開）			⑥砂鉄
48（慶安元）	銑			⑦年号
61（寛文元）		寛文元（杠、秋のみ操業15代）		
72（〃12）	鉄買上益金銀 310貫（歳入の5%）	2（杠、春秋創業） 寛文12　年貢担保 16,000俵分先納		⑧鉄師 操業 製品
87（貞享4）	廃止	（藩負債、鉄師は養米に）	鈩場・大鍛冶場数×月数の額	
91（元禄4）	復活（御礼座）	とりやめ	天秤吹子吹き鈩 （3割増のち減少）	
1704（宝永元）	廃止			⑨藩政
（〃2）	復活（藩と三郡鉄師） 銑と千割（割鉄）			
（〃4）	廃止			
（〃5）	御買鉄			
11（正徳元）	（鉄師10人）			
22（享保7）	廃止、私売（鉄師頭取制） 三郡御買鉄論争 （江戸－吉宗・大岡－株仲間）			⑩鉄山
（〃10）		（12月）「申觸書」－大水田地主の鉄師9人にのみ許可		⑪馬匹
（〃11）		（正月）「鈩・鍛冶屋ヶ所分限」（上申）		
（〃）		鉄方御方式布告（雑穀等銀納ほか）先納銀制復活（養米制） （16,000俵 銀160貫）		⑫関連文書
（〃）		「仁多郡鉄山箇所分け帳」差出 （鉄山各、5鉄師67ヶ所）　数年で鈩場移動	この年より記録明治初めまで完全に勘定書（9鉄師統一の帳合）も	⑬地下構造
34（〃19）				⑭永代鈩
（宝暦年間）		（鈎割る、砂鉄採取法普及、毎年操業と年間月数増） ・鈩場固定－3～5～10年へと ・地下構造複雑化へ ・馬の匹数増へ		⑮販路
1754（〃4）		「仁多郡鉄穴鑿取番付極帳」		
61（〃11）		「鉄方御条目」（鉄穴ヶ所制限令） 他3通		
（天明　）				
1871（明治4）		他8通　修正		
	廃止		廃止	

『播磨国風土記』の中の記載では緑肥が推定されるという。人糞尿は用いられていない。

10・11世紀には『和名類聚抄』の中に、農具がみえる。棚田の耕作地帯の農業は、極めて人力を最大に投入する仕事であった。

古代中世の横田庄

このことについては、本誌でいろいろの角度から詳述しており、『島根県横田町誌』その他で述べているので要点にとどめる。

源頼朝の時代となると、守護地頭が置かれたが、当横田庄には下級代官催職小池氏が下ってくる。（戦国時代には大催職といって、八幡宮神事の中心者となり、土豪となり実力を持っていた。江戸時代はじめ、のちに述べる馬木郷の杠氏との婚姻をめぐって、「杠」と改姓。八幡宮神事の中心者として（神主はいたが）明治中期まで伝統を保持した。江戸時代には古格を維持するため、松江藩より扶持米もうけた。子孫現存）

荘園から領家に納める年貢は代銭納化するのは、13世紀後半（鎌倉時代後半）からで、14世紀前半にはこれが全国化したという。

備中新見庄が銭納になるのは1271年からである。

横田庄の記録で年貢をみると、『斉民要術紙背文書』に公事断銭春五十貫秋五十貫の文字と、御用鉄並公事断銭等々の文字が見えるが、これをもって横田庄の貢納は鉄であったと見るのは読みすぎであろう。御用鉄は特に鉄の納入を必要上から要求した時であり、公事断銭は交換交換経済としての年貢米の銭納ではなく、宮の年中行事の自家消費にあてる目的の費用の負担とみるべきである。年貢は米・絹・布であったのが、銭納に移っていったのである。

石清水八幡宮の資料集のすべてを探求しても、このことは明らかである。

14世紀に入ると横田庄の一部が仙洞御料所に分けられ、代官安部氏が下る（子孫・屋敷・文書現存）。14世紀末には、仙洞御料所の荘園の半分が、皇室の菩提所京都泉涌寺に寄進される。そして16世紀末の荘園制の終りまで、御所や寺の記録が残っていて、その詳細が明らかにできる。唯一度だけ年貢に鉄が若干

斐の上川柳一月の句

残るほど遺産がないで平和なり　児玉哲呂
年ひとつ加え終着見え隠れ　高木凡太
雪降れば隣からでも電話来る　松浦久寿
何をして来たか時折り考える　石原冬明
年賀状なつかし友は皆元気　足立玉恵
初詣で素敵に年を重ねたし　藤原千代子
次つぎとゲームみたいに党が出来　松浦亜以
初打ちのゲート笑顔でスッと抜け　児玉えみ
初笑い七人家族あと別居　渡部ミツコ
孫ひ孫にぎやかいいがくたびれて　安部正子
雪のない手持ち不沙汰になるくらし　藤原のぼる
初春に大虎小虎つどいより　綿よし子
首都の雪たまにびっくりして見ては　田部都
歌合戦私が見たのは衣裳だけ　田中有樹絵
初詣で神は黙って願い聞き　小早川古葉
笛吹けど株価と景気踊らない　金阪柳月
超不況会社消えても役所生き　田中芳春

柴栗句会一月抄

初鑼や仔牛が毛布着て着きぬ　淺野としお
雪雲を脱ぐ鳥髪の峰高く　糸原古志
筧の音ぎれて夜を凍つるのみ　恩田和美
とんど火に春呼ぶ力貰いけり　加納信子
病院着脱いだ日セーター着て温くし　楠房子
古城趾の梢えそめにし初茜　高木白虹
福寿草のぞみ托してそっと置き　中澤美紀子
年新た悔なき余生趣味に生く　新出谷一華
注連おろし明日のとんどの支度する　峯石美代子
筆太に温故知新の吉書かな　渡部夕峰
仏前に一人で語る小正月　錦織富江

流々転々　簸の上短歌会

夏祭りも盆も終りて地虫啼く厨に二合の米を研ぎをり　永井弥生　人
山裾より持ちて帰へりて育てたる吾亦紅庭に十年を経たり　人
山の家の古き広きを守りつつ吾れにいく度の秋ぞ巡れる　人
杖によりて草取りしつつ夕されば没りつ陽に向き掌を合はすなり　岡田時子　人
子や家のこと言ひ妻が手より金受けたりしに臥して久しき　常盤はるまさ　人
戸の口に吹き寄せられし枯落葉今日も用ある人は来たらず　人
捨て場にて喚くが如く啼きゐたる烏が白きもの衝へとび発つ　人
打ち連れて友と退蔵院の庭に聞く水琴窟の妙なる音色　野村節子　人
夫の入院三ヶ月とぞ山畑に茜に染まり独り豆引く　人
妻と子を残し二十二歳をみまかりし孫婿の遺影は余りに若し　人
旅を愛し人とふれあい老いゆけど明日に夢あり悔いなき人生　安部夕波　人
二年坂下れば維新の道となり坂本竜馬ここに眠れり　人

添え物として加えられたことがわかる。年貢の主なものは絹である。

『斉民要術紙背文書』を用いて横田庄は年貢として鉄を納めたことを論ずる人もあるが、記録を調べてもそれを肯定することができない。

このことは当地の製鉄事情を考える時にも関連がある。

16世紀に入ると横田庄の中心地馬場を含む地域を中村と呼び今日に至っているが、ここに中村市場が開設される。この頃の記録も横田庄には豊富である。（本誌にいろいろの角度から紹介しており、年貢納入については、関連する資料を悉皆というほど集めて紹介していて、評価されている）

そして1636天文5年、馬木郷大馬木の杠氏が、「たたら吹く」との記事が、『杠日記』その他に登場する。杠氏は備中新見庄の杠城の城主であったが、戦国戦乱の折家臣の謀反によって落城、一族がここに退去し、のち土豪として土着した。記録は続きのち松江藩の鉄師の1人となる。

やがて下中村の地に築かれた藤ヶ瀬城（請所地頭三沢氏の居城）下へ町並みが出現し、市場は移って『横田市場』となり、牛馬の市場としても中国地方でも最も早く、三大市場の一つとなり、牛馬売買の制度が変った戦後まで連綿と続いた。

1543天文12年の鉄砲伝来は鉄への関心を高めたであろうが、当地の記録には伺えない。1591天正19年全国の荘園制の崩壊とともに横田荘も500年の幕を下した。

中世の鉄

中世の鉄の発掘遺跡は極めて少なく、文書記録も明らかにするものが少ない。その中で中世鋳物誌師集団の分布は『眞継文書』の研究によって次のように言われている。河内国丹南から12世紀末関東・東海・北陸と分派し、13世紀山陽から九州へ、15世紀因幡、16世紀宇波（出雲）へ分派したという。だが鋳物原料の銑鉄はどうして得たのか明らかでない。また鉄製品や鉄材も持ちあるいてもいる記録があるところから製鉄も鍛冶も行っていたではないかと推定する人もいる。鋳鉄仏など鋳造の中世のものは東海・関東に多い。私は当地方の近世の企業たたらの調査を深めているが、中世資料も悉皆に近く集めているので、中世の鉄にも関心をもっているが、研究者先輩の方々の研究も十分にまとまっていない状況である。

私は仮説として近世企業たたらの前身として、中世から近世初頭にかけての企業たたらを、大雑把ではあるが初期企業たたらと仮称して、銑生産が行われたのではないかと考えている。奥出雲の鉄師達の近世の明らかな文書記録を遡ぼるとそう考えざるを得ないようであってあとで触れることにする。

他方企業たたらと併行して、「自給たたら」と仮称するものの存在を考えている。江戸時代、東北・奥出雲・石見・安芸に点々と、山子吹き、鍛冶屋吹き、親子吹き、寄合い吹き、一夜吹きなどの言葉が残っている。それは今日小規模実験たたらと呼ばれるものの古いもの、刀匠の中で自家製錬をしているものの類の古いものと考えている。生活の苦しかった農民の知恵が育んだものである。明治初年に石見の邑智郡では、砂鉄採取場の既得権をめぐって訴訟になったとの記録が簡単裁判所にあったといわれている。また安芸国では、自給たたらでできる、粗鋼を買い集めた者もいたという。

この小さい粗鋼（仮称）を砕いてより分け、それぞれに鍛えるとか、再溶解して鍛える。或は再々溶解して鋳物鉄を得ているのである。

今日この方面の実験は全国各地で頻りと行われている。

こうした自給たたらの基盤の上に鋳物師集団が分派する原因があったのではないだろうか。またこの集団の分派の時代にあわせて中世武士団は、牧の盛んな地と重なって結成されたのではないだろうか。

奥出雲でも、寛政年間鉄師たちは差吹たたらが農民の間で、盛んに行われて木炭が払底してこまると藩に訴えている。その後の成行きは判明しないが、その自家製錬までも取締ることは行われなかったようである。

古代中世の山間の郷村の成立と開拓と山と水の問題を考えると、鉄穴流しの問題・たたら・鍛冶用木炭の生産についても、農民達は自然を生かし、育成しながらその恵みを享受していたのが明らかである。近世企業たたらの歴史の記録に、それははっきりと読みとれる。たたら製鉄は、樹木の乱伐や、砂鉄の乱獲で行われたと判断するのは大きな誤りである。

近世初頭

近世に入ると水田開発は、藩主の石高制と併行して、谷尻の開拓、河川敷への堤防の築堤によって行われた。築堤技術の低さは豪雨の時に洪水を招き損害が多かった。一方棚田の上方での池の構築、水路の新設は棚田の旱魃の脅威を少なくしていった。

松江初代藩主堀尾吉晴が禁止した、斐伊川水系の砂鉄採取はやっと25年だった寛永11年に、新しい藩主京極忠高によって解禁され、たたら操業が開始された。その頃製鉄を営む者は10人位いたが、毎年ではなかった。あとに述べるように、砂鉄・木炭の生産量の確保、その運搬が組織されない状態では、とびとびの年に操業することを余儀なくした。そして乾操期の秋に、夏期に集められた材料によって

斐の上川柳二月の句

耐えることさせずに親が耐えている　松浦亜衣
子どもだけ待合室でよく動き　児玉哲呂
あんちゃんと呼んでた兄貴古稀迎え　田部都
雪の壁隣の家も遠くする　児玉えみ
春の風出合いと別離運び来る　田中有樹絵
掛け替えて床一ぱいの春らしさ　真綿よし子
塩いわし節分魚のきまりごと　足立玉恵
大声で笑った後の気持よさ　松浦久寿
我が写真よくもこんなに歳をとり　渡部ミツコ
一つずつ荷物をおろすことに決め　藤原のぼる
想出の笑顔読んでる孫の文み　高木凡太
偉い人大金持ちでなぜ悪事　安部正子
くしゃみして嫁が入るか代舞風呂　藤原千代子

幻影　簸の上短歌会

沈黙のはてに独りの言葉ありてそれより会議　常盤はるまさ
は活発となる
皺ふかき同窓の友ら集まれば酔ふほどにいつ　全人
しか又兵のこと
訪ね来ることなき母がまぼろしに荷物背負い　全人
て山道越え来
着膨れて診察を待つわが前を白衣のナースい　諸角長子
そぎ過ぎゆく
雪しきる朝を登校の児童らの列まぼろしの如　野村節子
く通れり
雪空を渡りゆく鳥の影見えて新幹線は関ヶ原　全人
を過ぐ
しきり降る雪の東京の夕ぐれを灯油売りの流　永井弥生
すペチカのメロディ
生きてゆく重き想ひを乗せて行く日ぐれの駅　全人
を列車は発ちぬ
安部夕波

操業する作業の繰返しとなった。中世は小前（小規模）であったたたら炉も、このころは大型化の方へ行き、四昼夜操業の四日押であったと見える。製品の販売先は大坂で、大坂相場の銑の値段が、『杠日記』に毎年誌されている。銑が主製品であった。

1659万治2年鉄師が当地方で13人位となり、鍛冶屋の中から大鍛冶技術（鉄精錬）の腕の良いものを、専属として抱え、たたら場＝銑生産から大鍛冶場＝割銑生産への一貫工程をとる企業たたらが出現すると、ほぼ毎年操業を行うようになったが、期間はやはり秋のみの四日押であった。しかしこの頃企業化に移行できた地主兼鉄師は少なく半数が操業に従っている。砂鉄は谷川に流して谷川尻（大川口）や、川で採取する時代である。1666寛文12年割銑出荷が軌道に乗ると、『杠日記』には割銑の大坂相場が記入しはじめられる。

この頃の松江藩と鉄行政

しばらく、鉄師の中の杠・ト蔵両家の記録によって述べる。

1636寛永14年にたたら操業が再開されて11年たった、1648慶安元年から藩による鉄方御買上制がとられた。製品は銑である。13年たった、1661寛文元年杠家の操業は秋のみで15代である。松平直政が出雲国に入部した時の鉄師連名書の筆頭が杠家である。翌年は秋に加えて春も操業している。1672寛文12年の松江藩財政の収支をみると、収入には鉄買上益金銀310貫文とあり、歳入の5％にあたっている。支出の部には鉄師から秋の年貢で返済する約束で先納銀制を布き、その負債返済の米16,000俵が記されている（雲陽大数録）。これは鉄師に返されるが、これは養米（制）といって、鉄師の労賃支払いにあてられている。この養米を銀に換算すると308貫文くらいとなる。鉄師から先納銀として藩が前借したのは、銀買上益金相当であったことになる。これは32年たった1704宝永元年になって廃止となった。（のち享保11年より別途復活する）一方藩の鉄行政三本柱（鉄方御買上制・先納銀制・運上銀制）の運上銀制は、1687貞享4年鉄方買上制の廃止のかわりに新設されて、釜場・大鍛冶場数に操業月数をかけてそれぞれに応じた営業税を徴収した。これは明治4年まで微増しながら続いた。

横田史談会　高橋一郎

柴栗句会二月抄

春浅しだれかが薬の砧打つ　淺野としお
春浅し閉居に届く海のもの　糸原古志
春浅しマネキンすでにニューモード　加納信子
編み棒に刻を托して初吹雪　楠房子
薄水に蹲く園児庇う姉　高木白虹
大寒の研ぎ澄まされし月上がり　中澤美紀子
囀れど何処の梢浅き春　新出谷一華
待春や支えの杖の握り艶　渡部夕峰
青竹に餅く黒こげとんどの火　錦織富江
体調を崩しておりぬ寝正月　峯石美代子
猫柳柔毛ゆたかに日を溜めて　恩田和美

会員頒布一部二〇〇円／〒六九九-一八　島根県仁多郡横田町一〇六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇-九-一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四-五二-〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第276・7号(3.4月合併号)
1998．3．7(M130.T83.S72)
奥出雲編集集団
横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲の近世企業たたらの発達過程⑤

―自然と生活、および古文書の社会科学的考察に基づいて―

近世企業たたらⅠ

第一期＝1691元禄4年まで

1603寛永13年嘆願が聞き入れられ、25年振りに砂鉄採取禁止が解除されると、たたら操業がはじまった。当地方では10人位の経営者が名乗りをあげた。重い砂鉄集め嵩張る木炭集め、その運搬は細い山道を登ったり下ったりの人の背にたよる時代であったから、操業は毎年というわけでは無かった。それも砂鉄、木炭の量を集めるのも春から夏であったから、秋の乾燥期にのみ四日押の操業が行われていた。記録によると製品の出荷先である大坂の相場が誌されていて、それは銑である。

やがて1659万治2年には経営者が13人となる。そして野鍛冶の中で大鍛冶技術（精錬）のたしかなものを経営者の下に専属として抱え、銑を割鉄とするようになる。砂鉄・木炭の生産や集荷の仕組みが整いはじめると、1661寛文元年からは毎年操業となり、15代（四日押15回）の操業と数が増え、翌年からは春秋に操業するものもあらわれる。その一方経営者（鉄師）の自然淘汰も起っている。

寛文12年から出荷は銑を精錬した（大鍛冶場で）割鉄となり、藩を通して出荷する。記録は毎年大坂の割鉄の相場価格となる。

この成長を見た松江藩は先に述べた先納銀制を布いて、藩財政の強化を計り出した。

1687貞享4年に理由は不明であるが、39年続いた藩の買上制をとりやめ、かわりに月請け運上銀制（営業税にあたる）とし、鈩場・大鍛冶場の数とそれぞれの操業月数に応じて単価を掛けた金額を納めさせた（別表参照、はじめは大鍛冶場が高い）これは明治4年まで185年間続いた。幕末には付加（税）もついた。

1691元禄4年当地方のたたら炉への送風が、吹差吹子から天秤吹子に転換して強化されると、その鈩場の運上銀は3割増となる。これは労力減と生産増となったためとみられる。（6年後願出て若干減額）一方藩は操業許可と引きかえの意味のあった先納銀制をやめて、御札座制とし御買鉄を復活し、生産の増加した製品にみあう収益増を考えた。

他方原料の生産その集荷も軌道に乗りはじめたので、操業代数の増加が可能になり、乾燥期の秋に続く冬季操業をはじめ、積雪地帯のため、鈩場に覆屋（高殿）を設けたので、企業たたらは成長に向った。

その後御買鉄制は前号の年表左のように理由は不明だが、廃止・復活が三度行われ、1722享保7年廃止されてからは復活することがなかった。（幕末に一部鉄師に鋼の買上制を一時とったが）藩の財政とのかかわりは運上銀制のみとなり、のち先納銀制が復活した。（以上は本誌163 165 180 181に詳細に）

第二期＝近世企業たたらの成熟と藩鉄行政の確立

享保年間三郡御買鉄論争

（本誌171 172 176 179 183に詳述）

このことについて、絲原家文書に「享保年間三郡御買鉄ニ関スル一件」がある。絲原家当主が日記をもとに書いたものである。

御買鉄廃止後、松江藩の鉄奉行はその最終の清算書に鉄師の確認の判形を求めてきた。それは11月13日のことで、鉄方御役所に参上すると、御算用御目録を渡され、預かって帰り翌日拝見したところ、当方承知のことかなりの相違があった。さらに15 16両日にわたって検討したところ同様であったので、口上書を差出そうと鉄師が相談しているところへ、役人が乗り込んできた。（その後の経過省略）

ところが役人は12人の鉄師を個々に訪ねて判形をとろうとしたが、いろいろの理由をつけてとりあわなかったので、刀をおどしに使って各個撃破を狙った。そこで勘右衛門（湯の廻＝絲原）は鉄師一同の意向を踏まえて、郡奉行所へ口上書を差上げたが、受け入れられず仕方なく御目付へ差出し、その返答の上で判形すると申し出た。この時勘右衛門は29歳であった。年末になって鉄師いずれもそれぞれの居住地に引きあげた。

鉄師12人のうち数人は上級家老級の石高をもつ土豪大地主である。鉄師の抵抗には、士農工商の階級の違いの大きかった時代であるが、僅かな石高取りの木端侍のやんちゃであると、うけとめていた一面もうかがわれる。あけて享保8年になったが、正月にも2月になってもお上からは何の沙汰もなかった。（不利な清算をそのまま了承する結末になったよう）

鉄方御方式の制定

それから2年たった享保10年12月、藩は「申触書」によって、12人の鉄師のうち大水田地主9人にのみ営業の許可を与えることにし、翌年正月「鈩・鍛冶屋」

奥出雲の近世企業たたらの発達過程⑤・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

の数の実態を上申させた。9鉄師は斐伊川水系と神戸川の中下流水系のものであった。（能義郡と飯石郡西部は松江藩の支藩の広瀬・母里藩の所領）

仁多郡
竹崎村　卜蔵孫三郎（卜蔵）
大馬木村　湯の廻　勘右エ門（絲原）
仝　山本　又右エ門（杠）
亀嵩村　伊豆屋　六兵衛（山根）
上阿井村　可部屋　源兵衛（桜井）

飯石郡
吉田村　綿屋　庄右エ門（田部）
仝　分家鍋　助（〃）

大原郡
上久野村　七右エ門（石原）

神門郡
奥田儀村　宮本屋　又四郎（桜井分家）

上申書に基づいて、「鉄方御方式」を布き株仲間を結成させ、運上銀制を確認し、元禄4年でとりやめていた先納銀制を復活した。（当時の藩政については本誌180 181 239 240 244に詳述）

上申書を検討し

仁多郡　鈩5ケ所　鍛冶屋　2軒
飯石郡　〃3　〃　1軒
神門郡　〃1　〃　半軒
大原郡　〃1（事情により半減）
計　〃10　〃　3軒半

とし、先納銀は鈩15貫、鍛冶屋5貫で、総額160貫とした。

鉄師が賃金として従業者に渡す米を養米といった。この養米は秋の年貢から鉄師に対して払下げるのであるが、この時享保11年は16,000俵の予定であったので、この代銀を3月から10月までの8か月間、毎月銀20貫匁宛先納し、十月になると「年中他国御払米値段」平均によって、月1歩8厘の利息を加えた先納銀と払下げ米代とを差引清算するのである。

わかり易く言えば、鉄師からの直接的な利潤の吸上げは、これまでの運上銀のみに限り、これは年貢米を担保とする金銀借入をすることのみかえりとして経営を強力に保護することにより（藩有林の支配ほか）、確実に低利を行なおうとするものであった。

そのみかえりとして次のような政策をとった。鉄師達に提出させた「仁多郡鉄山箇所分け帳」（飯石・大原・神門3郡の記録なし）によって、それぞれの鉄師の実績に応じて所有林（平均して支配林の4割）の上に藩有林（平均して同じく6割）を分割して使用をまかせた。

（鉄山―木炭山、腰林―その他の山、鉄穴山など）

すなわち山の独占支配を許したのである。その上藩は各種の保護を与えながら、明治初年まで一貫して堅持し藩もいろいろの利益を受けた。

こうした鉄師を別の角度からみると、鉄師の所有する大水田地主としての石高は、上級家老職並みであり、その小作人は鋤・鍬・鎌を道具とする侍にあたり、水田を囲む山林は鉄師が所有し貸与されて支配し、輸送用として欠かせぬ馬匹も鉄師が所有して小作人に貸与したから、鉄師は小領主的存在であった。

さらに言えば鉄師は年貢米という安定した多額の収入と、土地・山林・住民という最高の資本を所有したのである。

そして株仲間を組織して頭取を置き、今で言えば独占企業共同体として企業たたらの発展に努力し、農鉱畜一体の小領主的経営を続けて奥出雲地帯の住民の生活も支えた。従って鉄価不況に於ける経営も藩の協力により切り抜け、技術改良も行い、わが国和鉄生産の主力地帯となった。この様な藩は、先年行った全国各地の研究者の協力によって行った調査と、それに基づく研究書や資料をひもといても例をみない。唯安芸国加計の加計家が安定した経営をしているが、これは海運業を家業としていたからである。しかし当地方の鉄師は不作の時でも年貢が比較的安定して入り、小作人と地主の関係の良い面があるのに引きかえ、流通の変化で海運業の浮沈があっている。この制度の結果、幕藩体制の崩壊によって、鉄師の所有林は既得権として個人のものとなり、大きい山林地主がうまれ、そのうちの三家（田部・桜井・絲原）は日本の三大山林王と呼ばれた。

こうした松江藩の鉄行政の生まれた背景については、本誌の中で詳述した。将軍吉宗が大岡越前守忠相を登用して幕政改革に成功したのがそれである。

運上銀制の変遷

1687貞享4年から明らかになる運上銀の変遷は別表の通りである。初めは大鍛冶場が高いが、天秤吹子導入からは鈩場が3割増で高くなる。ここに検討すべき点があるが、資料から推定するだけである。（統計は絲原家の記録の享保19年から明治4年までのもので、関連事項―若干記入とともに完全に保存されている。それに據った。しかし紙面の都合でとびとびに載せてある）

〜〜〜

		運上銀（操業月数に）		左の総額に付加割合			売　価		米　価
紀元	年号	鈩場1ヶ所	大鍛冶場1軒	1	2	3	割鉄(24貫)	鋼(30貫)	大阪玄米1石
1687	貞享4	88匁33	108匁33						40匁
91	元禄4	天秤3割増							
		114.834	〃						53.3
1734	享保19	〃	〃						46.0
41	寛保元	114.838	109.332						71.5
45	延享2	〃	〃	有					77.5
47	4	108.33	100.000	無					71.5
51	宝暦元	108.33	〃						55.2
61	11	〃	〃						53.4
72	安永元	〃 年間毎月・12～13ヶ月操業へ	〃						58.0
81	天明元	〃	〃	9朱					57.0
95	寛政7	〃	〃				鉄価大暴落		79.0
76	8	〃	〃						74.0
77	9	〃	〃						62.5
1801	享和元	〃	〃	9朱	6朱				69.4
10	文化7	104.33	〃	〃	〃				59.2
16	13	108.33	〃	〃	〃				75.5
24	文政9	〃	〃	〃	〃		102匁.1	75匁115	77.4
36	天保7	〃	〃	〃	〃	5匁9歩4匣	81.3	58.254	158.5
38	8	〃	〃	〃	〃	6.2.7	80.4	54.466	258.0
47	弘化4	〃	〃	〃	〃	⋮ 上下あり	193.5	167.859	82.7
						⋮			
53	嘉永6	〃	〃	〃	〃	なし	122.5	77.3	107.1
58	安政5	〃	〃	〃	〃		183.1	107.656	128.9
66	慶応2	〃	〃	〃	〃		銀459匁.00	銭31貫62文	銀1447匁0
67	3	〃	〃	〃	〃		391	32.822	960.0
68	4	〃	〃	〃	〃		238	33.929	6両3
71	明治4	〃	〃	なし	なし	なし	銭125.貫文00	銭140.貫文176	6.両9
72	5	／	／	／	／	／	175.00 (4円86銭1)	192.626 (5円35銭)	4円20銭
82	15	／	／	／	／	／	8円.62銭.5	5円.86銭	11円20銭
				（1朱は1割の1／100の割合）			（単位に注意）		

19	20
68 明治元	17 18 大正7
85 〃15 奥出雲、釜石を含めた日本の鉄生産量の5割を超える	鳥上木炭銑工場
	30 数ケ所出現（雲伯・備で木炭銑工場）
	（現在）実験たたら・刀匠たたら
幕末 / 76 明治9 / 11 / 15 / 10年代 / 25 / 26 / 31	1901 / 33 / 34 / 31〜40 / 09〜11 42〜45 / 15 大正4 / 17 6 / 10〜12
4人	
薩摩の高炉（ヒュゲーニン）を視察 群馬県中小坂製鉄所方式の導入計画など（1日で鈩1代分木炭銑・パドル炉で） ワットソン（英）の視察 ライマン（米）の改善報告書 権造の五ケ条の建白書 郡内全村長の嘆願書 農事試験場設置2ケ所（郡内） 牧牛社設置（八川村） 養蚕農家数県下最高（仁多郡） 製絲伝習所 2ケ所（〃） 農畜林産品評会（田部・桜井・絲原・卜蔵） トロンプ方式送風（卜蔵家1代生産57駄強 銑増産） （同 家 仝 生産63駄強 銑増産）	島根県種馬所設置（30年間）（八川村） 水車利用吹差吹子（銑増へ） 海軍省と4家納品契約 絲原・桜井家の協力で 電気炉開発成功（伊部氏） 電気炉松江（3）安来（4）で操業 福禄寿製銑工場（自営）始まる 木炭銑工場郡内6ケ所（鈩操業縮小）（日産3トン） 奥出雲のすべての鈩場・工場（鳥上のぞく）廃業
郡内2,006頭	島根木炭の質量の名声 →（敗戦後日本の三大山林所有者－田部・桜井・絲原） 簸上鉄道（木次線）開通
Ⓓ幕末 御趣向綱 / 藩営鋳造所 / 作事方御用鉄 / 軍用鉄砲地鉄 幕末奥出雲鉄師・大坂に共同事務所を置く	

| 世紀 | 18 | | |

こうして享保期に藩政と鉄師達の経営の基盤が整い25年を経ると、奥出雲の本格的操業時代へと入る。

第三期　本格的操業時代へ（宝暦年間より）

やがて毎年の操業月数が5～10か月と増えることが記録で明らかで活況を帯びる。（鉄師の文芸や風雅への関心は、諸著の書写、書画・道具類の購入へと向かっていることでそれを裏付けている。）

宝暦年間（1751～1763）からは、洗樋を設ける鉄穴流し法が普及し、川砂鉄の採取も増加した。原料の増加は毎年の操業10か月程度を保つようになる。仁多郡の馬匹の数も377頭（雲陽大数録）となり、輸送も便利となって、鉄山を求めて鈩場を移動するのが遅くなり、5～10年と固定するようになる。それに伴って記録によると1か所での固定期間が長くなると地下構造が複雑になってくる。一方天秤吹子の大型化等への改良も行われるなど、各部門の改良が行われる。

鈩場用木炭＝木炭は30年以上の雑木を伐採して焼いたもので、雑木林は切株を大切にして（乱伐は厳禁であった）成長させ、30年位（日照にもよる）を周期に炭窯を移動して生産した。―鈩場と大鍛冶場2軒で、年間に必要な鉄山は130町歩（ha）であったから、3,900町歩の山が鉄師には必要であった。嵩張る木炭運送は大変であったので、鈩場の移動が行われたのである。

これも記録によるが、これまではたたら炉で銑のみを目的に操業していたが、炉内には鉧もできていた。この中に鋼のあることもわかっていたが、割ることが出来ず放棄していたのである。工夫によって割れるようになり鉧が生産品に加わるようになったのもこの宝暦年間のことである。鉧を割って鋼をとり、残りの歩鉧は大鍛冶場に送られ割鉄の材料となった。炭素の含有量は銑はもとより鋼よりも少なかったから、左下場でなく本場で、銑からつくった左下鉄とともに卸し鉄、そして割鉄製品となった。こうして近世企業たたらは完成したのである。あとで詳しく述べるが、鉄師の収入の上では、1たたら場・2大鍛冶場の一貫経営の純益の上で、割鉄収入が80％強、鋼の収入が20％弱であったことを念頭に置かないと、近世企業たたら経営を誤ってみることになる。

1772（安永元）年からは年間12か月操業（閏年は13か月）が恒常化し（大雪で木炭輸送の途絶、高殿の修覆、本床すなわち地下構造の改修、火災等の事故の場合はのぞく）、1781（天明元）年ごろからは、天秤吹子もやや大型化し操業が極めて安定して来た。

そして天明初年（1781）前後から馬匹も増加し、鉄師は主力鈩を1か所に固定するようになる。永代鈩の出現である。

宝暦11年の鉄方御条目

鉄穴流しの盛行で、下流よりの陳情もあって、稼行鉄穴数を制限するなどの対策を講じたが、反対はおさまらず、宝暦9年には仁多郡30・飯石郡10・大原郡5に縮小制限したが、鈩1か所に必要な鉄穴は10か所以上を必要として、それ以下では稼業困難という鉄師の申入れで、宝暦11年1761「鉄方御条目」をもって、

仁多郡	69	
大原郡	9	
飯石郡	13	
合計	91か所	

正し、さきの年額銀160貫文を100貫文に減額し、これを鈩7か所に均分にし、10月から翌年7月まで、1か月11貫111匁1分1厘宛上納することとしている。

この鉄穴稼業数規定、先納銀制改正、林野利用規定の3つが、宝暦11年の鉄方御条目で、享保11年以来の農村の経済発展の中で行詰まっていた、藩の企業たたら保護政策を再編するものであった。

第四期＝企業たたらの充実から

またこの年、先納銀仕法を改請するかわりに、鉄師への保護を重要視している。

柴栗句会三月抄

稲妻を吐く神嶺の雪起こし　淺野としお
久しぶり牛の声聞く梅日和　糸原古志
雛壇や五人囃の置き違え　恩田和美
と忘れをおぎない会いて春炬燵　加納信子
金メダル白馬の早春泣き笑い　楠房子
労わりし牡丹芽吹く薦の牛　高木白虹
口笛をふいて少年春を行く　中澤美紀子
寄り添うて女雛男雛の雅びなり　新出谷一華
ミミの日や耳鳴り続く老の日々　錦織富江
春雨に起こされ病後の気の重く　峯石美代子
夕東風や無人の駅の一人客　渡部夕峰

斐の上川柳三月の句

横田奥言われて温泉自慢する　渡部ミツコ
働いた勲章だよと友が言い　藤原のぼる
校門で電波探知器したらいい　児玉哲呂
儲ると人心惑わすチラシ来る　松浦亜以
風呂の中今日も終りの大あくび　児玉えみ
曲り角沢山あって教えられ　真綿よし子
音のない老婆の目には耳があり　田部都
過疎に住み友に会わない日が続き　横山まこと
只ひとり気持ち通じる人がいる　松浦久寿
いい気合い老の長旅ちょっと無理　安部正子
茶口にもなると大目に炊いておく　藤原千代子
すっぽりと名残りつきない春炬燵　田中芳春

春夢　簸の上短歌会

母を待ち母も吾れ待ち佇みしこの橋けふは架け替へらるる　永井弥生
橋に立ち吾れの歸へりを待ちくれし亡き母の齢に近づきにけり　全
黒土は春の匂ひしてチューリップ揃ひて三十本つんと芽を出す　全
幼らの湯浴みに遊びし玩具いくつ春の陽と共に出窓に並ぶ　諸角長子
雪消えてひさかたぶりに現はれる墓碑に春の陽きらめきてをり　岡田時子
庭池におよぶ陽光に鯉の群水の底より動きはじめぬ　全
テレビに見る女性アナウンサーは爽やかにピンク・ブルーと春を着こなす　野村節子
背戸の山に笹鳴く鶯夕べには梟の声春の蠢く　全
缶コーヒーの蓋ねじあけて飲まむとすドブン官僚よりも清しく　常盤はるまさ
自動車の免許はとれずに過ぎしかど八十男は颯爽と歩く　全
天井を日がな眺めて臥す妻にしてやれること　全
は愚痴を聞くのみ五十六才の命消えゆく夜の静寂涙抑へて子の貌見詰む　安部夕波

合理化へ

寛政年間（1789～1800）になると、各鉄師の操業は順調となり生産量が急増しはじめたが、別な要因も加わって、上方の鉄価が暴落し、経営が苦しくなった。

当地方の鉄師は、資本家的経営でなく、小領主的な農鉱畜一体の経営であったので、米価は安定している上に、松江藩の保護もあって操業短縮もなく、耐え忍ぶことができた。

他国の鉄師は資本家的雇傭経営であったので、操業短縮の上賃金支払いも遅れ農民の不満が多かった。

これが引き金ともなったであろうか、操業の合理化が試みられはじめる。若干記録が失われているが、1818（文化15）年からこれまでの1代4昼夜（四日押）を3昼夜（三日押）に短縮する試算書が作られ、それが試みられる。半期毎（1月から6か月）の勘定書（決算書）によると数字の上で苦心の跡が読みとれるし、天秤吹子の大型化も行われている。他方番頭が主人（鉄師）に届けた1週間毎の手紙には（毎年ほとんど、藩主そのほかへの年始に続いて、春まで松江に滞在するのがならわし）、そのことで苦心したことが詳しく報告されている。そして1856（安政3）年には完全に三日押1本となる。30有余年の歳月をかけて完成したことになる。なお完成の年については、鉄師によって数年間の差がある。経過をみると、使用する砂鉄・木炭の量、そして生産した銑・歩鉧・鋼の全量に若干の減量はあるが、1昼夜短縮の割には減少していない。しかし中浮物（人件費や釜土・築炉・床焼の材料と経費等）が減っているのに割合が高くなっているのは、操業人件費は一昼夜分減っているが、釜（炉）や本床焼きなど材料代と人件費が減っていないからである。しかし人件費の減少分だけ、三日押が若干であるが、四日押より利益が多かった。

その上操業1回（1代）に要する日数が四日押で五日（一日は築炉）、三日押で四日となり1日短縮するから、年間操業代数が60代から80代越すようになり、増収へと向かった。

（この低温操業に於ける技術改良がどのように行われたか、炉の構造や従って炉内反応に関することは、記録では知ることができない。低温操業を脱し切れなかった日本的技術の努力があったものと思われる。科学の遅れを勘と経験でこのような改良をやっともたらしたものと言えるであろう。）

（こうした三日押――鉄を生産し鉧も生産――は、出雲と隣国伯耆の西部、石見の東部の真砂砂鉄の多い地帯で行われた。その他の全国各地は赤目砂鉄地帯であるので四日押で鉄を生産していた。時には小さい鉧も出来ることもあったが、鋼はなかった）

この短縮を中心に小論をまとめたものは、依頼により、『金属の歴史』（アグネ社刊）『ふえらむ』（1996 11月号・日本鉄鋼協会刊）『バウンダリー』（1997 6月号・コンパス社刊）にそれぞれ角度を変えて載せて頂いている。

（横田史談会　高橋一郎）

前号訂正　3頁4段の行　富・農層　4頁年表87・貞享　8頁欄外定価四・〇〇円

こぼれ話②

開拓史と製鉄史

おびただしい史料のある中世の横田庄と奥出雲を総合的にとらえようとする一方、これまた系統的にまとまった近世・近代の企業たたら等の史料に埋まって恵まれている反面、気がねや苦労をして今日に至っている。

そこでたたら研究は古代は別としても、中世も発掘によって明らかにすることを、己むを得ずせざるを得ないのは、鉄の古文書史料が極めて乏しいからである。しかも中世の発掘例は少なく、それらしいものも地下部分と鉄滓の分析値だけで、それで地方色やその発達史を描き出すことは、輪郭さえもまだ明らかになっていない。

そして近世になっても、生産や経営が経済的数字で追求されることが少なくて（史料不足によるが）、十分ではなかった。そして20世紀初頭の俵国一報告書が貴重で、一地方の報告であること、その時代の現状であることを忘れて、どの地方も、どの時代もそれで考えられて来ていた。（経済的数字の不足もあった）

ところが絲原家の膨大な古文書、同じ鉄師杠・卜蔵の両家の残存のすべと、田部・桜井両家ほかの一部の古文書に眼を通すと、新しい発見があったが、これまでの流れによどみをつけるだけの関連各分野の基礎学力もないので遠慮していた。

1983年のたたら研究会の伊豆下田大会で、三日押（当地ではこの語のみで鋤押法とも呼ばない。これも極めて重要であるとあとでわかった）はもとは四日押であって、一貫して銑造りが主力であったということを発表した。後日数人の方からお尋ねを頂き、その内の一人の方からは今もっていろいろな各方面の情報を頂いて感謝している。翌84年全国産業考古学会横田大会では、このことを数字をしめして発表した。

1988年刊の『島根県横田町誌』の古代・中世編と近世の一部を分担執筆したのち、さらに中世に頭を突込んでいたので、近世のたたら製鉄史にもさらに深入りした。

そして二つの楔期が訪れた。1982年発表の桂敬（東工大）の「砂鉄製鉄の原理」であり、二つめは1984年に出版された黒田日出男（東京大）著『日本中世開拓史の研究』の大著を読んで次のことを知ったことである。

この本は画期的な大著の中世開拓史で、横田庄や奥出雲の中世の研究の参考にと求めたのである。その中には、①中世農民の開発史　②開発と荘園体制　③民衆意識と農業技術という三部作が収められている。

水田中心の耕心だけでなく、山地・漁場・交通の開発が、自然と人間の関わりの中でとらえなおされている。さらに民衆史・農民史・農具史・技術史、さらに田遊びと農民意識の関係など隣接諸科学の成果が驚くほど活用され、さらに中世成立期から近世初頭まで見通してある。

最近綱野善彦の中世史研究による中世のとらえ直しが始まっているが、それと符合するものである。こうした中から鉄と農民生活を見直されねばならないが、これに関する資料や発掘が少ない。えてしてともすれば「日本刀に引きずられ勝ちな日本の製鉄史研究に、農具や生活用具の生産の問題を位置づけるためにも、鋳物師の銑鉄生産と中世鋳物技術の研究が重要である。」この言葉で私は踏切りがついたのである。

1986年仙台の金属博物館の今井勇之進館長が来町された折、絲原記念館その他を案内しながら、資料にもとづいて、三日押、四日押のお話などをしたことが縁になって知遇を得、窪田蔵郎参与の力添えもあって、86年全館創立10周年記念の金属学会主催の国際シンポジウムで、たたらについての講演を要請され、菲力ながら席を汚させて頂いた。

この時「三日押」・「四日押」のこと、釛場と大鍛冶場を一貫経営するのを「近世企業たたら」と呼ぶこと、古代から今日までの小規模たたらを「自給たたら」と呼んで位置づけ、その奥出雲での特色を述べた。

その直後同じ年、たたら研究会の富山大会では、思い切って記録の数字をあげ、奥出雲では四日押で銑つくり、できていた鋼をやっと割れるようになった宝暦年間から、そのために生産が2倍になったこと、のち一昼夜短縮して三日押となったことを発表した。

この会で俵一国博士の最後の直弟子といわれる下川義雄氏との出会いとなった。『眼から鱗が落ちた』と激励を頂き、あとで数々のお便りや論文を頂いた。

それを1987年3月発行の『金属』（アグネ社）に発表するようにとのことで登載して頂き、単行本の中にも収録して頂いた。89年島根大学研究紀要にも別な角度でのせてもらい、90年一般向けの小著としてまとめることができた。

1996年11月号の『ふえらむ』ついで、東京工業大学での講演に続いて97年、『バウンダリ』6月号への登載となった。

この連載は、以上のものを社会科学的に総合して、年表を作成し、これを追って述べることにしたものである。まことに結論は製鉄の科学の進歩は、西欧が先進であって、近世企業たたらは、その発展の一段階ではなかったかという考えにならざるを得ないようである。

今日の「新三日押」はその伝統的工芸部分の精粋というべきものではあるまいか。

（高橋一郎）

会員頒布一部四〇〇円／六九九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲
題字　糸原風亭書
第278・9号(5.6月合併号)
1998.6.6(M131.T87.S73)
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

国産耕運機誕生小史
—米原清男(亀嵩)の足跡—

藤井正治

かつて犂・鍬に頼るほか術のなかった耕耘は、能率があがらず、苦役の代名詞にさえなっていました。「耕耘の機械化」は長い間、農民の切実な願いであり、夢でもありました。

それが叶えられたのは、歩行型の耕耘機が普及し始めた昭和三十年（一九五五）代後半からのことです。初期の耕耘機は耕耘以外の作業は不可能でした。が、やがて作業機を取り替えれば運搬を含む様々な作業ができる、牽引型の〝耕運機〟が出現しました。それは乗用トラクター時代の今も生き続けています。

ところで、わが国最初の耕運機は、奥出雲亀嵩村中湯野の米原清男が開発したことをご存知でしょうか。本稿は、若いころ画家への道を断たれた米原が、耕運機完成に至る苦難の足跡を纏めたものです。

耕耘機時代の幕開け

耕耘機（自動耕耘機の通称）がわが国に初めて現れたのは、大正九年（一九二〇）といわれています。商社が米国製ビーマン式、ユーチリター式、更にスイス製シマー式等外国製耕耘機を、そのころ輸入し始めたからです。

島根県内では大正十二年（一九二三）にユーチリター式を県農事試験場が、シマー式を八束郡講武村（現鹿島町）金津喜之助が、それぞれ初めて導入しました。



米原清男
（昭和14年(1939)
第6号機製作のころ）

しかし、外国製耕耘機の価格は一、七〇〇円から一、九〇〇円と非常に高い上、水田の耕耘用には適しませんでした。導入は全国的に見ても失敗だったのです。

そこへ現れたのが国産耕耘機です。国産第一号は岡山県上道郡宇野村原尾島（現岡山市原尾島）の西崎浩が、大正十五年（一九二六）に製作した丸二式（ロータリー型）といわれています。西崎はシマー式の実演を見てヒントを得たとのことです。昭和初期には、岡山県南部を中心に多くの製造業者が現われ、井尻式、日本式、板野式、藤井式ほか様々な名称の耕耘機が発売されるようになりました。耕耘機時代の幕開けとなったのです。

しかし、当時は駆動部と耕耘部（作業機）が機枠で一体化されていて、分離できない。また耕耘専用である上、大型で重過ぎ、操作も楽でないという共通の問題点をもっていました。問題点は戦後まで未解決のままでした。

設計思想を異にする米原の耕運機は、この時点ではまだ製作されていません。製作が実現するまでには、幾多の困難を乗り越えねばなりませんでした。

機械耕耘の発想

農家の長男であった米原は、亀嵩村小学校高等科卒業後、農事手伝いや鉄穴場作業に従事しながら、同村実業補習学校に通いました。大正六年（一九一七）三月、同校を卒業。農事手伝いをする中で画家への夢が脹らみ、密かに上京しますが、露見。一旦帰郷の際、父にきびしく叱責され、涙を飲んで家業を継ぎました。大正七年（一九一八）のことです。

以来、米原は自家の田全部（掛作分含め三ヘクタール）を自作し、生活を豊にしたいと考えるようになりました。しかし、当時の鍬・犂に頼る人・畜力耕作では、それは無理でした。たまたま、足のけががもとで、飼い牛のあかば（あか毛）の牝牛を代役に渡し、代かきを頼んだ日に、あかばが突然あばれ出し、他家の牛五・六頭も傷を負わせる騒ぎが起きました。この出来ごとがあってから、米原は『自動して耕地面を進行しつつ掘り起こしのできる機械を創案したい』と、暗中模索を始めたのです。大正八年（一九一九）のことです。言うまでもなく、亀嵩村周辺には、まだ農用発動機はなく、まして耕耘機など夢のような時代のことです。

翌九年（一九二〇）、無理がたたってか重い腎臓病に罹り、

米原清男の足跡・徳川慶喜とこの地方・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

長期入院しました。幸い退院はしたものの農業従事は無理とのことで、横田村（現横田町）の出雲算盤㈱機械部に就職しました。

ここで、松江工業学校から出向していた実習指導教師神崎豊太郎に出会い、工業技術を身につけることができました。これを支えに夢であった耕耘機械の設計図を描き始めたのです。会社の事情や一身上の都合で勤務先は変わっても、設計図描きは休まず続けました。そして、昭和八年（一九三三）に、やっと得心のいく設計図が出来上がりました。

福山での失敗と成功

米原は設計図を県農事試験場や県農会に持参し、意見を求めましたが、意外にも農商務省が耕耘機は駄目だと言った、などと製作を勧めるような反応は得られませんでした。失望した米原は今度は上京し、帝国発明協会（当時、東京市丸の内）を訪ねると、芦葉清三郎技師が会ってくれました。芦葉は『設計図でみる限り、実用化できると思う』と言ってくれました。これが大きな励ましとなって、昭和十一年（一九三六）一月、当時の勤め先亀嵩村信用組合を辞め、知遇を得た福山市の大西製縄機工場へ向かいます。妻子を残して『成功せねば生きては帰らぬ』覚悟でした。米原三十六歳の冬のことです。

大西工場へは近所で寝泊りしながら通いました。が、工場主大西信次郎は有能な技術者でしたが、工場の設備は貧弱で米原は部品の外注から鋳造、溶接等に至るまで、苦労しながら作業を続けねばなりませんでした。そして夏になってやっと組立てにまで漕ぎつけ、記念すべき第一号機が完成しました。同機の外形は原動機（米国製空冷二馬力）を運転者側に、ロータリー式耕耘装置を原動機の向こう側にして、機枠で一体化した特異な構造のものでした（写真1）。しかし、残念ながら最初のテスト段階で始動せず、失敗に終わりました。伝動装置の改良、水冷式石油発動機（二・五馬力）搭載等による第二号機も、同じく失敗に終わりました。

原因が耕耘装置にあると睨んだ米原は、苦心惨憺、数ヶ月の後、鍬耕運動装置（クランク式耕耘装置）を発明しました（図1、写真2）。クランクが回転すると、鍬の形をした耕耘刀が閉三角形軌跡を描きながら、土を掘り下げ、抛出し、元の位置に戻るという装置です。そのうえ、『抛出土塊ヲ耕耘深度ノ大小ニ拘ラス完全ニ反転』させることができたので、後に特許となりました。耕耘機製作には失敗しましたが、この耕耘装置は画期的な発明だったのです。

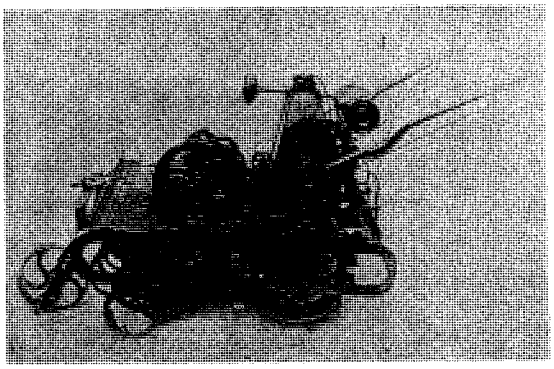
翌昭和十二年（一九三七）一月。知遇を得て松江市内の野津鉄工所で第三号機を製作することになりました。目標の一つは耕耘機の小型・軽量化でした。そのため鋳造製品である車輪一つにしても、できるだけ肉厚を薄くするよう苦労しました。このころの米原について野津の後継ぎ正雄は、『米原さんの図面はかなり正確で感心したものです。超人的に仕事をやっておられた姿をよく覚えています。』と語っています。

ところが、鉄工所は終業時刻以後、仕事を続けることができなかったため、製作した部品を自宅に運んで組み立てました。それが第三号機なのです。試運転の結果、耕耘機は前進を始め、福山で発明した耕耘装置がみごとに作動しました。

蘆溝橋事件が勃発し、日中戦争が始まったころのことです。

耕運機の原型成る

第三号機は作動はしたものの上下振動が激しく、実用化には至りませんでした。このころ、米原は自宅の納屋を改造して米原自動耕耘機研究所を創設しました。そして、大阪から仕入れた旋盤などの工作機械、鍛冶、熔接設備などを駆使しながら、村人を避けるように密かに研究・製作に集中しました。耕耘時の機体振動防止のため、『徹夜に徹夜を重ね』研究するうちに、駆動部と耕耘部の分離案が浮かびました。こうして、昭和十三年（一九三八）一月、第四号機が製作されたのです。



写真① 第一号機（昭和11年（1936）福山にて製作）

本機は㈠駆動部と耕耘部が自在つぎ手で接続してあるため、両者は着脱可能である。㈡耕地状態の凹凸に応じ、自動的に一定深度の耕耘を行う。㈢走行装置が無限軌道帯式のため、傾斜地・棚田での使用が容易であるなど、本邦最初かつ画期的なものでした。

次に同機と構造・機能は基本的に同じですが、さらに振動をおさえ、運転しやすくして、実用機に近づけたのが第五号機（同年九月製作）です（図1・2）。とはいえ、後年の耕運機開

発の原型になったのは、第四号機であるといえましょう。

ただ以上の両機は方向転換に力が要る、走行装置に土塊がくい込むなどの難点のあることが分かり、無限軌道帯式と車輪式の折衷によって解決しました。それが第六号機（昭和十四年（一九三九）製作）、第七号機（同十五年（一九四〇）製作）です。特に後者は実用機の水準に達した最先端の耕耘機といえるものでした。

全国動力耕耘機実演展覧会に出演

そのころ、耕耘機の有用論を唱える吉岡金市（日本労働科学研究所）に対し、大槻正男（京都帝大）・野間海造（東京帝大）らが、耕耘機無用論を展開し反対していました。こうした状況の中、米原は知人高橋英夫（大東町。当時畜青連全国連書記長）の勧めで吉岡に会いました。吉岡は研究を励ますとともに、翌年（一九四一）四月開催予定の全国動力耕耘機実演展覧会に出演するよう勧めました。

こうして翌年四月、米原は会場（岡山県児島郡藤田村）に第七号機（写真2）を出品し、実演したのです。もちろん、全国から出品した二十七機種の中で、第七号機ほど小型で駆動部・耕耘部が着脱自在のものは一つもなく、大観衆の注目を集めました。

実演終了後、吉岡金市（帝国農会嘱託）は講評に立ち、『…島根県から出たY式（注・米原式）はあの小型で相当の実力を発揮していたが、あの種の物は耕耘機の今後の動向を示唆するものとして注目に価しよう。』と高く評価しました。

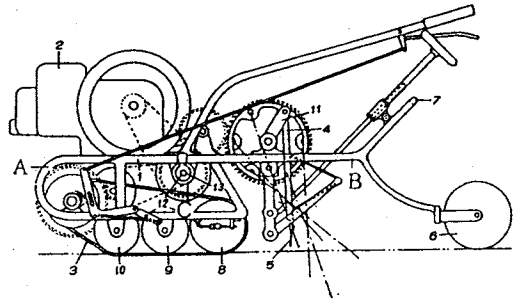


図1．第5号機一部の側面図（昭和13年(1938) 9月製作）
（注）A－駆動部　B－作業部，円輪クランク式耕耘装置に注意
C－自在つぎ手，ハンドルのつけ根部分に注意
（米原・芦葉原図）

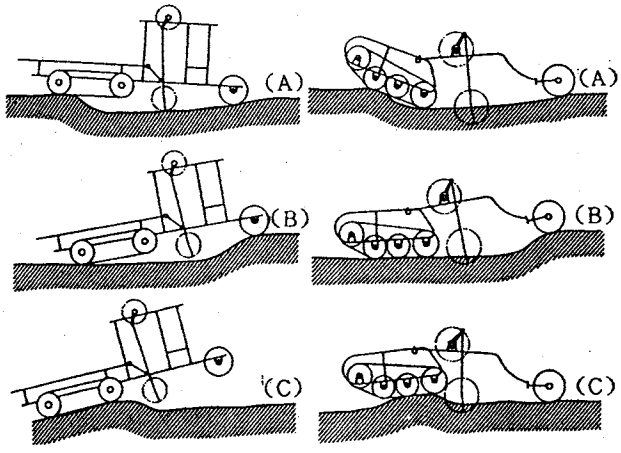


図2．凹凸耕地面における耕耘機の作用状態の比較
左　広瀬式　　右　米原式（米原・芦葉原図）

間もなく、米原のもとには第七号機の企業化申し入れが相次ぎました。中でも大阪の工作機械メーカー中島機械製作所からの申し入れは最も好条件であり、米原は大阪に出かけ交渉に当たりました。ところが交渉半ばに、高松宮から発明助成金を授与されたことがもとで、企業化か、研究かに迷います。結局、大阪の話を断って亀嵩に留まる道を選びました。しかし、思いもよらぬ苦難が待ち受けているとは知る由もありませんでした。

三成町大火

大阪の話を断り、亀嵩に留まっていたころの米原を、東京の「農機具」誌記者は次のように語っています。『島根の農機界で見落せぬのは米原式自動耕耘機である。発明者の米原清夫氏（ママ）はまだ紅顔の青年であるが、大正の初期より自動耕耘機の考案に没頭し赤貧の中に苦心の結果満足すべきものを作り出したが、之又統制の渦中にあって之を製品化して市場に出すことに行き悩んでいる。農事試験場の広江農具主任も絶讃して居るが、悲しい哉資力が無い何のバックも無い。』当時の米原が赤貧であったかは別として、既に大平洋戦争に突入し、農業用燃料、農機具用資材不足は深刻で、米原は行き悩んでいたのです。その中で吉岡金市が『日本型万能トラクター』にも成り得るとした、第九号機を製作していました。

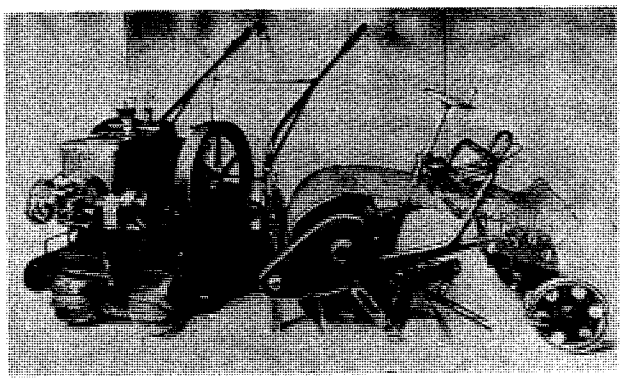
そこへ昭和十八年（一九四三）四月、島根県農務課から三十台に上る耕耘機製作の注文を受けたのです。農村の労力不足が深刻化していたからです。思いがけない注文でした。

けれども動力線もついていない亀嵩村では大量製作は無理でした。このため同年五月に三成町に研究所を移し、工場を増設しました。三成で製作不能な部品は、大阪に行き大阪の鉄工所で製作し、仕上がったものから三成の工場に発送し組立てました。

ところが、翌昭和十九年（一九四四）五月一日、米原の工場は軍需省の指定工場とされて航空機の部品製作を命じられ、耕耘機製作は非常に難かしくなってきました。それでも米原らは

勤務時間を延長し僅かながらも組立てを行っていました。そこへ、昭和二十年（一九四五）四月十八日、三成町未曾有の大火が襲い、米原の研究所・工場は類焼し耕耘機をはじめ悉くを失ってしまいました。

協力工場の援助で七月に復旧はしたものの、途端に終戦となり、米原は筆舌に尽くしがたいたでをこうむりました。時に四十五歳でした。



写真② 第７号機（昭和15年(1940)製作）
左　駆動部　右　耕耘部（鍬耕運動装置に注目）

戦後——国産耕運機誕生

大火で特許権を手放さねばならない程、経済的に苦境に立った米原は、動力脱穀機を製作したり、鋳物を作ったり、何とか経営を維持しようと懸命でした。朝鮮（現韓国）から引き揚げた鋳物師白名恵吉は、耕耘機の仕事がなく灰皿や火鉢を作っていました。と語っています。当時の米原には耕耘機製作再開の資金はなく、いかにして旧従業員を雇用し続けるかが最大の問題だったのです。

そこへ米原に経済的援助をしたいという人物が現われて、三成の工場は株式会社として再興することになりました。

昭和二十二年（一九四七）夏。米原は吉岡からの電報で急きょ上京し、農林省で出会いました。そこでは農業機械化委員会が開かれていて、大勢集まっていました。吉岡は『マッカーサー指令部の命令で、国民の飢えを救わねばならぬというので会議中です。耕耘機が重要になってきましたので、あなたには命をかけて耕耘機を作って下さい。』と言いました。そして、幅三十六㎝の小型で各種作業に使用できる耕耘機を急いで作ってほしい、と言いました。農業機械化委員会が、吉岡の機械化イネ直播農法の主張を取り上げたためと思われます。

亀嵩に帰った米原は技術者メンバーと共に、暑さの中、夜を日に次いで研究、設計を行いました。が、どうしても幅三十六㎝は無理だと分かり、急きょ吉岡に電話、四十㎝位ならよいとの返事に作業を続けるうち、米原が肺炎で寝込むなど色々と曲折がありました。

しかし、早くも昭和二十二年（一九四七）十月五日、戦後初の米原の第十号機が誕生したのです。同機の諸元・性能は㈠全長一四五・一㎝、全幅四十・五㎝、全重（原動機とも）一九八・八㎏。㈡クランク式、ロータリー式耕耘装置とも装着可能。㈢トレーラーの牽引も可能などの超小型・汎用型機でした。これまでわが国にはなかった、国産の耕運機第一号といえるものだったのです。西崎浩の耕耘機製作（大正十五年（一九二六））に勝るとも劣らぬ、画期的な開発だったのです。

米原は第十号機が完成すると直ちに、姫路市で開催されている再建日本農業博覧会（十月一日～十五日開催）に出品、衆目を集め、特に農機具メーカーには驚きの的となりました。ただ残念ながら会場では実演できませんでした。

このため米原はハンドルの一部を改良した同型の第十一号機を携え、翌年四月九日、戦後初の全国自動耕耘機実演会場（岡山県児島郡藤田村）に臨みました。ところが、実演開始の際始動せず、棄権を余儀なくされるというハプニングが起こりました。スプロケットの材料が三成大火に遭い劣化していたためといわれています。しかし、徹夜で修理し、翌日、吉岡立会いのもとに再度実演して好成績をあげ、さらに大原農業研究所（現岡山大学所属）でトレーラーの牽引を公開しました（写真3）。農業機械化委員会委員として吉岡金市は、同年六月十七日、次の証明書を書き高く評価しました。

『米原式小型自動耕耘機ハ駆進部（注・駆動部）ト耕耘部ヲ分離シ得ル最小型ノ万能自動耕耘機ニシテ実験ノ結果左記ノ如キ特性ヲ有スル最モ日本的ナ農業機械ナリ（中略）右ノ如キ万能機械ハ未ダカッテ出現シナカッタモノデアルガ本機ノ出現ニヨッテ（中略）在来ノ稲作法タル移植栽培ハ直播栽培ニ機械的ニモ変革サレ（中略）水田酪農ノ経営ヲ発展セシメルコトガ出来ル

当面ノ食糧ノ増産ノミナラズ将来ノ日本農業ノ世界的発展ノタメニ本機械ノ寄与スルトコロハ極メテ大デアル』

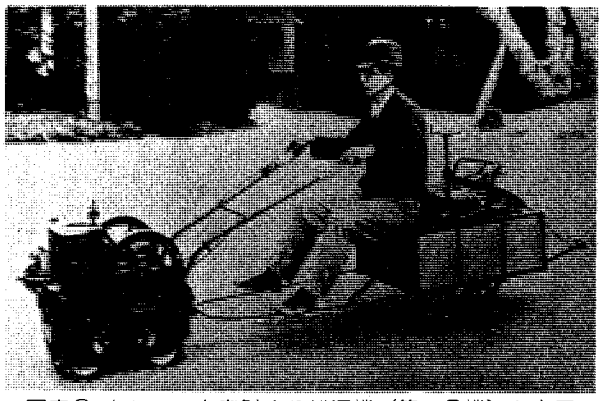
諸元・性能は第十、十一号機とも共通ですから、これによって第十号機の実用性も証明されたわけです。ところで、米原の耕耘機がなぜ耕運機なのか、を改めて述べておく必要があると思います。

先ず耕耘機という呼び方は大正十一年（一九二二）ごろに始まるようですが、耕運機は戦後から、主として新聞記事などで用いられ眼につくようになりました。『耕耘機誕生』の著者和田一雄は『どうも耕耘機と書か

なければ、感じがうまくでていないような気がする。』と述べています。しかし、米原の歩行用・小型・牽引・汎用型機は従来の耕耘専用機と構造・機能が異ります。農林省統計表は昭和三十三年（一九五八）以降、耕耘機を駆動型と牽引型に分けています。筆者は前者を耕耘機、後者を耕運機とする方が、構造・機能をより具体的に言い表わしていてよいと思います。米原の耕運機はその先駆となったのです。

第十、十一号機の実用性は明らかになりましたが、灌水状態の田んぼでは使用できませんでした。米原はその後も研究を続け、第十二号・第十三号機を製作しました。特に第十三号機は水田用車輪装着可能、オイルシールによる防水等によって、灌水田でも使用できるなど、当時、もっとも先進的耕運機になりました（写真4・5）。昭和二十九年（一九五四）六月二十日。亀嵩村中湯野において本耕運機の実演披露がおこなわれました。終わると県農業改良課の荻野博が米原に、九月に赤名高冷地試験場で行われる予定の、耕耘機性能試験に参加するよう勧めました。性能試験を受けて、今後は「県指定機」として製作されては、との配意からでした。

人の運命は分からぬものです。九月に亀嵩小学校改築問題に端を発し村議会解散となり、翌十月米原は議長に選ばれます。更に十二月には村長急逝のあと、村民の総意のもとに推されて村長に就任します。米原の固辞も叶わず重責を負うことになったのです。このため、荻野の勧めは実現せず、耕運機の研究・開発からも遠ざかることになってしまったのです。



写真③ トレラーを牽引する耕運機（第11号機）と米原（大原農業研究所にて。昭和23年（1948）4月10日）

結び

耕運機―第十二・第十三号機は、実は昭和二十四年（一九四九）夏に会社が解散し、そのうえ債務弁済引当金まで盗まれ、資産の大半を失った後に米原が開発したものです。米原が耕運機開発にいかに心血を注いでいたかが窺われます。

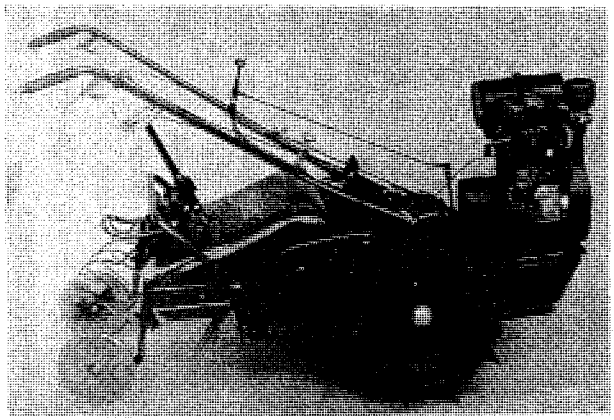
米原が開発の過程で取得した特許・実用新案は二十一件におよびます。それらによれば、既に昭和十四年（一九三九）に駆動部に畦溝立機を装着・牽引し畦立の機械化を可能にしていたことが分かります。

同十七年（一九四二）には㈠駆動部に刈取機、播種機を装着し使用可能にする。㈡肥料および作物の運搬機として、そのまま使用可能とするなどの段階に達しています。

そして戦後、昭和二十二年（一九四七）十月に国産初の耕運機を完成したのです。それは、米国製汎用軽耕耘機メリー・ティラー輸入（昭和二十八年（一九五三）の六年も前のことであり、その輸入に刺激された国内メーカーが、ティラー型（汎用型）耕耘機（＝耕運機）の生産を始める昭和二十九年（一九五四）よりも七年も前のことだったのです。

在来のクランク式耕耘機は一般に振動が大きく、不評でしたが、米原式耕運機は円輪クランク式のため振動が小さく、使いやすかったといわれています。

以上をふりかえるとき、米原清男の先見性に驚くとともに、一九四九年段階で僅か五十台も販売しな



写真④ 耕運機（第13号機）（昭和29年（1954）春製作。ゴム車輪使用）



写真⑤ 代かき中の耕運機（第13号機）と米原（昭和29年（1954）6月20日）

いうち、生産中止に至ったことが悔やまれます。平成三年（一九九一）六月二十九日、米原は九十二歳の生涯を終えました。

後記　本小史を纏めるにあたり、米原氏と縁のあった多くの方々にご教示いただきました。厚くお礼申しあげます。

なお、米原氏が最後に製作された耕運機が、この世に唯一、米原家に保存されています。日本農機具発達史上、貴重な貢献を果たした米原の耕運機が、然るべき施設に保管され、後世に伝えられるよう願ってペンをおきます。

藤井正治著『国産耕運機の誕生―米原清男の生涯』は、8年前1990年出版（新人物往来社）された。頂いて読みその労作に敬意を表するとともに、郡内亀嵩村の米原氏の生涯を余すところなく知るとともに、生涯かけ取り組まれた氏の研究と製作に感動した。当時はまだ生存中だった。

――8頁下段へ続く

最後の一年将軍
徳川慶喜とこの地方
――生涯と一年間の時代



生　涯（1837天保8～1913大正2）

江戸幕府第15代、最後の将軍。水戸藩主徳川斉昭の第7子で幼名七郎麿、または昭致。字は子邦、刑部卿を名のる。天保8年9月29日、小石川の江戸藩邸に生まれる。水戸弘道館で学んだのち、1847年（弘化4）一橋家を継いで慶喜と改名した。

ペリー来航後、将軍継嗣問題で改革派雄藩の松平慶永ら一橋派に推され、南紀派の推す徳川慶福（家茂）と争ったが、1858年（安政5）4月井伊直弼が突如、大老職に就任したあと、慶福を世子に決定したため敗れた。また勅許を待たずに日米修好通商条約に調印したことに対し、慶喜は、実父徳川斉昭、尾張藩主徳川慶勝らとともに不時登城して大老を詰責したために、登城を止められ、翌年の安政の大獄で隠居謹慎の処分を受けた。しかし、60年（万延1）井伊直弼が桜田門外に暗殺されてのち、幕政の宥和方針によって謹慎を解かれ、さらに62年（文久2）勅使大原重徳と島津久光が東下して幕政改革を迫った際に、勅旨により、一橋家の再相続を許され、同時に将軍後見職に任ぜられた。

かくて事態は一変し、慶喜は、政事総裁職についた松平慶永とともに幕政の頂点にたつことになったが、改革は難航した。63年、朝廷の攘夷督促に対して自ら開国を説くべく上洛して朝廷と折衝したが、かえって尊攘派勢力の工作によって攘夷期日を5月と約束させられて江戸に帰った。同年8月18日の政変により、京都から尊攘派が排除されると再度上洛し、松平容保、同慶永、山内豊信、伊達宗城とともに、朝議参与を命じられた。しかし、あくまで幕府中心の改革を主張する慶喜は他の参与と対立し、参与会議も失敗に終わる。64年、慶喜は参与と将軍後見職を辞任して禁裏守衛総督につき、禁門の変に活躍、翌66年（慶応2）の第2次長州征伐で東軍が敗戦を重ねるうち、家茂が死去したため、12月、第15代将軍職を継いだ。

フランスと結んで洋式軍制改革を行い、幕府の制度も改革して成果をあげたが、大勢挽回はならず、1867年10月、討幕の密勅が下ると同時に大政を奉還した。なおも諸藩連合の政治体制のなかで徳川氏の権力を維持することを策したが、12月、討幕派に動かされた朝議が王政復古を宣し、年が明けると鳥羽・伏見の戦いにおいて幕府軍は大敗した。

慶喜は海路江戸に帰還し、フランス公使ロッシュらの再挙の勧めを拒否して上野寛永寺に移り、謹慎の意を表した。江戸開城後は水戸で謹慎し、新政府の命によって徳川宗家の家督を田安亀之助（家達）に譲り、駿府に移った。69年（明治2）謹慎を許され、のち公爵に列した。大正2年11月22日没。

在職一年

15代慶喜は、最後の将軍である。最後の将軍だから、なにかと異例のことが多い。

たとえば彼は、将軍在職中一度も、自分の居城である江戸城に入ることができなかった。彼は京都で征夷大将軍に就任し、京都でその辞表を提出した。その間、外国使節団応接に大坂城まで出向くのが精一杯で、江戸へは遂に帰れない。危なくて京都を離れられないのである。老中はじめ幕府執行部も江戸・京都に二分され、不便なことこのうえないが、みんな耐えている。反対勢力に天皇をかつがれたら幕府の存立にかかわる、という局面になっていたからである。

辞表を出した将軍も、慶喜だけである。14代家茂も出そうとしたことがあるが、これは禁裏守衛総督だった慶喜が必死に押しとどめた。提出は見あわされた。家茂の辞表は、慶喜へのあてつけだったのだから、慶喜としては阻止せざるをえない。

それに対し、慶喜の辞表は、慶喜自身の高等作戦である。こ

れによって反幕府勢力の政治的結集に水を差そうとした。作戦はやや効を奏して、慶喜は辞表提出後も2ヵ月近く政局の主導権を握りつづけるのだが、やがて薩摩・長州のまきかえしにあって、辞表は「聴許」されてしまった。将軍就任から辞表聴許まで、ちょうど一年である。

1年という在職期間の短さも、もちろん異例である。15代中で最も短い。絶対年数が短いだけでなく、それ以上に、肉体的生命すなわち寿命との比率で、甚だ短い。虚弱短命ゆえに在職年数の少ない将軍は他にもあるが、慶喜は実に数え年で77歳まで生きている。満で76年と2ヵ月。それだけこの世にありながら、将軍は1年だけという点で、その短さはきわだっている。

ただし、右にいう1年とは、征夷大将軍に叙任していた期間であって、徳川宗本家の主(あるじ)だった時期は、もう少し長い。慶喜には、徳川宗本家当主だけれども、征夷大将軍ではないという中途半端な段階が、将軍就任の前に4ヵ月、辞表を「聴許」されてしまったあとに半年ほどある。この異例さも、最後の将軍なればこそのことだった。

（NHK大河ドラマにあわせて毎年、その時代の奥出雲をかなり描き出すことができたが、最後の将軍はなかなかとり組みができない。それでも話題となるもの若干が浮かんで来るのでとはじめた次第。この号は数冊の人名辞典を参考として記述した。）

開国と攘夷

ペリーが米国大統領の国書を持って浦賀に入港したのは、①対中国貿易の中継地の必要 ②大平洋の捕鯨基地獲得の必要 ③フランスの二月革命のため、英・仏両国が極東に力を注がれないすきをねらって、門戸開放をせまった。

幕府はペリー来航の動きをオランダを通して知っていたが、策がなかった。水戸の徳川斉昭や外様大名の島津斉彬らの発言力が増した上に、将軍継嗣問題で、幕府は井伊直弼派と徳川斉昭派に分裂した。

翌年再びペリーが来航し、やむを得ず和親条約（下田、函館の開港とここに領事駐在させる）を結び、露、英、蘭(ロシア・イギリス・オランダ)とも同様の条約を結んだ。3年後ハリスが

斐の上川柳四月の句

せめてもと紅を一すじひいてみる　松浦亜以
ときどきは齢を忘れている良さも　真綿よし子
世直しは誰がやるのか夏がくる　児玉哲呂
小川辺り吉野桜はやっと咲き　足立玉恵
仲裁はもうこりごりと音をあげる　藤原のぼる
雑草に攻められている老いの庭　児玉えみ
行革の荒波よそに花見酒　田中芳春
一人でも食べねばならぬ日に三度　松浦久寿
連休日家に居るのは老と老　田中有樹絵
春雪に炬燵もぐって句をひねり　安部正子
なんとなくとんちんかんに老二人　藤原千代子
友が来て世間の風をおいて行く　田部都
腹の底笑った良い日よく眠れ　渡部ミツコ

春愁　簸の上短歌会

妻なりし日の倖せと先ざきの心もとなに春愁ふかく　永井弥生
わが横に誰も居らざる生活にも慣れて真白き水芭蕉咲く　仝
妻に食事摂らせ終ればラーメンの残りしつゆに飯入れて食ふ　人
皺よりて枯れ木の如きわが身にもときに芳醇の酒滴らす　常盤はるまさ
あざやかに咲き極まりて散りそめる花の蔭に孫と遊べり　仝
友よりの形見となりしヤブランの二十年経て今年も咲きぬ　人
うららうらと春の陽あまねき畑中に菜を摘む老婆と幼子の見ゆ　岡田時子
はるかより棹売りの声近づきぬ何処まで行くや春の夕暮れ　諸角長子
妻と子を先に逝かせて生きてゆく老いゆくわれのかなしみふかく　野村節子
　仝
　人
　安部夕波

柴栗句会四月抄

タンポポの茹の旅天の穹きかな　淺野としお
春なれや人恋しさに文をかく　糸原古志
臥せし躯は爪伸び易し木芽どき　恩田和美
鯖寿司の海の色して春深し　加納信子
うららなる春陽を握る赤児の掌　楠房子
旅すがら一期一会の遍路笠　高木白虹
ありし日のこの径この杖花すみれ　中澤美紀子
吾が人生花の如くに終りたし　新出谷一華
貧しさは一人の夕餉蕗の苔　錦織富江
花に酔ひ彩に舞いたる土手の人　峯石美代子
初蝶の横断歩道渡りけれ　渡部夕峰
連なれる深山織りなす山桜　岩佐住江

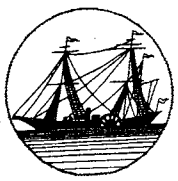
柴栗句会五月抄

春眠や舟こぐ卒寿の顔やよし　淺野としお
人待つや蛙けろけろうつつなる　恩田和美
それぞれの彩もつ芽木の庭あかり　加納信子
手をふって巡る舟路や春の湖　楠房子
玫瑰の咲きし入江の繋ぎ舟　高木白虹
新緑をトロッコ列車突っ走る　新出谷一華
裏木戸に今朝も来てゐる青蛙　錦織富江
湧き水を手で掬い呑む春うらら　峯石美代子
山吹を一枝所望し坂下る　渡部夕峰

斐の上川柳五月の句

通知より祝電先にくる叙勲　児玉哲呂
嫁道具箪笥のごみが捨てきれず　松浦久寿
重ね着し今日は気まぐれ真夏日か　安部正子
土と風聞きつつ農に生きて見る　真綿よし子
年金者花見にちらし寿司が向き　児玉えみ
いいところほめてやる気に火をつける　藤原のぼる
いそいそと就職二年板につく　渡部ミツコ
亡き母の月命日の墓参り　高木凡太
舌足らず思いがちゃんと届かない　藤原千代子
少子化を思うさびしい鯉のぼり　横山まこと
騒音の間をぬってホーホケキョ　田部都
捨てるゴミ仕舞うゴミみな君のゴミ　田中有樹絵
食べること眠ることまだ一人前　松浦亜以
若芽立つ山をながめりや藤の花　足立玉恵
バンザイをしてから後の長丁場　田中芳春

総領事として着任し、通商条約の締結を迫った。水戸藩をはじめ反対が多く、勅廷でも攘夷論が強かったが、大老となった彦根藩主井伊直弼は2年後の安政5年1858、日米修好通商条約に調印し、（神奈川（のちの横浜、下田の代り）・長崎・新潟・兵庫を開港、自由貿易と関税率を強要された。治外法権を認め、関税自主権もないという不平等条約）ついで英・蘭・仏（フランス）・露との間にも締結した。翌年、神奈川（横浜）・長崎・函館が開港されると、貿易額は年々増加したが、国内の経済状態がいちじるしく混乱した。とくに下級武士や民衆は生活困難においこまれ、下級武士たちはその原因は開国にあると考えたので、勅許を得ずして締結したことから、尊王攘夷を旗印とする運動が急速に激化した。ついに井伊直弼は暗殺された。



晩春回想　簸の上短歌会

病み臥してこころ弱るか妻の目にさくら見すれば涙ぐみけり　常盤はるまさ
法要に集ひし妹ら白髪の目立ちかたみに寄る齢を言ふ　野村節子
山を拓くわれのかたへで遊びたる吾子の子供服いまも箪笥に　緒角長子
児を養に座らせ夫と鍬をもて棚田を打ちたる日もおぼろなる　永井弥生
たまゆらに椿は散りぬ鳩丘の日だまりの砂乾きゆくなり　安部夕波

——6頁より

藤井氏は何とかして米原氏のわが国に於ける先駆的功績を後世に残したいと熱心である。それに協力したいと願っていたところ、原稿を頂いたので、またまた合併号として一挙に掲載し、関係方面にも差上げたいとした。藤井氏の御厚意に厚く御礼を申上げたい。

安来市の方で、県立高等学校の教師として、日本作物学会、日本植物学会ほかの会員でもあり、イネの栽培に関する研究を多数の著書、論文で発表しておられる篤学者である。

おわび——昨秋以来続けて合併号としました。編集者の都合（体調）と他誌への約束した執筆も断われず、負担増をさけるため、他誌への執筆のものを（少し堅いですが）少し短くして載せて、発行を続けさせて頂きました。今月も合併号は既述のような関係で致しました。よろしくお願いします。（編集者　高橋一郎）

会員頒布一部四〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座　松江〇一四一〇—九—一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四—五二—〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第280号（7月号）
1998.7.4（M131.T87.S73）
奥出雲編集集団
横田史談会

©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

BUMAIV
—1998—

報告

金属の歴史国際会議

㊤奥出雲の企業たたらの歴史

㊤奥出雲の砂鉄製鉄業

—近代化は西欧に260年遅れたが—

去る5月25～28日松江・くにびきメッセを中心に行われた会議の第3日—日本語シンポジウム鉄の部会において、研究発表報告（三本の柱—近代化・松江藩と鉄師・技術改良と自然との共生）の近代化部について加筆して、6月11日山陰中央新報文化欄に載ったものである。他の部分は別途加筆して発表する予定。国際会議のため世界の製鉄史の中での位置づけを明確にし、奥出雲の砂鉄製鉄史を述べたものである。この発表については、基礎的なことは本誌271 272 273に274・5 276・7号に述べてある。発表当日は274・5 276・7号の年表を使用して行った。

尚本紙再掲載にあたり、随所に中央学会誌、編著書および「奥出雲」に載せた関係部分を註記しておいたので、参照の程を。

近世企業たたら

奥出雲では江戸初期から、多い真砂（まさ）砂鉄と赤目（あかめ）砂鉄と木炭を用い、砂鉄製鉄業である近世企業たたらの操業が始まった。江戸末期にはそれまでの四日押（四昼夜操業）を、長年かけて苦心の末、一昼夜短縮の三日押に移行させた。



①（鉄滓・銑をとり出す）

㊟「金　属」1988 7月号（アグネ社）
「金属の文化史」1991刊　（アグネ社）
「ふえらむ」1996 11月号（日本鉄鋼協会）
「BOUNDARY」1997 6月号（コンパス社）
「BUMA IV準備会議・奥出雲のたたら製鉄の表象」

そのころの一代の製品の五割は銑、五割は炉底にたまる鉧（割って分けると三分の一が鋼、三分の二が歩鉧＝ぶけら）であった。このうち銑と歩鉧は大鍛冶（おおかじ）場の二工程で鍛えて割鉄（わりてつ）（明治中ごろから包丁鉄と呼ぶ普通の鉄）とした。割鉄は数量が多い上に道具用の鉄として需要が多く、生産量も少なく需要の少ない鋼の二倍の高値（江戸時代から明治中期）であったので、鉄師の収入の八割を占めたから、鉄師は銑増産に努力した。

㊟ 割鉄・鋼の価格
「奥出雲」256 276 277号

科学思想と技術の発達の遅れから、真砂砂鉄の多い地帯の三日押でも、低温送風を脱し切れず、いつまでも銑のほか鉧ができていた。

それに引き換え赤目砂鉄地帯の四日押では銑のみが生産されていた。一つの見方として真砂砂鉄の多い地帯（奥出雲・西伯・東部石見）では、低温操業のため鉧ができ、銑の生産を少なめたともいえる（後世三日押を鉧押法、四日押を銑押法と呼ぶ人もあるが、奥出雲では全く使っていない。三日押も銑生産を主力としていたからであろうか。）



②

西欧の近代化時代の日本

西欧が日本と同じ低い箱型炉②で低温送風で鉄鉱石から小鉄塊を作り、鍛冶屋で錬鉄（割鉄にあたる）としていたのを、水車吹子（ふいご）を用いて高炉内を高温とし銑を流し出し、それを鋼とする近代化を完成し、現代の洋式製鉄業の基礎を築いたのは、江戸時代前期の十七世紀半ばごろで、日本ではやっと近代企業たたらが軌道に乗ったころであった。それから二百年を経た幕末に、鉄師絲原（島根県横田町）は松江藩の蘭学者が訳した、この製鉄法をまとめたオランダのヒューゲニンの本を読み、銑の生産増を考え、その本を

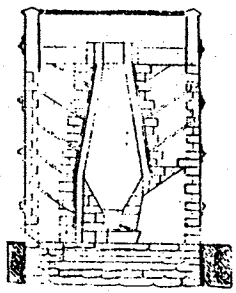
㊟ ヒュゲーニン「奥」213号
薩摩藩の角炉「奥」213 217 251 248 250号

金属の歴史国際会議・俳句・川柳・横田三十三番札所めぐり⑱

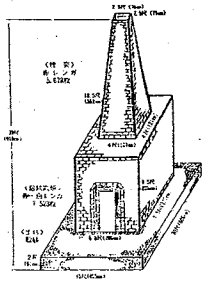
知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

基にわが国で初めて角炉（たたら炉の約八倍の高さ）で、砂鉄から銑のみを生産していた薩摩藩を視察した（安政年間）。③

続いて明治初年、民営の群馬県中小坂製鉄所の、鉄鉱石を木炭で高炉で銑鉄とし、パドル炉（溶けた銑をかき回す）で鋼とする銑鋼一貫の設備を参考とし、砂鉄を高炉とパドル炉で銑→鋼とする工場の設計書④も準備した。また維新後政府の招きで来日した多くのお雇い外国人学者の一人のライマンの来訪もあって、企業たたらの改善への助言も受けた。



③（幕末導入の高炉）



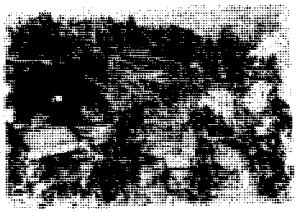
④（設計書の図）

ところが輸入鉄が増えて不況となったので、この転換には慎重を期していた時、仁多郡内の全村長は、村々の貯金を賃金に提供するから、農民の唯一の賃金収入の場である製鉄業（農家一戸平均一・五人が関連従事者）をいままで通りと嘆願してきた。そのうえ大水田・大山林地主の鉄師には、維新の国是「農村振興」の責務もあったので、両者の経営に努力を注ぎ、製鉄業では明治十五年奥出雲の産額は全国の産額（釜石の洋式製鉄も含め）の五割を占めるに至った。それに注目した海軍省・工部省の技官や将校は、二十年代にかけて足しげく視察に訪れた。

㊟　明治15年産額「奥」256号

一方の農村振興の多方面にわたる施策は着々と功を奏し、大正初年までに県内でも珍しい農林畜の産業地帯となり、大正末年の製鉄業の一斉廃業の痛手も少なくすることができた。

幸い明治時代の二度の戦没による鉄の需要増は、水車動力送風法の導入も加わって、三日押での鉄師の銑増産への努力となり（鋼の量は変わらず）、ついに鉄師卜蔵（横田町）⑤は三日押で最高の二倍量の銑生産を記録した。これに勢いを得て家島（広瀬町）とともに組合をつくり生産を進めた。



⑤（卜蔵の原釦）

一方、絲原は桜井（仁多町。当時吉田村田部、横田町絲原・卜蔵とともに二百余年の歴史をもつ出雲四大鉄師）とともに、増え続ける銑を鋼とする電気炉開発を目指し、技師伊部喜作に協力して成功した。（長野県で開発第一号があったが実用化せず）松江（三基）・安来（四基）に設備し、雲伯鉄鋼組合も発足し鉄鋼へと前進した。これは明治時代末期のことである。

電気炉製鋼をめざし角炉時代へ

電気炉製鋼時代を迎えると、近世企業たたらは近代化を目指して、低炉（箱型炉）から高炉（角炉）での銑（くず）生産を、と模索し始めた。

明治二十年代に官行広島鉄山で、留学帰りの小花技師は企業たたらの近代化を目指し、高炉方式への転換を試み、その弟子黒田技師によって完成した。中国山地各所にある鉄滓（てっさい）＝大鍛冶（かじ）滓・鍛冶屋金糞（かなくそ）＝を木炭とともに角炉（たたら炉の九倍余の高さ）に投じ、石灰石も加えて水力動力による吹子（ふいご）送風で高温度とし銑鉄を生産する方式である。

㊟　広島鉄山角炉　大橋周治著『幕末明治製鉄論』に

この角炉が企業たたらの操業を減したり廃止して、伯耆・出雲・備後・備中の各地三十余カ所に設置され操業開始した（仁多郡内で六カ所、うち四カ所は横田町内）。

絲原は近くに福羅寿製銑工場を設けたが、木原小一郎技師の種ケ島での経験からの意見に従い、鉄滓吹きを採用せず砂鉄吹きで大正六年日産三トンの出銑に成功した。低温による企業たたらの前近代的操業のすべてを改善しようとして、幕末維新を生きた絲原権造の夢はようやく五十年後に実現した。翌七年横田町大呂の地主堀江は委託を受けて、近くに同型の角炉を設け操業を開始した（後の鳥上木炭銑工場の前身）。

ヒュゲーニンの著書の輸入から七十年、ヨーロッパの製鉄業の近代化が実現してから二百六十年にしてようやく、わが国の砂鉄製鉄業の近代化は、各方面の近代化にはるかに遅れて実現した。

第一次世界大戦から

第一次世界大戦中から洋式近代製鉄を行う八幡製鉄所の生産は本格的となり、生産性の低い角炉、企業たたらは戦後一斉に廃業に追い込まれた。ただ大呂の木炭銑工場だけは引き継がれ日立金属の所属となり、昭和四十年まで操業を続けた。生産された木炭銑は、特殊鋼であるヤスキ鋼となり名声を高めた。

大戦中、某海軍将校は東京の

㊟　中小坂鉱業所「奥」257号
ライマン　「奥」266号
〃　島根大学紀要
〃　英文のレポート

商社を介して、一振りの刀剣用の鋼材等を絲原にたってと所望している。これは昭和八年鳥上鳥上木炭銑工場の一隅に、刀剣用鋼を得るために設けられた靖国炉へとつながるものであろうか。この炉は三日押で銑と鑄(けら)を生産し、その鑄の中の鋼(玉鋼)を得るための、補助金を使っての文化財刀剣の原料素材生産の文化事業であった。

玉鋼の名称の起こりは、明治二十九年海軍工廠(しょう)の要望で今まで頭大の鋼を頃鋼(ころはがね)と称して納入していたのを、拳(こぶし)大とし、品等も分けて納入し始めた時から、形の変化で生まれたもののようである。絲原では職人の一人を二年間、一人を半年間陸海軍工廠に派遣し、冶金(やきん)学や分析を研究所で研修させ、この選別に対応した。海軍工廠との多量の鉄材の納入共同契約は明治三十一年から四十二年まで続き、雲伯の四大鉄師はそれぞれの分担量を納入したが、包丁鉄が六割を超えていた。

今日の日刀保たたらは、かつての靖国炉の遺構を復元し、昭和五十二年から真砂(まさ)砂鉄のみを使用し、かつて生産品の一部であった鑄のみを生産し、その中のわずかな美術刀剣の一材料の鋼を得て刀匠の求めに応じている。文化財である伝統技法は補助金も得た冬季間数代の文化事業である操業に発揮され、高価な玉鋼を生んでいる(新三日押と呼び分けたい)。

(横田史談会　高橋一郎)

御存じでは？ 尻取り遊びについて 御協力下さい

このところ堅いことばかり連載しました。よい折ですので一寸。

滋賀民族学会『民族文化』最近から。

年長者からその言葉の簡単な説明を受けて納得したり、小さい子が発した不可思議な言葉を暗黙のうちに皆んなで認め合ったりする、そうしたやりとりを楽しむと同時に新しい言葉も覚えていくという有意義な遊びであった。こうした言葉遊びはかなり昔からあったのではないかと思われる。

『大言海』をひくと「言葉ノ尻ノ文字ヲ取リテ更ニ、他ノ言葉ニ云続クル遊」とあり、『広辞苑』には「はじめの人が言った物の名の語尾の一音を、次の者が頭字として別の物の名を言い、これを順につづけてゆく遊戯」と説明されている。この両辞書の説明は同じようにみえるが、実は微妙に異なっている。

鈴木棠三著『ことば遊び』(中公新書)の「尻取りことば」のところをみると「牡丹に唐獅子竹に虎、虎を踏まいて和唐内、内藤さまは下り藤…」のように、尻の文字を次の頭にとりあげていく方式が出ており、『広辞苑』の説明のように語尾一字をとりあげる形式の尻取りについては説明されていない。

筆者が小さい時、明治三六(一九〇三)生れの父からよく聞かされ、今でも覚えている尻取り言葉があるので次に紹介したい。

父の幼少の頃には、日露戦争の勝利の興奮がまださめやらぬ時期で、村内の戦争帰還者から生々しい戦闘の思い出話を耳にして心おどらしていた頃に流行していたものと思われるが、これが全国的なものであったか、一地方的なものであったかは、識者のご教示を待ちたい。

曰く「スズメ・メジロ・ロシヤ・ヤバンコク(野蛮国)・クロポトキン・キンタマ・マカロフ・タカジャツポン・ポンヤリ・リクグンノ(陸軍の)・ノギサンガ(乃木さんが)・ガイセンス(凱旋す)」

以上のように「ス」で終わり、もとの「スズメ」に堂々巡りするものである。

ここに言うクロポトキンとは、『革命家の思い出』を著わしたロシアの無政府主義者(一八四二～一九二一)で、マカロフは日露戦争時、旅順港外で戦死したロシアの極東艦隊司令長官(一八四八～一九〇四)である。

また、シリベタ(尻臀)は近年あまり使われない言葉であるが「シリペタ」「しりこぶた」「しりたむら」とも言い、尻の肉の盛り上がった部分をさす。タカジャッポンとは、中折帽やシルクハットのような丈の高い帽子のことを言う。ポンヤリとは「ボンヤリ」と同義で、本来は副詞であるが「ボンヤリしている人」の意で、名詞として使用されている。

さて、父から教わったこの尻取り言葉は、当時の世相が読み込まれていて面白いと同時に、尻取りの規則においても、かなり自由であったことがわかる。つまり「ン」で終る言葉を言えば、現代の尻取りではその人の負けとなるが、当時は「ン」の前の言葉をだき込んで次の語に移っている。また「陸軍の」、「乃木さんが」のように助詞が使われたり、「凱旋す」のように動詞も可となっている。

現代の規則「名詞のみの連続」もここでは無視されている。つまり、江戸期から明治期にまたがって行われていた言葉尻の発音文字二字を次に続ける方法も受けついで、語尾の一字のみを続けていく新方式の尻取り遊び

柴栗句会六月抄

童の出臍おかしき夏来る　浅野としお
更衣何年振りにセルを着る　糸原古志
この話放っては置けぬ掻き氷　恩田和美
一刻の憂忘れて花菖蒲　加納信子
花菖蒲ふれゆく風の優しきに　楠房子
着古るし糸の紊れや衣更　高木白虹
ぽつかりと巻山木の花明り　中澤美紀子
嬰在りて未来托せり鯉のぼり　新出谷一華
更衣あの日あの頃若かりし　錦織富江
訃報あり栗の匂いの中急ぐ　峯石美代子
梅雨空やほぐれし糸のまた絡む　渡部夕峰

斐の上川柳六月の句

決断のたびに額の皺が増え　藤原のぼる
一人前買ってふたりの昼すませ　松浦亜以
全世界一番悲しい核実験　田部都
からすまで祝いに来てる叙勲の日　児玉えみ
遊ぶにも送り迎えを親がする　藤原千代子
友入院もう順番が来る思い　横山まこと
バイキングあとはそろって胃腸薬　児玉哲呂
三橋をわたる旅終え元の人　田中有樹絵
ランドセル親の期待に程遠し　渡部ミツコ
賑やかな人がいたので座が和む　松浦久寿
横綱になって嬉しい若の花　足立玉恵
茄子を植え一雨降れと空をみる　真綿よし子
老みんな戸惑うている寒暖差　安部正子
当ては何処今日のおめかし只ならぬ　田中芳春

への転換期に、この「スズメ・メジロ…」がくるのではないかと考えられるのである。

（大津市・兼康保明）

編者の記憶では、当地方では日本の（或は陸軍の）・乃木さんが、凱旋す・スズメ・メジロ・ロシヤ・ヤバンコク・クラバトキン・キンタマ・マケテニゲルガチャンチャンボウズ…？不明

御存じのお方編集まで。滋賀県へお知らせ致します。

比較研究法　民俗学の特色は比較研究法である。観察と比較を精密に行い、できるだけ多くの類例を集めて、帰納的に判断せなければならない。

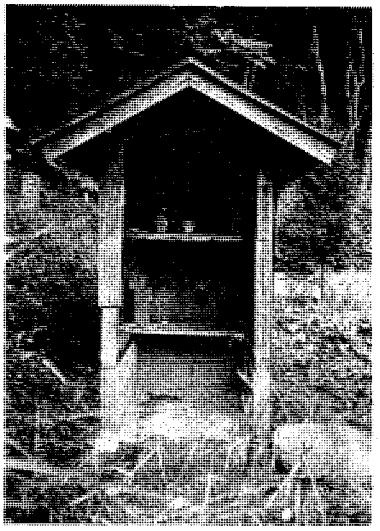
民間伝承の著しい特色はそれが記録によらないで受け継がれてきた点にある。長い年代にわたって伝承されて行くうちに、少しずつ改変されて行く。しかもこの改変は土地によって一様ではない。あらわれる形は地方々々で千差萬別であるのはこのためである。

その類似と差異が極めて重要な観点となるのである。

横田三十三番札所めぐり⑱

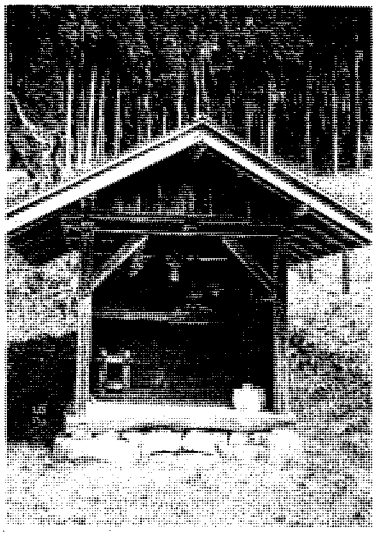
第22番　下横田・こんだわ　惣増院

照らします大悲のちかひ代々かけて
よもや迷はじ参る衆生は



第23番　八川・金川　善通寺

伝え聞く悪をやむるは善通寺
参るともからたのもしきかな



（写真　横田史談会　佐世川徳雄）

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

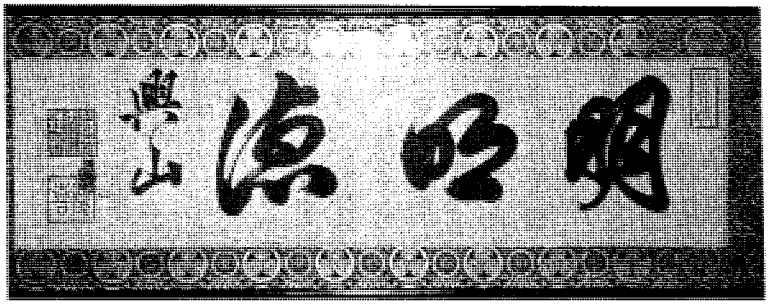
題字　糸原風亭書
第281号（8月号）
1998.8.7（M131.T87.S73）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

墨跡展にみる時代

絲原記念館夏季特別展から

墨跡展にみる時代・日本にとっての中国の儒学瞥見・短歌・俳句・川柳



▲ 徳川将軍家15代 徳川慶喜（号・興山）筆「明明徳」

「明二明徳一」（人の道に適した明らかな行いを学ぶ）は儒学の基本の四書の『大学』の冒頭の句であって、続く句の最後が治国・平天下となり、政治の要諦が説かれている。

『中庸』も四書の一つであるが、同時にこの語は知行合一を説き中正の道を説いているこの道徳の総合解釈書の中心の教えである。

前者は最後の徳川将軍で大局の推移の論断にすぐれ、東照宮（家康）の再来といわれ、大政奉還をなした慶喜の筆蹟である。大らかなうちに明徳が輝いている。後者は江戸初期の儒学者で朱子学派から王陽明学派に移り、野に下って身分差をこえた人間の内面的な平等を強調し、庶民に近江聖人と慕われた中江藤樹の書で、中庸（かたよらず常にかわらない）の徳がにじみ出ているのを感ずる。ともに孔子の思想に発し幕政の中心に置かれたものである。

林羅山は江戸幕府の官学昌平黌を創立の朱子学者で、儒学を中核に置いた人物である。「詩話三則」は漢詩の作詞の根本的手法を平易に述べた文章ののる大幅である。これはのち昌平黌で学んだ安芸の頼一族の書四幅に展開する。春水・春風・杏坪の三兄弟、春水の子山陽のそれぞれ清廉された七言絶句の漢詩である。逝く春を友と惜しむ情景、吉野を訪れて春風・杏坪が歌い込めた愛国の心、こうした中で育った『日本外史』の著者山陽は、備後神辺の廉塾が頭として管茶山が西日本の詩壇に捲き起した、身近な生活に詩材を求め、写実・実情を重んずる作風にも親しんだ。長崎の夜の詩は心にくい。

杏坪・茶山ともに横田の三井野峠を越え、春水は赤名峠を越えて山陰に遊んでいる。山陽には富田城尼子氏の漢詩もある。

絲原家十一代権造は幕末維新の当主で、藩主との縁も深い。同家の和漢のおびただしい蔵書に、蘭学特に理科の書を加え、鉄師として極めて生産性の低い企業たたらの改良にとり組み、一方農村改革に幾多の経論を実現した人である。

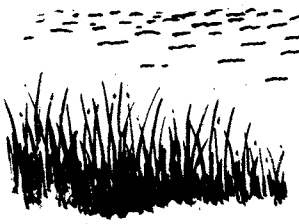
松平藩主松平定安（慤堂）直應（寛堂）の書はその縁の深さをしめすものである。貧民救済にも心を尽し、月照寺の碑文によれば、新時代を目指してフランスを学び、周遊を志すが果すことができなかった直應の墨跡には、憂愁の句の中にも気迫を漲らせている。

「深夜の空には北風が吹きつける。火の燃える炉のほとり座って夜明けを待っていると、あやしい一声がして庭の竹が折れる。私は部屋の外で雪がひらひらと舞うのさえ知らない」－冬夜即レ事為二絲原氏一－（意訳）とある。激動時代の意中を権造にあてた信頼があふれている。

（もう一幅も展示）

この他維新の功臣三条実美（尊皇攘夷派の主）・山岡鉄舟（江戸城明け渡し解決）・伊藤博文（初代総理大臣）のそれぞれ風格のある墨跡。明治大皇の和歌の師高崎正風のおおらかで美しい水茎の跡。有栖川宮熾仁・熾仁の有栖川流の書。さらに絲原家に来訪した人々などの墨跡がある。明治維新に山陰道鎮撫総督として松江に入り、大社藤間家を本陣とした西園寺公望がそこへ贈った、儒学精神の真髄を述べた書がさらに華を添えている。

激動していると思われる昨今、味えば味うほど味もある。



なかなかに波のまにまにまがせたる（まことに）

かもめは世にもしつまさりけり（天性）（の姿）

寄鳥述憶　高崎正風

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

日本の思想・政治・文化に大きい影響を与えた 中国の儒学 瞥見

儒学とは

中国の代表的思想。春秋時代末期の孔子（孔丘）に始まり、戦国時代には諸子百家（多くの学者思想家）の一つであったが、漢の武帝の紀元前136年（建元5）に国教となり、それ以後清朝の崩壊に至るまで歴代朝廷の支持を得、政治権力と一体となって中国の社会・文化の全般を支配してきた。また漢字文化圏とよばれる日本、朝鮮半島、東南アジア諸地域にも伝わり、大きな影響を与えている。

同類の語として儒学・儒家があるが、中国では儒教の語はあまり用いられず、学派を意味する儒家、その学問をいう儒学の語によってこれを示すことが一般的である。儒教の語は、外来の仏教に対して300年ごろに生じたものであるらしく、後世に至るまで主として儒仏道三教を並称するような場合に使用されていた。儒家・儒学に対していえば、儒教は教化の面を重視する学である。修己とは自身において道徳的修養を積むこと、その意味で儒教は倫理の学である。しかしその**修己は、自身のためであると同時に治人を目的とする。**具体的には士大夫として人民を治めるための政治の学である。ところが**儒教でいう政治とは、法律や刑罰で民を規律することではなく、道徳によって民を善導することにあり、そこでまず己を修めることが必須とされたのである。**

知徳の優れた人を「君子」と称するが、君子はまた治者をも意味した。その反対は「小人」であるが、被治者である小人には自身で修養する能力はなく、治者（君子）の教化をまって初めて道徳的たりうるとされる。さらに最高の知徳を備えた人を「聖人」と称するが、**聖人とは同時に帝王として天下に君臨すべきものとされ、ここに聖人即王者という、世界に類をみない「聖王」の概念が成立する。**最高の聖人である帝王（すなわち聖王）を頂点とし、士大夫はそれぞれに積み重ねた知識教養によってこれを輔翼する、かくて道徳政治（徳治）の全きことが期待される、というのがその理想であって、ここに**倫理と政治との一体化がみいだされる。**

さて教の根本は「仁」で、人に接する真心と思いやりであり、それは父母兄弟の近親から次第に他に及ぼすものとされた。（人類愛とは区別される）　それが広く拡大されると「仁政」となり、その人は聖王となる。すると「仁」は治政の原理ともなった。

また「五倫」といって、対人関係を次のようにも考えた。父子の親、君臣の義、長幼の席、夫婦の別、朋友の信がそれである。70才世代以上の人には心に残っている言葉である。

これは紀元前136年に国教化される以前の原始儒教ですでに確立していた。春秋末期の乱世に、孔子は外には礼によって失われた秩序を回復し、内には人に接するに仁をもってすべきことを説いた。そして人間中心的思考で貫いたので、儒教教団が発生し、孔子の死後門人は各地で布教を拡大した。それに刺戟されて多くの諸子百家があちこちにあらわれ、いろいろの説を述べた。

漢・唐時代には大乗仏教の哲学が主流となったが、宗・明時代になると反省から新儒教が生まれた。南宗の朱子（朱熹）によって完成した朱子学で、四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）を尊重する時代となり清末に至る。そして王陽明の陽明学派もあらわれた。

現代中国では、自由平等を説く時代思想の前では批判にさらされたが、民衆の間には根強く生き残っているし、権力者側にも温存しようとする動向がある。

特　色

儒教はひと口にいって「修己治人」（己を修めて人を治める、という意味の朱子のことば）の学である。修己とは自身においい

日本における歴史

すでに早く4世紀の末、5世紀の初めごろ、中国の古代儒教が伝わり、古来の祝詞にみえるような素朴な神道倫理を補い、氏族共同体（蘇我・物部などの豪族）を単位とする小さい氏族国家の思想の中心となり、継体の時代から欽明の時代ころにかけて（6世紀ころ）、朝廷が百済に五経博士（儒教学者）の交替派遣をしばしば要求したことは、国家統一への関心の強さのあらわれであった。

聖徳太子の執政後、大化の改新、天武の改革、持統・文武の新政に至るころ（7～8世紀）

先月号の「しりとり遊び」に3人の方から貴重な意見を頂きました。御礼申し上げます。

西暦	中国 時代		日本 時代		
B.C 700	春秋時代	原始儒教 孔子 (釈迦)	縄文晩期		
430	戦国時代	孟子・老子・諸子百家			
221	秦 始皇帝	I 万里の長城			
202	前漢		弥生前期		
136	武帝	儒教 国教化へ 五経博士			
0			弥生中期	倭百余国の部落国家	
57		II		志賀島の金印 (光武帝より倭王へ)	
170ごろ				邪馬台国 王に卑弥呼	
220	三国(魏・呉・蜀)				
239				〃 魏に遣使	
248				卑弥呼 死	
300		儒教という	古墳時代	大和朝廷 (大和・九州移動・騎馬民族)	
5世紀初				古代儒教渡来 氏族国家の思想の中心へ	
439	南北朝時代				
538			飛鳥時代	仏教公伝	
587	隋			(継体・欽明天皇)	
604				聖徳太子 憲法十七条	
607				遣隋使 法隆寺	
618	唐				
				遣唐使	
645			白鳳時代	大化改新 儒教・律令国家の柱に	
710				(神・仏と連合して)	
				(天武・持統・文武天皇)	
			天平時代	平城京 (奈良)	
794					
			平安時代	平安京 (京都)	
907	五代				
960	宋				
	北宋	III (新儒教へ)			
		朱子学			
1127	南宋				
		1180完成			
1193			鎌倉幕府		
1279	元				
		(西欧でルネッサンス)			
1338			足利幕府		
1369		王陽明学派		戦国大名(王陽明学派へ)	
1603			江戸幕府	昌平黌 (朱子学で)	林羅山
1644	清				中江藤樹(陽明学で)
		IV			
1767		(西欧で産業革命)			
1787		(フランス革命)			
					頼家一族
1832					頼山陽 死
1854				日米和親条約	
				日米修好通商条約	
		(アメリカ南北戦争)		安政の大獄・桜田門外の変	貫名海屋 有栖川織仁・熾仁
1867				大政奉還	徳川慶喜 三条実美
1877				朱子学の復活	山岡鉄舟 松平定安・直応
(明治10)					西園寺公望 山岡鉄舟
1912	清朝亡び中華民国				伊藤博文 高崎正風
(大正元)					

前号訂正　1頁5段12行　近世・企業　3頁1段　民俗・二ヶ所

梅雨のあとさき　簸の上短歌会

片栗の花にひと日を賑はいし船通山は霧にかくるる　諸角長子
朝廷の草引き終り縁に来て一服の茶にやすらぎて居り　岡田時子
街に住む孫ら思ひて今年また笹巻作りを手伝ひにけり　仝人
白き卵をおのもおのもに頭にかつぎ列なす蟻の足音きこゆ　常盤はるまさ
末の子の来るとし言へば妻の頬笑まふがに見ゆ眼つむりしままに　仝人
一週間逢はねば久しく顔見ぬと卒寿の叔母は電話かけくる　野村節子
二人して一人前と言ふ夫と豆蒔き終へぬ梅雨晴れの下　仝人
六十年の歳月を思ふ百人一首の今の取りくちにおろおろとせる　永井弥生
逆縁の悲しみ越えし友の歌さらりと生活を詠みてありたり　仝人
風薫る木曽路の旅よ馬籠なる藤村生家の前に佇む　安部夕波

柴栗句会七月抄

群青を夕立叩き寄せてくる　淺野としお
猫車先き見えぬほど草積んで　糸原古志
星逢ふ夜哀し夜雨に流されり　恩田和美
夕立や裏の瀬音に嵩を読む　加納信子
蜩のしきりと啼きて鍬洗う　楠房子
車止め水蜜桃の丸かじり　高木白虹
梅雨けぶり父の日記の閉じしまま　中澤美紀子
車の世汗で歩いた遠い道　錦織富江
風鈴に何時しか誘われ夢の中　新出谷一華
髪切りておしゃれ心で夏迎ふ　峯石美代子
咲き登る葵の道を日々通ふ　渡部夕峰

斐の上川柳七月の句

署いねと汗をふくのがごあいさつ　児玉哲呂
背高は団体旅行の旗がわり　石原冬明
政党名ぐらぐら変る世も変る　横山まこと
いばら道乗り越え勲章光る胸　松田牛歩
医者嫌い明日明日とまだ行かず　藤原千代子
障害を持って退院でも嬉し　田部都
金婚と叙勲両手に共白髪　松浦亜以
難かしい入れ歯外して句をつくり　足立玉恵
魚焼く煙りに客を引きよせる　渡部ミツコ
落ち込んでまた立ち直る繰り返し　藤原のぼる
買い過ぎて賞味期限を食べ過ぎる　森山悠子
雨つづき紫陽花だけが誇らしげ　田中有樹絵
老いの身を大事にされてちと甘え　松浦久寿
八十路越え白髪染めるも思案する　安部正子
錦帯橋上って降りてよっこらしょ　児玉えみ
有り合わせ布団作りも年の功　真綿よし子
手鏡に笑顔写して孫むすめ　田中芳春

は、律令国家（政治によって）への建設に進む時で、聖徳太子制定の十二階の冠位には一徳・仁・礼・信・義・智一の儒教の徳目の名称がつけられた。『十七条憲法』にも一君万民の儒教道徳が強く根本に置かれ、儒教の有徳為君の天子観（神のある人が君となる）は、神道の神孫為君の大王観（神の子孫が君となる）、仏教の十善為君の国王観（善を積む人が君となる）と連合して、新しい律令国家の思想を確立した。（この頃神話がこれらの思想を古代からとするためにまとめあげたられものである）

降って戦国大名は威富兼備（威厳や富を重んじる）を理想として、武家の治世安民の伝統的政治理想をかかげ、富をもって領国民の生活を安定させ、威をもって領国内を秩序がけようとしていたので、陽明学派に共感したが、徳川時代になると、この学派は既存の体制を批判する立場もあったので弾圧をうけた。

日本の林羅山をはじめとする朱子学者は、その創造・主宰を、人間の参賀を、中国の朱子学者よりも強調して、朱子学をいわば「現世の宗教」として、大名領国の繁栄と秩序を維持する神学（イデオロギー）としたのである。商工民も農民も、領主の恩に頼り領主の威に服するとき、領国の繁栄と秩序が将来するという政治的仕組みを、日常の生活で経験していた。したがっておのずと領国内の上下の生活に義理（義）と人情（仁）の徳が貫流し、それがまた意識されていたのである。

近松門左ヱ門、武士は封建社会を守って義理堅いという主題で時代物語りに登場し、町人は情に流れて義理を欠きやすい世話物語りに登場したが、儒教と世情に通じていたので、二つの流を描いたといわれる。

江戸儒教思想の背景は朱子学で、封建制度の思想の骨格となった。

明治に入った文明開化期には、儒教は旧封建思想として西洋流の啓蒙思想に抑圧されていたが、明治10年代から復活し始めた。しかし「現世の宗教」である朱子学は、その天の宗教性と天皇制に吸収されて、天皇家を宗家と仰ぐ大家族国家支持の「道徳」となった。教育勅語、修身の教科書がそれで、国民道徳の支えとなっていった。

（井上哲次郎ほかの論文によって）　文責　高橋一郎）

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九一一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第282号（9月号）
1998.9.5（M131.T87.S73）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治初期における仁多郡の経済事情と製鉄業（上）

幕末から奥出雲でも、近世企業たたらが近代化を指向しながらも、それを明治時代の後期まで遷延せざるを得なかった経済事情を、しばらくまとめて置きたい。

明治初年の仁多郡の物産

『出雲国物産表』（県立図書館蔵）から産額500円以上のものを表①としてみると、（横田町誌より）なんとしても農村地帯、米が1位で当時の価格で117,000円である。次はぐっと減って荒苧、大根、茅蓑、縄、大豆、麦と続く。製鉄業関係では、銑・鉄・鋼・鉾が10万円と米に次ぐ。（鉄とは銑・鉾（歩鉾）を若干そのまま販売し、あとの多量は大鍛冶場で割鉄＝台丁鉄＝普通の鉄としたもの）

さらに釘・鎌の製品の額、釈場用の薪、同じく釈場用の大炭、大鍛冶場用の小炭を加えると、農産物の総額を遥かに越える金額となる。仁多郡に於ける製鉄業の比重は大きい。これを『8年村誌』（『皇国地誌』と言う。全国一揃に同じ項目により調査したもの）によって職業別人口を比べてみると、表②のようである。（明治8年1874）

横田の養蚕業は12人である。大字原口の宮田氏の種蚕育成をもととして勃興し、のち県下でも最も養蚕農家が多くなった、その萠芽を見ることが出来る。算盤業6人であるが、のち全国産額の70％を占める産地となったこれも萠芽である。昭和30年1955初期ころは算盤業は絶頂となるが、農協に於ける農産物販売高を優に越える産額となり、全国の産額の70％を占めるに至る。

機械計算器の普及によって、その産額は激減しているが、その額はやはり全国の70％を占めている。

大谷村鉱山男60人女85人は絲原家経営の雨川の『鉄穴釈』をめぐるもので、中村・竹崎村の鉱山業は、竹崎の卜蔵の『原釈』に関連するものである。大馬木村工業10戸は大鍛冶屋の従業員であり、八川・大馬木・小馬木の薪炭業の8割は企業たたらの原料となるものであった。

さらに副業としての鉱山用薪炭業従事者、農閑期に砂鉄採取に従事するもの、夏の間の川砂鉄採取（—釈場の年間使用砂鉄の7割を占めることもあった）に従事するものもいたから、如何にこれらの賃収入が重要であったかがわかる。

ついで企業たたら経営に運送が重要な仕事であった。木炭、砂鉄等の運搬、銑・歩鉾の大鍛冶場への運搬（釈場と離れているものが多い）、製品の割鉄・少量の鋼の松江へ出荷の郡内の運送（大原郡以降は各地の馬士による）には馬が主力であった。

馬の飼育数の変遷は、『歴史の道調査報告書』四巻（1997刊県教委）に詳細に述べ、『奥出雲』268号にも再録しているが、次に表③④として掲げる。

馬の頭数は仁多・大原両郡が出雲国内では飛び抜けて多い。水運の便が良くないのを馬に専ら頼った。この馬の増加については更に『奥出雲』148 149号の「仁多郡畜産史」に述べているので参考に。馬頭数の増加も製鉄業を振興するため松江藩が特別に配慮したものである。

土地制度の改正

これについて若干触れおくと。明治維新になると、これまで藩主の私有地であった土地を、即ち封建的土地所有を否定して、農民に土地所有権を認めたのが、明治4年1871の地券交付である。

表①　明治5年仁多郡の物産

品名	生産高	価額
	石	円
米	31,199,485	116,998,068
麦	1,785.35	3,481,430
豆	180.35	556,070
大豆	939.37	3,913,950
小麦	367.51	1,531,260
大小豆	515.02	1,545,060
ソバ	80.55	2,125,617
油種	112.28	2,339,129
桐実	5,560束	926,296
中麻	335㎏	604,850
荒苧	21,290	7,357,590
葉香苧	2,700	1,124,980
藍茎	3,075	683,326
椿	16,957	941,960
根	450,000	4,999,950
蕪	150,000	1,666,650
繭	300	583,310
草	45,778斤	1,271,570
蓑	43,500束	3,020,640
靴	20,100枚	4,466,660
薪	210,050足	597,050
炭	7,352,900㎏	16,339,660
炭	2,749,050	19,089,400
銑	855石49	7,126,220
鉄	36,164㎏	14,750,646
鋼	117,415	63,413,215
鍔	67,921	13,206,839
砂鉄	69,000	7,009,113
釘	819,160	1,422,061
鎌	754,600本	1,152,800
	9,260枚	771,660

（備考）明治5年『物産表』（島根県庁蔵）より作成

明治初期における仁多郡の経済事業と製鉄業（上）・短歌・俳句・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

明治6年になると私的土地所有に対する租税徴収が始まり、当地方では、8年から改正による地租納入がはじまったようである。町村役場には『野帳』など土地台帳の基本に使われた帳簿が残っている。

この地租改正では、形式的には近代的な収益税としての性格が与えられていたとはいえ、「旧来の歳入を減ぜざる」ことを大前提にして地価を算定したために、生産費を低くするために、労賃計算を無視したり、反当収量を高くすることなどが行われ、このため旧藩時代と変らない位に、収穫量の4～3割が地租として徴収された。米価が安い時には、金納は極めて不利であることから（物納を行わない）、地租の重課に対する不満が全国的に高まり、百姓一揆や自由民権運動で、或は請願書が出された。

絲原家文書の中に「減租請願書」の控えがあるが、地租がはらむ問題と、米価下落のなかで金納地租が農家経済を危機におとし入れていることなど、切羽詰った農村の状況が述べられている。やがて農民の家屋財産等の売却が相ついで起る時期となる。

地租改正は、農耕地だけでなく、山林原野についても官有民有の所有区分を明確にし、私有地の山林原野にも税金をかけることにした。

明治以前では、山林原野については、農地ほどには所有意識がなかったのであるが、明治の地租改正で、山林原野にも税金が新たにかけられることになったため、零細農民は所有権の主張に消極的で（税負担を恐れて地主の山と申し開きをする）、逆に大地主たちが税金と引きかえに所有権を設定した。こういう話は一昔前の故老たちは具体的に語ってくれたものである。

当地方では鉄師は自己の所有山林の他に、藩有林を貸与えられたもの所有していた。享保11年1726の「鉄方御法式」によって貸与されたものである。それは明治時代になって個人の所有に帰した。（平均して鉄師の所有林4に対して藩有林6であった。

鉄師が最低必要とする鉄山（木炭山）は

釻　場　一ヶ所の木炭には

年間100haが必要であって、30年を周期伐採したから、必要な山は3,000ha（町歩）

大鍛冶場2ヶ所の小炭には年間30haが必要で30年を周期として伐採で必要な山は　900ha（町歩）で、あわせて3,900（町歩）必要であった。（木炭材は30年生の広葉樹で焼いたからである）

これに対して、山を全然持たないか、少ししか所持しない農家は、牛馬飼育、堆肥作りのために、山（柴草山）が必要であったので、組中持の共有山林原野への入会い利用ということが行われた。

水田耕作（米の生産）

農業生産の優れているのは郡内で、横田、中村、大呂、稲原、大馬木、竹崎、八川、大馬木（旧村・現大字）で、反当2斗1升で、その他は1斗8升、1斗5升と低い。これは郡内の場合で、全県的には出雲部では反当収量は飯石郡についで低く、田1反当り平均地価は最低であり、農業経営には非常に条件が悪かった地方である。それが現在仁多米の評判をとるに到ったのは注目すべきことで、別に掘り下げて見たい。

仁多郡の低い農業生産力については、1733享保18年の訴訟文書がある。（仁多郡誌）要点は寒い土地のため地面が悪く、植付までの水田への手間が非常にかかる。

田1反に付　人夫50人程

里部では　24～25人役

差引25人増となる

1人に付き賃扶持1升5合

1反に付き　3斗7升5合

郡中の田1,100町歩で

合計4,125石が必要となる。

これは必要経費である。

里部にては種籾

1反に　7～8升程必要

当郡は地面悪く、株も増えないで厚く植えるため

1反1斗7～8升から2斗2～3升で、必要経費はさらに増す。

里部は植付に

1坪に付　70～80株

当郡は　140～150株　所によっては170株で　費用は重い。

さらに植付、苅場までにも同様に多くの人夫が必要。

とある。この悪条件の状態は、明治初年まで、140年もち越されたものと見える。

ここにも明治期の農業振興への特別な取り組みが必要であった。これについては当（奥出雲）58 59 60 22号に詳述してある。

製鉄業の危機

経営難の時もあったが、150年続いて（享保11年から）松江藩の特権賦与と保護助成によって、日本の主産地となったが、明治維新そして廃藩置県、松江藩の廃止によって、すべてが打切られてしまった。

明治6年7月の太政官布告第250号で日本坑法が施行され、砂鉄採取は新しく課税の対象となり税金が徴収されることになった。さらに全6年前半期に工部省の指示で、鉱産物の購売が中止されてしまった。製造品が商品化できず、税金は支払わなければならないことになり、鉄師にとっては最大の危機となった。すでに述べた如く、郡内産物の半分占めている鉄、そこで働く職人や農民の賃金問題は、大水田地主でもある鉄師の経営よりも、これらの人々の生活に係る大問題であった。鉄業関連者は表⑥の如くで、郡内の戸数1戸当り1.5人がかかわっていたのである。

表②　民　　業

	農	商	工	その他
横田町	男　15人	男　2人		男養蚕12人、算盤6人
横田村	男　90戸	男　5戸　女 1人	男　7戸	男炭13戸　女裁縫5人
稲原村	男女ともに農業を専務とす			(女農業の余業に自用の衣類を縫織)
中村	村の８分		鉱山業、職工各村の1分	
大呂村	男女ともに農業を専務とす			(女農業の余暇に自用の衣類を縫織
竹崎村	〃		(余業として鉱山業3分	(　〃　)
下横田村	〃	(聞まゝ、工商を業とするもの　その１分)		
大谷村	男 280人　女 232人		男鉱山 60人	女鉱山業　85名
八川村	男 174戸			薪炭　43戸
大馬木村	217戸		10戸	〃　20戸
小馬木村	133戸	20戸		〃　25戸

（備考）８年村誌より作成

表③　馬　と　牛（明治７年）

	馬		牛	
	牡	牝	牡	牝
横田町		24	12	15
横田村		39	34	3
稲原村	3	150	50	2
中村	2	95	28	13
大呂村		177	72	37
竹崎村	30		15	15
下横田村	2	78	52	16
大谷村	3	51	12	8
八川村		134	133	133
大馬木村	14	315	52	51
小馬木村		149	85	37
計	54	1,212	545	330

（備考）８年村誌より作成

表④　馬の頭数

	飯石郡	仁多郡	大原郡
宝暦年間(1851～63)	294	377	190
明治10年(1877)	706	2,006	255
増加倍数	2.4	5.3	1.34

表⑤　明治23年の米生産

郡名	作付	収穫	反収	田１反平均地価
	反	石	石	円
松江	490	912	1.861	—
島根	22,470	45,317	1.931	52.22
秋鹿	10,594	16,159	1.525	46.70
意宇	35,106	60,410	1.721	52.32
能義	45,264	94,310	2.084	51.48
仁多	**23,029**	**31,707**	**1.507**	**38.70**
大原	27,046	45,876	1.696	48.01
飯石	32,915	44,976	1.366	39.51
出雲	26,540	43,253	1.630	46.35
楯縫	23,351	50,884	2.179	48.73
神門	54,047	98,400	1.821	51.90
出雲部	301,852	535,204	1.773	—
邇摩	20,168	27,236	1.350	37.91
濃安	19,654	28,761	1.463	44.52
邑智	40,049	49,844	1.245	32.58
那賀	52,539	67,075	1.277	32.81
美濃	38,236	47,822	1.250	36.97
鹿足	21,728	25,967	1.170	28.36
石見部	192,374	246,705	1.282	—
県	506,215	800,523	1.581	42.61

（備考）『明治23年島根県勧業統計書』より作成。
平均地価は明治17年のもの

表⑥　明治初年の製鉄業従事者

	所有炉	鍛冶屋	製鉄場関係	関連召抱人	合計
仁多郡	7	15	2,300	3,500	5,800
(絲原)	1	2	510	1,200	1,710
大原郡	1	2	340	650	990
能義郡	4	12	1,160	3,200	4,360
飯石郡	3	6	2,040	6,130	8,170
神門郡	1	2	160	400	560
合計	17	39	6,510	15,080	21,590

斐の上川柳八月の句

夏日傘遊覧船の出雲弁　真綿よし子
夏休み親は油断の出来ぬ時　渡部ミツコ
もう歳だなどと言わない事に決め　石原冬明
てぼたんの花火をあげてよろこばせ　足立玉恵
日本のドン選挙に破れただの人　田部都
暑中見舞やっと出したくなる暑さ　藤原千代子
甲子園今年はよけい砂が減り　児玉哲呂
暑くても孫の元気に救われる　森山悠子
二割引き得した顔で袋もつ　児玉えみ
老と知りさからって貼るサロンパス　松浦久寿
いじわるな雨がまたまた甲子園　横山まこと
甲子園無念の砂をかき集め　松浦亜以
風通しよいとこ探す昼寝場所　安部正子
台風が来ないとやたらなつかしい　田中有樹絵
飲み放題さすがオロチも泡をふき　田中芳春

孟蘭盆過ぎて　簸の上短歌会

山間の稲田は猪に荒されて農への思ひ崩れゆく　諸角長子
ごとし
子ら孫ら泣く子笑ふ子盆花に蝶の舞ふるを仏と迎ふ　岡田時子
妻の顔に薄き化粧をほどこしつつ娘は呟くごとく声かく　常盤はるまさ
五十余年共に暮しし妻なれば諍いしことさへ今はなつかし　〃
夜昼のさだめなき看取りと思ひしが妻逝きしのちうつろに過ぎ来　〃
洗はれし雨後の花壇に今朝咲きし朝顔の花の常より美しく　野村節子
竿や竿強くて丈夫な物乾し台秋風つれて竿売りの来ぬ　〃
過疎と言ふ声にも風にも親しみて合歓咲く此処に吾れ眠るべし　永井弥生
鰯雲は空の投網の中にあり丸くひろがりきらきらきらと　〃
息子の愛車形見と思へどあきらめて売ると決めたる夕べかなしき　安部夕波

全鉄師はそれぞれこの様に苦境を願書として島根県七等当仕（のちの県知事）境二郎に提出した。その上特権的な藩の助成廃止も打撃を深刻なものにした。即ち、享保11年から「鉄方御法式」施行以下実行していた先納銀制度は（8月の5ヶ月間、釜場・大鍛冶場の数によって毎月一定の金を藩へ上納し、出来秋にはその金額に利子をつけた金額相当の米が藩の郷倉から返済される）

ところが寛政年間の全国的鉄価の暴落の時を境に、この鉄師への藩への協力方式が変わった。逆に藩は釜一ヶ所に凡そ1,300俵を毎年貸与し、その代金の返却は翌年4月より9月迄、月割り又は年賦をもって還納するという、鉄師を救助することに転換して、鉄師は苦境をしのいだ。この貸与米を養米（やないごめ）といって、幕末になると鉄師はその増額を願出て経営を続けた。これは賃金の支払いにあてた。

明治になってこれが消滅したので、右の嘆願書の4ヶ月後に鉄師は養米にあたるものを、年貢米のうちから融通をうけて、代金を返却したいと申出たが「難二聞届一」と却下された。

（この嘆願書より4ヶ月後の事であるが、宛名は島根県権参事境二郎となっている）

それでも7年までは、鉄、鋼の価格は毎年上昇していたが、8年からは大巾な下落となり、10年が最低となった。

『仁多郡略談』（大馬木の旧家所蔵の貴重な江戸時代からの年代別記録）によると

8年は、鉄価下落につき、本郡金融不活発。

9年は、鉄鋼下落4円20銭となり、本郡の経済は渋滞。

とある。

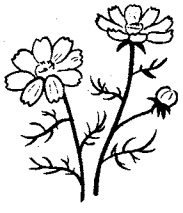
次号で苦境の対策をのべ、近代化への芽がつまれたことに触れる。

（横田町誌と絲原家文書によってまとめる）

（横田史談会　高橋一郎）

柴栗句会八月抄

西瓜割りわれづ喝采（かっさい）おこりけり　浅野としお
他人（ひと）さまの名の浮かびこず土用呆（ぼ）け　糸原古志
安からぬ世を憂いて西瓜食ぶ　加納信子
西瓜売る張り紙のこし店仕舞　高木白虹
げんのしょうこ干せる遠き日父在りて　中澤美紀子
明け易し机上の目覚し午前二時　新出谷一華
盆帰り双児の寝顔みな同じ　錦織富江
月見草黄色がポット開く宵　峯石美代子
盆休み一枚のメモ事務机　渡部夕峰



会員頒布一部二〇〇円／〒六九三-一八　島根県仁多郡横田町一、〇八二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇-九-一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四-五二-〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第283号(10月号)
1998.10.5(M131.T87.S73)
奥出雲編集集団
横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治初期における仁多郡の経済事情と製鉄業（中）

危機打開の対策

和鉄製鉄業の衰退の原因は市場にあった。政府は資本主義経済社会をめざし、新政策を打出していた。製鉄業・建築で必要な鉄鋼には洋鉄のみが用いられ、中国地方の和鉄は使用されてなかったので、和鉄生産発展のためには、販売市場を拡大しなければならないし、輸入の洋鉄に対処できる品質に改善せねばならなかった。

8年1875、鉄鋼価格の下落のため、鉄師たちは協議し対策をねった。7月に県に対して、品質の優秀性を再認させるとともに、販売斡旋の労をとることを要望した。その「伺書」の要点（平易に原文は片仮名まじり候文）

①割鉄（長3尺余　巾5寸）は洋鉄の錬鉄と同じものであるが、割鉄が火に強く、製造するに易く、中国地方で十分に生産できる。

②船釘も和鉄製が洋鉄製よりも二倍のもちがよいと大阪地方で言われている。長3寸～1尺までの品は、中国地方で十分に造れる。見本を提出します。価格も十分に考えます。…等々。

で、次いで松江に出雲国内の鉄師10人が集会し、県勧業係吏員とも協議し、鉄道に和鉄を利用してもらうことなど、ほかに蒸気鎚を購入して鋼を精造して直捌きすれば利口と思う。皇国の砂鉄は水晶ガラス質があるので、石灰を加えて吹くと右の両質を抜き正鉄となるとの伝承もあり工夫したい。などと話合った。（「集会頭書」から）

9年に入ると、半値に下った鉄価暴落に対処するため、県の助成を願うとともに、業者も鉄師締合をつくって、自主規制にのり出してゆく。

9年3月5日付の「奉伺書」の要点は、（原文は片仮名まじりの候文）

①　お互が低価格をとると一同の崩れと成り、廃業して自分の家を保守するは最も易しいが、附属の従業員の難渋は勿論、関連の者も稼を失う。その上樹木茂り、獣類の被害、農業の衰微となって、諸税の上納の道も立ちかねる。この物産盛立の資本のため、鈩場1ヶ所に付3,000円宛無利子で5ヶ年間御貸下げをお願する。その上は鉄業はもとより諸物産も盛大になると思う。

②　堤防費備えとして鉱物代金の100分の2分5厘、以後は1分以上の上納として欲しい。

③　養米（賃金引当）も運輸の不便故、豊凶作に付き買入が差支えるので、それをできるようにしてほしい。

④　鉄業以外の物産も、鉄業不振では十分にゆかないが、外の物産も小より興して盛大になるよう努力する。

⑤　鉄業取締りのため長を設けてほしい。

⑥　鉄師が毎年2度松江にと集会をするので許可してほしい。

⑦　鈩場へ看板を下されば、いよいよ取締りを厳重にする。

⑧　新しく鉄業を願出るものも許可してほしい。

⑨　砂鉄採取について、土地・水路或いは立木等郡により不相応に高値になることがあるが、日本坑法の達しの通り、心得違いはいたしません。

右の①～④については県庁がどのようにしたかわからないが、

⑤以下の自主的な組合については、次の2つの書類でさらに細かく具体化されているし、会合の記録も絲原家文書にある。

この年3月10日に絲原権造は鉄師頭取に任命されている（記念館に実物展示）。

「鉄師締合書」（原文同前　要点同前　欠番は省略）

①　諸賃金ほか不公平のないよう協議の上取締る。

②　松江集会の消費はすべて戸割

③　鉄師への仁義は一切しない。

④　家事締合をつくり不相応なことはしない。

⑤　突然雇用をたのまれても、それまでの職場と話合をして雇う。

⑥　鉄師一同毎年11月1日松江にて集会をする。差支えの時は代理を出席させる。

⑦　買入米、職人貸米の値段は郡別に不公平ないようにする。

⑨　鈩・大鍛冶の休業・開業は鉄師に届け出る。

⑪　集会場は今後鉄師の旅館をあてる。

⑫　集会の賄は宿の仕出しで一汁一菜、酒は禁止、席料は一会合金2円と定める。

右約定連印の上違反しない

明治9年3月

「鉄師頭取事務伺」（原文片仮名まじり　要点のみ）

明治初期における仁多郡の経済事業と製鉄業（中）・川柳・短歌・俳句・横田三十三番札所めぐり⑲

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

① 鈩場の御許可は鉄師頭取を通じて一同へ知らせる。

② 諸賃金や炭・砂鉄の値段の上下は、頭取の通知によって臨時会で公平に協議する。

③ 毎年11月1日松江にて鉄師一同集会をする。病気等の時には代理を出す。

④ 重大事件は臨時集会で協議するが、小さいことは頭取両名が出かけて処理する。

能義・仁多・大原3郡は

絲原権造

飯石・神門郡は

田部長右ヱ門

⑤ 頭取の世話料は、追って方法が立つまで考えぬ

⑥ 鉄業附属人員への貸渡養米の値段は頭取を通し、合一公平に取究める。

⑦ 鈩・大鍛冶とも年中休業・廃業とも頭取へ届けること。

⑧ 鉄山の決算表はきちんと提出すること。

明治9年3月14日

署名－丸山官兵衛（仁多郡中村）、秦瀬兵衛（能義郡広瀬町）、青戸清四郎（仁多郡西比田村）、須藤源丸郎（仁多郡上山佐村）、中沢義三郎（仁多郡高尾村）、梅木菊太郎（仁多郡亀嵩村）、梅木菊太郎（仁多郡亀嵩村）、石原市右ヱ門（大原郡下久野村）、卜蔵甚兵衛（仁多郡竹崎村）、永田四郎七郎（仁多郡下来島村）、家島隆（能義郡布部村）、桜井洪造（神門郡奥田儀村）、桜井三郎右ヱ門（仁多郡上阿井村）、絲原権造（仁多郡大谷村）、田部長右ヱ門（飯石郡吉田町）

しかし業績転換にはどうにもならず、5割操短の生産制限をし、炭焼や山野開拓などの副業で急場をしのぐ対策であった。

「心得願書」（原文片仮名まじり☆文要点のみ）

① 近年和鉄は不景気で、代価低く計算相立たず、継続も難しく、廃業して諸家督をもって家名を取続ぐより致し方ないが、そうすれば数十年来召抱えの山内居住人が路頭に迷うから、次のようにしては。

② 鈩吹き方をこれまでの5割とする。

③ 休業の間は自分山にて、木炭・小炭を焼いて山子渡世をし、鈩入用ののこりは売払う。

○ 山を開拓し桑・茶を盛んに植付て、山内の召抱人の営業とする。

右の外差向き愚存これなく、依願申し上げます。

明治9年3月6日

の状態であった。

表①　鈩1ヶ所収支計算

		明治11年	12年	13年	14年	15年	16年
		円	円	円	円	円	円
経費	給料	250.00	270.00	270.00	300.00	250.00	200.00
	銭費	596.11	631.54	1,033.62	1,075.90	954.10	764.75
	費	330.13	372.15	568.68	513.09	538.72	395.17
	費	1,708.05	2,162.78	3,491.65	3,098.43	3,975.42	2,898.49
	炭	1,364.78	1,837.28	3,221.44	2,225.49	3,550.68	2,237.52
	鉄	52.00	62.71	149.60	234.40	166.20	83.35
	繕	32.00	38.60	92.34	143.40	101.95	48.42
	械	278.00	315.48	779.80	1,195.40	860.70	445.07
	送	35.00	42.21	100.70	156.80	115.15	52.97
	用品						
	月備賃薪砂修器運需合						
	計	4,646.10	5,732.75	9,707.83	8,492.91	10,508.92	7,126.73
収入	鋼	1,397.52	2,003.26	3,055.34	2,574.90	3,165.01	1,797.45
	錬	1,425.97	1,605.93	2,821.74	2,473.75	2,542.37	1,468.35
	銑	1,881.78	2,469.95	5,354.37	4,435.32	3,706.65	2,172.43
	合計	4,715.27	6,079.14	11,231.45	9,483.97	4,415.03	6,438.22
差引損益		69.17	346.39	1,523.62	541.06	−1,093.59	−1,688.51

（備考）明治17年『民行鉱山志料取調書』（雨川絲原家文書）による。

製鉄業経営と地域社会

10年代後半になると、製鉄業の危機は経営内部にとどまらず、地域社会の問題となった。危機の深刻化である。

17年2月にはまず郡内有志の、横田町岡崎健蔵、八川村荒木暁一郎らが代表となって、鈩製鉄の不振が仁多郡全体に対して重

それでも10年以前には、経営者の鉄師だけで何とかしてゆこうと対策を練ってはいたが、大な影響を（本紙前号の仁多郡の物産の価格の5割以上が製鉄業にかかわるものであることを考えると）及ぼすことを9項目にわたって具体的に記し、すでに広島県が行っているように、県としての助成を実施して欲しいと、島根県へ要望した。

表②　鍛冶場2ヶ所収支計算

		明治13	14	15
		円	円	円
経費	銑鉄	4,572.415	5,312.250	3,919.488
	錬鉄	914.500	1,012.450	782.890
	細工賃	412.479	478.095	372.586
	炭雇	659.219	795.477	1,085.970
	金賃	1,618.450	1,575.166	1,893.354
	費賃	297.788	325.125	612.550
	雑費	502.850	731.350	718.250
	運道	1,011.600	1,400.950	1,714.800
	諸諸鉄小職			
	合計	9,989.301	1,168.863	11,099.888
収入合計		10,858.870	12,775.478	10,800.681
差引損益		869.569	1,094.615	− 229.201

（備考）明治17年計算書（雨川絲原家文書）による。

鈩鍛営業永続願（原文同前要点のみ）

仁多郡の地勢の山間僻地では耕地は山野の1/10にも足らず、物量少なく、冬は積雪に閉ざされる。幸に数百年砂鉄に恵まれ、それに関係して住民は小煙（貧しい生活のあらわれ）を立て、

耕作のあとは、莚・縄や鈩鍛（鈩場大鍛冶場）の用物或は運搬の労によって僅かに活路を開いて来ている。鈩鍛の操業を減らすと、樹木が茂って山に入られず、水も冷たくて田が耕せない。積雪の場合も鈩鍛への原料輸送で道があくのであって、やっと小さい息をしているのが郡内の状況である。

洋鉄に圧倒されて困難になり廃業に至らんとするものもある。

洋鉄の輸入による鉄価の安値は、和鉄を圧倒している。洋鉄は唯、工用に便利なこと、安値で和鉄を圧倒しているが、和鉄は堅剛で永く使用に耐えるものである。郡内の鉄師には、たまたま一、二の豪富家があるが、このままでは復旧はおぼつかなく、むしろ転業を考えているものもあるが、郡内の実情と誌すと、

① 樹木を伐採しないと猛獣横行して田園を荒らし耕作の妨害をし、さらに人畜に接近しておそいかかる。現に猫・鹿・猿・兎は白昼横行して損害を与えている。

ここに於て斧鎌を下さないと、その惨状は甚だしく言うにしのびない。

② 本郡は10月より翌年3月までは雪が多く人馬も通れない。仕事がないから砂鉄を採取して、その跡地を開墾して田園とし、或は深田を埋めて良田とし、一挙両得の幸福を得ている。製鉄業なくなれば、半年間の仕事を失い、山野も水田も悪くなる。

③ 本郡の収穫米の中の凡そ6,000石（15,000俵で生産高の2割）は毎年鉄師が購入するので、その代金で納税の義務を果たしている。鈩業が行われなくなると農民は貧窮に向かう。

④ 数百年鉄業に従事する良民数千人、廃業すれば浮浪者が郡中に充満し、遂に盗児凶僕に変って郡内弱肉強食の修羅場となる。

⑤ 鉄業関連の運送のための牛馬等数千頭であるが、鉄業廃すれば、幾十町歩の耕地肥料をどうして得るか、桑田変じて荒野となるは必至である。

⑥ 森林を伐採して薪炭としないと、樹木が繁茂して、豊かにして温和な水を得ることができず、即ち冷水が水田に潅漑すれば収穫は減少する。

⑦ 森林を伐採して薪炭として貨資を得ているが、鈩鍛の業がなきに於ては、貴重な土地も、塵芥（ちりあくた）と同じである。

⑧ 鉄鉱を販売して他県余郡に販売する者の数は極めて多い。休業すればこれらの口を糊するものなく死をまつのみである。

⑨ 鉄師の製品輸出の所得は年々凡そ10万円を下らず、（米・麦の物産品に相当する）、この金はあげて郡中の米麦及び薪炭その他の品を購入し、それを運搬する労賃に支出するのであるから、郡内労働の報償である。もし業を廃止すれば、これに替える物産金額はどうして得られようか。

右のことは唯概略をあげたので詳細に及んでいないが、本郡の人民利害の重要な問題である。この鉄業の隆替盛衰が、農工商一般に及ぼす影響は炳然（著しいこと）と明らかである。鉄師の業を隆盛ならしめることは郡民26,000余人の隆盛をなし、鉄師の衰替は郡民26,000余人の衰替となる。今や聖明の世で、皇沢四表に溢れている。然るに猶かくの如き無告の窮民のあるは一大欠陥である。父母なからん、老るも養う所なく、見栄もない。婚期を逸するものも多い。ああこの26,000有余人の生命を、今日に到って救恤せずんば、ともにともに腕を枕にして黄泉に至るもので、実に哀惜すでに限りあらんや。仰ぎ願くば特別の御詮議をもって資金貸与有らせられ、鉄師をして営業を永遠に持続せしめられ、併せて26,000余人をして将来の生計を保つ道につかしめられんことを。万一その義、能はずとせば、せめて隣国備後国の如く県庁の負担とせられんことを。

これかくの如く本郡26,000余人に代って謹んで請願するところである。何卒翼くば両条その一つを撰び玉はんことを。

明治17年2月

出雲国仁多郡中委任惣代
佐白村平民 馬庭又右エ門
湯村平民 川角松蔵
横田町平民 岡崎健蔵
八川村平民 荒木暁一郎

島根県会
藤川為親殿

前書の通り相違無之候也
仁多郡佐白村戸長 内田亀作
外郡内町村戸長連署

鉄山困難歎願書

製鉄業の衰退は地域住民の生産と生活に大きな影響を与えることになるのであったが、県からは何の措置もとられなかった。

そこで今度は鉄師である絲原権造が、11月に島根県会にあてて次のような歎願書を提出し、窮状を訴えた。（全前文体、要点のみ）

私儀祖先より仁多郡に於て数百年鉄山経営に従事し、毎年召抱の者502人、郡内農業余力を以って鉄業に附属して稼業1,270人で、何れも鉄山よりの取入金を以て、貢租及び活動の助けとしておるが、近年金融硬塞、諸物価追々下落の折、鉄鋼は最も不景気で殆んど売事なき状態で、休業しては年来の

斐の上川柳九月の句

幼な子が障子を破ること覚え　高木凡太
缶ジュース穴はないかと裏を見る　児玉えみ
秋風が去年よりまた胸に沁み　松浦亜以
賑やかに友達連れて孫帰る　藤原のぼる
種蒔いたあとは雨よと祈るだけ　田中有樹絵
夕顔の白さにぐちも消されてる　真綿よし子
披露宴歌の文句に気をつかい　児玉哲呂
老いの身を慰めて啼く秋の虫　松浦久寿
お目出度や孫の結婚ただ感涙　安部正子
時々は杉箸割って客気分　田部都
雨やんで洗濯干せば雨が又　渡部ミツコ
はしれ玉いのしし追いに夜の畦　足立玉恵
盆おどり孫は夜店が気にかゝる　藤原千代子
中休みしてからポツリ本音吐く　田中芳春

秋灯下　簸の上短歌会

悲しみは黒きマントに秋雨の夜を不意に来てわれにより添ふ　永井弥生
間歩水に葡萄洗ひて賜はりし硝子の皿に盛りて灯の下　仝
赤蜻蛉飛び交ふ空も深まりて母眠る里への想ひはるけし　角長子
幼きが電話で話す片言に息子の思ひの伝はりて来る　諸仝人
ひと夏の涼を誘ひし朝顔も種子を結びて何時しらに秋　野村節子
盆を過ぎ夏祭りも終り吹く風の爽やかにして秋菜を蒔けり　仝
正論を熱こめて吐く若者のひたみちなれば畏れ抱きぬ　常葉はるまさ
圃場整備なりたる峡に転作の蕎麦は乱れて花盛りなり　仝人
秋さりて庭の向日葵は丈伸びてうなだるる如く日昏を揺るる　岡田時子
われを残し逝きし息子よ汝もまた生きなむとして苦しみしならむ　安部夕波

召抱数百名の者は元より糊口に迫り、郡民も稼を失い、諸税金の上納が出来ないのは眼前のことである。種々努力して営業を続けているが、値下りの上に、かねて北国舟人に売っていたが、冬季に航路に差支えがでると、大冬売という努力をして来たが、このような不景気にては売れる見込みもなく、たとえ買人が有れとも余裕の安値でないと買取不申、翌年5、6月頃まで持こたえても、千駄(1駄25貫)の損失　云々　(以下略)

この県へ対しての嘆願書提出に続いて、絲原権造は18年1月付で郡内各町村戸長(のち村長と名称かねる)に向って、製鉄業の復旧維持についての方策を諮問をする。

―横田町誌と絲原家文書により―

陳情書にある、①森とけものと人間　②森と水温と作物のことは、今日時たま熊や猪が出現する位でなく、大変だったようである。400年前江戸時代初期25年間鈩操業が禁止された時の陳情はもっとひどかったと書かれていて、私どもの想像以上である。

(横田史談会　高橋一郎)

柴栗句会九月抄

ちちち鳴く八雲旧居の椅子古りて　浅野としお
先見えぬほど草を積み猫車　糸原古志
戦争に征った者同志月見酒　恩田和美
病窓に手を振り秋日の歩道越ゆ　加納信子
母と子の絵日記終りて夏果てぬ　楠房子
残照に燃えて儚なし曼珠沙華　高木白虹
椅子二つ語らいとぎれ萩こぼれ　中澤美紀子
秋彼岸生き長らへて車椅子　新出谷一華
赤い橋見えて揺るるや花芒　錦織富江
百日紅咲いて無縁の墓守る　峯石美代子
国東(くにさき)は佛の里ぞちちち鳴く　渡部夕峰

横田三十三番札所めぐり⑲

第24番　八川・榎　亀蔵院

八つの川ここのこもりへきぞういん
ふかき御法(みのり)のおしへかしこし

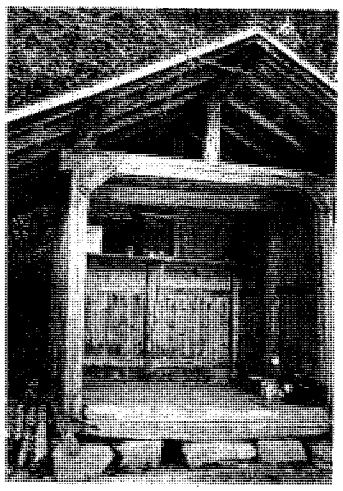


写真　横田史談会　佐世川徳雄

会員頒布一部二〇〇円／〒六九一―八（電話・電送兼用　0854―52―0191）　島根県仁多郡横田町一、四八ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410―9―12404）　頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第284号（11月号）
1998.11.5（M131.T87.S73）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

年表を読もう・俳句・川柳・短歌・「ハッケヨイ ノコッタ ノコッタ」

年表を読もう
―洋学の輸入と外国人の来航

年表への関心

本誌では度々いろんな年表をかかげて、政治経済史的なこと、社会文化史的なことを年代順に書き、私が調べたことも付け加えて理解し易くし、時代の流れと地域の拡がりの中で、地方の位置づけをし、物資や人の動きを浮かばせる努力をしたつもりである。今まで載せた年表はその一部で、数多くさらにくわしい年表が文章の蔭にある。

年表は面白い！といえば、首を傾げる方も少なくないであろうが、作り出してみるといろいろなことが連想できて面白い。さらに日本と東洋・西洋との時代的関連に目を開かせるような立場を失ってはならないと思う。洋の東西を問わず人物を入れてみると、その人の著書や業績が如何に生れるべくして生れたか、それが時代進歩に如何にかかわったかも明らかにできる。すると次々に興味が湧いて手作りするが、苦労は相当につきもので、こうして印刷するとなると一層慎重にならざるを得ないのであるが、精確を期しても完璧ということは容易にあり得ない。

しかし基本には『日本歴史年表』（岩波書店版）を置いて各種年表書10数書や古文書・著書を参考として記述しているつもりである。ところが自分史については小学校時代から日記をつけ、いろんな職業上の書類も、諸論文もほぼ年代別にしているが、思いつつも一向にはかどらない。今はとにかく、年代順にしようと思うことが精一杯である。

今月の年表は二つのねらいのもとに作成したものである。鎖国以来の外国との交渉、外国の学問の到来を一応押さえようとしたものである。テレビの幕末をみる時、必ず当時の外国船や人の到来が大切である。世界各地の国々の成立、進んで大航海時代は植民地獲得のせめぎあいになっている。それと日本も明らかにと、出来たもののなかから2頁に納まるよう抜き出したものである。日本の砂鉄製鉄の歴史もこうした立場で見直すと、決して『たたら』は独特なもので無く、科学の遅れが、少なくとも260年の遅れがもたらしたものである。特に当地はその一つの本場であったが、科学が到来した時から、いわゆる『たたら』（近世企業たたら）からどうして生産性をあげ、良質なものをと真剣に努力したことが浮かんできたので、特に今年に入って諸学会でそのことを記録でしめして訴えることにしている。これについての年表（略）は271～277号にのせたが、この年表は二つのことを明らかにしたいと作ったものの一部である。

出島――江戸幕府はキリシタン禁教政策の一環として、長崎に来航するポルトガル人を日本人から隔離収容するために、25人の長崎の長崎商人に命じて、長崎港の一隅を埋め立て、海岸から突出する扇形の土地を築かせた。（貸借としてオランダ人は年間銀55貫匁を商人に支払う）天草・島原の乱ののち、1639年ポルトガル人の来泊を禁止し、長崎のポルトガル人1278人をマカオに追放したので空き家となった。41年にはオランダ船貿易を長崎奉行の監視下に置くため、平戸からここに商館を移転させて以来、1855（安政2）年の日蘭（オランダ）仮条約締結まで222年間、オランダ人の在留をこの島にのみ限り、商館長の江戸幕府と長崎諏訪大社の祭礼（おくんち）以外はここから出ることを許さなかった。1本の橋のたもとには番所があり、遊女と高野聖を除く一般の日本人の出入を禁ずる高札が立てられた。幕末には住宅・倉庫65棟があったという。開国になるとオランダ人居留地となり埋め立てられて市街地となったという。

素人風の年表の読み方

自分が年表を作って、文を綴るためにする一つの方法を。

㊊㊋㊌㊍㊎㊏㊐という外国名の頭文字を、国別にきめて拾い読みしながら色鉛筆で染めてみると、それだけで何かが浮んでくる。次に外国で起きた事件の下に下線を、日本に到来した西洋の学問に同じく下線を色分けして引いてみると、またいろいろのことに気付く。この時代は天文学の進歩によって、欧州ではアメリカ大陸発見以来、大航海時代になり、それぞれの国民を刺戟し、航海へ海外各地の発見へと進み、欧州各国は発見のたびに領地を確保し、植民地獲得競争時代となる。各国は日本を除外しようとせず、開国と船の薪木・飲料水の確保地の交渉で迫り、さらに通商で利益を計ろうと各国が競争をはじめると、それに国内は、尊王攘夷（外国の到来を拒絶する）を主張するものと、開国を主張するものとが、国内で主導権争いをはじめる。松江藩は珍しく軍艦を購入する。（将軍慶喜の江戸帰還にあたりその首役を果たす）12月号では長州征伐と当地方、開国後の松江藩にふれる予定。

	1842	天保13	㋔船、㋑軍艦の来日計画報ず 異国船打払令を止め薪水食給与許す	松江藩医学講習所開く （西洋医学）
	43	14	㋺船漂流民護送エトロフ島へ ㋔商館長㋑軍艦の来日計画報ず ㋑軍艦琉球にて測量	
	44	弘化元	㋐船琉球に来航通商求む。江戸本丸大火 ㋔軍艦長崎へ来航　開国の国書を呈す	
	45	2	㋐捕鯨船漂流民護送して浦賀へ・幕府請け取る ㋑船琉球に来航、貿易強要。 ㋔国王に幕府返書を送り開国拒否 ㋑測量艦長崎に来船測量許可と薪水求める	㋑上海に租界成立
	46	3	㋑船㋔軍艦琉球に来航。㋐捕鯨船エトロフ島に漂着。㋐東インド艦隊司令官浦賀に来航通商求める。幕府拒否。㋐インドシナ艦隊指令長官長崎に来航し薪水と難破船の救護求める。㋔船長崎に入港幕府委嘱の武器・軍艦模型持参。デンマーク軍艦相模沖に来航。㋑軍艦那覇へ来航琉球国王に面会求める。	江戸大火
	47	4	㋔船長崎に入港、イギリス蒸気船の来日計画報ず	
	48	嘉永元	㋐捕鯨船西蝦夷地に漂着、乗員を長崎に護送 ㋔長崎へ入港、中国派遣のイギリス艦隊陣容報告。	ミル「経済学原理」刊
	49	2	㋐軍艦長崎に来航し、漂流民を受取り退去 ㋐の別の軍艦漂流民音吉を通訳として浦賀へ来航。浦賀水道の測量。 ㋑船那覇に来航貿易を強要、拒絶。	㋑インド植民地化完了
	50	3	㋔商館長江戸幕府へ（最後となる）。㋑捕鯨船蝦夷地に漂着。㋔船長崎に入港し㋐の対日通商要求について報ず。 伊豆韮山に反射炉、鉄砲鋳造、領内藩邸内での軍事教練を幕府に願い出る大名多数となる。	高野長英「三兵篇古矣機」 長崎藩反射炉を
	51	4	土佐漁民中浜（ジョン）万次郎㋐船で琉球へ ㋔船長崎入港し、中国の太平天国の乱を報ず。 ㋑軍艦那覇入港、艦長首里城に入る。	
	52	5	㋔商館長、幕府に東インド総督書翰を渡し、明年㋐使節が来航し開国を要求することを予告。㋺軍艦下田へ漂流民を送る。幕府このことを江戸城詰めの諸大名に伝達。幕府朝鮮通信使の来聘を延期。	大坂大火 薩摩藩反射炉 『大日本史』完成
⑬家定		6	㋐東インド艦隊司令官ペリー国使として軍艦4隻を率いて浦賀へ、国書の回答を明年に延期を認め琉球へ。幕府朝廷へ報告。ペリー琉球王国を威嚇し権利を得る。 ㋺使節極東艦隊指令長官プーチャチン軍艦4隻で長崎へ。去りのち年末再び。 ㋺軍艦北蝦夷地に上陸し兵営を築く。幕府は大船建造の禁をとき、㋔に軍艦・鉄砲・兵書などを注文する。	
	54	安政元	㋐ペリー、軍艦7隻率いて浦賀沖へそして交渉開始。漂流民保護・薪水食料給与は承認、通商は行わず。1ヵ月後日米和親条約（神奈川条約）締結し、下田・函館の開港も。 ㋺プーチャチン長崎に再来、樺太境界・和親条約の書簡残して去る。 ペリー那覇で琉球と修好条約締結。 ㋑東インド艦隊の司令長官長崎に入港。日英和親条約調印（長崎・函館開港） オランダに下田・函館を開港。㋺プーチャチン大坂へそして下田へ来航。 のち日露和親条約を下田で調印、下田・函館・長崎を開港。エトロウ・ウルップ島間を国境とし樺太を両国雑居地と定める。	吉田松陰の米航密航 拒絶で捕えられる。 幕府日章旗を制定。 京都大火、禁裏炎上。 近畿・東海に大地震 上海にアメリカ租界成立 幕府洋学所を建てる 幕府様式銃訓練命ずる
	55	2	㋐艦隊下田入港㋑艦隊函館入港。 ㋺プーチャチン伊豆で建造した船で退去。西洋式船の製作教わる。 ㋔商館長風説書で露土戦争の戦況を。松前藩北蝦夷の露陣営焼く（幕命）。 ㋔国王蒸気船を幕府に贈る。米、英、露との条約締結を朝廷に見申す。 琉球は㋐国と和親条約締結。日蘭㋔和親条約締結。222年で鎖国終る	海軍伝習所長崎に 長崎でオランダ式製鉄を
	56	3	㋔理事官、英使節の渡来を知らせ、列国との通商条約締結を勧告。 幕府外国貿易取調係を置く。㋐総領事ハリス下田に来航（駐在許す）。 ㋺使節下田に来航。	ベッセマー製鋼法完成 二宮尊徳・広瀬淡窓没 松下村塾開設
	57	4	㋔理事官 幕府の通商拒否方針に警告。日米㋐条約を下田で締結。ハリス登城に反対。㋺使節プーチャチンと長崎で追加条約調印。日蘭㋔追加条約調印 日米㋐通商条約締結	㋔軍医来日海軍伝習所教官に 松平慶水ら徳川慶喜を 将軍にするよう建議。 釜石で洋式高炉完成精
⑭家茂	58	5	幕府オランダ、ロシア、イギリス、フランスと修好通商条約調印（安政5か国条約） 天皇条約締結に不満の勅諚（戊午の密勅）安政の大獄始まる	錬成功（大島馬任） 次々と外国の領事、
	59	6	㋺士官・水兵、横浜で殺害される。 吉田松陰ら処刑	医師、学者、宣教師来航 マルクス『資本論』
	60	万延元	勝海舟米国へ向かう。桜田門外の変 日㋣修好条約調印。　この年輸出額47万ドル（前年9万ドル）	英仏連合軍北京入城 リンカーン大統領
	62	文久2	生麦事件　松江藩㋑製鉄・木軍艦2隻購入	
		3	長州藩下関で㋐商船㋑軍艦を砲撃。鹿児島湾にて薩英㋑戦争。	長崎で軍艦用汽関製作
	64	天治元	英米仏蘭連合艦隊下関砲撃、砲台占領。 第一次長州征代。幕末の外国貿易の63%㋑占める	
⑮慶喜	66	慶応2	第二次長州征代浜田落成	津和野出身留学帰りの
	67	3	大政奉還、王政復古	西周開成所教授に
	68	明治元	西園寺公望山陰鎮撫使として。江戸を東京と改称。	
		2	版籍奉還、四民平等	
		5	東京横浜間鉄道開通、学制頒布、太陽暦に。	

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

㊥ポルトガル　㊧オランダ　㊐ロシア　㋐アメリカ　㋖フランス　㋑イギリス

将軍	西暦	年号	国内	国外・出雲
③家光	1634	寛永11	長崎の出島にポルトガル人にのみ住まわせる。	京極氏松江藩主
	36	13	長崎㊥人278人マカオに追放。鎖国令励行 （1885－安政2年まで222年続く）。 在外5年以上の日本人の帰国を禁止。朝鮮通信使来国。	
	37	14	天草・島原の乱	
	39	16	㊥船の来航禁止。在住の㊧人妻子追放。鎖国の完成。松前藩160人の金山労働者らをキリシタンとして斬首する。	
	40	17	通商再開を求めて長崎来航の㊥船焼き61人斬る。	
	41	18	㊧商館を平戸から長崎へ。	明滅亡清国へ
	47	正保14	㊥船2隻長崎へ通商交渉拒絶して帰帆へ。	
④家綱	56	明暦2	長崎来航のシャム船帰帆させる。	
	60	万治3	㊧商館長の参府を3月とする。仙台伊達藩騒動。	
	64	寛文4	対島藩朝鮮へ武具密輸した数十人処刑。	井原西鶴
	66	6	朝鮮漂着の㊧船員8人長崎へ逃げ帰る。	
	68	8	朝鮮漂着の㊧人7人長崎へ送還。	
⑤綱吉	85	貞享2	マカオ船漂流民護送して長崎へすぐ帰帆させる。	松尾芭蕉
	1702	元禄15	赤穂浪士討入り。	新井白石「読史余論」
	15	正徳5	長崎貿易制限する。	「西洋紀聞」
⑧吉宗	16	享保2	享保の改革	
	20	5	㊥船の貿易額を減額する。	
	27	12	カンボジヤ使節長崎へ来航。	
	36	元文元	産銅減少のため長崎来航の中国船25隻に限る。	
	39	4	㊐探検船伊豆以北の沿海に出没。	
	42	寛保2	カンボジヤ船長崎へ来航。	
⑨家重	49	寛延2	中国貿易を増額（長崎で）。	
	55	宝暦5	幕府、朝鮮貿易不振につき対島藩に年間1万両賦与。	
⑩家治	65	明和2	㊧船からはじめて金銀銭を輸入。	
	66	3	長崎、銅の輸出ふえる。	イギリス産業革命
	71	8	㊐の対日侵寇ありとの情報あり。	杉田玄白「解体新書」 平賀源内「エレキテル研究」
	78	安永7	㊐蝦夷地に来航、通商を求める。	
	79	8	㊐船の通商要求拒否	
	83	天明3	天明の飢饉　　出雲三刀屋で蜂起	アメリカ合衆国独立
⑪家斉	87	7	各地で農民一揆　寛政の改革へ	
	89	寛政元		㋐大統領ワシントン　㋖大革命
	90	2	㊧商館長5年毎に幕府へと改正	異学禁止
	92	4	㊐使節漂流民を護送して来て通商求める。	丸山応挙没
	96	8	㋑人海図作成のため来航近海測量	『ハルマ和解』（最初の蘭日辞書）完成
	97	9	㊧の傭船長崎へ　㊐人エトロフ島上陸	
	99	11	高田屋嘉平エトロフ航路を開く。　伊能忠敬　蝦夷地測量へ。	本居宣長
	1803	享和3	㋐船長崎来航貿易要求。幕府拒絶。	
	04	文化元	㊐使節レザノフ、長崎に漂流民護送貿易求める。	㋖ナポレオン皇帝
	05	2	仝上拒否し漂流民受取り、今後㊧を介して漂流民送還を伝える。	
	06	3	㊐船カラフトに来り、上陸して番人を連行。	
	08	5	㋑軍艦長崎へ侵入、㊧人2人を捕え㊧商館引渡し要求、奉行引責自殺。	間宮海峡発見
	09	6	㊧船長崎入港中絶。　幕府オランダ通詞に㊐㋑語を学ばせる。	㋑ジャワ占領
	11	8	㊐艦長らをクナシリで松前藩捕える。	
	12	9	㊐船漂流民6人をクナシリ島に送還。 ㊐船長、高田屋嘉兵エを海上で捕える。	
	13	10	㊐船長高田屋嘉兵エを伴いクナシリ島にて2年前に捕えられた船長釈放交渉 ㋑のジャワ総督がオランダ商館乗取りのため使を長崎へ、商館長巧みに拒絶。 ㊐の船長引渡す。	
	16	13	㋑船 琉球に来航貿易を求む。	ナポレオン退位
	17	14	㋑船 浦賀に来航。㊧商館長帰国。	杉田玄白「蘭学事始」
	18	文政元	㋑人浦賀に来航貿易要求。幕府拒絶。	
	19	2		松平不昧
	20	3	対島藩朝鮮から銀輸入始める。	㋑シンガポール占領
	22	5	㋑船浦賀へ薪木水を求める	塙保己一「群書類従」
	23	6	㊧医師シーボルト出島着任	南米各国㋭より独立
	24	7	㋑捕鯨船薪水求めて常陸浜に上陸、捕えられる。 ㋑捕鯨船薩摩に上陸略奪する。水戸藩㋑同船と交易の漁民200人捕える。	㋑マラッカ領有
	25	8	㋑船陸奥に来航。異国船打払令	ペスタロッチ．ベートーヴェン没
	26	9	㊧商館長についてシーボルト幕府へ	頼山陽「日本外史」
	29	12	シーボルトに帰国命ずる	
	31	天保2	オーストラリア捕鯨船　東蝦夷地に来船交戦す。辺境警備厳重に。	ゲーテ『ファウスト』
	32	3	㋑船琉球に漂着。東蝦夷地に外国人上陸。	
	34	5	東蝦夷地に外国人来航略奪す。	
	36	7	㊐船漂流民護送しエトロフに来航。	
⑫家慶	37	8	㋐船漂流民護送し浦賀へ、奉行砲撃。	大塩平八郎の乱
	40	11	㊧船長崎へ入航アヘン戦争伝える。オランダ書物訳書の流布禁ず。	緒方洪庵蘭学塾を
	41	12	中浜（ジョン）万次郎太平洋で㋐船に救助される。	天保の改革

埋め草「ハッケヨイ」の語源は

九州場所が開かれている。「ハッケヨイ」「ノコッタ」の掛け声は欠くことのできないものであって、案外その語源は、「ノコッタ」＝「残った」ではわかっているが、はじめについては大いに問題がある。

子どものころ歌った「金太郎」のうたに

アシガラヤマノ、ヤマオクデ
ケダモノアツメテ、スモウノケイコ
ハッケヨイヨイ、ノコッタ
ハッケヨイヨイ、ノコッタ

で聞いても、ハッケヨイと聞える。

（石原和三郎詞・田村虎蔵曲）

ところが『大言海』などによると、―相撲ニテ、行事ノ力士ニ向ヒテ八卦良イト唱フル語―とある。

また、日本相撲協会の審判規定には、――両力士立上ってからは、「残った。ハッキヨイ。」の掛け声をなす。「残った」は技をかけている場合であり、「ハッキョイ」は発気揚々を意味し、両力士が動かない場合に用いる――とある。ところが地方巡業の時に聞いても、テレビで聞いても、ハッケヨイと聞える。

また両力士の立会いと同時に「ハッケヨイ、ノコッタ、ノコッタ」と掛ける行司もある。

そこで国学の教授の考えを聞いてみると、「ハッキヨイ」を「ハッ―キヨイ」の二つに分け、下の「キヨイ」の語源として、「競ふ」の命令形「競へ」と想定すると、

キホヘ→キヨエ
キオエ
キヨエ

となる。

次に「ハッ」は、万葉集の古い歌にもよく使われている。

はや船に乗れ
はや渡し給へ

の「ハヤ」が、相撲という闘技の、緊張の極にある場面での促しの掛け声に転じたものと考えられる。

「日本書紀」やそれに続く歴史書に出る文章に「早競う」という語があるが

ハヤキホヘ→ハヤキヨエ→
ハヤキヨエ→ハッキョイ→
ハッキョイ
ハッケヨイ

となったと考えられる。両力士が技をかけない静止時に限って「ハッケヨイ」の掛け声を掛るという意味も十分になる。

（昭和四十七年『国語研究』三三　岡崎正継より）

柴栗句会十月抄

園児らに叩かれ座る巨南瓜（おおかぼちゃ）　淺野としお
石蕗咲くや今年の秋もこの世にて　糸原古志
聖堂の鐘はるかなる秋夕焼　恩田和美
鵙鳴くや朝のコーヒー熱くして　加納信子
倶会一所早世の夫に供す小菊　楠房子
宮の森斜めに裂きし鵙の声　高木白虹
切株に腰をおろして茸談義　中澤美紀子
縄張りを一声高く鵙猛り　新出谷一華
諦めて今日を生きゆく柿一つ　錦織富江
朝霧の彼方でものわ叩く音　渡部夕峰
道草をして子等の行く草紅葉　峯石美代子

斐の上川柳十月の句

里芋がふっくら煮えて夕餉待つ　藤原千代子
店先で栗を拾って飯にする　児玉哲呂
過疎の町車のためか道広げ　横山まこと
朝湯して三分間の人格者　勝田みのる
台風がさけて通ってつい安堵　安部正子
さつま芋煮たり揚げたり旬の味　足立玉恵
涼しさにうなだれている扇風機　田部都
よい鴨とあれこれ物を売りにくる　藤原のぼる
ふる里の味があふれる秋祭り　真綿よし子
敬老が敬遠される世が変る　田中芳春
川柳が下手な横好き六十年　松浦久寿
小ねずみはペットのような顔で出る　児玉えみ
列島は日照不足金不足　松浦亜以
不況風広告ばかり派手になり　渡部ミツコ

独りの思ひ　簸の上短歌会

色も香も乏しき余生に短歌（うた）ありて一人で守るこの古き家　永井弥生
月命日は間引菜に煮る団子汁　戦後を生きてふたりの好物　仝
名を呼べど眼つむりしままの妻の顔　いくたびも拭ふ梅雨ぐもる朝　常盤はるまさ
妻の好みし呉汁を朝毎作りつつこころ残りのよぎるふたたび　仝
毎日の散歩道なり　折れてふさぐコスモスの花下を犬が這いて行く　小早川恵子
竜胆の今朝はひらかず　雲垂るる空には色を競はぬ花か　仝
刈り終はりし峡田を吹ける夕風に生きものなべてさびしかりけり　諸角長子
天気予報外れて明日は晴れになれ　秋雨つづく小豆の畑　仝
萩の花のこぼるる小径　打ちつれてうからと辿る奥津城への径　岡田時子
降れば降る　降らねば降らぬと人間の勝手なる思ひ又雨が降る　野村節子
鎌握りておぼつかなき手つきに稲を刈る業体験に来し町の若者　農仝
父われをひとり残して還らざる黄泉の旅路を行くは無精ぞ　安部夕波

会員頒布一部二〇〇円／六九・一六　島根県仁多郡横田町一〇六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第285号（12月号）
1998.12.7（M131.T87.S73）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

最後の一年将軍 徳川慶喜とこの地方（下）

—長州征伐をめぐって

開国へ

16世紀（尼子氏が抬頭して横田庄に支配を及ぼしてから、毛利氏によって滅ぼされ、その後豊臣秀吉の時代となり、横田庄が終り、秀吉が朝鮮に二度出兵するまでの時代）は、欧州の国々がその発展を世界市場の形成に求めはじめる時代である。

18世紀後半から19世紀前期（宝歴—当地方で鐚を割って鋼をとり、永代鉄となったころ、また四日押から三日押に転換に努力しはじめた頃、間宮林蔵が間宮海峡を発見し、杉田玄白が『蘭学事始』を著した時代）は、イギリスの産業革命を経て自由主義段階に達し、1857（安政4）には最初の世界恐慌が発生している。

その頃のアジアでは、欧米から最も離れ、前近代的ではあるが統一国家のもとで鎖国政策が行われ、欧米勢力の侵入を長年にわたり阻んできた東アジアが、アヘン戦争を経て1542年の南京条約による清（中国）の開国、58年の安政条約による日本の開国によって世界市場に組み入れられ、地理的にも世界市場がほぼ地球上を覆い尽くすのが、この1860年代である。

前号の年表は日本中心に欧米各国の来国を書いていて、イギリスも早く訪れてはいる。この世界市場の中心はイギリスであり、「世界の工場」として原料の輸入、製品の輸出では首位を占めていた。その一番の輸出入の相手国となったのは、非欧米地域のアジア、アフリカ、ラテンアメリカ（中南米）、オセアニア（南アジア諸島）であり、従属的市場であって、圧倒的な生産力格差に基づく商品の大量流入による在来産業の破壊、イギリスなどへの原料・食糧などの農産物輸出の発達などで、旧来の伝統的生産関係が破壊されて欧米に従属する経済構造になった。

この欧米の資本主義の底辺に強制的に組み入れられたのは、

① はイギリスの白人植民地（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ケープ植民地など）であり

② は政治的独立はいちおう維持されたが、自由貿易規定を中核とし、協定税率（輸入税率は相手国の同意なしで改定出来ない制定、日本はこれで自主権がなく、その後の交渉で1911明治44年やっと53年振りに撤廃できた）、治外法権（外国人が日本在住しても法律に従属しない権利で、明治32年に41年振りにやっと回復した）などを含む不平等条約を強制され、政治的、経済的に従属させられた諸国で、ペルシャ、トルコ、シャム、清（中国）、日本などがこれにあたる。

③ は欧米にとっての異民族植民地であり、政治的、経済的自主性を奪われ、本国に完全に従属させられた。最底辺を構成する国々で、アジア、アフリカの多くの地域が、1854年（安政元）以降この植民地に転落していくが、19世紀半ばから（1849嘉永2）植民地化したインドがその典型である。

ペリー来航と日本の開国

年表をよくみると積極的に日本に到来しはじめるのはイギリスである。列強のアジア侵略を主導したのはイギリスであるが、19世紀中期にはクリミヤ戦争や、インド・中国との戦争、民衆反乱鎮圧などに忙殺されていた隙間をぬって、日本の開国はアメリカ合衆国によって行われた。

アメリカは、発展しつつある中国貿易においてイギリスに対抗するため、太平洋横断航路を開く意図をもち、その寄港地を日本に求めたこと、当時アメリカの捕鯨業が全盛期にあり、北太平洋に出漁する捕鯨船が増加し、日本に漂着する遭難船の乗組員の保護や、日本に避泊・補給港を求めたことなどによって、日本への関心が他の列強よりも強かったのである。

アメリカの遣日特派大使兼中国・日本分遣艦隊司令官ペリーは、四隻の軍艦を率いて1853年7月8日（嘉永6年6月3日）浦賀沖に侵入した。黒船渡来の報は日本全国を震撼させたが、ペリーは大統領の国書を幕府に受理させて、いったん中国に引き揚げた。翌54年2月（旧暦1月）7隻の軍艦を率いて再度来航し、武力を背景に強硬に開国を迫り、ついに3月、日米和親条約（神奈川条約）が結ばれた。この条約は、下田・箱館での欠乏品供給、遭難海員・渡来民の保護、最恵国待遇、領事駐在などを規定し、通商条項は含んでいなかった。この条約に基づいて56年8月（安政3年7月）総領事として着任したハリスは、第二次アヘン戦争によるイギリス・フランスの中国侵略、中国の敗北を背景に、幕府と通商条約交渉を行い、58年7月（旧暦6月）日米修好通商条約が調印された。翌8月（旧暦7月）にはオラン

徳川慶喜とこの地方（下）・短歌・俳句・川柳・横田三十三番札所めぐり⑳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

ダ、ロシア、イギリス、10月（旧暦9月）にフランスと、相次いで、日米条約を原型とする条約が調印された（安政5か国条約）。

不平等条約と貿易の発展

この時の安政5か国条約は不平等条約であったが、中国（清）と比較すると、①輸出入税とも日本が高く、②中国では外国人の国内通商権を認めたが、日本では開市開港場に限定され、外国の経済的侵略を防ぐことができた。③中国はキリスト教保護の義務を負い、中国領海内の海賊鎮圧のため、外国船が中国の港に自由に入港を認めるなど、列強の内政干渉を招き易い条項があるが、日本にはなかった。従って典型的な不平等条約であるが、その従属性は弱かった。

横浜、長崎、箱館の三港で自由貿易が始まったが、通貨政策への対処のまずさから、急激なインフレーションを引き起し、幕府、藩財政や家臣団の窮乏を激化させて幕藩支配体制の解体が促進される結果を招いた。

輸出は圧倒的に生糸で、二位は茶で、両者で大部分。

輸入は第一位綿製品、第二位羊毛製品で、ほかに幕末維新の動乱期に武器、艦船の輸入が増加した。（松江藩は1862文久2年に英国製鉄艦―「一番八雲丸」と命名、米国製木艦―「二番八雲丸」を購入し、将軍上洛にあたり供奉艦ともなる）

取引相手国はイギリスが圧倒的優位で、ついでアメリカ、フランス、オランダ、ロシアであって、従属的な形で世界市場に組み入れられた。

貿易は完全に外国商人の独占である上に、茶再製工場、造船、炭坑の経営などにも進出してきた。養蚕・製糸業、製茶業などは輸出産業化して発展したが、在来の産業が衰退した。

尊王攘夷運動

ペリー来航に際して、当時すでに幕府は諸藩統制力が弱まっていたので、独力で対処できず、諸藩、幕吏の意見を徴した。これは異例のことであり、かえって幕政批判の道を開くことになった。さらに通商条約の調印に際しては、揺らぎつつある幕権を補強するため幕府は条約の承認を天皇から得ようとし、これに対して雄藩勢力や下級武士尊攘派は勅許を阻止しようと運動した。これに、幕政改革をめぐる対立、将軍継嗣問題をめぐる対立が加わり、激しい政争が展開されたが、幕府専制を維持しようとする保守派から井伊直弼が大老に就任し、勅許を得られぬまま条約調印を強行し、反対派を弾圧した（安政の大獄）。その結果、かえって尊王攘夷運動は全国的に拡大するとともに急進化し、1860（万延1）3月、水戸浪士らは井伊を暗殺した（桜田門外の変）。

長州征伐　第一次・第二次

①文久3 1863年8月18日の政変。

井伊大老の死後、孝明天皇の妹和宮を将軍家茂の室として降下させ、幕府と朝廷との妥協を計ったが、薩摩藩を中心とする雄藩の中にも同調するものもあったが、長州藩は公卿三条実美を通して、朝廷を尊王攘夷派に傾かせた。一方幕府は文久3年5月10日を攘夷実行の日と定めた。

長州藩はこの日下関海峡を通過するアメリカ・フランス・オランダの艦船を砲撃し、7月には薩摩藩は鹿児島湾に近撃してきたイギリス艦隊に発砲した。しかし強力な彼の国々の火器の前に失敗し、このような過激派の行動に批判がおこり、8月18日の政変となり、朝議一変して三条実美らの急進的な公卿と長州藩の勢力を朝廷から一掃した。三条ら七人の公卿は長州藩へ落ちのびた（七卿落ち）

②蛤御所の変（禁門の変）

翌元治元1864年7月、京都を追われた長州藩では、慎重論者の努力も空しく、形勢挽回のため、福原・国司・益田の3家老を押す来島又兵衛らは上京して強訴したが拒絶され、本隊が到着しないのに蛤御門他二か所で戦闘に入ったが、会津・桑名・薩摩の兵に敗退した。

③第一次長州征伐

これによって長州征伐の名目を得た幕府は、尊攘派に打撃を与える意図もあって、征長を表明し出軍した。参謀は西郷隆盛、そして長州藩に謝罪降伏させるべく画策した。

禁門の変、下関砲撃ともに敗れたことから、長州藩の保守俗論派が政権を握り、責任者として三家老ほかの処刑、藩主父子の謝罪、山口城の破却、三条以下の五卿の引き渡しなどの要望に応じたので、幕府は撤兵令を発した。

④第二次長州征伐

翌慶応元年1865になると長州藩では保守俗論派に対して、高杉晋作が下関で挙兵し、諸隊の力を得て美祢郡大田・絵堂の内訌戦を戦い、俗論派にかわって正義派が政権を握り、藩論を武備恭順へと転換した。この方針に従って、大村益次郎を登用して軍制改革を実行し、特別資金であった撫育方の貯蓄金を放出して銃器や艦船を購入し、装備の洋式化を図り、幕府の再征に備えた。

一方幕府は、こうした長州藩の態度を詰問して、将軍家茂自ら江戸城を発して上洛の途につき、（松江藩軍艦「一番八雲丸」によって）1866年5月には10万石削封ほかを内容とする長州藩の処分を打ち出したが、長州藩は応ぜず、6月7日の大島口での戦闘を手始めに、6月14日には芸州口、16日には石州口、17日には小倉口と、いわゆる四境で幕府軍と長州軍の戦闘が開始さ

れた。結果は幕府軍の敗走に終り、7月に家茂が大坂城で死去したことを契機に撤兵した。以降、幕府はその権威を失墜し大政奉還へと向かった。

長州征伐と当地方

幕府は親藩である松江藩主松平定安をして、早くから藩内の戦備を整えさせていたが、戦に関しては慶応2年の長州征伐からである。松江藩はこの役についても大いに勤め、軍費の支出も必要としたので、定安は慶応元年以来、国内に対して殿り合書を発して人民を戒めた。本郡もその令に答えて「差上申一札之事」を差出した。(原口村の庄屋ほかが署名して、下郡嘉一兵衛(大馬木富田屋の中村)に出した控がある)

藩も嘉永年間に出雲の海岸に砲台を築造した。美保関、加賀鼻、古江、江角、西ヘ釜屋、十六島、日御碕経が崎ほか3か所であった。別に唐船番隊なるものもあって海寇に備えた。また藩士のみにては不足のため、農民より壮年を抜擢して農兵なるものを組織し、松江にて錬兵を学ばせた。仁多郡よりは文久3年1863 3月に32名を選んで召抱えその後10余名のものを集めた。

ついで仝年5月、横田村角に於て陣屋を築造し、人夫98人役、明俵826俵、縄30尋28束を用いて土居6～7間四方(一畝半)の簡易なものではあったが、急に武備に力を入れたのがわかる。

しかしこの時は農兵にとどまったが、第二次長征においては、郷夫4895人、夫馬代り郷夫2070人、計6965人を出させた。仁多郡は529人で、ほかに竈(戸)一軒には草履5足、馬沓2足、石高10石に付千草一貫匁の割で徴収した。仁多郡は756貫匁であった。

この時国内の医師も徴発されてそれぞれ隊付を命ぜられたが、本郡医師石原淳斉(横田村)が小荷駄隊付を命ぜられた(既刊号参照)山猟師は番所を堅め、前と同じく食糧品、梅干を徴収された。

この戦いは幕府の失敗に終ったが、松江藩は独り7月13日の石州内田村(現浜田市内田町)の合戦に砲弾を放ち長州軍の屯集所に命中して狼狽せしめる。将軍家茂は大坂城にて没し征長の役は終った。

藩は10郡に1万両を出して各郡に割賦した。仁多郡は820両を受け取った。

伝えによると、落城した浜田城より帰還する備中藩の若干の侍が、馬木を通過したが、人々は情を与えて通したともいう。

幕府の威信も地に陥ち、将軍慶喜により大政奉還となり王政復古を促した。明治2年版籍奉還、松平定安は藩知事となったが、仝4年廃藩置県となり、新しい時代へと矢つぎ早にと制度が改正されて行った。

横田村では、文久2年1862より慶応3年まで6か年間数百人の地方農民の子弟を集めて錬兵演習を行った。出張藩士は與外森宝馬(三百石取)ほか與士の中野・山川・水戸・坪坂で、他郡と同じく郡内1か所に駐在した。それは横田町大市の吉重橋の西側のたもと伊藤伝兵衛＝広島屋(現西田村)方に、藩士の宿舎があって、5畝歩の操錬場があった。明治元年の廃藩とともに廃止された。

第一回の長州征伐が起きた元治元年1864に、藩は10郡に郷夫6916か夫馬1456頭、味噌6石、梅干93400箇であった。

そして他国に接する国々には番人として士列庄屋・山猟師・農兵他を配した。その場所は、上阿井、小馬木、大馬木、八川、蔵屋、福頼、竹崎、大呂、山奥、久比須であった。万一の場合には、山猟師・農兵その他の者も駆け付け、猪槍・竹槍・斧の手道具を以て防禦すべきことを命ぜられた。

絲原家文書から(絲原記念館蔵)

10代糸原徳右衛門は
・万延元年1860 3月16日に鉄師頭取に任ぜられ、3年後の
・文久3年1863 7月27日には代々帯刀を許され、翌年
・元治元年 9月12日、異変の節には具足着用許すが、兜・袖佩・楯派のぞき、代りに陣笠半首はよろしいとされ、若し家伝の兜があれば許すという下命があった。

そしてこの年10月2日には、記念館入口のガラス棚の中にある額装の文書が届けられた。その要点は、

先に述べた元治元年10月3日の異変の折の郷天探出の節の召抱人のうちから、業務に差し支える者について、除いてほしい(戸数)は3070戸であった。一戸2人のところもあった。そのほ

秋心象　　簸の上短歌会

寝たきりの妻を看取りて過ぎしかば身の衰へを今に愕く　　常盤　はるまさ

君葬ふる山の奥城に読経流れ紅葉しきりにはらはらぎてをり　　野村節子

渡り来しばかりの鳥か宍道湖の夕日に映ゆる波に寄り添ふ　　諸角長子

次帰る日まで風邪など引かずにと車より又子の声とどく　　永井弥生

庭木々の紅葉しきりに散りをれば友を誘ひて秋を歌はむ　　岡田時子

失ひし愛はふたたびかへり来ず別離の秋がまためぐりくる　　安部夕波

前号訂正　2頁下から15行　大島高任　→　全頁5行　征伐　浜田落城

斐の上川柳十一月の句

言い過ぎたあとは自分で慰める　児玉哲呂
背伸びして生きてゆくのも呆け防止　渡部ミツコ
秋らしい足がお山に向いている　真綿よし子
童心で粘土こねてる老いの友　児玉えみ
一人居に鍋売りつける電話あり　松浦久寿
お毒見の係も欲しい運動会　勝田みのる
女子高生くったくもなく足伸ばし　松浦亜以
一寸した修理次ぎつぎボロが出て　安部正子
手も口も出さず責任持ちもせず　藤原のぼる
柿の皮はぐ手で蠅が手足摺り　田中有樹絵
如何かと具合いを問えば涙ぐむ　藤原千代子
きのこ採り杉平少しあとは無し　足立玉恵
口元へ出かけた言葉のみこんだ　田部都
人は皆旅立ちの日を知らぬまま　松田牛歩
逝ってからやたらに褒める世の流れ　田中芳春

柴栗句会十一月抄

一匹が読めづ牧場閉じかねる　淺野としお
新道の石垣の反り冬立ちぬ　糸原古志
木守柿老のつぶやき黄昏る　恩田和美
日短か湯呑み茶椀が一つ欠け　加納信子
きのこ飯古りし藍絵の奈良茶椀　高木白虹
山茶花の紅白あれど無人駅　中澤美紀子
秋天へ響け大太鼓の撥捌き　新出谷一華
精一杯ついて歩くや文化の日　錦織富江
山茶花の花さりげなく散り重ぬ　楠房子
縁側に大根吊るす二人分　峯石美代子
山茶花や箒目清し屋敷道　渡部夕峰

と委曲をつくした願いが出されているが、容易に出来難い。だが具足着用も差し支えないとされていることでもあるので、職方手代・下男だけは此の度除いてもよいが、その他の召抱人で割当をうけたものは困難である。だが仕事に従事している時御操出しになった時には、また判断をすることを、郡役人に伝えておいたから、左様心得よというものである。

他の鉄師についても、それぞれこの様な対応がなされているようである。そして

・11月5日には、御紋付御幟、仝高張御挑燈を貸し渡すことについて追加の許可が届いている。

（これらの装具は、周囲に展示してある）

藩内総力を挙げて、幕府に協力体制をしている様子を知ることができる。

また古文書の中には、鉄師田部家に入った情報（商人に姿を変えた忍の者、或は朝廷の者であると入り込む者など注意すること等々）の写し、聞き書き、番頭忠四郎が得た情報などをしるした書類があって、急に幕末になって当地方にも及んだ緊迫した様子を知ることができる。

（岩波講座『日本通史』近世5、松平定安公伝、仁多郡誌、絲原家文書を参考とした）

（横田史談会　高橋一郎）

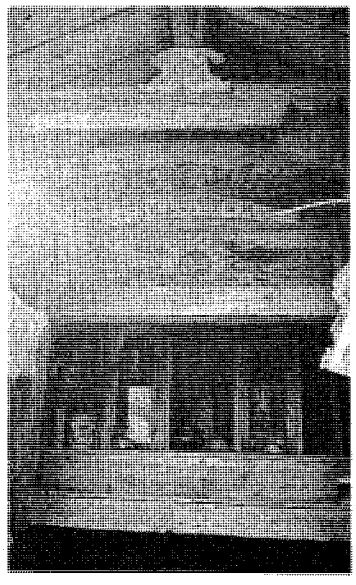
（ひとりごと）

編集や地方史記述の粗雑浅薄さはおいて、読書・会員の高齢化が進み、購読者の数が減り、台所がいよいよ苦しいのですが、御厚意を頂いたり、激励品や交換研究誌を頂くと、金に変えられぬと、ともに会計に繰り入れて続けています。交換研究物はとても有難く、これらに紹介して頂くと、たたら・奥出雲中世史をさらに知りたいと、電話や便りなどで該当号の申込みがあると、金には変えられぬとお届けし、励まされて何とか続けております。資料は沢山ありますが、編集者なりの深めた記述がおっくうになってまいりました。頑張ります。

横田三十三番札所めぐり⑳

第25番　下横田　滝尾山医王寺（避病院側）

むろ滝のすえの流れる医王寺や
くるしわずらふつみも消えけり



（横田史談会　佐世川徳雄）

会員頒布一部二〇〇円／六九一六　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第286号（1月号）
1999.1.2（M132.T88.S74）
奥出雲編集集団©
横田史談会

出雲讃歌①
—国来、国来

童女の胸のように
幅のひろい
大きな鉏をとって
大きな魚の鰓を
切りはなすように
その土地をたち切って
三つよりになった強い
綱をかけ
霜枯れした黒葛を
たぐりよせ
河船をひくように
もそろもそろと
ひきずりよせながら
「国来、国来」と
ひきよせて
つなぎあわせた土地は

前記のくだりは「出雲風土記」の中でも最もロマンの香りが高く、感動をよぶところ。その結果生まれたのが日御碕であり、つなぎとめる杭をたてたのが三瓶山となり、引いた綱は薗（その）の長浜になったとうたう。さらに東へ二つの地塊を引き寄せ、最後に引いたのが美保の国で、引き綱は夜見が浜、それをつなぎとめたのは大山であると歌いあげてある。この四つの地塊が、それぞれに宗教・伝承を異にしながらまとまっているのは、先住民の渡来の姿であろうか。国引きを終えたオミヅヌノは、意宇の森に杖をつき、自分は国造りにくたびれたとして「おえ」と叫んだとしめくくってある（意宇の地名のおこり）。

この詞章を称える人々は「驚くばかり確実な出雲の地形認識である。地形図を開いたもののひとしく感ずるところ」という。さらにある人は、一部の学者がいうように単なる机上の作詞ではない。綱をかけて山を引き寄せるということは「万葉集」東歌にも、平安時代の「祈年（としごい）祭の祝詞（のりと）」の中にもあるという。

大山からみる裾野の先につらなる夜見が浜は、美しい。逆に夜見が浜からみる湾曲した海岸線の彼方にそびえる大山は、さらに美しい。三瓶山から望む白波にあらわれる薗の長浜も美しいが、この長い砂浜の先にぽっかり浮かぶ三瓶山はもっと美しい。隠岐の島から出雲空港へ向かう機上から、それぞれを眺めるとき、決まってこの詞章を思いだすのである。だがこの美しい詞章を構成したのは、飛行機上からではなく、ほかならぬ奥出雲の船通山上であったと、思いめぐらすのである。

この山頂の視界は広い。東には伯耆大山が手のとどくほどのところに、その左手北に夜見が浜が、その向こうに島根半島が西へ山なみをくっきりとみせて、大社の弥山に至る。西の彼方に、三瓶山も親と子と孫が肩を並べて浮かぶ。山陰の中央部（伯耆・出雲）はほとんど一望のうちに、どんな説明にもまさる景観をひろげている。

「国引き」の詞章は出雲人の想像力とのみ片付けることは適当ではない。

眼前の事実に詩情が加わったのである。この山をほぼ分水嶺として、東には日野川が大山山麓の西をよぎって北へ流れ、夜見が浜をはぐくんだ。引き綱はのびた。北へは飯梨川が中海へ。西へ流れる斐伊川は、出雲大川として薗の浜辺をつくり出した。南に連なる山から南へ流れる川は分かれて、一つは吉備高原をよぎって旭川となり、一つは西南へ走って中国山塊をえぐり、北流して江の川となる。

船通山の眺望が、古代の人々を賢くしたのである。出雲への重要な通路にそびえるとほりかみ（鳥上）の山が、山の形からもやがて船通山と呼ばれるようになったのは、地名学からも説明ができる。こうした体験をもつ人々を風土記時代の出雲族は抱えこんでいたのである。育ちつつある浜辺の美しさを感ずる心の上に、この感覚が「国引き」の詞章をまとめあげたのに違いない。ここは陽と陰との重要な古代の通路であった。大和の人々が山陽と呼び山陰と呼び分けたのも、この山上で知る気候風土の違いからではなかったか。よく晴れた日には隠岐の島もみることができる。古代の人々が、この山頂からその東に越の国をおもい、その西の彼方に新羅を望んだのは、極めて素直な認識であった。

今の神話についての考えで出雲に関するものは、『日本書紀』『古事記』のものを—出雲的神話、『出雲国風土記』のものを—出雲神話とする見解が多くなっている。水野祐氏は広い史学的立場でその重要性を大冊

出雲讃歌①—国来、国来　・俳句・短歌・川柳

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

にまとめられ、さらに深められている。三品彰英氏の神話に関する多数の著作集では、大陸の古典との対象を極めて深く追求されている。井上秀雄氏の考えは、深い朝鮮古代史の研究から、日本の神話・古代史に迫っておられる。鳥越憲三郎氏の古代史は出雲に新しい視点を提供し、その後東南アジア・中国・朝鮮・斉州島・沖縄とそれぞれの神話・古代史を実地に検討されている。当県の古代史研究センターは若い客員研究者の多くの見解を、考古学との関連も密接にしてまとめて発表されている。「出雲国風土記」の値打ちはとみに高まっている。

最近8巻の古代史の著作集の刊行がはじまった上田正昭氏の出雲神話にはアジアの視点からさらに新鮮なものを加えられた。

これら諸氏の見解とくに上田氏のものを中心に標題を浮き上らせてみたい。

先に前段にのせたものは、私の戦後の出発となった拙文で、『奥出雲をさぐる』（拙著1965昭和40年刊、山陰文化シリーズ16、今井書店）『島根県横田町誌』（昭和年刊、横田町）の執筆の基礎となったものである。この文は昭和53年5月9日の山陰中央新報に寄せ、その年12月5日刊の『奥出雲のたたら製鉄覚書』（奥出雲文庫第2号）に載せたものの一部である。

（本号は以下に上田正昭作集三巻の一章の一部を転載させて頂く。12月発刊）

八雲立つ
出雲八重垣　妻籠みに
八重垣つくる
その八重垣を

『古事記』によればスサノオノミコトが、須賀の宮を営んだおりの歌とされている。その物語のすじに若干のちがいはあるが、『日本書紀』の伝承もほぼ同様である。

〝八雲立つ出雲〟、そのひびきに、私は古代の人びとが出雲によせた、出雲くにだまの讃歌を感じる。おそらくこの歌の原像は、若い首長の新婚を祝福する寿歌にあったとおもわれる。

〝八雲立つ〟は、しばしば出雲の枕詞として用いられた。『日本書紀』の崇神天皇60年7月の条にみえる。〝八雲立つ　出雲建が　佩ける太刀〟もそうであったし、『万葉集』に載る〝八雲さす出雲の子らが黒髪は吉野の川の沖になづさふ〟（430）の柿本人麻呂の詠もそれにつながる。

〝八雲さす〟ということばは、『古事記』景行天皇条の〝やつめさす出雲〟とも関連するが、雲のさかんにたちのぼるさまに瑞兆を感得した古代人たちは、聖なる厳藻としての義のみでなく、出雲にちなんで、その枕詞に〝八雲立つ〟を使うようになった。

山陰道7カ国は、和銅6年（713）の四月、丹波の国の北部5郡を割いてあらたに丹後の国が設けられるにおよんで、山陰道は8カ国となった。出雲の国は、その山陰道のなかの1国で、国の等級（大、上、中、下）としては上国に属した。

山陰といえば、幽隠の世界を想起する。じじつ『日本書紀』は、成務天皇5年の条に「山陰を背面といふ」と記している。山の背の面＝山の斜面の北側を山陰と名づけたのである。いまの世の人は、この山陰道の出雲のイメージに重ねて、〝八雲立つ〟を連想するかもしれない。だがそれは古代人の感覚とはかなりおもむきを異にする。山陰道という命名じたいが、大和に都した支配者の行政観にもとづくものであった。都を中心に背面を山陰とみなしたにすぎない。

出雲鰐淵寺の白鳳仏銘文（692年）にすでに「出雲国」とみえるその出雲の地を、後述のように、古代の出雲人みずからが、〝八雲立つ出雲〟と高らかに歌いあげたのである。

天平5年（733）に完成した『出雲国風土記』は、奈良時代にできたほかの『風土記』とくらべて独自である。朝廷から派遣された国司とその隷属下にあった官僚らが編集した『常陸国風土記』や『播磨国風土記』、太宰府の官僚らの編纂した『肥前国風土記』や『豊後国風土記』と相違して、在地の豪族出雲臣広島と秋鹿郡の人神宅臣金太理がその編集につとめた。

中央の知識に潤色されぬ土着のいぶきがきわだつ。したがって、ほかの四風土記のように、天皇や皇族らによる征討および巡幸を説話のなかにくみいれて強調する気配はまったくない。むしろ出雲人の信仰に生きた神々にまつわる神話や伝説、それら神々の巡行のさまを描きだす。

『出雲国風土記』については再撰本説や稿本説があるけれども、ほかの『風土記』のような欠損部分がなく、唯一の完本として伝わっている。それも貴重だが、そのことにあわせて、その勘造にあたった者が、出雲在住の人であったこともみのがせない。

その『出雲国風土記』の、冒頭に「出雲と名づくる所以は、八束水臣津野命詔りたまひしく、『八雲立つ』と詔りたまひき。故、八雲立つ出雲と云ふ」と記す。古代の出雲人みずからが、出雲の名のおこりを〝八雲立つ出雲〟と関連づけてうけとめていたことがわかる。

ヤツカミズオミヅヌノミコトは、国引き神話の主人公であった。オミヅヌとは「大水主」を象徴し、出雲人の信仰に生きた水神を意味した。出雲における

国づくりの巨神であった。「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国なるかも。初国小さく作らせり。故、作り縫はな」とことあげして国引きするその神話は、日本神話のなかでも、もっともすぐれた詞章として結実した。ヤツカミズオミツヌのことあげにみえる〝八雲立つ出雲〟は、〝陰〟の出雲ではない。

出雲人にとって、〝八雲立つ〟は瑞気みなぎる出雲のほめことばであり、そのゆえの枕詞でもあった。そこには〝出雲くにだま〟への讃歌が、ことだまの韻律となって、私の胸にひびく。

（中略）

まこと出雲は、神々のふるさとであり、古代におけるパンテオンの聖地であった。『古事記』や『日本書紀』の神話に登場する出雲が、出雲神話のすべてではない。しかも、その出雲像は、宮廷神話の世界で歪曲されすぎている。（パンテオンは神々）

こころみに記・紀神話における出雲の神々をかえりみるとよい。記・紀神話によれば、高天原を主宰する神の命令によって、葦原の中つ国を平定する派遣神が天降る。その葦原の中つ国は「ちはやぶる荒ぶる国つ神の多なる」国と描かれ、「いたくさやぎてありけり」と表現されている（以上『古事記』）。荒ぶる神々が多く住む、喧騒の地とみなしたのである。また葦原の中つ国には「ちはやぶる悪しき神どもあり」「彼の地は未平げり、なかぶし醜めき国か」（『日本書紀』第1の「1書」）、「本より荒芒たり」（『同』第6の「1書」）などとも記述されている。

その葦原の中つ国の象徴として位置づけられたのが出雲の地であった。記・紀神話では、高天原から派遣された神は出雲の地にいたり、出雲において国譲りを迫る。だからこそ出雲の主宰神オホナムチの神（オオクニヌシノミコト）も、葦原中つ国の「まつろふ首渠」（『日本書紀』第2の「1書」）ということになる。

葦原中つ国のことむけ（平定）が、出雲を舞台として繰り広げられる記・紀神話においては、出雲は野蛮未開の地として意味づけられた。したがって、国譲りも、出雲の国の伊那佐の小浜（『古事記』）、五十田狭（『日本書紀』では五十狭々）の小浜などという具体的な地名と結びあわされて物語られることにもなる。

オホナムチの神の別名に、葦原醜男という神名がある。この場合の神名には、葦原中つ国の武勇の神というよりも、黄泉醜女の醜女と同類の醜男の意味が強い。

記・紀神話における出雲は、平定さるべき地であった。荒ぶる国つ神の住まいするところであった。だがじっさいの出雲の地は未開野蛮の地として存在したのではない。出雲人の信仰にあおがれた神々は、けっしてただの〝荒ぶる神〟でもなければ、〝しこめき国〟の神々でもなかった。

10世紀の前半に編纂された『延喜式』に記載する神々の数は、大和の国の286座、伊勢の国の253座についで、187座と多い。平安時代のなかばにおいても、いわゆる中央が神社として記載したものは、そのように多数を占めた。しかしそれは『延喜式』に収録されている式内社の神の数であって、出雲にはそれ以外の神々もまた数多く鎮座した。

（神とは何をいうのかは別項で）

柴栗句会十二月抄

山眠る百樹千樹の寝息洩る　浅野としお
ひたひたと足音急ぐ師走かな　恩田和美
今聞いた用事忘れる師走かな　加納信子
平凡に生命あづけし裸木の虫　楠房子
ひと筋の灯屋の煙名残り空　高木白虹
年ごとに母の背低く冬囲い　中澤美紀子
寂しき夜の小皿に余る煮大根　新出谷一華
猫車積んで片向く十二月　錦織富江
冬葉漬け終えてワインをふくみけり　峯石美代子
吟行の茶受けの皿は木っ葉かな　渡部夕峰

ぬくき小春日　簸の上短歌会

掌をのぶる先にほろりと落ちてくる零余子ひろひてぬくき小春日　永井弥生
秋晴れを油単の紋もあざやかに婚の荷はゆっくりと峡の道のぼる　仝人
この一年山家ぐらしのつれづれに眺めし木々も冬に入りたり　諸角長子
庭樹々の紅葉はおおかた散りつくし月の光に枝間あかるし　岡田時子
測々と妻逝きしこと迫り来てあした夕べに経唱へゐつ　常盤はるまさ
敗戦の怖さ質すは愚かなりと宮尾登美子は強く言ひたり（NHKわが心の旅）　仝人
愛されて五十三年をひたすらに生きたる吾娘よ山茶花の散る　野村節子
恵那山の空碧く澄み木曾路行くわれは旅人明日に夢あり　安部夕波

前号訂正　1頁1段11行　宝暦・　2頁4段12行　蛤御門・　3頁1段19行　屋の中林・

『出雲国風土記』には、「合はせて神社三百九十九所。一百八十四所（神祇官に在り）二百一十五所（神祇官に在らず）」とある。そのうちの百八十四社の神は、のちに「百八十六社」となり、やがて『延喜式』に記す「百八十七座」の神となる。「神祇官に在り」というのは、中央の神祇官の神名帳に記録されているものをさし、「神祇官に在らず」とするのは、神祇官の『延喜式』に記す社のほか、それを上まわる社のあったことが、これでもわかる。さらに注目されるのは、『出雲国風土記』の意宇郡安来郷の条にみえる比売埼の伝承である。

その説話は、天武天皇の代のできごととして、およそつぎのように物語る。語臣猪麻呂の娘が、比売埼であそんでいたさいに、和爾（鰐）にであって食い殺されてしまった。そこで激怒した語臣猪麻呂は、その娘のなきがらを浜のほとりにおさめおいて、天に向かって泣きさけび、地に伏して嘆き悲しんだという。数日その場所を去らず、箭をとぎ鉾を鋭くみがいて、鰐をうちとるに都合のよい場所をえらび、そこで礼拝して「天神千五百万、地祇千五百万、ならびに当国にしづまります三百九十九社、また海若たち」と告げるのは、その他の海若（海神）などをさす。つまり天つ社、国つ社として天武天皇の代から公認されてきた神社のほかにも、海神をはじめとする出雲人がまつる神々のあったことを、はっきりと物語る伝承である。

斐の上川柳十二月の句

ポツポツと喪中あいさつきて師走　児玉哲呂
残り火をもやす宴げに齢し忘れ　高木凡太
初夢を明日はあすはと追い続け　松浦久寿
年金と病気の愚痴と孫自慢　勝田みのる
若人につられてまねて若返り　渡部ミツコ
着ぶくれてこたつで国会見学し　石原冬明
いつまでも融けぬしこりに悩まされ　藤原のぼる
来た道の足跡薄く生きただけ　松田牛歩
温かい冬の陽受けてシクラメン　足立玉恵
少子化でブランコ風と遊んでる　横山まこと
早寝して夜中の目ざめ句をひねり　安部正子
電話では足らず手紙がやってくる　真綿よし子
六度目の卯年いかがな年じゃやら　松浦亜以
城下町ぐるっと廻り二百円　児玉えみ
茶に呼ばれ嫁さんの愚痴聞かされる　藤原千代子
落葉寄せ芋でも焼きたい冬日和　田中有樹絵
宮参り寝ほけたまゝで紐落し　田部都
常備薬だけは忘れず旅支度　田中芳春

「また海若たち」と告げるのは、その他の海若（海神）などをさす。つまり天つ社、国つ社として天武天皇の代から公認されてきた神社のほかにも、海神をはじめとする出雲人がまつる神々のあったことを、はっきりと物語る伝承である。

語臣猪麻呂の礼拝が終わって、とばに、「当国にしづまります三百九十九社」というのは、前述の神祇官に在る百八十四所（社）と神祇官に在らざる二百十五所（社）の総計である。

この語臣猪麻呂の礼拝するこしばらくすると、百余の鰐が、ひとつの鰐を囲んで、じょじょに近づいた。猪麻呂は鉾をもって中央の鰐をさし殺した。その鰐をたちさくと、娘の脛がでてきたという。そこで鰐を串ざしにし、道の傍らに立てたと述べる。この説話の語臣猪麻呂は、安来郷の人、語臣与の父で、そのことがあってから六十年をへたと付記されている。安来郷に語臣を名のる、出雲語部の首長がいたことをも示唆する興味深い説話である。この物語にも、安来郷あたりの語部の間に語り伝えられてきた、出雲の神話や伝説の世界がほうふつと浮かぶ。そこには、出雲人のくらしに密着して語られていた出雲の神と人の面目がきらりと光る。

出雲の神々とその神話の伝統は、歪曲された記・紀神話のなかにも、無視しえずに存在している。記・紀神話における出雲像のみによって出雲を考えるのは、あまりにも一面的といわざるをえない。われわれは、出雲人の側に身をよせて、古代出雲の側から、出雲の神々とその神話の虚実をみきわめることが必要ではないか。

なぜなら、大和の出雲系神話とは異なったなかみを、出雲の地に語り伝えられた神話は保有していたからである。出雲の地ではぐくまれ、出雲の地に具体化した神話や伝説にこそ、出雲人たちの間に受けつがれた伝承をささえたいのちがひそむ。

《上田正昭氏の業績》

日本古代史研究の第一人者である。日本列島の中だけで古代の日本を研究していたのでは、古代日本の実像は見極めることができない。このことを1960年頃から痛感して、東アジア、朝鮮半島、中国大陸、モンゴルを含めた国際的な視野からの日本史の研究を、緻密な科学的論証を添えて、日本古代史研究を進め開拓した人である。歴史学界はもとより、考古学の西谷正、民俗学の宮田登両氏ほかも、同様な評価をしておられる。

（横田史談会　高橋一郎）



会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第287号（2月号）
1999.2.2（M132.T88.S74）
奥出雲編集集団◎
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

明治初期における仁多郡の経済事情と製鉄業（下）

鉄業維持への努力

郡内の戸長（町村長）へ絲原権造が、復旧維持について次のように書状を届けた。

「鉄山維持方法諮問」（要約）

本郡の鉄業は物産の一つで郡民の主たる稼場であって、郡内の鉄株5カ所他に増2カ所合せて7カ所、営業人（鉄師）は互いに約束によって、藩の救助もうけて営業して来たが、明治御一新以来制度がかわり、鉄師各自が適宜営業したところ、鉱物追々不景気になり、営業も衰頽している。何とか続けているが、資本も尽き休業に至らんとする情勢である。大切な国の産業をへらし、人民の困難は言うまでもないこととなる。だが鉄業は将来見込みがないものではない。協力復旧し盛業にいたしたくても、資力足らざるは遺憾にたえず、希くば各位の御意見を賜りたい。

明治18年1月3日

大谷村　絲原権造

仁多郡各町村戸長御中

（絲原家文書要約）

これに対する「回答書」が、下横田村大谷村八川村戸長武藤文郎兵衛から絲原権造に届いている。すなわち（全前、要約）

……休業なされては諸上納村費はもとより多数の人民活路を失い、瞬時にも難儀と成りますので、熟考し郡内の下横田・大谷・八川三村の貢納予備公債証書額面2,025円がありますので、これを抵当として鉄業資金拝借して備えられるならば、村会議員に謀って、何時なりとも相続されれば、人民の活路を失うことはないと考えました。このことを御返事申上げます。

そして具体的方法について次の四項を戸長一同協議した協議録がある。

明治18年1月3日　鈩営業維持方法協議録

①郡内の鈩27カ所は維持し当面宇根鈩・槙原鈩・八代谷鈩・野土鈩・雨川鈩・鹿野鈩・卜蔵鈩の7カ所とする。

②営業者（鉄師）の資力なき場合は、人民により補わせるか、他の方法で7カ所は維持する。

③とりあえず仁多郡積立の貢納予備蓄積公債証書を抵当として、官よりその資本金の借入の手続をとる。

④鈩営業者（鉄師）へ仁多郡中より養米凡そ7,000俵を年々与え（賃金となる）、毎年10月1日より11月10日までの粳米相場の価格を、第四期田租の期に間違えなく払出す。云々

右評決す。

明治18年1月4日

郡内各戸長連署

（絲原家文書　要約）

一方全戸長が署名捺印し次のことを県に上申している。

公債証貸与之義に付伺（要約）

本郡は山間に僻在し、ほかに物産を求めることできず、鈩・大鍛冶の業に従って炊煙を立てて来ました。ところがこの業漸次衰頽し、すでに破産するもの少なからず、従事者は浮浪となって路頭に迷っています。そこで昨年2月本郡20,600余人より実情を述べて永続保存の道を情願したが、何もなく進退ここにきわまりました。坐して死するのみでありまず。やむを得ず、明治の年以来公納予備として蓄積公債証を各村所有していますが、これを抵当として営業資本補充のため、幾分か営業者（鉄師）に貸与して、郡民の活路の道を開きたい。公債については厳重な御達示と御規則もありますが、郡民必至の場合にあたり、やむを得ず不都合なことを伺い申出ました。貸与するにあたっては抵当物権として地所或は物品等きちんとして、少しも公納に差し支えないように致します。この件について伺い申上げます。

明治18年1月

種々の努力を重ねていった。このころは往古よりの大坂北国地方には販売を続けていたが、松江市に於いて諸国より来りし顧客に売却し、或いは諸藩に向って直接注文するものに対して売却していた。割鉄の他鋼は専ら仲買人に折地鋼（粗製）として売却し、又は造鋼（折地鋼を精

明治初期における仁多郡の経済事情・製鉄業（下）・村と町の変遷①・歴史用語「禁裡御料・仙洞御料」・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

製したもの)として、直接北国及大坂地方に向って発売していた。

明治13～14年頃より洋鉄の輸入が急増し、その圧迫を受けて和鉄鋼の売行き日を追って不振となり、営業上逐年困難となり、その維持に苦心するに至ったので、遂に島根県勧業課への救済懇請に県も動き、工部省に向って事情を上申をしたため、明治16年同省より実地視察として技師の派遣があり、遂に仝17年2月東京海軍兵器局へ、「銃器類製造用試ミトシテ買上」が行われ、錬鉄・鋼各1万斤を納入することとなり、以来島根勧業課の手を経て注文を受け、同課を経由して年々多少の納付をした。次いで間もなく勧業課の手を離れ、東京へ納品代理人を駐在させ、直接注文を受けて納入することになった。

明治17年には品質改善のために新しい技術を習得させるため、東京の海軍兵器局製鋼所へ、技術伝習のため職員枝木治吉を派遣し二年間研修させた。

この間、明治9年英国人ゼームス・ワットソン、米国人ライマン、仝16年6月には前記工部省技手2人、仝10月には海軍から2人工部省から1人合わせて3人が視察に来ている。

その頃は、仝15 17年再度の朝鮮事変、16～18年至る仏清(中国)戦争、18年の朝鮮巨文島事変など風雲急を告げ、明治政府は国民皆兵の徴兵制に改め、海軍五ヶ年計画など、急速な軍備拡張を行ったが、唯一の官営の釜石鉱山製鉄所(鉄鋼石)は操業が失敗続きで、原料鉄は中国地方山地の民営の和鉄製造(近世企業たたら)に期待しなければならなかった。

(左の表を参照)

しかしすべてが順調に進んだわけではなく、改善努力も直ちに実を結ばず、21年には「鍛練方粗悪」として納入が不合格となったこともある。

明治30年10月からは、鳥取県日野郡の近藤家と仁多郡の桜井家、絲原家が三者共同で(代表人絲原)納入契約を海軍省と交して納入することになった。(田部家は35年から)最初は

	包丁鉄	鍔	銑	鋼
金額	4,312円	1,300円	1,337円	
	37,500キロ	20,000キロ	12,500キロ	

であった。39年まで逐年増加し、その後はとびとびで契約が行われている。(詳細は別に記述の予定)

本格的に契約の行われた、仝30年10月には呉海軍造兵廠長心得が技手とともに視察し、翌年10月には技手二人が視察に、その12月には絲原家の若月捨五郎が、呉海軍造兵廠へ、鉱物分析技術伝習のため5カ月間派遣されている。

今年10月には工学士俵国一(浜田市出身)が、仝34年6月・仝35年7月には呉造兵廠から技術将校が視察に来て、品質の向上への助言を受けており、仝38年7月には大坂鉱山監督署技師が訪ねている。

こうして何とか鉄業経営を続ける間に、水車吹子の導入と鈩場の操業努力によって、三日押で半季間に一代平均45駄にまで出鉱量を高めた。明治10年代までは35駄が平均であったから、4割3歩の増産で、これは銑の増量をもたらしたものであった。

そして卜蔵家の原鈩では、さらに最高記録を一代5割増、10割増(明治31年に)まで高めることもあった。10割は鋼の量は変らず銑が増量しているから、一代35駄と比べると、銑が4倍生産されたことになる。当時の記念碑が原鈩に建立されている。この好成績で明治初年以来経営に苦況を伝えられていたが、息を吹きかえし、田部、桜井、絲原とともに四家として、一斉廃業の大正末年を迎える。

「日刀保たたら」に於て、真砂砂鉄のみを用いて鋼のみを生産する「新三日押」を創始した安部由蔵村下は、「昔、卜蔵の旦那さんは、銑を沢山つくらんと機嫌がわるかった。鈩場のもうけはこれだ。すると鋼も良いのができた」と口癖に言っていた。

戦時中の昭和17年安部村下は、能義郡布部村の樋の廻鈩で、二代各50駄の生産高を記録している。(当時の靖国鈩の記録では、33～35駄であった)、これによって安部村下は経営者より、賞状と三つ重ねの木杯を貰らっている。親ゆずりの腕の良い村下であった。

(横田史談会　高橋一郎)

和鉄・洋鉄の生産高
(洋鉄は釜石・八幡の両製鉄所)

	1879	1882	1889	1899	1901	1904
	明治12	〃15	〃22	〃32	〃34	〃37
中国地方	86.0	89.7	79.1	38.6	29.1	20.2
鳥取県			15.9	11.5	9.7	9.4
島根県	50.8	▲52.4	33.8	15.6	12.3	9.1
広島県(官営)	11.8	5.3	14.4	5.5	2.3	
〃(民営)	15.0	1.7	10.0	5.9	4.6	
岡山県	8.4	7.9	4.9	0.2	0.2	0.1
岩手県	7.2	8.6	19.9	61.2	65.9	79.8
釜石製鉄所	0	3.7	14.3	55.0	51.1	69.9
その他	7.2	4.9	5.6	5.4	14.8	9.9
その他	6.8	1.7	1.0	0.1	5.1	極少
八幡製鉄所	(生産高)				釜石の1/3弱	釜石の2倍弱

▲実数6,368t(全国総実数12,164t)、数字は全生産量に対する割合(%)

村と町の変遷

古代から現代へ ①

しばらく、仁多郡内と村と町の変遷を、古代から現代へたどることにする。本号分は「ローカルタイムス」に寄稿したものの再録である。

現在の亀嵩地区

雲南広域連合が誕生し十ケ町村が介護保険を一体化して行い、ついでゴミ処理・消防についても一部その方向に進められるという。すでに農協は統合しているし、教育行政も雲南をまとめ、出雲管内として進められるという。交通網・通信網がもたらしたものである。

古代から開拓によって村々が成立したが、時代の下るに従って統合されてきている。全国各地も同じであるが、亀嵩地区について具体的に見ると。

古代 今から1,265年前の『出雲国風土記』には、旧亀嵩村を中心に東の比田村から西の旧馬馳村までが三処郷であった。（この本では村というのは、横田・幸谷のみ）その中心が高田・郡で、当時郡司（郡役人で当郡は三人）の長の大領は蝮部臣（たちひべのおみ）が任せられ赴任しこの地に駐在したようである。

琴枕から高田・郡に続く底の広い谷間は、北の護摩場山の麓の水源をもとに南に向って棚田が次第に広がり、当時としては稲作に良く豊かであり、北の山を越えて出雲の国府（今の風土記の丘の東方の国の役所）にも便利であった。

平安時代の初期承平7年、源順が勤子内親王の命で編集した『和名類聚抄』（和名抄ともいう）十巻のわが国最初の漢和辞典によると、同じく三処郷とある。

中世 鎌倉時代の文永8年の千家文書によると三処郷の地頭侍は三処氏（大領が土着したか）で9町5反余の所有者である。（横田庄は55町歩　馬木郷は35町歩と開墾が進んでいた。このころのち三沢氏となる三沢郷の飯島氏は4町4反である。）

ところがそれから300年後の岩屋寺文書によると、中村を中心に、竹崎・大呂・蔵屋・原口・尾園（大八川）の各村が生まれている。地方からの貢納（税金）を義務づけるためにこうして村が生まれていった。

室町時代の終り毛利氏が仁多郡を領地とした時、仁多郡西部の中心として亀嵩に家臣冷泉民部を駐在させたとき、その家臣達40数人に土地を与えているが、これは江戸時代の村の数とほぼ同じであるから、このころにはのちの村が一斉に貢納の石高を握るために出現したと思われる。

それから50年後の正保元年の『正保絵図』にはのちの村はすべて書込まれており、『天保郷帳』には、国絵図の村々名とともに、貢納高（石高）が村毎に書かれている。

この時から西比田村は能義郡に入る。明治9年明治政府は行政単位として村町を確立した。上三所村・馬馳村は布勢村に入り、あとは郡内の高田村・亀嵩村・亀嵩町となり、3年後亀嵩村となる。そして現在は仁多町亀嵩地区である。

（中世の古文書の中に上桑原の地名がありますが、仁多町内にこの地名の名ごりはないでしょうか、教えて頂けば幸いに存じます。）

横田史談会　高橋一郎

上段の問いに直ちに一報頂きましたが、桑原屋の屋号が三沢城趾の前にあるとのこと。古文書では上桑原を所有していた武士が（3段の40人の1人）かなりの土地を覚融寺に寄進しています。或は上桑原に住んでいた住人が、そこから現在地に移った時に、そう呼んだのかも知れません。

| | | |

歴史用語
—禁裡御料・仙洞御料

横田庄を禁裡御料所というが正確には、石清水八幡宮横田庄が、荘園として成立してから200年後（平安時代～後醍醐天皇）にその一部が、京都御所の荘園となり、その約100年後南北朝が合体すると後小松天皇がその一部を父天皇の追善供養のために、皇室の菩提所京都市南方の泉涌寺に寄進された。したがって横田庄は、石清水八幡宮と京都御所と京都泉涌寺3カ所の荘園に分かれたのである。

皇室の領地は幕府の領地が公儀御領所、天領とよばれるに従って、禁裡御料・仙洞御料といった。小池氏（江戸時代はじめ改姓して杜氏とよぶ）は石清水八幡宮料・安部氏は禁裡御料所の代官として下って土着して今日に至った武士の末孫である。

15世紀になると三沢郷地頭の三沢氏が、横田庄の代官も兼ね、いろいろ変遷があって19世紀末、豊臣秀吉の太閤検地により、ほとんど廃止され、武士の所領となる。横田3庄園の記録はいろいろの文書に残っていて、その歴史を明らかにできる。

川柳句会一月抄

各党首みんないいこと言っている　児玉哲呂
嬉しさは子供四人も生んだこと　松浦久寿
不景気に飛ぶよに売れる福袋　田中有樹絵
丸まって卯年女の寝正月　松浦亜以
大世帯泣く子笑う子三日間　安部正子
年はじめ船通山に深呼吸　児玉えみ
大雪もやんで一息炬燵番　藤原のぼる
立板に水を流すもほどほどに　渡部ミツコ
年賀状書くはおっくう来るを待つ　足立玉恵
子や孫と年賀をかわす電話口　藤原千代子
雪積り隣も遠く感じさせ　真綿よし子
鼻風邪も息子気遣う祝い歳　石原冬明
白兎助けて下さい大黒さん　松田牛歩

歳末吟　簸の上短歌会

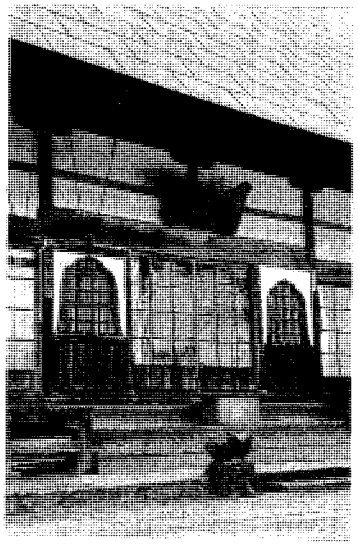
板の間に野良着を脱ぐに草の種ぽろりこぼれ　永井弥生
悲しみはすべて吸ひとり傷口は舐めてくれそうな冬の日溜　〃　人
日本の歌大好きとブラジルののど自慢にて老人唄ふ　諸角長子
一椀の粥ままならざりし戦時下の親思ひ出づ粥を口にす　〃　人
産卵の果てに死にゆく鮭のさまテレビに見たり冬に入る日よ　常盤はるまさ
われに告げ忘れありしや夢に妻の唇動くも声にはならず　〃　人
三日振りに風邪快くなりて絶えてゐし娘の仏前にお膳を供ふ　野村節子
紅葉に包まれながら逝きし吾娘の墓處は深く雪に埋れる　〃　人
紅葉せる山美しと言ひながら弟逝けり暮れゆく病舎に　安部夕波

柴栗句会一月作品

泉ただ濺濺と湧く雪の国　淺野としお
己卯の春金野色紙に祝百寿　糸原古志
八十年生命賜りたる大旦　恩田和美
介護ひとつ趣味に加えて冬の虹　加納信子
お降りに喪服の襟もふるえがち　楠房子
孫連れて一鍬千石鍬始め　高木白虹
思い出せぬ言葉がふえて去年今年　中澤美紀子
生かされて腹に滲み入る屠蘇の味　新出谷一華
玄関に亡父の表札年明くる　錦織富江
皆去にて寒さがどっと背を走る　峯石美代子
中腹に煙たなびき山眠る　渡部夕峰

横田三十三番札所めぐり㉑
第26番　下横田　川西大慈山惣安寺

川西の峯うつ波はふだらくの
やすき御法の御名を唱えん



（横田史談会　佐世川徳雄撮影）

会員頒布一部二〇〇円／〒六九一-一八　島根県仁多郡横田町一、九三ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　電話・電送兼用　〇八五四-五二-〇一九一）　振替口座　松江〇一四一〇-九-一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第288号（3月号）
1999.3.12（M132.T88.S74）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

元禄時代の奥出雲①

―時代の位置づけ

元禄といえば、当地方では天秤吹子が導入されて企業たたらが、近世企業たたらの性格が明瞭となり、本格的操業へと進んだ時代である。やがて奥出雲では、農産物と鉄業関係の収入が同じ水準となって、車の車輪として郡内の経済を、そして農民の生活を支え、200余年後の明治15年1882には、日本の鉄生産高の50％を占めるほどになったのである。

元禄14年1701は、関ヶ原の戦いから101年、家康の将軍就任の開幕から98年と、ほぼ100年1世紀たっていて、戦国乱世の時代の余風は次第にうすれていった時代である。

家康将軍が慶長8年1603に出現したといっても、まだ大阪城には豊臣秀吉の遺児秀頼がおり、成人すれば豊臣政権の時代を築く可能性もあったが、家康は在職2年であっさり退いて、子秀忠に譲って徳川家が将軍職を世襲すると意志表示したものと言われている。その後慶長19年の大阪冬の陣、翌年の大阪夏の陣となり、豊臣家は大阪城の炎の中で滅亡していったのである。

そこで居城は大名自身の城一城に限ると命じ、西国の大名の軍事力削減をねらったのであるが、のち一国一城の方針が全国の大名にも貫徹していった。そして武家諸法度13か条を出して、絶対的上下の関係を明らかにした。

幕藩体制の確立

2代将軍秀忠は初代家康と3代家光との間にあって、存在がうすいが、在職中に行った諸法度による、外様の福島正則、譜代の本多正純、親藩の松平忠直の改易など、大がかりな大名取りつぶしと転封は、基礎固めに大きい礎石であった。福島正則は広島城無断修復で、甲斐国の小藩へ左遷され、その時の家臣現桜井家の祖塙団右ヱ門は広島の可部に帰農したのである。

そして家光の時代となった。1万石以上が大名で、1万石未満を旗本としたのも、そのうち老中制も確立して幕閣の中枢をになわせたのも固めの前進である。

武家諸法度も改正されて、参勤交替制などが制度として確立し、幕藩体制はさらに一段と強化された。そして50年たったころ家光は没している。当時はまだ主君から特に恩をうけた者は、殉死することがあたりまえであったので、側近数名が殉死している。

4代将軍家綱はこの殉死を禁止する命令を諸大名に伝達させた。武士道の新しい芽生えが産まれてきた。

また明暦3年1657正月、江戸で大火があって、町数800余、死者10万人という歴史的な大火であった。これによって新しい町の誕生に進んだ。戦国時代の所産でその象徴であった巨大な江戸城の天守閣も焼失したが、再建されなかった。天守閣は不要で戦国時代は過去のものとなったという意識が強く働いたものと思われる。それから23年後の延宝8年1680に家綱没し、あとを弟の綱吉が継いで5代将軍となるが、綱吉の時代を象徴する元禄の泰平は、歴代将軍とこれを支えた幕閣たちの努力の所産であった。

（来年のNHK大河ドラマ「徳川三代」はこれを語ってくれるであろう。）

綱吉の元禄政治

5代将軍綱吉の治世の時代を、元禄時代と呼んでいる。綱吉の治世は延宝8年1680から宝永6年1700までの30年間であるが、元禄は17年で最も長く、しかも中心的時期であった。

元禄時代は、前将軍の時代に傀儡（ロボット）化した将軍を否定して、また大老・老中を否定して最高権力者として明確化を計った。就任早々に大老の裁決した裁判のやり直しを命じ厳罰に処した。家康の曾孫の松平藩主にも家中不取締りの責任でお家断絶に処したほどである。こうして処罰された大名は綱吉の時代に46家にも及んだ。賞罰は親藩・譜代。外様を問わず行った。将軍の権威のためである。赤穂藩主浅野長矩の改易もその政策の線上にあったものであろう。（吉良も元禄15年で絶家となるが8年後同族が吉良と改姓して世襲する）

権威を高めるために、儒学の思想を積極的にとり入れ、それに基づく制度や法律を整備し、政治や社会秩序の安定をめざす文治政治をとり入れた。

それとともに有職故実（諸行事の法式）にもとづいて儀式・典礼の整備に力を入れた。特に幕府と朝廷との円滑な関係をはかるには必要不可欠であった。

高家衆がその専門家であって、1万石以下にもかかわらず官位は大名に準じて高かった。家康が将軍職拝任のころから始まったと言われ、武家出身18家、公家出身の8家と決まっていた。したがって高家は役職名である

288号　元禄時代の奥出雲①・中国・朝鮮・南方から出雲（日本）を考えてみる⑥・俳句・川柳・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

ともに家格も意味した。こうした時代にこれらは急速に発言権を増してきた。まして高家の筆頭は吉良上野介義史で、重要視される存在であった。

浅野内匠頭長矩の吉良への忍傷の原因は明らかではないが、個人間の問題より、こうした文治政治が生んだ矛盾の中から起きた事件とみる研究者がかなりある。

付記

本紙では今まで、NHKテレビの大河ドラマ（劇）にあわせて、当地の社会情勢や事件や人物とのかかわりを述べて来た。これは在来の郷土史、地方史が狭いそして独りよがりなることを防ぐため、国内の中央とのかかわりあいの中で見ようという試みからである。江戸時代については、今までは近世企業たちの各種の連載でそうした観点を加えて記述したつもりである。思想・経済・社会の進展の中で、職場や技術も考えてきたつもりである。松江の二家老の対立、江戸時代の三大飢饉も、技術職人をはじめ、僧侶などについて同様であった。今後も予定しているし、連載も続けたい。

昨年の徳川慶喜も短かったがその一つである。来年は徳川三代が始まるようであるが、これに添ってそのころの当地方に触れると、ほぼ江戸時代は書き続けたことになる。

中世についても同様で、太平記の時代、日野家の時代、織田信長の時代、毛利元就の時代、豊臣秀吉の時代とあわせて記述してきた。その上横田庄・数家の旧家、三沢氏、諸高僧、岩屋寺の歴史も個々に述べた。まだ庶民の歴史は十分でないが、鉄に関するものとともに、岩屋寺文書の整理を通して本格的にまとめる準備をしている。

以上は時代史、人物史であるが、文芸については俳句、和歌等かなりまで掲載したつもりである。

これらの記述はただ単にNHK関連の書籍でなく、専門家用の、戦後の出版物をも参考として用い、引用もさせて頂いている。研究出版物でないので一々断っていない失礼はこの際記しておわびしたい。



岩波書店刊＝日本歴史講座
全集の30年代版と50年代版、
最近の日本の通史全集。中
央公論社刊＝日本の歴史全
集、日本の近世の全集。小
学館の日本の歴史全集。朝
日新聞社のグラフ日本歴史
全集。中国の学者の分担執
筆になる日本の歴史全集。
さらに単行本、新書、文庫
のそれぞれの時代を参考と
して来ている。この度はそ
れらの元禄時代を読んで参
考としているつもりである。
今までのもの読みかえして
みて恒悼たるものも感ずる。
当地方の資料も多く、中世
のものは各方面の協力で現在
では完全に集めを終って整理し
てある。近世も『杠日記』
『絲原家古代よりの聴書上下』
『仁多郡略談』ほか多数集め
てある。系図もそして今まで
の記述もすべて年表としてい
るので便利を得ている。

中国・朝鮮・南方から出雲（日本）を考えてみる⑥
99％を占める渡来僧

6世紀の中ごろに、仏教が朝鮮半島の百済から日本に伝えられた。当時の都は飛鳥地方（奈良盆地南部）にあった。

大連として権勢を誇っていた物部氏らは、崇仏に反対したが、大臣の蘇我氏は、鞍作氏などの渡来系有力氏族の支援により、仏教受容にふみ切り、たび重なる妨害にもかかわらず、所信を変えなかった。やがて物部氏が滅ぼされると、これまで日和見的な立場にあった豪族たちも、蘇我氏にならって仏教をうけいれ、それぞれ氏寺を建てはじめた。

これらの寺院に住んだ僧尼たちは、朝鮮半島や中国本土からの渡来僧ないし渡来系氏族主身僧が大部分であった。法興寺に迎えられた慧慈は高句麗の僧で、慧聡は百済の僧であった。また大化改新政府の推進役となって活躍した僧旻や請安などは、中国系渡来人の漢氏の出身であった。

いわゆる飛鳥・白鳳時代の僧で、史上に名を伝える者の99パーセントまでは、朝鮮や中国本土からの渡来僧、ないし渡来系氏族出身の僧によって占められており、新しく伝来した仏教は、かれらの努力によって、しだいに日本の国土に根を下ろしていった。奈良時代の行基・智光・良弁・慈訓や、天台宗を開いた最澄なども渡来系氏族の出身であった。

こうした公伝というかたちの仏教受容に先行する形で、公伝以後の公式ルートの波と並行する形で、私伝形式の仏教伝播が北九州から瀬戸内・幾内へ、そして日本海沿岸の山陰から越路にかけて、さらにそれらの内陸部へと広がっていたものと考えることができる。

『日本書紀』には、584年に蘇我馬子は、四方に人を出して僧侶を探し、播磨で高句麗からの渡来の還俗僧（僧からひいて一般人になっていた）恵便をさが

しあて、馬子の師としたとある。

すでに公に仏教僧として渡来した以前に、渡来僧がいたことをしめし、百済からも同様な人が渡来していたとも推定できる。

これらの私伝形式の渡来僧の大部分を占めていたのは、専門職でなく、多少なりとも仏教に故国で帰依していて、朝鮮三国から渡来した人である。各地に定着化していた渡来信者が、日本における仏教の急速な伝播と発展を支えたものである。あるいはこれらの僧の活動が、後世の行基がおびただしく各地で活動した話へとすりかわってもいるのである。

この仏教伝来以来、平安中期の天台座主（天台宗最高位）の良源に至る約500年近くの流れはおおむね朝鮮渡来僧が日本仏教の主導者として、日本の仏教文化を築き発展させたのである。

飛鳥仏教は、高句麗・新羅・唐などの仏教文化の摂取を含みながらも、主な流れは百済仏教・文化の直接受容であったとは定説となっている。

これに対し奈良仏教（白鳳期も含む）は、大勢において新羅仏教に直結している。東大寺建立や律令国家仏教の確立など、日本仏教としての独自性、主体性が発揮された時期であるが、新羅華厳教理が元暁・義湘らによって奈良仏教の源流となっているという。唐留学問僧も引き続いて送られてはいたが、新羅留学問僧には及ばなかったのである。だがその主導力をなしたのは百済渡来人系僧であった。

平安仏教は、教学的にも文化的にも日本仏教の創造的発展、主体的開化の時期であったが、その礎石を築き骨組みを組み立てたのは、やはり朝鮮渡来系の高僧たちである。古代史家井上光貞は戦時中の1943年に発表した論文で、朝鮮渡来系高僧13名を述べている。——道慈・智光・慶俊・勤操・義淵・行基・良弁・玆訓・護名・行表・最澄・円珍——

ひとり一人についてはすでに連載した僧もあるので略すが、空海は四国善通寺の出身といわれるが、父佐伯氏は中級の地方豪族であった。讃岐国造り系に連なる佐伯氏であり、新羅渡来氏族となる。また母は百済渡来氏族の阿刀氏の出であるという。

これらの僧は宗教活動の枠にこだわらず政治、経済、文化など多くの分野で、伝授者、開拓者、指導者の役割を果たしていった。

（仏教学者の田村円澄の諸著にもとづいた）

雪に暮れて　簸の上短歌会

県境を越えゆくバスは灯しゐて帽子にうつむく乗客ひとり　永井弥生

たたら吹きに金屋子の神降りますや吹雪の夜空に火柱のたつ　全

実る田を荒らしし猪と思へども今宵大晦日に猛る吹雪に　諸角長子

雪いまだ深き二月のこの峡も月澄む夜は春の匂ひす　全

薄暗くなりたる外の面は吹雪ゐて独りの夕べカーテンを引く　人

目交ひの備後を隔つ山脈のかすむと見えて雪降り来る　常盤はるまさ

朝まだきに窓を開くれば庭池より鷺が飛び立つ鯉を銜へて　全人

在りの日の娘のことを想ひ出て眠れざる夜の枕を濡らす　野村節子

冷え冷えと高原の街昏れゆけばレコード鳴る店一つ明るし　全人

安部夕波

柴栗句会二月作品

鳰三羽替り番こに逆立てる　浅野としお

梅咲きて穹の碧さの濃くなりぬ　糸原古志

想い馳す里の裏山冬いちご　小川敏子

あや取りの指に冬日がからみあふ　加納信子

寒波来て駅までの道遠くなり　楠房子

鐘の音も凍つる仏間の立如来　高木白虹

まんさくのほつほつ咲きて予報聞く　中澤美紀子

春立つや頂く京菓子紅と白　新出谷一華

如月や何もなきこと嬉しくて　峯石美代子

青鷺の凛々しく立てり寒の川　渡部夕峰

斐の上川柳二月の句

戦前派不況風など怖くない　渡部ミツコ

寒気団去って日差しの欲しい庭　真綿よし子

なまけ癖ついたは姑逝ってから　児玉哲呂

厨にはまだ現役と言って立つ　松浦亜以

天気図にダルマ顔出し老いいじめ　松田牛歩

傘寿越えまだまだ続く水仕事　松浦久寿

荒れた日の温泉湯舟いい心地　安部正子

太陽は寒がり今日も顔出さず　横山まこと

外吹雪お湯はしんしん抹茶飲む　児玉えみ

買い置きの本を読ませる深い雪　石原冬明

補装具をつけてしばらくやって見る　藤原のぼる

猪や狸と競う地の恵み　勝田みのる

しばと豆パチパチ煎って鬼の豆　足立玉恵

わからないけれどおかしい商品券　藤原千代子

宝かなゴミかなそれが戦前派　田中有樹絵

もうひとつ手が届かない総理様　田中芳春

奥出雲201～250号 内容項目別一覧表（数字は号数）

中　世　編

① 横田庄と日野家（233, 234, 235, 236）
② 征夷大将軍（234, 235, 236, 237）

近　世　編

③ 近世の三大飢饉（226, 227, 228）
④ 松江藩家老村松将監と平賀縫殿（205, 206）
⑤ 宝暦天明期と田沼時代（225）

時代・地域と奥出雲

⑥ 太平記の時代の奥出雲（201, 202）
⑦ 信長の時代と奥出雲
（202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 210, 212）
⑧ 奥出雲の中世近世を育てた武士たち
（246, 247, 249）

たたら製鉄

⑨ 明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜
（213（ヒュゲーニン）,214.5, 217, 218, 220, 221
222（松江藩と蘭学）223, 224, 230, 248, 250
未完
⑩ 奥出雲の近世企業たたら製鉄史
（239㉓, 240㉔, 244㉕）　未完
⑪ 出雲国鉄師と伯耆国鉄山師近藤家（242）
⑫ 鉄の来た道（シルクロード・窪田蔵郎述）
（245, 246, 247, 248, 249, 250）

神社・寺院

⑬ 横田札所めぐり
（203, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 216,
222, 225, 227, 230, 243, 244）未完
⑭ 仏像からのぞいた仏教（208）
⑮ 千利休の秘伝を伝える『山上宗二記』と岩屋寺
（219）
⑯ 天平の僧行基（231, 232）

歴史と風土

⑰ 出雲大川流域物語（214・5 ④, 222 ⑤）未完

小字の歴史

⑱ 小字めぐり　六日市（209）　大市（223）未完

人　　物

⑲ 島根県議会史にみる奥出雲の人々
（213, 216, 217, 218）未完
⑳ 村上朝吉と高橋常作（221, 226, 227）
㉑ 明見禅師　（228, 229）
㉒ 祭文と祭文語　（238）

諸　　史

㉔ 横田西城間の乗合自動車（204）
㉕ 中国・朝鮮・南方から出雲を考えてみる
神有月など　（209）
古代朝鮮と日本仏教
（210②, 211, 212, 216）未完
㉖ 資料断片　（234, 235）

民　　俗

㉗ 古い記録を綴りあわせて　（221）
㉘ 島根の名建築　（231, 232）
㉙ 年貢のおさめどき　（245）

随　　想

㉚ さる（猿），猿人，サル（申）　（201）
㉛ 松島やあ、松島や松島 ⑤　（203）
㉜ おくの細道 ⑥　（243）　未完
㉝ 古市のキリスト教　（220）
㉞ 衣がえの六月　（230）
㉟ 猪突猛進を排す　（237）
㊱ 懐古と感謝　（237）
㊲ 戦後50年の歴史 ①
—横田町青年団の歩み（239㊤, 241㊥）未完
㊳ 宮沢賢治生誕百年　（249, 250）未完

提　　言

奥出雲地域の歴史民俗の博物館（214・5）
21世紀は18世紀末の安藤昌益の蘇えりで（217）
古文書集蔵庫の完備を（221）

◎ **俳句・短歌・川柳（地元作者）**　毎号
（御協力に感謝します）

会員頒布一部二〇〇円／六九一六 島根県仁多郡横田町一〇六六ノ二 編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会 電話・電送兼用 0854-52-0191）振替口座 松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第289号（4月号）
1999.4.2（M132.T88.S74）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

中国・朝鮮・南方から出雲（日本）を考えてみる⑦
平安遷都のはじめ

日本の歴史学者によれば、時の桓武天皇は、「歴代中大帝といわれるにふさわしい器」（村尾次郎）であり、「古代でも有数の英邁な君主」（上田正昭）であったという。

出雲の歴史を考えるにあたって、『日本書紀』（古事記の神話とは思想が異る）の出雲的神話から離脱し、『出雲国風土記』の出雲神話を根幹とする考えへと、研究者の観点が変わりつつある。それは大陸の神話・世界の神話の研究、『出雲国風土記』の研究の深化と、考古学上の出土物等の関係が密接であることが明らかになりつつあるからである。

ここで平安時代の幕開けである。平安京への長岡京からの遷都のころを、人脈を中心に考えて置きたい。資料の少ない出雲のこの時代の歴史に、何らかの視点が加わるかもしれないからである。

古代日本の渡来系氏族

この問題には、じつはそう簡単に結論は出せない。〝渡来系氏族〟という概念が、そうはっきりしたものではないからである。つまり、渡来系という意味を、単に朝鮮半島から渡ってきたというように解釈するしかたもあるわけで、そうすると歴史の全時代を通じて渡来はあったということになる。朝鮮半島と日本列島が陸つづきであった先史時代を含めれば、たえずその渡来はあったということになるから、渡来系氏族の占める割合は、きわめて多くなる。

こうした観点にたって、弥生時代以来に大量の人口流入があったと考えて渡来系の人々の人口を計算すると、奈良時代人口約五百万人のうち、三百万人までもが渡来系の人々であったとする説もある。半数以上が朝鮮半島から渡来したというわけで、こうなると渡来だとか在来だとか言うこと自体にほとんど意味がなくなってくる。人口という観点ではこういうことが言えても、歴史と文化においてそれが日本列島にどういう影響を与えたのかという問題につながらないことには、渡来系氏族を論じたことにはならない。

歴史的な観点からわれわれが渡来系氏族を考える場合、平安時代初期、弘仁6年（815）に成立した『新撰姓氏録』から出発しなければならない。渡来現象は5世紀後半・7世紀後半の2度のピークがあるが、その人口はまったくわからない。ある程度、それが数字的に反映しているのが、この書物である。

『新撰姓氏録』は、平安時代初期に存在していた日本国内の各氏族―といっても平安京の左京・右京、山城、大和、摂津、河内、和泉の部分だけしか残存していないのだが―を、その祖先伝承をもとにして分類したリストであるが、そこに諸蕃として渡来系氏族は集成されている。もちろんこれは各氏族の自主申告によるものだから、歴史的に事実かどうかは別の問題であるが、一応の目安としての信頼はおくことができる。

そこには、合計1182氏の名前がみえている。内容は、皇別・神別・諸蕃・未定雑姓の4種に分類されているわけだが、皇別335氏・神別404氏・諸蕃326氏と、ほぼ1対1対1という比率になっている。くりかえすが、この数値は自主申告によるものだから、そのままに歴史的に信用できるというものではないが、古代日本における氏族の存在形態の大体を知ることはできる。単純にいって、三分の一は、渡来系氏族ということになるのである。この数値は、渡来人を、すくなくとも計量的に考えるときの基準となるものであり、出発点ということになる。

桓武朝廷の具現

山部親王すなわちのちの桓武天皇は、父の白壁王（のちの光仁天皇）と母の高野新笠の間に誕生した。時は天平9年（737）であり、父白壁王の29歳のおりであった。白壁王の父は、『万葉集』に収められている秀歌〝石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも〟（1418）の詠者としても有名な施基（志貴）皇子であり、その施基皇子は天智天皇の第六皇子であった。

山部親王はまぎれもなく天智天皇の皇統につながり、天智天皇→施基皇子→光仁天皇→桓武天皇という血脈を受けついだ、天智天皇の曾孫にあたる親王であった。天智天皇のあとの皇統は天武天皇→持統天皇→文武天皇→元明天皇→元正天皇→聖武天皇へと継承され、孝謙天皇（重祚して称徳天皇）＝女帝もまた聖武天皇と光明皇后との間に生まれた内親王（阿倍内親王）であった。

山部親王の父であった白壁王

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

が即位したのは、宝亀元年（770）の10月であったが、その以前の皇位は、天武天皇系の皇統によって受けつがれ、白壁王の即位によって天智天皇系の皇統が復活する。

神護景雲4年（770）の8月、称徳天皇は53歳をもってなくなったが、皇太子はさだめられていなかったので、藤原百川や藤原永手らは秘策を練って、白壁王を皇太子に擁立し、当時の政界に重きをなしていた道鏡を下野に左遷した。それは電光石火のすばやさであった。こうして白壁王の即位が実現した。即位のおり光仁天皇はすでに62歳であった。

父の白壁王が即位したからといって、山部親王がただちに皇太子になりうる保証はなかった。光仁天皇の皇后には、聖武天皇の娘である井上内親王がつき、井上内親王と光仁天皇との間に生まれた他戸皇子が皇太子に擁立された。しかし藤原百川らの「奇計」によって（『公卿補任』）、宝亀3年（772）の3月、呪詛の容疑で皇后は廃され、同年5月他戸皇太子も追放されて、母子ともに大和国宇智郡に幽閉された。宝亀6年の4月27日、同じ日に井上・他戸の母子はこの世を去った（『続日本紀』）。

こうして宝亀4年の正月、晴れて山部親王皇太子が実現した。藤原百川の子の緒嗣が29歳の若さで参議となったおり、桓武天皇みずからが「緒嗣の父（百川）なかりせば、予（桓武天皇）、あに帝位を践むを得むや」と告げたのもその間の事情を物語っている。天応元年（781）の4月、光仁天皇は山部親王に譲位して、山部親王の即位となる。こうして桓武朝廷の代がはじまる。

43歳で即位した桓武天皇の皇統譜で注目すべきは生母である高野新笠の存在である。高野新笠はもと和新笠であって、和乙継と土師真妹の間に誕生した女人であった。和氏が高野という氏名に改められたのは宝亀年間であったと伝えるが、白壁王（光仁天皇）の即位によって高野新笠は皇太夫人と称され、延暦8年（789）の12月28日に崩じた。翌年追号して皇太后が贈られた。

『続日本紀』によれば、延暦9年1月15日に大枝山陵（京都市西京区大枝沓掛）に葬ったと伝える。その崩伝には「后の先（祖）は百済武寧王の子純陁太子より出づ、皇后容徳淑茂にして、夙に声誉を著はす」と述べられ、「其の百済遠祖都慕王は河伯（河の神）の女、日精に感じて生める所なり」と記されている。

百済の武寧王については、韓国忠清南道公州の宋山里古墳のなかの武寧王陵の発掘（1971年7月）によって買地券石（墓誌石）が出土し、武寧（斯麻）王は523年（癸卯年）の5月7日に崩じ（『三国史記』の伝えと合致する）、525年（乙巳年）の8月12日に埋葬されたことが判明している。その武寧王の血脈の流れをくんだとするのが和氏であった。

したがって和乙継の娘である高野新笠の崩伝には、「百済の遠祖都慕王」にまつわる神話伝承が載せられている。いうところの「都慕王」とは、高句麗の長寿王2年（414）に建てられた有名な高句麗の好太王（広開土王）碑文冒頭にみえる「鄒牟王」であり、「河伯の女、日精に感じて生める所なり」とは、同碑文に刻する「惟れ昔、始祖鄒牟王の創基なり」とし、天帝の子にして母は河伯の女郎なり、卵剖けて降生す、生まれながらにして聖徳有り」と述べる建国神話にもとづくものであった。

このような出自を持つ桓武の登場は、何よりも律令体制の権力構造において、朝鮮渡来系氏族とその閨閥が大きな政治勢力を保っており、その勢力との結びつきを緊密にすることがむしろ、政権の掌握と維持に有利であったという事情を物語るものである。

事実、桓武は蝦夷征討と長岡・平安遷都という、いわゆる「軍事と造作」の二大路線を遂行するうえで、多くの朝鮮渡来系氏族とその閨閥を重用し、その力量を活用することによって焦眉の政治的課題を解決した。

朕の外戚

母高野新笠は百済の武寧王の血につながる百済和氏であるが、百済王氏の一族がある。百済滅亡のおり義慈王の子であった豊璋・善光（禅広）が渡来した。

豊璋は百済復興のため帰国したが、善光はとどまって百済王となった。『日本書紀』によると難波を本拠とし、百済郡も置かれた。その孫郎虞の三男の敬福から、百済王氏が政界で活躍するようになる。きっかけは聖武天皇の東大寺大仏造立のために黄金九百両を献じたことからである。陸奥の国守の時に黄金が産出したのである。敬福の名は一世を風靡しとんとんと出世した。早くから蝦夷地の経営に深いかかわりをもっていて、二度にわたって陸奥守となっている。

蝦夷征討で活躍する坂上田村麻呂（渡来系の東漢氏の出身）も、はじめは敬福の孫の百済王俊哲が陸奥守・鎮守府将軍であったおり副将軍であった。

敬福の子百済王理伯の娘の百済王明信が、藤原家（南家）の継縄（父は右大臣）と結婚しているが、藤原家の中の兄弟争いの余波をうけて、百済王敬福は出雲守として出雲に赴任し中央から一時遠ざけられた。その後の藤原仲麻呂（継縄の叔父）の乱後、刑部卿として中央政界に重きをなした。

天皇で渡来系氏族との血縁のあったのはこの天皇だけであるが、血縁を意識した天皇にかかわる女性は多い。

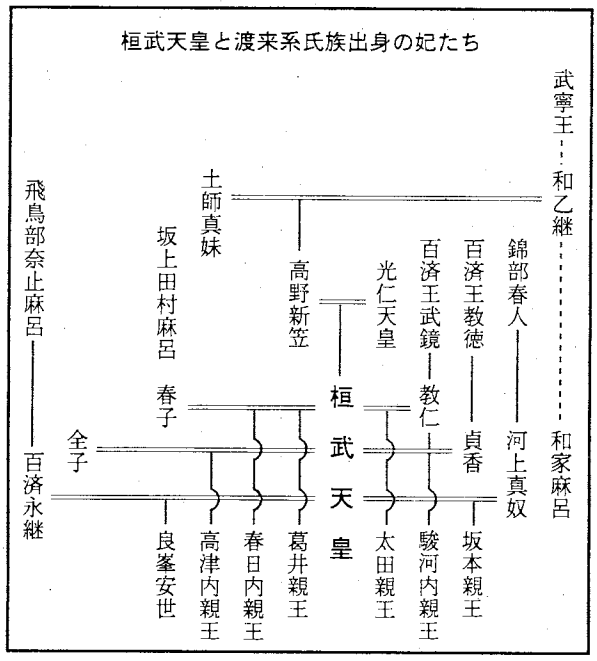
桓武天皇の後宮には多数の女人がおって、天皇の寵愛をうけた。37歳で皇太子となった山部親王（のちの桓武天皇）のそれ以前における姻戚関係や山部王を父とした皇子・皇女の実数はさだかではないが、史料にみえる桓武天皇の配偶関係者はきわめて多く、たしかな皇子だけで15人、皇女は21人、あわせて36人にのぼっている。その後宮の内侍司の女官長が百済王明信であり、右大臣藤原継縄の妻であった。とくに后・妃以外の女人を内寵したので、これらの女人を「女御」とよぶようになったのも、桓武朝廷のころからである。

この後宮の中には百済王氏の出身で入侍した女人は少なくとも9名にのぼる。百済王武鏡の娘である教仁は桓武朝廷の後宮にはいって大田親王を生み、敬福の孫にあたる俊哲の孫娘（父は教徳）貞香と桓武天皇との間には駿河内親王が誕生した。また俊哲の娘の教法も後宮にはいる。また百済王明信と藤原継縄の間に生まれた藤原乙叡の娘であった南子も桓武天皇との間に伊登内親王をもうけている。

別に王氏以外で記録の上に見える女人（女御）は、坂上苅田麿呂の女全子（高拝内親王の母）・坂上田村麿呂の女春子（坂上氏は百済系漢氏の一族。葛井親王・春日内親王の母）・錦部春人の女（錦部氏は百済系渡来氏族。坂本親王の母）・百済永継（良峯安正の母）などである。

それら女人群像のなかで、もっとも注目すべき物が百済王明信であった。百済王理伯の娘である明信は、宝亀元年（770）10月25日に従五位下から正五位下となり、同6年8月10日には正五位上、同11年3月1日には命婦として従四位下を授けられている。藤原豊成の子であった継縄とはすでに結婚していたが、桓武天皇の父である光仁天皇の代から朝廷で活躍するようになり、とりわけ桓武天皇の内寵をうけた。そして百済王氏の桓武朝廷における役割は予想される以上に多大であった。

延暦9年（790）の2月27日、大納言従二位藤原継縄（明信の夫）を右大臣にしたおり、百済



川柳句会三月抄

宣伝のほどでもないと店を出る　児玉哲呂
もっこりと花の芽が出て夢の夢　真綿よし子
勇気ある臓器提供でもしかし　松浦亜以
休刊日何だか足りぬ朝みたい　児玉えみ
骨と骨こすれて痛み日毎増し　藤原のぼる
賀の祝い幸せあれと願ったに　児玉玉恵
学校が親が世間が子を曲げる　勝田みのる
いい日和畑気にして炬燵番　安部正子
黙っててほしいと苦中うちあける　松浦久寿
入院もたまにはいいね二～三日　田中有樹絵
不出来にはふれず素直さほめてやり　石原冬明
惚けまいと頭の体操句をひねる　松田牛歩
目薬は口まで開けぬ目を開ける　渡部ミツコ
春風にときめく若さまだ残り　藤原千代子
やれ忙し極楽とんぼうらやまし　田中芳春

湖笛拾遺　簸の上短歌会

船通山の天叢窯の壺一つしっかと抱へ山をくだれり　永井弥生
備前焼の流れをくむとふこの窯にはじめて生れしこれの壺なり　仝　人
日もすがら炬燵にすごす雪の日は暮れざるうちに日記をつける　常盤はるまさ
広き葉にほろほろまろぶ露の玉うけつつあした里芋を掘る　野村節子
チロチロとこほろぎすだく朝を来て減反畑に小豆をむしる　仝　人
旅行けば亡き妻のこと逝きし息子のことすべてを忘れ今日をたのしむ　安部夕波
恵那山の空碧く澄み木曽路行くわれは旅人明日に夢あり　仝　人

王玄鏡・仁貞・鏡仁に位階を進め、桓武天皇みずからが「百済王らは朕の外戚なり」と詔することともなるのであった。

確かに桓武は、崩壊に瀕した律令体制を再構築するために、困難をきわめた蝦夷征討で最終勝利をものにし、長岡・平安遷都という大事業を成功裏に推進しているが、彼のごとく朝鮮渡来系氏族の血脈を濃密にうけつぎ、その政治・経済力に依拠して内外の動向に対処した天皇も、また稀であっただろう。

20余年にわたる懸案の蝦夷征討も最後の切り札として、百済・阿知使王を祖とする坂上田村麿呂を征夷大将軍に任じて勝利の終止を打った。

そのほか、学者として桓武天皇の側近グループを形成した朝鮮渡来系氏族は、『続日本紀』を編纂した百済系の菅野間道をはじめ、朝原道永、長尾金村、中科巨都雄、麻田真浄らで、彼らは学問の面ばかりでなく行政面でもすぐれた手腕を発揮している。

こうした関係は桓武の後3代にわたって続いた。桓武天皇の子の平城天皇も、葛井氏の女（葛井氏は百済系渡来氏族。阿保親王の母）を妻とし、その弟の嵯峨天皇も百済王氏の女の何人かを妻として忠良親王・基良親王・基子内親王・源定・源善姫・源若姫などを、また仁明天皇も百済王氏の女とのあいだに高子内親王をもうけている（太田亮氏『姓氏家系大辞典』などによる）。

このように、時代でいけば、8世紀末～9世紀前半に集中してしか見られないのであって、桓武・平城・嵯峨・仁明という4代の間にとどまっている。ほかの時代にはない現象といえる。

幕末の国学者平田篤胤はこの本を原典の完本としたが、その継承者の栗田寛はその後の研究で抄略本だとした。といっても最初にある上表文や序文は間違いないとされている。

関晃（昭26）・佐伯有清（昭38）の研究によって、原の姓氏録の真価を再生されている。

序文によれば、初め淳仁朝で氏族志の編纂が計画されたが途中で挫折し、次いで桓武朝で諸氏に本系帳の提出を命じたが遅々として集らず、嵯峨朝で原姓氏録が完成した。

皇別・神別・諸蕃の順序は、恐らく天武朝いらい確立していたものとみられる。

この完成期が桓武天皇の平安遷都（794）後、5年後の本系帳提出命令をへて、その約15年後であり、原姓氏録は京畿の氏族の三体三例的身分制を明確化するとともに、本貫地を国別に定める政策意図をもったものと考えられる。それぞれの当時の政情がからんでいる。

これまで述べた各姓氏の由来はすべてこの新撰姓氏録によっている。

序文の最後の「人倫之枢機、国家之隄括」の言葉は、平安京を中心とした人的国制の基礎を考察しうるものとして、史料的値打ちは考えられている。

（上田正昭論文に若干、若い研究者と韓国・中国の研究者の論文の一部をつけ加えたものである）

（補註）

新撰姓氏録

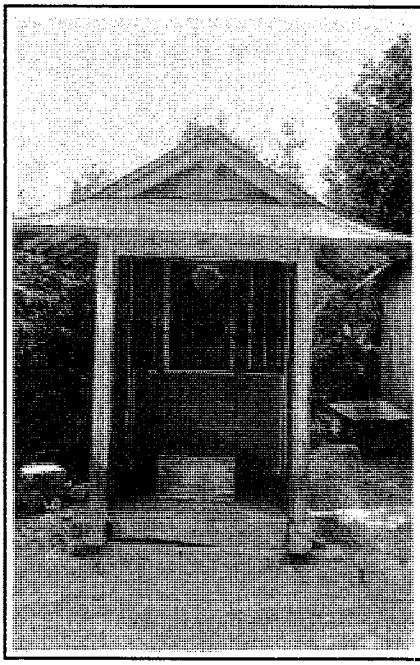
柴栗句会三月作品

鳥帰るおもひおもひに人も去る　浅野　としお
久し振り牛の声聞く梅日和　糸原古志
いい言葉ヘルプと出会い浅き春　恩田和美
山なみに煙あそばせ山笑ふ　小川敏子
山笑ふ一期一会の札所旅　加納信子
尾根一つ越したる里の山笑ふ　楠房子
涅槃西風不帰の旅立無情駕籠　高木白虹
谷いそぎほのかに淡く山染めて　中澤美紀子
病廊を歩めば窓へ梅匂ふ　新出谷一華
雪解えて庭掃くことを日課とす　錦織富江
俎板の窪みで刻むふきのとう　峯石美代子
暖や野良にちらほら人の影　渡部夕峰

横田三十三番札所めぐり㉒

第27番　下横田小路前惣安寺左横　吉祥庵

妙なるは法の吉祥蓮葉や
花のしょうじをみれば極楽



会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇三ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第289・90号(5.6.7月合併号)
1999.7.6(M131.T87.S73)
奥出雲編集集団
横田史談会

©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

新編 奥出雲の砂鉄製鉄業小史

近世企業たたらの成立から近代角炉完成まで

製鉄の道①　世界各地とも銑生産へ　日本は技術開発で西欧に遅れ

世の中が科学と経済の進歩とともに発展していることはご存じの通りで、製鉄の技術も同じく、先進国は西欧・中国で、日本は同じ道をゆっくり遅れて歩んだ。その特色であるたたら製鉄は科学の進歩の遅れを示すものとも言える。

このことを頭に入れて近世（江戸時代）以降歩んだ道をたどってみる。

原料は鉄鉱石あるいは砂鉄、燃料は木炭で始まり、温度を上げる送風器が、皮吹子（ふいご）・踏み吹子・吹差吹子・天秤（てんびん）吹子・水車吹子と進むと、鉱石を燃料で熱する炉型は、それとともに大きく高くなった。

まずシャフト炉（筒型炉・図①）で、進歩するとシュトック炉（箱型炉・図②）となりさらに水車動力送風となると高温が得られて角炉（高炉・図③）へと進歩し、炉は固定されて連続操業ができた。

日本の特色は水車動力の使用がおそく長らく箱型炉にとどまり、四昼夜ごとにいたむ炉を築きかえて操業し、260年後やっと水車動力送風の角炉へ到達した。

この間に西欧では燃料も石炭、そしてコークスへと進歩し連続生産で銑（ずく）が多量にできた。（銑＝銑鉄とは炭素分が多くて、たたくともろい鋳物鉄のことで、これを加熱して鍛えると炭素が減って、普通鉄＝道具用鉄となる。奥出雲では割鉄と呼ぶ。）

日本は相変わらず箱型炉で、四昼夜かけて銑をつくり（製錬）、大鍛冶（かじ）技術でこれを熱して鍛え（精錬）した。

西欧もパドル炉（溶かした銑をかきまぜて炭素を減らす）が出現するまでは、日本と同じく大鍛冶技術で鉄塊や銑を一個一個手間をかけて普通の鉄としていたが、この炉の出現で量産ができて鉄の時代へと向かった。

西洋ではこの鉄を錬鉄と呼ぶが、割鉄と同じ種類のものである。

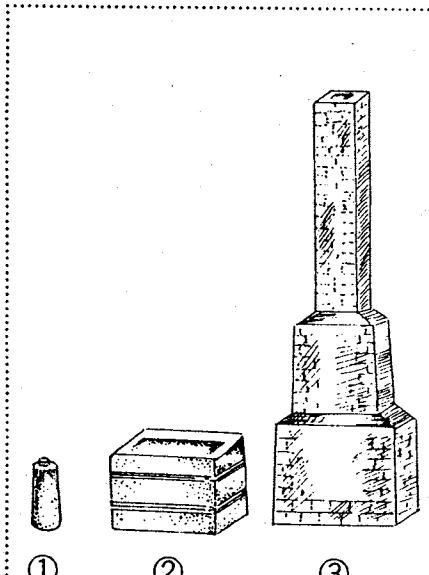
ここで少し突っ込んで付け加えておくと—。

今でもスペイン北部、アフリカ中部、タイ北部では、西欧で紀元前1世紀に出現したシャフト炉を用いている。日本では6世紀にこれが出現したことが、発掘で分かる。

そして今日、実験たたらや刀匠の試みる炉はこれであり、低温で半溶融の還元鉄（海綿状鉄塊＝ルッペ、私は粗鋼〈けら〉と呼んで、後世の鋼と分ける）を少量得て、それを大鍛冶技術で普通鉄＝道具鉄とした。

西欧では日本より背の高い箱型炉になり、しばらくすると銑もできるようになり、15～16世紀高炉（角炉）となると、時間を置いて銑を流し出し、開発したパドル炉で錬鉄とした。送風器の進歩がないため日本はいつまでも低温の箱型炉製錬であった。

日本は西欧のような革命的な科学技術の開発が遅れ、発明家なき発明で、与えられた道具の使用の高度の熟錬に向かった。日欧の技術者の生き方の違いである。鈩（たたら）場・大鍛冶場の道具は、240年前の宝暦年間からほとんど進歩していない。



製鉄の道②　企業たたらと自給たたら　—奥出雲は嘆願により操業復活

私は量産して鉄の需要に応ずる箱型炉の製鉄業を「企業たたら」と呼び、小さい筒型炉で製鉄するのは、産業というより自家用の少量の粗鋼（けら）を生産するので「自給たたら」と呼ぶ。これは明治初年まで各地で行われていたが、今また復活している。

日本では中世（戦国時代）の終りには企業たたらは、銑（ずく）を生産するまでに発達していたことが遺跡発掘ではわかるが、記録では明らかにできない。近世に入ると奥出雲の斐伊川・神戸川水系地帯では、砂鉄採取

奥出雲砂鉄製鉄業略史・俳句・川柳・短歌・横田三十三番札所めぐり㉓

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

を、初代出雲藩主堀尾氏が禁止した。嘆願によって25年ぶりに許され、奥出雲各地で企業たたらの操業が始まった。中世には小さい箱型炉であった、と横田町の鉄師杠家の記録などにある。

この杠家は松江藩主松平直政公に提出された鉄師名簿では筆頭であった。休んだ25年間は、鉄師・技術者とも1世代の年数にあたったので、この空白はなかなか埋まらず、操業の失敗もかなりあった。

操業は4昼夜操業（4日押と奥出雲で呼ぶ）で、乾燥期の秋に数代／4昼夜操業を一代（よ）と呼ぶ＼くらい操業し、銑を大坂に出荷した。毎年の記録に大坂の相場が記録されている。（銑と同量ほどの鍒と呼ぶ諸鉄塊ができていたが、割れないので長らく捨てていた）

しばらくして毎年操業（製錬）するようになると鉄師は、鍛冶（かじ）師の中で大鍛冶技術の巧みな者を抱えて、銑を鍛えて（精錬）割鉄（普通鉄で道具鉄。含む炭素量は西欧の錬鉄と同じ）として、製錬・精錬の一貫経営を始める。

記録には大坂の割鉄相場が登場する。山陽地方は赤目砂鉄地帯で四日押で鍒ができず、すべて銑だから、生産性は2倍であった。奥出雲で鍒を割るのはずっと後世である。

原料（砂鉄・木炭）の生産・運搬の組織が整い始めると毎年秋の乾燥期に、やがて春にも操業し、出荷量が増え、松江の相場も記録に加わる。

生産量が2倍の備中から鉄師が当地方に進出したが、真砂砂鉄が多いため、経験が生かせず失敗している。

このころの松江藩の動きに触れよう。藩主直政公の台所は赤字で、鉄師の生産する割鉄を買い上げて藩の専売とした利益で補いをつけた。奥出雲の鉄師は20人余りいたようだが、多くは中世武士で、来住して水田地主となった者であった。

開拓すると水田も小作人も増え、その多くが砂鉄採取、大炭子炭焼きを行ったので、鉄師の農鉱一体の経営の組織に組み入れられたから、年貢米を納めたあとの生活の苦しさをこの賃金で補うことができた。

数人の鉄師の記録を読むと明りょうである。

製鉄の道③　天秤吹子の導入と藩政
—鉄師を保護し経営安定

元禄4（1691）年、送風量・風圧ともに多い天秤吹子（てんびんふいご）が当地方に導入されて手押しの吹差吹子と変わると、労力は減り生産性は高くなった。13年前から納めていた鈩（たたら）場・大鍛冶（かじ）場の運上銀（営業税にあたる）のうち鈩場分は3割増加された。

これからしっかりした高殿を鈩場に建て、秋から積雪の多かった乾燥期の冬へと続いて操業するようになった。これからを近世企業たたらと呼ぶ。毎年操業するようになり、増産に向かい営業の内容が良くなった。

藩の買上制はこのころ中止したり復活したりしていたが、享保7（1722）年には廃止した。ところがそれまでの清算書をめぐって、鉄師と鉄奉行との論争となり、両者譲らず、攻防が続いた。このことは絲原家に詳しい記録が残っている。

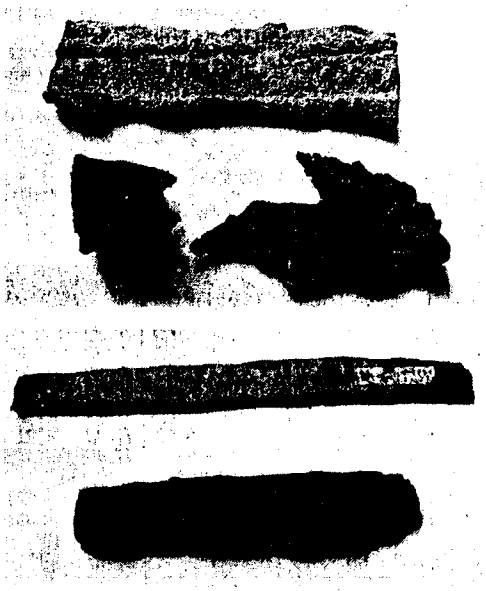
その後、藩は調査も行って享保11年「鉄方御法式」を定めた。多くの鉄師の中の大水田地主9人にのみ操業を許可し、株仲間を組織させた（広瀬母里両藩は別）。そして藩有林を鉄山（木炭材の山）として9人に分割して貸し与えた。平均すると鉄師が支配する鉄山のうち6割が藩から借りたものであった。

それに対して鉄師には運上銀の上に、所有する鈩場・大鍛冶場の数によって一定の金額を、春の4月から8月までの5カ月間、毎月上納させて藩財政を助けさせた。先納銀という。そして秋には全金額にその利子を加えた額の米を、年貢米で鉄師に返した。鉄師はその米を賃金に向けた。養米（やしないごめ）という。

その後変遷があったが、明治初年廃藩置県になるまで続いた。藩は鉄価不況の時代などをはじめ種々の保護を加えたから、経営は安定し技術改良もし、日本一の産地となった根本要因となった、他国の藩では例を見ないものであった。

絲原家文書には享保19年間から明治初年までの記録が完全に残っていて、これらのことや、業績が上がっていくことも明らかにできる。

宝暦年間（18世紀半、1751－61）に入ると、鉄穴（かんな）流し



が普及したり馬の頭数が増えて木炭の輸送も便利となり、毎年10カ月も操業し、鈩場を固定するのも5年、10年、15年と長くなり、生産量も増える。勘定書も鈩場・大鍛冶場が関連して整い、さらに捨てていた鋼（けら）も割れるようになって、飛躍の時代を迎えた。

銑（ずく）の量を3とすると、鋼の量が3であるので倍増となった。鋼を割ると鋼が1であと2は歩鋼であり、歩鋼と銑で5であるが、これを大鍛冶場で精錬すると、4の割鉄ができる。

この値段は鋼の2倍くらいだったから、鉄師の収入の8割はこれで、鋼は副産物程度のものであった。鈩場と大鍛冶場の収入の割合は大鍛冶場が鈩場の4倍であった。職人の賃金は大鍛冶場大工、鋼場（どう）頭取、鈩場の村下と低くなっている。

割鉄は完成品だから質の良さをお互い競った。桜井家の菊一という大工は評判の高い職人であった。従って鈩場が赤字でも大鍛冶場が黒字であることが度々あった。鋼は銑からでも割鉄からでも昔の鍛冶屋は造ることができた。

出雲国の産額が日本の首座になるのは19世紀の江戸後期からで、鋼が注目されるのは洋鋼と比べられた明治中期からである。

九鉄師は、吉田村の田部（綿屋）・田部、阿井村の桜井（可部屋）、大馬木村の絲原（湯の廻）・杜（山本）、竹崎村の卜蔵（卜蔵屋）、亀嵩村の山根（伊豆屋）、下久野村の石原、田儀村の桜井（田儀桜井）であった。

製鉄の道④
馬の頭数増加と永代鈩
—移動せずに鈩場を固定

宝暦年間（1751—61）には砂鉄採取方法の進歩と普及によって、下流地域の農民から藩へ陳情があって、鉄穴（かんな）場を仁多郡内では125カ所を指定し、毎年くじ引きによって許可されることになった。宝暦11年の「鉄方御条目」であったが、いろいろの経過があって後には形がい化してしまった。

この時代には、今まで捨てていた鋼（けら）を割る工夫に成功し、生産品は倍増した。鋼の3分の1が鋼で残りは歩鋼（ぶげら）と呼んだ。

砂鉄採取量が増えると、年間毎月鈩場（たたらば）の操業ができるようになった。使用する木炭の重量は砂鉄をわずか上回ったが、嵩（かさ＝容量）は50倍を超え、軽くても背負って運ぶ回数は大変であったが、馬の頭数の増加によって、遠距離を運ぶのも容易になった。松江藩では鉄山が放牧に適していたので、積極的に頭数を増加した。

それまでは、30年以上の広葉樹林のある鉄山（木炭山）がまとまっている中心地に、鈩場を設けて（高殿や関連施設、職人や家族の住居も含め）操業し、切り尽くすと、5年、15年、10年とまとまった鉄山のある中心に移動していた。

天明年間（1781～88）ごろには馬の頭数が増え、遠距離輸送が容易となり、移動のたびに多額の費用のかかる鈩場を固定し始めた。永代鈩の出現である。

鈩場の地下構造も鉄山の広さによって、操業期間の長短を考え構築していたが、これからは一斉廃業するまでの100余年間固定したので複雑となった。「粉鉄（こがね）七里に炭三里」とはこのことを意味していた。

大水田地主である鉄師の小作人らは、馬を借りて農業を営み、

馬の増加を示す

飯石郡	仁多郡	大原郡
294	377	190
706	2,006	255
2.4	5.3	1.34

上段は宝暦年間の数（「雲陽大数録」）、中段は明治10年ころの数（「皇国地誌」）で、下段は数の増加比である。

木炭生産、砂鉄採取、それらの運搬などで賃稼ぎをして生活費の補いや、馬代の年賦償還にも充てた。鉄師は広い水田のほか広大な山林の所有者で、自由にしかも計画的に木炭や砂鉄を集められるし、住民は鍬（くわ）、鎌（かま）を持つ小作農民兼鉱山労働者として仕える侍のようで、小領主のような存在であった。このような例は国内どこの藩にも見ないものであった。これが、出雲が日本の鉄生産の首座になった根本原因である。そして鉄師が経済的不況で苦しむ時には、藩は手厚い保護を加えた。

宝暦年間のころから、奥出雲の鉄師は自ら大阪へ出向き、10数人の鉄問屋の来訪も受け、終わると近畿地方を遊歴し、和歌・俳諧（はいかい）の師とも交わり、当地方に二条流和歌、芭蕉の高弟支考の美濃派俳諧の師匠も招いて、その一拠点も築いた。

鉄師と大阪の問屋の間の実務は松江の問屋が行い、製品の輸送は郡内から大東を経て、宍道、玉湯へ馬送し、そこから舟で松江の港へ、そして国内各地へ移出した。松江の問屋は鉄師の出張所の役目も務め、公私にわたってもろもろのことを処理していた。

大阪には幕末から鉄師らの共同事務所を置き、番頭が交代で駐在し、問屋と取引をした。奥出雲の鉄師が安来の港を経由して出荷するのは、明治の半ばからである。

製鉄の道⑤
鈩場と大鍛冶場
—銑と鋼を割鉄に仕上げ

多くの方々は「たたら」と言えば、高殿の内にある炉を指し、露天で操業した小規模な炉を野だたらと理解していて、さらに大鍛冶（かじ）場とは鈩（たたら）場での出来損ないの鉄類を鍛えて使いものになる鉄とする

ところ、とくらいに理解されていると思う。

ところが鉄師の企業経営の記録を読むと、鉄師の収入の8割以上は大鍛冶場製品の収入で、しかもその（割鉄）質の良さが求められている。

近世（江戸時代）に、鉄の需要に応じて鈩場と大鍛冶場を一貫して経営するのを近世企業たらと呼ぶ。これには砂鉄の種類によって二つの業態がある。真砂砂鉄の多い地方（西伯耆、出雲、東石見）と、赤目砂鉄だけのその他の全国各地とに分かれる。

基本は同じだが、炉型や操業方法に若干違いがあり、製品は前者は銑（ずく）と鍛（けら）、後者はほとんど銑である。

詳しくは触れないが、炉の内部の形や送風口の角度などに少し違いがある。

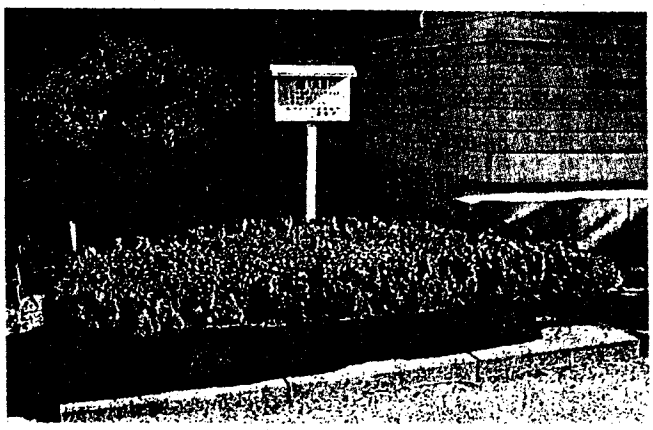
赤目砂鉄を用いる鈩場では、木炭と砂鉄を交互に炉内に挿入し送風して、銑と鉄滓（さい＝ノロ・金糞）を交互に炉外へ流し出し、4昼夜続けますと炉が薄くなって使用に耐えなくなるので、火を落とし炉床を修復し、新たに炉を築いて操業する。

真砂砂鉄と若干の赤目砂鉄を使う鈩場では、砂鉄・木炭を交互に挿入し同様な操業を行い、鉄滓と銑とを交互に炉外に流し出すが、やがて鍛という鉄塊が炉底に育ち始め、だんだん大きくなり4昼夜たつと送風もできず、炉の寿命も尽きるので炉を壊して鍛を引き出した。

これは初めは割ることができず捨てていたのであるが、割り方を工夫し鋼場（どうば）で苦心して割り、3分の1の鋼と3分の2の歩鍛（鋼より炭素分が少ない）に分けた。銑はたたけば壊れる（炭素分が多い）鉄で、鋳物にも使うものでもある。

この2業態はともに4昼夜操業であったが、あとで述べるように後者は1昼夜短縮して同じ銑と鍛を生産するようになり、三日押と呼ばれるようになった。

大鍛冶場は鈩場の製品の銑と歩鍛を割鉄（普通の鉄・道具鉄・のち包丁鉄と呼ぶ）へと2工程（精錬）で仕上げる工場で、銑のみの鈩場には3～4カ所、銑と鍛の鈩場には2カ所あった。



鍛。左上はこの中に3分の1ある鋼

初めの工程は左下（さげ）場で、鍛冶場のほどに銑を積み上げ熱して炭素を減らして左下鉄（さげがね）とする。次は本場で、左下鉄と歩鍛（ともに炭素の量同じくらい）をほどで熱して炭素を減らし、鍛えて不純物も除き、卸鉄とする。堅い鉄で

柴栗句会五月抄

大空をゆする爆音（おと）あり花あやめ　浅野としお
売れ残る塩鯖一尾日の永き　糸原古志
訪ね人無き日も嬉し初夏の庭　小川敏子
遠き日に焚木運びし旧街道　加納信子
命日はこだわりもなく牡丹剪り　楠房子
つづら折り曲る道辺の著莪の花　高木白虹
在りし日のあの道この径風薫り　中澤美紀子
花あやめ賞でつ一報所望せり　新出谷一華
すずらんの朝のドラマや子供の日　錦織富江
柔らかな手をつなぎゆく春の山　峯石美代子
新緑の街に一本太き道　渡部夕峰

斐の上川柳四月の句

集まれば思い出感謝つきぬ家　田中有樹絵
どこにでもひとりはいるよニュースマン　松浦亜以
朝ドラがすまねば今日が始まらぬ　児玉えみ
電卓に慣れてそろばん嫌う指　横山まこと
太平の眠り覚ますか不審船　勝田みのる
怠けろと言われてやる気少しでる　児玉哲呂
開票のとたん当確発表し　藤原千代子
古松葉枯れて落ちても二人連れ　松田牛歩
うぐいすは花見のうたをひとしきり　足立玉恵
読み返しまた読む便り春炬燵　真綿よし子
今までは気付かなかったバリア見え　藤原のぼる
勝てば泣き勝負の世界負けて泣く　渡部ミツコ
いい春に寒さ逃げたり戻ったり　安部正子
老いの坂昔のことはよく覚え　松浦久寿
振興券両手重ねて最敬礼　田部都
うなずいて黙って聞いてる慎重派　田中芳春

棒状に仕上げて割鉄と呼ぶ。この質の良しあしは本場の職人の大工の腕にかかっていたので、賃金も高く、明治の半ばまでは値段も鋼の2倍で製品の量も多かったので、鉄師の営業収入の8割を占めていた。このことが大切な点である。

製鉄の道⑥

一代（四日押）操業短縮
―試行錯誤重ね三日押に

鈩（たたら）場の操業には、鎚（けら）押法（西伯・出雲・石東の真砂砂鉄の多い地方）と、銑（ずく）押法（全国各地の赤目砂鉄地方）があるとされているが、奥出雲ではこの呼び名はまったく行われていない。

江戸時代半ばまでは、奥出雲では真砂、赤目の砂鉄を用いて四日押（4昼夜操業）で、銑を生産し、赤目砂鉄地帯でも四日押で銑のみを生産していた。だが、2種類の砂鉄を用いる鈩場では鎚という塊ができるが、硬くて割れず捨てていたので、生産量は半分だった（銑が5割に鎚が5割）。それが江戸時代半ばから鎚（この中の3分の1が鋼）を割る工夫によって製品は2倍になった。それから50余年たつと新しい工夫が加わった。

文化15（文政元・1818）年の『当分覚日記』（絲原家文書）を見ると、四日押と三日押（見込み）の収支計算表があって、利益は原料消費量も減り、製品の銑・鎚も減るのに、利益は逆に1代で銀2匁増えると書かれている。鎚も割りやすくなり、人件費が1日分減ったことからであろう。そこで代々の当主の『覚書』や『出府御用留』（松江滞在中の日記）、毎年半期ごとの『勘定書』さらに番頭が出府中の当主に届けた手紙を検討してみると、試行錯誤を重ねて30年後に完全に三日押になる。読んでみると、常に銑の量の多少に一喜一憂している。

前にも述べたように、銑の量の多少が、経営上の利益を支配したからである。鉄穴（かんな）押で銑のみを生産していた。だが、2種類の砂鉄を用いる鈩場では鎚という塊ができるが、硬くて割れず捨てていたので、生産量は半分だった（銑が5割に鎚が5割）。それが江戸時代半ばから鎚（この中の3分の1が鋼）を割る工夫によって製品は2倍になった。それから50余年



文化15年の「当分覚日記」（絲原家文書）

を超すようになった。できた鎚も歩（さ）えていて上質で割りやすくなったと思われる。

1代2匁の利益増だが、80代を超すと150俵の増収となり、大鍛冶（かじ）場の収入を加えると、400俵余りの増収となった。藩の保護も加わって、奥出雲の生産高は日本の首位へと伸びた。西欧は科学による技術革新で急速に進歩したが、当地方では経験の積み重ねで長い年月かけて改良に至った。

幕末唯一の外国との窓口であった長崎の出島に、1冊のオランダの本が入ると、経験1本の操業に新しい芽が出始めた。18世紀半ばイギリスはコークスを用いる高炉の生産で飛躍的に増産へ向かった（欧大陸ではまだ木炭燃料）。

イギリスの数工場の銑の生産量と比べると、品質や価格の劣りは別として、当時の日本の中国・東北両地方の100余カ所の手づくり鈩場の生産量は、あまり引けを取らない量であった、と故大橋周治はその著書で推定している。やがて西欧は転炉法を開発し、銑を鋼とする、鉄時代から鋼時代へと入るが、その前夜に奥出雲では手作業の三日押にやっとたどりついた。

製鉄の道⑦

一貫して自然と共生
―30年周期で炭材を伐採

近世企業たらでは、どのくらい木炭が必要だったか、最盛期の幕末から明治初期までを記録で紹介しよう。

1年間三日押80代で必要な鉄山（木炭材の山）は、鈩（たた

横田日乗　簸の上短歌会

牛を洗ひ水を飲ませし斐伊川をコンクリートの橋より見おろす　永井弥生

幼らの作り置きたる雪だるま日ぐれの庭に又思ひ出づ　諸角長子

幾冊の辞書に一語を解きあかす吾れに老耄の思ひよぎりて　常盤はるまさ

白銀は朝日燿ひ山脈をひときわだちて船通山も　岡田時子

ルーズソックスに男子はズボン引きずれる通学列車に乗り合せたり　野村節子

惜しまれて逝きたる息子の一周忌めぐり来し朝梅の花散る　安部夕波

ら）場（大炭）で100町歩、大鍛冶（かじ）場（小炭）2軒で30町歩、合わせて130町歩で、30年以上を経た材木であった。

分かりやすく言うと、200㍍の奥行きがあって傾斜面の高さ50㍍の谷間の両側が2町歩（2㌶）とすると、このような谷間の65カ所の面積が必要である。それを30年周期で木炭とするには3,900町歩の山が必要だったが、奥出雲の4鉄師はいずれもこれ以上の鉄山と山林の所有者であった。

この山々で多くの山子が大炭小炭を焼いて谷間を下りるのは大変であり、軽いがかさばるので、ほぼ同じ重量の砂鉄の50倍の量だった。鈩場を打つ（建設）のはこれまた大変であり、1年分65カ所の谷々がおおよそ5年分くらい集中していると、そこの中心に鈩場を固定して操業し、次には10年固定できるところに移るという状態であった。「粉鉄7里に炭3里」とはこうしたことから生まれた言葉であった。

ところが次第に馬が導入されると遠くから運ぶことができて、固定する鈩場の年数が長くなっていった。鈩場1カ所の地下構造づくり高殿建築、少なくとも10数人の職人とその家族の住居を整えると、半年近くはかかり費用も多額であった。鈩場一つに2軒の大鍛冶場は、銑（ずく）・鋼（けら）の搬入と製品の搬出であって、容易だったから、ほとんど固定していた。

前にも述べたように、奥出雲の鉄師は大水田地主・大山林地主で、そこに働く農民の組織づくりも容易であり、大量の年貢米は安定しており、製鉄業の原材料である木炭・砂鉄はいずれも自己の所有地で、自由に計画的に採取することができた。小領主が製鉄業を経営する形態で、こんな例は国内の他国にはなかった。松江藩は奥出雲には馬も優先的に増加を図ったから、永代鈩となって経営は充実した。

それでは砂鉄についても触れておこう。山で流して取る砂鉄と、そこで取り残して下流に流れた（7割5分）川の砂鉄が使われた。

1年間の山を崩す広さとその量は、先に述べた鉄山の2つほどの谷間の広さの傾斜地の2㍍の厚さに相当し、できる平地は2反歩（20㌃）だが、高さに低い所もあって、場所は20数カ所で、できる平地も多くなった。こうして長年かけてできた平地は、まず畑にし、やがて水田となった。また流した砂は下流の湿地に埋めて田畑とした。鉄師の開拓事業である。

私はもの心ついた時から、山の木の伐材の周期を肌で感じ、山や川での砂鉄採取も遊びの合間に見てきた。『街道をゆく』の「鉄の道をゆく」の記述を読んだ時、旅人には分からないなと感じた。

近世の人々は自然との共生なくしては製鉄業は成り立たないと、生活の中で知り実践していた。省くが、中世古代の製鉄量はしれたものである。当地方の生活の舞台は棚田であり、棚田は森林愛護で成立していた。

近代化への道①　ヒュゲーニンの著書 ―溶鉱炉の設置が相次ぐ

医学を学ぶ蘭学者によって、オランダのヒュゲーニンの著書『大砲鋳造法』が翻訳されると、加賀藩ではいち早く資源上の制約で溶鉱炉（製銑炉）を断念し、嘉永3（1850）年石見銑を用い反射炉（溶解炉）から、大砲鋳造に成功した。軌道に乗ると、いずれも時代を見る英明の藩主を擁する、外様・親藩の全国諸藩は競って視察に訪れ、技術伝習もうけ、各地に反射炉が設けられた。

薩摩藩主島津斉彬は、オランダの海軍士官も驚いたという、近代工場（ガラス・搾油・陶器・地雷など）群の集成館を経営していた。その年佐賀藩より訳書を贈られたが、在来の銑（ずく）が良くないので溶鉱炉設置に向かい、地元の砂鉄や巌鉄を水車吹子を用いて研究を進め、同5年より着手し安政元年には銑生産に日本で初めて成功し、鋳造も実現させた。嘉永6年ペリー来航間もなく、水戸藩主徳川斉昭は、薩摩藩より技術者を招き反射炉を設けた。続いて伊豆韮山（現存し文化財）・鳥取・萩（操業せず）ほか5藩も設けた。

他方わが国で最初に本格的に鉄鉱石を高炉法で製錬したのは、佐賀藩で学んだ大島高任で、さきの訳書のほかの2冊の訳書も参考として、釜石の大橋第一高炉を築き、長い間の苦心で釜石製鉄所として統計上産額をあらわしたのは明治13年であったが、産額の8.7％で、50％は島根県であった。割合が逆転するのは同24年からである。

松江藩主松平斉斎の奥方は佐賀藩主の妹であり、蘭癖の影響を豊かに受け、蘭学者金森錦謙を迎え、貨財を惜しまず援助し、嘉永6年3冊目の訳書を完成させ、さらに幾多の関連する献策もうけた。次の藩主定安にも受け継がれ、他藩にさきがけて英・米製の2隻の軍艦を購入するなど、海防にも積極的であった。

このころの鉄師絲原権造は藩主斉貴（貴の一字は将軍より賜る。引退し剃髪＝ていはつ＝後、斉斎という）とじっ懇な間柄であったようである。当時の文書の中には訳書の溶鉱炉の寸法書きがあり、別に溶鉱炉のスケッチとメモもあるが、薩摩藩のものと同じである（藩主が安政4年に亡くなり、翌年薩英戦争の砲撃戦で破壊）。権造の蔵書の中には蘭学の理科の本もあった。

また別な文書には、明治8年に建設された、溶鉱炉とパドル炉（溶銑をかきまぜて鋼・錬鉄を製錬するわが国唯一のもの）を備える群馬県中小坂製鉄所（鉄鉱石・木炭・水車吹子使用）を模して、砂鉄を用いての工場の見積書があ

り、用材はすべて所有林のものを用いている。その最後には製錬する銑、製錬した錬鉄・鋼の量と価格の収支見積書も添えてある。その上別な高炉の仕様書もあり、3日押を完成した当主権造が、砂鉄製鉄業の近代化にも意欲を燃やしたことが分かる。

近代化への道②

洋鉄輸入による苦境
―新技術の習得に力注ぐ

明治5年の仁多郡の物産（県庁蔵文書）をみると、農産物（米・荒苧＝あらそ＝・大根・茅蓑＝かやみの＝・大豆等）の価格は、製鉄業による銑（ずく）・割鉄・鋼・鋤（けら）や釘（くぎ）・鎌（かま）に薪（しん）炭を加えた額より若干多く、製鉄業の比重が多いことを表している。

明治10年より安価で良質の洋鉄の輸入が増加すると、和鉄製造業は苦境に立たされた。農民の生活は農・鉱の収入で維持されていたから、小領主的存在の鉄師は、農業基盤の充実と製鉄業振興にも力を注がざるを得なくなった。

鉄師たちの県庁への嘆願は、藩政時代とは違ってなしのつぶてであった。

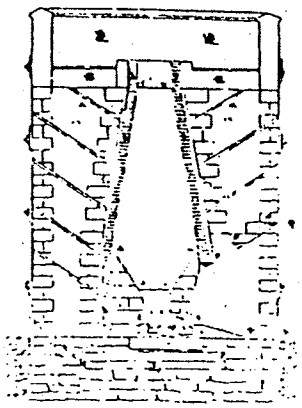
西南戦役でやや景気を持ち直したがつかの間で下落し、地域社会の問題と全郡あげての嘆願へと進み、県も捨てておけず政府の工部省に訴え、技師の派遣による実地調査が始まった。

10年代は鉄の需要が多くなったが、釜石製作所は失敗で操業中止と、政府と軍が必要とする原料鉄は、中国産地の民営企業に期待されるようになり、しきりと工部省・海軍省の視察が続いた。

権造は仁多郡の農業振興策5項目を献策し、自ら動き出すとともに、新しい工業技術修得のため、厳重な審査を経て一人の職人を2年間、東京の海軍兵器局の製鋼所に入所させ、品質改善に努め海軍省に納入したが、明治31年からは根雨の近藤、阿井の桜井、吉田の田部とともに海軍と共同契約をし、その代表として納入し始めた。この年、俵国一（浜田出身）も調査に訪れている。40年までの納入品は、包丁鉄（割鉄の商品名）が最も多く、次いで鋤鉄・頃鋼（頭大のもの）であったが、途中から頃鋼を砕いて小さくし玉鋼と呼んだものも若干加わる。そのため別な職人が半年、呉の海軍工廠へ冶金の研修に行った。

包丁鉄の需要が多いのにこたえるため、この間三日押操業で銑の増産に努力し、半期間平均一代15％増、26年には最高一代銑50％増、水車吹子導入後の31年には最高一代銑2倍ともなった。後者の2例は原鉾のものであるが、需要にこたえる村下の努力のあらわれであった。

明治9年にはお雇外人技師ライマン（米）が鉄穴（かんな）鉾を訪れて報告書をまとめている。（北海道の石炭、新潟の石油の開発者）科学者として各方面の調査を綿密に行い、産業として経済効率の向上を計るための意見はまことに貴重なものであった。この時同行したのは母里村出身の弟子安達仁造であった。数年遅れて来日したドイツの化学者コルシェットも適切な科学的改善策（高炉をはじめとする）を提言している。



金森錦謙の訳書の中の溶鉱炉の図

近代化への道③

やっと角炉へ到達
原料に砂鉄を使い成功

広島県の中国山脈沿いの企業たちは、明治8年官行広島鉄山となったが、奥出雲より一足早く危機が訪れ苦境となり、小花冬吉技師を迎え、間もなくフランスに留学させて砂鉄製錬への改造案に着手したが東京へ転勤した。

その後苦心の結果、同26年落合作業所（三次市の北方）において、跡を継いだ黒田正暉が7尺の角炉の上に4尺の煙突を持つものを築造し、50％内外の鉄分のある鉄滓（さい）吹きの試験操業を開始した。今までの銑（ずく）は鋳物用に適しない白銑であったが、ここではネズミ銑ができて市場対策としても効果があり、砂鉄単価のトン24円に対して鉄滓は1円50銭の格安の上に労働の節約もでき、さらに60日―40日の連続操業もできて製品の銑鉄コストは28円から18円となった。しかし鉄滓の流動不良などが重なり、当時の技術水準の低さとで37年には4カ所の角炉はすべて廃業した。

政府には改造を維持する考えもなかったが、各地の鉄師は挽回（ばんかい）策として採用をはじめた。近藤家では在来炉をやや高くして砂鉄を使用する方向を打ち出して成功した。桜井家は角炉で鉄滓吹きをしばらく行った。ところが落合の黒田式角炉が、新しい企業家によって継承されてくると、これまでの鉄師も企業たちの操業を縮小し、角炉の経営を始めるようになった。

わが国で製鋼用電気炉の開発の第1号は、明治42年の長野県松本市の土橋長兵衛のものであったが、第2号は安来製鋼合資会社の伊部喜作技師（のち社長）によって鋼を工具鋼とするもので、鉄師絲原・桜井両家の協力によって成功した。このころの

絲原家の商業部総括報告書にもたたら操業革新の必要性を述べている。同45年出雲電気株式会社の鈴木技師長の協力で、松江火力発電所に2基備えられた。大正4年には松江に2基、安来に4基備えられて本格的となり、同5年安来製鋼所へと発展した。

同5年の陰陽鉄山同業組合規約と名簿をもとに、近年調査をしたら、30を超す工場が出現していて、角炉のほかに旧来の2倍炉もあり、角炉は鉄滓、2倍炉は砂鉄によってともに銑を生産していた。

仁多町内に角炉2カ所、横田町には角炉が4カ所あった。

絲原家では木原小一郎技師によって改良黒田式角炉が完成し、6年秋から操業を開始している。木原が種子島での角炉操業経験から、原料を砂鉄として日産3㌧の出銑に成功した。

そこで同家では確保していた山々の鉄滓は、すべて大阪の業者と売却契約を結んだ。かつての権造の夢は50年後に、福禄寿製銑工場の実現となった。詳細な記録が残っている。その翌年横田町大呂にこれと全く同じ工場が設けられ操業をしている。

第一次大戦が終り、八幡製鉄所が全面稼働に入ったので、和鉄製鉄業（たたら炉・角炉とも）は相次いで廃業に追い込まれた。その後大呂の工場はのちの日立金属株式会社の木炭銑工場として再開され、昭和40年まで操業し、ヤスキ鋼の世界的名声を高めた。

近代化への道④

顧みて明日に光る
―美術刀剣鋼のたたら出現

「鉄は国家なり」は昔のヨーロッパの姿を映す言葉で、諸民族は道と川を境として住み、特色ある思想も芽生え、手づくりは機械化で量産へと進め、産業革命は国家意識を明確にし、科学は自然の征服へと進んだ。わが国は山や海の自然、四季の気候と食の糧にも恵まれ、お互い融和して、自然と共生し手づくりを続けた。

奥出雲の花崗（こう）岩系の地質は、地球の最深部にあったのが、変動による隆起で海中で風化し、化石も含んでさらに隆起し、表土が培われ森林が茂ったところで、砂鉄も含んだ自然に流れる砂が、沖の島を本土とつないで島根半島を生んだ。鉄穴（かんな）流しは江戸時代に入ってから次第に盛んになり、その量は化学的測定や諸記録の推定で明らかになる。大昔からそれが行われたとするオロチ話は、後世のお話である。古代のたたら炉は小さく、製品も少なく粗末なものであったから、オロチの眼や口から火を噴き出したものというのも同じお話である。

中世までの村人の生活の舞台は谷あいの緩傾斜地で、山林が蓄えてしみ出す湧（ゆう）水を上から下へと流し出せる棚田を広げて、用いる鍬（くわ）や鋤（すき）は木と枝をそのまま生かしたものを用い、改良を重ねて近世に至って鉄製へと進む。

村人は森と水と一体となり共生してきた。そこにカミを感じて畏（い）敬し、天候を祈りそして五穀豊穣（じょう）に感謝した。今にも残っている。各地方のほとんどの大川の下流は、訪ねてみても土砂の堆（たい）積地である。『出雲国風土記』にある「国引き神話」は、この思想で国土生成を見事に描いた、最も誇るべき神話である。

これまで近世企業たたらの発達が遅れたとはいえ、いかに自然と共生してきたかを、政策・経済・技術の記録の数的科学的検討から、関連整合するものを読み取って述べてきた。

第二次世界大戦前夜、刀剣への美術的側面からの需要で、当地に靖国鈩（たたら）が新設され、のち原鈩が叢雲（むらくも）鈩として復元し、さらにその他の地の旧鈩も、篤志によって復活し、三日押操業が細々と続いた。

敗戦後数人の刀鍛冶（かじ）から、戦時中布部村の樋の迫鈩で、優れた鋼が生まれていたとの語り草を耳にしていたが、つい3カ月程前にそれを裏づける文書に出合った。かつての原鈩のように多量の銑（ずく）を流し出し、鋤（けら）を割って鋼を得ている。その村下（むらげ）は原鈩の安部由蔵であった。

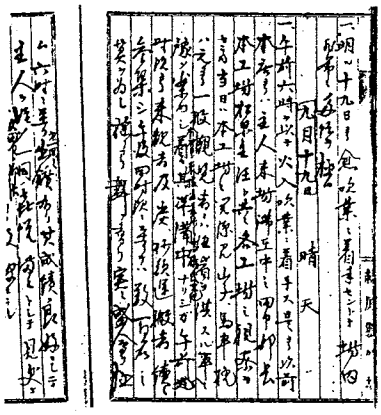
ところが銑を目的とせず鋤のみを造り、採算には合わないがわずかの美術刀剣用の鋼を得る、特殊工芸とも呼ぶべきたたらが出現した。伝統の三日押を真砂砂鉄のみを用いて操業する「日刀保たたら」である。

検討から、関連整合するものを読み取って述べてきた。

私は新三日押と呼んで分類している。研究者の熱いまなざしが注がれている。

最近とみに盛んになった小規模な筒型の実験たたら（形・操業・製品の特色から自給たたら

福禄寿製銑工場の初の火入吹業の記録



と分類）は、名古屋から東京近郊・東部東北地方で、広く深く研究操業され、小中学生の行うものでも研究者が対象として貴重な報告書を出されており、特に貴重なものを重ねてもうずたかくなる。

原料にも伝統技術も恵まれている出雲は、「紺屋の白袴（ばかま）」の感がしたが、芽生えも現れている。小規模たたらだけでなく、企業たたらの各種についても研究の深まりを期待している。

そこに鉄の新しい研究の糸口があると考えている研究者の方も少なくない。

山の恵みはここにも㊤

鉄のもたらした文化
―「風雅の道」地元拠点に

山林と水田という江戸期の時代とともに値打ちの高まった資本を持ち、そこに働く村人を抱え、村人の不足する生活費は、山が生み出す木炭・砂鉄・そして生産される鉄、さらに運搬による稼ぎ賃で補わせていた小領主的存在の奥出雲の鉄師は、鉄業の不況には解雇できる労働者を抱える、他国の同業者とは異なった存在であった。それは松江藩の鉄行政と鉄師頭取制をもつ株仲間がもたらしたもので、先年協力を得て行った全国調査をもとに資料や研究物を集めて一目瞭（りょう）然に浮かんできたことである。

その多くは山陽側の山麓（ろく）地帯の中世武士の移住者で、組織づくり情報集めにも、土工の経験にも優れていた。そのうち各地域で突出したのが九鉄師であった。

横田町内の鉄師のうち、湯之廼（絲原）・卜蔵屋（卜蔵）はともに、鈩（たたら）場などと鉄師・番頭・職人の住居が隣接していて、家風や風習が一体的な集落が築かれている特色が生まれていた。

絲原家は鉄穴（かんな）鈩を中心としていたが、今もそれが随所にうかがわれる。卜蔵家は火災などによって原鈩の中心部は遺構のみであるが、今も遺風をうかがうことができる。これは鉄師が村人と常にともに呼吸しあっていたことにつながる。

それは幕末から明治、大正にかけて、農業・畜産・林業の近代化へと取り組みが早かったことにも表れている。現在の名声を得ている仁多牛の源流は、卜蔵家が仁多牛と隣接する備中竹の谷の牛とで得た卜蔵臺（づる）である。

また享保6（1721）年、卜蔵孫三郎は家督を弟に譲り、能義郡荒島村の日白池新田をはじめ多くの新田造成に力を尽くし、松江藩から功績をたたえられ、下郡役を務め海運業も営んだ。いずれも鉄が取り持った縁であった。

卜蔵家の原鈩の銑増産のことを述べたが、明治後期にこの勢いに乗って、布部村の鉄師家島家と組合をつくってさらに進めようともした。

農鉱二つの家業の合間に、いずれの鉄師も上坂しての所用の折、各地を訪れ風雅の道も学び、地元の拠点となった。和歌・俳諧・茶道・書画などを地域にも広げた。絲原家は絲原記念館の収蔵品の公開によって全貌（ぼう）を知ることができる。

卜蔵家の残り少ない古文書のすべてを整理し、また他家の文書を通してみると、風雅の道も豊かであったことが分かる。

現存する旧宅地の庭園は、江戸時代初期のすぐれた様式を伝えるものとして、町指定の文化財である。

同家は14世紀の楠、名和両氏の流れで、最も早く当地に移っていた。

山の恵みはここにも㊦

鉄の道伝える絲原記念館
―鉄師の往時をしのぶ収蔵品

県道下横田出雲三成停車場線沿いに架かる石の橋を渡ると、旧松江藩鉄師頭取・絲原家がある。その入り口付近は、奥出雲の杉木立と清冽（れつ）なせせらぎに囲まれ、往時の面影を浮きたたせる。その一隅にある記念館は、元の木炭倉庫を改築したもので現在は管理棟として利用され、幕末期松江藩の士分格でもあった同家の具足が展示されている。そして廊下づたいに歴代の業績パネルを見ながら第1展示棟に入ると、たたら資料が展示してある。その壁面には写真と絵図で往時の鉄穴鈩（かんなたたら）の全容が表示されている。

展示台には当時使用された各種の砂鉄が並び、これを採取する鉄穴場・川砂鉄（かわこがね）場の解説とそこで使った道具が、展示してあり、ついでたたら製鉄の作業の様子が炉づくり（釜ぬり）にはじまり、鈩場の銑（ずく）・鋤（けら）の製品から、鋤を割って鋼を取り出す大鋼場、銑などを割鉄とする大鍛冶（かじ）場（左下場・本場）と展示説明されてあり、とくに大鍛冶場は模型の展示がある。このような系統的な展示は、他の施設にはあまり類例がない。

さらに同家の製鉄業史、明治末―大正期の経営陣・職人たちの写真や組織図、たたら製鉄近代化への歩み（電気炉・角炉）や日本美術刀剣についての展示もある。

第2展示棟への廊下ケースには、松江藩の製鉄史を知る上で貴重な資料や、奥出雲の農業の近代化の資料がある。

そして同家の風雅の歴史を作品で鑑賞できる美術工芸室に入る。ここは季節に合わせ年に3回展示替え公開が行われている。

また同家の13代武太郎が中心となって敷設したJR木次線の前身簸上鉄道の資料もある。たたら製鉄廃業後の奥出雲産業の

晩春断唱

簸の上短歌会

人はみな金屎坂と呼ぶ坂を落椿真赤にそめて春逝く　永井弥生
焼鯖に山椒そふる田舎寿司息子らやっぱり故郷と言ふ　全
子のもとに移ると告げてこの峡を拓きし頃を友は言ふなり　諸角長子
吹雪きたる日は夢の如この峡も桃さくら共に今盛りなり　全
死に近き妻に縋りつつ泣きて呼ぶ吾が娘に応える声すでになし　常盤はるまさ
夜に幾度体位変えくれと言ふ妻に小言したるをいまにして悔ゆ　全
天高く白蝶舞ふる如くにも辛夷一樹が花びらこぼす　野村節子
仁多米に換えくれと言ひ春の花とりどり並ぶる島の女は　全
山鳩はひねもす鳴けり中山はこぶしの花の白きそよめき　安部夕波

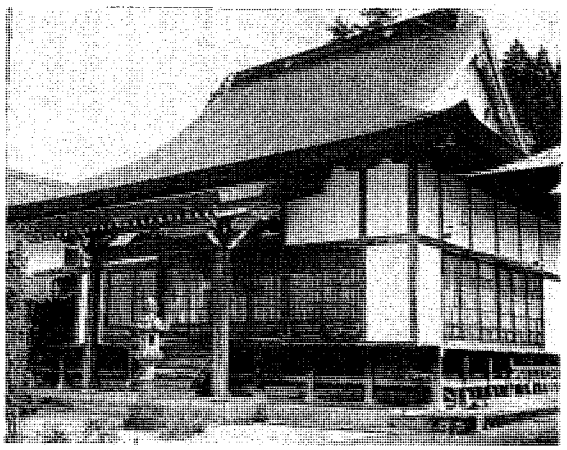
斐の上川柳五月抄

古障子紙は色つき我れは老いじいさんもおにぎりほしい連休日　渡部ミツコ
半農と半官で生く過疎の町農繁の連休田圃様変り　児玉哲呂
藤の実がパンパンはじけ遠く散り胃袋へ一直線にとろろ汁　勝田みのる
寝たきりと呆けない事を望む日々結構な暮しと見るは他人だけ　安部正子
過疎の村田畑の草だけ元気出し片付かぬままに五月も早や半ば　足立玉恵
槌音がわたしの日々のリズム決め若葉萌え思わず息を弾ませる　児玉えみ
満足に隔たりあれどいま平和田中芳春　松浦久寿
　藤原千代子
　松田牛歩
　松浦亜以
　田中有樹絵
　真綿よし子

横田三十三番札所めぐり㉓

第28番　横田・無量山安楽寺（薬師堂）

はかりなき大悲の誓あんらくの
二世を頼みて参る諸人



中心は製炭業の振興であるが、その輸送の主力はこの鉄道であり、これを利用し、京阪神に送られ島根木炭の名声を全国に高めた。

その館蔵品は大和絵・南宋画（文人画）・円山四条派を中心とした絵画や、県指定文化財である藤原定家筆の「明月記断簡」を始めとする書、また茶祖・千利休、大名茶人・松平不昧にちなむ茶道具や鉄師としての什（じゅう）器など多岐にわたっている。

また7代吉三郎（好親）は二条派の歌人でもあり、烏丸光栄の秘伝書のほか関連文書もあり、8代四郎左衛門（以文）は芭蕉の門人支考が開いた美濃派の俳人で『奥の細道』の木版初版本のほか、句集・論集が筆写を含めて残っている。そして再和坊・以哉坊。6世の松後までの来宅を含めての交遊の書簡、句会の記録さらに出版句集もある。

また隣接する居宅庭園内には松江有沢山荘の四畳半台目の茶室の写しである為楽庵、京都の大徳寺真珠庵の内つくばいを有する二畳半台目の茶室の写しの庭玉軒もある。また奥出雲の自然を借景とした出雲流の庭園も公開されている。

このように江戸中期から鉄の商いを通じて入って来た中央の文化はこの地方にも大きな影響を及ぼし、今に至るまで続いている。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（お断わり）同じことを繰り返し記述して申し訳けありません。編集者の身辺のとり込みから合併号とし、今年二・三・四月と地方紙『山陰中央新報』の「鉄の道を征く」連載の分担執筆したものを、文語体に改め、若干追加や訂正して載せました。

原論文は『たたら研究会40周年記念論文集』のために筆をとった長編のものの要点をやさしくまとめたものであります。

山陰中央新報社に感謝します。

（横田史談会　高橋一郎）



会員頒布一部五〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇三一ノ二編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇一九一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第291・92号（8・9月合併号）
1999.8.6（M131.T87.S73）
奥出雲編集集団©
横田史談会

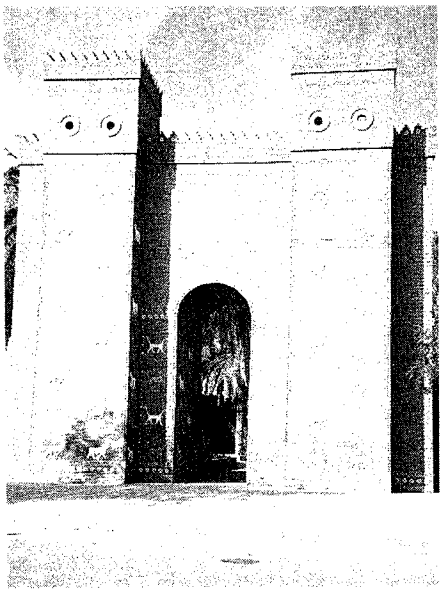
ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

「概略」メソポタミアの鉄文化（上）

特別寄稿　窪田蔵郎

1995年8月、第14回横田たたら研究会の特別講演をお願いした窪田先生のすべては、当誌254号（増刊号）として発行し、横田史談会員はもとより、研究会参加者の方にも贈呈しました。その後たびたびシルクロード調査においでになっておりますが、このたび本文にあるようにメソポタミアの調査の概要を、当誌に御寄稿賜りました。厚く御礼申し上げます。254号をもう一度読みかえし、最新の御研究にふれて頂きたいと存じます。

はじめにイラク全体の概況を申し述べますが、前半をバグダットより南の地、後半をそれより北の地に判り易く二分いたしました。いずれにしましても御承知の通りの経済制裁下の国であり、国際的な関係もありますから表現が難しいのですが、とにかく食糧、医薬品、日常必需品など、皆大変な不自由をしております。撓に実っている棗椰子だけがこの地の人々に対する、唯一のアラーの神の救いではないかと感じました。しかし国民は馴れてしまったのか国民性なのか、窮乏の中にあって比較的楽天的な生活を送っているようでした。（※イスラム教の神）



バビロン　イシュタル門（復元）
往時の3分の2の大きさ

A

簡単に地理的な事項にふれますと、まず国土は四四万平方キロメートル、日本の三七万平方キロメートルの一・二倍ほどです。人口は二、一二二万人（一九五五年）でこれは日本の一八%程度に過ぎません。人種は八〇%近い人々がアラブ系で、クルド人・アルメニア人やその他の民族は二〇%程度なのです。ですから隣国のイランの騎馬遊牧民族（ペルシア人、メディア人）主体とは、顔は似ていますが構成が全く違います。言語もペルシア語ではなく、アラビア語が中心で、北部でクルド語が僅かに通用するといった状況です。

シュメール文明の地

どなたもシュメール文明という言葉は良く御存知だと思いますが、この文明はとにかく悠遠のとしか言いようの無いような時代です。今後の発掘調査で何が発見されるか判りませんが、このシュメール人がウバイド期と呼ばれる前五〇〇〇年頃のものか、次の前三八〇〇年頃からのウルク期からのものか、また移住民らしいが何処から来たものなのかも判っておらず、曖昧な仮説になっております。現地では、ウバイド人にセム人が、合流混血してシュメール人が形成されたと言っていました。私もこの地の遺跡を幾つか廻りました。とにかく長い年代を経てその間に立派な都市国家を造っておりますが、鉄をどの辺りから使ったかとなりますと、この時代には全くと言って良いほど痕跡がありません。

欧米の学者達の成果によって細かく研究され年代も比定されて、徐々に文化の様相をはっきりさせていますが、前二〇〇〇年に近づいたウル第三王朝（BC二一一二～二〇〇四年）の頃に（古くてもこれを二～三〇〇年遡る程度）、一つ二つ指輪か工具の破片のようなものが採集された例があるに過ぎません。しかし、言語学の方からはすでにこのシュメール期に、鉄を現す文字があったとされておりま

肥沃な三日月地帯を廻って

鉄の原点とも考えられてきたイラク！そこは一九九〇年八月

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

す。（飯島紀夫先生の著書参照）

それによりますと当時鉄はアン・バーと呼ばれ、場合によっては頭にKuをつける場合（鉄刀剣の場合が多い）もあって、楔形文字で表現され米＋と刃物か鑿で刻字されていたということです。鉄釘を並べたものか鶏の足跡のような形です。しかし良く見ますとこの鉄の字に四角な囲いをつけますと大空・天空となります。ですから鉄は天から降ってきたものということを伝えているのではないかと思います。つまりシュメール人が末期頃でしょうが鉄を知ったのは、落ちてきた隕鉄を入手したことからと想像でき、そうだとすれば何と言っても鉄の創始の頃ですから、まだ加工用ではなく宗教的な崇拝の対象になっていたか、あるいはやっと原始的な加工に入っていった頃とも考えられます。

それでも年代はウル第三王朝終末期の、この地方の歴史で言う、ここから派生したイシン・ラルサなどの時代、多分それも終り頃に該当するものでしょう。王が一つか二つの小鉄器をもっていただけで、文字が出来ているというのも一寸と不思議な気がします。

私の海外での遺跡見学の常で、どこの遺跡でも鉄や青銅を使っていた痕跡はないかと、上の美しい風景より下の発掘調査で見捨てられた遺物を注意して廻っているのですが、ウルク遺跡でもモザイク神殿の場所で、粘土製で頭部を着色した円錐形の鋲、太さ三㎝、長さ三〇㎝足らずを十数本積んであるのを見ました。金属製のものは全くなく、何時のものか青銅の鋳造時に排出したらしい、極く少量の鉱滓を漸く見つけただけでした。

ウル遺跡の方はその経歴が非常に古く、ジックラトのほか神殿や王宮そのほか住居跡など広大な遺跡を残し、大洪水の跡まであって発掘補修の手が細かく入っていました。地下の奥深い王墓からは殉死者の遺体が多数発見され、金銀の副葬品が幾つも出土しています。遺構の外周は焼成練瓦ですが内側の部分は日干し練瓦であり、泥と棗椰子それに接着剤としての瀝青ばかりが目立ち、構造材に銅か鉄か、とにかく釘・鎹を使った様子は窺うことができませんでした。

錠鍵や内装器物などは使われて無かったのでしょうか。斧、鑿、鑿などは次々と転用されてしまったのでしょうか。前述王墓からニッケルを含有した鉄の工具破片が出土したと聞いていますが、見て歩いた感じでは全く金属の臭いはしませんでした。

何故この辺りこうも使用した形跡が無いのでしょうか。それはこの辺りに鉱石の資源が何とも乏しいためでしょう。さらに歩いていて気がついたことですが、地盤が余りにも弱い低湿地なのです。田畑の一寸と下った所はいずれも水が滲み出していて、その表面には塩が白く折出しています。地元の人はそれを掻き集めて塩の集荷業者に売っているのです。従って水が豊富な所なのに飲料水には不自由している、何とも矛盾した場所です。こんな処では仮に鉱石を持ってきて製錬しても、到底還元溶解などの作業はできません。鍛冶屋にしても神殿や王宮のある小高い場所で、炉底を十分に固め、王や神官の所有する半成品を加工するのがやっとのことでしょう。略奪品等の銅鉄から派生した文化はあっても、自前で製錬・調達した銅鉄による文化は無かったと言えます。

巨大なバビロン王城の築造

現在見ることのできるバビロンは、ハムラビ王などで有名な第一王朝の古いものではありません。アッシリアのセンナケリブ王によって破壊された後に、この地を世界の名都に仕立てたネブカドネザルII世王が、有名なバビロン捕囚の膨大な労働力によって、新バビロニアの時代になって造ったものです。

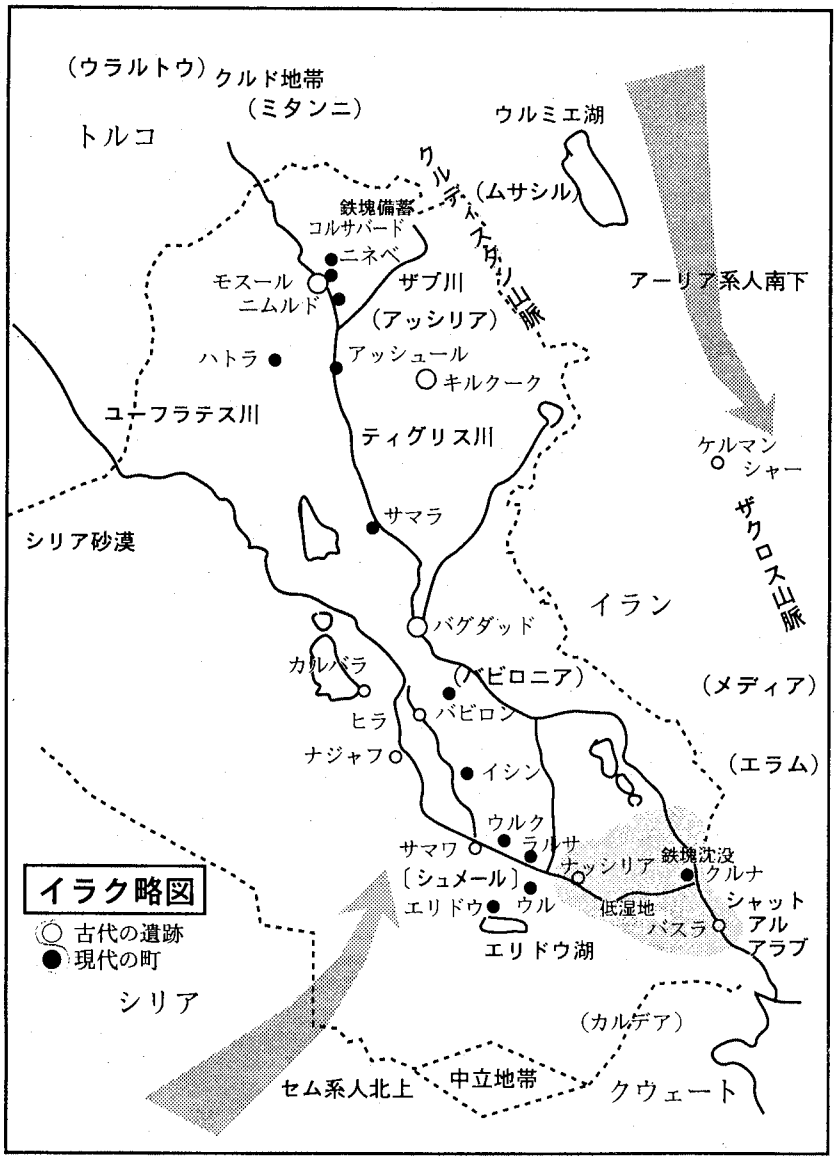
往時の三分の二の寸法で復元されたイシュタル門を入ると（写真A）、各地に遠征した軍団が凱旋・帰国してくる、現代流に言えば高架構造の行列道路。その傍らにはアレキサンダー大王が前三二三年に、志半ばにして病に斃れた王座の間があります。その傍に道を挟んで一寸離れて、誰も知っている王妃アミテイスの御機嫌をとるために造った、メディア産の植物が繁茂した空中庭園（写真C）。観光写真に出てくる奴隷組み敷くライオンの像（写真D）も整備されていました。これはヒッタイト遠征の戦利品といわれています。

バベルの塔はもう少し離れた荒野の処に、九十メートル角の基盤だけになって草が生い茂っていました。

さてこの大遺跡でも鉄の使用は少なかったらしいのですが、年代が前五世紀と大部降っているので、鉄に関する幾つかの挿話が伝っています。

空中庭園の建設に鉄材が使われたかどうかは、今のところ定かではありません。鉛だけです。設置場所すら異論がいくつか出ており、現地ではバビロン博物館長のワハブ氏の、食糧保管庫説がかなり支持されています。

はっきり鉄の使用が書き残されていたのは、ユーフラテス河を渡ってバビロンの旧市に入る箇所で、ニトクリス女王が橋の工事をしたときです。ヘロドトスの『歴史』に書かれているのですが、石材を主体に鉄と鉛を使って橋脚を立てたとされています。当時すでに推定されていたようにこの女王は架空の人物で、ネブカドネザル二世王の事跡と推定されています。この鉄はおそらくペルセポリス（前五〇〇）のように、石材と石材を固着するために鎹として使われ



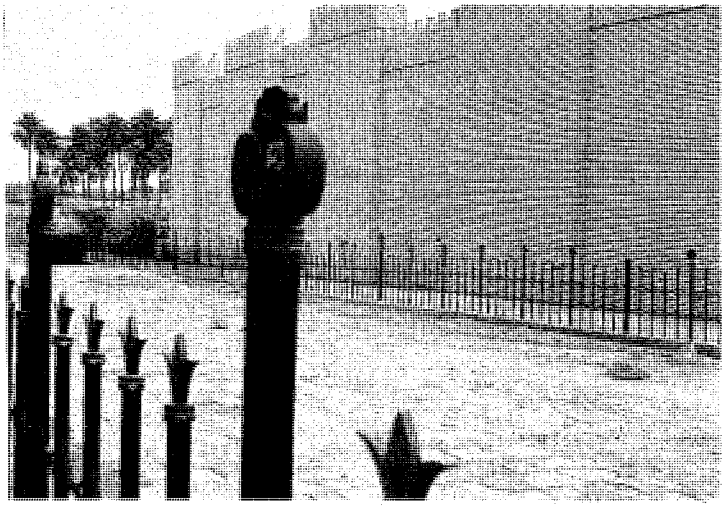
イラクとその周辺の年表

紀元前	(メソポタミア地域)	(周辺各国事情)
2500	ウル第一王朝建国	
	ウル王墓・ウバイト墳墓より鉄器残片出土(隕鉄と推定)	
2060	ウル第三王朝建国～1950滅亡・古アッシリア商館取引	
(2112)		(2004)
1960	イシン・ラルサ建国～1735・1698滅亡	
1880	バビロン第一王朝建国～1530滅亡	**ヒッタイト草創期**
1700頃	ハンムラビ法典発布	**フルリ人の移動**・ミタンニ国成立・アッシリア従属
1600頃		ハビロンをハッティ王ムルシリシュⅠ世占領
1450頃	アッシリア半独立・ミタンニ王国隆盛	
1360		ミタンニ・フルリ分裂
1288＝1280		エジプト・ヒッタイト戦＝カデシュ條約
1270	アッシリア勢力拡大・ミタンニ王国滅亡	
1200頃		トロイ戦争推定
1190		ヒッタイト王国滅亡(海の民侵入)
1000頃	**アッシリア帝国抬頭**	この前後新ヒッタイト時代
900		ウラルトウ抬頭
841	アッシリア・ダマスカス占領	
839	アッシリア・タバル遠征	
829	アッシリア・ウラルトウ遠征	
800頃	アダドニラリⅢ世ダマスカスより**鉄150トン奪取**	
750頃		ウラルトウ最盛期
721	サルゴン治世、**鉄塊・鉄器備蓄**(BC 708～7)	
700	アッシリア・オリエント統一(フェニキア・パレスチナ等版図に)	
625	新バビロニア王国建国＝カルデア王朝	
612	ニネベ陥落＝アッシリア帝国滅亡	
597～586	バビロン捕囚の連行。この頃ウラルトウ滅亡	
580頃	ネブカドネッアルⅡ世バビロン修復	
550・546		リディア滅亡・メディア滅亡
538	新バビロニア王国滅亡	

ただけでなく、川底に木の杭を打ち込むために先端に履かせて鑿の役割をさせた、大きなV字形の鍛造厚鉄板だったと思います。ベックは『鉄の歴史』の第一巻にメソポタミアのセム族の項で、鉄の鎹で結びとめられた組状で突起のある鉄の出土物をあげています（寸法不詳）。しかしこれでは装飾用としては役立ちますが、構造的には強度がたらないのではないかと思います。

前述の川底への橋脚打ち込みに使う例は、私は三〇年前東フランスのメッツにある博物館で、ローマ軍が使った実物を見ています。ベックの紹介しているライン河で発掘されたものは王の兜形で、厚鉄板を円錐形に加工していますがそれらは少し遅れた三世紀末とされており、この場合は時代も古いので、もっと簡単なもので済ませていたのではと思います。

ここに鉄がこのように消耗的な使われ方をしていたのですから、この頃になれば少なくとも武具陣営具をはじめ、城塞建築のために土木工具類、農耕と灌漑工事のための農工具類、そし



B

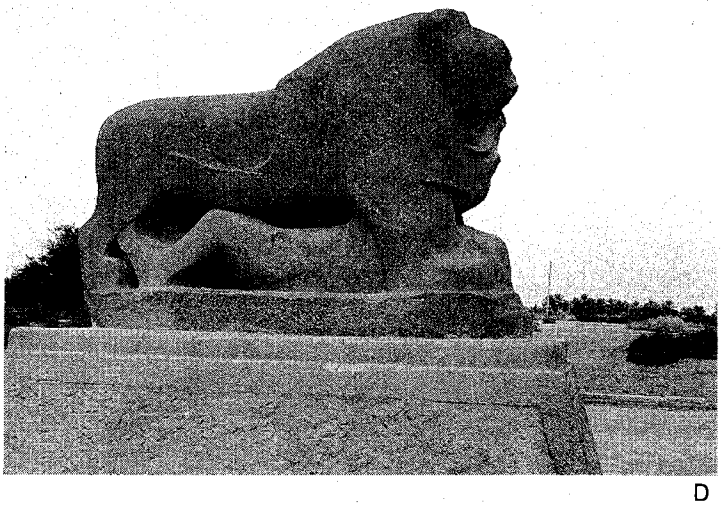
▲バビロン　凱旋道路



C

◀バビロン　空中庭園の跡
縦42m　横30m

バビロン
ライオンと組み敷かれた人間の像 ▶



D

て量の多寡はあれ、内装家具用などにも使われていたことは当然でしょう。

アッシリアの遺跡

首都のバクダードから川沿いの国道を一一二キロメートル北上しまっすと、まず最初に目に入ってくるにはサマラの尖塔です。近付いて見ると下側には外壁だけですが、一万人も収容できたという大モスクの廃墟があり、高さ五二メートルの塔はここに付属したものでした。八〇〇年代のアッバース朝のものですから、バベルの塔とは年代から言っても比較にはなりません。形式もここは新しい巻貝（らせん）形です。

ここで一息ついて再び車を走らせ、フセイン大統領の故里オルチャを通過。普通の地図には北部はイラク第二の都市モスールと石油の産地キルクーク位しか書いてないのですが、もうこの辺りも前十世紀頃には、アッシリアの勢力圏内に入っていたところです。

まず一番南寄りのアッシュールに着きます。アッシリア発祥の地このティグリス河を見下す小高い丘の上（写真F）といわれています。古代交通の要衝であり経済基地には打って付けのところです。古都としては前二〇〇〇年から前八八四年まで使われていました。現在残っているのは泥山のようなジッグラトと王宮跡などです。早くからキュルテペ辺りの都市国家に対し商権をもっていて、隊商が活躍した時代その指示を出したりもしたところです。その頃でも極少量の隕鉄を扱っていたようですが、時代が時代ですから鉄の使用とは全くと言ってよいほど関係がありません。この街の後身は前六一二年に、メディアと新バビロニアの連合軍によって徹底的に破壊されました。

ニムルードはアッシュールナシルパル王（在位前八八四―八五九）が造った首都で、サルゴンII世王の時にここからコルサバードへと短期間ですが移転しています。既に前十三世紀頃には聚落となっており、徐々に栄えて前九世紀頃には最盛期を迎えました。当時の石版画の想像図で見ますと、ティグリス河に沿って美しい高楼が建ち並んでいますが、現地は荒廃していて昔の面影を偲ぶ由もありませんでした。

一九八九年にここでアッシュールナシルパルの王妃イアバの墓が発掘され、金製品三十キロが副葬されていました。ここには多数のレリーフがありましたが、破損したものばかりで優品は大英博物館などに入ってしまっておりました。しかし戦利品と推定される家具調度用の、細かい細工を施した象牙製品が井戸の跡から多数発見されています。

ここで私が特に注目しましたのは、シャルマナセルIII世王（在位前八五八―八二四）の城塞です。遺跡の東東南隅にあるナブ神殿跡とよばれているジッグラトの廃墟から東南へ大体四〇〇メートル。その辺りは広々とした牧草地で羊が長閑に草を喰んでいました。その真中にポツンとこの遺跡が埋戻され、テル状になっておりました。ここが砦とよばれた位ですから、鉄製の武具などが沢山出土したところです。ここの出土品としては前八四一年のイスラエル遠征の勝利を称えるレリーフの「黒いオベリスク」が有名です。

そのところから発見された鉄器のうちで、主要なものをあげますと、レリーフで知られたトンガリ帽子形の（目方が三キロちょっとある）鉄兜、鉄の挂甲（魚鱗形の小札）残片、槍や鏃、鉄を挟んだ青銅やファイアンス製の棍棒頭、壺や瓶などを乗せて置く台の三脚部分（端部は青銅鋳造の物を使用）などがありかなり鉄が使われています。

ニネヴェはクユンジュクの丘の名で知られていますが、この丘の名は遺跡の北半分のところを指しています。ここに小聚落を形成したのは古くて前五〇〇〇年にも遡りますが、アッシリアが関与してくるのは前二〇〇〇年頃からです。首都を築いたのはセンナケリブ王の時代で、その後ここに人々は一〇〇〇年位生活していたので、考古学的には文化が重複しています。現在でも市の大通りに沿って城壁が連なっております。この遺跡の門はサカイヤの門、ディルガール門、アダト門などが修復されていて、とくにディルガール門の上部に取付けられた玄武岩のレリーフは、造営当時のものであり棺を運ぶ葬儀作業者の列は、採用されていた技術の片鱗をよく物語っています。

なおアッシリアの歴史を語るとき、必ず悪逆残忍の代表のような形容詞が、次々と飛び出してくるのは一体何故だろうかと気になりましたので、私は遺跡を注意して見て廻ったのですが、妙なことからその点に一抹の疑問を感じました。それはアッシリアの統治者をして特別に残虐暴戻と定義づける根拠となった、石板レリーフの取付けられていた遺構でのことです。

見る人をして目を覆わしめるというような描写の代表には、このニムルードの中央宮殿の捕虜を串刺しにしている城攻めの様子と、ニネヴェ南西宮殿で発見されたティル・トゥーバの戦場（ウライ川の戦い）（前六六〇―六五〇）を現し、乱戦の中でスーサの辺りにあったエラムの国王テウンマンを斬首する場面や、その兵達の首を切断して得意気に振りかざしている、アッシリア兵の図などが知られております。古代の戦闘の凄惨な様相をよく示しております。

その他の王宮遺跡でもこうした激烈な戦闘場面や、大王の剛勇ぶりを示す図柄のレリーフが沢山あります。ニネヴェ城の崩れた遺構を見て廻っていたとき、ふとこれらのレリーフが王座に

続く接見のための控えの間や、それに隣接する辺りの壁を飾っているものばかりなのに気がつきました。ひどい荒れ様ですが他の部屋では余り見掛けません。ニムルードの遺跡でも同様でした。誇張した表現でしょう。

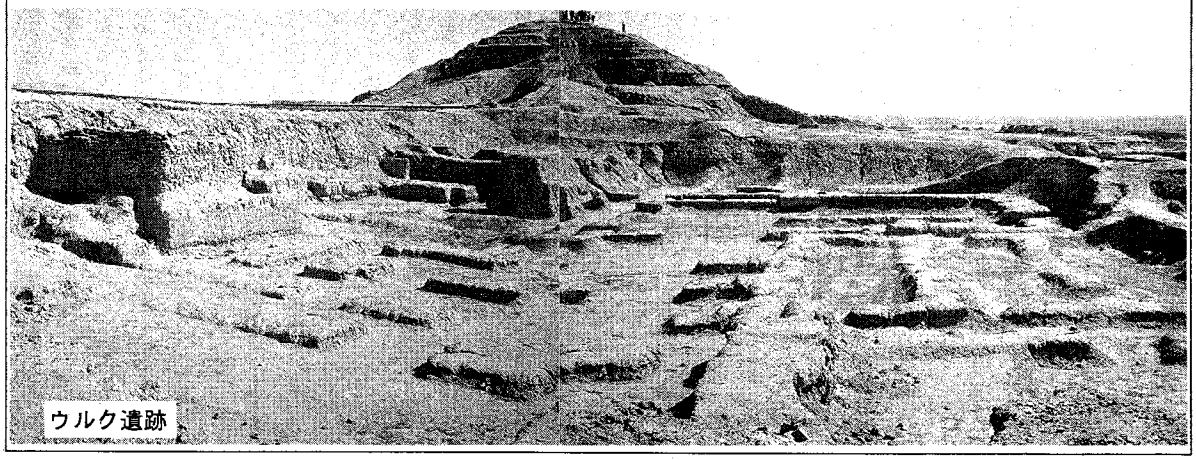
これは、従属民族や周辺国家の首脳や貴族階級の本人、それに代理者、つまり隷属や貢納や誓約などのために出頭させられ、この大城郭の中に参集させられた者たちが、嫌でもこの残忍な戦闘、虜囚、処刑、略奪など、弱者にとっては止めどの無い戦慄をもよおしてくるような絵の前で、王の出座までの時間をじっと待っていなければならなかったのです。この待ち時間の間に人々はこれから会う閻魔大王のような凄い人物に、自分は一人の亡者のような立場で、生殺与奪の権を握られていることを、改めて強く思い知らされたことでしょう。

これは茫漠たる統治地域を手にした絶体権力者の王が、古代国家の政策とは言え表現が余りに短絡的と言えますけれども、己れの力を誇示する手段なのです。これを見せることによって屈服した周辺民族国家の上層部を畏怖させ、反抗してみても所詮蟷螂の斧であることを自覚させ、広大な領土内で叛逆の続発することを防止して、占領地の管理をしやすくするために考え出された、最上とも言える舞台装置だったのではないでしょうか。この壁画には各種の武器類が出てきます。しかしこれが青銅なのか鉄製なのかはケースバイケースで、判断はむずかしいところです。

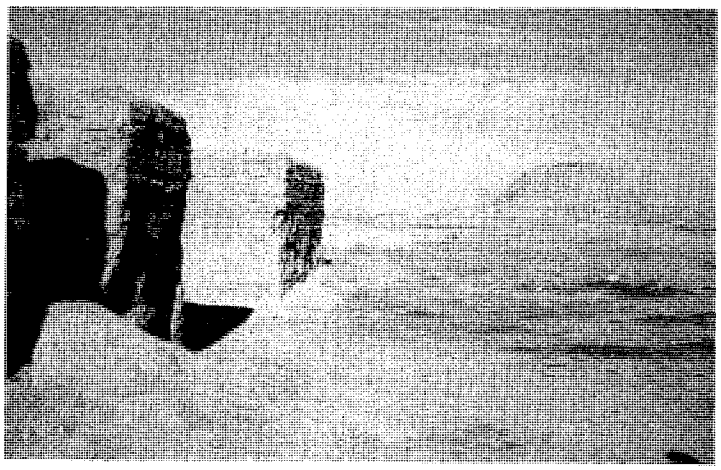
さて次に強豪アッシリアの戦力のポテンシャルエネルギーともなったと考えられてきた、鉄を大量に備蓄していたとも言えるコルサバードの遺跡（写真⑥）です。古代にはドゥルーシャルッキンと呼ばれました。御存知のサルゴンⅡ世王が王城の地として築城したところです。しかし紀元前七一〇年から僅か五年間で幕を閉じています。建設準備段階などを考慮しますと、恐らく完成しないうちに工事中止になったのではないでしょうか。何故こんな壮大な無駄をやったのか。歴史上のミステリーとも言われています。私は当時ケルマンシャー方面から西北へと、続々移ってきたメディア人に関係があるのではないかと思っています。

現在は大部分が埋め戻されていて、牧草も生えないような荒蕪地や一部農地となっており、小形のブルドーザを使って一角が均されておりました。観光地といえる部分は二割も無く、そこには王宮や神殿の跡があり前庭部階段下の所に、楔形をしたアッシリア文字の石碑が砂に埋もれて、一寸とだけ首を出していました。ここの発掘遺跡では有翼人面牡牛など大量のものが出ましたが、惜しくも輸送中下流のクルナで、水没の難にあっています。

さて鉄が大量に出土したと言う倉庫ですが、その位置は今申しました内城区から、一、三～四〇〇メートル南のところです。観光で立ち入る場所から見ますと割と近くに見えますが、砂の丘を歩いてみますとかなりの距離があります。普通はこんな所に行く人はまずありません。観光省の役人もあきれ返っておりました。市壁の部分にそって行くと少し凸出したような感じの所で、不完全な埋戻しなので建屋のあった部分は大部凸凹になっています。大小で六～七棟分あるでしょうか、その中で鉄を収納していたと言われている倉庫は『鉄の歴史』では間口二一・六メートル、奥行五メートルで、高さが一・四メートルとなっていますが、この高さは壁体が崩落しているし、人間の出入を考慮しますと二メートル位はあったでしょう。それにしても日干煉瓦の厚みなども考えますと、ここに一六〇トンの鉄材が収納されていたとは考えられないのです。この数値は理論的にそこに一杯つまっていたとした（巾2.2×奥行4.6×高さ2 m＝容積20.24これに×比重7.6で158トン）と計算



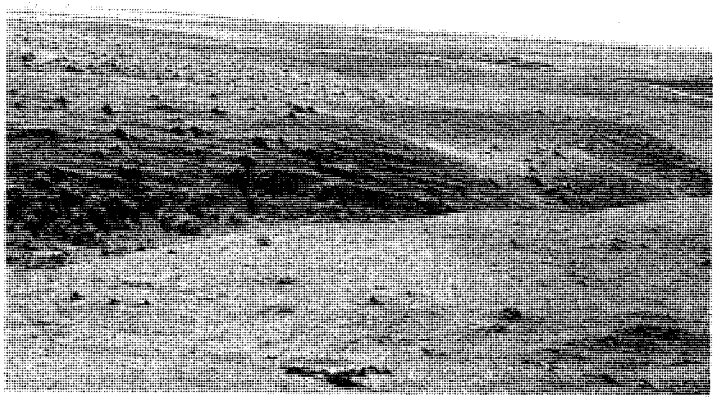
ウルク遺跡



F

アッシュール遺跡 ▶

コルサバード遺跡
鉄が備蓄されていた倉庫のあった付近 ▼



G

に四〜五〇人も子供が集ってきて「野蛮爺・ペン・ソーラ」の大合唱になりました。野蛮爺とはジャパニーズの訛りでした。

以上鉄に関連のあるイラクの遺跡を中心に概略をお話いたしましたが、これらの遺跡の出土品の幾つかは、バクダードやモスールの博物館にもあります。しかし爆撃で破損亡失することを恐れたイラク文化人の手で、これらの収蔵品は総べて何処かへ持ち出されて、地中に埋蔵されているとの説明もありました。極く少量だけで展示をしていましたが、とても一般に公開することは無理で、展観できるようにするためには準備期間が五年掛るとのことでした。

半成品の入手と工人の確保

このように見てきますと、南はもちろん北部でも、鉄で武装されて鬼をも拉ぐ軍団と言われたアッシリアが、本国内には肝心の鉄鉱石の産地を持っておらず、鉄製武器の確保充足にはかなりの苦心を払っていたという、弁慶の泣き所をもつ国であったことが判ります。例えばティグリス河の川砂を採集して調べてみましたが、一番製鉄で扱い易いとされる川砂鉄が、全くと言ってよいほど含まれてはおりませんでした。

それでは重武装の侵攻軍はどのようにして編成されたのでしょう。私は年代にもよりますでしょうが、完全武装の兵士はそんなにいなかったと思います。当初は大国化に伴なう兵士の増大に金属が不足して、武器が行き渡らなかったことが考えられます。粘土板文書の記載ですと、確かにダマスカスから大量に奪ったことが判ります。しかしそれでも全軍に十分な武器を持たせるには至らなかったはずです。どうも北側の山岳地帯の産地から遠征のたびに纏まった量の略奪をしていたようです。鍛冶工は寸法やデザインがありますから連行したのでしょうが、いずれにしてもその素材は力にまかせての略奪か貢納物だったのです。

そうした恵まれた経済基盤を引きついていたウラルトウは、前九世紀頃から抬頭を始めてきて、年を経るに従って徐々に隆盛を遂げたのです。サルドゥリ（在位前七六〇〜前七三〇）Ⅱ世王の時代に最盛期を迎えましたが、アッシリアのティグラトピレセルⅢ世王、さらに豪勇と伝えられたサルゴンⅡ世王（在位前七二一―七〇五）などによって、執拗なまでの侵略攻撃を受けてしまい、前八世紀の末には大幅に周辺の国土を失って、急速に衰退していったものと言われています。しかしその後も細々でも命脈を保ち続け、前六世紀に入ってメディアによって完全に滅亡させられました。

アッシリアの行なったウラルトウに対するこのような攻撃は、国力を傾注しての国策的戦略と想像することができますが、ムサシル（リサー）攻略（イェ西北部、前七三〇―七一〇）に関する粘土板文書の記述などからは、この戦いは

されたのではないでしょうか。それでなければ他の場所のものを合算したのでしょう。

半成品は大きな鰹節形をしていて、大小不揃でした。フランスのルーブル博物館には水没の難を、運良く免れたものが保管されているとのことです。この遺跡は日本人の来るのがまだ珍らしいらしく、五分か十分の間

前号訂正　1頁3段8行　鍛え（精練）割鉄とした

アッシリアの一方的な勝利だったと誤解され易いのです。しかし前記のようにウラルトウという国は、それほど脆弱なものでは無かったようです。このウラルトウの領土内の鉄産地が、鉄の製錬をし得なかったアッシリアの標的となり、鉄製武器を賄うための半成品乃至武具の、有力な供給源になっていたことは間違いの無いところです。

ウラルトウのアルギシュテイⅠ世（在位前七八一～七六〇）やサルドウリⅡ世（在位前七六〇～七三〇）王の奉献した、青銅製の兜や盾を見ても、この地域の金属工芸の水準がいかに高かったかが判ります。ここでは鉄器や武器の倉庫までも発見されております。（ソ連邦南部のカルミル・ブルで発掘）アッシリアの垂涎措く能はざる土地だったはずです。

この辺りで私が遺跡を見て廻りましたのは、前一世紀のアルメニア王の居城跡に設けられたガルニ神殿（太陽神信仰の跡、現遺跡は一世紀の建築）と、ヴァン城を中心としてトルコ・ロシア（アルメニア共和国）領の国境付近、さらに新しいものですが、七世紀に建設されたズワルノーツ教会遺跡程度であり、エプリシメ教会は世界最古のキリスト教寺院と言われているものの、旧態は全くなく十七世紀のものに過ぎませんでした。このコースを歩いていて、ヴァン湖北岸のアハラットの付近や、さらに奥地のアニ遺跡など、遠征の対象地で結構豊富な砂鉄の産出を目にしました。

一方アッシリア東寄りのイラン西北部、つまりウルミエ湖の周辺地域は、初めミタンニ領であり後にアッシリア領に変わった、変転の繰り返えされていた所ですが、そこにはゲオイテペやハサンルに加えて、デインカ・テペ、アグラブ・テペ、ハフトンバン・テペ、バスタムなどがみられ、もう少し南ではジブイエ（マンナイの領土だった）などの古い鉄器文化包含遺跡があります。これも常にメディア系の種族が跋扈していた地点ですが、アッシリアからの遠征地としてはそれほど遠い処ではありません。これらの地の鉄器も当然のように鹵獲したでしょう。ここのものは陸路を車による輸送です。それに反して、一方のウラルトウ側はティグリス・ユーフラテス両河を船を使っての輸送になりますが、距離は二五〇キロから三〇〇キロメートルですから、この程度なら楽に搬送してくることができます。捕囚奴隷を輸送労働に使えば一挙両得です。しかし捕囚工人はこれら北側の者より、南のイスラエルやユダの方が温和で抵抗が少なかったのかも知れません。（未完）

柴栗句会六月作品

棟梁の墨引く処作や目の涼し　淺野　としを
生き得たりすくなき髪を洗いけり　糸原古志
河鹿（かじか）鳴く満願近き旅の宿　小川敏子
髪洗う一人の刻を欲しいまま　加納信子
在りし日の想いをつなぐグミ熟る　楠　房子
海猫の巣立つ岬よ去り難し　高木白虹
せめて今気持ち切り変へ髪洗ふ　中澤美紀子
延暦寺琵琶湖眼下に夏霞　新出谷一華
双蝶のもつれもつれて空の青　錦織富江
リハビリの顔穏やかに梅雨の庭　峯石美代子
花水木トロッコ列車のぼり来る　渡部夕峰

うつぎの花に　簸の上短歌会

朴の葉につつむお萩に在りし日の母恋ひにけり白き花咲く　諸角長子
手洗所の鏡に道を行く人をしばし見てをり意味はなけれど　常盤はるまさ
減反の割当てらるるを若き農当然の如くして寄合ひ終る　仝人
逝きし娘は不如帰となりて帰りしや我が家の上をしきり啼きつつ　野村節子
今夕は雨との予報にブロッコリーピーマン植ゑ急ぐ汗ふきにつつ　仝人
花まつり一月おくれの山の寺嫗らのみにて甘茶をまつる　永井弥生
冴えざえと莢豌豆の味噌汁にひとりの朝餉も慣れて久しき　仝人
うつぎの花散らして雨の降る日暮れ明日に旅ゆく北国想ひぬ　安部夕波

斐の上川柳六月抄

サッチーの顔はもういやでも見たい　児玉哲呂
すずめ五時わたしのさえずり八時から　田部都
山里は猪狸のレストラン　田中有樹絵
これよりも他に芸なく米作る　石原冬明
涙出しドラマの人になっている　児玉えみ
邪魔な石素直によけて水流れ　松田牛歩
小さくて安くて軽い土産にし　松浦亜以
抜歯しておかゆ生活二週間　安部正子
風は初夏足を伸して話し合い　真綿よし子
朝起きて手足さすって第一歩　渡部ミツコ
順調にリハビリ進み立ってみせ　藤原千代子
嫁さんが姑におとらぬ楽天下　松浦久寿
横向いて聞かぬふりして耳を立て　田中芳春

会員頒布一部四〇〇円／〒六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇三八ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座　松江〇一四一〇一九一一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第293号（10月号）
1999.10.9（M132.T88.S74）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

「概略」メソポタミアの鉄文化（下）

特別寄稿　窪田蔵郎



モスールで会った民俗衣装のクルド人男性。黒っぽい上衣に帯。ダブダブのズボン。頭には黒白の格子縞のターバンを被る。

クルド人と鉄の文字

さてアッシリア領土の北東部などはクルド人が多かったのですが、年々北へと移ってしまって見掛けなくなりました。イラン、イラク、トルコなどの国境に多く、国家無き貧しい民族になっています。約五〇〇万人が居住といいますが、仲々会うことができず、やっと会えて鉄については鉄に関する限り、アッシリア語のアッシュームの変化したものでは無いかという気がしております。イラク人は鉄はハデードと言っており、シリアやヨルダンと同じ発音で、元を辿れば皆セム系だからアラビア語でした。

目の大きな神と人

ついての言葉や文字を聞くことができました。しかし辞書の発音記号とは微妙に異なっていて、発音は何度聞いてもアースンであり、トルコ東部で聞いたアディルとも違っておりました。

文字は下記の通りでした。この言葉について学者の間で、古代ペルシャ語との間に類縁関係の有無が、論じられております。しかし私

南部メソポタミアの遺跡で発掘された人物あるいは神の像には、目の異常に大きなものが少なくありません。神殿への奉納用像に多いようですが、バクダットのちょっと西側ではエシュヌンナの杯を持った男子像、それより少し南側ではハファージェの礼拝者像、ラガシュ出土の禿鷹の碑と呼ばれる兵士群像もそうです。それによく知られている、ウル王墓から出土したスタンダードと呼ばれている木板に象嵌された群像の絵、どれもみな男女にかかわらず、非常に目が大きいのです。

「そのようなことは在り得ないことで、きっと造形の際にデフォルメされたんだろう」と私は思っていました。しかし、今回ウルク遺跡などを歩いていて出会った人々は、長年のあいだ遺伝し続けてきたものなのか、一様に目が大きかったのです。平均して松島トモ子さん位の明眸皓歯な人たちと思ったら良いでしょう。セム系以外の人とはちょっと考えられないんですが、何民族の子孫なのでしょうか。北部で会った人たちにはもうそうした特徴はみられませんでた。バクダッド南側のウカイアやシリア北東部のブラックのテルにあった神殿は、余程目を意識した宗教であったと見える。その神像はアラバスターの稚拙な加工であるが、目の部分だけが異常にデホルムされていた。

クルド人とシャーナメ

イランで10世紀頃に完成した『シャーナメ』王の書は、以前に「やまたのおろち」（八股遠呂智）の日本神話と一脈通じるものがあると述べたことがありますが、このペルシャ神話の中にクルド人に関連した面白い話が出てきます。それはザッハーク蛇王に捕らえられていた、ジャムシード王の2人の姫の勇敢な行動です。王の肩に生えている2ひきの蛇の世話係をさせられ、毎日、人間の脳味噌を食べさせていたのですが、知恵を絞ってヒツジの脳味噌に代えて何人もの人たちの命を助け山の中に逃したのです。その子孫がさらに北方へと移り住むんで増加し、今日のクルド人になったという話です。

それはイランのことでイラクは関知しないと言えばそれまでですが、このシャーナメの物語の境域は、西はトルコ、東はインドや中国、南はパレスチナに、北はアフガニスタンにまでも及んでいますので、メディア族との混血など後世の複雑な要素も配慮しますと、まったく関係ないではすまされない話でしょう。

銅4kgイコール土地三〇〇〇坪

この粘土板の文書は紀元前二五〇〇年頃のもので、南イラクのファラ遺跡で掘り出された土地売買の契約書です。釘をばら撒いたのか、鶏の足跡のような文字で、銅四kgと土地三一七五坪を交換したときのものですが、売り主や立会人に対するお礼からこの文書を運ぶ人間の賃金まで書いています。この当時の金属の値段をおおざっぱに銅一トンを二億円としても、土地の方は代金分が銅四kgですから八〇万円、従って八〇万円を三一七五坪で割ると一坪が二五一円。日本とは価値観がちがいますし、それも古代のことですからもちろん正確とはいえません。それに土地は住宅地ではなく、耕地といっても少し耕作できる程度か、あるいは羊を飼うような不毛の場所でしょうから日本と同列にはなりません。しかし金属

「概略」メソポタミアの鉄文化（下）・元禄時代の奥出雲②・俳句・川柳・短歌

前号訂正　3頁　地図「イラク略図」の下を訂正下さい　●古代の遺跡　○現代の町　と

がいかに高い値段の物だったかが、この一例でも想像できると思います。現在でも郊外へ行けば羊一匹の値段の方が土地一坪よりずっと高いのです。鉄は銅の半値とみてよいでしょう。

バグダットの市街

観光で参りましてもバグダットの市街はほぼ見れますし、ここで余り見掛けませんがアラジンのランプを売っている場合があり、市の中心にはアリババと四〇人の盗賊の噴水があります。経済制裁下とは思えない明るい雰囲気でした。夜の公園にはむき出しですが、青や赤などの蛍光灯がついていました。

経済制裁の方はかなりキックて薬品が一番困っているようです。食物は輸入品が乏しいですが、鶏羊の肉、ピーマン玉ねぎ、小麦粉のパン位はあります。メロンとティグリス川の鯉や草魚の焙り焼きなどは珍味です。ただ決してムダにはしませんで、日本ではちょっと考えられないことですが、ディジと言う町の食堂で、客の食べ残しのピーマンや玉ねぎを集めて、バケツの水を掛けて再度盛り付けて客に出していました。ホテルにはバクダットの高級ホテル以外、石鹸、チリ紙、歯ブラシはもちろん、シーツもスリッパもありません、これらは持って移動しました。また途中で何度か会った、演習に行くイラク軍兵士達が、空腹そうな顔をしてトラックに揺られていたのは哀れでした。

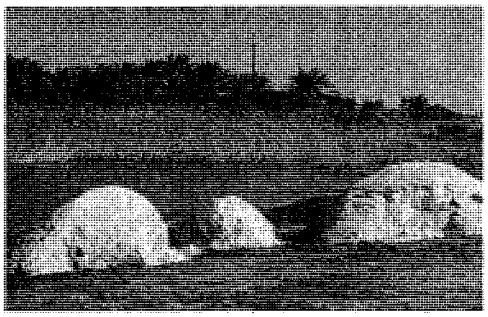
ガソリン一リットルが正価では四円か四円五〇銭といった所ですが、実際に買いに行ってみますと、四六人乗りのバスを満タンにしても三〇〇円。この代金では小さなコッペパンが一六個買えるだけとのことでした。

夜の部・昔と今と

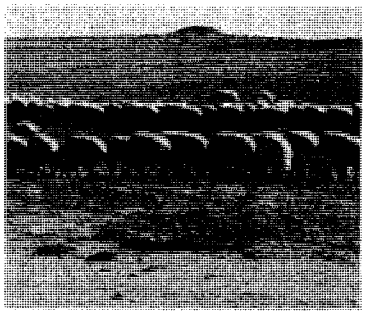
最後に男性にとって秘やかな興味のある、この地の売春につ



▶コルサバード宮殿跡にて筆者。この約一㎞余り後に鉄塊備蓄の倉庫跡。



右　シャルマネセル三世王の砦（城塞）（ニムルド南部）



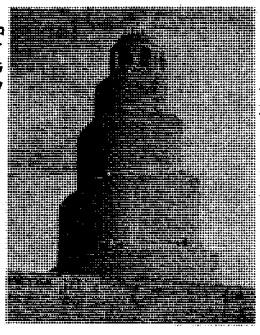
左　低湿地から滲み出た塩（バスラ北部）こんな土地では治金に不向きだ。

いてほんのちょっとだけ述べますと、あのヘロドトスが『歴史』に奇妙なことを書いております。それはバビロンでは、ここの若い婦人は一生に一度は神殿の狭い回廊に集められて、大勢で座っていて、ここを通る見知らぬ男に買われて身を任せなければならない、そんな仕来たりがあったというのです。

これは富や権力を持っている人の婦人でも、例外扱いはなかったようで女中を連れて馬車で来た人もあったと言われています。また女には男を選ぶ権利が無かったそうです。男は気にいった女の膝に定められた金額の金を置いて、女と別室に行くがその金は神殿の収入になり、人数が多いので上がりは膨大な額に達していました。なお男がその女をいくら気にいっても〈もう一度〉と言うのは出来ない仕組みだったそうです。

神殿が体裁よく強制的な管理売春をやっていた訳です。生け贄の女性ほどの犠牲ではないけれども、金儲けの方法としては旨く考えたものです。こうしたイシュタール神への奉仕の神事？が、やがて享楽の行事へと化していったのでしょう。この中から後に職業的な売春婦が現れてきました。『新約聖書』ヨハネ黙示録でバビロンを指して「淫婦どもの館」と記させたのはこうしたことを示していると思います。

現在ではどうかと言いますと、近年はイラクにはこの種の専業者はいなかったようですが、空襲やロケット砲で働き手を失った若い未亡人などが喰うに困って、サマラから北にかけての街道筋で、ホテルが無いので森陰でやっているようです。エイズ検査が厳重なのでその方の心配は薄いそうです。客は石油の仲買にタンクローリーでやってくる、金回りの良いトルコ人達が主で、一リットル二〇円程度で仕入れて帰ると五〇円位で売れるので小遣いは十分だそうです。



中イラク
サマラ（シモズータ）の螺旋塔
高さ五十一m
バベルの塔は九十数mと推定されている。

元禄時代の奥出雲②

―松江藩主3代　松平綱近

延宝3年1675　5月家督を相続したが、このころ泰平が続いて士風が大いに頽廃していた。（以下月は旧暦である）

延宝7年、倉崎権兵衛が松江に来り、楽山焼をはじめる。

延宝8年は霖雨（長雨）が続き世の中は大いに悪かった。この年松江藩士佐藤平兵衛は、横田町郡家（仁多郡の郡役所、今の六日市　鉄屋須山から昭和電気店まで）に蟄居を命ぜられたが、挙動おさまらず、三年後の貞享元年、吉田屋で捕えられ、子3人とともに死を賜った。（詳細は本誌205号にあり）

天和2年1681　は中の上の年であったが、天候は悪るく百姓で難儀するものが多かった。（年貢は収穫の6割強）幕府の巡見使高木忠左衛門他2名、伯耆より横田に入り、横田町の富田屋（現田村）、吉田屋（現松浦）・夷屋に泊る。

天和3年は豊作で1俵8～10匁となる（1斗代銀5匁だったのが）

貞享元年1684　母里藩が分封する。

この年の世の中は上上上。

この頃鉄師桜井氏は大鍛冶職人菊市の製品（割鉄）が良質のため評判をとったので、「菊市印」として後世まで販路を拡めた。その後菊市は亀次と改名した。その子孫は明治20年になって、三次に移り鋸鍛冶を業とした。

貞享2年、中の上上という。三成の川方船の運行止まる。

貞享3年は中の下の年。藩主この年、世の頽廃に対して、遂に政令を出して戒めることになった。要点は、「仏法を重んじ、忠孝を勉め、文学・武芸を怠慢する勿れ。武器は分に応じた質素なものを求め、馬を持つものは形状の美悪をとらず用に適するものを選ぶ。常に志をこうしたことに注ぐものに、それを賞することは吝まない。良くないことを行うものには直言して隠してはならない。上役に対して媚びへつらうは士の道ではない。造り話を流布する罪も重い。老人小人ともに小動物を可愛がり、鳥も飼ってはならない。遊び廻るなかれ。諸士の女は琴三絃歌牌など分を失わなければ学んでよい。好色に耽る勿れ。妾を買うは無礼の至で、一家の不和や窮乏はここに起る故慎しめ。博奕は堅く禁ずる。囲碁将棋もかけて行うことはならない。これらを犯す者は目附をして密にしらべさせて処罰する。」で、当時の士風を知ることができる。

8月3日より6日に至まで大風雨があり21,400余石の減収の上に、家屋・堤防・道路の破壊するものも多かった。

横田の岩屋寺の本尊十一面観音の開帳が行われ、参詣者で賑った。

この年から神門郡の大梶七兵衛は神西湖に排水路を設け、沼地を水田として、2,000石の増収を得ることに成功した。また藩は漆・桑・楮・茶の栽培を奨励しはじめた。

貞享4年、大梶七兵衛は神門郡の高瀬川を完成させた。藩は製鉄業者は免許者にのみ限り、製品は藩が買上げることゝした。横田の馬場八幡宮の大鳥居を、鉄師卜蔵甚兵衛が建立した（現存）。

元禄元年1688　6月3日より19日に至るまで大雨洪水が続き、42,000余石の減収となり、田圃・民家の破壊するもの甚だ多かった。11月3日白潟の街が失火によって200余戸が焼失した。

現在も生きている横田33番観音御詠歌を五反田村六兵衛が興行した。斐伊川の川船が三成まで通うようになる。66町村の庄屋を5組に分け、5人の大庄屋が任命される（のち下郡・奥頭へと移行）

元禄2年　この年は大悪の年となる。長雨が続き、秋には台風が吹き、雪は少しも降らず渇水となる。

この年松江藩家老の村松将監と平賀縫殿との論争があり両成敗となる。（詳細本誌205号にあり）

国中の町での酒造業は許可制となり、当郡内では次の5家であった。

三成町杠甚七、大馬木村湯の廻、横田町富田屋、亀嵩町伊豆屋、上阿井町可部屋

元禄3年　この年は中で大吉。夏大日照、大日焼で豊年。この年より三成に川方役所再開。

元禄4年　6月1日より3日まで大雨そして洪水のため、百姓で困るもの多し。

近世企業たたらの鈩場の送風に天秤吹子が設けられ、操業が一段と本格的になる。

元禄5年　春は長雨、5月も雨、稲悪し。10月28日雪積る。大雪庭先で5尺。

元禄6年　上阿井村の「**木地屋仇討**」事件。

上阿井村に長兵衛という木器を作る者がいた。以前、七郎兵衛と土地争いをしたが村中の父老が仲に入って和解していた。さる日材料の木材を求めて山に入ったが、七郎兵衛も従って行った。ところが暮れになって七郎兵衛が独り家に帰った。長兵衛には五兵衛・三助・七兵衛の3子があったが、五兵衛は父の帰らないのを不審に思い、山に入ったが出合うことなく帰った。翌日再び尋ねてゆくと、林の中で倒れており、首は切られて喉の皮のみがつながっていた。五兵衛は弟2人と仇を討たんと決意したが、伯父・従弟が知ってこれを中止させたが、志は益々固くなり、しかも家ますます貧しく、米を村中に借りて生活をたてる有様であっ

た。負債は牛5頭と山宅園林で返しこの際仇を討つ決心を強めた。ある日、三助は七郎兵衛が独り山に向うのを見て、背後より呼びとめ、木刀を振って殺した。時にこの年の5月4日、父の死から17年目のことであった。3人は捕らえられて松江に送られ、詰問に応じてこれまでの話をした。それを役人は江戸にあった藩主に具申してその判断を仰いだところ、藩主は厚くこれを賞すべきと伝えて来たので、翌年から褒美として、米10俵宛を毎年下さることとなった。

元禄7年 中の年。春夏降雨多く、11月より降雪12月は大雪。稲作郡中3,600石の減収。

元禄8年 早稲よろしく、晩稲悪るし。

5月大日照のため、横田村・稲田村・原口村の百姓と、船通山所有の鉄師卜蔵氏との間に論争がはじまったが、雨が降りはじめ植付けが出来てことなく済んだ。

また八川村の庄屋と百姓との間に論争があり、百姓3人は追放となり、庄屋も辞めて後任は神門郡から来任した。

元禄9年 1695 この年より郡中の庄屋給が定められた。家老棚橋玄藩は罪により、横田の岩屋寺に蟄居を命ぜられる。

番人10人が参詣の者や、松江一門の来山を拒んだ。翌年6月20日こゝを脱して上方に向った。

その翌年伏見にて捕えられ、松江に護送され切腹させられた。この年は10月より雪降りやまず、2月まで大雪となった。

元禄10年 横田の原口天満宮遷宮。江戸は大火大地震に襲われる。5～6月の土用中降雨多く米不作。

本文は次の文書によって執筆した。

。鉄師—杠・卜蔵・絲原・桜井家所蔵文書

。『古代よりの聴書（下）』絲原家所蔵

。『出雲私史』『仁多郡略談』ほか。

（横田史談会　高橋一郎）

盆あとさき　簸の上短歌会

正札のままの反物残りゐて装ふことなき妻なりしなり　常盤　はるまさ

いささかは和裁に長けし妻なりしに和服地は箪笥に手つかずにあり　仝　人

穂肥播きて汗を拭きゐる田の畦に蜩の声しきりにきこゆ　諸角長子

採りたての野菜ゆたかに膳に盛り胡瓜の馬も控えて盂蘭盆　永井弥生

ひたひたと親しき者の足音を待つごと灯籠に灯を入れるなり　仝　人

写経するわが傍を蝿一つそれさへ吾娘かと撲つをためらふ　野村節子

連れ立ちてこの火の明りで帰へりませ盆果てし夕べ送り火を焚く　仝　人

遠雷を聞きつつ佇む夕庭に咲きしばかりの夕顔匂ふ　安部夕波

柴栗句会九月作品

言いすぎて自戒に黙す萩の雨　浅野としお

虫時雨闇ふっくらと広がりぬ　糸原古志

花芒一輛気道車かたむけり　恩田和美

秋の蝉声をかぎりの別れ告げ　小川敏子

晩夏光遠き日握手の人も老い　加納信子

二人っ児残暑を握る四つの掌　楠　房子

内陣の法灯暗し虫の声　高木白虹

萩こぼれ独りはひとり雲流れ　中澤美紀子

蜩や夏は果てしと告げて去り　新出谷一華

百歳の笑顔豊かに敬老日　錦織富江

あるや無しの風にささやく秋桜　峯石美代子

こおろぎの闇に響くか拍子木音　渡部周行

きのうとは違う揺れあり秋櫻　渡部夕峰

斐の上川柳八月の句

わだかまりとけて一日嬉しい日　松浦久寿

そううまく水に流せぬこともある　児玉哲呂

重たいが可愛いい孫は軽く抱く　渡部ミツコ

人工の関節もらい生きかえる　藤原のぼる

盆明けて二人の食事あり合わせ　松浦亜以

この暑さ汗して先祖供養する　真綿よし子

術中のランプがともり不安増す　藤原千代子

風もない音もない盆昼さがり　田中有樹絵

教え子に引率される老人会　児玉えみ

不満思う時に感謝は棚の上　田部都

初の盆花は山辺のおみなえし　足立玉恵

独り居も盆は十人揃います　安部正子

早朝の散歩がてらに句をひねる　田中芳春

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　電話・電送兼用　〇八五四—五二—〇一九一）　振替口座　松江〇一四一〇—九—一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第294号（11月号）
1999.11.9（M132.T88.S74）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

元禄時代の奥出雲③

―松江藩主綱近から吉透へ

（仁多郡の下郡役渋川勘右ヱ門・下阿井竹ノ内）

元禄11年 1697

東海道12ヶ国、関東の安房・下総・常陸の海岸に大津波来襲。

当地方にも大風吹く。

仝13年 1699

横田の岩屋寺本尊十一面観音開帳。30年来の豊作と予想していたところ。大風のため作柄悪し。

神門郡上古志村の大梶七兵ヱ、出雲大川から高瀬川に水を引く工事を完成し、水田1町2反歩増加する。6月27日～7月20日、大雨続きで宍道湖6尺増水、周辺の平地にても3~4尺も上るところがあって、3360余人の漂民がでて救う。8月27日大雨にて湖水1丈2尺、平地5,6～8,9尺増水。50人溺死し、人家415戸漂流し、堤防8万尺潰れ、米84,294石減収となる。

元禄14年 1700

正月朔日　日蝕。3月17日雪降り春中雨降り続く。4月15日より大日照り続くかと思うと、5月1日大雹ふり、翌日大雪となり、7日より雨となり変化が激しかった。

7月20日、京都287ヶ所に落雷、人家240軒焼け、40～50人死す。

御所内紫宸殿や、上下賀茂大明神2社にも落雷あり。この年光りもの西から東へ通ったと噂さあり、不吉のしるし。当地方10月雪2尺積る。やがて消えると冬は少しも降らず。

この年3月14日、浅野内匠守長矩、吉良上野小将に切り懸る。

元禄15年 1702

天満天神さんの800年、各地で神事あり。6月28日～7月1日大雨洪水、平野部田地損失多し。

7月29日大風。8月27～28日大雨で田畑と堤防潰れる。簸川郡では3ヶ所土手切れて流れ、民家を押し流す。また飯石郡の熊谷土手が切れて、この普請に仁多郡より庄屋3人与頭1人と6,000人役が出かける。「午の洪水」と言う。

4月、長門の萩藩士の馬来氏が当地に来り、馬木城最後の城主馬来出羽守道綱を、5代目の孫が111年振りにまつった。この時八川村の長兵ヱという者、9寸5分の小脇差を持ち来たり、これに1両で売った。また滞在中馬来殿の火葬場・墓所が畑の中にあったが、畑主が広いといって廻りを切立てたところ、ギャッと一声叫んで即死したという。馬来殿の霊魂の仕業という。

8月1日洪水あり、29年前の洪水に似るという。三成川で3尺あふれる。八川村の丹波関96間上流までできる。（庄屋安部権兵ヱ）

この年の出雲国内の減収は84,294石という。

元禄16年 1611

2月4日、大石内蔵之助ら47人切腹する。

当地の春夏の米の値段銀1匁で8合（4割高）、塩は1升5合。春大霜のため果物のとれる木々は全滅して収穫なし。麦も不作で1俵26匁と高騰したが、用意よきためか飢人はなかった。稲作良しと喜んでいたところ、7月大風21日大雨で無残。8月15日の大雨で追い打ちをかけられさらに減収。湖水は5~6尺、平地でも3尺の増水、方々で土手切れ、家流出203戸、減収30,853石という。61年前の寛永20年に近い不作。その前年は大凶作。8月25日霜降る。9月8日家老有沢土佐当郡内の巡視をする。その夜初雪。10月29日、藩主綱近の病気平癒祈願のため、名代稲葉刑部が国中の神社仏閣残らず参詣。当地の岩屋寺で一泊。11月7日大雪。11月18日、江戸で朝出火、四ツ谷・麻布・駒込の2里四方焼失。

諸大名の上屋敷・中屋敷・下屋敷の多くと寺院焼失。仝月22日大地震あり、江戸から小田原まで家潰れ、その上津波も来襲し死者21万5713人という。江戸城も崩れ前代未聞の災害。死者30万ともいう。仝月29日、小石川の水戸屋敷より出火し、四里四方、諸大名の屋敷も残らず焼失し、江戸市中の⅓が被害をうけた。

宝永元年 1704

藩主綱近隠居し吉秀継ぐ。1月13日、江戸から小田原まで大地震。諸大名屋敷残らず被害をうけ、死者40万という。

当地方春は長雨・大風あり麦出来悪し。3月14日雪1尺積る。

4月中は日照りが続いたが、5～6月雨続きで世の中悪し。

5月25日より横田・大馬木の土手普請行われ、御普請方黒田松右ヱ門他二人と小人100人が在駐する。

8月より藩は鉄方先納銀をしき、8月から翌年3月まで、銀600貫目を鉄師に納めさせ、窮地脱出をはかる。横田の岩屋寺本尊十一面観音33年目の開帳あり。

宝永2年 1705

正月大雪、庭で5~6尺。岩屋寺の大松4本倒れる。4月11日の八十八夜の日、大霜降り麦作だめとなる。柴草みな枯れる。比田村金屋子神社遷宮。5月27日～6月1日の大水で各地に欠所

元禄時代の奥出雲③・一枚の木簡の発見から（上）・川柳・短歌・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

ができる。横田町の六日市・大市の間の土橋落ちる。鉄師先納銀とりやめ。6月25日大風のため早稲だめとなる。続いて大雨大風しきりと来襲、天気良くない。

8月より御札座へ鉄買上制となる。9月2日藩主吉透江戸にて他界。嫡子12才で継ぐ。

松江藩では琉球櫨を移植し、東・西津田他にて栽培する。

宝永3年 1706

雉子の鳴き声近年は聞かなかったが、今年の春は多くの山でも鳴く。

時鳥・鶯の鳴声ここ3年聞かない。横田の下馬では鴨が春雨のころ沢山やってくる。蜻蛉があらわれない。早稲に雀が集まらない。鳴子もない。米も昔は10俵もとれた田も今は漸く7俵位である。

6月、洪水のため平地で2尺の水量となり、24,450石減収という。

8月16日18日、大風のため、家、樹木倒れる。早稲の損失さらに増え、30,000名減収と見込まれる。家4,290戸倒れる。

9月21日、杵築町大火、730戸焼失、棟数1,400軒という。西方に大成屋が出れば、杵築では何かことがあるとの言い伝えがあったが、8月より大星が西に出たところ、この度の大火が発生した。伊勢でも大火があった。

10月11日夜より雪降る。3尺積り、立稲は雪下になったが、その後消えて冬日はよろし。

宝永4年 1707

8月16日、大風雨あり、平地で4尺、溺死2人、家倒壊60軒、米減収5,700余石（仁多郡は2,300余石）、中中の下である。

9月13日、大雨、平地で3尺余、家流出69軒、米17,080余石減収。

10月4日昼、大地震。海辺の国の各地で被害あり。出雲では簸川郡武志土手200間沈み、平地になり杵築・高浜損ずる。地震で倒れた家130戸。

大地震は半時ゆれ、天地鳴動する。大阪・阿波では津波来襲し、家1,060軒つぶれ、6,000軒被害。死者534人、橋流出38、大名屋敷13、船860隻ほか600隻流され、そのほか損害多し。人畜はさらに多い見込み、大小の船も数万隻流出とも伝える。

白鷺が飛来したら波静かになったという。

11月23日、富士山噴火。関八州は暗夜のよう。数ヶ国に砂石飛散する。5～6尺も積るところあり。富士山頂は地震の如くで、12月12日に至って止む。山の近辺は砂石深くて1丈2尺、浅くて5尺6寸も堆積する。江戸近辺では4寸5分～7寸8分のとこもあった。

鉄の専売制止めて私売となる。

宝永5年 1708

1月、富士山噴火のため砂の積った3国（武蔵・駿河・相模）へ救恤のため、国中石高100石につき金2両ずつを送られることになり、2月、仁多郡よりは銀18貫400匁を上納する。

3月8日、京都で大火災あり禁中も焼失。江戸より御普請を当藩にも負され、藩より4万俵、各郷よりあわせて2万俵負担する。

12月29日～1月1日まで大阪で大火あり。

6月より再び藩の鉄方御買鉄となる。大阪の銑の値段が、鉄師の記録に誌される。まだ割鉄は出荷されていない。

松江に蝋細工所設置し。櫨木栽培を奨励する。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳十月の句

松茸はあまり好かぬと無理に言い　児玉哲呂
危機管理経験あればうまくでき　藤原のぼる
穏やかに感謝重ねて我が余生　田部都
きちがいに刃物ライフルミサイル弾　藤田みのる
お互いに酒量が落ちた同窓会　横山まこと
人ごとのように聞いてた目の弱り　松浦亜以
菊作り愛と生きがい咲き始め　真綿よし子
きばといでいのしし秋をにたにたし　児玉えみ
老いて尚多忙で年をとられない　安部正子
買物のレジで気がつく空財布　藤原千代子
さわやかな秋風なのになぜわびし　松浦久寿
束ね髪あれば女か男かな　渡部ミツコ
秋冷えが肌身にしみて夏恋し　田中芳春

秋信　簸の上短歌会

減反は寂しきものよ　山の田に蕎麦・コスモスの花ゆらしつつ　永井弥生
風にのり愛宕囃子の流れ来る　亡夫の旅は今どの辺り　〃
ひそかには出世せよとの子への念ひ　今は元気に暮らせよと言ふ　常盤はるまさ
気にかかることは一つでも減らしたく深夜ハガキを投函したり　〃人
網持ちて孫が追ひたる黄の蝶か　一羽がけふも小径に舞へる　諸角長子
猪は親子連れならむ　防止柵のそばに乱れて足跡多し　〃人
残暑未だ厳しと言ふも吹き過ぎる風爽やかに　野村節子
秋菜を蒔きぬ　広島に慰霊の詠歌上げなむと千羽の鶴を折りて持ち行く　〃人
潮風の香る能登路は夕映えて輪島太鼓の遠くきこゆる　安部夕波

一枚の木簡の発見から（上）

——古代横田の推理の前進

木　簡

文字を墨書した短冊状の木片。古代中国で発生し、日本でも飛鳥時代以降、近世に至るまで紙と併用された。

日本でも古くから使用されていたことは一部に知られていたが、本格的に注目されるようになったのは、1961（昭和36）年、奈良市の平城宮跡で奈良時代の木簡が出土してからである。その後全国各地で発掘による木簡の出土例が増え、現在では飛鳥時代以降、各時代のものが多数確認されている。

多く、用途に応じて孔をあけたり切り込みを入れたり、一方の先をとがらせるなどしている。日本の木簡は中国の漢代以前の木簡などと異り、紙と併用されたのが特色である。紙が貴重だったこともある。

日本の木簡で価値が重視されているのは、ほかに史料の乏しい古代のものである。おもに宮、京や地方官庁の跡から出土し、内容的には中央・地方の行政事務に関する文書・記録や、それらの廃材を利用した習書（手習い）・落書の類、さらに税物に出土している税物の荷札は、地方行政制度や納税制度、地方の物産をうかがわせる貴重な史料といってよい。

地名・貢人名・冠位名・役所名・物品名なども記されている。

出雲国関係の都城跡から出土したものは、藤原京で4枚（うち大原郡と思われるもの1枚）、平城宮で9枚（大原郡来次郷と、上の横田郷）、長屋王家2枚（いずれも大原郡）、二条大路5枚の合計20枚である。

出雲国仁多郡　横田郷前分一籠　天平宝宇［

大量に出土した遺跡では、古代の奈良の飛鳥京跡・藤原宮跡・平城宮跡ほかで、中世では広島県福山市の草戸千軒町遺跡ほかがある。木簡の記載内容は、①記録・文書　②習書・落書　③付札であるが、呪符・卒塔婆も含める場合が少なくない。用材は檜・杉が中心で、竹簡は発見されていない。形は短冊型がつけられた荷札などで占められている。文書・記録は官庁の日常実務についての断片的なものが多いが、律令制の成立過程や律令国家の実体を知るうえに欠かせない史料となっている。

また習書・落書は、木簡を用いて官庁の事務にあたっていた下級の役人たちの、知識や教養を知る手掛りになる。また大量に

5～6世紀（大和の大王）時代の社会体制

手工業の発達にともなって、部民制（中央では大王直属の伴造に率いられる私有民が伴部と呼ばれ、中央・地方の豪族に率いられる私有民が部曲と呼ばれた）は、5世紀中頃（古墳時代後期始め）から成立しはじめた。

伴造――伴（部）
- 軍事担当大伴氏（靭負部　舎人部など）
- 軍事担当物部氏（多くの物部）
- 祭祀担当忌部氏（諸国の忌部）
- その他に土師連（土師部）
  - 玉造部
  - 弓削部

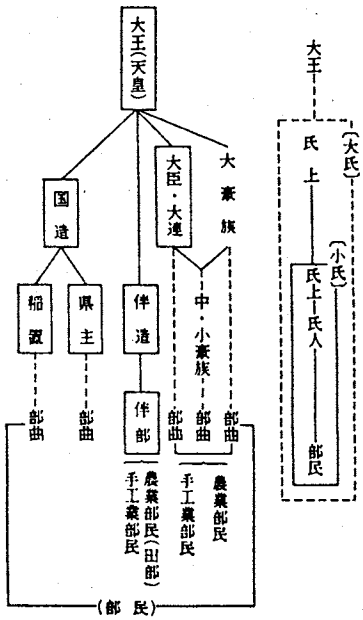
など特殊の手工業によって伴造が部民を従えた。5世紀後半から大陸特に百済からの渡来人（帰化人）によってさらに韓鍛冶部・陶部・錦織部が生れた。

そして鏡作部・楯縫部と6世紀初頭にかけて分化発達し、これらの部民が広く朝廷への貢納品を製作した。この頃から百済の文字、部（民）をあてるようになった。部民は表の伴部（大王の私有民）・部田（中央・地方の豪族の私有民）の総称である。

また帰化人は、手工業ばかりでなく、記録・財政を担当した史部や、王仁の子孫と称する西文首や、阿知使王の子孫という東文首も、そうした仕事にたずさわった。

（王仁は応仁朝に論語や千字文を伝えた百済博士。阿知使王は同じ頃百済170県の民を率いて来朝し機織の術を伝えた）

以上のように中央政府の運営をめぐって部民制が確立してくると、農業支配の上にも部民制が拡大され、すでに大規模な開拓の行われた河内平野には、次々と屯倉が建てられた。本来は倉庫だけをいったが、倉庫・土地・耕作民（田部）を総称するようになり、大王の直割地を意味するようになった。そして現地に田令を派遣して田部の耕作を監督し、収穫物は宮倉に収納した。これは中央が直接設置したものである。のち天皇や皇子の名を冠せた、名代・子代の部民も設けられる。名代は大化前代の皇室の私有民である。子代と同じく国造の民をさいたものである。



子代は天皇が皇子の養育費などをまかなうために、国造の民をさいて設定した。名代部・子代部ともいう。それぞれに屯倉があった。後段において、さらに当地とのかかわりもみる。

中央・地方の豪族の私有地を田荘という。管理・経営方式は屯倉と同じであって、付近の農民を部民として支配しはじめた。（のちこれらの豪族が贖罪によったり、献上したりして屯倉に没収されるものもあった。）

国造・縣主・稲置

大化前代の古代の中央行政官に対して、地方官職として地方で部民及び私有地を有する土着の豪族を国造・縣主として地方の支配組織に組入れ、その支配を確実にした。中には中央から派遣されて土着した者もあった。

世襲されたため朝廷に対する身分の上下を示すものともなった。稲置は最末端の地方官職で、一般には田租の稲の収納を任務とする村落の長とされる。中国の史書『魏志倭人伝』の爾支、同じく『隋書倭国伝』にみえる伊尼翼はこれを中国流に書いたとも考えられるという。稲置も世襲であったらしく、のち天武天皇の時代従来の姓が、壬申の乱で既存の諸氏族の勢力が変動し、役割が果たせなくなったので、天皇だけを姓制から超越させ、皇族に真人を与え以下八色の姓を定めた。

その時稲置は朝臣・宿禰・忌寸・道師・臣・連の次最下位第八級の姓とされた。

身分・格式の確立

このようにして支配組織が整備してくると、諸豪族を氏上として姓を与え、大臣・大連に統割させ、一方地方豪族を国造・縣主に任じた。

中央政権統率下の諸豪族は、氏上――氏神は氏を統率し、家父長的統制権・裁判権・氏の守護神である氏神の祭祀権などを以て、氏人や部民〈部曲〉の統制をしていた――として、臣・連・公・別・造などの姓を与えられた。姓は朝廷における身分・格式をしめして世襲された。とくに臣・連は尊ばれ、最強の豪族が大臣・太連として大王を補佐し国務に当った。その職は世襲された。

臣姓国造にはその地方で大勢力を持ち有力な同族団を形成していたものが多かった。出雲国がその例であった。（太化改新と、以後の律令により廃止され、部民土地の所有も認められず、国造、縣主の実質が失われた。そして新しく国司の下に各郡に郡司が置かれると、国造を優先的に充てることが規定された。一部には――出雲も――律令下の国造となり神祇祭祀の任務にもあたった。そのところで詳しく見ることにする。そして地方においても確固たる地位と勢力は、続いて重視された）

君・公姓の国造は九州・関東・北陸等の遠隔地に多かった。直姓国造は数的に最も多く、大和王権に対して服属が画一的であったためといわれ、屯倉の設置された地方に多い。

国造の下に縣主・稲置が任ぜられた。姓としては君・連・直・首があるが、直より一段低いとされる首の最も多いことは、国造より身分の低かったためであろうという。

柴栗句会十月作品

映るもの影のびやかに秋彼岸　浅野　としお
朝夕の冷えこみ腰をいたわりて　糸原　古志
秋を読む机の上のブロンズ像　恩田　和美
佛壇にあけび二つの静けさよ　小川　敏子
雁わたるデイサービスに夫送る　加納　信子
遠き日の糸繰る祖母や秋彼岸　楠　房子
行きたくも行けぬ哀え菌取り　高木　白虹
苔寺の石蕗の黄の深さかな　中澤　美紀子
予備の鎌腰に差し込み稲を刈る　新出谷　一華
腰おろし話す人の背赤とんぼ　錦織　富江
一ぱいの朝茶で秋の畑に出る　峯石　美代子
鰯雲釣り糸遠く投げにけり　渡部　周行
秋彼岸手に余る程の花もらふ　渡部　夕峰

横田三十三番札所めぐり㉔

第29番　永正庵（永祥寺）



ながき世の竹のそのかみちかひより
正しくここに幾世へぬらん

（写真　会員　佐世川徳雄）

会員頒布一部二〇〇円／〒六九九―一八　島根県仁多郡横田町一〇三ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

296号　一枚の木簡の発見から（3）・辰のとし・短歌・俳句・川柳

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書

第296号（1月号）
2000.1.8（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

古代学に見る横田②

一枚の木簡の発見から③（2の中）

――『出雲国風土記』に見る仁多郡――

変らない解読

1968（昭和43）年刊行の『島根県横田町誌』の分担執筆（古代・中世と近世の一部）をしてから32年を経たが、古代史への姿勢は今も変らない。その後多くの学者・研究者の研究成果が、著作・論文によって発表されているが、資料も増えて補習すればよく、当時の研究者の方々の研究に負うて執筆したのが、当を得ていたとの感を深くしている。

今まで仁多郡の郡司主張品治部は、横田郷に居住して「いたであろう」としていたのが、その後の研究と「一枚の木簡」の出現で「であるとしたい」とする方向に進んだのである。それを述べようとするのがこの連載であるが、まだもう一歩の感が残っている。また「和鉄」の歴史については、考古学的発掘調査の総合的検討を行っても、まだかなり距離があるようである。

これまで2回の記述は、わが国全般の制度や社会の発展を知って、奥出雲の置かれた状況を浮き上がらせようとしたものであるが、本号では風土記の記述の中心となっている地理記述に目を向けて、『横田町誌』の記述とほとんど同じであるが、地図を（2P）傍らに置いて記述したい。

4郷をみる　註　⑥は布勢郷との面積の比較倍数　神社の下の㊤は出雲の大穴持系　㊥は外来系の祭神のことゴチックは格式の高い神祇官社

横田郷⑥△区域―鳥上・横田・（横に長き田）（ありて横田）　八川（大字大谷）（のぞく）の旧村町

△三津池　大穴持に縁のある池　出雲国造新任挨拶で都にて神賀詞奏上の折、ここの水にて身をきよめる。

郡司太領嬢部臣（たちひべの）は郡家のある三処郷に居住していることは明らかである。古墳や出土品なども濃厚にそれを裏付けているし、のち高田北部に、太領神社や高田寺が建立されているから、郡司の地位と所領の安定化がもたらしたものといえる。

大穴持（命）の足跡は、布勢郷・三処郷に伝えられているが横田郷にはないようである。神社も出雲系＝大穴持系の祭神でなく、東の隣国の近くには、吉備津彦を祭る神社があり、北の三処郷の比田社は吉備津彦を祭っている。このルートは大原郡を経て簸川平野多くの郷に結ばれている。古代に於けると勢力扶殖の影を映すものと言われている。

三沢郷には大穴持の子の物語りが伝えられて、そこの三沢社は横田の伊賀多気社とともに他の神社より格式が高く、中央で神祇官社として登録されていた。

出雲国造家（意宇郡大領出雲

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々（りょう）と闇（やみ）をてらせり
その塔のすがたかしこし

むさぼりて厭かぬ渠（かれ）ゆえ
いざこゝに一基をなさん

正しくて愛（めぐ）しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

△神社　伊賀多気社㊥
△郷庁・正倉（年貢収蔵庫）
（のち岩屋寺が建立される）
△刻（せき）　関所のこと。東の国境に常に置かれた。

出雲国仁多郡　横田郷前分一籠
天平宝字［

布勢郷①
△区域―布勢（上三處馬馳）（のぞく）
旧村
△神社　仰支斯里社㊤
△　郷庁

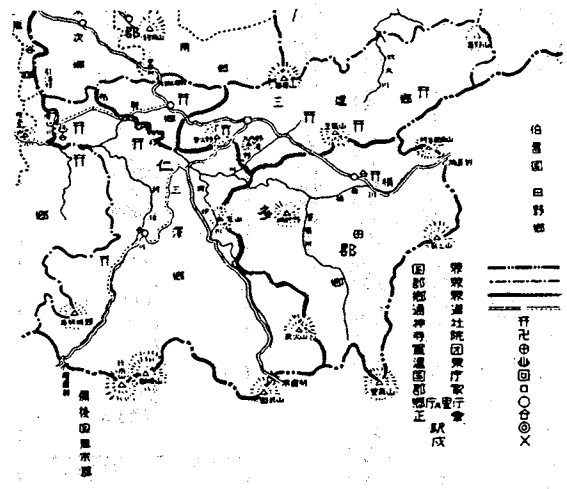
三沢郷⑧
△区域―温泉・三沢
三成・阿井
馬木の旧村
（のち温泉が漆（しつ）仁郷に、阿井・馬木が阿位郷として独立）
△神社　三沢社㊤
漆仁社㊤
石壺社
大原社㊤
△　郷庁・正倉
△刻　南の国境に常刻と非常の時の刻があった。

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

臣が本家）につながる出雲臣がここに少領として居住していたと考えられる。この郷の「御津池」は、出雲国造家（出雲大和などの神社の司祭者）は代替り毎に、都に出て神賀詞を上告する国家的行事を行うにあたって、ここの水を汲みとって身を潔めるを常としたと伝えている。

出雲臣の一族は各郡に勢力を扶殖していた（前号表参照）。従って出雲臣のいないところは、横田郷のような出雲大川の最上流で他国に接しているところ、また大郡であるが開拓の新しかった出雲郡（杵築大社のある）などである。横田郷は外来系の祖神を（伊賀多気社）祭る土豪が勢力を扶殖していて郡司になったと考えざるを得なくなる。

各郷の面積の大きさと、神社数や祭神を読みとってみると、以上のような状況が浮かんでくる。研究によると、出雲国76郷87500人と推定される。大原郡は仁多郡の面積より狭いのに8郷あり、神社が29社、人口は4倍位あったようである。さらに郡内に構えの整った寺が3カ寺あり、そのうち2カ寺は僧5人尼2人がいて、出雲国でも仏教文化が深く浸透した地域であった。



このように仁多郡の状況、そして郡内の各郷の状況を見ると、開拓そして土着の歴史が、浮かんでくるのである。

（横田史談会　高橋一郎）

（4P最下段の続き）それによる。

お八ツ　午後2時ともなれば、江戸の町ではあちらこちらで時の鐘が八つ鳴らされる。この時間帯に食べるのがお八ツ。ついでに正午とは正午の刻、これをこえれば午後というわけだ。江戸時代の鐘は現在、浅草・上野などに残っている。

鬼門　艮の方角を鬼門という。陰陽道で百鬼出没する方角とされ、その方角への建築や引越しなどは敬遠された。王城の鬼門に寺社をたて、桃の木を植えるのは鬼を払うためである。

丑三ツ時　深夜2時ごろを「草木も眠る丑三ツ時」というのは、丑の刻は1時から3時ごろ、それを4つにわけたとき、丑の三刻は2時から2時半ごろになるからである。



辰（たつ）のとし

―暦にも時刻にも方位にもかゝわる十干十二支

古文書と十干十二支

古文書を読んでいて「辰正月」とあると、「辰」は12年毎に巡ってくるから、年号や紀元をどうするか苦労である。「庚辰」とあるとあとで述べるように、60年毎に巡って来るので、年号・紀元の決定が易しくなる。

手紙などでは宛名人と差出人との関係を推定するとさらに絞られる。また文中に「分家の泉屋六兵衛の13回忌の法事云々」などあると、本家と同じ寺であろうと過去帳を頼んで見てもらうとずばりと決定ができる。また普請のことなど書いてあると、古い家の天井裏の梁などを見せてもらうと明らかになる。「辰どしの大洪水」とか「辰年のききん（飢饉）」などとあると、次のような年表を作成して置くと極めて便利である。各種の記録を読む度に形式を統一した表を作って、庶民史・産業史・社会史・風習史などの年表を書いておくと、それを比較しながら、見つけ出すことも出来る。

この文は13年前の1988（昭和63）年の戊辰の「奥出雲」新年号に載せたものに、若干付け加えて便利にしたものである。

今年2000（平成12）年は庚辰である。これは古代中国に由来する暦法である。

十干　甲（きのえ）、乙（きのと）、丙（ひのえ）、丁（ひのと）、戊（つちのえ）、己（つちのと）、庚（かのえ）、辛（かのと）、壬（みずのえ）、癸（みずのと）

十二支　子（ね）、丑（うし）、寅（とら）、卯（う）、辰（たつ）、巳（み）、午（うま）、未（ひつじ）、申（さる）、酉（とり）、戌（いぬ）、亥（い）

十干と十二支を組合せて、甲子にはじまり60種の干支をつくり、年・月・日とさらに時刻を数えた。

十干　一カ月を3旬に分けて、1旬を10日とし、甲…癸の10種を用いる。干とは箇数のことで、十干とは10種の記号の意味であ

る。当初は社会生活も単純で、日順記号は十干の10種でよかったが、複雑化する時代となったことと、また将来の計画のためにも必要性が生じ、次の十二支と組合せて、60組の干支ができた。

十二支

十干と同じく古代中国で定められた。天の周縁を12等分して、12の方位を定めた。支とは分支、区分のことで、その区分（方位）ごとに与えられたのが先の呼称である。

このように十干は本来の文字の意味でなく日順の記号とされている。十二支も同様に**方位方角**の記号として借用されたものである。これを合せて60組とした、日順に用いはじめたのは、中国の殷王朝（紀元前C.1500～1000）からで、これが年にも適用されるようになったのは、漢代（B.C200年）からであり、朝鮮・日本へ、蒙古・安南へと伝わった。

え（陽）と（陰）の成立

十干と十二支は無味乾燥な記号であり、憶え易くもなかったので、干に陰陽説と、五行説から（のち合体して陰陽五行説ともいう）意味づけがされ、支に12種の動物名があてられた。ね（鼠）、うし（牛）、とら（虎）、う（兎）、たつ（竜）、み（蛇）、うま（馬）、ひつじ（羊）、さる（猿）、とり（鳥、特に鶏にあてることが多い）、いぬ（犬）、い（猪、中国では豚にもあてる）である。

陰陽説では世界の根元は、陰（と）と陽（え）の対立と和合で、これで万物が生成し衰退すると説く。**五行説**は万事万物一切、木火土金水という五種の根本要素で合成されて存在し、分散しまた消滅するという。この二説が合体して、世界の根源は陰陽二気で、これから五行が発生し、組合わさって世界が出現し万事万物が存在するという。

そして五行にも陰陽がある。

甲＝木の陽　乙＝木の陰
丙＝火の陽　丁＝火の陰
戊＝土の陽　己＝土の陰
庚＝金の陽　辛＝金の陰
壬＝水の陽　癸＝水の陰

と配した。こうして十干には五行の陽と陰がつく。本来はこのように十干がえとであるが、今日十二支に配当した動物のことと解しているのは誤りである。

「平成12年のえとは辰である」というのは誤りである。

干支に生じた神秘性

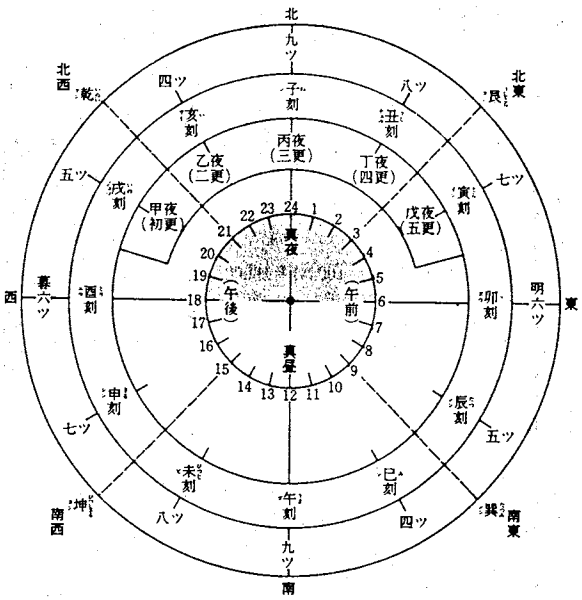
こうして複雑になって、神秘性が生じて来た。今日は丙の日で火性である。自分は庚の年の生れで金性であるから、火金相剋の理で凶運が予想されるから何事も気をつけねばならぬとなる。またA青年は乙の年生れで木性、B嬢は癸の年生れで水性、水木相性で合性となるとする。これが次第に神秘主義となり、複雑な理論をもつ、運命論や予言となり、十二支の方位と夜空の諸星座の形に対する諸種の動物の連想と結んだ。動物そして動物神とが結合して、意味の深化をもたらした。一部ではうらないの基底となって神秘性をいよいよ加えている。世間で言う**還暦**とは干支が一巡するのが60年それにもとづくもの。**丙午**（ひのえうま）の丙は火の陽で激情を、午は奔馬をあらわし、無軌道で人をこまらせる意となり、女におおいかぶさる。この年に女の子を生むまいと、出生率は激減した。**辛酉**（かのとり）は、金性の重なりで、中国では革命の年とされた。天命によって位にある帝王は反省し政治を改新せねば王位を去らねばならぬ。そこで年号を改めて政治を改新した。これがわが国にも伝わり、人心一新のため改元が行われた。年号とは要するに政治の災害除けのまじないであった。

竜（龍）に因んで

登竜門とは、黄河の上流に急流があって竜門といった。それを登る鯉は竜になると伝えられ、栄達への関門をそう呼んだ。竜とは**仏教**では蛇形の鬼神で、地上・空中・水中に住し雲雨を自在に支配する神である。竜神とも呼び、密教では竜王は雨を祈る本尊とされた。**中国**では鱗虫の長として神霊視される巨大な想像上の動物で、鳳・麟・亀とともに四霊とされ、よく雲を起し雨を呼ぶという。大蛇とは龍のことである。

考古学的には中国では紀元前

時刻・方位対照表



訂正　前の294・295号で天平宝字・とすべきを多くが天平宝字×となっていましたので

それぞれの秋　簸の上短歌会

発車を待つ汽車の中まで匂ひきて蕎麦売る駅の夕べ明るき　諸角長子

遺骨なる妻を納むると真新らしき晒に娘は鋏を入れぬ　常盤はるまさ

木犀の薫る小庭の朝まだき薄靄のなか冷気たただよふ　野村節子

筆はこぶ心許なき秋の夜を小さき蜘蛛の畳這ひゆく　永井弥生

サロマ湖は秋深くして燃ゆるごと湖畔をいろどるサンゴソウ赤し　安部夕波

柴栗句会十二月作品

葉牡丹の渦に凍て星住いけり　浅野としお

病室は消灯冬の月残る　糸原古志

生涯の歩みの一ト日と日記買ふ　恩田和美

暖房に衿もと剝らる眠気かな　小川敏子

初あられ病衣の襟を合せやる　加納信子

移り行く世紀の名残り落葉かき　楠房子

凩の荒ぶ曝ての猫車　高木白虹

みかんむく人の心のさまざまに　中澤美紀子

湯豆腐に心身温くめて夕餉とす　新出谷一華

木枯しの吹いて余命細きかな　錦織富江

衿元の赤が可愛いい冬の街　峯石美代子

メモの添ふ蜜柑の二つ温みかな　渡部夕峰

登校の児童らの挨拶息白く　渡部周行

16世紀の商時代（3000～4000前）の青銅器皿に現れるとなっていた。数年前から内蒙古東部や遼寧省西部の地区で出土する竜形玉器によって5000～6000年前が起源であると改められた。最近の内蒙古自治区文物考古研究所の発表によれば、全区東南部で発見された竜紋陶器によって、竜の形は既に7000～8000年の歴史があることが分かったという。中華民族の象徴は極めて古い。

龍に因むことわざ

画龍点睛［水衡志］（梁―中国の古代の国名―の画家張僧繇が金陵安楽寺の壁画に白竜を描いて、その睛（ひとみ）を書きこんだところ、風雲生じて白竜は忽ち天に上ったという故事から）事物の眼目となる所をいう。またそれによって事が完成する最後の仕上げをいう。転じて諺として「画龍点睛を欠く」がある。全体的にはまあ良いが、それを生かす肝心な所が一箇所不十分であるの意味。ついでに集めてみると「**辰巳天上**」は辰の日と巳の日には相場が上る。

「**竜天に登る**」は聖人が天子の位につく。「**竜雲を得る如し**」は英傑が時を得て活躍する。「**竜頭蛇尾**」は初めは盛んだが終りは尻すぼみになる。「**竜の髭を撫で虎の尾を踏む**」は命がけの危険を冒すをいう。

1940（昭和15）年生れの人は今年が還暦。敗戦から半世紀。龍は雲を起し雨を呼ぶという。そして昇りに昇って21世紀へと明るい未来を切開く年であるよう。「竜頭蛇尾」に終らぬよう。お互いに自戒して進み歴史を残したい。

時刻・方位対照表について

時刻法―1日を12辰刻（子～亥）にわけ、一辰刻を4刻に等分していた。一時は2時間、時刻のよび名は12支によるが、太鼓や鐘で報時する数によって九ツ、八ツと呼ぶ。現在の24時間になったのは1873（明治6）年から。

方位名―12支によった。子が北、卯が東で、東北は丑と寅の間なので、艮（丑寅）という。

また、東西南北の四方にはそれをつかさどる神がいる。青竜（東）・白虎（西）・朱雀（南）・玄武（北）の四神がそれで、相撲の四本柱（現在は房）は（2Pへ）

斐の上川柳十二月の句

あと十年生きてみようか年忘れ　松浦亜以

八十路坂妻を杖とし伊予の旅　高木凡太

軒下の大根漬けて秋が冬　真綿よし子

選挙戦目をそらす人笑う人　児玉哲呂

いい運は来ないが生きてる有難さ　松浦久寿

こだわりはよそう相手もそう思う　藤原千代子

選挙すみ流れるうわさ耳にふた　安部正子

よく干した大根漬けて姑思う　児玉えみ

気配りが足らなかったか悔い残り　藤原のぼる

ふと空し月に伝言たのみたい　渡部ミツコ

幾山河さびしかろうとまた越える　勝田みのる

惚けまいと重たい本を買い求め　石原冬明

葉も実もなくカラスがっかり去っていく　田部都

日めくりが散りゆく紅葉追っかける　田中芳春

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江01410-9-12404）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　0854-52-0191）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第297号（2月号）
2000.2.5（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

古代学に見る横田③
一枚の木簡の発見から④
——地方豪族＝国造・伴造と部曲の流れ——

出雲国仁多郡　横田郷前分一籠
天平宝字［

『新撰姓氏録』

815（弘仁6）年—平安初期嵯峨天皇—萬多親王を代表とする役人によって完成した1182氏の家系を集めた30巻目録1巻の書である。

現存するものは抄本ともいわれている。その後1920（大正9）年天才的姓氏研究者太田亮の『姓氏家系辞書』が出来たが、一般には知られることが少なかった。それが戦後間もなく刊行された『新編姓氏家系辞書』（丹羽基二編集）によって知られることになった。それは原著に略注と新項目を2000数百ばかり加え、口語体に改めた労作である。その後種々な角度から研究されて出版されているが、1986（昭和61）年に丹羽基二によって編集された『姓氏家系総覧』3巻の大冊は、これまでの研究者のものも考察して、一般向けに出来たものである。本号で述べるのはこの書によったものであるが、誤りがあれば筆者の力不足である。

部について

重複するがこれについて角度を変えて述べる。部は伴とも、又品部とも云って起源は神話の時代に発する。初めは特殊の職

シルクロード余話
—シルクロード食べ物の珍談

特別寄稿　窪田蔵郎

古代の鉄を探し求めて十四年をかけ、シルクロードを約二往復してしまった。その間には旨いもの不味いもの色々食べなければ、生活ができない。好き嫌いは言っていられないのが実情だ。見ただけでもう結構と言うものもあれば、今だに記憶に残る旨いものもあった。以下にその断片の思い出。

天山北道の庫車などの町で夕食のおかずに、烏賊と野菜を一緒に炒めたものが出た。海には縁の無いタクラマカン砂漠の北辺、何処で烏賊が捕れるのかと聞いたところ、上海の方から列車で輸送してくるという。バザールで黄褐色のカチカチに干したのを、水タンクの中に入れ戻しているのを見て驚いた。これが延々と三千六百キロ以上も運ばれてきた烏賊の正体だ。

洛陽で蠍の唐揚げを食べたことがある。名を聞いただけで初めのうちは、恐わ恐わ反っくり返った尻尾の先を爪で切ったりして中国人に笑われたが、これは桜海老を抓んでいるような感じで味も仲々なもの。五～六匹食べたが酒の肴には最適だ。

この洛陽で中華料理店に入った時には驚かされた。風呂桶ぐらいもあるガラスの箱の中に、蛇が大小ウジャウジャと入っている。そして注文を取りにきたボーイが、何と「どれ食べます／」冗談じゃない「そこの生きのいい奴を一匹」なんて言えやあしない。勘弁してくれよ。

人面魚がテレビで騒がれていた頃に、新疆のウイグル自治区内のホテルで、決まって夕食の最後に出てくるのが、この魚の四〇センチ以上もある大きな奴の唐揚げ餡掛け。味もいまいちのうえに、その恨めしそうな顔を見るのが怖い。

蒙古の包頭で食べた駱駝の肉は、骨付をバケツで持ち込まれるからかも知れないが、料理法も余り上手でないらしく、茹でただけのようで泥臭くておいしく無かった。後に鄭州で脚の掌の処から切り取った肉の料理を食べたが、これは透明なゼリー状で薄味。正に珍味……。

バイカル湖のほとりのリストヴィヤンカ村で、漁師が捕ってきた鰯に良く似た魚があったので、これをホテルの厨房で塩で〆めて貰って食べた。何と実に旨い。名前をゴロチャンコと言っていたが、土地の漁師の呼び名らしく、案外ブリヤート語あたりではなかろうか。

イスタンブールではガラダ橋の魚料理屋に入った。何れにしても揚げるか焼く位だろうと想いながら、何を注文しようかと思案する間もなく、店の親父の口から「ヘイー。ジャポン塩焼きねー」と出たのには開いた口が塞がらなかった。味も魚の種類が違うだけでほゞ同じだった。

同市のトプカプの海に面した食堂でのこと、案内して下さったM・ドウ氏から、お昼にしますが何を食べますかと聞かれ、トルコ料理ではドネルカバブーが一番おいしかったので、あれを注文しようと思ったが即座にその名が出てこない。仕方なく変な恰好だが腰のところで手の掌を合せて、交互に動かしクルクル廻す仕種をしたら、ボーイが判った判ったと持ってきたのが正しくそれだった。

（小田原市住在）

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

業に従事する者から成り立った団体を指す名称—物部、玉作部、鏡作部など—であったが、後にはあらゆる職業にわたりなお特殊の人の為に労働する部から、特殊の人の御名を伝える為に設置した部、特殊の人種を以て組織された部などが出来て、その意味も広くなり、その数も多くなった。研究によれば6世紀の終り頃には、全国の人民の殆どは何れかの部に属していたと考えられるという。だがその数はそれ程多くなく記録から窺われる300位で、実際にはそれ以上僅かなものであろうという。それを分けると

①職業的部（矢作部、鍛冶部、久米部など）

②御子代、御名代部（品治部、武部、日下部の類）

③帯豪族氏名部（蘇我部、大伴部、平群部、和珥部の類）

④異人種によって組織されたる部（百済部、佐伯部、上部の類）

①はその名の職業に従事した団体で、長を伴造、又は伴緒といった。伴造のうちで全国中のその民を支配するのを総領的伴造と名付ける。

②御名代部は、天皇・皇后・皇子の御名を後世に伝える目的で設置され、これに属する人民は、御名に部を添えた名を負っていた。このうち御子のない方のは御子代部といった。総領的や部分的伴造があった。

③大臣・大連や臣・連などという中央貴族や、地方豪族で国造・県主などの官職を帯びているものの私有民を部曲（又は民部）といった。その内、主人の氏に「部」字を添えた名を負っている者を帯豪族氏名部という。（出雲国の豪族では出雲臣が大きい。神門臣もあり、出雲部、神門部などの私有民がある）その広大なものは中央にも、それぞれ管理者（代官のようなもの）を置いて支配した。出雲臣もその大豪族であった。

④は、百済部・漢部・佐伯部・呉部のようなもので、帰化若しくは捕虜となった異人種から成立った品部をいう。そのうち職業名を負うているのは①に、また御名代部ではあるが、殆ど帰化族から成立つ飛鳥部もある。

以上の4種の部の所属は

㋑王の所有

㋺皇后・皇子並びに皇族所有

㋩中央及び地方豪族私有

㋥神社領

である。その後の変遷は省略するが、諸氏の私有の民（部曲又は民部と記す）も、大化の改新（696）で廃止されたが実現せず、天智朝（664）で再び許されたが、天武朝（675）になって全く廃せられた。この民部より一等下等な豪族私有民があった。（家部といい家人とも家人部とも書く）これは天武朝にも廃せられず8世紀に残っている。また奴婢はこの家部より下等なもので、かなり富民は皆所有していた。この両者は共に氏がなく、放たれて良民となる場合には、元の主家の氏に部を添えて氏とした。

年表①②を見ながら

4頁の年表①は「古代学年表」で、文献学、考古学等で明らかになったものの中から、本小文に関連あるものを、分野別に年表としたものである。最右側は氏姓制度のおおよその推移である。まず紀元前より時代の推移を追って読んで頂きたい。

次に3頁の年表②に移って頂くとこれは、本号冒頭に紹介した『姓氏家系総覧』によって、本小文で推理したいために、選び出した出雲神族・出雲臣・吉備臣・品治部の系譜の推移を書いたものである。これは『新撰姓氏録』を基本とし、日本書紀・古事記・諸国の風土記本文や逸文そして続日本紀なども加えて考察されたものである。従って年表①との整合は必ずしも一致しないが、凡その諸氏の変遷は伺えるものである。

これらの氏族がどのように古代の出雲に拠点をもっていたかを見るために、図①、表③を作った。この2つは738（天平11）年の正倉院にある、出雲西南部の一部のみが残っている。『出雲国大税賑給歴名帳』からあげたもので、これも欠落部分があるが、大勢を知ることができる。

この記録は、班田収授の行われている時、納税申告の正確を期するために作製されたもので、課税は土地に対してというよりむしろ人に課せられたものである。（歴名帳は670年に造られた全国にわたる最初の戸籍—庚午年籍—以来の台帳にもとづくもの）

だが当時といえどもすべての人から無理な租庸調を強要したわけではなく、高齢者や幼年者、その他疾患のあるもの、孤独なものに対しては、それぞれ米を給して賑恤したのである。賑給帳には細かい規定があって、郡内各郷（または里）の賑給者と給米の合計をあげ、次に一々その名を戸主名と共に里別に列記してある。（90才以上、80才以上、老独男、老独女、15才以下孤児、独住者、自存不能者と区別がある。受給者560人の姓名とその戸主の姓名との合計は延べ800人）これから年令階層による人口状態や、老いて妻なき者より、老いて夫なきものが断然多いことや、孤児等の実情が知られ、当時の社会状況を知るのに極めて貴重な資料である。

郷別に分布をしらべ姓氏別に印をしてみたり、神社の規模の分布も重ねてみると、古代のこの地方の氏族の来住や開拓の様子が浮かんでくる。そこまでは述べないが、表③によって輪郭を明らかにしたい。（鳥越憲三郎の40年前の貴重な研究があって、古代簸川平野に於ける郷の発生と成長を示唆するものがある）

表③の下にあるように姓のあ

←（4頁を左にずらし3頁の のりしろ にのりをつけてはり年表を続けて見て下さい。）

（1頁誌名の下の©は著作権のある略語です。すべてではありませんが確認のため）

る者が多いが、家すじ、家格をあらわすものである。また林臣族と族の字をつけているものもあるが、林臣の一族であることを表し、家格は本姓に準ずるものとされたらしい。

年表にある如く氏姓制度廃止後60余年を経た天平の記録であるから、当時は次第に家格というよりも、家すじだけを伝える名目となっていたのではないかとも思われるが、前号で述べたように郡司の職についたものがほとんど臣姓である点からなどみると、やはり支配者階層には高い家格の人から選任されているから、担当に家格を表していたものと考えられる。

主な氏族について

地質学と考古学上の遺跡・出土品を重ねて（数多い小神社の分布もにらんで）みると、神門郡は本州の陸地で、出雲郡は次第に開かれた（陸地にもなった）土地であることがわかる。

神門郡—『出雲国風土記』によれば神門族は神話の鵜濡渟の子孫で、古代より今に至るまで土着していて、78氏族で臣姓が半数近い。当地の開拓氏族であると思われる。郡司大領に神門臣がいる。次いで多いのは若倭部で、開化の御名代として当地に土着したもので58氏あり、臣姓が12人この一族の伴造家であって、出雲臣族から入ったもののようである。

第3は日置部で52氏これは職業的部で地方政治の基盤であったらしく、その伴造（統率者）は出雲臣族が日置部臣として12人いる。吉備部は吉備臣が命によって出雲振根を誅してこの勢力をこの地から退けた時に入って来た吉備臣の私有部曲で30、各郷に居住する。神門郡の郡司主政も出ている。

勝部は27人いるが、これは異人種部で百済系帰化系と考えられ、出雲と京畿の東と西の隣国に分布している。出雲郡の勝部と同じく臣10人は出雲臣族からこの族の伴造となったものである。（出雲郡の勝部首は勝部族の中から成長した伴造である）。品治部18は垂任の皇子の御名代部で、すでに述べたように出雲大社に来た時にこの地に土着したもので、氏姓のあるものは無い劣勢な氏族である。この郡には出雲臣族は出雲積が2人住むだけで、吉備津彦によって敗れて、東出雲の意宇郡の出雲臣を中心とする地に移っている。愚考するとこの地の古墳の変遷と意宇郡の古墳の変遷に、それがあらわれているとも思われるが。

出雲郡——職業的部の日置部が多いのは、この地の新開地造成にかかわったものか、出雲臣族でこの部の伴造となった日置部の臣が88人中49人いる。日置部臣は出雲郡郡司大領を出し、新造院の建立者ともなっている。次に52人いる建部は倭武（尊）の功名を伝えるために置かれた御名代部で、倭武の西討東伐の道筋の東海・北陸・中国地方各地・四国・九州と広く住んでいた。出雲は倭武が出雲建を誅した土地で部民が多い（神門郡には4人）。この伴造は出雲臣族（出雲国造族）の建部臣である。建部の多くは国造に命じて置かせ、国造族に掌らせた。

神門部は26であって神門臣は出雲臣族からの伴造である。古くからの土着部民であることは出雲郡と同じ。出雲臣25、勝部臣25、吉備部4、品治3も出雲郡と同じ土着の部曲である。

出雲臣

以上の二郡でみると、国造家（かって出雲国の支配者）の出雲臣の勢力が思いのほかに少ない。既述したように『出雲国風土記』によると、国内の32人の郡司32人中の¼の8人が出雲臣である。

意宇郡—大領・少領・主政・主張。島根郡—主帳。楯縫郡—大領。飯石郡—少領。仁多郡—少領。

意宇郡大領出雲臣広島は出雲国造を兼ねているから、出雲国に於ける勢力は偉大であったのに、

①出雲国造が奉祀する杵築大社もあるその近接する、出雲・神門両郡に出雲臣を名乗る氏姓が意外に少ない。

②両郡の郡司にも、郡内の文化の先進性を示す新造院の建造者にもない。

③飯石郡の少領出雲臣弟山は意宇郡の新造院の建立者で、のち国造に任ぜられている。

ただ出雲臣氏族は、出雲・神門両郡内の多くの部の伴造となって、〇〇臣と名乗っていることは既に述べた。主流は意宇郡であって、この両郡からは排除されたことがわかる。

当時は最高の神は熊野大社で、食糧神で祭られる神として存在し、杵築大社は国造神で国造に祭られる神であり、そして熊野大社を祭る神であった。それを祭るのが国造家であった。

食糧神↑国造神↑国造家

という関係にあった。

神社の数を見ると、

（官社—神祇令によって祭るもの。国社はそれに準じて祭るもの）

意宇郡	67（官社48	国社19）	
出雲郡	122（〃	58	〃 64）
島根郡	59（〃	45	〃 14）
神門郡	37（〃	12	〃 25）
（略）			
仁多郡	10（〃	2	〃 8）

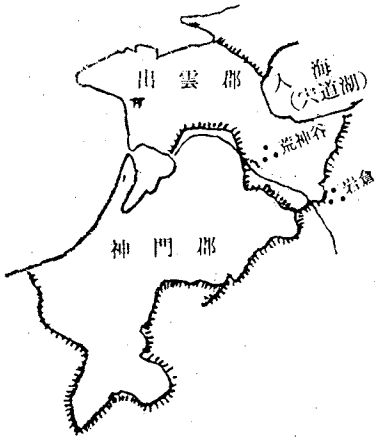
である。神社数は各郷内の居住者の数に比例しているようであり、官社の数の多いことは開拓が古く勢力も扶殖されていることをあらわしている。出雲郡・神門郡は、部が置かれたのが既述のような状況であり、特に出雲郡は国社が多いのはそれを示し、新開地であったと思われる。仁多郡は最も国内で奥地であり、神社も少なく開拓の遅かったことをあらわしている。

のりしろ

年表②　『姓氏家系総覧』から（年表①との整合性少ない）

時代	出雲神族	出雲臣	吉備臣	品治部
神話	－素戔嗚が祖 出雲を中心に西本州・四国・九州に勢力。国譲りで大和の三輪山へ移り三輪氏族となる。神武の后ほか数代の王の外戚。最古最大の名族に。	－天穂日が祖 国譲りのため出雲に降ったが3年復命せず土着する。 出雲大社を以後代々奉斎する。		
神武・綏靖 安寧・懿徳 孝昭・孝安 孝霊 孝元・開化			－孝霊の皇子吉備津彦が祖 京畿地方安定し発展がみえる吉備（西九州への要路、山陰制圧の基地）へ派遣して治めさせる （備前・備中・備後・美作のち品治の各国を吉備と）	－開化の王子息長日子の部（私有民）
崇神 垂仁・景行・成務・仲哀 応神		－崇神60年 出雲の神宝を崇神みたく神門郡に使いを遣す。12世出雲振根は筑紫にいて留守、弟入飯郡献上す。兄帰りて弟を殺す。政府吉備津彦を遣し振根を誅す。その子13世は出雲国造に補せらる。	－崇神10年 吉備津彦 四道将軍として西海道へ 全60年 左の事件後西出雲制圧、東部出雲に出雲臣抬頭。 その子は倭建に従って遠征 その子は仲哀の熊襲征伐に従う （一族九州・北陸・東海・紀伊に栄える）	－垂仁王子誉津別の御子代部（私有民） いとこの曙立王をつかわし出雲大神のたたりを鎮めるため出雲大社へ、ところどころに御子代部を配置　出雲の品治部となる
				－吉備に品治国成長　今の芦名郡（以前は品治郡と芦品郡）地帯（福山の北西部）で、品治部の部民領へ発達しその統率者の伴造吉備品治部君は、品治国造となる。のち消滅する。

図①



716（霊亀2）26世果安国造に出雲臣出雲東部各郡に
724（神亀元）28世子広島国造は飯石・仁多西に拡がる
733（和銅3）『出雲国風土記』広島が国造で編集

山城・河内・大和に氏族多く私有民部曲多い
千家 北島

表③

出雲郡		神門郡	
日置部（職業的部）	88人	神門（左に同じ）	78人
建部（御名代部）	52	若倭部（開化御名代部）	58
神門（古い土着人）	26	日置部（左に同じ）	52
出雲（出雲臣族）	25	吉備部（〃）	30
勝部（異人種部）	25	勝部（〃）	27
吉備部（吉備から入る）	4	品治部（〃）	18
品治部（大和から入る）	3	出雲部（〃）	2

以上には臣・造・連・君・村主・稲置・首・直・朝臣の姓のあるもの。さらに1人ずつであるが両郡に他の氏族が18氏ある

のりしろ

年表①　古代学上から

世界史	世紀	西紀	年号		政治・外交・社会	思想・文化・遺跡	氏姓制度
		B.C 2000				(縄文式文化)	
秦中国統一		200				(弥生式文化)	
前漢		100			小国分立時代 (百余国)		
						金属文化伝来 (神庭荒神谷・加茂岩倉遺跡)	
	1	0					
後漢		50				同上の銅器類埋納される	
						四隅突出型古墳時代へ	
ローマ帝国最大	2	107				(古墳文化時代)	
	3	238			邪馬台国女王卑弥呼		
					魏に遣使	神原神社古墳の鏡伝来	
	4			崇神		稲作拡がる	
		375				石上神社七支刀百済より伝来	
ゲルマン民族大移動		399		應神	倭、幾度も新羅・百済を服属し高句麗と戦う (広開土王碑に)	大陸文化渡来盛ん	
ローマ帝国東西に分裂		395				前方後円墳奈良盆地から大阪平野へ	
宋	5						大和の王権芽生え
		421		仁徳(讃?)	宋へ遣使	熊本江田船山古墳の太刀	
		438		反正(珍?)	仝　上 (宋の文帝より安東将軍に任ぜらる)	(古墳時代後期)	
							部民制成立へ
							(中期) 王直属の伴造の下の私有民(伴部)
		443		允恭(済?)	仝　上 (仝　上)		中央地方の豪族の私有地(部曲) −大伴連・物部連ほか
		472		安康(興?)	仝　上		(後期) 大陸特に百済から技術者渡来
ローマ帝国滅亡		478		雄略(武?)	仝　上	(横穴石室出現)	部曲となる
	6	527	22	継体王	磐井の乱		農民支配にも部民(田部できる)
		538		宣化王		仏教伝来(分伝)	
		552	13	欽明王		百済より仏像・経典伝る	
		570				(製鉄はじまる)	(後半) 国造・縣主・稲置が成立へ
		585			崇仏の蘇我氏と棄仏の物部氏対立	岡田山古墳額田部臣銘の太刀	出雲東部の大首長統一して国造に出雲臣
隋の統一		589					御名代部・御子代部成立
		593	1	推古大王	聖徳太子摂政?	(畿内の古墳時代終る)	国造の民をもってあてる
	7	604	12		憲法17条	飛鳥文化(氏族仏教)法隆寺建立	
唐		618	28		天皇記・国記・伴造記なる		
		630	2	舒明大王	遣唐使	(大淀廃寺?)	
(唐律令制へ)		645	大化1	孝徳大王	蘇我氏亡び大化の改新へ		部民制廃止
		652	白雉2	天智大王	班田収授法施行	白鳳文化(国家仏教)	
		664				出雲国造に出雲大社修復させる	仝　制復活
		675		天武天皇	間もなく戸籍整う(庚午年籍)	出雲国造　意宇郡大領兼帯	仝　制廃止
		733				出雲国風土記成る	
		738				(出雲国大税賑給歴名帳)	
		815				(新撰姓氏録)	

直木孝次郎説　推古大王から極めて有力な地方官の国司と考えてよい地位で、天武天皇から日本の国号、朝廷の呼称にふさわしい地位となり天皇と称す。

訂正　前の289・290合併号で6頁3段27行・佐賀藩に

隆冬雑唱　簸の上短歌会

雪かつぐ猿政山よ幼なきに養はれゐしはあの麓あたり　諸角長子
妻逝きても家にゐし娘が勤もちて気侭八百に吾れの残年　常盤はるまさ
二千年のトラブルを言ひ堀炬燵に炭火つぎ足せばうから寄り来る　野村節子
梅干しの薬効説きて長生きを言ひたる友のこの暮れを逝く　永井弥生
帰り来し息子の声する想ひして夢より目覚めて闇をみつめぬ　安部夕波

歌集「いとぐるま」を祝いて

養母と娘の絆詠まれる〝いとぐるま〟頁繰りつつ涙あふれ来　諸角長子
〝いとぐるま〟に紡ぐにも似て詠まれたる永井さんの歌集成るを寿ぐ　常盤はるまさ

柴栗句会一月作品

生きているよろこびの韻炭を切る　浅野としお
掌にのせて石の冷たさ寒玉子　糸原古志
かきぞめやいろはにほへと試し書き　恩田和美
銭太鼓守る熟女の初稽古　小川敏子
夫の干支昇り竜をちぎり絵に　加納信子
二千年元旦は先づ水を飲む　楠房子
人形も添えし幼女のお年玉　高木白虹
寒灯や心の余白もてあまし　中澤美紀子
威勢よく寒鰤商人大き声　新出谷一華
世に遅れ人にもおくれ雪の道　錦織富江
笹の葉の雪おちて笹揺れ止まず　峯石美代子
山の湯の湯舟の中で賀詞交す　渡部周行
雪催ひ山の学校始まりぬ　渡部夕峰

品治部（仁多郡の）

品治部については既に述べたが、この二郡においても戸数も少なく伴造もない単なる部民（部曲）であったようであるから、この一族の中から仁多郡に駐在を命ぜられた郡司とは考えられない。この時に早くから来住した御名代部の一族として土着し、開拓によってこの地方に勢力を扶殖していたのを認められ、郡司に氏姓もないのに登用された極めてまれな例とみられる。そこで御名代部の品治部がここに来住した由来を考えてみると、かつて吉備津彦が命によって出雲西部に遠征し、出雲臣を制圧し東部に拠点を移すに至らせたことがある。その吉備臣が来征した道筋は、次のようであると推定されている。

横田郷の東隣の多里郷→横田郷の北隣の三処郷の比田→出雲大川中流→そして下流の出雲西部。

そこにはいずれにも、吉備津彦を祭る官社・国社があり、下流には勢力を張ったから多い。横穴古墳墓にも南の影響もあるという。

これも既述したように、今の備後国の東南地方に品治部の成長によって、品治部臣も生まれ品治国が成立したが、経過は明らかになっていないが、吉備国に吸収されその版図に入ったころ、吉備津彦の出雲遠征やその後の往来とともに、品治部の流れが当地に土着して次第に成長し、隠然たる勢力を扶殖していて、その実力が認められて出雲国内郡司のうちでただ一人、部曲の氏名—品治部—で任ぜられたものと推定できる。

そこで「出雲国横田郷…云々」の木簡の不明部分に、郡司品治部が浮んで来る。（それより40年後の平安時代初期の801（延暦20）年の記録には、ようやく楯縫郡に品治部の伴造である品治部首があらわれてくる。このことは郡司の存続と成長を推定するに見捨てられない点である。仁多郡郡司大領は蝮部臣（たじひ）のであった。蝮部は反正王の御名代部で、京議と東中国地方に多い。蝮部臣はその伴造で出雲臣氏族が任ぜられている。それは秋鹿郡郡司少領ともなっている）

—次号で先進地吉備国の古代製鉄業についても触れる—

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳一月の句

お雑煮のノリとカツオはやめられぬ　児玉哲呂
一人居にこんなに長い夜を知る　松浦久寿
年賀状児等の決意がたのもしく　藤原のぼる
松迎え香りも高き床の間へ　真綿よし子
雪消えてゲートボールの虫動く　児玉えみ
友の計に集う友にも皺白髪　勝田みのる
長生きしお年玉やる子が増える　安部正子
誤作動の意味分からずに怖えてた　松浦亜以
コンピューター右往左往で年が明け　藤原千代子
忘年会割箸だけはさっと割れ　渡部ミツコ
二〇〇〇年明けても景気変らない　田中芳春

会員頒布一部三〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇—九—一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四—五二—〇一九一）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第298号（3月号）
2000.3.4（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

古代学に見る横田④

一枚の木簡の発見から⑤

——考古学から追ってみる——

8世紀はじめの『出雲国風土記』の仁多郡の条の横田郷の終りに、「以上の諸々の郷より出す所の鐵、堅くして、尤も雑具を造るに堪ふ。」とあり、飯石郡の条にも製鉄のことがある。これをもとに奥出雲は古代からの製鉄の本場であり、オロチ退治の神話はそれを語るものであるとすることが、かなり今もって言われているが、オロチの物語はエジプト・ギリシャに源流がありシルクロードを伝ってアジアそして日本で完成された政治的創作物語である。

『播磨国風土記』『常陸国風土記』を見ると、先の記述よりもっと具体的に方法や製品までも書かれている。

その他の国の風土記が残っておれば、製鉄の先進地は他に多いに違いない。それを考古学が語ってくれる。

全体像に深入りせず、2～3例を述べる。

考古学上の製鉄遺跡

これも発掘によって出土したものの上での考察であるが、全国の遺跡地図、炉形やその時代の変遷による推移を考察すると、地域性や時代の変化と発展の方向が明らかになっていく。まず東北地方をみると、

宮城県（陸奥国・中世陸前国）の多賀城遺跡の近くの**柏木遺跡**では、8世紀前期からのものがあるが、多くの炉のうち地中式踏吹子のものが3基明らかで、その他は恐らく皮吹子導入初期のものであろうとされている。それから100年後の9世紀に入ると、東北地方の遺跡のすべてが踏吹子である。その伝播の元は海外からであろうとされている。

南隣りの**福島県**（陸奥国から分れて中世磐城国）の**金沢地区製鉄遺跡群**は、7世紀後半から10世紀初めのもので、東北電力原町火力発電所建設用地内（約130 ha）で発見されたものであるが、箱形炉・竪（筒）形炉が123基発掘されている。この他炭窯149基、鍛冶炉20基、竪穴住居113軒、堀立柱建物跡29軒など、鉄・鉄器生産に関わる遺構があらわれている。この地区内の遺跡群は11ケ所にわたり、最大の大船迫A遺跡では59基の製鉄炉が発見された。ただし、ひとつの谷や丘陵単位では数基～10基程度で、8世紀前半後半の製鉄炉は全体で39基となる。おびただしい鉄滓もすべて分類収納し分析も行われ、状況が明らかになり、これは、8世紀前期からのものがあるが（私は4度現場をたずね、或る時は夜遅くまで話合った。）この他は恐らく皮吹子導入初期のものであろうとされている。それから100年後の9世紀に入ると、東北地方の遺跡のすべてが踏吹子である。その伝播の元は海外からであろうとされている。

南隣りの**福島県**（陸奥国から分れて中世磐城国）の**金沢地区製鉄遺跡群**は、7世紀後半から10世紀初めのもので、東北電力原町火力発電所建設用地内（約130 ha）で発見されたものであるが、箱形炉・竪形炉19基が発見され、箱型炉・竪形炉の変遷もうかがえる。炭窯も135基検出されている。

宮城県も含めて、鉱石は浜砂鉄で、これらは古代の東北支配（多賀城造営）と、蝦夷対策が考えられるとされている。（多賀遺跡や資料館見学して）これらを統べていた律令制度の崩壊によって、俘囚も全国各地に移住させられたという研究もあって、出雲国にもその群が到来した地が推定されている。

『出雲国風土記』時代の製鉄地はこのようであって、出雲国は考古学発掘上から見ると、発達が遅れていたとも考えられる。同じ時代北九州にも数基ずつの遺跡がかなりあり、ごく最近発掘が進んでいる。（九州大学移転先）、福岡市の**元岡遺跡群**では、奈良時代8世紀の製鉄炉30基近くが現れている。少ないところでは近くの滋賀県各地（一部見学）、京都府にもあり、いずれも10基までの数基の炉跡で箱形炉が多い。

さて当地の南岡山県西南部（吉備国のち備中国）の**製鉄遺跡**を見る。年表③を本誌前297号の年表①とならべて頂きたい。総社市の近くに、大和に匹敵する大型前方後円墳、5世紀中頃の作山古墳、後半期の造山・両宮山古墳がある。吉備王国最盛期のものといわれている。品治国の存在したころと推定されている。そしてその近くに、**藤原製鉄跡群**ほかが発掘されている。

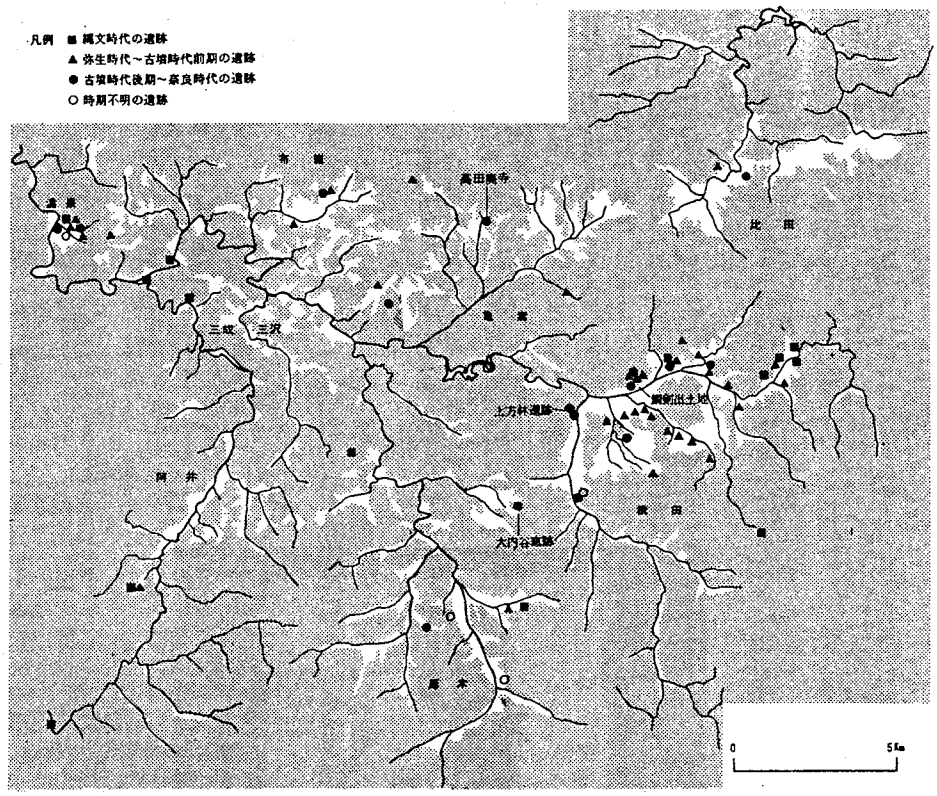
古墳時代後期の6世紀後半から7世紀のもので、『出雲国風土記』に先立つこと150余年前のものである。

藤原遺跡は山麓の広い台地上に広く炉と炭窯が発掘されている（見学済み）。多くは箱型炉（西日本に多い）である。ここには炉跡60基、炭窯16基、近くの**奥坂遺跡群**では炉跡20基、炭窯24基が発掘されている。また近くの笠岡・倉敷・府中等にも遺跡群がある。これらは品治国の東域隣接地や、国内の府中や西方にあって、殆んど原鉱は鉄

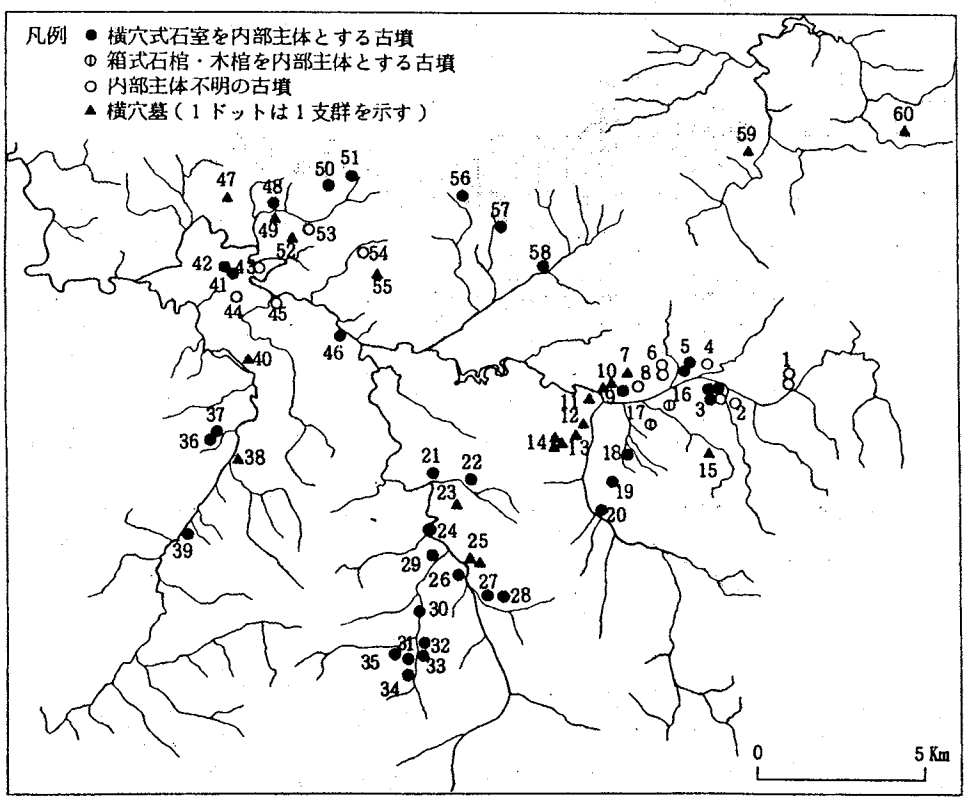
出雲国仁多郡　横田郷前分一籠　天平宝字［

298号　一枚の木簡の発見から（5）・川柳・短歌・俳句

地図Ⓐ



地図Ⓑ



知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

鉱石である。『日本書紀』の記載にある如く、鉄鉱石を細かく砕いて木炭火力を使っての製鉄が行われていたものである。この遺跡の北東や西方への中国山地の同時代の遺跡は砂鉄を用いている。

いずれも吉備氏勢力の中心部をとりまく産地となっていることは見落せない点である。

（吉備国の歴史については触れないが、巨大古墳の存在、多数の製鉄遺跡群はそれを明らかに裏付けているものである。）

『出雲国風土記』を過大に評価してはならない。神話は中央中心の物語である。砂鉄採取の鉄穴流しも中世末からで、盛んになるのは徳川中期からであることは記録と、下流の宍道湖の堆積物の科学的分析結果の検討でも明らかである。繰返えすが出雲国の近世の製鉄の盛んになったのは、松江藩政そして鉄師群の努力が実を結んだものである。

繰り返しとなるが、風土記前時代の製鉄遺跡の最大のものは東北の地磐城（陸奥から分れた）、福島県、西では吉備（のちの備中）の岡山県西南部である。それは他の出土品や遺跡とも重なり、古代史に於ても合点される点が多い。

製鉄も須恵器時代の発展と足並みを揃えている。

それは送風方法の発達で高温を得易くなったからである。

『出雲国風土記』時代の当地の製鉄も、竪形（筒形）炉から箱形炉へそして長方形へと移ったころと想像されて来る。吹子も皮吹子から、早ければ土中踏吹子へと移ったころであろうか。推論であるが。

鉄で造った道具の刃物は刀子、ヤリガンナで、極めて貴重なものであった。長い時代を経てちょうなが出現し、台鉋が用いられるのは中世13世紀に入ってからである。一般に木製の鍬や鋤に刃先に鉄がかぶさるのは江戸時代である。生活用具をみても鉄製品が拡がるのは同じである。

考古学から見た仁多郡

本誌1983年93号から4回連載した中浜久喜（当時当県在住現姫路市住）論文から、当時現在の主な出土遺跡地図（図Ⓐ）を転載して見ると、（その後若干増えているが傾向は同じようである）

縄文時代の遺跡■も横田地区に多く、稲作の始まった弥生時代から古墳時代前期の遺跡▲も数・規模ともに他地区を圧倒しており、この地区には銅剣も出土していて注目される。

古墳時代後期から奈良時代の遺跡●も、前代に続いて横田地区に多く、注目するのは上方林遺跡（川西）で、底に孔を穿った須恵器大甕・横瓶・冠と思われる金銅製品の一部分が出土していることである。（私は韓国—横穴墓が占めている。（詳細は当論文に、さらにその後の発堀遺跡・出土品を加えて検討が必要）

念のため総数60の古墳の中から、出土品名と数をあげて置く

	鉄滓	人骨	耳環	玉数	刀子	大刀
横田地区	1	2	2	2	1	2
馬木地区		2	1	2		5
阿井地区				1		3
三沢三成地区			2	1		2
布勢地区		2	2	2		1
亀嵩地区						

古代社会の展開

弥生時代中期以降（紀元前後、今から2000年前後）、当地域でも生産力が急速に発展へ向かったと考えられる。横田八幡宮附近出土の銅剣は、この地域の共同体の農耕祭祀に使われたものであろう。したがってかなり有力な首長がいたと推定される。（神庭荒神谷・加茂岩倉の両遺跡出土の銅器とにらんでも）

ただ古墳時

世紀	年表③
200	—田和山遺跡
1	
2	
3	—西谷古墳群
4	倭、幾度も新羅・百済を服属し高句麗と戦う（広開土王碑に）
5	—作山古墳 —造山古墳 ＼ 吉備国最盛期 両宮山古墳 ／
6	—出雲最大古墳 ㊐大念寺 ㊒山代二子塚 吉備・藤原製鉄遺跡群 金沢地区製鉄遺跡群
7	—柏木遺跡 10世紀まで

代前期から後期初頭（4～6世紀初頭）の首長墓は未発見であるが、それまでの共同体の基盤を引き継いで、独自の社会が成立し成長していたであろうことは推定できる。

古墳時代は横田地区が若干早く、後期古墳期になると、亀嵩地区の高田、三沢三成地区の三沢が少し突出している。出雲大川（斐伊川）の下流からの移住がもたらしたものか、先に述べた首長墓にあたるものはないが、古墳の数・形・出土品などで、7世紀初頭に、下流平原部の要素が色濃く入っていることが考えられる。『出雲国風土記』には、高田に郡家があり郡司の大領蝮部臣が居住し、三沢の地に小領の出雲臣が居住している。従ってそれ以前の郡司制が布かれたころには居住していたことは間違いなく、それ以前に遡ることも考えられる。この臣姓のある二氏の前者は国造出雲臣族の中から、蝮部の伴造となったものであり、後者は国造出雲臣（意宇郡の大領）の一族と考えられている。

後者の居住については、風土記の中の記述から考えられる。

「大穴持の子、阿遅須伎高日子が成長して顎髭が長くなるようになっても夜昼泣きとおし、聾唖児であった。父は子を船に乗せて各地を巡って慰めたが泣きやまなかった。父はなぜ泣くのか神のお告を頂きたいと願ったところ、夢の中で言葉がありの出雲臣が居住している。従って言葉が通ずるような夢をみた。朝たずねると「御津」と答え、歩いて石川を渡り、坂の上に留まり「こゝ」と言った。この泉の溜り水で、潔斎をした。それ以来国造が、神賀詞を奏上するために朝廷に参向する時には、この水で潔斎するならわしとなった。（このみつ池―三津池―は、今にも三沢に言伝えられている池がある。）また妊婦がこの池の水による稲を食えば、当時から今に至るまで、聾唖児が生まれると言い伝えられている」

以上縷々と述べて来たことをふりかえると、郡司主張品治部の土着の由来、さらに鉄に関する道などについて、一つの道が見えるような気になる。

今後の考古学上の発掘の進展が待たれるところである。

本号執筆について中浜久喜、穴沢義功の皆様に御礼を申し上げ、誤りは後日訂正を致したい。これで一応筆をとめ、別に本誌ですでに触れたことをまとめて、仁多郡品治部のその後を推理したいとも思っている。

（横田史談会・高橋一郎）

斐の上川柳二月の句

この五体おき場に困る長休み　渡部ミツコ
風邪の神どこへ行こうかうろうろし　児玉えみ
人柄がそのまま青木官房長　松浦亜以
手孫して丸背農婦の立ち話し　高木凡太
今冬の寒暖の差に老い迷う　安部正子
老人の常識今は非常識　松浦久寿
おふくろは笑いも詰めて荷作りす　田中有樹絵
円満な兆し電話が弾んでる　田中芳春
お薬りをのんだりはったり感謝の年　足立玉恵
ソ連風邪なつかしがって寄ってくる　児玉哲呂
迷ったら軌道修正するもよし　藤原千代子
友逝きて冬の寒さやなおかなし　磯島恵子
恙がなく喜寿終りてか安堵する　綿真よし子

仰ぐオリオン　簸の上短歌会

蝋梅の黄は陽に透きてあはあはと雪晴れの空　永井弥生
果てなく蒼し
たたら吹く炎も凍てつく冬の夜を真空に仰ぐ　仝人
オリオンの星
特老の一日終るや窓々の灯り消されて夜気深　宮廻愛子
かまれり
晩くなしし子が大学を出るまではと思ひをり　常盤はるまさ
しに結婚を言ふ
還りゆきし妻よ一すじのシグナルと杉の落葉　仝人
を奥津城に焚く
雪荒るる山住の夜に子の電話灯油はあるか食　諸角長子
べ物はどうか
雪落ちて空に直ぐ立つ杉木立の頂きあたり白　仝人
き雲ゆく
如月の雪は止むなく降りつぎて喪の家のみが　野村節子
深夜を灯す
池のめぐり雪残りゐて陽の射せば水底の鯉や　仝人
やに蠢く
冷えびえと窪の雪に変る夜啼きゐし山鳩いづ　安部夕波
こに眠る

柴栗句会二月作品

薬罐吹くことも独りや寒ごもり　淺野としお
余寒とは碧の彩かたとふれば　糸原古志
雪しんしんロシア民謡口づさむ　恩田和美
暖流の涯に抱かれし野水仙　小川敏子
雪晴れや天寿といわれみまかりぬ　加納信子
寒三夜炎に命を燃やす男　楠房子
立つ春の母が遺愛の糸車　高木白虹
散歩道水仙はまだ水の音　中澤美紀子
こぼれ餌を睦みあいつつ寒雀　新出谷一華
冥り来てほっとしてゐる雪の中　峯石美代子
睦まじや窓の氷柱と床暖房　渡部周行
立春や乱帙の部屋整へり　渡部夕峰

（4・5月は合併号299・300号として記念増頁号として5月に発行する予定です）

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六／二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第299号（4月号）
2000.4.8（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

シルクロード余話②

＝自動車に纏わる印象＝

特別寄稿　窪田蔵郎

絲綢の古道を車が行く

片側は一〇〇m以上もある崖、山の中腹を〝蜀の桟道〟よろしく、超狭い無舗装の道を私を乗せた車が走っていく。ここは長寿で知られるパキスタンのフンザ郷。杏の花が咲き乱れている、長閑な里を貫通する中パ高速自動車道の支道。この道路名前は良いが、本道でも乗っていてハラハラの連続、カーブでもガードレールなどは見当たらない。

この枝道を本道までジープで走ったが、この時の車には驚いた。正面に付いている計器はいずれもメチャメチャ。油量計は0を指しているし、スピードメーターは10km前の処で、上にも下にも行かずプルンプルン震えている。早く走っても止まっても依然として同じ。そのうえ、走行中に頭の上からしばしば落石がパラパラとくる。大きなのに見舞われたら一たまりも無い。落ちた場所は予備役の兵隊が、シャベルと猫車でノンビリと補修していた。

そんな道路だが、ペシャワールやイスラマバードとの間をバスが運行している。汚れたものが多いがえらく綺麗なのもある。しかし日本人から見ると、この綺麗という言葉は当てはまらないかも知れない。日本でもトラック野郎の車が仰々しく飾っているのを稀に見掛けるが、これはそんな生やさしい程度ではない。薄鉄板を花形や動物の形などに切り抜いて、ペンキで毒々しいまでに着色したのが、車体一面に取付けてある。車体に直接塗ったり書いたりしたものもある。蓮の花などが付いていると霊柩車ではないかと思ってしまう。美意識に対する国民性の違いであろう。

こんな極彩色の車が自慢らしく街道を、クラクションを高らかに鳴らしながら走ってくる。しかもこれらの車をターミナルなどで見ると、蠅が窓にビッシリ集っており内側は見えたものではない。少なくとも私の乗り込んだ車はそうだった。日本から廃車を買って二台分で一台に合成して造ったようだ、都会では鍛冶屋が少なくなり、修理組立屋が多くなっているわけである。

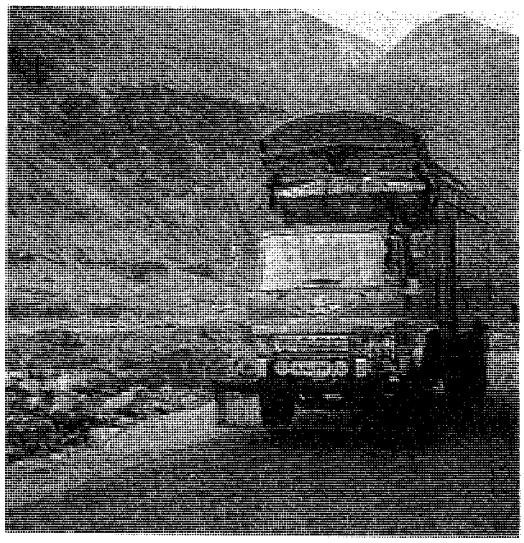
ちなみにこの長寿の里、高速道路が完成して車が頻繁に通るようになるにつれ、人々の寿命が短くなったと言う。歩くのが少なくなったためだと古老は零していた。

駱駝から高級外車へ変換

イラクに近いマリ遺跡からシリア砂漠を横切って、ゼノビア女王で有名なパルミラの廃墟に出る途中、ベドウイン族の天幕集落を通った。山羊か羊の毛で荒く織った薄汚れた天幕が五～六張りあり、家畜用の木の枝で造った囲い柵もある。耕地は少々ある程度でこれは自家用であろう。奥さんは老婆みたいな人から娘のようなのまで五～六人、子供が十数人いた。ガイドからお金持ちだからチューインガムなど上げないようにと注意された。しかし、それほどの富豪？にはどうしても見えない。

ところが天幕の裏に立派な外車がある。何故だろうこんな処に？白衣にターバンの精悍な顔をした御主人と一問一答して、驚いたのはその価値感の違いである。土地や家屋には全く拘らない。紙幣などは当座の使い分だけで、余計持っていても所詮紙屑同然だと考えている。国も政府も全く信用していない。何かあれば引越して行くのだから、余計なものは無い方がよいと言うのだ。家財道具などは見廻しても無いに等しい。

昔は駱駝を数頭飼っていたが自動車の方が、イザという時には機動性があるから良いという。ガソリンの備蓄分はドラム缶で砂の中に埋めて置く。低収入なのに車にだけは大変な金を注ぎ



中パ高速道路を行くキンキラバス

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

込んでいるようである。金目のものはこの車を筆頭にして、女達が（男も）身につけている金製の腕輪や足輪で、行った先（難民のような場合）で困った時に、ペンチで切って売れば、当てにならない貨幣や株券よりもずっと役に立つという。ズラッと入れている金歯も同じ意味かも知れない。

平和ボケした日本人には夢想もできない、不安定な状況下におかれている人々の、鋭い実戦的経済感覚である。



ここは高さが30m位だから助かった。
救援の来るのをノンビリと待っていた。

名産のナイフは日本産バネ鋼で

タクラマカン砂漠の西端近く、ローランやホータンを通過すると西域南道の終りに近付く場所に、ヤンギサールと言う町がある。もう一いき北西に進めばカシュガルになる処だ。

この地は古来有名なナイフの生産地。街道筋のところでは、二軒に一軒はナイフ屋である。そのうちの一軒に入って驚いた。ナイフを買うつもりはなく、どのようにして造っているかが知りたかったからだが、その薄暗い店に入って見ると、素材は総べて解体した自動車のスプリング鋼。伝統の中国産鋼といったら、古物はもちろん、地元産の鋼片や平鋼なども全く無い。しかも街を走っている車は大部分が、日産、トヨタ、マツダなどの中古車ばかり。

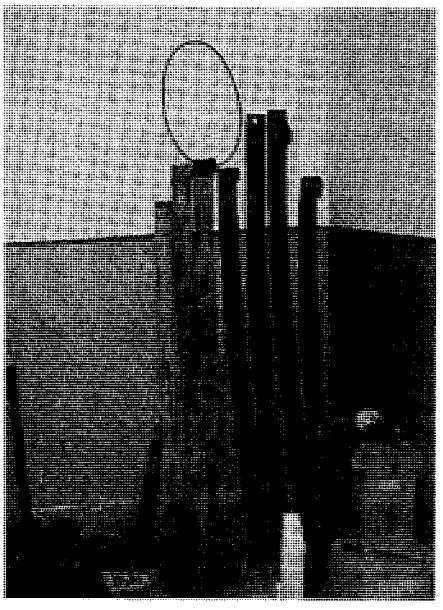
これではここでナイフを買って帰り、銘産ヤンギサールのナイフの原料はなどと、化学分析でもして論文を書こうものなら「何だこれは／愛知製鋼、大同特殊鋼などの、スプリング鋼社内規格と同じではないか」と言ったことになりそうである。庫車（クチャ）の町でもかなり大規模に製造していた工場を見たが、原料の点についてはやはり同様のようであった。

ちなみに廃却自動車がこのように利用されている位であるから、解体建材も火造り釘や蹄鉄になり各種の建築金物などになる。樹脂製品も材質別色別などに分けて細かく再利用されている。産業廃棄物が少ないというより、捨てないで何でも再活用してしまっているようである。

走っているからこれでも自動車

バクダッドは御承知の通り産油国の首都。それなのに経済制裁のためか、自動車は日本製のそれも中古車が多い。ガソリンスタンドに行くと、日本の大手自動車メーカーの車が、仲良く順番待ちをしている姿をしばしば見掛ける。それらの車は決まって後尾のところにTOYOTA、NISSANなどの文字が、20センチ角もある大文字で書かれている。ここまできて中古車の宣伝でも無いものをと思わせられるが、宣伝ではなくてこれが所有者の自慢なのであろう。

さてここで、今まで随分酷（ひど）い中古車を見てきたが、これ以上のものは世界中捜しても無いだろうと思うような、そんな車を街中で見掛けた。観光省の役人が知っていたから、案外名物になっているらしい。街角でバッタリ出くわしたのだが、車の化物としか表現しようが無い代物だった。



倉庫内のバネ廃材

その一度見たら話題になるような車だが、ボンネットもトランクもルーフも、もちろん窓も扉も無い。バンパーもだ。シャーシの前方にエンジンがあり、その後にハンドルと、粗末な木製の腰掛けに小さな絨毯（じゅうたん）が敷かれており、これで走っているから不思議である。日本ではポンコツ置場へ行っても到底見出せない。雨が少ないから良いようなもので、降ってきたら片手で傘でもさすのだろうか。車検どころの騒ぎではない。シャッター

を切るのを忘れて唖然としている筆者の前を、立派な髭のお兄さんが運転して悠然と走り去っていった。

シルクロードを廻っていて色々な車を見たが、これはピンからキリのキリの方の最たるもの、走行していたボロ車の中で正に横綱であった。車が走っているのでは無くて屑鉄が走っている、そんな感じの風景であった。

シルクロードで見た現地人の足長距離バスは、何処でも車内は喧噪に溢れて汗とハーブの臭いが充満していた。屋根の上にうず高く積上げた古毛布やアンペラの包み、高さの制限など無いからよいが車が横倒しになるのではとハラハラさせられた。



イラクのガソリンスタンドで見た日本の中古車
他は石油輸送のタンク車と少数の軍用自動車

田和山に浮ぶ出雲びとの古代

風土記

風土記の丘資料館を訪ね、四度目の常設展を見て出雲びとの古代を頭に描いた。見るたびに生活の輪郭が明らかになるが、ここではその出土地と周辺の風景のないのが欠陥で残念である。

説明を聞いて紀元前二世紀、二千二百年前の田和山遺跡の出土品に見入った。土器・石器の片々、銅剣に移る前と見られる石剣片もある。一部復元されている土器などからも、そこに弥生人の姿が浮かんでくる。長い間に育まれた生活の思想があらわれている。そこで先程見た、荒神谷・加茂岩倉の出土諸銅器が生きて来る。驚くほどの弥生人の思想とそれを表現する技術は、この遺跡全体が当時の聖地と考えられることと結びついて、現地遺跡見学への思いをせきたてた。

続いてそれから四〇〇年たった二世紀の弥生時代の、近くの友田遺跡の出土品があり、さらに四〇〇余年下った来実(くるみ)廃寺遺跡の遺物があった。長い古墳時代を経て、次々と大陸から渡来した文化を吸収して、日本文化をさらに豊かにしてきたことを見て感慨深かった。遺物・遺跡はその場所が大切である。近くの来実廃寺遺跡の現地に立寄って、古代人の生活と思想そしてその表現様式の発展充実を噛みしめた。

次いで県立美術館のロー・コレクションの、初期ルネッサンスから、バロック、印象派の絵画、そしてムンクまでを、心ゆくまで見入った。かつて一ケ月に及ぶ旅で西欧文化の満ちる各地でかみしめた感慨は一つひとつの絵画の生まれた風土、思想の推移、表現技術の進歩をより鮮やかに蘇らせて、味わい深かった。時間が少なく心を残して田和山遺跡に向かった。

島根考古学会員の案内で現地を十分に見学できた。まず高台から四周の遠景を眺めて写真にもおさめた。すばらしい位置と眺めである。これは弥生人の思想を育てその行動の原動力を導き出したものと思った。伯耆のむきばんだ妻木晩田遺跡も同じであるが、特にここは聖地の色彩が濃い。高地の中段には三段の環壕があり、最上の段丘には、祭祀の社や物見櫓の柱跡がある。いよいよ荒神谷や加茂岩倉の銅剣・銅鐸などとの関連が密接に感じられてくる。

こうした姿の遺跡は、日本では一つしかないものであるという。東北アジア大陸とのつながる推定がいよいよ深まってくる。「国引き神話」を生んだ、大陸との交流が色濃く浮かんでくる。

それは高台から東を眺めると伯耆大山、西へと島根半島の山並み、そして西の簸川平野へと続く眺めは、国引きの詩情として結実している。

奥出雲横田の住人は、雲伯国境の鳥髪の峯＝船通山に登って四周を眺めると、勿論弥生時代以来現在も、一望のうちに、東の大山から夜見ケ浜、そして島根半島の数々の山塊の連なり、西の大社の浜・園の長浜、そして三瓶山を眺めることが

無為の日　簸の上短歌会

昨日無為今日又無為と書く日記余白はさびしき雪の色なり　永井弥生
真直ぐに雪の降る夜はあたたかく向ひの灯火はたんぽいろに　仝人
春の陽にきらめく流れに歩みきて裡に溢るるものを覚ゆる　常盤はるまさ
大関に返へり咲きたる貴ノ浪千秋楽の拍手やまざり　諸角長子
春浅き道の辺の笹風に鳴り杳き旅立ちの日にもききにし　仝人
耳遠き友とゼスチャーを交はしつつ田の草取るにひと日は長し　宮廻愛子
長火鉢に鉄瓶の湯のたぎちゐて外はしんしんと淡き雪降る　野村節子
一合の晩酌に足らひ熟睡の夫のかたへにわれの平安　仝人
しんしんと雪ふりしきる鳩丘に今宵も狐の鳴く声きこゆ　安部夕波

柴栗句会三月作品

春めくやとっとっと語る出雲弁　浅野としお
余寒とは春が近づく足音か　糸原古志
三月寒し風が襷を横切る時　恩田和美
啓蟄を歩き始めの日と定め　小川敏子
冬すみれ異国に発ちし娘等送る　加納信子
竜年に生れて戦事に麦を踏む　楠房子
春炬燵インクも切れしボールペン　高木白虹
夢なせる絵馬の奏でる早春譜　中澤美紀子
三月や語感に生気蘇へり　新出谷一華
風花や躓づいて知る我が生活　峯石美代子
蕗味噌や母の香りとにが味と　渡部周行
春寒し摩文仁の丘の愁かな　渡部夕峰
侘びしさに夜ごと鳴らすや琴の春　錦織富江

できる。ここで国引きの詩章は完成したものと、2,000年を越えて実感する。

縄文人・弥生人も古代人も、恵まれた自然に対する感謝は敬虔と畏敬の念を育てて来ている。折からの春の陽光はまぶしく、その感を益々深くした。この土地・遺跡が現にあるからである。失われることは考えたくない。

同時代の出雲西部の二つの銅剣・銅鐸の出土地がまだ思い浮ぶ。自然への感謝と畏敬は生活のもとであり、祭りの出発点であり回帰点であった。

記録に残る友田遺跡は今は平地であって想像しても浮んで来ない。この聖地をもとに次第に国の拡がりが大きくなったと思われる。他地方にないこの遺跡は、精神と生活発展の原初を如実に語ってくれる。

再びロー・コレクションの作品を思い、風土は文化の母体であると思うことしきりであった。

この遺跡と同時代が、さきの銅器出土の時代である。それらを重ねて始めて出雲びとの生活が描かれる。そして遡って縄文人の、降って西谷墳墓群から四隅突出型墳丘墓時代、出雲国の成立、来実廃寺へと歴史が充実

4月28日の大社町の発表によると、出雲大社が平安時代後期(11～13世紀)ごろ、本殿が48mにも及ぶ巨大建築であったと伝えられていたことを実証する、9本の柱の1本(丸木柱3本を束ねて直径3m)が発掘された。この社殿は弥生時代の田和山遺跡の高台の祭祀の社の形を継承し、発展させたものと考えられるという見解も出されている。

斐の上川柳三月の句

外は雪鉢の花見て春を待つ　真綿よし子
新入生いない集落昼静か　児玉哲呂
いびき止め買ってしかけてお楽しみ　足立玉恵
名も知れぬ草も美わし病みあがり　勝田みのる
リハビリになるかもしれぬ落葉かく　藤原のぼる
炬燵番春にそなえて充電し　安部正子
黒砂糖黒くなりそな味がする　児玉えみ
尻炬燵もそろそろ終り畑見る　藤原千代子
一ケ月とうとう風邪といくさする　松浦久寿
雪消えて狙われている蕗の薹　渡部ミツコ
白髪へ春が来たよと雪しずく　田中有樹絵
ふたり居て痛い痛いとこぼし合う　松浦亜以
平凡にやって見たいが暇がない　田中芳春

古代出雲の実力・勢力・経済力を推定でき、その技術力にも目を向けざるを得なくなる。

(4月29日追記)

場所は他に求められる。すると保存される田和山遺跡は永久に伝えられるものとなって億金の値打ちとなる。(今年の2月3日の見学会のあとで)

この遺跡は価千金である。他の計画施設も価万金であろうが、

1975(昭和50)年5月第1号を出した。『奥出雲』(当初は横田文化)も25年を経て、第300号となる。横田史談会はその秋結成されて今日に至っている。

見学会も35回を数え、京都一泊見学をはじめ、多くは日帰りであった。当初はバス1台60人の参加者で盛会であったが、旅行ブームによって減じたが、陰陽各地の見学を続けている。

古文書を読み古典を読む会も200回に迫っている。

(横田史談会　高橋)

会員頒布一部二〇〇円／〒六九一-一八　島根県仁多郡横田町一、〇三一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎(横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇-九-一二四〇四)　頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
(電話・電送兼用　〇八五四-五二-〇一九一)

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第300号（5・6月合併号）
2000.6.3（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

中世の横田庄と出雲を 岩屋寺『快円日記』に見る①

—全文解読により—

300号を記念として、40年前全文を解読して引用していた『快円日記』の全文に、『大永の古記録』全文も加えて、時代と地域の舞台の中で記述する。休みながら長期連載の予定。『奥出雲』に連載したり、拙著に載せたものを補正して本号にのせ、序とした。

金巌山岩屋寺

平安仏教の特色のひとつ山岳修行場としてこの地に創建された。横田八幡宮が山麓に移転再興されると、やがて神仏習合思想からその神宮寺ともなり、武士そして庶民の信仰をあつめ、修験者の修業の場ともなり、中興僧佑円によって寺勢は大いに上り、横田庄の一荘官も兼ねるほどであった。16世紀に入ると三沢氏が横田庄に入ってその荘官となったころ、中興の傑僧快円の登場となり、21坊100余名の僧を抱える奥出雲の霊場となった。やがて三沢氏の家臣石原氏によって弘法信仰が高まり、庶民の信仰もあつめて今日に至っている。岩屋寺といえば弘法さんと言われるほど、近国に名を知られた。

中世の記録が多く、横田庄の解明の根本資料となっている。中世以来奥出雲の真言宗系諸寺の中心となり、近世では松江の千住院の住職となるものも多く、松江藩の相談役として重きをなした。明治時代半ばよりわが国の革新僧侶として、教育改革も唱えて中央で活躍した雲照律師は、若いころこの寺で修業した。今も本堂には快円が当時富田（現広瀬）に於いて求めた仏壇などが置かれている。

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸に
をちこちに美しくも成りて

燐々と暗をてらせる
その塔のすがたかしこし

むさぼりて厭かぬ渠ゆえ
いざここに一基をなさん

正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

横田八幡宮

13世紀半ばすぎ1281（弘安4）年、第2回の元来襲の2か月前に現在地に移されて以来、横田庄の守護神として武士や庶民の信仰の中心となった。8月15日の放生会の祭典には、郷内6か村の農民の奉仕によって大催小池氏（出雲国は近江国の宇多源氏の一門佐々木高綱）、各地に移り住んだ地頭によって、半世紀にわたる源平争乱も終りを告げた。幕府の基礎づくりを終えた頼朝が没すると、実権はその妻政子の実家北条氏へと移っていった。これをみてふたたび貴族政治復活をねらっていた後鳥羽上皇を擁する京都方は、幕府討伐を考えた。これを知った幕府方は直ちに兵を進めて京都に迫り、梅雨あけの宇治川渡河作戦に成功して京都方を敗り、その所領3000余か所を没収しそれを恩賞として多くの関東武士に与えた。こうして各地に新補地頭が置かれ、武家政治の体制は一段と整った。これが承久の乱である。

の登御の行列が行われ、社前の長い広場の中央仮殿に移した神体とともに待つ、岩屋寺僧・神官と合流して本殿に到着し、上座に大催ついで僧、下座に神官が着座して祭典を執行した。この費用はすべて大催所有の免田からの収入でまかなわれた。放生は行列に参加した馬を放つ行事であって、この馬の行方で稲作の豊凶も占った。明治期半ば1890年ころまで続き、雲伯備国境地方最大の祭典であった。

弘安4年以来の棟札すべてがあり、当座の歴史資料として貴重なものである。

13世紀執権北条氏のころ

12世紀末、源頼朝によって京都中心の貴族政治が終り、武家による鎌倉幕府が成立し、源氏の氏神となった石清水八幡宮の全国の荘園は手厚い保護を受けた。横田庄の開発領主であってそれを石清水八幡宮に寄進した、元郡司系武士横田氏はその力を弱められた。八幡宮は新しく一人の荘官をこの地に送った。荘官「催」職の小池氏である。

全国の各国々に置かれた守護

こうした情勢をみて動き始めたのが横田庄の北方の広い地域、三処郷をもつ地頭三処氏（仁多郡の郡司で首席の大領の末孫か）であった。三処左衛門長綱は横田庄の荘官の一人（預所職）にも任ぜられてからは、領家八幡宮への貢納品（年貢鉄あるいは年貢銭）をとかく滞納し懐を肥し、時には乱暴もし八幡宮側に味方する岩屋寺に火を放つなどし、領家と荘官預所職の地頭と

300号　岩屋寺『快円日記』に見る・回顧と感謝・短歌・川柳・俳句

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

の争いは絶えなかった。ほかの荘官の報告によって八幡宮は幕府に訴えるが、地方武士も掌握したいとしている幕府は煮え切らない対応をし続けた。

ところが執権北条時宗の異母兄時輔が京都六波羅探題南方となり、伯耆出雲にも勢力をひろげ、出雲では八幡宮領の竹矢郷（平浜八幡宮）・横田庄ほかを支配することになり、三処氏は三処郷内へ押さえ込まれてしまった。元来襲によって西国地方は緊張を加え、西国の社寺に対しては「敵国降伏」の天皇の祈願文がしきりと届けられ岩屋寺にも届いた。源氏をはじめ武士の守護神として信仰をあつめる八幡宮の神宮寺として、庄内における力と信仰をあつめるため、北条氏（時輔の母で、時頼の後室妙音尼）を動かして、八幡宮を庄内の南の尾園村から岩屋寺の山麓現在地の馬場に移したのは、覚満のあとをついだ怙円であった。怙円は東大寺と石清水八幡宮のかつてのゆかりから、岩屋寺は行基の開基した寺であり聖武天皇の勅願寺でもあったとして寺格を高めることも考えた中興僧であった。

南北朝時代

1313（正和2）年妙音尼の没後、当庄は鎌倉鶴岡八幡宮ついで京都六波羅密寺の造営料所となり、のち内裏（皇室）御料所となった。そののち持明院統（のちの北朝）の仙洞（上皇）御所御料所となって、その代官として安部氏が下って来た。鎌倉幕府が亡び建武の親政に復すると横田庄はふたたび石清水八幡宮に寄進されて八幡宮領に復したが、南北朝の対立時代に入ると、修験道当山派が持明院統にくみし武家側がこれに加担したため、再度仙洞御料所となった。やがて足利・山名両氏が入り乱れてこの庄に触手をのばしはじめた。

一方北方の三処郷は大覚寺統（のちの南朝）に属し、建武の中興による恩賞によって鰐渕寺（簸川郡）の僧頼源がこの庄の地頭職を与えられた。のち親政に不満をもつ武士の棟領となった足利尊氏によって親政は崩壊し、当地方でも三処郷と横田庄は南朝と北朝に分かれて対立し、岩屋寺と高田寺の争いにも発展し、武家勢力側に立つ岩屋寺によって高田寺は押さえられ、岩屋寺に服する立場に追い込まれた。

足利尊氏の勢力が安定して来るとその下にあった山名氏は、伯耆を中心として勢を拡大し横田庄に進出した。このころ仁多郡西部三沢郷の地頭飯島氏（改姓して三沢氏）はその地盤をかため、同じく土着成長した飯石郡三刀屋の地頭諏訪部氏（改姓して三刀屋氏）とともに——両氏は新補地頭で清和源氏流の信濃源氏の同族——足利方に協力した。やがて伯耆守護山名時代の子師義は積極的に横田庄内に働きかけ、岩屋寺も保護した。その子時義（但馬・備後・伯耆・隠岐の守護）は、横田八幡宮の遷宮の本願ともなり、岩屋寺への寄進もしきりと続けた。そして時義の弟満幸は丹後・出雲の守護となった。このころ横田庄の南方備後国境の馬木郷には、山名氏の一門馬来氏が地頭として来住した。南の山一つ越えた備後国の地毘庄（庄原市周辺）には、関東武士山内氏一族が早くから地頭として来住、土着してかたい地盤を築いていた。

守護山名氏がしきりと岩屋寺・八幡宮に寄進を続けたのは、民心を握り庄内の名主層（地主）そして現地在住荘官を味方に引き入れることによって、それらが荘園領主（このころは仙洞御所と石清水八幡宮）と守護の双方に、秋波（色目）を送ることを断ち切ろうとしたからである。

明徳の乱

このころ山名氏は「六分一殿」と呼ばれ、一門で全国の六分の一を支配するまでになっており、将軍足利義満にとってはその勢力はあなどり難く、眼の上のたんこぶであった。

1390（明徳元）年義満は山名氏の嫡統時義とその叔父氏清・弟満幸とがかねてから不和であったことに目をつけ、時義が生前将軍をないがしろにしたということを理由にして、二人に時義の子時熙・氏幸を討たせた。時熙は本拠但馬より領国であった備後にのがれた。そしてここで守護として山内氏に所領を安堵（認め）して、被官（主従）関係を結んだ。討伐後、時熙の領国但馬を氏清に、氏幸の領国伯耆・隠岐を満幸に与えたので、満幸は丹後・出雲とともに四か国を領することになり、その勢で仙洞御領所横田庄に本貫地（本領）丹後の石原庄から家臣石原氏を差向け、これを横領してしまった。

その後仙洞上皇は度々教書を下して、その返還を求められたが応じなかった。これを知った義満は態度を変えて、先に討たせた時熙・氏幸を許し満幸を追放しようとした。ここで満幸は三度の教書を頂けば返還すると願い出でた。勅使・院司別当中納言日野家斉と下司斉藤左衛門尉が横田庄へ下ったが、山名方代官石原氏は地元民をそのかしてこれを追い払わせたので、上皇は立腹、義満は満幸の守護職の改易（とり消し）を決定した。ここに於いて満幸は「これは山名一族を亡ぼす計略である」と氏清と謀って兵を挙げたが、山名一族の結束は手遅れのまま1391（明徳2）年12月26日両軍は京都の西の内野で激突した。

出雲・隠岐・伯耆・丹後の兵1700余騎の山名満幸方に対して、勝利の確信のなかった足利義満は、思わぬ氏清の戦死と、戦線の乱れによる満幸の逃亡によって勝利を収めた。この時参加した三沢5代尾張守為忠は内野で討死した。

奥出雲251～300号 内容項目別一覧表（数字は号数）

古代編

① 出雲讃歌（286）

② 1枚の木簡の発見から（294, 295, 296, 297, 298）完

中世編

③ この頃（秀吉）の奥出雲（255）

近世編

④ 年表を読もう（洋学の輸入と外国人の来航）（284）

時代・地域と奥出雲

⑤ 秀吉の時代の奥出雲
（252, 253, 255, 257, 258, 259, 260, 261）完

⑥ 奥出雲と毛利氏
（262, 263～4, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 274～5）完

⑦ 徳川慶喜とこの地方（278～9, 285）

⑧ 元禄時代の奥出雲（288, 293, 294）

たたら製鉄

⑨ 明治以降の奥出雲に於ける銑生産の系譜⑬
続（251, 253, 256, 265, 266）未完

⑩ 奥出雲のたたら製鉄史㉖
続（267, 268, 269, 270）未完

⑪ 奥出雲の近世企業たたらの発達過程
（271, 272, 273, 274～5,, 296～7）未完

⑫ 金属の歴史国際会議報告（280）

⑬ 明治初期に於ける仁多郡の経済事情
上・中・下（282, 283, 287）

⑭ 新編奥出雲の砂鉄小史（289～90）

神社と寺院

⑮ 横田札所めぐり⑭
（255, 256, 257, 280, 283, 285, 289～90）未完

⑯ 出雲国内の朝鮮関係神社
（265）

歴史と風土

⑰ しん仁多郡風土記①　（270）未完

小字の歴史

⑱ 村と町の変遷①（287）未完

人物

⑲ 米原清男（亀嵩）の足跡（278～9）

諸史

⑳ 鉄の来た道－トルコから日本への奇跡
（増 254）

㉑ 史蹟めぐり－備中成羽町と横田
上・中・下（256, 257, 262）

㉒ 中国・朝鮮・南方から出雲（日本）を考えてみる
⑦ 平安遷都のはじめ（289）未完

㉓ メソポタミアの鉄文化（291～2, 293）

㉔ シルクロード余話（297, 299）未完

民俗

㉕ ハッケヨイ、ノコッタ（284）

随想

㉖ 宮沢賢治生誕百年④
（252, 253, 255, 256, 257, 258, 259, 261）完

㉗ 墨跡展にみる時代（281）

㉘ 日本にとっての中国儒学瞥見（281）

㉙ 辰のとし　（296）

提言

㉚ 田和山に浮ぶ出雲びとの古代

◎ 俳句・短歌・川柳（地元作者）　毎号
（御協力に感謝します）

回　顧　と　感　謝

横田史談会は、1975（昭和50）年に発足して25年になりました。戦時中の1939（昭和14）年、敬友藤原道夫君から発見されたばかりの、「宮沢賢治の詩一篇」を示されて以来61年、時あるごとに私の脳裡に浮んで来たのでありました。教育職時代は激動し見通しない時代でしたので、諸学校の教育に若さで熱中するかたわら、地元の学校在勤が長かったので、音楽・読書を中心として、楽しみそして懐古し明日を考える文化活動に昼夜をつぶしました。

退職後はこの会の運営に日夜努力し、郷土の古代史とくに中世史、また近世近史とくに奥出雲の砂鉄製鉄業（企業たたら）の究明に力も注ぎました。それらは会員の皆様や多くの同好者の支えで、『奥出雲』（50号までは横田文化）に、皆様の発表とともに掲載してきました。高齢者の増加は基盤を揺るがしていますが、篤志を頂く方や、数多くの研究者の方々から受贈する著書や学会誌あるいは抜刷、学会の方々との資料交換によって、それを宝物にかえて運営を続けてまいっています。資料は夥しくありますが、頭の回転が遅くなったのを用心して、考察に誤まりない努力をしております。

『奥出雲』300号となり、和歌・俳句・川柳の地元の同好会の作品も毎号載せて頂いており感謝しております。

『奥出雲』にのせて修正し、『山陰史談』『風土記論叢』『季刊文化財』に少なからずのせておりますが、島根史学会会報の古代から現代に至る各種の論文で参考となるものの一覧表に1993年までで　37　も採用集録して頂いて恐縮しています。

その他、中央の各種学会誌（主として鉄）にも要請をうけたり、また2つの国際会議でも発表を要請されたりして感謝しております。特に日本鉄鋼協会の ①『ふえらむ』あるいは ②『バウンダリー』③『金属』などに掲載して頂いたものは、温い眼を注いで頂いてよろこんでおります。そして数多くの研究者の貴重な論文の中にも引用して頂き、また『奥出雲』掲載のものまで引用して頂いて恐縮しております。それは当地の系統的資料が保存されていて、その集計がお役に立っているものであります。「㈶絲原記念館」蔵の文書を中心に、卜蔵・杠・桜井・田部ほかの鉄師の文書も加えられているからであると思います。責任を感じております。

また、「鈩場」と「大鍛冶場」の工程を一貫して経済的視点からとらえて、「近世企業たたら」として述べていますが、「企業たたら」の語は次第に使って頂く論文が多くなりました。「四日押から三日押」への操業の合理化は、近世企業たたらが銑生産を目的としている、真砂砂鉄地帯のたどる技術史（経済とともに）であったと考えています。『ふえらむ』発表論文の数字のさらなる詳細な紹介と、それと符号する、鈩場番頭の記録を紹介したいと考えています。（日刀保たたらは当地の三日押の技術の中から、鍔のみを生産する新三押と私は位置づけています）

① 1996. 11月号　② 1997. 6月号　③ 1991『金属の歴史』

また、伯耆国の下原重仲の『鉄山必要記事』（鉄山秘書）にも、10余年前から同時代の中国地方の4鉄師の経済記録部面から問題をもち、最近貴重な傍証を得ることができましたので、協力して頂いた方とともにまとめることにしております。

終りに、『山陰史談』に2回宛にそれぞれ分けて登載して頂いた「仁多郡馬木郷地頭馬来氏」（12, 13号）と、「仁多郡地頭三沢氏」（14, 20号）の論文は、旧島根県史・新修島根県誌・仁多郡誌・島根県横田誌（但三沢氏記述の冒頭部分）・仁多町誌の記述の根本的誤りを訂正したものであります。この論文が修士・学位論文に用いられていることは感謝しております。また『奥出雲』207号の「信長の時代の奥出雲6」の横田庄の貢納の記録も、学術論文に用いられております。町内岩屋寺の『快円日記』をこれからまとめますが、終れば、奥出雲と横田庄と三沢・尼子・毛利の3氏についてまとめたいと思っています。

古文書を読む集い

島根県立図書館の絶大な御協力により毎月開催し、出雲・奥出雲・町内の古文書を読む会をはじめて262回を数え、途中から加えた古典を読むは、『出雲国風土記』全巻、『日本書紀』全巻（あと2回で）を100回を越えて読了することになります。

研究会の主催・共催

見学会　10回。　講演会　8回。　講座　8回。

主催○横田たたら研究会（はじめは勉強会）　15回
- うち全国規模で北海道から沖縄まで参加　8回
（県文化ファンド・横田町・日立金属鳥上木炭銑工場、絲原記念館協力で）

○陰陽郷土史研究会　4回
○先覚者を語る会　2回

協力・共催
○島根県近世史研究会　2回
○出雲風土記研究会　2回
○たたら研究会　横田大会1回
○産業考古学会　横田大会1回
○BUMAIV金属の歴史国際会議　横田会場

他　横田紹介展（松江において）横田町内仏像展（町内）　郷土偉人遺墨跡展　2回

史蹟巡り

京都市（1泊2日）	御所・石清水八幡宮・泉涌寺・六波羅密寺
岡山県	津山市。奥津・上斎原。成羽町。倉敷。高梁市。倉敷市。岡山市。総社市。
鳥取県	倉吉市。名和町。大山。鳥取。米子市。日南町。
広島県	福山市。神辺町。西城町。東城町。高野山町。広原市。三次市。吉田町。
県　内（3〜4回の地もあり）	石見銀山。吉田村。荒神谷。加茂町。県埋文センターとその付近。風土記丘とその周辺。熊野・八重垣・神魂神・広瀬町、安来市　他郡内の町内。　（計　50余回）

その後再起を期した満幸は伯耆に下った。たのみとしていた富田城（能義郡）にいた満幸の出雲守護代塩冶駿河守も30余騎のみであった。その上駿河守の父上郷入道は足利方に下り、駿河守も二君にまみえずと自害した。この時山名方に加った馬木郷の馬来氏綱も、富田城下吉田村で討死した。満幸は失意のうちに削髪し、主従5人で筑紫へ逃れた。この年10月、60年に及んだ南北両朝の対立も終り、合体して北朝の後小松天皇の時代となった。

この山名氏の横田庄横領の10年間の代官石原氏が、居を構えその砦としたのが、仙洞御料所内の八川の三笠山であったと考えられる。この後石原氏は逃れて三沢郷の三沢氏をたより、再起して子孫がふたたび、三沢氏の代官として横田庄に入るのは、それから半世紀の後のことである。また仙洞御所から下向した勅使が代官に追われて、九死に一生を得たという場所が、今も地名として五反田の東方に「ごよん（五位の）橋」として残っている。

明徳の乱哀話

1390（明徳元）年も押し迫った10月29日、洛西内野の一隅にある八幡宮の社前に集った山名氏の若党の中で、わけても山口・森下・旗津・鹿野・小鴨そして家喜九郎の6人は、心に誓い合うことは同じであった。九郎が言うのには「京に上って久しい。御所様の御旗の下にあるべきなのに、主君がこれに敵対されたので今は京へ攻めのぼることになった。勝っても負けても逆徒の汚名はうける。このうち一人でも討死したら、ほかの5人もみなともに枕をならべてあの世へ」と。そして神前でこの志でと契り合った。その後二条大宮の合戦でほかの5人が討死したと、九郎の中間が告げて来た。九郎はわが身の不覚と馬を駆って二条大宮へ至り、大音声とともに敵方赤松勢の真中へ割って入った。たちまち馬を斬られ九郎も5～6か所深手を負った。太刀を杖に「南無阿弥陀仏」と念仏して大宮へと歩むところを、山名時熙（義満方）の兵が囲んで首をはねた。その時左の鬢に少し切ったあとがあったので怪しんだところ、最後まで付いていた九郎の中間が「29日に八幡宮から九郎どのが女房へ送った手紙の中へ、その鬢の髪をひとふさ切って巻きこめて送られた」と話した。

この女房はもと姫子（貴人の娘）で東洞院（貴人）の思いものであったが、九郎と知り合ってからは四条のあたりで母とともに住んでいた。九郎が届けた手紙には、「われが討死するとも、軽々しく我との交りを語りたもうな。それでこそ草葉の蔭で嬉しく思う」とあった。母とみた妻は「生涯を契った仲である。さまをかえしてほかの袖による心はない。この心を伝えたい」と、自分の髪を切って19才の年の暮、濃き黒衣にかえ、歌一首に水々しい黒髪を添え使にことづけた。

一すぢに思い切りつゝくろかみの　かゝる乱れの世を嘆くかな

これを読んだ九郎は、思い残すことはないと片身と歌を肌に守り入れて、次の日討死したという。

1520（永正17）年、尼子方の兵火によって全焼した岩屋寺の復興のため、院主として登場したのは快円である。この時38才であった。その後20年生涯をかけて復興に努力し、本堂をはじめ21坊をことごとく完成した中興僧である。この快円こそこの横田庄に端を発して始まった明徳の乱で討死した、家喜九郎の忘れ片身の末孫であるとは、奇しき縁にしである。乱後その子孫は生国因幡へは帰らず、流浪し主君山名氏の縁でその一族、横田庄の南馬木郷の地頭馬来氏を頼ってそこに住んだ。父は家喜藤兵衛、母は三処郷湯野（亀嵩）の佐藤彦右衛門の嫡女であった。

快円の父藤兵衛は当時尼子氏との合戦で大原郡で討死した。

この明徳の乱については、冒頭に雲州横田庄との書き出しで綴られている「明徳記」1巻にくわしい。1巻をなすほどこの乱は、将軍義満が宿敵山名氏の勢力を削いで地位を確保した天下分けめの戦いであったことをしめしている。奥出雲の奥・横田庄が争いの発端となるのは、そこにそれだけの値打ちがあったからである。戦国の軍略上の要衝でもあったし、社寺の信仰の中心でもあったが、この庄の

麻播桜よ　簸の上短歌会

斑雪踏みて金縷梅の一枝に谷いそぎと呼びゐし母はるかなり　永井弥生

臥す妻に奇蹟念ひて見せたりしおととしのごと満開の桜花　常盤はるまさ

ストレスのたまれる頃と娘の誘ふ人波つづくさくらの道を　宮廻愛子

営林署を退く友の便り読む夫も辞して十年を過ぐ　諸角長子

向ひなる古刹の丘に咲き満つる麻播桜よ縁に茶を汲む　野村節子

愛くづれ別れは告げず葦切の鳴ける湖畔をあてなく歩めり　安部夕波

斐の上川柳三月の句

草けずり一時間でも大仕事　児玉えみ
半日ですんだ田植のあっけなし　藤原千代子
大相撲夏場所テレビ楽しみに　足立玉恵
少年法十七歳をもてあまし　児玉哲呂
同窓会喜寿でみんなが爺と婆　横山まこと
連休を喜ぶようにホーホケキョウ　渡部ミツコ
見送った弟の顔が目に残り　真綿よし子
一人の灯ひとりの闇にもなれてくる　松浦久寿
人生の節目にとどく年なのか　安部正子
賑やかに子や孫揃い法事済み　松浦亜以
人生の節目悪魔の十七才　田中有樹絵
錆止めはいらぬ手足は未だ達者　田中芳春

柴栗句会五月作品

蕗の葉に雹突き刺さる午の闇　浅野としお
てまり花咲き出す幼きみどりいろ　糸原古志
つばくらの追い越し行くや田代掻く　恩田和美
三千院青葉楓の重りて（京都）　小川敏子
筍の少しのえぐみも味として　加納信子
五部咲きの牡丹に詫びて鋏いれ　楠房子
芽木若葉息吹く梢の村境い　高木白虹
飛行雲夏めく空をまっすぐに　中澤美紀子
筍寿司在りし日母をふと想う　新出谷一華
少年の心いづこや若葉闇　錦織富江
母の日や小さな愛が背をなでる　峯石美代子
保育所の親子遠足筍掘る　渡部周行
筍があれば事足る昼餉かな　渡部夕峰

生産力も無視してはならないと思う。

（4頁横書きの続き）

『奥出雲』発刊。横田史談会発足以前から御指導頂いた研究者の先生方のお力が、私の支えでありました。また各種の研究会等が当地で開催できたのも、同様な御指導御支援があったからで感謝の至りであります。

故人では

山崎俊雄　飯田賢一
大橋周治　芹沢正雄
飯塚一雄　並河孝義
加藤義成　伊東　錫（国韓）

そのほかの先生方、休養中では

今井勇之進　葉賀七三男

先生がおいでになります。また

北海道　秋田　岩手　宮城
福島　千葉　埼玉　栃木　茨城
群馬　東京　神奈川　静岡
新潟　富山　石川　静岡　長野
愛知　三重　滋賀　京都　大
阪　兵庫　奈良　大阪　和歌山
岡山　鳥取　広島　山口　高
知　福岡　熊本　大分　鹿児島
（種ケ島含む）　島根の各地で御活躍中の先生方のお顔を思い浮べ感謝しております。学会で学会誌で、見学会で、当地に御来町頂いて各種学会、研究会で御指導頂き、また当地からの調査協力や資料提供を頂いた数は、整理した文書が示しています。有難うございました。創刊当初から貴重な御研究を掲載頂き、現在もシルクロード余話を頂いている、窪田藏郎先生の40余年の御厚情には頭が下る思いであります。ほかに外国の方もおいでになりますが、ドイツのマールブルグ大学の日本文化研究所長のエリック・パワー先生にも御夫妻ともども数回来町頂き、講演もお願いし、研究物は英文出版の2編著にも登載いただき感謝の限りであります。

春尽唱　簸の上短歌会

表装は幼き日の夢朱のいろ八十歳にして雛の軸求む　永井弥生
田ごしらへに疲れし夫がリモコンを握れるままに眠りをりたり　宮廻愛子
山に入りて美しと他人の写したる桜も桃も風に舞ふなり　諸角長子
一枚ののめは炙るにたちまちにこはばりてゆく独りの昼餉　常盤はるまさ
ぜんまいが伸びたと義姉より電話あり何はさておき山へ来りぬ　野村節子
君と来し夕映岬に佇みて最後の別れを告げて切なし　安部夕波

製鉄に関する学会発表、学会誌登載頂いた小論や、当誌に幾つか連載しているもの（未完もあり）を、貴重な資料を拝見している（財）絲原記念館の御了解を得て、詳細に述べて1冊にとも思っています。また史料豊富な中世横田庄も同様にと、地頭三沢氏・馬木氏の全貌を明らかにしたいとも思っています。

「この地の自然は　心の鏡」であることを、いよいよ強く感じております。

（横田史談会　高橋一郎）

会員頒布一部合併号で三〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、四二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）

奥出雲

題字　糸原風亭書
第301号（7月号）
2000.6.3（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

中世の横田庄と出雲を 岩屋寺『快円日記』に見る②

下の文書の1、2、3、4、の根拠となる文書はすべてあるが、ここでは『島根県横田町誌』に文書を加えて載せてあるので省略した。そこでこの項目のそれぞれの時代背景について、前300号の①で序文として要点を述べた。本号では若干補足するにとどめる。

衰退していた岩屋寺を再興したのは、源頼阿闍梨と号した祐円法師である。1272（文永9）年北条時輔が執権北条家の後継者争い（執権時頼の長子が時輔で母は出家した尼妙音。時宗は時頼の室の子、異母弟で将軍となる）によって殺されたが、母の尼妙音は、1313（正和2年死亡）年まで横田庄に所領を維持していた。祐円はこの尼妙音の力を借りて岩屋寺の復興に努力したものである。

横田八幡宮を現在地に、1281（弘安4、第2回元来襲の2か月前）年、庄内の南方の地から現在地（岩屋寺の山麓）に移したのも、本願は尼妙音である。その後30余年尼妙音は没する前まで、庄内の寺社や郡内他郷の社寺に寄進を続けている。

岩屋寺は勅願寺のため、賦課を免除されていた。快円が大林坊院となった時に、三沢郷地頭三沢氏は、荘園横田庄の代官として支配をまかされた時にも同様であった。

④については、日記を残した快円が自らの経歴を書き留めたものである。

前号でくわしくのべたが、快円の祖、家喜九郎の遺児が、明徳の乱後代々諸国を流浪して、横田庄の南馬木郷の地頭馬来氏を頼って仕えたのは、次のような経緯である。

（『島根県横田町誌』にも短く触れているが、詳細は『山陰史談』の1977年12・13の2号にわたって記述してあるので参照されたい。）

（紙表）金巌山岩屋寺快円日記

（本文①）

為後見日記

1 ①
一、横田庄岩屋寺再建旦那関東最明殿後家　六波羅之尼岩屋堂殿妙音　式部大夫時輔（スケ）ノ母儀　於二六波ラ一滅ヒ　正和二年十二月廿八日月忌□

2 ②
一、當山初度建立開山者行基菩薩也　再興天台之末葉祐圓法印号ス二源頂阿闍梨一ト九月廿六日一遷化　此法印之檀那妙音禅尼ナリ

3 ③
一、當寺者依禁裏勅願寺成　代々諸役従内裏免許之上者　一向為于時地頭一ト非儀之旨諸役停止也　今度三澤遠江守殿横田ヘ隠居之時　従寺領分者共頭付雖申付候　来福寺快円大林坊院主之時　堅依申分一ルニ寺家役ナトノ事ヘ不及申　地頭分頭付免許同駄之口（クチ）免許之由　同三沢次郎四郎殿為国判形被成候早　并當山四至傍示之堺阡陌之制札被出畢　永正十七庚辰潤六月七日清書之状制札自身有登山被持早　此月二王堂之面櫻ノ下石口　地頭築駄坊之柱ニ木被立早

4 ④
一、大林坊院主職之事　代々老僧次第也　乍去依事闕地頭以内裏寺家間　来福寺快円大阿闍梨　永正十七年庚辰六月廿六日入院候畢　行年三十八　俗姓者但馬山名之内家垣九郎明徳二内野合戦之時被討早　其後□□為子孫不帰国牢浪　出雲馬来上野守頼所牢人之間　同心富田、被□□吉田合戦討死ス家垣藤兵衛尉息　母者佐藤彦右衛門湯野之□□□（欄外）大東力ニ　楽ス山ニテ討死之嫡女也

最上段の番号は『快円日記』の記事を時代順としたもの。2段の番号は日記の中の記載順。やがて3段が入るがこれは『大永の古記録』に記載順の番号。

『早』は『畢』と同じ。「おわんぬ」で終りの意味　傍示（ほうじ）は境界の標識）か

301号　岩屋寺『快円日記』に見る②・シルクロード余話③・短歌・川柳・俳句

勅願寺　天皇みずから仏に鎮護国家・皇室安全を祈ること。このような祈願をあげるべき寺院は、綸旨（天皇の仰せを伝える文書）によって定められている。寺院側ではその権威を誇示しようと、勅願所に定められることを熱望した。

馬来氏はもと山名氏清の一族で、山名満幸が出雲国守護になった時、摂津国馬来郷から、仁多郡馬木郷へ所替えになったものである。その14世紀半ば以来16世紀末葉（天正年間）まで在住し三沢氏とともに毛利氏の直轄領となった仁多郡を引き揚げ、広島に移り、毛利氏が防長2国に支配を縮められた時、萩城下に移った。のち三沢氏は毛利支藩長府藩家老となり、馬来氏は萩城下に住み仕えた。（末孫は現在4家が健在である）

この馬木郷の馬来氏が山名氏の一族のため、家喜氏は移って来て、馬来氏に仕えたものである。それは父が祖父か不明。

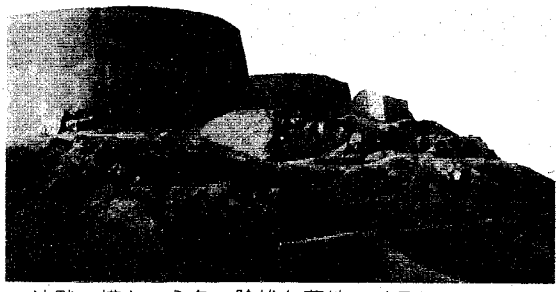
快円の母の佐藤氏については現在まで明らかにできていない。「湯野」は横田庄の北隣の三処郷内の現 亀嵩の湯野と思われる。

〜〜〜

昏の迫ってくるその上空を何時までも、禿鷹が六羽も七羽も輪を書くように飛んでいた。何とも凄惨な風景でした。

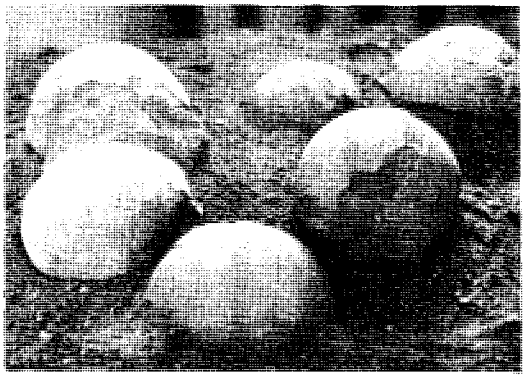
恐竜の骨と卵

首都ウランバートルから南へ五二〇キロメートル、草原の中に滑走路も無いゴビの飛行場がある。そこからほど遠くない所にある、小さな恐竜博物館で卵の化石を見た。ガラスケースの中に泥土を敷いて、発見された状況が判るように展示してあった。発掘場所は空港から七六キロメートル北西に行った、バヤニザク渓谷とよばれる地帯で一面軟質の赤土でできた広大な丘陵。白亜期の後期というから七〇〇〇万年から一億年位前のもの。小さくても二メートル、大きいと十八メートルにも達する周知の巨大な動物の卵が、僅か長径十七～八センチ、短径十～十二センチ程度で、駝鳥の卵位しか無いのには余りの小ささに驚かされた。殻の厚みも二ミリ程度であり、内部は粘土と砂のまじった砂岩状を呈していた。



沈黙の塔という名の陰惨な墓地・イラン

数日後ウランバートルへ出てから、市内にある国立自然史博物館に入ると、さすがに恐竜の国だけあって本格的なブースが出来ていた。完全骨格のものも全長十三mのタルボサウルスを筆頭に、小形のプロトケラトプスとか、それらの中間のピナコザウルスや、ハドロザウルスなどがあった。バラバラになったものの中に畳二枚分ほどもある巨大な骨盤があり、その想っても見ない威容には圧倒されてしまった。



恐竜の卵・モンゴル

ここで珍談は前記のバヤニザクで、三メートルも無い自動車道の脇に降りたとき、偶然卵の破片五～六個を見つけたことです。しかも数日後にホテルで見た新聞に高価で外国に売れる卵を盗み逮捕された顛末が、犯人の写真入りで掲載されていた。私が見たのは警官に追われ逃げる時に放り出したものだったのでしょうか。

砂漠に住む蜥蜴

崑崙山脈を左手に見つつ喀什へ向けて、渉車の付近を通行中、タクラマカン砂漠の南縁で車を捨て、三〇〇メートルほど果てしない砂地へと入ってみた。その辺りは植物は皆無に近く、黄褐色の砂地に点々と駱駝の尻尾と呼ばれる、高さ五〇センチばかりの鋭い刺をもつ植物が、ボシャボシャとした感じで生えているに過ぎない。

ふと見ると七～八センチほどの小さな蜥蜴が走っている。身体一面に明褐色に濃い褐色の斑点があり、日本のと違うところは頭・胴・尾が別個のような感じがした。中国人に聞くとスキカナヘミと言う。人を恐れないようなのでそっと近づいて、接写レンズを使いカメラに収めたが、何か極く小さな恐竜といった趣きのする蜥蜴でした。

なお、これに似たものを蒙古のバヤニザクでも見掛けた。ここは恐竜の著名な産地なので、一億年の間に退化してしまい、こんなミニチュアになってしまったのだろうか。

これらはミニチュア恐竜というよりも、むしろ蜥蜴と幻の蛇槌の子の混血とでも言ったところではないでしょうか。

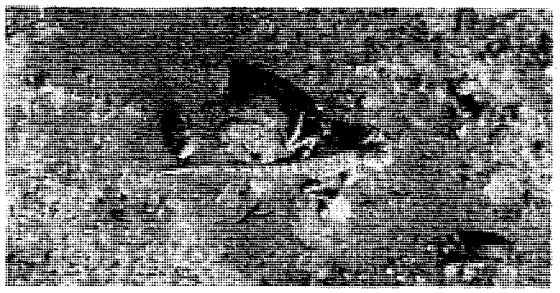
驢馬の足は4本だよ（漫談）

天山南路の要衝庫車の町。ここは昔亀玆と呼ばれていて、唐



恐竜化石の出る荒涼としたバヤニザク渓谷

前号訂正　6頁3段16号　尹・東錫



省博新疆中国恐竜のミニチュア・中国新疆の恐竜のミニチュア

の安西都護府が設置されていたことでも知られています。しかし筆者はここの北方にある、三世紀の『水経注』（酈道元著）という本に、製鉄をやっていたと書かれています、その鉄山を見るのが目的で来た旅です。

製鉄屋の子孫がいないかなと思い、町中をウロウロしていたところ一軒の鍛冶屋を発見し、親方から技法を教わることができました。彼は驢馬の蹄鉄を鍛造するのが専門の職人。店先でトマトジュースの空罐のような廻転吹子を子供に廻させて、助手の男と鍛造に余念がありませんでした。話好きと見えて筆者の筆談に気易く答えてくれたのは良かったのですが……。

まず地面に材料の棒鋼で驢馬の絵を描き、足が四本だと念を押してから、それぞれの足の下にU字形の蹄鉄の絵を描き加え、傍らの一・五メートル位の棒鋼を取って、やっと指幅で素材は四個切るのでと教えてくれた。以下、加熱、鍛造の順だが…。

この親方、日本人は都会暮しで馬の足が何本かなどしらないのではないかと思ったらしい。これにはさすがにシルクロードを歩き廻った筆者も、親切過ぎる親切で辟易してしまった。

砂漠で馬や駱駝から振り落とされそうになったことも、何度もあるのでそれよりは危険性が無いだけ有難かったが……。

中近東の各国では農村部に行くと、日本でなら動物園や遊園地で人気者の驢馬が、ここでは羊よりもずっと安い値段で売買されていて、一頭が五千円もしない。少しかわいそうだが、小さな労働者として、終日輸送に農耕に働かされています。

柴栗句会六月作品

固唾のみ蝶の羽化視る末子僧　浅野としお
情報をささやき交し蟻の列　糸原古志
テトラポット孤独な海猫の居となりて　小川敏子
軒ごとに焼いか並ぶ初夏の岬　加納信子
蟻地獄ててっぽかっぽの幼き日　楠房子
秘め言や日傘斜の男女連れ　高木白虹
山暮し時には海の見える夏宿　中澤美紀子
崩れても王者の風格夕牡丹　新出谷一華
だるまくじ引いて初夏の厄おとし　錦織富江
紫陽花や経島の径丸く咲き　峯石美代子
深呼吸腹の中まで新緑なり　渡部周行
千草のいきれを積んで通りけり　渡部夕峰

斐乃上荘歌話会拾遺　簸の上短歌会

起ちあがる夫に背を貸すわれの耐へむとすれど老いは哀しく　宮廻愛子
前年の夏暑けれど色濃く咲く老い桜木の花にひかるる　諸角長子
恥づるなきモラルハザードマスコミも人も声なく春寒つづく　常盤はるまさ
逝きまして二十五年経ぬ姑のこと想ひ出づ老いてわが今　野村節子
競り合ひて撫の若葉の崩え出づるおろちの山にぬくき雨ふる　永井弥生
妻と息子がともに眠れる奥津城は小雨にけぶり藤の花散る　安部夕波

斐の上川柳六月の句

採りたての野菜あれこれ食卓に　真綿よし子
失言も三度となれば許されぬ　児玉哲呂
目のあたり緑あざやか好季節　礒島恵子
格上げは老人番付ばかりなり　高木凡太
命日におはぎ供えてお話し　安部正子
呆け近く辞書を片手に手紙書く　横山まこと
カタカナが飛び交う中を気にもせず　松浦亜以
母の味祖母の味入れ宅急便　藤原千代子
ねこ車これならわたし運転手　児玉えみ
あと何年使うかしらと歯をなおす　松浦久寿
減反に大豆蒔くとて忙がしい　足立玉恵
草刈りも筋肉痛に悩まされ　藤原のぼる
取り上げる神の国より少年法　渡部ミツコ
捨て石になって定年勤め上げ　田中芳春

会員頒布一部二〇〇円／〒六九一一八　島根県仁多郡横田町一（五）ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）
振替口座　〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第302号（8月号）
2000.8.5（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団
横田史談会
©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

「葵」徳川三代の奥出雲 ①

—中世末期から—

テレビジョンの年間通しての大河ドラマにあわせて、当誌にそれぞれの時代の奥出雲を描いてきている。

『太平記』—南北朝と岩屋寺。(201～202)

『日野富子』—仙洞御所と代官安部氏（現存土居安部氏）と明徳の乱。(233～236)

『毛利元就』—三沢・尼子両氏のほかの群雄と横田庄—(262～275)

『織田信長』—横田庄とその領家への上納年貢のすべて。(202～212)

『豊臣秀吉』～中世の終りと新しい息吹き。(252～261)

『元禄時代』『徳川吉宗』『徳川慶喜』の時代と年表と対照

302号　「葵」徳川三代の奥出雲・俳句・短歌・川柳

して述べてきた。その間若干の空白時代も少しはあるが、中世から近世末までを概観することができる。奥出雲横田庄のはじめから、そこで土着した武士出身の豪族の活躍が、小池（のち杠）・安部・三沢の諸氏の当地での動きの流れが明らかになり、京都の石清水八幡宮・京都御所・御所の菩提所泉涌寺そして、この3領家と横田のかかわりも完全に明らかになる。

鎌倉時代の初めから荘園の荘官催職として来住した小池氏（杠のち）は明治中期まで古格を維持して現存し、南北朝時代から仙洞御所代官として来住してきた安部氏も、明治中期まで古格を保ち現存している。平安末期の地元武士横田氏もその末胤が現存しているようである。

この時代の流れの中で郡内に中世武士杠・卜蔵・絲原・桜井・（田部は飯石郡）が来住し、開拓領主として土着し、一方砂鉄製鉄業を営み、近世企業たたら（たたら場で銑を生産し、これを大鍛冶場で鉄＝割鉄＝とする）を成長させ、幕末からは明治中期まで日本産鉄の5割を占めた。（中国地方で9割）しかし送風技術の改良に西欧に遅れること260年、やっと明治末年に高温を得て角炉にたどりつき、銑生産一本そして電気炉開発で鉄鋼生産へと進んだ。

徳川三代

豊臣秀吉の没後に始まった関ヶ原合戦から、徳川初代家康（生誕天文11年1542）の天下取りと開幕、2代秀忠による組織固めと発展、そして3代家光が幕藩体制を確立した、寛永10年1633ころまでが年末まで放映されるという。

この3将軍は、幕府の創業と守勢の功をあげた時代であるが、歴史的には、戦国以来の戦乱に終止を打ち、信長、秀吉によって進められて来た天下統一を完成させ、政治的にも文化的にも、近世日本のあり方、方向を定めた時代であった。

徳川家康

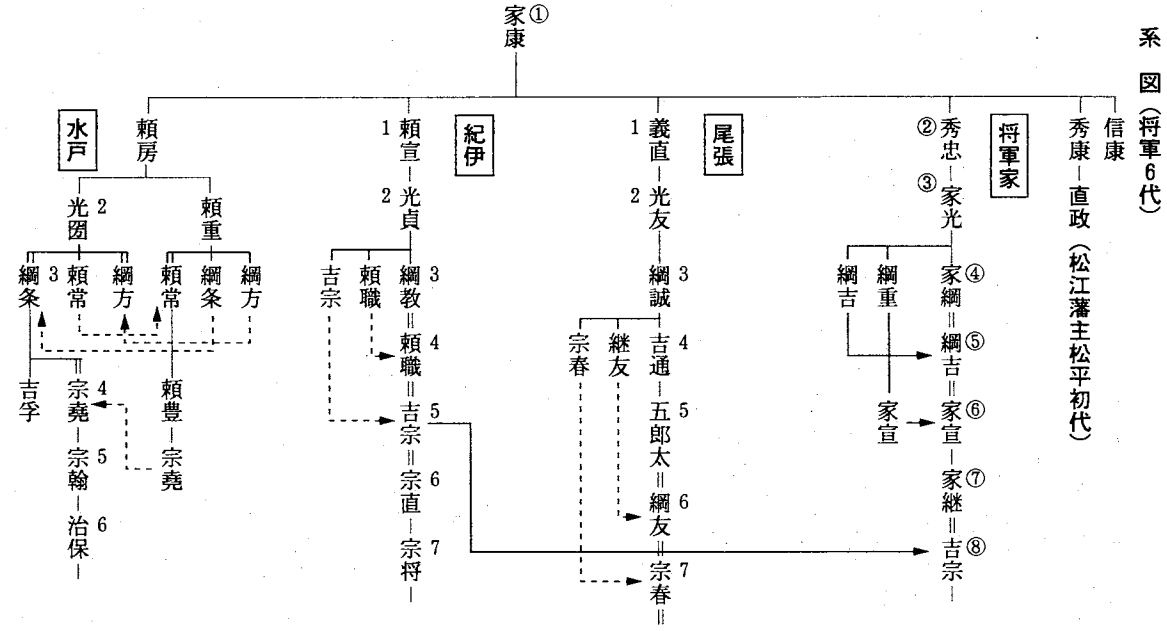
関ヶ原の戦いが4ケ月にわたって展開されたのは、慶長5年の10月までである。この戦いの放映が11ケ月余の番組の1/4を占めたのは、家康にとって生涯最大の戦いであり、文字通り天下取りのために、乾坤一擲の大勝負に出たものであった。後年譜代・親藩・外様の諸大名の多くがこの戦いによって色分けされたことを知らせてくれたのである。

大閤秀吉が没すると、豊臣政権内部に根ざしていた分裂と権力闘争が表面化し、その葬儀さえも行うことができない有様であった。秀吉は晩年、秀頼や豊臣家の行く末を案じ、五大老・五奉行を定めたが、秀頼に代わって、天下の実権を掌握する者が必要な情勢となっていた。刻明に劇では描かれていた。この間家康は次第に政権奪取を考えるようになった。

信長には正妻と長男信康を殺させられ、手伝いの戦いに東赴西走させられ、信長の死後、秀吉と火花の勝負の末、その臣下となった。そして小田原合戦で北条氏滅亡後、その遺領である関東250万石を与えられたが、関東に遠ざけられた。身分的には豊臣家大老の筆頭格であったが、外様の客分扱いで、実際は石田三成らの五奉行たちが行っていた。

家康は桶狭間合戦で今川から独立したが、信長、秀吉の下で苦労させられ続け、慶長5年1600年は59才であった。これまでは苦労の連続であった。秀吉の死後政権内の対立の混乱に乗じて、これらを巧みにあやつって漁夫の利を収めることも、決して夢ではない情勢となってきた。関ヶ原の戦いの舞台は、この間の動きをくわしく演出していた。合戦後中央政権の実権を掌握していた家康であるが、慶長8年2月12日、朝廷より誠夷大将軍に補任せられ、江戸幕府を開くことを認められた。時に60才であった。しかしその後わずか二年にして将軍職を秀忠に譲っている。この将軍職委譲という事態は、豊臣家にとって大きな衝撃となった。それは徳川政権の

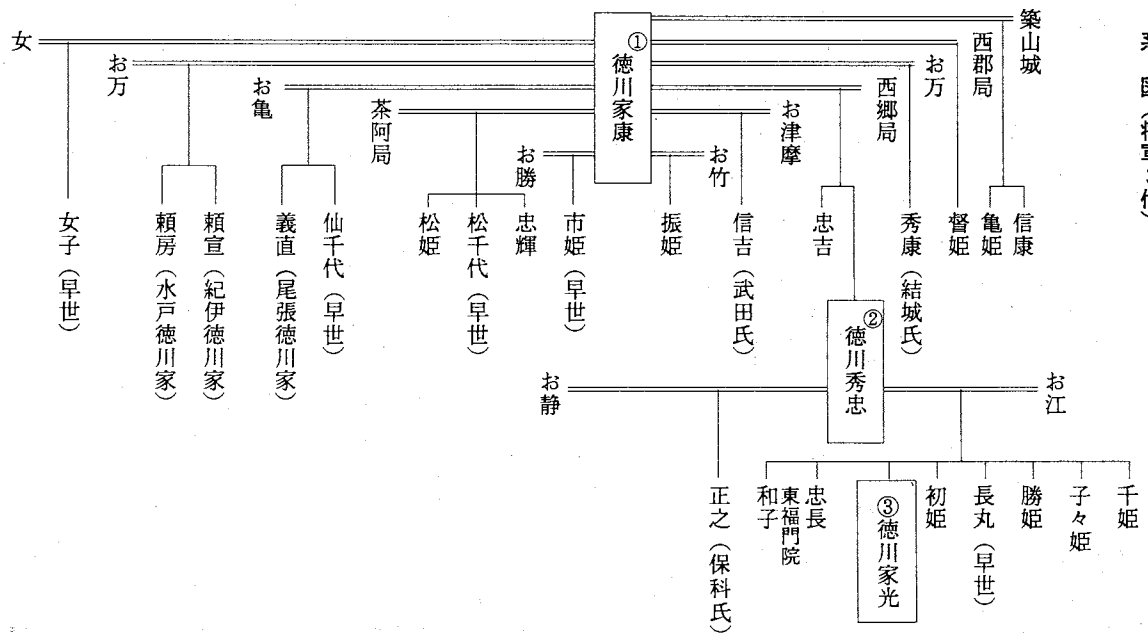
藩主	出雲	奥出雲
	尼子経久藤ケ瀬を攻め落せず。	備中新見庄杠城落ち杠氏馬木へ 岩屋寺を焼いて退去 馬木村で杠氏たたらを吹く 三沢為幸尼子方で吉田城攻めで討死 岩屋寺再興に快円努力し26年には８分通に完成。
	大内義隆毛利元就　尼子晴次を富田城に攻め敗退。	秋　晴久横田庄の支配をまかされ森脇家貞らを代官として駐在させる。 杠氏八槙寺創建（日蓮宗）　弟源八郎のち本山貫主日恩上人に
		伊賀多気神社現在地へ（町作りの中心へ）
	元就・晴久を石見銀山に敗る	三沢・毛利陣営に
		（この頃横田庄の貢納滞納あり院宣毛利氏に下る）
	元就・尼子義久を富田城で降伏。	毛利・横田庄をまかされる。 （慶長元年まで34年間） 安部氏（土居）稲田へ移る。 毛利一族吉川元秋（三沢為虎妹）富田城へ
	天正６－上月城落城（勝久自刃・鹿之介殺さる） 備中高松崎水攻め（為虎毛利方で参加）	天正５－亀嵩築城（為清42才） 天正７－馬来道網 寒の峰城から小馬木へ移る （このころ茶頭山上宗二（千利休の愛弟子）岩屋寺へ）
	天正15　細川幽斎山陰を経て九州へ。	為虎九州へ出陣　天正16－為清死（58才） 三沢・馬来氏毛利の配下で広島へ 亀嵩城へ毛利家臣冷泉氏入り、藤ケ瀬城へは仝杉原氏、下横田へは仝祖式氏入る。 為虎小田城攻めに参加。 横田庄の御所への貢納終る。
	毛利輝元出雲隠岐石見の検地。	横田庄大催小池氏毛利氏より村役人に。
		亀嵩冷泉氏朝鮮にて討死。 杉原氏に従い安部氏朝鮮へ出兵。 杉原氏藤ケ瀬を倭城に改修す。



知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

世紀	紀年	年号	将軍	中央
16	1472	文明 4		
	1514	永正11		
	36	天文 5		
	40	9		
		10		
		11		徳川家康誕生（岡崎城）
		12		ポルトガル人種ケ島へ鉄砲伝える
	49	18		フランシスコ・ザビエル　鹿児島に上陸
		19		鉄砲実戦に使用される。
		20		
	56	弘治 2		
	58	永禄元		木下藤吉郎（秀吉）織田信長に仕える。
	59	2		
		3		織田信長・今川義元を討つ。家康岡崎城で自立（姓　松平を徳川へ）
	61	4		川中島の合戦（上杉と武田両軍）
	63	6		
	66	9		
		10		
		11		
	76	天正 4		信長　安土城に入る（前年信長は家康と武田を討つ）
		10		大友ら三大名ローマへ少年使節を派遣。
		11		本能寺の変（信長自刃）
		12		秀吉関白に。大阪城天守閣完成。
		17		（天正16－天正大小判鋳造）
		18		北条氏滅亡。家康関東へ
		19		千利休自刃させられる。
	92	20		秀吉　朝鮮へ出兵（文禄の役）
	95	文禄 3		
	97	慶長 2		秀吉　再度朝鮮出兵（慶長の役）
		3		秀吉　伏見城で没す。家康朝鮮撤兵を
	99	4		秀吉の死公表。家康と前田利家らの反家康派の論争

系図（将軍3代）



永続性を意味するものである。

江戸の将軍秀忠と駿府の大御所家康をめぐる喜怒哀楽の物語のち、再び大阪冬の陣、ついで夏の陣の壮絶な戦闘場面が登場するようである。

家康の生誕から関ヶ原合戦（1600）

59才）前までの奥出雲の動き

年表の左（中央）・右（出雲）を眺めてこの時代をふりかえると、

家康の16才ごろまでは、馬木郷の領主馬来氏を頼って、新見庄（備中）の杠城主杠氏が配下であった南の松山城主（高梁市）の謀反によって落城し落ちのびて来た。間もなく杠氏は「たたらを吹いた」との記録があるが、細かいことは不明である。一方横田庄の藤ヶ瀬城を尼子経久が攻めたが落ちず、岩屋寺を焼いて退去した。

三沢氏12代為幸は尼子氏の毛利氏の吉田攻めに加わり討死した。子為清は時に4才、この弱味をとらえて、横田庄の3領家の代官職を三沢氏を押さえて引き継ぎ、数人の家臣を駐在させた。

城下に町並が揃いはじめ（六日市・大市）たので、伊賀多気神社を現在地に再興した。

秀吉は関白になり、大坂城の天守閣も完成して、勢あたるべからざるものであった。

時代は移り、地頭武士として来住した三沢氏は350年、馬来氏は250年この地の領主であって、三沢氏は奥出雲の重鎮として、伯耆・備後にも影響力をもち尼子氏を常に悩まし続けたが、天正17年両氏とも毛利氏に属して広島に移り、郡内の各地には毛利の家臣が分駐した。

また横田氏、代官小池・安部の両氏、来住した卜蔵・杠の諸武士も土着して土豪となって永住今日に至っている。

天正18年は北条氏滅亡の年であるが、全国各地の荘園も終末期となり、横田庄の御所などへの貢納の250年の記録も終った。

年表を読みながらこの地の小さい動きを知っていただきたい。

（年表作成資料）
歴史年表。国史大辞典。
日本史総覧。地方史大年表。
日本文化総合年表。
松江市年表。出雲私史。絲原家「古代よりの聴書」　その他
2・3頁の系図はNHK版の『徳川三代』のものに若干加えたもの。

横田史談会　高橋一郎

柴栗句会七月作品

奥の座は老母の城なり蚊遣香　淺野　としお
睡蓮や小波もなき禅の池　糸原古志
摘みどきと日毎急かるる松の芯　小川敏子
介護てふ日々の流れや松の芯　加納信子
廃屋につんつん伸びて松の芯　楠房子
ぶらり旅青い四国路足まかせ　高木白虹
風鈴や絵手紙届く昼下り　中澤美紀子
藤ヶ瀬城栄枯盛衰松の芯　新出谷一華
待てば来ぬ赤いポストよ夏燕　錦織富江
荒波や一枚岩をつゝむ夏　峯石美代子
合歓紅く空にほのかな夢のせて　渡部周行
波のりを飽きぬ若者夏の海　渡部夕峰

うつぎ咲く　簸の上短歌会

散骨を容れざりし妻に香手向く墓標は雨に濡れて艶めく　常盤はるまさ
帰りおそき娘待つ夕べ亡き妻と在りし日のことなど思ふしきりに　仝
一輌の電車の通る高原の駅は野菜の市場となりて　宮廻愛子
山蕗のとどくを待ちゐし父母よ在はさぬことしは摘むさへ哀し　諸角長子
〝メシタベタカ〟補植のわれを呼ぶごとく小鳥は夕べの空を飛びつつ　仝人
妹より菖蒲の花の絵手紙は『お元気ですかお出掛け下さい』　野村節子
吾子背負ひ馬を使ひて田仕事に励みし夫の杳るかなる日よ　仝人
歌上手田植上手の亡母はるかうつぎは今年も色あでやかに　永井弥生
もろもろの溢るる思ひを朴の葉に包むこの餅いつの日かまた　仝人
旅に来し木曾路馬籠よ藤村の生れしふるさと月見草咲く　安部夕波

斐の上川柳七月の句

熱帯夜フクロウまでが起きている　児玉哲呂
清き一票みんな平等これだけは　渡部ミツコ
泣きに行くところもなしに娘待つ　松浦久寿
父の日のプレゼント着て会に出る　藤原のぼる
ご無沙汰の顔の集る納涼会　石原冬明
三世代泣くも笑うも舵ひとつ　森山悠子
笹巻は脱ぐにはおしい着物きて　児玉えみ
扇風機冬の座敷へ同居させ　松浦亜以
中元が届く直ぐすぐ開けたがる　安部正子
百円市馴染みの客がおやつくれ　藤原千代子
町変る道路や家や人の顔　横山まこと
笹巻が着いたと電話嬉しそう　足立玉恵
水張りし初夏の棚田を蛍とび　真綿よし子
三億円思いをはせる宝くじ　田中芳春

会員頒布一部二〇〇円／六九一八　島根県仁多郡横田町一、五二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）
振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書
第303号（9月号）
2000.9.8（M133.T89.S75）
奥出雲編集集団©
横田史談会

シルクロード余話④

＝砂漠に咲いた数々の花＝

特別寄稿　窪田蔵郎

大輪のクロッカス

ロシア連邦もカフカズ山脈の北側、葡萄酒で知られるグルジア共和国のトビリシから、真北へと向って三〇〇キロメートル。そこのドムバイ国立公園の宿舎を出て、テベルダ川沿いに約一時間、落葉松の鬱蒼とした林を通り抜け、あと二～三キロも歩けば氷河に差しかかるというところ、エリゲン山など四〇〇〇メートル近い山々が、行く手に雪の山肌を見せて立ち塞がっている。歩き疲れて私が坐り込んでしまった場所に、野生らしいクロッカスの花が一面に乱れ咲いていた。

しかもそれらが実に立派な大きなもの。色あいや葉は日本のものと変り無いが、直径で八～九センチもある。この花ガーデニングの流行している日本に移植することができれば、愛好者にとても喜ばれるであろう。



① 野生なのか大輪のクロッカス

ヒッタイト兵士の亡霊か

トルコはまず、小アジア中央部から、イラクやシリア地方まで席捲した、ヒッタイト帝国の根拠地ハットウシャ（現在のボアズカーレ）に向った。初秋の九月末なのに廃墟は枯れ枯れとした秋風が吹いていて、崩壊した超大国の遺跡に国破れての思いを深くした。このときそこで何とも不思議な雑草を見かけた。葉の形があのヒッタイトの武装した兵士の姿なのだ。水気の無い紫の小さな花も一抹の哀れをさそう。

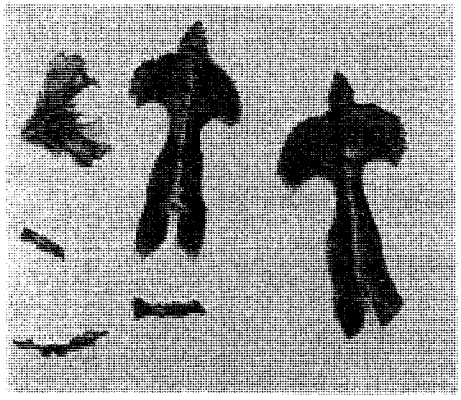
形を旨く言い現せないので写真を掲げておく、同遺跡のキングゲイトの脇のところだったが、筆者はそれを見た途端に思わず、あの壇の浦の平家蟹の姿を脳裏に描いていた。三千数百年の星霜を経て、海からの蛮賊に攻められて、城と運命をともにした兵士達の魂魄が、昇天を拒否してここに留まっているのかと。



③ トルコ・エルズルム市近傍の川原で見掛けた、真っ白な直径25cm～30cmもある巨大な花。草丈は40cm位。

葦の茎で紙を造る

以前に南イラクでは低湿地帯に茂る葦の印象を書き、これをゲイサップと呼ばれる建屋の材料としていることや、アッシリア時代から束ねて船を造り、チグリス・ユークラテス両河などで使っていたことを述べた。ところが、中国の新疆ウイグル自治区では、これを原料として製紙用に充てていた。その場所は、かつて製鉄民族の突厥が金狼の旗をなびかせて疾駆していた、天山南道の東端に近い托克遜の辺りと思う。イラクの場合と同様に塩湖の岸辺に群生しているのを刈り取って、トラックに山積みにし、ここの製紙工場に運び込んでいた。吐



② 故城跡にそよぐ葉・ヒッタイト兵士の怨念か

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

303号　シルクロード余話④・「葵」徳川三代の奥出雲②・川柳・俳句・短歌

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

魯番（ルファン）の西に当る小草湖か南側の艾丁湖辺りから運んでくるようだ。

インドでは沈丁花（ちんちょうげ）の樹皮を製紙原料にすると聞いたが、葦を使うというのは初めてであった。

なおこの付近に住む回賊は、貧しくとも花だけは絶やさない優雅な民族で、小さな住宅の入口には、必ず直植えや鉢植えの花が咲き乱れていた。

砂漠でとれる農作物

イランの荒涼とした砂漠地帯、もう少しでペルセポリスだという辺り、一面に緑の木々が見えてきた。特産物ピスタチオの林だ。既に花期は通り越して枝には薄紫掛かった実をつけていた。農産物は棗椰子だけではない。

ヤズドのイスラム神秘主義教団の庭に真紅に咲いたサルビヤの花は、場所柄不釣合いの感がしなくもなかったが、シラーズやイスファファンに、人工の花園が造られているのは、流石にオアシスの国だと感心した。



⑤　祁連山麓の畑の隅で見たあやめ



③　ピスタチオ・南イラン砂漠でこれのみが生育

藩主	出雲	奥出雲
		（以下大馬木の杠氏の『杠日記』より）
堀尾吉晴	行賞により出雲隠岐24万石藩主に。宮川秀理佐太神能案出。	堀尾親子国巡り、三井野から坂根－ここで炭焼2軒に賞を与える　かつての城下町横田町六日市の五反田屋（のち富田屋と改める。現田村氏）に泊る。安部源太左衛門藤ヶ瀬城案内
	堀尾親子城地の下検をする　忠氏没	
忠晴	遺子忠晴襲封する 城地を亀田山に決定 松江城築城へ　白潟と末次を松江という。 出雲大社遷宮 天守閣竣工　忠晴家康の孫娘と結婚 吉晴没 亀井政矩津和野藩主に（4万石） 吉田重治浜田藩主に（6万石）石見焼始る	煙草（相思草（たばこ））始めて渡来 斐伊川水系鉄穴流し禁止 以後毎年解禁をたのむ
		（元和7）樋口表小池氏杠と改姓。日蓮宗に改宗 （大馬木杠氏より聟養子入籍条件）
		天下たばこ禁止 唐より西瓜渡る 八川の丹波関完成（堀尾の家老前田丹波により）
京極忠高	（寛永10年）堀尾忠晴没　嗣子なく改易 京極忠高藩主となる 斐伊川宍道湖に注ぐ（洪水多くなる）	代官横田町芦田瀬兵衛　大市大火
松平直政	京極忠高没　嗣子なく断絶 松平直政（家康の孫）藩主に	鉄穴流し許可（釜・鍛冶屋許可） 大馬木杠氏釜吹立てる（小峠山・五ノ旗山）
	（19年）直政安来地方の潜在キリスト教取締厳命 松江ホーランエンヤ始まる （20年）　日御碕神社完成 （正保元）　出雲阿国没（87才） 直政桑名より白魚をとりよせ宍道湖で養殖	
綱隆	直政江戸で没（66才）月照寺に葬る　弟2人広瀬（3万石）母里（1万石）両藩に分藩	

「葵」徳川三代の 奥出雲 ②



⑥ 染料をとる紅花の群生・ホータン

下の年表を左から右へと読みながら、外国との交流が増え、国内体制も次々と整って来ることを読みとって。

外国の攻撃をうけて鎖国に踏み切るという歴史の中で、出雲の藩主が、世嗣の断絶で、堀尾・京極・松平と移って行く状況、堀尾も京極も徳川家の関係深く、そして松平直政は家康の孫（前号系図）であることは、松江藩が親藩として山陰に占める地位はかなり期待されていた。民衆とのかかわりのある事項ものせておいた。

奥出雲については、堀尾氏の初の巡国があり、鉄穴流しの解禁は、毎年の嘆願が25年振りに解禁となる経過も明らかで、奥出雲の農民の生活安定は記録にもはっきりしている。しかし25年は人の一生、再開しても技術の伝承に苦労したようである。

大阪の陣の功績で福島正則は広島の大藩主となったが、勝手に城の改修をしたとして甲斐国の小藩に左遷、家臣で桜井家の祖は帰農し、可部町に居住のち高野町を経て上阿井に居住土豪となる。横田の土居安部氏は江戸時代を通じ代々が下郡役として勤め重きをなした。

（横田史談会　高橋一郎）

（奥出雲の情況が中央の年表と対象して理解の助けになると数人方の便り頂きました）

世紀	紀年	年号	将軍	中央
	1600	慶長 5		関ヶ原の合戦　堀尾吉晴三中老の1人として、家康と5奉行の和解に動く。家康会津征伐のため大坂城を出、堀尾の領国浜松城（12万石）を経て会津へ（子忠氏従う）
		6		忠氏隊岐阜城で首327得る
		7		家康の生母没
		8	徳川家康	江戸幕府成立　家康征夷大将軍に　孫千姫大坂城の秀頼に嫁す　カンボジア国王書簡を送ってくる。　出雲阿国歌舞伎踊始める　京都で阿国歌舞伎踊りす
		9		
				フィリピン長官キリシタン布教求める。　5街道に1里塚を設ける。
		10	秀忠	朝鮮国使引見する。　「ドンキ・ホーテー」刊行
	07	12		江戸で阿国歌舞伎踊を
		14		
		15		
		16		キリシタン禁止（キリスト教信徒仙台までの間70万人）
		17		
	14	19		大坂夏の陣・冬の陣（豊臣家滅亡）　武家諸法度下す
	15	元和 元		東照宮成る　5人組制度施行　宮本武蔵没　吉原に遊郭（傾成屋）
		2		
		3		
		5		福島正則広島を改易
		6		桂離宮造営　洋書輸入禁止　伊勢踊り諸国に流行
		8	家光	
	24	寛永 元		
		2		鎖国令　毛利輝元没
		5		
		9		『塵劫記』（わが国最初の算術書）刊行
		11		
	35	12		参勤交代確立
		13		
		14		
		15		鎖国完成（オランダはスペイン・ポルトガルに領土的野心ありと密国よって長崎での貿易許される）
		16		田畑永代売買禁止
	41	18		九谷焼創業　伊達正宗の遣欧使出発
	47	正保 4	家綱	小堀遠州・中江藤樹・沢庵和尚没
	49	慶安 2		慶安の御触書（農民の心得32ケ条）光圀大日本史編纂へ
	66	寛文		

前号訂正－2頁年表中央 ㊧高松城 ㊨（三沢為虎妹が妻）

あやめと紅花

女真打鉄の壁画で知られた楡林窟は、有名な莫高窟と並ぶ敦煌石窟の一部だが、ここから武威を経て蘭州へ向う途中で、祁連山脈のよく見える天祝藏族自治区の手前付近を通った時のことだが、見るからに地味の劣るような淡赤色を呈した酸性土壌で、化学肥料の与えるのが少ないためか、作物の生育もいま一つといったところを過ぎた。野生のあやめは青紫の花を付けていたので、すぐにそれと判ったが、丈が低く、雄大な山容の下で咲くにしては、野趣はあるが、何か痩せて悄然とした感じであった。

タクラマカン砂漠の一角和田は「天山」銘柄の絹織物を大量生産している。工場は織子の女性を中心にしたかなりな規模であった。また地機というか農家の副業のようにして、繭から織物までの工程を零細な工房で小量一貫生産もされていた。そうしたわけで良質な絹織物となると染料ということになるが、この郊外では紅花の畠を見かけた。ポプラ並木に沿ったやや日陰地であったが、広い土地をそれに充てていた。この辺りの製品や技術が長安を経由して日本に齎らされ、京都を通じて山形へと伝播し、今日では地場産業として定着したのであろう。



⑦ トルクメン共和国メルブ遺跡。
〝駱駝の尻尾〟とよばれる凄い針をもつ植物

鬱然とした樹林帯

イルクーツクからバイカル湖の南端に向う辺りは、鬱蒼たる大森林が続いている。昔はもっと千古斧を入れずの状態だったであろう。シベリアの民族史でみかけるシャーマン教の人達、たとえば製鉄小数民族のショール人などが信じていた、山の精が跳梁したタイガと言う処は、こんな場所のことを指したのでは無かろうか。

斐の上川柳八月の句

冷や酒をビールの癖でグイと飲み　児玉哲呂
ご馳走はまず目で先に味をみる　児玉えみ
しかられて育った親が甘やかし　藤原のぼる
夏休みめいわく受けたかぶと虫　渡部ミツコ
夏まつり聞いただけでも心浮く　足立玉恵
呆けたのか夏ばてなのかと考へる　松浦久寿
青空に百日紅が誇らしげ　田中有樹絵
夏休みちらかす孫で又楽し　藤原千代子
神でなく悪魔でもなく迷い生く　勝田みのる
豊作も嬉しくはない米余り　石原冬明
盆行事年々腰痛ひどくなり　松浦亜以

柴栗句会八月作品

青芒義民伝六語られよ　淺野としお
猿すべり風にうなずく花の房　小川敏子
亡母に焚門火は西の風となる　加納信子
訃報また心痛たまし花すすき　楠房子
雲流る八月六日夢の夢　高木白虹
独りでは広すぎますと門火焚く　中澤美紀子
暮れ六つの梵鐘に秋気の籠りけり　新出谷一華
涼しげに暮して見たい青芒　錦織富江
枝豆の彩を盛りたる伊万里焼　峯石美代子
明けそめの思いを残し月見草　渡部周行
大西日木造校舎壊さるる　渡部夕峰

苺熟るる頃　簸の上短歌会

『海やまのあひだ』ひらけばいくさをはりふるさとにわれの若き懊悩　常盤はるまさ
烏啼とは地名と言ひし漢文の先生もすでに身罷りにけり　仝人
亡き母が言ひし熊苺裏山に熟るるを摘みてこぼるるばかり　諸角長子
姉妹も離れて住めば年ごとに相逢ふことの稀とはなりて　宮廻愛子
豊作の梅は塩漬砂糖漬酢漬甘露煮焼酎漬はや作る苦労思へば野菜が安すぎると老人言へり　野村節子
日赤即売場に手際よき亡夫の粽はするすると思ひ出をり　仝人
笹の季節に母さんの笹巻はペロッと咽喉ごしよし息子の世辞のうれしき電話　永井弥生
梅雨晴れしあじさい寺に君と来て手を触れ歩めば愛のつたはる（月照寺）　仝人
　　安部夕波

会員頒布一部二〇〇円／〒六九－一八　島根県仁多郡横田町一〇六／二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇－九－一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四－五二－〇一九一）

303
304合併号　岩屋寺『快円日記』快円日記に見る③・短歌・川柳・俳句・シルクロード余話⑤・俳句・短歌・川柳

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第303・304号(10・11月合併号)
2000.12.8(M132.T88.S74)
奥出雲編集集団©
横田史談会

中世の横田庄と出雲

岩屋寺『快円日記』に見る③

『快円日記』は傑僧快円が岩屋寺の復興の記録をまとめたものとある。

岩屋寺焼失のこと

本号の本文②の7によると、富田城に復帰した尼子氏（1486文明18）は、地味も文化も豊かな荘園横田庄に、京都御所の院宣をうけて、藤ケ瀬に城を築いて（1509永正6）移った三沢氏―奥出雲に隠然たる勢力をもつ―を押さえるため、築城5年たった永正11年甲戌10月14日、この城を攻めた。

この時三沢氏は築城した10氏遠江守為忠は隠居し、息子の次郎左衛門為国が11代を継いでいた。経久は竹崎の王子の山（山根側の王子神社のある方向か）に陣取って攻めた。岩屋寺もあげて籠城して戦った。攻めあぐんだ尼子氏は引きあげるにあたり、寺に火を放ったので、別表のように焼失がひどかった。この時岩屋寺院主岩本坊真海は死去した。（日記の記事から推定すると、当寺には150人にも及ぶとみられる僧達がいた）（なお16年後の亨禄4年1531には、尼子氏は再び藤ケ瀬城攻め、為国らを捕えている）

快円の生い立ち

すでに延べた如く、家喜氏諸国を山名氏の縁で流浪に、山名氏の一族である馬木郷の地頭侍馬来氏の下に家臣となっていた。快円の父家喜藤兵衛は湯野（三所郷の湯野か）の佐藤彦右衛門の息女を妻とした。その間に文

金厳山岩屋寺　快円日記

5	6	7	8
⑤	⑥	7	8

岩屋仏閣僧坊焼失数之事

一、鎮守堂　本ハ口山名伊与守時義建立、面二間唐戸刻階アリ、行ハ七間口　岩之上覆畢、長板葺内・奥之社壇間中方　蔵王権現（寸法一尺余）本像口面之岩上行基ササ（菩薩の略字）作　不動木仏（寸法五尺余）スシノカラ戸玉ヲ磨ケリ

一、本堂者三間四面ハ五間　東西一間ハ唐戸、余ハカウシ戸　内陣ノ戸モコウシ　天上カウシ面ニ有高机　其中ニハ仏具十一置之　高机後中ノシキ居ノ内　東ヘヨリテ香盤ヲ置ク・東ノ二間籠所有大般若　同奥一間・四方宝蔵五部大乗経与法花経三テ香盤ヲ置ク・東ノ二間籠所有大般若　同奥一間・四方法蔵五部大乗経与法花経三十三部　諸物置之　戸ハ北ヘヨッテ西へ向　同北二間中ノ床アリ　行基ササ（菩薩）の木像アリ寸二尺斗座像　比丘ノ躰持物如意ナリ　前ニ仏具一面置之　香油本尊ト　同十八日仏具二坏也　本地ハ文珠ナリ　故大和国射駒廟塔ヲ文珠ト申也　北ノ一間ハ戸出仕之時ノタメナリ　同次間二床スノコアリ　閼伽棚手水置之　西ノ一間ハ戸出入間也　次西ハ二間籠所イルリアリ・内陣畳アリ　本尊壇一間ハ中四方歟　如石座惣メ黒漆　面ヘ朱塗　キホウシハ銅キヲサスランカンアリ、同上二二（四）天王像サイシキ仏立像寸四尺余　御スシ面ノ唐戸折戸也　上ハカウシ〇〇組入　内ヨリトンスヲ以張之　内シトミアリ　唐金以唐草ヲホルメツキヲサス　内ニ錦絹二色ノ戸張アリ　悉ク妙音奉行トシテ内裏ヨリ建畢

出仕之間後戸・又西ノ角戌亥ニモアリ　不断香ハ其中ハ小机ニ本尊ノ左ニ邊中ノシキ井ニアリ

一、永正拾一年甲戌十月十四日　富田尼子伊与守経久　横田庄并岩屋寺発向　下中村藤ケ瀬ノ城ニ岩屋衆籠畢　当庄地頭ハ三沢遠江守殿当所隠居之時也　名乗為忠　同鬼次郎左衛門殿為国　岩屋院主岩本坊之真海此時死去ニテ中絶畢　御陣ハ竹崎ノ王子ノ山也

一、真言堂ト者、当山之戌亥ニアリ　三間四方ナリ　行張屋不断光明心言故真言堂ト云ヘリ　毎晩不怠護摩　十五坊役田地二ケ所ニアリ　十三俵納畢　堂内ニ石塔アリ白色

岩屋堂殿法名妙音大禅尼ノ御石塔也　忌日十二月廿八日也　并ニ忌之彼岸臨時ノ月

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

明17年1485生れたのが快円である。日記の本文⑥（後述）によると高野山に3年間入山し修業して帰り（37才）、岩屋寺内の来福寺の住持となっていた。永正18年1521（この年大永と改元）5月24日39才で大林坊に移り岩屋寺の院主となった。焼失したから6年目の永正17年6月7日に、三沢9代為国は自ら岩屋寺に登山し、諸役寺領を安堵し制札も下した。この日二王堂建立のための柱二本を立てた。

岩屋寺の堂宇

前号の本文②の5・6・8は火災によって焼失した堂宇の一部の記憶による構造などの記録である。当時の岩屋寺の堂宇についてのすべてと、復興の状況を一覧表としたのが、下の表である。これは『快円日記』、同じ快円の『大永の古記録』、そして本号3頁の「天文八年の快円文書」をもとに作成したものである。これをもとに説明を加え、その上で『快円日記』の記述追うことにする。

この表に見ることの出来る岩屋寺は、13世紀の後期、北条妙音尼の存命中、岩屋寺僧祐円の声望は高く、尼妙音からの寺領・寺宝の寄進が続いて復興したとある。しかしそれ以前の概比していた堂宇は明らかにできない。

岩屋寺の堂宇の変遷

名称	永正11（1,514）×焼失 ○焼失セズ	天文8（1,533）×復興セズ ○存続・復興	天正5（1,577）○存続（雪掻の記録にあるもののみ）
①本堂	×○	○	○
十一面観音像	×○	○	
厨子	×○	○	
文珠菩薩像	ナシ	○	
護摩堂	×○	ナシ	
本尊正観音像	×○	ナ○シ	
愛染堂	×○	ナ○シ	
愛染妙王像	×○	ナ○○	
四天王堂	ナシ	○○○	○
二王堂	××	○	○
鎮守堂	××	シ	○
②惣蔵王権現	×?	ナ?	
岩屋の秘仏・御鏡王	××	ナシ	
大聖不動明	××	ナシ	
御修法堂の鎮守である			
白山権現	××	ナシ	
本地十一面観音	××	ナシ	
熊野蔵王権現	××	ナシ	○
（養門坊という熊野三山の先達山伏也）			
③弘誓大師堂	?	○	○
八照井	×○	ナ○	○
天御神	××	シ	
法伽荒神	××	シ	
大之宮	××	シ	
太神体	××	ナ	
④虚空蔵堂	×	未完成	
妙音観尊堂	??	○	
本尊十一面天	?×	○	
東十一面観音	○○	ナ○	
十一地蔵尊	○○	○	
本六王堂	×○	ナ○	
十三堂	○	シ	
⑤極楽坊	×	○	○
風呂場	×	○	○
	数不明	21坊	21坊

忌訪也　教緘役也　彼妙音御菩提ヲ簡要可奉訪也　當寺大檀那也　六波羅ノ尼トモ甲也　堂之後山権現ノ宮アリ　本地十一面観音ナリ。

別表中の①は真言密教であった岩屋寺本来の建物である。②は真言密教が修験道と密着することによって建立されたものである。三朝の三仏寺、伯耆の大山寺、出雲の鰐渕寺とならんで、修験者の道場として栄えたことをしめしている。今もある天狗岩などはその修業場であった。

横田町内には権現社が多く、出雲国内でも最も多い地方になっているのは（雲陽誌から）、その盛時をしのばせる。これが岩屋寺の21坊を出現させ、僧兵ともなっていったのであろう。

天文8年から8年後、快円が没するまでに復興した現状を示すのが表の中央の印であるが、①の復興が早かったのにひきかえ、②の修験道場の復興は全く行われていない。諸坊は21坊あったが、そこに住む修験者の信仰の拠点は復活していない。（今後追求しておきたい点である）

③は神仏習合のあらわれである。復興が少ないのは時代の流れであろう。

④は庶民信仰の花形であった。観音・地蔵・十王等の堂であって、復興も早かったのである。

⑤の僧坊の復興は、僧侶・修験者の生活の場として一日も欠けないから、また生活の場の性格が強いから早かったと思われる。それに小さく粗末であってもよかったからでもあろう。

右側の天正5年の欄の印は冬季の雪掻きを各坊に割当てたことの記録によったもので、雪掻きの必要な建物であったということで、建物の大きさを推定できるのでのせておいたものである。

21坊は　大林坊

（こゝの院主が、寺家中随一のもので、全山の院主に）

（横田史談会　高橋一郎）

来福寺	山本坊	池本坊	
教威坊	妙音坊	栄門坊	
妙乗坊	金剛院	賢光坊	
大宝坊	杉本坊	宝妙坊	
宝泉坊	大門坊	常泉坊	
光照坊	遍照坊	真乗坊	
正乗坊	岩本坊		

次号から『快円日記』を解説しながら、『天文8年快円文書』、『大永の古記録』も加えて、歴史を易しく緒解くことにする。

盆あとさき　簸の上短歌会

蕾もつ蛍ぶくろを朝露に残して小井手の草を刈りゆく　永井弥生

フクと呼びて親の情は限りなし行年十三才と墓石小さく　〃　人

山峡に拓きいささかの稲作も猪予防に米価の値下げ　諸角長子

在りし日の如く父母に声しつつ灼けし墓石に水そそぐなり　〃　人

教育勅語軍人勅諭一字だに違はず書きしを苦く思ひ出づ　常盤はるまさ

小休止の度にたづねし虎丘の塔年経り想ふもひとりし行けず　〃　人

雀追ふ鳴子とどかぬ山の田に汗ふきながら蕎麦を追播く　宮廻愛子

浜木綿の咲けるみなみの砂丘に君と来りてしばしたのしむ　安部夕波

川柳句会九月抄

出た杭がないから無事に生きて来た　松浦久寿

三宅島思えば我等極楽で　安部正子

ふと言ってしまってからの気の重さ　藤原千代子

秋風はフッと淋しさもってくる　児玉哲呂

萩ゆれて残暑の中にも秋の風　田中有樹絵

体力の限界炎暑あごを出し　松浦亜以

身の丈に合った気ぐらいしかと持ち　藤原のぼる

思い出は昔話になりました　横山まこと

空見ては大根種を握りしめ　児玉えみ

扇風機猫まであたり暑さよけ　足立玉恵

孫抱けば雷親父恵比須顔　渡部ミツコ

夏ばてで根気どこやら見えかくれ　真綿よし子

若かりし頃もあったと負け惜しみ　田中芳春

柴栗句会九月作品

鄙住い独りに余る栗の艶　淺野としお

鳥渡るステッキ握る余世感　糸原古志

裾少し上げて風入れ秋簾れ　恩田和美

雨日でも童の在れば月見かな　小川敏子

思い出を拾い集めて萩の道　加納信子

爪跡の深き豪雨や名残り蝉　楠房子

踏みまどう道なき道のこぼれ萩　高木白虹

とおせんぼ遠い想い出萩の径　中澤美紀子

焼き鯖の匂いが届く秋の昼　錦織富江

秋茄子の彩みづみづし今朝の手に　峯石美代子

山里は錦の序章萩の花　渡部周行

国分尼寺裏参道は萩のみち　渡部夕峰

シルクロード余話⑤

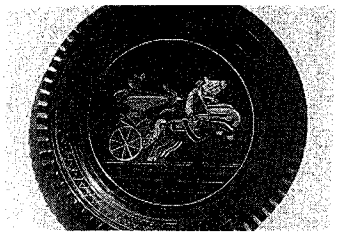
職人の手による民芸品

特別寄稿　窪田蔵郎

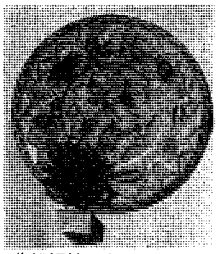
シルクロードの大方の街を尋ねたので、各地のバザールでその土地土地の民芸工芸品を見ることができた。絨毯などそれだけでも一章になってしまうので、本稿では紙や繊維製品のようなものは除外した。

驚き！金属板への鏨（たがね）彫刻

中近東では銅板や真鍮板に鏨で細密な加工をした飾り皿が、国により地方によって独創的な模様で、職人達の手によって打ち出し売られている。幾何図形に草花を組み合せたような構図がほとんどで、トルコ、シリア、イラン、さらに旧ソ連のステップ路、みな同様だがイラクでは具体的な図柄が多かった。私がイラク人から記念に貰ったものは、アッシリアの二頭だて戦車で兵士が弓を射ている図だった。レリーフの絵を簡単に彫れるように省略したのであろう。ホテルの売店には品数は少なかったが、城郭やお姫様のような観光客好みの絵もあった。



アッシリアの戦車の絵皿（イラク）



トルコの黄銅板絵皿とミニチュア・スタンダード（太陽の円板）

このような鎚金細工をしている所を、ウズベク共和国（ホラムズ）の文化遺産ヒワのイチャンカラで見つけた。お土産用の唐草模様の飾り皿を造っていたが、素材を少し斜に置くようにし炉で鈍した銅板を乗せ、鏨を当てゝ小さな鎚で同芯円状に連続した模様を刻んでいた。タンタンタンと言うその早さはかなりスピードで、長年それだけをやってきたにしても、下絵も無しにいきなり勘で打ち始めていき、あたかも鏨が皿の縁を滑るように見えた。



ヒワ・イチャンカラでの金属工芸職人

天文8年快円の文書

（この文書の最上段番号は○）
（筆者が説明上つけたもの）

① 永正年□□□邦兵乱□□□□家之仏閣僧房一字不残焼失候也、雖然本尊世音伊勢谷（立）速飛去給、□□不思議、是□因茲快円貴賤上下一紙判銭之勧而、如往昔仏閣建立寄数畢（連）、一開山行基菩薩、則文殊大士也、

② 新造立本願快円、檀那三沢七郎（為永）兵衛殿、お女房衆申辰五十六歳、天文八年己亥七月造、同厨子床造立云云尊御長（体）二尺、大座二尺、同京之大仏師法眼康秀、同三郎次郎、年行事常泉坊中将公

③ 一岩屋惣鎮守蔵王権現面之尊像者、右之岩堀之秘仏無之、同面御鏡無之也

④ 一、同鎮守堂大聖不動明王野火之皆（時）ササ飛（菩薩）去給フ、時節到来哉、先年放火ニ焼失給フ、御長五尺余、行基ト云々、無之、

⑤ 一禁裏御修法之毎日不断護摩堂無之

⑥ 護摩料田松木田弐反ハ大ノ前、一反ハ平ラノ前、（為忠）三沢覚永押領、惣奉行中屋土佐守落之華、依之護摩怠転、御本尊正観音像在之、

⑦ 一本堂本尊十一面之頂上仏之作不足、蓮花座之後之板無之、

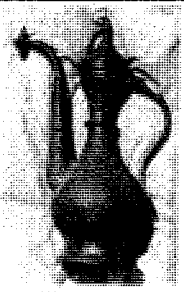
⑧ 一同厨子仏壇無之、然ヲ材木三所之居去ノ宮ヨリケヤケノ木取之、亀井太郎左衛門殿抱之時寄進、番匠下行共地頭三沢三郎左衛門殿為幸御出候、同七郎兵衛殿ヨリ五俵、亀井太郎左衛門慰安鋼ヨリ米拾俵、溝尻清兵衛尉弐拾貫文出之、惣面於当山死（尼）堂物、万此清兵衛尉度寄進不知数、院主快円、

⑨ 一天照太神之宮御神躰共無之、於当山御鏡溝尻寄進ナリ、在神秘之岩戸、昔此谷江飛移給ヘリ

⑩ 一西峯弘法大師始而当山安置、於高野山大塔阿本上人依仰造下華、快円依興行、石原伊賀守義扶（駿アラシ）檀那也、同女己酉歳、且又息源三郎常栄訪故也、天文七年

一二王之像彩色無之、長八尺、在堂軸立、上葺無之、檀那佐々木民部少輔詮久（尼子）井塩冶兵庫助泰敏、

ここの外れにあった住宅で水指しを造っていたが、これは四～五個に分割して造り蝋付けし、模様はほんの少しで実用的なものを手際よく造っていた。シリアのパルミラではこれは安いと思ってら、何と飾り皿の模様が電喰で加工されており、折角の品物なのに味気無いとも言えるが、何処から運んできたものかコストダウンが計られていた。また驚いたことにブハラでは印度製の皿や壺が、トラックキャラバンでアフガニスタンを経由して運び込まれ転売されていた。

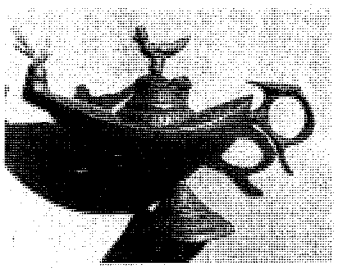


電喰で模様付された水指し（ヨルダン）

入手難アラジンのランプ

（18世紀初めに仏の東洋学者ガランが紹介した）

バクダットに行ったら『千夜一夜』にも出てくる、昔懐かしいアラジンのランプを捜して買ってこよう、そう予定していたイラクへの旅だった。だが到着してみると経済制裁下の街には、そんな余裕は到底無さそうに見えた。食糧も日用品も極度に不足。しかし、滞在する外国人には一人六〇ドルの強制使用義務がある。何とかなるだろうとバザールを廻って聞いたが、銅板を曲げて造った小さな粗雑なものばかり、ようやくとある一軒で見付け出した。



アラジンのランプ（イラク）

よく本の挿絵に書いてある油を入れて火を点すことのできるもので、思ったよりも小さく、これではガラスの火屋（ホヤ）を使わないと、明るくならないのではなかろうか。燈芯の口が一個のものと二個のものがあり、真鍮の鋳造品で胴部の周囲に波、人物、積荷などの絵が陽鋳で表現されていて、油を入れる部分の摘（つま）みも『旧約聖書』に記載の鳥（にわとり？）の姿であり、一見してそれと判るノアの箱船を形造ったものだった。

壜の中に花、波、駱駝など

ヨルダンのペトラには天然の色砂を使った民芸品がある。有名なファラオの宝庫（葬祭殿かも知れない）遺跡付近の砂岩（十種類位）を、色別に削ってきて、この砂を空壜の中に小さな如雨露（じょうろ）で流し込み、その過程で色を変え簡単な模様を現して行く、十才位の子供が手品と紛うほど器用な手付きで、次々と造っていく。写真のミニチュアボトルで一本一ドル。牛乳壜だと三～五ドル。ただし手に持って歩く程度は良いが、車の中に置いて振動が長時間加わると、絵は徐々に惚（ぼ）けはじめ、遂には崩れて消えてしまう。

余り上手くない木工象嵌細工

箱根山中を発生地とする木工象嵌細工と全く似たものが、ダマスカスのバザールで売られていた。日本では観光地のお土産屋で奇麗に並べてあるが、シリアの場合はそんな丁重な扱いでは無い。外国人の来る店やモスク、空港の売店などは別だが、酷い処になると店先に大小放り出したように、埃を被って積み上げてある。日本の英文案内にはこの模様をダマセンパターンと表現しているが、ダマスカスの刀剣肌と関係があるのだろうか。

御本家にしては技術に習熟しているとは言うものの、木片の合せ目などに僅かだが喰い違いが見られる。それより感心したのは日本では一枚の寄せ木を、刳（くり）と呼ばれる大鉋（かんな）で百枚位に削り、それを木箱などに貼付けているが、こちらでは肉の薄い丸

⑪ 一白山権現之宮、御神躰共ニ無之、御修法堂ノ鎮守ナリ、鎮守ナリ、山中戌亥ニ在之、代々斎藤建立云々、本地十一面観世音ナリ、

⑫ 一熊野三所権現、寺家ヨリ在辰巳嶺、号養門坊、熊野三山ノ先立山伏也、無権現社無之、

⑬ 一閼伽井ハ弁才天、無神躰、同八大荒神アリ、

⑭ 一四天王今度造之、可安座無仏壇（也）之、

⑮ 一虚空蔵堂ハ中絶也、上卿兵庫助泰敏御願、

⑯ 一妙音院観音堂在之、無上葺本尊十一面在之、安阿弥ノ作ニ天アリ、

⑰ 開山綱円、今ノ堂円親建立ナリ

一同天神宮御神躰共無之、天神田三沢為国寄進、

⑱ 一愛染堂無之、本尊在之、三沢為忠本願ニテ造ラル、

⑲ 一鐘推堂在之、上葺無之、下立中林筑前守源慶立之、

20 一来福寺薬師堂阿弥陀堂無上葺、同弁才之（天）宮仮殿也、快円建　阿弥陀堂、大催立也、

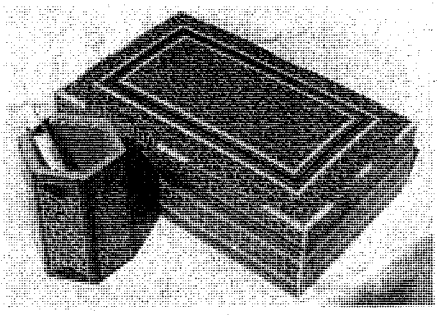
㉑ 一東嶺堂無之、本尊ハ十一面并六地蔵アリ、

㉒ 一十王堂アリ、本尊無之、十三仏在之、

㉓ 右、此数ケ之仏閣興行造立思立処也、為勅願寺且者禁裏御奉公、且者為二世安楽可有奉加者也、

天文八年八月吉日　阿闍梨快円白

鋸で挽いている。いくら薄く挽き割ってもせいぜい十枚位のものであろう。手文庫やペン箱、ペンスタンドなどに加工しているが、小形のトランクまで免税店にあった。こんなのんびりした技術で商売になっているのであろうか。イランのはもう少し合理的？に造っているようだ。

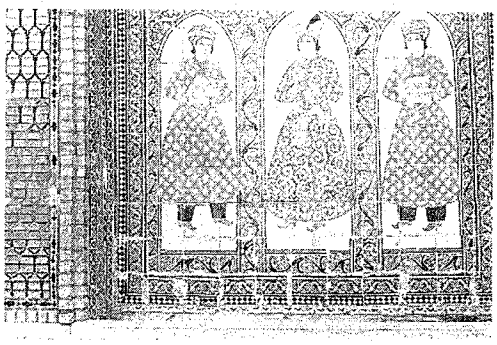


筆立（シリア製）文庫（イラン製）

天空の反映か青の群舞

タイルはブルー系を主体に黄・白・緑などで、真赤のような華やかな色は極めて少ない。具象的な絵が描かれていたのは、サマルカンドのレギスタン広場にあった、シェルドルのメドレッセのアーチで、鹿を襲うライオン（背部に人面）が描出されていたのと、イランのシラーズで見掛けた、モスク外壁の中世風女性像の程度に過ぎなかった。これは例外で、イスラム建築はみなアラベスクと呼ばれる、直線や唐草の幾何模様ばかりである。

ちなみに釉薬を使い着色されているタイルは、到底庶民には手の届かない高価なものであった。したがって王がスポンサーになって造営した、これらを内外装に夥ただしく使ったモスクは、宗教心の発露だけではなくて、王の膨大な財力や権力を誇示するものであった。前出ヒワの西門を潜って約八十メートルの処にある、ムハンマド・アミンの建設中途で放置した、完工時には一二〇メートルにも達すると伝えられる、カルタ・ミナルの塔の伝承は、こうした王達の思いを良く物語っている。



イランでは珍らしい女性像のタイル絵
（シラーズ市）

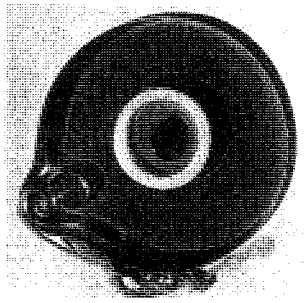
観光土産に目玉の神様

イスタンブールの街を歩いていて路傍の売店で見掛けた、濃いブルーのガラスで造った大小の円板。小さなものは直径一センチメートル足らず、大きなものになると二十センチメートル（日本のおはじき大鍋敷きのようだ）もある。もっとも大きなものは看板用であり、売れているものは一センチか三センチ位のアクセサリー用。写真に見られるように、周囲の一端に小さな紐通しの孔が付いた小突起があり、白ガラスで描かれた円環の中心は幾分薄いブルーになっていて、さらに中心は、黒色のガラス。見たこともない奇抜な形状の品で中から上の大きさのものなら文鎮にちょうど良い。

売り子に聞いてみると目病のお守りだと言う。なるほどこれは目玉だったのか。そう言えばイラクやシリアの紀元前の祭祀遺跡で、テル・アスマルの礼拝者像とか、テル・ブラックの眼の神像など、やたらと目の大きな神人の像やその抽象化したものの多数が出土している。茫漠とした、これらの辺りを歩いていると、強烈な直射日光や飛来する砂塵に目が痛めつけられ、こんなお守りも生まれてきたのだろうと苦笑させられた。

素焼きの壺の隠れた役割

パリーのルーブル美術館で土器の壺を抱える、妖しくも美しい少女の画像を見たことがあった。アングル・ドミニック・イングレス（一七八〇―一八六七フランス人）の作品で、百五十年も前のものである。その絵に魅せられたのか、こんな素敵な壺との遭遇（小女も）を気に掛けていた。しかし、中東辺りなら何処でもお目に掛れると思っていたのだが、何とこれが時代の波でもうほとんど無くなっている。ムードも何も無い茶、緑、青などのプラスチック製に代ってしまっていた。

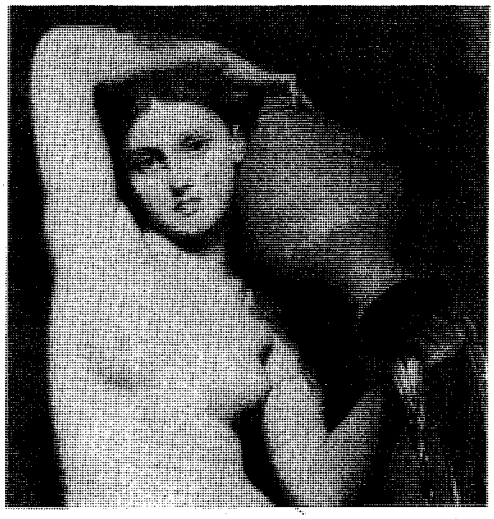


ガラス製目玉の魔除け（トルコ）

トルコのウルギップで陶芸工人に聞いたのだが、この毀れ易い素焼壺当然廃滅の運命にあるのかと思ったら、これが生活の知恵で安外あると便利なのだそうだ。石や粘土造りの日の当らない薄暗い室内の棚に、水を満たして置いておくと、外面にある微細な孔から蒸発熱を奪って中の水が適当に冷え、天然の冷蔵庫の役割をしてくれると言う。単に水を運んでくるだけのものではなかったのだ。田舎へ行けば井戸は昔通りだが、もう運ぶ美しい小女も壺もほとんど見られないようだった。



砂絵を造る子供達拾った空壜と足元の砂で
（右は完成品）



水カメを抱えた少女（ルーブル美術館蔵）
本物の絵は足元まである。

コルサバード遺跡での幻想

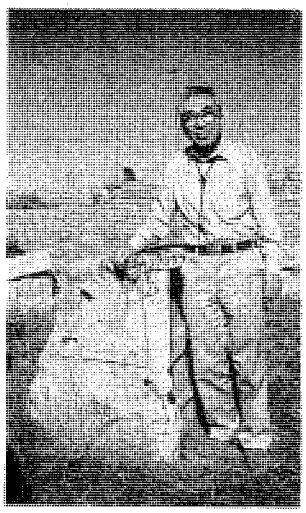
窪田蔵郎

鉄の歴史を研究する者にとって、最も行って見たい誘惑に駆られる遺跡は、チグリス河上流にあるコルサバードであろう。多くの中近東史で暴逆残忍なサルゴンⅡ世王が率いる、鉄で完全武装されたアッシリア軍団の禍々しいレリーフから受ける印象。残虐な戦闘行為、膨大な略奪品、そして男女の夥しい人数に及ぶ捕囚の群れ。モスール近辺の遺跡はどこもこうしたレリーフで宮殿内が飾られている。

しかしある程度はそうであったにしても、果たして本当にこんな事が行われていたのであろうか。こうしたレリーフが飾られたのは、謁見の間とか使臣の控えの間だけのようである。こんな暴逆極まりない、威嚇としか考えられない図柄は、武断政治だからこそ、宮廷画家をして描かせたものと考えられる。反乱抵抗したらこうなるぞと言う誇張された絵、それは無言の圧力では無かったであろうか。

鉄産の無い国で鉄製武器で固めた軍団をどのようにして造ったか、その鍵はこのコルサバードにあった。鉄塊と鉄製品の倉庫、一六〇トンは割引いて考えなければならないが、相当な量はあったはずである。それはウラルトウが入手先の筆頭であり、ウルミア湖方面もそれに次いでいた。しかしそれ以前から鉄の収奪は行われており、ニムルードに付属するシャルマナセルⅢ世王の砦跡からも、各種の鉄製武具などが出土している。

私が立っているこの後側は起伏が続く緑無き荒野で、既に肌寒い秋の風が啾々と吹き抜けていた。



王宮遺構にて
鉄塊等の倉庫はこの1㎞後側にあった。
1997年11月



旅の思い出

カイバル峠へは歴史刻む三本道

窪田　蔵郎71

シルクロード沿いの鉄文化を調べるため五年前の五月、パキスタンのペシャワルから一直線に西へ向かい、アフガニスタンとの国境にあるカイバル峠まで行った。

この間、ピストルやライフル直売の立て看板や、怪しげな麻薬密売店まで、車窓から見ることができた。峠の国境展望台の少し手前で、後ろを振り返ると山腹を横切るように三本の道路がくっきりと浮かんで見えた＝写真

一番下はトラックが疾駆する現在の道路。一番上が十一世紀からのキャラバン隊商路。その中間が紀元四世紀にアレキサンダー大王の軍勢も攻め込んだ道という。目をつぶれば、そうした光景が浮かんでくる。動乱の続くアフガニスタンは、目の先にあった。

（神奈川新聞より転載）

回想重く　簸の上短歌会

ふりむけばコスモスゆるる友の家小さきせせらぎに夕陽あまねし　永井弥生

巡り来し終戦の日のカンナ紅く失なひたるもの重く思ひ出づ　仝

小休止の度にたづねし虎丘の塔年経て想ふもひとりし行けず　仝

教育勅語軍人勅諭一語だに違はず言ひしを苦く思ひ出づ　仝

田の畦を染めて咲きゐるきつね花みどりのまろき実を風ゆらす　諸角長子

土色とかはらぬやうな高菜種播きつつ視力の衰ろふ覚ゆ　仝

稲刈りを終へし夕べの雨の音夫と息子の晩酌はずむ　野村節子

わが母の行年十九才と刻まれし墓石の文字のうすれ苔むす　仝

斐伊川の河畔を歩みし少年が草笛鳴らして遠ざかりゆく　安部夕波

川柳句会十月抄

豊作が仇か米価がまた下り　藤原のぼる

夜ふかしが常識となる世の流れ　勝田みのる

さわやかにゴール世界の尚子さん　松浦亜以

蝉は晴れ蛙は雨とわけて鳴く　足立玉恵

話なら明日聞こうとうまく逃げ　児玉哲呂

なぜ曲る自分の腰骨たたいて見　松浦久寿

四匹もモグラが捕れて畑仕事　藤原千代子

下手な字は親ゆずりだとすましてる　児玉えみ

追悼式残された妻数が減り　安部正子

週刊誌ほんとか嘘かさわがしい　渡部ミツコ

待ってたよ敬老の日の娘の電話　横山まこと

吹く風にどこやら稲の匂いくる　真綿よし子

減反で瑞穂の国も蕎麦の里　田中有樹絵

柴栗句会十月作品

鵙猛ける不易を信じ老にけり　淺野としお

遠き人偲ぶ古着や石蕗の花　小川敏子

病む友に不沙汰を詫びて菊便り　加納信子

紅葉散る庚申堂の古りし絵馬　高木白虹

菊花展葉一枚にもよどみなく　楠房子

天高しこの国未来信じたし　中澤美紀子

信じても背を向け去りし秋の風　錦織富江

高原の風ひょうひょうと秋深し　新出谷一華

帰る娘に冬の野菜を洗いけれ　峯石美代子

拝殿の足袋の白さや七五三　渡部周行

百鉢の花に華あり菊花展　渡部夕峰

会員頒布一部四〇〇円／六九〇八　島根県仁多郡横田町一〇五ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会）
（電話・電送兼用　〇八五四―五二―〇一九一）　振替口座　松江〇一四一〇―九―一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

奥出雲

題字　糸原風亭書
第305号（8月号）
2002.8.3（M135.T91.S77）
奥出雲編集集団©
横田史談会

シルクロード余話⑤

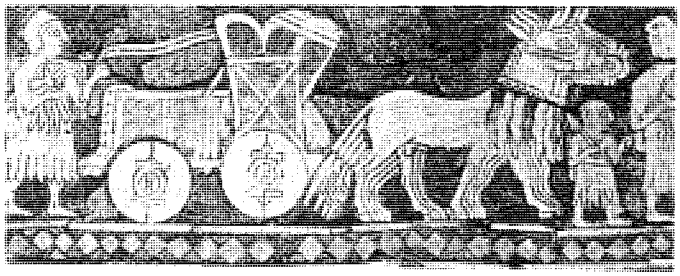
特別寄稿　窪田蔵郎

＝王・軍国・庶民が使った車＝

荷車から鉄の戦車へ

車はシュメールの時代（BC二〇〇〇年前後）から用いられ始めていて、南トルクメニスタンやシリアのウガリツト、インドなどでも模型状のものが出土しています。ウル王墓（BC二五〇〇年前後）出土の綺麗なモザイク画で、板車輪の戦車を馬が曳いている図が良く知られています。やがて板車輪はキの字形の輻（スポーク）のある組立車輪へと進歩し、放射状の形式となり、さらに周囲の磨耗を防ぐために銅鉄を打ちつけたものなどが出現しました。

創始はカフカス山脈南麓の高地に盤踞してフルリ人と考えられていて、これを改良して実戦に使えるようにしたのが、彼等を統合したミタンニ王国（BC二〇〇〇年紀中葉～BC一四世紀末）であったと言われています。

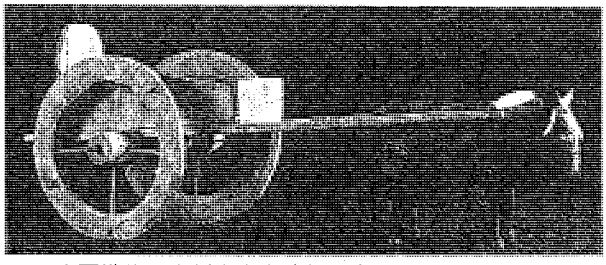


ウルのスタンダード（馬は人間の丈と同程度でロバの属）
初期王朝時代紀元前3000年紀（大英博物館蔵）

このように紀元前二〇〇〇年紀に入りますと、遊牧・農耕の民族間での侵攻征服や文化の交流は、車の役割を飛躍的に大きなものとしたので、確かに構造上大巾な進歩をきたしました。レリーフでその中末期の建造物遺跡などに見られます。大王獅子狩や戦闘の図のように勇壮なものに車が現れました。しかしこれらは偉大な王達を表現するために、従属画家・彫刻家が描いたものでして、それを誇張の無い実像と見るのは無理ではないかと思います。

出土した車については、まずエジプトのカイロで見ましたツタンカーメン王墓（BC五～同3世紀頃）のものも、アルタイ・パジリク古墳（BC一～AD2世紀）のものも、いずれもオール木製のようです。しかしパキスタン・シルカップ（車輪直径五〇センチ位）の車は葬送用らしく小形でしたが、何故か車輪や軸など総べて鍛鉄製でした。外輪に焼嵌めするような難かしい技術は『技術（シンガポール博物館）の歴史』によれば、ハルシュタット時代には鍛鉄の帯を箍（たが）状にして、灼熱し嵌め込んだと言われています。しかし実際はどの程度のことが行われていたものでしょうか。

最近イランのテヘラン国立考古学博物館で、チョガサンビル（旧名ドウル・ウンタス）で発見された青銅使用の車輪を見ることができました。エラム王国時代のもので直径一二〇センチメートル、車輪の外縁部は中心の車轂（こしき）の四分の一も無い五センチ程度で、平均六ミリ程度の青銅板をU字形に加工し、青銅鋲で固定したもので、接地面を被覆すると同時にスポークの取付け部分を補強していました。この仕様ではスピードは出せそうですが、耐久性に欠けるところがあります。それを青銅板の被覆でカバーしているのでしょう。復元が精巧に出来ているので権威の象徴の車とも見られますが、やはり戦時輸送の目的ではなかろうかと想像されます。



中国漢代の木製水牛車・甘粛省武威県出土を模造
（スポークを補強すれば軟質地での農耕用には適する）

具体的な戦車の活用例を考えてみますと、最もその動員が華やかに伝えられているのは、シリア・オロンテス河の畔、カデシュに対峙したヒッタイトのムワタリシュ王とエジプトのラムセスII世王の決戦です。（BC一二八六年在位～一二六七年在位）BC一二八六年（一二九〇頃～一二四四年在位）各二万人ほどの大兵力と言われていますが、先んずれば人を制すで戦略的に恵まれた地域を確保し、いち早くここに大軍を配備するためには、戦闘の前に本国からにしても出先駐屯地からにしても、四～五〇〇キロメートルを駆け抜けてくることが、これと言った武器の無い人海戦術の場合には焦眉の急務なのです。

レリーフに残っている戦車戦の絵は、王の勲功を誇り古代戦闘の勇壮さを誇張した、プロパガンダ的表現だと私は考えております。

立派な中国の車だが

中国ではすでに春秋戦国の時代から精巧な車輌が製作されていたことが、同国考古学研究者の論稿で発表されていて、その復元図は他国に例を見ない突出したものになっています。

知ったかぶりの外国語使用は国際化ではない　日本語を愛用し育てよう。

『詩経』（孔子毛萇に係り、漢代には毛詩という）の周都へ向う有棧の車はリアルな表現ですが、『楚辞』（戦国時代から漢代・一部屈原著とも）の離騒に現れる屈原の車は若干美辞麗句の羅列ではないかと思われます。また『史記』（司馬遷著BC一世紀）には「華元宋以兵車百乗文馬四百匹」の記載があり、当時の戦車が二頭曳きで控えが二頭いたか、あるいは四頭曳きのものだったことを示唆しています。同国の千乗の国、万乗の君という言葉は、戦車保有台数による国力形容の一つと言われています。

しかしそれにもかかわらず、戦車が戦闘に際して兵器としての偉力を発揮した可能性は、地域も黄河流域以北に限られ條件に恵まれていなければ、総論的評価とは別に極く僅かなものだったと言えるようです。

『六韜』は周王朝の時代に武帝の質問に対し、軍師をしていた大公望が答えている形で纏められた書物です。中国古代の兵法を詳細に解説していますが、この書の実際の編集は大部年代の降った漢代のものと推定されます。この『六韜』の末尾に近い五八章の戦車の項に、戦陣での戦車使用についての得失が、一〇の欠点と八の得点をあげて語られています。

その欠点としては竭地とか絶地と言われるような、急峻な地形や湿地帯などの機動性を発揮できないような処では、誤っても使用すべきではなくそんなことをしたら、将軍でも捕虜になってしまう危険性があるとしています。平原での戦闘で指揮をとる程度なら十分ですが、遠征疾駆して行った挙句に縦横に暴れ廻り、大軍の敵を蹴散らすようなことが可能であったかどうか。また車輪の径が八尺と言うので（一尺は二・五センチ）すが、これは前漢時代の計算で（車輪の径が小さくなると前後に傾えられない）一・八メートルになり、実戦用としては少し大き過ぎます。

車轄（車軸）の芯に鉄鋳物を使い車輪に厚みがある頑丈なものなら、それでも瞬間的なスピードは出せるでしょう。しかし『呉子』（戦国・呉起著）でも戦陣で車輛の軸や楔が破損することの無いように、十分な注意を払わなければならないことを力説しています。

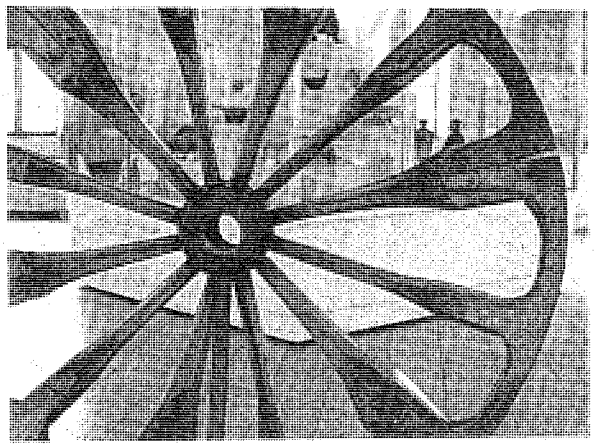
秦・王嘉選、梁蕭綺再編の『拾遺記』には、鉄をもって車輪となすと書かれていますが、その用途や構造はどのようなものだったのでしょうか。兵員や軍用物資の前線への運搬用だと考えた方が合理的ではないかと思われます。

いずれにしても、中原辺りの大草原などなら話は別ですが、変幻極りない複雑な地形を展開する北部の戦場では、どの程度役に立ったものかと思います。また出土品に車轂だけで鉄製車輪が見られないのは、使っていたとしたら用済廃棄された後に、再び鉄器の素材として利用してしまっていたのでは無いでしょうか。『准南子』（王劉安・前一七九）説林訓の「屠者が金属の破片を捨てると鍛者がこれを拾う」が思い浮かびます。

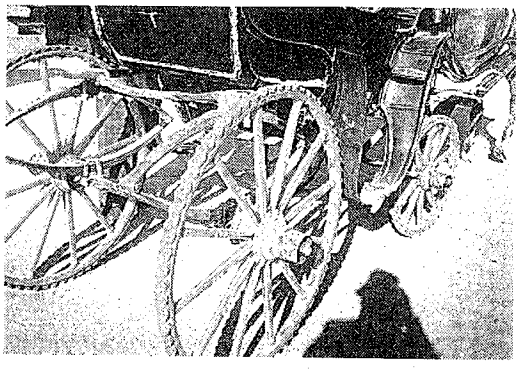
外蒙古で車の使用されているのを見たことがありますが、放牧地への引越しで解体した包（パオ・ゲル）や家財道具を積んで、ノロノロと走っていました。このように重量物運搬での画期的役割は十分に想像できます。しかし紀元前二〇〇〇年紀中頃の勇壮な戦車群は、どうしても製作技術の水準を考えますと、レリーフの絵柄にはほど遠いものでして、車や戦車は王や貴族階級のスティタスシンボルであったと、考えて置いた方がよいものと思われます。

『史記』巻六五の孫子の項によりますと「己疾之則以法刑断其両足而黥之欲隠勿見斉使者如梁」とあって、そのために「孫子為師居輜車中座為計謀」ともあります。孫臏（そんぴん）は足が悪かったために車を使っていますが、明らかにこれは戦闘をするためではなくて、後方での指揮と移動のためのものです。

『苦寒行』という魏の武帝（一五五～二二〇在位）（曹操）の詠んだ、建安（後漢年号・一九六～二二〇）一二年頃のものと推定されています詩



チョガサンビル出土の青銅被覆車輪（複製）テヘラン博物館蔵



イスファン・王の広場にあった観光馬車

に、大行山の氷雪を踏み越えて鳥桓に進撃した時の、具体的な状況を描写したものがあるのですが、その冒頭の部分に「羊腸の坂詰屈たり、車輪をそのために摧く」とあって、その頃になってもまだ車の構造上の弱さから、悪路を進むのに難渋していたことがよく判ります。古代の車の太い車轂が左右に大きく突出しているのは、頑丈さを確保するためでしょう。『夢渓筆語』の記載では鉄製の座金が使われていたようです。

降って『元朝秘史』に書かれている鉄車も、使用の経験から改良されたとはいえ、軸受けや外輪を相応の大きな木材で造り、少し余計に鉄が用いられていた程度だったと思われます。この当時のオゴデイが用いたゲル運搬車輛は、何と横巾が三〇メートルもあったと言われています。

中国最古の詩集で漢代に再編された『詩經』『毛詩』とも言うの中の、何草不黄（小雅・魚藻之什）には、辺境防備に刈り出された兵卒の裏話があり、その一節に「有棧之車」とあって、木材を組み合わせただけの粗末な車に乗って、徴発された兵士が遠去かっていく光景を歌っている。同書の離騒などからみても車の存在は事実であるが、一般的には前期程度のもので、例外として秦の始皇帝陵脇で発見された銅車馬の本物が、ステイタス・シンボルとして使用されていたのであろう。

河西回廊で見た古めかしい車

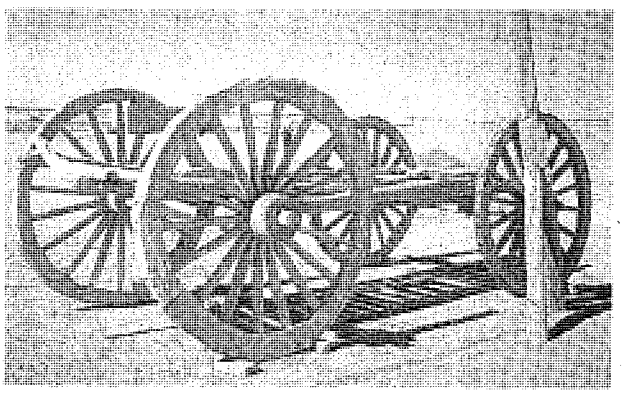
古代の彫刻に見られるような戦車の構造を推測できる、そんな木製の車を中国・甘粛省の西部、橋湾県で見掛けました。有名な莫高窟のある敦煌の街を出て東北へ一〇〇キロメートル、河西回廊のオアシス安西を過ぎてからでも、さらに五〇キロメートルほど行ったところです。遠く広漠とした砂礫の原に清朝の康熙帝が、夢に見た城を造ろうとして築いた橋湾城の廃墟が見えていました。

人影も疎らで寂寥とした雰囲気のところに、この古代の戦車を思わすような、古びた車がポツンと放置されていたのです。この車、前輪は木材のみで造られており、後輪には外輪に相当する部分に短冊状の鉄板を鋲で取りつけ、その内側にも多くの鋲が打ちつけてありました。戦車と言うよりもこの荷台に幌をつければ、五世紀頃に高車族がモンゴルの地を西へ西へと移動して、高昌国の方へと行き短期間でエフタルに侵攻されてしまったんですが、その時に使った馬車とでも創作できそうな代物でした。

写真を一見しただけで見当がつきますが、これを分割して二輪戦車としてみましたら、前輪部の方は紀元前一〇〇〇年紀初めか若干前頃のもの、後輪の方は中末期以降の形式とでも表現できるでしょう。馬二頭くらいで曳くのか随分と頑丈な構造にできていましたが、これでも木製のものは若干重量のある荷物を積んで平地を引張るのならとにかく、このような構造のものでも乱闘時の苛酷な使用には耐えきれないでしょう。原始そのままの整備されていない石塊の多い凸凹道や、無闇とうねりの多い坂道、さらにそうしたところで追撃戦などで疾駆したならば、外輪や車軸に過大な局部応力が掛かるので、破損の危険性が非常に高かったものと思われます。

仕様を説明しますと、木製の車輪は直径一五〇センチメートル、鉄を使った方は一四〇センチです。車輪の幅はいずれも八～九センチで、一〇個位の木を組んで造ってあり、外輪の周囲に取付けた鉄は鍛造された厚い短冊状のもので、輪にそって幅なりに四～五〇センチ程度の長さのもの、日本の庖丁鉄を湾曲させて大きな鋲で止めたと考えたらピタリでしょう。その使われている鋲も鍛造したもので、頭部は五×六・五センチ程度の四角形の大きなもの、厚さは角が磨滅していましたがそれでも七～八ミリ、この鋲の頭部は面取りしてあるように見えましたが、かなり使い込まれているので自然にできたものかも知れません。打込まれて隠れている部分は一・五センチ角、長さは八～九センチ位の角釘状のものと推定されました。

側面にも頭部で直径二・五センチほどの鋲が多数打ち込まれ、また輪軸の両端にも二〇センチ幅で、厚さ六～七ミリ程度の鉄箍が焼嵌めされていました。車轄の部分は陰になっていて見えませんでした。これらの鉄の合計は二輪車一台分で、兵士の短剣が二〇～二五振りぐらいはできる量でしょう。



橋湾故城付近で見掛けた車

シルク・ロード（絹の道）

中央アジアを横断する古代の東西交易路の総称。中国を発し、タリム盆地の南北に点在するオアシス国家群を通り、パミール高原を越え、西アジアから地中海沿岸に達する、物資、文化、民族などの東西移動の最も重要な幹線。中国特産の絹がこの道を通って西方へともたらされたことから、19世紀末ドイツの地理学者リヒトホーフェンが命名した。

シルクロード＝鉄東漸の道

10余年をかけて、シルクロードを旅し、『シルクロード鉄物語』の著書もある窪田先生には、50年に及ぶ御厚情を頂き、鉄についても根本的なところから学びました。そして今も尚、このような小誌『奥出雲』にも、早くから御寄稿頂いて、稔りある読み物で飾って頂いています。

まだ続編数稿がございます。

お許しを

再開へと心を向けていましたが、中央からの協力依頼の執筆や、当県で発刊の『松平不昧と茶の湯』『鉄の道を征く』の原稿協力執筆があり、体調保持の為期休養に入り、本誌も急に休ませて頂きました。休んでみると20余年毎月発行できたのは、読んで頂く皆さんが継続して求めて頂いたのは、中央・地方の研寄者の方々の御寄稿、そして地元の短歌・俳句・川柳の同好会の方々の掲載があったからであると、しみじみ感謝致しました。

一昨年12月私の不徳のため長限界（単住）のため失礼しました。

前304号の「岩屋寺快円日記に見る③」の続編は6回分は粗稿作成済みで、続いて「中世横田庄の文化」というのは年表を作り、高野山・紀伊・奈良・京都・北陸そして出雲と岩屋寺を中心として5回程度を予定しており、さらに三領家の代官として横田藤ヶ瀬城に拠って、家臣団を形成・強化した三沢氏の成長を描きたいと考えて資料集めも終えています。

一方、近世以降の企業たたら研究については、中央でも御厚意を頂いているので、その深化を求め、明治時代半ば釜石製鉄所の操業が不振で、海軍が奥出雲の企業たたらの生産する錬鉄（普通鉄（包丁鉄））に注文を10余年続けたが、それが送風量の増加の改良で、三日押（鎚もできる）の銑生産が増加し、銑処理が大鍛冶場だけで処理が困難となり、電気炉開発へと努力して成功した経緯のまとめも、貴重な（財）絲原記念館の古文書の整理の結果で明らかになったのでまとめたいと思っており、さらに角炉製鉄工場へと発展し、はじめて本格的に砂鉄（鉄滓でなく）を用いて成功した全記録の検討結果もまとめております。

でも追われる生活を離れ、前者を『中世横田庄の文化』、後者を『近代砂鉄製鉄業の完成』としてまとめることを奨める身内もあるので。

すばらしい観光案内書

「水と炎」という、この地の最新の改訂案内書は、とても良く出来ていて、各地のものを集めているが傑出していると思う。

出来ばえの良さに一つ二つ慾を述べると、現代の考古学・文献学・比較民俗学などの進歩にも眼をすえて、表現に工夫をすることが大切である。今までも東京その他から団体客、個人客を案内して困ったことから、特に言葉の使い方に注意して欲しいと思うのである。神話は物語りであるし、さらに「出雲的神話と出雲神話」に判然と分けられるのが、現状である。貴重な『出雲国風土記』の総合研究は、当県の方針に出雲神話を中心としていることである。

藤ヶ瀬の城は誇る文化財であるが、中世を通じて先に述べたように厳然とし、横田庄の文化を育んでおるが、近世の城郭が成立する（本丸、二の丸……）前に終末を迎えている。

（この号は2000年12月分に相当し、この号を届けて年会費を前納なさっている方は完済したことになり、その都度代金を支払いの個人やグループの方々は納入となります。前金納入の方は残額計算済みですので、今後の方針で、経読するか、前記の発行本に繰入れるか、振替口座による返金とさせて頂きます。

貴方様はこの号　　円

お願いします。）

会員頒布一部二〇〇円／六九ノ一八　島根県仁多郡横田町一、三六ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（横田史談会　振替口座　松江〇一四一〇ー九ー一二四〇四）頒布／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所
（電話・電送兼用　〇八五四ー五二ー〇一九一）

荘園（しょうえん）　横田荘（庄）

律令体制の衰退（奈良時代後期頃）により、公の土地が大規模な私的所有地となったもの。8～9世紀には、開発耕地を寄進・買得で集めた既墾地系荘園が多く。10世紀以降は、中央の権門勢家に寄進してその保護下に、荘園の自己領有化を確実にしようとする寄進地系荘園増加。

横田庄は当地の土着有力者が1110年頃、京都石清水八幡宮へ寄進した荘園と考えられる。出雲国には同類の八幡宮荘園が多くある。当地の実力者は武士として平家方に属し、鎌倉幕府成立後はその勢力下に服した。14世紀鎌倉時代の終りからは、石清水八幡宮のほか京都御所（南朝から北朝へ）の荘園ともなり、14世紀末期からはその一部が、幕末の孝明天皇までの御所の菩提寺、京都の泉涌寺（現存の大寺）の荘園にも寄進される。戦国末期荘園制崩壊まで三領家の有力な荘園であった。その間の記録は残っており（本誌に詳述）、三沢郷地頭三沢氏は、三領家の代官として、庄内の藤ヶ瀬を拠点として支配した。

編著者　高橋一郎紹介

［略歴など］

大正五年十月二九日生まれ、昭和十二年島根師範専攻科卒。以後県内にて教員（音楽、社会科担当）。昭和五十年横田中学校長を退職後、無職のまま郷土史研究や、文化運動に専心。横田史談会、山陰考古学会結成に貢献、横田町文化財専門委員会、島根ふるさと伝統産業審議会委員等歴任。鉄師頭取・絲原家「絲原記念館」、「奥出雲たたらと刀剣館」、「雲州そろばん伝統産業館」の企画展示の責任者、開設後の委員・役員として貢献。横田町文化祭の歌、横田音頭など作詞作曲多数。

［著書　］

＊「奥出雲をさぐる―古代・中世の奥出雲―」　昭和40年、今井書店（松江）

＊「雲州そろばんの今昔」　昭和52年、松江文庫（報光社内）

＊「あるく見る横田」昭和53，58年、奥出雲文庫１（奥出雲文化協会―高橋一郎内）

＊「奥出雲のたたら製鉄覚書」昭和53年、奥出雲文庫２

＊「奥出雲横田とたたら」平成２年、奥出雲文庫３

＊「横田町誌」昭和43年、編集、執筆に中心的役割を果たす。

＊　たたら製鉄に関する中央・地方刊の専門誌や専門書に研究論文多数発表。地方新聞、地方刊行物に随筆、評論等多数執筆。

［最新執筆］：02年の「奥出雲」刊行中止前後以後

＊　横田町教育委員会「鉄師絲原家の研究と文書目録」05年。高橋一郎整理の分類目録を基礎に文化庁、県補助で悉皆調査、再整理、分類、研究した報告書。A4・514頁。

＊　鉄の道文化圏推進協議会「鉄の道を往く」平成14年、山陰中央新報社所収、「奥出雲におけるたたらの成立と発展―鉄師糸原家文書にみる―」

＊　不昧公生誕二百五十周年記念出版実行委員会「松平不昧と茶の湯」２００２年（非売品）所収「茶書を通して見る一貫性と深化」、「たたら製鉄と松江藩の関係について」

＊　共著「江戸時代における奥出雲たたら製鉄の経営の展開」「鉄と鋼」２００５年Ｎ０．１（ＶＯＬ．91）（日本鉄鋼協会刊）所収。

＊　特掲：「出雲の近世企業たたらの歴史―錬鉄が主要製品であった―」、「ふぇらむ」（日本鉄鋼協会）１９９６年11月号所収。（被引用が多い）

［受　賞］

地域振興文部大臣賞（昭和60年）、産業考古学会長表彰（たたら研究、平成２年）・通商産業大臣表彰（伝統産業育成強化、平成６年）、日本観光学会長表彰（鉄の道文化圏提案と推進、平成７年）、山陰中央新報社地域開発文化部門賞（平成７年）受賞。叙勲「瑞宝雙光賞」（平成16年）。

しめじだけ

しめじだけさん
れつをつくつて
遠足するのか
雨もふらぬに
大きなかさをさして
どこへいく

（評）きのこのかさは日がらかさ、
雨のふる日は雨のかさ

児童雑誌「幼年の友」の「私の童謡」入選。
濱田廣介選。大正15年1月号、小学3年生。

発行
「奥出雲　―　第三分冊」編著者代表・高橋一郎
（横田史談会・奥出雲編集集団）
発行２００６年４月

無断転載、出版を禁止します。
著作権は高橋一郎遺族が所有しています。